

# 二十年後の半端者

山中 一

“第四真祖”が治める暁の帝国に一人の半端者がいた。その名は昏月凧。人間にも吸血鬼にもなりきれない半端者と皇女たちの物語、の予定。

これは、原作の二十年後を勝手に妄想した作品です。

極めて独自色の強い設定となっております。オリジナルの皇女も出るかもしれませんが。

# 目次

幕間	第十話	第九話	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

続・幕間

続続・幕間

第二部 一話

第二部 二話

第二部 三話

第二部 四話

第二部 五話

第二部 六話

第三部 一話

第三部 二話

第三部 三話

第三部 四話

第四部 一話

第四部												
十四話	十三話	十二話	十一話	十話	九話	八話	七話	六話	五話	四話	三話	二話

第四部 十五話

第四部 十六話

第四部 十七話

幕間

幕間

幕間

幕間

閑話 二十四年後編

閑話 二十四年後編 2話

閑話 二十四年後編 3話

第五部 一話

第五部 二話

第五部									
十三話	十二話	十一話	十話	九話	八話	七話	六話	五話	四話
									三話

第五部 十四話

第五部 十五話

第五部 十六話

第五部 十七話

第五部 十八話

第五部 十九話

第五部 二十話

第五部 二十一話

第五部 二十二話

第五部 二十二話

幕間

幕間

幕間

幕間

幕間

幕間

幕間

幕間

幕間  
《猫の怪》

幕間  
《猫の怪》

幕間  
《猫の怪》

幕間  
《猫の怪》

2

3

4

幕間 《お化け屋敷編》

幕間 《お化け屋敷編 2》

幕間 《お化け屋敷編 3》

幕間 《お化け屋敷編 4》

幕間 《お化け屋敷編 5》

幕間 《お化け屋敷編 6》

第六部 一話

第六部 二話

第六部 三話

第六部 四話

# 第一話

何も無い、無機質な部屋に隔離されて何日が経過しただろうか。

十日がすぎたころには数えるもの飽きてしまい、それ以降は今が、何月何日なのかも分からない。カレンダーはあるのだが、意識しないようにしていた。

日に日に弱っている身体を自覚すると、日を数えるのも怖くなる。子供心に、死ぬかもしれないという恐怖は感じていた。

季節が、何度か巡った桜の綺麗なある日のことだ。

「ごめんね、ごめんね。今は、こうするしかないの……!」

母親が涙を流して、小さな頭を抱きかかえる。

手術が決まった。命を繋ぐ、唯一の手段だという。病魔に侵された今の身体は、真つ当な方法では到底助かる見込みがない。だが、彼はその血筋と奇跡が重なって、未来に希望が見出せた。

しかし、それには大きな代償が必要だった。成功する見込みは低く、成功したとしても、もう元には戻れないだろうと。

そのリスクは、正しく自覚していたわけではない。ただ、今は生き永らえることができるかもしれないというだけで、期待に胸を躍らせていたのだ。

「がんばる」

「うん。うん。……強い子だね」

母は気丈に振舞って泣き笑う。

どうだろうか。

本当に、覚悟を決めていたのなら、この選択をしたのだろうか。ならば、それは強いというよりも、無知なだけであろう。

運ばれていく身体を他人事のように感じながら、手術室へ向かう。

母親だけでなく、父親や伯母たちが見守ってくれている。伯父はすでに手術室に入り、準備を済ませているという。

やがて、手術は静かに始まった。

麻酔を打たれ、急速に視界が暗くなっていく。

次に目が醒めたとき、自分は自由の身となっているのだと信じて、自ら目を瞑ったのであった。

□

蛍光灯の一つが遂にダメになった。

点滅を始めて数日。限界まで命を燃やし、天寿を全うして逝ったらしい。ジャー  
ジ姿の昏月くらつきなき風は、ソファに寝転がったまま気だるげに頭上の蛍光灯を眺めていた  
が、十秒ほど後で諦めたかのように頭を掻いて起き上がった。

「だりい」

暦で言えば六月の中頃に入り、日本は梅雨の季節を迎えている。とはいえ、ここ  
は南の島。しかも人工島である。日本と異なり、梅雨前線が形成されなかったために、  
高気圧の影響をそのまま受ける。ここ一週間、雨は一度も降っていない。

「マジで外出なきゃいけねえのか……」

少年は、逡巡する。クーラーの効いた部屋の中で寝ていたいという欲求が勝って

いる。蛍光灯一つなくても生活に与える影響も少ないということもあって外出に乗り気ではない。

リビングの蛍光灯は四本。その内の一つがなくとも、明るさは十分なのだ。

「でも、ダメだよなあ」

この家が自分だけのものならば、それでもいいが、彼は中学三年生である。訳あっての一人暮らしだが、日本で働く母親に心配をかけるわけにはいかず、見てくれだけでもきちんとした生活は送っていることにしなければならぬ。

一人で利用している家でありながらも、凧は好き勝手に家を使おうとは思えなかった。

だから、家の中は比較的整理整頓が行き届いている。そもそも、必要以上にものを置く性格でもなく、物欲も少ないので簡素な見てくれになってしまふ。

凧はジーンズを履き、パーカーを着る。長袖長ズボンという格好は、見た目からして暑苦しいのだが、これが意外に涼しい。世界に誇る「魔族特区」が、さらに発展したこの「ライヒ・デア・モルゲンロート暁の帝国」の技術力は、こんな些細なところにも発揮されている。

さすがは、世界最高峰の技術大国だ。

二十年前に発生した“大災厄”は世界各国に深刻なダメージを与え、各地で情勢不安を誘発した。この人工島は特に被害が大きく、日本政府から見捨てられるまでになったのだが、その最悪の事態を收拾するために立ち上がったのが、皇帝の地位にある“第四真祖” 暁古城とその仲間たちだったという。

結局、今から十年前に“第四真祖”を戴いて日本政府から独立した最新の夜の帝国<sup>ドミニオン</sup>は、今日に至るまで拡充を続け、今や日本の四国と同程度の国土を獲得するまでに成長した。主要産業は電子産業と錬金術。この二つの分野は、他国に十年以上の差をつけているとまで言われている。

皇帝は、まさしく救国の英雄というわけだ。

電気街を歩いていると、否応なく数多のモニターが目飛び込んでくる。その中には、“第四真祖”の動向を追った映像も入っていた。見た目がいいということもあって、一部には熱狂的な信者がいるのである。

性格も非常にいいお兄さんといった感じなので、彼と個人的に親しくした女性は、大抵好意を抱く。最近は、慣れてきたのか、開き直っている節もあるくらいで、複

数の後の間で警戒感が広がっているという話を聞く。

凧はいくつか店のショーウィンドウを眺めた後で、行きつけの大型家電量販店に入った。

日曜日というだけあって、人でごったがえしている。

蛍光灯は二階に上がってすぐのところにあるのだが、まずは新商品のイヤホンを捜しに行く。

売れ行きナンバーワンの人気商品で、外部の雑音をほぼ遮断する機能があり、骨伝道を利用する最新の方式によって、耳にイヤホンを装着する必要がないというのだ。雑音を完全に遮断するイヤホンと、ポケットに入れておけば、誰かと会話しながらも楽曲を楽しめる骨伝道式。どちらも一長一短があって、有利不利を論ずることはできない。

屋内に入った凧は、フードを外して一息ついた。

空調の行き届いた店内は、極楽至極。肌寒いくらいの温度設定で、外出意欲をものの見事に砕いてくれる。おかげで、何時間でも店内を物色できそうだ。あるいは、それも含めて店側の策略であろうか。

もったも、手持ちはそう多くない。

購買意欲だけはあるものの、実際に買えるかといえばそうではない。

「とっとと買って、寝るか」

イヤホンが陳列されているコーナーにやってきた凧は、眉根を寄せて商品を眺める。

しゃがみこんで、三色のバリエーションを見比べる。赤、青、黄色とありそうな色の候補である。

「耳につけないのにイヤホンってどうなんでしょうねえ」

唐突に、すぐ近く、左側から声をかけられた。

視線を向けると、髪を短く切り揃えた赤毛の少女が膝に手をつけてこちらを覗き込んでいた。

「なんだ、シンディ」

「なんすか、その反応。可愛い後輩が、目つきの悪い先輩にこうして挨拶しにきてあげたのに」

シンディは、中学二年生。凧の一つ下だ。一年ほど前に、不良に絡まれていたと

ころを助けたのがきっかけで交流が始まったが、一緒に外出するほどの仲ではなく、見かけたら多少の無駄話をする程度である。

ちなみに、後輩といいながらも学校が同じということではない。

凧は公立の中学校に通っているが、シンディは私立彩海学園に通っていると聞いている。

シンディがため息混じりに言ってくるので、凧はブスツとしながら言葉を返す。  
「いや、頼んでねえよ。つか、誰が目つき悪いだ」

「先輩。挨拶は頼まれてするものじゃないですよ。後、目つき悪いがダメなら、あれですね。何か暗い。友だち、あたし以外にできませんよ」

「ナチュラルに俺がボツチみたいに言うんじゃないか。しかも、お前が友だちかよ」  
「あ、それなんか酷くないですか。それとも、もう友だち以上の関係だと思っちゃったりとか？ それはそれでなんですけど、こちらとしては言葉にしていただけだいなとか」

「あー、はいはい。お前みたいに騒がしいのは百歩譲ってただの後輩で結構」

「酷い!？」

ガツン、と頭を殴られたような顔でシンディは言う。しかし、それも一瞬のこと。表情をコロコロと変えるのが、シンディの長所であり短所でもある。この程度の軽口を本気にするような繊細さをこの少女は持ち合わせていない。

凧は適当に青色のイヤホンを選んで立ち上がった。

「あれ、青ですか？」

「何かおかしいかよ？」

「いやー、黒っぽい先輩には、赤をお勧めします」

と、シンディは勝手に凧からイヤホンを取り上げ、赤いイヤホンのパッケージを押し付けた。

「……」

「赤は黒で引き立ちます。先輩、その黒いパーカーの前だけ開けて中に赤いシャツとか着たらどうで、非常に痛いんですけど」

凧は手渡されたパッケージの角を後輩の旋毛に押し付けてグリグリと捻る。

「お前こそ、何を勝手に俺をコーディネートしてんだ」

「いやいや、赤の魅力というものを是非先輩にもと」

「余計なお世話だ」

凧はふと手元のパッケージを見ると、力任せに扱ったからか角が折れてしまっている。このまま戻すのは気が引けるので、しかたなくそのままレジに持っていくことにした。

そして、シンディもまた赤のイヤホンを買っていた。目立つ赤毛もそうだが、この少女の持ち物には赤い小物が目立つ。パーソナルカラーが赤以外にないといった状況だ。

「ところで、何で先輩は日がな一日フード被ってんです？」

「日差しが嫌いなんだよ。悪いか」

刺すような太陽光は、肌を焼く。他人はどうか知らないが、少なくとも凧にとつてはあまり得意なものでもない。体質的な問題もある。

「いや、全然。何となく不思議に思っただけです」

「大した理由でもなかったろ」

「ええ、びっくりするぐらい普通でした」

「びっくりするような理由があるとしても思っただけだよ」

むしろ、フード一つに何をそこまで期待するものがあるのだろうか。

「色々と半端な先輩は、太陽に当たったら溶けちゃうとかって弱点があったりとか」「溶けるか。完全な吸血鬼でも日光は苦手くらいだろうが」

そもそも、半端という言葉は凧にとって思うことのある言葉である。シンディもその理由を知っているが、あえて使っている。人のコンプレックスをぐさりと刺すのはさすがだが、彼女が言う和不快に思わない。あっけらかんとした態度が、その原因だろうか。嫌味に聞こえないのだ。

なぜか付いてくるシンディと話をしながら、蛍光灯を求めて二階の売り場に向かうとしたときだった。

凧のポケットで振動があった。携帯端末にメールが届いたのである。

凧は端末を取り出して、画面を見る。

差出人・那月ちゃん

件名・仕事だ

本文・第二南地区の区役所三階に來い

極めて簡素な連絡だったが、言いたいことは分かった。

師が学生に面倒事を押し付けようとしているのである。ばっくれる、のは無理。後で何を言われるか分からないし、身の危険を増やすだけだ。

「あー、先輩。実はこの近くに最近クレープ屋さんが出店してて……」

「悪い、シンディ。その話は後で」

「へ？」

「高校教師から呼び出し食らった」

「え、あ、そうですか」

いかにも面倒そうな表情で凧は言う。

休日呼び出しを食らうというのは、あまりないのだが、凧は決して素行のいい生徒ではない。幾度となく教師の世話になっている上に、以前は非常に喧嘩っ早いところがあったために煙たがられるところもある。だから、教師から呼び出しを受けるのは納得のいく話だったし、凧自身が非常に迷惑そうにしている。嘘かどうかは別として、彼にとっても色よい話ではないのだろう、という予想は立った。

シンディは、しおしおと元気をなくしながらも去っていく凧を見送った。

シンデイと別れた凧は、大急ぎでモノレールの駅に向かい、セカンド・サウス第二南地区に向かう。

ライヒ・デア・モルゲンロート 暁の帝國グは、

かつて絃神島と呼ばれていた頃の部分を中心として、東

西南北に人口大地を増設して国土を増やしてきた。絃神島の中心地だった部分を

セントラル・ゾーン

中央行政区とし、東西南北に内側から第一、第二、第三と人工島ギガフロートを増設してきた。

凧が呼び出されたのは、その第二南地区である。

第二南地区の区役所前までは、中央行政区からモノレールで一時間ほどかかる。

近隣で事を終える出不精には、なかなか厳しい距離だ。

モノレールから見える景色は、立ち並ぶビル群から住宅街に移り変わり、第二南地区に入ったところから工場が立ち並ぶようになった。この区画は、国営の食料生産工場が多数ひしめき合っている区画だ。民間の資本とも提携して、他国を圧倒する植物工場プラントが特徴の一つとなった。国営の工場は日々の生活で食す野菜類を中心に生産し、民間の工場では南国の気候を利用した半自然状態での果物栽培を行っている。今では日本向けの輸出産業として成立するほどになっている。

第二南地区は、植物工場発祥の地で、規模を拡大して内陸部になってしまっただけかも、未だに多数の資本が操業している。

改札を出ると、そこに一人の少女が佇んでいた。長い髪と無機質な表情が特徴的な彼女は、見た目には年下に見えるが、実際は凧よりも二十歳ほど年上だ。

また、主人の少女趣味を反映してか、概ねメイド服姿でいることが多い。今も、ふりふりのメイド服に身を包んでいる。

「アスタルテさん」

「南宮教官<sup>マスタ</sup>から到着次第連れて来いとの命令を受けています。寄り道せずに、真っ直ぐ庁舎へ向かってください」

有無を言わせぬ言葉にも、凧は動じない。アスタルテは世にも珍しい眷獣使いのホームンクルス。その制御も完璧だ。凧は教えを請う立場にあり、南宮那月と共にアスタルテは戦闘に於ける師の一人なのだ。

「分かっていますよ。さすがに、これをすっぱかしたら豪<sup>えら</sup>いことになる」

師は高校教師を兼任する攻魔官だ。その実力は同僚を遙かに圧倒し、戦闘能力だけならば「第四真祖」に匹敵、あるいは上回るとされるほどの怪物なのだ。その恐ろしさを、凧は嫌というほど知っている。

凧は二の句なく区役所に向かう。徒歩で五分とかからない。寄り道などする場所

もない。

「確認。最近、母親とは連絡を取っていますか？」

隣を歩くアスタルテが、こちらを見上げて尋ねてくる。

「一週間ほど前に、電話で十分ほど。忙しくしているみたいですよ。それが、何か？」

「『第四真祖』が気にかけている」

「あの人は、いつも母さんを心配してるじゃないですか。それに、なんなら陛下自ら連絡を取られればいい」

「回答。息子にしか見せない弱みもあります」

なるほど、一理ある、と思いつつも風は首を振る。

「それだったら、問題ないとしたか。あの人は電話越しにも騒がしい。いつも通りでしたよ」

それを聞いて、アスタルテは頷いた。

心配していたのは皇帝だけではない。アスタルテもまた国外で働く友人を気にかけているのであろう。

徒然と話をしていると、区役所の前に到着する。

五階建ての赤レンガで建てられた旧時代的な外観は、建築家の趣味が多分に反映されている。

風が連れてこられたのは、その地下一階にある会議室であった。

小さな会議室で、長机を三つ、コの字型に並べている。そして、正面には大型のスクリーン。その左端に、西洋人形のような端正な顔立ちの少女が座っている。

南宮那月。

ライヒ・デア・モルゲンロート  
暁の帝 国 最強の攻魔官である。

「来たか」

那月は風が来るなり黒い扇で口元を隠しつつ、鋭い視線を向けた。

「無駄口を叩かずに聞け、馬鹿弟子」

開口一番、尊大な態度で接してくる那月は、恐ろしいことに外国の王族に対しても同じような態度を取る。礼儀作法というものを、母親の腹の中に忘れてきたような女である。実年齢は四十過ぎ。しかし、外見年齢は、十代の前半くらいであろうか。

母親の学生時代の写真に、まったく同じ容姿で写っていたのは衝撃的であった。「お前もそろそろ実戦を経験する頃合だと思つてな。ちようどいい舞台を用意してやった」

「は？ それは一体……」

「いいから聞け」

那月に窘められて風は口を噤む。

「この区画は植物工場が密集した農産物の生産地だ。とりわけ、植物の生産技術は、独自開発したのもも多用されていて秘匿性が高い。知っているな？」

「それは、まあ」

「困ったことに、優れた技術は金になるし狙われる。先日、この工場に企業スパイが入り込んでいる可能性が浮上した」

那月が大型スクリーンを指し示す。

表示される画像には、見覚えのある建物が映っていた。

「帝国農業研究センターですか」

「ああ。内偵も済んでいる。北米連合に本社を置く大企業と繋がっている所員がい

るようだな」

「そらまた……」

ライヒ・デア・モルゲンロート  
暁の帝國

は建国十年目を迎えたばかりで、国家としての自覚を持っている人は多くない。人間のうち、九割が元日本人であり、帰属意識は本土にある者も多い。そのため、国立の研究所の職員といっても国家公務員という自覚の薄い人間が多いというのが、なかなか難しい問題だった。

「国を裏切るだのなんだのは置いておくが、とにかく情報を持ち出される前に潰さなければならぬ」

「え、でもそれは特区警備隊アイランドガードの仕事では？」

「ああ、そうだ。だから、お前は後方で見学だ。実戦を見学しろと言っているんだ」「なるほど」

今まで、戦闘訓練や雑用を主にやってきた風だが、今回は犯人確保の瞬間に立ち合わせてもらえるらしい。

おそらくは、今までで一番の収穫になると思われる。

「もちろん、逃げたスパイがお前のほうに向かったら、それはお前の仕事だ」

「ええー……」

「当たり前だ。仮免とはいえ、お前も攻魔官の端くれだろう」

「それは、まあ」

苦心の末に見習いとはいえ攻魔官の資格を手に入れてはいる。しかしながら、実戦経験は皆無で師の好意に甘んじているのが現状だ。

「とにかく、今すぐにお前も配置につけ。まずは突っ立っているだけでいい」



## 第二話

作戦は夜を待って行われる。

最優先に確保するべきは三人。二十代の男が二人と、百年を生きた吸血鬼の女が一人だ。

危険なのは、吸血鬼の女のほうか。戦闘経験の有無に拠らず、魔族というのは人間以上の能力を秘めている。とりわけ吸血鬼は、眷獣を従えているので本人の実力以上の危険がある。

作戦としては非常に簡単だ。

密かに施設を取り囲み、対象者が退勤してきたところに同行を求める。抵抗することがあれば実力行使となる。

「いきなり配置につけて言われたんですよ」

「あの教官の弟子ってだけでも尊敬するがね。少年」

三十人の武装した隊員が、大型車の中で待機する。

風が送り込まれた車には、男女合わせて五名が乗り合わせていた。

大型車両が停車しているのは、広大な駐車場の隅だ。

車内の詰める隊員のうち、運転席にいる隊員以外は武装を済ませている。

スパイに同行を求める穏便なやり方をする初動の部隊はスーツ姿だが、彼らは後方に控える実働部隊。戦闘行動が行われた際に前線に投入される部隊である。

「まあ、大抵こういう場合は素直に勧告に従ってくれるから、戦いになることって少ないんだけどね」

隣に座っている女性隊員が気さくに声をかけてくる。それに対して、班長が嗜めた。

「そう言うな。油断は命取りだぞ。なんせ、相手は吸血鬼だ」

「わたし、眷獣の相手ってアスタルテさんしかしたことないんですよ」

「だったら、今度第三管区の吸血鬼に組み手を頼めばいい。合同訓練のときにもな」

国内にいる吸血鬼の絶対数はまだ少ない。『第四真祖』が世に認められて二十年余しか経っておらず、その血族も二世までだ。他の『夜の帝国』のように、皇帝たる真祖の血筋を主体とした戦力が構築できていないのが、この国の弱所であり長所

でもあった。

そのため、アイランドガード特区警備隊内に占める魔族の割合は二割程度で、吸血鬼となるとさらに少なくなる。

「と、来たぞ」

車内に緊張が走った。

駐車場に現れた三人は、間違いなく問題のスパイとみなされる者たちだ。白衣を着ていていかにも研究者といった風である。

「三人纏めてか。あまり、上手くはねえな」

隊長が呟くと、女性隊員が頷いた。

「そうですね。できれば、一人ずつ確保するのが一番だったのですけど」

「まあ、想定内でもある。後は、素直に投降してくれば御の字だが……」  
ライフルを握る手に力が籠っている。

風が見守る中で、静かに近付いていった特区警備隊計十人が、三人を取り囲んだ。少しして、男の一人が包囲を破ろうと突進して、もみ合いになった。

「総員準備！」

号令と共に車外へ飛び出していく実働部隊。

「昏月君は、とりあえずここで見ていなさい」

隊長に厳命され、凧は後部座席に浮かせかけた腰を落ち着ける。

面倒くさがりの凧は、やるべきことはやるが人任せにできることは人任せにする主義である。異論なく、傍観に徹することにした。

そして、戦闘が始まった。

初めに接触した十人が一様に宙を舞った。突如吹きあれた想定以上の魔力が隊員の対魔防御を上回ったのである。

そこに駆けつけた特区警備隊は二十人。そのうち、魔族は吸血鬼の隊員が一名である。相手にも一名吸血鬼がいるとはいえ、力ならば、これで互角以上である。

対魔族用のアサルトライフルを構えた隊員が三名のスパイを包囲し、投降を勧告する。怪我をした十人も、包囲の輪に加わる。また、戦闘不能になるほどの怪我ではなかったであろう。

しかし、それだけの人数差がありながら、戦況は一進一退を繰り返していた。

それは、女吸血鬼の眷獣が、調査段階で浮かんでいたものと性質を異にしており、

しかも非常に強力だったからである。

十メートルはあろうかという蟹の眷獣であった。

硬い甲羅が、銃弾をいとも容易く弾き返し、巨体が振り下ろす鉄は凶悪な威力で特区警備隊の接近を封殺する。さらに、厄介なのが吐き出す泡だ。大量の泡が、三人を覆い隠してシエルターのようになってしまったのだ。泡の強度は銃弾を弾くほどで、泡の外では蟹の眷獣が特区警備隊の吸血鬼の眷獣と殴り合いをしている。

巨大な犬の姿をした眷獣も蟹の眷獣に負けていないが、勝っているとも言えない。

「初動でミスったな、こりゃあ」

頭を搔いて戦況を見守る凧は、誰にともなく呟いた。

相手が吸血鬼なのだから、眷獣での抵抗も想定はしていただろう。だが、質と能力が想定外だったわけだ。通常装備で、あの眷獣は倒せまい。こちらの吸血鬼がどれほど善戦できるかというところにかかっているだろう。

とはいえ、特区警備隊も馬鹿ではない。

攻撃が通じないと分かれば、持久戦に持ち込むだけだ。

相手は罦城しているに等しい。眷獣同士でぶつかっているから消耗は続いている

く。敵の抵抗も、そう長くは続かないだろう。

戦線を下げた特区警備隊は相手の動きを押さえるために銃撃を続ける。

膠着状態が続くほど、天秤は特区警備隊に傾いていく。

「ん……？」

それに気付けたのは、離れたところから傍観していた凧だけだった。

戦闘に集中するあまり後方支援を専門とする部隊も、その強襲を把握できなかつた。しかしながら、把握できたからといって、対処できたのだろうか。

突如として空に現れた怪炎が、今まさに降り注がんとしていたのである。

一瞬にして、視界が赤く燃え上がる。

敵の正体は鳥の姿をした眷獣であった。燃えるような赤い翼の眷獣が、火を吹いて地上を焼き払ったのである。

爆風で特区警備隊の包囲網が崩れ、巨大な犬の眷獣は炎に包まれて炎上した。

その隙に、蟹が犬に襲い掛かり、首を一撃の下に切り落としてしまった。

断末魔の悲鳴すら上げずに消える犬の眷獣。眷獣のダメージは宿主にも影響する。吸血鬼の隊員は、大幅に戦闘力を削られたとっていいだろう。

吸血鬼を倒したのなら、後は特区警備隊の人間だけだ。もはや、女吸血鬼に敵はない。堂々と、この戦場から逃亡するだけだ。

おまけとばかりに、巨鳥が炎の弾丸をばら撒いていく。駐車場全体に炎が飛び散り、大炎上する。

「うおおお、ヤベエ！」

危険を察して、凧はドアを開けて外に転がり出た。

その直後、火球の一つが凧のいた大型車両を直撃し、爆発した。

間一髪で命拾いした凧は仰向けに転がる。炎の熱が肌を焼き、怒号が響き渡る。救助と増援を求める声が飛び交う中で、三人の犯行グループは夜闇に紛れて姿を消した。

「……那月ちゃんに殺されかねえか」

あの魔女が敵の逃走をみすみす見逃したとなったら、どのような鍛錬を後で課してくるか。後ろで見てるとは言われたが、逃げる敵を追うなどは言われていない。それに、敵が向かってきたらそれはこちらの仕事だとも言われた。

特区警備隊が見事に敵にしてやられたからには、自由に動ける自分が何とかしな

ければならぬだろう。

「最低限、何とかしようとした体は装わないと、死ぬな」

凧は身体を起こして、状況を確認する。魔力によって発生した炎がアスファルトを溶かし、悪臭を放っている。

よし、やるかと凧は髪についた砂埃を払って動き出した。

特区警備隊の中の何名かが、逃げた相手を追いかけているようで、爆発が続いている。それは、敵の眷獣が激しく応戦しているからであろう。

凧は魔力を搾り出して重力を軽減し、手近な倉庫の屋根に飛び乗る。

「いた」

相手は五百メートル先で、道路を封鎖していた特区警備隊の包囲網を蟹がこじ開ける。バリケード如きでは、押さえることはできない。

となれば、やはり眷獣での戦いになるだろう。

凧は屋根から屋根へ飛び移る。体重を軽くして踏み出し、即座に体重を戻す。それを繰り返して、加速し、一息に数十メートルを跳ぶように走る。

「来い、不出来な黒剣」  
インフェリア・アーデル

右手に現れたのは、光を放たない漆黒の剣だ。刃渡り一メートルほどで、飾りの類は一切ない。

凧の第七の眷獣。意思を持つ重力剣であった。

凧は、戦う準備を済ませた上で、相手を待ち伏せることにした。

やるなら奇襲だ。

凧は近接戦闘なら大抵の相手に勝つことができると自負しているが、体質の影響で長時間戦い続けることができない。ドツボに嵌る前に、速攻で決める。

倉庫の屋根に隠れて凧は、座る。剣の腹を額に当てて、深呼吸する。

実際に戦うのは、これが初めてだ。

緊張はするし、怖い。

不死性の低い凧は、死ぬときはあっさりと死んでしまう。油断は禁物である。

敵が走ってくる。ここまでの抗争で、吸血鬼の女以外は脱落したようだ。つまりは、タイマン勝負となる。

相手は包囲網を食い破ったばかりでこちらにまで意識を割く余裕はないはずだ。

「いくぞ」

吸血鬼が自分の真下に来るのを見計らって、凧は飛び降りた。

剣を振りかぶり、相手の頭を目掛けて振り下ろす。刃ではなく、腹で殴れば気絶くらいはするだろう。

「ッ……ッ！」

女は美しかった。それでいて、酷薄な顔であった。外見年齢は二十代後半。茶色みがかったウェーブする髪が数本風に舞った。

外した。

直前で、相手を傷付ける覚悟を決め切れなかった凧の甘さだ。

「グランキョー！」

女吸血鬼が吼える。同時に背後に現れた蟹の眷獣が強大な爪を振り下ろした。

「く、のッ」

凧はギリギリで爪をかわず。

蟹の爪で大地が陥没し、地面が割れて凧を巻き込む。その隙を突いた蟹の爪が凧を襲う。凧は体重を軽減し、さらに脚力を魔術で強化して蟹の巨体を飛び越えて事なきを得た。

「何かと思えば、その剣。まさか、眷獣かい？ つーことはT種か？」  
敵が凧を見て言う。

意思を持つ武器を眷獣とするのは、T種と呼ばれる吸血鬼の特徴の一つとされる。

「いや、違うね。T種の男なんて聞いたこともない。変なヤツだ」

不意打ちをしたにもかかわらず、相手は比較的冷静だ。これは失敗したかもしれない。

蟹の眷獣は攻防一体の強大な怪物だ。力と力の打ち合いでは分が悪い。自分の一番の得意分野である、近接戦で切り崩す。

凧は八双の構えで突進する。自分よりも大きな相手は、アスタルテを相手に散々経験している。

まして相手には機動力がない。アスタルテよりも、さらに鈍重だ。

高速の領域で、凧は蟹の挙動を視る。

攻撃手段は三つ。左右の鋏と泡。致命的なのは鋏だが、泡に押し包まれるのも危険だ。

攻撃順序は右の鋏が真上から。その直後に泡、そこで動きを止められた後、左の爪が胸を抉る。そこまで読み取って、凧は右の鋏を急制動をかけて、バックステップで回避する。

急な動きに内臓が悲鳴を上げる。それを押し殺す。

「オオッ！」

凧は右の鋏を踏み、飛び上がる。

これで、先に視た未来は回避された。凧の未来視は、獅子王機関の劍巫すらも上回る。三手先を読むと評された霊視が、未来の死を覆す。

「バカめ！ それでどうやって避ける！ 始末しろ、グランキオ！」

吸血鬼が笑みを浮かべて吼える。

宙に逃れた凧には足場がない。足場がなければ、避けることもままならない。

蟹の鋏が凧を襲う。対して凧は、その剣を思い切り蟹の甲羅に向けて投げつけた。

インフェリア・アーデル

不出来な黒剣は重力制御を能力とする。投げた瞬間には、その重さは数十トンに達する。いかに頑強な甲羅を持つ蟹の脊獣と雖も、これをまともに受け止めるのは不可能だ。

激突した鋏が砕け散り、そのまま蟹の背中を粉碎して地面にクレーターを作り出した。蟹の眷獣は内側から弾け飛び、跡形もなく霧散してしまった。

「くあああああああ！」

眷獣が倒され、その爆発に巻き込まれた女吸血鬼は思い切り吹き飛ばされた。それを見て取って、凧は着地した。

「この、ガキがッ」

立ち上がった女吸血鬼が必死の形相で魔力を吐き出す。新たな眷獣を呼び出すつもりだ。その眼前を黄金が駆け抜ける。

一匹の豹が、女吸血鬼の首に噛み付いていた。

「あが、がああああああああッ!!」

そして、激しい雷撃が発した。豹の眷獣は、全身が雷で構成されているのである。首に噛み付かれ、感電した女吸血鬼は痙攣してその場に倒れた。

凧は、相手が確実に気絶しているのを確認する。

吸血鬼の肌には電流による火傷のあとがあるが、目立った怪我はそれだけだ。再生能力のある吸血鬼にとっては、この程度は怪我のうちにも入らないかもしれない。

「終わったあ。お疲れ、小さな黄金」  
タイニールアウルム

傍に歩み寄ってきた黄金の豹が座り込んだ。くるくると喉を鳴らす。なでてやりたいが、触れると感電するので我慢する。

「ふん、派手にやったな」

そこに、ずいぶんと遅れて那月がやってきた。

「那月ちゃん、いたッ」

扇で額を打ち据えられた。骨の部分に当たったために、かなりいい音がした。額を摩りながら、那月に抗議の視線を送る。

「馬鹿者。師をちゃん付けで呼ぶな」

「師匠が前線に出てくれば、こんな事態にならなかったんでは？」

「こちらはこちらですることがあったからな。この女の眷獣の強大さは想定外だった」

「そっすか」

那月は魔法陣を出して、凧が倒した女吸血鬼を監獄結界に転送する。

恐ろしい能力だ。監獄結界は一度掴まれば、『第四真祖』ですら、脱出は難しい

とされる那月が管理する牢獄である。

「さて、初陣はどうだった。馬鹿弟子」

「最悪」

「ふん、まあそんなものだろうな」

凧の答えにさして不満を見せることもなく、那月は口の端を吊り上げた。

「今日はここまでだ。それと、しばらく眷獣は使うなよ」

那月は意味ありげな視線を凧に向ける。

凧は、神妙な顔つきで頷いた。

「次の鍛錬の日時は追って報せる。今日は休んでいろ」

それから、那月は凧の足元に魔法陣を展開した。

「電車賃代わりだ」

「え、ちょ……！」

凧が何か言う前に、身体が魔法陣に飲まれて消えた。

那月が得意とするのは、空間魔術だ。

凧を転移させるのは造作もない。一瞬にして、凧は自分の家の玄関前に立ってい

た。

「すげえな。ほんと」

那月の魔術は強力で、しかも便利に過ぎる。

相對しても、勝利する未来が一切視えない怪物だ。しかし、今回の一件で那月の評価は上がった気がする。そう思えば気分も少し高揚する。

凧は鍵を差込み、回そうとして眉根を寄せる。鍵を抜いてから、ドアノブを捻ると、ドアが開いた。家の中から明かりが漏れる。

「ん……？」

凧は、警戒しながらそろりと家の中に入る。廊下を進み、正面のリビングに入るとテレビの前のソファにどっかと座る白衣の少女がいた。

「葱葱、姉さん……？」

「あろー、凧君。元気？」

髪を染めた少女は、暁葱葱という。皇女の一人でもあり、“第四真祖”の第一子という極めて高い地位にある吸血姫だ。

「ぼさっと突っ立って何してんの？」

「そりゃ、こっちの台詞ですけど。俺の家なんで」

「古城君の家でもあんじゃん。であれば、あたしの家も同然よ」

とんでもない暴言もあったものである。確かに、この家は、皇帝となる前の暁古城が暮らしていた家だ。萌葱が鍵を持っているのも、そのような理由であろう。

「ねえ、凧君。ここ、蛍光灯切れてたから換えておいたよ」

「あ、マジか。ありがとう、萌葱姉さん」

蛍光灯が切れていたのをすっかり忘れていた。買いに出でいたところで、あの事件に遭遇したからだ。萌葱は、どうやらわざわざ買いに出してくれたらしい。

「うむ。弟たるもの姉に奉仕するべしってね。じゃあ、まずは肩でも揉んでもらおうかなあー」

萌葱が背凭れに頭を乗せて、こちらを見てくる。

そして、その視線をすぐに険しいものに変えた。

「その手……」

「え、ああ。ちよっとね」

「ちよっとね、じゃないでしょう」

萌葱はすぐに凧もところにまで足音を立てて歩み寄り、乱暴に手を取った。

凧の手の平は酷く焼け爛れていた。その怪我は蜘蛛の糸のように腕を這い上がり、肘にまで到達しようとしていた。

「酷い怪我。包帯と消毒がいるわね」

「え、大丈夫だよ。これくらい」

「それがただの怪我ならね。魔力を感じるわ。……眷獣、使ったんでしょ」

萌葱はすべてお見通しと言うかのごとく断定的に言った。

凧は、視線を逸らして頷く。

「南宮先生ね。まったく、あの人も何を考えているんだか。凧君に眷獣を使わせるなんて」

萌葱は親指の爪を噛み、忌々しそうに顔を歪める。

「今回は不可抗力だったんだよ。ちょっと、事件に巻き込まれたただけだ。解決するのに、使わないといけなかったんだよ」

「そう。まあ、凧君が言うならそれでいいけど」

萌葱は救急箱から包帯と消毒液を取り出して、凧の手の処置を行った。

正直に言えば、その手並みはあまり上手いとは言えなかった。萌葱の一家は、吸血鬼一家だ。怪我とは無縁で、消毒液も包帯も必要としていない。たどたどしく巻いた包帯は、継ぎ接ぎ感が多いに出ていた。

「萌葱姉さんは、相変わらず不器用だな」

両手をミイラのようにされた凧は苦笑して言う。

「わ、悪かったわね。こんな怪我、したことないんだからしかたないでしょ」

「いや、でも悪いって意味じゃない。その、ありがとう」

「ん。まあ、いいわ」

と、萌葱は気分を取り直して凧に向き合う。

指を凧の眼前に突きつけた萌葱は、敢然と言った。

「もう、軽々しく眷獣は使わないこと。いいわね」

「え、ああ。まあ、それはそうだ。法でも定められているしな。仮免攻魔官とはい

え、軽々しく使わないって」

「そうじゃなくて、ああ、もう。何度も言ってるじゃないの。凧君は吸血鬼じゃないんだから、眷獣を使ったら寿命を縮めるって。身体の方も魔力に耐えられなくて傷ついでる

んだから」

この世で眷獣を召喚、使役できるのは極僅かな例を除けば負の生命力を無限にする吸血鬼だけだ。眷獣の召喚には、莫大な魔力を必要とし、人間ではあつという間に命を食いつぶされて死んでしまう。凧は両親が人間なので、吸血鬼ではないが、同時に人間でもなく寿命は非常に長い。だから、眷獣の召喚にも、一応は耐えられる。

「みんな、心配してる。古城君も、お母さんたちも。それに、零菜だって」

「……………分かってる。けど、俺だってこの国で安穩と暮らしているのは嫌なんだよ」

凧は自分の気持ち分からない。

人間から外れながら、魔族にもなれない半端者。人間と吸血鬼の間に奇跡的に留まった半吸血鬼。世界唯一のダンピール。それが昏月凧という少年の本性だ。

「古城さんに助けられた命だ。何とか、この国に活かしたい。今はただそれだけなんだよ」

「気持ちは嬉しいけど。本当に無茶はしないでよ」

「ああ。分かってるよ、萌葱姉さん」

萌葱は包帯と消毒液を救急箱に入れて、それを元の場所に戻した。

それから、縛っていた髪を解き、髪留めを白衣のポケットに仕舞うと、

「じゃあ、家主も帰ってきたことだし、お風呂借りるわよ」

などと言い出した。

「はあ、何で!？」

「そりゃ、あたしだって女だし。風呂に入らないで一日を終われないでしょ」

「自分の家に入ればいいじゃねえか」

「あたし、今日この家泊まるから」

「いや、意味分かんぞ。萌葱姉さん」

「明日、この近くの公民館で学会発表あるのよ。それ、見に行きたくてね。それに、  
うちは今修羅場ってるし」

「はあ、そう……また、古城さんが？」

「この前、日本に外遊したときにね。また、女の子を引っ掛けたらしくて。まあ、  
いつも通りだよね」

暁古城は、どういいうわけか訪問先で事件に巻き込まれることがまある。しかも、そのたびに女性と何かしらいい雰囲気になるものだから、后たちは心配で仕方がない。

現段階で、すでに複数の女性を囲っているのだから今更ではあるが、今の后たちは互いに認め合い、牽制しあっている。新たな女性の影は、彼女たちにとって安定を崩す要因になりかねず、それでも古城が懲りないものだから、度々暁家の中に修羅場が具現するのである。

それで、娘たちはそれぞれの友人宅に難を逃れたり、観戦したり、煽ったりしているらしい。

「ダメって言っても聞かないんだろ。もう、好きに使ってくれ」

「どーもねー」

観念した風になんか笑いかけた萌葱は、自分の着替えを抱えて風呂場に向かっていった。萌葱がいなくなると、一人になると、途端に静寂が押し寄せてくる。

外見もそうだが、雰囲気からして明るい萌葱は、そこにいるだけで場の空気をがらりと変える。

ミイラのように包帯で両手をぐるぐる巻きにされた凧は、天井を仰いだ。

そして、自分の手を明かりに翳す。巻かれているのは治癒促進の魔術が施された特別製の包帯だ。凧自身の再生力もあって、朝には傷が塞がっていることだろう。それでも、その再生力は吸血鬼には程遠い。

「吸血鬼ではない、ね。そりゃそうだ……」

しかし、その一方で人間でもない。

左手首には魔族登録証。人間ではない証である。

どちらにもなりきれない、中途半端な生き物だ。

生きているだけ儲けモノだと、そう思えたのは昔の話。生を拾った感動は、その瞬間にしか成立し得ない。それから先は、新たな原動力なり目標なりが必要になる。しかし、困ったことに凧は、未だにそういったものが見出せていない。

ただ、救ってくれた相手に恩を返すという、安直な目標だけで、将来自分がどうなりたいかとか、どう生きるかとかは見えないままだ。

そもそも、こんな中途半端な生き物が、彼女たちと関わっていいのだろうか。



## 第三話

暗転する。

天地は意味を失い、前後左右は境界をなくす。視界は失われ、手足の先から冷たくなっていく。血の気が引き、膝の力が抜けた。

「な、何してるの！」

誰かの声が聞こえた。

板張りの廊下を慌しくかけてくる。

頭の奥に音が響く。どうやら、倒れこんだらしい。泣き声と人が集まる音が響く。

「何てこと。救急車！」

「貧血か。まずいぞ、うちに輸血パックがあったな」

「あなたたちは離れていなさい」

大人たちの騒がしい声が頭に突き刺さる。

こんなにも眠いのだから、放っておいて欲しい。

ああ、もう睡魔がすぐそこまで迫ってきている。揺り籠に揺られているような心

地よさ。身を委ねればすぐにも深遠な夢の世界へ旅立てるだろう。

目を瞑る。視界は元より失われている。だから、これは感覚的なものにすぎない。大人たちの声も、すすり泣く誰かの声も遠く彼方に追いやって、一人、闇の中に沈み込んでいく。

魔力も霊力も基本は同じ。熱力学に囚われない不可視のエネルギーであり、あらゆる生命が生きていくのに必要な第一要素でもある。

食物から得る栄養素や、精神的充足感などを差し引いて、魔力や霊力が第一要素とされるのは、それが生命力という言葉で表されていることから伺えよう。要するに、それそのものが生きるためのエネルギーであり、命そのものだということだ。そうでなければ、眷獣が純粹な魔力の塊でありながら意思を持つことなどありえない。意思を持つからこそ、魔力を持つのか、魔法を持つからこそ意思を持つのかは数多の哲学者や神学者が議論してきたが、一つだけ言えることは、魔法というのは、それ自体が命の源であるということだ。

腕の怪我は寝ている間に治っていた。

純粋な人間だった頃にはありえない回復速度だが、この身体になってから早五年。すっかり、慣れてしまった。

戦闘を終えた翌日、萌葱を学会に送り出した後で、アイランドガード 凧は自宅近くの特区警備隊の道場に足を運んでいた。

毎週日曜日、凧はここで近接戦闘の訓練を受ける。四年前から続く、習慣の一つだ。かつての「魔族特区」とはいえ、ライヒ・デア・モルゲンロート 暁の帝国の人口に対する異能者の数はまだまだ少ない。魔族を含めても、他の歴史ある夜ドミニオンの帝国に比べれば戦力不足が否めない。凧のような異能者はそれだけで重宝される。

もちろん、そこには軍事訓練を施すという目的以上に、力の使い方を学び、人類と魔族の共存を推し進めるといふものがある。魔族もそうだが、異能の力ほたいていが生まれ付きのものだ。それを振るえない者との間に軋轢を生みやすく、暴走させやすい。幼い頃からの教育は必要不可欠なものだ。

「萌葱姉さんから腕を怪我したって聞いたけど、もう大丈夫なのかい？」

茶色みがあった短髪の少女が、凧の隣を歩いている。背の高さは凧の肩くらいで、スレンダーな体形だ。これから運動をするというので、凧と同じくジャージの上にプロテクターをつけている。

「寝れば大概は治る。つーことで、問題はないな」

「そりゃあ、結構だ。組み手とはいえ、僕も怪我人が相手だとやりづらいからね」  
「なんだよ。もう勝った気になってんのかよ」

「まあ、優位性は常に僕にあるからね。本気になれば別だけど、君は組み手で軽々しく力は使えないだろう？」

「人に眷獸を使おうって時点で、反則なんだよ」  
むす、として凧は視線を前に向ける。

飾り気のない廊下を抜けて、扉を開けると、開けた空間に出る。天井は高く、焦げ茶色のペンキで四方が色づけられている。魔力に対抗するための特殊ペイントだ。

ここは、魔術戦闘を想定した試合会場で、一見すればフットサルコートが三面分の広さの体育館だ。ここで、特区警備隊は日々訓練を行っている。

ドアの真横には、壁に背を預けてスキンヘッドの筋肉達磨の如き男が座っていた。その男は、訓練所に入ってきた二人を見て人好きのする相好を崩した。

「おお、麻夜ちゃんに風の坊主。次か？」

頷いて答えたのは麻夜だった。

「はい。ここの第三コートを一時間ほどお借りする予定です」

「おお、そうかい。若いつてのに、真面目だねえ」

「秋月隊長もまだお若いでしょう」

「つつても、俺はもう妻子持ち。君らに比べりゃおっさんさね」

秋月は、特区警備隊の小隊長を務める男であった。十年ほど前から那月の部隊に属し、多くの事件に関わってきた猛者の一人である。

その秋月は、自分の汗を拭きながら立ち上がる。

「そういえば、今日は午前中に零菜ちゃんが来てたな」

「零菜が？」

「ああ。ここは使ってなかったけどな」

訓練所を使わなかったとなると、書庫辺りに顔を出したのだろうか。

暁零菜。

「第四真祖」の第三子に当たる姫にして、その戦闘能力は「第四真祖」の子供たちの中でも二回りは飛びぬけていると評される戦闘の申し子だ。

「ふうん。まあ、零菜がまだいるなら、一緒に帰るかな」

などと、麻夜は言う。麻夜と零菜は同じ年の異母姉妹で、麻夜のほうが三ヶ月ほど後に生まれている。姉妹仲は良好だ。

「と、まずはこっちに集中か」

麻夜は腕の筋を伸ばしながら配置につく。凧はすでにコートで中央で、黒い棒を素振りしていた。

「遅れてすまない。凧君」

「別にいいよ。ウォーミングアップの時間は稼げたしな」

「ふふ、じゃあ、すぐに始めてもいいわけだ。負けても準備不足は言い訳にできないよ」

「そりゃ、こっちの台詞だな。隊長殿と立ち話したのは、言い訳とは認めねえ」  
棒を麻夜に突きつける。

棒の長さは八十センチほど。対魔族用の特殊加工が施された警棒を剣術に合わせ  
て長くしたものだ。特区警備隊の基本装備の一つである。

「うん、まあいいよ。といっても、戦うのは例の如く僕じゃないんだけどね」

そう言っつて、麻夜は三步下がって魔力を炸裂させた。

「来て、ル・ノワール」

ズオ、と麻夜の魔力が渦を巻いて形を取る。

漆黒の西洋甲冑に身を固めた騎士。魔力によって召喚される、意思ある魔力の  
塊。暁麻夜の眷獣だ。

「いきなりソイツかよ」

ル・ノワールは、麻夜の眷獣の中でも打撃に秀でた眷獣で、メイスを武器として  
扱う。加減しやすいという点では剣や弓を扱う眷獣よりはいいだろうが、それでも  
凧と相對するには過剩戦力だ。

「壁を壊さない程度には加減するよ、怪我はしないでね凧君」

「余裕ぶっこくと、そっちが怪我するぞ」

凧は警棒を肩に担いで麻夜に言う。

試合の方式はいたってシンプル。

制限時間内に、凧が眷獣を潜り抜けて麻夜に警棒を突きつけるか、それとも麻夜の眷獣が凧を打ちのめすかだ。当然、この方式は凧が圧倒的に不利だ。麻夜を倒す必要がないとはいえ、眷獣と相対するのはそれだけで危険な行為である。

しかし、これは訓練だ。正々堂々のスポーツではないし、凧からしても眷獣との戦いはいい経験になる。

怪我をしない程度に、凧は全力でル・ノワールに向かっていった。

結論から言えば、凧は負けた。三勝一敗。麻夜の勝ち越しが確定した。

「ぼっこぼこにされて、ジュースまで奢らされるとか、訳が分からん」

直前まで仕合をしていたコートを見下ろしつつ、凧はボックスチェアに座った。そこは、二階にある休憩場所で、廊下の一部に設けられている。大きなガラス窓から、コートの中を見下ろすように作られていて、四台の自動販売機が据え置かれている。ボックスチェアが纏めて置かれているので、行儀は悪いが仰向けに寝転がることも不可能ではない。

「ごめんごめん。僕も、夢中になっちゃってさ。でも、賭けは賭けだろう？」  
頬にガーゼを張り付けた凧が、麻夜を睨む。

「途中から、ル・ジョーヌなんて持ち出しやがって。一対一じゃねえのかよ」  
「あはは、ルールにはなかったなあ」

手ぬぐいで頬を撫でながら、麻夜はいけしゃあしゃあと言う。

確かに、一対一なんてものは凧が勝手に思い込んでいただけだ。加えて言えば、凧対麻夜という視点ならばずっと一対一だった。

ル・ノワールとの戦いそのものは、僅かながらに凧が優勢だったのだ。それは、脊獣が本気になれば凧を殺しかねないということでの手加減もあったが、凧が上手く立ち回り、靈力を叩きつけて脊獣を弱らせたこともあった。

靈力と魔力は対消滅する関係にある。魔力の塊である脊獣には、靈力を叩き付けたほうが魔力で攻撃するよりも比較的効きやすいのだ。

さらに凧の母親以上に強大な靈力は、長ずれば神官が勤まると評されるほどのもので、その能力は突き詰めれば魔族の天敵として活躍できるほどなのだ。

それでも、脊獣と対消滅するほどの靈力を人間が発するのはまず不可能で、さら

にそこに二体目の眷獣が追加されれば、圧倒的に劣勢となるのは目に見えている。

「喉渴いたかな。飲む？」

そう言って、麻夜はペットボトルをこちらに向ける。

「飲むって言ったら、くれんの？」

「もちろん。君と僕の仲じゃないか」

どこまで本気か分からない麻夜の言葉に、凧はため息をつく。ボーイッシュなのは母親譲り。とはいえ、明け透けすぎて最近、いろいろと困るのだ。身体のほうは、もうずいぶんと女性らしくなっているのだ。幼馴染とはいえ、これは目にも身体にも毒だ。

「いいよ。自分のがある」

凧は麻夜の提案を断って、自分の水筒をバッグから取り出した。常夏の国では、ペットボトルを持ち歩いていても、あつという間にぬるくなってしまう。

「なんだろうね。そういう風に断られたらそれはそれで微妙だなあ」

「どうしろってんだよ……」

「間接キスとか、僕は気にしないよ？」

「少しは気にしろ。年頃の女だろう、お前は」

凧は、水筒の中の麦茶で喉を潤し、一段落つける。

馬鹿なことをいう従妹に、呆れつつ水筒を仕舞う。

「ふうん、そう」

「次はル・ジョーヌも纏めて倒してやる」

「それなら、三体目も召喚しちゃうかな」

「まじ、それは死ぬだろう。こっちが」

さすがに「第四真祖」の血を引く二世だ。眷獣の数で戦力が決まるといふものではないが、平均的な吸血鬼に比べてもポテンシャルが異様に高い。それこそ、長く生きている「古き世代」に十数年で追いつかんとするほどだから、彼女たち「皇女」の才覚は目覚ましいものがある。

単純な破壊力では、到底敵わない。

もちろん、物を壊すだけの眷獣ばかりというのも苦勞する。使い勝手が悪すぎるからで、その点では凧の眷獣は優秀だ。主の命を削らなければ及第点は与えてもよかつただろう。

「そうだ、凧君。一つ、付き合ってくれないか？」

「どこに？」

「……そこは、冗談でも慌てて欲しかったかな」

よく考えていることが分からない。

麻夜は、ペットボトルの蓋を閉めて自分のシヨルダーバッグの中に仕舞った。内容物は、まだ僅かに残っていたようだ。麻夜の癖のようなものだ。ペットボトル飲料は、僅かに残して持ち歩く。曰く、「暴漢対策」なのだとか。

「とりあえず、僕は着替えてくるよ。汗をかいたからね。凧君も着替えるだろう？」

「そうだな」

「では、集合は玄関前にしよう」

好きなように言うだけ言って、麻夜は更衣室に向かっていった。

「しまった」

凧は膝に頬杖をついて呟く。

彼女がいったいどのような要求をしてくるのか、まったく聞いていなかった。な

し崩的に、同行が確定している。

麻夜の性格から推察するに、あまりければいけないところにはいかないだろう。パツティングセンターとかそこらに連れて行かれるに違いない。

凧は、ジャージから私服に着替えた後で、玄関に向かった。

女子の着替えは遅い。特に話をする相手もいなかったらうに、凧に遅れることたつぷり十分、やっと麻夜がやってきた。

「ごめん、凧君。もしかして、かなり待たせたかな？」

「ん、いや。そうでもない」

麻夜の私服は、シックな印象の黒と紫紺を基調としたものだった。頭にはキャスケットを被り、Vネックのシャツの上から薄い長袖のカーディガンを羽織っている。可愛いというよりもかっこいいといった感じになっている。それにしても、ホットパンツから覗く引き締まった脚線美は、少々反則ではないか。さらに足元は厚底のサンダルで、健康的な肌の露出をしている。

対する凧は、いつも通りの黒パーカーだ。

「どうかした？」

「なんでもない」

凧は目を逸らし、空咳をする。

それから、麻夜はショルダーバッグを担ぎなおして、

「ちよつと、書庫まで行ってたんだ」

「書庫に？」

「うん、零菜がいるかもしれないと思ってさ。ほら、午前中にはいたって言うていただろう？」

「ああ。それで、いたのか？」

麻夜は首を振る。

「行き違いになったみたいだ。もしかしたら、君を避けているのかもしれないけど」

「何年前の話だったの」

「まあ、あんなことがあったからね。零菜にとってもショックだったんだよ」

凧は眉根を寄せて、自分の首を摩る。

「散々謝られたし、許す許さない以前に恨んでもない」

「でも、やっぱり顔を合わせずらいんだろうね。しかたないさ。気持ち分かる」

同じ年のいとこ同士とはいえ、年末年始の挨拶くらいでしか零菜と顔を合わせる機会がない。かつては、日がな一日一緒に遊んでいたこともあったが、ある事件をきっかけに関係は途絶した。

「で、どこに連れて行くってんだ？」

「うん、とりあえず付いて来て」

麻夜が先導して歩き始めた。

日曜日の午後。マンションの立ち並ぶ住宅街を抜けてモノレールの駅に入る。

「中央までね。あの駅の近くに最近できた、黒猫堂って店。知ってる？」

「いや、まったく」

「そう？ テレビでは割と取り上げられているんだけど、まあ、男子だからしかたないか」

つまり、女子なら知っている穴場スポットということか。

どのようなところか分からないが、そういった場所に連れて行かれるのは、なんだか不安になる。

モノレールにしばらく揺られた後、駅の改札口を出た二人は、寄り道もせず

真つ直ぐ目的地に向かった。

居酒屋が立ち並ぶ路地の只中。小さな十字路の角に建つ五階建てのビルの一階部分がそれだった。

「ここが、黒猫堂？」

そこは、赤レンガ風の外壁の、こじんまりとした喫茶店だった。内装は古風で、お洒落なアンティークショップでも経営できそうな雰囲気だ。

「とりあえず、凧君。何も聞かず、話を合わせて欲しい」

「うん？」

意味深長なことを言ってから、麻夜は凧を連れ立って扉を開ける。鈴が鳴り、店員が二人を出迎えた。おそらくは大学生くらいの女性店員。その、にこやかな営業スマイルをやり過ぎし、案内された角席で向かい合った。

黒猫堂などという名前の割りに、猫を思わせるものは何もない。せめて置物くらいは置いておくのがいいのではないだろうかと思いつながら、店内に視線を巡らせる。やはり、女性客が多いようだ。カップルでの来店者もいる。

空調の整った喫茶店の中では、窓から差し込む強い日差しも暖かく思える。そう

いえば、吸血鬼は日差しが苦手だったはずだが、実際のところはどうかだろうか。

「その迷信、本気で信じてるのかい？ 親族として、それはどうかと思うよ」

親族とはいっても種族が異なる。最も、凧は半分は吸血鬼寄りの身体になってしまったが。

「俺は太陽光で、なんつーか身体が重くなる気がするんだよな」

「まあ、みんなその程度の苦手意識はあるよ。好きではないよね、やっぱり」

店員が持ってきた水で、唇を濡らした麻夜が言う。

店内のテレビでは、吸血鬼の芸人が、吸血鬼のあるあるネタをかましていた。

「ああいうの、人間からすればどうなのかな。僕らにとってはあるあるだけど」

「どうだろうな、言われれば納得、程度じゃないか。……吸血鬼の生活で想像できないことって、あまりないよ。知識としては知っているし、結局は実感が伴わないだけじゃないか」

「ふうん、吸血は？」

「人それぞれとしか。人間だって、ママシとかすっぱんの血を健康にいいつつって飲むことあるだろ」

それはマイノリティではあるが、文化として血を摂取することがないというわけではない。

「それと一緒ににはできないと思うよ、僕らの吸血は」

「分かっているよ。血を飲むって部分を拡大解釈しただけだ」

「血を口にするという点で言うなら、僕らは人間とは違う。むしろ、蚊のほうが近いと思うな。血を吸って仲間を増やしたいっていう部分ではね」

蚊の雌は卵を育てるために血を吸う。吸血鬼の吸血衝動は、性欲から来るものとされる。根源的には次世代のための吸血だ。

そのため、吸血鬼は同性の血はあまり好まない。ホモとかレズとかそういうレッテルを貼られるからだ。マイノリティを除けば、同性に欲情しているなどと思われるたぐいはないだろう。

「血を吸っても、仲間は増えないだろ」

「どうかね。上手く血の従者にしてしまえば、その時点でチェックメイトだと思うけどね。何せ、わざわざ告白する必要もなければ、浮気をされる心配もない。血の従者は、主には逆らえないからね」

「性質が悪い」

「そういう吸血鬼も、残念ながらいる。それが、僕らの苦難の歴史を生み出す一因だったわけ」

血の従者。別名に血の伴侶とも呼ばれるそれは、吸血鬼の支配下に入った人間を指す。主からの魔力提供を受け、擬似的な不老不死となり、相性次第では主の眷獣を使役することもできる。永遠の命を持つ吸血鬼と定命の人間が永久に一緒にいる唯一の手段であり、吸血鬼と人間のカップルは、総じて血の従者を選択することが多い。

しかし、その一方で、血の従者は主となった吸血鬼には逆らえないという大きな危険が伴う。赤の他人を無理矢理血の従者にしてしまうことも可能なので、問題視されることも少なくない。

当然ながら、吸血鬼と人間が共生するために、吸血に関して各国で法整備が進められている。

「緊急事態を除き、公共の場での吸血行為の禁止」であったり、「同意のない吸血行為の禁止」であったりが基本であろうか。日本国や日本国の法律を参考に整えら

れた「暁の帝国」の法律では、前者は「わいせつ物陳列罪」後者は「強制わいせつ罪」に準じた処罰が加えられる。

強制的に他者を血の従者にした者には、重い罪に問われるのは言うまでもない。幸いなことに血の従者は、人間から擬似吸血鬼への不可逆の変質ではないので、元に戻すことも不可能ではない。

「ま、吸血がどうこうって話は、吸血鬼同士でもあまりしないものだよ」

「そうなのか」

「うん。血が吸えるかどうかってのは、つまりはその対象がタイプかどうかだからね。輸血パックは別としてさ」

さらに言えば、その相手に欲情できるかどうかの議論だ。思春期の吸血鬼にとっては、恋バナに準じる話題なのだから。

「ところで、オーダーは決まった？」

「ん、ああ。これでいい」

風がメニューを指差す。アイスコーヒーだった。

「じゃあ、決まりだね」

麻夜はすでに決めていたらしい。呼び出しボタンで、店員を呼び出した。

店員は先ほどの大学生だった。

「ご注文を承ります」

「アイスコーヒー一つと、後はこの、期間限定カップル専用特盛りパフェで」

凧が目を見開いて口を開こうとすると、麻夜は狙い済ましたようにサンダルの踵で凧のつま先を踏み、捻る。「話を合わせろ」とはこのことだったのだろう。言外の圧迫感が凧に押し寄せた。

「なんだよ、カップル専用って……」

声を潜めて尋ねた。

「ここの特盛りパフェは男女二人組みでなければ食べられないんだよ。期間限定でね。安くてでかい」

「写真を見れば、それは分かる。なんで俺だよ」

「僕には凧君以外に仲のいい男子がいないからね。最後の手段はできるだけ使いたくなかったし、君が暇でよかった」

見た目もいいが血筋もいい麻夜に手出しできる勇気ある男子はまだ出てきていな

いらしい。いたとしても獅子の黄金レケルス・アウルムを何とかしなければ蒸発は必至だが。

「ちなみに最後の手段って何だ？」

「僕が男装して、部活の後輩を連れて来る。悔しいけど、まだ男子でも頑張れば通るからね。シンディ辺りなら、いいえさもあるし釣れるだろうね」

そういえば、麻夜はシンディと同じバスケット部だった。吸血鬼と人間なので、試合は別で行っているらしいが、練習では顔を合わせる機会も多いのだという。

「あまりシンディを煩わせなくてやってくれよ……」

「その辺りは大丈夫さ。僕はこれでもいい先輩だからね」

「どうだか」

それから十数分後。

凧は、運ばれてきた巨大なパフェを見て絶句し、麻夜は珍しく目を輝かせてスプーンを取るのだった。

## 第四話

陽光の下を黒い傘が跳ねる。

日の光。そして、紫外線は、吸血鬼はもとより乙女の天敵。不老不死ではあっても、人間と価値観をほぼ共通する昨今の吸血乙女たちは、もともとの体質もあって日光を嫌う傾向にある。生物学的視点ではなく、精神面での嗜好が影響しているというのが一般的な見方である。

「吸血鬼が太陽を浴びると、老ける」  
何の根拠もない噂。

そもそも不老の吸血鬼に老けるという概念は適応されにくい。個体差が非常に大きく、肉体の成長が止まる年齢は吸血鬼それぞれだが、大概が人間換算で十代から二十代の容姿を維持する。子孫を産み育てるのに適した肉体年齢で成長が止まるように、遺伝子にインプットされているのではないかという説もあるが憶測の域を出ておらず、結局は原因不明なままだ。

とはいえ、吸血鬼の成長の度合いがどのように変わるのか不透明だということ

は、「もしかしたら」という憶測を生みやすい。

紫外線対策が、人間の乙女の必須事項に挙げられていることも手伝って、吸血鬼の少女たちにも大きな課題の一つとして認識されているのだった。

日本は梅雨明けを迎えた季節。

“暁の帝国”はこの日も当たり前のように太陽が輝いている。

下校時刻を迎えても、正午ごろと日差しが強さがそれほど変わらないような気がする、と吸血姫暁零菜は苦々しい思いで小石を蹴った。

ギラギラと自己主張する太陽が憎い。陽光が身体を溶かし、アスファルトに吸い込まれていきそうになる。いっそ、そのほうがいいようにも思った。

(帰りたくないなあ……)

零菜はため息をつく。

一週間のうち、四日間を零菜は戦闘訓練に費やしていた。

中学に入ってから始まった実戦的な訓練。痛いし辛いし遊べないしで、まったく楽しくない。しかし、零菜は槍母バカ親に頭が上がらず、しぶしぶ訓練に付き合っているのだ。

西に傾きつつある陽気な太陽とはうって変わって零菜の頭の中は沈鬱なままだ。母親の雪菜は零菜のことを思っているのだろうが、零菜からすればいい迷惑だ。あの堅物なところとか、気に障る。感性が合わないと言えればいいのだから。零菜自身の顔立ちが母親の生き写しかと思うくらいに似ていることもあり、鏡を見たときなど一瞬冷や汗が出ることもあるくらいだ。

違うのは、目の色と胸部。中学生でありながら、零菜の胸部は母親の上位互換と言ってもいいくらいになっている。おそらくは祖母の遺伝子であろう。そして、目の色は父親のそれに近い。光の加減によっては空色にも見える黒目である。

父親から受け継いだのは、目の色だけではない。

父親からは、膨大な魔力と不死の呪いを受け継いだ。成り上がりの吸血鬼よりも肉体のスペックは上のはず。

しかし、零菜は母親にはまだ勝てない。仮に本気で殺しあつたとしても十中八九敗北を喫するだろう。何せ、雪菜はあらゆる魔力攻撃を無効化する槍と第四真祖の眷獣という凶悪な組み合わせで敵を殲滅する大魔神だ。この支配から抜け出すには、せめて一矢報いる程度の実力を示さないといけない。

肩を落として歩いている、まさにそのときだ。

あ、と零菜は小さく声を漏らし、コンビニの軒下に小走りで駆け込んだ。黒い日傘に角度をつけて顔を隠す。

「凧君……?」

そっと、見る。

道路を挟んで反対側をスクールバッグを担いだいところが歩いていた。通信端末を弄りながら、彼は零菜に気付かず自宅方面に歩いていく。

その姿を、零菜は息を殺して見送った。

そういえば、凧と最後に話したのは、いつにだったか。

ほかの姉妹は頻繁に会っている娘もいるようだが、零菜に関してはこの距離まで近付くのも久しぶりだ。記憶にある限りでは、年末年始に顔を合わせたくらい。そのときも、会話がないわけではないが、零菜のほうが距離を取ってしまい、結局ギクシャクしたままで関係改善は遅遅として進んでいない。

悪いのは、零菜のほう。

分かっている、一步を踏み出せないでいる。

「あれ、零菜じゃん。何してんの？」

「あ、萌葱ちゃん？」

話しかけてきたのは異母姉の萌葱だった。

ウェーブのかかった長髪が、柔らかく風に踊る。仄かに、柑橘系の匂いが尾空をくすぐる。

「それ、香水？ 柔軟剤？」

「お、気付くか。そうそう、今朝アルディギアの王室から贈られてきたばかりの新品。零菜の家に届いてるんじゃない？」

「アルディギア王室。ラ・フォリア女王から？」

「いや、クロエからだね」

「クロエちゃんか」

暮らしている国が異なれば会う機会が減るのは当然である。零菜の父暁古城は多くの愛人を囲む艶福家であるが、その中でもアルディギア王国の女王が、古城と関係を持っているというのは周知の事実だ。アルディギア王国と“暁の帝国”は深い同盟関係で結ばれていて、経済的にも関わりが深い。クロエは、アルディギア女王

のラ・フォリアと古城の間に生まれた娘で、零菜の一つ下の学年だ。

「で、零菜は挙動不審で何やってたのさ」

「え、わたし？ いや、わたしはなんて言うか。まあ、ぶらぶらと」

「雪菜さんなら、今日は仕事が遅くなるから帰れないってさっき研究室に来たときに言ってたけど？」

「ほんと!？」

萌葱の言葉に零菜は期待に目を輝かせて尋ねた。

「何か連絡入ってないの？」

言われて、零菜はカバンから携帯電話を取り出した。四角い板状の通話機は二世代ほど前の機種だ。壊れていないので、零菜は買い換えていない。

画面を眺めると、確かに雪菜からメールが一件届いていた。

母親の性格を現すかのように、絵文字もなければ顔文字もない簡素な内容の文面。

「ご飯は萌葱ちゃんところで、だって」

零菜の表情が明るくなる。

雪菜との戦闘訓練が休止したことで、この日の夜は萌葱の家にお邪魔して遊び惚

けることができる。落ち込んだ気分を上昇させるには、ちょうどいい。

「ここ、コンビニ前だし、夕ご飯買っちゃったのかと思った」

「ううん。別に何か買ってたってわけじゃないから」

「そう。じゃあ、用事ないなら、帰る？ 今日他にも麻夜とか来るから、鍵を

開けないといけないのよ」

「そうなんだ。じゃあ、一緒に行く」

萌葱に並んで、零菜は歩く。

萌葱の家は、中央セントラル・ゾーン行政区の中央、行政機能が集まるエリアに建つ、五十二階建ての高層マンションの五十一階にある。最上階は古城のプライベートスペースになっていて、その妻と子どもは五十階から五十一階をそれぞれ思い思いに使っている。使っていない部屋もあれば、勉強専用の部屋もあり、さらにはカラオケや書斎など部屋の用途は多岐に亘る。非常にもつたいない使い方をしているように思うが、そこは皇族の特権というものだ。それに、四十九階未満は賃貸にするなど、抜け目がない。

カードキーで電子錠を解除して、二人はマンションのエントランスを潜る。エレ

ベーターに乗って、そのまま五十一階の葱葱宅へ向かう。

「お、葱葱姉さん。早いね」

葱葱の家の前に麻夜が立っていた。

ビニール袋を真っ青な甲冑に持たせている。凍結の能力を持つ麻夜の眷獣は、その両手を冷凍庫と同じ程度の温度に設定して袋の中身を冷やしていたのだ。

「アイスが溶けちゃうところだったよ」

「自分の家の冷凍庫でいいでしょ」

「いちいち家を往復するのは面倒じゃないか」

「それで眷獣を出すのはいかがと思うわよ」

ため息をつく葱葱は、冷凍庫扱いされている憐れな眷獣に憐憫の視線を向けた。ル・ブルーも心なしか不機嫌そうだ。甲冑なので表情を読み取ることができず、完全な葱葱の空想でしかないが。

「とりあえず、開けるから下がって」

葱葱は妹二人を家に上げるため、慣れた手つきで開錠した。

□

時刻は夜の九時を回った。

夕食の片付けを終えた萌葱は、冷蔵庫を漁っている。

風呂上りの萌葱は、紺色のジャージに眼鏡という化粧っけのない出で立ちだ。

「萌葱ちゃん。お風呂どうする？ 栓抜く？」

黄色い薄手のパジャマを着て脱衣所から出てきた零菜が、萌葱に尋ねた。

「んー、そうだね。あと二十分してもお母さんが帰ってこなかったら、抜いちゃうか」

「分かった。じゃあ、とりあえずほっとく」

結局仕事が長引いているのか、雪菜も浅葱も帰ってきていない。この家には、三人の暇人が集っているだけだ。

「てか、麻夜。あんた、その格好どうにかならないの？」

「え、何。何かおかしい？」

ソファの上で胡坐をかく麻夜は首を捻り、自分の身体を見直す。

「いや、おかしくないけどさ。ちょっと、無防備すぎるでしょ」

萌葱の指摘を受けて、麻夜は改めて自分の服装に目を向けた。

無地の半袖Tシャツに太ももの半分も隠せていない短パンという組み合わせだ。健康的な肌が、これでもかと露出しているのはうら若い乙女としてどうかというのが萌葱の指摘であった。

「んー、でも普段からこの格好で寝てるしさ。夜暑いのに、変に着込むのも無理っしょ」

「そうかもしれないけど、その無防備さが心配なのよ」

「大丈夫だって。へーきへーき」

なんの根拠もない自信を堂々と披露して、麻夜は自分が持ち込んだアイスを齧った。

「てか、うち、冷房入れるんだけど、とっちは入れないの?」

「窓全開で吹き込んでくる風を楽しむのが乙なんじゃないか。そこは、ほら。風情ってやつ?」

「人工の島に風情を求めてもしょうがないっていうか……まあ、考え方次第だけど、

うちは冷房つけるから」

「寒くなったら布団被るからおっけー」

「あくまでも上を着ないつもりか。まあ、それでいいならいいわよ」

麻夜の生活習慣にいちいち口を出すのも野暮というもの。これ以上姉貴風を吹かしても、羞恥心が決定的に不足している彼女には何の意味もないだろう。

「その格好で外をうろつかないでよ」

「いや、さすがの僕もそんな非常識な真似はしないよ。信用ないなあ」

麻夜は、アイスをすべて食べきり、残った棒をゴミ箱に投じた。

弧を描いた棒は、ゴミ箱の縁に当たって床に落ちた。

「ありゃ」

「麻夜ちゃん下手」

床に落ちた棒を、零菜が拾ってゴミ箱に入れ直した。

「悪いね、零菜」

「どういたしまして」

零菜は、そのままリビングの隣にある和室に歩いていく。

長座布団を敷き、その上でストレッチを始める。

「何してんの？」

「見ての通り」

「そんなことしなくても零次元々にやくにやじゃん」

「くにやくにやって何？ 変な言い方やめてよ」

前屈をして自分のかかとを触る零菜を見て、麻夜は「見ての通りじゃん」と笑う。

「きちんとやっとかないと、勝てないからね」

「相変わらず打倒雪菜さん？」

「もちろん。ぎゃふんと言わせてやる。ぎゃふんと」

吸血鬼の肉体にとっては、外傷は大した意味を成さない。よほどの重傷ならば話は別だが、ストレッチを怠ったからといって肉離れや捻挫などにはならない。なつたとしても、すぐに回復する。しかし、肉体の柔軟性は回復力とはまた別の問題だ。スポーツでも言えることだが、柔軟性が高いほど動きはよりしなやかになり、届かないところにも手足が届くようになる。戦闘訓練においては、数ミリの動きの差が勝敗を別つことも珍しくない。ストレッチは、打倒雪菜のためには必要不可欠なの

だ。

「あ、発掘ー」

零菜が気合を入れてストレッチをしていると、キッチンのほうから萌葱の声が出た。

それから、トタトタとテーブルまで歩いてきた萌葱は、その手に抱えるビニール袋をテーブルの上に置く。

「萌葱姉さん。それ何？」

「これ、この前貰ってきたヤツなんだけど、すっかり飲むの忘れててさ。この機会にね」

と、萌葱は袋をひっくり返す。

中から出てきたのは銀色のパウチ容器だ。アルミラミネートフィルムが鈍く輝いている。

麻夜はテーブルまで歩いて行って、容器の一つを手にとった。ラベルには「AB型Rh+」と書かれている。

「これ、血じゃん」

「そう、血。人工だけどね」

「飲料用の人工血液って、事業失敗してなかったっけ？ 新しいの出たの？」

血液を人工的に作り出し、吸血鬼を対象に販売するという企業戦略に打って出た会社もかつて存在したが、需要が少ないことと、本物の血を味わえる輸血パックには及ばず撤退に追い込まれている。

「でも、ほら。輸血パックの血は飲料用じゃないし、いざというときに使うのを嗜好品として消費するのはよくないでしょ」

「何度かニュースになってるから、それは分かるよ」

「うん。だから、本格的に飲料用を開発したほうが後々のためになるって判断があったの」

吸血鬼にとって人間の血は必須のものではない。

口にすれば、魔力を充足し、精神を昂ぶらせ、肉体的にも一時的にタフになる

——要するに強烈なドーピング薬のようなものである。嗜好品としての摂取のほかには、緊急事態では自分の身を守るために血を摂取することもある。

しかし、日常を生きる上で吸血が必要とされる場面はほとんどなく、制度上も人

間からの吸血は法に抵触するとあって、萌葱たちも他者から吸血したことはない。輸血パックなら、許可さえ取れば入手できるので、血を口にしたことがないというわけではないが。

「試作品か」

「そ。でも、よくできてるって専らの噂」

「へえ、じゃあ、ちょっと貰おうかな。何型があんの？」

「一般的なのは全部。何、あんた。もしかして、血液型で味変わるとか思ってるの？」

「まさか、そんな俗説信じないって」

麻夜は笑いながら適当に容器の一つを選んだ。

血液型による味の違いは、一昔前に流行った俗説だ。科学的には、血液型による味の違いはほぼ皆無だと証明されている。強いて言えば、血中コレステロール値や血糖値などで味が変わることがあるくらいで、吸血鬼の味覚でも味の違いを判別するのは難しい。

最も重要なのは、その血液の中にどれだけ魔力や霊力が含まれているのかという

点で、これは人工の血液では再現できず、輸血パックの血液でも時間が経てば、その内部から魔力や霊力が失われてしまう。結局、吸血鬼が最も美味しく血を味わえるのは、人間に牙を突き立てたときだけなのだ。

「うーん、やっぱり味気ないなあ」

麻夜はプラスチックの蓋を外して、中の人工血液を吸い上げた。一口吸って、眉を顰める。

「不味くはないけど」

「まあ、病院食みたいなもんだしね。血の味が恋しいときに舐めるのがちょうどいいくらいよ」

などと、萌葱は言う。

彼女も、口を付けてはいるが微妙そうだ。

「吸血は吸血鬼のアイデンティティーだし、ちょっとは飲んどいたほうがいいって言うけどねえ」

今の人工血液ならば、嗜好品として飲むようなことにもならないだろう。

これは、プロジェクトが軌道に乗らなかつたのも頷ける。今後の課題は、どのよ

うにしてオリジナルに近づけるか。味ではなく、魔力や霊力といった部分で。

「零菜はいる？」

「わたし？」

和室でストレッチをしていた零菜は、足を組み直して、別の筋を伸ばし始める。

「……わたしは、いいよ。血は、飲まない」

「そう。まあ、飲みたくなったら言っつてね。結構、残ってるから」

「分かった」

おそらく、そのようなことにならないだろう。

零菜自身だけでなく、萌葱や麻夜もよく分かっている。零菜には吸血禁止令が母親から出されているし、零菜自身も血を忌諱しているからだ。

いや、血を忌諱しているというのは建前に過ぎない。

本当に忌諱しているのは、血ではないのだから。

零菜は足の裏を合わせて股関節を伸ばす。

両膝が座布団に付くくらい、股関節が柔らかい零菜にとってはあまりに意味のないストレッチだ。けれど、今はリビングに行きたくなかった。血の匂いに当てられ

ると、思い出してしまうから。

思考を無にしてストレッチに励んでいると、麻夜がひょっこりと顔を出した。

「零菜、ストレッチ終わった？ ゲームやろうよ」

いつの間にか、リビングから血の匂いが消えている。片付けたのだろう。

「ん、いいよ」

麻夜がコントローラーを手に現れた。零菜はほっとして、コントローラーを受け取って立ち上がる。

「萌葱姉さん。テレビ借りていい？」

「どうぞー」

萌葱は、携帯の画面を弄って気のない返事をする。テーブルの上にあった人工血液は、いつの間にか冷蔵庫に戻されたらしい。

テレビゲーム。

あまり、零菜はやらないが。

「何するの？」

「んー、手っ取り早くパーティー系で」

麻夜がゲーム画面を起動する。

大型のテレビ画面に映されたゲーム内容の選択画面。最近は大容量ハードディスクにすべて保存されていて、ディスクそのものをセットするタイプは少なくなつた。麻夜は、表示されるゲームの中から大人気パーティゲームの最新作を選び、スタートした。



## 第五話

真つ暗な空にぼっかりと開いた白い孔。

夜闇が死をいざなった古代の世界ならばともかく、地上が人工の光に満たされた現代では青白いその孔には自然現象以上の価値を見出すのは難しい。単純に個々人の美的感覚に左右されるもので、多くの人にとっては、一つの風景という程度のものでしかないのかもしれない。

しかし、オフィス街ならばまだしも、住宅街ともなるとさすがに夜闇は深まる。島の中央部は深夜になってもまだ明るく、その灯は空に浮かぶ雲に反射して西部地域にまでぼんやりと届くほどだが、路地に入れば街灯くらいしか明かりがないのは当たり前のことだろう。

セカンド・ウエスト  
第二西地区の端にある廃れた工業団地は、十年ほど前の建造ラッシュにある日系企業が進出してきたことで建築された場所だが、結局は魔族特区の技術力に及ぶべくもなく撤退して、今では住む者のない幽霊団地と化している。

五年ほど前からだろうか。

幽霊団地に本当に幽霊が出ると噂が立ったのは。

もともと不良学生たちの溜まり場となっていた幽霊団地だったが、ここ最近はその学生の姿も消え、その代わりに廃墟マニアの聖地、あるいは心霊スポットとして名を上げていた。

科学の発展した現代で幽霊など馬鹿げている。

そうは思っても、ありえないからこそ妄想を掻きたてるとはよく言ったもので、理性的に否定できるものでも心理的な部分で恐怖しているという点は昔から変わらず、それを楽しむ肝試しが若者の間で流行するのも水が上から下へ流れるのと同じくらいに普通の出来事だ。

となれば、心霊スポットとして名高い幽霊団地に足を踏み入れようとする者は後を絶たない。

「やっぱり、ちょっと不気味じゃない？」

「ちょっとどころかかなり不気味だろ」

「何、もしかしてびびったの？ 男なんだからしっかりしてよね」

「そういう男だからどうだっていうの、ほんとどうかとおもうけどね」

幽霊団地の中に一棟に、男女四名が忍び込んでいた。

髪を染め、ピアスをつけた如何にも若者を楽しんでいるという風の高校生から大學生のグループだ。

この建物が建造されてから十年、放棄されてから人の手が入っていないからか、傷みようは凄まじい。若者の溜まり場となっていた証拠として、いたずら書きやお菓子のゴミが散乱し、ガラスも至るところが割れているという荒れようだ。

さすがに壁が崩れているといった建物そのものの老朽化は見られないものの、所々感じる新しさが、壊れた物品との不調和を醸し出して尚一層の不気味さを演出している。

少年の一人が懐中電灯を部屋の中に向ける。

「うおッ」

部屋の中から突如として黒い生き物が大量に飛び出した。光に驚いた蝙蝠たちが、一斉に飛び立ち、翼で空気を叩く音が連なる。

「きゃあああああ！」

「いやあああああ！」

少女たちが驚いてしゃがみこんだ。

バタバタとうるさい蝙蝠は、人間から遠ざかろうとして割れた窓や開け放たれた扉から部屋の外に飛び出していく。

「ははは、何。驚きすぎでしょ！」

「あんたが一番最初に声上げたんでしょーが！」

「いって。蹴るなよ！」

照れ隠しなのか、少女はからかってくる少年に蹴りを入れる。残りの二人は、またかよと笑いながらその光景を眺めている。

—— お ■ し そ ■

「なあ、今なんか言った？」

「はあ、何。やめてよそういうの」

友人の戯れを眺めていた少年が、不思議そうに周りを見回す。

確かに、何か声のようなものが聞こえたのだが、音を立てそうなものは四人を除けば僅かに残った蝙蝠くらいしかない。

—— ■ べる

「え、何？」

ノイズのような何かが頭に響いているような感覚。

冷や汗が流れる。

さすがに、他の面々も気付いたらしい。

「じよ、冗談でしょ」

「何か、いる？」

「ねえ、帰ろうよ」

「ああ、なんか気味が悪いな」

この段階になると、声のような何かだけでなく、明確な「意思」を感じられるま  
でになっていた。

ただの人間でしかない四人に存在を感知されるほどの、何かがそこにいる。

そして、部屋の中を警戒しつつ外に出ようとした少年は、室内を意識するあまり  
廊下で待ち構えているソレにはまったく対処できなかった。

「あ……？」

冷たい泥に飛び込んだかのような感覚。

見上げれば、真っ黒なスライムのような何かが身体を飲み込もうとしていた。

「——ッ！」

悲鳴を挙げるまでもなく、少年は黒い泥の中に飲み込まれていった。

「は？」

その光景に誰もが息を呑み、目を見張った。

声を挙げることもできなかった。

あまりの光景に思考が吹き飛び、理解することを脳が放棄してしまった。

その怪物は、目のない顔を三人に向ける。下腹部が膨らんだナメクジのような巨体をゆっくりと室内に進め、不定形の肉体を大いに広げて優しく、三人を包み込んだ。



昏月凧は、人間から魔族に変わった変り種として学内でも有名ではあるが、それ以上の何かがあるわけでもなく、ただ漫然と学校に通うだけの日々を過ごす中学生だ。

実は、皇帝の血縁でもあるのだが、そのことを知る者はほとんどいない。

人に言うようなことではないと思っている。

偉いのは、自分ではないからだ。

皇帝に似てる、とはよく言われる。

色素の薄い髪がそう思わせるのだろうか。自分では分からないが、親戚からも時折そのような評価を受ける。自分では、とてもそうは思わないが。

伯父と甥の関係なのだから、どこか雰囲気似ていても不思議ではないのかもしれない。

しかし、そうは言っても凧自身に特別な何かがあるかといえはそんなこともない。

眷獣はあるが、寿命を削るし、身体に多大な負荷をかけるので使えるものではない。学校は休みがちで、成績は中の中。テストは一夜漬けで乗り切るタイプ。そんな勉強方法なので、定着しない。定着しないから定期テストは乗り切れても、模試

の成績は酷いものだ。

今まではそれでよかった。

しかし、このままというわけにもいかない。

中学を卒業した後が問題だ。

夏休みを直前に控えた金曜日。

大して面白みを感じない漢文の授業を聞き流しつつ、成績のことを思う。

今回の定期テストは、自分でもそこその点数だった。全体的に平均点を越えていた。少しだけだが、それは評価してもいいだろう。しかし、高校受験を念頭に置けば、平均点を超えているという程度なのはよくない——などと、考えながらも授業には身が入らない。

これが終われば放課後だ、と。

結局、勉強のことなど頭にはない。初めから、終わってからのことを考えている。

「昏月！」

怒鳴り声が聞こえて、視線を教壇に向ける。

一度怒り出すと面倒だと有名な、白髪の老教師が目くじらを立てて尻を見ている。

この国の教師たちの多くは、十年前に日本国籍を離れて「ライヒ・デア・モルゲンロート」の国民となつた者たちだ。彼らは、国を離れてまで、この島の生徒たちを導くことを選択したのであり、それゆえに教師陣の士気は高い。日本国内の学校に比べて、平均偏差が僅かに高いのは、母数が少ないということもあるが、教師たちの熱意が学業を後押ししていることも影響しているという。

そんな教師陣の中でも、この老教師はなかなか厳しい人物だ。

生徒指導を担当していることもあり、凧は日頃から目を付けられている。

しまった、———と思つたのも束の間、怒涛の質問攻めが始まり、授業が終わるまでそれは続いた。

「よりもよって最後の授業でジイに目エ付けられるなんて、ついとらんなあ、昏月」

隣のタナカがカバンに教科書を詰めながら言ってくる。

「俺、寝落ちしかかつたから正直助かつたわ。あんがとよ、凧」

後ろの席のヨシオカは嫌味つたらしくそんなことを言う。

「他人の不幸をありがたがつてんじゃねえよ」

当然、ふるぼっこにされた凧にとっては面白くもなんともない。加えて、目の前でへらへらとしている居眠り常習犯の男が狙われなかったのが、本当に気に入らない。

「なんでお前じゃなくて俺なんだっての。あの、ジィ」

「そりゃ、お前は素行が悪いからな」

「今日だって、平然と二限から登校してんじゃねえか。ふりょーだ、ふりょー」

金属バットを担いだ男に不良などと罵られたくない。

そう言おうとしたが、生粋のスポーツマンなヨシオカはバットを持たせても違和感を覚えない。

凧が持っていれば、明らかな野球以外に使っていきそうだが、ヨシオカが持つと不健全な雰囲気は一切なくなってしまう。やはり、坊主か否かは見た目から受ける印象を大きく変えるらしい。

「お前ら部活？」

凧は聞いた。「もちろん」と、二人は口をそろえた。

サッカー部のタナカと野球部のヨシオカは共にチームの要として活躍している。

彼らにとって来る夏休みは遊びのためにあるのではなく、部活のためにある。二人の夏休みは課題と部活で消費され、華やかな思い出は何も残らず終わるだろう。

「そろそろ大会近いからな」

「サッカーは日本とも交流大会あるしな。全国二位まで出られるんだったか」

「そうそう。まあ、全国つっても四国と同程度しかないからあつという間に終わるんだけどな」

サッカーには“暁の帝国”と日本のサッカー協会が共同で執り行う大きな大会がある。夏休み中の全国大会で二位以上になると、その秋に日本で行われる大会への出場権を獲得することができるのだ。

「また日本でスキーしてえ」

「ゲレンデの出会い。なかったなあ……」

タナカとヨシオカは遠い目で、修学旅行を思い出す。

昨年の冬に、凧たちは修学旅行で日本のスキー場を訪れた。そのときのことを今でも思い出しているのだ。

「俺は、あんな寒いところには行きたくねえ」

「ばっか、凧。ゲレンデだぞ。白銀の。スキーの上級者コースに行ければ、今頃俺だつて彼女の一人や二人できてただろうによ」

タナカの言葉にヨシオカは笑いながら同意する。

スキー場で恋が始まるなどという、何十年も前の幻想を未だに引き摺っているのだ。この二人は。凧からすれば、ただただ寒かったという印象しか残らなかつたが、真夏日が年がら年中続くこの国も正反対ながらも似たようなものか。

「いや、二人はまじいだろ」

とりあえず、凧はありきたりで常識的な指摘を二人に添えてから教室を出た。

帰宅部の凧にとっては、放課後の教室に残り続ける意味がない。

タナカもヨシオカも、すぐにグラウンドに向かわなければならぬのでいつまでも話をしているわけにもいかない。

チャイムを背に、凧は学校を後にした。

かつたるい勉強も、一先ずはここまで。

明日からは、一ヶ月にもなる自由時間が与えられる。

日がな一日を誰に咎められることもなく自由に過ごせるというのは、面倒くさが

りの凧にとっては最高の日々だ。

「教官が呼び出ししなければ、だな」

攻魔師見習いとして、最低限の仕事はしなければならぬ。

凧が唯一関心を向けることができる仕事だ。

自分が役に立っているという実感が欲しかった。迷惑をかけるのではなく、誰かのために生きているのだと証明したかった。漫然と流されるままに生きるのではなく、純粋に「生」というものを感じたかった。だから、やるべきことがあると思えるのは、幸せなことだと思う。

歩いていると、携帯が振動した。

無料通話アプリで送られてきたメッセージだ。

『あたし、あなたの後ろにいるの』

内心でため息をつきつつ、振り返る。

「何してんの？」

「冷たいなあ。もうちょっと驚いてよ、凧」

「いや、驚くも何も、誰か分かるしな」

振り向いた先にいたのはセミロングほどの茶色みがかった髪を、後ろで一つに纏めた少女だ。

背は高く、風の中よりも上くらいには目線がある。

いつも背負っている黒いギターケースには、見るからに呪的処理が施されていて、おいそれと触れられない。

「で、なんのつもりだ、紗葵」

「んもう、風ってば相変わらずさんだね。可愛い妹分に会えたんだから、ちっとは嬉しそうにしたらどう？」

「自分で言うなや」

一つ年下で、シンディと同じクラスだという紗葵は上目遣いで風に迫る。

ぴよこぴよこと短いポニーテールが跳ねている。

子どもっぽい言動とは裏腹に、しばらく見えない間にすっかり女性らしくなってきた紗葵は、前かがみになると強調されてはいけけない場所がはっきりと自己主張してくるから困る。

どうにも踏み込んだらいけないような気がしてならない。

いつの間にか成長してしまった妹分は、精神的にも油断ならない女に変わりつつある。

「家、帰んなくていいのか？」

「帰る帰る。今日は母さんが帰ってくるしさ」

自分の母親が帰ってくる頻度を表すのに、「今日は」という言葉を使うのは中学生にとってはどうなのか。最近、紗葵の母親は忙しくしていても家に帰ることもないらしい。

「最近は変な事件が起きてるってのに、軽々しく寄り道するな」

「ふうん、心配してくれるんだ」

「して当然だろ」

至って真面目な表情で、凧は答える。

心配したところで、紗葵がそうそう危害を加えられるということはないだろうし、あったとしても平然と乗り越えるだろう。

幼い頃から叩き込まれた呪詛の知識は、「皇女」の中でも群を抜いている。それに加えて眷獣までいるのだから、紗葵は対人戦闘において比類ない力を発揮する。

それでも、常識的に考えて、中学二年生の女子が——それも鼻眞目に見てもアイドルなり女優なりになれそうな容貌の人物がうろろうろとしているのは心配だろう。妹分ならなおさらだ。

「凧さ、ほんとに心配してくれてる？」

「心配してる心配してる」

「投げやりすぎるでしょー」

ツッコミのつもりか、ぽすんと凧の胸を殴る紗葵は、しかし気分を害した風でもなくにやりと笑う。

「心配してんなら、送ってってよ」

「はあ？」

「心配してくれてるんでしょ」

帰る方向が違うんだけど、というのにはさすがに口にしないでおいた。

心配しているというのは本心だったし、送っていけと言われて断わる理由もなかった。家に帰っても誰かが待っているわけでもなく、明日から夏休みで予定もない。

「じゃ、よろしくね。——お兄ちゃん」

こいつは……。

一体誰に似たのだろうか。

少なくとも、彼女の母親はこのようなタイプの人間ではなかった。父親もそうだ。となれば、隔世遺伝というものだろうか。両親に似なければ、その上に原因があると疑うのも仕方がない。

紗葵が凧の前を歩く。

足取りは軽く、後頭部にくっつく馬の尻尾がリズムミカルに揺れている。

「凧は高校どうするの？」

「どうって、どっかその辺に入るだろ」

「どっかって何、どっかって。どこでもいいならうちに来れば？」

「彩海学園か。まあ、気が向いたらな」

凧が彩海学園に入学したら、学校の中に親戚が勢ぞろいすることになってしまふ。ただでさえ、同年代の皇女たちが何人も在学しているのだ。凧は高校三年間を非常に居心地悪く過ごすことになるだろう。

「あっちへふらふらこっちへふらふらしているとどこにもいけないよ。成績だって大して良くないんでしょ」

「知ったようなことを言うんじゃないよ。紗葵、お前に俺の成績が分かるのか」

「それくらい分かるよ。テスト、五教科平均すると零点になるでしょ」

「そんな漫画みたいな点数取ったことねえよ」

凧のテスト結果は、低くても七十点くらいだ。それ以下になったことは未だ嘗てない。

とはいえ、彼女の言うとおり成績が芳しくないのは今に始まったことでもなく、正直に言えば成績で悩んでいるところは確かにあった。

しかし、それをおくびにも出さないようにしなければ、ただでさえ舐められていゝるのにさらに舐められることになる。年上として、年下には負けたくないという意地があった。

「相変わらず、だけえマンションだな」

行政の中心地は、四六時中明かりに包まれるオフィス街を形成している。所謂国家公務員に当たる人々が暮らす、公務員街とも言い換えられるだろうか。人工の島で

ある「暁の帝国」は土地の問題から建物が高層化する傾向があるのだが、中央行政セントラル・ゾーン区はその傾向が一層強い。

「じゃ、俺は帰る」

「え、なんで？」

「いやいや、送ってやっただろ！」

「ええー。まだ、母さんも帰ってないから暇なんだってー。寄ってってよー」

「なんで、そうなるんだよ。ほかにもいるだろ、萌葱姉さんとか零菜とか！」

「つれないこと言わないでよー。ご飯食べてって。ねえ、いいでしょ。どうせ家に帰っても一人なんでしょ。母さんにはあたしから言っとくからさ」

紗葵は困り顔をしつつも凧の袖を掴んで放さない。ぐいぐいと引っ張り、マンシヨンのエントランスに連れ込もうとする。

夕食時で人の往来がある時間帯だ。好奇の視線に曝されるのは、真っ平なので早々に降参する。

「分かった。分かったから、静かにしろ！」

結局、凧は紗葵に引っ張り込まれる形でマンシヨンの中に姿を消した。

高層ビルの五十階ともなれば、吹き込む風の強さは路上とは比べ物にならない。風に髪が煽られる。時折吹く突風が、甲高い音を立てて後方へ流れていく。

地上の星を思わせる夜景を左手に眺めながら、凧はテーブルに腰掛けていた。

目の前には熱々の湯気を上げている料理が並ぶ。デミグラスソースのハンバーグにシーザーサラダ、コンソメスープ。すべて、紗葵の母親、紗矢華の手製だ。

「凧君、おかわりもあるから、好きなきときに言って」

「ありがとうございます、紗矢華さん」

四人掛けのテーブル。

凧の正面には、紗葵と母親の紗矢華が座っている。

暁紗矢華。

旧姓は煌坂。

呪法を司る“舞威媛”の肩書きを持っていたこともある攻魔官のエリート中のエリート。

今は呪術を研究する国家機関で浅葱らと共に高度な呪術研究に励んでいる。彼女が担当する分野は極めて専門性が高く、代替の利かないからこそ休みも中々取れない。

いのだ。

「また紗葵がわがままを言ったみたいで、ごめんね」

「母さん、またって何よまたって」

「またはまたでしょ。あなた、凧君に会うたびにいろいろ引っ張りまわしているじゃないの」

「そんなことないでしょ。ねえ、凧」

そんなことない、と言われても、現に今こうしてここにいるのも紗葵に連れ込まれたからで、それだけを見れば紗矢華の言葉に誤りはない。

「ん。まあ、そんなことないとも言えなくもない」

「ちょっと凧、どっちの味方なのよ」

紗葵は憤慨して凧に食って掛かるものの、凧は心ここに在らずといった風を装ってハンバーグを口に放り込む。

紗葵と超絶美人人妻だったら後者の味方になるわ、とはさすがに言えないので適当に無視する。ぞんざいに扱われた紗葵は眉間に皺を寄せて不愉快そうにする。

紗葵は、フォークを置いてリモコンを手にとってチャンネルを変える。バラエ

ティーン番組が始めるには早すぎるため、夕方の情報番組が主流だ。日本の番組が半分、「暁の帝国」の放送局の番組が半分と言ったところだが、内容に大きな変化があるわけではない。ただ、日本の番組にはないこの国の情報が入っているという点で、視聴率は「暁の帝国」をメインに扱う放送局のほうが高いようだ。

接近しつつある台風の話題から、上昇傾向にある株価の話題、それからどこぞの小学校の終業式の映像と特に見るべきものはない。

チャンネルを変える紗葵の手が止まる。

『——第二西地区で連続する行方不明者はこれで六人となり、警察と特区警備隊アイランド・ガードは魔導犯罪や魔獣によるものという可能性も考慮した上で捜査を続けていくとの方針を明らかにしました——』

ここ最近頻発する若者の行方不明事件。

被害にあっているのは札付きの悪ばかりなので当初はそれほど話題にならなかったのだが、最近は真面目な学生から獣人の若者まで姿を消しており、それが第二西地区のある場所を中心に行っているということから注目が高まっている事件だった。「ただの人間はともかくとして、獣人まで同一犯の手に掛かってるのは、どう

なんだろうね」

紗葵は呟く。

獸人は最もポピュラーな魔族であり、不死性こそ持っていないものの身体能力は吸血鬼をはるかに上回る。個体差のばらつきが大きいのも特徴の一つではあるが、それでも弱い個体でも肉体の強度は他種族の上位に位置するほどだ。それが、人間と同じく被害にあっているとなれば、犯人は特殊訓練を受けたような者でもない限りは魔族か魔獣という線が濃厚になる。

「幽霊団地の辺りだから、隠れる場所も多そうだな」

「ああ、その噂聞いたことある。あれでしょ、あの団地の三号棟二階のトイレの奥から三番目の扉を午前二時ぴったりにノックすると、誰もいないはずなのに返事が来るっていうヤツ」

「俺は、日付が変わる瞬間に窓を見ると自分の死に顔が映るって話を聞いたけどな」「何ソレ、そんなの知らないー！　ありえねー！」

ケラケラと紗葵は笑う。

彼女が言っていることも次元としては同じレベルだというのに何を笑っているの

か。

その様子を、微笑ましそうに眺めている紗矢華は、ごはんの最後の一口を飲み込むと食器を早々に流し台に持っていく。

紗矢華が蛇口を捻ろうとしたとき、不意に甲高い呼び出し音が鳴り響いた。紗華のカバンの上に置いてある携帯が振動している。

紗矢華は表示されている文字を読むと、すぐに別室に向かい、そこで声を潜めて話し始めた。

「なんか急ぎの連絡かな」

「どうだかね。古城君からの呼び出しかも分からんよー」

紗葵はクッキーを齧りつつ、テレビの画面に目を向ける。

それから、数分。

紗矢華は部屋から出てくると、携帯をカバンに押し込んで、そのままカバンを担ぎ上げた。

「ごめんね、紗葵。わたし、ちょっと仕事に行かなくちゃいけなくなった」

「え。何、今更!? ほんとに呼び出し!？」

「緊急だって。とりあえず、上にいるから何かあったら呼んでね」

「ちよっと、母さん！」

「凧君。あなたさえよければ、今日は泊まっていいいわよ」

「自分の娘を男と二人きりにする母親ってどうなのよ」

紗葵が紗矢華の後を追う。

紗葵は至極真つ当な反論をしているが、仮に凧が紗葵を襲ったとして手痛い反撃を食らうのは間違いない。眷獣と魔術の二本立て。それを攻略するのは非常に難しい。

どうやら紗矢華は、最上階の古城のオフィスに呼び出されたらしい。

母親を見送った紗葵は、憤慨したと言わんばかりに不機嫌そうにして、ソファにどっかと座り込んだ。

「あれ、見た？ あれが、仕事先に呼び出された人間の顔かっての！」

「妙にキラキラしてたな」

「仕事しに行ったんだか、エッチしに行ったんだか分かったもんじゃないわ。まったく、我が母ながら呆れるわ。ま、女性率高いし、弟とか欲しいんだけどねえ」

「ストレートに言いすぎだって。第一、急ぎの用事ってのは間違いないだろ」

そうでなければ、古城に会いに行くと言えばすむ話だ。古城の用件はあくまでも仕事であって、紗矢華はただ古城に呼び出されたという事実が嬉しかっただけなのだろう。

「いい年して古城君にぞっこんってか、あれはないでしょ。娘置いてくとかさー」  
紗葵はソファに寝転がってリモコンをピコピコと押し捲る。

目まぐるしく変わるテレビ画面に、目が白黒する。ただでさえ、半吸血鬼化して目がよくなっているのだから、連続で画面が切り替わるとチカチカして仕方がない。もともと吸血鬼ではない凧の身体は、感覚と身体能力が乖離することがあるので、訓練で慣れていかなければならないのだ。

しかし、輝きを失い土と岩石だけになってしまった星のように消沈する紗葵を見ていると、何となく理解できるものはある。

「お前、寂しいのか」

「はあ！ そんなわけないし！」

ガバッと起き上がった紗葵は顔を紅くして反論する。

説得力がない。

顔に出るのは母親譲りということなのだろうか。

「ふうん。まあ、別になんでもいいんだけどよ。結局、俺は泊まってるのか？」

紗葵が嫌だってんなら、すぐに帰るけど」

紗矢華の口ぶりから察すると、今晚は戻ってこない可能性が高い。となれば、紗葵は彼女が言ったとおり年頃の男と同じ屋根の下で夜を明かすことになる。それを嫌だと言うのなら、凧はすぐにでも帰り支度をしなければならぬ。

「ん、別に泊まってるじゃあいいじゃん」

「いいのか？ それなら、俺も楽でいいんだけど」

「いいよ。後で布団出せばいいし。あ、でもあたしの部屋には入らないでよ。入ったらその胸射抜くから」

胸を射抜く。

ロマンチックな表現ながら、それには（物理）というワードが隠れている。

純正の吸血鬼ならばまだしもダンピールと命名された下位互換の凧では蘇れない可能性も高い。大人しくしておくのが吉だ。

時刻は午後九時を回り、そろそろ世間も静まり返る頃合だ。思うに、八時から九時というのは、夕と夜の境なのではないだろうか。八時台だとまだ早いという印象。それが九時になると、もう夜になったか、となる。一時間の違いだが、受ける印象はかなり違う。

九時を過ぎて今話題の恋愛ドラマに目が釘付けになっている紗葵を後ろから眺めつつ、凧は麦茶で喉を潤す。エアコンがゴンゴンと唸り声を上げて、部屋を冷やす音が聞こえる。

話すことも特に無くなった。こんなことなら本の一冊でも持って来ればよかったと思いつつ、かといって教科書を開くような殊勝な真似もできず手持ち無沙汰のまま、ちびちびと舐めるように麦茶を口に運ぶ。

インターホンが鳴ったのは、そんなときだった。

「宅急便かなんかかね」

「なんぞ、このいいときに……風、頼んでいいー？」

「はいはい、お姫様」

とりあえず、ドアホンで応答する。

「はい」

『あ、え……紗葵じゃない？　もしかして、風君？』

モニターに映し出されたのは、なにやらうろたえている零菜だった。

「零菜？　ちょっと待ってろ」

『あ、えと。……』

ドアホンの向こうで零菜が何か言いかけたが、そのときにはもう通信を切ってしまっていた。

「零菜が来たぞ」

「零菜姉さんが？」

はて、と紗葵は首を捻り、それから立ち上がって玄関に向かって歩いていく。

鍵を開けて、ドアを開けると見知った零菜の顔がある。

「零菜姉さん。どうかした？」

「あ、紗葵ちゃん。これ」

「うん？」

零菜の手にはビニール袋がぶら下がっている。中にはケーキの箱が入っている。

「あれ。これ、不死身屋のじゃん、どうしたの？」

「貰い物なんだけど、量が多くて、みんなに配ってるの。よかったら、紗葵と紗矢華さんも」

「おおう、ありがとう、零菜姉さん。ちょうど、口寂しかったんだよね。何たって、凧がいるしよ。————やっぱり、喉が渇くよね」

紗葵はにやりと笑う。

人間よりも僅かに長く鋭い牙を見せ付けるように。

「紗葵ちゃん、それは」

「仕方ないじゃん。吸えるか吸えないかで言えば吸える人だしー。それに、イイ匂いもするしね。零菜姉さんなら、分かるよねー」

「ッ」

赤い瞳に射竦められて、零菜は息を呑む。

「零菜姉さん。ちょっと、話そう」

紗葵は零菜から貰った箱を靴箱の上にある花瓶の隣に置いて、家の外に出る。ドアを閉めて、そのドアを背中で押さえるようにして立つと零菜に向き合った。

「ちょうどいいと思う」

「何が？」

「このドアの向こうに、風がいる。今日、うちに泊まることになってるの」

「——それが、どうしたの」

「零菜姉さんも泊まらない？ 風と同じ部屋にしてあげるよ。なんなら布団も」

「ちよ、なあ！ 何、言ってるの、紗葵ちゃん！」

一瞬にして耳まで紅くなった零菜が、声を抑えながらも叫ぶ。

「いいじゃん、零菜姉さん。別に妹の家に泊まるくらい普通だよ。それに、風と仲直りするチャンス。次はいつになるか分からないよ」

「仲直りって、別に……」

ざり、と音がする。

零菜の革靴が、廊下を擦った音だ。

「ねえ、零菜姉さん。——いつまで、うじうじしてるの？」

「うじうじなんて、してない」

「してる。分からないわけじゃないでしょ。凧のこと避けすぎだし、みんな言わないけどさ、気を遣ってるんだから、いい加減、そういう辛気臭いの止めて欲しいんだって」

「う……」

避けている自覚はある。

向き合うことから逃げている。

それによって、ほかのみんなに不快な思いをさせていることも、察していた。

「もう何年も経ってるし、謝ったじゃん。凧だって、そんなに引き摺るタイプじゃない。それでもダメだって言うならさ、パパッと土下座して何でもするから許してくださいって言えばいいんじゃない？　凧だって男の子なんだし、そのおっぱいでエロく迫ればコロッと墜ちるでしょ」

「な、なんてこと言ってるの!?　そ、そんなことできるわけないでしょ！」

「でも、あんまり引き伸ばしていると、みんな我慢しなくなるよ。零菜姉さんがいい

ならいいけど。何なら、今夜あたりあたしが風の血を吸ってみようか。うっかり血の従者になっちゃったりして」

「紗葵ちゃん」

「怒らないでよ。それに、最初に風に出したのは零菜姉さんじゃないの。それで、罪悪感からうじうじとして未だに一步が踏み出せない」

責めるような紗葵の口調。

零菜の急所を逐一抉るような言葉のナイフだ。言い返せないのは、それがすべて凶星だから。湧き上がってくる反発心を零菜は懸命に飲み込んだ。

「もうさ、白黒つけてよ。風を諦めるなら諦める。そうじゃないなら、そうじゃないって。親戚の仲がギスギスするの、正直嫌だしさー」

「う……ごめん」

紗葵は正しい。

零菜はどこまでも逃げ腰で、風を殺しかけたことやその後のダンピール化の遠因になるなど、彼の人生を尽く狂わせてきたことに深い罪悪感を抱いている。

彼が近くにいると萎縮してしまう。

あんなことをしたのに、凧に嫌われているのではないかと不安になる。——  
嫌われていないかなど、もはや気にしても仕方がないくらいのことを仕出かしたと  
いうのに、嫌われていないと思いたい自分を捨てきれない。

凧の身体に流れる血には、輸血パックとは比較にならないほどの霊力と魔力が宿っている。母親由来の規格外の霊力と、第四真祖由来の膨大な魔力だ。高純度の霊的能力に富んだ血液は、それだけ吸血鬼を初めとする血を媒介に力を得る魔族や魔獣にとってご馳走に見える。

生まれながらにして、凧は狙われやすい体質だったということであり、零菜が輸血パックの血を嫌うのも、吸血への抵抗感以外にも凧の血を味わってしまったことで、無味乾燥とした輸血パックを不味いと思ってしまうからでもあった。

今、こうしていても吸血の誘惑はどこからともなくやってくる。凧が近くにいるというだけで、牙が疼く。はしたないことこの上ない。

いや、違う。

そうではない。

吸血は、あくまでも当時の零菜が知っている手段が吸血だったというだけで、あ

のときの零菜は吸血以上に大切な目的があった。

凧の血を吸ったのは、あくまでも手段であってそれが目的だったわけではない。けれど、それを口にしたところでどうなるものでもない。結果的に零菜は加減を誤って凧を気絶させたし、危うく命の危険もあるというほどにまで追い込んでしまった。その後、彼の体内に残留した零菜の力がダンピール化に一役買ってしまったのである。凧の人生をこっそり覆したわけだから合わせる顔がないというのも仕方がないのだ。

「まあ、いいや」

言いたいことは言ったとばかりに呟いた紗葵は、指を組んで背中を伸ばす。

「さっきの、血を吸っちゃうっていうの。……割と本気だったりするからさ、零菜姉さんも覚悟決めたほうがいいよ」

「うう……あ」

呻いた零菜が視線を上げたとき、大きな瞳がさらに大きくなった。

ぞわり、と零菜と紗葵の背筋が粟だった。

「紗葵ちゃん！」

零菜が叫ぶ。

紗葵の背後に現れた黒い影が、今まさに紗葵を飲み込もうとしていたからだ。

「あ……」

紗葵は振り返ったはいいものの、それまでだ。

覆いかぶさってくる黒い泥のような何かに対して思考が停止してしまい、行動に移せなかった。

「下がって！」

零菜が紗葵の襟首を掴んで引く張る。咄嗟に紗葵は後ろに跳んで、身を翻すと零菜と共に後方に滑るようにながった。間一髪、黒い泥に飲み込まれずに済んだ。

「何、あれ。カ○ナシ？ カ○ナシなの？」

「いやいや、そんなわけないでしょ」

とはいえ、正体不明の魔獣であることは間違いない。

目の前に蠢く不定形の粘液、あるいはゼリー、もしくは真つ黒な泥。その何かがボコボコと泡立ったかと思えば、一部が盛り上がって顔となる。

人の顔を模倣して、失敗したとでも言おうか。凹凸は皆無で、口の部分だけが

ぽっかりと孔を開けている。その泥が伸び上がり、弧を描いて零菜と紗葵に襲い掛かった。

「やばいやばい！」

「逃げろ！」

バガン、と派手な破壊音を上げて零菜がドアを蹴り砕く。魔力で強化した蹴りは、過たず鉄製のドアをぶち抜いた。

開け放たれた脱出口に二人は飛び込む。

紗葵の家の隣は、暁家の物置として使われている部屋だ。

荷物は多いほうではなく、ダンボールがいくらか並んでいるだけで暮らそうと思えば暮らせる。

狭い廊下よりは、まだ対処しやすい。

「れ、零菜姉さん。何、あれ。魔力の塊って感じだったけど！」

「知らないよ、あんなの。眷獣っぽいけど、それほどじゃないし」

いきなり襲われて動転してしまって、詳しい相手の様子を窺えなかったが、パッと見た感じではあの泥は魔力が凝り固まったような構成だったように思う。

似たような存在は、吸血鬼が扱う眷獣が代表例だ。

意思を持つ魔力生命体とでも言うべきモノ。あれがそうとは言えないが、極めて近いものだと感じられた。

「ど、どうする？」

「どうって。とりあえず、連絡しないと。ここにあんなのが入り込むってだけでも問題だよ」

零菜は呼吸を整えて言う。

ここは、暁家が管理する高層マンションであり、国の中枢とも言うべき場所の一つでもある。化物が入れるようなセキュリティではないはずだが、侵入されているという事実は変えようがない。

「う、うん。そう、し、よ、う……？」

紗葵がふと上を見て、顔色を変える。

零菜がつられて上を見ると、真白な天井に黒い染みが浮かび上がった。それはどこもなく人の顔のようにも見える。

「う、わ……」

次の瞬間には、どろりとした粘液が二人の頭上から降り注いだ。

「わああああああああああああああああ！」

「いやああああああああああああああ！」

零菜と紗葵が抱いたのは奇しくもまったく同じ感想——「キモイ」「生理的に無理」だった。転がるように廊下に転まろび出ると、異変を察して飛び出てきた凧と鉢合わせした。

「あ、な、凧、君」

零菜がびくり、と身体を震わせる。

「零菜か。久しぶりだな」

「あ、うん。久しぶり」

本当は最近見かけていたのだが、それは言えない。言葉を探っているところで、紗葵が怒鳴る。

「そんな風にしてる場合じゃないでしょ！」

「あ、そ、そうだ。凧君は、逃げて！」

「いや、逃げるってやっぱり変なのがいるのか」

血相を変える二人の様子と部屋の中に感じる魔力の蠢き。

奇妙な生物のような何かが電気が消えて真っ暗な家の中を這い回っている。

「みんなで逃げるのがベストだと思っただが」

「あたしも賛成。さっさと逃げよう」

「うん。とりあえず、上！ 古城君のここに行けば何とかなる！」

古城がいるのはこの一つ上の階だ。

逃げるのは容易。

それどころか、この異変を察してすでに動いてくれているかもしれない。

三人は揃って階段に向かって駆け出した。距離にして二十メートルも離れていない。数秒で駆け抜けられる距離を塞いだのは、例の黒い影だった。

ナメクジを思わせる身体を伸ばして三人の前に躍り出た。

外壁を伝って先回りしたらしく、外から回りこまれた形となった。

「う……！」

影はゼラチン質の身体を震わせたかと思うと無数の触手を伸ばして三人を捕らえにかかる。廊下という狭い環境で、面制圧をされては逃げ場がない。

「飛ぶぞ！」

叫んだのは凧だった。

凧は零菜と紗葵の手を取って、五十階という高さから外に飛び降りたのだ。

「あ……」

「ふえ……」

唐突な浮遊感に唾然とする零菜と紗葵。

そして、落下していると理解して絶叫する。

「ぎゃあああああああああああああああああああ！」

「いやあああああああああああああああああ！」

風を切る音がいやに近く聞こえる。

あまりに高いところから落ちた所為か、落ちていないのではないかと錯覚するほどだ。

生身の人間ならば落ちれば原型を残さずミンチになる。もちろん吸血鬼でもミンチになる。再生できるかどうかはその肉体のスペック次第。零菜と紗葵ならば、生還できる可能性は高いが、凧は死ぬ。そして、もちろん高所からの落下で生き残れ

るからといって怖くないわけではない。

「無理無理無理死ぬ！ いや、死なないけど死ぬほど痛いって！」

「ざけんな、凧！ 何してくれんの！ 何とかしなさいよ、もー！ 死んだら崇ってやるからね！」

半泣きになりながら、零菜と紗葵は凧に抗議する。その抗議を受けて、凧は「分かっている」と怒鳴る。

凧は零菜が抱き抱えると、自由になった右手の中に一振りの魔剣を呼び出した。

「来い、インフェリア・アーテル不出来な黒剣！」

凧の眷獣の中でも最も召喚する機会の多い重力剣の眷獣だ。重さを操るだけでなく、重力そのものへの干渉も可能という優れたもの。

「任せたぞ！」

刀身が魔力を纏い、三人を重力フィールドに包み込む。本来は魔剣の影響下に置かれた物体の重さを調節したり、斥力を発生させたりすることで弾き飛ばすなどの攻撃的な用法をするのだが、今回は高所からの落下を可能な限り安全に乗り切るのに行使用する。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

声と魔力を振り絞り、凧は魔剣の能力を全力で引き出す。

ビリビリと腕が痺れ、倦怠感が襲ってくる。

ほんの数秒、力を使えばいいだけだ。それほど辛いものではない。吹き抜ける風が緩まり、落下が浮遊程度にまで緩和されるころには、十階程度の高さにまで落ちてきていた。

勢いを失った三人は、一瞬だけその場に制止すると重力フィールドの消滅と共に地面に足を付けた。

「い、生きてる……?」

「死ぬかと思ったー!」

膝に手を突く零菜と尻餅を突く紗葵は、それぞれが自由落下の恐怖から解放され、安堵の表情を浮かべる。飛行手段のない紗葵では地面との激突を避けることはできず、転移能力を持つ零菜であっても、裸になって難を脱するかミンチになってから再生するかという二者択一を迫られていたわけで、何の説明もなしに飛び降りた凧に対して非難の視線を向けるのは当たり前前のことだった。

とはいえ、その恐るべき危機を乗り越えた後の安堵や怒りも、これから迫る敵を前にしてはすべて棚上げしなければならぬ。

黒い泥の目的等、分かっていることが多いのだが問答無用でこちらに襲い掛かってきたことから一旦逃げて終わりとは言えない。

吸血鬼としての優れた視力が、マンションの最上階付近の壁に張り付く黒いナメクジを捉える。

そのナメクジは、身体を震わせたかと思うと、徐に身体を壁から離して重力に身を任せた。風たちが選択したのと同じように飛び降りたのだ。

「く、来る！」

零菜が叫び、

「舐めんな！」

紗葵が怒鳴る。

紗葵は、迸る魔力を右手に集めて、半透明なクロスボウを作り出した。己が手に馴染んだ武器を構えて、紗葵はその名を口にする。

「射抜け、捻じ切る颯風！」  
ヴィント・ホーセ・シュビラーレ

紗葵の眷獣が咆哮を上げ、烈風の弾丸を射出する。

柔らかい射撃音に反して、その矢は凶悪さを隠しもしない。大気を巻き込む魔弾は落下してくる泥の怪物の左半身を一撃の下に貫通し、らせん状にその身を折り取っていく。打ち抜かれた怪物は錐揉みして落下するより他にない。

眷獣の召喚から一撃を入れるまで、二秒とかからぬ早業だった。

べちゃり、と地に墜ちた怪物は原型を留めないほどに押し潰されてただの水溜りのような姿に変わった。

「どーよ！」

勝ち誇る紗葵はクロスボウを下げて得意げに笑う。

しかし、その笑みは長くは続かない。黒い水溜りはすぐさま泡立ち、蜘蛛を思わせる怪物へと姿を変えたからだ。八つの足と筒状の胴体を持ち、ミミズのような頭は先端が上下にぱっくりと割れている。恐らくは口なのだろう。

その奇怪なフォルムに女性陣は顔を引き攣らせた。凧ですら、気味の悪さが恐怖に先行するほどだ。とはいえ、あの姿は見せかけでないだろう。ナメクジ上の姿から、足を持つ形状に変化したところを見るに、学習していると考えるのが無難だろう。

う。知性というよりも、もっと根源的な本能の部分で肉体を最適化しているように思える。故に、あの怪物は今までのような鈍さを持たず、野生動物に近い動きでこちらに襲い掛かってくるだろう。

身を沈めた怪物は、ロケットスタートを切って風を襲い掛かる。風を切る怪物に先んじ、風は練り上げた霊力をこぶしに溜め込み、勢いよく撃ち出した。

「発ッ」

不可視の力の壁が怪物と正面から激突しその肉体を大きく後方に跳ね飛ばす。

「効いてるな。やっぱり、魔力の塊には霊力をぶつけるのが最適だな」

魔力と対消滅する関係にある霊力ならば、魔力で構成されたあの怪物の身体を中和することができる。膨大な霊力に曝されれば、あの怪物の肉体は塩をかけられたナメクジのように溶けて消えるだろう。ただし、如何に風が世界でも最高クラスの霊力タンクであったとしてもあれを中和するだけの霊力は発揮できない。弱らせるのが精々と言ったところだろう。

あるいはアルディギア製の武器があれば話は別だったのかもしれないが、ない物強請りに意味はない。

「よし、零菜」

「は、はい！」

なぜかビクッとした零菜が凧に視線を向ける。

「零菜が切り札だ。紗葵と俺で隙を作るから槍の黄金でハスタ・アウルム一撃入れてくれ」

「分かった。紗葵は？」

「おまけっぽくて気に入らないけど、それが一番手っ取り早いか。じゃあ、あたしは後衛で」

紗葵はクロスボウを肩に担いで頷く。

怪物はすでに起き上がっていて、こちらの様子を窺っている。

巨体を八本の足で弾き、一瞬にして距離を詰める怪物に対して、凧は再び靈力を放出することで対処する。弾き飛ばすのではなく、今度は受け止めるために出力を調整する。遠当てにも似た技法で怪物の眼前に眼に見えない壁を打ち出し、その突進力を大幅に削る。

ヴァイント・ホーゼ・シュペラーレ  
「捻じ切る颯風、お願い」

そこを狙い済ました紗葵がクロスボウの引き金を引く。風の矢が八つに分かれて

怪物の足を次々と破壊する。そして、三手目。腹で地面を滑る怪物の正面に立つ零菜が、雷光を纏う槍を掲げる。

「ハスタ・アウルム  
槍の黄金！」

魔力を無効化する雷光の槍が、漆黒の泥を一撃の下に葬り去る。

怪物の突進力は、その運動エネルギーも含めてすべてが魔力に由来するため、魔力そのものを打ち消されては何の意味も成さない。

「だああああああああああああああああ！」

雄叫びを上げる零菜は槍を一気に振り抜き、怪物の肉体を跡形もなく吹き飛ばした。

魔力を打ち消すというのは極めて単純ながら非常に強力な反則的な能力だ。特に魔力で生きる存在にはそれが致命的な毒となる。零菜の槍を受けた怪物はその肉体を魔力で構成していたために、槍に抗うことができず肉体を崩壊させていった。

「すげ……！！」

猛威を振るった怪物がなす術なく消滅した様を見て、凧は言葉を失う。

「相変わらず反則だな、おい」

「魔力を打ち消すなんて、あたしたちの天敵も天敵だしね」

魔力だけでなく霊力まで打ち消すだろう。あの槍は、あらゆる害悪も守りも関係なく消し去る破邪の槍なのだ。

「零菜、怪我はないか？」

「あ、うん。大丈夫」

凧に話しかけられて、ぎこちなく返事をする零菜に紗葵は呆れたようなため息をつく。

「ところでお二人さん。あれ、何？」

紗葵は、路上を指す。

零菜が怪物を仕留めた直後、その内側から飛び出た何かだ。

「俺には人に見えるぞ」

「うん、女の子に見える」

白いワンピースを着た少女が仰向けに倒れているのだ。

怪物の中にいた。あれが本体だったということだろうか。だとすれば、正体は吸

血鬼ということになるのだが、果たして少女は何者なのだろうか。

「とりあえず、捕まえて調べてみないとして感じか」

紗葵が微動だにしない少女に向かって歩き出す。

警戒しつつも、少女からはほとんど魔力が失われているようで危険な反応はない。吸血鬼だとしても、眷獣を呼び出すような魔力の動きは感じられないので、危険はないものと考えていた。

事実、少女からは何の魔力も感じなかった。

ただ、戦いの余波で周囲に巻き上がった魔力の流れが急速に変動し、紗葵のすぐ傍に渦を巻くに至って初めて危険を察知した。

凝り固まった魔力は黒い泥と化して紗葵を包み込もうとする。

「あ……」

紗葵は思わず身体を固めてしまう。零菜も凧も間に合わない。コンマ一秒の差で紗葵が取り込まれてしまうのがありありと分かってしまった。

広がる泥が自らを包み込む瞬間を紗葵はスロー映像を眺めているかのような気分で眺めていた。

非常に冷静な気持ちで、自分が喰われると認識できた。かといって、何ができるわけでもなく一瞬先の死を座して待つしかない。

漆黒の泥を眩い金剛石の輝きが跳ね除けたのは、まさにその瞬間のことだった。穢れを寄せ付けない金剛の楯は、泥が張り付くことすら許さず怪物の残滓を十メートルほども跳ね飛ばす。

「メサルティム・アダマス神羊の金剛……」

へたり込む紗葵は、救い主の名前を呟く。

眷獣の姿は見えない。

全力展開していないからだろう。古城父が本気になれば、この程度の泥など撫でるだけで蒸発させられるが、それでは周囲への被害も馬鹿にならない。紗葵が高性能ミサイルならば古城は核爆弾だ。下手に力を解き放てば、国を滅ぼすことにも繋がりがねない。

跳ね飛ばされた泥は尚も抵抗を続けようとして蠢いたが、今度は遙か上空から降り注ぐ無数の呪矢に射抜かれて、ついに活動を停止し、大気に溶けて消えた。

紗矢華は二十代中頃以降になってからが最大の魅力を発揮するんじゃないだろうか。

喫茶店とかでジーパンなどのラフな格好にエプロンとかつけてそう、と勝手な妄想。

## 第六話

謎めいた漆黒の泥の襲撃を受けた直後、零菜たちはマンションの最上階

暁古城が座す広大なフロアにやってきていた。

フロアは円形で、南側半分がオフィスとして利用される空間であり、残り半分が生活空間として分かれていた。

凧が呼び出されたのは、オフィス側だった。

中に入って圧倒される。

天井は高く、一面ガラス張りとなっている。東に向かえば、バーベキューもできる広い屋上が見れるし、オフィス内にあるテーブルやソファの類はすべてアルディギア王国の伝統技法がふんだんに用いられた高級品。国内最上級の調度品に飾られた、豪華な一室だ。

らしくない、というのは零菜がこの部屋にいる古城を指しての言だ。凧からすれば、一国の統治者なのだから、オフィスくらいは最上級であってもいいと思うし、実際には古城の要望でこのような形になったのではなく、政治の先輩であるアル

ディギアの女王が主導してこのような形になったらしい。——ラ・フオリアあの女王がそれを好機と見て、基本的な内装のすべてをアルディギア式にしてしまったのは言うまでもない。

「凧くん、はーい」

ソファに腰掛けて手を振るのは萌葱。その正面には、サツカーのユニフォームを着こみ、如何にも応援真っ最中だったという格好の麻夜が母親優麻と立ち話している。この空間に足を踏み入れたとき、凧が圧倒されたのも仕方ない。

暁家が一堂に会しているのだ。国外にいる面子を除いて、勢ぞろいしている。

「凧、零菜と紗葵が迷惑をかけたみたいだな」

「いえ、そんなことは……」

華々しい面々の中心に座る皇帝——第四真祖暁古城がそこにいた。

凧の叔父であり、この国を統べる権力者は高校生程度の若々しい外見をしている。吸血鬼の年齢と外見は比例しないのは常識であるが、彼は凧と同じく人間として始まり運命の悪戯によって吸血鬼としての生を歩むことになった数機な運命の持ち主だ。

膝と肩に子どもを乗せていなければ、最強の名を欲しい俤にする吸血鬼の皇帝として寸分違わぬ威厳を発していたのだろうが、今は実質家にいるに等しく本来の親バカな性格が表に出てしまっていて、気のいいお兄さんという風にしか見えない。「凧君も来ましたから、夏穂は引き取ります」

「はいはい、瞳もね」

銀色の天使と見紛う透き通った美貌の女性夏音が、古城の膝に乗って絵本を讀んでいた四つばかりの少女を抱き上げると同時に肩に乗っかって古城の頭を玩具にした夏穂結瞳と同じ年の娘瞳を持ち上げるミディアムヘアのすらりとした体形の女性。

どうにも暁家は女の子に恵まれる血筋のようだ。そろそろ男の子が生まれてもいような気もするが、そうなるとその女性陣の中で一番年下の弟ということになってしまう。そうなれば、実に肩身の狭い思いをすることになるだろう。

「やあああああ」

「ぐおッ？」

古城から引き剥がされそうになった瞳が全力で古城の頭に抱きついて、母親の暴挙から身を守る。結果として両足が首を極めることになり、古城は苦悶の声を漏ら

した。

「あ、ちょっと瞳！ 駄目でしょ古城さんの首絞めたら！」

「ここがいのー！」

「だーめー！ 我俣言わないのー！」

「こじょーくんがいのー！」

古城の頭にしがみ付いて離れない瞳に手を焼く結瞳。悪戦苦闘の末話が始められないと、古城が仲裁を行い結局瞳は己がポジションを死守することに成功した。尚、夏穂については何の問題もなく母親に抱きかかえられており、すでに眠りの世界に旅立っている。普段からぼうっとしているが、ここでも実にマイペースな少女である。

「まあ、なんだ。あれだな、さつき凧たちを襲ったやつのもので集まってもらったわけだが」

「アイツ、なんなの？ いきなり、うちの目の前に出てきたんだけど！ てゆうーか、死にそうになったんだけど!?!」

紗葵が古城に文句を言う。

魔力の塊という奇妙な怪物に、危うく飲まれそうになったのだ。そのときの恐怖たるや筆舌に尽くし難いものがある。

「ああ、セキュリテイレベルを上げる必要があるな。今のままだと家の中に入られても不思議じゃない。それはもちろん、市民全体に言えることだけだな」

「ッ……」

紗葵は唇を噛む。

そして、古城の一言が事態の深刻さを物語っていた。

相手が暁家が暮らす建物に侵入できたということは、事実上 ライヒ・デア・モルゲンロート 暁の帝國<sup>内</sup>

のどこに現れてもおかしくはないということだ。吸血鬼のように対抗手段を持つ魔族ならばともなく、人間では食われて終わる。

「セキュリテイについては、浅葱が何とかするから心配はいらない。街の警戒について、那月ちゃんも動いているから早々悪いことは起こらないだろう」

那月がすでに特区警備隊を率いて巡回を行っているという。

「でも、あの怪物に特区警備隊の兵装がどこまで役に立つかわからないよ、古城君」  
零菜が口を開いた。

「何か、思うところでもあるのか？」

「だってアイツ、実体がないっていうか。一応、本体らしいものはあったけど、全身が魔力の塊……眷獣みたいなものだったよ？」

「それは、俺も思いました。ただの魔獣ではない感じでした」

零菜と凧の報告を受けて、古城は頷く。

「やっぱりか」

「やっぱりって、見てたの？　というか、見てたよね。紗葵ちゃんに手を貸したでしょ？　もっと早く助けてくれてもよかったじゃん！」

「悪かったよ。それは、本当に」

「むう……」

零菜がぷっくりと頬を膨らませる。

その零菜を雪菜が嗜めた。

「あまりお父さんを困らせないの、零菜。飛び出していこうとするのを抑えるのが大変だったんだから。こんなところで獅子の黄金を召喚しようとしたものだから……」

「まったく、もっと落ち着きを持ちなさいっての」

雪菜に続いて紗矢華がため息をつく。

「ま、娘が狙われたときにどんな行動をするのだったのがはつきりしたし、よかつたかもね」

「大体分かったたことだけどね、それは」

さらに浅葱と優麻が笑いながら言った。

「お前らなあ……」

古城が不機嫌そうにむすつとする。その頭の上で瞳がなにやら楽しそうにきゅんきゅんとして笑い声を上げる。

「でさ、古城君。結局、凧君たちを襲ったのは何だったの？」

ミルクコーヒーを味わっている浅葱が横から話を戻す。

「それは、今後の調査結果が待たれるところだな。零菜の話によれば魔力の塊に近い存在だというし、ただの魔獣ってわけでもないみたいだな。魔獣だったら、そっちの専門家にも話を通すのが楽だったんだけどな」

「あの女の子は？」

「ワンピースのか？」

「そう」

零菜が言っているのは、戦闘の最終局面で現れた少女のことだ。あの怪物の中から現れた少女は、いつの間にか姿を消していた。紗矢華の矢で怪物が打ち抜かれた直後にはすでに消えていたのだ。

「カメラの映像を見る限りでは、あの怪物の一部みたいよ」

答えたのは浅葱だった。

浅葱が手元のタッチパネルを操作すると立体映像が部屋の中央に浮かび上がった。凧たちの戦闘シーンを捉えた監視カメラの映像だった。

それを見る限りでは、白いワンピースの少女はあの怪物の一部と考えるしかない。何せ、怪物の体内から出てくると共に、怪物の残滓と同化して排水溝に溶けていったからだ。

「あれで死んだと思うのは、楽観的過ぎるよね」

映像を見た麻夜の呟きは、一同が揃って抱く感想だった。

「でも、アイツの狙いははっきりしているわ。ここに入ってきて、一直線に紗葵の部屋にまで来たんだもの。あの部屋にいた三人を狙っていたのは明らかよ」

紗矢華がそう言うと、狙われていたと指摘された三人が顔を引き攣らせる。

「な、なんでわたしが狙われるの!？」

「そうよ、悪いこととしてたわけじゃないし!？」

零菜と紗葵が揃って反論する。

「いや、こっちの都合は関係ないんじゃないか?」

そんな二人に凧が冷静に突っ込む。

雪菜も頷き、口を開く。

「あの怪物の正体は不明として、魔力で構成された身体を持つという点に注目すれば零菜たちを狙った理由を探ることはできます」

「なるほど。単純にエネルギー源にしようとしたってことか。理性らしいものはなさそうだったし、動物的な本能に従っていると考えるほうが的を射ているのかな」  
浅葱が雪菜の言葉を補完する。

「うえ、それってやっぱりわたしたち、食べられそうになってたってこと?」

「もしくは魔力や霊力を吸い尽くされてポイかもしれないけどね」

それはどっちも嫌だ。魔力や霊力を吸い尽くされても、結局は衰弱死するだけで

死ぬことに変わりないではないか。

「ともあれだ」

古城が議論の間に入って声を挙げる。

「これからこの件については、こここの四階に緊急対策室を設置して対応する。地区長に通達を出して、市民の安全確保の努めるように全力で事に当たることになる。母さんたちもそれに応じて忙しくなるからな、お前たちは夜に外出せず、一人で出歩くことも控えるようにしなさい」

「む、別にあんなの、次来たらぶっ飛ばすだけだし」

「零菜」

少し強い口調で、古城は零菜を嗜める。

「それは大人の仕事だ」

「古城君……」

頭に瞳を乗せていなければかなり格好よかった、という思いが脳裏を過ぎったが口にするのと雪菜が本当に怒り出すので黙る。

しかし、古城が言っていることは理に適っている。

二十年前、今の零菜と同じ歳の頃に雪菜は数多くの実戦を古城と共に潜り抜けてきた。零菜たちの母親たちは、皆学生でありながら大人顔負けの戦績をたたき出し、世界の命運にすら手を伸ばして英傑とも言うべき存在なのだ。そんな人物たちが動員されるといふのに、未熟な零菜たちが手を出しても足を引っ張るだけだ。

「敵の目的が魔力の確保だってんなら、お前たちが狙われる可能性は十分にある。質という点で見れば、凧もな」

古城の視線が凧を射抜く。

凧の身体に流れる、凧沙の霊力と古城の魔力。それは、ここに集う皇女たちを差し置いて最上位に位置する高純度の代物だ。

もちろん、単純な魔力量ならば凧は純正の吸血鬼には及ぶべくもない。

しかし、どのような分野に於いても質というものは時に量を上回るほどの重要性を持つ。魔力や霊力の世界でも、不純物が少ないものほど珍重されるし、狙われる。

——雪菜が幼い頃、ある神への生け贄にされかけたように。

「凧の家は遠いし、あそこじゃあいざというときが心配だからな。……しばらく、こっちで暮らすといい。何ならそこ使っただいいぞ」

古城は自分のプライベートルームを指差した。

「いやいやいや、さすがにそれはできないですよ。自分の身くらい自分で守れますし！」

「こっちが心配をするとやっているんだ。何より、凧沙に何を言われるか分かったものじゃないしな。一先ずは、零菜」

「ん？」

「お前、凧の護衛に就け」

「はあ……!?!」

零菜は素っ頓狂な声を挙げて驚く。凧もまた愕然として古城を見た。

「な、なんで凧君の護衛なんて」

「そ、そうですよ。俺は別に護衛してもらわなくても」

「そうだろうがな、まあ、相性を考えてだ。零菜の眷獣はあの怪物に相性がいい。狙われやすい凧の傍に零菜がいるのは、いざというときのためになる。もちろん、そうならないようにするためにこっちも動くがな」

そして、ほかの皇女たちにはそれぞれ自由に使える眷獣がいる。幼い瞳や夏穂は

親が付きつ切りで面倒を見る上に護衛に就く帝国職員もいる上に大錬金術師が四六時中傍にいるのだ。しかし、凧は暁家を離れた身だ。眷獸も自由に使えるというわけではなく、戦力としては聊か劣る。その上に狙われやすいとなれば、誰か傍にいらる者が必要だ。

仕方ないとはいえ、実力不足を指摘されたに等しい。凧としてはそれが悔しくてたまらない。

「はい！」

そんな凧の懊悩を知らず、元気よく手を挙げる紗葵。

「ん？」

「凧君は今日うちに泊まる予定だったよ、古城君。零菜姉さんが凧君の護衛をするのは、まあいいとして凧君が泊まるのはうちでおっけー？」

「そうだったな。それなら、それで構わないぞ。ただ、一人でいられると心配だっただけだからな」

古城の返答を聞いて、萌葱が提案をする。

「一人でいるのがアウトなら、わたしたちも紗葵の家に行ったほうがいいんじゃないな

い？」

「あ、じゃ僕も行く」

「萌葱姉さんに麻夜姉さんも？」

「こんだけ集まれば、あの魔獣モドキ程度に遅れは取らないよねー」

萌葱が笑ってソファから立ち上がる。

凧はどうしたものかため息をついた。女性の中でただ一人の男になるのだ。親戚とはいえ、辛い状況ではないか。

しかし、古城の言葉に逆らうわけにはいかない。心配をかけてはならないという理屈も分かるので、唯々諾々と従うことにする。

「うちは女の子ばかりで凧も居心地が悪いかもしれないな」

「いえ、そんなことはないです」

「男の子が一人でもいいれば、凧もキャッチボールとかもできたかもな」

などと、古城は気さくに話しかけてくれる。

そんな古城と凧の会話を古城に肩車されている瞳が聞きつける。

「こじょーくん、おとうと？」

「ん？ ああ、男の子がいれば、弟だったな」

「おー。ねえねえ、ひとみ、おとうとほしい」

「え……」

古城が固まる。

固まったのは、古城だけではない。ほんの一瞬ながら、その世界が停止した。凧はそんな錯覚に襲われた。

「そうだねー、瞳。弟、欲しいねー」

そこで満面の笑みを浮かべて結瞳が瞳の傍に近寄り、瞳を抱きかかえた。今度は、古城の身体からあっさりと引き剥がされた瞳は、結瞳の腕の中に戻る。

「おとうと、どうなんのー？」

「お父さん次第かなー」

結瞳が瞳の頭を撫でながら、ちらりと古城に視線を向ける。

室内に目に見えない何か飛び交っている。

理由定かならぬ危機感のみが凧の背筋を伝って脳に届く。いや、理由ならある。室内の魔力やら霊力やらが、誰かの影響を受けて小波を立てて蠢きだしているのだ。

「あ、あー。わたし、寝巻きの準備しなきゃ。おっ先ー」

逸早く萌葱がその場を後にする。

「なら、僕もだね。じゃ、紗葵。後でお邪魔するよ」

「鍵開けなきゃだめじゃん。わたしが先に帰らないと。ほら、凧、行くよ」

「え、あ、ああ。そうだな……」

「わたし、凧君の護衛だから。じゃあね、古城君。……えーと、たぶんまた明日」  
後ろ髪を引かれる思いで、凧たちは先に出て行った萌葱たちの後を追うように大人たちに背を向ける。

閉じた扉の向こうに、おどろおどろしい気配が充滿しているような気がするの  
は、あくまでも気のせいなのだろう、と凧は現実逃避に耽った。

## 第七話

翌日から夏休みに突入するというだけあって、平然と夜更かした凧たちの消灯は二時を過ぎた。

部屋を管理する紗矢華は結局帰ってくることはなく、大人に文句を言われることもないまま夜遅くまで遊び惚けたのだ。

学校指定の体操着に着替えた凧は、ソファの上で仰向けになる。

部屋割りは多少もめたが、紗葵と紗矢華のベッドを萌葱、紗葵、麻夜の三名で使い、リビングに置いてあるソファを凧が使用することで決着した。零菜は、凧の正面のソファでタオルケットに包まって浅い寝息を立てている。

凧はちらりと零菜に視線を向けてからすぐに逸らした。

(あいつ、思いつきり足出てんじゃねえか……)

すらりとした白い足が、タオルから伸びている。熱い夜を乗り越えるため、短パンを履いていた零菜だったが、その短パンすらも幾度か繰り返した寝返りによって捲れ上がってしまったらしい。

隣の寝室では三人の美少女があられもない姿で寝ているのだろう。年頃の男子にはキツイ状況に留め置かれてしまった。

「寝れん」

一人暮らしが染み付いた風にとつては、誰かと同じ部屋で寝るといふ行為そのものに抵抗感があるもので、どうにも落ち着かない。きっと無防備な自分を曝け出すことが嫌なのだ。理由は分からないが、自分のことを誰かに語るのが苦手な風はその延長ではないかと考えていた。

自分と他人との間に、見えない壁がある。

シンディにボッチなどと不名誉な呼ばれ方をするのは、恐らくはそういった雰囲気を読み取られているからだろう。

心のどこかで、自分は人とは違うという思いが燻っている。ダンピールという世界でただ一人の存在。厳密に言えば、吸血鬼の能力を持ってしまった人間。強化人間と言ったところだろうか。同様の例は今まで確認されておらず、風の存在は極めて珍しい症例として記録されている。

今の流れのままでは夏休みを一人で過ごすという当初の予定は白紙に戻ること

なりそうだ。それこそ、速攻で怪物を退治しない限りはこの辺り一帯が厳戒態勢の下に置かれることになるだろう。

夏休みは観光シーズンということもあり、経済に与える影響も馬鹿にできない。凧はソファから抜け出して、ベランダに向かった。

ガラス戸を開けて外に出る。

生暖かい夏の夜も、五十階という高さになればかなり冷えている。地表よりも幾分か気温が低い分だけ、涼やかな風を感じる事ができる。

マンションの五十階から俯瞰する夜景に人はなく、時間が時間だけにオフィスビルの多くも電気を落として薄暗闇の中で静かに眠りに就いている。

動くモノはない。

航空障害灯の赤い光が、地上の星となって凧の目に残光を残す。

下を見ると、街路樹が本当に小さな点に見える。この高さから飛び降りたのかと、数時間前の自分に驚いたりする。

高さ、恐らくは三百メートルほどになるだろう。

勝算はあったとはいえ、今から飛び降りろと言われて飛び降りれるかというとな

理だ。

「凧君、一人で何してるの？」

いつの間に起きたのだろうか。

零菜が後ろにいた。

「一人で出歩くの、ダメだよ」

「分かってる。別にどこかに行こうとか思っていない」

「本当？」

「本当だよ。暑かったから、出ただけ」

「そう」

吹き込む風がカーテンを柔らかく揺らし、零菜の髪を撫でた。

「ああ、涼しいね」

「高いところはいいな。うちは、吹き込んできても熱風だからな。冷房を入れてばかりだ」

一年中夏日を持続する熱帯の島国だ。

冷房は必要不可欠であり、家庭の支出のトップを占めるのが冷房の費用だったり

するし、なんと冷房代を一部国が補助するほど気を使っている分野でもあった。もちろん、世界屈指の技術大国である「暁の帝国」に出回る商品は、大半が超省エネで、各家庭での自家発電も普及しているので早々非常事態は発生しない。ライフラインは島国の弱点でもある。特に人工の島である「暁の帝国」にとっては、ライフラインは国家の生命線だ。家庭レベルで分散できるものは分散しなければ、災害発生時に致命的なダメージを被りかねない。もっとも、今の帝国の面積を考えれば、その心配もほとんど無用ではあるのだが。

「あの……そっち、行っていない？」

「いいよ。というか、居候に聞くことじゃないだろう」

「わたしも居候」

「そっか」

この家は零菜の家というわけではない。泊まりに来ているのは零菜も同じなので、風と条件は同じだった。

零菜はぺたぺたと足音を立てて近付いてきて、サンダルに履き替えてベランダに出してきた。

「あ、外はもつと涼しい」

月光に照らされる零菜の姿は、神秘的な妖艶さに包まれているような気がした。上は長袖のジャージに下が短パンという色気のない格好のはずなのに。着飾っていない、家庭的な空気が醸し出されているからだろうか。

零菜は風の隣にゆっくりとやってきて手すりを軽く掴み、下を覗き見た。

「こっから飛び降りたのか。うん、やっぱり死ぬかもね」

「悪かったよ。俺もさつき、自分が仕出かしたことのヤバさを実感したばかりだ」

「眷獣、使ったもんね。あの黒い剣」

「ああ」

吸血鬼が肉体的に人間を上回っていたとしても、三百メートルを越える高さからの落下に耐えられる構造はしていない。不老不死の肉体も、損傷が激しければ機能を停止し死に至ることはある。真祖であれば、バラバラになっても再生できるだろうし、その子どもか孫世代くらいまでならば、真祖由来の高すぎる不死性を持っているだろうから、復活は不可能ではないだろう。しかし、それでも死に至る苦痛はそのまま感じるし、復活できない可能性もまた内包していることは忘れてはならな

い。

とりわけ凧は、吸血鬼ほどの再生力も不死性も持っていない。そんな凧が生きていられるのは、重力を操る眷獣で斥力場を生み出し、落下の衝撃を打ち消したからだ。

「なんともない？」

零菜が恐る恐る尋ねてくる。

「大丈夫だよ。今回は、時間内に収まったからな」

眷獣を召喚すると膨大な魔力を持っていかれる。不死ではない生物では、あつという間に寿命を食い潰されるため、現実的には眷獣を召喚、使役できるのは吸血鬼だけとなっている。凧は、吸血鬼ではないため眷獣の召喚は命懸けのだが、短時間であれば命に関わらない範囲で召喚することを可能としている。要するに自分で賄える範囲の魔力であれば、持っていかれても問題ないのだから、その範囲内で運用すればいいということだ。

眷獣の出力によるため、明確に何分という形で表現はできない。

しかし、今回は飛び降りてから地上に到着するまでの数秒の間だけの顕現だっ

た。凧の命に触れるような運用ではなかった。

「でも、もうしないで」

零菜は、呟くように言った。

「……飛び降りか。まあ、実際怖かったしな」

「凧君」

零菜は声のトーンを落として、凧を見た。

角度によっては蒼穹の色にも見える黒の視線が凧に突き刺さる。責めているようにも、懇願しているようにも見えた。

視線をそっと逸らす。

直視はとでもできなかった。

だというのに、零菜の不安げな表情が、夜の闇の中に浮かび上がるような気がした。

「零菜は、寝ないのか」

目を瞑り、あからさまな話題転換をする。

零菜は、自分の視線を街並に戻して答える。

「凧君が寝るなら寝る」

「俺のことはいいだろう」

「わたし、護衛役だから。凧君が夜の街を徘徊するのなら、止めなくちゃいけないし。古城君の言いつけだから」

「そうか」

古城の言いつけには逆らえない。凧も同じだ。ならば、凧も零菜も勝手にこの家から出て行くことはできないわけだ。不良もどきを気取って出歩くことも不可能ではないが、迷惑をかけたくない人に迷惑がかかると思うと躊躇する。悪ぶっていても、結局はその辺の学生と大差ない。

凧は髪を乱暴にかき上げて、盛大にため息をついた。

「じゃあ、俺は寝るぞ」

零菜はこくと頷いて、室内に戻る凧の後ろをついてくる。

「ここ、網戸でいいよね」

「寒くなければ、いいんじゃないかねえの」

「じゃ、それで」

零菜はガラス戸を全開にして、網戸だけで外界と仕切ることにした。さわさわと、カーテンが柔らかく揺れて涼やかな風が室内の空気を循環させる。

凧は、ソファに戻り、タオルケットの中に潜りこんだ。

ソファの肘掛部分を枕にして目を瞑る。別のソファに零菜が倒れ込む気配を感じつつ、ベランダから戻って以降、彼女と会話をすることもなく、静かに眠りに落ちるのだった。



地上五十階という高所に位置する曉家には、日の出を知らせる鳥の声は届かない。地上から隔絶した空の孤島は、路上を駆け回る自動車の音や人々の喧騒とも関わりなく、夏休み初日のまったりとした気分をそのまま残していた。

じりじりとした南国の暑さも、冷房を入れた室内には届かない。

まさしく楽園とも言うべきこの空間から外に出るつもりなど毛頭なく、凧は瞳や夏穂といった年少組を相手にウノに興じていた。

リビングは、麻夜や紗葵もいるのだが、それぞれが独自に好きなことをして、まったくと言っていいほど協調性が見られない。麻夜は携帯端末で日本のプロバスケットリーグの観戦中、紗葵も携帯端末を眺めているが、こちらはファッション誌のメールマガジンの確認中だ。

「ほんとに自由人の集まりよね、これ」

そんなリビングを一目見てため息をつくのは最年長の萌葱だ。母親の学生時代を想起させるような明るく染めた髪が特徴の今時娘ながら、高い家事スキルを有する。今も、おなかが減ったと訴える幼少の妹のために簡単なお菓子を作ってあげている真っ最中だ。

「萌葱姉さん、これどう思う？」

紗葵が萌葱に端末の画面を見せる。

「えー、ピンクがきつ過ぎない？」

「そっちじゃなくて、その隣」

「あ、こっちなら紗葵に似合いそう。シックな感じ出てるし、色合いもいいんじゃない。んー、でももう少しだけ可愛い系がいいかな」

萌葱は画面をタップし、ページを変える。

それを幾度か繰り返し、紗葵とファッションの話で盛り上がった。

「問題は値段ね」

「いいよ、今は。そのうち何とかするしー」

萌葱の呟きも紗葵は気にしない。

紗葵が眺めていたファッションブランドの商品は、決して高級路線を追及するよ  
うなブランドではなく、学生でもその気になれば手が届く商品も多い。とはいえ、  
紗葵の月々の小遣いは日本円にして千五百円。皇女の懐は寂しく、打開策として持  
ち物の共有制度が自然と定着した。無論、衣服を好き勝手に購入できるほどの余裕  
はなく、物入りのときは、親に相談するのが常だった。

「いざとなれば古城君に頼めばいいわよ。ダメとは言わないでしょ」

「言わないって分かかってお願いするの、何か違和感あるなあ」

「あんたって意外に真面目よね」

ショートポニーをひよこひよここと跳ねさせて風呂の下に去っていく紗葵は、その勢  
いのままにウノに参戦した。

「萌葱ちゃん、焼けたー」

キッチンから零菜の音がする。それと同時に仄かな甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「ん、すぐ行く」

焼きたてのホットケーキがテーブルの上に鎮座する。

甘いものに目がない女性陣は、勝負事も観戦も途中で放棄してテーブルに群がった。

メインは幼少の二人。

母親が共に仕事で離れている間、ここで預かることになっている。魔力を狙う外敵がいる状況なので、迂闊に一人にするわけにはいかない。もっとも、いざとなればユスティナをはじめとする親衛隊が動くので、夏穂の守りは万全と言っても過言ではないのだが。

瞳と夏穂は、ホットケーキに蜂蜜をかけて頬を綻ばせて食べている。その様子にほんわかとしつつも、凧は同じようにテーブルを囲まずソファに居座る。

理由は簡単で、椅子が足りないからだ。テーブルは四人掛けだ。どうしようもない。

「ほいよ、凧君」

萌葱が切り分けたホットケーキを皿に載せて持ってきて、凧の前にある長方形のガラステーブルの上に置いた。

ホットケーキの甘い匂いが胃袋を掴む。しかし、凧の視線はホットケーキの隣に並ぶ棒状のお菓子に向けられた。

「お姫様がパンの耳の砂糖揚げって、何かなあ」

それは、揚げたパンの耳に砂糖を絡めた簡単なお菓子だった。美味しいのは分かるが、庶民的にもほどがあると思うのはおかしいだろうか。

「小学校の給食に出てくる、揚げパンみたいだよ、これ」

「あ、分かる。中学に入ってから、一度も食べてないや」

麻夜の言葉を零菜が笑って肯定する。

「まあ、そんな感じだとは思うけど」

凧が言っているのは味云々ではなく、イメージのことなのだが。『暁の帝国』の

お姫様が休日にはパンの耳をおやつにしているというのは、物好きな週刊誌あたりから面白おかしく書いてもおかしくない。別にスキャンダルでも何でもないからいいかもしれないが。

「何よ、まさかアンタ。お姉ちゃんが作ったもんが食べられないって言うの？」

「いや、別にそういうわけじゃないけど。いや、食べますはい」

フォークで突き刺してホットケーキとパンの耳を片っ端から片付ける。

情けないとは思うまい。

これは単純に男女比の問題。女子の勢力が圧倒的な環境下に於いて男子の存在感など蟻の巢の中に迷い込んだ蚊と同程度でしかない。

「これから何するー？」

ホットケーキを齧りながら紗葵が尋ねた。

「映画鑑賞会」

「うちには映画の類はないよ」

「そう。んー、うちのは見飽きたしなあ」

麻夜の提案も物がなければ実現できない。都合よく面白い作品が放送されている

わけでもない。

「借りてくるか」

ネット上での配信が一般化した現代にあっても、ディスクのレンタルは続いている。歩いて五分ほどのところにある大型レンタルショップに行けば、有名所はほぼすべてレンタルできるだろうし、マイナー作品も探せば見つかる。

問題は、誰が借りに行くのかということだが。

「言いだしっぺが行けばいいんじゃないの」

「それだと面白くないじゃないか零菜。なんていうか、選ぶ映画によって人の感性が垣間見えるだろ」

「そんなことを言う人のために映画を借りてこようとは思わないよ」

零菜の真っ当な意見も、面白がった萌葱と紗葵に却下される。

「じゃんけんね。じゃんけんで負けた人が借りに行きましょう。二人でね。凧君も」

「え……」

萌葱に言われて凧はテレビから視線をテーブルに移す。

「俺もそれに入るのか、萌葱姉さん」

「もちろんよ」

「もちろんなのか」

「至極当然」

少しばかり寂しい胸を張って、萌葱が言う。

ここまで言われては、凧に断わることはできない。

凧は負けを認めて大人しく萌葱の下まで歩いていったのだった。



## 第八話

耳障りな蝉の聲が高層建築物の間に木霊する。

黒いパーカーのフードを頭から被った凧は、大嫌いな太陽の下を憂鬱そうに歩いている。教科書を抜き、代わりに護身用具を入れた学生カバンがかかっている。

なぜ出歩くことになったのか。

そんなことは言うまでもない。

単純に、負けたからだ。

自転車があれば、すぐにレンタルショップまで辿り着けるのだが、凧の自転車は自宅マンションの駐輪場に置いてある。そのため、凧は気温三十度に達する炎天下の街中を歩いて移動するしかない。

夏休みの初日とはいえ、休みなのは学生だけで国の大半を占める大人たちは今でも忙しく働いている。加えて、昨夜から得たいの知れない魔獣（ということになっている）が街中に発生しているという事で警報が出されている。そのため、夏休みという割には大通りでも人通りは多くはなかった。

「昼前だしな……」

時刻は十一時を回ったところ。

昼休みになれば、近場のオフィスビルからサラリーマンが大挙して出てくるのかもしれないが、今の時間帯はまだ仕事をしているのが一般的だ。

(暑い)

心の中で呟く。

声に出さなかったのは、独り言が鬱陶しいと思われたくないからだ。

誰に。

もちろん、同伴者にだ。

「凧君、そのパーカー暑くないの？」

半歩後ろを歩く零菜が凧に尋ねた。

「暑い。けど、暑くない」

「どっち」

「直射日光に当たるよりはマシ。あと、これ見た目の割りに通気性がいいんだよ。

これでも夏用だからな」

「夏用なの。長袖なのに」

「それを言ったら零菜だって長袖だろう」

零菜は薄水色のワンピースの上にベージュのカーディガンを羽織っている。頭には鍔広の帽子が乗っかっていて、太陽から顔を隠している。曰く、百パーセントUVカットだそうだが、怪しいものだ。地面からの反射はカットできるわけでもないだろうに。凧と同じく、直射よりはマシというだけだろう。

「零菜まで付いて来なくてもよかっただろ」

「護衛役が近くにいないくてどうするの」

「んなこと言ってたってな……別に昼間から何があるってわけでもねえだろうに」

「それは樂觀的過ぎる」

「そうか？」

「相手が日光を嫌うって情報はないし、人目を憚る知能があるわけでもないんだから、いつどこに現れるか分からないよ」

「ああ、そうか。なるほどな」

相手が人間並みに知能があれば、自分によって都合のよい時間帯を選び、無防備

な相手を捕食するだろう。しかし、そうでなくただ狩猟本能に従うだけのものならば、白昼堂々街中に姿を見せることもあるだろう。

「といってもだ、まだ発見されたって報告は来てないからな。それこそ、人目につくところに出てくれば騒ぎになる」

「それでも、危ないものは危ないから」

「それは零菜にも言えるだろ……」

魔力の質、霊力の質、共に零菜のそれは凧と同等かそれ以上だ。吸血鬼だから、霊力よりも魔力のほうが際立って高く、霊力は巫女として上位という程度でしかないが、それでも一般人からすれば十分に凶抜けている。あの怪物の行動理念が、魔力や霊力を補給することであれば、凧と零菜のどちらに食いつくのかは未知数なのだ。

そのための二人一組。

単独では危険だが、二人いれば切り抜けられる。あるいは、どちらかがやられても片方が助けを呼べる。

さて、問題なのはあの怪物が凧と零菜の前に現れたときにどのような対処するの

かという点だ。

零菜は古城に言いつけられて凧を護衛している。言葉遊びでも、子どもの戯れでもなく本気で凧のために身体を張ろうとしているのだろう。零菜にはその能力がある上に責任感も強いから間違いない凧を助けるために戦うだろう。しかし、その一方で凧もまた零菜を危険な目に合わせるくらいならば自分が戦ったほうがいいという思考をする男だ。女子に守られるだけというのは、男子としては考え物だ。たとえ女子のほうが強かろうが、関係がない。凧は、そのために訓練を積んできたし、攻魔官の見習い資格を取得したのだから。

結局、どちらがどのように戦うのかという問題については、あの怪物がどのように行動するのかというところにかかっているということになる。

凧はポケットに手を入れて、空を見上げた。

太陽光線が目突き刺さる。

どこまでも抜けて行くような青空がビルの合間に広がっている。青い天井には、染みのように白い斑点がポツポツと浮かんでいて、それがゆっくりと流れていく。

零菜との会話は、そう長くは続かない。

昨日から、共に過ごす時間が増えたことで会話はできるようになったが、それだけでも快拳と言える。ギクシヤクとした関係は、一度話してみればそれほど深刻なものでもなかったかに思えたが、社交性のない凧からすれば改まって話をしようにも話題そのものが見つかからない。

しかし、だからこそこうして外に出られたのは僥倖だったかもしれない。

あのまま紗葵の家に行ったら、萌葱や麻夜の玩具にされていたかもしれないからだ。女性ばかりの環境というのは、それだけで息苦しい。もっとも、外に出たら出ただ太陽の灼熱が反射込みで上下左右から襲い掛かってくるというデメリットがあるのだが、それは店に入ってしまったえば解決する。

紗葵の家にいるときは、外出するほうが面倒だったのだが、一度出てしまえばこちらのほうが開放感があつていいかもしれないと思ってしまうのだ。

零菜はそんな凧の後ろを黙ってついてく。

静寂を愛する気質というわけではないので、会話が続かないのは心苦しい限りだが、ここ数年でここまで凧に近付いたことはない。それを考えれば、流されている

だけとはいえ状況だけを見れば数倍好転しているように思える。

凧の歩く早さは、零菜とほぼ等速。

時折、前に行ってはペースを落としている。それは、凧が零菜の歩く速度に合わせられていくということであり、気にかけてもらっているということでもあった。

それが、零菜には嬉しかった。

昨日は、普通に会話ができた。

過去を清算できたわけではないけれども、少しずつ前には進んでいるらしい。

時間が解決してくれたというには違和感があるものの、それでも前向きになれる変化を思わせる要素はあった。

「あ、の。凧君」

「ん？」

凧が振り返る。

フードに顔の半分を隠しているものの、視線が自分に向けられているのが分かる。声をかけたはいいものの、さて、何を話したもののか。

零菜は慌てて視線を動かして会話の端緒となりそうなものを探す。そして、コン

ビニを見つけると、

「あ、えーと。暑いし、ジュースでも買わない、かな」

少しどもりながらも搾り出すように言った。

「ジュースか。そうだな、コンビニあるしな」

「うん」

零菜は頷き、凧と共に横断歩道を渡って道路の反対側にあるコンビニへと立ち寄った。

「飲みやすい血液味!!」。

あからさまな謳い文句と共に陳列される赤黒いラベルの缶に辟易しつつ、零菜はその隣の500mlのペットボトルを掴む。昔からあるお茶のブランドだ。九州限定だったものが、大ヒットして息の長い全国的人気商品へと脱皮したものだ。三十年以上前に生まれ、旧日本人が大半の“暁の帝国”でも変わらずすべてのコンビニで取り扱われているものだ。

零菜はとりあえず悩んだらこれを買うことにしていた。

お茶系の王道であり、あらゆる状況で購入しても不自然さがないので不都合が

あつて誤魔化し紛れにコンビニに入ったときなどには重宝する。

例えば凧とすれ違いそうになったときなど——。

今でも、自分の発言が原因とはいえ予定していなかったコンビニ入りだ。喉を潤す何かを買わなければ、都合が悪い。

一方の凧は、零菜の懊悩を知ってか知らずか、コンビニに入ると真つ直ぐ雑誌コーナーに向かつていった。週刊少年漫画を立ち読みする姿は、一般的な中学生と大差ない。

その後姿を遠目に見て、零菜は嘆息する。

レジの前には数人が並んでいて、零菜は列に並ぶ間に目に付いたガムを手にとって購入リストに加える。ペットボトルとガムを購入した零菜は、肩に掛けたカバンに袋ごと押し込むと凧の下に向かった。

「買わなくていいの？」

「俺は大丈夫だ。どうせ、行って帰るだけだしな」

ゆっくり歩いたとしても、目的地に到達してから紗葵の家に戻るまで一時間とかからないだろう。どの映画をレンタルするのか悩めばもう少しかかるかもしれない

が、寄り道しなければ熱中症で倒れるほどの時間を外で過ごすことにはならない。

凧は少年漫画を閉じてもとの場所に戻すとずり落ちかけたカバンを担ぎ直す。

「行くか」

「うん」

零菜は小さく頷き、凧と共に店を出る。

途端に襲い掛かってくる夏のじめっとした空気に顔を歪めつつ、零菜は買ったばかりのペットボトルを取り出して蓋を開け、一口だけ水分を補給した。

「そういえば、零菜は何を見るつもりなんだ」

「え、あー、そうだなあ。特に考えてなかったな。最近、映画観てないんだよね」

「俺もだ。何があるのかも分からない」

「行ってから悩む？」

「そうなりそうだな。さっきから考えてはいるんだけどな。何か、何を選んでも弄られそうな未来しか見えない」

げんなりとした凧の脳裏には萌葱と麻夜が凧が選んできた映画について酷評する  
凧が浮かんでいる。

それなりのものを選んで「無難」、マニアックなものならば「何これ」。有名所は「もう観た」。どうしたところで、厳しい末路が待っているような気がする。

あくまでも想像ではあるのだが。

あの二人の琴線に触れるものが分からない。

「もういっそ、自分で観たいものっていう風に割り切らないとだめだね」

「B級映画の地雷にチャレンジしてみるのもありか……」

究極のギャンブルだ。

外せば多種多様な弄りに曝されるし、勝てば問題なく一日を終えられる。

と、その時だ。

太陽が翳り、大きな影が街に落ちる。

昼時の街に、ざわめきが広がる。

凧と零菜もまた唾然として空を見上げた。

「蜘蛛っばいな」

「蜘蛛っばいっていうか、蜘蛛だし、これ何のB級映画!？」

凧の呟きに零菜が突っ込みを入れつつ、現実味のない光景に文句を付ける。

それもそうだろう。

昼のオフィス街に、全長三十メートルにはなろうかという巨大蜘蛛が現れれば、それを現実だと認識することはまずあるまい。

映画の撮影かと笑い、逃げる気すら起こさない者もいるくらいで、ざわざわとしつつも多くの一般人が危険を感じていない。

怪物の見た目は巨大に過ぎるアシダカグモ。見るだけで生理的嫌悪感を掻き立てる外観をしている。

「あの怪物だな」

「うん。いよいよ眷獣染みてきたね」

この場に於いて、怪物と相對したのは凧と零菜の二人だけ。その魔力の特徴を掴んでいるのも、この二人だ。外見が多少変わったところで本質が変わるわけではなく、おどろおどろしい魔力の塊だということは明確に感じ取れた。

向こうも八つの複眼で凧と零菜を見下ろしている。感情は定かではないが、意思のようなものを感じる。理性というよりも機械的な、本能に基づく意思だ。

「凧君、手持ちは」

「警棒とグレネードが三つ」

「物騒」

「眷獣出せる吸血鬼に言われるのもどうかと思うけどな」

凧は周囲を見回して、人の多さに舌打ちする。

ざっと二十人ばかりが凧の回りで暢気に話をしている。怪物に牙を突きつけられる直前だというのに。こういう者たちは、最期の最期まで自分の死因を理解しないのだろう。

もちろん、攻魔官としては、彼らを死なせるわけにはいかないのだが。

凧と零菜、そして蜘蛛の間で薄絹を張ったかのような緊張が駆け巡る。

火蓋を切ったのは、蜘蛛のほう。

ふわりとビルから足を離し、その巨体を重力の手に委ねたのだ。ゆっくりと落下してくるように見えるのは、巨大すぎて感覚が狂っているからだ。

「凧君、下がって！」

零菜が前に進み出る。

雷光が迸り、その手に一振りの槍が現れる。

「ハスタ・アウルム 槍の黄金!!」

落下する蜘蛛の脳天を目掛けて、零菜は魔力無効の刃を突き込む。相手が魔力で構成された怪物なので、この槍の一突きはそれだけで致命的なダメージを与えるはずだ。

槍に触れ合うかどうかの一瞬を、蜘蛛が制した。

蜘蛛は、長い足でビルの側面を蹴り、天敵の刃を躲して反対側のビルに激突した。

「な……!?!」

激突したと見えた蜘蛛は肉体の半分を泥へと変えてビルの壁にへばりついていく。

「こいつ……!」

槍の危険性を理解して、回避行動を取った。

それだけでも知性の表れだと言える。

「零菜、ここはまずい。場所を変えるぞ」

風が叫び、カバンの中から取り出した野球ボール大の黒い物体を蜘蛛に向けて投じた。

蜘蛛に直撃する直前、ボールは空中で破裂して目を焼かんばかりの真白な閃光を撒き散らした。それと同時に四方に靈力の衝撃波をぶちまける。

対魔獣用のグレネードは、熱を発しない代わりに生物の感覚に衝撃を与えることで相手を無力化する。靈力の波の直撃を受けた蜘蛛は驚いて落下し、地面に落ちて潰れた。

あの怪物に形は意味がない。

行動しやすさから蜘蛛の形を選んだだけで、物理的に破壊されても魔力さえあれば再生する。

「攻魔官だ！ 全員、あの怪物から逃げろ！ 喰われるぞ！」

凧は全力で叫び、靈力をばら撒いて周囲のガラスを鳴らす。

それが決定打になった。

物見遊山気分だった見物人たちは、自らが凶獣の餌食になりかけていたことを察して、悲鳴を上げて逃げていく。

「零菜！ 走れ！」

凧が叫び、カバンから警棒を抜き放つ。

黒色の短い棒は最新の技術で生み出された護身具であり、凧の霊力を増幅して放出する対魔兵装でもある。

霊力を警棒に込めて一閃すると、青白い輝きが刃となって大蜘蛛の顔面を打ち据えた。

「走るって言ったって、どこに？」

「人がいないとこだよ」

凧の言葉を聞いて、零菜がはっとする。

「サテマか」

「おう」

サテマは大型デパートのことで、サテライトマートの略称だ。

帝国内にも十店舗を構えており、日本と合わせて百店舗ほどを抱えている。凧がいる地点から五百メートルほど離れたところには、店舗改装のため解体工事の最中であるサテライトマート中央店がある。

「あの蜘蛛が俺たちを狙ってくるなら、なんにしても人気のないところにかかないとまずい。あそこなら、どうとでもなる」

凧と零菜は走り出す。

人間離れた速度で走れるのは、人外ならではの身体能力をさらに呪術で強化しているからだ。



時間は僅かに遡る。

セカンド・ウエスト  
第二西地区の「幽霊団地」を取り囲むのは物々しい雰囲気だ。

有事の際には軍隊としても機能する特殊部隊、アイランド・ガード特区警備隊が鼠一匹取り逃がさぬとばかりに団地そのものを包囲していた。

住人が絶えて久しく、ここ最近の不穏な噂で不良すらも満足に寄り付かなくなつた真正正銘の廃墟に、銃やら棒やらで武装した一団が一斉に雪崩れ込んで行く。

「一応、ここがあの眷獣モドキの拠点ということですけど」

陽光の下、スーツ姿の美女がギターケースを背負って呟く。

奇怪な光景だ。

緑の黒髪がふわりと風に揺れる。

屈強な武將隊員たちがあくせく走り回る中にいるにしては、あまりに不釣合いな容貌をしている。

今となつてはこの国の要でもある暁雪菜は、厳しい表情を崩さず突入の様子を見守っている。そして、彼女の隣には、さらに荒事には不釣合いな風貌の少女がいる。「外れ籤を引かされた可能性は高いだろうな。ここからは、残滓を感じ取ることしかできません。いればすぐに分かる」

ゴシッククロリータのひらひらとした衣服に黒い日傘。

二十年前、雪菜が中学生だったところから寸分変わらぬ格好にはもう慣れたものだ。極自然に、その有り様を受け入れている。

単純な戦闘能力なら、雪菜と那月はほぼ互角。争えば地形が変わるのは覚悟しなければならぬ。それほどの使い手が二人揃って集っているのは、それほど駆逐しなければならぬ敵の危険性が高いことを物語っている。

「もつとも、ここに居る可能性自体は元々低かった。手掛かりでも掴めれば御の字といったところだがな」

相手は魔力の塊でありながらどういいうわけかセンサーに引っかからない。

何かしらの能力で隠蔽しているのだと思われるが、向こうから出てきてくれない限り打つ手が無いのが現状だ。となれば、怪物が関わっていると思われる行方不明事件の中心となったこの団地の調査は迅速に行わなければならなかった。

結局突入した部隊が敵と交戦することはなく、第一目標は案の定取り逃がす形となった。しかし――、

「遺体とはいえ見つかったのは僥倖だったか」

「南宮先生。不謹慎ですよ」

黒い扇で口元を隠す那月の顔にはこれといって変化はない。

護送者に運び込まれた六体の遺体は、時期に大きな差があり白骨化したものもあればまだ朽ちかけといったものもあった。

性別が分かるものは少ない。

白骨になっていないとはいえず、それは肉が骨についているという程度であり、人の形を留めているということではないのだ。

「ここは熱いからな。腐るのも早い。それでも、DNA鑑定はしやすいから身元が

割れるのもすぐだろうな」

雪菜に窘められたばかりの那月が事務的な口調で言う。

「やはり、魔力を喰うという予想は的を射ていたようだ。六人すべて、生命力を根こそぎ吸い尽くされた上で放り出されたようだからな」

「死因は、衰弱した状態で放置されたことですか」

「あるいは、魔力を喰われた時点で死んだか。噂の怪物が何であれ、魔力に依存する存在だということははっきりした。出くわせば、お前の槍で十分に仕留められるだろう」

魔力を断つ破魔の槍は、魔力を扱うあらゆる存在に対して有効だ。『暁の帝国』では、雪菜と零菜、そして特殊車両の中で黙々とキーボードを叩くアスタルテの三名のみが、魔力無効化能力を有している。

「零菜の槍が一度相手を消滅間際まで追い込んでいます。決定打になるとは」

「ふん、あれの槍が打ち消したのは外装だけだろう。映像しか見ていないが、核を潰さないことには意味がない。鎧を剥いだところで、また着直せばいいだけだからな」

「なるほど。それで、心臓とは？」

「すでに理解していることをいちいち聞くのは感心しないな」

「失礼しました」

雪菜は言葉少なに、遺体に視線を戻す。

中学生の頃とは違う。

命が消える瞬間を幾度も目にしてきたからか、かつてほどこうしたものを見ることを忌諱する気持ちは出てこない。しかし、それでも自分の娘がこの元凶となった存在に付け狙われたと思うと、心静かにはいけなかった。

雪菜と那月は車外に出て一息ついた。

遺体と同じ空間にいつまでもいては、気が滅入るばかりだ。

「そういえば、転校生も母親暦十四年になるのか。奇妙なものだ」

那月が雪菜に言った。

不意のことに、雪菜は一瞬どう応えたものかと思案して、結局そのまま思ったとおりの回答をする。

「そうですよ。何せ娘が、わたしがここに来たときと同じ歳になりましたから」

「そうだったな。あのときのお前はまだ中学生だった。まあ、その割には色々騒動を起こしてくれたが」

「ご迷惑をおかけしました」

中学生がどれくらい子どもなのか。大人となった今ならよく分かる。かつては、そのようなことは微塵も思わず考えたこともなかったが、中学生の娘を一人暮らしをさせるとか吸血鬼の監視任務につけるようなことは母親として許可し難い。

「その割には、護衛などよく言い渡したものだ」

「凧君は、別です。見ず知らずというわけではありませんし、きっかけにしてくださいばいいんです」

「そうか」

那月は腕を組む。

「だが、公序良俗を乱すような行いに走るのであれば、教師として見過ごすわけにもいかん。そのときは、当然三者面談になる」

「それは、そうでしょうけど。あの娘もあれでしっかりしているはず、ですし、先生の手を煩わせることはないと思いますよ？」

たじろぎながら雪菜は言った。

その雪菜に、那月は思わせぶりな笑みを見せる。

「さて、出会って間もないときに二人揃ってゲームセンターでデートするような親だからな。どうなることか」

「そんな、最初期のことはもういいじゃないですか。それこそ、二十年も前の話です」

からかわれて顔を赤らめた雪菜は、那月から顔を背けた。

三十代も中頃になりはしたものの、雪菜の外見は二十代前半のまま成長していない。吸血鬼とその従者は外見から実年齢を推測することができないのだ。

例外は那月。

彼女に至っては、吸血鬼とはまったく異なる原理で以て若さ、というよりも幼さを保っている。

「総隊長！」

そんな雪菜と那月の下に一人の隊員が駆け込んできた。

総隊長と呼ばれた雪菜が表情を引き締めて、隊員と向き合う。

「どうしましたか」

「本庁から緊急連絡です。例の怪物が、中央行政区に現れたとのこと。今、居合わせた零菜さんが交戦中だと……」

「な……ッ!?!」

さすがの雪菜も絶句せざるを得なかった。

目的の怪物が現れたのはいいとして、そこに零菜が居合わせたというのが衝撃だった。しかし、頭の中の冷静な部分が、その原因を探り、到達する。

(零菜か凧君を狙ったのか、それとも、単純に魔力量の多い零菜たちが近くにいたからか。昨日の今日で、もう襲撃に出るような真似をするとは思わなかった)

やはり、那月が言うように外装を壊した程度では大した影響を与えられなかったということなのだろうか。

情報が少ないので断言はできないが、通常の生物であれば身体の九割を消滅させられればその場で死ぬ。アメーバのようなものならどうか知らないが、あの怪物は生物というよりもエネルギー体と考えたほうがいい。それも眷獣に近い存在ながらも、眷獣ほど自己の形態に依存しないより原始的な存在だ。

「南宮先生。現場に直行します」

「ああ、門は開けて置いた。こちらの後始末はこっちでやっておこう」

「ありがとうございます」

雪菜の前には紫色の魔法陣が立ち上がっている。

那月の得意魔術である空間制御で、空間を跳び越えて移動できる極めて便利な魔術である。空隙の魔女の異名を取る那月の本領である。

一礼した雪菜は、躊躇うことなく魔法陣に足を踏み入れ、そしてその場から消失した。



## 第九話

サテライトマートを目指す凧と零菜を、蜘蛛の形態に変化した怪物が猛追する。目的地まで五百メートル。

全力疾走で、およそ二分弱。その時間を、あの蜘蛛から逃げ切れればこちらにも有利か環境を整えることができるのだが、身体の大きさが段違いだ。当然、一步の大きさもまったく違う。凧と零菜が全力で走っても、大蜘蛛はいとも容易く追いつき、牙を光らせる。

頭の上に落ちてくる牙に、凧がグレネードを投じる。

青白い光が大蜘蛛の眼前でさんざめき、その身体の強烈な靈力の波を叩き付ける。

大蜘蛛は光と靈力に驚き、後方に跳ねる。

「くっそ、あと一発しかねえ！」

大蜘蛛にある程度の威圧効果を發揮するグレネードは、残り一発だけになってしまった。それを使えば凧の手持ちは警棒と眷獸だけとなる。

「凧君、ここはわたしに任せて。あいつはわたしが引き付ける」

「はあ？ そんなことできるわけないだろ」

「あれが魔力に惹き付けられるなら、魔力量の多いわたしのほうが狙われやすい。だったら、わたしが囷になるほうがいいでしょ。それにわたしの槍なら、あいつに致命傷を与えられるかもしれないだし」

零菜の言っていることは、理に適っている。

純正の吸血鬼である零菜の魔力量は、凧を上回って余りある。そして、魔力無効化の槍は魔力で構成された大蜘蛛の身体を消し飛ばすことが可能だ。

「いや、ダメだろ」

凧は否定する。

「そもそも、零菜はお姫様だ。お姫様を残して逃げるってのは、さすがに無理だよ。これでも攻魔官の端くれだぞ！」

「わたしは凧君の護衛役なんだから、凧君の安全を確保しないとダメなの！」

「護衛とかそんなのこの際いいだろ、……このッ」

零菜への言葉を抑えて上を見る。

大蜘蛛が跳んでいる。

グレネードの直撃から、さっそく回復したと見える。

その大蜘蛛を空を駆ける閃光が撃ち抜く。空中で三つの爆発が生じ、大蜘蛛がひっくり返って地面に落下する。

「ッ———今のは、紗葵ちゃん？」

これほどの威力の矢を放てるのは、紗矢華と紗葵の二人だけだ。そして、紗矢華は今朝から出張に出ていて不在となれば、絶好の狙撃ポジションを確保している紗葵による援護と考えていいだろう。

彼女の部屋からは、この大蜘蛛の動きが手に取るように分かるはずだ。

空から降り注ぐ矢が大蜘蛛の身体を撃ち、さらに特区警備隊の面々がいよいよ大蜘蛛に攻撃を仕掛ける。数が少ないのは、近場から騒ぎを聞きつけてやって来たからだろう。零菜を隠れて護衛していた者も含まれているのかもしれないが、詳しい事情は風には分からない。

とにかく、現状は風と零菜だけがあの蜘蛛に立ち向かっているというわけではないのだ。

銃声と爆音が響き、空から魔力の矢が轟音と共に墜ちる。

大蜘蛛の身体が崩れ、じゅくじゅくと傷口が蠢く。足は挽げて、内臓は零れ落ちていた。半死半生に見える大蜘蛛はしかし、実のところまったくダメージを受けておらず、取れた足の傷口から、無数の触手を伸ばして銃撃を仕掛けてくる有象無象を打ち払う。

「うあああああああああ！」

「ぐ、ああああああああ！」

金属が拉げるような甲高い音が響いて特区警備隊の隊員が宙を舞う。

身体を壊しても意味を成さない相手に銃器で武装しただけの隊員では分が悪い。高価な呪装弾の類を持ち出さなければ目に見えるような効き目がない。標準装備の対魔獣弾は魔獣や魔族の再生を阻害する効果があるものの、魔力の塊に対処する効果は持たないのだ。魔獣と眷獣では本質的に別物だからだ。

「あ……！」

「馬鹿、戻ってどうする！」

凧が隊員に駆け寄ろうとして零菜の手を掴み、引っ張る。

「で、でも……!」

「こつちに惹き付けければ、アイツはほかに目もくれずこつちに来る。とにかく、サテマまで走ればいい!」

「う、うん」

魔力量の少ない隊員にあえて襲い掛かる意味はないだろう。目の前の凧ごと零菜馳走に比べれば、人間の隊員など捕食するだけ時間の無駄だ。その隙にメインディッシュに逃げられるようなことになっては元も子もない。

案の定、大蜘蛛は空から降り注ぐ矢を無視して前進を開始した。

矢によって身体が崩れていくこともあって速度はかなり鈍くなっている。

このまま走っても、サテライトマートまで十分に逃げ切れそうだ。そして、そうすることがあの大蜘蛛に立ち向かった隊員たちを救うことにも繋がる。

しかし、もう少しでサテライトマートの駐車場跡地に入るところで、側溝から泥が伸び上がった。

「な……!?!」

まさか、足元の側溝から敵の触手が伸びてくるとは思っていなかった。

蜘蛛の形態を取っていたとしても、本質は不定形の泥の魔力生命体だ。身体の一部を変化させることなど造作もないことであり、現に特区警備隊の隊員を迎撃したときに同じように肉体の構造を変化させていたではないか。

完全に不意を突かれた零菜は、足に絡みつ়く泥に抵抗できずそのまま宙に吊り上げられた。一気に下半身までが泥の触手に飲み込まれる。

「こ、の……ハスタ・アウルム槍の黄金！」

零菜が切り札たる魔力無効化の雷撃槍を召喚する。右手を貫く雷光が、主の身に纏わりつく汚泥を消し去ろうとしたとき、まるで電池が切れたかのように明滅した。

「あ、う、嘘ッ……。魔力、が……」

途端に襲い掛かってくる倦怠感と常軌を逸した眠気。このまま、睡魔に身を任せてしまいたいという欲求が、抗い難い強さで襲い掛かってきた。

泥が急速に零菜の魔力を吸い上げていっているのだ。

ハスタ・アウルム  
槍の黄金が実体化を維持できずに消失する。

そのまま零菜を飲み込もうとする泥に向かって、凧が飛び掛る。

「来い、鈍ドール・アダマスき金剛！」

凧の両腕に、金剛石の籠手が現れる。

鈍く輝く籠手に守られた拳を握り、思い切り泥を殴りつける。

瞬間、金剛の輝きが泥の柱を吹き飛ばし、零菜を解放する。

「おらあッ」

さらに、凧は金剛の靴と脛当てで足を保護し、追いつがる泥を蹴り飛ばした。

落下する零菜を抱き止めて、凧は大きく後方へ飛び退く。

鈍ドール・アタマスき金剛の能力は、反射だ。攻防一体の金剛石は身体から離して使えないものの、防具としてあらゆる攻撃を弾き、そして武器としてはその反射能力であらゆる敵を弾き飛ばす。そして、移動に用いれば、自分の身体を弾き飛ばすことで大きく距離を取ることも可能だ。もちろん、そのときには相応の反動を計算に入れなければならぬが。

「ぐ、……！」

ぐらりと凧は上体をふらつかせた。

一瞬だが、目の前が揺れた。

体内から魔力が抜け落ちていく感覚。眩暈に似た症状に冷や汗が吹き出る。だ

が、それ以上に今は零菜だ。

「おい、零菜！」

抱き抱えた零菜は顔面を蒼白にして呻く。

生命力の根幹に関わる魔力を奪い取られているのだ。眷獣を呼ぶことはおろか、立つことも儘ならないだろう。

零菜がこれほどにまで弱ってしまっていると、ハスタ・アウルム槍の黄金の使用は難しいといわざるを得ない。

凧は、進行を続ける大蜘蛛に思い切り最後のグレネードを投げつける。僅かでも足を止められればそれでいい。空から降り注ぐ矢も相俟って、足止めには十分な効果を発揮してくれる。そして、それは足止めにしかならないということでもあった。

凧は歯軋りし、思い切り地面を蹴った。

アスファルトが砕けて、凧の身体は眷獣の反射の力で一息に二十メートルを走破する。駐車場の入口から、工事中のエントランスまでを二歩で進んだ凧は、眷獣を送還してサテライトマートの中に入り込んだ。

解体工事は始まったばかりで、店内は原型をそのままに残していた。

防音シートによって日光すら入り込まない店内は、夜と同じくらいに暗い。

ダンピール化によって暗闇を見通す目を手に入れた凧ではあるが、やはり明るいところほどものが見えるわけではない。

生鮮食品売り場だった場所を抜け、寂寞の海に沈んだ店内を息を潜めて進んでいく。

息を殺しているのに、鼓動の音はいやに強く聞こえる。

鈍ドール・アタマスき金剛は使い勝手のよさに反して大食いだ。ほんの十秒足らずの使用で、貧血を起こしかけている。

凧も零菜もほぼ戦闘不能に近いところまで追い込まれた。援軍の到来までここで凌がなければならぬというのに、戦力が零では話にならない。

もしも、ここに敵が現れたら。

考えるまでもないことだ。

動ける凧と動けない零菜。凧一人ならば逃げ切ることは可能だろうが、それは選択肢には入らない。

当然、凧が囷となって零菜を生かすことになるだろう。疑問の余地もなく、凧は

それが当たり前だと受け入れていた。

凧は人間よりも寿命が長いと言われている割に、常に身近に死を感じてきた。眷獣を使うたびに何かが少しずつ薄れていくのを感じていたし、大病などもあって己の生死については達観した価値観を持っている節がある。まだ十五の若者ではあるが、これと定めたものに対して命を擲つことができるのは、彼の強みであり短所でもあった。

凧は零菜を抱えたままに止まったエスカレーターを駆け上り、二階にやってきた。

道具が取り除かれ、柱だけが残った二階フロアは閑散としていて車のない立体駐車場にも似た雰囲気を感じる。凧は柱に零菜を寄りかかると、自分もその隣に腰を下ろした。

それから、自分と零菜の回りに気配を隠す魔術をかける。相手が魔力を感知して襲ってくるのなら、姿を隠しても意味がない。気配そのものを魔術的に隠蔽しなければならぬ。

「ッ……」

パーカーの袖を捲くしてみると、両腕の肘から先が血に濡れている。金剛石の籠

手に覆われていた部分だ。足のほうも酷い状況だろうし、身体中の毛細血管が破れて青あざだらけになっているのも鈍痛の具合から分かる。凧の人間の部分が、吸血鬼の魔力行使に耐え切れていないのだ。寿命を削る上に身体にかかる負荷も桁外れ。それでもただの人間が眷獣を使うよりは何百倍もましなのだ。普通の人間なら、この時点で死ぬか虫の息だ。それを思えば、凧は純粹な吸血鬼ではないにしてもかなり眷獣の使用に耐性をつけていると言えるだろう。

「ん……」

もぞもぞと零菜が動いた。

凧は捲くっていた袖を戻す。

「あ、凧君？」

「気付いたか。よかった」

「ここ……もしかして、サテマの中？」

「ああ。サテマの二階だ。見ての通り、何もないけどな」

営業しているときには、数百人の客と従業員で賑わったフロアも、今となっては閑散として物寂しい。

普段見られない裏側を見られたとなると、童心に返ったような気持ちになるものだが、零菜はその直前に鼻腔をくすぐる鉄臭さに気付いて顔色を変える。

「凧君、もしかして怪我……」

「まあ、ちょっとな」

「ちよっとって」

すぐ隣から漂ってくる血臭は、擦り傷程度のものではない。明らかな流血の気配を嗅ぎとって、零菜は凧の腕に手を伸ばした。

「い……!?!」

凧は漏らしかけた苦悶の声をかみ殺す。

零菜は凧の反応にびくりとしながらも、ゆっくりと服の袖を捲り上げる。

「これ……」

だらりと垂れ下がった左腕から立ち昇る血臭に頭がくらくらしそうだった。

裂けた皮膚から血が滲み、赤黒く腕を染め上げている。

「脊獣、使ったの？」

「ほっとけば治る」

「そんな……!! だって、そんなことしたら……!!」

零菜は、凧に抗議しようとして身体を起こそうとして、がくりと崩れ落ちた。体勢を崩した零菜は凧に枝垂れかかるような体勢になってしまふ。

「おい、大丈夫か？」

「ごめん……。力、入なくて」

「しばらく休め。俺は見た目が酷いだけだけど、零菜はそうはいかないだろ。中身が空っぽだ」

「う……」

敵に吸い取られた魔力はそう簡単には回復しない。できれば一晩は寝て過ごす必要があるのだが、現状ではそうも言っていられないので、走れる程度の体力を取り戻すのを目標にして休憩しなければならない。

しかし、凧に凭れるわけにもいかないのです、零菜は無理矢理身体を起こして柱に背中を預ける。

「凧君」

「ん？」

「もうやめてって言ったのに……」

恨みがましいというような口調で、零菜が言う。

「ごめんね。また、わたしの所為だよね」

「違う。あの化け蜘蛛の所為だ」

「でも、わたしがしくじらなかつたら凧君が眷獸を使う必要はなかつた。命を削るようなことをしなくて済んだのに」

零菜がはっきり覚えてるのは、自分が泥に飲まれかけていたことだけだ。その後、どのように凧が救い出してくれたのかは分からない。しかし、推測することはできる。凧の怪我の具合を見れば、それが眷獸の召喚によるものだという事は分かるし、凧が零菜を救い出すために寿命を代償に眷獸を召喚したのだということは疑う余地もない。

「ほんとに、ごめんね」

じわりと、零菜の目尻に涙が浮かんだ。

「お前、謝ってばっかだな。気にしていないっての」

「だって、凧君死んじゃうかもしれない」

「死なねえよ、こんなんじゃ。俺は、人並み以上に生きられるらしいしな」

凧は吸血鬼の力を持つ人間ということでダンピールと仮の呼び名を与えられた新種扱いだ。その能力やダンピール化の経緯から、不老不死ではないものの通常の間を遙かに上回る寿命があるとされているのだ。

「そんなのだめだよ。凧君が人よりも長い寿命があるっていう根拠がないのに」  
しかし、零菜はそれを否定する。

「凧君はそもそも自分の寿命が何年あるのか分かるの？」

「そりゃ、知らねえけど」

「じゃあ、寿命が延びたかどうかもはっきりしないじゃん。もしかしたら、人間並みの寿命かもしれない。それなのに、寿命を削ることは確定している眷獣を使ったら、あっさりと寿命を使いきるかもしれないよ。凧君の身体は分からないことが多いから、無茶はしちゃだめなのに」

無茶をしてはならないと言いながら、それが難しい状況だったことは零菜にも分かっている。凧が無茶をしなければ、零菜は今頃干物になっていただろう。

「凧君をそんな身体にしたのは、わたしなのに、わたしの所為で寿命を使い果たし

たなんてことになったら、……そんなの、抱えきれないよ」

膝を抱え込み、零菜は俯いた。

彼女の声は震えて、今にも消えてしまいそうだった。

凧はため息をついて答える。

「別に、零菜の所為ってわけじゃないって。前にも言っただろ」

「でも、わたしが凧君の血を吸ったのがそもその原因でしょ。そのときに凧君の身体に送り込んだわたしの魔力が、凧君の身体に残り続けてたから、古城君が凧君を血の従者にしようとしたときに失敗したの。魔力同士が競合しちゃって、凧君の身体には吸血鬼の因子だけが残ったから」

凧のダンピール化には二つの段階があった。

一つ目は零菜が凧の血を吸ったときに、凧を血の従者にしようとして失敗したこと。このときは、幼かった零菜の知識不足により致死量の血を失った凧が危うく死にかけるという事件も起こっていて、それが零菜の吸血嫌いに繋がってしまった。た。

二つ目はその数ヵ月後、凧が病に倒れ余命幾許もないという状況になったとき

に、苦肉の策として古城が血の従者にしようとしたときだ。

凧自身の強すぎる霊力が災いして、肉体を崩壊に導くという科学技術でも対処が難しい問題に、不死の呪いを分け与えることで対処しようとしたのだが、凧の体内に残る零菜の魔力が古城の魔力とぶつかって凧の身体に不可逆の変質を引き起こしてしまった。

偶然に偶然が重なった末に起こった予測困難な事例だった。

「まあ、そんなとこだろうとは思ってたけどな」

凧は後頭部を柱につけて、天井を見上げた。

ダンピール化の原因は、はっきりとしたことは分からないということになっていく。とはいえ、自分の身体に起こった現象だ。状況からして、凡その予想はできた。零菜が小学校のころのことを未だに引き摺っているのは、その後の態度から明らかだった。あの一件については、凧だけでなく零菜も相当傷ついており、当事者である凧から話しかけるのを躊躇してしまうのも無理からぬことだろう。

零菜はずっと思い悩んできたことでも、凧自身はさほど気にしていない。

「ああ、むしろこれでよかったよ」

「どうして……?」

「そりゃ、あのとき古城さんの血の従者になってたら今でも子どもの姿だったはずだろ。成長できたんだから、こっちのほうがいい。はっきり言えば、俺がまっとうに生きていくには、ダンピールになるしかなかったんだよ。だから、何の問題もない。むしろ、感謝してるくらいだ」

「そんなの……」

何と答えたらいいいのか、零菜には分からなかった。

零菜があのと血を吸っていたから、凧は眷獣の召喚能力を身につけてしまった。人間を辞めることになり、訓練を積んで戦う道を歩みだした。自ら命を危険に晒すという選択肢を凧が選ぶ原因になったのは、間違いなく零菜なのだ。

しかし、その一方で零菜が血を吸っていなければ、今頃凧は古城の血の従者となっていただろうしそうなれば、幼い姿のまままで生活することを余儀なくされていただろう。

眷獣を使うことによるデメリットを考えなければ、むしろダンピール化はあの時点での最良の結果だったとも言える。

問題なのは、凧が眷獣の使用を躊躇しないことだ。必要性を感じたら、すぐにその力を利用する。せっかく人よりも長く生きられる可能性を手にしていながら、このままでは人よりも早く寿命を使い果たしてしまうかもしれない。零菜が眷獣を使うなどというのは、そんな凧を思ってたことだった。

「……わたし、もう分かんないよう」

弱弱しく零菜は呟いた。

「俺だって分かんねえよ。でも、昔のことを気にしても仕方ないんだって。前向きに捉えるのが一番だろ」

「わたしのこと、嫌ってないの？」

「嫌う理由がないっての」

凧は即答し、零菜は気恥ずかしさから顔を膝に埋めた。

つくづく現金な女だと自分でも思う。

凧に肯定されたことで罪悪感がこうもあっさりと薄れてしまうとは。

「それに、昔話してる場合でもないだろ。ここがああ蜘蛛野郎にばれるのも時間の問題だ」

この建物に逃げ込む瞬間は見られている。

相手が執念深く追ってくるのなら、いずれは発見されることだろう。凧の隠蔽は、あらゆる目から逃れられるほど性能の高いものではない。

「今のままだとお互いに立てないし走れないしで見つかったら終わりだ。まあ、俺は眷獣使って抵抗できるけど」

「あ、でも、そ、れは……！」

「抵抗だけだよ。そもそも、あれをぶっ飛ばす火力がない。ジリ貧だ。零菜のほうは……」

「まだ、全然……」

申し訳なさそうにする零菜を凧は責めない。

さっきの今で魔力が回復するはずがない。言葉を交わせる程度に体調は回復したようだが、それだけだ。体力も魔力もすっからかんだということに変わりはない。

「どの程度、血が必要になる？」

凧の問いに零菜は目を丸くして驚く。

「血って、あの……」

「吸血鬼は血を吸えば力を増すんだろ。古城さんは、それで難局を乗り切ってきたって聞いたことがある」

「う、まあ、ママの愚痴にそんな話があったような気もするし、事実だけど」  
現状を打破するのに有効な策ではあると思う。

零菜が凧の血を吸えば、それだけで零菜は失った魔力を取り戻し、さらに絶好調の状態で敵を迎え撃てる。凧の血の力を考えれば零菜は平時を大きく上回る出力を出すことも不可能ではないだろう。

「でも……」

零菜にとって吸血は禁忌だ。

凧にすべてを話してその上で許しを得たからといって、早々に吸血できるわけではない。精神的な枷はまだ残っている。もしも昔みたいに加減を誤ってしまったら、とか色々と考えてしまうし、何よりも子どもだったころとは異なりきちんと性を差を認識できる年齢になっている。異性の血を吸うというのは、魔力補給の意味を越えたものになってしまう。

しかし、本能の部分では凧の血を吸える好機に昂揚している自分がいるのもまた

事実だ。

風首のどこをどのくらいの強さで噛めば血を吸えるのか、考えなくても分かる。牙で風の皮膚を裂き、血管を食い破って熱い血潮で喉の渴きを潤す瞬間を想像して、心臓が跳ね上がるような気持ちすらした。

吸血を抑制してきた罪悪感の原因を風は気にしないと云った。

そして、彼自身からの提案でもある。

言質は取っているのだ。ならば、この蠱惑的な誘いに乗ってしまったても何も問題はない。何と言っても緊急事態だ。法的にも吸血が認められる状況下で何を迷う必要がある——。

長年溜め込んだ様々な不安や不満が欲望の形で渦を巻き、弱りきった肉体の中で膨張していくのが分かった。

「いいの？」

「いいよ。それに、本当に選択肢がほかにねえ」

零菜を如何に回復させるかということが、何よりも重要だった。

バリバリと大きな音が響く。

防音シートが引き裂かれ、大蜘蛛が店内に強引に押し入ってきたのだ。

考えている時間はもうない。

「うう……」

吸血という魅力的な提案に牙が疼いて仕方がない。その一方で、どうしても最後の一步を踏み出せないでいるのは、かつての過ちを繰り返してしまうのではないかという不安からだ。牙を突き立てて、それで凧にもしものことがあるのではないかと。

今となってはそのような失敗は十中八九ないのだが、それでも不安になってしまふのだから仕方がない。

「あ……凧君、手……」

零菜の視線が凧の手に向かう。

凧の両腕からの出血は、まだ完全には止まっていない。これなら、牙を立てる必要もないではないか。

妙案だと思った。

「痛……！」

零菜が凧の左手を取った。

放射状に広がった傷は指先にまで達しており、痛々しい血色に染まっている。

「零菜、おまえ」

「噛んだら、また昔みたいになるかもしれないし……！」

ごくり、と生唾を飲んだ零菜はおずおずとしながら凧の人差し指を口に含んだ。確かに血液を摂取できるのであれば、噛み付く必要はない。すでに出血しているのなら、そこから血を啜っても構わないのだ。とはいえ、いくら一番啜えやすいからといって、指を啜えるのは反則だ。

（これは、いろいろと不味いだろ）

零菜の口の中が想像以上に暖かく、ぬるぬるとしているのが艶めかしい。見ないようにしても、指から伝わる感覚は打ち消せない。零菜の唾液が傷に染みてじわりとした痛みを伝えてくるおかげで理性を保っているようなものだ。

零菜は零菜で頬と瞳を紅潮させて吸血に耽っている。

凧の内心の葛藤には気を配る様子もなく、傷口から血を吸い上げ、舌で追い回す。血を啜っていたのは、ほんの一分にも満たない時間だった。それでも、異様なま

でに長い時間が経過したような気がした。

我に返ってみると、とてつもなく恥ずかしい。

零菜と凧は互いに視線を合わせず、そっぽを向く。

「あの、ふ、拭くから！」

零菜は沸騰したかのように顔を紅くしつつ、ハンカチで凧の指を拭く。手つきが乱暴で、傷が痛む。凧は文句を言わずに、零菜に任せた。

「零菜、身体は？」

「大丈夫。……やっぱり、凧君のはすごいね……すぐに元気になれた」

零菜ははにかみ、ハンカチを畳んでポケットに仕舞った。

「今なら、負ける気しない」

立ち上がった零菜の身体から紫電が漏れ出た。

充溢した魔力が、零菜の身体の内側から溢れ出す。

零菜は振り返り様に雷光を一閃。

衝撃波がホールを駆け抜け、背後に迫る泥の触手を跡形もなく消し飛ばした。

「凧君、動ける？」

「動く分には問題ない」

「なら、巻き込まれないようにしてね」

濁った魔力の胎動を感じる。

零菜から三十メートルほど離れたフロアの一画が崩落し、そこから大蜘蛛が這い上がってきた。蜘蛛の腹に当たる部分は触手を生やしていて、あたかもヒュドラかヤマタノオロチのような外見になっていた。

触手の先は二股に裂けていて、捉えた敵を捕食する器官として利用するものだと分かる。

その触手を、大蜘蛛は零菜に伸ばす。

「それが——どうした！」

槍の黄金の一閃が、雷光の刃を飛ばし大蜘蛛の触手を斬り飛ばす。零菜は床を蹴って、一足飛びに大蜘蛛との距離を詰め、顔面に槍を突き込む。穂先が大蜘蛛に突き立つ寸前に、零菜は槍の狙いを変えて床に突き立て、高飛びの要領で宙空に身体を投げ出す。

大蜘蛛は零菜が正面から槍を突いてくるものと判断して後方に跳躍していた。零

菜が跳んだ先に、自ら身体を投げ出す形になったのだ。

「ハアッ!!」

そして、今度こそ零菜の槍が大蜘蛛の頭を真一文字に斬り裂いた。

着地した大蜘蛛は体毛を逆立てて零菜を牽制しつつ後ずさりする。上下に分かれた頭は、すぐに再生する兆しを見せない。魔力無効化が効いているのだろうか。傷口から魔力を漏らし、後退していく。

「逃がさないよ」

「零菜、深追いするな！」

風が零菜を制止する。その声と同時に、大蜘蛛は全身の毛を膨らませてばら撒いた。その毛は、空中で人間大の蜘蛛と化し、フロアの床や壁に八本の足をつける。

「ひ……」

零菜が喉を干上がらせる。

うぞうぞと蠢く蜘蛛の大集団。生理的な嫌悪感は、どうあっても打ち消せない。この群れに飲み込まれたら最後、全身に牙を突き立てられて魔力を吸い上げられてしまうことだろう。

蜘蛛の津波を、零菜が槍の一振りで押し戻す。迸る雷撃と煌く魔力無効化の刃が蜘蛛を打ち払う。

その零菜の頭上に、泥の糸が飛び交った。

「ちよ……蜘蛛ごと」

糸を放ったのは親元である大蜘蛛だ。

己の分身である蜘蛛と纏めて零菜を絡め取るつもりだ。いずれにしても、蜘蛛も糸も大蜘蛛の身体の一部だ。結局帰るところは同じなので、零菜の動きを封じることができればそれでいいのだろう。

上から迫る糸を、強烈な霊力の斬撃が吹き飛ばした。

「一旦退け、零菜！」

「凧君！」

凧は呪符を投じて十羽の鷹を生み出して蜘蛛に突っ込ませる。壁として利用することで、零菜の退路を確保するためだ。

鷹は善戦するも多勢に無勢。あっという間に飲み込まれて取り込まれたものの、零菜が凧の隣まで戻ってくるだけの時間は稼げた。

蜘蛛の数は見たところ五十匹ほどはいるだろうか。

槍一本で捌くには難しい数だ。それに、その後ろにはやや体積を小さくした大蜘蛛が控えている。

「来るよ、凧君」

「応、上等」

槍と警棒を構える二人に向かって、蜘蛛の群れが突撃を開始する。

津波を二人で押し戻すようなものだ。

状況は、悪化の一途を辿っている。

覚悟を決めたまさにそのとき、二人の視界を金色の雷光が埋め尽くした。

猛烈な熱と魔力が吹き荒れて、凧と零菜は思わず後退する。

「な……」

一瞬の雷撃の後には焼け爛れたフロアが残された。蜘蛛の群れは、一撃で半数が削り取られている。

「よかった、零菜も凧君も無事みたいね」

かつん、と軽妙な音が響く。

槍の穂先が、床を打った音だ。

「な、ま、ママ……!? なんでここに!?!」

唐突に現れたのは雪菜だった。

スーツ姿に白銀の槍を携えた出で立ち。槍がなければOLと言われても納得できる格好だが、その身体から溢れる禍々しい魔力と澄み渡る霊力は、常軌を逸した次元にあると言っても過言ではなかった。

「例の怪物がこのあたりに出たって聞いて、南宮先生に転移させてもらったの。間に合ってよかった」

ほっとしたのだろう。雪菜が笑みを浮かべる。

助かった、と漏らしそうになるのを雪菜は堪えた。母親への反発心半分、活躍の機会を奪われたことに対する抵抗感が半分といったところで、素直にありがたがれなかった。

「ちよ、上!」

蜘蛛の一匹が、いつの間にか雪菜の頭上に進んでいた。雪菜が叫ぶや否や、雪菜に向かって蜘蛛が飛び掛る。死角からの完全なる奇襲は、しかし、雪菜に近付いた

途端に身体が霞みのように消えてしまい失敗した。

「零菜、余り騒がないの」

たしなめるように雪菜は呟く。

雪菜は、その視線を襲ってきた蜘蛛に向けることすらなかった。

「きちんと普段から槍ハスタ・アウルムの黄金の真価を引き出せるように鍛錬を積んでいれば、これくらい、どうということもないでしょうに」

「ちよつと！　こんなときにまでお説教とか止めてよ！」

零菜が悲鳴のような声を上げた。

「それに、アイツはわたしがやるから」

「何言ってるの。あなたにはまだ早いでしょ」

「子ども扱いたくないですよ。とにかく、わたしがやるのー！」

やれやれといった様子の雪菜に食って掛かる零菜は、黄金色の槍を消さずに前に出ようとす。

「協力して、早めに片付けなければいいのでは？」

努めて冷静に、凧が言った。

雪菜が仕方ないとばかりに頷いた。

「凧君の言うとおりね。言い争っても仕方ない。あれを倒すには核を叩かないとダメみたいだし、わたしが外装を剥ぎ取ったところを雪菜が止めね」

「止め、おっけー。で、核って何？」

「あの眷獣をこの世界に止めている憑り代のこと。あなたたちが見た、白い服の女の子がそれね」

「あれが……」

「五年前に行方不明になった吸血鬼の女の子。魔力を吸収する蜘蛛型の眷獣を使っていたみたいよ。おそらくは、どこかで宿主が亡くなって、眷獣だけが周囲の魔力を吸収して実体化し続けていたってところでしょうね」

通常は宿主が死ねば眷獣も共に消滅する。この世界に実体を維持するだけの魔力が供給されなくなるからだ。ところが、あの蜘蛛は宿主が死んだ後も、自分の能力を駆使してこの世界に留まっていたというのだ。宿主の遺体を自らの核として魔力が霧散しないようにした上で、外部の生命を襲って力を蓄えていたのだろう。

よって、外的要因にとって核となる吸血鬼の遺体を破壊されるなどすればあの

蜘蛛は実体を維持できなくなり消滅する。

「じゃあ、やるわよ零菜」

雪菜が雪霞狼を回し、穂先を蜘蛛に向ける。

「雪霞狼！」

解き放たれる神格振動波の清純なる輝きが蜘蛛の群れを打ち消し、押し戻す。

「薙ぎ払え、獅子の黄金！」  
レグルス・アウルム

そして、蜘蛛の群れの中にぽっかりと開いた穴を埋めるように雷光の獅子から抽出された雷撃の魔力が暴威を振るう。

白と黄金の圧倒的な破壊を前に、蜘蛛の眷獣たちは根こそぎ蹴散らされ、大蜘蛛を守るものが壊滅する。

雪菜は右手を振り上げ、五指を鉤爪のようにすると大蜘蛛目掛けて振り下ろす。その動作に惹かれて異界から呼び寄せられた獅子の腕が、鋭い爪を翳して大蜘蛛の身体を引き裂いた。

大蜘蛛にとっては不意打ちにも等しい暴力だ。

虚空から現れた雷撃の爪は、一撃で以て大蜘蛛の身体の七割を削り取り、内部か

ら死相を浮かべた少女を引きずり出した。

「零菜！」

「分かってる！」

ドン、と零菜が地面を蹴った。

身体が軽い。

蝶にでもなったようで、それでいて力強く地面を蹴りつけて少女の遺体に肉薄する。

ぞぶり、と少女の遺体が黒い肉の中に沈んでいく。なけなしの肉体で核を守ろうとしているのだろう。

「遅い！」

零菜は叫び、槍を少女の胸に突き入れた。

ハスタ・アウルム  
「槍の黄金！」

閃電が走り、魔力無効化の刃が少女の内側から大蜘蛛の核としての力を根こそぎ打ち消す。魔力の根幹を破壊された大蜘蛛は、実体を維持できずに消滅した。

大氣中に溢れた澱んだ魔力も母娘の魔力無効化の槍の効果で霧散し、跡形も残ら

な  
か  
っ  
た。  
。



## 第十話

セカンド・ウエスト  
第二西地区の一画に建つビルは一棟丸ごと研究所として用いられていた。

地上五階、地下三階、築十年ほどのビルで外観は風雨によって一部ペンキが剥がれかけているところもあるものの、内部は清掃が行き届いた小奇麗なオフィスだった。

「だった」というのは、それも今は昔のことだからだ。

研究所は今や戦場と化している。

エントランス——銃声の類は一切ない。拘束された従業員が、アイランド・ガード特区警備隊に促されて外に連れられていく。

研究所が、違法な研究に手を染めていたことが明らかになったためだ。

突然の強制捜査に研究所側は実力を以て抵抗を試み、そしてあっけなく防衛線は崩壊した。

たった一人の吸血鬼がその怒りで以てすべてを蹂躪したのだ。

戦闘能力のない職員は早々に降服した。リタイア

戦闘能力のある職員も、大半が屈服を強いられた。

残るは地下三階に退避した幹部職員だけだ。

「な、なぜ、どうしてアイツが自らここにやってくる？」

白髪混じりに初老の男が、顔面を蒼白にして廊下を駆けている。

「所長、お早く！」

「分かっている！」

所長と呼ばれた男は、止まりかけた足に鞭打って奥へと進んだ。

銃で武装した取り巻きは五人。所長のほか、その側近も含めて十人の集団が、研

究所の現有戦力となる。

「早く防壁をロックしろ！」

核シェルターに匹敵する防御力を有する防壁が閉じ合わさり、外界と隔絶した空間を形成する。

秘密裏に造った脱出用の抜け道が、この先にはある。この通路そのものが設計図にも載っていないまさしく秘密の部屋とも言うべきものであり、たとえこの建物を強襲した特区警備隊であっても入口を発見することすらできないはずだ。

計五層にもなる防壁のすべてを固く閉ざした。早々抜けられる心配はない。おまけに、防壁と防壁の間には侵入者を迎撃する様々な防衛システムが稼動している。如何に強大な吸血鬼であったとしても、魔獣の群れを仕留める自動防衛システムを簡単には突破できまい。

目的の部屋に辿り着いた所長は、すぐに脱出路に向かうための扉に向かった。トネルを抜ければ、海に出ることができ、隠している船で脱出が可能なのだ。

「お、おい。何をしている。早く扉を開けろ！」

所長が怒鳴った。

扉を開ける部下が、暗証番号の入力に手間取っているからだ。

「す、すみません。でも……」

「でも、なんだ？」

「暗証番号が、————違うと……」

震える声で部下が言った。

「何———？」

所長は、慌てて扉に駆け寄り部下を跳ね除けると、自らカードキーを取り出して

認証しようとする。

鳴り響くのは無機質な電子音。そして、表示されるのは「ERROR」の五文字。「ど、どうなっている!？」

気が狂ったかのように、所長はカードキーで開錠を試みるが扉は固く閉まったまま開く気配すらない。

この扉が開かなければ、彼は脱出路に進めない。

前に進めず、かといって戻れば迫り来る吸血鬼と相對することになる。一体誰が勝つことができるだろうか。あの第四<sup>バケ</sup>真<sup>モノ</sup>祖に。

「なぜ、なぜだ! どうなっているのだ!」

怒鳴ったところで扉が開くことはない。

外敵を防ぐために造り上げた頑強な防壁は、今となっては獲物を閉じ込めるための檻と化したのだ。

予備のカードキーに切り替え試すと、今度はエラーとは異なる電子音が響いた。

——開いた。

期待に目を輝かせ、扉の前に立つ。

扉が開く。

所長の後方、入口の扉が。

「な、に——？」

振り返ると、そこには色素の薄い髪をした一人の青年が立っていた。

気だるげな表情で白いパーカーに袖を通してはいるが、見間違いようもないその顔はまさしくこの国の皇帝、第四真祖暁古城だった。

「な、馬鹿な！ どうやって、ここに辿り着いた？ こんなに早く。いや、そもそもこの通路は職員ですら大半が知らないというのに——!?」

もちろん、あっさりと突破を許したことに驚いたが、ふと古城の背後を見れば防衛システムが起動した様子がない。

世界最強とも呼び声高い強大な眷獣で防壁を食い破り、防衛システムを叩き潰したのではない。何かしらの手段で、防壁を開き、防衛システムをダウンさせたのだ。

「ああ、電子制御された防壁ってのは、システムに手を加えられると脆いもんだ。あれだ、砂上の楼閣ってヤツ」

核にも耐えるシェルターを破壊ではない方法で突破する。何と言う皮肉だろう

か。物理的な防御手段も、電子的な手段であればいとも容易く破られる。

「最強の楯で防げるのは、同じ土俵に立ってくれる矛だけだそうだ」

そうして、まったく別の方向から攻め込まれた防壁は暁古城という最強の外敵を素通りさせた。

「ありえん」

と、所長は呟いた。

「我々の防衛システムは外部と物理的に遮断されている！ いくら、国家機関であらうとも、これほど短時間にどうこうできるものではない！」

「知らないっての」

「何だと？」

「だから知らないっての。俺にそんなこと言われても困るんだ。アイツが何をしたのかなんて、専門的過ぎて理解できないからな」

困ったもんだ、と古城は頭を掻いた。

服装も態度も皇帝という立場にいるとは思えない。

その辺を歩いている若者という程度でしかない。だが、二十年前の大戦を知る所

長は目の前の青年が世界にどれほどの影響を与える怪物なのかをよく理解している。十年前の建国の折の混乱に乗じて研究所を展開したのは、それだけこの国に隙があったからではあるが、その隙も近年は主要各国並みになっていて手広く犯罪を犯せないレベルにまでなっている。暁古城が無能なら、このような急速な発展はなかっただろう。故に、相對した今、所長とその連れの未来は限りなく絶望的となった。

「で、あんたらどうする。俺としては、大人しく投降してくれると助かるんだがな」  
それは、一戦交えると言うのなら容赦はしないという宣告だった。

退路がない状況下で、世界最強の吸血鬼に睨まれる。まさに蛇と蛙だ。どうにもならない。

「何故だ」

「さっきからそればかりだな」

「何故、皇帝ともあろう者が、このような場所にいる!？」

「そりゃ、仕事に決まってるだろ。俺もあんたもいい歳だ。働かないわけにはいかないだろ」

「ふざけるな！」

所長は怒鳴った。

不敬だとかは最早考えることすらない。すでに自分は犯罪者だ。ならば、皇帝だろうがなんだろうが感情を露にして何が悪い。

「皇帝の公務は断じてこのような場所にこのこと顔を出すことではないだろう！ 貴様が出向くべきは会議室であって現場ではない！ だというのに何故、貴様のような怪物が前線に出てくるのだ！」

もしも、第四真祖が直々に出陣しなければ、脱出路を使うような逃げ方をしなくても乗り切れたかもしれない。そもそもこの敗北は暁古城が現れたことが原因なのだ。所長は思った。相手は最強の怪物だから、自分は負けても仕方がないとして神の均衡を保ちつつ、皇帝の職務を離れた行為を非難した。

「誰が皇帝の仕事で来たって言ったよ」

古城はため息をついて言った。

それから、一步前に踏み出した。所長らに降服の兆しがないことから、古城自身が手を下すことにしたのだろう。

その動きに所長の部下たちの緊張が一気に限界に達した。

一人が震える指で引き金を引き、その音で感情が決壊した部下たちは短機関銃で対魔族用の銃弾をばら撒いた。マズルフラッシュが室内にオレンジ色の光が点滅させ、硝煙の香りが充満する。

二秒ほどで、重火器の饗宴は終わった。

弾を撃ち尽くしたわけではない。

銃を撃っていた全員が、血を流して倒れたのが原因だ。

部屋中に潰れた弾丸が転がった。

「な、あ……!?!」

あまりのことに所長は喉を干上がらせた。

暁古城は無傷で立っている。

対魔族用の銃弾は古城に届くことはなく、その寸前ですべて弾き返されて部屋中を跳弾し、そして銃を持っていた部下たちを撃ちぬいていったのだ。奇跡的に死んではいない。そして、所長も弾が肩を浅く掠めただけの軽症だったが、古城に対抗する手段がないことを如実に示す一幕に完全に所長の心は折れた。

キラキラと輝く金色の粉が古城の回りを舞っている。

砂粒ほどの大きさの金剛石の楯が全方位に展開されていたのだ。

眷獣クラスの攻撃でなければ、この防御方法で大半は凌げる。狙撃すら、古城には通じなくなった。

古城はまだ立っている所長の目の前まで歩み寄った。

そして、叫んだ。

「娘を危ない目に合わせたドアホウをぶっ飛ばすのは、皇帝じゃなくて親父の仕事だろうがッ」

古城は思い切り、所長の顔面を殴り飛ばした。

所長は声を上げることができず、身体を半回転させて倒れ込み、そして気絶して動かなくなった。



『親バカ皇帝陛下、娘を危険に晒した犯罪組織に自ら乗り込み制圧！』

『かっとしてやった。今は反省しているなどと仰っている模様』

//ライヒ・デア・モルゲンロート  
暁の帝国

の首都を襲った大蜘蛛の怪物の正体は、特区警備隊と暁古城によって叩き潰された違法研究所が秘密裏に開発した生体兵器ということで発表された。

新種の魔獣となれば別個体の存在が不安視されるし、眷獣となれば宿主がどうなっているのかという話になる。宿主の少女には罪はなく、その少女を監禁し殺害した上でこの眷獣を兵器に利用しようとした研究所にこそ罪がある。亡くなった少女の人権やその両親に配慮して、事件の真実は秘匿される運びとなったのだろう。そして、何よりも大蜘蛛による犠牲者は皆無であり、そして公務をそっちのけで敵地に取り込んだ皇帝の行動が面白おかしく報道されることになったために、事件そのものを掘り下げようとすると動きは半分抑制された。

テレビのニュース番組でそんな報道がされている。

苦言を呈する識者もいるが、概ね古城の好感度は高いようだ。

「また、古城君のニュースだ」

零菜がニュース番組を眺めて呟いた。

「ん、凧君……」

ここは、凧の家だ。

事件が解決したので、凧が暁家に保護される理由もなくなった。無事に自宅に戻った凧の家を、今度は零菜が訪れているのだ。

零菜はソファに座る凧に密着し、首筋に牙を突き立てる。

軽く噛むだけで牙は思ったとおりの場所に突き立ち、血管を食い破る。

滲み出る鉄錆にも似た味が口内に広がり、腹の底からじわじわと全身に向けて多幸感が広がっていく。

事件解決から五日が経った。

零菜はトラウマの克服と称して、時折凧の血を啜っていた。

これで血液の提供は三度目になる。

ここ数年、零菜が凧を避けていた心理的な要因は、今回の大蜘蛛事件をきっかけにして取り除かれたらしい。変わりように凧も驚いたものの、血を与えるくらいど

うということもないので気にしないことにした。

凧は首に走る刺すような痛みを耐え、柔らかな零菜の身体に反応しそうになる自分を叱咤する。

零菜はそんな凧の葛藤を知ってか知らずか吸血行為に耽った。

「なんか、悪いことしてる感じがする」

零菜は艶やかな髪を遊びながら言った。

「まあ、よくはないかもしれないな」

凧は零菜を直視できず、テレビに視線を向けたまま答えた。

「雪菜さんに禁止されてなかったか」

「されてるね。だから、秘密。でも、大丈夫だよ。あの人だって、中学生のときに古城君に献血してるし」

親に秘密というのが、またなんとも言えず甘美な表現に思える。ばれると本当に不味いことになるのだが、そのスリルすらも今は楽しめる。それだけの余裕が、零菜には生まれていた。状況に酔っていると言い換えてもいいかもしれない。

吸血の話ばかりしていると、また血の味が恋しくなる。

ただの血ではだめだ。

零菜を充足させてくれるだけの、魔力と霊力を備えた高位の血液でなければ受け付けない。

この歳でずいぶんとグルメになってしまったが、こればかりは最高級を提供してくる風が悪い。

血液に依存性はないはずだが、血を吸いたいという欲求は本能の中に刻み込まれている。吸血鬼として生まれたからには避けられない感情であり、であれば相応のものを味わいたい。零菜はもうそれを知ってしまったている。

とはいえ、恋しくなったから「もっと欲しい」などとはさすがに言えないので今日は我慢しなければならぬと自制心を働かせる。

と、そんなときにリビングの扉が唐突に開いた。

「凧君ー、零菜ー。いるー？ いるよねー、気配あるし」

入ってきたのは、萌葱だった。その後ろからぞろぞろと麻夜と紗葵が続いてくる。

突然の来訪に、零菜が目を見開いて固まった。

「あら？」

「お？」

「あ……」

入ってきた三人は、三者同様のぽかんとした表情で零菜と凧を見比べる。

それから、にやりと笑った。

面白い物を見つけたとばかりに。

「あらー、お邪魔だったかしらねー」

萌葱があからさまに挑発するように言った。

「ちょ、ちょっと、どうしていきなりみんなが入ってくるの!？」

「ん、そりゃ夏休みになって暇だし、中央は騒がしいしでね」

萌葱はくるくると鍵を指で回している。この家の鍵だ。萌葱が凧の家の合鍵を持っているのは、周知の事実だった。

「凧君、最中買ってきたよ。後で食べよう」

麻夜は特に何も言わず、ビニール袋を持ってキッチンに向かった。我が物顔で冷蔵庫の扉を開き、中に最中が入っていると思しき袋を仕舞う。

「零菜姉さん、ここ、血が付いてる」

「!？」

紗葵に指摘されて、ごしごしと零菜は唇を拭う。

「でえ、零菜さん。お休みの日にこそそ吸血ですかー？ エッチな娘だねえ」  
萌葱は零菜側の肘掛に腰を下ろし、零菜の肩に腕を回した。

「いや、これは。そういうんじゃないかって……」

「じゃあ、どういふんじゃ？ ん、お姉さんに教えてくれる？ ほれ？」

「いう、あ、凧君……」

「どうにもならん」

「うわああああ！」

羞恥で零菜は顔を紅くし、凧はそっぽを向いた。

そして萌葱は楽しげに笑い、麻夜は呆れたような苦笑を浮かべる。

「うん、まあこれで積年の問題は解決したのかな」

紗葵が麻夜に話しかけた。

「そうなんじゃない？ 零菜も凧君も昔みたいに話ができるようになったし」

「血まで吸う関係じゃなかったように思うけど」

「なんにしても、暁の一族が外に流出しないようにするにはこれが一番収まりがいいだろうね」

「ドライだねえ、麻夜姉さん」

暁古城の血縁者は、国外に風沙とその夫、そして両親がいるものの皆人間だ。唯一風だけが特殊能力を持っている。風の特徴的な力はある意味では帝国の資産でもある。暁の血を引く者でもあるので、政治的な価値もある。その力を古城の血統に取り込むのであれば、姉妹の誰かと風がくっつくのが好都合なのだ。

「まだそこまでじゃないみたいだけど」

紗葵の見立てでは、本当に血を吸っていただけで恋仲にまで発展しているわけではない。見ていれば時間の問題だろうとは思うが、この先何があるか分からないのが人生だ。

「まあ、零菜と風君の関係も大切だけど、僕らと風君の関係も同じく大切だ。紗葵がどうするかは知らないけど、囲い込むには人数がいたほうがいい」

「おう、そう来る。うん、面白そうだとは思うけど」

ちらりと見ると、零菜と萌葱は格闘戦に入っていた。

引き離そうとする零菜とじゃれ付く萌葱という構図。萌葱のそれは猫可愛がりという言葉がよく似合う。

麻夜は風の傍まで歩み寄った。

「悪いね、騒がしくて」

「いつものことだろ」

「そうだね」

麻夜はどこから取り出したのかトマトジュースのペットボトルを風の頭の上に乗せた。

「それ上げるよ。どうせ普段は不健康な食生活なんだろう」

「助かる」

「萌葱姉さん、そうやってイベント待ってても来ないから」

「婚期を逃したみたいに言わないでくれる？」

零菜を解放した萌葱が不承不承といった様子で風の隣に座った。さっきまで零菜が座っていた場所だ。

「自然な感じに人の場所取った!？」

「お姉ちゃん的场所です」

「横暴！」

零菜が身体を起こして萌葱に不満をぶつけた。

「まあまあ、零菜。今回、零菜はずいぶんと役得したんだからさ」

「役得？ 蜘蛛に追い回されただけけど？」

きよんとする零菜に麻夜が笑って言う。

「蜘蛛に追い回されてからの指ペロはなかなかないと思うけどね」

「ちよお!!」

驚いたのは凧も同じ。

何故、麻夜があのと時のことを知っているのか。

問い質そうとすると頭の上のペットボトルが上手い具合に凧の頭を固定していて振り返れなかった。

「監視カメラのある場所で行為に及ぶのはよくないよ。まあ、元のデータは萌葱姉さんが消したけど」

「そうよ、消してあげたのよ。このわたしが」

「ぐ……」

ここぞとばかりに自分の仕事をアピールする萌葱に零菜は悔しそうな顔をする。

「なんであんなところに監視カメラが」

「工事現場は泥棒も不良も入りやすいからね。そんな理由なんじゃない」

ひらひらと萌葱は手を振った。

「まあ、なんにしても姉を差し置いていちゃいちゃするなんてそんなのダメ。ずるい」

「いちゃいちゃとかしてないし、緊急事態だったし、歳も関係ないじゃん」

「とにかくダメなのー！ 吸血なんて、わたしもまだなんだから！」

「萌葱ちゃん、子どもみたいだよ」

呆れたとばかりに床に座り込んだ零菜が呟く。

「萌葱姉さんは友だちが高校デビューで彼氏作ったから焦ってるんだよ」

「ああ」

零菜が頷く。

「ああじゃない。それに、焦ってない。ただ、イベントがないだけ。そう、きっか

けがないの。そういう青春きゃっきゃっうふふイベがないの！ 高校生なのに！

ねえ、麻夜？」

「僕は中学生だし同意を求められても……うん、事実といえば事実だけど、強いて言えば僕はほら、凧君と訓練したり黒猫堂のパフェ食べた『らしい』ことはしてるよ」

「黒猫堂？ それは、まさかあのカップル限定パフェとかいう外道商品を置いているあそこ？」

萌葱が戦慄したとばかりに表情を強張らせて呟く。

「そうだね。あれ、食べてみたかったんだ」

「どういうことよ、それ。なんでわたしも誘ってくれなかったの!？」

「誘ったらカップル限定が成立しないじゃないか」

「それ、わたしも知らなかったんだけど、……凧君。いつの話？ ねえ、いつの話？」

騒がしい。

凧は顔を歪めつつ、文句の一言も言えないでいる。女性多数の家庭で育った男性

の悲しい点は、基本的に頭が上がりなくなってしまうことだろう。意見するのも難しい。まして、血液を提供している場面を見られたとなつては、余計な一言が騒ぎに油を注ぐことになりかねないのだ。

だから、凧は急場を凌ぐべく無我の境地でテレビに視線を向け続ける。

「……これ、綺麗に収まつてるかな？」

若干心配そうな表情で姉と従兄を眺める年少者は、どうしたものかと考えてからため息をつく。そして、面白いからまあいいかと開き直って、自分もまた騒ぎの中に入っていくのだった。

---

中編という感じで構想したもので、ここで区切りです。

途中停滞しましたが、書きたい部分は書いたなという感じで最後まで持っていけましたかね。

## 幕間

大蜘蛛の事件以降大した事件もなく、いたって平穩な日々が流れる暁の帝国は、夏休みの真っ最中だ。大人は仕事に勤しむが、学生は遊びに全力を尽くす。そんな季節。旧日本ということで、日本の文化を受け継いでいる暁の帝国は、日本と同じ時期にお盆休みに入る。

この時ばかりは熱心な部活動も多くが休みになる。持て余すほどに休みがある学生たちは、ここぞとばかりに遊び始める。

暁麻夜が異母姉である萌葱の家を訪れたのは、ただ手持ち無沙汰だったからだ。た。

空調の整った屋内は実に涼しい。

もともと帝国内でもとりわけ高いマンションの最上階を占有している暁家は、地上付近に暮らす人々に比べて夏の暑さは楽なほうではある。

しかし、南国の夏は五十一階の高みにあっても侮れない。

屋外の気温は二十九度。湿度は考えたくもない。姉妹ではあるが、互いの部屋に

行くには一度外に出なければならぬのが気になるところで、いっそのこと他の家々の壁をくり貫いて一纏めにすればいいのではないかとすら思うくらいだ。

「て、あれ。零菜もいるんだ」

「麻夜ちゃん、またそんなかつこして……」

リビングに入ると、先客が呆れたとばかりにため息をついた。

暁零菜——麻夜と同じ年の異母姉妹で、生まれた順で零菜が姉となる。が、

学年が同じなため、二人の関係は対等と言ってもいいだろう。

零菜が麻夜の姿に苦言を呈したのは、姉貴分という意識からではなく単純に麻夜が表に出れないような守りの薄い格好をしているからだだろう。

タンクトップとホットパンツという出で立ちなのだ。健康的なすらりとした足がこれでもかと存在を主張しており、さらに薄いシャツは豊かな二つの丘が目一杯自己主張している。このような少女が街中を歩いていたら、すれ違う男たちは前かがみで歩く羽目になるだろう。

「紗葵は？」

「友だちんどこ行っちゃってさ」

萌葱がストローを咥えながら答えた。

麦茶に浮いた氷が心地よい音を立てる。結露したグラスが中身を美味しそうに演出している。

「萌葱姉さん、僕も水貰っていい？」

「いいよー、冷蔵庫から好きなを選んで。まあ、お茶と牛乳とゲロまずの輸血パックくらいしかないけど」

「それもう捨てればいいんじゃないの」

冷蔵庫を開けると見覚えのあるパッケージがある。赤黒い血が封入された輸血パックだが、萌葱が口をつけないので一向に減らない。この家で吸血鬼なのは萌葱だけだ。古城はこの冷蔵庫を使わないし、母親の浅葱も料理はほとんどしないので冷蔵庫そのものが萌葱の所有物のように扱われている。

この輸血パックを見ても、さっぱり吸血衝動が湧いてこない。この血を吸いたいとも思わないのは、吸血衝動が性欲に関連するものだからだろうか。昨今は吸血自体を恥じる若者も増えていて、若者の吸血離れを憂う先達の中には積極的に血を摂取するように呼びかける者もいる。人間との共存が進む中で種族間の文化的な摩

擦は、各国の喫緊の課題でもあった。

手近なコップに麦茶を入れた麻夜は、リビングに戻って椅子に横を向いて腰掛ける。背凭れに肘を置き、麦茶を口に含んだ。

「零菜何してんの？」

麻夜が零菜に声をかけた。

テーブルの上に手鏡を置いて、にらめっこしている。目の下を引っ張ってみたり、鏡を覗き込んだりしているのだ。

「あー、なんかカラコンが上手く入ってないような気がする」

「ああ、分かる。ゴロゴロするんだよね、変な入り方すると」

零菜は目薬を打って、パチパチと瞬きをする。

「てか、何で今日カラコン付けてんの？ 別に学校もないしよくない？」

萌葱が零菜に尋ねた。

「いや、昨日新しいの買ったから試してみようと思って。んー、合わないのかなあ」  
カラーコンタクトの需要は年々高まっている。

吸血鬼の若者——特に思春期の学生にとっては必需品と言っても過言ではな

く、学校も着用を許可する場合が多い。ファッションではなく人権に関わるものとして認識されているのだ。というのも、吸血鬼は吸血衝動に襲われると瞳の色が赤く染まる。吸血衝動は前述の通り性的欲求に関わるものなので、若い世代は赤い瞳を見られるのを嫌う傾向があるのだ。

吸血衝動自体は性欲以外にも体力の低下や体調不良などでエネルギーを欲する場合などでも現れるもので、一口に性欲と直結しているとはいえないが、それでも赤い瞳をしていると興奮していると宣言しているようなものだった。

多感な思春期の少年少女にとっては、見た目から吸血衝動が分かってしまう赤の瞳は恥ずかしいもので、からかいの対象ともなり、酷いものだとしてそれがいじめに繋がってしまう。

「家の中で目を赤くしても別に気にしないでしょ」  
「いや、そうなんだけどね。やっぱ、これ合わないや」

零菜は諦めたのかカラーコンタクトを外した。自分の瞳の色に合わせた黒と空色を混ぜたような色合いのカラーコンタクトだったが、どうにも使用感が彼女の好みに合わなかったらしい。

「吸血衝動ねえ。あったとしても基本無視だからなあ」

麻夜が言うど萌葱も頷く。

「食欲とかと違つてほつとけば収まるしね。まあ、血が吸いたくなつたときに吸えたらいいんだろうなあとは思うけどね。……輸血パックじゃなくて、生血が欲しいんだよ」

「なんか猟奇的だな、その言い方」

萌葱が天井を見て欲望を口に出すと、麻夜が笑いながら感想を述べる。

「まあ、確かに輸血パックは不味いなんてものじゃないよね」

零菜は以前試しに口にしてみた輸血パックの血の味を思い出す。魔力と霊力がすっかり抜けた血は、エネルギーに乏しく味も微妙だった。

「ああ、このブルジョワが。お姉ちゃんを差し置いて風君の血を貰っちゃつてもう！ そりゃ輸血パックは不味いでしようよ。本物の生血吸つてんだからさ。しかも風君の！」

「いや、まあ、それはそうなんだけど」

何と言つていいのか分からない。

確かに零菜は度々凧から血を吸っている。まだ片手で数えられる程度ではあるが、一回も血を吸ったことのない萌葱からすれば、それだけでも零菜のほうが吸血鬼として進んでいる。おまけに吸血対象の凧は、魔力と霊力を最高水準で兼ね備える血の持ち主だ。それはもう近くにいただけで、噛み付きたくなるくらいに甘い芳香を放っているくらいで、彼に目がくらむのは栄養価の高い食品に目が惹きつけられるようなもので自然な反応だ。採血してからずいぶんと経ち、魔力を失ったただの血では、決して凧の生血には勝てないのだ。

萌葱と零菜のやり取りを見ていた麻夜がふと思いついたことを口走る。

「あれ、そういえば凧君はさ、吸血衝動あるのかな？」

彼女たちの従兄弟に当たる昏月凧は、もともと強い霊力を備えているだけの人間だったものに零菜と古城の血が入ったことで半吸血鬼となった少年だ。

「凧君の吸血衝動？」

「そういえば、聞いたことなかったな」

零菜と萌葱が首を傾げた。

凧に吸血鬼の因子が入っているのだから吸血衝動があっても不思議ではない。完

全な吸血鬼ではなくとも眷獸を使役する能力は持っているし、弱いながらも再生力もある。ならば、吸血能力を持っていてもいいだろう。

「凧君に吸血衝動があったら、古城君みたいに誰かの血を吸うってことじゃないの。ダメダメそれは。わたしの凧君が汚れる」

「何で萌葱姉さんになってんのさ」

「でも、実際どうなんだろうね。吸血鬼の因子があるなら、吸血衝動があるのは自然じゃないのかな」

零菜は、この場にはいない人のことを話すのはどうかとも思うのだが、興味深い内容だけに逡巡をすぐに忘れる。

「僕は見たことないな、凧君が吸血衝動を起こすところ。もともとないんじゃないのかな。あるのに出ないんだったら、問題は大きいでしょ」

吸血衝動を有していながらそれが出てこないということは性欲を感じていないということである。無論、凧のすべてを知っているわけではないが、彼の付き合いも長いのだ。凧は女に興味がないというわけではないのを麻夜は知っている。

「んー、でも零菜に血を吸われてたときとか普通にしてたしね」

「零菜をそういう対象で見えてなかったとか？」

「ちよ、あの、その言い方やめて二人とも……わたしの尊厳がね……ほら……」

言いながらも零菜の不安そうな表情は隠せない。無理もない。血を吸うために身体を密着させたりもしたのだ。それで何も感じていないのならば、それは零菜の乙女としての尊厳が失われることになる。

「何か、興味が出てきたな。凧君に吸血衝動があるのかどうか。ねえ、零菜」

「え、あ、うん。でも、どうやって確かめるの？」

「そりゃ、あれじゃないの？ 凧君が感じればいいわけだから、あー……危なくない一歩手前辺りで頑張るとか」

手っ取り早いのは凧が性的に興奮することだが、それはつまり凧を興奮させなければならぬわけだ。要するには、凧に色仕掛けをするということになる。同い年の従兄弟を相手に、それはハードルが高い。物怖じしない麻夜が口籠るのも当然だろう。

「吸血衝動だけなら、葉で何とかなるんじゃない？」

「一服盛るのか。水かなんかに溶いて」

萌葱が立ち上がって部屋の隅にある棚を空ける。薬箱がそこには入っている。怪我をすぐに治せる吸血鬼でも体調不良に陥ることはある。決して不老不死だから、肉体面に問題が生じないということではないのだ。

「確かね、吸血障害の薬があったはずなのよ」

「吸血障害の薬って、確か吸血衝動を起こさせるヤツでしょ。なんで萌葱ちゃんが持ってたの?」

「貰い物。まだ経験がないって言ったら、寄越されたのよね。誰が不感症だったのよ」

どうやら萌葱は以前に誰かから不感症だと勘違いされたらしい。

市販の吸血衝動を補助する薬は、通常は体調不良のために吸血すらする気が起きない中で無理にでも血を吸って体力を取り戻そうとするときや、吸血に対する心理的拒絶反応の軽減などを目的に服用する。

「粉薬でミルクによく溶けるタイプです」

萌葱は茶色の小瓶を振って零薬と麻夜に見せた。

「それ、大丈夫なの?」

「百パーセント天然成分だって書いてあるし、市販されてるヤツだから。それに軽く血が吸いたくなるだけで実害ないし、へーきへーき」

萌葱は小瓶を麻夜に投げ渡す。片手でそれをキャッチした麻夜は、ラベルに視線を這わせた。

「ダンピールに効果あるのかな、これ」

「そもそも凧君の体質は唯一無二だから、薬の効能も効き目があるのかどうか分からないのよね」

吸血鬼には吸血鬼の、人間には人間の薬がある。

多くの薬は共用でもいけるのだが、やはり不老不死の吸血鬼と人間では免疫などでも違いがある。人間に効く薬が吸血鬼に効かないということは往々にしてあることであり、その逆もまた然りである。

「あの、それって、凧君に薬を盛るってことだよ。まずいんじゃない?」

零菜は恐る恐る意見すると萌葱はからからと笑った。

「でも気になるじゃん。それにこれはちょっと気分を高めるだけだから、大丈夫だって。プロテインみたいなもんでしょ」

「いや、でも、そもそも葉って勝手に使っていないものじゃないし……」

「あ、凧君三十分くらいで来るって」

麻夜が零菜の言葉を遮って言った。彼女はいつの間にか手の平大の液晶パネルを操作していた。最新式の携帯だ。

「ナイス麻夜」

萌葱がグッと親指を突き立てた。

基本的に友人と外で遊ぶことのない凧は、暇を持て余しているのである。その一方で、連絡を入れれば呼び出すことはできる。凧から人を誘うことがないだけで、付き合い自体は悪くないのだ。特に、皇女姉妹は親戚筋で気心が知れているとあって、呼び出しに応じることは多い。

通い慣れた道を通って凧はやって来る。

三十分というのは凧の自宅から暁家のマンションまで寄り道せずにかかる時間であつた。

「どうして俺が呼ばれたんだ」

きっかり三十分でやってきた凧は、従姉妹に問う。

伸びた前髪が目にかかって鬱陶しそうにする風は、夏場だというのに相変わらずの黒のパーカー姿だ。見ているだけで暑苦しいが、特殊材質のパーカーは紫外線をカットし、熱を散らす機能を持った夏服だったりする。

「え、ああ、ゲームがね四人いるからさ。一人加えようと思って」  
萌葱がテレビを指差した。

最近出たばかりのテレビゲームの本体が液晶テレビの前に置かれている。手の平サイズのそれは、ついさっきまで麻夜が弄っていた携帯だった。

無線を利用してテレビゲームの本体として使うことができるのだ。

「あれ、紗葵はいないのか？」

「外に出てるよ。友だち、多いからね」

麻夜がそう言うのと零菜が笑う。

「それだと、わたしたち友だちがいないみたいじゃん」

皇女という立場はあるものの、概ね学校生活に問題はない。友人関係は良好である。  
る。

「まま、外暑かったでしょ。これで一服してからにしょ」

と、萌葱はグラスに麦茶を注いで持ってきた。

「ありがと、萌葱姉さん。ちょうど、喉が渴いてたんだ」

何せ外の気温は三十度を軽く越える真夏日だ。南国らしい湿度の高さとフェーン現象のダブルパンチはそれだけで外出意欲を尽く低下させる。

凧は萌葱に渡されたグラスの中身を一息に飲み干した。

「ん？」

凧は眉を顰めた。

「あ、ど、どうかした？」

萌葱は凧の様子を観察するように表情を覗き込んで尋ねる。

「いや、なんか苦いと思って。気のせいかな？」

「気のせい気のせい。いつもと使ってるの変わらないよ。普通の麦茶。そのスーパード買ってきたヤツ」

萌葱は乱暴に凧の手からグラスを奪い取り、そのままキッチンに戻った。

手際よくグラスを洗う。

その様子を見ていた凧に零菜が話しかける。

「ねえ、凧君」

「ん？」

「……あ、いや、なんでもない」

「何だよ」

凧は訳が分からないとばかりに首を捻る。

麻夜はちよつとがっかりしたといった風にソファに沈み込んでいるではないか。なんだか分からないが、あまりいい気はしない。

「ま、いいや。ゲームしよゲーム。せっかく来たんだし、凧君が選んでいいよ」

「ん、そう？ 四人だし、パーティゲームでいいんじゃないか。確か、入ってたよな？」

「いくつかあるね。あー……じゃあ、この前買ったばかりのダンジョン飯2にしようか」

「聞いたことないぞ、それ……」

「あれ、知らない？ CMとかよくしてるはずだけどな」

「あまり意識してCMとか見ないから」

そもそもテレビ自体、流し見している状態だ。内容はほとんど頭に入っていない。

「ふうん、結構面白いよ、これ。嵌ると癖になる……あれ、起動遅いな」

ローディング画面から先に進まず、画面が黒いままだ。

「あ、凧君。ごめん、コントローラー持ってきてなかった」

「ああ、わたしの部屋の棚のところに置いてあるわ。凧君悪いんだけど、取ってきてくれない?」

萌葱は、キッチンでなにやら作業を始めていた。人数分の飲み物と菓子の準備を始めたのだ。

「俺が入っていいの?」

「別にいいわよ。ちょっとなら変なことしても許したげる」

「しねえよ」

挑発的な笑みを浮かべる萌葱にムツとして返し、凧は萌葱の部屋に向かうべく背を向ける。

女子の部屋に男を一人で向かわせるとか年頃の娘としてどうなんだろうかとは思うが、萌葱にとっては凧は弟分でありそれ以上のものではないのだろう。弟が姉の

部屋に入ったところで、困ることはない。見られてどうこうなるものもない。

「わたしもいこー」

なぜか、零菜が凧についてくる。

「コントローラーくらい俺一人でいいぞ」

「いや、ほら萌葱ちゃんはあるあ言ったケド凧君は年頃の男子だし、何があるか分からないからね」

「何かって何だよ」

「そうだね。例えば、萌葱ちゃんのベッドでいやらしいことするとか」

「しねえよ」

そんなことをしたら、生きていけなくなる。

明け透けで美少女ではあるものの態度は普通の女子高生と変わらない萌葱ではあるが、この国の皇女という立場でもある。おまけに第一子である。その萌葱の部屋で不埒な真似をすれば、あらゆる存在を敵に回す。

ドアを開けて部屋の中に入ると、桃色を基調とした女の子らしい部屋が広がっていた。

十畳ほどの広さで、個人の部屋としては十二分であろう。風の部屋よりは広い。「しかし、零菜もそうだけど、ずいぶんと庶民的な部屋だよな」

「そう？　普通じゃない？」

「普通だよ。でも零菜たちは皇女だろ。もっと煌びやかな部屋に住んでもいいんじゃないかと思うけどな」

零菜の部屋もこのこと大して変わらない。綺麗ではあるが一人暮らしの学生の部屋でもこのこと同じような内装にできるだろう。

庶民派というか、完全に庶民の部屋だ。

「まあ、うちは歴史も伝統もないからね。古城君だって一般人の出身だし。ああ、かのねえはアルディギアの血縁だからあそこは歴史も伝統もあるけど……クロエちゃんとは、その辺別格だよ」

羨ましいと思う反面、金銀で彩られた王宮での生活は息苦しい。

皇女らしからぬ今の立場がほどよくて楽なのだ。

「そう。まあ、でもあれだな、何にしても、これじゃ皇女らしさは欠片もないな。シンディの部屋と大差ないじゃないか」

時折絡んでくる後輩を思い出す。

彼女の部屋も萌葱の部屋と同じような雰囲気だった。あちらのほうがスポーティな印象があったというくらいしか違いが分からない。

「シンディ？」

「ん、ああ。いっこ下のヤツ……零菜と同じ学校だったはずだぞ。麻夜は知ってるらしいけど」

「ふうん……で、その娘の家に行ったんだ」

「何度かな」

「へえ」

答えながら、凧はコントローラーを探した。

萌葱は柵のところにあると言っていた。ソレらしき場所に視線を向けてみれば、プラスチックのケースの中にコントローラーらしきものが入っている。

「お、あったあった」

凧はケースを柵から取り出して、中を確認する。黒や青の手の平サイズのコントローラーが収納されていた。

「しかし、今時外付けコントローラーってのはマニアックだよな」

大抵のことは携帯一つでできるのだ。今の時代はテレビゲームですら本体を必要としない。携帯が本体とコントローラの役割を併せ持つものも多いのだ。ゲーム業界は通信技術の発達が大いに貢献している世界でもある。

「どうかしたか？」

「別に」

零菜は妙に刺々しい視線で凧を見ていた。空色の瞳がどことなく影を帯びているようにも見えた。

「ッ……!!」

凧はぞくり、と背筋を這うような悪寒に曝された。

胸がざわつき、頭が真っ白になる。その一方で、不思議と感覚は研ぎ澄まされていた。

甘い香りが鋭敏になった嗅覚に染み込んでくる。

前後不覚に陥ってプラスチックケースを取り落とした。

「凧君、どうかした？」

零菜が凧の異変に気付いて近付いてくる。

無防備に凧のパーソナルエリアに入った零菜を、凧は抱きしめた。

「ふえ……?」

固まった零菜は状況を理解するのにたっぷり五秒を要した。

「ちよ、あ、凧君!? 何、何どうしたの!?!」

叫ぶ零菜を凧はベッドに突き飛ばす。さらに、尻餅をついた零菜に凧は覆い被さった。

「え、あ、ちよ、わわわ! ストップ! 凧君、ストップ!」

零菜が慌てて凧を押し退けようとする。

だが、思いのほか凧の力が強く、零菜の体勢からでは力が上手く出ない。ベッドのスプリングが力を吸収してしまう。

「も、もしかして吸血衝動!? 今更出た……うわあ、ちち近いいい! 待ってって!」

騒ぐ零菜を無視して凧は烏羽玉の黒髪を梳き、零菜の耳元に唇を寄せる。

凧の吐息を肌で感じ、零菜は羞恥とくすぐったさに身を縮める。

「何か、いい匂いがするな。髪もさらさらで気持ちいいし……」

「うわあ、うわあ！ 変態！ 変態！ いやらしい！」

「ああ、何かもう、それでいい」

「それでって、わああ！ 萌葱ちゃん、麻夜ちゃん！ 助けて！ 凧君が変になった！」

じたばたと凧に抵抗する零菜の叫びを聞いた萌葱と麻夜がドアを開けて室内に入ってくる。

零菜を襲う凧を見て、二人は目を見開いて固まる。

「これ、どういう状況？」

麻夜はどうしたものかと萌葱に尋ねる。

「ええと、菓の所為だよね、多分。吸血衝動が出たのかな」

「と、止めてええええ！」

零菜が足をバタつかせ、凧の肩を掴んで押し退けようとしている。凧はそんな零菜の手首を掴んで、拘束を外すと零菜の首元に顔を埋める。

「んんんんんんんん！」

零菜は顔を背けて凧から逃れようとする。

やれやれと、萌葱は凧に近付いて、その手を引っ張った。

「そこまでよ、凧君。色々興奮してるのは分かるけど、とりあえず落ち着いて」

「ああ、萌葱姉さんか」

「今気付いたの？」

「ああ、ゴメン」

萌葱に謝った凧は零菜を解放する。

「まったく、吸血衝動は分かるけど、もうちょっと我慢ってのをしないとダメでしょ」

萌葱は凧を諭すように言った。

吸血衝動を引き起こす薬を盛った手前あまり強く言うこともできないのだが、凧がここまで過剰反応してしまうとは想定外のことだった。普通の吸血鬼であれば、軽く血の味が恋しくなる程度で済む薬なのだが、中途半端な体質の凧には異なる効き目をもたらしたらしい。

「輸血パックのでよければうちにもあるし。味の保証はないけど……」

萌葱の言葉は途中で途切れた。

凧が今度は萌葱を抱き寄せたからだ。

「え、あれえ、ちよっとお!？」

「姉さんもいい匂いがする」

「にゃあっ!？」

さわ、と背中を摩られた萌葱は真っ赤になり、くすぐったさに身を振る。

「凧君、見境がなくなってるね」

「麻夜、冷静に言ってんじゃない！」

萌葱は凧を引き離すべく両手に力を込める。戦闘能力は低いものの、それでも古城の第一子たる萌葱のスペックは高い。

同年代の男子が身体を強化していたとしても、振り払うことは可能だ。

「うわ」

凧の手を振り払った萌葱は、バランスを崩して机にぶつかると。ノートや鉛筆が、ばらばらと床に落ちたが気にせず数歩後ろに下がって体勢を整えた。

「萌葱姉さん、大丈夫？」

「わたしはね。……ただ、凧君が大丈夫じゃないっぽいけど」

ふらふら身体を揺らす凧の表情は明らかに普通じゃない。どことなく夢見心地のようで、正気を失っていることが分かる。薬物中毒に陥った人間が浮かべるような、虚無的な表情であった。

「どうすんの、これ。僕、回復系の眷獣持ってないし」

「わたしだってないわよ。零菜も……」

「ない」

零菜が凧から距離を取りつつ答える。

「参ったな、想定外ね。これが催眠の類だったら、零菜でなんとかなるのに」

萌葱は冷や汗を流しながら呟く。

もしも凧がおかしくなった原因が魔術に由来するものならば、零菜の眷獣ハスタ・アウルムの黄金ですぐに解決できた。

だが、今回は薬によって前後不覚の状態に陥ったものだ。魔力無効化の槍は何の意味も為さない。

「まあ、凧君は再生能力あるし、ほっといても大丈夫じゃないかな」

無責任なことを麻夜が言うと萌葱も頷く。

「そうね。葉の効果がずっと続くわけじゃないし、落ち着けば元通りになるでしょ」

「よし、じゃあとりあえず凧君にはこの部屋から出ないでいてもらおう」

頷きあい、そしてドアを開けて外に転げ出る。

最後まで見ていなかったが、萌葱たちが部屋の外に出る気配を察したのか凧が動き出したようだった。

外に出ると同時にドアを閉め、体重をかけ、ドアレバーを下から押さえて開かないようにした。ドン、とドアに重い何かがぶつかる音がする。

「ふう……いや、後でどう謝ろうか」

「これ、母さんたちにばれたら怒られるよね、さすがに」

人に悪戯で葉を盛った挙句に暴走させたなどとなれば、大目玉は確実だ。

「やっちゃったあ……はあ、ねえ零菜は？」

萌葱はそこで辺りを見回す。

麻夜はすぐ隣にいるが、もう一人の妹の姿がない。

「あれ、零菜？」

「部屋の中だよッ！ 閉めるの早いよッ！」

ドンドンと零菜が室内からドアを叩いている。

「あ、やっべー！」

萌葱がドアを閉めたとき、逃げ遅れた零菜が室内に取り残されていたのだ。

脱出直後にドアにぶつかったのは風ではなくて零菜だったのだ。

彼女はドアから最も遠くにいて、しかもベッドに座り込んでいた。萌葱と麻夜が息を合わせて脱出を図っても、零菜はそれについていけなかったのだ。

「ドア開かない、ちょ出して！ 今、二人きりはまずい……あ、ちょ、放し、待って！ そんなところ触っちゃ、やあ……！ もっと、優しく……え、あ、あ、何す

——」

それっきり、零菜の声は聞こえなくなった。

物音もしなくなり、シン、と静まり返った。

萌葱と麻夜は目を見合わせる。それから、意を決した萌葱が恐る恐る少しだけドアを開ける。

「んーんーんー！ んんーんーんー！ ぶあ、はあ、落ちついて、あ、ま……ん、ん

んんんんんんんんんん！！　んんんんんんんんんんんんんんんんんんんん！！　ん、  
んう……ふうむ、んう……あふ、あ、うんう……」

「うわお……」

そして、そっと閉じた。

「姉さん、どうだった？」

「あ、いや、そうだね……何かね、凧君が覚醒した初号機みたいになってた」

一体零菜はどうなってしまったのか。萌葱は室内を見ただけで、頬を朱色に染めているのではないか。心なしか瞳も赤い。

「ま、まあ、あれよね。吸血衝動っていうよりも性欲が増強された的な感じなのか。よく分かんないね、凧君の身体は」

「止めなきゃまずくない？」

「だ、大丈夫だとは思うけど」

中三で一線を越えてしまうとかなり問題が大きい。責任を問われるのは菓を盛った萌葱らであると同時に被害者である凧である。

とはいえ、今の室内に踏み込むのは刺激が強い。踏み込んだとして、その後凧を

どう止めるのかという問題もある。

ドアが勢いよく開いたのは、その時だった。

バチバチと放電する零菜が仁王立ちしていた。

「なんで助けてくれなかったの？」

真紅に染まる瞳で零菜は萌葱と麻夜を見る。

一番の元凶である萌葱は震え上がって、

「ひい、いや、これはちょっととしたミスであって……あれ、凧君は？」

「眷獣で縛ったよ」

部屋の中を見ると、凧が雷光の槍に絡みつかれて倒れている。変幻自在の槍の黄金は、形状を変化させて縄のようにすることもできるのだ。その気になれば、このまま感電させることもできる。悪辣なことに、この眷獣は零菜の魔力以外のあらゆる異能の力を打ち消してしまう。つまり、巻きつかれたら、脱出は不可能なのだ。

「そんな使い方できんの？」

「萌葱ちゃんにもしてあげようか。ついでに部屋の中に放置してもいいよ」

「か、勘弁してください。本当に死んでしまいます」

身動きができない状況で部屋の中に入れられたら、それこそ暴走した凧に取って喰われることになる。どの程度凧が相手を選んでいるのか分からないが、それでも萌葱に興味を示していたのだから零菜と同じようになる可能性は高い。

「で、どうするの？」

「どうしようもないから、落ち着くまで待つしかないと思います」

「はあ……」

零菜はため息をつく。

今回の一件は萌葱だけが悪いということではない。凧に葉を盛ることを興味本位で認めてしまった零菜にも落ち度はある。零菜も同罪なのだ。ただ、運悪く凧に捕まったのが零菜だったというだけだ。

「えーと、凧君は吸血衝動が出ない代わりにキス魔になったってことでもいいのかな？」

「吸血もキスも親愛と関わるから……かな？　だとしても、あれはすごかったけど」

萌葱はちらりと零菜を見る。

カッと零菜は顔を茹蛸のように染め上げる。

「どんな感じだったか聞いてもいい？」

「ダメに決まってるでしょ、萌葱ちゃん！」

零菜は叫ぶ。

正直に言えば訳が分からなかったので、よく覚えていないのだ。激しく求められる心地良さとスリルに身を任せそうになった。

もしも、抵抗しなかったら今でも貪られていたかもしれないし、完全に屈服していたかもしれない。

そう思えば、少し惜しいと感じると同時に周囲に当り散らしたくなるほど恥ずかしかった。

結局、風が正気を取り戻し落ち着いたのはそれから一時間ほど経ってからだった。幸いなことに暴走していたときは覚えておらず、零菜たちはほっと胸を撫で下ろしたのだった。



## 続・幕間

南の島国である“暁の帝国”の主要な産業は電子機器の製造である。もともと魔族特区という最先端の技術を集積する特別区を土壌として誕生したが故に、世界でもトップクラスの技術力を持つ“暁の帝国”は、家庭用家電から企業向け大型コンピュータに至るまで幅広く世に送り出している。

そして、もう一つ。

“暁の帝国”の得意分野として名高いのが、医療だ。

先進的な技術は先進的な医療機器をもたらした。建国十年という若い国ではあるが、世界有数の経済大国に躍り出た要因の一つである。十数年前まで、世界的に紛争が相次いだ時期に、魔族特区の技術を活かした医療は大いに役に立った。日本からの独立後も、発展を続けてこれたのは、この国が抱える技術が必要とする国が多かったからでもある。

そんな“暁の帝国”の中でも最大規模を誇るのが、中央行政セントラルゾーン区に建つ国立医療研究所——かつてはMAR社の医療研究所と付属病院であったそこは、十年前に

そのまま「暁の帝国」に払い下げられて今に至る。

月に一度、凧はこの病院に通っている。

小学校四年生の夏にダンピールと化してから、一回たりともサボることなく続けているのは、偏に身体の状態に直結する問題だからである。

「まあ、正直に言ってよくないよね」

白衣を着た医師、暁深森は凧の両手を見て言った。

この病院の院長にして、皇帝の生みの親。そして、凧の祖母に当たる人物だ。とても五十代には見えない若々しい外見で、本当に人間なのかと疑わしくなってくる。

そんな深森は、凧の両手の前腕に走る蜘蛛の巣状の傷跡に触れて眉根を寄せた。

「よくない？」

「うん。よくない」

うっすらと赤い線となって残る傷跡は、ここ最近使用頻度の増えた眷獣の負荷による自傷の痕跡である。接触感應能力者である深森は、そこから凧の身体の状態を細かく読み取って、現状を端的に伝えたのである。

「そもそも軽い不死性があつて痕が残るって時点で、身体の調子がよくないってこ

とだからね。吸血鬼なら、跡形もなく治ってる……：：：。凧君はそうじゃないからね。その服の下も、結構酷いことになっているでしょう」

「ええ、まあそれなりに」

「笑いごとじゃないよ。ほんと、死ぬからね。冗談抜きで。寿命については、医療じゃどうにもならないんだから、凧君自身が自重しないと」

「はあ……まあ、そうだけど」

当事者意識にかけるような物言い。

凧の悪い癖である。

いつの頃からか、凧は自分の命に関してかなり軽く受け止めるようになっていた。一度死に掛けたからか。それとも身体の変化が、彼の意識に影響を与えているのかは不明だが、死ぬという可能性に対して、凧は極めて鈍感だった。

自分の命が危ないという事実に対して目を背けているようにも見えるし、受け入れているようにも見える。

「ばあちゃん、それで、俺の寿命ってどれくらいあるんだ？」

「さあ、それはなんとも。長いかもしれないし、明日かもしれない。凧君は不老不

死じゃないけど、吸血鬼の因子が入ってるし、でも人間の部分もある。いろんな考え方があって、正直分らない。けれど、眷獣の召喚が寿命を削るのは間違いないわ」

それはもちろん実感しているところではある。眷獣の使用時間に比例して、凧の身体はポロポロになっていく。それが外見だけならばまだいいが、問題の根底には寿命すらも消費しているという事実がある。傷ならば時間と共に癒える。しかし、寿命は時間経過で取り戻せるものではない。

「まだまだ調べる必要があるわ。あなたも、下手に時間を縮めるようなことは控えなさい。冗談抜きに、死ぬわよ」

「ん……死にたくはないし、自重するよ」

とはいえ、最近は加減もできるようになってきた。眷獣の使用についても、短時間ならばデメリットを抜きにして扱える。魔力を、自分で捻出できる程度の範囲で召喚すればいいのだ。その加減を覚えたので、小出しにする形で眷獣を使用することはできるだろう。そして、それを脳裏で考えてしまう程度には、凧は自重するつもりがなかった。

生き死にをどうでもいいとは言わない。

死ぬということが理解できないわけでもない。

だが、必要なときが来れば戸惑わずに眷獸を使うだろう。

そういう性格の男だった。

それを、おそらくは目の前の祖母も理解しているのだろう。表情こそ変えなかったが、内心では大いにため息をついているに違いない。

「ま、眷獸を使うような機会なんて、そう来ないでしょうけど、意識して使わないようにしなさい」

最後にそう言って、凧を退室させた。

眷獸は兵器と同等の危険性を持つものだ。遊びで召喚できるものではなく、街中の使用は、一部の例外を除いて犯罪だ。

眷獸を使うということは、基本的にありえない。だから、大人しくしていれば凧の身体にこれ以上の負担がかかることはないはずなのだ。

無論、それは凧が寿命以外で死を迎えることがないという前提に立った話であつて、外的要因による死は考慮されていない。

深森はカルテに目を落とす。

気が重い、息子と娘にだけは伝えておく必要はあるだろう。

それが、医者としては解決させることのできない問題を解決する一助になるかもしれない。最悪の場合は、血の従者に賭けるという方法もなくはないが、それも成功する保証がない。吸血鬼の性質を有する風の体質を考慮すれば、血の従者にしようとした際に何が起きるのか分からないからだ。いずれにしても、現状は以前に比べてはるかに悪い。たとえ眷獣を使用せずに生活したとしても、近くこの先のことを考えなければならぬことになるのは間違いないなかった。



ジワジワと照りつける太陽に肌が焼かれ、蒸し暑さに耐え切れずに零菜は目を醒ました。額に滲む汗は、室内温度が夏日に近いことを如実に表しており、肌に張り

付いたシャツが気持ち悪い。

「うわー、エアコンが死んでる」

つけたままにしていたはずの冷房が、すっかりダウンしていることにはすぐに気付いた。何度、リモコンの運転ボタンを押してもうんともすんとも言わないからだ。

真夏の“暁の帝国”は地獄のような蒸し暑さだ。熱帯に位置する島国ゆえに、夏の気温と湿度は不快感を通り越して生存本能に警鐘を鳴らさせるほどのものなのだ。たとえ、地上五十一階という高みにあっても、文明の利器をなくして快適な生活など送れない。

目覚まし時計を見れば時刻は午前の十時を回ったところだ。夏休みの平日。中学生の零菜は存分に寝過ごせる。母も父も仕事で家を空けているので、誰にも文句は言われない。

しかし、さすがにこの暑さで惰眠を貪ることはできないだろう。

汗が気持ち悪いから、取り急ぎシャワーを浴びることにした。

水風呂を楽しむのもいいかもしれない、などと思いつながら脱衣所に入った。

汗に濡れたシャツを洗濯機に放り込み、新調したばかりの薄桃色の下着も同じく

洗濯機に入れる。素肌を曝して風呂場に入った零菜は、まずは三十七度に設定したぬるま湯のシャワーで汗を流した。

夏の暑さに悲鳴を上げていた肌が、恵みの水分に喜びを露にするかのようだった。

「あ、水、飲んでおけばよかった」

眩きは風呂場に反響する。

大人が二人入れればいいというくらいの小さな風呂場だが、こだわりがあるのか一枚物の大理石で壁でできているので響きやすい。

寝汗が酷かったから、風呂に入る前にグラス一杯の水を飲んでおいたほうがよかっただろうに。

固い石床を踵で感じつつ、腰掛に座る。流れるお湯が、汗と共に身体の熱を奪い去っていく。心地よさにまどろみすら覚える。

夜更かししたせいか、ぬるま湯が再び眠気を誘ってくる。そのせいだろう。意識の間隙を突いて、不意に数日前の出来事が頭を過ぎった。

凧にキスをされた。

そのときの、僅か数分の出来事の記憶が零菜をまどろみから引き上げる。

一気に頬が赤みを帯びて、体温が上昇したような気がした。

湯気で曇る鏡に映る自分の顔。

形のよい唇とその奥に隠れる舌を、風は無理矢理奪われた。

無論、それは風の意思ではなく、葉による葉効が彼の理性を著しく低下させていたから起こった事故ではあるが、力づくで組み伏せられて、激しく求められたことは事実だ。

心など欠片も籠っていない、ただ貪りつくすためだけの一方通行のキスだった。だというのに、不快ではなくて、驚き、混乱こそしたが、冷静になって振り返ると受け入れていた自分がいたわけで、あの瞬間のことは身体中に電流が駆け巡ったかと思えるほどに鮮烈な記憶として脳の深いところに刻み込まれている。

歯をこじ開けて押し込まれたぬるぬるとした舌の感触と口の中に広がる血液とはまた異なる従兄の味に、抵抗するという思考すらも蕩かされ、玩具のようになる自分を危うく受け入れるところであった。

頬だけでなく、瞳の色も変わっている。透き通った空色が一変して、欲を湛えた赤色に。昼と夜が入れ替わるように。聖と邪が入れ替わるように。直前までの、落

ち着いた気持ちは塗り替えられる。吸血鬼は、昂ぶると瞳の色が変わる。心境の變化が目に見えて分かるから、感情のコントロールは重要だというのに、ここ最近はどうにも抑えが利かないことが多い。長年の確執を越えて、仲直りしたからだろうか。それともまさか、従兄に恋でもしたか。慕う気持ちを否定はしないが……。

「う……」

鼻を押さえた零菜の指の間から赤い血が滴り、流水に溶ける。

興奮して鼻血が出てしまったのだ。父親からの傍迷惑な遺伝だ。鼻頭を押さえながら、シャワーを冷水に切り替えた。心臓が止まるかと思えるほどの温度変化に、火照った身体が冷えていく。

しばらく冷水に身体を曝していたが、当初の目的をすっかり果たしていたことに思い至って、零菜はシャワーを止めた。

浴室に冷気が立ち込めて、ひんやりとしている。

五分ほどの時間だったはずだが、もっと長くいたようにも思える。頭の天辺から足の指先まですっかり冷やされた零菜は鼻血が止まっていることを確認してから浴室から出た。

タオルで水気を取って、バスローブを身体に巻きつけ、手早く櫛とドライヤーで髪を乾かしていく。セミロングの髪を乾かすのに、十分ほどの時間を費やしてしまった。いつものことで、髪を守るのも大切なことだと分かっているが、面倒なのは間違いない。

白い半袖のシャツと、綿の短パンというラフな部屋着に着替えた零菜は、蒸し暑いリビングに戻って顔を顰めた。

冷房をつけてからシャワーを浴びるんだった、と後悔してリモコンを手取る。幸いなことに、寝室のエアコンのように壊れてはいなかったため、すぐに室内温度は快適になるだろう。埋め込み式の大型テレビの電源を付け、情報番組を流しながら、零菜は麦茶をグラスに注ぎ、一息に飲み干した。一晩のうちに失った水分が、身体の中に染みこんでくるような気がした。

そして、キッチンからリビングを見回す。

戸籍上は父と母と零菜の三人家族。しかし、この室内にある私物は総て零菜のものばかりだ。ソファの上に転がっている大きな兎のぬいぐるみも、その脇の二段の本棚に収まっている小説やDVDも総て零菜が集めたものだ。その家が持つ色は、

暮らす人によって代わる。零菜の色が大半を占めるこの家のリビングを見れば、如何に両親が家に帰ってきていけないか分かるだろう。——もっとも、古城からすれば、このリビングも広い家の一室程度なのかもしれない。

父は皇帝で、妻が多い。その全員が、高校以前からの知り合いだったというから驚きだ。その当時から、ハーレムを築いていたのだ。そして、妻が多い分だけ子どもも多い。不老不死の吸血鬼なのに高い出生率を誇っていることもまた、内外から注目される場所であり、子どもとしては恥ずかしいことこの上ない。

零菜は上から三番目の第三皇女。

長女の萌葱と違って、気楽なほうではある。

外出のたびに、密かに付けられる数人の護衛が鬱陶しいといえど鬱陶しいし、魔力を無効化する眷獣を有するが故に身の危険もあるという意味では、普通の家庭に生まれたかっただけという思いがなくもない。

壁には転移魔術を阻害する術式が刻み込まれている。これも、過去に零菜の眷獣の篡奪を目的とした誘拐未遂が発生したことから施されたものであった。まるで、監視されているようで、好きではないのだが。

数少ない親の私物といえるものは、窓際に置かれた小さな鉢植えだろう。夏の日差しを弾いて、元気に枝葉を伸ばす低木。

その刺々しい若葉はヒイラギを思わせる。小さな緑白色の花が咲いていて、秋になると赤い実を付けるのだ。アマミヒイラギモチ——一般にはヒメヒイラギと呼ばれる魔除けの木である。花言葉は確か「あなたを守る」だっただろうか。

何でも母の恩人と関わりがあるらしいが、詳しいことは知らない。

ヒメヒイラギ、姫柎、母の旧姓と同じだ。何か繋がりがあるのかもしれない。それには興味があるが、今更聞くのも憚られる。

冷房が効いてきて、室内温度が下がってきた。

だからだと休みを謳歌するには最適な温度。夏休みの宿題はとうに終わったし、残り僅かな夏を楽しむべく、一先ずはソファで惰眠を貪ってやろうと、零菜はソファに身を沈めるのだった。

ゲーム的には序盤から攻略できるびっくりちよろいん零菜ちゃん。ただし、序盤で攻略するとバッドエンド不可避というピーキーヒロイン。他のヒロインを攻略していくには、零菜の高感度を上げすぎないように注意していかないといけない。そんなイメージ。

心中をほのめかすヒロインの娘だから仕方ないね。

お姫様ということもあってバッドエンドも多種多様。仕方ないね（ゲス顔）  
流行に乗ってf a t e風になると零菜のステはこんな感じ。

筋力A 耐久B 敏捷B＋ 精神力B－ 眷獣A＋

魔力は吸血鬼だからEX。眷獣は真祖くらいでEX。肉体面は神獣くらいでEX。皇女たちは固有堆積時間が人間並みなので、発展途上。スパルタ特訓で筋力だけは無駄についた状態。

## 続続・幕間

午後十一時を回り、世の中が眠りへと邁進していく中で、中央行政区の大通りを歩く人影があった。

二人の女だ。

一人は腰まで届く美しい黒髪の少女である。黒を基調としたブレザーの制服に身を包んでおり、一見して中高生だと分かる。彼女の手には、チョコミント味のアイスが握られている。すぐ近くのコンビニで購入したものである。そして、彼女の隣を歩いているのは、スーツ姿の妙齡の女性だ。ダークブラウンに染めた髪を肩口で切り揃えていて、働き盛りのOLといった雰囲気醸し出している。

傍から見れば、年の離れた姉妹かあるいは母娘のようにも見えるが、会話を聞けば二人の間に血縁がないことはすぐに分かるだろう。

「まったく、こんな時間に外を出歩かれるのは護衛の立場としても苦言を呈さずにはいられませんね」

と、スーツ姿の女性——暁の帝国に属する攻魔官たる富士宮茜は奔放な少女

の行動に静かに諫言する。

「ごめんなさい。でも、仕方なかったのよ。アイスが食べたい気分だったの」

「それくらい、言ってくだされればこちらでいくらでも用意できます」

「自分で選ぶことに意味があると思うわ。それに、ここは地元よ。日本ほど、警備が必要な場所でもないわ」

悪びれもせず、少女は茜にそう言った。

あと一時間もすれば日付が変わる。深夜と言っても過言ではない時間帯に高校生が出歩くこと自体が問題なのだが、彼女の場合はさらに護衛を必要とする立場にあるという点で勝手な外出には問題があるのだ。

こうして、警備の目を掻い潜って外に出ることも屢々で、外見や言動とは裏腹に中々のじゃじゃ馬であった。

「あなたに何かあつては、わたしは御父君や御母君に顔向けできません。きちんと、第二皇女としての自覚を持った行動をしてください」

「分かってるわよ。だから、周りには上手く合わせてるじゃない」

「人が見てないところでも、同じように振る舞ってくだされば尚の事いいのですけ

どね」

普段の彼女の行動は、多くの人から慕われるに足る立派なものだ。それは、第四真祖の娘たるに相応しい振る舞いであり、学校でも彼女の人気はカリスマ的な状態にある。

だからといってばれなければ問題ないというわけでもないだろう。実際に迷惑をかけている人はいるのだから。

「今、車を呼びます。ですので、ここでお待ちください。このまま、ご自宅までお送りしますので」

「ここからなら、歩いて帰れるのだけど」

「ダメです。何があるか、分からないのですから——ああ、ほら、こんなことしているから」

ガラスが割れる音がする。百メートルほど先の宝石店の扉が壊されて、三人の男が飛び出てきたのである。

「これは、わたしの所為じゃないわ」

「ですが、君子危うきに近付かずと申します。進んで危険に身を曝す必要はないか

と」

「うーん、それはそうなのだけど」

理屈では分かるものの、目の前で強盗があつて見逃すというのは、どうにも落ちて着かない。

正義感などというものではない。だが、気に食わないのは事実であつて、そう思えるのはあの強盗三人組をどうにかできる力を彼女が持っているからでもあつた。

故に――、

「あら、大変。あの人たち、こっちに來るわ」

などと嘯きながら――事実、向こうからこちらに走ってきている強盗を視界に収めて、薄らと笑みすら浮かべて、庇おうとして前に出る茜をあざ笑うかのよう  
に魔力を生成する。

「古椿」

彼女の足元に、小さな椿が現れた。魔力で生成された真っ赤な一輪の花が、はかなく、それでいて美しく咲いている。

椿からは甘い香りが放たれていて、その香りは指向性を与えられて強盗に絡みつ

く。三人組は、忽ちうっとり表情をゆるめてその場に座り込んでしまった。

全身の筋肉が脱力状態にあり、その一方で眼球は激しく動いている——夢を見ていたのと同じ状態である。

「椿の香りは、わたしも好きよ。幸せな夢を見てしまおうくらいに……」

「……まったく」

得意げにする護衛対象に茜はため息で答える。茜でも、この三人を捕らえることは容易だった。見ればただの人間の様子だ。魔術に対する耐性も皆無だろう。眷獸を持ち出さずとも、攻魔官である茜の能力でも解決できた問題であり、皇女が積極的に動く必要はない。けれど、相手を眠らせるという考え得る限り最良の解決方法を選んだのもまた事実なので、これについては苦言を呈するというわけにもいかない。

「連行させますので、しばらくお待ちください……」

茜は特区警備隊アイランド・ガードに通報した。

そうしている間に、護衛対象はアイスを食べきって手持ち無沙汰になっていた。きよろきよろと辺りを見回していて、目を離すとまたどこかに消えてしまっそうで

ある。

「ねえ、茜さん」

「なんででしょうか？」

唐突に、彼女が話しかけてきた。

「わたし、今日はお父様のところには帰らないわ」

「はあ!?! あの、ではどこに？」

「この辺りってちょうど風君の家の近くじゃない。挨拶がてら、そこに泊まるわ」  
昏月風——彼女からすれば従弟に当たる少年だ。一つ年下ながら、家庭の事情で一人暮らしを余儀なくされているという。詳しい事情は、茜にもよく分かっていない。両親が外国で仕事があるのは理解できるものの、何故、彼が付いていかなのかなどということとは。深く考えたこともないけれど、よくよく考えれば奇妙ではあって、偏差値の高い私立校に通っているわけでもないのだから、留学として親についていってもいいだろうに。

皇帝判断があったということだけは、伝え聞いているところだが、それがどのようなものだったのかまでは末端には伝わらない。所詮は家庭内の問題で、茜の仕事

とは無関係だ。

「泊まるといいましても、連絡は？」

「今、入れたわ」

「今って」

深夜十一時過ぎに泊めてくれと連絡するというのは、さすがにどうなのか。そうこうしている間に彼女は、あっさりと約束を取り付けて、凧の家に向かう方向でその日の行動を決めてしまった。

第四真祖、暁古城を皇帝に戴くライヒ・デア・モルゲンロートの帝国は八月の最終週を迎え、夏の観光地としての役割を終えようとしていた。

熱帯に位置する南の島である暁の帝国は、夏と冬が観光客が多数押し寄せる観光シーズンに当たっている。

人工島に端を発する新興国のため、歴史遺産や自然由来の観光地は皆無と言って

よく、売りとしているのはその技術力を駆使して建造されたレジャー施設が主となっている。

中でも、昨年オープンしたばかりのレジャー施設、ブルーマウンテンの人気振りは凄まじく二年目でもその売り上げは鰻上りだという。地元住民は観光客が去った九月から楽しむようにしているため、結果的に年中無休で開店することになる。

薄明かりが東の空に昇り始めた早朝に、萌葱はベッドに寝転がって携帯端末を弄っていた。

寝付けなかったわけではない。

ただ、早く目が覚めてしまったただけだ。夏休みがもうすぐに終わってしまうということへの、せつなさを感じながら、ブルーマウンテンの人気を示すネットニュースを眺めていたときだ。

携帯端末が振動した。

バイブレーション機能が、メールの受信を報せてきたのである。

こんな時間になんだろうか。広告でも、こんな早朝に送ってくるような真似はしないだろうに。などと、思いながら画面を操作して受信フォルダを見る。

送信者　くれは

件名　朝のヒトトキ♡

それは異母妹からのメールだった。こんな時間に何をしているんだと思いつながらメールを開くと、本文は何もなく、画像データが添付されているだけだった。

「何なのよ」

朝っぱらから何がしたいのか。時折不可思議な行動を取る妹に対して首を傾げつつ、萌葱は画像データを開いた。

表示されたのは、一枚の自撮り写真だった。

腰まで届くみどりの黒髪が、白磁の肌に艶めかしく張り付いている。

上下共に黒の下着で、身体を隠すものはほかに何もない。とどのつまりは、自分の下着姿を写真に収めているというわけであって、痴女と呼ぶに相応しい行動である。が、ここで萌葱は痴女だと叫ばなかったのは、彼女の隣で眠る風が目に入ったからであり、どうにもこの痴女と風が寝所を同じくしているらしいというのが、萌葱のツツコミを忘れさせた。

「ど、どど、どおいうことじゃ？」

目を白黒させた萌葱は、即座に電話帳画面を呼び出して異母妹の電話番号を選択する。

ワンコールで、異母妹は電話に出た。

『どうしたの、萌葱』

「どうしたのじゃないわよ。何よ、あのメールは!？」

『あら、そのまんま朝のヒトトキを楽しんでいただけじゃない』

「だから、なんでそこに凧君がいるのかって話よ！　そもそも、あんた日本にいるんじゃないの!？」

萌葱は声を潜めながらも語気を荒げて疑問を叩き付けた。

紅葉は母親とともに日本で生活していたはずだ。

『そんなの、戻ってきたからに決まっているでしょう。お盆は過ぎてしまったけれど、こっちだって夏休み中なのよ。お父様にご挨拶するくらい、普通ではなくて？』

「ん、まあ、それはそうかもしれないけど……いや、じゃあなんで凧君の家にあったがいるのよ。こっちに来ればいいでしょ！」

『いやよ』

「なんで」

『だって、そんなことしたら朝チュンドッキリができないじゃない』

「いやいやしなくていいから。あんたマジで変態のレッテル貼られるわよ。凧君にも！」

『ふふふ、それも悪くないわね。むしろ、いい』

「ちよっと、あんた」

『日頃抑圧されている分、親族の前では素の自分を曝したくなるものよ』

「限度があるでしょ、限度が」

電話口で妖しく笑う妹に、萌葱は頭を抱えたくなる。

もとより、変わり者ではあるのだ、紅葉は。

『それにしても、近くで凧を見てると……こう、血が吸いたくなるというか……なるほど、零菜が噛んじゃったのも分かるわ』

「おい、今すぐそのベッドから、いや部屋から出て行きなさい！」

『そんな慌てないでよ、萌葱。大丈夫。五時間は我慢できてるんだから、これから

も我慢できるわ』

「紅葉、あんたまさか一晩中そこにいるの!? 今だけじゃなくて!」

『ふふふ』

「ふふふじゃないわよ、何考えてんのよ!」

凧が吸血衝動を引き起こすのは、萌葱も理解できる。彼の血に流れる力はあまりにも高純度なために、吸血鬼のような他者から霊力や魔力を吸い上げる魔族や魔獣にとつて力の源のように見えてしまうのだ。それほどまでに、彼は霊媒として図抜けた才能を有している。本人からすれば、堪ったものではないだろう。そのため、自衛手段として攻魔官の訓練を受けなければならなくなったほどだから。

『萌葱』

「何よ」

『……汗って血からできてるのよね』

「本当に止めておきなさいよ、それは」

『何のことかしら』

「いや、何って」

『別に風を舐め回そうだななんて、思ったとしてもしないわよ。わたし、妄想と現実の区別はつけるタイプなもの』

「つけてもらわないと困るわよ。妹が変態性癖で逮捕されるなんてニュースは見たくないわ」

『わたしだって、逮捕されたくないわよ。そういうのは、頭の中で十分』

「頭の中でも十分に変態だけどね！」

奔放な発言に、萌葱は呆れ返る。

昔からこうではあった。何を考えているのか読み取れない変わり者というのが萌葱の紅葉に対する率直な考えである。

風に対して、彼女がどのような感情を抱いているのかすら判然としない。好意的であるというのは確かだが、果たしてそれ以上なのかどうか。姉として弟を見守るのか、それとも異性として意識しているのか、はたまたあくまでも吸血対象でしかないのか。のらりくらりとした態度は、そうした本質的な部分をすっかり覆い隠してしまっている。

『人を変態変態言うのはよくないわ。例え事実だとしても、ね』

「事実って認めてんじゃん」

『まあ、世の中は広いから。色々な変態がいるものよ。ほら、例えば弟分がお気に入り登録しているちょこっとエッチな動画を、眷属まで使ってでいすびでおはずびーんでりーってどにしちゃうくらい過保護な姉も世の中にはいるって聞いたわ』

「へえ……そんなのがいるの。大変なのね、その子も」

『ふふふ……』

「ふふふ……」

冷ややかに笑う。

相手の声が冷えているのか、こちらの声が冷えているのか。

「とりあえず、そっち行くわ」

『あら、急にどうしたの？』

「そんな気になったのよ。わたしが着くまでに、ちゃんと服着てベッドから出ていなさい」

それだけ言って、萌葱は通話を切った。

すぐに、パジャマから外出用の服に着替え、軽く化粧をして外に出る。

朝日はいつの間にか昇りきっていた。

湿った夏の風が、ビルの間を縫って吹き抜けていく。



朝食はコーンスープとトーストだけという簡単なもので済ませる。

これはいつも通りの朝食である。

違いがあるとすれば、トーストの上にチーズだけでなく丸いハムが乗っていることと、麦茶が無脂肪牛乳になっていること。そして、いつも見ているテレビ番組の司会者が夏休みということと別のアナウンサーに代わっていることと、日本で暮らしている従姉が目の前に座って、一緒に朝食を摂っているということであった。真っ白なブラウスと黒いチノパンだけという飾り気のない格好で、しっとりとした大人の雰囲気醸し出している。風の周りにはいないタイプの人種だ。雰囲気と

いう意味で。

「どうかした？」

「いや、何も」

コーンスープをすすって、凧は言う。

「朝、用意してもらって申し訳ないなど」

「別にいいじゃない。泊めてもらったのは、こっちなのだから」

ゆっくりと、静かな口調の紅葉は、嫣然とした表情で凧を見つめている。その視線からのがれるように、凧はテレビに視線を移した。

「護衛の人は？」

「いるわよ。隣の部屋に。それ、昨日も聞かれたわ」

「そうだったっけ」

「そうよ」

「そうだったかもしれない、うん」

会話が中々続かない。滅多に逢わない相手だから、仕方がないと言えば仕方がない。親戚相手ではあっても、口下手な凧では、気の利いた言葉は出てこない。単純

に、そういった経験が不足しているというのは否めない。

紅葉の護衛を務める攻魔官は、かつて雪菜が暮らしていた部屋で待機しているのだという。この家に皇女の誰かが来るときの、待機室として使われている部屋であり、凧のための部屋でもある。

「大丈夫よ。別に会話まで聞かれているわけじゃないから。魔力を使えばすぐに知れるでしょうけど」

「うん、まあ護衛だしそれはそうだろうけど」

小さくトーストを齧る紅葉は、その行為だけでも絵になる。

窓から差し込む朝日に照らされた水彩画めいた色調の中に浮かぶ、モノクロの少女。

「そういや、一人、いや攻魔官の人と二人でここに来たんだっけ？」

「ここ？」

「暁の帝国にさ」

「違うわよ。母さんと唯雫ゆいしなも一緒。ただ、わたしは空港から単独行動しただけ」

「ああ、なるほどね」

何となく飲み込めてきた。突然、夜中に泊めてほしいと連絡が入ったときから、そんなことだろうとは思っていたのだ。

「空港から単独行動ってのが、ちょっと危ないだろうとは思うけど」

「あら、茜さんみたいなことを言うのね」

「茜さん？」

「わたしの護衛をしてくれている人」

「それは、茜さんが正しいでしょ」

「かもしれないわね」

深夜に皇女が外をほつつき歩くことが、そもそもおかしいのである。午後十一時だ。普通の高校生でも補導される時間帯である。

そんなことを話していると、不意に紅葉の視線が玄関のほうに移動する。直後、ガチャガチャと音がして、鍵が開いた。

「紅葉ア！」

乗りこんできたのは、萌葱だった。ずいぶんと慌てているようだ。

「萌葱姉さん、おはよう。で、朝っぱらから何しに来たんだ？」

「え、あ、風君、おはよう。うん、大丈夫だった？ 何もされてない？」

「いきなりどうしたんだ？」

風は萌葱の焦りように首を傾げる。そして、すぐに紅葉が何かしたのだらうと察した。紅葉が、口元を隠して笑いかみ殺しているからである。

なるほど、紅葉がこの家に泊まった理由が理解できた。

どうやら、萌葱に悪戯を仕掛けるためだけに、ここに泊まったのだ。どのような悪戯をしたのかは、まったく想像がつかないけれど。

「あら、萌葱。朝から人の家に突撃なんて、情熱的にもほどがあるわ」

「紅葉、あんたねえ、ホントになんなの!？」

「だって、面白いんだもの。ところで、朝食は？」

「はあ？ そんなの……」

と、言ったそばから萌葱の腹部が大きく鳴った。

言葉を失い、見る見る真っ赤になっていく萌葱の顔を見て、ついに紅葉は破顔一笑を余儀なくされた。

「ぐぎ、んぎいいいいい！」

「くひ、あ、ははは、何それ、わたしを、笑い殺すつもり？　これ、ヤバイ、はは、くく……」

「お、おお表に出なさい！」

「いいけど……萌葱じゃわたしに勝てないでしょ。タイマンじゃ。道具があれば、別かもしれないけれど」

萌葱は悔しそうに歯を食い縛る。

散々虚仮にされた復讐をしてやろうと決闘を挑んでも、戦闘能力が低い萌葱ではどうしても紅葉には勝てないのだ。紅葉の眷獣は直接戦闘向き。それも、オーソドックスな生物系である。対して、萌葱の眷獣は後方支援に秀でたタイプである。局地戦で力を発揮する紅葉のそれと、戦略面で多大な影響力を有する萌葱では、土俵そのものが異なる。

「何か、何かない？　この女をぎゃふんと言わせる何か!？」

「ゲームでも、すればいいんじゃない？」

トランプからテレビゲームまで、一通り取り揃えてある。普段使うことはないの  
で、使ってもらえるのならば玩具も本望だろう。

唐突な殴りこみにも凧は平然と対応した。よくあることだと、すでに割り切っていた。萌葱がやって来たことで、紅葉が醸し出していた奇妙な異世界感が消えて、急速に現実味を帯びてくる。

相変わらず仲がいい。同学年ゆえに、萌葱にとっても紅葉にとっても、姉妹でありながらも対等な友人といった感覚が強い。姉と妹では、両者の間に上下関係が自然と生まれるが、学年が同じであれば対等だ。零菜と麻夜がそうであるように、萌葱と紅葉もまた同等の相手として、互いを認識している。

凧は立ち上がってキッチンに向かった。

とりあえずは、萌葱の分の朝食を用意すればいいかと食パンに手を伸ばしたのであった。

---

新キャラ

暁紅葉

第二皇女で萌葱と同学年

暁唯乘

第六皇女で中一

## 第二部 一話

ファースト・サウス、セントラル・ゾーン  
第一南地区は、中央行政区に程近いという立地からベッドタウンとして整備された区域である。交通網が整っており、大通りを真っ直ぐ進めば中央行政区に入ることができる。

アイランドガード  
特区警備隊所管の国有大規模実験場は、そんな第一南地区の中でも最北端——  
——ほぼ、中央行政区と重なる位置に建造された巨大施設であり、魔導実験や実戦訓練などが日夜行われている。

帝国第三皇女の暁零菜は、この日休日を利用して棒術の鍛錬をするためにこの施設を訪れていた。

広い「道場」には零菜と教官の二人だけ。基本的に吸血鬼同士の戦いを想定すると、周囲に人はいないほうがいい。先ほどまでは麻夜と紗葵もいたのだが、二人は休憩に入っていて道場の外にいる。

黒い訓練用の棒は長さがおよそ二メートルにもなる零菜の身長よりも長いそれを、器用に振り回して教官に刺突を放つ。

零菜の武術は同年代でも抜きん出て優れている。最も得意とするのは棒術だが、剣術も弓術も高い次元でこなすことができるという意味では天才があるのだろう。

「ッ……！」

しかし、零菜は唇を噛んでバックステップをする。彼女の喉元を狙う鋭い警棒が虚空を斬る。

驚くことではないが、かといって素直に受け入れることもできない。相手の胴を狙った三連撃が、いとも容易く警棒で受け流されたのは、零菜の自信をいたく傷付けるものだった。

「ハハハ、まだまだ甘いわ、お姫様」

「その呼び方は止めてください、ダーナさん」

「別に間違っていないでしょう」

零菜の師であるダーナ・エーカトルは、年齢不詳の女吸血鬼である。

緑を帯びた金色の髪を腰の辺りまで伸ばしており、見た目は二十代の前半くらいでありながらも実際には数百年を生きる歴史ある吸血鬼だ。

T種に属しており、零菜と同じように意志のある武器を従えていることから零菜

インテリジェンス・ウエポン

の護衛兼教導を委託されているという。付き合いはかれこれ五年にはなるだろう。「さて、廊下の二人が戻ってくるまで、あと十分はあるのだけど、続けられる？」  
「もちろんです」

零菜は頷いて、棒を構える。

彼女が最も得意とする眷獣は槍ヘスタ・アウルムの黄金だ。

眷獣の中でも珍しい魔力を無効化する対魔の槍であり、意志を持つ武器でもあった。対人戦闘では無類の強さを発揮する槍の黄金も、当たらなければ意味を成さない。変幻自在の槍ではあるが、根本が「槍」である以上は槍の使い方を身体に叩き込まなければ使いこなせはしない。

「前に雪菜さんが言ってたわ」

零菜の猛攻を易々と凌ぐダーナは、軽口でもするように言った。

「昔戦ったある女吸血鬼は、自分の眷獣の動きについていけなくて雪菜さんに負けたって」

零菜の突きを、ダーナは黒い警棒で払い除ける。

受け止めるようなことはせず、動きを見切った上で最低限の対処をするのである。

零菜の顔に焦りが浮かぶ。

棒術を本格的には始めて五年。残念ながら、天賦の才があったとしても、数百年を生き、あらゆる戦乱を体験してきた歴戦の猛者にはまだ届かない。

その実力差を越えるため、零菜は一瞬先の未来を読み解く。

人間の巫女が有する霊視能力。未来視の特性は、どういうわけか吸血鬼の零菜にも引き継がれている。性能は雪菜には及ばないが、近接戦では僅かな先読みが活路を開くこともある。

が、零菜は霊視をした瞬間に目を見開く。

「あ！」

パン、と音が鳴って零菜の手から棒が叩き落される。次いで、逃げる間もなくのど元に突きつけられる警棒が勝敗を如実に物語っている。

「ま、参りました……」

「うん」

満足げにダーナは笑う。

零菜は割りとは必死になって戦ったつもりだが、彼女にとってはまだまだ本気を出

すまでもなかったのだろうか。それは、やはり悔しいことこの上ない。

吸血鬼は人間と違って老いることがない。どれだけ自分を成長させても、目標の背中も同じように遠ざかる。古い者ほど強いというのは、単純に魔術的な性質というだけではなく、のびしろが無限にあるということでもあった。

零菜がダーナにこの分野で勝利するのは、まだまだ先の話になるのだろう。

「ま、あなたは雪菜さんの娘だし、腐らず鍛錬すればすぐにわたしくらい超えるわよ」

「う……」

雪菜の名前を出されて、零菜は表情を曇らせた。

鍛錬を積んでいると分かる母親の理不尽な強さ。才能の差とも言うべき壁を感じている。

「マ……わたしの母は、やっぱり強いですか。その、ダーナさんから見ても」

「ん、それはもう」

と、ダーナは呆れすら含んで言う。

「あの人は十四、五歳で第四真祖とカタストロフを戦い抜いた人だしね。人間って

のは、時に魔族の数百年を凝縮したような天才を生み出すことがあるのよ。高位の攻魔師なんて、そういう才能のある人間だからね。雪菜さんだけじゃなくて、あなたたちの母親たちは大体そんな理不尽の集まりなのよ」

零菜の母親である雪菜は日本にかつて存在した獅子王機関という対魔組織の出身者だと聞いている。同じように紗葵の母親や唯零の母親も獅子王機関の人間だったらしいが、大体十五歳前後で魔族と戦い鎮圧できるだけの戦闘能力を身につけるのだという。身体能力で圧倒的に不利な人間の少女が、屈強な獣人や数百年を生きる吸血鬼に匹敵する戦闘をこなせるようになるには、相当の魔術的修練と洗練された武具が必要だ。ある意味では兵器として育てられた者でなければ到達しない領域であり、その中でも才能に優れた一部の者だけが辿り着ける高みである。

母親の血を継いでいるはずの自分は、母親が活躍を始めたという中学三年生になっただけながら、まだまだ打ち合いで簡単に凌がれる程度の技術しか身に付けられていない。練習しているつもりだが、練習が足りないのか。あるいは、単に才能がないだけなのか。零菜にとっては、母の名前は重過ぎる。

「ま、焦る必要はないわよ。吸血鬼は時間が有り余っているし、人間みたいに生き

急いでもいいことなんてありゃしないんだからね」

「……はい」

「ヒューマナイズ世代の零菜には、ちょっと実感しづらいかもね」

「そんなことは、ないですけど」

零菜の言葉に強さはない。

ヒューマナイズ世代と言われて少しばかり不愉快な気持ちになる。

ヒューマナイズ世代は、主に高齢の吸血鬼が若年の吸血鬼を指して使う言葉であり、文化的に人間化していることを揶揄する意味合いがある。吸血鬼が人間の生活に溶け込むのは、数百年前から当たり前のように行われてきたことではあるが、四十年近く前に聖域条約が成立して以降の共存の道を模索する中で、趣味嗜好までも人間に合わせるようになっていったのが、旧い吸血鬼には不心得者と映ったらしい。吸血鬼文化の再興を叫び、テロを行う吸血鬼優位主義者も現れるくらいに、文化的な衝突は根深く発生している。

第四真祖は元人間であり、妃たちも人間から擬似吸血鬼になった者ばかりだといふことで、世界で最も若い夜の帝国<sup>ドミニオン</sup>は、世界で最もヒューマナイズされた吸血鬼国

家だと呼ぶ者もいるのである。

ヒューマナイズ世代という言葉は昨今では流行語のように広く知られたものであるため、ダーナが差別的な意味合いで用いたわけではないが、言われた側は粹に嵌められたような気がして気分がよくない。

人間でも「最近の若いやつは」とか「ゆとり世代」などと言われては、十把一絡げに一緒にするなと言いたくなるだろう。

「ん、帰ってきたね」

扉が開いて、麻夜と紗葵が入ってくる。休憩を終えて、鍛錬の続きをするために戻ってきたのである。

厳しい鍛錬も、残すところ一時間となった。

ここが正念場とばかりに、零菜たちは気合を入れなおす。

第四真祖である暁古城や、その血の伴侶のような例外を除けば、ダーナは帝国でも最強クラスの吸血鬼である。才能があるとはいえ、まだ生まれて十五年程度の若輩者に遅れは取らない。単純な力のぶつかり合いでは、積み上げた年月がものを言う。吸血鬼として非常に若く脆弱な零菜たちが学ぶべきは、そういった年月の重さ

に対抗するための技術と知恵であると言つてよい。力技はそのうち自然とできるようになる。よつて、今は基礎の基礎の段階だ。

午前中に鍛錬を終えた零菜たちは、揃つて実験場を出る。思い切つて眷獸を使えるのは、こうした広い公共施設の中くらいのもので、ストレスの解消にも役立つているのだが、それでも棒術やら魔力制御やらの鍛錬は身体に疲労を蓄積する。不老不死で負の魔力を無限に持つ吸血鬼の肉体であつたとしても、体力や精神力まで無尽蔵というわけではないのだ。

「あまり根を詰めすぎても、身体に毒だからねー」

と、ダーナは笑つて、三人のジューズを奢つてくれる。

遠巻きに三人を見ているのは、それぞれの護衛役を務める攻魔官だ。彼らもまたダーナの教え子たちである。

ダーナは、“暁の帝国”の中でも最年長の吸血鬼である。気の遠くなるような長い時間を世界の放浪に当て、二十年前に雪菜と知り合つたことをきっかけにして絃神島に移り住んだ。絃神島が日本から切り離されて独立した後も、根無し草は今更

困ると、古城たちに協力して荒廃した絃神島の再建と国家の樹立に貢献した重鎮である。

「そういうえば、旦那さんってどんな人ですか？」

と、零菜は聞いた。

最近になって、ダーナが結婚したのだということを出したのである。

「ん、どんなんて言っても、企業づとめのサラリーマンだよ。わたしから見れば若い若い。羨ましい若さだよ。まあ、人間なんて例外なく若いんだけどね、わたしからすれば」

「え、人間なんですか？」

そう尋ねたのは、紗葵だ。

驚いたように顔を上げる。

歴史を重ねた吸血鬼の伴侶が人間だと聞いて意外そうな顔をする。

「てっきり、吸血鬼の誰かだとばかり思っていましたけど」

「昔ほど種の壁ないしね。見てくれは同じだし」

「見てくれて……」

零菜はなんと云ったらいいか言葉を詰まらせる。

人間と魔族はその多くが外見を同じくし、子を為すこともできる。生物学的な面からしても謎の多い現象ではあるが、これが両者の勢力を長らく戦争状態にしてきた要因でもあった。なまじ近いために、価値観の衝突が起こる。相手が言葉を解さない他の生物であれば、そのような葛藤は生まれなかっただろう。

しかし、今は新たな時代だ。世界規模で魔族と人間の融和は進んでいて、結婚することにも特に規制があるわけではない。

「ダーナ師匠は最近ご結婚されましたけど、その前はとうだったんですか？」  
「踏み込むね、麻夜殿下」

そう言いながらも、ダーナは不快感を滲ませることもなく、むしろ得意げな表情で続ける。

「前はざっと五十年ばかり前に死別かな。わたしは、血の従者を作ったことがなくてね。吸血鬼の旦那は、百年ばかり連れ添ってから分かれたし、人間のほうはいつも死に別れだよ。かれこれ、七回は見送ったかな」

「な、七回？」

さすがに麻夜も目を白黒させる。

一人の相手と最後まで連れ添うことが美德である、とはもうこの時代には通じないかもしれないが、それでも相手をとつかえひつかえするのは非難の対象にはなる。しかし、それも場合によりけりである。

長い時を生きる吸血鬼の中でも経済力のある者がハーレムを築き上げるのは珍しいことではない。ほかでもない暁古城が、そうして美女を囲っており、零菜も紗葵も麻夜もそうした環境の中で育ってきた。

それでも、やはり七回旦那を見送ってきたと聞けば、すぐには納得できない思いを抱く。

「おかしい？ 仮に千年生きたとして、相手を血の従者にしなければ当然そうなるわ。わたしは世界の終わりまで連れ添いますって覚悟はなかったし、そう思うとうちの皇帝はすごいことしてるわよ」

「それは、まあ、そうです。確かに」

「うちのことを言われると、何も言えないよね」

麻夜と紗葵が苦笑する。

同時に複数の愛を楽しむ古城と、一つの愛を繰り返すダーナ。恋愛観は正反対と言っても過言ではない。

「お姫様たちも、そのうち考えなきやいけないときがくるよ。特に血の従者云々は、いろいろと覚悟しないとね」

「覚悟ですか？」

零菜が聞いた。

血の従者について、零菜は過去に騒動を引き起こしたことがある。

「相手の人生を背負えるのかどうか。何せ自分が死ぬまでずっと縛り続けてるわけだからね。いろんな問題も発生するでしょう。百年もすれば嫌だから契約を切るってわけにもいかなくなるし、それを、正面から受け止めて乗り越えられないと、血の従者は足枷にしかないよ」

それは長く生きた人生の先達からの言葉だからだろうか。内容は非常に重く、簡単に忘れられるものではなかった。特に、どこか後悔を滲ませるダーナの口調に零菜は引っかけかりを覚えたのだった。

中央行政区の北部は今、まさに再開発の真っ最中である。工事の指揮を執るのは、世界最高峰の錬金術師であるニーナ・アデラートで、彼女は暁の帝国の拡張に大きな貢献を果たした人物である。

人工の島ゆえの資材の乏しさを、海水中のミネラル分を金属に変換することで補ったことで解決した。

最新の夜の帝国が、簡単に独立できたのも人工島であるための自給能力の低さがあったからだ。いざとなれば日干しにできるといふ点が、周辺諸国から侮られる要因であり、独立も容易かった。錬金術の大規模使用による資源調達という発想は、古代からあったものの暁の帝国が実現するまでは夢物語でしかなかった。そして、現代でも、この規模で錬金術を使えるのはニーナ以外には存在しない。各国が挙って錬金術師の育成に取り組んでいるものの、なかなか次のステップに進めないのが

現状であつた。

そこかしこで大規模な工事が行われている街並を眺めながら零菜と紗葵は歩いてゐた。目的地は、すぐ目の前に建つショッピングモールである。

生鮮食品売場から映画館、書店、レストランとおよそ生活するのに必要なものはこだけで揃えられる。絃神島だった頃から存在する古参のショッピングモールであり、休日ということもあつて家族連れも多い。

零菜と紗葵がその護衛と共に訪れたのは、ショッピングモールの三階で営業する映画館だった。

零菜も紗葵も皇族ではあるが、その生活は一般市民と大きく乖離することはない。護衛を連れているのは、彼女たちが狙われる可能性を有しているからであり、戦闘訓練を行うのも自衛手段を持つためである。それ以外については、通う学校から食事に至るまで飛びぬけて高価なものを利用してゐるといふことはなく、映画を見るにも一般市民と共に列に並んでなだれ込むしかない。特別扱いを母親たちは認めておらず、それもあつて零菜も紗葵も皇族として恭しく接されることには不慣れだった。

「なんでこんな人いんの……」

予想以上の人だかりに紗葵は早くも不平をもらす。

吸血鬼も混じっているだろうから、言い切ることはできないが見たところ若い女性が多い。いや、吸血鬼の精神年齢は見た目に左右されるというから、見た目の若さは精神的な若さにも繋がる。実年齢はともかくとして、若い女性が多いと言いついてもかまわないだろう。

「海外では、かなり人気だって話だし、しかも初日だから」

しかたない、と零菜は答える。

製作は中央アメリカの夜の帝国・混沌海域の映画会社である。

大掛かりなセットとCG、そして世界的名俳優の起用と斬新なストーリーで人気作を連発する有名な映画監督。およそ失敗しないとさえ言える布陣で撮影に臨み、見事に大ヒットとなったのが、この映画だ。

現在、第三部まで公開されている。

しかし、諸般の事情により暁の帝国では公開が認められていなかった。

タイトルは「第四真祖と真夏の訪問者」。

「第四真祖シリーズ」の第一作目であり、本人が断固拒否したことで帝国内での公開がお蔵入りとなった作品である。

「でも、古城君が主人公の映画とか……ふ、くく……」

紗葵は堪えきれずに失笑を漏らした。

民主主義国家の暁の帝国としては、過度な言論統制は不可能である。まして、公序良俗に反するわけでもなく、政治的意図も見出せない映画を皇帝の個人的感情でいつまでも公開不可とするわけにもいかなかった。映画会社や世論の影響を受けて、苦渋の決断をした古城が、テレビでCMを見たときの表情は一緒にいた零菜と雪菜の間でのみ共有されている。

古城としても、赤の他人が演じているとはいえ自分をモデルにしたキャラクターが冒険活劇をするなど夢にも思わなかっただろう。

「なぜかヒロインがジャーダさんで、アルデアル公がよき友人でありライバルなんだったね。日本で見た友達が言ってたけど、CGがすごくて本物みたいだったって」

「一作目は獅子の黄金レグルス・アウルムしか出ないらしいし、わたしは、蟹ちゃんが好きなんだけどなあ」

紗葵は声を潜めて呟く。

古城の眷獣は非常に有名だ。一体一体が破滅的な力を有するものの、十二体と真祖の中では控えめな数ということもあり、その名前から効果まで広く知られてしまっている。外見も、映像媒体の普及した現代では隠すことはできず、ネット上に出没している。そのため、眷獣の非公式ファンクラブまで誕生しているカオスな状況だ。

ネット上では、よく古城の眷獣の中でどれが最強かという不毛な議論もされている。

この列の中にも、俳優よりも第四真祖の活躍にこそ興味があるという者が紛れいているに違いない。

「チケットくらい、仰っていただければわたしが事前に購入しておきましたのにと、零菜の護衛に就く高城有紀が言った。

二十代半ばの女性で、十五歳までは日本の獅子王機関に属していたこともあったという。今は、その身に積んだ対魔の秘儀を活用して暁の帝国で働いている。

「思いつきで来ちゃったから」

と紗葵が言った。

事前に予定を組んでいれば、チケットを取り寄せるなりしていただろう。しかし、今回は本当に思い付きでの行動である。通販もあるこのご時勢にまさか、チケットを買うところから並ぶ羽目になるとは思わなかった。それもこれも、窓口購入特典などというものをつけたことに問題がある。想像以上の客足に窓口が対応し切れないのだ。

「それに、有紀さんはお手伝いさんってわけじゃないんですから」

零菜も有紀にチケットの購入を頼むという手は使わないと明言する。

皇女の庶民的な反応には慣れたものだが、果たして人込みに長時間佇むのが妥当な対応と言えるのだろうか。第二真祖のように、時折護衛もつれず、お忍びで遊びにくる国家元首がいる世の中なので何とも言い難いところではあるが、彼女のような最強の吸血鬼というわけではなく、まだまだ能力的には未熟な零菜たちを危険に晒すことになりかねないというのは懸念事項ではあった。

大蜘蛛の眷獣の暴走により、零菜が危険に晒されたのはつい最近の出来事である。この先、同じようなことが起こらないとも限らない。

そして、往々にしてそうした懸念というのは実際に発生する。

唐突に、店内に炸裂音が響いたのである。

何かかと思えば、ゲーム売り場から粉塵が上がり、警報機がけたたましく鳴り響いている。

「な、何!？」

零菜が叫ぶ。

突然の爆発に、シヨッピングモール内は騒然としている。あちらこちらで悲鳴が上がり、逃げ惑う人々が走り過ぎていく。並んでいた列も最早なく、その場にしゃがみこむ者や列を飛び出して逃げていく者、状況が掴めず困惑する者などが混在している。

「お二人とも避難します！　すぐに！」

有紀が叫ぶ。続いて、三人の護衛が零菜と紗葵を取り囲み、その場を離れるように促した。

爆発はなおも続いている。

強い魔力の波動が、辺りにばら撒かれているのを感じる。

「あ、でも……」

伊達に戦闘訓練を受けてはいない。感じる魔力は吸血鬼の眷獣によるものだろう。燃える二足歩行の狼が、陳列棚を押し倒して暴れまわっているではないか。

「お二人の安全確保が最優先です！」

「わたしたちだったら、自分で逃げられるよ。まずは、民間人の安全を守って！」  
紗葵の言葉に護衛たちは戸惑う。

彼らも攻魔師の資格を持つ者である。護衛の仕事は重要だが、同時に民間人の安全を守ることもまた仕事である。一発の爆弾ならばまだしも、吸血鬼が暴れているとなれば、それを止めるのは攻魔師の義務であった。

「では、我々があの吸血鬼を抑えます。ですので、お二人は高城攻魔官と共に離脱してください」

青年攻魔師は、言うやジャケットを脱ぎ捨てる。すでに彼の上半身は金色の毛に覆われ、甲羅のように背中が筋肉で膨らんでいた。

彼はライオン系の獣人だったのである。

速度よりも力に秀でた獅子頭の獣人が暴れる吸血鬼の眷獣に襲い掛かる。飛び散

る備品の欠片を物ともせず、燃える狼に格闘戦を挑むのだ。

「こちらへ！」

有紀が零菜と紗葵の手を引っ張り、現場を離脱する。二人の離脱を確認しつつ、被害を最小限に抑えるために狼の眷獣に獅子頭の獣人は殴りかかる。

眷獣に物理攻撃は通じない。しかし、彼には臂力のほかにも対魔の技がある。低級の眷獣が相手ならば、十分に通用する性能を持ち合わせているのだ。そして、彼を援護するのは魔術師である女だ。紗葵の護衛であり、魔術談議の相手でもある十代後半の少女はつぶさに戦況を観察して、眷獣の宿主を探り当てる。

「見つけた……！！」

吸血鬼は瓦礫の中で雄叫びを上げていた。

吸血鬼は眷獣こそ強力だが、本体はそれほど高い能力を持つわけではない。眷獣を倒すよりも、吸血鬼本体を叩くのが対吸血鬼のセオリーである。

暴れる眷獣の宿主は、これまた奇異な状態だった。

無残に押し倒された陳列棚と散らばった商品の中に佇むのは、制服を着た少女だったのだ。部活動の帰りなのか、大きなスポーツバッグを肩に担いでいる。

「暴走している!？」

見るからにだった。

頭を抱えて、髪を振り乱す少女は強い魔力を垂れ流しながら喉を裂かんばかりに怒鳴り散らしていた。

「ああああああ! うぐああああああああ! ざけんな、ざけんな、なんであたしが、スタメン落ちなんだよ! 今まで頑張ってきたのに、なんでいきなり! あ、ぐう、くああああああああ!」

苦悶の表情を浮かべる少女は、まったく周囲が見えていない。眷獣が暴れているというのも、意識の外である。発言は二転三転し、自分の身体を引っ掻くなどの自傷行為も見られた。

「説得は無意味か」

完全に錯乱している少女に対して、言葉を投げかけても意味はない。

無理矢理にでも拘束して、眷獣の実体化を解除するのが先決だ。

魔術師は即製の拘束魔術と催眠魔術を生成し、少女に放った。

地響きがショッピングモールを襲っている。

眷獣の暴走から逃れた人々が、一斉に出口に向かったために混雑が発生していた。怒号と罵声、悲鳴が飛び交う中で、零菜と紗葵は二階に留まり、成り行きを眺めるしかなかった。

この建物は一階から三階まで中央部分が吹き抜けとなる構造だ。そのため、上から出入り口を目指す人々を眺めることができる。

人込みの中に飛び込めば、いざという時に自衛できなくなる。眷獣を召喚するペースくらいは常に確保しておかなければ、咄嗟の防御ができないのである。それに、最悪の場合は窓から飛び降りて脱出するという手もある。そういったところは民間人よりも融通が利くのである。

「何が、あったんだろう」

零菜は緊張と不安を緋い交ぜにした表情で呟く。

眷獣が暴れていたということしか、今の時点では分からない。テロなのか、事故なのかすらも掴めないのです、余計に不安が広がる。

「これから、どうするの？」

紗葵が有紀ともう一人の護衛——美樹に尋ねる。

「この敷地から出るのが最優先です。吸血鬼がどうして、このような場所で眷獸を実体化させたのかは分かりませんが、現時点ではお二人を危険に晒せませんから」あくまでも護衛としての職務に忠実であるのならば、当然の判断ではある。

戦う力はあるが、それとこれとは別だ。零菜と紗葵が皇女という特別な立場にある以上は、騒ぎに首をつっこむべきではないという理屈は分かる。けれど、納得がいかないというのは確かにあって、零菜も紗葵も悔しげに唇を噛む。実際に、無謀というわけではないのだ。先ほど暴れていた眷獸程度であれば、零菜でも紗葵でも倒せる。しかし、それをわざわざ皇女がする必要はないとも言えるし、倒したところで解決するかという怪しい。その先があった場合、彼女たちが出て行くことで事態が悪化する可能性もある。

「相手の狙いが分からない以上は、こちらでも動けません。状況を整理する必要があるし、それはプロの仕事です」

有紀が言い聞かせるように言った。

零菜は小さく頷く。

自分の立場は分かっている。ここで無理を言っても、彼女たちを困らせるだけだ。先を争って出口を目指す人々の流れ。誘導する係員も、最早どうにもならないほどの混乱が生じている。そこに、畳み掛けるように問題が発生する。出口に向けて走っていた一人の男が、突然眷獣を実体化させたのである。

現れたのは、全長十メートルほどにもなる巨大な鷲だった。

鷲は頭上に舞い上がり、けたたましく鳴いておぞましい魔力を撒き散らす。宿主の男も、なにやら訳の分からないことを口走っているようだ。

「この——！」

咄嗟に零菜は手すりを蹴って飛び出した。何か考えがあるわけでもなく、あの妖鳥をどうにかしなければ、悲劇が起きると直感したからである。

無論、護衛の二人の制止は振り切った。後で謝ろうと思いつながら、雷光の眷獣を召喚する。

「ハスタ・アケルム  
槍の黄金！」

槍を振るうのと、鷲が火球を放つのは同時だった。

着弾点は未来予知にも匹敵する直感で感じ取っていた。人の上に落ちる前に、空

中で零菜は火球を打ち消した。魔力無効化能力のある槍の黄金ならではの防御法である。零菜はそのまま、観葉植物の枝に着地した。

「零菜さん！」

「ごめんなさい、有紀さん！ でも……！」

「もう、分かっています。ですが、無茶はしないようにしてください！」

困った護衛対象だと呆れながら、今のは零菜に助けられたとも思っただろう。眷獣が一般市民を攻撃すれば、ただではすまなくなる。頑丈な獣人や不老不死の肉体を持つ吸血鬼ならば、ある程度は耐えられても魔術の心得もない人間では直撃した瞬間に蒸発することになるだろう。零菜の槍の黄金は余波も含めて危険な火球を消し去ることができるといふ点で、対吸血鬼の楯としてこの上なく優秀である。

安堵しつつ、有紀はポケットから札を取り出して、投じる。

札は空中で三羽の鳥となって、吸血鬼に向かって下降した。

「は、ははは！ ははははは！ さつきからギャーギャー騒ぎやがって、人間ども！ このまま——うお!？」

舞い降りてきた鳥の式神に、吸血鬼は瞠目する。三方を囲んだ鳥は白銀の糸で結

ばれ、吸血鬼を完全に包囲したのである。

「なんだ、こりゃあ!? てめ、出せコラ！」

吸血鬼は第二の眷獣を召喚する。それは、青白い蛇だった。

宿主の苛立ちを代弁するかののように、内側から結界を食い破る。

魔族の中でも最強ともされる吸血鬼の眷獣だ。下級吸血鬼の眷獣であっても、たった一人で紡ぐ即製結界では数秒押し止めるのが精一杯だろう。その程度のこととは、有紀も十分に承知している。必要だったのは、その数秒だ。

砕けた結界の欠片の中に飛び込んだ有紀は、あっという間に吸血鬼の懐に踏み込んだ。

「若雷！」

強烈な破魔の体術で吸血鬼の身体が跳ね上がった。

凄まじい一撃は、大気すらも震わせたかのようで、有紀の攻撃を受けた吸血鬼は哀れにも錐揉みしてベンチの上に落ちて動かなくなる。

宿主が意識を手放したことで、眷獣たちも消える。

ふう、と有紀は深呼吸をした。

「突然、何なのよ」

小さく文句を言うのも仕方ない。

倒れた吸血鬼はスーツを着込んだ、どこにでもいるような青年だった。実年齢は不明。内ポケットから出てきた名刺には、一流企業の名が入っていた。

「どうして、こんな人が眷獣を出したりしたの？」

覗きこんだ零菜が意外そうに驚いた。

倒れた吸血鬼の風貌と肩書きが、人込みで眷獣を無差別に使うテロリストと結びつかなかったためだ。先ほどの狂気を孕んだような叫びも、まったく似つかわしくない。

「人は見かけによらないとは言うけど……」

有紀としてもそれは同じ意見であった。それに、三階で暴れていた吸血鬼とこの吸血鬼が申し合わせて眷獣を使ったようにも見えなかった。単独犯が偶然重なったような、ありえないとまでは言い切れないものの低確率な事態ではあって、さすがに異常を感じずにはいられない。

「零菜姉さん、有紀さん、大丈夫？」

紗葵と美樹が駆けつけた。

一階にはもうほとんど人が残っていない。

ちらほらと見えるのは、逃げ遅れた人がいないか確認している店員や警備員である。この広いショッピングモールが蛻の殻になっているという異世界感が、この事件の異様さをさらに後押ししているような錯覚すらする。

「とりあえず眷獣行使の現行犯で逮捕、ですな」

有紀が魔力抑制の手錠を吸血鬼にかける。

強大な魔族や魔術師の異能の多くは魔力に依存する。その魔力を著しく制限する効果のある手錠である。さすがに、歴史を重ねた吸血鬼相手には、多少の違和感程度しか与えないが、低級魔族にはこれでも効果がある。

上の戦いも終わったらしく、魔力の波動はもう感じない。

「これで、一件落着？」

紗葵が誰にもなく尋ねる。

頷けるものは一人としていなかった。

「とりあえず、この人の精神鑑定から始めないと何とも言えませんね」

有紀はそう答えるのが精一杯だった。

明らかに精神に異常を来たしているようで、もしかしたら上階で暴れていた吸血鬼も同じ問題を抱えていたのかもしれない。何かしらの病気と言うには発生したタイミングが重なっているのが不自然だ。となれば、何者かが引き起こした事件であると考えたほうがいい。

「ッ……」

紗葵は不意に首筋にチクリとした痛みを感じて、首を叩いた。

「どうしたの、紗葵ちゃん？」

「ううん、なんでもない。虫かな？」

「虫って」

零菜は苦笑いを浮かべる。

吸血鬼を刺す虫などそうそういない。不死の呪いや強い魔力を帯びた血液は、虫からすると栄養価よりも毒性のほうが強く、好んで吸血鬼から血を吸おうとはしないのだ。

休日のショッピングモールを襲った騒動は、一時間もしないうちに大々的に報じ

られることとなり、零菜と紗葵の貴重な休みは特区警備隊への捜査協力で潰えることとなった。

## 第二部 二話

ショッピングモールを襲った眷獸事件から五日が経った。

テレビやネットニュースはこの話題で持ちきりではあったが、かといって世の中が過敏に反応しているということもなく、事件現場近くの小学校の集団下校が取り上げられたくらいであろう。

逮捕された二人についても身元が判明しているようだが、二人揃って精神状態が不安定で取り調べが難航しているということが報じられただけで、具体的な発表がされたわけではない。

事件の詳細が明らかになるには、まだまだ時間がかかりそうではある。

紗葵が通う彩海学園も、この事件を受けて特別な対応をするといったことはなく、普通に授業を行っている。あったとしても各学級で、注意が促される程度で休校になるようなことはなかった。内心で期待していただけに、残念だったというのが紗葵の正直なところである。

部活動に所属していない紗葵は、授業が終わればその足で家に帰る。友人と一緒

に戻ることもあれば、護衛の誰かと一緒に帰ることもある。異母姉とは学年が違ふこともあって、一緒にいることは少ない。この日は、護衛の攻魔官の車で送迎される手はずになっていて、その通りに帰ってきた。この不自由さは何とかならないものかと思ひながら、紗葵は唯々諾々と車に乗り、家まで護送されることになった。

「もしであれば、ご友人もと思いましたが」

「いいよ。今は、みんな忙しいから」

ハンドルを握る攻魔官の提案を紗葵はにべもなく断わる。

紗葵の友人たちは運動部に所属しているのが大半で、今は秋の大会が近いこともあり土日休日に関わらず、汗を流している。

紗葵は、そこまでの執着を見出せないこともあって、部活には入らなかつた。やりたいことが特になく、楽しいと思えることもほとんどない。言われたことや必要だと思ふことは、最低限のところまではやりきるので、真面目だとよく言われるがそんなことはない。ただ、大人に逆らつてもやり遂げたいことがないだけなのだ。そんな労力をかけるくらいなら、唯々諾々と指示に従うほうが楽だ。冷めた人間だと自己評価していて、そんな自分が嫌いだった。

「そういえば、今日母さんが戻ってくるか聞いてますか？」

「どうでしょうか。わたしも、紗矢華さんの予定についてはまだ何とも。ショッピングモールの一件で、かなりバタバタとされていますからね」

「そうですか」

紗葵は窓の外に視線を向ける。

流れていく商店街の景色の中に、母娘で歩く買い物客の姿が見えて、目を伏せる。ギシリ、と身体の奥が軋み、首筋が痛んだ。

「ずいぶん、忙しくしてるんだ。まあ、いつものことだけど」

「紗矢華さんは非常に優秀な攻魔官ですし、呪術の専門家です。今回の事件でも、何らかの呪詛が用いられた可能性もありますから、まさしく舞威媛の本領発揮といったところでしょう」

笑みすら浮かべて、その攻魔官は言った。

舞威媛は、日本に存在した獅子王機関という国家機構に属する攻魔師の役職の一つである。

呪詛と暗殺を生業とする魔術師たちのグループを前身とする、裏家業であり、近

代以降は要人警護などを請け負ってきた。

呪詛が関わる可能性のある事件に、紗矢華の知識が求められるのは自然の成り行きである。もともと忙しくしていて、家に戻ることの少ない紗矢華だが、事件以降は声も聞いていない。

「舞威媛……あなたもそうなんでしたっけ？」

「違いますよ。わたしは候補生止まりでしたから。卒業前に、獅子王機関がなくなってしまったので」

日本の獅子王機関が長い歴史に終止符を打ったのは、紗葵が生まれるよりも前のことだ。

その際に多くの剣巫候補生や舞威媛候補生が、新たな道を探る必要に迫られた。魔術の世界では日本政府最大の失策の一つにも数えられるもので、大半が孤児だった候補生たちは帰る場所を失い、闇の道に墜ちた者が多数いたという。日本国外への流出も多く、雪菜や紗矢華を頼って落ち延びた候補生たちは、暁の帝国に大きな利益をもたらした。

皇女の護衛を務めるのも、こうした獅子王機関の流れを組む者たちが多い。専門

技能と母親たちとの繋がりが、そういった形で落ち着いたのである。

この攻魔官は、幼い頃に紗矢華に面倒を見てもらったことがあるらしく、この国に渡ってきてからは半ば紗矢華に弟子入りする形で技術を磨いてきた。紗葵とも昔から面識があつて、その縁もあつて紗葵の護衛をするメンバーに入っている。

「紗葵さんは明日、どうするか決めてますか？」

「今は、特になにも」

「そうですか。外出の予定があるのでしたら、一報入れてくださいね」

「——分かりました」

明日は土曜日。学校に行く必要はないので、一日自由だ。だが、外に行くならば護衛が必要だ。遠巻きに護衛する場合もあれば、ぴつたりと寄り添うように護衛する場合もある。そのときの外出先によって方法は様々だが、事前に誰かに言うておくことも、人に迷惑をかけないためには必要だった。

紗葵は、それ以上話をしたくないとばかりに黙り込んで再び景色に視線を向ける。

紗葵の機嫌の悪さを感じ取ったのか、攻魔官もそれ以上話かけてくることはなかった。

マンションの正面に横付けした車から紗葵は降りる。

紗葵たち皇女に真の意味でプライバシーが保証されるのは、家の中だけだ。外に出れば、誰かしらに護衛されることになる。仕方ないこととは思いうし、受け入れてもいるが、鬱陶しいという思いはどうしても拭いきれない。

エレベーターの前まで護衛はやって来るのだ。人によっては中にまで。マニュアルでは、エントランスまでとなっているようだが、心配性な者もいる。

「はあ……くッ」

一人になった途端、ぶわ、と体温が上がる。

唇を噛み、肩に担いだ鞆のショルダーストラップをギュッと握り締めた。

身体の調子が悪化しているのを、紗葵は自覚していた。原因は分からないが、妙に喉が渴き、苛立ちが募る。それが、昨晩から続いている。些細な音が気になって仕方がなく、人との会話が異様な程に鬱陶しく思える。耳鳴りが続いているような不快感に苛まれ、夜はろくに寝付けなかった。けれど、誰にも相談はしていない。相談できる大人は近くにはいないし、母親は仕事で忙しい。紗葵に何かあれば、母の仕事の邪魔になってしまう。そう思って、魔術まで使って誤魔化してきた。

「吸血鬼が風邪？ んなわけないっての」

紗葵は鼓舞するように呟いて、玄関を潜る。

不老不死の呪いを帯びた吸血鬼が病気になることはほとんどない。肉体的な問題は、呪いがすべて解決してくれるから、体調不良すら珍しいくらいなのだ。

だから、吸血鬼の家には風邪薬の類はほとんどなく栄養補給用の薬剤がある程度である。

横になっていれば、そのうちよくなるだろうと考えて、紗葵は冷蔵庫を開けた。

「スーパ―寄ってもらえばよかった」

冷蔵庫の中身は、かなり偏りがあった。豚肉と秋刀魚が一食分しかなく、他はペットボトルのジュースと冷蔵保存されている栄養剤だけだ。

皇女でありながら、紗葵の食生活は一般人とほとんど変わらない。シェフを雇っているわけでもなく、お手伝いさんがいるわけでもない。身の回りのことは、紗矢華がするか紗葵が自分でするかしかない。アルディギア王国の妹が羨ましい――

「ッ」

栄養剤を挿んだ直後、ぞわり、と総身が震える感覚に紗葵は膝をつく。

貧血にも似た症状の後に襲い掛かってきたのは、説明できない嫌悪感だった。何が気に入らないのかすら分からないが、とにかく不快だった。自分の中で、何か異質な感情が膨れ上がっているのが分かった。何を思っても、不愉快だ。今、目の前にあるもの、自分の脳裏に描くもの、この心を動かすすべてが気に食わない。

「ハ————ッ、クハ」

思わず眷獣すら使ってしまった。

この家を跡形もなく消し去って、どこか遠くに行きたい。

暴力的な衝動が、紗葵の頭を白く染める。

「なにこれ……」

ぼろぼろと涙が零れた。

訳が分からぬ。自分の感情が目茶苦茶になっている感じだ。

心身に異常を生じているのは明らかで、唐突に襲い掛かってきた悲しみに理解が追いつかないままに紗葵は涙を流した。

昏月風の土曜日は午前十時から始まった。

時間の流れが他の人間と違うということではない。本当に遺憾なことながら、風の時間は他のすべての生物と平等に流れている。

ただ、休みの日に早起きをするほど勤労精神に溢れていないというだけである。魔術や剣術の修行の予定も入っていない。自主的に鍛錬するにしても、午後からでいいという気持ちから、風はベッドから出るのを躊躇い続け、結果的に昼前にもそのそと活動を始めたのである。

覚醒してから、ベッドを抜け出すのにかかった時間は実に二時間。

起きてしまえば、二時間を無駄にしたと後悔することになるのだが、これは休日にはよくあることだった。

顔を洗って、着替える。

もうじき昼時なので、朝食は抜くことにしてテレビをつける。

「土曜のこの時間って見るのないんだよな」

などと、一人愚痴る。

凧が普段見るのは、ニュース番組が多い。タイムリーな話題は、ショッピングモールの事件だが、もうじき発生から一週間だというのに続報らしい続報は出ていない。犯人の二人は逮捕されたというのに、その後の進展がないというのは、もしかしたら複雑な事情が絡んでいるのではないだろうか。

凧の寝室から物音が聞こえてきたのは、そのときだった。

初めは気のせいかとも思ったが、何か——いや、誰かと言ったほうが適切か——が動いている気配が確かにするのだ。若干、魔力の変動を感じたのもあって、凧の寝室に何者がかが侵入したのは明らかだった。

さて、どうするか。

ただの泥棒ならば、返り討ちにするまでだ。

凧とて攻魔官の候補生だ。仮免許ではあるが、実戦も多少は経験した。眷獣を使

わなくても、靈力増幅機能を有する警棒があれば、そこそこの戦闘で使いものになる技術は習得している。

しかし、ここはマンションの七階だ。

侵入するとしたら、窓しかないが、休日の真昼間に七階の窓から侵入することが可能なのか。可能だとして実行するのはよほどの馬鹿だろうと思う。

相手が何者であれ、壁をよじ登ってきたのなら疲弊はあるだろう。確保するのなら、今が好機だ。凧は、警棒を持ってドアを一気に押し開ける。

「誰だッ！」

声を荒げて、相手を威嚇するように中に入る。警棒にはすでに靈力が注入されており、鉄をも砕く強度に変わっている。

意を決した凧の突入はしかし、予想外の光景に停止を余儀なくされる。

ベッドの上に見慣れた人物が転がっていた。

茶色味があった短いポニーテールを好む少女。妹分でもある従姉の暁紗葵だった。

凧のベッドの上で、紗葵は凧の枕をぎゅっと抱きしめて顔を押し当てていた。

「ああ、風。……おはよう」

顔を上げた紗葵は、普段の彼女からはイメージできないほどふやけた笑みを浮かべている。若干、顔も紅いように見える。

紗葵がなぜ、ここにいいのかといった疑問もあるがどうやって入ってきたのかも分からない。窓に視線を向けるが、鍵は閉まったままで、風が入ってきたドア以外に侵入経路はない。風に気付かれずに家に忍び込み、寝室に入ったというのはありえないはずだ。

「なあ、紗葵。お前、どうしてここにいるんだよ。というか、どうしたんだ本当に」  
「どうし、た？」

こてん、と紗葵は首を傾げる。

「わたしが、ここにいたらダメ？」

「いや、ダメじゃないけど、何か様子がおかしいぞ。熱でもあるのか？」

「熱？ ハハ、確かになんか熱い。何か、うん、熱い、よ」

ふらり、と紗葵は立ち上がった。

「冷房、切っちゃってるのかな。ねえ、風」

紗葵は熱に浮かされたような表情で、凧を見つめてくる。

こんな状態の紗葵を見るのは初めてだった。

言動の端々に、常とは異なる精神状態であることを伺わせるものがある。

「紗葵、体調悪いみたいだし、とりあえず寝たほうがよさそうだ。水、持ってくるから待ってろ」

凧は紗葵に背を向けて、リビングに向かおうとする。

とにかく、紗葵の体調が悪いのは明白で、精神的にもかなり参っているらしい。それに、護衛の気配がまったくもないのも気になる。どうやって、この家に侵入したのか。考えるべきことはいくらもあるが、とりあえず紗矢華か護衛担当の誰かに連絡を取るべきだろう。

と、そんなことを考えていたからか、凧は反応が遅れてしまった。

紗葵に背中を強く押されたのである。思いつきり体当たりでもするように突き飛ばされたので、つんのめって床にダイブすることになった。

「うわッ！」

鍛えていたおかげで、凧は受身を取って横に転がり、仰向けになる。上半身を起

こして、紗葵に抗議する。

「いきなり、何するんだ、よ……お、わ!?」

立ち上がる前に、紗葵は凧に押し掛かって身動きを封じた。

真っ赤に染まった瞳が凧を見下ろしてくる。

「な、何のつもりだ？」

「凧こそ、どこに行こうとしたの？ わたしと話してたのに、何で突然出て行くとしたのよ？ どうして、凧までわたしを一人にしようとするの！」

凧の胸倉を掴んで、紗葵は怒鳴りつけてきた。

「待って！ 俺はキッチンに行こうとしただけで、紗葵を一人にしようとしたわけじゃないからな。だから、落ち着いて、話をしよう。紗葵は、何ていうか体調がよくないんだろ？ ちゃんと休まないとダメだぞ」

努めて冷静に凧は言い聞かせるように言った。あまりに突然すぎる感情の起伏は、体調不良では説明しきれない。何かしらの精神に異常を来たす病気でも持っているのだろうか。

「体調不良……ふふ、そう、だね。わたし、調子悪いよ。頭がガンガンするの。母

さんは帰ってこないし、護衛はいちいち鬱陶しいし、喉は渴くし、凧はわたしを一人にしようとするし、どうして？　ねえ、どうしてなの、お兄ちゃん！　なんで、お兄ちゃんは零菜姉さんにばかり血を吸わせてるの!?　今まで、全然、交流なかったのに、なんで、いきなり、そんな話になったのさ!」

「ッ……!」

まずい、と思ったときには凧の肩を掴む紗葵の爪の先が凧の肌を斬り裂いていた。じわり、と血が滲み出す。若い女子とはいえ、吸血鬼だ。その握力は鍛えた人間の成人男性くらいはある上に、魔力で強化までしている。このまま紗葵が前後不覚の状態で組み付かれていたら、肩の骨を碎かれる。冗談を抜きにして、それほど危機的状况に置かれているのだ。

「紗、葵。とにかく、降りてくれ」

「やだ」

「やだって」

「凧の血はわたしがここで全部貰う。そのために来たの。ずっと我慢してたんだから、イイよね。体調不良だからね、くふ、ふふ、早く元気にならないと」

狂気染みだた笑みを浮かべて、紗葵は凧の首元に顔を寄せた。

「ああ、分かるよ。どこを噛めばいいか、不思議なくらい分かる……ああ、そっか……これかあ」

陶然とした声色で囁く紗葵が、凧の首に舌を這わせる。

「いい匂い、血の匂いがする」

紗葵はそう言って、凧の首に牙を突き立てる。そのほんの僅か前に、凧は拘束魔術を完成させた。紗葵の脇腹に押し当てた手の平から、金縛りの術をかけたのだ。

「あうッ」

「ばちん、と感電したように紗葵は呻いて脱力する。不意打ちの密着状態からの金縛りだ。吸血鬼であっても、そこそこ効果はあるだろう。」

「なんだよ、まったく」

凧は紗葵の拘束から抜け出した。

凧らずも紗葵の目的を知ってしまい、凧はどうしたものかため息をつく。精神に異常を来たした紗葵は、凧から吸血するためにこの部屋を訪れたらしい。今の紗葵は、我慢という発想をなくしてしまっているように見える。自分の血が彼女たち

吸血鬼に非常に好まれるというのは、昔からよく聞いていた。従姉妹からは、それらしい話をちらりと聞いたこともある。吸血の話は性の話題とも関わるので、女子である彼女たちから聞くことはほとんどないと言って過言ではないが、自分の体質は理解している。だが、まさかこのような形で求められるとは思わなかった。

「なんで？」

ビキ、と空間が捻れたような気がした。

声の主は紗葵だ。この声に、憎悪にも似た感情が込められているのを肌で感じて、凧は怖気が走った。

紗葵の身体から魔力があふれ出しているのだ。それが、凧がかけた金縛りを侵食し、強引に砕こうとしている。

「紗葵！ ダメだ、こんなところで！」

「うるさい！」

怒りの発露と共に、魔力が爆発した。

金縛りは弾けとび、衝撃で凧は三メートルは後方に飛ばされた。リビングのテーブルの上に背中から叩きつけられて、凧は目を白黒させた。

「金縛りなんて、酷い。わたしは、風の血を吸いたかっただけなのに」

「今のお前に血を吸わせたら、どうなるか分かんないからダメだ」

「なあに、それ。はは、なにそれ。そんなの、知ったことじゃない、よ。喉渴いてるもん。零菜姉さんだって、吸ったし、わたしがダメなのって何？ おっぱい？

確かに零菜姉さんは大きいけどさ、あんなの、どうせそのうち垂れるよ。でかいだけだし、わたしのほうが形いいもん。それに、わたしのほうが絶対零菜姉さんよりも上手く血を吸える。痛くないよ。大丈夫、先っぽだけだからさ、ちょっと血管に穴開けるだけだから、ね」

「零菜がいたら、本気で怒られそうなことを」

さすがに絶句する。

暴走状態だから、紗葵の普段考えてることが表に出てきているのか、それとも考え方が捻じ曲がってしまったのか。とりあえず、今の紗葵は風の事情を考えてくれることはなさそうだ。

そもそも血管に穴を開けるなんて言われて血を吸わせるのはよほどのマゾだろう。紗葵はもう少し、誘い文句を考えたほうがいい。

血を吸わせて、元に戻れば何の問題もないが、それで戻らなかった場合が厄介だ。吸血行為は吸血鬼の能力を大きく上昇させる。

紗葵の状態は恐らくはショッピングモールでの出来事と重なるものだ。  
眷獣の暴走。

それは避けなければならぬ、最悪の事態だ。

このまま暴発させずに説得できる自信もない。家の中で紗葵を抑えるというのも、まず無理だ。

「なあ、紗葵。場所を変えよう」

「え……?」

「ここはちと狭いからな」

「いいよ、ここで。血を吸うだけだし。外に出たら、凧、どこかに行くでしょ。絶対ダメ。お兄ちゃんはおわたしの目の届くところにいなきゃダメ。そんなの、絶対許さないから」

「じゃあ、俺を捕まえるしかないな。鬼ごっこだよ」

言って凧は魔術の閃光を放った。

ただ光を放つだけの魔術だが、不意を突けばかなりの効果を期待できる。

「きゃっ!？」

紗葵は驚いて動きを鈍らせ、その隙を突いた凧は靴を掴んで玄関から飛び出した。それからは全力疾走だ。

七階から一階まで休まずに駆け下りて、それから式神を飛ばして紗矢華に連絡を入れる。

目的地は、一キロほど離れた場所にある人工森林だ。五年前ほど前に行われた大規模な区画整理の際に誕生した人工島に有るまじき広大な国立公園で、サッカーコート二十面分の敷地の中には森のほかにもピクニックに訪れる家族連れも多い芝の平地や池、遊具などを兼ね備えている。そこならば、多少は眷獣で暴れても問題ないだろう。



取り残された紗葵は、一人呆然と佇んでいた。

まるで、恋人に裏切られて死の寸前まで追い詰められた女のような感情の抜け落ちた顔だった。その半面、瞳だけは真紅に色づいていて、それが、悪魔的に美しい。能面のような表情にキラキラとした情愛の目というミスマッチは、紗葵の混乱に混乱を重ねた心理状態に似つかわしい。

「鬼ごっこ？ ……ハハ…アツハハハッ、アハハハハハハッ！ くひ、ひはッ、ハハハ！ わたしと鬼ごっこ？ 逃げ、切れるわけ、ないじゃん！ 可愛い、可愛すぎるよ風！」

一転して相好を崩した紗葵は腹を抱えるようにして笑う。

「可愛すぎて、食べちゃいたいくらいだよ……ほんと」

爪についた血を紗葵は舐めた。途端に心身に力が漲ってくる。きちんと味が分かるほどの量もないのに、この力。喉を鳴らすくらいに飲めたら、どうなってしまうのだろうか想像して、身体が熱くなる。

「熱い、熱いよ……わたしが、こんなになってるのに、何で風はいないのかな。どうしようもない人。そんなにわたしに捕まえて欲しいのなら、ふふふ、ちゃんと捕まえてあげるよ。もう血を吸うだけじゃ、許してあげないから」

紗葵は凧のベッドに横たわる。

それから、掛け布団の中に潜り込んだ。

直後、人一人分の膨らみが沈み込むようにして消えていき、やがて紗葵の姿は凧の部屋から消えてなくなった。

## 第二部 三話

大型ショッピングモールでの眷獣召喚事件はマスコミに大きく取り上げられ、多くの報道陣が容疑者の運び込まれた病院に押しかけることとなり、今国内で最も注目を集める事件となった。

休日の親子連れで賑わうショッピングモールで殺傷性の高い眷獣を無差別に解き放ったというだけでも衆目を集める大事件である。テロリズムも疑われるため、周辺住民は不安な日々を送ることになるだろう。捜査本部はこの問題に全力を挙げ取り組むことを明らかにしたものの、逮捕された二人の容疑者には面識がなく、揃って「なぜ、あのようなことをしてしまったのか分からない」と供述しており、大分参っているようであった。

古城の手元には今、A4サイズのタッチパネルがある。仕事で使用する端末で、広く普及しているタイプである。人工島ならではの資源問題もあって、基本的に仕事の情報はデータでのやり取りとなる。この日に上がってきたのは、やはり巷でも話題になっている眷獣の暴走事件である。

零菜と紗葵が巻き込まれていたというのも驚くところではあるが、無事だったので今はよしとする。現状、古城は現場の人間ではないので、上がってくる報告に目を通すだけだが、この事件の奇妙さはそれだけでも十分に理解できる。

「容疑者は吸血鬼で、一人は女子高生、もう一人は五十代の男性セールスマンか。二人の接点は一切なしで、健康状態も良好。両者共に眷獣を使用したときの錯乱した原因に心当たりはない……なんだ、これ」

報告書を読んでも、事件の概要しか書いていないので具体的な部分についてまったく分からない。問われた雪菜も困ったように顔を曇らせることしかできなかった。

初動捜査が遅れてしまったのは、眷獣を召喚した二人の精神状態が悪く、取調べもろくにできない状態が続いたためだった。下手に刺激をして、病院内で眷獣を召喚されたら大惨事である。専用の施設で隔離して、暴走しても対処できるように人員を割くなど、捜査の前段階に多くの手間をかけることとなった。

「見落としがないか、お義母様と紗矢華さんに確認してもらっているところです。もしもなんらかの魔術が関わっているのなら、それで痕跡を見つけることができる

のではないかと思えます。幸い、零菜の槍ハスター・アウルムの黄金は、眷獣の攻撃を無力化しただけでしたし」

もしも、槍の黄金の魔力無効化が容疑者の身にまで及んでいれば、魔術的な痕跡を確認することは困難だっただろう。何せ、魔術的な能力の一切を消滅させてしまふのだから、残されるのは容疑者の身体だけである。

「しかし、零菜もよくよくこういうことに巻き込まれるな。どうしたもんだらうなあ」

背凭れに体重を預け、古城は悩ましげに呟く。

「誰かさんに似たんですよ」

「それはブーメランが返ってくるぞ。あの娘はどっちかというところ、雪菜似だしな」  
外見は中学生のころの雪菜と瓜二つ。性格も、実は似ているところが多々あるというのが古城の見立てである。雪菜は、敢てそれを否定はしなかった。似ているとは思わないまでも、強く否定するのもまた親の反応として違うと思うからだ。

「でも、実際に古城さんも零菜と同じくらいのとときにはあの娘以上に危ない橋を渡ってききましたよね」

「お前も一緒にな。もう、あんなことが起こらないとうにしていけないとダメだつてのに」

二十年前、絃神島の治安は決してよいとはいえないところがあった。

高校一年生のときの古城が一年の間に関わった事件はどれもこれも一歩間違えば絃神島が跡形もなく消えてしまうような大事件一歩前のものだったのである。

一般に知られないように、当時の上層部がその都度上手く誤魔化してきたが、重犯罪の規模も頻度も、かなりのものと言えた。

そして、今。

ライヒ・デア・モルゲンロート

暁の帝国と名を変えた大規模人工島は、テロリストの標的の一つとなつて  
いる事実はある。

ドミニオン

四番目の夜の帝国は、聖域条約成立当時の世界のパワーバランスを大きく崩す危険性のある存在であり、魔族側に世界の軍事力が傾く継起となつたとまで言われている。おまけに人間側の対魔族戦線の最前線に立っていたアルディギア王国の女王を血の従者とし、労なくその国力を取り込んだというのは人間を至上とする者たちに危機感を抱かせるには大きすぎる事件だった。その辺りは、古城とその周囲が政

治的に上手く立ち回ったということではある。世界規模の大混乱の中での独立から、国力の確立までを短期間で行った政治手腕と外交能力は、世界の誰もが認めるところではあるのだ。

たとえ、自分が潜り抜けてきた修羅場ほどではないにしても、娘が危険に晒されるのは我慢ならない。かといって、がちがちに護衛を固めるのも職権乱用かつ娘たちの自由を制限することにも繋がるのでできない。国全体の治安を改善するのが、手っ取り早く確実で、より公共の福祉に繋がる解決方法である。

根が庶民なために、上流階級としてどういった対応をするのか、ということも皇帝としての課題の一つとなっている。

「古城、入るわよ」

ドアを押し開けて入ってきたのは、紗矢華だった。

すらりとしたスーツ姿の紗矢華は、トレードマークのポニーテールを揺らして古城の下までやって来た。

かつて、魔導テロ対策を主な任務とする獅子王機関にいた紗矢華は、現在でも犯罪対策の仕事をこなしている。特に、魔術や魔族が関わる案件に関しては那月と共

に担当することが多い。

「紗矢華さん。何か、分かりましたか？」

雪菜が尋ねると、紗矢華は重苦しい表情で頷いた。

「義母様と一緒に、あの二人の身体を検査した結果が出たわ。これを見て」

紗矢華は携帯端末を操作して、古城と雪菜の端末にデータを画像送信する。

表示されたのは、首筋の画像だった。

「これは？」

「この二人の首筋に、二ミリくらいの赤い痣があるのが分かるわよね」

「ああ」

画像は分かりやすいように、該当箇所を赤い円で囲っている。確かに、小さな虫刺されのような痣がある。

「虫刺されではない……？」

「ええ、ここから微量だけど魔力が検出されたわ。この二人の魔力とは別の第三者ね。それで、残留魔力を照合した結果、コイツが浮かび上がったわ」

古城と雪菜は次のページに進む。

表示されたのは、男の顔写真だった。

外見は二十代後半から三十代前半くらいで、やややつれた印象のある男だった。「通称ジェリー・ブラッド。本名不詳の吸血鬼で、北アメリカ出身とされている男ね。大体百年前から、人間の国家を相手にテロを続けていたテロリストで、聖域条約締結後も西洋で度々事件を起こしているお尋ね者よ。ジェリー・ブラッドって名前も、昔、犯行声明を出していたときのものね」

「そんなのがどうして国内にいるんだよ。入国審査どうなってんだ!？」

「そうね。それについては、後々調査しないとわからないことでしょうけど、今の時点でこの男がこの国のどこかに潜んでいるのが確実だということが第一の問題ね」

「吸血鬼としての力量はどの程度なんだ？」

「百年から百五十年くらいは生きているけれど、もともとそこまで強い吸血鬼ではないみたいね。ただ、ジェリー・ブラッドの眷獣は精神に作用するタイプの眷獣よ。これまで発生したテロも、コイツに精神攻撃を受けた人による暴動が主だもの」

「精神支配か」

「どっちかというと精神汚染って言ったほうがいいかもしれないわね」

魅了を初めとする精神攻撃は吸血鬼の基本的な能力の一つである。その強度は、それぞれ異なるにしても大なり小なり精神に干渉することを可能としている。

「この男の眷獣はジガバチに似た外見をしてて、刺した相手の精神を狂わせるわ。些細な苛立ちや不満、欲望を増幅して暴走状態にするのが特徴ね。吸血鬼に使えば、精神の暴走に合わせて眷獣も暴走状態になるでしょうね」

眷獣を持つ吸血鬼を暴走させれば、強い殺傷能力のある眷獣が制御不能になる。自動車爆弾のように、何の前触れもなく周囲に破壊を撒き散らせる上爆弾のように事前に準備をする必要もない。どこかですれ違った相手を密かに刺しておけばいいのだから、楽なものだ。

「この男はどうしてテロ活動をしているんだ？ これまでの経緯は？」

「それが、今まではつきりとした政治主張はしてないのよね。組織をバックにつけて捜査攪乱をするとかはあったけれど。テロリスト御用達の尖兵ってところ？ だから、厳密にはテロリストってわけじゃないかもしれないけれど」

「歴史的にテロリスト扱いされてんなら、テロリストでいいだろ。問題は、ここで何をしようとしているのかってことと、今の居所だ」

「どっちも不明。いつ、この国に来たのかもね。今、入国記録を調べさせているけど、どこまで遡ればいいのか見当も付かないというのが現状。未登録なら眷獣の使用記録も出てこないし、厄介ね」

紗矢華は肩を竦める。

データベースに眷獣の登録をしている魔族であれば、一定量以上の魔力の使用はすぐに検知できるようになっている。しかし、聖域条約成立以後に生まれた魔族のように生まれたときからデータベースに情報が入力されているというわけでもなく、生活状況も不透明だ。つまり、この男についての情報は、過去の犯罪歴以外はないのである。

おまけにジガバチの眷獣は、破壊に用いるものではなく放出する魔力量も少ない。発動を感じ取るのは、容易ではない。

「今日の午後三時を以て第二種警戒態勢を敷くよう関係省庁に通達済み。特区警備隊もパトロール頻度を上げているわ。とにかく、各方面からジェリー・ブラッドの捜査を進めさせるから」

「ああ、よろしく頼む」

相手の能力を考えると、非常に危険な事態であると言いきれる。

いつ、どこで、誰が暴走して周囲に危害を加えるか分からないのだ。それは人工的な災害と同じであり、凶悪犯罪である。また、操られた人の心に癒えない傷をつけることにもなる外道の行いだ。

乱暴にドアをノックされたのは、直後のことだった。飛び込むように、室内に入ってきたのは紗矢華の部下だった。顔を蒼白にして、肩で息をしている。

「紗矢華さん！ 陛下！ お嬢様が、吸血衝動を暴走させたと、連絡が！」

「え……」

何を言われたのか、紗矢華はすぐに理解ができなかった。

「凧さんから式神を通して連絡がありました。お嬢様が凧さんの血を吸おうと眷獣まで使用していると。民間人への被害を抑えるため、何とか南地区の自然公園に誘い込むつもりだとのことです！」

「さ、紗葵が……！」

「恐らくは、この前の事件の際に刺されていたのではないかと……」

「ッ……！」

ぐらり、と足元が崩れるかのように血の気が引いた。

考えればあり得る話ではあった。事件現場に紗葵はいたのだから、シエリー・ブラッドの放つ眷獣の毒牙にかかっているもおかしくはないのだ。あるいは、紗矢華が紗葵との時間をもっと設けていれば、兆候を看取することもできただろうが、紗矢華は事件後仕事にかかりきりで紗葵とまともに顔を合わせてもいなかった。事件解決に奔走していながら、最も身近にいた被害者を見落としていたのである。言い訳のしようのない、大失態だった。

「紗葵の安否は!?!」

古城が立ち上がって尋ねた。

「現在、確認中です。ですが、登録証が警戒域を上回る魔力の発動を感知していますので、眷獣をかなりの規模で行使しているものと思われます」

「そんな……!?!」

紗矢華は口元を押さえて、肩を震わせた。ショックが大きすぎて、声にならない。しかし、古城は大きく深呼吸をすると雪菜に向かって言う。

「雪菜は零菜の安否を確認してくれ。零菜は紗葵と一緒にいたからな」

「はい」

二つ返事で雪菜は頷き、部屋を後にする。雪菜自身、紗葵のことは気にかかるもののまずは自分の娘の安全確保が最優先事項である。

「紗葵は風以外には手を出していないな？」

「は、はい。今のところは被害報告は入っておりません」

「そうか。自然公園の封鎖を急がせろ。紗葵が被害を広げないうちに連れ戻す。紗矢華」

古城に話しかけられた紗矢華はやっと冷静さを取り戻した。

未だ信じられないという面持ちながら、やるべきことは理解したのである。

紗矢華は、踵を返して部屋を出ていった。



眷獸は、異界から召喚されるとも体内に寄生していてもされる吸血鬼のメインウエポンにして半身たる存在だ。その身体のすべてを魔力で構成されているために、消費魔力量が桁外れであり、低級吸血鬼の眷獸であっても、魔力に限りのある人間が使用すれば、ほんの数秒で寿命を使いきってしまうとも言われる凄まじい代物だ。

紗葵も大多数の吸血鬼と同様に眷獸を従えている。

この世に生を受けて、十四年。

第四真祖の娘として、彼女もまた巨大に過ぎる才能を有していた。

右手にだらりとぶら下げているのは半透明なクロスボウだ。

第四真祖の娘たちは、第四真祖の眷獸属性に加えて母親の性質を多分に受けて生まれるらしい。意思インテリジェンス・ウエポンを持つ武器を誰もが一つは有しているが、その形状には父親よりも母親の影響を伺うことができるからである。それだけ、母親も優れた霊媒だったということでもあるが。

母親である紗矢華の得意とする武器が弓であるように、娘の紗葵はクロスボウの

脊獸を飼っている。時折、ギチギチと震える脊獸はあたかも獲物を求める狩人のよう  
うで、紗葵は強化した視力で逃亡する凧の背中を的確に捉えていた。

「やっぱり、公園に行く気だね。まあ、そうだよ。それ以外に行き場なんてない  
もんね」

喉の渇きは俄然、強くなる。どうにも熱もあるようで、頭はくらくらしして思考が  
纏らない。こうして、マンションの屋上に出て熱帯の風を浴びていると、体調が悪  
化しそうである。それはとても大変で辛いことだから、早く薬を仕入れたいところ  
だ。

しかし、

「鬼ごっこ、かあ。すぐに終わるのも、つまんないよね」

凧が挑んできた遊びに、紗葵は乗った。

乗ったけれども、本気になればすぐに終わる勝負である。そもそも追いかけてこ  
で紗葵から逃げられるのは、那月くらいのものである。少なくとも、身内の中に紗  
葵の追跡から逃れられる者はいない。今すぐにでも飛びついて、首に牙を突き立て  
たいと思うが、獲物を駆り立て、仕留める過程にもそそられる。

「街中なら萌葱姉さんに一步譲るけど、森の中はあたしの独擅場だからね。人を巻き込まないようにしてるつもりなんだらうけど、あたしの土俵に自分から上がるなんてね」

思わずにやけてしまう。

一キロ先に生い茂る緑の木々。多種多様な植物と生物が育つ人工の大自然であり、空から見ると灰色の街中にぽっかりと緑の区画があるように見えるのだ。当然ながら土も盛られていて、人工島とは思えない起伏のある土地を形成している。

休日には親子連れのピクニックにも利用される国立公園である。決して、人を巻き込む可能性がないとは言えないものの、この周囲で紗葵と事を構えるのならば、確かにそこ以外に適所はない。

目的地は、この蕩けた頭でも十分に予想できる。

ならば、これはかくれんぼにはなり得ない。凧の言うとおり、鬼ごっことして楽しむほかないだろう。——どちらであっても、紗葵が狩る側なのは言うまでもない。

ちらと紗葵は腕時計を見る。

きっちり五分。凧は小高い丘の遊歩道を昇りきり、その向こうの森の中に姿を消した。

「——さあ、行こうか」

唇を舐めて湿らせる。

渴いた喉が血を吸い、魔力を奪い去れと訴えかけてくる。視界が喜悦に赤く染まり、眷獣が宿主の昂ぶりを感じて呻き出す。

勝負の名前は鬼ごっこ。

捕まえたら血を吸って構うまい。何せこちらは、鬼は鬼でも吸血鬼。血を吸うのがアイデンティティだ。

与えたハンデはここまでだ。

これより後は一方的に、粛々と蹂躪していくだけである。



身体能力を可能な限り強化した凧は、背後を気にしつつも国立公園の中に走りこんだ。

芝の広場や森、ピオトープといった人工の自然が広がる広大な公園だ。大規模な区画整理の一貫として整備された場所で、古くは千人以上の人が暮らす住宅地だったという。

人工島が巨大になり、一つの国家になるに当たって、コンクリートとアスファルトの視界は如何にも寂しいということに加えて、二十年前からの大災害の爪痕もあって、一つ大きな自然公園を作ろうという話が持ち上がったのである。凧が小学生に上がったところに完成した自然公園の中は、身を隠すにはもってこいの環境だ。とはいえ、場所は限られる。一般人も利用しているからには、迂闊に巻き込むようなことがあってはならない。

今の紗葵がどれだけ周囲に気を配れるかはまったく分からないのだ。さらに言えば、今だって凧を無視して周囲の人々の血を吸いだす可能性だってある。しかし、そこについては凧への執着心に賭けた。幸い、紗葵はあれから眷獸を暴れさせるこ

ともしていかないようだが。

どこに逃げ込もうかと、脳裏に地図を思い浮かべながら風は森の外周部を走る。遊歩道として、ランニングコースになってる場所だ。鉄札を撒いて人払いの結果を張りながら、風は周囲に視線を配る。そこに、走ってきたのはジャージ姿の麻夜と二人の護衛役だった。

「あ、風君じゃないか。こんなところで珍しい」

目を丸くして驚く麻夜は、額に汗を滲ませており首にはスポーツタオルをかけている。護衛役に就いている二人と共にランニングの真っ最中だったようだ。

一緒にいる護衛役の二人は、確か旧獅子王機関の剣風だった攻魔師である。どちらとも面識があり、それも加えてありがたかった。

「麻夜！ それに麗華さんとくるみさんも！ 助かった！ まずいことになってんだ！」

「え、いや、ちょっと待って」

麻夜は、走っていた勢いのままに話しかけようとすると風は気圧されて足を止める。「そんなに慌ててどうしたのさ」

「紗葵が……」

どう説明したものか。

紗葵がおかしくなって、自分の血を吸いに襲い掛かってきたということなわけだが、そのような荒唐無稽な話を素直に信じてくれるものか。流れから説明すると、そこそこの時間を必要とする。端的に伝えられる言葉を捜そうとしたのだが、凧が言葉を続けることはできなかった。

「うそだろ、紗葵……!?!」

さすがに、驚きを禁じえなかった。

凧の前方二十メートルばかりのところに、いつの間にか紗葵が立っていたからだ。麻夜に気を取られていたとはいえ、ここまで近付かれるまで存在にすら気付かないとはどういうことだろうか。

表情を固め、麻夜の後方を見つめる凧に、麻夜は不審そうな顔で振り返る。

「紗葵？ 凧君もそうだけど、珍しいな」

「麻夜！ 伏せろ！」

「わっ!?!」

凧は麻夜の後頭部を掴んで、前方に押し、姿勢を無理矢理低くさせる。

暴風が吹き抜けたのはその直後のことだった。

「麻夜さん！」

叫んだのは、麗華とくるみのどちらだったのだろうか。炸裂した風音のために判別をつけることができなかった。

「な、何？」

麻夜は突然のことに目を白黒させる。

状況が掴めないのも無理はない。妹が眷獣で攻撃を加えてきたと理解するのに、五秒は必要だった。麻夜の護衛の二人は、苦しそうな表情で膝を屈している。

まさか紗葵に攻撃されるとは思っていなかったために、防御が間に合わなかったのだ。並みの魔族ならば、単独で仕留められる麗華とくるみだが、先手を打たれた時点で敗北の色合いが強い。

「麗華さん！　くるみさん！」

「麻夜さん。離れてください。紗葵さんは、どうやら正気ではないようです」  
くるみが厳しい口調で言った。

何があったのか、確認する時間が取れそうもない。

「まずは凧君と麻夜さんはこの場を離れてください。紗葵は、わたしと麗華で止めます」

「紗矢華さんに連絡して、応援を。この症状……ショッピングモールの事件と似ています」

「ッ……!!」

麻夜が驚愕に目を剥いた。

視線の先の紗葵は、真っ赤な瞳で凧のことを凝視している。麻夜のことはおろか、自分を抑えようとしている攻魔師にすら興味を抱いていない。

「なら、僕も残ったほうがいいじゃないですか。妹を助けるのは姉の仕事ですよ」  
「ことはそう簡単にはいきません。ショッピングモールに居合わせた紗葵さんが、逮捕された二人と同じように精神を不安定化させているのです。これは偶然ではありません。麻夜さんを巻き込まないのが、わたしたちの仕事です。どうか」  
くるみの言葉を聞いて、麻夜は押し黙る。

彼女の言うことはよく分かる。

ショッピングモールで眷獣が暴走した事件には零菜と紗葵が巻き込まれている。事件の解決にも、零菜の眷獣が一役買ったと聞いている。そして、現場にいた紗葵に異常が発生した。その異常が麻夜に飛び火する可能性は否定できず、護衛を仕事とするくるみと麗華にとって、その可能性は極力除外しなければならない。

今の時点では麻夜を逃がすという判断以外には取れそうな選択肢がない。

「てか、紗葵！」

凧は紗葵に大声で問いかけた。

「何？」

「お前、俺に用があるんだろ？」

「そだよ」

「この三人は関係ないよな」

「ないね」

こくり、と頷く。

問答無用で攻撃対象にしているわけでもないらしい。

「でも、なんかムカツとしたし。それに、あたしの邪魔をするなら、みんな敵だ」

轟、と魔力の風が吹く。

異質で重い気配に、五月蠅いほどに鳴り響いていた蝉の声はピタリと止み、鳥たちは危険を察して飛び去った。

「凧君。これ、どういうことかな？」

「俺に聞かないでくれ。後、巻き込んですまない」

「いや、いいよ。どうも、巻き込んだのは妹のほうみたいだしね」

眷獣の召喚か魔術か、どちらにしても今の紗葵には迂闊に背中を見せられない。紗葵の眷獣は遠距離攻撃で力を発揮するタイプであり、魔術にしても同年代ではかなりの腕前である。攻魔官二人が前衛にいるとはいえ、全力で手加減しなければならぬというハンデがある以上、安心はできない。

戦うとしても、どのように止めて、どうやって正気に戻すのかということが頭の上には掛かる。課題は山積しているのに、解決策は何一つ浮かんでこない手詰まり感は、凧の内心に焦りの念を積み上げていく。

もっとも、それは凧の側の事情でしかない。

狩る側であることを自認する紗葵は、対峙する四人の思い通りにはさせない。対

抗手段を構築される前に、先手を取る。

紗葵の様子がおかしいと気付いたのはいいが、紗葵に先手を譲ったのは大きな過ちだ。

ヴェーレスト・ボーゲン  
「曠野の空谷」

その莫大なる魔力と禍々しさはまさしく眷獣のそれだ。咄嗟に、麻夜は自分の眷獣を呼び出して楯とする。

吹き荒れる烈風は、夏の盛りを少し過ぎたばかりの南の島には似つかわしくない肌寒さを持って押し寄せる。麻夜の正面に現れた真っ白に輝く鎧が紗葵が放った凍てつく風を受け止める。

その風は灰色で、砂混じりの嵐だった。凧は麻夜の眷獣が構えた白磁と金剛の大楯に守られる形で砂嵐から逃れる。

「ッ……」

だが、それすらも過程に過ぎないのだと思ひ知ったのは嵐が過ぎ去った直後だった。

世界の色が変わっている。

空は灰色で重々しく、薄らと視界に靄が浮かんでいる。

「これは……空間そのものが眷獣なのか」

別段、世界の構造まで代わったわけではない。色は変わったものの、景色自体に大きな差異はない。ここは、先ほどまで凧たちがいて、紗葵とにらみ合っていた自然公園で間違いない。

ならば、この空間にどのような意味があるのか。眷獣としての能力は何か。見た目ではまったく掴めない。

「初めて見る眷獣だね、紗葵」

「麻夜姉さんは堪えたかぁ。あの二人と一緒に出てってもらいたかったのに」  
紗葵はため息をついた。

面倒な邪魔者が、目的を妨害している。それが、気に入らなくて堪らないとばかりに盛大なため息だ。何故、自分の思い通りの展開にならないのか、苛立っている者のため息だ。

「麗華さんとするみさんは、無事ってことか？」

凧はこの場にいない二人の安否を問う。

紗葵は頷いて答えた。

「邪魔者には退場してもらったただけだよ。ここはあたしの眷獣が支配する領域。  
ヴュースト・ボレゲン 曠野の空谷は結界型の眷獣なんだよ。結界は向こうとこっちを区切るもの。境を通れるのは、認められた者だけ、なんだけど」

紗葵はちらと麻夜を見る。

「麻夜姉さんの眷獣を押し出すだけの力はなかったか」

「降参するかい？」

「やだ」

問答の余地はなく、すでに麻夜を敵として認識してしまうほどに狂っている。ギチギチと、右手に現れたクロスボウが唸る。

「あたしは風の血を吸いに来た。今までずっと、我慢してた……麻夜姉さんだって、本心ではそうなのがいい子ぶって。気に入らないなあ、そういうの。そうやって、すました顔して風に取り入って、横取りしようとしてる！ 悪い姉さん！ あたしの血だ！ それは、あたしの、ものだ！」

怒鳴りながら紗葵は自分の首を引っ掻き、髪をかき乱す。地団太を踏むのが子ど

もならばまだ可愛いものだが、それが脊獣を従えているとなると笑えない。今の紗葵は子どものがままに脊獣を持ち出すほど不安定な状態だ。

「凧君、好かれてるねえ。やっぱり、古城君の血縁なだけあるよ」

「何だよそれ、誉めてんのか？」

「いや、皮肉ってんのさ」

軽口を交わしつつも、油断なく紗葵を見つめる。

ヴェースト・ボゲン  
曠野の空谷は空から魔力の灰を靄のように降らせ続けるだけで、これといった干渉があるわけではない。

佇む紗葵は、引き攣った笑みを浮かべ、小さく唇を震わせる。

瞬く間に風が形を成して、巨大なクロスボウを作り出した。いや、それはもやほクロスボウと呼べるものではないだろう。

何せ、四足歩行の生き物の姿をしているのだ。

身体は半透明で、ごつごつとした皮膚に覆われていて、頭の部分に弓が横向きに備え付けられているという歪な脊獣である。

ヴァイント・ホーゼ・シュペラーレ  
「捻じ切る颯風……シュテールバリスタ！」

大気が魔力で加工され、大型の矢となって弓に番えられる。太い四肢が地面に爪を立て、その身を固定する。その姿はなるほど大型弩砲バリスタの名を冠するに相応しい威容であって、凧はさすがに軽口も叩けず口をつぐんだ。

「フオイア！」

無情にも紗葵は攻撃命令を下し、台風を思わせる暴風が矢と化して解き放たれた。

## 第二部 四話

それは矢というよりも砲弾というにふさわしい凶悪な一撃であった。圧縮空気による砲撃は、地上に真っ直ぐに線を引き大気を捻じ切って風と麻夜を打ち砕かんと襲い掛かった。

攻撃性能も防御性能も上位陣には及ばない風の力では、とても紗葵の攻撃を受け止めることはできない。迎撃などさらに不可能な話である。風ではどうすることもできない暴威を阻むのは、紗葵と同格の吸血鬼である麻夜の眷獣だ。白銀の鎧と金剛石の楯を持つ防御の眷獣ル・ブランは、輝く楯を全面に押し出し、その巨体すらも壁として紗葵の空気砲を受け止めたのである。

楯から広がる魔力の膜が、より広範囲に広がり風の炸裂すらも弾き返す。

空気砲が勢いを失うと見た風は、未だ暴風の名残を留める膜の外側に身を躍らせる。

「ハッ———！」

霊力をこめた警棒を一閃する。

凧が自慢できる数少ない技能が霊力制御であった。霊媒として最高峰の力を持つ凧の霊力は吸血鬼らに力を与えると同時に魔族にとって致命的な毒を生み出すこともできるのである。

警棒はこのとき、凧の霊力を吸って擬似的な聖剣となり、白亜に煌めく斬撃を飛ばした。

擬似聖剣はアルディギア王国に伝わる対魔族用の兵器である。第四真祖が、アルディギア王国を掌中に納めた際に流出した技術の一つであり、霊力を主戦力とする攻魔師たちの武器に転用されている。凧が振るう警棒は、リスクの高い眷獣を使わずに戦えるように、特別に支給されたものである。

グリップ部分に搭載された霊力の簡易増幅回路が凧の霊力を増幅し、刃に加工する。放たれた光は、物理的な破壊力すらも伴い過たず紗葵の眷獣の前足を斬りつけた。

発声器官がないのか、苦悶の声を上げることのなかった捻じ切る颯風ツイント・ホセ・シュビラーではあったが、身体を支える足を斬られたことで体勢を崩すこととなった。重量を四本の足で支え、強大な一撃を放つ据え置き型の砲台にも似た運用を求められるこの眷獣

は、本来の用途としては敵の眼前に召喚するものではないのだろう。敵の攻撃範囲外から長距離砲撃を加えるのが正しい運用であり、凧が攻撃できる場所に召喚されたのは、眷獣にとっても不本意だったに違いない。

「紗葵！」

凧は身体能力を強化して紗葵に向かって走り出す。

今ならば、人間部門での短距離走世界記録保持者をも上回ることができるだろうと思えるくらいの疾走である。しかし、相手は吸血鬼だ。もともとの身体能力からして人間とは比較にならない。動体視力も含めて、凧よりも紗葵のほうが優れている。

「シュティールアルムブラスト」

変化は一瞬。一秒とかわからず、巨大な眷獣は紗葵が片手で取り扱える程度の大きさのクロスボウへと姿を変えた。

ヴァイント・ホーゼ・シュビトラレ  
捻じ切る颯風は、意思を持つ武器であると同時に獣の姿を有する変形眷獣なのだ。

躊躇いなく、紗葵は引き金を引いた。

凧は感じるままに姿勢を低くする。

おおおん、と咆哮にも似た風鳴りが凧の耳元を掠めていく。

魔力によって加速した風の矢は特区警備隊が正規採用しているライフルよりも初速が速い。正面から撃たせては、回避できるはずがない。

しかし、凧には未来視の眼がある。

優れた霊能力を持つ凧ならではの霊眼で、紗葵の狙いを先読みして回避したのだ。

さらに一歩、凧は踏み出した。

クロスボウは尚も凧に狙いを定めている。

これは賭けだな、と頭の片隅で思う。

ヴァイント・ホーゼ・シユレラーレ  
捻じ切る颯風の特性は、凧もよく知るところではある。

打ち出す矢は空気を魔力で成型した物理攻撃。その特性から魔力無効化能力を持つ零菜の槍の黄金ハスタ・アウルムへのアンチとして機能しうる。

また、一度放たれた矢は途中で進路を変えることはない。

射線から外れれば、当たらないのは銃弾と同じだ。先読みと身体能力、反射神経を駆使して喰らい付くことは不可能ではない。

二射目で頬が浅く切れて血が滴る。痛みを無視して、次を視る。紗葵までは残り十メートル弱だ。駆け抜けるのに、一秒もいらぬ。

だが、三手先を見通す凧の霊眼が映し出したのは、紗葵を取り押さえる己の姿ではなく、紗葵の矢を強かに浴びて地に伏せる自分の姿だ。

「その眼は知ってるよ！」

声はまったく別のところから聞こえた。

目の前にいたはずの紗葵が姿を消した。凧は瞠目したものの、すぐに飛び込み前転の要領で地面に身を伏せる。側面から襲い掛かってきた矢を辛うじて躲すことに成功する。

「転移……！ 眷獣か！」

その正体を凧は即座に看破する。

空間転移能力を持つ眷獣だ。紗葵が凧の家に入り込んだのも、この公園にいつの間にか現れていたのもすべて、この眷獣による転移があったからだ。

そして凧が紗葵の眷獣の特性を知るように、紗葵もまた凧のことを知っている。だから、誘ったのだ。先読みしても避けきれないように、準備を進めていたので

ある。すでに、クロスボウに矢は装填されている。凧の想定よりも早い——空気を取り込み、矢の形に成型するというプロセスが必要な紗葵の眷獣には連射ができないというデメリットがあったはずなのに。

「単発式は時代遅れだよね」

紗葵がしたのは至極簡単なことで、事前に矢を用意しておいたというだけだ。銃と同じだ。弾倉に銃弾を込めておけば、弾が切れるまでは連続して射撃ができる。紗葵の眷獣は進化している。少なくとも、凧の知識にある捻じ切る颯風よりも、厄介な形で。

「く……!!」

三連射。

狙いは凧の手足で、身動きを封じるつもりだ。避けることはもはや不可能。未来視は明確に凧の敗北を告げてくる。だが、未来視は数ある未来の中で最も可能性の高い事象を予報しているに過ぎない。適切に対処すれば、未来を回避することは可能である。これまで、そうしてきたように。咄嗟の判断が、未来を変える。

紗葵の眷獣が放った三つの矢を避けることができないのならば、防ぐしかない。

幸い、未来視でどこを狙っているのかは分かっている。後は自らの血肉に等しい眷獣を顕現させて、これを防ぐ。

呼び出すのは金剛の楯と脛当。身体に密着する防具として具現する、意思ある武器の一つ。あらゆる攻撃を反射する、凧が有する最強の守りだ。本物の吸血鬼の眷獣の攻撃ですら、鈍き金剛は弾き返す。絶対無謬の楯と脛当が紗葵の風矢を受け止める。紗葵を傷付けないように、弾き返す場所を感覚で調整する。眷獣の感覚が凧にも明瞭に伝わってきて、コンマ一秒以下の判断を即座に行う。

しかし、想定外だったのは弾き返すべき矢が消えたことだ。

紗葵は鈍き金剛に矢が触れるか触れないかといったところで、矢が纏っていた魔力を消したのである。結果、空気を矢の形に押し込めていた外殻が崩れて内側から圧縮された空気が解き放たれる。

それはさながら爆弾のようで、耳障りな轟音と共に凧を吹き飛ばした。

楯と脛当による守りは一部分しか守れない。上半身と脛より下の部分は影響がほとんどないが、膝と太ももの辺りは至近から強烈な打撃を受けてしまった。

いくら未来視ができたところで、限界がある。反応できなければそれまでだ。凧

にできたのはダメージを受けるであろう箇所を重点的に強化することだけであり、それすらも無傷で凌ぐには強度が足りなかった。

仰向けに転がる風は、両足の激痛に歯を食い縛る。

「うぐ……！」

呻くも起き上がることができない。

風の爆発は、風の両膝を完膚なきまでに叩き壊していた。常人ならば、一生使っている物にはならないというほどの重傷である。痛みがあるのは神経が一応機能しているからなのだろうが、それも太ももの半ばからであり、膝より下についてはまったく分からない。膝下は血みどろになっていて、まったく動かない。繋がっているのが目視で確認できる程度である。これほどの重傷を風の再生力と治療術でどうにかできるだろうか。できないということはないだろうが、完治に一週間は必要だろう。つまりは今の時点では、まったく役に立たない。

「くそ……」

痛覚を魔術で遮断する。痛みで涙が滲むが、確認が取れたからには痛覚の必要はない。

「うう、痛い、痛いなあ、凧」

紗葵はふらりと凧に歩み寄ってくる。

紗葵は額から血を滴らせ、衣服もボロボロになっている。ところどころに血が滲み、足も引き摺るようにしているのに、笑みはずっと張り付いたままだ。

至近距離で風の爆発を受けたのは、紗葵も同じだったのだ。あくまでも自然現象だったこともあり、紗葵自身にも風の爆発は襲い掛かっていた。むしろ、防御の眷獣を出していた凧に比べれば、紗葵は全身で爆風を受けていたはずであり、身体中に血痕がついているのも、かなりの重傷だったからだろう。

「う、ふふ、こんなになっちゃった、よ。血だらけ。ハハ、痛い痛い。凧に痛くされちゃったあ」

けれど、紗葵は吸血鬼だ。人間よりも遙かに強靱で、再生能力と不死性は魔族随一である。再生障害も何もないただの爆風ならば、すぐに治る程度の傷にしかならない。

事実、紗葵は引き摺っていたはずの足で、凧に近づいてくる。すでに、普通に歩けるようになっていたのだ。分かってはいたことだが、反則だ。生物としての性能

の限界値が、まるで違う。

「凧も怪我してる。ふふ、ふふふふふ……血の匂い、血の匂いがする。もっと、もっと痛くしてあげる。もっと、血を流して、もっとあたしに感じさせて」

ふらふらと頭を揺らしながら、紗葵は鍬を凧に向けて射放った。

威力を抑えた風の矢は凧の肩に向けて真っ直ぐに進んでくる。両足の自由を失い避けようのない凧では、眷獣によってこれを防ぐほかない。金剛石の楯で全面を覆った凧の前に颯爽と割り込んだのは紅蓮に輝く西洋甲冑だ。炎と熱風を撒き散らし、燃える剣で紗葵の風矢を打ち払う。

「凧君！ 無茶しすぎだ！」

駆け寄ってきた麻夜は凧の隣に膝を突く。

彼女自身、紗葵がここまでするとは思ってもいなかったのだろう。暴走しているも、どこかできちんと加減すると。その考えは正しい。紗葵はきちんと加減して、凧を殺すことのないようにしている。目的のために手段を選ばなくなったというだけで、力を誰彼構わず振り撒くような暴走の仕方ではないのだ。だが、加減の上限が麻夜が思っていたものと違いすぎた。

まさか、凧の手足を壊してでも自分の目的を達しようとは。

「すまん、麻夜。助かった」

「謝るのは僕のほうだ。紗葵がここまでだって分かってたら、みすみす凧君を危険に晒さなかった」

跪いた麻夜は、凧の傷を見て顔を歪める。

赤黒い傷口の中に白い欠片が見える。患部はむき出しで、砕けた骨の欠片が見える。傷は貫通してはいないが、上半分がミンチになっているような状態だった。最早、後ろ側の肉と皮と筋で繋がっているだけだ。

「とりあえず、逃げよう。あの娘の相手をしながら、君の治療はできない」

「麻夜姉さん、何してるの!? 凧を連れて行かないでよ! これからなのに!」

「何がこれからだよ。頭を冷やすんだ、紗葵! こんなことして、ただじゃすまないよ! 紗矢華さんとか古城君にだって叱られるし、法律にだって反している!」

「そんなの知らない! 関係ない関係ない……関係ない! そこどいて……どいて……」

血に餓えた獣のように吼えて紗葵は風矢を放つ。無造作に放たれた矢は燃える鎧

の眷獣——ル・ルージュの身体と剣で受け止められて弾かれる。炸裂したとしても、それは物理現象で魔力の塊である眷獣には何の効果も与えない。

「く……ル・ブルー。紗葵を止めて」

魔力消費に苦悶の表情を浮かべながら、麻夜は青き鎧を呼び出す。凍結の鎧は、振り下ろしたハルバードで地面を砕く。吹き上がった砂と土と石を押し退けて、地面から氷柱が立ち上がった。

「ッ……！」

それは氷の壁であり、氷の檻であった。

紗葵の周囲に広がる凍結の檻が、瞬く間に少女の身体を取り囲む。

「特別製だ。簡単には出られないよ」

麻夜は二体の眷獣を消して、白い鎧ル・ブランを召喚し、凧を抱えさせる。ル・ルージュやル・ブルーは人を抱えることはできない。燃えているわけでもなく、冷たいわけでもないル・ブランは運搬には最適だ。

「痛ッ……」

「さすがに、この重傷じゃ痛覚遮断も限度があるね。ゴメン、我慢して。場所を移

すから」

麻夜は眷獣に凧を抱えさせたまま移動を始める。

空は相変わらずの灰色で、紗葵の魔力で胎動している。果たして、どれくらいの範囲がこの眷獣に覆われているのか定かではないが、森の中に入れば身を隠すことはできるだろう。それくらいの大眷獣を眷獣が覆っているのだ。

しかし、これだけの大眷獣を紗葵はどうやって維持しているのか。

若い吸血鬼は眷獣を一体呼び出すだけでも一苦勞なのだ。鍛錬と時間の経過が扱える魔力の質と量を増やしていくとはいえ、百年も生きていない吸血鬼では二体同時使用でも体力を一気に持っていかれるほどなのだ。

紗葵は、境界眷獣を維持したまま強力な眷獣を消耗している様子もなく平然と使っていた。

この境界眷獣が紗葵に都合のいい空間を作り出しているというのなら、この場にいる限り紗葵に対して不利になっていく一方だ。とはいえ、脱出できるかどうかはまったく不明。凧を抱えたまま、あの境界を渡るのは難しそうだ。

紗葵から離れて挽回の機会を探る。それが一番賢明だろう。麻夜は遊歩道を外

れて、道なき道に踏み込む。自然公園ではあるが、他国にあるような超大規模な公園ではなく、人工的に整備された公園である。たとえ道を見失っても出られなくなるようなことはない。後はどこに身を隠すのか、ということ問題となるが、上空を覆い隠す灰色の天蓋が紗葵にどのような影響を与えているのかはつきりしないために、絶対に安心という場所はない。仮にあの脊獣が感覚器官をかねているのなら、麻夜と凧がどこにいらつとも紗葵に居場所が筒抜けとなってしまうからだ。

とはいえ、事実確認が取れない以上は必要以上に警戒していても仕方がない。紗葵から距離を取り、凧を休ませることができればそれでいい。

多い茂った南国の木々はさながら熱帯雨林のように密集し、土の湿った匂いが鼻をくすぐる。上を見上げて幅の広い葉が幾重にも重なった緑の天蓋が視界の九割を占めている。僅かに見える空は、紗葵の色に染め上げられているが、そうでなくても空の色が分かる程度の視界でしかない。

だが、それでいい。隠れているという実感は、それだけで安心感をもたらす。油断に繋がってはいけませんが、余裕を持つことは大切だ。

凧を巨木の幹に横たえる。千切れかけた足がぶらぶらと揺れて痛々しい。傷口を

見ると吐き気を催してしまうので、麻夜は目を背けて凧の隣に座った。

「痛い？」

麻夜は尋ねた。

当たり前前で、聞く必要性もないことだった。しかし、話の取っ掛かりが掴めず、つい聞いてしまったのだ。

「痛いよ」

凧は特に痛がるそぶりも見せないで言った。ここまで損傷が激しいと止血も儘ならない。傷口が大きいので、感染症も不安だ。魔術による止血と治癒は、凧の生命活動に支障を来たさないとところまでは回復させている。しかし、傷を完全に塞ぐことはできない。専門の施設に運び込み、相応の治療を施すのが一番だ。そのためは、紗葵を止めるか、この眷獣の世界から脱出する必要がある。

麻夜は念を入れて、自分たちの周りに半径一メートルほどの結界を張った。彼女の母は魔女の資質を持つ。麻夜自身は悪魔と契約しているわけではないが、それでも魔女術を簡略化した魔術を修めている。紗葵が扱う魔術とはまったく異なる系統の魔術だ。紗葵が、魔術に高い適性を持っていても、そう容易く解析されることも

ないだろう。

「そろそろ、紗葵に何があったのか教えてくれないか？」

麻夜は凧に尋ねる。

「俺もよく分からない。いつの間にか、紗葵がうちに来ててな。それで、いきなり襲われた。多分、うちに来る前からああいう状態だったんだろうな」

「そうか」

「何か、心当たりがあったりするか？」

「心当たりといってもはっきりとはしないけど、多分この前の眷獣暴走事件があっただろう。多分、あれだ。あのとき、紗葵も現場に居合わせたから、そこで何かされたんだろうね」

「された……やっぱり、誰かが紗葵を操ってんのか」

「そうと考えるしか辻褄が合わないと思うよ。まあ、これは僕の希望的観測でもあるんだけど。そうでなければ、紗葵は自分の意思で眷獣を使ったことになっちゃからね」

街中で、自分の意思で眷獣を召喚するというのは、非常事態でもなければ厳禁で

ある。聖域条約下においても、攻魔師に討伐される可能性があるほどだ。それだけ、文明化された社会では眷獣という個人が持つには大きすぎる力は危険視される。

紗葵が眷獣で暴れまわれれば、たとえ皇族と雖も何かしらの処罰は免れない。ただし、それが誰かの悪意によって操られていただけだとすれば、紗葵は被害者として扱われるだろう。幸いと言っては語弊があるが、まだ、紗葵が攻撃を加えているのは麻夜の護衛の攻魔師も含めて身内だけの少人数だ。

「やっぱりか」

麻夜はポツリ、と呟いた。

「何が？」

「紗葵の眷獣……この空を覆う眷獣の能力が何かって考えてたんだ。多分、結界で覆った範囲内の魔力を吸ってる。少しずつだけどね」

「魔力の収奪能力？」

「結果なんて言うくらいだから、ただ敵を分断するだけだとは思ってなかった。さっき、僕が張った隠蔽結界からも少しずつ魔力が抜かれてる。うん、魔術を使ってなかったら気付かなかったな」

常に魔力を消費する魔術を使ったことで、魔力の流れに違和感を覚えた。

紗葵が眷獣を複数同時に使って疲弊しなかったことと併せて考えると、結界内のすべての魔力源から魔力を吸っていると考えるべきなのだ。おそらくは、木々や虫、鳥や小動物も対象にしている。決して命には影響しない範囲で、魔力を少しずつ掻き集め自分に還元しているのだ。

「森は失敗だったね。ここは魔力源にする命が多すぎる。実質、この結界の維持費は零だ」

「それがマジなら反則だ。眷獣をノーリスクで使うなんて、羨ましすぎる」  
凧は肩を竦める。

眷獣を使うごとに寿命を削り、身体を削っている凧からすれば羨望すら覚える。

「ねえ、凧君。君、回復系の眷獣とか持っていないの？」

「……あるにはあるんだよね。一応」

「え、あるの？」

麻夜は意外そうな顔をする。

「ああ。でも、本当に死ぬってときにしか使うなって言われてんだよね。ばあちゃ

んに」

「そこまで？」

「反動が酷い。他のヤツに比べても、あいつほどキツイ眷獣はないな」

「そう」

凧の眷獣は使用に多大なデメリットがある。寿命を削ったり、身体のだこかに裂傷を生じたりといった問題があるのだ。それ以上の反動となると、確かによほどの事態でなければ使えない。使ってみれば、などとは口が裂けても言えないのだ。

ポツポツと雫が落ちてくる。

見上げれば豊かな緑の合間から雨水が滴ってくる。

「雨だ」

天気予報では晴れのち曇りのはずだったが、どうしたことか。

この結界は雨は通すらしい。敵対する意思を持たないからだろうか。それとも、魔力源である植物を枯らさないようにしているのだろうか。

南国の島国である暁の帝国は、降雨量が多い。特に夏から秋にかけての台風の時節は、大嵐になる。今も、大型の台風が近付いてきていると報じられているくらい

だ。この雨も、その影響なのだろうか。雨が止む気配もなく、それどころか徐々に強まってく。

雨を遮るものは木々の葉だけで、それすらも今は心もとない。

「まいったね」

「ああ。傘持って来てないな」

冷たい雨粒が身体を冷やす。むしろ夏の暑さに火照った身体にはちょうどいいかもしれない。

麻夜は唐突にジャージの上着を脱ぐ。

ジャージの下は、タンクトップ一枚だ。

「おい、何してんだよ、いきなり」

「雨が傷口に入るでしょ」

麻夜は尻の膝の上にジャージを被せる。

「いいのか、こんな使い方して」

「別にいいよ。これくらい」

ジャージが土に汚れるのも気にしない。

雨はすっかり土砂降りとなっていた。

滝のような雨は、慣れ親しんだ南国の前である。しかし、こうも長く雨に打たれるのは久しぶりだ。

森の木々では雨宿りにもならない。滴る水が、身体を濡らし体温を奪っていく。ちらりと真横に視線を向けると、麻夜が青時雨に濡れた前髪を弄っている。肌張り付くタンクトップが、扇情的な身体つきを強調し、黒い下着を浮かび上がらせている。

「ん？ 何？」

「いや、何でもない」

凧は視線を麻夜から外す。

「何、見てた？」

にやり、と麻夜は笑う。

「何だと思う？」

「胸」

「違うわ」

違わないが。

分かってはいたが、麻夜は少年のような雰囲気を持ちながら身体は非常に女性的だ。目のやり場に困って仕方がない。

「あまり見ないで。これでも、恥ずかしいからさ」

「ああ、まあ、そりゃあな」

何と言えばいいのか言葉に困る。

麻夜は頬を紅くして恥ずかしさを誤魔化すように、

「紗葵は、どうしてるかな」

「あの氷は」

「もう抜かれてる。今は、僕らを探してるんだろうね」

麻夜の魔術が何とか誤魔化している。見つければ、また戦闘になるだろうが、風がこれでは足手まといにしかならない。敗北は必至だ。

「風君」

「ん？」

「思ったんだけどさ。風君の眷獣……僕の魔力でどうにかならないかな？」

「は？」

何を言っているのか、理解ができなかった。

確かにアスタルテの眷獣の消費魔力を古城が肩代わりするなど前例がないわけではない。しかし、凧についてはその試みがすでに失敗している。凧の眷獣は、なぜか他者の肩代わりを許さない。

「それは知ってるけど。でも、僕が凧君に魔力を供給すれば話は別じゃないかなって。眷獣に直接魔力を渡すんじゃないってさ、凧君を経由すればどうかなって」

「ああ、なるほどなあ。試したことないから、どうかな。第一、どうやって？」

「そうだね……」

麻夜はしばらく視線を彷徨わせる。どう伝えたものか、悩んでいるという風にやがて、葛藤を振り払うように麻夜は口を開いた。

「手っ取り早いのは、君を僕の血の従者にすることだよ」

「……だけど、それは」

「うん、そう簡単にはいかないよね」

血の従者についても、以前に失敗している。無論、臓器の移植といった確実に血

の従者にする方法を取ったわけではないので、その気になれば風を血の従者にすることは不可能ではないのだろうが、今の風はかつてののように命の危機に瀕しているというわけでもない。不用意に血の従者を作り出すのは、非常に問題のある行為である。

「だからさ、同じような方法で、君と魔力のパスを作るってのはどうだろう。血の従者にはしないけど、僕が君に魔力を供給する道を作れば、どうかなって」

「それは、確かにアリかも知れないけど。どうやってするんだ？」

「そんなの、簡単だ。僕が君の血を吸えばいい。吸血鬼は血を媒介にする魔族なんだからね。僕自身も紗葵に対抗できる」

「そうか。うん、そうだな」

それに、麻夜の魔力が供給されれば、膝の怪我也治せる。

「紗葵を止めるためだ。背に腹は代えられないな」

「何か、それ僕に血を吸われるのが嫌だって言ってる感じなんだけど」

「いや、そんなことないぞ」

「そう？　じゃあ、遠慮なく、貰うから」

「う……?」

麻夜は凧の目を手で隠し、首に牙を突き立てた。目隠しは、羞恥心からだろう。麻夜にとっては初めての吸血だが、やり方は本能が知っている。牙を突き立てるべき場所も吸い方も重々承知の上で、それでもおっかなびっくり牙を凧の肌の下に埋め込む。滲み出る血の味が口腔内に広がって、麻夜は膨らんでくる多幸福感に肌を打つ雨の冷たさも忘れてしまう。

血を媒介にして、凧との間に魔力の道を作り出す。そして、吸い出した血を自分の力に還元する。

一通り血を吸った麻夜は唇を離す。凧の首についた噛み痕が、自然と消えていく。治療能力が上昇している証である。

凧は麻夜のジャージを取って膝を確認すると、怪我をする前の状態に戻っているのが分かった。驚くべき回復力だ。

「治ってる」

「成功、だね。ふふ、これで君は僕の血の従者だ。二、三十分の間だけだけどね」  
麻夜の魔力が凧の体内から排出されるまでの間だけ、凧は麻夜からの魔力供給を

受けられる。長く見積もって、三十分。それが限度だ。

「でも、これならまた戦えそうだ。紗葵を抑えられる気がする」

「そう？　じゃあ、紗葵を捜しに行こうか」

立ち上がった麻夜はジャージの袖を腰の辺りにまきつけて固定する。さすがにずぶぬれになったジャージを羽織る気にはならないらしい。凧としては、きちんと隠すところを隠して欲しいのだが。

「あ」

麻夜が口を開けて棒立ちになる。

麻夜が見つめる先に視線を向けると、草木の陰に紗葵が佇んでいた。

「何してんの、麻夜姉さん」

「何って？」

「凧の血、何吸ってんの？」

ひりひりとした感覚が肌を撫でる。紗葵の魔力が周囲に満ちていくのが分かる。

「あたしが血を吸うって言ったじゃん！　なんで、麻夜姉さんが吸ってんの!？」

順番が違うじゃん！　割り込みしちゃダメでしょ！」

「いや、まあ、そうなんだけど……」

紗葵の剣幕と正論に麻夜はどうしたものかと頭を搔く。言っていることは正しいが、その過程を思うと悪いのは明らかに紗葵のほうなのだ。

「この、もう我慢できない。凧も麻夜姉さんも纏めてやっつけてやる！——  
残虐なる合成獣！」

現れたのは体長およそ七メートルにもなる巨大な怪物だった。青く燃える身体は多数の動物の寄せ集めでできていて、獅子の頭と虎の胴体、蠍の尾に蝙蝠の翼と名の通りキメラを思わせる姿だった。

「俺が抑える。麻夜は紗葵を」

凧は前に進み出る。木々を蹴散らして飛び掛ってくる眷獣に、凧もまた眷獣を召喚して応戦する。

「獅子の右腕!!」

雷光の輝きが緑を焼く。恐るべき魔力の集合体が紗葵の眷獣を真正面から受け止めた。

それは、巨大な獅子の右腕だった。雷でできた五本の爪で、キメラを頭から鷲掴

みにする。

「な———！」

紗葵が驚愕に目を剥いた。

「おおおおおおおおお！」

凧自身、まさかこれほどの変化があるとは思ってもいなかった。しかし、これは好機。麻夜からの魔力でその力を遺憾なく発揮できる雷の眷獣は、すぐさま紗葵の眷獣を押し戻し、ついには地面に叩き伏せるまでになった。

地響き。次いで、雷撃の渦が周囲に拡散し、炎が上がる。

「紗葵！」

麻夜が紗葵に向かって飛び掛った。眷獣を失い、消耗したところを狙ったのだ。

「ブルータル・シメル残虐なる合成獣シュティールシュヴェーアト！」

「ツ———ル・ノワール！」

紗葵の手に現れたのは青く燃える剣の眷獣。幅三十センチ、刃渡り一メートル五十センチばかりの大剣である。凧が打ち倒したキメラが剣に姿を変えたものだが、紗葵が持つにはあまりにも大きすぎる。そして、大剣が現れた瞬間に麻夜は漆黒の

鎧を着込み、メイスを振るっていた。

メイスと剣がぶつかり合い、激しい魔力の嵐が吹き荒れる。

黒と青のぶつかり合いは、どちらに軍配が上がることもなく引き分けに終わる。

眷獣の衝突が生み出した破壊によって、直径二十メートルばかりの木々が砕かれ、燃えて倒された。さながら決闘場のように広がった空間の中で凧と麻夜は紗葵と睨み合うことになった。

眷獣を着込む麻夜と眷獣の形態を変化させる紗葵。どちらも、これまでの眷獣の常識では考えられない特殊な能力である。それが、第四真祖の血縁の特性なのだろうか。凧はふと思わずにはいられなかった。



## 第二部 五話

青炎の獣が咆哮する。

放たれる炎が地面を焼き、可燃物を瞬く間に炎上させる。その炎を雷光を纏って麻夜は潜り抜ける。装着しているのは黄金の鎧。雷を従える最速の眷獣だ。二挺のトマホークですれ違い様に相手を斬り付ける。

「く……」

呻くのは麻夜だ。鎧で守ってはいっても、灼熱の炎の塊である眷獣への近接戦はそれなり以上の厳しさである。紗葵を直接叩きたいところだが、残虐なる合成獣は紗葵への攻撃には過敏に反応し、我が身を楯にして麻夜の進路を塞いでくる。速度が売りのル・ジョーヌであっても、攻略は難しい。凧がしたように、眷獣そのものを叩いてから紗葵を狙うしかないのだろうか。

凧の援護が欲しいところだが、困ったことに凧にも紗葵の眷獣が襲い掛かっている。

サイント・ホーゼ・シムピラーレ  
捻じ切る颯風の獣形態が地面を踏み鳴らして凧に挑みかかっているのだ。射

撃と行進を間断なく繰り返し、凧の眷獣と互角に戦っている。まさか、本当に三体の眷獣を平然と使いこなすとは思わなかった。この結界の中にいる限り、麻夜たちは決して紗葵に対して優位には戦えない。

麻夜は凧の血を吸って絶好調とはいえ、一度に使える眷獣の上限が著しく上がったわけではない。二から三体が限度で、それも魔力の消費量を考えれば長期戦には向かない。

「ハアッ！」

麻夜は二挺のトマホークを投擲する。

左右から弧を描き、引き付け合うように炎の眷獣を挟撃する。腹部と背中を強かに斬り付けられた残虐なる合成獣は、怒りに任せて炎を撒き散らす。土砂降りの激しさが、延焼を防いでくれているが、余り長く戦いが続けば自然公園が火の海になってしまう。

「まったく、困った妹だな！ ル・ブルー！」

麻夜は鎧を交換する。瞬時に黄金から青の鎧を纏った麻夜は、凍気の魔力で灼熱を押し返す。

周囲には水気が満ちている。氷の力を存分に発揮することができる環境だ。麻夜の魔力は空から降り注ぐ大量の雨にも干渉し、残虐なる合成獣の頭上に数え切れな  
いほどの氷の槍を形成した。

「ツ——ブルターレ・シメレ残虐なる合成獣！」

炎の眷獣は青き咆撃で空の氷を消し飛ばす。

燃え盛り身体の魔力をそのまま使った息吹は、恐るべき威力である。砲台としても優れた眷獣と言えるだろう。その巨体の真下に、麻夜は踏み込んだ。ハルバードを全力で首元に叩き込む。

「ぐ、うう……」

冷気による守りがなければ全身大火傷を負っていただろう。それほどの熱量を持つ眷獣に突き込まれたのは、絶対零度の刃である。背反する属性の攻撃を受けて、両者の眷獣は激しく動揺する。

「頑張れ、ル・ブルー！」

「麻夜姉さん、そこ、どいて！」

紗葵が眷獣に魔力を注ぎ込んだ。暴れるキメラは麻夜を振り払い、爪を振るって

攻撃を加える。

——まったく、暴走して行くせに……。

麻夜は内心で舌打ちをする。

紗葵は暴走している。それは間違いないが、その暴走は善悪の区別がつかなくなり、我欲を優先するようになるといった形での暴走のようだ。つまり、シヨッピングモールで感情任せに暴れまわった吸血鬼とは微妙に暴走の仕方が異なっているのである。前後不覚になっていない。判断能力を残している。それが、厄介だった。暴れまわることが目的ではなく、風の血を吸うことが最終目的だからだろうか。

「ほんと、もてる男だね、凧君は！」

残虐なる合成獣の前足にハルバードを叩きつけ、怯んだところで顎にアッパーカットを放つ。凍結の拳と燃える顎の激突だ。

その直後、目の前に一枚の鉄札が舞い降りてきた。その札が突如として強烈な光を放つ。閃光弾のような光は麻夜の視力を一時的に喪失させる。

紗葵の魔術だ。

想定外の攻撃に曝された麻夜の鎧を、カメラの豪腕が弾き飛ばす。

「うぐ……！」

吹っ飛びながら、麻夜自ら魔術を練り上げて視力を取り返す。魔術の腕前はほぼ同等。術式が違うものの術師としての技量はそう変わらない。視力をいつまでも封じられることはない。

しかし、火力不足は否めない。

紗葵の眷獣は強力だ。殴り合いで負けているとは思わないが、それでも一撃の大きさが違う。鎧を着て自分の防御力を高めるというのは、本体が脆弱な吸血鬼の弱点を補う回答の一つではあるが、破壊範囲が人が個人で出せる程度の範囲に納まってしまうが難点だ。鍛錬を続けていけば、数十年の後にはビームが撃てるようになるかもしれないが、今の時点ではどこまで可能か。眷獣を纏ったまま、眷獣の力を最大限に発揮させるといえるのは、中々難しい問題なのだ。

「だったら——！」

飛び退き、炎を躲す。

爆炎を冷気で凌ぎ、新たに眷獣を呼び出す。

「ル・ブラン、ル・ルーシュ……眷獣融合」

ギチリ、と身体に多大な負荷がかかるのを奥歯を噛み締めて堪える。

身に纏う眷獣が変わる。白と黒の眷獣が合成されて、灰色の眷獣に生まれ変わった。眷獣を融合し、その能力を跳ね上げるのは、何も麻夜の専売特許ということではない。一部の吸血鬼が持つ技能の一つであり、珍しいながらも使い手はいる。だが、やはり才能がなければ眷獣融合を使うことはできないのだ。麻夜の吸血鬼としての資質の高さを物語る能力だ。紗葵の眷獣変形と比較してもそんな色ない才覚と言える。

灰色の眷獣は右手に黒のメイスを持ち、左手に金剛石の楯を構えていた。出力も、大幅に増加している。

「だあああああああ!!」

威勢よく怒鳴り、炎に正面からつつこむ。金剛石の楯が紗葵の炎を跳ね返し、重力によって加速したメイスが残虐なる合成獣の頭を打ちのめす。

地面がひび割れて、魔力の嵐が吹き荒れた。

「マジで死にそうだぞ」

凧は風の矢を潜り抜けてぼやいた。

半透明で見難い風の眷獣が相手だ。紗葵の意識は高速で移動し攻撃を仕掛けている麻夜に釘付けになっているので、こちらはある程度余裕を持って対処できるが、眷獣自身にも意思はある。凧を倒せと命じられた捻じ切る颯風は、その命令を適切に履行するために風の矢を吐き出し続けている。手加減はしてくれているのだろう。砲撃というほどの威力ではない。しかし、一度に射出される風の矢は最大でも二十本に達する。それが銃弾以上の速度でばら撒かれるのだから、普通に考えても、凧は肉片にされてもおかしくはないのだ。そうなっていないのは、麻夜からの魔力供給でリスクを回避して使えるようになった眷獣のおかげである。

緋色に燃える二角獣の頭を楯のようにして、凧は飛んでくる矢を迎撃する。

二本の角を音叉のようにして激しい衝撃波を発する。凧と衝撃波のぶつかり合いは、不可視ながらも明確な破壊の嵐を生み出している。

「どうにかしないとマジでマズイ」

心配なのは麻夜の魔力だ。こちらは麻夜からの魔力供給で持ち堪えているが、麻夜自身も戦っているのだ。吸血鬼が無限の魔力を持つ魔族であっても、急速な魔力

の消耗は身体に堪える。まして、凧の魔力消費まで負担するとなれば、吸血によって力を著しく強化していたとしても無視できる負担ではないのだ。

ならば、こちらを早く片付けて麻夜の負担を減らさないことには勝利はない。

凧はバイコーンを戻し、即座に金剛石の眷獣を呼び出した。

「来い、ドール・アダマス神羊の大角！」

召喚されたのは金剛石の大楯だ。身を隠すほどの巨大な楯は、中央に大角羊の文様を刻んでいる。

楯に触れた風の矢は、尽く跳ね返された。鋭い矢の衝撃を全身に受けて、風の眷獣がよろめく。

「はあ、く……キッツ……」

魔力の消費に眩暈がして膝を突く。口の中に鉄錆の味が広がった。麻夜からの補助を受けていても、吸血鬼の魔力を人の身で扱うのは無理があるということなのか。自分の魔力を使わないので、寿命への影響はないが魔力を通す身体のほうは相変わらずポンコツのようだ。

どうやら、不完全な一時的契約ではノーリスクでの眷獣使用というわけにはいか

ないらしい。けれど、それでも負担は大分軽い。

凧は空に向けて手を振り上げる。

「来い、夜摩インフェリア・アーテルの独鈷劍」

ギリギリと身体を締め上げる魔力の負荷をかみ殺す。

勝利のために、多少の無茶もするべきだ。

狙いは上空。

灰色の天蓋のさらに上だ。

異変に気付いたのは紗葵が最初だ。

凧の眷獣召喚の気配はあったが、現れない。魔力を伴う眷獣召喚を紗葵の眷獣の胃の中でしておきながら、紗葵が感知できないというのはどういうことか。答えは簡単だ。

「凧！」

紗葵は凧を止めるために風の眷獣に砲撃を命じる。

だが、もう遅かった。

眷獣の召喚は完了している。

閉じた世界からは見えないが、この天蓋の遙か上に真っ黒な刃が現れていた。真っ直ぐな両刃の刀身が光のすべてを吸収している。刃だけの未完成の剣の眷獣だ。

重力を操り加速する全長二十メートルの眷獣は、真っ逆さまに紗葵の結界眷獣の頂点に突き刺さる。

「あ、ああああああああああああああ!!」

びしり、と空に罅が入った。

卵の殻が割れるように、ドームの天蓋が割れていく。激突と同時に、凧の眷獣は消滅した。威力の割りに、打たれ弱いらしく衝突の襲撃だけで大分参ってしまったらしい。フィードバックはもちろん凧の身体で受け止めなければならない。

「クツソ、なんだこの自爆眷獣は……!」

毒づく凧は楯の後ろで呻いた。

だが、効果はあった。

紗葵の眷獣が目に見えて弱りだした。紗葵も倒れて、苦悶の表情を浮かべている。

ヴェルスト・ボーゲン

曠野の空谷の魔力収奪能力で複数の眷獣召喚に耐えるだけの魔力を賄っていたのだ。結界に罅が入れば、それだけ紗葵の負担は激増する。たった十四年の歴史で

は、三体の眷獣を同時に操るだけの精神力は養われていない。魔力の供給源が傷つけば、それだけ紗葵に負荷がかかるのは自明の理であった。

「凧……この……あたしは、まだア！」

血反吐を吐くような顔で紗葵は吼えた。なけなしの魔力が二体の眷獣に送り込まれた。打ち倒されたキメラが闘志を燃やして起き上がり、風の眷獣が砲撃の準備に入る。

「紗葵、いい加減にしろ！」

麻夜がしかりつけるように怒鳴る。だが、止まらない。凧の血を吸うために、ここまで暴れたのだ。凧を支配して、食い尽くすという我欲の囁きに、どうしたって耐えられない。

「うるさい」

紗葵は呻くように呟く。

「うるさい、うるさい、うるさい、分かってる。分かってるんだよ。悪いことだって！ やっちゃいけないって！ でも、止められない。我慢できない！ どうにもならないのッ！」

身体を掻き毟るように紗葵は叫んだ。

眷獣が紗葵の不安定な感情に影響されたかのように咆哮する。ビリビリと響く眷獣の声には魔力が乗っていて、その脅威が依然として存在していることを如実に物語っている。

今まさに二体の眷獣がそれぞれの攻撃を加えようとしたとき、ひび割れた天蓋をさらに押し破り破壊する侵入者がいた。

「な……!!」

紗葵が愕然として空を見上げる。

灰色の空は完全に破壊された。

押し入ってきたのは、ケルベロス魔犬だった。さらに、ケルベロスが開けた穴を押し広げるように、その周囲に無数の呪矢が突き立ち、爆発する。対魔族用の呪矢は、並の眷獣ならば一矢で消し飛ばすほどの威力があった。そんな桁外れの呪矢を放てるのは、紗葵の母親である紗矢華しかありえない。紗葵はそう直感し、身体を硬直させた。

「紗葵!!」

砕けた眷獣が姿を薄れさせて、本物の空が現れた。土砂降りなので色は変わらな  
いが、雲が見えるだけでも大きな違いだ。開放感がある。

紗葵を呼んだのは、案の定紗矢華だった。

すらりとした長身が豹のような美しさを醸し出す。信じ難い身体強化魔術で、あつ  
という間に現場に駆けつけて来たのである。

「か、母さん……」

嫌なところを見られたと、紗葵は顔を背けて後ずさった。

凧の血を吸うという感情よりも母親に見られた羞恥心とバツの悪さが勝ったのだ  
ろうか。

「紗矢華さん、速い」

遅れてやって来たのは、メイド服を着た女性だった。

奇抜な格好だが、可愛らしい顔立ちで妙に似合っている。

「ヴェルディアナさん？　なんでここに？」

驚いたとばかりに麻夜が尋ねた。

「買出しの途中で紗矢華さんに捕まったのよ。車出させて。暁家には色々世話に

なってるから、まあ、ね」

ついでに眷獸で結界を割る手伝いもした。

先ほどのケルベロスは、ヴェルディアナの眷獸なのだ。

紗葵は紗矢華と睨み合ったまま動かない。麻夜は紗葵から離れて尻の傍まで駆け寄ってきた。

「麻夜、この人知り合いか？」

「ヴェルディアナ・カルアナさん。喫茶カルアナの社長さん」

「え、ええ!?!」

喫茶カルアナはメイド喫茶に始まりファミレスや牛丼屋のチェーン店を全国展開する最大手である。メイド喫茶から始まったこともあり、手広く展開していても本社は喫茶の名を冠したままになっている。

女社長ということで社交界にも顔を出している。何と元は戦王領域の貴族の家系なのだそうで、領地を失い没落した後で、絃神島に渡りアルバイターから身を起こしたのである。皇帝である古城とも古い馴染みで、暁の帝国成立に手を貸している。生まれて百年を越えたくらいではあるが、本人はカルアナ伯と呼ばれた一族の記

憶の大半を失っているそうで、貴族だったといわれてもピンと来ないらしい。

「うん、初めまして。君が凧君？」

「え、はい。初めましてカルアナさん」

凧は立ち上がって、頭を下げる。

「ヴェルでいいよ、長いしね。それにしても、古城によく似てるわね。うん、お父さんにも」

「父を知ってるんですか？」

「うちの常連だったのよ。最近はアルディギアにいらっしやるみたいね」

「は、はあ……え、常連……」

なかなか会う機会のない父だ。思い入れがあるかといえば微妙だが、メイド喫茶の常連だったと言われると、言葉にならない衝撃を受ける。

「じゃあ、紗矢華さん。この二人は連れてくから」

「はい、お願い」

紗矢華は振り返らずに言った。

紗葵ももはや何も言わない。関心が凧から紗矢華に移ったというわけではない。

複雑そうな顔で、凧を見つめている。凧を追いかけたが、紗矢華を出し抜くのはまず不可能。一方で紗矢華も紗葵の転移の眷獣を考えれば、目を離すことができない。弱点も含めて知っている紗矢華であっても、目を離れた際に転移される可能性は捨てきれないからだ。

ベルディアナは凧と麻夜に言った。

「後は親子で話をつけるから、部外者は帰るわよ」

尻を叩かれるように、凧と麻夜はヴェルディアナに連れて行かれる。

紗葵のことが気にかかるが、凧がこの場においてもはやどうにもならないのは明白である。ベルディアナの言うとおりに、ここが退きどころだった。

ヴェルディアナに昔の常連さんの息子さん超美味しそうというちょっと妖しげな視線を向けられていたりする凧君。

原作より二十年経ってるので、記憶を失った分を差し引いてもそこそこ眷獣も強

くなっています。



## 第二部 六話

紗葵と対峙した紗矢華は、血に餓えて従兄を襲った愛娘の姿に改めて衝撃を受ける。

血と泥で汚れた肌と衣服。

欲望と憎悪に塗れた表情。

見慣れた娘の顔なのに、まったく別人のようにすら思えるほどに、紗葵は変わっていた。

いや、違う。

これも紗葵なのだ。

普段、抑圧された彼女の負の部分が表出しているだけで、まったく別人が乗り移ったというわけではない。紗葵が常日頃抱いていた様々なストレスや願望が表に出てきている状態である。他人のようだ、などと言うのは娘を否定しているに等しく、紗矢華は自分の蒙昧さに唇を噛む。

「母さん。なんで、邪魔するの」

「娘が悪いことしてたら、止めるのが母親だからよ。だから、ここにはわたししかないの。凧君も麻夜ちゃんも、関係がないから」

「止めるって。止めるってなに？」

紗葵は一步、強く前に踏み出した。

凧を追うという選択肢すら忘却して、怒りを露にする。

「あたしを止めるって……今更、何言ってるの？　なんで、今になってそんなこと言うの？　遅すぎ、遅すぎるよ！　大事な時にいなくせに、全部終わってか  
ら出てきても遅いんだよ！」

その叫びは、紗矢華の胸に深く突き刺さる。

それは絶望の雄叫びだった。

紗葵は我欲に支配されながらも、それが倫理的に悪であると理解している。理解しているが止められない。それが、欲望の暴走であり、テロリストが使用する眷  
獣の最悪の効果である。社会的な是非では決して止めることができない、自分優先  
の思考に変えられてしまうのである。

「紗葵……」

紗矢華は娘に返す言葉が何もなかった。

彼女が言っていることは、紛れもない事実だからだ。

紗矢華は母親でありながら、仕事に忙殺され、紗葵とともに会話することも儘ならない状況が長く続いていた。時折家に帰っても、果たして母親らしいことがどこまでできていたのか。情けないことに、娘が蜂に刺されていることにすら頭が回らなかった。娘がそんなことに巻き込まれるだなんて、まったく考えもつかず、仕事に没頭する愚かしさ。それは、いくら謝罪してもし尽くせない紗矢華の不徳ではあった。

「ごめんなさい。あなたが、苦しんでるのに気付かなくて。止めてあげられなくて」  
「だから、もう遅い。あたしは、もう止まれない。今更、引き返せないから！」

紗葵の言葉は乱暴で、聞く耳持たないとばかりに脊獣を発動する。空間転移の脊獣。これがある限り紗葵を捕らえることはまず不可能である。紗葵が移動しようとした矢先に、激しい光が満ちて紗葵はよろめいた。

「ダメよ。追わせない」

紗矢華はきっぱりと言いつ切った。

「母さん……!」

紗葵は奥歯を噛み締める。

今、こうしている間にも風がどこかに行ってしまう。まだ、ほんの一滴程度しか風の血を舐めていないが、そのときのスパークのような悦楽を舌と身体が覚えている。あの味と魔力をもう一度味わえるのなら、何をしてもいいとすら思えた。その一念のためだけに、眷獣まで使って風を追い詰めたのである。それを、今になって止めるなどと言われて止まれるはずがない。止まれるくらいなら初めからやっていない。

身体がおかしくなっていることに気付いてから、ずっと耐えてきたのだから。感情の制御ができなくなりつつあることを自覚しながら、誰にも相談できなかった。姉妹にも母親達にも、そして父にも従兄にもだ。つまらないプライドと他人を煩わせたくないという思いから我慢して耐えて堪えて抑えて抑制して無理を続けてまた怖えて夜も眠れず意識をなくせば自分がどうにかなくなってしまふのではないかと恐怖して身体を掻き毟りその確信に震えて誰彼構わず襲い犯し辱めて吸血して支配しろと囁く甘い欲望に耳を塞ぎそれでもどうしようもなくなって従兄のところ逃げ込ん

で彼のベッドの上でついにあらゆる理性が弾け飛んで我に返ってみればもうすべて終わっていた。

限界まで膨らんだ風船が、弾けるように。紗葵の心は真っ白に染まった。

何もかもが、もう終わっているのだ。

誰が好き好んで自分の負の部分の人に見せたいと思うだろうか。

欲望に身を委ねた醜い姿を曝したいと思うだろうか。

心の守りをすべて脱ぎ捨てて、血を求める吸血鬼など誰が受け入れてくれるか。そんなものは凶鬼と何も変わらない。第四真祖の娘として密かな誇りをもっていた紗葵には受け入れがたい事実であり、その事実こそが彼女が絶望し今の暴走を受け入れる要因となってしまった。

耐える意味を見失ったのである。

我慢しても仕方がない。

ここまでしてしまったのなら、もう欲求のままに振る舞わなければ台無しではないか。

だから、今はもう紗矢華と話をする時間すらも惜しい。

尻に嫌われてもいい。彼が自分をどう思おうが、その血で喉を潤すことに変わりはないのだから。そう考えなければやっていけないかった。

フエアツヴァイフエルト・ゲボータ  
「望み断つ戒禁！」

「輝きよ」

紗葵が眷獣を発動すると、紗矢華は鉄札を取り出して投じる。発生したのは強烈な光で、それによって紗葵の魔力が融けるように消えていく。

転移の眷獣の弱点は光である。影から影へ移動する眷獣であるため、光によって影を消されたり形を変えられたりすると紗葵は弾かれてしまうのだ。

雲の影程度ではまだ発動条件を満たせず、ある程度の濃さが必要だ。光が差し込むだけで、影の眷獣は退散してしまうというほど、デリケートな扱いを要する。

明確すぎる弱点のため、こうしてカウンターを当てられると途端に攻略されてしまうのだ。

「く……」

紗矢華は信じ難い速度で紗葵に迫った。本気の紗矢華の速度に、紗葵はまったく反応できなかった。眷獣を呼び出すことも、魔術を組み上げることもできずに懐に

入られて、そして腹部に衝撃を受けた。

「くは……！」

くの字に倒れた紗葵はそのまま紗矢華に身体を預ける。紗葵の体内に打ち込んで、微量の霊力が彼女を暴走させていた蜂の眷獣を打ち消したのである。

ジガバチの眷獣の毒は決して強いものではない。除霊程度の力でも、取り除くことができるのであった。そして、紗矢華はその道のプロである。対魔族に特化した獅子王機関の中でも呪詛を生業とする舞威姫の肩書を持っていた紗矢華にはお手の物であった。

「はあ、霊力なんて使うもんじゃないわね」

血の従者と化した紗矢華には本来霊力は使えない。雪菜のように特殊加工を身体に施していればまた別だが、紗矢華はそこまでではしていない。霊力の代わりは魔力で十分に務まるからである。今回は眷獣を効率よく追い払うためのワクチンとして霊力を封入したカプセルを用意していたのである。それを、紗葵の体内に叩き込んだのである。

「ごめんね、紗葵」

意識を失い脱力した娘を抱きしめて紗矢華は声ならぬ嗚咽を漏らした。

娘をこんな風にしてしまった自分の不甲斐なさと申し訳なさに涙が溢れた。



もう何度目かになる入院を凧はすることになった。

身体に痛みはなく、怪我也治っている。疲労だけはどうにもならないが、それも放って置けば取れるのだから心配いらぬ。

すでに事件から三日が経っているのだ。そろそろ退院してもいい頃ではないか。「心配がいるかいらぬかは医者が決めることでしょ」

祖母であり主治医でもある深森は、凧の額にデコピンをして言った。

「まったく、古城君も無茶をする子だったけど、あなたも大概ね」

「今回は巻き込まれたようなもので、完全に不可抗力だと思う」

「まあね」

凧から首を突っ込んだのならばまだしも、敵の眷獣の影響を受けて暴走した紗葵

に襲われた完全なる被害者である。戦ったのも、偏に紗葵を止めるためであった。助けを呼ぶのも、紗葵が他人を巻き込みかねないために却下したのである。

「凧君のおかげで、紗葵ちゃんの件は身内の中で処理できる程度で済んだから、その点は感謝してるけど」

「紗葵は？」

「今は、護衛についてた二人のところに謝りに行っているよ。そのうち、凧君のところにも来るんじゃないかな」

深森は凧の腕と繋がった計器の数値をタブレット端末に入力しながら言った。

この機械が何を測定しているのか、凧はいまいち分からない。

「なあ、ばあちゃん。俺は個室でいいのかな？」

「何、相部屋がいいの？」

「いや、個室のほうが気楽だけど、実際大した怪我してるわけじゃないんだぞ」

「まあ、いいじゃないの。病院が使わせてくれるって言ってんだから」

やんわりと、深森は言った。その口調は、柔らかくも有無を言わせぬものだったので凧はそれ以上何も言わなかった。

個室のほうが自由でいいというのは本音である。ただ、怪我一つない身体で病院の一室を占有していることに良心が痛んだのである。

「紗葵はもう退院か」

「身体のほうは眷獣が抜けたから大丈夫よ。あの娘は吸血鬼だもの。あなたとは違  
うわ」

「まあ、そうだろうけど」

凧は何ともいえない表情で視線を彷徨わせる。

紗葵は吸血鬼で不死の呪いを持っている。あと数年か十数年で成長を止め、本格的に不老不死の仲間入りを果たすだろう。一方の凧は、残念ながらベースは人間のままだ。吸血鬼の力を僅かに宿しているものの、怪我の治りを多少早め、身体能力を向上させたこと以外に恩恵はあまりない。寿命についても謎が多いので評価保留中である。

仮に同じ怪我をした場合、凧はしばらくその怪我と付き合うことになるが、紗葵は数分もしないうちに怪我を治してしまえる。

「ただ、あの娘もいろいろと不安定だったからね。今は落ち着いてきたけど……」

「不安定？」

「そりゃ、暴れてたときのことを覚えてるからね。泣いたり、叫んだりね。紗矢華ちゃんが付きっ切りで面倒見てやっと落ち着いてきた頃なのよ」

「紗葵が……」

あの小悪魔のような達観したところのある娘が、そこまで取り乱すとは。想像でしかなかったが、テロリストの手に墜ちていたとはいえ、あれだけ派手に暴れ、心中を吐露していたのだ。羞恥やら後悔やらで、平常心ではいられなかったのである。その場を見ていないので、想像することしかできないが、しかし十分にあり得る可能性ではある。となれば、紗葵はこの後ずっと心に傷を抱えたまま生きていくことになるのだろうか。

「わたしが言えることじゃないけど紗葵ちゃんのこと、責めないであげてね」

「悪いことしてないのに、責めるも何もないって。ブラッドだっけ。アイツがどうなったか聞いた？」

「報道以上のことは知らないわ。わたしはあくまでも医者であり研究者。捕まえるのはこっちの管轄外だもの」

「そりゃ、そうか」

親族とはいえ、軽々に情報漏洩するはずもない。

捜査の最前線に立っていた紗矢華が紗葵に拘束されているというのは痛手なのかもしれない。

ジェリー・ブラッドが、なぜ紗葵に眷獣を向けたのか。何が目的なのかいまいちはっきりとしていない。無差別テロに、紗葵が偶然巻き込まれたと解釈するほうがすんなり来るのだが、皇女という立場が安易な解答を許さない。場合によっては、反政府どころではなく反第四真祖の意思表示かもしれないのだから。

「犯人はすぐに捕まるわよ。大丈夫大丈夫」

気楽に祖母は言う。

それがいいと、凧は思う。

紗葵の一件は、捜査に進展をもたらしたのだろうか。

この第四真祖が支配する帝国も、二十年前に比べれば大分巨大になった。隠れようと思えば、隠れられる場所も増えている。ジェリー・ブラッドがどこにいるのか、果たして特区警備隊はどのように探るのだろうか。非常に気になるところでは

あつた。



月明かりが窓から差し込み、そのあまりの見事さに眠気を忘れて眺めてしまふ。青白い月は、さながら空に開いた穴のようで真つ暗なはずの夜は白く照らされている。夜も更けて、街の明かりも街灯と一部のオフィスビルだけになった今、月光はますます強く輝いているように感じられる。残暑の厳しい日々ではあるが、こうして月を見ていると思わず身震いするような冷たさがある。月光は冷たい。例えそれが夢幻の類であっても、人がイメージする温感が身体に確かに届いている。病室の出入り口付近、月光の届かない影が僅かな魔力と共に盛り上がり、一人の少女を形成する。

「ノックくらいしてくれないか。さすがに、ホラーかと思うぞ」

「……」

髪を下ろした紗葵を見るのは久しぶりだ。いつも、髪は後ろで纏めているので、自然な髪型をしているのは非常に新鮮である。

「ごめん。こんな、時間に……」

小さく紗葵は言った。

「人がいるときに、来たくなくて」

「別にいいよ。どうせ、寝付けないんだ。紗葵は……」

「あたしも、寝付けない。凧が起きてる気配があったから、今のうちにとと思って」  
紗葵はゆっくりと凧に近付き、来客用の椅子に座った。

白く照らされる紗葵の表情は思いつめたように陰しく、苦しそうであった。

「怪我は、もういいの？」

「怪我してないんだよ。だから、そもそも入院なんてしなくてもいいのにな。ばあちゃん心配性なんだよ」

「そんなこと、ないよ。膝、すごかったもん」

ぶるり、と紗葵は身体を震わせた。

凧の両膝は、半分がつぶれ、抉れて骨も砕かれていた。文字通りのミンチ状に

なつてしまい、常人であればそこで歩行は諦めることになつただろう。人間の風が事なきを得たのは、もともとの再生能力に加えて、麻夜が擬似吸血鬼に近づけるような魔力供給をしたからである。

「あんな怪我、あたし、見たことない。あ、あたしがした、ことだけど……ひざ、膝が、あんなになつて。麻夜姉さんが風が魔力供給しなかつたら、一生歩けなかつたかもしれないに……」

ぼろぼろと紗葵は涙を流し始める。言葉は途切れ途切れで、か細く聴き取りにくい。

「ごめんなさい……あたし……どう、謝つたらいいか、分かんなくて……ごめんなさい……」

声を押し殺して泣く紗葵に、風はかける言葉を捜した。

かつての零菜を思い出して、場違いな懐かしさを覚える。

もうかなり経つというのに、つい最近のような気がする。零菜に噛まれた直後に病院に運ばれたとき、零菜も今の紗葵のように涙ながらに謝罪したのだ。腹違いとはいえ姉妹なのだろう。あのときの零菜と雰囲気がよく似ている。

「もう、いいって。泣くなよ。そんな風に泣かれると、俺も困る」

目の前で涙を流す従妹に、凧は言う。

「うう……うう」

紗葵は唇を噛み、膝の上で握り拳を作った。

「悪いのは、ジェリー・ブラッドとかいうテロリストだろ。紗葵は被害者なんだ。自分を責めちゃいけない」

「うく……うっ……でも、あたし……」

「もうこの話は止めにしよう。俺は紗葵を責めるつもりないし、紗葵が悪いとも思わない。まあ、確かに痛かったけど、結果オーライだしな」

過ぎたことを責めても何も解決しない。

今回の件で紗葵に非があるとすれば、眷獣に取り付かれた際にすぐに異変を知らせなかったことであろう。それについては、周囲とのコミュニケーションの不足が否めず、単純に紗葵を叱ればいいという問題でもない。家庭環境から見つめなおすべき問題である。強いて、凧が紗葵に言うようなことはない。

「もう遅いし、自分の病室に戻ったほうがいいだろ」

「見回り、来ないよ。結界張ったから」

「おいおい、病院で何してんだよ」

病院で人払いを使うとは何事か。自分の個室だから問題ないのだろうが、例えばこれが多床室であれば、緊急時に医者が駆けつけられず大問題となる。

「膝、動く？ 本当に、大丈夫？」

「動くって。病院の散策もしたくらいには問題ないんだ」

「そう……」

紗葵は肩の力を抜くように吐息を漏らし、

「よかった」

そう、眩く。

「凧」

「ん？」

「ありがとう」

言葉を残して、紗葵は消えた。

恥ずかしげにはにかむ顔が、目に焼き付いた。あんな表情もするんだなど、凧は

少し不意を突かれたように固まった。

■

明るく染め上げた長い髪をサイドで束ねた少女は、薄暗い部屋の中でタブレット端末を眺めている。

彼女の顔を照らすのは画面内で踊る色とりどりの獣達。吸血鬼が使役する眷獣の映像記録である。

金剛石の楯を取り出した従弟の姿を、自然公園に設置された観測機器からダウンロードしたのである。もちろん、公開されている動画ではない。戦いの詳細も、すべてが機密扱いになっていて外に出ることは永遠にないだろう。

だが、彼女————暁萌葱にとってそんな事情は一切関わりのない話である。公開されているように、非公開であろうが関係なく、必要と思えば情報を取り寄せるこ

とができる。それが、萌葱の唯一のとりえなのだから。

「何、この眷獣……？」

妹と従弟の喧嘩。振るわれる力は一步間違えば殺し合いと取られてもおかしくないほどで、きつと自分があの場においても何もできないだろうという無力感を抱きつつ、萌葱は動画を無感動な目で眺め続ける。

別の端末には病院のデータベースとリアルタイムで繋がり、バイタルの計測結果を盗み見ている。入院してからずっと、大きな変化は見られない。

凧が使った見たことのない眷獣は、非常に強力だった。紗葵の眷獣を正面から倒せるほどに。それだけの力を使いながら、凧の身体には大きな悪影響は残さなかった。

麻夜が彼を一時的に血の従者に近い状態に置いたからだという。吸血鬼が他者に魔力を提供することは、決して稀有な例ではない。麻夜がしたのは、その延長ではあって理屈としては凧が負担する分を麻夜が負担していたということなのだが、それはつまりこれまで凧が使っていた眷獣は本来の姿ではなかったということである。麻夜が力を注いで初めてあの姿になった。魔力不足を補ったからだ。では、本

来の姿とは何か。あのどことなく見覚えのある眷獣は何なのか。

「凧君……」

データをフォルダに保存する。

脳裏に僅かに湧き上がる気に食わないという苛立ち。強い眷獣を振るう妹と凧に対して、そんなことを思ってしまう自分に嫌悪感を抱く。

凧の身体の問題は、家族の中で予てからの懸念事項ではある。

だが、眷獣の件も含めて萌葱達の知らない何かがある。

そして、恐らくは父と母は萌葱達が踏み込めないところまで、凧の身体について知っているに違いない。

萌葱は内心で舌打ちをする。

凧の眷獣のデータを管理する研究所のフォルダにアクセスできなかったからである。

「母さんか」

萌葱の侵入を防ぐことができるのは、世界でも一人しかない。

本気になれば、破れないことはないだろう。しかし、それではいらぬ騒ぎを引き

起こす。ここは手を引くしかない。

だが、これで確信した。

凧には何かがある。ただの人間が吸血鬼の因子を取り込んだくらいで、あれだけ強大な眷獣が生まれるはずがない。

そして、その情報にここまで万全のセキュリティを施すはずがないのだ。

他の誰も、その事実には気付いていない。姉妹の中で萌葱だけが辿り着いた秘密である。密かな優越感に浸りつつ、萌葱はタブレットの電源を落とした。

萌葱が凧に親切なのは面倒見のよさもあるけれども、もろもろのコンプレックスを解消するためでもあったりと反動形成的側面があったりするのだ。



## 第三部 一話

ジェリー・ブラッドは世界的に知られたテロリストであり、隠密性に優れた眷獸を使った他者を操ることによる突発的なテロを得意としている。その能力ゆえに、各国の捜査機関の手を逃れて各地を放浪し、犯罪組織から金を得てテロを行う悪質な犯罪者である。

百年余りの年月を裏の世界で生き延びてきたジェリーが絃神島とかつて呼ばれた暁の帝国を訪れたのも、ある組織からの依頼を受けてのことだった。

とはいえ、今回は散々だった。

暁零菜に毒を打ち込むという依頼は、結局失敗に終わった。混乱に拍車をかけるために妹のほうに毒を打ち込みはしたが、依頼主は余りいい顔をしないどころか、報酬の支払い拒否まで始めた。

もともと、ジェリーに支払う金などなかったのだろう。彼らは人身売買を生業とする犯罪組織ではあるが、大陸の組織との競争に敗れてすでに落ち目である。第三皇女を狙った理由はいくつか考えられるがもはや、その思考に意味はない。

組織は潰えた。

ジェリーよりも先に、特区警備隊にかぎつけられて暁の帝国での活動拠点が風潰しに消されているのである。こうなっては、依頼主へのお礼参りにも行けない。それどころか、無事にこの島から脱出することも難しいだろう。何せ、ここは人工の島国である。脱出の難しさは、国境が地続きの他国とは次元違いである。

幸い、ジェリーの風貌はアジア人としても通用する。人込みに紛れて数日をやり過ごし、精神操作の眷獣を駆使して一般家庭に入り込めば、まず見つかることはない。

こうして、百年もの間警察組織の目を逃れてきたのだ。まさか、縁もゆかりもない家の中で普通に過ごしているとは誰も思わないだろう。折を見て、地方に住居を変え、然る後に国外への高飛びを検討しなければならぬ。

住宅街に逃げ込んだのは、監視カメラの数が少ないという理由もあってのことだ。徹底的な監視社会は、現代の先進国では実現することは難しい。特にプライバシーの問題に触れるとあっては、行政も住宅地に監視カメラの設置は困難だからだ。仮に暁古城を初めとするこの国の上層部が、そうした管理徹底をしているというのな

らば話は別だが、あの性格でそれはしないだろう。

老夫婦の息子という立ち位置を擬似的に獲得したジェリーは、宛がわれた自室に引き籠もって思案に暮れる。不老不死なので、時間をどれだけ無為に過ごしても失うものはない。そういった余裕もあって、ジェリーは何年でも今の生活を維持する心積もりでもあった。隙を見つけて、国外逃亡を図る。

何と為しにテレビを付けるジェリーは、ニュース番組に思わず視線を止めてしまふ。

『はろういんフェスタの開催を明日に控え、けやき中央通はすでに様々なコスチュームに身を包んだ人たちが賑わっています！』

レポーターが興奮したように喋っている。

ジェリーが起こしたテロ事件が解決に向かって進んでいることもあり、世間は明るい話題を取り戻しつつある。

はろういんフェスタは絃神島の時代から続くハロウィンをモチーフにした祭を暁の帝国風に作り直したもので、十月の第二土曜日から一週間に渡って行われるのが慣例になっている。もはや宗教上の原型はなく、コスプレや露店が立ち並ぶ帝国独

自の祭へと昇華したそれは、億単位の経済効果があるとも謳われる一大イベントである。

海外からの観光客も著しく増加することになる。

「チツ、しばらくはここにいろしかねえか」

ジェリーは舌打ちをしてベッドに寝そべった。

人の出入りが多くなるということは、それだけ空港や港の警備が厳しくなるということがある。国外に抜け出すのならば、イベントが終わって気が抜けた頃を狙うのがいい。

時間が経過すればするほどに、ジェリーに対する警戒心は薄れていくだろう。焦らずに、その機を待つべきだと判断した。こうした判断力は、決して強力な吸血鬼ではないジェリーを長年官憲の手から逃れさせてきた武器である。

くだらない情報を垂れ流すテレビは消してしまってもいいのだが、如何せん自分は追われる身。情報源は多いに越したことはない。

菓子でも食べようかと、居間から持ってきた菓子袋に手を伸ばす。この国の菓子類はコンビニで売っているものでもかなり美味しい。

ドアをノックする音を聞いて、ジェリーは警戒心を高めた。最小限の動きで立ち上がり、いつでも眷獣を出せるように準備する。

先ほどのノックは三回。この家の人間には、ノックを五回するように暗示をかけてある。つまり、今、ドアの外にいるのはこの家の住人ではないということだ。

また、トントントンと三回のノック。気配は一つだけだ。声を殺し、じっとしていると床を軋ませてその人物は去っていった。遠のく気配に、ふうと息を吐く。

しかし、何者だったのか。

声をかけることもなかったというのは解せない。特区警備隊が動いているというのならば、周囲はもっと騒然としているはずである。

「ッ……」

隣の部屋から物音がする。ガチャン、と鍵を開ける音の後に引き戸を開ける音が続く。

この部屋のベランダは、隣の部屋のベランダと繋がっている。相手の狙いを察した時には、すでにジェリーは発見された後だった。

現れたのは、十代中頃の少女だった。

陽光に濡れたいぶし銀に近い黒髪と、魔法使いのような長い黒ローブという全身を黒尽くめでコーディネートした出で立ち。普通であれば目を引く姿も、はろういんフェスタを控えた今は奇異というほどには目立たない。無論、ベランダにそんな人物がいれば衆目を引くのは当然であろうが。

「ジェリー・ブラッドを捕捉。オーダーを実行します」

その一瞬をジェリーは理解できないまま跳ね飛ばされた。

「が……！」

窓ガラスが砕け散り、突風に舞うガラス片が身体を傷つける。

ドアに背中から叩きつけられたジェリーは咳き込みながら襲撃者を改めて見遣った。

「お前、何をする!？」

「マスターからのオーダーにより、あなたを抹殺します」

これ以上ないほど明確な殺害予告。しかし、フードに隠れた顔からはまったく殺意を感じることができない。彼女の言の通り、これは彼女の意思によるものではなく命令を実行しているだけなのだろう。

「ふ、ざけんなよ、小娘！」

立ち上がったジェリーに傷はない。吸血鬼は多少の怪我なら瞬く間に治せてしまうからだ。

「あのジジイの差し金だろうが、そう上手く行くとは思うなよッ」

この少女は、雇い主たる組織の長が口封じに放った刺客と見て間違いない。

「てめえの主は今何をしている？ 特区警備隊にとっ捕まっただはずじゃねえか？

助けに行かなくていいのか？ ええ？」

「マスターから救出の依頼は受けていません」

「そうかよ。融通の利かない小娘だな！」

室内に真っ赤な蜂が溢れかえった。

それは一瞬の出来事で、出現を予感させるものもなかった。小さな蜂の群れは虚空から現れるや少女に向かって殺到する。

「感情の爆発で自滅しな！」

赤いジガバチの群れは全方位を取り囲み、少女の身体を押し包む。攻撃性能は低いものの、一刺しで吸血鬼すら前後不覚に陥れる精神攻撃である。それが数十匹分

ともなれば、心が崩壊して死に至ることもある。

敵を倒すのに大仰な眷獣など必要ない。狭い室内に踏み込んだ時点で、ジェリーが圧倒的に優位だったのだ。

しかし、そんな勝利の確信は黄金に輝く膜の前に霧散する。

少女を取り囲むように展開される黄金色のカーテンがジェリーのジガバチを寄せ付けない。それどころか触れた傍から消えていく。——食われていく。

「なん、うぐ……！ てめ、俺の眷獣を……！」

眷獣を介してジェリーの魔力がごっそりと抜け落ちる。金色のカーテンが次第に厚みを増し、薄らと輪郭の分かる巨人の姿を象り始めた。

「黄金の腕を持つ者」

「ま、待て……待て！ やめろおおおおおおおお！」  
光が満ちる。

ジェリーの断末魔は黄金の眷獣を操る少女には届かない。メリメリと身体を押し潰される感覚に絶望しながら、ジェリーの意識は消えていった。

金曜の午後、学校を終えた凧は真つ直ぐ帰宅することはせず、友人とともに中央行政区のけやき中央通りに出向いていた。

はろういんフェスタイブともなれば、すでに祭時と寸分違わぬ集客である。歩行者天国となった大通りの左右に並ぶ露店は日本のそれと大差ないが、これはあくまでも一部に過ぎない。絃神島のときからの伝統で、はろういんフェスタは大企業がそれぞれの技術や商品を世間に喧伝する日でもあり、決してけやき大通りだけが会場ではない。中央行政区全域に渡って、この機に乗じて一攫千金を目指す企業が主催するイベントが重なるのである。

一通り騒いだ後で、凧は帰路に着く。

午後九時を回るくらいだろうか。

祭のメイン会場から離れれば、さすがに人通りは落ち着いてくる。車通りが多い

のは仕方ないことではあるが、住宅地に入ればそれも普段を大きくは変わらない。遠くから聞こえてくる祭の音色を聞きながら、風は薄暗い夜道を歩く。風の自宅は通りに面した古いマンションだが、近道のために住宅地を抜けるのはお決まりの通学路である。

そういえば、はろういんフェスタ中に彩海学園は学園祭をするらしい。風が通う、至って普通の公立校は、そんな気配はまったくなく、祭の開催期間中だからといって羽目を外すことがないようにとの通達が出される程度である。

何せ学生世界は短いながらも秋休みに入るのだ。土日を入れて五日の連休となれば、学生の気持ちは浮かれてしまうのも当然であろう。

月明かりに照らされた路地を歩いていると、ゴミ捨て場の傍にしゃがみこむ人物を見つけた。

そんなところにしゃがみこんでいるのも不審であるが、何よりも黒いローブを来ていてフードで顔を隠しているというのが何よりも気になった。気にはなったが、ついさっきまではろういんフェスタで盛り上がるけやき中央通りを練り歩いていた

のである。コスプレははろういんフェスタの華である。別におかしくもないかと、  
凧は一人勝手に納得した。

たった一人で、人気のない路地に座り込んでいる、という事実については不審と  
いわざるを得ない。無視するというわけにもいかず、声をかける。

「あの、どうかしましたか？」

何か事件に巻き込まれたか、体調不良か。

電灯が点滅する。

フードの奥で瞳が動いたのに気付いた。紅い瞳が凧を見ている。カラーコンタク  
トでなければ、吸血鬼ということになるだろう。

「あなたは……？」

暗くてよく見えないが、その人物は凧と同じ年くらいの少女だった。声には特  
おびえもなく、落ち着いている。事件に巻き込まれたわけではないらしい。

「こんなところにしゃがみこんでいたから、調子でも崩したのかと思って声をかけ  
ただけど……」

「そうですか、それはご心配をおかけしました」

少女は外灯を支えにして立ち上がる。身長は風の胸くらいまでか。ちょうど零菜と同じくらいの身長だ。立ち上がった少女は、膝に力が入らなかったのかがくりと体勢を崩した。

「あ、あぶねー！」

風は咄嗟に少女を抱きとめる。

しゃがみこんだ風は身体を下にして少女を受け止めることに成功した。

倒れこんだことで、フードが外れた。風の胸に顔を押し付けるようにしているの  
で顔は見えない。電灯に照らされる髪はいぶし銀色をまぶしたような綺麗な黒髪  
だった。

「一つ、お願いが」

「救急車なら、すぐに呼ぶけど」

「いえ、それは不要です。ただ、あなたの血をいただきたいのです——昏月風  
さん」

「な——、ぐ！」

ぎちり、と身体に重しを付けられたような気がした。密着状態からの拘束魔術

だ。手足が棒になってしまったかのように動かない。

少女が動き出す。

守りをなくして、露になった風貌が風の眼前に現れる。

「お前——なんで」

驚愕に目を剥く風を尻目に、少女は牙を突き立てる。

痛みを感じる間もなく風の意識が遠退いていく。これもまた、何かしらの魔術行使であろう。抵抗するということがまったく許されないまま風は力なく路上に倒れこんだ。

変わりに少女は立ち上がった。

風の血を吸って、活力を取り戻したらしくふら付くこともない。

「ラストオーダーを執行します。お手伝い願います、昏月さん」

ぴくり、と風は覚醒する。

焦点の定まらない瞳で少女を見上げる。

自由意志のない感情の抜け落ちた表情が、風の置かれた危機的状況を物語っていた。



## 第三部 二話

私立彩海学園は、暁の帝国でも指折りの名門校として知られる学校である。土地の都合もあって校舎は決して広くはないが、技術の進歩もあって絃神島の頃よりも高層建築が可能となった現代では、縦に増築が繰り返され、時代を先取りした先進的授業も内外からの注目を集めている。私立校でありながら、皇帝の出身校ということでも注目度が高く毎年高い競争率を記録している。

この日は土曜日。

最近の私立校にしては珍しく、彩海学園は土曜日の授業がない。そのため、通常ならば部活動に汗を流す生徒以外は、登校していないはずだが、この日ばかりはそうではない。

年に一度の学園祭だ。

中等部から高等部の上から下までがてんやわんやの大騒ぎになる日である。常から学業に駆り立てられている学生たちが、学内で多めに騒げる日というのは、そうそうない。学校の外ははろういんフェスタで盛り上がっていることもあって、学生

たちの気分は最高潮に達している。

そんな中にあつて、難しい顔をしているのは帝国第三皇女暁零菜であつた。

多数の客でごつたがえす第二食堂の窓際カウンター席に頬杖を突いてバナラシェイクを啜っている。

隣に座っている麻夜は、そんな零菜を眺めて微笑ましげにしている。顔立ちはまったく違つて、街を歩けば声をかけられることも珍しくないが、ここは学食、彼らしい容貌である。街を歩けば声をかけられることも珍しくないが、ここは学食、彼女たちの身分を知る者も多い。気さくに接してくれる友人は多いが、他学年の生徒などはやはり遠巻きに眺める程度である。そうしたこともあつて、少々近付きづらい雰囲気になつているのだろう。人目は引いても、不用意に話しかけてくる者は皆無だつた。

「まだ、連絡付かない？」

麻夜が聞いた。

「全然」

「そう、何してんだらうね」

麻夜は困ったように笑みを零す。

零菜の手には携帯端末があり、着信履歴には同じ番号への発信が六回も溜まっている。

「麻夜ちゃんは？」

「僕のほうも全然だね。電話に出ないし、既読も付かない」

麻夜は携帯の画面を見せる。

確かに既読のマークが付いていない。携帯を見てもいないということか、それとも表示だけ見てアプリを開いていないのか。後者だったら完全に無視されているということになる。

「むう、せっかく案内してあげようと思ったのに」

「何かあったんだらうね。さすがに何の連絡もなくデートすっぽかすタイプじゃないからね」

「……デートじゃないし。てか、麻夜ちゃんもいるじゃん」

「まね。僕のシフトは午前だけだったし、暇だし」

麻夜も零菜も自分の教室の出し物は午前中のみ参加だった。厳正なる籤の結果

だ。午後のほうが余裕をもって回れるので、午前シフト希望者は熾烈な争いだったのである。とはいえ、蓋を開けてみれば風が現れなかったことで零菜の午後の予定は空白になってしまった。開校日なので、授業が終わる時刻までは学外に出ることは許されておらず、結局残りの半日が宙ぶらりんになってしまった。

「連絡つくまで、その辺うろつくのもありじゃない？ どうせ、学校からは出れないし」

「そうだね。萌葱ちゃんのとこ行ってみる？ 高等部見学兼ねて」

「あっちには滅多にいかないし、行くかな」

萌葱は一つ年上の高校生である。敷地を同じくしていても、高等部と中等部では意識の面で大きな違いがある。高校生が中等部に顔を出すことは滅多にないし、その逆もまた然りである。零菜も麻夜も、用事がなければ高等部の校舎には立ち入らず、その用事自体がそもそも存在しない。そして、高校生も中等部には立ち入らない。禁止されているわけではないが、意識的な部分での壁が生まれるのである。部活動くらいだろうか。両者が繋がるのは。

零菜と麻夜は揃って席を立つ。ゴミを捨てて学食を後にした。残されたのは二人

の会話を盗み聞きしていたその他大勢のざわつきだけだ。

「デートって？」

「嘘やろ、誰ですの相手は」

「れぐるす・あうるむ不可避」

等々、憎悪や好奇がどこの誰とも知らぬ相手に向けられる。なお、この後容疑者に上がった数名が無実ながらも追い回される悲劇に見舞われるが、零菜とその関係者にはまったく関わりのない話である。



かつて、波瀾院フェスタと呼称されたイベントが絃神島にはあった。当時は、島の規模も大きくはなかったもので、島全域を巻き込むようなイベントとなったようだが、暁の帝国となって十年の月日が流れる間に国土は膨張し、今では日本の四国と

同程度の大きさにまで成長している。結果、島全域に渡ってのイベント開催というのはまず不可能になってしまい、はろういんフェスタのメイン会場は中央行政区が担当することになった。もちろん、帝国内各地で便乗したイベントは行われているので、関連行事を含めれば国全域が祭の空気に飲まれているとも言えるだろう。

ちなみに名前がはろういんフェスタに変わったのは、絃神島から暁の帝国として独立したこともあるが、何よりも漢字が分かりづらく、商業的に利用しにくいという理由によるものである。

「では、第三オーダーです。あのチョコミントアイスははろういんバージョンの購入を要求します」

「ぐぬ……！」

ケヤキの街路樹がその名の由来である中央行政区けやき中央通は、はろういんフェスタ開催直前の金曜日と開催期間中の土日に限って歩行者天国となり、多くの露店が立ち並ぶ。若者が普段集まる繁華街——中央3号線と垂直に接続する位置にあり、マンションやアパートが立ち並ぶ区域である。

一年に一度のお祭に引き寄せられた無数の客でごったがえす通りを凧は歩いてい

た。隣には、凧から血を吸った少女がびったりとくっついており、腕まで組んでい  
る。フードをすっぽりとかぶって顔を見せない彼女は、凧から離れることなく、こ  
れはと思った食料を凧の財布を使って物色しているのである。

「お前、ホントに何なんだよ」

凧は振りほどこうにも振りほどけない少女に毒づく。

「見ての通り、今は昏月さんの彼女です」

などと、表情を変えることなく言う。

彼女の名はヴァニタス。

あくまでも自称で身分を示すものは何もない。服もなかった。昨夜、凧を一時的  
に前後不覚にした後、彼女は凧の家に上がりこんだ。その際はローブの下に何も着  
ていなかったのである。彼女の正体について、はっきりしたところは何もないが、  
自力で意識のみは回復できた凧はヴァニタスにジャージを着るように嘆願したので  
あった。そういうこともあり、今のヴァニタスは真っ黒なローブの下にジャージを  
着ているという何とも滑稽な格好をしている。女性用の服など、凧は持っていない  
のだから仕方がない。

フード付きローブは如何にもハロウィンという雰囲気である。周囲にもコスプレをした人たちが溢れているので、決してヴァニタスが浮くこともない。

道路脇に設置されたベンチに座り、バリバリとコインを齧りつくしたヴァニタスは、指についた溶けたアイスを舐めてから立ち上がる。

「それでは次に行きましょう。そろそろ三時。おやつの間です」

「今食ったろ！ いい加減にしてくれないと、俺の財布が死ぬ！ お前、目的何なんだよ！」

思わず怒鳴る風を尻目にヴァニタスは腕を絡み付けて風を引っ立てる。けやき中央道を抜けて、中央3号線に出る。そして、きよろきよろと周りを見回して、近くのケーキバイキングに乗り込んだ。

風からすれば堪ったものではない。

一夜を明かし、午前中も大人しくしていたヴァニタスが昼頃から風を操ってはろういんフェスタに向いている。しかも、風を自分の彼氏として扱い、露店巡りを決行している。金の出所は風の財布であり、普段それほど出費せず貯金している風の財布が急速に萎みつつあった。

ケーキバイキングはやはり盛況で、席に着けるまで実に三十分も待つことになった。それでも、運はいいほうなのだろう。ガヤガヤとざわめく店内の片隅で、風とヴァニタスは向かい合って座っている。

「昏月さんも、好きな物を取ってきていいですよ」

「俺はいい。コーヒーがあれば十分だ」

食べ放題に払う金はない。ないが捻出しなければならない。となると出費はヴァニタス一人分に絞ったほうがダメージが少ない。

「では、いただきます」

フードを外し、ヴァニタスはその可憐な容貌を露にする。

隠れた素顔——それは風の従妹、暁零菜にそっくりだった。

相変わらず無表情のまま、スプーンを皿と口で行き来させる。止まることがないので、美味しいとは感じているのだろうが、如何せん彼女の表情から読み取れる情報がほとんどない。口は達者なようだが、こんなことをする目的が未だに掴めない。

「なあ」

「はい」

「そろそろ目的を教えてもらえないか？」

「いいですよ」

あっさりと言った。アタスは了承した。

席に着いてから二十分弱。三種類のカットケーキを胃に送り込んだ直後であった。

「わたしの目的は簡単です。マスターからのオーダーを実行することに尽きます」

「マスター？」

「大村夕美の名で世間的には知られているでしょう。最近も、ニュースになっていました」

「大村、夕実……おい、まさか」

時事問題に疎い風ですらその名に聞き覚えがあった。

昨今国内で発生したテロ事件の主犯格とされている人物である。実行犯であるジェリー・ブラッドを雇い、国内で活動させた人物として特区警備隊に追われ、先日討伐された女。人身売買を主とした犯罪組織の長であることが判明し、特区警備隊は引き続きその下部組織の撲滅のために忙しくしていると聞いている。

「特区警備隊が組織を攻撃する直前に、わたしは起動しました。オーダーは二つ。一つは『ヘマをしたジェリー・ブラッドの抹殺』もう一つが『性能試験』です」  
ヴァニタスは紅茶を口に含み、周囲を探ってから言葉を続ける。

「前者はすでに達成済みです。直に発見されるでしょう。後者についてはこれから実行します」

「達成済み？ お、おい、まさかと思うが……」

「ジェリー・ブラッドには裏切りを防止するための追跡装置が渡されていましたので、見つけるのは容易でした」

さも当然とばかりに言うヴァニタスではあるが、彼女の言が正しければジェリー・ブラッドはすでにこの世にはいないことになる。聖域条約に基づけば、確かにジェリーほどの悪人魔族は討伐されても仕方がないが、それは攻魔官の仕事であろう。もちろん、犯罪者同士の抗争の末に死亡したジェリーに思うところは無いが、零菜と同じ顔をした少女が何とすることもなく口にするとなれば、戦慄を覚える。

「性能試験ってのは……」

「晓零菜を凌駕すること。それを以て吸血鬼のホムンクルスに付加価値を付け、ビ

ジネスとして安定させるといのがマスターの思惑でした」

それは、ジェリー・ブラッドの殺害宣言以上の衝撃を風に与えた。

ホムンクルスは古くから存在する人工生命体で、錬金術に該当する。製造技術は十六世紀にはほぼ現在と同じ水準で確立していたとされるが、倫理面やあまりにもコストが高いという理由から、ほとんど下火になっていく技術体系である。同時に科学の発展に伴いクローン技術が誕生するとますますホムンクルスの有用性が失われることとなった。

それは世界の常識である。

まして、吸血鬼のホムンクルスは作れないともされている。不死の呪いや眷獣の再現は現在の技術では届かない神代の技法である。

「マスターはそれを可能としたのです。ホムンクルスに付加価値が付けば、高額の製造費用を捻出することも容易となり、わざわざ商品を誘拐する必要もなくなるというの出発点だったようです」

風の常識を遙かに上回る衝撃的な裏話だ。

彼女のマスターは人身売買組織の長であり、取り扱う商品は人間、あるいは魔族

である。今の時点では貧困による身売りや戦争難民などを拉致するほうが安価に済むが、吸血鬼のホムンクルスとなれば兵士としても高い価値が生まれるだろう。その一点に賭けて、落ち目となった組織を立て直すべく大村夕実は残酷な実験着手したのだ。

「お前がホムンクルスということは……お前は……」

「わたしは暁零菜の遺伝子情報をベースに製造されています。もちろん、純粋な吸血鬼ではなく獣人や妖魔の性質も組み込まれています。眷獣の使用も可能です。何故、わたしが第三皇女をベースにしているかは、言わずとも分かるかと思えます」

ハスタ・アウルム  
「槍の黄金……か」

「はい。魔力を無効化する眷獣は、貴重且つ戦力として申し分ない。量産できれば、真祖にすら対抗できる軍勢が作れるでしょう」  
もつとも、そんなに上手くことは運ばない。

吸血鬼のホムンクルスを製造できただけでも、奇跡的だったのだ。槍の黄金の完全再現は終ぞ実現できなかった。ヴァニタスに与えられたのは、不完全な人工眷獣。吸血鬼ではあるが、吸血鬼としては半端な存在なのだ。

「昏月さんを巻き込んだことについては——そうですね……恐らくは申し訳ない、というのでしょうか、この気持ちは……言葉にできない感情があるのは事実です」

「そう思うなら、自由にしてもらえないか？ ついでに、零菜を巻き込むのもやめてもらえるとありがたいんだけどな」

「それはできません。マスターのラストオーダーは最優先事項です」

にべもなく、ヴァニタスは言った。ホムンクルスの思考は、主に縛られることが多い。

「もう少し協力していただきます。あなたとアベックごっこをしていれば、フードを被っていても怪しまれずに行動できますので」

ヴァニタスはフードを被って顔を隠す。零菜に似た顔立ちというのは、それだけで人目を惹き付ける。皇女であると理解できる者はそう多くないだろうが、美貌が目立つというのはあるだろう。それを避ける意味でも、フードは必要だと判断しているのだ。

誰かに助けを求めることもできない。ヴァニタスの魔術か眷獣か、何かしらの能

力なのだろう。言葉は話せるが、特定のワードが喉に引っかかって出てこないのだ。それは、誰かに助けを求めたり、ヴァニタスを告発するような言葉である。

立ち上がったヴァニタスは、凧を操って立たせる。

「では次に行きましょう」

「この面白い食いに意味はあるのか？ 最優先事項はどうした!？」

凧の主張も空しくヴァニタスをはろういんフェスタに盛り上がる街に繰り出していく。

零菜もそうだが、財布の心配もしなくてはならない。凧は終わりの見えない「デート」に戦慄し、冷や汗をかくのだった。



## 第三部 三話

身体の自由を奪われてからというものの、凧の心中はまったく以て穏やかではなかった。もちろん、身体が勝手動いてしまうということもあるが、それ以上に相手の狙いが零菜であるという点が問題だった。

ヴァニタスと名乗るホムンクルスの少女。

その正体は、犯罪組織が生み出した零菜をベースにした人工吸血鬼である。恐らくは世界初の快拳ではあるのだろう。吸血鬼のホムンクルス化成功は数百年に渡って膠着した錬金術の世界に革命をもたらすと同時に不死の呪いの謎を解く一助ともなる可能性がある。彼女の存在は学術的にも価値がある。しかし、当人たちにそのような認識はまったくない。理解はしているが、それは重要ではない。ヴァニタスは零菜と戦うことを目的に行動しており、凧はその協力者を強制されている。

少なくとも思考と口は自由を取り戻せている。誰かに助けを求めるということも不可能ではないが——。

多くの人々が行き交うはろういんフェスタの真っ最中である。もしも、凧が助け

を求めたとしても、凧が危険な目にあっているということを理解してくれる人がどれだけいるだろうか。その一方でヴァニタスは即座に周囲に眷獸を解き放てる。それを思えば、今は大人しく彼女の言うとおりに動くしかない。

「クソ、まったく何ともならねえ」

苛立ち紛れに毒づいても、結果が変わることはない。

凧はベンチに座って西に傾く太陽を見る。人通りは依然として多く、むしろ増えているようにも思う。そういえば、彩海学園の学園祭も今日だったはずだ。零菜に招待されていたが、すっぱかす羽目になってしまった。後で謝ろう。

「人が多くて酔ってしまいそうですね」

ローブが隣に腰掛ける。

今日三つ目になるアイスがフードの中に消えていく。

「食べすぎじゃないか？」

「大丈夫です。これでも腹八分に留めています、うん。甘味は活力の元ですね」  
機械的な言葉遣いかと思えば、ところどころに感情が混じりこむ。

これが、ホムンクルスという一個の機械だと割り切れればよかったが、それでも

ないのが問題だった。何よりもホムンクルスというのは扱いが難しい。風の師の一人がホムンクルスということもあって、どうにも彼女への接し方が掴めない。

「零菜と戦って、何かヴァニタスに得るものがあるのか？」

「特にないです。強いて言えば、命令を完遂したという事実が手に入ります」

「もういいい主の命令だろ」

「それでも、命令は命令です。命令を実行できない機械など三流以下の粗大ゴミです」

コーンを咀嚼した後、ヴァニタスは包み紙を丸めてゴミ箱に投げ入れる。投じられた紙屑は、十メートル先の仮設ゴミ箱に過たず入った。

「ホムンクルスの製造にはコストがかかる。私は出来損ないの粗大ゴミになりたいとは思わないのです」

初めて、感情の揺らぎが明確に感じ取れた。

それは主からの命令を実行するという最優先事項に対する彼女なりの意地だ。

自分を作り出した者に対する忠誠心ではない。あくまでも、彼女が自分自身を無駄にしないための最低限の意地なのだ。

「……仮に失敗したら、どうするんだよ。零菜は結構強いぞ」

「その時はその時です。どちらにしても犯罪は犯罪……処罰は受けるでしょうが、わたしには関わりないことです」

主の命を守れるか否かがすべてと割り切るヴァニタスにとって、計画の後のことについてはどうでもいいのだ。それが犯罪であろうとも彼女の倫理観には触れない。そのように設計されていない、というよりもその点についての教育がされていないということなのだろう。罪であると知っていても、より優先すべきことがあった場合にはそちらを優先してしまう。彼女の中で法律というものが非常に軽い扱いを受けている。

こうなっては言葉では止まらない。零菜個人の能力もあれば、護衛も何人かついているはず。あまり、悪い結果にはならないと信じているが、不安は募る。

「それでは、行きましょいか」

「どこに行くつもりだよ」

「決闘場」

そう言って、ヴァニタスは凧を引っ立てて歩いていく。

人込みを掻き分けて進む様は積極的な彼女に引き摺られる晩熟な男子に見えるだろう。ヴァニタスは顔を隠しているが、身長や動作が異性の——それも恋人のそれに近いのだから当然である。そして、彼女は意図してそのように振る舞っている。あえて腕を組んでいるのも、その演出だろう。

ヴァニタスの目的は零菜と戦うことだ。

可能ならば勝利する。できなくても、現在の自分の性能を評価する試験として有用な情報となる。もう、その情報を活かす主はいないが、情報を取得するという当初の目的は果たせる。自らの生死すらも、度外視して戦うという一点のみを重視している。そのためには、零菜と戦える環境が必要不可欠である。

ヴァニタスは凧と行動を共にしながら、探っていたのだ。零菜を自然に呼び出せて、かつ邪魔の入らない場所を。

——彼と二人だけで過ごせる、できるだけ広い場所を知りませんか？

ヴァニタスは訪れた店の店員などに、折を見てこのように尋ねていた。いつも離れたところに佇む凧をそれとなく店員に意識させることで、ヴァニタスの問いに信憑性が付与されて、微笑ましいものを見るような表情で店員たちは各々の知識を披

露してくれた。

結果、ヴァニタスは五つの候補地を絞り込むまでになった。

が、しかし、彼女は結局そのどれも採用はしなかった。戦場としてはこの上ない場所だ。凧の携帯を使用すれば零菜を呼び寄せることも不可能ではないだろう。だが、その場合は彼女の護衛の攻魔師と一緒にやって来るに違いない。そうなれば、零菜との決闘など叶わない。一国の姫に就けられる護衛の戦闘能力を甘く見るほどヴァニタスは自分の性能を過大評価していない。低く見積もるつもりはないにしても、性能試験をするのであれば、適切な環境を整える必要があるのだ。邪魔が入っては元も子もない。

そうしてやって来たのは中央行政区のタワーマンションの直下だ。凧にしても見覚えのある高層マンションである。

「おい、ここ——んぐ」

凧の唇が唐突に自由を失った。

ヴァニタスが支配力を強めたのである。本人の言うところによれば夢魔の力だというが、非常に強引ながらも強力な支配能力である。

「そうです。ここなら、護衛は入らない」

灯台下暗し。護衛が必要なのは外出先で危険に会う可能性があるからである。学校や自宅にまで護衛を置くことは、まずない。それこそ、王宮のように広大な敷地があれば別だが、暁家はマンションの五十階と五十一階を自宅として利用しているだけである。外国の王宮ほどの厳重な守りがあるわけではないのである。無論、侵入しようとしてもできないようにはなっている。が、それもヴァニタスを相手にしては形無しだった。

ヴァニタスは零菜のホムンクルスである。

そのため、生体認証に引っかからない。おまけに傍には親戚の尻を引き連れてい。人とすれ違っても零菜がコスプレをしているとしか思われない。

電子錠による機械的な処理が裏目に出た瞬間だった。

今日のはろういんフェスタ関連のイベントで古城を初めとする暁家の大半が自宅にはいない。それもねらい目だった。

ヴァニタスと尻はエレベーターに乗りこんだ。目指すは屋上。ヴァニタスが選んだ、決闘場である。

殺人的な暑さだった一日も日が沈むと比較的穏やかな気温に戻る。風は冷たく、どことなく秋の気配を感じさせる。

今日は綺麗な満月だった。

街の明かりで星は消えても、月光までは打ち消せない。

夜の魔族だからだろうか。月明かりは太陽光よりもずっと好きだ。

零菜は早足で廊下を歩いていった。

高層ビル特有の強風に煽られる髪を手で押さえながら、階段を跳ねるようにして上がる。

数分前風からメールが来たのだ。

今日の昼間の約束をすっぽかした謝罪と、罪滅ぼしに屋上で月見でもしないかと

いう誘いだ。

メールが来てからそう時間も経っていないので、風が来るのはまだしばらくかかるだろう。でもとりあえずはと、零菜は先に屋上に行くことにした。

祭の後で気分が高揚していたこともあるだろうし、風にすっぱかされた怒り——のようなものもあった。そういった後押しもあり、風と会うということに二つ返事で了承してしまった。

「ん、制服じゃなくて、ハロウィンらしい服にすればよかったかな」  
階段を上がりつつ、零菜はそんなことを呟いた。

零菜は麻夜と祭を楽しんだために帰宅が遅くなり、先ほど戻ってきたばかりなのだ。そのため、学校指定の制服を着たままである。ついつい、勢いで待ち合わせ場所の屋上に向かってしまったが、どうせならそれらしい衣服を選べよかったと今更ながらに後悔する。

だが、まあ気にしなくてもいいだろう。

月見の会場として利用するのは屋上。

今回はまずは二人での申し出だ。下手に気張った服装で勘違いされても困るの

で、いつも通り意識しようと零菜は内心で繰り返す。

屋上への出入りは普段はあまりしない。

景色を楽しむのならば自室で十分だからだ。利用するとすればバーベキューをするときくらいだろう。

基本的に利用者は暁家だけの屋上だ。施錠もされていないので、扉を開けるのは簡単だ。

屋上を舐めるように吹き抜ける強風に視界が揺らぐ。

優雅に月見、という環境ではなさそうだ。

安全を考慮した二重のフェンスがぐるりと取り囲み、三十×五十の四角い空間が広がる。上には満月と風に流れるふわふわとした雲があり、前後左右は人工の明かりが広がる地上の星に満ちている。

そして――、

「暁零菜さん、お待ちしておりました」

風に舞う黒いローブ。

「誰……」

凧ではない。

身長は零菜と同じくらい。声音からして女だ。こんなところにいるのがまず不可思議で、しかも零菜を待っていたとはどういうことだ。

「自己紹介しましょう。わたしはヴァニタス——端的に言って、あなたをベアスにして作られたホムンクルスです」

ヴァニタスは何一つ隠すことなく零菜に告げて、フードを取った。

露になるのは零菜と瓜二つの顔だ。

「え、へあ？」

零菜は素っ頓狂な声を出して目を丸くする。

いきなり目の前に自分と同じ顔の人間が現れば、誰だって我が目を疑うだろう。まして、自分のホムンクルスを名乗るなど、常識の範囲外にもほどがあるというものだ。

「ちょ、ちょっと、あなたいきなり何言ってるの？ え、ええ？ わたしをベアスにしたホムンクルス？ ちょっと何いつてるか分かんないんだけど……」

「そうですか？ そのままの意味ですけど」

「そのままって、そんなのいきなり言われて納得できる訳ない……」

「あなたが納得するしないは関わりないことですから。わたしは事実を伝えただけ。その上で、わたしはあなたと戦う必要があるということですので、暫しお相手願います」

バン、と扉が閉まり、魔術的な施錠が行われる。

結界が屋上全体を覆い、内部と外部を切り離れた。

しかし零菜は振り返って状況を確認することができなかった。

このときにはすでに、ヴァニタスが眷獣を呼び出していたからだ。

彼女の右手に現れたのは、白銀に輝く二挺の短刀だった。

「刃シイカ・アルゲントウムの白銀」

緩やかな反りの入った短刀を持ったヴァニタスは、一足飛びに零菜に飛び掛ったのだ。言葉を交わすほどの時間もない。ただの一步で風を切り、零菜の眼前に迫った。

「うわッ！」

零菜は横っ飛びでヴァニタスの斬撃を躲した。地面を転がり、二撃目を回避する。

「ハスタ・アウルム  
槍の黄金！」

黄金が白銀と激突する。

雷光が煌めき、明滅する光が両者を弾き飛ばす。

「い、いきなり何するのよ！」

「この期に及んで危機感のない人ですね。わたしはあなたを倒すと言っているのです。真面目にしないと、死にますよ」

「だ、だから、こんなことされる理由がないんだって」

「戦いなんて、あなた自身に理由なくても周りが勝手に作るものです。特にあなたはお姫様。巻き込まれる理由なんて掃いて捨てるほどあるはずですよ」

零菜は槍を握る手に力を入れる。

彼女の言うとおり、業腹ではあるが零菜が事件に巻き込まれる可能性は否定できない。そのため普段から護衛まで付けられているのだ。普通の家の娘のように過ごすことができないのは、分かりきっていることではあった。とはいえ、自分のホームクルスを名乗る少女に命を狙われるとまでは思わない。

「戦う理由があるのなら、そこをご覧になれば十分ではないですか？」

ヴァニタスは右手の刀を自分の頭上に向ける。

零菜とヴァニタスの位置関係は逆転している。ヴァニタスの刀の切先は、出入口のの上に備え付けられている貯水槽に向けられていた。

「え、あ？」

零菜は再び目を剥いた。

そこには荒縄で縛り上げられ、ガムテープで口をふさがれた凧が磔になっていたのだ。

「ちょ、凧君!？」

「戦う理由としては十分ですか？」

「何で、こんな」

「あなたと戦うためです」

ヴァニタスはトンと床を蹴って貯水槽の隣に飛び上がった。

「わたしはあなたと戦わなければなりません。そのために、あなたの親戚である彼に協力していただいたのです。わたしには、夢魔の特性があります。精神を操るのは苦手ですが、条件さえ揃えれば肉体を支配下に置くことは不可能ではありません

ん。ということ丸一日、わたしと行動を共にしていただきました」

ヴァニタスは馴れ馴れしく凧の頬を撫でた。本人は意識がないのかぐったりとしたままで、反応がない。

「消耗していたわたしにとって、凧さんとの出会いは偶然ですが運命的でもありません。彼のおかげで、わたしは力を回復し、こうしてあなたと向き合うことができただけですから」

「凧君を操って、連れ回してたってこと？」

「そうです」

「あなたの目的はあくまでもわたしなんです。だったら、もう凧君は解放してもいいんじゃない？ これ以上、凧君に迷惑をかけるのは止めて」

零菜は空色の瞳に怒りを湛えてヴァニタスを睨み付けた。  
冷やかな口調には隠し切れない怒気が込められている。

「生憎と、そのつもりはありません」

ヴァニタスは、零菜の要求をまったく無視してしまう。

「彼がここにいてくれたほうが、あなたも危機感を覚えるでしょう。わざわざ縛っ

たのもそのためですし。要するにあなたに見せ付けるための演出というヤツです。まあ、こういう役回りの似合いそうな人ですし」

そう言いながら、ヴァニタスは風の頭を横に逸らせる。露になる首筋に、牙を突き立てた。

「ああッ！　な、なあッ！」

零葉は言葉を失って愕然とした。

深くヴァニタスの牙が風の柔肌に突き刺さり、鮮血が吸い出されている。

「ん、中々……わたしは燃費が悪いのですが、風さんの血はわたしの欠点を補って余りあるものです。これも理由の一つ」

「こ、この……訳の分からないこと、並べ立てて、人に迷惑かけて」

カタカタと零葉は肩を震わせる。

いきなり巻き込まれた挙句に目の前で風の血を吸われるという事態に脳が追いついていない。

「わたしがあなたに要求するのは、わたしと一戦交えていただくことだけ……それが、わたしの価値を明確にする唯一の道だからです。これは、わたしの理屈でわた

しはこれをあなたに押し付けます」

凧から離れたヴァニタスは、紅く染まった瞳を零菜に向けた。

そして、零菜に向かって白銀の雷刀を投じた。

「ッ！」

零菜は槍の黄金で飛んでくる刀を打ち払う。——と、その時点でヴァニタスが零菜の懐まで飛び込んでいた。ヴァニタスの武器は二刀だ。一挺を投じて、もう一挺が残っている。

零菜は半身になって刺突を回避する。空手だった左手に、いつの間にか短刀が握られているではないか。ヴァニタスは身体を反転させて、零菜を斬り付ける。

首を目掛けて振るわれた横凧の刃を零菜は咄嗟に槍の黄金の石突で受け止めた。火花の代わりに黄金と白銀の雷撃が弾ける。目の前で弾ける雷光に目が眩む。が、零菜は未来視でヴァニタスの動きを読み、連撃をギリギリのところ回避し、受け流す。

眷獣と眷獣がぶつかるたびに、熱と魔力と光が飛び交った。

ヴァニタスの剣筋は型に囚われない変幻自在の妙技だった。武器の性質からして

重さはないが、斬撃の速さは驚異的とも言えるだろう。未来を予測する霊眼がなければ、数合のうちに斬り捨てられていたかもしれない。槍の間合いの内側に入れているということが零菜を追い込む要因であり、もう一つ零菜をして驚かせているのは眷獣でありながら槍の黄金と打ち合えているという点である。

零菜の眷獣

——ハスター・アウルム 槍の黄金は世界的に見ても例のない魔力無効化能力を有する

眷獣である。これはおそらくは母親からの遺伝的性質が具現したものでだろうが、その効果ゆえにあらゆる眷獣を一方的に打ち倒せるのである。眷獣は魔力の塊である。その魔力を打ち消す槍の黄金は眷獣を扱う吸血鬼の天敵となる眷獣なのだ。本来であれば、ヴァニタスの眷獣もまた槍の黄金に触れた瞬間に消えていなければならない。だが——、

「ぐ……！」

踊るような回転斬り。二連撃を柄で受けて、零菜は三步下がる。ヴァニタスの

シーカ・アルゲントゥム

刃の白銀は零菜の眷獣に触れても何も影響を受けていない。それはつまり、零

菜の眷獣と同様の能力があるということだろう。魔力無効化能力の刃——吸血鬼の再生能力を阻害するだけに、掠り傷が致命となりかねない。

「この、調子に乗るな！」

零菜は槍の黄金に魔力を注ぎ、放電させた。雷撃が刃となり、ヴァニタスを押し返す。

「さつきから好き勝手なこと言って、迷惑なんだけど！」

「でしようね。重々承知しています」

「分かってやってるから、なおのこと質が悪い……」

表情一つ変えないヴァニタスではあるが、今の交錯で分かったこともあった。

ヴァニタスの眷獣は確かに魔力無効化能力を持つてはいるが、零菜の眷獣ほど強力なものではないということだ。いぶし銀の黒髪が燻っていて、彼女の頬や裾にも電光で焼けた形跡が認められる。零菜のように全身に作用するものではないということだ。

近接戦ではなく、遠距離戦にこそ活路がある。

「いいよ、やってあげるよ！ 凧君に迷惑かけた分も含めてね！」

槍の先端に雷の魔力が集中する。

集積した雷撃のエネルギーをヴァニタスに向けて放射する。

「ッ!？」

ヴァニタスは魔力の流れを読み、零菜の雷撃に先んじて身を投げ出した。刃の白銀の守りがあるとしても、それに頼りきりでは勝てる戦いにも勝てはしない。眷獣の守りが万全でない以上は、身体能力と判断力で身を守るのが大前提となる。その点、零菜ほどではないにしても未来を予測する力を持つヴァニタスは類希な身体能力もあって雷撃に先んじるだけの能力が備わっていると言える。零菜からすれば雷を避けたというのは驚きであろうが、ヴァニタスからすれば当然の帰結であった。雷撃の放射は予想外ではあったが遠距離攻撃をしてくる可能性は考慮の範囲内。対して零菜はまさか回避されるとは思ってもいかなかった。その僅かな差が、ヴァニタスに反撃の糸口を与えた。

「モードチェンジ……」

自己暗示めいた言霊と共に、ヴァニタスが弾丸となる。

踏み込んだコンクリートの床が削れるほどの脚力による突進は、零菜の反応速度を瞬間的に上回った。目は追えている。霊視もヴァニタスの行動を予測しているだろう。だが、身体が付いていかない。それでも反射的にヴァニタスの斬撃に槍を合

わせたのはさすがと言えるだろう。火花が散る。直後、ヴァニタスの強烈な膝蹴りが、零菜の腹部を打ち抜いた。

「うぐ……ッ！」

呻き声を残して、零菜は蹴り飛ばされた。

凄まじい脚力。内臓が破裂したのではないかと思えるほどの衝撃に曝されて零菜は床をバウンドして転がる。

「あぐ……ぐ、げほッ……！」

嘔吐しかける零菜は歯を食い縛って堪えた。

痛みに任せるよりも、乙女としてそれはできないという意地が勝ったのだ。とはいえ、ダメージは深刻だった。鳩尾に一撃を食らったのだ。身体の構造は人間と同じ。多少頑丈でも弱点らしい弱点は共通している。神経系が密集する鳩尾を強かに打ちぬかれたことで、零菜は呼吸困難に陥っている。不死の呪いがあるうが、この結果は変わらない。

拘っていたわりにはあっけない終わりにヴァニタスは自分でも理解し難い無常感に苛まれていた。

これは性能評価試験である。ならば、自分の性能がオリジナルである零菜の性能を上回っていたということが実証されたに過ぎず、それ以上の価値などないはずだ。理解できない失意を抱えてため息をついたヴァニタスは、半ば反射的に二刀をクロスして前面に構えた。視界を覆う雷撃の圧で、身体が浮き上がる。

「ぐ……！」

魔力無効化の結界ごと押し戻されていく。チリチリと肌を焼く熱を感じる。ヴァニタスの眷獣では打ち消せる魔力量に限度がある。まして、魔力無効化の性質を帯びた雷撃ともなれば、完全に防ぎきるのは難しい。

雷撃が通った後の鼻を突くオゾン臭も、屋上を吹き抜ける強風に流れて消えていく。

「もう立てるんですか」

ヴァニタスは小刀を握る手に力を込める自分を止められなかった。それは、半ば無自覚の行動だったのだろう。

「何笑ってるの」

「笑ってる？　そうですか？」

「人を蹴り飛ばしておいて、楽しそうにするなんて信じらんない」

死ぬかと思った、という言葉が零菜は飲み込んだ。さすがに、そこまで弱みを見せたくはなかった。今、こうして立ち上がりはしたものの、頭はくらくらするし腹は痛いしで泣きそうなのだ。

「……で、何、その格好」

零菜は槍を突きつけ、尋ねた。

「格好？」

「いきなり変身したのはどういうこと？ あなた、獣人だったりするの？」

零菜の問いは、ヴァニタスの外見にあった。

彼女の頭に二つの突起が生まれているのだ。三角形のそれは、見るからに動物の耳そのものである。

「ああ、これですか。まあ、生えてきちやうんですよね」

ヴァニタスは自分の頭についた第三の耳の先端を掴んで言った。

「ちなみに尻尾もありますよ。こう見えて、獣人の因子も入っているので」  
「言わなくていいよ、そんなのまで」

ローブに隠れて見えないが、獣人だというのならばそういう変化もしているだろう。通常の獣人のような完全に獣の外見になるのではなく、人の容貌を残したままの中途半端な獣人化である。希に、そういった個体が存在していることを零菜は知っている。例えば、彩海学園で教鞭を取っている、カーリという女教師はその類だ。本来の獣人ほどの身体能力を発揮できないために、嘲笑と差別の対象になるという。だが、それでも身体能力は常人の数倍以上。吸血鬼をも上回る。零菜をベースにしたホムンクルスと言いつつも、身体能力を獣人の因子で補強している点は、強化体と言うべきではないか。

「どっちかと言えば、キメラというのが正しいのかもしれないね。わたしのようなもの」

「それこそ、どうでもいいよ」

そんな呼び方に意味はない。

零菜にとって意味があるとすれば、自分のホムンクルスを名乗るこの少女には断固として負けられないという点だけだ。

状況は決して最悪ではない。

ヴァニタスの能力に翻弄されはしたが、よくよく振り返れば彼女の身体能力も桁外れというほどではない。彼女を上回る身体能力を持つ獣人はごまんといるし、眷獣の性質でも零菜のほうが勝っているのは確実である。ただ、その二点が組み合わさって総合的にヴァニタスの能力値を押し上げているに過ぎない。適切に対処すれば、致命的なダメージを受けることはない。

周囲を覆う結果も、槍の黄金の力でスタスタに引き裂かれている。ヴァニタスはその都度修復しているようだが、零菜からの攻勢が強まれば、それも間に合わなくなるに違いない。ここは護衛の入らない晝家の真上に位置するが、だからこそ異変を感じて駆けつけてくれる者もいるだろう。例えば、彼女の姉や妹がそうだ。遊びに行ってみんな不在なのが恨めしいが、そろそろ戻ってきてもいい頃ではないか。

「そうですね。その通りです」

ヴァニタスは頷いて小刀を構え直した。

白銀の電光が刃を流れている。零菜の槍を流れる黄金の電光とは異なる魔力ながら、その性質は非常に近い。存在するだけで大気中の酸素をオゾンへと変換してしまうために、その周囲からは常に異臭を漂わせる。

「では、続きをしましょう」

獣人に匹敵する身体能力でヴァニタスは零菜に接近する。獲物に向かってかける豹のように、しなやかな五体を駆使して滑るように零菜の胸に向かって刃を突き出す。

エクリプティカ・サフィルス  
「天球の蒼！」

零菜が対抗して膨大な魔力を解き放つ。

ハスタ・アウルム

槍の黄金ではない。また別の眷獣であろう。槍の黄金以外の眷獣については、組織のデータベースにも記載されていないのでまったくの不明である。だが、問題ない。刃の白銀はあらゆる魔を断ち切る。

果たして、貫かれたのは衣服のみ。青と白で色づけされた彩海学園中等部の制服は無残にも焼け焦げ、両断されたブラジャーが転がった。

「な……」

ヴァニタスはさすがに驚いて動きを止めてしまった。

次に零菜の姿を認めたのは、遙か背後——貯水槽のある場所だった。

「転移魔術？　しかし、今のは……」

確かに膨大な魔力の発露を感じ取った。あれはまさしく眷獣の召喚であつたはずである。ならば、今召喚されたはずの眷獣が転移の能力を有していたということだろう。

「しかし全裸になるとは……わたしですらローブは着ているのに」

ひゅん、と小刀を振るう。

零菜の目的は分かっている。

後は逃げるか向かつてくるかの二択だろうが、向かつてくるのであれば受けて立つ、逃げるのであれば存分に背後から刺すまでだ。

ヴァニタスの予想の通り、零菜の第二の眷獣<sup>エクリプティカ・サフィルス</sup>球の蒼の能力は転移ではあるが、それはあくまでも能力に一側面に過ぎない。本質は別であり、極めれば時空すらも越えることができる——つまりはタイムスリップを可能とする非常識な眷獣なのである。現状、零菜はそこまでは至っておらず、転移したとしても肉体と精神を飛ばすのが精々で、一度使えば衣服が残ることになる。

一糸纏わぬ姿となつた零菜はヴァニタスの速攻をやり過ぎして貯水槽に縛り付け

られた凧に駆け寄った。

槍の黄金で縄を焼ききり、呪詛を取り除く。口からガムテープを剥がして完全に自由を取り返した。それでも意識が回復しないのは、強制的に眠らされた影響だろう。魔術による眠りから自然な眠りに変わったのだ。今目覚められても困るので、これはこれでいい。

「凧君、ゴメン」

零菜は凧の首に噛み付いた。ヴァニタスが噛んだ部位とは反対側だ。一口だけ血を啜り、全身に活力を漲らせる。

「まあ、そう来るでしょうね」

ヴァニタスが零菜の背後に飛び上がってくる。

「ちよっと、不愉快です」

「こっちの台詞」

刃と刃が激突する。

しゃがむ姿勢の零菜に対して、ヴァニタスは上から斬り付ける体勢である。体重をかけることができる上に筋力も上なので、押し切ることもできる。ヴァニタスは

そう考えていたのだが、零菜を押し潰すことができないどころか、押し返されると  
いう状況に困惑した。

零菜の足元から影が伸び上がり、彼女の身体に巻きついていく。

「はあッ！」

零菜は槍の黄金を振り上げて、ヴァニタスを振りほどいた。

零菜の身体を包み込む影は黒い衣装となった。黒いロングコートと黒の手袋であ  
る。

「ッ！」

「影の漆黒」  
リヒト・ニゲラ

零菜の右ストレートがヴァニタスの鳩尾に突き刺さる。

「ごふッ……！」

数分前の焼き回しだ。立場の逆転はあるが、腹部を殴りつけられたヴァニタスが  
今度は宙を舞った。

「うん、よし」

零菜は吹っ飛んだヴァニタスを見送った後で、拳を握ったり開いたりして状態を

確認する。

使い方は脳裏に浮かぶが、このような形の眷獣もあるのかと驚いた。

麻夜の眷獣の性質に近いだろう。纏うことで、身体能力を飛躍的に高める効果がある。零菜はロングコートの前をしつかりと締めてから、尻の元を離れて屋上に舞い戻る。

「やられた分だけやり返してやったわ。どうよ」

「げほ、うぐ……ええ、まったく。これは辛いものですね」

顔を歪めて、ヴァニタスは呟いた。

急きこむ姿は先ほどの零菜を髣髴させる。

「どうするの？ まだやるの？ さすがにこれ以上は人がくると思うけど？」

「どうもこうもないですよ。ここまで来たら、最後までやるしかありませんし、あなたを逃がすつもりもありません」

魔力が渦巻いていく。ヴァニタスを中心に強い魔力の奔流が発生しているのだ。

「じゃあ、叩きのめす。後悔しても遅いからね！」

止まるつもりがないのならば、どこかで拘束しなければならぬ。

相手は吸血鬼。眷獣を保有している以上は中途半端な形での拘束では意味がない。周囲を危険に晒すだけである。

零菜は強化された身体能力で駆け出した。今の零菜ならば、ヴァニタスまで二歩で届く。二歩目は拳を叩き込むための踏み込みとなる。一瞬に近い短時間で距離を零にした零菜は固く握りこんだ拳を振りぬく。

「ぐ……!!」

だが、零菜の拳は半透明な黄金の膜に遮られて通らない。鋼鉄を打ち据えたような、硬い音が響くだけだ。

「今しばらくお付き合い願います」

ヴァニタスは紅い瞳を輝かせて、眷獣を呼び出した。

「黄金の腕を持つ者」

暴風が物理的な力となって零菜を弾き返す。

立ち上がったのは黄金の巨人だ。ヴァニタスを取り込んだ巨人は、表情のない顔で零菜を見下ろしてくる。

「黄金の腕を持つ者って、まさか——」

この巨人に酷似した眷獣を零菜は知っている。

零菜の驚愕を、ヴァニタスは正しく理解している。

「そう、この子は人工眷獣ロドダクテュロスのデータを引き継いでいるのです。もっとも、断片的なものでしかありませんので、型落ち品とも思ってください。人工物のわたしには、人工眷獣が相応しいでしょう」

巨人が拳を握り締める。

人工の眷獣と言ってもその力は絶大だ。薔薇ロドダクテュロスの指先の型落ちであろうとも、眷獣というだけで強大な戦闘能力を秘めているのは明白である。

振り下ろされた拳は大魔術に匹敵する威力を誇る。直撃すれば、零菜とて無事ではすまない。

零菜はするりとヴァニタスの攻撃を潜り抜けた。今の零菜は高速機動と先読みの組み合わせで、高い回避能力を身に付けている。大振りのパンチなど当たるはずもない。

「いやあッ!!」

零菜は力いっぱい黄金の腕を持つ者を殴った。

やはり固い。鋼鉄のような防御力である。

「う、わッ」

零菜は慌てて距離を取る。

黄金の腕を持つ者に触れた拳に異変があった。影のグローブがボロボロに崩れているのである。

「まさか、魔力を食って、わわッ」

ゴミを払うかのように振るわれた腕を零菜は伏せて躲した。

魔力を食らう眷獣と戦うのはこれが二度目。一度目は大蜘蛛の眷獣だが、そのときも零菜は魔力を吸い取られて瀕死にまで追いやられている。正直、苦手意識はあった。

「ハスタ・アウルム  
槍の黄金」

だが、相手が魔力の塊であるのなら、槍の黄金が通じるのは自明の理。

強化された筋力を駆使して、零菜は黄金の槍を一閃する。

まるでバターを熱したナイフで斬ったかのように、あっさりと人工眷獣の腕が両断されて、虚空に消えた。

「じゃあ、決めるか」

零菜はくるくると槍を回して切先をヴァニタスに突きつける。

ヴァニタスは即座に失った腕を修復する。魔力があれば、いくらでも治せるということだろうか。それはそれで厄介な能力ではある。

ならば、治らなくなるまで切り刻むか本体を叩く。それだけの簡単な作業だと零菜は言い聞かせて、ヴァニタスとの決着に向けて踏み出したのだった。

今回風君は完全に部外者。可愛い女の子に血を吸われるだけの簡単なお仕事でした。

## 第三部 四話

黄金ククリッスの腕ロノスを持つ者は魔力を食らう巨人の眷獣で、アスタルテの薔薇ロドダクテユロスの指先と同様に宿主を体内に取り込み、全身を覆う鎧となる。眷獣の戦いは魔力のぶつかり合いである。その戦いで、相手の魔力を一方向的に収奪する能力は、非常に凶悪と言えるだろう。

「もう、なんか嫌だなッ」

風きり音が耳元でした。

ビル風を攪拌する巨人の腕が台風さながらに振り回されている。

零菜は流れに身を任せるように、決して無駄な抵抗はせず、最小限の動きで黄金の腕を持つ者をやり過リヒト・ニゲラぎしている。霊視能力は零菜の方がヴァニタスよりも上らしい。霊視能力を持つ者同士の戦いは、どちらが相手よりも素早く的確に霊視できるかという点にかかっている。影の漆黒によって飛躍的に向上した身体能力と合わさって、零菜を捕らえることは極めて困難となった。

金色に輝く巨人の眷獣が、自分と同じ暁を意味する名前を持つことがまず気に入

らない。アスタルテはいいとして、自分の生き写しの少女がそんな眷獣を従えているのは感情的にも反発してしまう。

「こんのお！」

振り下ろされる腕はさながら隕石のよう。落ちれば床を砕き、階下を崩落に巻き込むだろう。零菜は槍を突き上げて、黄金の腕を持つ者の拳骨を打ち消した。バリバリと紫電が駆け抜けて、巨人の腕が溶ける。片腕となった巨人は尚も零菜への攻撃を諦めない。

「何度やっても同じだって！」

振るった槍の一閃が、残る片手を斬り飛ばす。肘から先を失った巨人は、よたよたと後ろに退いた。

どれほど強力な眷獣であろうとも、槍の黄金はその存在の根幹である魔力を消し去ってしまう。防御も攻撃も一切が無効である。黄金の腕を持つ者では、槍の黄金を持つ零菜には歯が立たない。

踏み込んだ零菜の総身に怖気が走ったのは、直後のことだった。身体は反転させて、槍を振るう。再生を果たしていた黄金の腕を持つ者の腕と交錯する。

「ッ………！」

強烈な一撃。

腕に仕込まれた刃（シーカ・アルゲントゥム）の白銀が零菜の槍（ハスタ・アウルム）の黄金ごと小柄な身体を跳ね飛ばす。

空中で体勢を立て直した零菜は、猫のようなしなやかな動きで着地した。

「眷獣を……」

「融合といえるほどのものではありません。共鳴させるというほうが正しそうですね」

ヴァニタスが操る二体の眷獣が一つになっている。

ただ、それは麻夜がするようにまったく新しい個体として新生するものではない。両腕に埋め込まれた二刀がその両腕全体に魔力無効化の能力を付与しているという状態である。

あれに殴られれば、さすがに死ぬ。回復もできないだろう。

童巻にも似た旋風を巻き起こし、殺人的な魔力の暴風を纏ってヴァニタスの眷獣は荒れ狂う。

同じ魔力無効化能力を持つ以上、零菜を優位に立たせていた相性の優位性は打ち

消されたも同然である。こうなれば、槍一本と腕二本。単純な数と力の暴力が戦局を左右することとなる。

「ぐう……！」

零菜は槍で受け止めた衝撃を逃すように、後方に跳躍する。

幸い、相手に機動力はない。追撃してきても十分に対応できる。

「ええいッ！」

零菜は力任せに槍を振るう。

落ちる黄金の拳骨と切先をふれあい、そのエネルギーを真横に受け流す。

激しい火花が咲き乱れ、黄金の拳は零菜を掠めて虚空を切った。

しかし攻め切れない。敵の武器は二つある。一つを掻い潜ったところで、もう一つの拳骨が零菜の進路を阻むのだ。これまでに、何度も零菜の踏み込みは浅くなった。槍の能力が通じる身体まで辿り着けない。

黄金の腕を持つ者の拳骨を竜巻とするのならば、零菜の槍の黄金は鎌鼬である。面に対して点で受け、線で風ぐ。一撃の重さはないものの、力の流れを適切に読み取って対処している。一流の船乗りならば、風も波も自在に乗りこなせるだろう。

一瞬先を読み取る。ヴァニタスよりも正確に、腕と腕をくぐりぬけ、その守りと攻撃をやり過ごした先にある僅かなほころびを零菜の眼が捉えた。

「ハスタ・アウルム  
槍の黄金!!」

意思ある武器にして変幻自在の槍たる槍の黄金は、主の魔力を受け取って雷光の煌めきも高らかに己が刃を伸ばした。

まさか、槍が伸びるとは思わなかったヴァニタスは想定外の攻撃に反応が遅れた。腕と腕の間を潜り抜けた槍の黄金は、黄金の腕を持つ者の頭を打ちぬき、その胸まで斬り開いていた。さらに、魔力を無効化する能力を秘めた強烈な雷撃が内側から巨人を焼き尽くす。

如何に強力な守りで固めようとも、内側から焼かれてはどうにもならない。魔力無効化の槍に耐えることができるのは腕の部分だけであって、身体の方にまで刃の白銀の効力が及んでいるわけではないのだ。

ヴァニタスの眷獣は瞬く間に雷光の中に溶けて消えていく。

ヴァニタスは自らの眷獣が消滅するよりも一瞬早く外に飛び出していた。黄金の膜から零れ落ちる白銀の刃を手に、零菜に向けて飛ぶ。

眷獣が倒されたフィードバックが彼女の身体にも及んでいるだろうに、消耗をおくびにも出さず刃を突き入れてくる。しかし、精神力で誤魔化せる消耗にも限度がある。刃が零菜に届く前に、肉体が悲鳴を上げた。

「がふッ……」

失速したヴァニタスはその場に崩れ落ちた。

零れ落ちたのは、大量の血液だった。

「うごほッ、がはッ……ごふ」

ヴァニタスが激しく吐血しているのだ。

「え、ちょっと……!!」

自分を狙ってきた相手とはいえ、さすがに目の前で吐血して悶絶されては対応に苦慮する。彼女を自業自得だと切って捨てられるほど零菜は非情には徹しきれない。

零菜は不老の吸血鬼とはいえ、まだ十五年しか生きてはいない。

重ねた時間は人間の同世代とまったく一緒に、精神性も十代の女子中学生と同程度である。多少鍛えられてはいても、軍人のような精神を持つことまで要求される

こともない。

駆け寄った零菜は膝を突くヴァニタスの背中を摩る。ほかにどうしたらいいのか分からない。

「……異かもしれないのに、駆け寄ってくるとは。甘いのでは、ないですか……がふッ……」

「そんなの知らないよ。目の前で、血吐かれたら誰だって、ああもうしゃべるな！」  
わたわたとする零菜はともかくにもヴァニタスを寝かせなければならぬと無理矢理その場に転がした。

ヴァニタスは抵抗する体力もないのか、あっけなく床に転がる。

「え、ど、どうしよう……」

ヴァニタスの口から零れる血の量を見ると、非常に危険な状態だということが一目瞭然である。不死の呪いを持つ吸血鬼であっても、その力の源泉である血液を失えば容易に死を迎えることになる。不老不死などと銘打っても、それは死ににくいというだけで、死ぬ理由を並べれば当然のように死ぬ。殺しても死なないのは真祖くらいのものだ。

ヴァニタスの身体は、何かしらの致命的な欠陥があるに違いない。ホムンクルスと言っていたことだし、身体面に重篤な障害があったのかもしれない。すでに彼女の意識はない。顔を蒼白にして、痙攣している。

どうすればいいのか分からず、完全に思考が固まってしまった零菜に声をかけたのは凧だった。

「零菜……」

「凧君、ど、どうしよう！」

「とにかく、救急車を呼ぶしかない。いや、ヘリか？　結界が解けたみたいだから、連絡は付くはずだ」

「あ、ああ、うん、そうだね」

ヴァニタスが倒れたことで隔離結界も解けたらしい。外部と内部を隔てていた壁がなくなり、連絡が付くようになった。

「え、あれ、携帯……」

零菜は自分が携帯を持っていないことに遅ればせながら気付いた。天球の蒼を使用した際に、制服ごとごっそり置いたままだったのだ。

「いい、俺が呼ぶ。零菜はとりあえず、ヴァニタスを横向きに寝かせて。血で喉が詰まるかもしれない」

「う、うん」

零菜は言われたとおりにヴァニタスを真横に寝かせる。

仰向けでは、吐瀉物などで喉を詰まらせる危険がある。そのため、横を向かせて寝かせるのがよいとされる。回復体位とされる姿勢は、零菜も学校の授業で習ったので一応の知識はあるが、いざ実践となると中々頭に浮かんではこないものだ。

凧は携帯で救急へりを要請し、次いで雪菜の側近に連絡を入れる。零菜関連のトラブルがあった場合の緊急連絡先の一つである。雪菜が郊外の施設で行われているイベントに出演中であることもあり、すぐに連絡が着かないだろうと判断したのである。

「とりあえず、雪菜さんにも連絡が入ると思う」

「うん、ありがと」

ヴァニタスはもうすっかり反応がなくなってしまうている。急速に生命力を失っているような、そんな感じだ。これは、眷獣を使用したことによる急激な消耗とは

また別の問題のように思える。

「このままじゃ、ヤバイかもな」

「治癒魔術、できる？」

吸血鬼は勝手に肉体が再生するので、あまり治癒系統の魔術を必要としない。零菜自身もそれほど得意ではないのである。

「できるっちゃできるけど、焼け石に水だろうな」

凧の技術でも重傷者をどうにかできるほどの治癒はできない。ゲームなどではありがちな技術ではあるが、現実には物を壊すよりも難しい繊細な魔術なのである。念じれば、自動で治ってしまうような、そんな単純な代物ではない。

「手っ取り早く確実なのは、血を吸ってもらおうことだよな」

「えと、血って凧君の？」

「そう。零菜、何か刃物ある？」

「……ない、けど。槍の黄金でよければ、出せる」

「それじゃ感電しちゃうだろ……」

零菜は複雑そうな表情で答えるが、凧はその点には頓着しない。

優先事項はヴァニタスに血を吸わせることだ。事は命に関わる。

仕方がないので、凧は人差し指の先を犬歯で食い破り、血を滲ませた。そして、その指をヴァニタスの口に入れる。

吸血鬼は強い霊力や魔力を帯びた人間の血を吸うと、格段に能力を跳ね上げる性質がある。個体差もあるが瀕死の重傷からでも、瞬く間に回復する例もあるくらいである。零菜のホムンクルスを名乗るのならば、凧の血の一滴でも相当な回復が見込めた。

「んう……」

ヴァニタスが反応を示した。

口内に入った血の味を彼女の本能が察知したのだ。死に瀕しているというだけあって、生存本能が凧の血を求めて指に喰らい付く。

しばらくすると、ヴァニタスの顔に血の気が戻ってきた。

凧はほっと一安心して、救急隊の到着を待つ。凧の要請どおりに動いてくれれば、ヘリが出るはずだ。それならば、もう着いてもいいころであろう。

「どうした、零菜？」

「いや、別に……」

何か言いたそうにしている零菜は、凧に聞かれて他所を向く。

ヴァニタスが直前まで敵対していた相手だ。さらには零菜のホームクルスであるなどと聞かされては心中穏やかではいられないのだろう。

凧は零菜の態度を深く追求しなかった。

相変わらぬ強風に舞い上がったものがある。

黒い布切れだ。それが凧に向かって飛んできたのである。咄嗟に凧はそれを掴んだ。

「ん、何だ……ッ……」

凧は思わず息を呑む。

凧に乗って飛んできたのは、黒い紐パンだったのだ。

ヴァニタスのものではない。彼女に衣服を貸しているのは凧である。即ち、ヴァニタスの下着も凧のものなのだ。このような女性用下着をヴァニタスが身につけているはずがない。

恐る恐る振り返ると、顔を真っ赤にした零菜が震えていた。

ああ、なるほど、と凧は得心した。

このロングコートの下には何も着ていないのかと埒もないことを考える。

「はすた、あうるむ  
槍の黄金」

ビリビリと零菜の右手に雷光が具現する。

「お、おい！ ちょっと、待てよ。これは不可抗力っていうか……紐なんだな……」  
「オーケー、分かった。とりあえず、ニューロンから消すところから始めようか」  
冷ややかに零菜は笑った。

一日分の不愉快を煮詰めて詰め込んだような笑みだった。



ヴァニタスに関する報告は逐一古城の下に届けられている。

彼女は一連のテロ事件を引き起こした組織が製造したホームクルスであり、活動開始からまだ数日しか経っていないということも分かっている。直接テロに加担したわけではなく、主の命令を受けて行動していたことから、罪には問われない――

——情状酌量の余地があると判断されている。これについては、同様の事例としてアスタルテの扱いを参考にしている。絃神島の頃の話ではあるが、アスタルテもまた主の道具として使役され、法を犯している。その際に、彼女については保護観察処分として様子を見る形となったので、ヴァニタスもまた同じ扱いを受けることになる。

問題は、彼女の素性である。

まさか、曉零菜のホームクルスであると公表するわけにもいかない。

表だって彼女が引き起こした事件は、マンシヨンの屋上で眷獣を使用したことくらいだ。交戦したのは、零菜であり、過激な姉妹喧嘩として内々に処理できる。

ヴァニタスが倒れた後、彼女は救急搬送され、集中治療室に送られた。ホームクルスであることや、様々な魔族の因子を植え付けられていることもあって、治療はかなり難しかったようだが、凧が血を与えたことで彼女自身の再生力が機能していた。一晩もかからず、峠を越えた。

ヴァニタスとの激闘から三日が経ち、秋休みで学校が休みとなっていることもあって凧は昼間から零菜の家を訪れていた。

表はまだはろういんフェスタの熱が続いている。最も大きなイベントは終わったものの、その後もしばらくは祭が続くことになる。縁日を髣髴させる出店はもう店仕舞いしているが、その一方でライブや展覧会といった施設を使用したイベントはこれからが本番だ。

夕方から夜にかけて、大規模な花火イベントが催される。幸いなことに今日は快晴で、天気が悪化する予報もない。このまま行けば滞りなくイベントは行われることだろう。

相変わらず、テレビははろういんフェスタの特集に溢れている。皇帝宅の真上で行われた死闘については、一回たりとも報道されていなかった。

凧が麦茶で喉を潤していると、リビングに零菜と萌葱が入ってきた。

「お待たせ」

「ん、おう」

零菜は、青い浴衣に身を包んでいる。そして萌葱は薄い桃色の浴衣だ。日本から独立して、まだ十年と少し。文化の面ではまだまだ日本を引き摺っている。しかし、それでいいと凧は思った。大正義浴衣である。

「ちょっと、凧君。もうちょっと何かあるでしょ。ほら、ねえ」

萌葱が自分の浴衣の袖をパタパタと振ってアピールしてくる。

「萌葱姉さん、よく似合ってる」

「うん、よし」

それでいいのかと思うが、萌葱は特に凧の返事にどうこう言うつもりはもともとなかったらしい。すでに彼女の関心はテーブルの上のチョコレートに移っている。

「萌葱ちゃん、もう時間だよ」

「分かってる分かってる。一個だけだつて。うん、おいし」

チョコレートを口に放り込んだ萌葱は、すぐに零菜の隣まで戻った。

「何してんの凧君。行くよ」

「ん、ああ……」

零菜が声をかける。凧は頷いて、テーブルに放置していた携帯をズボンのポケットに押し込んだ。

これから花火大会がある。零菜と萌葱は雰囲気を出すために、わざわざ浴衣に着替えているし、恐らくはほかの姉妹も同じように着替えているのだろう。

三人で連れ立って外に出ると、待ち構えていたように麻夜と紗葵に出くわした。

「や、遅かったね」

「ゴメンゴメン。ちょっと、手間取ってね」

「萌葱姉さん、帯大丈夫だった？」

「いや、別に結べなくて手間取ったわけじゃないわよ？」

「そう？ いや、萌葱姉さんは不器用だからねえ」

麻夜は萌葱を挑発するような口調でからかう。

「凧がいるなんて珍しい。いつぶり？ 三年くらい？」

紗葵が凧の両肩にがっつりと体重をかけて飛びついてくる。不意打ちだったので、ふらついてしまった。

「待て、紗葵。危ない……」

すぐ右手は断崖絶壁である。前に一度落ちたことがあるとはいえ、二度とあのよ  
うな経験はしたくない。紗葵を振りほどいて、凧は答える。

「最後に来たのは、六年の時だからまあ、それくらいかな」

暁家が入るこのマンションは、花火を見るのに絶好の立地にある。そのため、花

火大会の日は屋上で夕涼みをしつつ、花火を観覧するのが暁家の習いだった。

「あ、ところで今日は雪菜さんたちはどうするんだ？」

「古城君は相変わらずのお仕事。まあ、マ、母さんたちはどうかな。うちは来るって言ってたけど」

「うちも来るってさ。麻夜んところは、さっき上に行ったの見たな」

零菜と萌葱が口々に答える。

「僕んところは、割と時間が自由な部署だからね。むしろ、今がつつり忙しいはずの雪菜さんがいるのが驚きだけど……紗葵は？」

「ん、うちの母さんはもう上に行ってる」

「来るんだ。忙しいんじゃないの？」

零菜が驚いて尋ねた。

紗矢華はここ最近続いたテロ事件の捜査に当たっている。ヴァニタスのこともあり、雪菜と同様に非常に忙しい時期だと言えるだろう。

だが、紗葵が操られる事件があつて以降、紗矢華は時間をやり繰りして紗葵との時間を増やす努力をしている。今回も、このためだけに時間を空けているのだろ

う。涙ぐましい努力である。

そして、現在育児専念中の夏音と結瞳はその娘と共に出席は確實である。一族の大黒柱が欠席というのが何とも締まらないが、皇帝が忙しくするのは当たり前と言えは当たり前である。

凧たちは駄弁りながら階段を上がり、屋上に出た。

数日前の戦闘の名残で、床のところどころが焦げ付いているが、それ以外に目立った変化はない。修繕するほどの破壊もなかったもので、そのままにされている。扉を開けてみれば、すでに宴会の準備が整っている。花火日和に相応しく風も弱く、外で飲み食いするにはちょうどよい。

紗矢華や優麻といった母親陣はすでに軽く酒も入っているようであった。

「あ、来た来たー、おい凧君久しぶりー！」

ぶんぶんと人懐っこい笑顔で手を振って駆けて来たのは、ポニーテールの女性である。あまりのことに凧は啞然とした。

「え、何で母さんがここに？」

「実はお昼に帰って来てたんだよ。色々あったみたいで、大変だったねえ」

「いや、ええ!？」

こうして会うのはいつ以来か。正月に帰って来てからずっと海外にいたので、実に十ヶ月ぶりになるのだろう。

「ほんとは、もっとちよくちよく帰ってこれればいいんだけど、ごめんね」

「いや、いいよ、仕事だし。でも連絡入れてくれてもいいんじゃないか？」

「ふふ、それはドッキリってヤツだよ。どう、驚いた？」

「まあまあ」

「どうしよう、紗矢華さん。息子が冷たい」

すでに三十を越えているだろうに、中学生のような反応を示す母。しかし、それが嫌味に見えないのは、彼女の明るさのためだろうか。外見も若々しい。古城の嫁たちは血の従者となったことで永遠の若さを手に入れたが、風沙はただの人間でありながら異様に若い。祖母もそうだが、暁家は人間の範疇から考えてもかなり身体的に恵まれているらしい。

「ああ、そうそう。帰国したのは、花火を見るためじゃないんだ。色々と手続きがあつてね」

「手続き？」

「そう。風君に妹ができました」

「ふーん、ん？ え？」

「風君に妹が……」

「いや、それは一度聞けば分かる、妹？ え、できたの？」

「妊娠したってわけじゃないよ。紹介しまーす、はい」

風沙は母親集団の中から立ち上がり、こちらに歩いてきたのは零菜によく似た少

女——ヴァニタスであった。

「あ！ ちょ、ちょっと！ なんであなたがここにいるのよ！」

風が口を開くよりも先に、零菜がヴァニタスに噛み付いた。

「何でと言われましても呼ばれたからですが？」

「だ、誰に？」

「風沙さんです」

零菜はバツと風沙を見る。

「いやあ、こうして見るとほんとに瓜二つだねえ」

ヴァニタスは生体認証を零菜としてすり抜けられるほど外見的には零菜にそっくりなのだ。細かな仕草や表情から判別は可能だが、そこらの双子よりもよく似ている。

「あれが、噂の？」

「うわ、ほんとにそっくりだ」

「零菜姉さんのホムンクルスだって」

萌葱と麻夜、紗葵は初めてヴァニタスに会う。話だけは聞いていたが、まさかこれほどとは思っていなかったし、実際に会うとどう接していいか分からない。

「ん、母さん。さっき、妹って？」

「うん、そうだよ。ヴァニタスちゃん、うちで引き取ることになったから！」

「え、ええええええ!! ちょっと待ってくれ、何でそうなる!!」

「そ、そうですよ、凧沙さん！ だって、コイツ、凧君連れまわして色々あれやこれや、何かしたんですよ!!」

零菜が凧沙に詰め寄る。

「うん、まあね、色々あったみたいだし？ それに、ほかに行き場もないって言

うし、まさか古城君のところまで引き取ってわけにも行かないからね」

ヴァニタスの処遇はかなり難しいのだ。零菜のホムンクルスである以上、手放すことはできない。古城や雪菜からすれば血縁上の娘に当たる上に立場が立場だ。遺伝子や吸血鬼のホムンクルスのただ一人の成功例という意味もあって彼女の存在は非常にデリケートなものとなった。しかし、その一方で零菜を狙ったという事実もある。同じ屋根の下で過ごさせるのは、事情を知る者からも異論が出た。結果、一族である昏月にお鉢が回ってきたのだ。

「はあ、まあ、そういうことなら」

「そういうことってどういうこと!? え、凧君なんであっさり受け入れてるの!?!」  
零菜からすれば自分のホムンクルスというだけでも警戒対象になる。

そのため、同じように彼女の被害を受けた凧が軽く事実を受け入れていることに驚きを隠せない。

「いや、もうほかに選択肢もなさそうだし……」

「そ、それでもさあ……」

零菜は不満たらたらな様子でヴァニタスと凧沙を見る。

しかし、昏月家の話になった以上は零菜が一文句を垂れても仕方がない。

「ヴァニタスではなく本日より昏月空菜くらつきくうなと名を改めましたので、ふつつかな妹です  
が何卒よろしくお願いします、凧さん」

「う、むう、何か調子が狂うな……」

空菜はたおやかに頭を下げる。零菜がそんなことをするタイプではないので、余計に違和感が強まってしまう。

まさかの展開に萌葱を初めとする姉妹も啞然としている。

「じゃ、空菜ちゃんはわたしが使ってた部屋を今度から使ってね。凧君、変なことしたらだめだからね」

「しないよ」

凧は妙な念押しをしてくる母親に素気無く言う。対して零菜は空菜に対してさらに詰め寄る。

「ちょ、ちょっと、一緒に住むの？ 凧君と？」

「妹ですのぞ」

「妹、いや、そうだけど……学校は？ あなた歳いくつなの？」

「もちろん、凧さんと同じ学校です。公立ですから、当然です。学年も同じですね。先ほど、手続きを済ませました」

「えええ……！」

零菜は今度こそ絶句してしまった。

彼女の言い分はもつともで、零菜が口を出すところはない。だが、あまりにも唐突過ぎるではないか。零菜が納得するしないは完全に議論の外にある。零菜は空菜の存在と彼女が起こした事件については当事者ではあるが、その後の空菜の処遇について左右する立場にない。

愕然とする零菜を他所に、紗葵と萌葱が空菜とコミュニケーションを取ろうと話しかける。

「何ていうか、すごいことになったね」

「麻夜、俺はどうしたらいい？」

「んー、流れに身を任せるしかないんじゃない？ 得意でしょ」

「得意なもんかよ」

麻夜が面白そうに笑っている。

凧の苦境を楽しんでいるのだ。他人事だと思って暢気なものだ。

凧はこれからどうしたものかと、内心でため息をつく。休み明けから転校生という形で空菜は凧の通う公立校に転校してくる。そうなれば、本当に一日中彼女と一緒にいることになってしまう。これからの学校生活から、凧は不安になってしまっていた。

ストブラは何かと暁に拘りがあるらしい。主人公の性もそうだし、アスタルテの眷獣も暁の女神エーオース別名。そのため、ヴァニタス改め空菜の眷獣も同じ女神の別の名前を持ってきた。そしてエーオースがローマに転じてアウローラ、つまりストブラはローマだった？

## 第四部 一話

暁の帝国の書き入れ時は、大きく三つに分かれる。

一つは言わずと知れた夏休み。

暁の帝国は新興国であり、歴史があるわけではないので歴史ロマンに対抗することは不可能だ。しかし、その一方で完全無欠の人工島であるがゆえに、遊園地などのレジャー施設で勝負することができる。南国なので夏の海を楽しんでもらうというイベントも強い。

二つははろういんフェスタ。

日本にはシルバーウィークがあり、はろういんフェスタは日本のシルバーウィークに重なる形で開催しているのが特徴だ。狙いはもちろん隣国からの観光客だ。帝国最大のイベントは、企業にとっても一般人にとっても大きな経済効果をもたらすものだ。

そして、最後に冬休みから春休みにかけての三ヶ月。

これは、南国だからというのが最大の理由だ。

雪の降らない暁の帝国は、年間を通して強い日差しと高い気温が維持される。この国で生まれ育った人にとっては、当たり前のことではしかないが、主として日本から観光に来る人々にはそれが珍しい。冬でも海で騒げるというのは、一つの目玉なのだ。

そのためのビーチは帝国全土に多数設けられている。人工のビーチなので、天然物を求める人たちには物足りないかもしれないが、人工であるが故の美しさはある。暁の帝国は技術のみならず、観光面でも安定収入を得ることができているのである。

もともと、それは観光客を誘致する業者に恩恵があるというだけであって、下々の一般人には何の恩恵もない。いや、税込面での恩恵は確かにあるが、それを実感することはまずないだろう。

強いて言えば、テーマパークが庶民の娯楽にも繋がるという点があるが、それ興味のない人間にはさほどの価値もない。

ということ、冬休みを目前に控えた十二月の中頃にあっても、凧の生活にはほとんど変化らしい変化はなく、常夏の島と同様に年中彼の予定に大きな波はないの

だった。

世間は今クリスマス一色になっている。日本の放送局から流れてくるCMや番組はもとより、国内の放送局でも様々なクリスマス特集を取り扱っている。一週間後のクリスマスに向けた関連企業のPR合戦でもある。雪があるのとないのでは、印象が大分違うんだな、という程度の感想しか持てないのが悲しいところではある。学校から自宅に戻って風呂はカードキーを取り出す。

自分の親がこの人工島にやって来たときから暮らしているマンションなので、かなり古い部類に当たる。数年前までは普通の鍵を使っていたのだが、今はカードキーに置き換わっているのだ。

カードキーシンダーにカードキーを挿入する前に、風呂はふと手を止めてドアノブを捻った。案の定、鍵はかかっておらず、ドアを開けることができた。

「ただいまー」

と小さく家の中に声をかける。

一人暮らしの頃は一言も発さずに家に帰っていた風呂だが、今は相方がいるために最低限、自分が帰ってきたことは知らせないといけないのだ。

リビングに戻ると、テレビを観賞している義理の妹がいた。

頭にはワイヤレスのヘッドホン。口にはソーダ味の氷菓子。ソファの上で胡坐をかいて、太ももの上に置いたリモコンのボタンを操作している。

「おや、お帰りなさい、凧さん」

空菜は、相変わらず感情の起伏のない声で言う。

「……お前、なんでまたそんな格好してるんだよ」

空菜はワイシャツの胸元をだらしなく開けており、スカートからもシャツが出ている。それだけならばまだしも、スカートがめくれ上がり、あやうく下着が見えてしまいそうな状態だ。真面目な雰囲気を漂わせるブレザーもここまで着崩せばまったく印象が変わってしまう。

「夏を快適に過ごすための、涼しさを追及した格好です」

「もう夏じゃないだろうが。一応、暦では冬だよ、冬」

言いながら、凧は自室に向かう。

空菜の格好は実のところ、普段からこうなのであまり口うるさく言うこともなくなった。彼女は面倒くさがりで、手を抜くところは手を抜きたがる。やるべきこと

はきちんとやるので、文句はないが、こうして無防備な姿を曝すことが茶飯事となつている状況でもある。凧はもう慣れたものだが、人前でこうした格好をしないかどうか心配で仕方がない。

学生カバンを自分のベッドの上に放り投げた凧は、再びリビングに戻ってくる。キッチンまで行ってから冷蔵庫を開けて麦茶を取り出し、グラスに注ぐ。凧が先ほども言ったとおり、暦の上では冬に突入しており、クリスマスも近い。しかし、気温は未だ高く、残暑と言うには夏に近すぎる環境だ。衣替えで冬服——つまりは長袖の制服が導入されているとはいえ、多くの学生は上着を脱いで、袖を捲くって生活しているほどである。リビングでクーラーが稼働しているのも不思議なことではない。

「ん、今日はレバーか？」

凧はキッチンに出ている冷凍レバーを見つけて呟く。

「そうですよ」

と、空菜が返事をする。

夕食は、二人で持ち回りとなっている。基本的には自炊をしているが、どうして

も手が回らなくなれば近くのコンビニに向かうことになる。ホームクルスである空菜は戦闘以外にも「様々な用途」での運用が計画されていたらしく、知識だけならば多方面に通じる。料理も、もちろん彼女のレパートリーの中に入っているのだが、如何せん経験がなかった。頭でっかちな知識ばかりだったので当初は炒め物で焦がしてしまつて計算が合わないと首を傾げたり、美味しいと知っていて食べた料理が口に合わず困惑していたりと意外にも失敗には事欠かなかった。日常生活でもとどころどころ抜けているので、学校ではすっかり不思議ちゃん扱いだ。社会生活経験がないのだから、人と異なる言動が出てしまうのはどうしようもないが、不安ではある。彼女の発言一つで、自分の学校生活にも影響が出てくるのは当然のことなのだ。クラスが違うが昏月という苗字は日本も含めて彼の家くらいのもだろう。必然的に身内だということは広まる。

「レバー……なんか、この前もそうだったような」

「わたし、レバーが好きみたいなんです。健康にも、いいって言いますよね」

ソファの背凭れにぐったりと頬を乗せて、空菜は言った。

「それは、俺も聞いたことあるな。健康にいいっていうのは」

「凧さんの食事は栄養バランスがかなり偏ってました。もう少し、健康的な食事を意識しなければなりません」

「耳に痛い……」

一人暮らしの習慣が身に付けさせたのは生活力だけではなかった。食事や睡眠が非常に不健康なものとなってしまっていたのだ。空菜が来たことで、そういった点については多少の改善がされた。凧自身、料理当番のときには食べたいものだけを食べるようなことができなくなったことを自覚して食事を作っている。

「ちなみに、レバーで何を作るつもり？」

「レバーといえば、当然ながらレバニラ炒め。今日はチンジャオロース風にオイスターソースを使ってみる所存」

「へえー」

特に料理に興味のない凧は適当に相槌を打つ。レバニラが出てくると分かっただけで、十分なのでそれに使われる材料がオイスターソースなのかどうかはあまり興味の対象ではなかった。

「まあ、ほかにも色々と安かったので魚介類とか買ってみました。この島は青物に

は高値がつくのに、魚介類は安く手に入りますね」

「そりゃ、回りが海に囲まれてるからな。海の幸にはかなり助けられてるんじゃないか」

島国の食料は魚介類と相場は決まっている。まして、人工島である暁の帝国には天然の土がない。農家は皆無と言ってよく、企業のバイオプラントが野菜類の大量生産に成功したからこそ、輸入にあまり頼らずに野菜を摂ることができるようになっている。その一方で、漁業は企業だけでなく一般家庭でも転向しようと思えばできる。養殖業も盛んなため、どうしても野菜類よりも魚介類のほうが安くなる。「まあ、当然の成り行きですか」

「それでも、昔よりはマシになってるみたいだぞ。絃神島ときは、大部分を輸入に頼ってたから、ショートケーキで何千円の世界だったらしい」

「技術大国とはいえ食料自給率が壊滅的では、戦わずして負けるのは自明の理……暁の帝国は上手く弱所を改善しているわけですか」

「ま、仮に戦争になって輸入を止められても今の生活がある程度維持できるような生産体制は取ってるらしいからな。色々と反則だよ、この国」

かつて、絃神島は生産力のない技術だけの実験場という認識を持たれていたという。たとえ危険な兵器を抱え込んでも、食料の輸送を止めてしまえば瞬く間に崩壊するものと。

しかし、今は食料を自分たちで調達できるようになった。完全に独立して活動できるようになった暁の帝国は他の追隨を許さない圧倒的な技術力も加味して世界トップレベルの先進国として影響力を持つまでになったのだ。

第四の夜の帝国として、歴史ある第三までの夜の帝国と並んでも遜色ない国力を手に入れているというのは、帝国国内だけでなく、世界全体の認識である。

空菜は、口数の多いタイプではない。凧もそうだ。よって、家庭内での会話はそれほど賑やかなものにはならないのが常である。それを、居心地が悪いとは思わなかった。顔立ちが零菜に似ているからだろうか。それとも、自分と同じ中途半端な立ち位置にいるからだろうか。比較的容易に凧は空菜の存在を受け入れていた。いい意味では空気のような存在。過度に干渉してくることなく、けれどそこには明確に存在している。

当初は零菜と瓜二つで、あまり見分けのできなかった凧だが、最近では零菜と空菜

を並べてもきちんと見分けることができるといふ自負を持てるまでになっていた。顔立ちと身長はほぼ同一。しかし、外見をどれだけ揃えようと、別人である以上は違いが出てくる。機械的に判別するのは困難でも、感性での判別はできる。

日頃の行動からでも、零菜は空菜のように無防備を曝すことはしないだろう。髪の色も微妙に異なる。零菜は艶のある深い黒の髪、空菜は同じく黒髪ではあるが光に触れると銀粉を鏤めたかのような鈍い色を呈する。零菜は右利きで、空菜は左利き。それだけでなく血を吸うとき、噛み付く部位も左右対称だということに最近になって気付いた。

同一になるように組み立てられたというが、生活を共にしていると大分零菜とは異なる思考、行動をする。表情もまったく違う。よく似た双子というのが現状だろう。おそらくは生産者の意に反しているのだろうが、これが健全だ。空菜も、今は零菜に取って代わろうとか乗り越えようとか思っているわけではないようだ。

それから、あまり会話がないままに三時間余りが過ぎていった。凧は自室で漫画や小説を読み漁ることで時間の大半を潰し、空菜は五時半頃から夕食の支度に動き始めていた。

「凧さん、ご飯できましたよ」

と、声をかけられたのがついさっき。

リビングから漂ってくる芳しい香りは、それだけで食欲を刺激する。

空菜が語ったとおりのレバニラ炒めが香ばしい匂いを纏った湯気を上げている。確かにレバニラ炒めはレバーとニラを炒めれば成立するから、味付けに何を使おうと料理する人間の自由。オイスターソースが入っていても、レバニラ炒めはレバニラ炒めなのだという主張は頷けるし、口に運んでこれはこれで美味いと宣言できる。チンジャオロースを思わせる味付けなのも、むしろ好みかもしれない。普段、食べなれたレバニラ炒めとは異なる味わいがそこにはあった。

「魚介って、これ牡蠣？」

「はい。安かったです。残念ながら養殖物ですけど」

殻を皿にした焼き牡蠣。海と養殖技術に恵まれた暁の帝国ならば、日本よりも比較的安く本来は高級であるはずの魚介類を手に入れることができる。今回は牡蠣が安売りされていたらしい。

「そういえば、テレビで養殖牡蠣が豊漁だったとか」

「養殖だと時期を選びませんしね」

大きな身の牡蠣だ。

一口で食べるのがもったいないと思えるほどだが、それを敢て一口で食べるのがいいのだとばかりに風はペロりと食べてしまう。ほどよく火の通った牡蠣は口の中で溶けるように独特甘味を出して消える。

今日の献立のメインとなるのは、オイスターソースで味付けをしたレバニラ炒めと焼いた牡蠣の二点になるだろう。

その他、摩り下ろした山芋の炒りゴマ乗せ、きくらげと干しえびの鶏がら中華スープ、アスパラガスとブロッコリーを添えた千切りキャベツと食物繊維もしっかり取れる献立となっており、おかずはとても豊かだ。

「やっぱり、料理上手いな」

「そうでしょうか。わたしは与えられた知識を使っているだけですよ」

「それでも、知識を実際に使えるかどうかは別物だろ」

「そうですね。それは、確かにそうです。知っていても、失敗してしまうことはありましたし」

空菜はこの家に来たばかりの頃を思い返しているのだろう。

知識ばかりで実践できなかった頃。最初の一週間は文字通りの試行錯誤の日々だった。

それこそ、身体の大きな子どものように目が離せなかったものだ。一応、名目上は妹という扱いなのだ。まだ、というか今後も妹という実感は湧かないんだろうが、心配することは多かった。

「そういえば、学校」

「ん？」

「クリスマスには何もしないんですね」

「どうしたんだ、急に」

凧は空菜の発言の意図が分からず、尋ねてしまう。

「漫画とかではクリスマスには学校を挙げたイベントを行うのが常。萌葱さんに借りたゲームでもそうでした。ですが、わたしたちの学校にはそのようなイベントはなく、彩海学園にもないとのこと」

「そりゃあ、クリスマスなんて学校には関わりないイベントだからな。うちは公立

だから創立記念日もないし、世間のイベントなんて、学校にはほとんど関わりない  
だろ」

「そういうものですか」

「ファンタジーの中だけじゃないのか。俺はクリスマスに何か学校行事を入れるってとこに心当たりはないな」

凧が答えると、空葉はちよつとだけがっかりしたような表情を浮かべる。

以前は、表情筋が死んでいっているのではないかというほどに表情に乏しかった彼女だが、徐々に感情表現を豊かにしている。

カタン、と物音がしたのはそのときだった。郵便物が届けられたのだ。取りに行ってみると、一通の封筒が郵便受けに投函されていた。

差出人は、暁夏音とある。

「夏音さんから？」

珍しいこともあるものだと思は驚いた。

「何事ですか？」

「夏音さんから手紙だよ。今時珍しい」

今時は大概がメールや短文投稿アプリを使用する。夏音さんは、そういった機械よりも手紙のような前時代的な伝達手段のほうが似合っているように思うが、実際に彼女から直接何かしらの連絡が来るのは初めてのことであつて、それがますます不思議だつた。

「とりあえず開けてみれば？」

「そうだな」

不思議がついていても仕方がない。

凧は開封して中から手紙を取り出した。

丸みを帯びた丁寧な字で書かれた便箋と、業務的な文面の印字された通知がそれぞれ二枚ずつ入っている。

「クリスマスパーティーがあるんだと」

「クリスマスパーティー？ 暁家主催で、ということですか？」

「ああ、そうみたいだな。その招待状だそうだ」

そういえば、例年この各国の大使らを集めてクリスマスパーティーを催していたように思う。零菜たちも、パーティーの最初には最低限出席させられていた。凧は

案内は貰うものの、基本的に出席しないでここまで来た。

「凧さん、どうするのですか？」

「あー……まあ、保留」

クリスマスの予定などないが、要人が集まるような場所に出席するのは気が引ける。皇族から外れた昏月家は基本的には一般人の家庭なのだ。

凧から手紙を受け取った空菜は、興味深そうに文面に目を走らせている。

空菜も招待されている。

いつも通りに不参加を決め込むかどうか、空菜の反応を見てから決めてもいいかなと凧は思うのだった。

## 第四部 二話

昏月空菜が一人で暁家を訪れるのは、これが初めてのことになる。遺伝的には暁零菜とほぼ同じ。多少獸人などの因子を組み込まれているものの、外見はあえて零菜に似せて作られていることもあって、傍目からすれば零菜が帰ってきたのと區別をつけるのは難しいだろう。

二人をよく知る者であれば、仕草や表情から區別をつけることも可能だろうが、そうではない他人が空菜と零菜の違いを見分けることはまず不可能だ。

そのため、マンシヨンに入ってから空菜は零菜と間違われて挨拶をされることが多々あって、やや辟易していた。

生まれて半年も経たない彼女だが、それなりに人格が形成されてきたのか快と不快の違いが明確になってきた。

とりあえず、零菜と間違われるのは心底嫌だということが最近になってはっきり自覚できるようになった。

「わたし何かした？」

「特に何も、ええ、何もありませんでした」

零菜が怪訝な顔で空菜に聞いてくる。

顔に出ていただろうか。

零菜への敵意は、そもそも初めから存在しない。命令を忠実にこなすことはホームクルスとしての絶対正義だったわけで、それも自分の性能を正しく示すことができた時点で達成している。零菜はただ巻き込まれただけの被害者だと言えるだろうし、空菜もまた生命科学と魔術の実験の末に生み出された憐れな生命の一人ではない。

昨今の生命倫理の説からすれば、こう考えられるだろう。

作られた本人からすれば、どこか違和感を覚えるわけだ。

己の幸運や不運は他人に評価されるものなのだろうか。確かに一般常識に照らし合わせれば幸福ではないかもしれないが、憐れまれるほどでもないだろう。実際、普通に生活しているわけで、身体に問題を抱えてはいるものの、それも時間をかければ解決できる程度である。

集合場所は夏音の自宅。

といつても、マンションの一室であり隣人もまた古城の妻の部屋である。ここは姉妹たちにとつては自宅にも等しい。とことこと歩き回っている二人の四歳児瞳と夏穂が、穏やかな休日の午後を演出している。

この家に今いるのは瞳と夏穂、空菜に零菜、そして別室に麻夜と結瞳だ。大人は夏音がついていて、下の二人の面倒を見ている。

零菜と空菜は同じ空間にしながら、あまり話をしない。

無理もない、と空菜は思う。

零菜からすれば、自分の遺伝子情報から作られたホムンクルスなど気味が悪いだけだろう。まして、風を人質にして戦いを挑んできた相手だ。仲良くしろというほうがどうかしている。だが、暁家の家風はそうではなかった。空菜を昏月家で引き取り、適当な距離を置くことで事件そのものをなかつたことにしてしまった。零菜の感情の矛先は、どこに向けられることもなく彼女の中に燻っているに違いない。それについて空菜は文句を言う立場にない。

敵意がないだけかもしれませんか。

零菜も人がいい。空菜を拒否するのではなく、彼女なりに受け入れようとはして

いるようだ。そうでなければ、空菜の視線に問いを投げかけるようなことはしないはずだ。

耳を澄ませばゴトゴトと物音が別室から聞こえてくる。確か、そこは和室になっていて真新しい畳の匂いに包まれた落ち着きのある部屋だったはずだ。

と、そんな風に空菜が思いを馳せていると和室の引き戸がスライドして、麻夜が出てきた。

暗い紫を基調としたドレス姿だ。細身ながら出るところの出ている麻夜に合わせたオーダーメイドである。

「麻夜ちゃん、可愛い……」

零菜が思わず感嘆の念を込めてため息を零した。

「そう？　ありがと、零菜」

麻夜はこうした服に慣れていないのか、自分のドレスをあちこち見ている。

「うーん、何かこれ、下がすかすかするんだけど」

「普段ズボンで過ごしてるからじゃない？　制服のときだって、下に短パン履いてるじゃん」

「それは零菜だって同じじゃん。スカート脱いですぐに体育に出られるようになってさ。みんなやってるって」

気に入らないとばかりに麻夜はドレスのひらひらを摘む。

麻夜とて女子だ。こういったキラキラひらひらとした服が嫌いなわけではないが、それを自分が着るとなると抵抗感があつた。

普段から着飾らないタイプだからか。どうしても気恥ずかしさが勝ってしまう。「とりあえず、写真撮ろう写真」

零菜がスマートフォンを取り出す。カメラ機能を即座に起動させ、麻夜にレンズを向ける。

「ええ、撮らないでいいよ、恥ずかしい」

「いいじゃん、可愛いって。どーせ、後でみんなで写真撮るしさ」

「だったら零菜が着てからでいいよ。今撮らない」

麻夜は手を振って零菜の撮影を拒否する。

「今撮らなくてもいいけど、座るときは注意してね。皺になるといけないから」  
和室の中から結瞳が声をかけた。

「あ、はい。結瞳さん」

クリスマスパーティーは友だち同士で集まるような小さなものではない。各国の大使やその縁者も招待される規模の大きなものであり、政治的な色合いも強い。麻夜たちもまだ子どもではあるが出席しなければならないのだ。世界のパワーバランスを左右するとも言われてる暁の帝国は、領土こそ小さいものの世界的全体から見ても重要な国である。好を通じたい国は、友好国として縁を結んでいる国以外にも多々あるのだ。粗相のないように、ドレスの準備も抜かりなく進めなければならぬ。

「じゃあ、次、零菜ちゃん来て」

「はい、お願いしまーす」

呼ばれて零菜は和室に入っていく。

零菜と入れ代わりで出てきた麻夜が、空菜が座るソファの肘掛のところに腰掛け  
た。

「ここに座らないのですか？」

「そこ座ると、後ろがだめそう」

彼女の言わんとすることは分かった。

背凭れもあり、普通にソファを使用するとドレスに皺がつくのではないかと気にしているのだ。肘掛のところであれば、触れる部分は最小限に抑えられる。

「空菜はどんなドレスにしたんだい？」

空菜もクリスマスパーティー用のドレスを注文していた。彼女にとって初めての経験だ。どのような場所なのか、どのような話をして、どのようにパーティーが進んでいくのかも分かかっていないまっさらな状態だ。

それどころか、クリスマスすら空菜はよく分かかっていないので、本番ではとりあえず外国語は話せない設定にして会場の隅で大人しくしていようと考えているところだった。

「空色のドレスにしました。下のほうがそんな長くなくて、膝が出るかでないかわらないのですね」

「動きやすそうでいい。僕のこれなんか、どうやって走れって言うんだって感じですよ？」

「そもそもドレスで走ることを想定する必要はないのでは？」

「それもそうなんだけどね。普段が普段なもんだから、動きやすいかどうかで考えちゃうんだよね」

運動が大好き。

年がら年中走り回っているような生活をしているのが麻夜だ。身体能力は非常に高いし、スポーツ面での成績は姉妹の中で一番上だ。

「それはそれとして」

麻夜は自分で振った話をあっさりと変えて、背凭れに腕を回して身体を捻り、空菜のほうを向く。

「凧君は今日、どうしてるの？」

「一日暇を持て余していると思います。いつもの休日ですね」

「そっか、まあ、そうだろうね」

凧は休日だからといって積極的に遊びまわるような人間ではない。ほとんど家中にいるか、近くの店にぶらりと立ち寄るかくらいのもんだろう。友人がいないわけではないが、休みに約束をして一緒に出かけるということはしないタイプだ。

「ねえ、空菜」

「はい」

「そこ、何かついてるよ」

「ん？」

麻夜が指差したのは空菜の袖の先のほうだった。

今、空菜が着ているのは秋用の長袖だ。白いワンピースの上から薄い桃色のカーディガンを羽織っている。そのカーディガンの袖に薄らと赤黒い染みがついていた。乾燥した絵の具のようだ。

「血だね」

「そうですね」

「拭ったときについた？」

「そう思います」

取り立てて隠すようなこともなく、淡々と空菜は答えた。

「目ざといですね」

「目に入っただけ」

麻夜は小さく笑みを浮かべて、

「ここに来る前に凧君の血、吸ったんだ」

「そうですね」

「いつも吸ってるのかい？」

「はい」

あっさりとき野菜は認める。

「一日に二度、朝と夜に血を吸わせてもらっています」

「い、一日二回？ ……さすがに、多くない？ 毎日って、ちょっと」

麻夜が珍しく動揺した。

吸血行為は吸血鬼にとって特別なものだ。麻夜だって、まだ一度しか血を吸ったことはない。

「恐らく、わたしが一番吸血経験があるでしょうね」

「どうして、毎日血を吸う必要があるんだい？ ちょっと多すぎるような気がするよ」

「わたしの身体の事情です」

「身体の？」

「わたしはもともと軍事面で活用するために作られたホムンクルスですから、反乱を防ぐために色々と仕込まれているのです。例えば、一定時間血を吸わないと急激に消耗して動けなくなるとかです」

「そんな都合のいい話……」

「あるから困っているんですけどね。まあ、風さんの血を吸えるので役得ですけど、本来はマスターの血に縛られる形になるのです。わたしが最初に血を吸ったのは風さんですし、風さんが今のわたしのマスターと言ってもいいかもしれませんけれど」

何でもないとはばかりに白状した空菜に麻夜は複雑そうな視線を向ける。

「麻夜さんも、以前に風さんの血を吸ったのだとか」

「一回だけだよ。そんな、何回も吸ってない」

「多分、頼めば吸わせてもらえますよ。あの人、もう慣れてしまってるみたいです、基本受身な人ですから」

「そんな簡単に言わないでくれるかな。うん、僕にも色々あるからさ」  
げんなりとした顔つきで麻夜は言った。

何も事情がないにも関わらず吸血を頼むと言うのは、それ相応な仲でなければならぬことだ。

麻夜と凧は決して不仲ではなく、空菜が現れるより前であれば最も接点の多い異性ではあっただろう。しかし、だからといって吸血させてくれとは言えない。それが性に纏わる話題だからだ。空菜はそういった現代吸血鬼としてのいろはを知らないとということと、血を吸わなければならぬ身体だという二点から吸血行為が日常生活の中に組み込まれているというだけなのだ。

よって、空菜と同じ感覚で麻夜が凧に迫るわけにはいかない。

魅力的な提案ではあるだろうし、頼めば血を吸わせてくれるという部分についても賛同する。凧はその辺りを深く考えてはいないだろう。彼はお人よしなのか考えが浅いのか、よほど自分が不利にならない限りは無茶振りにすら付き合ってくれる。そういうところは信頼できると麻夜は思っているし、一緒に暮らしている空菜もまた短い付き合いながらも見抜いていた。

夏から秋を経由せず冬になったような感じすらする今日この頃、凧はぶらぶらと街を歩いていた。冬といっても、十度台中頃。日本ならばまだ肌寒いと感ずるほどでもないのだろうが、暁の帝国は南国であり夏の暑さに身体が慣れて国民はこれくらいでも寒気を覚えることもある。凧としては涼しくていいのだが、ふと見れば薄手ながら長袖を着ている者もいる。

街はもうじきクリスマスだ。

当然、どこもかしこもイルミネーションに彩られ、煌びやかに飾り立てられている。

今年は凧の予定も埋まっている。

帝国主催のクリスマスパーティーに参加することになったからだ。

高尚なパーティーに自分は似つかわしくないと思いつつ、招待されたのだから顔は出さないとはいけない。従姉妹から誘いのメールが何通か着信しているということ

もあり、今更行かないとも言えないのだった。

書店にでも行こうかと大通りを歩いているときだった。ふと、視界の片隅に違和感を覚えたのだ。風景が多少盛り上がっているような気がする。

人の邪魔にならないように端に寄り、自分の目の錯覚ではあるまいかと焦点をずらしつつそこを観察してみる。

道行く人々はまったく気付いていない。違和感が視界にも入らないとばかりに無視をして歩いている。ならば、風の気のせいなのかと言え、どうやらそうではない。

「姿隠しの魔術か」

魔力まできっちり隠している辺り相当鍛えているのだろう。姿を隠す魔術は様々な種類があるが、総じて街中での使用は制限されている。犯罪に用いられやすいという簡単な理由があるからだ。それをあえて街頭で使っているというのは、よほど後ろ暗い理由があるのだろうか。

さて、どうするか。

どうやらあの影に気付いているのは風だけのようだ。

放置して犯罪が起きたら目も当てられないではないか。観察していると影が動いた。凧はいつでも通報できるように携帯の画面を操作した上で影を追跡する。彼我の距離はおよそ三十メートル。人込みの中という動きにくい環境下では容易に逃げられてしまう距離である。姿隠しの魔術を使うからには、魔術での追跡も難しいだろう。凧は引き離されないように注意して、その後ろをついていく。

風景に浮き上がる違和感を追いかけるのは中々難しいことではあったが、凧には霊眼がある。先読みの霊眼は、普通の人間よりも取得する霊的情報が多くなる。魔術に対して鋭敏な反応を示すのは、その最たる特徴の一つでもある。

人並みをすり抜けて、何者かは路地の中へ消えていく。

大通りから一つ入れば、そこは巨大なビルの間。一日中影に包まれた薄暗く細い通路だった。区画整理によって誕生したそこは、結局店が軒を連ねることもなく、大通りの喧騒から遠ざかってしまったのである。

「こんなところに」

凧が踏み込めば、相手にもそれと分かってしまうかもしれない。

大通りのように人影に隠れることもできない。日中でありながら、疎らな人影し

かないこの場所では中学生に過ぎない凧は悪目立ちする。

レンズを通して歪んだかのような風景が動いている。それは途中で十字路を右に折れて消えてしまう。

追いかけるなければならない。そう思った。凧は決心して影が消えた十字路まで来て足を止めた。

「行き止まりか」

十字路に見えたのはビルとビルの間を通る通路であり、そこは道ですらなかった。人が一人通れるかどうかという細い通路は室外機や粗大ゴミで半ば塞がっている状態だ。目を凝らすと、人影は粗大ゴミを越えて、先を進んでいる。真っ直ぐに進めば、明るい通りに出ることができる。

凧は影を追いかけてようとして一歩、足を踏み出して動きを止めた。

理屈ではなかった。

通りに向かう人影。

風景の中に浮かび上がる半透明なレンズのような何か。視界に映りこむ余分な染みのようなものに違和感を覚えた。自分が追いかけてきた何かと、今日の前にいる

何かが微妙に違うような。

「ッ——」

凧は咄嗟に学生カバンを頭の右側を守った。

衝撃がカバンを通り越して頭に届く。

何か棒のようなもので殴られたのだ。

凧はすぐに姿勢を低くして、横薙ぎの攻撃を躲し、カバンの中から警棒を引き抜く。凧の霊力を食らって瞬時に硬化した警棒は襲撃者の棒と激突して火花を散らす。

「いきなり、何すんだ……!!」

「そちらこそ、人の後をこそこそとつけ回すとは不審極まりない！」

目の前にいたのは竹刀袋のような長い革製の袋で凧に殴りかかったままの姿勢を維持する少女だった。

第一印象は白。

白銀のサイドテールに幼さを残すものの凛々しい顔立ちだ。鼻筋がよく通っていて、目は大きくぱっちりとしている。抜けるような白い肌の北欧系の美少女だった。

が、話す言葉は綺麗な日本語だった。

———というか、

「まさか、クロエ？」

「な……ッ」

彼女は驚きのあまりに大きく目を見開いた。

「何故、わたしのことを……！！ まさか、わたしが大使館から逃げ……外出したことを知って追いかけてきた者か!?!」

ぐい、と彼女———クロエ・リハヴァインは興奮したように力任せに己の武器で風を突き飛ばす。

「ちよ、まで、クロエ。クロエ姫！ ストップ、俺だつて！」

「問答無用！ どこの誰か知らん、いやなんか見たことがある気がするが、不審人物ストーカーは記憶ごと強制排除だ！」

魔力が竹刀袋に集まっていく。あの中には長柄の武器が隠してあると思われる、それがクロエの魔力を吸って凶悪な兵器に変わりつつあるのだ。

「覚悟！」

「お、俺だって。昏月凧だ！ 従兄のツ！」

「うぬ？」

びたり、と黒い袋が凧の鼻先で止まる。

「凧？」

首をかしげたクロエは凧の顔をじろじろと見てくる。

それから、二度目の驚愕。また目を見開いて数歩下がって、隠しようもない長柄武器を背中に隠した。コホンと咳をして、それまでどうって変わった淑やかな笑みを浮かべた。

「どうも、お久しぶりですお兄さま。日本では男子三日会わざれば刮目して見よと申しますが、最後にお会いしたのは三年も前のこと。一目でお兄さまと見抜けず、ご挨拶が遅れましたこと平にご容赦ください」

「お、おう……」

まったく別人になったかのような切り替えに凧は相槌を打つことしかできなかつた。

「ところでお兄さまはお昼はもうお済になりましたか？」

「……まだ、だけど」

「ああ、そうですね。それはよかったです。実はわたしもなのです。如何でしょう、再会を祝して一緒にお昼を楽しむというのは？ ええ、それがいいです。このような路地裏で立ち話など、わたしとお兄さまには相応しくありませんものね」

早口で一気に捲くし立てた後で、クロエは凧の手を取った。挙句、腕を組んでくるではないか。

「……どういうつもりだ？」

「ふふ、後できちんと説明します。まあ、大した理由はありませんが、暫しお付き合ってください」

嫣然と微笑む彼女。

これが、今年中学に上がったばかりの従妹との三年ぶりの再会だった。

クロエが萌葱と同じ髪型なのは、一国の跡継ぎという点で萌葱と接点が多いから。

## 第四部 三話

アルトリアとオリオン以外未所持の確定ガチャでオリオン当たって真顔になった。

☆4以上のランサーがないから槍王まじで欲しかったんだ。ランサー高レア少なすぎませんかね。

伯父であり第四真祖たる暁古城が女性関係に奔放なため、凧には多くの従姉妹がいる。その中で特に異質なのが、白銀の姫クロエ・リハヴァインであろう。

彼女の国籍は北欧のアルディギア王国であり、暁の王国の皇位継承権では下から数えたほうが早いものの、アルディギア王国の王位継承権は第一位となっている。暮らしているのもアルディギア王国であり、父と姉妹が暮らしている暁の帝国には数年に一回やって来るかどうかという頻度だ。

古城たちがアルディギア王国を訪問することもあるので、顔を合わせる機会はク

ロエが暁の帝国にやって来る回数よりも多いが、やはり家族でそろうのはほとんどない。誰かしらが仕事などで欠けているのが常であった。しかし、今年は運がいいのか久しぶりの暁家勢ぞろいとなる見通しだ。

アルディギア王国も女王たるラ・フォリアと娘のクロエがそろって日本を訪れている。到着したのは二日前で、テレビには気さくに取材に応じるクロエの姿も映っていた。

クロエのことを、白銀の姫と暁の帝国では呼ぶこともある。北欧の血の力だろうか。齡十三にして、百六十センチに届くかという身長と服の上からでも大きいと分かる胸、そして美しいと評判の容貌が人気の要因の一つというのは、覆せない事実ではある。

問題なのは、一国の姫が護衛も連れずに外を歩き回っているということであり、さらに彼女の発言からして無断外出をした可能性が高いのである。

とりあえず、姿隠しは犯罪である。クロエの身の安全をどう確保するかという問題が発生するが、基本的にアジア系の人種で構成される暁の帝国の人間は欧米人をパッと見で見分けるのが苦手だ。日常的に顔を合わせていたり、それこそ写真など

を普段から見ている限り一目でアルディギア王国の王女だとは気付かれないはずだ。もちろん、クロエの歳不相応な美貌は人目を惹き付けるといふ点での問題は何一つ解消しない。同じ皇女であっても、暁姓の姉妹とは根本的に感覚が異なっているところがあるというのも気がかりである。例えば服装。萌葱や零菜は皇女ではあっても、両親ともに庶民の出であることもあってハレの日でもなければ着飾ったりはしない。小遣いの額も普通の中高生と大差なく、日常生活の上で皇女たちが高級な衣服を身に纏うことはまずない。しかし、クロエは生まれも育ちもアルディギア王国の王宮だ。彼女は外出用の衣服を選んできたつもりかもしれないが、一見して生地も仕立ても最高級の代物であり、それだけで彼女が特別な存在なのだとう々に強く訴えかける。まして、そこに薙刀袋を持ち歩いていれば、目立つことこの上ない。

隣を歩く凧など、浮きすぎて同行者だと認識されないと考えるほどだ。

とにかく話ができる環境を探し、辿り着いたのは中央運動公園だった。サッカーやラグビーの試合が行われるスタジアムの他、野球場や一面芝が敷き詰められたサッカーコート三面分の広場、公民館や美術館などが密集する公共の複合施設であ

り、二人は美術館のロビーにあるソファに腰を落ち着かせた。

大きな美術館ではあるが、決して入館者数は多くはない。クリスマスに向けた企画展のコーナーから離れてしまえば、ほとんど人の目を気にする必要はなくなる。

「……改めて聞くけど、何でクロエがここにいます？ しかも、一人で」

「……いきなり、そこを聞いてくるか。いや、せっかく二人で出歩いているのだ。もっと、男性として色のある話をしてみようとは思わないのか？」

「一国の姫が一人で外を出歩いているってのが、そもそも不味いんだよ。分かるだろ。今頃、大使館は大騒ぎになってるんじゃないのか？」

「……むう」

クロエはむすつとしてサイダーのペットボトルを開ける。炭酸が抜けて小さく音を立てた。一口、サイダーを口にして、

「そんなこと、知ってる」

不満を滲ませて、クロエは答えた。

「ただ……」

「ただ？」

「一度でいいから、一人で出歩いてみたかっただけだ」

そっぽを向くクロエ。

姫として扱われる彼女には常に誰かしらが付いて来ている。自由度は同年代の一般人に比べればかなり低い。それを嫌う気持ちは理解できる。

「姉さんみたいに転移が使えれば、と思わない日はないぞ。まったく鬱陶しいのだ。毎日毎日後ろを姫様姫様と。わたしはな、兄さん。姫よりも、騎士になりたいのだ。宮廷騎士だ。ろいやるおーだーだ」

「何でまた。いいじゃないか、姫でも」

「だって、正直意味がないじゃないか。姫なんぞ」

「意味がないって」

「一応は跡継ぎではあるけれど、うちの母さんは歴代の王とは違って本当に不死身だからな。後を継ぐことなんて、万が一にもありはしない。もしも、王位を継ぐことになるのなら、それは国が傾いたときだろう」

世界に四つある吸血鬼の帝国のうち、三つは実質数百年以上前から存在している。人類側に認められたのは半世紀ほど前のことではあるが、国としての形は何百

年も前から続いているのだ。しかし、三つの帝国に於いて代替わりが行われたことは一度もない。真祖たちは、遙か太古からずっと国の頂点に君臨し続けている。

もしも、代替わりが発生するとすれば、それは何かしらの理由で不死身の元首が殺されるか引退するかの二択。そして、引退というのは不死身である以上は中々できるものではないのだ。

クロエはアルディギア王国の跡継ぎではあるが、事実上跡を継ぐことはない。これは、暁の帝国に於ける萌葱の立場に近いものだ。

「それで、騎士がいったって？」

「うん。だって、カッコいいだろ。剣とか槍とか振り回すの」

「ああ、まあ、そうだな」

もしかして口調が男の子っぽくなってるのも、何かしらの影響を受けているのだろうか。

実際にクロエが騎士になれば、かなりの戦力ではあるだろう。何せ、第四真祖の第二世代であり長く続いたアルディギア王家の血を引くサラブレッドだ。

「兄さんはすでに実戦経験を積んでいると聞いているけれど、本当か？」

「まだまだだよ」

俺は苦笑いを浮かべるしかない。

実戦などと言えるようなものはほとんどない。巨大な化け蜘蛛や犯罪を犯した吸血鬼の相手をしたくらいか。紗葵というとびっきりのイレギュラーもあったが、あれはカウントしないでおく。

「で、どうすんの、これから。大使館に連絡しないってわけにはいかないからな」「分かっている。兄さんに見つかった時点で全部おじやんだ。覚悟はできている」

お手上げとばかりにクロエは両手を挙げた。

「はいはい、じゃあ、もう連絡するからな」

凧は携帯を取り出し、ダイヤル画面を呼び出した。

クロエは外出の際に置手紙は残してきたと言っていた。その手紙が見つかった時点で、大使館中を巻き込む大騒動になりかねないのだ。いや、もうなっていると、言っても過言ではあるまい。

「いえ、その必要はありません」

いつの間にか、クロエの背後に白銀の人影が立っていた。

銀の髪を一つ結びにしたアルディギア王国の王宮騎士だ。

「げえ、アレックス」

「お迎えに上がりました、姫様」

「どうして、ここに」

のどを干上がらせたクロエがソファの上で固まっている。

お化けでも見たかのように頬を引き攣らせているではないか。

「よくここが分かったな、アレックス」

「ただの勘です。方々に散った職員の中で偶然私が姫様の気配を察知できる場所まで近づけたというだけですよ」

アレックスは凧よりも一つか、二つ年上の宮廷騎士。今は高校に通いながら、クロエの傍に仕えているのだ。一族がアルディギア王家に仕えていた関係で、アレックスもまたアルディギア王家に仕えることになった。

クロエの傍に幼い頃からいる幼馴染という間柄であり、凧の決して多いとはいえない友人の一人でもあった。

「アレックスにはしばらく寝てもらったはず……薬の有効時間は半日はあったは

ずなのに」

「確かに、あれは強力な睡眠薬でしたが、忍の技を継ぐ私は薬物への耐性も人並み以上です」

「うぬ……ぬかった」

「とにかく、陛下もお困りになっております。三時間以内に見つかからない場合は、我々の責任問題にもなりかねないとの仰せです」

「他人を人質に取るなんて、さすが母上汚い」

「いいえ、それそのものは至極正しい。そして、姫様はご自身の行動が如何に人を振り回すのかということを引きちんと理解していただきませんと」

「……ごめん」

叱られて、クロエはしょんぼりとする。

「風様。姫様がご迷惑をおかけしました」

「迷惑なんてかけられてないから、ところでいい加減その様付けやめてもらえないかな……何年も前から言ってるんだけど」

「なりません。皇族から外れようとも、風様は姫様の従兄です。ならば、然るべき

態度で接すべきでしょう」

毅然とした態度で言い切られてしまう。

昔はこんな堅物ではなかったはずだが、と過去のことを思い返す。

大して変わらなかったかなと思いなおした。

「さて、姫様。大使館に戻る前にどこかよってみたいところはありますか？」

「え？ いいのか？」

「陛下からのご下命は三時間以内に見つけること。三時間以内に連れ戻せではありません。もちろん、日が暮れる前には戻っていたただかなければなりません」

クロエの目が光り輝いた。

「兄さんは？」

クロエは風の様子を見て尋ねる。

「風様にもご同行いただければと思いますが、それは風様の都合もあるでしょう」

「俺は特に予定も入っていないからいいけど、むしろ邪魔じゃないか？」

「風様は見習いとはいえ攻魔師の資格を持っていますから、一緒にいていただければそれだけ安心できます」

「あ、そういう。……見習いは見習い以上の働きはできないんだぞ」

「私も大して変わりませんよ」

アレックスは小さく笑みを浮かべる。

「うん、そうだな。女二人では外歩きは不安だし、兄さんに街を案内してもらおうじゃないか。大使館に帰る道すがらな！」

元氣を取り戻したクロエは、勢いよくソファから立ち上がって言った。

アルディギア王国の大使館は閑静な住宅街の中にあり、ここから車を使えば十分ばかりで到着してしまう。帰る道すがらでは、あつという間に旅行を終えることになるのだが、まあいいかと凧は思考を停止する。

想定外だったのは、クロエが行きたがったのは観光地でもなんでもない普通の店だったことだろうか。

大型デパートを一階から最上階まで梯子したクロエは、特に何かを購入するといふことはなかったが、どのような商品に興味を示して店員にアタックを仕掛けていた。

クロエは日本語堪能だ。外見から僅かに警戒心を見せた店員も、日本語で応対できると分かっているから、若干緊張しながらもクロエに丁寧な説明をしていた。それも、クロエを喜ばせることになったのだ。

クロエがあっちへふらふら、こっちへふらふらしている間、凧とアレックスはその背中を追いかける。

「クロエにとってはデパートすら珍しいのか？」

「そのようなことはないでしょう。特別、大きな違いはこちらでも我が国も変わりません。姫様とて、行動に大幅な制限がかかっているというわけでもありませんからね」

「アイツ、たまには一人で出かけたとか言ってたぞ」

「それはもちろん、お一人で行動などされては困ります。必ず、誰かお傍でお守りするようになっていますから、姫様が息苦しく思われることもあるでしょう」

「へえ、そうか。ま、そうだろうな」

それが、一国の姫として当たり前前の生活なのだ。

かく言う暁の帝国ですら、皇女姉妹にはそれぞれ専門の護衛官が就いている。凧

の家に遊びに来るときですら、隣の部屋を待機室にして、皇女たちが帰るまで控えているのだ。彼女たちを振り切って遊びに来るのは、紗葵くらいのもだろう。

「姫様、何かお求めのものがあればお申し付けください」

「いや、いい。買ってしまったら、自重できなくなりそうだ」

一般庶民の感覚では高級品であっても、クロエからすれば小遣いで買える程度のものも少なくない。同じ皇女でありながら、アルディギア王室の一員であるクロエは立ち位置からして零菜たちとは異なっている。

それでも、好き勝手な買い物をしていないように自重している辺り、教育が行き届いているというべきか。

こうしてみれば、歳相応に見えなくもない。肉体的には少々成長しすぎているが、精神的には同年代とさほど変わりはないのだろう。

その後、クロエは迎えに来た車に押し込まれて連れ帰られることになった。日が落ちる前には大使館に戻っていなければならぬということになったらしい。

半日程度とはいえ、無断で外出したのだ。それ相応のお叱りは覚悟しておくべきだろう。

アルディギア王家の自家用機である装甲飛行船ワググナーは、無補給でアルディギア王国と暁の帝国を二度往復できるほどの燃費と弾道ミサイルの直撃にも耐える魔術装甲を装備した戦艦だ。アルディギア王国数百年の歴史の中で積み上げられた魔術の知識の結晶とも言えるだろう。魔獣はおろか高位の吸血鬼とも戦えるだけの戦闘能力を有しているが、日頃これほどの装備を積み込む飛行船で外遊などしない。今回はラ・フォリア女王とクロエ姫の二人を護送する必要があるということと、暁の帝国が実質的にアルディギア王国と血縁で結ばれているという点から実現したものである。

ワググナーの武器庫を見て回っているのは、スーツ姿の男だ。四十を越えたくらいの歳だろうか。背の高い屈強な肉体は、スーツの上からでもはっきりと見て取れ

る。

長い一直線の廊下の左右には、人型のゴーレムが凄然と並んでいる。アルディギア製の機動兵器であり、魔術と科学の融合が生み出したものだ。

その他、銃や刀剣類まで揃っている。

「アーロン隊長、ご報告が……」

そこに、一人の青年がやって来る。アーロンの部下の一人である。

「どうした……クロエ姫が見つかったか？」

「え、あ、はい。そのようです」

「そのようですとはどういうことだ。お前が持ってきたのは不確定情報だったのか？」

「い、いえ。申し訳ありません。先ほど、大使館より連絡があり、午後四時二十分ごろにクロエ姫がお帰りになられたとのことですよ」

「そうか」

アーロンはため息をつく。

クロエがいなくなったことは、すぐにアルディギア王国の関係者に伝わってい

た。置手紙があり誘拐ではないことははっきりとしていたし、暁の帝国は治安の面では悪くない。そのため、すぐにどうこうなるような心配はしていなかったが、それでも余計な仕事は増えた。

「姫様も困ったものだ」

「お年頃ではありますし、街に興味を持たれることもあるでしょう」

「女王陛下の若い頃も似たようなものだったと聞く。が、王族には王族の振る舞いがあるものだ。そして、此度は大使館側の警備の問題もある。以後、姫様の回りに騎士を増やさなければなるまい」

「増やす、と言われましても」

人員には限りがある。

本国ならばいざ知らず、ここはアルディギア王国から遠く離れた暁の帝国だ。他部署から人を回すということは不可能である。もちろん、滞在中の騎士や関係職員を回すことは可能だが、いずれにしても護衛を増やせば、どこかの人員が減ることになる。

「構わん。ある程度の余裕は常にあるものだ。我々騎士の仕事はアルディギア王国

を守ることである。そのために多少の無茶は通さねばならぬ」

表情を変えず、アーロンは言った。

「報告ご苦労。持ち場に戻れ」

「ハッ」

敬礼をして部下は武器庫を後にする。

アーロンは胸ポケットから懐中時計を取り出した。古めかしい懐中時計は、文字盤に大きな穴が開いている。当然、針も失われており、すでに時計として機能してはいない。

それでも、彼はこの時計を後生大事に持ち歩いている。いつ如何なる時も手放さない。

「アルディギアを守らねばならぬ」

小さく、それでいて力強くアーロンは呟いた。

握り締める懐中時計を胸ポケットにしまって、再び意識を仕事に埋没させる。

やるべき仕事は無数にある。

各方面との調整もあるし、護衛のこともある。戦艦の運行計画会議にも出席しな

ければならない。だが、それももうじき落ち着くだろう。一番の大仕事であるクリスマスパークティーを終えれば、目の回るような仕事も一段落つくというものだ。

## 第四部 四話

オジマンに聖杯つぎ込んで皇帝特権スキルマにしたらもう素材とQPが……

それは、ちょうど第二子となる紅葉が生を受け、雪菜と優麻のどちらの出産が早いかという頃だっただろう。古城自身、二十歳を越え、皇帝としての仕事もある程度こなせるようになってきたという時期で、全体的に明るい話題が多かった。そんな時に予期せぬ凶報が飛び込んできたのだ。

「凧沙が、倒れた!？」

国内の大学に通う実の妹が、キャンパス内で倒れて救急搬送されたというのだ。もともと身体は強くなく、中学生の頃には度々熱を出して寝込むこともあったが、その原因であるアヴローラの魂を体外に出してからは、入院することもなく、体調を著しく崩すこともなかった。

それが、今になって倒れるとは。

搬送された病院に駆けつけた古城が見たのは、熱に魘されて意識が朦朧とした最愛の妹の姿だった。医師でもある母は、凧沙をあらゆる角度から検査した後、絶望的な表情で古城に向き合った。古城自身、樂觀的で楽天的な母が、ここまで消沈したところを見たことがなく、喉が干上がりそうな感覚を覚えた。

「……凧沙ちゃん、もう長くない」

小さく呻くように母が言った。

長くない。

その言葉の意味を古城は理解できなかった。したいとも思えない。そんな馬鹿なことがあるはずがないと叫びたかった。

「長くないって、何で……何が……病気、か。この国の技術なら、治せるだろ、そんな……」

思考が真っ白になるという感覚は、生まれて初めてかもしれない。

凧沙の命が目の前から零れ落ちてく現実には狂ってしまいそうだった。

だが、絃神島の技術を受け継ぎ、発展させてきた暁の帝国の医療技術は世界最高

峰である。その分野も、この国の経済に大きな貢献をしているところであり、よほどの難病でもなければ十分に治療できる可能性はあるはずだ。だというのに、深森は俯くばかり。答えを促されて、やっと口を開いた。

「凧沙ちゃんのは病気じゃない。これは、呪い……に近い」

「呪い、だと……いったい、どこのどいつがッ」

カッと頭に血を昇らせた古城を深森が制止する。

「落ち着きなさい、もう、呪った相手はいないの。言い方がまずかったわね。これは、そう、後遺症と言っていると思う。第四真祖の魂を身体の中に受け入れたことの」

「アヴローラの魂をか」

古城は力なく椅子に座り込んだ。

この事実を知ったら、アヴローラはどんな表情をするだろうか。第二真祖の下に逗留している彼女は、凧沙の無二の親友といっても過言ではない。かつてはその魂を凧沙の中で保護されて、後に別の肉体を得てこの世に生まれ変わった第四真祖の前任者。

「それだけじゃないでしょ、あの娘の身体に入ったのは」

「——原初<sup>ルイト</sup>。だけど、アイツは」

「ええ、滅んだ。あなたとあの娘がどうにかした。それは間違いないわ。でも、さっきも言ったでしょう。これは後遺症。邪悪な第四真祖の魂に乗っ取られた風沙ちゃん<sup>ルイト</sup>の魂そのものに悪影響が出たのよ。原初<sup>ルイト</sup>の残滓が、纏わりついている状況だわ」  
伝説に謳われる凶悪無比な第四真祖の本体は、その正体を知る者からは原初<sup>ルイト</sup>のアヴローラと呼ばれていた。

休眠と復活を繰り返し、数多の文明を破壊してきた怪物の伝説を終わらせたのは他ならぬ古城である。風沙を乗っ取り復活した原初<sup>ルイト</sup>を古城と十二番目のアヴローラが協力して滅ぼしたのである。原初<sup>ルイト</sup>をアヴローラがオーバーライトし、体内に取り込んだ直後、アヴローラごと聖槍で撃ち抜くという決死の策で伝説の吸血鬼は完全に消滅した。

「今のままだと、風沙ちゃんと血の従者にして延命<sup>ルイト</sup>ってわけにもいかないでしょうね」

「じゃあ、どうするんだよ！ このまま何もしないで、風沙が弱っていくのを見

てろって言うのかッ!? 何か手は、何か助ける方法はないのかよッ。風沙は何も悪いことしてないじゃねえか! 結婚するって言ったばかりだぞ……」

熱い涙がこみ上げてくる。

暁の帝国の皇帝にして世界最強の第四真祖などという肩書きを持っていながら、妹の命一つ救ってやることのできない無力さに打ちひしがれる。

「このこと、アイツは知ってるのか?」

「ええ。昏月君にもさっき伝えた」

「それで」

「風沙を救う方法はある、彼はそう言ったわ」

「な……マジか。本当なのか?」

昏月は、風沙が付き合っている男であり近々入籍する予定だった。学生婚だが、兄である古城が女性関係にルーズなところがある一方義弟となる予定の男は偏屈者だが一途な男だった。そして、生命工学の分野で天性の才能を示しており、将来を嘱望されている大学院生である。

「彼の意見、わたしも聞いたわ。賭けてみる可能性はある。でもね」

「何だよ。風沙が助かるんならそれでいいだろ。何があるんだ」

風沙が助かるのならば、何を戸惑う必要があるのだろうか。

今も苦しんでいる妹を思えば、すぐにでも治療なり解呪なりを進めるべきだ。刻一刻と命を削られている風沙の苦しみは想像を絶する。兄として見過ごすこととはできないし、可能性が見えただけでも古城の気持ちを明るくするには十分だった。

対照的な母の表情——重く、長い沈黙を守る彼女の反応を疑問に思いながら古城は次の言葉を待つのだった。



暁の帝国主催のクリスマスパーティーは毎年クリスマス直近の日曜日に行われるのが常であり、今年もその例に漏れず日曜日の夜に立食形式で行われることになっている。

日曜日が潰れるからと娘達は大きいに不満げではある。外交的な側面が強く、同世代の王族や貴族の子などにもいるにはいるし、クリスマスパーティーで知り合った友人と日常的に連絡を取り合うこともある。だが、それはそれ、せつかくの冬休みなのだから遊びに費やしたいと思うのが子ども心だろう。

特に遊び盛りの中学生となれば尚のこと。皇族だからと割り切ってはいても不満はある。

「はあ、毎年のことだけど本当に疲れるんだよね、これ」

迎賓館の控え室で零菜はため息混じりに呟いた。

暁の帝国は海の上に建造された人工島からなる島国である。ほかの国と異なるのは、増改築が比較的容易にできるということであり、埋め立てというよりも増築により領土を拡大することが可能なのはほかに類を見ない。

築二年と新しい迎賓館は、風光明媚な観光地を目指して設計された第三南地区の南端にある広大な国営公園内に存在する。

暁の帝国のクリスマスパーティーは昨年から会場がここになった。元より、このために作られた箱物である。普段は国営公園の管理のために用いられる施設でもあ

り、決して無駄ではないのだが、正しい用途で使わなければ税金の無駄遣いを指摘されることとなる。

姿見に映るのは、華やかに着飾った零菜の姿。

白と空色のパーティドレスは零菜のために作られたオーダーメイド。奢侈に走らず、それでいて華を失わない明るさがある。あくまでも主役は零菜であると、着る者の魅力を引き出すようにデザインされたドレスだった。

「零菜、ちょっと大胆過ぎないそれ」

化粧台の前に座り、紅茶のティーカップを口に運んだ萌葱が、零菜の背中を指差して言う。

「う、やっぱりそうだよ。やだな、恥ずかしい」

零菜の背中には大胆なカットが入っている。透明感のある若々しい肌がこれでもかと露出している。人前で肌を曝すなど、零菜にとっては不慣れに過ぎる。

選んだのは祖母。

彼女の趣味が多分に反映されたドレスであった。

「萌葱ちゃんのは肩がガッツリ出てるけどね」

「ハハハ、まあね。こんなもんでしょ、パーティドレスって」

萌葱は長女として社交界に幾度か出席したことがあり、経験を積んでいる。ドレスも何着か持っているし、その時の気分に合わせてコーディネートが容易だった。今日、萌葱が選んだのは黄色を主体にしたワンピースのドレスだった。シヨルダーオフが特徴で、肩より上の露出は零菜よりも上だろう。

「今日のパーティって顔だけ出して途中退席ってアリなのかな？」

そこに声をかけたのは、髪飾りの調整をしていた麻夜だった。

スマレをイメージしたという紺色のドレスは、姉二人と異なり上半身の露出は少なめにデザインされている。その一方でスカートは短めにしており、すらりとした足を強調している。

動きやすいという一点のみで、麻夜はこのドレスを着用したのだという。

「いいんじゃない？ わたしたちが主賓じゃないし」

零菜が答えると萌葱は頬杖を突いて言った。

「一応、顔つなぎはしておく必要はあるけどね。うちら、これでも皇族だからさ」  
「萌葱ちゃん、よろしく」

「いやよ、わたし一人に大役押し付けられないで。めんどくさいったらないわ。零菜にはテュランの大使さんの接待任すから」

「え、やだよあのおじさん視線がエロイもん」

「本国だと結構なロリコンで名が通ってるんでしょ？ 僕も関わりたくないなあ。

帰っていい？」

テュランの大使はその筋では有名な男だ。二十人の妻を持ち、一番下の妻は三十歳も年下だという。彼自身は今年四十五歳なので、文化の違いはあるとはいえ暁の帝国では十分に罪に問える。自分たちと同じ年の少女を手籠めに行っているという時点で、暁家の姫たちの間では頗る評判が悪いのだった。

なお、本人は根っからの善人である。太めの外見と文化的な差異から誤解されやすいだけであり、同じく妻の多い古城とは何かと気が合っているらしい。

妻に知られず女性に粉をかける方法を古城に伝授したとして、古城の妻たちからも警戒されている人物ではあったが、本人は周囲の悪評などまったく気にかげずむしろ他者の嫉妬が心地よいとも言えるかのように入った女性には声をかけているのが現状であった。

「毎度毎度疲れるだけよね、このイベント」

萌葱はこれまでのクリスマスパーティーを思い返して愚痴を言う。

様々な国で重責を担う者たちが招待されるのだ。パーティーと言っても政治色は消せないし、子ども心に気を遣う場面が多かった。

無邪気にはしゃいでいた時期が懐かしい。

何度ため息をついてもつきたりない。おそらくは一年で最も気が重い一日の一つではあるだろう。

「なんか新しいことの一つや二つないと、マンネリで益々つまらなくなるじゃない。何かないの、ときめく何かがああ」

「萌葱姉さん、気持ちは分かるけど、そんな大きな声で愚痴らなくても」

「まあ、冬休みだし終わったらダラ寝すればいいんじゃないの」

一国の姫が口にするとは思えない発言も、今夜のイベントに対する不満と不安から来るものだ。口々に出てくる愚痴も慣れない環境に対する自己防衛でもあるのだろう。

この部屋にはいない紗葵や紅葉、結雫も似たようなことを思っているに違いない。

ドアがノックされたのはそんなときだった。

「葱葱姉さん、いる？」

「凧君？ いいよー」

葱葱が返事をした。

声をかけてきたのは凧だった。今まで、クリスマスパーティーにはろくに参加することのなかった彼だが、今年は参加することになったのだった。

「どうしたの、凧、君」

ドアを開けて入ったきた凧は、見慣れないスリーピースのタキシード姿だった。中学三年生ながら、大人っぽさを醸し出し始めた凧のタキシードは、なるほど新鮮さに満ちていた。一瞬、言葉を失うくらいには。

「どうした、姉さん」

「あ、いやなんでもない。そっちこそ、突然どうしたの？」

「葱葱さんが呼んでる。ホールにいるから、すぐに来いって」

「母さんが？ 分かった、すぐ行く」

「じゃあ、伝えたから」

そう言って、凧は部屋を出て行った。

あっさりしたものだが、彼らしいといえれば彼らしい。

「クリスマスパーティー……これはイイイベントだわ……」

残された萌葱は素直な感想を呟いた。



どことも知れない暗がり二人の女が立っている。

闇色のゴスロリ衣装に身を包むのは、クシカとユリカ。十数年前から欧州各地で名前を轟かせる魔導犯罪者であり、高位の魔女だった。外見は十代中頃のアジア人。名前の響きから日系人と思われるが詳しい経歴は明らかになっていない。能力もはっきりとはしておらず、強力な吸血鬼の眷獣に似た悪魔を使役していることが分かっているだけだった。

「魔女姉妹が先に来ていたか」

野太い声。

無論、クシカのものでもユリカのものでもない第三者。遅れてやって来たスーツの男の声だった。

「あら、遅れてやって来たのに一言の謝罪もないのかしら」

「殿方としてそれは如何なものでしょう。仮にも騎士を名乗るのならば、それくらいの礼儀はあってよろしいのではなくて？」

「魔女に尽くす礼はない。我がスタンスに意を唱えるのならば、この話はなかったことにしても構わぬ」

恥じることもなく、欠片も申し訳ないと思っていない。自らに非はないと確信した声音である。もちろん、約束の時間に遅刻したならばともかくとして、予定時間の十分前の到着である。避難される謂れはないという意見も間違ではない。上から目線の言葉に眉根を寄せる姉妹の反応を別にすればだ。

「まったく、これだから破魔の騎士様は好きになれませんわ」

「見た目もゴツゴツですしおすし」

「ああ、商談相手が細身の可愛い少年だったらと思わずにはいられません」

「そのままお持ち帰りして、くふふ。朝までと言わず色々楽しんでものを」

クシカとユリカは同じ顔、同じ声、同じ仕草で話を進める。相対する者はそれだけで気分を害するだろう。この魔女は、会話だけで相手を苛立たせることに長けている。

しかし、男のほうは動じない。どっかとソファの腰を下ろして油断なく姉妹の様子を観察している。

ここにきたのは彼女が言うように商談のため。実質的には話は纏っていて、最終確認の段階に入っていた。

「おや、ところで獅子王機関の方がおりませんね」

クシカが言った。

獅子王機関。

かつて日本に存在した対魔族組織。千年の歴史があると伝わる超法規的機関として長年日本の魔術世界を裏側から支えていたのだが、今はすでに存在しない。権力争いの果てに自衛隊や警察に吸収されて存在そのものを忘却されたという。

「彼女ならばすでに現地入りしている。作戦に変わりがなければ改めて確認するまでもないとな」

「あらまあ、そうですね」

「剣巫でしたっけ。協調性がないにも程がありますわ」

「貴様等が言えたことではないだろう」

クシカとユリカは魔女の仲間を幾人も殺してきたことから同族からも恐れられている性格破綻者だ。犯罪を犯す魔女には珍しくない性質ではあるが、彼女たちはその狂気を直近まで仲間だった者にも向けることで今ではペアを組む者がいなくなっただけである。

「まあ、いいでしょう。わたしたちはわたしたちで目的を果たせばよし。あなたはあなたで剣巫は剣巫で。各々裏切り者の始末ができればそれでよし。利害の一致は、当初と変わらさず。作戦内容も変更なし。時間も予定通りでよろしくて？」

「それで構わぬ。第四真祖を出し抜き、この国を終わらせる。それを以て我が祖国の栄光を取り戻すには、最早これ以外にはありえない」

最優先目標は第四真祖とその妃たち。

姫たちは多少取り逃しても構うまい。所詮は十数年しか生きていない小娘でしかない。吸血鬼としての才能はあっても、経験も重ねた時間も少なすぎる。警戒はしても脅威にはなり得ない。

「いや、クロエ姫には即刻退場ただかなくては。あれは、アルディギアの汚点であるからして、その血で以て罪を償わねばならぬ」

男は覚悟を込めて呟いた。

アルディギア解放戦線。

第四真相に支配された祖国を取り戻すべく戦う義憤の輩。愛国の徒であるがゆえに、魔女や他国の元攻魔師、果てはマッドサイエンティストなどとも手を結び、屈辱に耐えて計画を練ってきた。

すべてはこの日のために。

一点の穢れもなき心で、巨悪を討ち果たすのだ。



## 第四部 五話

クリスマスパーティは厳戒態勢で行われる。

各国大使館からも多くの客が来る。厳重な警戒態勢が敷かれて当然である。特区警備隊のみならず、アルディギア王国からやって来た騎士団員も数多く出入りしているのが見て取れる。

アルディギア人は北歐系。透き通るような白い肌と白銀の髪が特徴で、アジア人が中心の暁の帝国内では目立つ。

凧が窓の外を見ると、見たことのない機械を持ち込んでいるアルディギアの騎士が見えた。特区警備隊としては、あまりいい顔はしていないだろう。凧の知り合いも、苦々しく思っているようではあった。自分の国に他国の騎士が我が物顔で入り込むのは正直複雑な感情を抱いている。

タキシードなどという大仰な衣服を着るのは、少々気恥ずかしい。

凧はあくまでも招待された客の一人でしかなく、政治的な背景を背負っているわけでもない。適当に参加して、パーティーを端っこで眺めていればいいと比較的気軽

な思いで開始時刻を待っている。

迎賓館の外は広い自然公園になっている。緑の少ない人工島では、こうした土地は重要なのだ。

パーティが始まるのは午後七時。それまで、凧はぶらぶらと時間を潰さなければならぬ。

「何をしていいのかわからないといった感じですね、お兄さん」

「空菜。そっちこそ、手持ち無沙汰って感じだな」

エントランスを出て、日差しの下にやって来たところで空菜がふらりと現れた。

「お前、零菜たちと一緒にじゃなかったのか？」

「途中までは。ですが、わたしは暁の人間ではありませんし、零菜によく似た赤の他人なのでメディア対応もお偉いさんとの顔合わせもする必要はないです。ぶっちゃけメンドイのです」

空菜は零菜を元にしたホムンクルス。

当然、一国の姫のホムンクルスなど存在そのものがイレギュラーにもほどがある。取り扱いを誤れば、大きなスキャンダルとなるだろう。

微妙な立場にある空菜は、今現在古城の娘として扱われてはいない。昏月の姓名乗っているところからも、親族ではあっても、暁家の一員とは数えられていないのである。

「で、どうですか」

「ん？」

空菜が唐突に尋ねてくる。

何が、と問い返す前に空菜は自分のドレスのスカートの先を摘み上げた。

「どうですか？」

空菜のドレスは薄い桃色を主体としたフリルのついたパーティードレスだ。身体に密着するようなタイプではなく、全体的にふんわりとした可愛らしさを協調しているように見える。若々しさをアピールするためだろうか。スカートの丈は膝くらいのミニだった。

「すごい似合っていて可愛いと思う」

「……ん、できれば、もっと心を込めて言って貰いたいところですが、凧さんにそこまで求めても酷でしょうし、このくらいで勘弁してあげます」

「何だよ、その上から目線」

「で、凧さんは暇しているわけですか」

「そりゃあな。警備の仕事が俺に回ってくるはずもないし、後一時間、どうすっか  
なつてとこだよ」

西に太陽が傾きつつある夕方。そろそろ、空腹を自覚する頃でもあった。

「お姫様たちは、もう会場入りしているみたいですけどね。開場まで三十分あります。散歩しますか？」

「まあ、そうだなあ」

ちようど、ここは自然公園だ。遊歩道もあるし、トラックもある。日本風庭園を備えている区画もあれば、人が足を踏み入れる事のない雑木林としか言えない区画もある。人工の島にない景色を求めた結果がこれである。一応、国民にも解放されているから無駄にはなっていないどころか、貴重な自然ということで学校や保育園の遠足の場としても重宝されているくらいだ。

空菜と一緒に遊歩道を散策することになった。が、かといって話が弾むということもない。もともと口下手な凧と口数の少ない空菜の組合せだ。一緒に生活する仲

ではあっても、無駄話に興じることは決して多くはない。

風呂の数メートル前を歩く空菜は遊歩道の左右に広がる緑の森を興味深そうに眺めている。日本の山をイメージしたという森は、とどのつまりは雑木林でしかないのだが、機械とコンクリートばかり見てきた空菜にとっては緑溢れる自然というだけで物珍しいのかもしれない。

「こうして歩いていると、街中とは全然違うのですね」

「例えば、どんなところが？」

「ん、そうですね。風が涼やかです。それに、匂いが違います。これが、土の匂いというのでしょうかね」

「まあ、コンクリアスファルトとは違うだろうな。……気に入ったのか？」

「ええ。なかなか面白いです」

空菜は手近な葉を一枚千切ってまじまじと眺めている。その空菜の頭にひらひらと飛んできた黒揚羽が止まって羽を休めた。

「？」

空菜は違和感に気付いたものの、特に気にしないのか頭に止まっている黒揚羽を

無視して歩き始める。

木でできた遊歩道は全長二キロ。夕暮れ時は木で西日が隠れるので、薄暗くなる。数十メートルおきに外灯が設置されている。その外灯が淡い光を放ち始めた。

「もう夜だな」

「やっぱり外灯がないと真っ暗になりますね。空は、ずいぶんと明るいようですが見上げる空は街の明かりに照らされて夜ながらも、比較的明るい。雲が光を反射してオレンジ色にぼんやりと染まる。雲が多い日にはよく見られる景色ではある。地上が明るいので、暁の帝国の星空はあまり見えないのだ。

「ん、誰かいますね」

「誰かって」

前を見ると、確かに人が歩いてくる。三人か。凧たちとその人影は十メートル先の外灯の下で顔を付き合わせる事となった。

先頭を歩いていた少女は白銀の髪をサイドに流したアルディギア系。アルディギア王家に名を連ねる凧の親戚、クロエ姫だった。

「兄さん？」

「クロエ？ 何してんだ、こんなところで」

「わたしは父さんに挨拶した後で、開場までの時間つぶしだ。公園の散策なんて、普段できないからな。色々とうるさくて」

クロエは鬱陶しそうに付き添いの二人に視線を向ける。一人はアレックス。長身の美人で、こう見えて高校生。クロエの幼馴染でもある。そして、もう一人は背の高い筋肉質の男だった。アルディギアの軍人だろうか。

「せっかくだから一人でぶらついてみようと思ったのにこれだ」

「姫様、そうは仰いますが何かあってからでは遅いのです。ご自重ください」

「分かっている。でも、アルディギアよりは治安がいいだろう、この国は。一人で歩いていたらとところで、何かあるとは思えないけどな」

近年のアルディギア王国はかつてほど治安が安定していない。もちろん、犯罪率の低さは先進国の中でもトップクラスではある。だが、それでもここ二十年、経済的な問題と政治的な問題からテロ事件の件数は増えつつあるのは事実だった。

もともとアルディギア王国は軍事国家としての側面があった。武器の入手しやすさはかつて日本だった暁の帝国よりは上だ。

「吸血鬼は武器云々以前に眷獣使えるし、魔術だってあるんだからそういう油断はしないほうが身のためだぞ」

「兄さんまでそういうこと言う」

ぶう、とクロエは不満げに唇を尖らせる。

「風様の仰るとおりです、姫様。アルディギアの未来を担う大切なお身体です。あまり心配をさせないでください」

アレックスにも窘められてクロエは四面楚歌の状態になった。

あまりに不利な状況にクロエは話題を変えようとしたのか、風の隣にぼうつと立っている空菜に視線を向けた。

「……ん、もしかして空菜さんか？」

「はい、昏月空菜。風さんの義理の妹です」

「よろしく、もう知っているかと思うが、風兄さんの従妹でアルディギア王国の第一王女のクロエ・リハヴァインだ」

クロエが右手を差し出して、空菜が握手に応じた。

「しかし、本当に零菜姉さんによく似ている」

「事情が事情なので」

「ああ、まあ、それは知っているけれどな」

複雑そうな表情を浮かべるクロエ。

一応、肉体年齢では空菜のほうが一つ年上のはずだが、クロエのほうが身長が高く大人びた風貌なので一見するとクロエのほうが年上に見えなくもない。

「姫様。そろそろ、お時間です」

「え、ああ、そうだな」

騎士の男に話しかけられて、クロエは腕時計を見た。開場まで十分を切っている。ここから歩けば、ギリギリで間に合うかどうかというところだろうか。開始時刻に遅刻することはありえない。

「わたしは、また色々といさつ回りをしないとイケないみたいだから、ここで失礼する。兄さんも空菜さんも、デートは早々に切り上げないと姉さんたちがむくれて面倒だよ」

「何だよ、それ」

「ふふ、じゃあ、また会場で」

クロエはそう言って、従者を伴って凧たちが来た道を辿っていく。

「さて、どうしますか、凧さん」

「まだ、開始まで時間あるからな。お姫様たちと違って準備がいるわけじゃないし」  
「では、一周しても時間に余裕はありそうです。この公園を一周してから向かいましよう」

空菜は引き返すのではなく、進むことを提案した。

もう暗くなっているので、遊歩道を進んでも大して面白みもなさそうではある。空菜の視力ならば、この暗闇を見透かして木々の間の小動物を見つけることもできるだろうが、凧にそこまでの眼力は期待できない。人より少し目がいいだけの凧は残念ながら外灯を頼りに歩くくらいしかないのだ。

それでも、空菜が進みたがっているのなら付き合ってやるくらいの甲斐性はある。

「しかし、あれですね」

「ん？」

「こんな暗がりですら吸血鬼と二人きりとか、首筋かむかむされても仕方ないといいま

すか、誘ってんのかと勘違いする人もいるかもしれませんがね」

「何だよ、いきなり。血なら昼にやったぞ」

「そうですね。まあ、でも、ほら雰囲気とかありますし。一噛みいこうぜ、的なノリ」

「ない。今タキシードだしな。血がついたら何事かと思われる」

「ぶう、そうですね、そうですね。あなたはそういう人だったんですね」

「そうですね、俺はそういう人だったんですよ」

どこかで聞いたようなフレーズでむくれる空菜をあっさりを受け流す風。

「まあ、いいです。わたしはどっかの誰かと違って風さん無理矢理どうこうしようとはしない主義です。じゃあ、いつも通り十時になったら貰いにいきますので」

「はいよ、待ってればいいのか？」

「はい。いっそ、寝てもいいですよ。鍵だけ開けていてもらえれば」

「十時だと寝てはいないかな」

空菜への血液供給は最低でも一日に一回、可能ならば二回がよいというのが祖母の見解だ。彼女の体内に仕込まれた「裏切り防止機構」は軍事目的で製作されたホ

ムンクルスならではの爆弾であったが、空菜自身が吸血鬼としての力を高めていけば自然と消滅していくだろうとの見立てである。半年から一年は、身近な人間が彼女に血を与えなければならず、必然的にその役割を担うのは凧となった。

空菜は、時折こうして約束の時間以外でも血を吸おうと迫る時はある。休日とはより、学校の昼休みでもだ。基本的に断わっているし、学校で吸血なんてさせられない。凧の社会的な立場が崩壊してしまう。ただでさえ、空菜は美少女として多くの注目を浴びている。義妹の吸血鬼に血を吸わせているとなれば、凧がどのような視線に曝されるか分かりきっている。

困ったことに、空菜にはその辺りの羞恥心がまだ芽生えきっていないのだ。

歩いているうちに遊歩道が終わった。目の前に広がるのは芝生のただっ広い公園だ。昼間は多くの家族連れで賑わう公園も、今は軍関係の車両やテントが散見されて物騒な気配と漂わせている。アルディギア製の自動歩兵も五体ほどいる。

「嚴重だね、まったく」

凧は物々しい気配にため息をつく。

彼もまた攻魔師の見習いとして何度か特区警備隊の任務に参加したことはあるの

で、慣れていないというわけではないが、だからといって落ち着いていられるかというところというわけでもない。

やはり、こういうのは緊張を強いる。

軍でなくとも警察なり役所なり堅苦しい空気の場合に向かうとこちらが一方的に感じる圧力がある。向こうはそんなつもりがなくとも萎縮してしまうのだ。

「凧さん、行きましょう」

「ん、ああ」

頷いて、空菜と一緒に明るく照らされた道を歩く。

芝生の公園をぐるりと囲む陸上トラックを横断し、迎賓館を目指す。開始時刻まで後十五分といったところか。受付も始まっており、後は会場に入るだけだ。招待状をポケットから取り出して、凧と空菜は受付に向かうのだった。



暁の帝国主催のクリスマスパーティーはそこまで大規模に行われているわけではないのに、一般庶民の凧からすれば庄巻の一言であった。

帝国の政府要人も当然のように出席している。

テレビでしか見ないような人がすぐそこにいるというのが、凧にとっては別世界の光景に見える。

ガヤガヤと、日本語以外の様々な言語が入り乱れている。

凧はVIPの喧騒から逃れるようにして広間の端のほうに立ち、黙々と飲食に励んでいた。

ざっと、広間全体を見渡すと、暁姉妹たちが各々知り合いと話をしているのが見て取れる。萌葱は情報系部局の長らと話をしているようだし、紅葉は母親と共になにやら話をしている。零菜と紗葵は見た目同年代の友人と談笑中。ほかは――

「ぼんやり突っ立っているだけかい、凧君」

「麻夜こそ、さっきから出たり入ったりじゃないか」

「見てたのか……あはは、まあ、こういう空気は苦手だからね。慣れないと、とは思ってるよ？」

麻夜はこそそと折を見ては会場の外に出ていた。

古城の挨拶が終わり、自由に談笑できる空気になってからというもの、いつ逃げ出してやろうかと機会を窺っているようにも見える。

「兄さん、楽しんでる？」

「凧さん、これ美味しかったですよ」

クロエと空菜は妙に意気投合しているようで、さっきからずっと一緒に行動している。

空菜が差し出したグラスを受け取ろうとして凧は手を止める。

「これ、口つけてないか」

「それがどうしたんです？」

「いや、あのな。自分が口つけたのを他人に勧めるのはよくないんだぞ」

「存じてます。ですが、凧さんは他人ではないので問題ないかと」

「他人じゃないと言ってもらえるのはありがたいんだけど……」

空菜の価値観が分からず、凧は困惑する。

間接キスという概念を、この義妹は正しく理解してはいないのであるか。いや、理解はしているが気にするような理由がないというべきだろう。ホムンクルスらしい合理性重視の考え方ではある。

「ふふ、困りものだねこれは」

「楽しそうにするなよ、麻夜」

「いつもこんな感じなのかな？」

「割と。最近はそうでもないけどな」

「……一緒に住んでるってのは、なかなか厄介だよ」

ふう、と麻夜はため息をつく。

その彼女が何かに気付いたように振り返る。麻夜の視線を追うように、凧が視線を動かした先には、金髪の青年が佇んでいた。

見覚えのある顔だった。

「アルデアル公」

「覚えていてくれたのかい、昏月凧。君と以前会ったときは、まだ小さな子ども

だったはずだけれど」

「テレビで、時々見ますから」

「結構。私のような者はどうしても目立ってしまうからね。当然と言えば当然だ」  
肩を竦めた美青年は、クロエから麻夜へ視線を動かし、最後に空菜を見た。

「おや、零菜姫かと思っていたが、他人の空似か」

「昏月空菜です」

空菜は少しだけ警戒の色を顔に浮かべて名乗った。

「昏月？ 君と同じファミリィネームだね」

「妹です、一応」

「なるほど。君に零菜姫そっくりの妹がいるとは知らなかったよ。初めまして、空菜嬢。私はゲオルグ・ヴァトラー。第一真祖より、正式にアルデアルの地を任せられた者だ」

ヴァトラー家は第一真祖の血筋に連なる吸血鬼の貴族の家系。二十年前の当主が問題を起こして失踪したことを機に断絶しかかっていたところを親戚筋のゲオルグがその名跡を継いで存続したらしい。前当主はかなりのバトルマニアだったよう

で、そのためにヴァトラー家は多くの恨みを買っている。現当主は前当主の負の遺産の処理に方々を駆けずり回っているのだと聞いたことがあった。

「ゲオルグさんが参加されるのは、久しぶりだと思えますが……その、お忙しいのではありませんか？」

「ははは、まあほどほどに忙しいよ。二週間ほど前に軽く戦争したばかりだからね」  
「せ、んそう?」

「ああ、まあ報道はされていないよ。戦争と言っても先代に恨みのある連中が夜襲を仕掛けてきただけだからね。当然、叩き潰してあげたけれどね」

「そうですか……」

麻夜はそれ以上何も言えなかった。

比較的安全な環境で育ってきただけに、戦争と呼ばれるような行為に現実感がないのだ。麻夜からすればゲームか映画の中の出来事である。

しかし、大陸では今でも散発的に戦争に近い領地争いが続いているという。

「ま、うちはほどほどだけだね。最近はアルディギアと事を構える必要もなくなってきたし安定してるほうさ。第二真祖のところは、相変わらず皇族同士の小競り合

いがあるみたいだ。君達のところは、まだ仲よくやっているかな」

「特に喧嘩もしないですね」

「うん、封建制以後の帝国だからかな。今後どうしていくのか気になる所だけ  
れど」

領土争いになるほど、第四真祖の帝国の領土はまだ広くない。不老不死の吸血鬼  
であり、姫でもある麻夜達が将来何を収入源とするのかは、確かに課題の一つでは  
あった。

「さて、昔懐かしい凧と再会できたことだし、一つ提案があるのだけれど」

「はい、何でしょうか」

凧は青い瞳に見つめられて身体を固くする。

「君、私に執事として雇われてみないか？」

「は？」

凧はゲオルグが何を言っているのかまったく理解できなかった。

ぽかんと口を開けて思考を停止した。

「ちようど、執事に空きができてね。以前努めていた人間が定年退職してしまっ

んだ。血の従者にはならず人として一生を終えたいと言ってね。彼は霊媒として非常に優秀だったから、私としては手放したくなかったんだけどね」

「はあ……」

「もちろん、給料はきちんと出すよ。完全週休二日。夏休みに冬休み、この国の習俗に合わせてお盆休みも認めようじゃないか。その他各種保険に家賃の実費支給も約束するし、学費の面倒もみようじゃないか」

「いやいやいや、いきなりの提案過ぎて訳わかんないんですけど、どうしてそんなことを？」

「ん？ さっきも言っただろう。辞めた執事は霊媒としても優秀だったとね。以前あったとき、君は私が今までに出会ったあらゆる人間を遙かに上回る霊媒だと気付いたんだよ。フフ、恐らくはほかの吸血鬼も注目しているはずさ。凧、君がもしもアルデアルの人間だったのなら、出会ったその場で身請けしたんだけどね。残念だよ。第四真祖の血縁となると無理に連れ出すわけにもいかないからね」

じろり、とゲオルグの視線に舐められて凧は背筋が凍りついた。

「アルデアル公。凧君は、僕らの血縁でもあるので簡単に国を出るわけにはいきま

せんよ」

そこに口を挟んだのは麻夜だった。

「その通りです。それに、わたしとしても兄と離れるのは困ります」

さらに空菜が同調する。

二人の発言にゲオルグは悪感情を抱くどころか面白そうに笑みを浮かべる。

「ああ、その通りだ。だから、こうして誘いをかけているのさ。来てくれれば儲けモノ、くらしいの誘いさ」

「そうですか……」

「うん、それと一つアドバイスをしておこう。麻夜姫、それにクロエ姫も。君達も吸血鬼として早く成長したいのならば、強力な霊媒は手元に置いておいたほうがいいよ。私達吸血鬼にとって、霊媒の血こそ力の源なのだからね。君達の父君しか、私の先祖然りね」

古城にとつての霊媒は麻夜の母親である優麻やクロエの母親であるラ・フォリアなどが該当する。血の従者として共に永遠を生きる彼女達は、古城の妻であると同時に血液を提供する霊媒でもあった。

「霊媒を手元に置くと仰いましたが、兄さんは男性ですよ？」

「それがどうかしたのかい、クロエ姫」

「え？ いや、だって……」

ちらちらとクロエは凧の様子を窺った。

「ふ、もう一つ人生の先達としてアドバイスしてあげようか。いいかい、愛の前にも性別など無意味で無価値だ。私が愛するのは強力な霊媒。それ以上でもそれ以下でもない。うん、俗な言い方ではフェチというのかもしれないけれどね。男女の差異など、私にとっては大した問題じゃないのさ」

「は、はあ……そういう、ものですか」

「まあ、生まれて十五年も経たない君達では少し難しいかもしれないけどね」

ゲオルグは肩を竦めて言った。それから腕時計を見て、

「おっと、私はこれで失礼する。次の仕事が入っていてね。……凧、先ほどの件、検討しておいてくれ。何なら学業を終えた後でも構わないよ。私達にとって時間は無限にあるからね。これは私の名刺だ。二日はこの国に滞在することになっているからね、もしよければ、ここのホテルを訪ねてくれ。歓迎しようじゃないか」

受け取った名刺にはホテルの住所と部屋番号、さらにはゲオルグの連絡先まで書いてあった。

さわやかな笑みを浮かべて一礼し、ゲオルグは側近を伴って去っていく。

凧は颯爽とした後姿を見送ってからも、全身に走った悪寒が消えないでいた。

「凧さん、顔色が悪いようですが」

「いや、そりゃ面と向かってあんなこと言われたらな……うお、鳥肌立つわ」

空菜が心配そうに見上げてくるので、苦笑いを浮かべて答えた。

「ずいぶんとキャラの濃い人だったな、アルデアル公」

情熱的なゲオルグの言葉に影響されたのかクロエの頬は少し紅い。

「先代も相当だったらしいけどね。ところで、凧君」

「何だよ、麻夜」

「アルデアル公のところに行ってみたりはしないのかい？　かなり情熱的なアプローチだったし、今夜一晩だけ血を吸わせてあげたりとかは？」

「しねえよ！　何だよ……いや、何で残念そうなんだよ！」

「いや、別に。男同士の吸血って現実にはどうなのかなって。ほら、漫画とかだと

人気のジャンルだしさ」

「人気なのか、それ。……いや、BLってやつなんじゃ」

「最近の少女漫画には多いし、人気じゃないなんてことはない」

麻夜は少し語気を強めて断言した。

「読んでるのか、そういうの」

「読んでるよ」

「そう、へえ……」

何一つ恥じるどころなく、麻夜は断言した。知らなかったし、知りたくもなかった麻夜の一面に触れて風は絶句する。

「少女漫画？ 麻夜さんが読んでるのは、どういった内容ですか？」

漫画が空菜の興味を引いたのか、空菜が会話に参加した。問われた麻夜は、何を説明しようかと少し頭の中で情報を整理してから答えた。

「ん？ そうだね、最近買ったのは、亡国の王子様がスラムのがっちり系吸血鬼の血の従者になって国を取り戻すためにあれやこれやするハード系。一卷から過激な吸血描写と王子の嫌だけど仕方ない、から始まる心理描写が秀逸だってネットで

も話題騒然なヤツだね。今は三巻まで出てるよ。何？ BL興味ある？ 貸そうか？」

「BLというのがどういふのかよく分かりませんが、漫画は興味あります。凧さんからよく借りてます」

「うん、そうか。分かった、じゃあいくつか初心者向けの作品を見繕うよ。向こうで話をしよう。でもどうしようか、ソフトなヤツは零菜に貸してるところだった」

「零菜がソフトならわたしはハードで大丈夫です。オリジナルに負けることはありません」

「そう？ それでいいのなら……」

話をしながら、麻夜と空菜は広間を出て行ってしまった。

完全に置いてけぼりを食った凧とクロエは視線を交わした。

「あー、何か大変だな、兄さん」

「んー、俺が大変ってわけじゃないけどな……まあ、空菜がまた変なことを言い出さなけりゃいいんだ、ほんと」

基本的にまっさらなのが空菜の長所であり短所だ。余計な情報で勘違いを繰り返

して突飛な行動を取らないか心配である。

空菜とは一緒に暮らしているのだ。振り回されることも無きにしも非ず。

「さて、兄さん。ちょっと相談なただけど」

「何だ、いきなり」

声を潜めて、クロエが言った。

「これからわたしは外に出るんだが、一緒にどうか」

「抜け出すのか？」

「一応、母さんから許可は取ってる。騎士たちに言うとは反対されるから秘密だけだな。アレックスと一緒にいたいそうさ。で、兄さんはどうする？ 暇なんだろう？」

「そうだな。一緒に行かせてもらえるのなら行かせてもらうか。どこに行くんだ？」

「

「その辺の散策。アルディギアとは別の景色だ。気難しい連中は抜きで楽しみたい」

「そういうことね」

了解した風はそこで一旦分かれることになった。外で待ち合わせだ。クロエが言うにはアレックスが同行することなので、ラ・フォリアから話を通っているの

だろう。アレックスは騎士団員というよりも、ラ・フォリア子飼の護衛騎士なのだ。凧は会場となっている広間からエントランスに出て、そこから迎賓館の外に出た。先に外に出ていたクロエとアレックスの二人と合流し、クロエの興味を赴くままに夜の自然公園を歩き回ることになったのだった。



## 第四部 六話

迎賓館の裏口から出た凧は、近場の自動販売機で麦茶を買った。

大きいため息をつく。

知らないうちにずいぶんと疲れていたようだ。

大仰なパーティは柄じゃない。実際、ただの中学生である凧にとって、こうした催し物に参加する機会など皆無だった。第四真祖の血縁者ではあっても、立場は一般人と大差ない凧は、ここ数年はパーティや会合とは無縁で過ごしていた。小さい頃ならば、また話は変わってくるのだが、それも昔のことだ。

近付いてくる足音が聞こえて、そちらのほうに視線を向けると銀糸を夜風に靡かせる二人のアルディギア人がいた。クロエとアレックス。二人とも、ドレスから目立たない私服に着替えての登場だった。

「そこまでして？」

「人目は避けたいだろう。これでも、衆目を集める立場だと理解しているつもりだ」  
「そりゃ、まあ、そうだけど」

クロエの衣服は薄い桃色のワンピースとベージュ色のカーディガン。どこにでも売っていいような、特徴のない服なのに、彼女が着用すると瞬く間に華やかになる。だが、アレックスが持っている長い竹刀袋はどうかならないものだろうか。間違はなく武器の類が入っている。この前クロエが持ち歩いていたものと同じだろう。

「兄さんも着替えればいいのに」

「そうだな。着替えればよかった」

そう言いつつも、実際には難しいだろう。クロエとアレックスの服は、まだパーティに顔を出しても溶け込めるラインを維持しているが、風の私服では無理だ。黒のパーカーでパーティに出席しても不審者になるだけだ。

「服屋にでも行くか？ この辺りに良い感じの店が何件かあると姉さん達に聞いたんだ。特に萌葱姉さんのオススメの店があっちの通り沿いにあるみたいだぞ」

「その店なら知ってる。テレビで何度か紹介されてたな」

萌葱がどの店のことを言っているのか、風にはすぐにわかった。

若者の間で話題になっている海外ブランドの店だろう。大手デパートに出店したり、広い敷地に展開するのではなく、小型店舗を狙った土地にピンポイントで出

店する戦略を取り、対象となる購買層を的確に集めている。経営戦略という点からも、テレビや雑誌で取り上げられる機会の多い店だ。ファッションに拘りのない風ですら、名前くらいは聞いたことがあるほどだ。

「でも、ダメだろ。最低でも公園の中にはいないと後で何を言われるか分からん」  
「真面目だな、兄さんは。頭が固い」

「これくらいは普通だろ。なあ、アレックス」

腰に手を当てて不満げな表情を見せるクロエの隣でアレックスが苦笑する。

「真、その通りかと。クロエ様はもっとご自身の立場を自覚して欲しいところです。これではいつまで経っても目が離せないままです」

「わ、わたしは子どもか」

「はい。疑いの余地なく。気促に行動しては周囲を振り回す。とても大人とは言えません」

「うう」

にこやかにダメだしをするアレックスにクロエは引き気味だ。

見た目だけはすっかり大人っぽくなってしまったクロエではあるが、中身はまだ

まだというところか。アレックスも未成年ではあるが、王宮の警護を代々司り、自分もその道を進むと幼い頃から当たり前のように自覚して生きてきただけに、肝が据わっているというかしっかりしている。クロエにとっては姉貴分。まず、アレックスに窘められると反論できずにしょぼんとしてしまう。

「堅苦しい空間から逃げるにしても、迎賓館から出たくらいじゃな。かといって、護衛がすぐに動けない場所に勝手に行くわけにはいかないだろ。素直に公園の中を散策するくらいが関の山だな」

「真っ暗ではないか。わたしはもっと賑やかなところも見てみたい」  
「無茶言うなよ……この時間にいきなりそんなところに繰り出せるか」

ただでさえ目立つ容貌なのに、人前に簡単に出ていいはずがない。凧の常識的な考えは、往々にしてお姫様達に通じないことがあるのだが、クロエもその例に漏れない。

もともと、クロエ自身、普段から多少抑圧されているので、地元を離れたことで気分が解放的になっているという面は否めない。

「明日じゃだめか」

「抜け出すことに意味があるのだ。抜け出すことに」

「そうかい」

さて、どうするか。

正直に言えばクロエに付き合う理由もないわけで、ここでアルディギアの誰かに声をかければそれで終わる話ではあった。ただ、それはそれで心が痛む。一緒に出てもいいと言って抜け出してきたのだから、その時点で凧も同罪である。

言っても聞きそうにない従妹に困り果てた凧はアレックスと視線を交わす。彼女もため息を付きそうな顔つきで、しかし楽しそうに微笑を浮かべている。

アレックスもアレックスで状況を楽しんでいるような気がする。

公園の中でクロエの興味を引きそうなところ。凧には一箇所しか思い当たる場所がなかった。

「で、うちに連れてきたって」

凧の前に佇むのは大柄の男。

周囲には十五名ほどの武装した男女がそれぞれの仕事に励んでいる。主に監視カ

メラのモニターチェックである。

全員、特区警備隊の隊員であり、攻魔師資格を持つ者もいる。

「たく、凧よお。いくらなんでもいきなりアルディギアのお姫様連れてこられたら、こっちは大変だぞ」

「ですよ。いや、分かってはいたんですけど」

今年で二十七歳になる吉岡信二は、凧にとって攻魔師の先達であり那月を通せば兄弟子となる。凧が那月の無茶振りを受けた時にはしばしばサポートに回って来ていたりもしているのだ。その縁を頼り、公園内のテントで警備に当たっていた信二に連絡を取ってクロエを連れてきたのである。

「しかし、こんなむさい場所に来たがるってのはな。いや、そういえばうちの姫さん達も似たようなところはあるか。でもなあ」

うーん、と信二はクロエとアレックスの後姿を眺める。

機材を興味深そうに見ているクロエは対応する職員にあれこれと質問を投げかけている。

アルディギア王国の姫であり、第四真祖の娘でもあるクロエは暁の帝国の特区警

備隊からしても護衛対象である。普段関わりのある姫達と異なり、他国にも影響があるので緊張感が違う。

クロエとアレックスに対応している女性職員は事務方だそうだが、かなりの若手。今にも泣きそうである。

「お前も兄貴分なら、きっちり面倒みてやれよ」

「いや、そりゃ勝手に街中で歩かれるよりはずっといいじゃないですか。この方がまだ」

「そりゃあな。何かあったらこっちの責任になっちまう。まあ、そういう時に謝るのは上の人間だけだよ。お前のおかげで俺達のところにも飛び火しかねないことになったけどな」

「すみません」

「いいさ。ほっといてどっかいかれても困るのは事実だしな」

クロエとアレックスが着ている服は、どうやら特殊な魔術迷彩が施されているらしい。服に織り込まれた物ではなく、服の上から魔術をかけたのだろう。術式の一部に日本伝統の隠れ身を流用している辺り、多分アレックスの忍術なのだろう。

透明化するのではなく、視線をずらすタイプの魔術だ。メリットはそのまま他者から識別されにくくなることだが、その一方で事故に遭遇しやすいという簡単なデメリットが存在する。車の運転手から認識されないのだから当たり前である。

「多分、飽きたら戻ると思います」

「ああ。ま、見られて困るような物品は、ここにはないからな。好きなだけ見て回って、迎賓館に帰ってもらえればそれでいい。俺達としても良い暇つぶしになる」

決して暇ということはないはずだが、信二は堂々とそんなことを言い放つ。

護衛の仕事の中でも対象者にぴったりと張り付いているわけではないので、することといえばモニターチェックか機材の確認くらいのもだろう。緊張感を維持するのは最低限の原則ではあるが、それを朝から晩まで常に貫き通すのは人間である以上は難しいだろう。

クロエがしたかったのは要するにしがらみからの解放だ。

アルディギア王国関係者のいない場所でのびのびとしたただけだろう。そう思ってここを紹介したらばっちり嵌った。

アレックスも敷地内かつ暁の帝国の特区警備隊のテントということで文句なく付

き合ってくれている。

公園内部に点在する特区警備隊とアルディギアの王国騎士団の護衛部隊の拠点の位置は、凧も把握している。それくらいは頭に入れておくと、怖い教官に資料を送られていたからだ。

その上で、迎賓館からほどほどの距離にあるこのテントを対象としたのは知り合いがいることに加えて、クロエが迎賓館から離れたいという思いがあるだろうと踏んだからだった。

クロエ自身も、おそらく分かっているのだ。

だが、素直に檻に入れられる性格でもない。聞けば、母親のラ・フォリア女王も似たようなことをしていたと聞く。

伝統といえど伝統か。

むしろ、ラ・フォリアに比べて言うことを聞く分だけクロエのほうがまだましという話も以前、アルディギアの御老体から聞いたことがある。

お転婆で年頃のお姫様が相手では、どこの国も苦勞するのだろうと凧は他人事のように考えていた。

■  
迎賓館の一室はアルディギア王国に所属する騎士団の最前線だ。

室内には多くの機材が持ち込まれ、床には足の踏み場もないほどに多種多様なコードが這っている。

無線ではどこで傍受されるか分からないという至極単純で、必要以上の厳戒態勢が敷かれているのである。

如何なる敵が攻めてこようとも、即座に対応できるだけの戦力を迎賓館周辺に展開している。特区警備隊と合わせれば、吸血鬼の旧き世代が束になってかかってきたとしても撃退できるだろう。

それだけの戦力を用意しても、内側からの不意打ちには対応できない。それは、歴史が証明していることではある。

敵戒態勢が機能していたのも、ほんの十数分前までの話だった。

今や、アルディギア王国騎士団の最前線は崩壊したも同然の有様だった。

倒れ伏した騎士は十三名。外傷はなく、昏々と眠り続けている。立っているのは、三名の男だけだった。

「計画通りとはいえ、自分が属する騎士団がこの有様というのは泣けてくるな」  
縛り上げた部下を部屋の片隅に放置してアロンは吐き捨てるように言った。

「仕方ないでしょう。まさか、上司に菓を盛られるとは思ってもいないはずですからね」

「立場というのは便利なものだ。屈強な騎士も、それだけで大人しくなる」

騎士は本来戦場の華であるべきであって、邀撃騎士や近衛騎士もまた王族を守るために身命を賭して戦う存在である。

そして、アルディギア王国にはもう一つ、人類を魔族から守る盾としての役割もあった。

王国が成立してから数百年以上に亘って、戦い続けたアルディギア王国の立ち位置は、人と魔の戦いが終息しつつある現代にあって大きく意味合いを変えてしまっ

た。

アルディギア王国が吸血鬼に屈したと一部の人間は影で言う。

そのような悪評を、女王は平然と受け入れている。

だが、女王が受け入れていても下の者まで受け入れているわけではないのだ。

これまで、どれだけ多くの血が吸血鬼のために流れたか。あの女王は知らないわけではないだろうに、自分の我欲を優先し国体を変え、人の精神を腐らせた。

吸血鬼に対抗する人の盾であることを誇りとしてきたアーロンにとって、今のアルディギア王国の惨状は見るに耐えないものだった。

「吸血鬼どもの動向は？」

「第四真祖とその妃達は全員ホールにいますが、姫達がそれぞれ別々に行動しております。クロエ姫も監視の目を潜って外に出たようです」

「腐っても女王の娘か」

「もっと大々的に動かせれば、そちらにも人員を割けたのですが」

「致し方ない。取り逃してはならんのは第四真祖と血の従者だ。クロエ姫の優先順位は低い。見つけ次第始末するにしてもだ」

第四真祖と血の従者は超強力な眷獣を振るう。万が一、一人でも逃せばその時点で詰む。

「このまま決行すればいい」

長い年月をかけて集めた賛同者は百人ばかり。かなりの数だが、それでもクーデターを起こすには少ない。

最大限に自分たちの力が発揮できるように道具も運び込んでいる。そういったことができる立場に今のアーロンはある。

「よろしいですか？」

部下の問いかけに、アーロンは静かに頷いた。

よくここまでやってこれたと感慨深そうにしながら。

「では、始めます。これよりホール内に限定し、空間凍結封印術式を展開します  
合図とともに強力な魔術が作動する。

パーティ会場のホール内に仕掛けられ、巧妙に隠蔽された魔法陣が即座に展開した。アルディギア王国から——厳密にはアーロンが指示をして運び込ませた贈答品が基点となって、会場全体が瞬時にして凍りついた。

勝負は一瞬だった。

この一瞬にすべてを注いだアーロンとその部下の根気と覚悟が勝敗を分けたともいえる。

「空間の凍結を確認しました」

「さすがに何人かは気付いたようだが、まあ遅すぎたな。致命的に」

モニターの内部には灰色に染まった空間が映し出されている。

パーティ会場の時間の流れが停止してしまっただかのような状態だ。第四真祖も、その妻たちもそして運悪く居合わせた参加者達も揃って凍り付いてしまっている。「フェーズ1完了です」

どっと、アーロンは椅子に座り込んだ。

強大な吸血鬼を倒すには心臓か脳を潰すしかない。しかし、それ以上の真相クラスの怪物が相手となると心臓を潰しても頭を潰しても復活してくる。そのため、無力化は封印処理するのが有効な解決策であった。

ドアがノックされる。

決められたリズムで四回。

返事を待たずに想定していた人物が室内に入ってきた。

「まずは作戦成功をおめでとうございます。正直、ひやひやしながら見守っていましたよ」

現れたのは黒髪の女だった。

二十代中頃だろうか。

美しい顔立ちではあるが、ナイフのような伶俐な目つきは物好きな男でも遠ざかるだろう。そういうのが好みならば、むしろ寄ってくるかもしれないが。

彼女が肩に担いでいるギグケースにアーロンは視線を向ける。

「そちらも上手くいったようで何より」

「おかげさまで第一に回収すべきものは手に入りました。それで、身柄の引渡しは予定通りでよろしいですか？」

「構わん。我々には価値がないからな。予定通り封印変更が進めば、姫柊雪菜以下元日本人はお渡しする」

「そうですか。では、予定通り事が運ぶのを期待しています」

表情を変えずに淡々と女は言う。

「元剣巫として、彼女達に思うところはあるのか？」

「いいえ」

女は答えた。

「顔見知りでもない？」

「顔は知っています。話をするほど歳が近いわけではありませんので、遠目に見たことがあるという程度です」

女はググケースを背負いなおし、ねめつけるような視線でアーロンを見た。

「暁零菜を取り逃がしたのは失策だったのでは？」

「そうかね」

「ご存知でしょう。あの吸血鬼にはハスタ・アウルムの黄金があります。凍結魔術に対するジョーカーになりえます」

「そうだな。それについては、すでに魔女共が動き出しているところだ。私の部下も向かっている。もともと、あの魔女は暁零菜を喰らうために参加したようなものだ」

「そうですか」

「信用ならんといった顔だな」

「計画に若干の遅れがあるのは事実です。効率を考えれば、子ども世代をより多く封じるべきでした。まあ、雲が出てきたという不運があるにしてもタイミングを見誤ったと言われても仕方ありません」

「辛らつだな。ああ、事実は事実として認めよう」

第四真祖に通じるほどの強力な封印術をホール全体に一瞬でかけるには、それだけ多くのエネルギーを必要とする。しかし、ここは暁の帝国内であり、そして竜脈は帝国が掌握している状態だ。利用できるエネルギー源は自ずと空に求めることになる。

星を利用した魔術は遥か古代から用いられている。凍結封印にも、星を利用した天候に左右される以上計画的な運用には不向きだった。

それをあえて計画に取り入れたのは、それ以外に手がなかったからである。

「そろそろ特区警備隊が動き始めるころだ。それを持って逃げるとなれば、参加者に成り代わることもできないだろう」

「ご心配なく」

そう言って、女は踵を返した。

女が扉を開けると、外から銃撃や爆発音が響いてくる。逃げ遅れた人達の悲鳴が耳に突き刺さる。

「無遠慮な女でしたね」

「闇から闇を渡り歩いた女だ。油断はならんぞ」

「獅子王機関の生き残りですか」

「あれは政府に拾われたからな。散り散りになった剣巫と剣巫候補生の中ではまだマシな人生だっただろう。もともと身寄りのない人間を集めて戦士に仕立てた組織出身だ。政府も表立って雇用はできんから、結局は裏家業以外に生きる道はなかったようだ」

日本政府子飼の退魔暗殺部隊が獅子王機関の実態だとアロンは思っている。実際、そのような活動をこなしていたのは事実だ。権力争いに敗れた組織の人間の末路の悲惨さはアロンとてよく知っている。とりわけ、表に出せない超法規的活動をしていた組織となればなおのこと。

もちろん、それはこれからの暁の帝国関係者にも言えることだ。

第四真祖がいなくなれば、この国は国としての体裁を失う。逃げ延びた姫は姫ではなくなり、真祖の力を分け与えられた血の従者達もそれぞれの引き取り先で相應の扱いを受けるだろう。アルディギア王国は騎士団主導の下で王政を管理する。ラ・フォリア女王は引き続き女王を続けてもらいつつ、復活するアルディギア王国の象徴として御輿とする。日本側はどう扱うつもりかは知らないが、暁の帝国の知識を欲しているはずだ。

強力すぎる封印術のせいではらくはアールロン達もホールには入れない。少しずつ封印を小規模化して、小分けにしていく作業が必要だ。

その時間を稼ぐために、護衛のために必要という名目で多数の兵器を持ち込んでくる。

さて、後は何人の姫が逃げ延びるか。関心があるとすれば、そこくらいか。



## 第四部 七話

あちらこちらで魔力が噴出している。魔術や眷獣が飛び交い、銃声が四方八方から響いてくる。静かな公園は、ほんの数分のうちに戦場へと様変わりした。

怒号や悲鳴が現場の混乱を如実に表している。敵味方の区別すらも、今は曖昧な状況なのではないだろうか。

森の中を零菜と萌葱は木々を掻き分けて走っていた。鬱蒼と生い茂る低木は身を隠すには十分だが、その一方で動きにくさを強制してくる。枝葉に引っ掛けてパーティドレスが裂け、肌から赤い液体が滲んでは傷が塞がっていく。

青白い魔力光。爆発的な魔術の作用で迎賓館の一部が凍結封印されたことは萌葱が監視カメラの映像を携帯で傍受してすぐに判明した。不意打ちとはいえ、古城や母親達が一瞬のうちに無力化されたのは最悪としか言いようがなかった。

不幸中の幸いなのは、比較的姉妹が難を逃れていたということだろうか。凍結したホールの映像からは、少なくとも麻夜、クロエ、空菜がホール内にいなかったことが確認できる。凧もいなかった。きっと、パーティの堅苦しい雰囲気嫌気が差

して、途中退席したのだろう。もしくはトイレにでも行っていたのかもしれない。

「零菜、そっちは？」

「大丈夫、だと思おう」

萌葱と零菜で木々の間から顔を出し、様子を窺う。

遊歩道をそのまま使うわけにはいかない。どこに敵が現れるか分からない。身を隠しながらの移動は、できるだけ道なき道を行くべきだと思った。

「ねえ、萌葱ちゃん」

「何？」

「古城君、とか。みんな、大丈夫かな」

不安げな声に萌葱はどう反応していいのか分からなかった。

「わたしが見た限りだと、封印術だから直接の危害はないはず。だけど、この後どうなるかは分からないわね」

考えたくない末路が脳裏を過ぎる。

不安で息が上がりそう。頭に血が上っているのに、顔面からは血の気が引いていく感覚。いっそ、これが夢で、ここで眠れば朝にはまた自宅のベッドの上だった

なんてことにならないかと本気で思ってしまう。

木陰に身を潜めて、魔力の流れを探る。

自分達の気配を隠すことも忘れない。下手な魔術行使は相手に自分の居場所を報せる愚かな行為ではあるが、かといって何も隠蔽をしないわけにはいかないのだ。萌葱も零菜も吸血鬼。その身体には、人間では扱えないほどの魔力が宿っている。つまり、魔力を探られればすぐに居場所が知られてしまう。魔術的な隠蔽は必要不可欠だった。

「ほんと、誰がこんな酷いこと……意味分かんないよ」

「……そうね。とにかく、今は逃げ延びないと。古城君達が狙われたんだから、わたしたちだってほっといてはもらえないでしょ」

零菜が身じろぎした。

萌葱以上に、零菜のほうに不安が強そうだ。

本当に土壇場で弱い。萌葱は内心で苦笑する。こんな風に弱気になってしまう零菜でも、追い込まれてからの爆発力は姉妹でも随一。眷獣の特異性もあって、高い実力を持っているのだ。萌葱は自分の能力よりも、零菜の実力のほうが頼もしいと

思えている。

零菜がいるから自分は平静を保っている。それを、萌葱は実感した。妹の前で取り乱すことはできないと自戒する。

生垣の後ろから頭を出して、萌葱は前方を確認した。敵が何者なのかはある程度萌葱は把握している。一箇所に落ち着くことができれば、敵側の氏素性をすべて解き明かすのも不可能ではないが、今はその余裕がない。

分かっていることは「アルディギアの騎士には注意すること」と「特区警備隊は味方である」の二点だけだ。

敵の姿が見えないことを見て取って、萌葱は走り出そうとする。この先の区画は特区警備隊の受け持ちだ。そこまで行けば、一応全体の把握ができるかと踏んだ。

「萌葱ちゃん！」

生垣を越えた萌葱に零菜が焦ったような声をかけた。何事かと思う前に、身体がぶれた。

「あ……」

地面が目の前に迫っている。足がもつれて無様に転んだのだ。とっさに手で顔を

守ったが、打ちつけた肘と膝が痛い。いや、それどころではなかった。右の膝から感じるのは、地面に打ちつけたのとは比較にならないほどの激痛だった。

「あ、ああ——、あ」

それは最早灼熱とも言うべきものであって、萌葱の脳を一瞬にしてスパークさせた。遅れて届いた銃声も萌葱の耳には届かない。

「萌葱ちゃん！」

「零菜、来ちゃ、ダメ！」

バチ、と萌葱から紫電が走り、零菜の前で弾けた。

「萌葱ちゃん!？」

「あんたは先に逃げなさい」

「何言ってるの!? そんなことできるわけない!？」

「わがまま言わない! あんたがいないと古城君が助けられないじゃないの!」

萌葱は渾身の力で怒鳴りつけた。

膝は血まみれで、起き上がることもできない。

だが、そんな状態にあっても敵の狙いを萌葱は理解していた。萌葱を助けるため

に見晴らしの良い場所に駆けつけてくる零菜が本命だ。動けない萌葱なら、いつでも料理できる。だから、こうして生かされている。零菜の霊視力なら狙撃にも対応できるかもしれないが、それは萌葱という重荷を背負った状態では難しい。その一方で、零菜一人ならば、いくらでも逃げることは可能だ。なにせ、彼女には転移の眷獣がある。完全に制御できていないとはいえ、戦場からの離脱くらいは可能なのだ。

「早く行って……逃げてよ、お願いだから」

「萌葱、ちゃん……」

人の声が近付いてくる。

銃や何か分からない大きな機材を引き連れた五人ばかりの一団だった。装備と見た目から考えて、アルディギアの騎士なのは間違いない。

「早く逃げて、助けを呼びなさい。それ以外に、みんなが助かる方法はないの」  
諭すような言い方に零菜は涙し、唇を噛んだ。

多勢に無勢。たとえ、零菜がどれだけ戦闘能力に秀でていようと、プロの武装集団を相手に大立ち回りできるほど強いわけではない。槍ハスタ・アウルムの黄金が事態を打開する

ために必要な切り札なのは敵も理解しているはずだ。優先的に零菜を狙うだろう。それは避けなければならぬ。

「あんたの命の張りどころはここじゃないわ」

「……萌葱、ちゃん。……ごめん」

そう言い残して、零菜は消えた。

転移の眷獣。エクリプティカ・サフィルス天球の蒼を使ったのだ。さて、零菜が転移の能力を使えること

は、あまり知られてはいない。きつと、相手はいまだに零菜が茂みの中に潜んでいると思っっているだろう。そうあってくれれば助かる。そうでなければ、——まあ、構わない。萌葱は萌葱なりのやり方でこの状況を打開すればいいのだから。

零菜とやり取りをしている間に足は動くようになってきた。骨と筋の修復が終わって見た目までは治っていないものの内側はそこそこだ。痛みを堪えれば立ち上がることはできる。萌葱は歯を食い縛って立ち上がった。こんなに痛い思いをしたのは初めてだ。萌葱は基本的に怪我をするような経験をしたことがなかったからだ。尻はこんな痛みを何度も繰り返していたのか。

駆けつけてきたアルディギアの騎士は萌葱から十メートルほどの距離を取って立

ち止まった。

銀色の鎧に身を包む前時代的な格好が、やけに板についている。彼等の後ろに大きな鉄の塊が置かれている。梵鐘にタイヤをつけたような奇妙な鉄塊だ。何かしらの兵器。萌葱はそう感じた。

「暁萌葱だな」

先頭の男が銃口を突きつけながら声をかけてきた。

銃火器に詳しくない萌葱だが、これはフルオート射撃を可能とする凶悪なサブマシンガンであるという程度のことは理解できている。たとえただの弾丸であっても、萌葱の回復力と生命力を奪い去るくらいは簡単だろう。

「鎧と銃って意外に似合うのね。何ていうかロボットアニメみたいだわ」

「君にはこれから、我々と共に来てもらうことになる。無駄な抵抗はせず、魔力の封印を受け入れれば命までは奪わない」

「断わったら？」

「抵抗できないように手足から撃ち抜いていく。繰り返すが余計な抵抗はしないほうがいい。君の出来の悪さは知っている。眷獣を満足に操れないどころか、傷の修

復にすら時間をかけるような半人前の吸血鬼が我々に抵抗などするべきではない」

「……………」

萌葱は男を睨み付ける。

銃口は一ミリたりともぶれない。こうして萌葱と話をしている間にも周囲の気配に気を配っているのが分かる。プロの攻魔師に命を狙われるのはさすがに初めてで、今すぐにも逃げ出したい。足は怪我とは別の原因で震えているし、腰が抜けるようなのも否定できない。それは、仕方のないことだ。萌葱はまだ十六歳。命のやり取りはテレビか小説の中の出来事だ。頭では分かっているけど、こんな状況に適切に対処なんてできるはずがないのだ。気丈に振る舞ってはいても、結局は一介の女子高生に過ぎない。

妹を逃がした時点で、萌葱の勇氣は打ち止めなのだ。

だから、これはただのやけくそ。

どうしたらいいのか分からないから、強気を演出しているだけなのだ。

萌葱が眷獸を使うことを警戒しているのか、男は銃口を向けたまま動こうとはしない。萌葱の眷獸が脆弱であると知っていても、やけになった吸血鬼が力を全方位

に解放すればそれなりの被害を受ける可能性はあるからだ。

「アマデウス。時間がない」

「そうだな」

背後の騎士に声をかけられて、萌葱を脅していた騎士——アマデウスが銃口を僅かに下ろした。

そして銃声。

容赦なく引き金は引かれ、放たれた銃弾は萌葱の太ももを掠めて地面を抉った。

「きゃ……!!」

足に感じた熱と銃撃されたことで萌葱はふらつき、尻餅をついた。

「何……」

しかし、驚いていたのはアマデウスも同じだった。

「どうした？」

「いや、なんでもない。今のは牽制だ。次は確実に撃ち抜く」

再び熱を帯びた銃口が萌葱に向けられる。

今は運よく弾が外れた。アマデウスの口振りだと、外したのは本当に偶然だった

らしい。だが、幸運はここまでだ。引き金が再び引き絞られ、銃声が響き渡る。そして、赤い液体が飛び散った。まるで、握りつぶしたトマトのようにあっさりとアマデウスの頭が吹き飛んだ。

「え……」

あまりの光景に萌葱は呆然とした。

アマデウスの同僚も同じだった。

突然、目の前で隊のリーダー格が頭を撃ち抜かれて死んだ。その事実には頭が真っ白になったのだろう。

「き、貴様、吸血鬼！ いったい、何をした!?!」

「し、知らない。わたしじゃない!?!」

「眷獣か、コイツの眷獣が何かしたのか!?!」

「化物め!?!」

萌葱の反論も聞かず、騎士たちが各々の武器を振り上げる。銃のほかにも巨大な斧を肩に担ぐ者もいる。

明確なまでの殺意を向けられて萌葱は身体を縮まらせる。

その瞬間、後ろにいた騎士の一人が銃を持った別の騎士に斧で斬りかかった。

「うぎゃあ！」

「あ、な……！」

斬り付けられた騎士は鎧の背中部分が割れて血が噴き出していた。血の付いた斧を握り締めて、騎士は顔を青褪めさせた。

「お前、何をしている!？」

「ち、違います。俺は、別に何も」

「ふざけるな、今になって裏切る気か!？」

「そうじゃない、違う。今のは、あ、ああ身体があ！」

ぶおんと風を切って、斧が横一文字に振るわれる。傍にいた騎士は咄嗟に自分の銃を盾にして防ぐが、衝撃を殺しきれずに後退した。

「コイツ、どうしたというのだ。——まさか、お前か。暁萌葱！」

「ち、ちが……」

騎士が引き金を引く。フルオート射撃の洗礼を浴びたのは、斧を振り回していた騎士だった。鎧に当たった銃弾が火花を散らして四方八方に飛び散る。アルディギ

ア製の退魔鎧はそう簡単には壊れない。だが、間接までは守れないらしい。当たった部位から血が出て、痛みに呻く。

「あああああああ！」

しかし、止まらない。

斧を振り回して暴れる騎士。その周りにいる四人の騎士もそれぞれが自分の身体を制御できずに殺し合いを始めていた。

銃を至近距離から撃ち合い、効かないとなれば籠手で固められた拳を握って殴りかかる。

「身体が、身体があ！」

「ねじれる、腕、腕があが」

「き、吸血鬼——貴様、貴様あ！」

殺し合いはすぐに終わりを迎えた。べきぼきと鈍い音を立てて、騎士たちがねじれていくのだ。仲間を討ち果たした者も、仲間討ち取られた者も等しく生死を問わず間接が逆方向に曲がっていく。

ごぼごぼと口から血を吐いて、真っ赤な海に沈んでいく四人の騎士。この惨状を

見なくて済んだのだから、最初に絶命したアマデウスは幸運だったかもしれない。流れてくる血が萌葱の靴を汚した。

「あ、ああああ……」

萌葱は後ずさりして現場から立ち去ろうとした。

腰が抜けて、何度も尻餅をついた。

「ああああああああああああああっ」

頭が真っ白になって、もう訳が分からなかった。

目の前で起きた凄惨な殺人に萌葱自身がパニックになっていたのだ。

危険だとか、ここが戦場だとかも気にならなかった。形振り構わず走り出した。とにかく遠くに行かなければならないという強迫観念にも似た衝動に突き動かされたのだ。

ただ全力で走ることしかできなかった。

やがて息が切れ、もう足が動かないくらいに疲れたところで立ち止まった萌葱は、思い切り胃の中の物を吐き出した。

ゲホゲホと咽て、最悪の気分のままに何度も戻した。

一緒に記憶まで外に出してしまいたかった。

「はあ、はあ……う……」

しゃがみこんだ萌葱は、そこで初めて近くに自動販売機があることに気が付いた。広い公園の中にはいくつも自動販売機があるが、戦場となった公園でも人工の明かりがあることに妙にほっとしてしまう。

「え……」

気のせいだろうか。

自動販売機の電気がチカチカと明滅するたびに、その明かりの中に人影が映っているような気がする。

まるで、ホラー映画のワンシーンのように、瞼に髪の毛の長い女の姿を焼き付けられている。

「何……」

「萌葱ちゃん、変わった眷獣を使うのね」

耳元で声をかけられた。

「な……」

反射的に飛び退いて、振り替えるが誰もいない。

ゾツとする。

何かが近くにいるのは分かるのに、何の気配も感じない。

ガチガチと音がする。

それが、自分の歯が奏でる音だと気付かない。

耳障りな音が不安を掻き立てる。

「誰……」

萌葱の問いは夜の暗闇に消えていく。

木の影や自動販売機の裏に何かがいるのではないか。

萌葱は足が地面に根付いてしまったかのように動けなくなった。

「誰なのよ。誰!? そこにいるんでしょ!?!」

怒鳴った萌葱の声に返事はない。

その代わりにクスクスと女の笑い声が聞こえてくる。

「萌葱ちゃん、そんな大きな声を出さなくてもちゃあんと聞こえているわよ」

姿は見えない。

だが、闇の中に確かに潜んでいる。

何かの魔術を使って姿を隠しているのは間違いない。残念ながら、萌葱の知識と技術では一流の魔術師の魔術を見破ることは難しい。

「うふふ、全部見てたわよ。あなたが、アルディギアの騎士様を虫けらを潰すみたいに殺すところ」

「……違う！ あれは、わたしがしたかったわけじゃない！ あんなのは、わたしは……！」

「そうかしら？ 本当に？ 本当は叩き潰したかったんじゃないの？ 思い上がった人間に、吸血鬼としての自分を叩きつけてみたかったんじゃないの？ 萌葱ちゃん。ねえ、本当のあなたはいったいどうしたいのかしらねえ」

「何が、言いたい……」

視線を彷徨わせて、萌葱は相手の出方を窺う。

敵の正体が分からない以上は後手に回るしかない。

だが、とても冷静にはなれそうになかった。

「あんた、本当に誰なのよ！ 目的は何？ わたしをどうしたいのよ!？」

「目的？ そんなの決まっているじゃないの。——わたしたちは、とっても美味しそうなお姫様を食べに来たんです。本当は零菜ちゃんを食べるつもりだったのだけれど、気が変わったわ。あなたの眷獣のほうがわたしたちの好みですもの」  
「な、に……」

ずりりと、何かが這う音が聞こえた。

視線を向けて、萌葱は小さく悲鳴を上げた。

右手の森の中から、大きなミミズのようなものが這い出てきたのはさすがに目を疑った。生理的に受け付けない化物だった。女子高生的に完全にアウトな代物だ。頭から尾の先までざっと十メートルはあるか。胴回りは直径二メートルほどで、ドラム缶を縦に並べたようになずんぐりとした身体だった。

「紹介するわ。わたしたちが契約する悪魔、ベルゼビュートちゃん。とっても可愛らしいでしょう。この子は吸血鬼が好物の変わり者でしてね、ええ、負の感情が強い子ほど相性がいいみたいなの」

ベルゼビュートの頭がぱっくりと割れる。

そこが口なのだ。萌葱は直感した。頭が割れて口が出るなんて、昔話の山姥のよ

うだと他人事のように思った。それだけ現実感がなかった。

ベルゼビュートの口から飛び出てきた無数の触手が萌葱の身体に巻きつく。

「ひう……!」

ねっとりとした触手のおぞましさに萌葱は声を上げることできない。

そのまま万力のような力で引き摺られて足からベルゼビュートの中に飲み込まれていく。

「い、いや、離して！ いやあ、こんな、ああ、助けて、やだやだ！ いやああ

ああああああ！」

萌葱の力では僅かな抵抗も許されない。

巨大なミミズに足から飲み込まれた萌葱は、悲鳴の残響を残して消えてしまう。

萌葱を取り込んだ分だけ身体を膨らませたベルゼビュートはすぐに形を変え始めた。どろりと溶けて、球形に膨らんでいく。

「あら、もう始まったの？」

「よほど相性がよかったですのね。わたしたちの見込みのとおり」

クシカとユリカ。彼女たちは二人で一人の魔女である。

本来は零菜を取り込む予定だった。しかし、零菜よりも萌葱のほうがベルゼビュートとの相性がいいと判断したのだ。アルディギア解放戦線の計画など、初めからどうでもいい。興味を持った相手を手に入れることができれば、それで十分。零菜よりも萌葱の力のほうが、彼女たちが好き勝手に遊びまわれると思ったからこそ対象を変えただけ。

まあ、それが後々どういった影響をもたらすのかは、魔女にとっては重要なことではないのだ。

## 第四部 八話

青い鎧が氷の欠片を散らしながら宙を舞った。

遅れて、強力な魔力の放射と熱風が吹き荒れる。鎧が冷気を発してくれなければ、全身が焼け爛れていたかもしれない。

「く……！」

迎賓館から直線距離にしておよそ百メートル。芝生が敷き詰められた広場の只中で、麻夜は汗と泥に身体を汚しながら、追っ手と相対していた。

魔女の子だからだろうか。麻夜は魔力の変動には聡い。父親と母親達が強力な封印術に囚われたことは肌で感覚で理解できた。すぐにでも助けに行きたかったが、自分一人では何もできない。一緒にいた空菜と共に窓から外に抜け出して特区警備隊の詰め所に向かっている最中にアルディギアの騎士団の襲撃を受けた。

足止めを引き受けてくれた空菜を残し、麻夜は助けを呼ぶためにひた走ったのだ。が、どこもかしこも戦場だった。公園内に散らばっている特区警備隊の詰め所も、ほぼ同時に敵の攻撃を受けていたのだ。助けを呼ぶどころか、麻夜が助けに入る必

要があるほどであった。

まだ未熟な麻夜にとつては、青の騎士ル・ブルーと白の騎士ル・ブランの二体の眷獣を同時に全力で運用するのは、体力的にも精神的にもかなりの負担となる。

麻夜は流れる汗を手の甲で拭い、迫る敵を見据えた。

燃える狼と岩石の蜘蛛、そして半透明な蠅螂。すべて、五メートルほどの大きさであり、間違いない吸血鬼が使役する眷獣だった。そして、その三体の眷獣の後ろにはアルディギアの騎士甲冑に身を包んだ兵士がいて、銃口を麻夜とその後ろにいる特区警備隊員に向けているのだ。

「麻夜様、後退しましょう！ 状況が悪すぎます！」

対魔族用の大楯を構えた隊員の一人が麻夜を庇うように前に立つ。

彼の額からも大量の血が流れている。銃弾が掠めたのか、それとも眷獣との戦いでついた傷なのか。

特区警備隊の装備と錬度ならば、外部の敵ならば如何様にも跳ね返せたことだろう。だが、よりにもよって内部からの裏切りがあるとは思っていなかった。特区警備隊の部隊の配置状況もすべて知られていたために、ほぼすべての部隊が後手に回

ることになってしまった。

それに輪をかけてこの眷獸召喚だ。

吸血鬼の姿が見えないのに、眷獸だけがここに存在している。

吼える炎の狼をル・ブルーの氷の壁が押し戻し、狼を押し退けるように迫ってきた岩石蜘蛛をル・ブランの大楯が受け止める。衝撃が再び四方に走り、麻夜は魔力が抜け落ちていく感覚に苦悶の表情を浮かべる。

「後退って言っても、どうやって？」

眼前にいるのは吸血鬼が最強種と呼ばれる由縁たる眷獸であり、銃火器による援護まである。

撤退しようにも、下手に動けば瞬く間に背中から食いつぶされ、撃ち抜かれるのは目に見えている。

麻夜だけならば、この戦場を離れることは不可能ではないかもしれない。特区警備隊の中でも何人かは逃げ切れるだろう。

だが、すでに何人もの怪我人が出てしまっているからには、彼等彼女等を見捨てて行くことはできない。

少なくとも、後方で防衛線が安定するまでは誰かが敵の眷獣を抑える役割を演じなければならぬ。

眷獣を使っているのが吸血鬼ならば、本体を狙えば済む話ではあった。しかし、本体が見えないとなると眷獣とまともに戦う必要が出てくる。厄介と言えば、それこそが厄介だった。

三体の眷獣を麻夜は二体の眷獣で押し留めている。それは麻夜の才覚がそれほど優秀だったということではあるが、長期戦が期待できる戦い方ではない。にも関わらず、守勢に回らなければならないというのは、麻夜の中に確実に焦りを蓄積させていた。

狼の眷獣が吐き出した炎の中に、蠓螂の眷獣が麻痺毒を乗せていたのだと気づいた時には膝が笑っていた。

「か、ふ……はっ」

膝に力が入らず、すっと尻餅をついてしまった。

「ぐ、卑怯な」

麻夜を銃弾から庇いながら、警備隊員もまた膝を突く。背後では数名が苦悶の表

情を浮かべてもがいている。

「や、ばい。クソ」

麻夜は身体の痺れが原因で魔力が上手く操れなくなっていることを自覚してしまった。そうなれば、眷獣の実体化にも悪影響が出る。ル・ブルーもル・ブランも敵の眷獣を支えるだけの力が残っていない。氷は炎に溶かされ、白亜の盾は蟻螂の鎌に溶断される。

「う、う……！」

眷獣が受けたダメージが麻夜にフィードバックされる。ガリガリと精神力を削られる感覚は、激しい吐き気や倦怠感となって麻夜を襲う。

その隙を狼が見逃すはずもなく、燃え盛る巨大な顎を開いて麻夜を飲み込まんよと迫る。当然ながら、回避する力はもう残っていない。

「せめて頭くらいは守ってください」

聞きなれた声が聞こえた直後、麻夜は言われたとおりに頭を抱えて伏せた。

爆弾が爆発するような巨大な音がして、熱と魔力が弾けた。

麻夜と狼の間に割って入った白い巨人が、その豪腕で狼の首根っこを握り締めて

いた。

「空菜、助かったよ」

「こちらこそ、遅れて申し訳ありません」

巨人の内部に潜む空菜の声はどこか反響して聞こえてくる。こんな時なのにいつもと変わらない口調に麻夜は小さく笑みを浮かべた。

「眷獣の相手はわたしがします」

「大丈夫かい？」

「わたしの眷獣は、こういった手合いには滅法強いので」

そう言うや握りしめた巨人の拳が狼の眷獣の喉を突き破った。何の抵抗も許さず、次の瞬間には狼の首と胴体は捻じ切られて、実体を保つことができずにあえなく消滅した。

魔力を吸収する巨人黄金ククリッスの腕ロソスを持つ者の両腕は、空菜のもう一体の眷獣刃シーカー・アルゲントウムの白銀と融合している。あらゆる魔力が、この拳の前には無意味。まさしく眷獣殺しの眷獣と言うに相応しい怪物であった。

敵対するアルディギアの騎士たちもこれは瞠目せざるを得なかったようだ。必死

に銃撃してくるが、その銃弾すらも強固な眷獣の身体を突破することはできない。蟻螂の眷獣を腕の一振りで薙ぎ払い、蜘蛛の眷獣を地面に叩き付けた。どちらも勝敗は一撃で決まった。眷獣同士の殴り合いに於いて、今の空菜と渡り合えるのは魔力無効化能力を有する零菜くらいのものだろうか。

「空菜様、助かりました」

背後の警備隊員が言う。蟻螂が倒れたことで毒が消えたのだろうか。立ち上がれるまでに回復していた。

「このまま前進するのは不味いですか」

「負傷者多数に加えて、相手の目的や勢力、装備、そして皇帝陛下を初めとする多くの各国要人の状況が不透明です。迂闊に敵地に飛び込めば、どのような結末を招くか分かりません」

現状が不透明なのは、どこも同じだろう。恐らく敵と繋がっていない限りは、今何がどうなっているのか説明することはできない。

公園全体が戦場となっているが、残存する兵力がどれくらいで敵勢力がどれくらいいて、事態を好転させるにはどの程度の戦力をどこに投入すればいいのか。そう

いった基本的な情報がまったく手元にない中での進軍は、あまりにも無謀と言うほかない。最悪なことに、こちらは国家を維持する核となる第四真祖とのその親族を丸ごと敵に奪われた状態なのだ。

「では、少しばかり公園を荒らします。その隙に撤退を」

空葉は地面に脊獣の腕を突き立てた。そのまま、地面を掘り起こすように腕を跳ね上げると、捲れ上がったアスファルトや土の塊などが騎士の頭上に降り注ぐ。

至極単純な物理攻撃ではあるが、人間が相手ならばこれだけでも十分すぎるほどの脅威にはなるのだ。

さらに黄金の腕を持つ者の右手はアスファルトを握り締め、敵に向けて投じた。銃弾よりも大きなアスファルトの礫が散弾のように撒き散らされる。前方に味方がいないのを良い事に、何の容赦もなく黒い弾丸はぶちまけられた。

「め、目茶苦茶するな」

麻夜が呆れているのか非難しているのか、そういった感情が混ざり合った声で呟いた。

敵とはいえ人間。命には変わりない。戦場で軽々しく命のやり取りができるの

は、相応の経験を積み重ね、感性を鈍らせた生粋の兵士くらいだ。あるいは空菜のように、初めから軍用として作り出された感情を知らないホームクルスなどだろう。まっとうな近代国家の価値観で育った麻夜にとっては、目の前で人命が損なわれるのは何にしても現実感がなく、当然ながら気分の良いものではなかった。

「何はともあれ撤退を。どこに逃げても戦場には変わらないでしょうが」

麻夜と特区警備隊員達にそう告げた空菜は、一仕事を終えたとばかりに吐息を漏らした。



凧はクロエと一緒に特区警備隊の設備見学をしている最中に、事件を知った。

第四真相とその妃達が纏めて凍結封印を受けるなど、ありえないと断言できるくらいに非現実的だったので、何かの間違いだろうと思っていた。

しかし、飛び交う情報はどれも凧の期待を打ち砕くものばかりであり、状況が刻

一刻と悪化しているということだけがはっきりと理解できた。

クロエは焦燥に駆られた表情で丸イスに腰掛けている。背後に佇む護衛のアレックスもまた、落ち着かない様子だ。両親が敵の手に落ちたというだけではない。クロエにとっては、父の国とはいえここは異国である。

凧はクロエの様子を気にかけてつ、この場を預かる先輩に話しかけた。

「吉岡さん、どうなっているんですか？」

「さあな。ホントか嘘か分からないが、悪い報せばかりが飛び込んでくる。はっきりしていることは迎賓館が敵の手に落ちていることとその近くにあったうちの陣地は軒並みやられちゃったってことだな」

「そんな……」

「ここもさっさと引き上げないと全滅だ。ここにあるのは監視装置ばっかだしな。十人ちよつとでこの場を維持するなんざ土台無理な話だ。他んこと合流して立て直さないといけない」

残念ながら、吉岡が指揮する部隊は戦闘を目的に配置されたわけではない。

不審者の侵入を逸早く察知して、警報を発するための部隊であり装備そのものも

戦争に対応できるような大仰なものではない。

一般的な獣人ならば一人か二人までならば対応できるだろう。しかし、眷獸やアルディギア製の兵器まで投入されているとなれば話は変わってくる。

「相手はアルディギア解放戦線ってところでしょか」

「個人的にはその可能性もアリだろうとは思ってるけどな。証拠がない。ただのクーデターかもしれん。どっちにしても俺達からすればテロ以外の何物でもない」  
憎憎しげに吉岡信二は呟く。

暁の帝国は新興国家ではあるが若い世代にとっては疑いの余地なく祖国である。愛国心教育をしているというわけではないにしても、そこにあるのが当たり前で育ってきた国を根幹から揺るがそうとしている敵に対して敵意を隠しきれない様子だ。それは、もちろん凧も同じである。曲りなりにも暁の血を引いている。親族に手を出されて憤らないなどということはありえない。

凧が比較的冷静なのは、ただ単に状況を飲み込みきれていないからでしかないの  
だろう。

「分かっているのは、やらかしたのはアルディギアの一部の奴等だったことだ」

それは、とりわけクロエにとってはショッキングな内容だった。まさか、と思っただろう。信じたくないと目を瞑り、唇を噛み締める。

「クロエ様」

アレックスがクロエの肩に手を置いた。

「すまない、アレックス」

悄然としたクロエに信二が近付いていく。

「クロエ姫、申し訳ありませんがすぐにここを発たなければなりません。車が通れる道はすべて戦場となっています。草木を掻き分けながら走るようになりますが、よろしいですか？」

「わたしは構いません。……こんなことになってしまって、申し訳ない」

「謝罪の必要はありません。悪いのはあっちであって、クロエ姫ではありません」  
淡々とした口調で信二はクロエに言う。

その他十数人の隊員が各々武器を持って、周囲に警戒の視線を走らせている。  
クロエが立ち上がったとき、テントの中に警報が鳴り響く。

「吉岡さん！」

その警報の意味を知る誰かが叫んだ。時間的にも、それが限界だった。迎賓館屋上から放たれたロケット弾がテントを強襲したからだ。

爆風がテントを燃やし、衝撃に皆が動転した。けれど、被害は軽微。咄嗟に未来を先読みした凧が金剛の盾でロケット弾を爆風ごと弾き返したからだ。

「兄さん！」

クロエが叫ぶ。

「大丈夫！」

ロケット弾を受け止めたのは初めてだったが、こんな弾き方をするのかと凧は意外な発見をしてしまった。やはり銃弾などと違ってロケット弾の場合は爆発しないまま跳ね返すことはできないらしい。その代わり、爆風を反射する形で防御することになる。爆炎は相手までは届かないが、防げるのを確認できただけでも収穫だろうか。

「助かったぞ、凧！」

「とにかく、ここは不味いです。見晴らしが良すぎる」

「ああ。おい、さっさと撤退だ。とりあえず、後ろの再生林まで走れ」

最低限の機材と武器を持って、一斉に撤退を開始する。

木々の間に身を隠せば、遠距離からの火力支援は当面は防げるだろう。適当に撃ちまくってくればその限りではないにせよ、正確に狙われるということとはなくなる。走りながら、吉岡が叫ぶ。

「凧、次来るぞ！ 何とかしろ！」

「無茶振りですよ、それ！」

背後から迫るのは五発の光。それが、正確にこちらに向かって飛んで来るのだ。赤外線なのか魔力や霊力なのか。ロケット弾ではなく誘導弾のようだ。

「頼む！」

凧は魔力を搾り出し、タイニアウルム小さな黄金を召喚した。命令などしない。雷光の豹は自分で判断して飛来する誘導弾を瞬時に食い破った。五つの爆発音が背中を押す。

「雷ってのは便利だな！」

「そんな簡単なもんじゃないですからね！」

加減しているとはいえ、自前の魔力で眷獣を使うのは激しい疲労を凧にもたらす。金剛の盾を召喚した右腕は出血で赤く染まっているだろう。

「ふおおおおおおおおおおッ」

何ものかの咆哮が響き、空から強力な魔力が落ちてくる。

「散開！」

信二が叫ぶ。

落下してきた何かから逃れるように、一同はバラバラに散った。地響きを立てて着地したのは、身の丈三メートル余りの人型の眷獣だった。筋骨隆々で、全身が筋肉で作られているのではないかというくらいであり、右手には武器として身長よりも大きな棒を持っていた。それもまた丸太のように太い。

「昔話に出てくる鬼って感じだな」

「眷獣ですけどね」

警戒しながら距離を取る風達。鬼の眷獣は、ぐるりと周囲を見渡してある一点——クロエを見つけると喉を裂かんばかりに叫び声を上げて飛び掛った。

「いかん！」

信二が咄嗟に宙にいる鬼に手榴弾を投げつけた。空中で炸裂した手榴弾からは封入された霊力が撒き散らされて鬼の身体を激しく揺さぶる。

「おおおおおおおッ」

バランスを崩した鬼が地上に落ちる。

そこに、特区警備隊員の一齐射撃が加えられた。魔族に対して絶大な効力を発揮する魔弾であり、眷獣に対しても魔力の結合を弱らせることで効果を発揮する。

だが、この鬼はそう簡単には膝を突かない。

金棒の一振りには途方もない突風を生み出して、ゴミでも払うかのように特区警備隊の抵抗を跳ね返す。

さらに、鬼はクロエとアレックスに対しても金棒を振るった。鉄槌もかくやとばかりの豪風がクロエとアレックスの二人に叩きつけられる。

クロエは目に見えない魔力の塊に対して、背負っていた竹刀袋を突き立てる。

「ぬう、あああああああ！」

竹刀袋が内側から溢れるエネルギーに耐えかねて破れていく。

現れたのは一振りの槍だった。飾り気のない棒の先に刃を取り付けただけの無骨な槍だが、その穂先は白銀の輝きを振り撒いて、鬼の魔力を散らしていくではないか。

振り上げた槍はそのまま莫大な靈力の斬撃となって鬼の身体を打ち据える。

よろけた鬼にクロエが猛然と襲い掛かる。

炎の吐息を漏らし、鬼がクロエをひき潰そうと金棒を振り回した。一振り目を伏せて躲し、振り下ろされる金棒を飛び退いて避けた。その直後、戻すことなく真横を薙ぎ払うように振り回された金棒がクロエの腹部を直撃し、骨と筋肉が拉げられる響かせて小さな身体が宙を舞う。

「クロエッ」

凧が悲鳴を上げたときには勝敗は決していた。跳ね飛ばされたクロエが溶けるように消え、いつの間にか懐に潜りこんでいた白銀の少女の槍が鬼の喉笛を貫いていたのだ。

「ミステイルティーン！」

ぎゅるん、と鬼の身体が歪んだ。

白銀の穂先が光り輝き、その柄に至るまでが複雑な文様に彩られる。鬼を構成していた魔力が一瞬にして消滅し、上半身がこの世からかき消された。

まるで雪霞狼を食らった眷獣のようだった。

「クロエ、大丈夫か？」

駆け寄った風にもクロエは微笑んだ。

「何とか」

「でも、さっき殴り飛ばされたのは」

「あれはアレックスの幻術だ。ニンジャの変わり身というヤツだな」

「変わり身ってそういう技だったか」

どこかしらを勘違いしているようでもあるが、本人がそれでいいのならいいだろう。

クロエの槍は、眷獣が相手でも十分に通用する兵器らしい。さすがはアルディギアの技術力だ。魔族と戦うことに慣れていくだけのことはある。

「ほっとしている場合じゃありません。すぐに行きますよ。怪我人はいるか？  
いないな？ 走るぞー」

信二が銃を背負いなおして言った。

幸いなことに、眷獣の襲撃を受けても負傷者らしい負傷者はいなかった。

これならば、撤退にさしたる支障はない。

凧が異様な魔力を察したのは、そのときだった。数百メートル離れた場所から禍々しい魔力の塊が膨れ上がる感覚がする。

「兄さん……何これ。気持ち悪い」

クロエが顔を顰めている。彼女も、この異質極まりない魔力に悪寒を感じているようだ。

「吉岡さん、何かおかしい」

「ああ、みたいだな」

信二にすら感じられるほどの周囲の空気が変わっている。

その正体は、すぐに知れた。

森の向こうから立ち上がったのは、あまりにも巨大なシルエット。百メートルに届こうかという漆黒の怪物だったのだ。

「何だ、ありゃ」

さすがの信二も呆然とそれを見上げている。

「クロエ、知ってるか？」

「知らない。あんなものはうちの兵器にも存在しないはずだ。あれは——まる

で、そう、魔女と契約した悪魔だ」

悪魔と呼ばれた怪物はその形を整えていく。顔に当たる部分は鳥のように細く。腕は地面に届くくらいに長くなし、手の先端から肘の辺りまで鋭い突起で一繋がりになっている。その形状は、中世騎士が愛用したランスに酷似している。

悪魔が頤を持ち上げ、二つに裂けた顔——おそらくは口の部分から猛烈な鳴き声を放った。

---

君の名は。に浮気して遅くなってしまった。

## 第四部 九話

不意打ちによる指揮系統の混乱と、それに乗じた機動兵器の投入により、戦況はアルディギア解放戦線に優位な形で進んでいる。

とはいえ、それは一時的なものに過ぎないことは指揮官であるアロンもよく分かっている。ここはいわば敵国の中枢であり、逃げ場はない。第四真祖とその妃、娘達や各国要人を人質として確保しているのは、暁の帝国側の抵抗を可能な限り弱めるためである。

反乱を起こしたのは、この日のために仲間を引き込んでいた百二十七人の精鋭たち。それ以外のアルディギア要撃騎士は薬物や不意打ちその他諸々の手を使って無力化している。相手方と違って敵と味方は戦いが始まる前から分かっていた。部隊の配置も武器の配給もすべて任されていた立場にあるアロンにとって、要撃騎士達を無力化することほど容易いものはない。特区警備隊もよくやっていると見えて、身内からの裏切りに即座に対処できるほど戦力が整ってはいないと見える。

「無理からぬ話か」

もしも、自分が特区警備隊と同じ目にあえば、業腹ではあるが混乱はしよう。自分一人で立ち回れることはできるが、部隊全体の混乱を鎮めて敵に当たるとするのは困難を極めるだろう。

モニターに映し出されているのは凍結したホールの映像だ。パーティ会場は凍結封印直前の姿のまま、時間が停止している。その中で動けるのは、凍結封印の術式に対して対抗呪紋を施した特殊スーツを着用した者だけだ。それでも活動限界時間はほんの三分ばかり。それを越えると、マネキンのように固まった他の人々と同じく停止してしまう。

要人の一部をカプセルに入れて別の封印をかけ、ホールの外に持ち出すことで、各々移送を行うのが第二フェーズ。

この作戦はアルディギア解放戦線だけでは成し遂げられなかった。様々な裏工作に参加した多種多様な勢力への手土産が必要になる。例えば、妃のうち何人かは元々は日本人で獅子王機関に属していた。日本政府は彼女達の身柄を欲しており、この騒ぎに乗じて封印状態の彼女達を引き取ろうと潜水艦を派遣している手はずになっている。魔女どもも裏切り者を回収するなどと言っていたし、第四真祖の血縁

は軒並み貴重な研究対象として注目されている。

そう、アルディギア解放戦線の背後には複数の反魔族国家がついているのだ。彼等からの支援を今後も受け続けるために「我が身を犠牲にして」第四真祖を討ち、その血縁者を売り飛ばすのが目的だった。

端から生きて帰るつもりはない。

アルディギア解放戦線が、アルディギア王国を再興するための踏み台となることこそが目的であり、それが叶うのならば命など惜しくはない。

難関は二つある。

一つはすでにクリアした。この国の最高戦力を一瞬にして凍結するという無理難題はなんとか乗り越えた。後は、それぞれの組織に手土産を届けるだけだが、それがまた難しい。

「申し上げます！」

指揮所を構えた迎賓館の一室に、飛び込んできた部下は大層慌てているようだ。

「どうした、騒々しい」

「申し訳ありません。園内の人工林より巨大悪魔出現を確認しましたので、報告に

上がりました」

「ほう、そうか」

小さく笑みを浮かべたアローンは部下を一瞥してから下がるように伝えた。もちろん、最大限の警戒をするようにと下命した上でだ。

「ベルゼビュートを出したということは、吸血姫を取り込めたということか」

あの魔女二人組の悪魔は魔族を吸収し、その能力を我が物とする特殊な性質を持つ。吸血鬼を好んで捕食するのは、彼等が持つ無限の魔力を活用することと眷獣の強さによるものだろう。

これで、吸血姫一人分の戦力を敵から削り取れたことになる。

若い吸血鬼など、恐れる必要はないと声高らかに吹聴するもののやはり眷獣というのは危険な力である。可能な限り削っておきたいところであり、同時に利用できるのならば利用したい。それができるだけの力をアルディギアは持っている。

と、その時だった。

迎賓館を揺るがす大きな振動が襲ってきたのだ。

「何……」

何事かと思えば、室内に設置された複数のモニターがノイズだらけになってしまった。デジタル時計は点滅し、その度に異なる数字を表示する。無線も携帯もすべて使い物にならなくなった。

「何だ、これは？ 何が起こっている？」

異常事態にもアーンは硬直しなかった。計器の異常の原因を突き止める必要がある、修理するには部下に声をかけなければならぬ。しかし、無線機も携帯も使えないとなれば直接声をかけに行くか使い魔を飛ばすしかないだろう。そこまで考えた時、部屋のドアが何者かに破られた。

「ッ……！！」

ヒップホルスターから素早く拳銃を引き抜き、侵入者に銃口を向ける。

「何？」

さすがに驚かざるを得なかった。

現れたのは黄金の鎧を身にまとうアルディギアの騎士だった。それもアーン部の部下であり、それが三人だ。

「何のつもりだ？」

「違います。違うんです！ 隊長。俺は、そんなつもりじゃない。こんなことするつもりじゃないんです！」

「逃げてください、隊長！ どうか、離れて！ 身体が勝手に、鎧が！」

飛び込んできた三人の騎士は各々長剣や槍を装備している。時代遅れと罵る者もいるだろうが、アルディギアが誇る魔導技術の粋を結集した鎧は生半可な銃撃ではびくともしない。弾切れで使えなくなる銃火器よりも霊力を込めれば絶大な兵器に様変わりする剣や槍のほうが魔術戦では重宝することもあるのが実状だった。

魔族を討ち果たすために砥がれた刃が、今、自分に向けられている。

生身のアーロンでは対<sup>バ</sup>魔<sup>ツ</sup>族<sup>イ</sup>用<sup>ド</sup>強<sup>ス</sup>化<sup>ツ</sup>外<sup>ス</sup>骨<sup>ツ</sup>格<sup>ツ</sup>を装備した騎士を相手にするには分が悪い。

「隊長！」

騎士が悲鳴を上げる。

彼は言葉とは裏腹に長剣を振り上げてアーロンに斬りかかっていた。体内より組み上げられた霊力が増幅され、刀身を淡く輝かせる。

分厚い鉄板すらも滑らかに斬り捨てる鋭い聖剣をアーロンは飛び退いて掻い潜

る。

「破ッ」

振り回される剣を避けたアーンはするりと騎士の懐に入り込み、掌底を放った。同時に霊力が砲弾のように射出され、騎士の身体を跳ね飛ばして壁にめり込ませた。

「後二人か……」

「隊長……」

上司の強さに驚きながらも、それでも身体を操られた騎士の顔には悲哀の色が濃い。キリキリと音を立てながら、壁に叩きつけられた騎士が起き上がった。

「うぐ、ごふ」

咳き込みながらも彼は生きている。強化外骨格がアーンの掌底の威力を大きく減衰したからだ。

「やはり、そう簡単にはいかないか」

何者かに身体を操られているというよりは、身に纏った鎧が勝手に動いているという状態だろう。

彼等を解放するには鎧を破壊するしかないが、素手と拳銃しか装備がない以上は不可能だ。

『ハロー、ハロー、そこにおりますわね、破魔の騎士さん。わたしです。クシカですわ』

ザリザリと耳障りなノイズを混ぜ込み、より一層耳障りな甘ったるい声が無線機から聞こえてきた。

『うふふ、とつても素敵なおサプライズパーティーになりましたわね。どうですか？

自分の部下に罠り殺しにされる気分は？ お返事してくれてもいいのですよ。そちらの声もわたしの下に届いておりますので』

「どういふつもりだ、と聞くのは無意味か。我等と手を切って暁の帝国と結んだか？」

『まさか。そんなつまらないことはしませんわ。ただ、あなた方と手を組む必要性がなくなったというだけ』

「……我々の手を借りず、敵軍と事を構えると？ 思上がったな、魔女め」

部下が繰り出す槍と剣に斬り付けられながら、アーロンは致命傷を避け続けている

る。歴戦の技が、強化されただけの技術のない部下の攻撃から身を守らせているのだ。

『あなた方の手を借りる必要はありませんが、あなた方は戦力として勘定していませんのよ。ほら、騎士さんだってこの通り貴重な戦力。ああ、でも、お命ばかりはいらないかもしれませんわね。先ほどから喚いてばかりで五月蠅いったら』

そんな言葉が無線機から聞こえてきた直後、部下の一人が長剣で自らの首を掻き切った。

「な……！」

その場の誰もが、言葉を失った。自分の首を斬り、大量の血を噴き出した彼自身も信じられないという表情を浮かべ、そしてそのまま生命活動を停止した。

しかし、彼は死んでも尚鎧が勝手に肉体を操り、アーロンを攻撃してくる。

「貴様ッ」

『うふふふ！ そう、そう。そうやって踊っていればいいの。どこまで持つか、高みの見物をさせてもらいますわ。わたしたちは素晴らしい力を手に入れた。今のわたしたちは世界を潰せる、支配できる。あなた方の兵器も人もとりあえずわたしが

管理してあげますわ。アルディギアも、そうですね。まるっといただいてしまいま  
しょうか。この眷獣——電子グレムリンの悪魔の力でね』



白銀の刃が振るわれると、赤黒い眷獣の姿が解れて消える。

「なるほど、これが雪霞狼の力」

機械的なフォルムの短槍をぐるりと回して、彼女は油断なく周囲を見回した。世  
界で唯一、魔力を完全に無効化する魔族殺しの槍は、かつて獅子王機関が実用化に  
成功し、暁の帝国に篡奪された日本の秘奥兵器であり、彼女の任務は不当に持ち出  
された雪霞狼の回収が第一である。

彼女——かつて劍巫候補生として活動していた雅みやびという女性は、大した感慨  
もなく木陰に姿を隠した。

状況が変わったということは肌で感じている。

遠目に見るアルディギア騎士の様子がおかしい。特区警備隊の面々も困惑している。どうも、武器が何者かに乗っ取られたらしいのだ。

おそらくは、あの魔女姉妹の差し金だろう。

見上げんばかりの巨大な悪魔。その身体から不可思議な魔力が放射されているようだ。雅は雪霞狼の能力で悪魔の干渉を遮断しているが、雅だけの特権というべきだろう。他の者達は尽くあの悪魔の能力に当てられている。

「誰を食ったんでしょかね。暁零菜に、あのような能力はなかったはずですが」となれば、逃げ延びた姫の誰かか或いは特区警備隊に属してこの公園にいた吸血鬼か。もしかしたら吸血鬼以外の魔族なのかもしれない。

雅には関係ないことで、白銀の突撃槍と共にこの国を脱することが何よりも重要だ。姿を見せるたびに能力を変化させる節操のない悪魔の情報など、収集しても何にもならないだろう。

「わたしは相手をするつもりはないというのに」

伏せたところを銃撃された。

魔女の大半は信用ならない。欲望を満たすために悪魔に魂を売った者どもだ。初めから味方だとは思っていないが、このように戦う必要のない相手にまで喧嘩を売ってくるとは、長期的な視点を持たない、刹那的な快樂主義者の何と面倒くさいことだろうか。

現れたのは人ではなく、小型の自動兵器である。四足歩行の蜘蛛のような外観で、背丈は一メートルばかりしかない。背中に積んだ砲塔には一挺の機関砲があり、その弾丸一発だけで人間の上半身を粉々に吹き飛ばせるだろう。

雅は厄介かと、舌打ちをする。

彼女が持つ雪霞狼は、魔力に対しては絶大な効力を発揮するが物理攻撃に対してはただの槍でしかなく銃撃を防ぐことはできない。

しかし、劍巫としての彼女の経験と霊眼が攻略手段を教えてくれる。

悪魔の力に汚染された兵器——ならば、刃を当てれば無力化できるだろう。雅にとっても兵器にとっても一撃で勝敗が決まる。それだけ分かれば十分だった。

双子の魔女の姉クシカは、巨大な悪魔の肩に座って光り輝く夜の街並を俯瞰している。遠目からも十分に見えるだろう。このベルゼビュートの圧倒的な威容は。

足元に蠢く特区警備隊やアルディギアの退魔騎士どもなどもはや相手にならない。歩けば潰れる虫でしかないのだ。

ちょっとやそっとの銃撃ではビクともしないし、最新鋭の兵器は軒並みベルゼビュートの支配下に収まっている。もはや人間に勝ち目はなく、魔族であろうと敵ではない。

羽化したベルゼビュートは、六枚のトンボのような羽を広げ、二対の巨大な刃となった腕を掲げる。

「うん？」

クシカは首をかしげて、悪魔の横顔を見上げた。銀色を帯びた機械の鳥のような顔には感情らしいものはないが、霊的に繋がっているクシカにはベルゼビュートが

困惑しているのが分かる。

悪魔が方々に伸ばした見えざる感応の触手が阻まれているのだ。悪魔を中心に半径一キロあまりを覆う半球状の結界が、ベルゼビュートの能力を内側に封じ込めている。

「これは」

ベルゼビュートの周囲に展開した数十からなる魔法陣の包囲網に、クシカは目を細めた。魔法陣からは魔術で生み出された鎖が伸びて忽ちにして悪魔の巨体を絡め取ってしまう。巨体が災いしたか。四方八方から伸びる鎖から逃れることなどできなかつた。

「南宮那月ですか」

「貴様とは初対面のはずだがな」

憎憎しげに名前を呼ぶと、十代前半にも見える小さな少女が現れる。クシカの先達にして、恐怖の代名詞ともされる最強最悪の魔女。空隙の魔女と渾名される暁の帝国の最高戦力の一人だ。

現れた那月は、宙に浮かぶ魔法陣を足場にして浮かんでいる。空間制御に特化し

た彼女ならではの反則技だ。

「わたしたちであなたの名を知らない者はいませんでしょう。空隙の魔女」

「そうか、ならばこれから先、貴様達が向かう場所も知っているだろうな。そのデカブツを仕舞えとは言わんさ」

ベルゼビュートを拘束した太い鎖とは異なる、対人用の鎖がクシカに伸ばされた。拘束されれば一卷の終わり。魔女としての実力は那月には及ばないと自覚している。だが、それは平時での話である。

「わたしはどこにも行きませんわ。ええ、強いて言えばあなたが彼の世とやらに行くのではなくて？」

クシカの念を受けて、ベルゼビュートが吼えた。強靱な腕が膨れ上がり、力任せに那月の拘束を砕いてしまったのだ。

「やはり、無理をしていらっしやいますね、空隙の魔女。ベルゼビュートちゃんの力を押さえ込むこの結界、相当の負担と見ますが？」

那月の正体は理解している。ここで彼女を倒したところで、那月そのものを殺すことにはならないだろう。だが、意識をこちらに表出している器を壊せばそれなり

のダメージを与えることにはなるし、復活にも時間がかかるはずだ。結界の中での戦いは決してベルゼビュートとクシカの不利には働かない。那月を倒すのならば、今が好機だ。

悪魔の巨大な腕を、那月は転移で回避する。乱れに乱れた大気が、那月とクシカの髪を掻き揚げる。

「ところで、貴様は二人一組で行動する魔女だったはずだが、片割れはどこに行った？ まさか、戦争も序盤で脱落したわけではないだろう」

「ああ、ユリカのことですか。お気づきの通り、中にいます。萌葱ちゃんと一緒にね」

伸びてくる鎖を悪魔の腕で弾き返し、クシカは笑みを深めた。

「あの可愛いお姫様のこと、よほど気に入ったみたいですね。どんな風に壊そうか、ずっと考えていたみたいですからね」



どろりとした粘性を感じさせる空気の不快感。腐肉の臭い。何者かの呻き声。そうした劣悪な環境の中で萌葱は周囲に目を凝らした。自分がどこにいるのかはさっぱり分からない。息をするのも嫌だと言いたくなるような酷い臭いのする場所としか分からない。周囲は真っ暗で何も見えない。魔術を使おうとしても、魔力が上手く扱えないために闇夜を透視して様子を探ることもできないという状況だ。

自分の状態も芳しいとは言えない。手足が固定されており、身動きができないのだ。手枷と足枷が何か分からないが、生暖かいのがますます気持ち悪い。巨大な芋虫のような化物に飲み込まれたかと思えば、この場所に拘束されていた。とすれば、ここはあの化物の腹の中で、自分の手足はその肉の中に埋め込まれていると考えるのが一番しっくりくるのだが、信じたくはなかった。純粋に気持ち悪いとしか言いようがない。そのため、叫ぶこともせず、ほとんどしゃべることもなく呼吸すら最小限に抑えていた。

閉じ込められてからどれだけの時間が経過したのか、萌葱には分からなかった。完全な暗闇の中では時間の感覚すらも曖昧だ。だから、ぼんやりとした明かりでも

とても久しぶりに見たような気になってしまふ。それが敵の用意した光であつても、明かりというのは心を落ち着ける作用がある。

「酷い顔。ずいぶんと不機嫌そうですね、萌葱ちゃん」

水のりのような声だと思つた。やつて来たゴスロリの魔女は、見た目だけならば非常に愛らしい少女だ。外見は萌葱と同じくらいだろうが、実年齢は上だろう。もともと人間だつたとしても、魔女になつた時点で人間としての寿命には縛られない。契約した悪魔や本人の実力にもよるだろうが、外見年齢を取り繕うくらいは皆やつてゐることだ。

左右に宙に浮かぶ火の玉を引き連れて、魔女は妖艶な笑みを浮かべてゐる。

「自己紹介から始めましょうか。わたしはユリカ。このベルゼビュートちゃんの契約者であり、あなたの飼い主になる者よ」

ふてぶてしい魔女の発言を萌葱は黙殺する。

ただ彼女の様子を観察する。今の時点で萌葱が言葉にできることなど何もないからだ。しかし、ユリカのほうは萌葱の態度が気に入らなかつたと見える。目に見えて不快そうに顔を歪ませたのだ。

「ふふ、ずいぶんと余裕なのねお姫様。ここがどこだか、分かっています？」

「どこって、あの悪魔の腹の中とかそんなところでしょ。まさか、飲み込まれた後でこんなところに捕まるなんて思ってなかったけど」

「察しがイイのは、素晴らしいことですわ。でも、できればもっと愚鈍であって欲しかったところです。こういうことをあえて説明して差し上げるのも、愉しみの一つでしょう」

ユリカは萌葱のすぐ傍までやってくる。彼女が持ち込んだ明かりのおかげで、萌葱は自分が置かれている状況が目視で確認できた。

そこは赤黒い肉壁だった。四方のすべてが肉の壁で閉ざされた部屋で、萌葱は四肢の膝と肘までが壁の中に埋もれていた。

がっちり肉の中で固定されていて、身動きは取れそうもない。

「どういうつもりよ。こんなことして」

「どういうつもりとは？ あなたを捕まえたこと？ それとも、あなたのご両親を封印したこと？ 後者についてはわたしたちには関わりのない話なので詳しいことは存じません。前者については、まあ成り行き上ですわ」

「成り行き」

「ええ、だって本当は零菜ちゃんを狙っていたんですもの。でも、あなたのほうが美味しそうだったから」

「美味しそう、ですって」

ぞくりと萌葱は背筋を震わせた。ここが化物の体内であることも相俟って、一段と強い恐怖を覚える。

その萌葱を見て、目の前の魔女は顔を紅くして身体を振った。

「うふふ、そうそう。そうよお、いいわ。その顔、実にイイ。ぞくぞくする。怖いわよね。そうよねえ」

「何を言ってるのよ。別に、あんたなんて怖くないわ」

「ええ、知っているわよ。わたしじゃあない。でもベルゼビュートちゃんは怖いでしょう。具体的には、これから何をされるのか分からないことが怖い。隠しても無駄。わたしはあなたの感情を読み取ることができるし、記憶を覗くこともできる」

「な……嘘、そんなことができるわけ……」

「できますわ。だって、あなた。もう半分はベルゼビュートちゃんと溶け合ってい

るんだもの」

「え……」

萌葱は絶句してユリカを見た。

ユリカはますます笑みを濃くして萌葱の頬を撫でた。

「ベルゼビュートちゃん、あなたは魔族を取り込み、その力を我が物とする。ほら、周りをよく見てごらんさい。あなたの前任者たちの姿が見えるでしょう」

火に照らされた肉壁がもぞりと動いた。

まるで火の熱から逃れるように。そして、赤黒い肉壁の表面に時折目のようなものが浮かび上がっては消える。人の顔のようなものが見えるときもあった。

——この部屋は生きている。

生かされているのだ。ほかでもない、この悪魔と魔女に。

「一番最初の贄は、半世紀以上も前でしょね。わたしがこの子を受け継ぐ前から、生きた吸血鬼の肉壁は作られていたのですから。まあ、これをベルゼビュートちゃんに接続したのはわたしとクシカなのですけれどね。ほうら、萌葱ちゃん、融合が進んでいるわよ」

ずぶり、と萌葱の身体が僅かに壁の中に沈む。腕と足の先の感覚がないことに萌葱は初めて気が付いた。

「ひ、ひあ、や、やだ。いや、離して！ 離してよ！」

「くふふ、ダ・メ。萌葱ちゃんはこの肉壁の中で永遠に生き続ける。魔力と力をこの子に与え続ける装置になるの。それまでの間、たっぷり絶望して養分を蓄えてね」  
そう言って、ユリカは萌葱の唇を奪う。

「ん!? んんー……!!」

萌葱は目を白黒させ、ユリカのキスから逃れようともがくが完全に四肢の動きを奪われた状態では逃げようがない。ユリカの為すがままにされるしかない。

長いキスを終えてユリカが唇を離した。

「げほ、げほ、なに、すんのお」

「ファーストキスの相手が可愛い可愛い弟ちゃんじゃなくてごめんなさいね、萌葱ちゃん」

あくまでも萌葱を遊ぶのを楽しむかのように、ユリカは笑っている。

「何で……弟なんて」

「わたしはあなたの記憶も感情も読み取れると申しましたわよ？ 正確には従弟なんですわねえ。一つ年下で、一緒にいると血を吸いたくなってしまうのでしょうか。ええ、姉が弟に抱く感情としては少々情熱的に過ぎますわねえ」

「ッ……そんなじゃないわよ。勝手に人の気持ち語るなッ」

萌葱は食って掛かるように怒鳴った。しかし、身動きのできない萌葱では何を言ったところで相手の脅威にはならないだろう。危険な魔獣でさえ、鎖に繋ぎ、檻に閉じ込めてしまえば人に危害を加えることはできなくなる。まして、もともと戦闘能力のない萌葱では、五体満足であったとしても目の前の魔女に傷一つ付けられない。

クスクス笑う女に対して強い敵意を抱く。その敵意すら、ベルゼビュートを介して筒抜けになってしまっているのだろう。

すると、ユリカは虚空から氷の刃を作り出した。血液を凍らせたかのような赤黒い氷の杭を萌葱が埋め込まれている肉壁に突き刺した。

「あ、あああああああああッ!!」

肉壁が痛みに喚く。その痛みが萌葱にも届いた。

「い、痛い、ん、うあああ！ やめ、ああッ！ 痛い、痛いッ!!」

ユリカは舌なめずりをしながら、氷の杭をぐりぐりと肉壁に押し込み、左右に捻る。

「どこ？ どこが痛いのも葱ちゃん。答えて、ねえ」

肉壁はこれまで犠牲になった吸血鬼の血肉でできている。最悪なことに、不死の呪いも生きているようで、ユリカがつけた傷は瞬間に修復されていく。傷付けられても傷付けられても再生してしまうのだ。葱はユリカが刃物を振るうたびに新しい傷を付けられる。嗜虐的な笑みを顔に貼り付けた魔女は、痛みに悶え涙する少女になんら手心を加えない。

「い、ぐう……あ、あう……ぐ」

何度斬りつけられたのか。葱は自分の身体ではない場所が痛めつけられているのに、その痛みを直接感じなければならぬ。血はでないのに、傷付けられているという実感は明確にあった。

「あ、あう、あ……はあ、あ……」

ぜえぜえと荒く息を吐く葱は、ぐったりとしてユリカを見上げることまでできな

いでいた。声も出せないとばかりに、ただ喘ぐことしかできない。

そんな萌葱の頬にユリカは肉壁から引き抜いた杭を押し当てる。

「ひう……」

萌葱は恐怖に顔を引きつらせる。また、痛いことをされるのではないかという恐怖感が、萌葱の中で湧き上がる。

「可愛い可愛い萌葱ちゃん。こんなに痛いのは初めてだったわよねえ」

ねっとりとしたユリカの声が毒を帯びて萌葱の中に入ってくるかのようだった。

「あなたの弟ちゃんは、今までに何度もこんな痛みと戦ってきたのよね。眷獣を召喚するたびに、誰かのために戦うたびに……事あるごとに怪我をする困った弟ちゃん。そんな彼にあなたはどんなことを思ったかしら……ふふ、言い当てて見せましょうか」

ぞくり、とした。

背筋を蛇が這い上がるかのような忌避の感情に震える。

「あ……」

「怪我をした弟ちゃんに『もっと怪我をして欲しい』なんてことを思っていたので

はなくて？」

息が詰まりそうになる。ユリカの言葉はナイフで切り刻まれる痛みを上回る衝撃を萌葱に与えた。それは荒唐無稽な話などではなく、今まで表に出したことのない本心であったがために、萌葱にとってこの上ない弱所を貫くものとなったのだ。

「いろんな吸血鬼を食べてきたけれど、弟に対してこんなに歪んだ思いを抱く子は初めてでしてよ」

「違う」

「違わないでしょう」

「違うッ。そんなこと思ってない。そんな酷いこと、凧君に思わない。凧君はずっと頑張ってきたんだもの。それを見てきたから、だから、わたしは」

「応援してきた、知ってますわ。それはもう真剣に。他の妹ちゃんたちと同じくらい。いいえ、もっと大事に思ってきた。それは親愛であり友愛であり恋慕であり、そして姉弟愛でもありましたわね。『姉として』弟ちゃんを素直に心配できるのは、あなたにとっては重要なことですよものね」

「ッ——」

「だって、弟ちゃんだけはあなたよりも弱かった。いつも優秀すぎる妹ちゃん達に劣等感を抱いていたあなたにとって、唯一『必要とされていること』を実感できる相手だった」

「違う」

冷や汗が出る。呼吸が大きく乱れて、過呼吸になりそうだ。

「弟ちゃんの成長に、実は焦っていたでしょう。置いていかれたら、いよいよ後がなくなるものね」

「違う」

胸が痛い。見えないナイフで心臓を一突きにされたみたい。

「ああ、そういえば眷獣を使って怪我をするなんて未熟さにほっとしてしまいましたわね。まだ自分が上だと思えたのでしょうか。その怪我を姉らしく心配してあげるたびに自分の存在意義を確認できた……」

「違うって言うてるでしょ！ それ以上、余計なことをしゃべるな、この——  
あ、ぐ!？」

萌葱は急に全身に怖気が走った。それは、眩暈の前兆のような不快感だ。

「やっと回ってきましたわね。先ほどのベーゼの際にあなたに飲ませた魔女の秘薬」

「薬……?」

「ええ、あなたにはもっと絶望して、墜ちてもらわないといけませんもの。ベルゼビウトちゃんのためにね。ええ、もちろん、あなたの弟ちゃんもここに連れてきて差し上げますわ。実用化したプレイヤーなんて、わたしも見るのは初めてですもの」

「なに、言ってるのよ……わけの分らない、ことを……」

まるで酒に酔っているかのようなうづらうづらとして呂律が回らなくなる。そんな萌葱の耳元でユリカは囁く。

「プレイヤー……吸血鬼に血を吸われるためだけに作られた、憐れな生餌のことですわ」

それを萌葱が聞くことができたかどうかは定かではない。

萌葱は再び夢の中に落ちたのだ。

彼女が抱える闇の中へ。これまでの人生の中で、萌葱が抱いたあらゆる負の感情を直視する。そういう夢の世界へ彼女は落ちていくのである。





## 第四部 十話

那月が事態を把握した時、すでに古城もその妻達も封印された後だった。何をしているのだ、あの馬鹿共は、と教え子の不甲斐なさに苛立ちつつ、その安否の確認作業を急がせた。那月は暁の帝国における攻魔官の筆頭の一人である。こうした事態に率先して行動すべき立場にあり、指揮官として現場を纏める必要性もあった。那月が出るといふことはそれだけ余裕がないということでもある。

とりわけ、あの悪魔——ベルゼビュートが顔を出した時、いよいよ危機感に顔を歪めることになった。

「萌葱を取り込んだか。まずいことになった」

あまり知られていないがクシカとユリカ姉妹が契約しているベルゼビュートは、魔族を取り込みその力を我が物として振るうことのできる悪魔である。咄嗟に公園そのものを結界で閉じたのは、今回あの悪魔が取り込んだのが吸血姫の萌葱であるということ在即座に看破したからであった。

伊達に生まれた時から見守ってきていない。

那月は萌葱の眷獣の能力を知っているし、ベルゼビュートが彼女の力を完全に掌握するよりも早く公園の内側と外側を切り離すことに成功した。

とはいえ、これは姑息な手段に過ぎず、長持ちするわけではない上に大雑把に範圍を区切ったために那月の魔力を余計に注ぎ込んでしまっている。おかげで、格下のはずの魔女を相手に五分五分の戦いに持ち込まれてしまっているというのは屈辱以外のなにものでもなかった。

もっとも、那月の戦闘能力が落ち込んでいるのは何も結界のせいだけではないのだが。



凧は気がつくくと石造りの城館の中にいた。

飾り気のない石壁の部屋で、壁には鉄格子が嵌められている。さながら牢獄だ。

「うわ、監獄結界かよ」

凧はげんなりとして呟いた。

過去に何度かここにぶち込まれたことがあったので、見るだけで分かってしまう。この停滞した重苦しい空気感、記憶にある監獄結界そのものとまったく同質であった。

「うわ、とは何だ、馬鹿弟子」

「教官、いたんですね」

いつの間にか風の隣に現れた教官、もとい南宮那月が不快そうに睨みつけてくる。ここは那月の居城である。「うわ」などと言われればさすがに不愉快にもなるのか。

「てか、こんなことしてる場合じゃないんですけど！ クロエは!? みんなは!?

アルディギア解放戦線の連中は……あたっ」

取り乱した風の鳩尾を那月が閉じた扇の先端で突いたのだ。

「一々騒ぐな。状況は分かっている」

「教師が学生に手を上げていいんすか」

「わたしはお前が通う学校の教員ではないからな」

理不尽な答えに風は絶句する。

もちろん冗談でもなんでもなく、本気でそう言っているのだから始末に追えな

い。本当に教師かと疑いたくなくなってしまいうのも無理はないだろう。

「来い」

単的な命令。

有無を言わせぬ絶対的な強制力がある。

攻魔官の訓練を始めた頃から叩き込まれた弟子根性が問答無用で命令を実行させる。

ともすれば小学生にしか見えない外見のゴスロリ教師にへこへこするしかないとは何とも情けない、と傍から見れば思うかもしれないが、およそ暁の帝国内で彼女とまともに戦えるのは第四真祖くらいのものであろう。

監獄結界は那月の「本来」の居住地であると同時に多数の魔導犯罪者を収容する牢獄であり、脱出不可能の地獄である。出口も入口もないここは那月の夢が形作る異世界であり、物理的にはどこにも繋がっていない固有空間であった。

建物の構造も思ったように変化させられるらしいことを前に言っていた。今回、凧が囚われた部屋を出ると二十メートルくらいの石造りの薄暗い廊下があって、那月に先導されて突き当たりの部屋に入った。

そこは、比較的明るい部屋だった。印象も軽くなっている。石造りという点は変わらないが、生活空間といった感じだ。テーブルが部屋の中央に置かれ、シャンデリアが明るく室内を照らしている。

そして、テーブルには零菜、空菜、麻夜、クロエが座っていて、壁際にアスタルテが立っている。

「凧君！」

零菜がパツと顔を上げて嬉しそうに笑った。

「零菜。それにみんなも無事だった……のか」

零菜の姿を見て、凧は固まってしまった。

どうしたことなのか。零菜はふりふりの白黒服で着飾っていたのだ。ドレスとは相容れない、質素素朴ながら明瞭な主張をしてくる典型的なメイド服。

なるほど、零菜のような愛らしい少女がこれを着れば破壊力は自ずと激増するだろう。状況が状況でなければ、凧もやばかった。

「こ、この服は見ないで！ 全然、そうじゃないから！ 那月ちゃんが、これしかないって言うから！」

顔を紅くして、零菜は早口で捲くし立てた。

「ああ、うん、分かった」

恐らくだが、零菜の空間転移の眷獸を使ったのだろう。あれは、紗葵や那月の転移と異なり自分の身体しか転移させることができないらしい。よって、一度使うと裸になってしまうというこぞどという時にしか使えないあらゆる意味で諸刃の剣なのだという。凧は話に聞くだけで、一度も見たことはないのだが。

それでも、凧はほっと胸を撫で下ろした。

唐突なまでに始まった事件に翻弄されていたので、まったく情報が入っていない。分かっていることのほうがずっと少ない中で、零菜たちの安否が分かったのは朗報だった。

「あれ、紗葵とか紅葉姉さんとか萌葱姉さんとか……どうしたんだよ」

ざっと見回して人が足りないのはすぐに分かった。

尋ねられた零菜は言葉に詰まり、目を伏せた。

その意味を真正面から受け止められず、零菜を問い詰めるために凧は一步踏み出した。

「待て」

その風の腕を那月が掴んだ。

「那月ちゃん」

「ここに連れて来れたのはお前で最後だ。他の連中は……死んではいけない」

「死んでないって……」

「ここにいるのは、わたしの手で救出できる範囲で転移させた暁古城の血族だ。お前と一緒にいた他の連中は、皆後方に下がったから心配するな」

那月が睨み付けるように見上げてくる。

「まず、お前はどこまで今回の件を把握している？ 話はそこからだ」

どこまで把握していると問われれば、まったく把握していないと答えるほかない。強いて言えば、アルディギア解放戦線の手のものがアルディギア騎士団に紛れ込んでいたというくらいだろう。

だから、まずは那月が言うように互いの情報を出し合い状況の整理に努める必要があった。

その上で、状況が逼迫していることが如実に明らかになってくるといよいよ室内

の空気は悪化してしまふ。

那月はただ淡々と今分かっている状況を説明した。

両親が封印されたと聞いて、零菜たちは顔を真っ青にしてしまふ。凧も同じ気持ちだった。凧達にとって、第四真祖は絶対的な存在だったのだ。世界最強と謳われる強大な魔力と眷獣を使役する父とその血の従者達は、十人に満たない人数で一国を相手にして勝利することも可能とまで言われるほどの戦闘能力を有するこの国の最後の砦でもあった。それが、こんなにもあっさり覆されてしまふとは思ってもよらなかったし、那月が嘘をついている可能性のほうが高いとすら思えてしまふ。

アルディギア解放戦線が実際に活動しているところを目撃し、その襲撃を受けていなければ、那月の言葉であっても笑い飛ばしていただろう。

それだけ、今、この国で起きていることは非現実的なのだ。

「古城さんたちが封印されたなんて……」

だが、信じるよりほかにない。

あれだけの被害を目の当たりにして、ありもしない希望に縋ることなどできはしないのだから。

空間ごと封印してしまう大雑把な魔術は、しかし、強大な吸血鬼に対処するには、確かに有効な手ではある。むしろ、それ以外に真つ当な対処法など存在しないといったほうが正しいか。

ともあれ、今回の件は暁の帝国側にもアルディギア王国側にも大きな油断があったことは否めない。

「加害者」側であると同時に「被害者」側でもあるクロエなど、どう発言したものと顔青くして震えているほどだ。

「別にクロエが悪いわけじゃないぞ」

凧はクロエに声をかけた。

「そ、それでもアルディギアの兵にテロリストが入っていたのだ……わ、わたしは……」

ぎゅっと拳を握り締めるクロエは、唇を戦慄かせていた。

クロエが悪いわけではない。

それどころか、テロリストはクロエを優先的に排除しようとしているような動きを見せていた。ロケット弾を撃ち込んだり、眷獣をけしかけたりしたのはクロエが

いると分かっているやっただということ間違いない。つまり、彼等からすればクロエは自国の姫ではないという扱いだ。

そんなクロエに那月は容赦のない言葉を投げかける。

「そうだな、クロエ。あのテロリストにとって、お前は真っ先に始末したい要注意人物なのは間違いない。アルディギア解放戦線は、以前からそういう主張をしてきただろう。まさか、知らないわけではないだろうな」

「そ、それは……」

クロエは悲しげに俯いた。

クロエの敵は外国ではなく国内にこそ多い。アルディギア王国が抱える重要な問題の一つが「人種問題」であり、クロエは姫であると同時に差別的な感情を向けられる被差別対象でもあった。

そもそもアルディギア王国は人間の国であり、長らく隣接する第一真祖の帝国と戦い続けてきた人類の盾であり剣でもある退魔国家だった。北欧の小国ながら軍事力と霊能力に秀でたアルディギア王国は、人間社会から大きな期待と畏敬の念を向けられていたのだ。

それが、今の女王の代で大きく方針転換をした。

緩やかに人類と魔族が融和していたこの時代にあっても、王家が吸血鬼に血を取り入れるなど前代未聞。

そんな時代ではないと分かっているにしても、感情的に受け入れられない者も少なからずいたのだ。

経済的にも軍事的にも暁の帝国と結び付く利は確かに大きい。数字の面にも明確に現れていて、外交としては大成功と言える結果が出ている。

世界的にも聖域条約に批准している国々からは友好的に受け入れられていたし、アルディギア王国ほどの国がそこまで魔族を受け入れるのならばと、後に続く魔族との共存の礎となったのも事実である。

しかし、それでも受け入れられないという者はいる。

結果がどうこうではないのだ。

魔族と戦ってきたアルディギア王国の体制そのものへ忠誠を誓う愛国者たちが立ち上がり、反政府勢力となり、それらは漠然と今に不満を抱く若者を抱きこんで過激なテロ活動を展開し始めたのである。

そうした過程があるために、吸血鬼が自国の姫であるというのは目の上の瘤ではない。この世に生まれたその時から、常にクロエは狙われる立場にあった。

自分の国の民から——それがごく一部であったとしても——殺意に等しい悪意を投げかけられるということがどれだけ辛いことなのか。生憎と凧には見当もつかないことであった。

クロエが姫ではなく騎士として武芸と魔術にのめり込んでいるのも、もともとは戦闘能力がなければ身を守れないという危機感から始めたことだった。

「那月ちゃん、萌葱ちゃんは？」

零菜がイスから腰を浮かせて、那月に尋ねた。

「那月ちゃん。古城君とママ達が封印されたのは分かったよ……紗葵とか紅葉ちゃんも同じってことも……でも萌葱ちゃんは？　萌葱ちゃん、封印されたわけじゃないよね？　一緒に、途中までいたんだから」

零菜は途中から焦ったように早口になった。

「零菜と萌葱姉さんは、一緒だったのか？」

凧が尋ねると零菜は頷いた。

「うん。でも、途中で銃を持った騎士に追いつかれて……それで、わたしに転移して逃げろって……わたしじゃないと古城君、助けられないからって」

涙声になった零菜の瞳が涙で濡れる。

萌葱を置いて、自分だけ助かったという罪の意識に苛まれているのだ。

「萌葱は、暁古城を救い出すために、魔力無効化能力が必須だと分かっていたのだから。あれの眷獣なら、敵の計画くらい丸見えだろうからな」

那月はそう言いながら指を鳴らした。

すると、テーブルの真ん中に水晶玉を出現した。それも浮いている。夢の世界だからといって、ここまで何でもありだと笑えてくる。

宙に浮く水晶玉が発光し、その光が虚空に立体映像を形成する。

映し出されたのは、鳥のような頭を持つ巨大な怪物だった。

「何、これ。魔獣？」

麻夜の問いに答えられる者はいなかった。

凧はこれを目視で確認していたが、正体までは分かっていない。ただ、おぞましい何かとして言いようがなかった。

それが、何と那月と戦っているのである。

「那月ちゃん？ 何で？」

「騒ぐな。ただの分身だ」

ただの分身だと言われても実感できるものではない。こちらにいる那月も、あちらで戦っている那月もどちらも本物ではあるのだろう。空想と現実。夢を操る空際の魔女にとって、もはや肉体の現実性などあってないようなものなのかもしれない。分身と言うからには、本気の那月ほどには強くはないのだろうがそれでも那月は那月。魔族殺しとまで呼ばれた怪物的な強さの那月を相手に渡り合っているあの怪物は何なのか。

「あれは悪魔だ。名前はベルゼビュート。双子の魔女が契約するデカ物だ」

「悪魔……あれが？」

麻夜が信じられないとばかりに目を見開いた。

悪魔は吸血鬼の眷獣に匹敵する強力な霊的存在だ。

悪魔は人間と特殊な契約を結び、契約者に様々な恩恵を与える。その代わり、契約を違えればその時点で「罰則」が与えられることになる。

悪魔と契約した女性を特に魔女と呼び、那月や麻夜の母親がこれに該当する。

魔女の娘なので、麻夜は他の姉妹よりもずっと悪魔には詳しいつもりだった。だが、あれほどの巨体の悪魔など聞いたことがない。

「あれが悪魔だなんて、信じられない。あんな巨体、維持するだけでも人間の魔力じゃ追いつかないはずですよ」

悪魔は霊的存在であり、眷獣と同じく魔力で活動している。吸血鬼ならばまだしも、魔女は人間の範疇から出てはいないのだ。莫大な魔力を持つ魔女であっても、悪魔を全力で暴れさせるだけの素養を持っている者は多くない。

能力の低い魔女では悪魔の力を引き出しきれず、瞬く間に悪魔のほうに契約者の魔力を食い散らかしてしまうからだ。

麻夜が問うのは極めて根本的な問題だった。

百メートル近い巨大な悪魔を維持し、さらに那月と激しい戦闘ができるほどの燃料をどこから持ってきているのだろうかということだった。

「ベルゼビュートは極めて特殊な悪魔だ。おそらく、人工的に改造が施されているはずだが、あれは契約者の魔力を食わない」

「食わない？ 魔力を消費していないということですか？」

「契約者の魔力はな。ヤツの契約者、クシカとユリカの双子は自分達の魔力ではベルゼビュートを養えないと知って、燃料タンクを外部に求めたのだ。何か分かるか？」

すっと、那月は凧達を見回す。

まるで教師が生徒の挙手を促すかのように。

しかし、誰も答えない。口を開かず、微動だにしない。

「はあ……お前たちと同じだよ。ベルゼビュートは吸血鬼を取り込み、肥大化する。お前たち吸血鬼の魔力は無尽蔵だからな」

「な……じゃあ、あの悪魔は」

「吸血鬼を取り込んでいるな。あの巨体はそういうことだろう」

全員が言葉を失った。

吸血鬼は最強の魔族とまで称される強力な種族だ。当然、天敵らしい天敵は存在しない。それが、一方的に捕食される光景など想像したくはない。もちろん、凧以外は吸血鬼だ。自分たちがあの怪物に取り込まれてしまうのではないかと思うと悪

寒が走る。

「さて、ここからが本題だ」

那月は相変わらずの傲岸な表情で凧たちを見回す。

「今回、あれは誰を取り込み成長したのか。それが重要だろう」

ベルゼビュートが吸血鬼を取り込むことで肥大化する悪魔ならば、当然ながら被害にあった吸血鬼がいるはずだ。

テロによる封印を運よく逃れ、しかし、この場に辿り着けなかった吸血鬼。

「あ、まさか……」

零菜は喉が干上がったような声を出す。

脳裏に浮かんだ答えを必死に否定できる要素を探す。

しかし、その前に那月が頷いてしまった。

「あれの中に暁萌葱がいる。それは間違いない」

それはあまりにも残酷な宣告だった。

誰もが言葉を失った。

古城が封印されたというのも衝撃的ではあったが、それは同時に封印を解けば救出できるということを示していた。封印とは殺傷することができないからこそ選ばれる選択肢だ。つまり、命は保証されている。シヨッキングではあったが、最悪ではなかった。

しかし、萌葱が悪魔に取り込まれたという現実は、最悪以外のないものでもない。「も、萌葱ちゃんが、あの悪魔に？　でも、だって、さっきまで……那月ちゃん。そんな嘘、笑えないよ？」

零菜が笑顔を凍りつかせて、那月に言った。

「そうだぞ、教官。何だってそんな、こんな時に冗談キツイって」

那月の言葉を受け入れられないのは凧も同じだった。

零菜に続いて、凧は那月に言う。

冗談だと、いつもの冷淡な態度で言い放って欲しかった。

だが、那月は腕を組んだままため息をつく。

「ベルゼビュートの能力は、取り込んだ吸血鬼の眷獣を自分のものとして使うことだ。それが本来の能力かあるいは契約した魔女に弄られたからなのかは不明だが、

吸血鬼の無限の魔力を利用するから、魔女を始末しても召喚が途切れん。あれをどうにかするには、中から取り込まれた吸血鬼を助け出すか、もしくは吸血鬼ごと始末するかしかない」

零菜と凧の言葉を、那月は無視して話を進めた。

それは二人の問いに答える必要がないという言外の圧力となって、零菜と凧を黙らせた。

「あれが顕現してから、公園内の電子機器に異常が発生した。あらゆる銃器や計器類がまともに動かせなくなったのだ」

「それが、萌葱姉さんと関係あるってことですね。那月先生」

麻夜の問いに那月は頷く。

「お前たちは萌葱の眷獣のことは知っているだろう？」

「まあ、それなりには。でも、姉さんは、あまり人前で眷獣を使いたがらなかったから」

麻夜が口籠りながら言った。

凧と零菜は視線を交わし合った。実は那月が言うほど、萌葱の能力を知っていな

いのだ。萌葱の力が電気に関することであり、眷獣の大きさが抱えられる程度の小型であることくらいのものだ。攻撃性は非常に低い、後方支援型の眷獣であると聞いている。

凧達が知っていることなど萌葱の眷獣が、電子機器に干渉できるというくらいが関の山であろう。

「あれはな、確かに直接的な攻撃能力は低い。コンクリートの壁を壊すこともできないくらいで精々が焦げ目を入れるくらいだろう。だがな、今の時代にあつて萌葱の眷獣は決して無視できない。知られば、暗殺や誘拐の被害にあう可能性が極めて高くなり、敵の手に墜ちればその時点ですべてが終わる。そういうレベルの危険な眷獣だ。萌葱の口が重いのも、当然だろう。電子グレムリンの悪魔は、まさしく世界を支配する災厄の眷獣と言える」

淡々と説明する那月に答える者はいない。

萌葱が自分の眷獣について語ろうとしないのは、何か訳があるのだろうかとは思っていた。誰もが、そこに踏み込んだことは尋ねない。吸血鬼の間に敷かれた暗黙のルールである。眷獣は個々人のパーソナリティに関わる部分であり、重要な個人情報

報の一つである。軽々とその能力を他者に明かすことはできない。萌葱の場合は、周囲に危険視されることもあり、具体的な説明は姉妹にすらしていなかったのだ。

「萌葱姉さんの眷獣をあゝの悪魔は使えるようになった、ということですか？」

「そうだ」

「それで、例えばどんな危険があるんですか？」

「……あれの能力は電子機器への干渉。それを極限まで突き詰めたものだ。電気の眷獣ではなく、電気信号の眷獣だと思えばいい。電気が通る場所ならどこにでも現れて、あらゆるプログラムを自在に構築することができるというわけだ。究極のハッキングツール。あらゆる文明が萌葱の支配下になると言えば、危険性の高さは分かるだろう？ あれがその気になれば、世界中の電子機器を操れる。家電製品から兵器まで何でもありだ。当然、科学技術の塊であるこの国は真っ先に陥落するだろうし、その他の国々も同じだ。夜の帝国ドミニオンすら生活水準の根幹を科学に頼っている今の時代に、萌葱の力は致命的過ぎる毒になる」

電子機器に干渉する能力の凄まじさ。何よりも驚愕するのはその規模だ。まさか、世界を覆い尽くすほどの干渉力があるとは思ってもよらなかった。

だが、考えてみれば当然のことではあるのだ。

萌葱はただ座っているだけでいい。プログラムは眷獣が構築し、ネット回線などを使って狙った獲物に向けて飛ばせばいいのだ。座して世界を支配する女王の眷獣こそが、萌葱の眷獣の正体。

直接的な戦闘能力を持たない、という点で弱いと判断されがちだったが、強弱などという戦術的な眷獣ではなく、それ以前の戦略面で相手を圧倒する眷獣だったということだ。

これは確かに危険すぎる。

下手をすれば、聖域条約の前提すら崩しかねない眷獣だ。

人類が、科学技術の発展で魔族と対等に渡り合えるようになったからこそ聖域条約が結ばれたのだ。両者の力関係はつりあっていなければならない。第四真祖の出現と科学の王国である暁の帝国の建国から歪みが生じていた聖域条約に、萌葱の眷獣はさらなる歪を生みかねない。

萌葱の眷獣は敵対者を一国丸ごと中世レベルの生活水準にまで叩き落とす。それだけでなく、相手が保有する兵器の大半を支配できる。戦争をする前から結果が見

えてしまう。そんな危険な眷獣が存在すると知られたら、確かに萌葱の身は危険に曝されるだろう。

「政治的にも萌葱はこの国の安全保障上とてつもなく重要な存在だ。心情的にも救出を最優先にすべきだとは思う。が、それが困難だというのが現状だ。何せ、兵器が投入できん。アルディギアの反乱分子どももこちらの特区警備隊も最新鋭の武器の支配権を乗っ取られている。わたしが結界を張って影響を公園内に抑えているが、そちらに能力の大部分を割いているせいであの魔女ども拘束するだけの力が出せん」

忌々しいとばかりに那月は鼻を鳴らした。

それで「表」の那月が苦戦しているのだ。

本来ならば、一秒とかならず拘束できるほどの戦力差があるはずなのに、ベルゼビュートと戦っている那月の分身はやや劣勢に立たされているようにも見える。

「那月先生。萌葱さんの能力を那月先生の結界が抑えているということは、公園の外にある電子機器は影響を受けていないということですか？」

手を挙げた空菜の問いに那月は頷く。

「今のところはな」

「どれくらい持ちますか？」

「あの規模の境界を維持するとなると、三時間程度が限度だろう。戦闘を止めればさらに伸ばせるがな」

つまり、三時間以内に萌葱を救出し、ベルゼビュートを討ち果たさなければ暁の帝国はあの悪魔の支配下になってしまうということだ。いや、暁の帝国だけでない。これは、もはや世界の危機といっても過言ではないだろう。

「解決すべき問題は三つ。一つ、迎賓館に囚われている第四真祖らの救出。二つ、ベルゼビュートに取り込まれた萌葱の救出およびベルゼビュートと魔女の駆除。三つ、雪霞狼の捜索だ」

「え？ 雪霞狼？」

零菜が反応したのは、ここまで名前が挙がっていなかった彼女の母の武神具のことだった。

「雪霞狼が、どうしたの？」

「強奪された。少なくともお前の母の手元にはないだろう。あれば、凍結封印など

されなかったはずだからな」

「あ……」

確かにその通りだった。

魔力を無効化する雪霞狼は、所持しているだけでもおよそすべての魔術的干渉を打ち消してしまふ。雪菜が雪霞狼を持っていれば、その時点で凍結封印が無効化されていただろう。

「でも、じゃあ、どうして……」

「今日は各国の要人が集まるパーティだったのだぞ。いつものように武器を持ち歩けるわけがないだろう。部下に持たせていたはずだが、どこかで誰かと入れ替わったかあるいは部下が内通者だったか……監視カメラの映像があれば、すぐに分かるのだが、今はベルゼビュートの支配下だ。犯人は不明。だが、公園からは出ていない。雪霞狼を持ったままわたしの結界をすり抜けることは不可能だからな」

雪霞狼が結界に触れれば、その部分が打ち消されるので分かる。

那月は魔力無効化の影響が最小限になるように結界の術式を非常に複雑なものにしており、それも彼女への負担を強いる結果になっているようだ。

「さて、萌葱を救出するにしても曉古城達を救出するにしても、お前たちに出てもらわなければならん。特区警備隊の武装は旧式の電子装備を積んでいない武器しか持ちません。眷獣と魔術が頼りだ」

凧達は一樣に頷く。

科学がダメならば、旧時代の戦い方を採用するしかない。幸い、火薬と金属だけで構成される銃火器の類は使えるようなので、十分対抗する手段はあると思いたい。そして、やはり鍵を握るのは眷獣という生身で爆撃機並みの攻撃性能を有する吸血鬼の存在だろう。

とはいえ、敵には最新鋭の対魔族兵器があるのだ。決して楽な戦いになどならない。むしろ、命を落とす可能性すらあるのだ。

だが、やるしかないというのは、この場にいる全員が共有する思いだった。

「萌葱ちゃんが悪魔に囚われているのなら、わたしの槍の黄金で解放できるはずだし、わたしが……」

「ダメだ」

覚悟を決めた風の顔つきだった零菜は、那月に真正面から否定されて水をかけら

れたような顔をする。

「な、ど、どうして？」

「萌葱は捕まっているわけではない。悪魔の身体と半ば同化しているはずだ。お前の槍ならば、悪魔を消滅させることはできるだろうが、そのときは萌葱も一緒に消してしまうだろう」

「ッ……」

零菜は息を呑み、唇を噛んだ。

「打つ手はある。馬鹿弟子。お前が萌葱の救出に当たれ。この中では、唯一お前だけが事態を打開する手段を持っている」

「俺？」

凧は那月が何を言っているのか理解できず、呆然とした。

「いや、待ってくださいよ教官。萌葱姉さんはあの悪魔と同化してるんですよ？ 助け出すのなら、かなり特殊な魔術的手段が必要になる。俺はそんな魔術は使えないし、眷獣だって同じです」

「眷獣も魔術も必要ない。が、詳しい話は後にしよう。長くなるからな。まずは、

体力の回復が先だ」

そう言って、那月は零菜たちを見回した。

「お前たち、さっさとコイツの血を吸って力を蓄えておけ。これから厳しい戦いになる。疲れて動けないでは話にならないからな」

「え、!?」

凧だけでなく、急に話が飛び火した姫達が目を白黒させる。

コイツ、と指を指された凧は絶句している。

「あ、那月ちゃん!? ちょっと、急過ぎない!? いきなり吸血とか」

零菜が立ち上がって那月に抗議する。

「なら、そのメイドは吸わなくてもいい」

「え、いや、そういう意地悪なことはなんていうか……」

「ふん、万全を期して戦場に臨むのならば、それ相応の準備は必要だろう。「緊急事態」だ。気にするな。とりあえず、十分席を外しておいてやる」

言うや否や那月はその場から姿を消した。

ここは監獄結界。彼女の夢の世界だ。移動に足を使う必要が、そもそもないのだ。

取り残されたのは吸血姫と霊媒の少年。

最初に動き出したのは、空菜であった。やるべきことを的確に行うホムンクルスの本能もあって、躊躇なくイスに座る風の背後に回りこむ。

「おい、空菜」

「状況は那月先生の言ったとおりです。合理的に考えて、吸血行為は必要不可欠と考えます」

空菜は風の肩に両手を突いた。

「第四真相の救出には魔力無効化能力が必要ですが、それならわたしも持っています。そのエセメイドが日々出てくる必要はありません」

「な！」

じろりと意味深な視線を投げかけられた零菜が青筋を浮かべた。

エセメイドなのは事実だが、それでもカチンと来たのだろうか。

「あなたね、毎回毎回喧嘩吹っかけてきて……何？ そんなにわたしが嫌いなのです？」

「いえ、別に嫌いというわけじゃありません」

あっさりと空菜は否定し、凧の頭頂部に顎を乗せて背後から抱きつく姿勢を取った。

凧は背中に押し付けられる柔らかい感触に困惑しつつ、この妙な空気に口出しできないうでいた。

そうしている間に、零菜と空菜の間には冷戦もさながらの火花が散り始めていた。空菜は零菜の遺伝子を元にして製造されたクローンだ。遺伝子操作により、オリジナルの零菜とは異なる性質を多分に付与されているが、外見を決定する部分にはほとんど手がつけられていなかったらしく二卵性双生児のようにそっくりだった。そういった生い立ちのため、空菜は昏月家に引き取られた後も、零菜に対して挑発的な態度をしばしば取っている。

「じゃあ、何？」

「さあ？ 何ででしょう？」

はぐらかすような態度。しかし、これは嘘でもなんでもなく空菜自身が自覚していないので仕方がないことではあった。

対抗意識、あるいは嫉妬心であろうか。

空菜が言うように生まれて間もない彼女は、自分の感情に名前をつけて制御する術に疎い。

「まあまあ二人とも落ち着いて」

そこに割って入ったのは麻夜だった。

「喧嘩も煽りあいも意味がないよ。僕らにできることをするしかない。そうだろう？」

朗らかに。さっぱりとした口調が戦場さながらの空気を洗い清める。

「那月先生がせっかく席を外してくれたんだ。この時間に血を吸っておかないと、後で何を言われるか分かったもんじゃな。凧君も、それでいいかな？」

「そうだな……俺が血を提供するしかないもんな」

この中で人間は凧だけだ。

吸血鬼同士での吸血は、よほど特別な仲か敵対関係でもない限りはしない。「上書き」される危険があるためだ。

もちろん、上書きなしで吸血してもいいのだろうが、吸血鬼からの吸血を心情的に受け付けない吸血鬼も多いらしい。

「ほら、風君の許可が出たことだし……誰からする？」

零菜、空菜、麻夜、クロエ……四人の視線が交錯する。

血を吸うのは当然と思っている視線。どう答えたものかと探りを入れるような視線。そもそも考えが読めない視線。血を吸うとかいきなりすぎて混乱しているという視線。四者四様の心情で、各々が誰かが発言するのを待っていた。

## 第四部 十一話

凧を取り囲む四人の少女は互いに互いを見つめている。

凧の血を吸うことで、吸血鬼の力が大幅に増強される。そして、それが今後の戦いに必要不可欠であるというのは、確認するまでもない事実である。

とはいえ、血を吸うには大前提として牙を凧に突き立てるといふ行為が必要になる。注射器などで血を採るといふ手もないではないが、この際その手段は保留だ。吸血鬼としては、やはり生身から直接血を吸い出すのが一番なのだ。彼女たちに流れる魔の本能は、より鮮度の高い血を求める。脊獣も凧の血ならば大喜びで力を貸してくれることだろう。クロエ以外の三人は、凧の血を吸ったことがあり、当然その体内に巢食う脊獣もまた凧の血の味を覚えている。事ここに至って血を吸わないという選択肢はなく、脊獣たちもまた宿主を急きたてるように興奮している——  
——ように思われた。

しかし、それは本能の部分でのことだ。

彼女たちは年頃の娘であって、知性ある正統な吸血鬼である以上本能に身を任せ

て凧の血を啜るのは、やはり戸惑われた。各々程度が異なるものの、恥じらいがブレーキとなつているのである。

他人が見ている前で異性の首に噛み付くのはさすがに……という思いが彼女たちに一步を踏み出させない。それは逆に言えば人の目がなければ何かと理由をつけて噛み付いていたということでもあるのだが。

そんな張り詰めた空気の中で真っ先に動いたのは、やはり空菜だった。

彼女の人生経験は浅く恥じらいは少ない。やるべきことがはっきりしているのであれば、足踏みする理由がない。ホムンクルスであるがゆえに、決断に持ち込む私情は少ないのだ。

「あ、ああ！」

空菜が小さく抗議の声を上げるのを他所に、空菜は凧の首に牙を突き立てていた。空菜は凧に噛み付いたまま、じろりと空菜を見遣る。表情には表れないもの、どこか得意げで、勝ち誇ったかのような視線だ。そのように感じたのは空菜だけだったかもしれないが、とにかく空菜を挑発するかのような視線に、空菜は端整な顔を歪める。

「く、む……ぬう……風君。ちょっと顔、逆向けて」

ずんずんと風に歩み寄った零菜がそう言うのと、風の頭と肩に手を置いた。

「おい、零菜」

風は零菜がやろうとしていることを察したが、零菜にきつと睨まれて声を失う。空菜は後ろから風に噛み付いている。ならば、自分は前から噛み付いてやろう。勢いのままに零菜は空菜が噛み付いているほうとは反対側の首筋に噛み付いた。

「うぐ……」

血を吸われ慣れている風も、さすがに同時に噛み付かれたことはない。

首の両側に牙を突き立てられている上に、両者が競うように血を吸い立ててくるので、全身から力が一気に抜け落ちていくかのようだった。

おまけに、風が抵抗できないように零菜も空菜もがっしりと風の身体を掴んでいる。おそらくは無意識の行動なのだろうが、しがみつくようして風を固定している。

「ね、姉さん大胆すぎ……」

顔をほんのりと紅くしたのは、クロエだった。もともと白い肌なので、尚の事紅潮が目立つ。

なによりも彼女にとっては初めてなまで見る吸血行為だ。刺激的な光景に見えるのだろう。

「あの二人は慣れてるからねえ……」

麻夜の表情には困惑と呆れが入り混じった感情が浮かんでいる。確かに、この面々の中では零菜と空菜が吸血経験者として突出している。クロエはいまだに吸血経験がなく、麻夜は緊急事態に一度だけだ。「味わう」という余裕を持って凧から血を吸ったことがあるのは、零菜と空菜の二人だけなのだ。

とはいえ、このままというわけにもいかない。

何せ、これから麻夜とクロエも吸血しなければならぬのだ。凧に微小ながら回復能力があるとはいっても、一度に大量の血を提供するのは厳しいだろう。

「はい、終わり終わり。零菜も空菜も後が控えてるんだからがぶ飲みしないで」  
麻夜はパンパンと手を叩いて、吸血に没頭していた二人の意識を引き剥がす。

「仕方、ないですね。じゃあ、交代で」

「あ、ごめん凧君。つ、ついね……あはは……」

顔を真っ赤にして飛び退くように零菜は凧から離れた。空菜もそっと凧から離れ

て、麻夜とクロエの様子を見た。

「はい、じゃ、クロエ」

どうぞ、と麻夜がクロエの背中を押した。

「ほあ！ わ、わたし!? 麻夜姉さんが先じゃないのか!?!」

「僕は最後でいいよ。クロエは、ほら、初めてじゃん」

「え、麻夜姉さんは」

「僕は経験者。一応ね」

クロエは麻夜に突き出される形で風の前に押し出された。

「だいたい、血を吸えっていきなり言われても、やり方分かんないし……」

「大丈夫です、クロエさん。風さんはほら、わたしはしっかりと抑えていますから逃げません。後は、ここいがぶっと噛み付けば本能が何とかしてくれます」

空菜が風の頭を横に倒し、首筋を露出させる。

「抑えられなくても逃げないっての！」

「まあ、そうでしょうがそこは気分の問題ということで。安心感は大事かと」

風の抗議に空菜は手を離した。風は首を鳴らして、クロエを見上げた。視線が重

なって、クロエは恥ずかしそうに顔を背ける。

「えーと、クロエちゃん。大丈夫、最初は怖いかもしれないけど、噛んじやえば後は自然と分かるから」

零菜がクロエに声がけをする。

「時間もないし、ごちゃごちゃやってる場合じゃないよ、クロエ」

麻夜からもそう言われ、最年少の王女は困り果てて風助に助けを求めるように視線を向ける。が、風助から何か言えることはない。風は血を吸われる立場であって、クロエがその気にならなければ血の提供などできはしない。無理矢理彼女に血を与えるにしても、それは風助が自傷して血を流す必要がある。

「クロエ。君が騎士として国のために頑張るっていうのなら、ここでしっかりと準備をするのも仕事の一つだろう」

「麻夜姉さん……う、う……それは、そうだが」

いまいち一步を踏み出せないクロエはあれこれと考えていたが、それも切羽詰った外の状況を思えば時間の無駄である。

彼女もそれを分からないわけもなく、自ら頬を叩いて気持ちを引き締めると咳払

いをして風に向き直った。

「兄さん、よろしいですね」

居丈高にクロエが言った。それが精一杯の虚勢であるということは誰の目から見ても明らかだった。

クロエは深呼吸してから、風に覆いかぶさるようにして体重を預けた。そうして、ついさっきまで空菜が噛んでいた場所について二つの傷跡を頼りに牙をずぶりと押し込んだ。

「いっつ……」

風が思わず声を漏らすと、クロエが慌てて口を離した。

「あ、すまない。痛かったか？」

「いや、大丈夫。続けていい」

「う、うん」

クロエは今度は恐る恐る風の首を噛みなおす。何分初めてのことなので、力加減が分からないのだ。

しかし、それも束の間のことだ。クロエが分からなくとも本能が知っている。風

の血を一舐めした瞬間にクロエの脳内にはある種の閃きが迸っていた。それはつまり、どうすれば牙の先、血管の内側から熱い血潮を吸い出すことができるのかという決定的な方法であった。

クロエは噛み付いたままで尻の肩を両手で押さえて姿勢を安定させ、そのまま彼の血を啜った。ごくりと一飲みすると、身体の奥底から火山の噴火めいた勢いで熱が噴出して身震いする。これまでに経験したことがないほどの幸福感と魔力の昂ぶり。

クロエの中に潜む眷獣たちが十年以上続いた空腹を満たすために血液を要求しているのが分かる。

「あ、つい……」

クロエは蕩けた表情を浮かべて、尻の肩に顎を乗せる。心臓がバクバクと脈打っていて、どうにもならない状況だ。落ち着くまで深呼吸が何度か繰り返す必要があった。

クロエの吸血が一応終わったのだと判断して、最後に麻夜が歩み寄る。

「さすがに貧血気味なんだが」

「まさか、ここまでできて僕だけナシとか言わないよね？」

「言わないけどさ」

そのようなことを言える雰囲気でもない。断わるだけの理由もない。血を吸わなければならぬという理由を打ち消すだけの道理がなければ、凧は断わらない。

クロエと入れ替わった麻夜は凧の首筋を眺めて、

「やっぱ交互にいったほうがいいよね」

「どっちでもいい」

「ん、そう？ 僕としてはやっぱり左右対称がいいんだよね……ん、じゃあ」

初めからどこを噛むかは決めていたのだろう。麻夜はクロエが噛み付いたほうとは逆、即ち零菜が噛み付いた側に自分の牙を突き立てた。

「ん……」

麻夜は一口目をじつくりと味わうように飲んでから、続けて二回喉を鳴らした。人生で二度目の吸血は一度目よりもお鮮烈に麻夜の身体に火を灯す。紗葵と争ったあの日のことを思い出し、麻夜は内心で紗葵に謝った。思えば紗葵ほど激しく凧の血を求めた吸血鬼はいない。それが敵の眷獣に操られての行為であれ、凧の血を

あれほどまでに吸いたがった紗葵がこの場にいないというのは、何という皮肉的な状況だろうか。

血を吸って、自分の能力が強化されているのを確認した麻夜は凧から離れた。

それを見越していたように、ドアが勢いよく開いた。那月だ。十分席を離れると言って消えた那月が戻ってきたのだ。

「血の補給は済んだか？」

那月はイスに座ったままの凧と、その凧を取り囲んでいる四人の吸血姫を眺めて、単刀直入に尋ねてきた。

「一応」

零菜が答えると、表情を変えることなく那月は頷いた。

「そうか。なら、お前たちの準備は整ったわけだ。後は凧の準備を整えれば、逆襲ができるな」

「俺の準備……？」

凧は首を傾げる。

ついさっきまで血と魔力を吸われた凧は、むしろコンディションを下げているよ

うな気がする。

一人二人への献血ならばまだしも四人だ。中には雰囲気に流されて通常よりも多めに血を吸った者もいる。平均して一人当たりコップ一杯分程度の血を吸われている。常人であれば、貧血になって動けなくなっているところだが、幸いなことに風はダンピールだ。血を吸われながらも回復しているので、彼女たちに纏めて血を提供することができていた。

那月は風の隣にふわりと転移して、ひらひらのついた黒い扇の先端をこめかみに押し当ててきた。

「動くな」

「はい」

有無を言わせぬ迫力を湛えて、那月は言い放つ。風に拒否権はない。教官の言は絶対である。

那月がじろじろと眺めているのは、風の首筋だ。

零菜たちがそれぞれ思い思いの場所に刻みつけた八箇所の赤い噛み傷——いや、その数はすでに五箇所に減じていた。

「治っているな」

「そうですか」

「わたしがお前の教導を受け持ったときよりも、傷の修復が早まっている。そうだろうとは思っていたが……」

「何です？」

「……馴染んでいるということだ」

「何が」

「これから説明する」

深刻そうな顔をする那月に風は生唾を飲んだ。

「那月ちゃん、さっきから何を……」

零菜の問いに那月はすぐには答えなかった。とりあえず、全員座れと言って零菜たちを着席させる。

「説明を始める前に、一人追加だ」

と那月が言うやドアが勢いよく開かれて、室内に少女が飛び込んできた。

「あつぶなッ!? ナツキちゃん、危ないッ!」

どうやら那月の魔術でここまで引き込まれたらしい。つんのめった彼女は、しかしバランス感覚に秀でているのかすぐに体勢を立て直し、顔面と石畳の激突を避けた。

身長は零菜よりも低いくらい。目測で百五十センチに届かないくらいだろう。特徴的なのはその髪色だ。襟に届かなくらいで切り揃えた彼女の髪は、金色を基調としていながら光の反射で七色に輝いているように見える。瞳は焰を思わせる輝きを宿した空色だ。

「もしかして、東雲」

凧が驚いて名前を呼ぶと、東雲——暁東雲はイエス、と親指を立てた。

「みんな久しぶり！　そして、零菜。なんぞそのコスプレは！　可愛いな、可愛いな、すごく可愛いな！」

メイド服を着た零菜にぴよんぴよん近付いていった東雲は、そのまま零菜に抱きつき胸に顔を埋めた。

「ちよ、ちよっと東雲ちゃん!？」

「ん、ぬ？」

東雲は零菜の脇を両手で触り、それから胸を鷲掴みにした。

「にゃッ!？」

「去年よりもふかふか増してね。腰変わってないのに、おっぱいだけ成長してる……!？」

「な、な、変なこといきなり言わないでよ！」

戦慄する東雲に零菜が抗議する。

「変というか事実だよな。え、あ、分かった。エロイことしてるな。一日何回したらこんな成長するんだ。どうなんだ、これ。おい、ぽにぽにだぞ零菜。D いやEか」

「エロイことしてないし、掴むな揉むな！」

零菜は東雲を突き飛ばすようにして距離を取り、胸元を隠した。

「いやあ、ついね。ごめんね。ほら、可愛いメイドさんがいたものだからついね」  
東雲は悪びれずに笑う。

「うん？」

そして、その目は風の後ろにいる空菜に向けられた。

「お！ あなたもしかしてあれでしょ、零菜由来のホームクルスだっていう……くーな？」

「はい。初めまして、東雲さん。お話は聞いてます」

さつと空菜は凧の背中に隠れた。零菜に向けられた暴虐が自分に向くことを恐れたのだ。

「ねえ、東雲。君、いきなり現れてどうしたんだ？ 飛行機が遅れてるって話は聞いてたけど」

話が途切れたところを狙って麻夜が話しかけた。

東雲はもともと第二真祖の領国内で生活していた。それがクリスマスにあわせて帰省する予定だったのだ。

「いや、それが、やっと空港に着いたら外が大騒ぎになってるじゃない。情報なし全然動けないしで飛行機の中で待機してたら突然の監獄結界。我、大混乱」

「あ、もしかして那月ちゃんが席を外してたのって」

「ああ、コイツを迎えに行っていた」

「ナツキちゃん相変わらずで安心した」

へらっと笑う東雲。第四真祖と第四真祖の間に生まれた正真正銘の吸血鬼。ある意味で、その存在は奇跡と言ってもいいだろう。もちろん、その身に宿す絶大な魔力は他の追隨を許さない。まだ十五年程度しか積み上げていない固有堆積時間であっても、親が親なのですでに旧き世代に並ぶだけの力を持っていると目されている。

「うん、それで、凧ちゃんとみんなの酒池肉林は終わった？　まだならわたしも参加したいなー」

「そこまでしておけ。これからが本題なんだ、東雲」

「ん、はい」

しぶしぶ東雲は空いたイスに座った。

「さて、これからの方針だが、暁古城以下迎賓館ホールに封じられた重鎮たちの救出には零菜と空菜を切り札として当たる。敵部隊のひきつけ役は麻夜とクロエ。当然、特区警備隊の各部隊との連携をして戦闘を行うことになる」

「特区警備隊の装備って、確か今……」

凧が心配そうに呟く。

敵に奪われた萌葱の眷獣の能力により科学技術は軒並みあの悪魔の支配するところとなっているはずだ。

「特区警備隊に限らずな。アルディギア側の兵器もごっそり向こう側だ。よって、こちらの武器となるのは魔力に対抗できる擬似聖剣の類や電子機器を積み込んでいない銃火器、そして吸血鬼たちの混成部隊だな。半世紀以上も前の装備で戦わなければならぬのが萌葱の眷獣の恐ろしいところだな」

これが科学技術を奪われた技術大国の姿か。

確かに萌葱の力は恐ろしい。下手をすれば敵を一方的に殺戮することができるのだから。

「だが、そこまで心配する必要はない。ベルゼビュートから各方面に指示を出しているが、結局頭脳はあの魔女二人だ。やつらの処理能力は萌葱の眷獣を使いこなすには不十分だ。所詮は他人の力だからな。慣れるまで相応の時間がかかる。そこで、東雲でベルゼビュートを抑える」

「おっけー。わたし、眷獣使っていいのね？」

「ああ、きちんと加減ができるのならな」

「大丈夫大丈夫。南米での特訓の成果を見せてあげるよ」

明るく、朗らかに東雲は言う。むしろ眷獣が使えるということが嬉しいとでも言うかのように。

「えーと、それで教官。俺は」

「お前は萌葱救出係だ」

「萌葱姉さん救出って言っても……」

「……分かってている。今のままでは無理だ。だから、お前はお前自身を知らなければならぬ。これからお前の封を解く」

「封？」

「お前が生まれたときにわたしたちで施した封印だ。お前の中に移した吸血鬼の力を抑えるためのものだな」

「は？」

凧は啞然として那月を見つめた。

「俺の中の吸血鬼の力だって？ いやいや、そんな話、今まで聞いたことないぞ

!？」

「黙っていたからな。皆でタイミングを伺っていたが、そうも言っていたらなくなった。状況も状況だが、お前自身が吸血鬼の力に馴染んでしまったからな」

「みんな？」

「皆は皆だ。親世代は全員、共犯だな」

その発言に反応しないでいられる者はいなかった。

「まるで母さんたちが悪いことをしたような言い回しですね」

麻夜が探るように尋ねる。

「その判断は難しいな。すでに善悪で判断できるものではなくなった。もっとも倫理的な問題は、確かに指摘されるところだろうがな」

それから那月は深く息を吸った。

「凧。お前の母親がもともと病弱だったということは知っているな？」

「俺が産まれる前までの話ですよ？ 物心ついてからは、入院したって話も聞

きませんが」

「ああ。その原因を取り除いたのが十五年前だったからな」

「どういうことですか？」

「もともと、ヤツの体調不良の原因は第四真祖だったのだ」

「古城さん？」

「違う。あれはもともと人間だった。それも有名な話だろう」

「それは、まあ。先代の第四真祖を上書きした<sup>オーバーライト</sup>っていう噂は、よく出回ってますよね」

古城がもともと人間だったのは過去の記録が証明している。隠せるものではなく、隠す必要もない。そうなるとうやうやって第四真祖に成り上がったのかという問題が発生する。人間が吸血鬼になる方法。それは唯一、上書きすることだけだ。

今でこそ第四真祖は親しみのある、実在する皇帝として認知されているが、二十余年余り前までは伝説上の存在として御伽噺の中にのみ現れる破壊神として認識されていたという。

「上書きは事実だ。暁古城は先代第四真祖から第四真祖の力を受け継いだ。その先代こそが、そこにいる東雲の母親であるアヴローラだ」

そこまでは特に不思議なことではない。詳しい説明こそなかったが、そうと察する機会は多々あった。アヴローラが第四真祖に関わる特別な存在であるというの

は、子ども達の共通認識である。

「そして、アヴローラのさらに先代第四真祖が、風。お前の母親だ」

「……………は？」

風は那月が何を言っているのかまったく分からなかった。

風沙は今も昔もただの人間であるはずだ。特別な力といえば、人並みはずれた霊能力であろう。だが、霊力があるという時点で吸血鬼というのはありえない。

「風沙は強力な霊能力者だ。特に憑依系に強くてな。とある事件に暁古城と巻き込まれた際に、第四真祖に憑依されたのだ。いや、あれは自ら受け入れたというほうがいいか。ともあれ、暁風沙という少女は第四真祖の人格をその身に宿すことになった。今から二十四、五年前のことだ」

「母さんが第四真祖の人格を宿した？」

「第四真祖はな、封印されていたのだ。それもただの封印ではない。基本人格となる原罪ルルトと十二体の眷獣を封印するための十二体の人工吸血鬼の合計十三のパーツに分けられてだ。アヴローラ・フロレスティーナは十二体目の人工吸血鬼に付けられた名前だよ」

母が人工吸血鬼と告げられても、東雲の表情に変わりはない。知っていたのか、察していたのか、それともそもそもそんなことに興味はないのか。

「それで、その封印のうち一つを母さんが解くなり何なりしたわけですか」

「ああ。そして風沙に憑依した原罪は、その数年後に目覚めた。風沙の身体を我が物とし、伝説に謳われる破壊の化身として活動しようとした。それを阻止したのが暁古城とアヴローラだったわけだ。アヴローラは原罪を上書きし、古城に第四真祖の力を託して消えた。最新の第四真祖はこうして誕生した。本来ならば、それで終わるはずだった」

「アヴローラさんは生きてる」

「ああ。消えかけたアヴローラの魂を、今度は風沙が自分の体に受け入れたからな。巫女としての面目躍如といったところだな。そうしてアヴローラは消滅を免れ、そして新たに肉体を得て新生した。今に繋がる面々はこうして揃った。二十年前、この島が大きな転機を迎えたときのことだ」

「それで、母さんの体調不良の原因だったのは？ アヴローラさんの魂はさすがに重過ぎると思いますけど」

「当時は、アヴローラの魂が風沙の体力を削っているものと考えられていた。それは、九割方正しくてな、事実アヴローラが肉体を得てからは風沙の体調も安定していた。それが崩れたのは、十五年前。ちょうど、暁零菜が生まれるかどうかという時期だったか……突然、風沙が倒れた。原因は、第四真祖の原罪だった。あれはな、消えたと見せて風沙の魂にずっと潜んでいたのだ。人格を失いながらも魂にしがみ付いた、原罪の欠片。だが、それでも人間の命を脅かすには十分だった。言ってみれば、毒のようなものだ。毒は毒抜きしなければならぬが、地に落ちたとはいえ第四真祖の主要人格だったものだ。生半可な手段では風沙を解放することはできなかった。そこで、当時風沙の交際相手だった昏月が目を付けたのがプレイヤーだ」

聞いた覚えのない単語に、風は首を傾げる。周りに視線を向けるが、これといって反応がないところを見ると、皆知らないようだ。

「はい、那月ちゃん。プレイヤーって何ですか？」

さっと手を挙げた東雲が那月に尋ねた。

那月は十秒ほど黙っていた。何かしらの葛藤があるとしても言うように、目と眼。そして口を開いたとき、彼女はある種の覚悟を決めたのだろう。いつもの毅然

とした態度で風を見つめた。質問者の東雲ではなく、風に対して答えたのだ。

「半世紀ほど前。まだ人類と吸血鬼が戦争をしていた頃のことだ。吸血鬼側がある研究に手を出した。ちょうど科学技術が急速に発達し、生命工学が所謂神の領域を侵し始めた時期だった。戦争を継続するには人手がいる。もしくはより強力な吸血鬼の存在が必要不可欠だった。吸血鬼は知ってのとおり、血を吸うことで本来の能力を発揮する。だから、血を提供するためだけに軍に招聘される人間も少なくなかった」

特に夜の帝国にとっては吸血鬼は戦争の中核を担う強力な兵器であった。全人口の大半が人間であっても吸血鬼の国家として成立しているのは、吸血鬼の魔族としての圧倒的なポテンシャルによるものだ。その力を維持するために人間を徴発していたが、やはり人間の国家との戦争だ。戦意のない人間を多数戦場に連れて行くのはリスクが大きいというのは、古い時代からの課題であった。

「そこで、当時の吸血鬼の誰かが考えた。人間を連れて行くのではなく、もっと気軽に血を吸って力に変えることのできる生物を生産すればいいとな。当初はホムンクルスで代用しようとしたが、錬金術で生み出されるホムンクルスの血には吸血鬼

の力を底上げする効果はない。必然的に、クローン技術を用いた吸血鬼に血を提供するための人工生命体の研究が始まった。それがプレイヤーの始まりだ」

「待ってよ那月ちゃん。その話が凧沙さんに繋がるの？ だって、それじゃ……」

零菜は凧を見て言いかけていた言葉を飲み込んだ。

零菜が言わんとすることは凧にも分かる。けれど、今は那月の説明が先だ。

「続けるぞ。……吸血鬼に血を吸われるために作られる人工生命体というコンセプトはその後人間側にも継承される。夜の帝国は技術力不足で諦めたが、アルディギアは興味を持ったらしい。吸血鬼に血を吸わせることで、相手に呪詛や毒の注入ができれば敵を内側から瓦解させられるかもしれないと訴える者がいたようだ。まあ、戦争では時として信じられない阿呆な方向に兵器開発が進むこともある。まあ、費用対効果の観点と倫理面から研究は頓挫したかな」

「吸血鬼に血を吸われるための人工生命体……」

「プレイヤーとは被捕食者を指す。吸血鬼をその気にさせるある種のフェロモンを生成する能力を持った人造人間だが、結局はそこ止まりだった。兵器として扱えるほどの効果は期待できない」

真面目に考えればそうだ。そんな突拍子もない研究が承認されたのは、それだけ当時の情勢が行き詰っていたからだろう。

「那月さん。結論をお願いします。凧さんは何者ですか？」

静かに空菜が尋ねた。

「そうだな。——凧、結論を言おう。お前は十五年前、わたしたちが死に瀕した凧沙を救うために、プレイヤーの技術を流用して造った人造人間だ」

「ッ……」

凧は息を呑む。

覚悟していたこととはいえ、自分が自分の思っていたものと異なる出生だったというのは、重い。

「この国にはアヴローラという人工吸血鬼のデータがあった。世界有数の技術大国であり、プレイヤーの研究データを握るアルデイギアと同盟関係だ。実用化はせずとも、秘密裏に一人生み出すくらいは可能だった」

「古城君は、知ってたんだ。それ、ずっとわたしたちに隠してたってこと」

空菜はショックを受けたように声を震わせる。

「そうだな。恐らくは我々この国の上層部の人間が初めてした『表沙汰に出来ない仕事』というヤツだろう。凧に関するデータは完全に削除され、凧沙が人工授精で授かった子という形で処理している」

那月の一言一言が凧に突き刺さるかのようだった。

「最後に、凧。お前の力の正体だが、勘付いているだろうが第四真祖の原罪のものだ。わたしたちは『吸血鬼を惹き付ける』プレイヤーの性質を利用して凧沙から原罪の残滓をお前に移した。その後わたしたちは原罪の力を封じ、ただの人間としてお前の成長を見てきた。正直な、お前の中にある原罪がどういう形で作用していくのかまったく予想ができなかったよ」

「俺がダンピールっていうのも、嘘だった？」

「まあな。あれは暁零菜に噛まれた際に、封の一部が解れ原罪の力が漏れたことによるショック症状だと考えられている。おかしいとは思っていただろう。血の従者になり損ねたというにはあまりに中途半端だと」

「ああ、うん。まあ……気にはなってた」

そして納得した。

あのと看、治療室に運ばれる際の母の涙は凧の出生に絡んだものだったのだ。

「あの、一ついいですか、教官」

凧は恐る恐る手を挙げる。那月が頷いたので、

「それで、俺は母さんの子じゃないってことなんですか？」

「どういふ考えによるかだが、お前を生み出す際に凧沙の卵子と昏月の精子を用いている。血の繋がりという観点であれば、確かに凧沙の子だし、凧沙自身もお前を自分の子として育てるのだと言って聞かなかったからな」

「そうですか」

「それだけか？」

「それだけと言うと？」

「お前はわたしたちを非難し、訴える権利がある」

「いや、別に。それに、それがなければ俺産まれてないわけですからね……空菜だって、別に作った人を恨んでるわけじゃないですし、なあ？」

凧は空菜に聞く。

空菜も凧と同じく人工生命体だ。ホムンクルスとクローンという違いはあるが、

人造人間というカテゴリには含まれる。

「そうですね。恨む理由がありません」

さらりと空菜は言い切った。

「うん。大体分かりました。俺の原罪の力が萌葱姉さんを助けるのに役立つはずだってことですな」

「そうなる。やってくれるか？」

「もちろん。自分の正体をはっきりしてむしろよかった」

凧は笑みを浮かべる。

長年の疑問が解消したのだ。少々驚くこともあったが、だからどうしたという程度のものであった。

「あの、凧君。いいの、本当に？」

麻夜が心配そうに聞いてくる。

「いいよ。どうしようもないし、どうこうすることでもないじゃないか。母さんはあのとき、俺のために泣いてくれた。目茶苦茶心配してくれた。それで十分」

凧は心底から凧を自分の子として扱ってくれている。

それは、これまでの生活の中で十分すぎるほどに感じているのだ。

「で、教官。原罪の力って、どうやって使うんですか？」

「封印を解けば自然と分かるはずだ。お前の身体には十分に原罪が馴染んでいる。風沙のおかげだな。アイツから受け継いだ力が、原罪とお前を結び付けて融け合わせた。他の人間ではこうはいかなかっただろう」

那月は人差し指を風に向ける。

淡い紫色の魔法陣が展開して、風の身体を光が包む。

風は自分の身体の中に那月の魔力を浸透してくるのを感じていた。固く閉ざされた古びた扉が音を立てて開いた。そんな幻聴を、風は確かに聞いたのだった。

## 第四部 十二話

特区警備隊はもともと公園の内外に指揮所を設けてクリスマスパーティーに備えていたが、今回の事件ではそれが功を奏した。広い公園そのものは那月の結界で遮断されてしまったが、その外に位置する指揮所は機能を失うことなく運営できたからだ。アルディギア王国側の騎士たちも、反乱に加担していなかった勢力が盛り返している。本船を奪い返し、本国との通信を回復、その上で公園内に持ち込まれたアルディギア王国の兵器の詳細についても報告を上げていた。もはや機密もなにもない。ここで全面的に協力しなければ、外交的にも大きな傷を負うことになる。無論、ここでクロエ姫の鶴の一声があったことも大きい。

アルディギア王国の近衛兵たちは指揮官クラスの要人がアルディギア解放戦線の構成員であったという点で大いに驚愕しており、そのために指揮できる者が不在の状態となっていた。

若年であっても、クロエは自身が所属する組織の頂点に君臨する一人であり、彼女の言葉には重大な意味がある。

「何とか、足並みは揃いそうですか」

クロエが尋ねたのは特区警備隊の前線指揮に当たっている女吸血鬼ダーナ・エーカトルである。

長い金髪の女吸血鬼は、おそらく古城を除けば帝国国内でも最強クラスの吸血鬼であると言えるだろう。数百年の年月を積み重ねた旧き世代だとされているが詳しいことを知っているのは、古城たち上層部くらいのもだろう。彼女が言うには、流浪の旅を続けてきた流れの吸血鬼だということらしいが、紆余曲折の末にこの国に居付いてしまったのだとか。

「ああ、クロエ姫。こちらの準備はオツケーですよ。あとは空隙ちゃんに入口開いてもらえば、いつでも突撃できますね」

厳しい戦いになるのは分かってきている。吸血鬼や魔族ならばいいが、人間の部隊員にとっては荷が重い戦いだ。何せ科学技術が封じられている上に向こう側には最新鋭の科学技術がついているのだ。

本来ならばありえないことだが、それが萌葱の眷獣の恐ろしさということか。

「さて、初めはわたしの眷獣を先頭に押し立てて迎賓館まで突っ切る。途中で出て

くる眷獣や機械兵器も潰す。速攻で館内に押し入り、零菜姫か空菜ちゃんの眷獣で凍結封印を解除し、アルディギアの反乱軍を鎮圧すると。うん、雑だけどこれしかないね」

相手とこちらの兵力差が考慮すれば、とにかく速攻で終わらせるしかない。

慌しく周囲を行き交う関係者達。

結界の内部に入れば通信機器は使えない。魔術で代用するしかないが、実のところそういった魔術による連絡というのはできない隊員も少なくない。通信機器の発達により、魔術での連絡を学ぶ必要性が薄れていたからだ。

機関銃などは用意できたが、それ以外の面は中世レベルにまで低下していると言われてもおかしくはない。

「うーん、そう考えると大分質が落ちてるのね。人間も魔族も……」

ダーナは頭を振って余計な雑念を払った。

確かに数百年前、人間共と交戦していた頃はドイツもコイツも強敵ばかりだった。思い出補正もあるだろうが、その半面科学に頼らず吸血鬼たちを相手に戦っていた時代なのだ。信じられないくらい強い人間が組織単位で存在していたというの

も、記憶違いではないはずだ。

それとも、自分が強くなりすぎたのだろうか。親元を出奔して、滾る血に任せて戦地を駆け抜けた時よりも、着実に歴史と力を蓄えているのだから。

「意味ないね、これは」

さつき旦那から血を吸ってきたので魔力は十分。機械というのが気に入らないが潰しがいはそこそこありそうだ。

「注意するのは二つ。敵は最新の兵器をぶつけてくるので死なないようにすることとポッドが出てきたら攻撃を当てずに確保すること」

前者については目茶苦茶なことを言っているがそれ以外に言い様がない。相手はこちらの動きなどお見通しなのだ。後手に回っている以上どう足掻いても不利には違いない。

そして後者。こちらは非常に重要なのだが、敵が如何にして眷獣を操っているのかという謎を解く鍵がポッドであった。

正式名称は不明。しかし、二メートル程度の大きさの円筒形の機械は内部に吸血鬼を封入し、脳に電気刺激を与えることで眷獣を無理矢理召喚させるといふ悪辣な

兵器だったのだ。

聖域条約締結以前に理論が構築され、アルディギア解放戦線が秘密裏に完成させた兵器だが、この存在が分かったときには吸血鬼を中心にアルディギア解放戦線に對する敵意が吹き荒れたものだ。

「空隙ちゃん、門開けて」

「妙な名で呼ぶなダーナ」

那月がふわりと現れる。相変わらずの神出鬼没さに、クロエなどは驚いてしまうのだがダーナはさすがに平然としている。

「いいじゃないの、わたしのほうが年上だし」

「そういう問題じゃないだろう」

そもそも吸血鬼を相手に年齢で戦える人間がどれだけいるものか。那月はそういう観点では条件を満たすものの、自分よりも早く生まれた者には一生追いつくことはない。年上よりも長く生きることができても、存命中の相手よりも年上になることは永遠にない。年齢を持ち出すのは、卑怯というモノだ。

那月は不機嫌を顔に貼り付けながら、指を鳴らした。ベルゼビウトの能力を封

じ込めていた大結界の一部が形を変えて、開かれた門となる。

「門は二重だ。部隊が中に入ると同時に入口を閉鎖し、内側の門を開錠する」

そうすることで敵の能力が外に漏れることを阻止するのだ。二重窓のようなものだ。

「了解。よし、行くよ！」

ダーナが声をかける。集まった二十五名の選抜部隊の面々は気合を入れるように各々吼える。ダーナを含めた五名の吸血鬼が血路を開き、後続の魔族と人間の混成部隊により素早く敵兵力の鎮圧にかかる。

ぞろぞろと特区警備隊員たちが結界の中に入っていく。

「クロエ、折を見て、お前たちも投入する。ほかの姉妹にもいつでもいけるように準備するように改めて伝えておけ」

「はい」

ダーナたちの目的は道を切り開くことだけではない。敵兵力がどのように運用されるのかを見極めることも含まれている。零菜の存在は敵も知っているだろう。魔力無効化が封印を破壊する最適解である以上警戒されている可能性は高い。

凧と東雲がベルゼビュートと交戦してからが、本格的な勝負所となる見込みだ。



成すべきことがはつきりした今、凧に迷いはない。とにかくベルゼビュートと命名された巨大悪魔から萌葱を救出し、この騒動を終わらせなければならぬ。

東雲以外の吸血姫たちは、那月の魔術によってすでに公園の外に転移させられている。監獄結界からであっても、園内の指定した場所に転移させることができないくらいに那月が張った結界は強力なのだ。内部と外部を遮断するという特性は転移魔術すらも妨害する。結局、自分の足で目的地までいかなければならないのだ。ベルゼビュートの巨体は、はつきりと思いつける。正直、距離感が狂うくらいの大きさだ。

姉妹たちがいなくなったことで、監獄結界の中は閑散としている。主である那月

も姿を消したので、今は凧と東雲の二人だけとなっているのだ。この二人で萌葱を救出しなければならぬ。

「凧ちゃん、緊張してる？」

イスに座っている凧に反対側に座る東雲が尋ねてきた。金色に輝く虹の髪を手櫛で整えた後、彼女は頼杖について凧を見つめてくる。

「うん？ いや、こういうのは何回か経験してるけど、ちょっとは緊張してる。やっぱり」

「そう。ちなみにわたしはバックバク。一応、ジャーダ様のところでそこそこ働かせてもらったけど、ね」

東雲は国外、第三真祖の領土内に留学という形を取っていた。といっても、彼女の存在は容易く公にできるものでもない。第四真祖と第四真祖の間に生まれた子という特殊極まりない立場は、萌葱や零菜以上にデリケートな扱いを必要とした。そして、強力な力をコントロールする技術を身に付ける必要もあった。アヴローラ関連に理解のあるジャーダ・ククルカンを頼ったのは、そういった経緯があったからだ。

「ジャーダ様がねー、凧ちゃんに興味があるってさ」

「何で？」

「プレイヤーだからじゃない？ あの、あれでも皇帝だからね。欲しい、興味あるってことには結構貪欲だよ」

「へえ……ん？」

凧はふと、東雲を見る。

「なあ、東雲」

「何？」

「もしかしてさ、俺のこと知ってたか？」

今の会話に引っかけるところがあった。

ジャーダが凧の秘密を知っていた。それは、ありえないとは言えない。ジャーダと古城の仲だ。皇帝同士そういった話があってもいいだろう。だが、それを東雲が知っているとなると話は変わる。暁の帝国にやって来る前から、ジャーダとプレイヤーについて話をしていなければ、今の受け答えはなかったはずだ。

「知ってたって言ったら、どうする？」

東雲は薄らを笑みを浮かべた。

朗らかさを消した妖艶な笑みだ。挑発的と言ってもいいだろう。

「ん、いや。別に何をどうするってことはないけど」

「……なんだ、残念。わたしとしては凧ちゃんがかつとなつてがっとな押し倒しにくるくらいはあってもいいと思つてたのに」

「しないよ」

「でしょーね」

「それで、知つてたの？」

「知つてたよ。何年前かにジャーダ様から聞いた。わたしが知つてゐるってことはナツキちゃんも知つてる。今日、ここに来る前にちよこつとその件で打ち合わせたからね」

「もしかして、那月ちゃんが席を外した十分つて」

「うん。あれ、別室でわたしと話す時間を取るための十分だね」

あつさりとう東雲は白状した。

凧が真実を知つたことで、もう隠す必要もなくなったのだろう。

「いや、やっと肩の荷が下りた。ちょっと衝撃の事実だったでしょ」

「ちよっとどころじゃなかったぞ。自分が人造人間だとはさすがに思わないって」「あはは、だよー。ま、うちのお母さんとか優麻さんも似たようなものだけどね」人工吸血鬼が東雲の母親アヴローラであり、麻夜の母親である優麻もクローニング技術で生み出されたのだと聞いている。そういった家族構成だからだろうか。風が言うとおり受けた衝撃はそれほど大きくはなかった。

「じゃあ、さ。この機会に全部の荷物を下しちゃうってのをわたし考えちゃった」そう言った東雲はおもむろに立ち上がるとテーブルを回って風の隣にやって来た。

小柄なので隣に座っても風のほうが十分に高い。下から見上げられて、風は反応に困った。

「荷物下すって言ってなんで俺の隣に？」

東雲は風の胸倉を掴むと自分の顔を胸元に押し付けてきた。

「いや、んー……」

じっとして十秒ほど経っただろうか。

離れた東雲は瞳を焰に染めている。

「んふ、うん。分かってたけど、これは、いやすごい。たったこれだけで凧ちゃんの血が吸いたくなくなったよ。ねえ、今日はみんなに血を上げてたんだし、わたしにもくれるよね？」

頬を少し赤らめて東雲は聞いてきた。

「今更だしな……東雲が戦いに必要だってんなら断わる理由もないし」

「凧ちゃんはそうやって、みんなに求められるままに血を吸わせてきたでしょ」

「いや、求められるままにじゃないけど。その都度理由はあったし」

「それ、凧ちゃんの判断なのかな？ プレイヤーとしての判断なのかな？」

「……？ 何それ、どういうこと？」

「ナツキちゃんがさっき説明しなかったこと。プレイヤーとしての凧ちゃんの危険察知能力の低さの問題」

凧は眉ねを寄せた。東雲がいきなり何を言ってきたのか、すぐには理解できなかったのだ。

「プレイヤーっていうのはさ、吸血鬼に血を吸われるために調整された人造人間な

わけ。そんなプレイヤーが、血を吸われることに嫌悪感を示したら意味ないよね。戦場に連れて行かれて怖いから逃げますなんてことになったら、せつかくお金を出して造ったのにおじゃんでしょ。だからさ、凧ちゃん。プレイヤーは自分に迫る危険にとにかく鈍感になるように設計されてるんだって」

「……うん？　あまり自覚ないけどなあ。危ないと思うことは普通にあるし」

「何でも受け取り方の問題みたいだよ。例えば、ボールが顔面に飛んできたとき普通の人は頭で考えなくても避けたりガードしたりするでしょ。でも、プレイヤーはボールが顔に当たると痛い、怪我をする、じゃあどうするか、避けようっていちいち考えるの。反射的に避けないみたいなのね」

「俺は別にそうでもないぞ」

「凧ちゃんには霊視があるもん。先が見えるんだから、事前準備ができるでしょ。意識してないと思うけど、凧ちゃんはそうやって危険を回避してきたし、ナツキちゃんからも霊視を活かした身体の使い方を叩き込まれてきたんじゃない？」

「あー……まあ、そういうのもあったかな」

東雲に言われても、特にピンとくるものがない。自分以外になったことがないの

だから、普通の人の感覚が分からないということもあるのだろう。凧は自分がそれほど人と離れているとは思っていないし実感も湧かないのだ。

「凧ちゃん、問題はさ。凧ちゃんは『理由があれば命を賭けられる』ってことだよ。死んでもいいとかいうやけっぱちじゃなくて、効果的だと思ったならその選択をしてしまう。怖いって感覚が人よりも薄いもん。まあ、要するに自分のことすら状況次第じゃ他人事になるってことね」

「ホムンクルスの考え方ってことでいいのかな？」

ホムンクルスも自分の命を第一に考える力が弱い。自己を道具と割り切っているというような理屈ではなく、本能レベルで自己保存欲求が弱いのだ。これはもともと道具として設計されているために、意図的に調整された結果だという。

アスタルテのようにホムンクルスとしてではなく、人間として扱われた者はしっかりとした自我を身に付けるが、本能の部分への刷り込みは生涯消えることはない。理性で覆い隠すのが関の山だろう。

「似たようなものかもね」

東雲はそう言いつつスカートのポケットから小瓶を取り出していた。

「何それ」

「お薬」

東雲は蓋を開けて、一粒の錠剤を手の平に乗せる。

六角形の市販品風邪薬のようである。

「これね、吸血障害の薬。わたしたちが凧ちゃんの匂いに充てられるのと同じような状態を作るヤツ」

「何でいきなりそんなの出してんの？」

「凧ちゃんのためだよ」

「俺の？」

「ベルゼビュートと戦うのに、凧ちゃんは原初の……吸血鬼の力を引き出さないといけない。そのままでもいいと思うけど、念には念を入れないじゃない、なんて」東雲は錠剤を口に含むと、自分の左手首に噛み付いた。凧のフェロモンの影響で吸血できる状態になっていたこともあり、赤い血がすぐに唇を濡らした。

「東雲!？」

「ん……」

凧は突然の行動についていけない。

東雲は一頻り自分の血を吸った後で口を話した。

「なぎちゃん、わらひをあえる」

口に含んだ血のせいできちんと話せない東雲は両手をさっと凧の首に絡めて、凧にキスをした。

ぎゅっと頭を固定されて凧は抜け出せず、東雲の口から凧の口へ鉄錆の味が広がっていく。

「ん、んぐ……！」

東雲の血に混じって、凧の口内に錠剤が押し込まれた。がっちり唇は塞がれていて、戻すこともできず、凧は血と一緒に錠剤を嚥下してしまった。

「ぐ、う」

ざわりと背筋があわ立った。喉が急激に渴いていく感覚に凧は呻く。凧の背中からは黒い魔力が湧き上がり、瞳が焰光を湛える。通常の吸血鬼とは異なる瞳の色。第四真祖の特性であり、真にその血を引き継ぐ東雲と同じ色の瞳である。

「し、ののめ……！」

「もえちゃんを助けるには力があるでしょ。吸血鬼の力。わたしと凧ちゃんのルーツ……原初の力が。ふふ、もつと、もつと血が欲しいよね。あげる。あげるよ、凧ちゃん。我慢しないで、衝動に身を委ねて、そのままわたしに全部ぶつけて」

東雲は待ってたとばかりに凧の頭を掻き抱く。

那月が吸血鬼の力を解放していたことに加えて吸血衝動を助長する錠剤を飲まされたのだ。吸血鬼の血液という魔力源まで一緒に。凧は湧き上がってくる衝動を抑えることもできず、従姉妹の首に牙を突き立ててしまった。



## 第四部 十三話

暁東雲は十五歳。神話伝承に謳われる闇の眷属たる吸血鬼のイメージとは正反対の、光り輝く名を与えられた少女である。

父は暁の帝国皇帝第四真祖暁古城。母は先代第四真祖にして第四真祖の眷属を封じるべく作成された古代の人工吸血鬼アヴローラ・フロレスティーナ。世界でも類を見ない第四真祖を両親に持つサラブレッドの中のサラブレッドである。

母に由来する金色の髪と第四真祖の血を引くことの証左である焰光の瞳を持つ彼女は、真正正銘第四真祖の後を継ぐに足る器であるとも言えた。

だが、現実にはそのような話は一切持ち上がらない。それどころか、彼女の存在を知る者すらほとんどいないというのが現状である。

暁の帝国には第二世代とされる姫達は何人もいる。皇帝が血の伴侶とした女性と短期間に平行して関係を持ったために姫達の年齢も近いのがこの国の特徴だが、一応生まれた順に第〇皇女というように呼ばれたりもする。例えば第一皇女は萌葱であり、第二皇女が紅葉、第三皇女が零菜というようにだ。この枠組みに、東雲は

入っていない。生まれが——両親ともに第四真祖というあまりにも特殊な事情が、当時の混乱した世界情勢へ影響を与えるのではないかという危機感から、発表を見送ってしまったからだ。

さらに、東雲は眷獣の制御能力に難があり、度々眷獣を暴走させかける事があった。監獄結界に隔離された事も一度や二度ではなく、吸血鬼が少ない暁の帝国では彼女に吸血鬼の何たるかを教える事が困難だった。

結果、東雲は十歳で母と共に第三真祖ジャーダ・ククルカンの下に留学する事になったのである。

——どうしてわたしだけが。

そういう思いが胸に燻っていたのは確かにあるし、幼かった東雲からすれば父に追い出されたと感じる面もあった。もちろん、一般的な意味で父と慕う気持ちが皆無というわけでもないが、東雲にとってはやや複雑な感情を抱く相手である。

旧き吸血鬼の帝国で吸血鬼とは何たるかを学ぶ日々にあって、やはり東雲は浮いていた。身分を隠し、ジャーダの友人の子とだけ周囲に伝えての生活。焰光の瞳を隠すためにカラーコンタクトは必須だったし、向こうで出会うすべての吸血鬼が東

雲とは異なる瞳の色をしていた。

やはり、誰一人として焰光の瞳を持つ者はいなかったのだ。

同じ吸血鬼でありながら、決して同じものではない。東雲と異母姉妹に当たる皇女達でさえ、東雲と同じ存在足り得ない。

物足りない日々が続く中、不意にジャーダが言ったのだ。

——東雲の従弟の凧という少年。アレは、もしかしたら焰光の力を持っているかもしれないぞ、と。

それを聞いた時の衝撃たるや表現のしようがない。

まさか、凧がと思いはした。

昔はよく、それこそ毎日のように遊んだ仲である。身体が弱く、事故で吸血鬼の力を得てしまったと聞いていたが、第四真祖に関わる力とは聞いていない。

だが、ジャーダから聞いた凧の出生の秘密は東雲の期待感を大きくした。

彼が人造人間であった事など、どうでもいいのだ。母が人造吸血鬼なのだから気にしても仕方がない。東雲にとって重要なのは、凧が本当に原初の力を宿しているのなら、ジャーダが言うように自分と同じ焰光の瞳を発現するかもしれないという

事だ。

もしも、凧が焰光の瞳を——第四真祖の特質を露にしたら、それは東雲にとって、初めて同族と言うべき相手を見つけた事になる。

東雲にとって他の皇女は家族ではあっても同族ではない。生物学的、民族的な繋がりではなく、意識、魂の繋がりとといったもの。自分と他者が同じ存在であると思える特別な繋がりに東雲は餓えていたのだろう。

今回、ここぞとばかりに凧の覚醒を促したのは、この瞬間をこそ待ち望んでいたからに他ならない。

凧とは同い歳。

生まれた日付で、辛うじて東雲が姉となるか。

萌葱ほど面倒見はよくないが、姉として弟に吸血鬼のイロハを教えてあげるのもやぶさかではない。

何せこちらは遙か古代より生きる第三真祖ジャーダ・ククルカンのところに「吸血鬼留学」していたのだ。

吸血衝動を発生させる薬と自分の血、第四真祖の力を最も多く含む東雲の血は彼

の中の第四真祖を目覚めさせるのに効果的だろうという那月のお墨付きもあった。東雲を床に押し倒した風の顔は獣欲に歪み、瞳は期待したとおりの焰光に染まっている。東雲は鼓動が弾み、歓喜して思わず彼の頭を抱きかかえてしまったほどだ。今なら彼に何をされても文句は言わない。いっそ上書きしてくれてもいいとすら思えてしまった。

だから、そのまま風が求めるままに首筋を差し出した。吸血衝動を喚起したのは東雲自身だ。ここに血を与えられる者がほかにいないのだから、東雲がその責任を取るしかない。

「うく……」

ぞぶり、と首に牙が打ち込まれる感覚に頬を震わす。

暁東雲は吸血鬼。普段は血を吸う側の存在であり、自らの血を他者に提供したことはない。血を吸われるのは、これが初めての経験だ。

「いっ……いっ……」

風が牙を深く食い込ませる。多分、目的の場所に牙が辿り着いたのだろう。

(そういえば牙って注射器よりも太いじゃん。けっこう痛いじゃん)

唇を噛んで東雲は凧の肩を押さえた。身体はどこかに力を入れていないと、慣れない痛みが早々に苦痛になってしまいそうだった。

けれど、それも束の間のことだった。痛みがあつたのは最初の一瞬だけで、すぐに痛みが引いたのだ。

痛みが消えた直後にやって来たのは、まったく正反対の感覚だった。

傷口から血と魔力が抜けていくのを感じる。凧が懸命に東雲の血を求め、食らい付いてくる。それが愛おしいと思えてしまう。

「あ、う……凧、ちゃん、待って……そんな、強くしたら、あ……」

吸血鬼の牙というかだ液には痛覚を麻痺させる効果があるらしい。特に吸血行為にはその成分が多く分泌されるらしいが、これが人によっては快の感情に結び付くらしい。相性にもよるとのことだが、とにかく、吸血鬼のだ液には相手に吸血に対する抵抗感をなくす魅了の効果があるのだという。

その効果は本家本元の吸血鬼であっても微々たるもの。神話伝承に語られるような強烈な催眠作用はない。凧は完全な吸血鬼化をしたわけではないと高を括っていたが、どうにもこれは東雲の想定外ではあった。

凧の吸血鬼を惹き付ける性質も厄介だ。この密着した状態では、東雲自身が凧の血を吸いたくなってきたってしまう。

「あ、あ……」

東雲は凧を強く抱きしめて、慈しむように頭を撫でる。好きだけ血を吸っていないのだと、行為を促していく。

凧が正気を取り戻した時、東雲は凧の真下でほんのりと顔を上気させて息を荒げていた。

「あ、うわ」

凧は驚いて、東雲から退いた。そして、自分がやらかしたことを思い出して固まった。

「えと、悪かった……」

何と言っているのか分からず、凧は謝罪の言葉を口にする。今まで、数え切れないくらい吸血鬼に血を吸わせたきた凧だが、自分が吸血鬼の血を吸うことになるとは思っていなかった。

身だしなみを整える東雲は、小さく苦笑した。

「気にしないで、わたしが誘ったんだし。それに、思ってたよりもずっと悪くなかった。……ね、帰ってきたら、またしよっか」

「何、言ってんだよ……」

冗談か本気か分からない口調と表情。ずっと小柄な少女で、時に年下にも見える東雲は、しかし言動が時折ずつと年上なのではないかと思えるようになることがある。雰囲気がそう思わせるのだろうか。

東雲は立ち上がって、自分の両頬を叩いた。気合を入れる、小気味よい音がした。

「じゃ、萌ちゃん助けにいきましょっか」

「ああ」

頷く風、心身にかつてない充足感を覚えている。

強い魔力の籠った血を吸ったことが吸血鬼化を促した。風の中に燻っていた力が解放されて、胸の内で渦を巻いている。

これが、第四真祖の原初の力か。

端的に言って桁外れだ。滾々と湧き出てくる魔力も、力の性質も。感じる分だけでも今までの風を遙かに凌駕している。強力な吸血鬼というのは、こんな世界を生

きているのかと風は視界そのものが切り替わったような気持ちになった。



ふわふわとした感覚だった。

まるで、見えない力に押し流されるよう。意識だけが覚醒していて、身体は指一本動かさない。

魔女の秘薬とやらを飲まされた萌葱は、何一つ抵抗できないままに夢の中を漂っている。

それが夢であると理解できた途端に、景色が明確化した。

見覚えのある景色——ほかでもない萌葱の家だ。窓から入ってくる日差しに照らされた我が家。萌葱はテーブルに座って、熱いココアに悪戦苦闘している。デフォルメされた熊のイラストが描かれたマグカップを握るのは、やや肉付きの良、ふっくらとした短い指だった。

萌葱が持つマグカップも、彼女が座るテーブルとイスも、何年か前に処分してし

まったはずだ。懐かしいと感じるのは、幼い頃の記憶が浮かび上がっているからだろう。——そう、これはきっと萌葱が幼い頃の記憶の追体験なのだ。

視線の先にはキッチンで洗い物をする母の黒髪浅葱が見える。

(これが、あの魔女のやりたい事?)

声も動きも制限された状態で、萌葱にできることは思考することだけだ。が、しかし、このような幻術に何の意味があるのか。

「萌葱、そういうえばあんた眷獣は使えるようになった?」

浅葱が萌葱に背を向けたまま尋ねてきた。

「ん? まだだよ」

「そう? もう五歳になるし、そろそろ使えるようになるのかなと思ったんだけどね」

萌葱の鼓動が早まった。

何となく、思い出してきた。ずっと昔の光景。記憶の彼方に飛ばしていた、母との会話。何ということのない世間話だが、当時の萌葱にはそこはかかない不安を抱かせたのだ。

吸血鬼の眷獣が発現するタイミングには個人差がある。萌葱は五歳を迎えても、眷獣が発現する様子を見せなかったのだ。

母親も心配するのは当然で、眷獣は弱いものでも簡単に人命を奪うほどの威力を出せる。扱いを誤れば大惨事になることは間違いない、子どもの吸血鬼を教育する上で眷獣の存在は非常に大きいのである。

第四真祖の長女として、周囲から特別な目で見られていることを自覚し始めた頃である。萌葱は自分の眷獣がどんなものなのか興味と期待に胸を膨らませていた。

その半年後、萌葱よりも先に零菜が槍ハスタ・アウラムの黄金を限定的ながら召喚した。ほんの僅かな時間しか維持できていなかったが、目の前に現れた雷の槍の形状に周囲が驚いていたのを覚えている。すぐさま大人たちが顔色を変えて零菜の眷獣について議論を交わした。それだけ特別な眷獣だったのだ。萌葱は、零菜の成長に喜びながらも戸惑う母親たちの後姿を眺めていることも、零菜に声をかけることもできなかった。零菜の眷獣が羨ましかった。先を越された悔しさで胸が詰まった。このとき抱いた感情の正体を当時の萌葱は理解できていなかった。

（こんなものを見せて、何のつもりよ）

確かに、当時の萌葱は悔しかった。妹達が次々に眷獣を使役しているのに、自分はまだ召喚を成功させてもいない。

至極当然の感情だ。それを、今更振り返ったところで何の意味があるうか。

萌葱は過去の自分の成長を追体験している。見る見るうちに身体は大きくなり、心身ともに成長していく。

小学校に上がり、勉強も運動も人と競うことが増えた。自分よりも優れたところのある友人も何人もいたが、別にそれを気にすることはなかった。萌葱にとって彼等は赤の他人で、自分と比較する必要がなかったからだ。

成長すると自分の体のことが何となく分かってくる。

萌葱は身体的が高い方ではないらしい。もちろん、吸血鬼なので人間よりは上だ。しかし、同世代の吸血鬼——特に妹達と比較しても萌葱に突出したところはない。紅葉や零菜が発揮する全身がバネでできているかのような運動性能を萌葱は持たなかった。

運動会で活躍する妹達を見て、萌葱は密かに唇を噛んでいた。眷獣を試しに出して戦闘訓練を積む妹を傍目から見ながら、戦闘向きではない自分の眷獣の弱さを恥

じた。いつのころからか萌葱は眷獸の話題を口にしなくなった。吸血鬼として家族の中でも劣ったほうだという認識は小学生のうちに抱いていたからだ。

過去の自分を見せ付けられる今の萌葱は、苛立ちを隠せないでいた。

家族に嫉妬する自分。それは萌葱にとっての黒歴史だ。この振り返りに意味はないし価値もない。

場面が変わる。

中学に上がった後の景色だ。制服を着た萌葱は一人で放課後の廊下を歩いている。沈みかけた太陽が真っ赤に廊下を燃やしている。

この日のことを、萌葱はよく覚えている。

(嫌だ……やめて……ッ)

心が震えているのに、足は勝手に進んでいく。

教室のドアに手をかけると、小さな笑い声が聞こえてきた。

「つーか、お姫様先生に媚び売りすぎじゃない」

その声は萌葱の友人のものだった。小学校の頃からずっと一緒のクラスで家に遊びに行ったこともある。そんな友人の言葉に中学生の萌葱は固まってしまったの

だ。

「どうせ家では萌葱様ーって感じでちやほやされてんしょ」

「そりゃ、本物のお姫様だからね。うちらとは住む世界が違うっしょ」

「萌葱様萌葱様。あ、でもアイツ吸血鬼なのにまともに眷獣使えないらしいよ」

「え、それマジ？ 第四真祖の長女じゃなかったっけ？」

「何か妹は話聞くよね。出涸らし？ みたいな？」

「出涸らしだったら逆じゃね。萌葱様って姉でしょ。いちおう」

くすくすと彼女達は笑っている。ドアの向こうに萌葱がいることには、当然気が付いていない。

このときの苦しみを萌葱は忘れない。友達のこと——友達だった他人の言葉が刃物のように自分の心を切り刻んだときのことを萌葱はずっと覚えている。今でも覚えていいる。絶対に忘れない。目の前が真っ暗になって、胃の中をひっくり返してしまいたくなった。呼吸が荒くなり、心臓が激しくのた打ち回る。

「この前の数学もさ、アイツ高得点だったじゃん。九十点台、萌葱だけだったじゃん。先生に出るところ教えてもらってんじゃない？」

「あー、先生も公務員だしね。お上には逆らえないって感じ？」

「うちらみたいな庶民がどんだけがんばってるか分かってないんじゃない、あれ」  
彼女達の口から零れるのは掛け値なしの悪意。萌葱がそれまで体験したことのない一方通行の理不尽に、中学生の萌葱はその場を立ち去る以外に選択肢がなかった。  
(わたしだって、こんな立場に生まれたかったわけじゃないのに)

萌葱の立場では人前で愚痴を言うこともできない。ただの口論すらも取り沙汰される。だから、理不尽は飲み込むしかなかった。

「萌葱様の眷獣は、人を感電させる程度の力しかないらしい」

特区警備隊の誰かが言った。

「体力テストも第四真祖の娘としては、どうなんだろうって数値だな」

第四真祖の血縁とか、関係ないところでも常に意識させられる。必要以上に持ち上げられて、結果が伴わないとすぐに失望される。

「また入院？　ここ最近は何調子よかったじゃん」

病床の風は両腕に包帯を巻きつけていた。

「検査だよ、検査。体調は悪くないんだ」

「腕の？」

「そう」

「どうしたの、それ」

「眷獣を使ってみたらこうなった」

「は？」

凧にも眷獣が発現したと聞いたとき、さすがに萌葱は衝撃を隠しきれなかった。ただの人間だったはずの従弟。数年前に、吸血鬼の特性を得てしまったというが、これと違って変わったことなく、むしろそれ以前よりも健康になったのでよかったじゃないかとすら思っていた。

「何で、眷獣使ったら怪我するのよ」

「さあ？　なんか、魔力に身体が耐えられなかったんじゃないかって話だけど、どうなんだろうな」

「ふーん、そう。じゃあ、凧君はきちんと眷獣を使えないんだ」

「今はね。でも、今後どうなるかは分からないよ。問題なく使えるようになれば、一番いいんだし」

「痛い？」

「麻醉してる」

「そう……風君も大変だね」

風は大変なのだ。自分自身の身体の問題は幼い頃から突きつけられていたが、それが改善したかと思えばこれである。

「大変なのは、姉さんのほうだろ？」

「え？」

「今度、何かの式典に出ないといけないって聞いたけど？」

「え、うん。そうなのよね」

「俺だったらそんな式典に出たら緊張して何もできなくなりそうだ」

風はただの世間話をしただけだろう。

萌葱にとっては衝撃だった。

社交辞令ではなく、素で労ってくれる人が今までいなかったからだ。「やって当たり前」「できて当たり前」という世界を押し付けられた萌葱には、ただ式典で挨拶をするだけのことで苦勞は感じない。だから意外ではあった。そんな風に言って

もらえるとは思っていなかったもので、不意を打たれた。

「……うん、やっぱり大変かも」

ぞくぞくした。思わず笑ってしまいそうだった。自分が求めていたものが、こんなにもあっさりとしたものだったとは思わなかった。

萌葱にだって欲はある。

血を吸いたい。愚痴を零したい。必要とされたい。認めて欲しい。自分を受け入れて欲しい。凡そ、求めていたものを満たしてくれる風は萌葱にとって好都合だった。

これが萌葱が抱えているもの。自覚し自己嫌悪を続けながらも捨てきれないでいた感情の正体だった。

当初、風が血を吸うのは麻夜だったんだ。いつもの調子で風に血を吸わせたけど、予想以上にあれがあれでびくんびくんする予定だったんだ！

原作ヒロインで普通の家庭出身者って浅葱と唯里くらいか。浅葱は継母なんだっ

たかな（うろ覚え）

東雲と萌葱は似た者同士でありつつ正反対。甘やかしたい願望と甘えたい願望は表裏一体なのだ。



## 第四部 十四話

遙か古代。まだ人間も魔族もおらず、まさしく野生が野生のまま繁栄していた時代。文明の光なき世界を生き、生態系の頂点に立っていた肉食獣。刃の如き一對の牙で獲物を仕留めたという。

剣のような歯を持つ虎。その名を冠した青き炎が、戦場を一直線に引き裂いた。ずんぐりとした体形に似合わぬ颯爽とした動きはさながら豹のようであり、しかし力強い前足の一撃はヒグマの爪を思わせる。

全長は優に五メートルを超え、灼熱の身体は鉄をも融解させる。特殊な術式で魔力に耐性を持たせているアルディギアの歩兵戦車が、触れただけで真っ赤に熱せられ、原型を留めることなく押し潰されていく様を、特区警備隊の隊員達は畏怖と尊敬の念を込めた視線で眺めていた。

これこそ、ダーナの眷獣メガンテレオン。単純な攻撃性能は真祖に伍するとまで称される純粹攻撃型の眷獣であった。

アルディギア軍が持ち込んだ戦車も砲台も何もかもを圧倒的な暴力で叩き潰して

いく。

「ほんとに久しぶりだねエ、ここまで眷獣を暴れさせられるなんて！」

強力な吸血鬼は、それだけ制限も多い。眷獣の全力戦闘など、滅多なことではできないのだ。暁の帝国にやってきてそれなりになるが、メガンテレオンの召喚は三回しかしていない。

「後腐れなく、徹底的に全力でやっちゃまえ。人が乗ってない鉄屑ならいくらでも壊して構わん！」

ゆえに派手に暴れさせる。

メガンテレオンもまた、鬱憤を晴らすかのように縦横無尽に駆け回り、火の粉を散らして暴れまわった。

爪が戦車の装甲を切り裂き、牙がゴーレムを砕き、熱と咆哮が装甲車両を粉碎した。

「ダーナさん！」

部下が叫んだ。

「おう。あんた達、注意しな。ポッドのお出しました！」

ベルゼビュートが支配した敵の兵器の中で、ダーナが目の仇にしているものがある。

正式名称は不明なので、便宜的にポッドと呼んでいるものだ。見た目は白い金属の筒だが、どうやら中に吸血鬼が入っているらしい。

それも、意識を奪われた吸血鬼である。ポッドは内部で吸血鬼を催眠状態に陥らせ、眷獣を兵器として利用する悪辣な人道に反する生体兵器だったのだ。

同じ吸血鬼として、とてもではないが無視できないものだ。

「アルディギア軍の兵器というよりは、アルディギア解放戦線の連中のもんだろ。うが……何にしても気にいらんのよ！」

轟、と熱風が舞い上がりメガンテレオンが飛び掛った。対応したポッドが召喚したのは真紅のコブラと氷の大鷲の二体。三体の眷獣の激突は余波だけで人工林を燃やしつつくさんばかりのものだった。

「キヨ！」

「分かってますよ」

新人隊員、暁の帝国生まれの十九歳清原清子は、緊張に唇を震わせながらも自分

の眷獣を呼び出した。

「ミクマリ、おいで」

現れたのは一メートル弱のアマガエル。これが大きな声で鳴くと、周囲に霧が立ち込めた。二回目の鳴き声で霧が晴れ、代わりに雨粒が降り出した。魔力を帯びた豪雨が人工林を打ち、飛び散る火花を消していく。

「そんなに長くは持ちませんから」

清子は若い吸血鬼だ。水分を精製して雨として降らせるという希少な能力も、メガンテレオンの熱に負けないくらいの出力を続けていけば精神力が持たない。

「上出来だ！ 救出班！」

「はい！ 続け！」

十人の工兵とその護衛がポッドに向かっていく。銃撃があったが、魔術で強化した盾を並べて必死に銃弾を防ぎ、また眷獣の援護を受けながらポッドの破壊と吸血鬼の救出作業に当たった。

敵を叩き潰すだけならば、ダーナだけでもどうにかなりそうではあったが、何分囚われた吸血鬼を救出しなければならぬという事情があるため進軍速度は緩めで

ある。もちろん、派手に戦えば、それだけダーナに敵の攻撃が集中する。アルディギア解放戦線が持ち込んだ兵器の総量は不明だが、とても戦争ができるほどではないだろう。数に限りがある兵器をダーナに当てれば、それだけ別働隊が動きやすくなる。

敵が仕掛けた凍結封印を解除するために、何と少しでも零菜に迎賓館まで辿り着いてもらわなければならないのだ。

ダーナの役目は、その道を切り開くことである。第四真祖救出の功は、彼の娘に任せる。別に戦功が欲しいわけではないし、そもそも救出戦などダーナの性分には合わない。やはり、こうして敵の眷獣と殴り合っているほうが、ずっと気分がいい。だから、感謝している。

不謹慎極まりないことではあったが、メガンテレオンを暴れさせる機会をくれたことに対してだけは、アルディギア解放戦線もいい仕事をしたと誉めてやりたいところであった。

地上で巨大なサーベルタイガーが火を吹いている頃、空には白銀の彗星が瞬いていた。

それは一頭の天馬であった。

その名はアルスウィズ。白亜の身体は世界を照らす太陽のようであり、その背には主である銀の姫騎士を乗せている。

クロエは右手に聖槍ミスティルティンを握り、夜空を駆けている。

鎧のように眷獣を身に纏う吸血鬼もいるのだ。クロエのように、騎乗する眷獣を持つ吸血鬼がいてもおかしくはないだろう。

戦闘機と違って空中戦を演じることができると自負しているクロエではあったが、本格的な戦闘はこれが初めてだ。一気呵成に攻め立てて、敵の本陣を強襲できるとまでは思っていなかったが、敵の対空ミサイルや狙撃をやり過ごすのに手一杯で、いまいち活躍できていない。

「ミサイルで狙われるとか」

三発のミサイルが背後から迫る。戦場は那月の結界の範囲に固定されているので、あまり高くを飛ぶことができないというのもクロエの戦い方を制限している。

「もっと広ければ、もっと速く飛べるんだけどな！」

ぐちぐち文句を言っても仕方がない。空をぶんぶん飛び回って、敵の視線を集めるのも仕事のうちだ。

アルスウィズが放つ電撃でミサイルを迎撃し、眼下でクロエを狙っている多連装ミサイルの発射装置を目掛けて雷撃を放たせる。

いくつかの雷撃は防衛術式で弾かれてしまったが、それでも一度に三箇所を攻撃し爆破することに成功した。

どれだけ高性能なミサイルであろうとも、アルスウィズを捕らえることはできない。

戦闘機よりも速く、ミサイルよりも運動性に優れた眷獣である。対抗するのなら、同様の空中戦闘能力を有する眷獣を出すほかない。

それを、相手も分かったのだろう。支配された兵器に知能があるのかどうかはさておいて、状況に合わせて手を変えるくらいはできるらしい。

ポッドから召喚された雷のコンドルや溶岩のトンボ、漆黒の巨大蝙蝠といった飛行能力を持った眷獣がアルスウィズに挑みかかってきたのである。

コンドルの雷をアルスウィズの雷が相殺する。雷光の激突をすり抜けて、溶岩のトンボが飛んでくる。どれくらい温度になるのだろうか。触れたらただではすまないということだけは容易に理解できる。

「ミスティルティン起動」

音声認証により、クロエの槍が眠りから目覚める。穂先が青白く光、石突まで光の線が無数に駆け抜ける。

「リバーサルシールド、前面展開！」

クロエが穂先をトンボに向けると、ミスティルティンの前面に円形の魔法陣が現れる。特殊かつ高度な術式を搭載した新型退魔兵器。アルディギアの錬金術師が、神格振動波とは異なるアプローチで究極の退魔兵器を生み出そうとした意欲作である。

魔法陣と正面から激突したトンボの頭が空気に溶けるようにして消える。熱も魔力も霧散して、身体の半分が消失したことで能力を失い失墜していく。

「よし、まずは一体！」

襲い掛かる雷撃をミスティルティンで切り払い、アルスウィズを走らせる。

背後から追いかけてくるコンドルは、かなりしつこい。速度もアルスウィズに匹敵する上に要所所で雷撃を飛ばしてくる。保有魔力も相当のもので、クロエよりも高い能力を持つ吸血鬼が宿した眷獣であろう。歳若いクロエよりも強い吸血鬼などごまんという。悔しいと思う気持ちはあるが、かといって卑屈になっても仕方がない。

強いなら強いと理解した上で撃墜する。

「それにしても、うん、兄さんの血は凄いな。まるで別世界だ」  
今更ながらに思う。

アルスウィズの能力が上がっているのを実感する。それにクロエ自身の力も大分底上げされているように思う。一時的なドーピングであっても、これは凄まじい効能だ。

吸血鬼に生まれながら血を吸ったことのなかったクロエであったが、風の血を吸ったことで眷獣が真の力に目覚めたということか。やはり吸血は吸血鬼の基本だったのか。身体がぼかぼかとして熱く、それでいて頭が冴え渡って多幸福感に包まれている。今なら何だってできてしまえそうだと思えるくらいに気分がいい。

「こういうことか」

学校の友人が言っていたことを思い出す。彼氏の血を初めて吸ったという吸血鬼の同級生が興奮気味に話していたものだ。世界が広がったようだったと。今まさにクロエはその世界を実感している。

「うん、よし、一気に行くぞ」

さらに加速したアルスウィズは、進路を塞ぐようにして立ちほだかる蝙蝠に真っ直ぐに突っ込んでいく。

ミスティルティンのシールドが前面に展開。そこに、蝙蝠から破滅的な超音波が叩きつけられた。

「ぬ、重……ぬ、くぬお！」

勝負は一瞬。

ミスティルティンに魔力を込めたクロエが、蝙蝠の超音波を押し切ってその下半身を消し飛ばしたのだ。

恐るべきはミスティルティンの能力だろう。

破魔の力といっても、それは多種多様千差万別存在する。ミスティルティンの能

力は魔力と靈力の反転であり、魔力を靈力に、靈力を魔力に瞬時に変換することで敵の攻撃を対消滅させる効力を有する。

吸血鬼なので魔力を扱うクロエだが、ミスティルティンはクロエの魔力を靈力に変換して敵に叩き込むことができるし、前面に展開されたシールドは敵の魔力を靈力に変換してしまう。

するとどうなるか。

眷獣であれば、自分の魔力が靈力に置き換わるため消し飛んでしまう。靈力と魔力は同一の性質を持ちながら互いに打ち消しあう関係にあるからだ。

蝙蝠の眷獣もミスティルティンによって肉体を構成する魔力を靈力に変化させられたことで体内で自分の魔力と自分の魔力を反転させて生成された靈力が打ち消し合って消し飛んでしまったのだ。

クロエはさらに身体の大半を失った蝙蝠に対してアルスイズの突撃攻撃を上乗せしている。眷獣に限らず魔術で防御力を底上げしている要塞などにとっても、この連撃は致命的な威力を発揮するだろう。

後はコンドルの眷獣を倒せば、迎撃に來た敵の眷獣は撃退したことになる。

クロエはアルスウィズを走らせる。恐らくはコンドルを倒しても第二、第三の迎撃が行われるだけだろう。それでも、クロエが空をかき回している間は、ミサイルなどの対空攻撃の多くはクロエに割かれることになる。それだけでも、味方を大いに助けることにはなるのだ。



鬱蒼とした人工林は、すっかり闇に包まれている。四方から吹き付ける風には多大な魔力が混じっており、火薬の臭いはツンと鼻を刺激する。爆発物の炸裂音や魔術や眷獣が発する魔力などが入り乱れて風の感覚を惑わせる。

今更ながらに大事になったものだと凧は内心でごちる。

定義上は戦争ではないが、やっつけることは似たようなものではないか。実質的にはアルディギア軍と特区警備隊の最新装備を相手に戦わなければならない、それを使うのはアルディギア軍の騎士達である。事実上敵に操られている状態であったとし

でも、当初の予定では彼等精銳がそのまま敵になっていたのだから性質が悪い。

アルディギア軍の騎士を相手にすると、ベルゼビュートに支配された電子兵器を相手にするのはどちらがよかったのだろうか。

いいほうに考えるのならば、相手はアルディギア騎士の技術や知識を使うことができないというくらいだろう。電子機器を封殺された状況は、科学の国である暁の帝国にとってかなり痛い状況である。

「ねえ、凧ちゃん。萌ちゃんを助ける方法、分かってる？」

東雲が声を潜めて話しかけてくる。

「分かってる。どうしたらいいのか、頭に思い浮かんでくるよ。力の使い方っていうのかな。何となく分かる」

「そう、ならいいんだけど」

東雲はそっと自分の首をなでた。凧に噛まれたところが、むずむずした。気のせいだろうか、あれは誘った東雲にとっても少しばかり想定外だったのだ。

「ベルゼビュート。蠅の王か」

失われた神話に語られる魔王と同名の巨大な悪魔。強大にして邪悪な悪魔の王と

しての姿容をそのままに体现しているかのようであった。

「わたしの眷獣よりもでっかいなあ。大きさだけなら、父さんのよりも大きいかね」

東雲はどこか感慨深そうにベルゼビュートの巨体を見上げた。

「教官が抑えてくれてるのが幸いだっただな。何だかんだ言っても、いかれた強さだからな。あの人は」

今でも空中を飛び回り鎖を出しては悪魔を押さえている那月の分身体は、那月本人の力には及ばないものの、戦闘技術などは受け継いでいる。那月が操る分身なのだから当然だ。そして、戦闘経験の少ない研究職の魔女は那月に翻弄されるばかりである。

「といっても、悪魔を呼び出すだけの余裕はなさそうだし、わたし達でやるしかないか」

吸血鬼の警備隊員にも余裕があるわけではない。もともと、第四真祖の帝国は吸血鬼の人口が少ないのだ。最新兵器が封殺された戦場に出られる吸血鬼となるとさらに限られる。まして、あの巨大悪魔と戦えるだけの力を持つ吸血鬼は、ごく一握

りだ。

「こっちにも少しは人員を割いて欲しいところだな」

「仕方ないよ。優先順位を考えれば、迎賓館の奪還が上なんだから」

東雲の言葉に凧は不快そうに顔を歪める。

迎賓館に囚われた第四真祖達と各国要人。対してベルゼビュートに囚われているのは皇女とはいえ少女一人だ。国際的な立場も考慮し、第四真祖という国の支柱を救出することに人員を割かざるを得ないのは理屈としては理解できる。

ベルゼビュート自体も、古城や妃達がいればどうにでもできる。萌葱の生死を問わないという判断を下せば、駆逐するのは難しくない。絶対に古城はそんな選択を認めないだろうが、選択肢としてその非情な結論が用意されているのを感じるのは、弟分として反発したいところだった。

「じゃ、わたし達で助けようか。囚われのお姫様を」

「ん。もちろん」

凧は頷く。否やはない。萌葱を助けるためにここまで来たのだ。

凧と東雲はすでにベルゼビュートの足元まで辿り着いている。後は敵の心臓部ま

で一直線に飛び込んでいくだけだ。

「道はわたしが作ってあげる。凧ちゃんはただ只管に、萌ちゃんに向かって走って」  
走るといってもどうやって——。そんな疑問はすぐに解消した。誰でもない、凧の内側から声ならぬ声が教えてくれたのだ。

焔に輝く瞳が漆黒の悪魔を見上げる。二人の魔女が操る空前絶後の大悪魔を、これから凧は切り崩さなければならぬ。困難な、極めて危険な仕事である。それも、萌葱を人質に取られた状態で。

「大丈夫。ベルゼビュートがああしていられるのも、萌ちゃん的能力を取り込んでいるから。萌ちゃんを殺してしまったら、あの萌ちゃんの眷獣は使えない。生きてさえいれば、凧ちゃんなら何とかかなるでしょう?」

「……うん、そうだな。できる」

確信はある。受け継いだ第四真祖にのみ許された能力は、萌葱をあゝの悪魔から必ず萌葱を救出することができるはずだ。

「まずはわたしからね」

東雲が急速に魔力を高める。おどろおどろしく、それでいて太陽のように熱い魔

力の投射。一秒と経たず、彼女の背後には身長三メートルばかりの白装束の女が現れた。

「ヨミ」

ただ一言、彼女の名前を呼ぶ。

応答はなく、小さな怨嗟の苦悩に塗れた虚ろな呻き声をもらすだけ。ヨミは異様なまでに長い髪の間から、真っ白な眼球のない顔を悪魔に向ける。

「aaa  
aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa！」

声帯はおろか肉すらついていないにも関わらず、ヨミが発した声は人工林を震わせた。恐ろしい、と本能が萎縮する。まるで幾千万の呪いの声を叩きつけられたかのようなのである。そこに意味はなく、ただ怖いという感情だけが湧き上がる。

もともと、危機感を抱きにくい性質の凧にはさほど効果はないものの、通常の生物ならば嘆きの声だけで精神に変調を来たすことになるであろう。

「さあ、一気に決めてしまおうかッ！」

東雲と同調した女の白骨は髪を振り乱した。艶やかな黒髪が伸びて蜘蛛の糸のよ

うに絡まりながら、無数の縄となってベルゼビユートの胴体に巻きついていく。風はそれを見届けてから、魔力で編み上げた翼を広げて飛び立ったのだった。

## 第四部 十五話

うおおおおおおおお金セイバーアア……！

ジークフリート！

やったね、宝具レベルが5になったよ（白目）

空菜と麻夜は同じ部隊に配属された。

空菜の持つ眷獣は零菜の槍の黄金と同様に魔力を無効化する。どれほど高度で複雑な魔術であっても、容赦なく問答無用で消し去ってしまう魔力無効化能力は、術式を解除する手間もなく一瞬で勝負を付けることができる。

よって、空菜と零菜のどちらか一方が迎賓館に到達する必要がある、二人は二つの部隊に分かれて別方向から攻め込むこととなったのだ。

麻夜と空菜が同じ部隊になったのは単純に割り当ての都合だった。

麻夜の眷獣は攻撃よりも防御が得意な鎧の眷獣である。彼女の仕事は空菜の護

衛。空菜が無事に迎賓館に辿り着けるようサポートするのが麻夜の役割である。

特区警備隊の防弾ジャケットを身につけた少女たちは屈強な隊員達と共に庭園の西門から那月の結界内部に侵入した。

人工林が生い茂る東門方面とは異なり、このエリアは記念館や博物館、公園管理事務所などの建物が並んでおり特区警備隊やアルディギア騎士団の駐屯地でもあった。そのため、騒乱初期の段階で敵の兵器群の強襲を受けてずいぶんと荒らされてしまっていた。しかし、建物は残っている。銃火器程度で鉄筋コンクリートの壁を貫通することはまず不可能だ。

数時間前までの見慣れた光景は失われた。周辺には無数の鉄屑がばら撒かれていて、芝生や道は穴だらけになっている。

「ここから、九百メートルですか」

空菜は小さく嘆息した。

「真っ直ぐ走るだけなら、さほど時間もかからないんですけどね」

「真っ直ぐ走るは無理だよね。徒競走というよりも、障害物競争だから」

「障害物は、引っかかったら死んじゃう代物。笑えませぬね」

空菜の言葉には緊張が見られない。麻夜は内心ではかなり緊張しているのに、隣の零菜似の少女はまったく顔色も呼吸も変えていない。

ホームクルス故の感情の希薄さであり、恐怖の薄さは戦場でかなり役に立つ。だが、羨ましいとは思わないが。

「空菜はこんなところよりも凧君のほうに行きたかったんじゃないかい？」

ふと、そんな言葉が口を突いた。

「そうですね」

空菜は当然とばかりに答えた。

「正直、第四真祖とは何回か顔を合わせたくらいです。娘である麻夜さんには悪いとは思いますが、わたしからすれば他人です」

「凧君は違うってことか」

「あの人はわたしの主人です。わたしは最初に血を吸った人を主人と認識するように設計されています」

「え、そうなの？」

「そうです。主人を設定する方法としては、最も簡易的だったということでしょう。」

もともと、一定時間ごとに吸血を必要とする身体ですので、そうするのが都合がよかったのだと思います」

製作者の意図など、今となっては分からないとも空菜は付け加えた。

事実としてあるのは、空菜が最初に牙を突き立てたのが凧だったということであり、そして空菜は初めから凧を狙っていたということだけだ。凧の情報を空菜は出会う前から持っていた。零菜を狙う以上、その周囲の情報を集めるのは当然である。そして、より強い力を発揮するために凧の血を狙うのも、零菜を打倒するという目的を果たすためには必要な過程であった。製作者が消え、野良ホームクルスとして野に放たれた時点で、空菜が凧を主人とするのは自然な流れだったのだろう。青白い光が煌めく。飛んでくるのは靈力を装填した対魔族用の呪装弾だ。常ならば敵を打ち倒してくれる頼れる武器だが、今回は自分達に牙を剥いた。

「下がって！」

声がるるや否や、土が盛り上がって部隊の前面に半円状の壁が生まれた。攻魔師の一人が使った防御魔術である。土壁は幅十メートル、厚さ三メートルといったところか。土を操る魔術は暁の帝国ではマイナーだが、土を敷き詰めた公園ならば本

領を發揮することも難しくない。自然にあるものを操作するため、魔力で一から擬似的に物質を想像するよりも燃費がよく規模も大きくできるといふ利点もある。結果、飛来した二十六発の呪装弾は誰も傷つけることができないままに役割を終えた。

「かなりの威力ですね。弾丸そのものは決して大口徑というわけではありませんでしたが」

地面に落ちた呪装弾を拾い上げた青年が呟く。

「これ特区警備隊の弾ですよ。当たれば神経系が痺れて魔力が一時的に使えなくなります」

「ああ、マジだ。K-10じゃねえか」

口々に隊員達が呟いた。

K-10は暁の帝国に本社を置くテクノピストル警備保障が開発した暴徒鎮圧用の銃弾だ。殺傷力は低く、弾丸に治療魔術が付与されているため、直撃しても後遺症も残しにくい。最大の特徴は魔力を乱す術式が込められていることで、魔力を扱う魔族や魔術師などを制圧するのに有効だった。

K―1に始まり、一年ごとに対魔術式を更新して今年で十年目。K―10は、まさしく最新の対魔弾であった。

「アルディギアの強化服がお出ましか」

K―10をばら撒いてきたのは、アルディギア解放戦線とアルディギア軍に属する騎士だった。前方でマシンガンを構える五名全員が最新式の対魔族用強化外骨格を着込んでいる。

「生命反応は？」

「ありません。体温、呼吸ともに変化なし。亡くなっています」

部隊長の問いに、目を細めて騎士を見た攻魔師が答えた。

「そうか。できれば、ご遺体は綺麗なままご遺族に返還したい。が、拘っている場合ではない。総員、鎧を狙え。身体に当てても意味はないぞ」

対魔族用強化外骨格そのものが、騎士の遺体を操っている状態である。よって、あの騎士を止めるのなら、部隊長が言うように鎧そのものを破壊するほかない。

無骨な鉄色の鎧は、中世に活躍した騎士のプレートアーマーを基にデザインされたという。全身を覆うものではなく、胸部と四肢にプレートを貼り付けているだけ

のようにも見えるが、それで十分すぎるほどの防御性能と運動性能を保証しているのだ。

「撃て」

号令の下に五人の騎士に一斉射撃が加えられる。旧式の銃だが、人間に使う分には過大な威力と言えるだろう。

射撃はほんの三秒程度。放たれた弾丸は百を優に超え、五つの人型を蜂の巣にする——ことはなかった。

弾丸の雨の軌道が空中で逸れる。それはまるで磁石の同じ極同士が反発し合っているかのような光景であった。

理屈は単純。防御術式を起動し、不可視のシールドを張ったのだ。対物ライフルでも貫けないほどに強力な防御魔術である。

アルディギア騎士が銃口を特区警備隊に向ける。K-10がたつぷりと装填されているであろう特区警備隊の小銃である。科学技術の脅威が自分自身に跳ね返ってくるという百年以上前から語られてきた皮肉が今まさに特区警備隊を襲っている。

「刃シールカ・アルゲントウムの白銀」

白銀の刃がアルディギア騎士の頭上から降る。獣化して身体能力を高めた空菜がアルディギア騎士の頭上まで跳躍、真上から魔力を無効化する眷獣の巨腕を叩き落したのだ。

刃の白銀と黄金ククリッスの腕を持つ者の融合体は、一列に並ぶ五人の騎士のうち、中央の三人を押し潰す。防衛術式など紙屑にもならない。あっけなく貫かれ、鎧は魔術防衛を失いたただの鉄屑と化して引き千切られた。

さらに現れた巨人は身体を捻り、豪腕を振るって残る二人を跳ね飛ばそうとする。アルディギア騎士は、黄金の腕を持つ者の攻撃が自分の身体に触れる前に、大きく背中を逸らして横薙ぎの豪腕を躲した。それは、人間の骨格ではおよそ不可能な姿勢であった。事実、骨という骨が砕けた音がした。

「ホラー映画みたいだ」

昔見た映画を思い出して麻夜は顔を歪めた。頭が背中側に反って地面に触れるほど腰を曲げてしまうなど、誰が想像できるだろうか。

肉体がどうなろうと意味がない。鎧と肉体の主従関係は逆転している。鎧が無事ならば、肉体が砕けようと構わないとでもいうかのような動きである。

「ル・ジョーヌ！」

麻夜の叫びに呼応して、雷撃の騎士がアルディギア騎士の一人に踊りかかる。アルディギア騎士は腰から剣を抜いてル・ジョーヌの片手斧を受け止める。魔族に対抗するために用いられる霊剣である。眷獣の一撃にも、しっかりと耐えている。ただし、霊剣が受け止めたのは一振りだけだ。雷光の騎士は二振りの斧を持つ眷獣。アルディギア騎士が一振りの斧を受け止めた瞬間に、下方からもう一振りが襲い掛かってきた。

麻夜の眷獣の中で最速を誇るル・ジョーヌの斬撃は、過たず死体を操る鎧のど真ん中、胸部装甲に刃をめり込ませた。

こうなってしまうえばこちらのものだ。麻夜の魔力は雷撃へと変換されて刃を介して敵の内部に送り込まれる。

萌葱の眷獣が電子回路を介して鎧を操っているのなら、麻夜の電撃はその電気回路そのものや破壊してしまう。回路が使えなくなれば、もう萌葱の眷獣の支配は届かない。一瞬の紫電の炸裂と共に、アルディギア騎士は静かに永久の眠りに就いた。そして最後の一人も空菜の眷獣に打倒され、二十メートルばかり弾丸のように跳

ね飛ばされた上でケヤキの木に衝突して動かなくなった。

麻夜と空菜が交戦を開始したとき、別ルートを進んでいた零菜も敵の妨害を受けていた。

敵をすり抜け、打倒しながら零菜は遊歩道を走っている。特区警備隊員に守られながら、迎賓館を目指している。こんな時でなければ、走って十分とかわからない距離だ。だというのに、零菜の行く手を阻むかのようにオレンジ色の光の雨が降り注ぎ、その度に進行を妨げられる。一発でも当たれば肉も骨も持っていけるだろう。現に、弾丸が直撃した木々や地面には大穴が開いている。もちろん、零菜が何の対策もしていないわけではない。影の漆黒リヒト・ニゲラを纏った零菜の身体能力と防御力ならば、速射砲にだって耐えられるし撃たれてから避けることも難しくない。とはいえ、それが銃撃が何千と繰り返されれば話は別だ。見つからないように茂みに身を隠す必要もあれば、眷獣や盾の影に隠れる必要もあった。

迎賓館まで二百メートル地点に来るまでに、零菜を護衛していた特区警備隊員の三割が脱落している。幸いなことに死亡したわけではないが、怪我で戦列について

くる事ができなかつた者と怪我人を介抱するために戦列を離れなければならなかつた者がそれだけいたという事だ。

目標の迎賓館まで、やっと三十メートル地点まで到達した。遊歩道からはずれた木々の中で、二十三人にまで減った特区軽微隊員と共に迎賓館の様子を窺う。

入口の前には三両の四足戦車。さらに対魔族用強化外骨格を装備したアルディギア騎士十人。屋上には対空機関砲やミサイルの発射装置などなど、戦争を前提とした兵器が満載だ。

人工林はここまで。

残る三十メートルに遮蔽物はないが、すでに敵に捕捉されているので飛んでくる銃弾の数に違いはさほどないだろう。こうしている間にも、結界や眷獣達を敵の銃弾が削っているのだ。厄介とすれば、やはりアルディギア騎士達だろう。対魔族用強化外骨格を身につけた彼等の白兵戦の能力は、こちらを遥かに上回っている。

「零菜さん！ ダーナの部隊がじきに到着しますが、どうですか!？」

爆発、銃声、咆哮、様々な轟音が入り乱れる戦場だ。近くで怒鳴り声を発したであろう隊長の言葉も零菜の耳に辛うじて届いた程度になっている。

「いけます。中さえ見えれば、一気に！」

「了解です！ ……竹中、映せ！」

竹中と呼ばれた女性攻魔師は、頬の煤を手の甲で拭うと両手の人差し指と親指の先をくつつけて輪を作った。

「投影します」

竹中の目が見開かれる。

指の輪が光り、連動して空中に映像が映し出された。それは、大気をスクリーンとする映写機のようなものだ。

透視の過適応者である竹中は自分の視た映像を映写の魔術と組み合わせ、迎賓館の内部の様子を映し出したのである。

「零菜さん、そう長くは持ちませんので急いでください！」

竹中は苦痛と吐き気に顔を歪めている。過適応者は魔力も呪文もなく特定の能力を発揮する言わば超能力者だが、その力は身体への負担が大きなものも少なくない。竹中のそれも透視能力と聞こえはいいが、発動中は一歩も動けないし、凄まじい頭痛に悩まされるもので好んで使いたい能力ではないのだ。それを魔術と併用す

るのだから、透視の発動は一分が限度であった。

「分かってます！ 来い、ハスタ・アウルム 槍の黄金！」

零菜の手に現れた雷光の槍が、夜闇を明るく照らし出す。降り注ぐ銃火の嵐を雷と化した槍が一瞬にして打ち落とす。銃弾程度の速度で雷を出し抜くことなどできるはずがない。まして、槍の黄金は意思を持つ雷の槍だ。使いこなせば絶対的な防御と絶対的な攻撃を併せ持つ必殺の武器となる。

零菜は影の漆黒に魔力を込める。闇色の衣がさらに暗さを増して、槍の黄金の光ですら照らせない闇となる。筋力と敏捷性は瞬間的に高位の獣人を上回るほどのものとなる。こうまでして初めて槍の黄金は真価を発揮できるのだ。

インテリジェンス・ウェポン  
意思持つ武器は、主の意思に従わずともある程度の効力を発揮する武器型の眷獣だ。だが、それでも主の意思は眷獣の意思に優先するものだ。となると、武器のほうに優秀だった場合、指揮系統が混乱する。最適な動きをするはずの武器の性能を主が貶めてしまうのだ。

零菜もまた、槍の黄金の力を引き出しきれしていない。この半年の間に、それを何度も実感する場面に出くわしていた。影の漆黒が、零菜の基礎能力を底上げする。

雷の槍の動きにもある程度ついていける。目で追える。反応できる。それくらいの能力まで零菜は自分自身を強化したのだ。一瞬、槍の黄金と零菜の意思が合一した時、防御不可能な超精密狙撃が可能となる。

零菜は逆手に槍の黄金を持ち、ただ一点を見つめて投撃する。

「ッ!!」

声を発する事はない。ありつたけの力を穂先の一点に集中した槍の黄金は減速することなく迎賓館に吸い込まれる。

迎賓館は十三の結果が施されており、十三の結果が互いに影響しあって防御力を跳ね上げる積層魔術防御陣に守られている。旧き世代の眷獣の攻撃にも耐えるとされる国の施設の外壁に零菜の眷獣はいとも容易く穴を開けた。積層魔術防御陣は、槍の黄金に触れた瞬間に砕け散った。魔力を無効化する槍を前にしては、魔術防御などあってないようなものである。そして、魔術防御のない鉄筋コンクリートなど、槍の黄金にとっては紙にも等しい。問題は射線上に人がいないかどうかと槍の黄金が決った壁や柱、その他資材などが建物の崩落を誘発したりはしないかということくらいだった。透視能力でわざわざ射線を確認したのも、安全に人質を救出するた

めだ。

手応えはあった。

槍の黄金は、ただの一撃でアルディギア解放戦線が苦心して発動した凍結結界を切り裂き、無力化したのである。

直後、ダーナの眷獣が正面玄関に向かって突撃してくる。

彼女の担当していた地域の敵勢力を駆逐してきたのだ。途方もない破壊力の眷獣が、一瞬にして勝敗を別った。

敵の兵器群が次々と燃え落ちていく。

「迎賓館内部の凍結魔術の反応が消えました。作戦成功、ホールは開放されました！」

「よし、我々は予定通り撤退する。気をつけろ、まだどこから敵が出てくるか分からないぞ！」

零菜の部隊はあくまでも槍の黄金による凍結魔術の破壊が目的だ。その目的を果たした以上はこの場に踏みとどまる意味はない。ダーナが引き連れる囹部隊はそのまま迎賓館への突入部隊へと様変わりする。

荒々しく迎賓館の壁面を登るサーベルタイガーが、屋上の新たな戦場と見定めた。とにかく、無人兵器は問答無用で破壊する。そのように命じられた眷獣は、圧倒的な力でアルディギア王国の最新兵器を融解させ、鉄屑に変えてしまう。

同じ吸血鬼として、零菜は羨望を覚えずに入られなかった。三十メートルを隔てて感じられる自分をずっと上回る魔力の波動。

「零菜さん、引きますよ！」

「……はい」

迎賓館の中にはまだ古城達がいる。今頃は那月が転移しているはずだから、万に一つもないだろうが、真っ先に駆けつけたいところだった。

だが、ここでわがままを言っても仲間を危険に曝すわけにはいかない。

零菜の仕事は終わったのだ。反対側で戦っている空菜や麻夜の部隊にも撤退命令が出るだろう。

速やかに退いて、成り行きを見守るしかないのか。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

凄まじい咆哮が身体を叩く。

巨大悪魔ベルゼビュートの雄叫びだ。

「凧君……?」

悪魔に挑むのは凧と東雲の二人。東雲の脊獣が悪魔を圧倒しているのは見て取れるが、凧の背中から伸びる羽はいったい何だ。

見たことのない能力。だが、それは古城が本気を出したときの姿によく似ている。「あれが、<sup>ルイト</sup>原初の力」

零菜は生唾を飲んだ。凧が背負う漆黒の翼は、まさしく古城が切り捨てた第四真祖本来の能力の一端に他ならなかった。



## 第四部 十六話

かつてない魔力の昂ぶりに風は唇を噛む。

心拍数が明らかに上昇している。激しい運動の所為ではないだろう。背中の翼は鳥のように空気を受け止めて浮力を生み出すものではないようだ。ただ思うだけで身体は空中に舞い上がる。重力制御。重力剣の眷獣の効果も合わせて空中戦を可能としているのだ。

ベルゼビュートの足を自分の足場にして蹴り上がる。凹凸の多い体表面は足場にできる場所が多く、上を目指すにはちょうどよかった。

東雲の眷獣が操る妖しい髪がベルゼビュートに絡みつき、その動きを制限している。那月の分身体の鎖も合わさって、ベルゼビュートの動きはほぼ止まった状態で、ベルゼビュートからの邪魔はない。それも、持って数分の猶予だろう。ベルゼビュートが戒めを破り活動を開始するまでの短時間で風は萌葱が監禁されている心臓部に突入しなければならぬ。

園内の建物を下に臨む位置まで昇った。目的地まで残すところ三分の一といった

ところか。勢いのままに飛んできた凧の侵攻速度が緩んだのは、ベルゼビュートの肩に佇む魔女が明確に凧に戦意を向けてきたからだ。

「ッ……」

悪魔が動けなくとも、その主は健在だ。那月を追い回すのを止めて、クシカはベルゼビュートを駆け上る凧に狙いを変更したのだ。

宙空に現れたのは長さ三メートルに達する巨大な石杭。形状は錐に似ていて、先端がドリル状に捻れている。

鋭い石杭の魔弾が重力に従って落ちてくる。たった一発だけでもちよっとした眷獣の突進と同程度の威力にはなりそうだ。

小さく吐息を漏らす。凧の身体から力が抜ける。落ちる石杭が胴を貫く寸前に、凧は宙に身体を放り出していた。紙一重で石杭との激突を避けた凧は、地上に向けて落下するかに思われた。

インフェリア・アーデル  
「不出来な黒剣」

漆黒に煌めく粉が凧の身体を押し上げる。重力を制御する眷獣の能力を駆使して、凧は磁石にでもなったかのようにベルゼビュートの身体に着地する。下ではな

く横方向に重力を発生させたことで、凧は大悪魔の身体を地上と同じように走ることができるとだ。傍目から見れば奇妙な光景に映るだろう。凧自身も、信じられない気持ちで一杯だ。

「ユリカの言っていた弟君ね。ああ、でもその羽は、記憶にありませんわよ」

クシカとユリカ。

悪名高い吸血鬼ヴァンパイアイーター喰らい。

多種多様な能力を持つ吸血鬼を捕縛し、取り込むからには彼女達の魔術の腕も確かでなければならぬ。

クシカのフィンガースナップ。空気を弾く軽妙な音は必殺の呪文と同義だ。背後に展開した二つの魔法陣はそのまま砲門として機能する。

青白く輝く複雑な紋様が高速回転し、人間の腕くらいの大きさの石杭を乱射し始めた。

先ほどの石杭がロケットランチャーならば、今回の石杭はまさしく自動小銃のフルオート射撃。それも魔力が続く限り撃ち続けられる凶悪な代物だ。

凧の斥力障壁ならば、多少は持ち堪えることもできるだろう。だが、それは一時

しのぎにしかならない。十発は耐えられても、二十発は耐えられまい。

遮蔽物のないこの場所で、凧が生を拾える可能性など方に一つもありはしない。殺意の弾丸は一秒とかわからず凧の身体を刺し貫く。防御に徹しても三秒も持たないのは明白だ。

クシカは凧が見るも無残な肉片に変わる瞬間をその目に焼き付けようと眼を開く。直後、その視界が、真っ赤に染まった。

「な……」

ずぐん、と奇妙な音が胸の真ん中でした。

喉からこみ上げる灼熱が気管を塞ぎ、咽てしまう。

「ば、な……」

クシカの眼前に凧がいた。衣服がところどころ裂けていて、血を流してはいるがそれだけだ。苦悶に顔を歪めるでもなく、失血に顔色を悪くするでもない。石杭の雨に打たれたことを考慮すると、裂傷や擦り傷が身体の表面にしかないのは異様ともいえた。掠めただけで、肉をこそぎ落とすだけの威力はあったはずなのに。

「ああ、そう……」

疑問はすぐに氷解した。吸血鬼の専門家なだけはあって、見てすぐに理解できた。凧の身体から僅かに立ち上る、白い霧。

「身体を霧にして、わたしの攻撃をすり抜けたのね……」

吸血鬼が普遍的に持つ基本能力の一つである霧化だ。個体差もあるが、これを使いこなした吸血鬼はあらゆる物理攻撃をすり抜けることができる。吸血鬼の専門家であるクシカが、こうも容易く裏をかかれたのは、凧が中途半端な吸血鬼であるという誤った認識に立っていたが故か。

いや、それにしても疑問は残る。

霧化によって石杭の雨をすり抜けたのは間違いないとして、どうやって一瞬でここに辿り着いたのか。

凧から目を離したりはしていない。霧化をしていれば、見て分かったはずだ。「いったい、どうやって……」

眩きは続かず、赤黒い血を吐き出してクシカは墜ちる。刃から身体が抜けて、地上に向けて真っ逆さまに失墜していく。

その身体を受け止めたのは那月の分身体が放った鎖だった。

「無茶をする」

ふわり、と那月の分身体が風の隣に降り立った。

「アイツは……」

「安心しろ。死んではない。監獄結界にぶち込んでやったからな。治療も容易だ」

「そうか。良かった」

風はほっと吐息を漏らす。

未だ人命を奪うほどの心積もりはできていないのだ。真正面から剣を突き刺したという事実はあっても、心まではその行いを認めていない。

「大丈夫か？」

「はい」

為すべきことは分かっている。

気持ちと行動を完全に別つのも、風の得意技の一つである。

それもプレイヤーのテンプレートなのだろう。

自分の身の危険に対して鈍感になるという生まれ持った性質は、身体だけでなく心にも影響している。内心では嫌だと思っても、必要であると判断できればすぐ

に行動に移せるのだ。

戦闘経験ではクシカのほうが圧倒的に上。見た目は若い女でも、実年齢はずっと上だろう。記録上は半世紀以上活動している謎多き魔女だけに、真っ当に勝負をしても敗北する可能性のほうが高かった。相手が油断をしている隙を突き、一撃で勝負を決するしかなかったのだ。

ベルゼビュートの身体が震える。

主の一人を失って怒りを覚えたか。それとも、制御が外れてしまったのか。いずれにしても、この巨体。この腕力を防ぎきるのは大変な魔力や霊力が必要になる。那月と東雲の二人掛りでも、さほど猶予はない。

「じゃ、教官。行ってきます」

「ああ」

凧は臆することなく、ベルゼビュートの胸に飛び移る。ベルゼビュートの身体に触れた感じは錆び付いた鉄だった。冷たく手の平が張り付いてしまいそうだ。鉄は鉄でも丸一日冷凍庫に入れていた鉄のようだ。

凧は自らの魔力を右手に集めて、ベルゼビュートの胸を突く。

「朽ちた銀霧！」  
ウイザー・シネレウス

凧の目の前が白く染まる。

ベルゼビュートの硬質な肌と肉が瞬時に白銀の霧と化し、大きな空洞が生まれる。道は見えている。萌葱が囚われている部屋まで、一直線に突き進む。

表皮を越え、肉を抜け、固い骨も霧に変えて凧は銀霧のトンネルを滑りぬけた。まさか身体を掘り進んで侵入するとは思っていなかっただろう。防衛機構も何もない霧の道は、実に二十メートルにもなった。

霧の手応えが変わったと思つた途端、凧は眼前に広大な空間が広がっていることに気付いた。

鼻を突くのは腐った肉と血の悪臭。体内だからか壁はぬめりとして生暖かい。まさしく肉の壁だ。ドーム状の部屋は多種多様な魔力が渦巻く奇怪な空間だった。照明はないが、宙に浮かぶ小さな火がぼんやりと周囲を照らしている。そして、凧から見て反対側の壁に下半身と腕をめり込ませた萌葱を見つけた。

萌葱は意識がある。凧を見て驚いたような表情を浮かべている。

「萌葱姉さん！」

凧は萌葱に向けて駆け出した。

「来ちゃダメッ！」

萌葱が叫ぶ。

凧の未来視が瞬時に襲い掛かってくる危険を読み取り、身体を捻った。見えない刃が凧の首があった場所を通り抜けていった。

「凧君!？」

「大丈夫！」

くるりと左足を軸にして時計回りに回った凧は、体勢を立て直すと同時に第二、第三の刃を重力剣で斬り払う。

魔力と魔力のぶつかり合いならば、眷獣に軍配が上がるのは必然だ。風船が破裂するような音と共に、風の刃は消し飛んだ。

遅れてやって来る、静寂。

肉の壁が蠢く。悪趣味だ。生きているのだ、この壁は。那月が言っていたのはこういうことか。吸血鬼を取り込み、同化して魔力源とする。萌葱も、放っておけばこの肉の壁の一員となってしまうのだろうか。

おぞましさに風は総身が震えた。恐怖はないが、怒りはあった。剣の柄を握りなおした風は、じつと萌葱の右隣を睨み付ける。

空間に浮かび上がる黒い影がゴスロリドレスの女に変わる。

「あら、もうばれてしまいましたか」

「冗談。いくらなんでも、初歩的過ぎる」

現れたのはユリカ。

魔法の片割れ。

「もう一人の魔法はさっき捕まえたぞ」

「ええ、そのようですわね。見ておりましたわ、現存唯一のプレイヤーさん」

プレイヤーと聞いて、風は眉ねを寄せる。

「ねえ、昏月風君。あなた、ご自身のことはどこまでご存知なのかしら？ 萌葱

ちゃんの頭の中にはプレイヤーの知識がなかったのだけれど」

ねっとりとした話し方。

妖艶、といった表現がしつくりくる悪女の空気がある。関わった男を喰らい、墮落させる悪女。こういう手合いには関わらないのが得策である。

よって、凧の返答は剣の一閃。目に見えない重力波が、ユリカに放たれた。

「あらら、つれないこと」

凧の攻撃は届かず、ユリカの足元から盛り上がった肉の壁に阻まれた。

今の一撃で決着を付けられるとは思っていなかった凧は、萌葱を助けるため走り出す。そもそも、凧の目的は萌葱の救出であってユリカを倒すことではない。

萌葱まで今の凧ならば十歩程度で到達できる。黒の翼の推進力を加えれば、さらに速度を上昇させられる。

「ッ……！」

凧の行く手を肉の壁が阻む。

足を止めた凧に雷撃が四方から襲い掛かってきた。轟音、閃光。薄暗い空間は瞬時に白く染まり、反響する雷鳴が鼓膜を打ち震わせた。

膨大な電熱は、肉の壁すら焼いた。吸血鬼の肉でできた肉壁を焦がすほどの力を発揮したのは、それが眷獣だったからだ。

ユリカがベルゼビウトを介して操れる眷獣は萌葱の眷獣だけではないというところか。現れた閃電の鷹の羽一枚一枚が雷撃を呼ぶ力があるらしい。

「外した？」

ユリカが呟く。

凧を確実に倒すために引き付けて雷鷹で不意を突いたはずだった。どれほど身のこなしが素早くとも雷を躲すのは不可能である。

しかし、蓋を開けてみれば四方から襲い掛かった雷撃は獲物を穿つことができず、黒くこげた肉壁だけが残されている。

「いえ、なるほど、そういうこと」

さっとユリカが手を挙げた。青紫色の魔法陣が足元に展開し、その光に照らされた凧の姿が露になった。

「クシカと同じ手は通じませんわよ」

「う……ッ」

雷鷹の羽がばら撒かれ、凧の身体を打ち据えた。

「あ、があ！」

耐え切れずに弾かれた。目で追うことも、反応することもできなかった。脊髄による攻撃は魔力を高めた程度では防げない。

肉の床をごろごろと転がった。重力剣が手から離れて飛んでいき、虚空に姿を消してしまった。

「幻惑の眷獣で分身を作って、自分は身を隠す。初見ならば通じたかもしれませんがね」

吹き飛んで、うつ伏せに倒れた風を見下ろしてユリカは小さく笑った。

「い、いやあああああああッ。風君！ 風君ッ！」

そして、萌葱が狂気して叫んだ。

身体を肉壁から抜こうとして身を振る。もちろん、すでに身体の半分以上を取り込まれている萌葱には脱出する術などありはしない。目の前で風が颯られるのを見ていることしかできないのだ。

「ふふ、いい声。萌葱ちゃん、やっと泣いてくれたのね。あなたを助けに来た弟ちゃんがあなたの所為で死んじゃうから」

「離して、離してよ！」

「だあめ。よく見て、そして感じなさいな。これから、あの子を取り込んであげる。そしたら、萌葱ちゃんと風君はずっと一緒に居られるわ。身も心も蕩けあって、同

じ物として永遠になるの。いいと思わない？」

「ふざけないでよ！ 凧君は関係ないじゃない！ あんたが欲しかったのはわたしの力なんでしょ!?!」

「ええ。でも関係ないってこともないわ。彼はあなたを助けにここまで来たのだから。その時点でわたしの敵。敵は排除が基本でしょう。逃がしてあげる理由はない。それにプレイヤーの血肉はベルゼビュートちゃんの養分としては最上。ますます逃がすわけにはいかないわ」

「うく、くう……」

萌葱は唇を噛み、無力感に打ちひしがれる。

魔力を操ることもできない萌葱には凧を助けることができない。凧が自分でこの場を離脱するしかない。だが、それは萌葱がここで肉の塊になってしまふことを意味している。そのようなことは絶対に嫌だ。

「うふふ、まあ何でもいいわ。あなたの愛しい凧君はここで臓物ぶちまけてあなたたちの養分になるんですもの」  
べりべりと肉壁が変形する。

盛り上がった肉壁は何本もの触手となって倒れた凧に襲い掛かった。一本の重量が大型トラックに匹敵ほどの太い触手だ。もはや、それは巨人の腕というべき代物で凧の身体をひき潰し、吸収するための消化器官でもあった。

「凧君ッ！」

喉が張り裂けんばかりの絶叫。生まれてこの方、ここまで声を張ったことがあっただろうか。眼前で、凧の身体が千々に分かれて押し潰され、血の一滴も残さずに食い尽くされる。避けることのできない一秒後の未来に萌葱は絶望した。

「え……」

何とも間の抜けた声。

その主は、ほかでもないユリカであった。

「何をしたのかしら？」

凧に殺到した触手の先端が掻き消えたのだ。

結果、凧の生命は永らえた。壊され取り込まれることなく、凧は膝を突いた姿でじっとユリカを睨みつけている。

「ねえ、何をしたのかって聞いているのだけど？」

空間そのものが軋みを上げる。ここはベルゼビウトの体内。肉塊の内部。ユリカの支配領域だ。魔女の本拠地であり、那月の監獄結界のようにある程度の融通が利く。壁と床と天井の肉を操作して、ドーム状の部屋の作りを変更する。凧の逃げ場のすべてを塞ぐ。点ではなく、面で制圧し、押し潰す。

避けることは不可能だ。今の不可解な現象を探るのならば、凧の逃げ道のすべてを塞いで、彼の出方を見る。

やはり、肉壁は届かない。

凧の一步手前で消失する。

凧全体を包み込むように押し寄せた肉壁は、凧を中心に半径五メートル以内に近づけない。ならば、足元からならと攻撃を加えようとしたが、ユリカの指示が通らない。

「氷……！」

ユリカが苦虫を噛んだような顔をする。

凧の足元が凍り付いている。強力な魔力による凍結は瞬時に凧の足場を確保した。凍結した肉はピクリとも動かない。

「腹立たしいですわね。何をしているのかは分かりませんが、小賢しい。ええ、実に小賢しい」

ユリカの表情に苛立ちが浮かび上がる。

「言うの忘れてたよ、姉さん」

凧は立ち上がった。

「助けにきた。さっさと帰ろう」

見れば、顔に幾筋もの血線。強力な魔力の行使。眷獣召喚が度重なり、肉体が悲鳴を上げているのか。吸血鬼化が進み、眷獣召喚へのリスクが低減したとはいえ、まだ人間の部分も多く残している状態だ。戦えなくなるのも時間の問題だろう。

「感動的ですわね。で、それができるとでも？ このベルゼビュートちゃんの中で。そのボロ雑巾のような身体で」

「難しくはないだろ。あんた程度なら、今の俺でも十分やれる」

おそらく、ユリカに対しての初めての挑発。

単騎でここに突入してきたことや、これまでの言葉からそれが事実だと——  
少なくとも、凧自身は萌葱を助けることができると確信している。

「大言壮語、もしくは有名無実、かしら。この国にもありますわよね、この言葉。あなたのような吸血鬼もどきがこのわたしを相手にしてただで済むと？　甘く見られたものですね」

あからさまな挑発に易々と乗るほどユリカは優しくはない。常に冷静で余裕を持って事に当たるのが彼女のやり方だ。

対する凧は特に戦い方を定めているわけではない。最終的に萌葱を助けられればそれでいい。目覚めた眷獣の力を使えば、萌葱を助けることは可能なのだ。その実感は確かにあって、後はどうやってそこまで行き着くかという問題を片付けるだけだ。

本来、ユリカなど眼中にはない。凧にとって彼女は萌葱を苦しめた敵だが、優先順位は萌葱が第一だ。ユリカなど後で誰かが捕まえればいい。しかし、当然ながらこうも邪魔をしてくるのなら、どうしたって相手にしなければならぬ。それが面倒だ。

おそらく、ベルゼビュートが取り込んだ吸血鬼の眷獣を操るためには肉壁に完全に取り込んでしまうのは都合が悪い。萌葱を半分だけ残しているのは、彼女を辱め

る目的もあるのだろうか、取り込めば眷獣の使用に制限がかかるからだろう。普段ならば問題はないかもしれないが、今は暁の帝国との抗争中だ。戦いを優位に運ぶには、萌葱の眷獣の力が最大限に引き出されているのが望ましい。

「溶けた水銀」  
メルティッド・メルグリー

静かに眷獣の名前を呼ぶ。

現れたのは双頭の蛇だった。全長は五メートル程度。ちょうど、肉壁が掻き消えた部分の半径と同じだ。

「へえ、なるほど。それが、わたしの肉を抉った眷獣の正体ですか」

ユリカは未だ正体の定かならざる眷獣を目を細めて眺める。

「第四真祖の眷獣……によく似ていますわね。ええ、彼の双頭の龍蛇よりもずいぶん可愛らしい見た目ですが、能力はほぼ同じと言ったところですかね」

第四真祖が召喚する天災級の十二体の眷獣の内の一つ、アル・メイサ・メルグリー竜蛇の水銀を縮小した

ような外観の眷獣だ。能力も同系統の空間干涉。竜蛇の水銀はその顎であらゆるものを空間ごと喰らい、異空間に放逐する能力があるという。ならば、肉壁を削ったのも同じ理屈によるものだろう。

理屈が分かれば、対処の仕方も見えてくる。第四真祖と同系統の眷獣ならば、第四真祖の眷獣が苦手とする攻撃も同じく苦手なはずだ。

竜蛇の水銀の過去の戦闘記録はユリカも見たことがある。伊達に吸血鬼の専門家ではない。竜蛇の水銀は食い切れない物量に押し負けることがあった。凧のそれはずっと規模が小さいので、ユリカが用意できる戦力でも、十分に打ち勝てる。

「では、総攻撃といきますわ。もったいないですけど、それを持ち出された以上、手加減はできませんものね」

肉壁だけではない。五体もの眷獣が動員された。先ほどの雷鷹に加えて、青紫色の巨大蠍に角の生えた水のトド、二又の巨大猫に泥のような表皮の巨狼。それらが、ユリカの一声で一斉に襲い掛かってくる。

本来の力を完全に再現できているわけではないにしても、狭い空間に五体の眷獣だ。迫る肉壁もあって、圧迫感はかつてないものがある。

多少の無理はやむを得ない。

肉壁自体は溶けた水銀の能力でどうにでもできる。五体の眷獣の攻撃に対処するのは別の眷獣に任せることにする。

「暗き紫」  
ダークネス・ツイオーラ

現れたのは下半身が蛇で上半身が人間の女性——伝説に語られるゴルゴンを思わせる眷獣だ。

紫色の頭髮はよく見るとすべて蛇だ。この暗き紫が発する金切り声が迫る五体の眷獣に叩きつけられる。すると、先頭にいた巨大猫又の動きが僅かに鈍る。その隙に暗き紫は無数の蛇髪を伸ばして猫又に絡み付かせ、毒牙を突き立てた。

猫又が苦悶に鳴き、振り払おうと牙と爪を剥く。猫又を助けようとしているのか、暗き紫に氷のトドと泥の巨狼が襲い掛かり、蛇の毛髪が引き千切る。

「老いた瞳晶」  
オールド・クリュスタルス

後退した暗き紫に並び立つように、水晶の亀がのっそりと表れる。きらり、と老いた瞳晶の身体が光ったかと思うと、猫又の眷獣が隣の巨狼のど元に噛み付いたのだ。

老いた瞳晶は精神支配の眷獣だ。暗き紫の毒と魔力吸収で弱った猫又を支配し、味方にしてしまったのだ。

「よし、いい具合だ」

身体の傷も塞がった。暗き紫が周囲から魔力を奪い、凧に還元しているからだ。今、まさに凧は絶好調だ。対する相手の眷獣は精神支配に屈した猫又の裏切りと暗き紫が吐き出した毒霧によって苦戦を余儀なくされている。

戦場が狭いのが逆効果となった。猫又一体の寝返りが、他の眷獣の進路を妨害することになったのだ。

だが、それで凌げるのは地上を這う眷獣だけだ。空から攻めて来る雷撃の鷹は仲間割れで生じた混乱などまったく気にする様子もなく、凧の頭上を取った。

ドル・アダマス  
「鈍き金剛！」

凧が眷獣を召喚するのと鷹が雷の羽をばら撒くのは同時だった。

鈍く光る金剛石の大楯が鷹の雷撃を受け止めて、跳ね返す。

タイニー・アウルム  
「小さな黄金！ 頼むぞ！」

空を舞う雷の鷹の動きは凧では追えない。よって、同じ雷の属性を持つ金色の豹に任せることにした。

雷の豹は類希なる敏捷性を発揮して、雷の鷹に襲い掛かる。こうなると天井の低さは空中戦を基本とする雷鷹の不利となった。小さな黄金は鷹が滞空している高

さくらいなら軽々と飛びかかれるし、雷の身体なので宙も自由に駆け抜ける。となれ、機動力に秀でる豹の眷獣のほうが有利に戦いを進めることになる。

豹と鷹の交錯は一度。それで決着がついた。小さな黄金は、名も知れぬ雷の鷹の喉を食い破り、宙から叩き落したのだ。

ちょうどその頃、地上での戦いも佳境を迎えていた。

猫又の腹部をトドの一角が貫き、猫又が内側から凍結してしまっていたのだ。凍りついた猫又を巨狼が頑丈な前肢で粉々に砕いてしまう。

「小さな黄金。攪乱しろ」

小さな黄金は素早さは高くても攻撃性能は低い。体長一メートル程度の大きさでは、その三倍以上の大きさの泥の巨狼や氷のトドに致命傷を与えることはできないだろう。

「暗き紫と老いた瞳晶は援護だ」

右手に再び重力剣を呼び出して、凧は巨狼とトドに向き合った。

「いくぞ、不出来な黒剣」  
インフェリア・アーテル

手の平で黒き剣が僅かに震えた。

暗き紫の蛇の頭髮が肉壁に喰らい付き、手当たり次第に魔力を収奪する。全面が吸血鬼の肉体で構成されているという肉壁は魔力の宝庫だ。そうして得た魔力を使い、凧は不出来な黒剣の出力を向上させる。

軽く呼吸を漏らし、肩の力を抜いて一閃。斥力場が瞬時に肥大化して泥の巨狼の顔面を打ち据える。巨狼が怯んだ隙に凧の姿が掻き消えた。老いた瞳晶による幻術だ。

「そこ！」

成り行きを見守っていたユリカがキツと目を見開いてトドの右斜め前に向けて手を切る。それが凧を覆っていた幻術を斬り裂いた。

「ッ……！」

姿を現した凧に驚いたトドが身を引いた。外見の割りに素早い動きで、凧の剣は切先を掠めた程度のダメージしか与えられなかった。

おまけに反撃とばかりに激しい冷気が叩きつけられた。全身が引き裂かれそのような猛烈な冷たい風を斥力障壁で凌ぐ。

「冷てえ、な！」

顔を歪めた凧は床を手で叩いた。するとそれを合図に氷の壁が目の前に出現した。氷を操る眷獣は凧も持っている。その能力を引き出して、氷の壁を作ったのだ。トドの発する冷気をこれで防ぐと共に、凧は重力剣を宙に放り投げる。宙を舞う重力剣の柄を雷光の豹が啞えた。

重力剣の軌道が変わる。雷豹に導かれ、泥の巨狼の頭蓋に刀身をめり込ませたのだ。

「一万倍くらいでどうだ」

巨狼の頭蓋に食い込んだ重力剣の重量が瞬時に膨れ上がった。眷獣の筋力を以てしても抗い難い超重量に巨狼の頭は一瞬で潰れて魔力へと還っていく。

残ったのは氷のトドと蠍の眷獣だ。

蠍は見るからに毒持ちだ。対毒能力を持つ暗き紫をぶつける。凧は小さな黄金と協力してトドを退ける。

「ですから、甘いのですよ、弟ちゃん」

笑みすら漏らしてユリカが言った。

送り込んだ眷獣を屠られていながら、それでも彼女の余裕は崩れていない。

「この肉室は数多の吸血鬼の肉から作られたもの。眷獣の数は取り込んだ吸血鬼の数を、当然に凌駕しているのです。分かっているでしょう。一体や二体の眷獣を倒したところで、わたしの手元にはまだまだ眷獣が控えているということくらい！」

倒れた眷獣を補充する。それもユリカにとっては朝飯前なのだ。肉壁から魔力を抜き出して、新たに二体の眷獣を召喚する。今度は燃える獅子とエメラルドでできた四足の蜘蛛のような眷獣だった。

獅子が火を吹き、氷のトドごと風を焼き尽くそうとする。風が生み出していた氷の壁は容易く融解し、身を翻していなければ風も焼かれていただろう。直撃を受けたトドの眷獣は、消滅してしまっている。

「使い捨てかよ。可愛そうだな」

「吸血鬼なんて皆そんなものでしょう」

「ふざけんなよ！ 眷獣だってな、心はあるんだぞ！ 年増の魔女には分からねえんだらうけどな！」

「そう。今すぐに死にたいようですね。眷獣、さらに二体追加してあげますわ。精々飛び跳ねてくださいな。萌葱ちゃんに情けない死に様をよおく見てもらうとなおよ

ろしい」

轟、と旋風が巻き起こる。

召喚されたのは大きなバクの眷獣と孔雀の眷獣。どちらも風を操る眷獣のようだ。

炎の獅子の口に紅蓮が宿る。その両脇を固めるバクと孔雀も攻撃態勢に入った。

「凧君!!」

萌葱が悲痛な叫びを上げた。

三体の眷獣の一斉攻撃。一体一体に割り当てられた魔力量も、これまでに召喚、使役されていた眷獣よりも明らかに多いのだ。恐らくは旧き世代の眷獣なのだろう。瞬間火力は現代兵器にも引けを取らない。

炎が風に乗る、巨大な火炎嵐ファイアストームを生み出した。ベルゼビュートの胴体すらも打ち抜くつもりか。当然、巻き込まれれば、凧は灰も残さず焼滅してしまふ。

まず、獅子に踊りかかっていた小さな黄金が跡形もなく吹き散らされた。次いで、凧を庇うように前に出た暗き紫が絶叫を上げて消失する。熱に肌を焼かれながら、それでも凧は逃げなかった。やるべきことを最後までやり通すためだ。そのための

準備をしてきた。プレイヤーの特質で恐怖を最低限にまで抑えることができるというのも影響したのだろう。死を目の前にして、凧は起死回生の一手——ジョーカーとも言える眷獣を表に出した。

「行くぞ、プロレクン・アルバス 毀れた白鋼」

姿を現したのは両腕が翼、下半身が鳥のそれになっている女性——神話に於いてハルピュイアと呼ばれる怪物である。身の丈は二メートル程度か。平均的な眷獣の中では小さいほうであろう。

毀れた白鋼が表れた途端、熱と凧が意味を失った。

凧を肉壁を炙っていた火炎凧が奇妙な形で後退し、眷獣の体内に吸い込まれていったのだ。

「何!?!」

さすがに、ユリカも驚かすにはいられなかった。

炎が掻き消されたのなら分かる。防がれたのなら、許容もしよう。だが、今のはそのような現象ではなかった。

「炎と凧を巻き戻した……ッ。時間逆行能力ッ!?!」

一目でユリカはその正体を看破した。確かに第四真祖にはそういった眷獣がいるとは聞いていた。文明規模で時間を後退させることも可能、などと言う眉唾めいた話もある。だが、実際に目で見るそれは信じ難い現象であった。

「コイツを出すのは、時間がかかるんだ。いや、出すには出せるけど、能力を使うにはそれなりの充電が必要だ。だから、今まで使えなかった。ここで待機させるしかなかった」

「待機、ですって。ずっと前から召喚は済んでいたというの？」

「まあ、な」

そのための老いた瞳晶だ。オールド・クリスタルス敢て凧自身に幻術を度々かけたのは、本来背後に隠れる毀れた白鋼を隠すためだったのだ。

「もう一度言うぞ。俺は萌葱姉さんを助けに来た。あんたと戦うのだって、本来の目的じゃないんだよ」

「涙ぐましいですわね。本当にイライラしますわ。……何にしてもわたしを倒さない限りは、萌葱ちゃんは助けられませんか？」

「何度も言わせんな」

再び呼び出した重力剣の斥力波がユリカに放たれる。当然ながら、それは彼女が呼び出した眷獣が我が身を盾にして防いだ。

何度も繰り返した行為は当たり前のように無為に終わるはずだった。が、しかし、今度ばかりは意味があった。

「え？ きゃっ!？」

驚きの声を上げたのは萌葱だった。

何と萌葱の身体が肉壁から抜け出て、宙に投げ出されたのである。

「何ですって!？」

ユリカが咄嗟に伸ばした手をすり抜けて、萌葱は風の下に落ちていく。

そして、風は悠々と萌葱を受け止めた。重力を制御して、萌葱にかかる重力の方向を変えたのだ。よって萌葱は地上に落下するのと同じように風のいる場所まで落ちたのだ。

「あ、な、風君……」

何が起こったのか分かっていない萌葱はただ呆然と自分を抱きかかえる風を見上げるばかりだ。

メルティッド・メルクトリ  
「溶けた水銀！」

凧の足元にいた双頭の蛇が鎌首を上げて、背後の肉壁に喰らい付く。目的は明らかで、ユリカは氣勢を上げて眷獣に攻撃を命じた。

そのユリカが使役する眷獣の攻撃は途中で巻き戻る。それどころか、眷獣の姿勢も巻き戻されて肉室から消えてしまう。

「姉さん掴まって」

「う、うん」

萌葱は言われるままに凧にしがみ付く。

萌葱を抱きしめたまま、凧は溶けた水銀が作ったトンネルに身を投げた。脱出はあつという間で、浮遊感に身を任せた二人は夜の空に飛び出した。

凧は漆黒の翼を広げ、萌葱を外に連れ出したのだ。ベルゼビュートが苦悶とも怒りともつかない声を上げている。萌葱を失った以上、電子機器を支配する能力は失われた。

「萌葱姉さん、怪我、ないよな。時間を戻したから、大丈夫だとは思うけど」

「……うん。大丈夫、みたい」

「よかった」

ほっと、風は安堵の吐息を漏らす。

「あ、風君。あの、色々と聞きたいことが……えと、その前に、その、ありがと。助けてくれて」

「いつも世話になりっぱなしだからな。こういうときくらい萌葱姉さんの助けにならないと」

「……そんなこと、ないよ。わたしは……」

つん、と鼻の奥が痛んだ。萌葱は言葉が続かなかった。ユリカに直視させられるまでもなく理解していたことだった。風の弱いところ、劣った部分を見て自分を支えていたという事実があった。風を心配していたのは確かだが、その気持ち、行為を通じて自分自身を上を持ち上げようとしてたのだ。だから、こんな風に風に命を張ってまで助けてもらえるというのは、いっそ申し訳なかった。

「風君？」

浮遊感が消えて、重力に吸い寄せられる。

「風君、落ちてない!？」

「飛んでたわけじゃないからな」

「羽は!？」

「いや、飛行用じゃないみたいなんだよね、これ」

「ちよ……!」

萌葱は絶句する。地上まで果たして何メートルあるのか分からないが、地面に叩きつけられればミンチより酷いことになるのは目に見えている。残念ながら萌葱の眷獣では、高層ビル級の高さからのフリーダイブに対処できない。

咄嗟に萌葱は風を抱きしめる。身を任せるのではなく、赤子を守る母のようにできるかぎり地面との衝突を萌葱自身の身体で受け止めようと体勢を整えようとしたのだ。

「不出来な黒剣」  
インフェリア・アーテル

萌葱が決死の覚悟を決めたとき、風はやっと重力剣を呼び出した。重力を操作して二人分の体重を大幅に軽減し、さらに地面との間に斥力を発生させて落下速度を緩め、ふわりと着地したのだ。

風が着地したのは遊歩道から逸れた人工林の只中。ベルゼビュートが踏み荒らし

て荒廃し、見晴らしがよくなった場所の一つであった。足元は悪く、倒れた木々の残骸が敷き詰められている。

萌葱を降ろした凧は重力剣を送還して、膝を突いた。

「凧君、大丈夫!? 身体が……血が……!」

「大丈夫。でも、さすがに疲れた」

「疲れたって、それだけじゃないでしょ! あんなに無茶して、古城君みたいな羽まで出して、あれ何?」

「何っていつでも、第四真祖の原初の力だとか。まあ、俺も実はよく分かってないんだ。後で、きちんと確認しないととは思ってるよ」

「それは、そうよ。ちゃんと確認しないと」

自分の力を確認もせずに使う危険を理解していない凧ではなかった。原初についての説明も那月から受けている。分からないことも多いが、力を使うことに不都合はない。

凧は黒の翼を消した。維持する力も使いきった感じがする。東雲の血を吸い、ベルゼビュートから収奪した魔力もそろそろ底を突く。

見上げる巨体。大悪魔ベルゼビュートは未だ健在だ。

「萌葱姉さんを出したら、ちよつとは弱くなるとは思ったんだけどな」

「アイツの力の源はさっきの部屋そのものだもの。魔力はあそこから得ているから、魔女を倒しても残る可能性もあると思うわ」

「うん。まあ、そのために毀れた白鋼を残してきたんだけどな」

凧は呟いて、ベルゼビュートを見つめる。

内部に残してきた眷獣は今も戦っている。その力を一瞬でいい。最大解放して、この戦いに終止符を打つのだ。

凧と萌葱を取り逃がしたユリカは爪を噛んだ。

完全に裏を掻かれた。油断があったのは事実だが、クシカのように簡単にはやられないという自負が邪魔をしたか。

いずれにしても萌葱を失い電子グレムリンの悪魔が使えなくなった以上はこの島に留まる理由もない。

上手くすれば一日にして世界を支配することも不可能ではなかったが、こんなこ

とならば欲張らずに零菜を食らっておくべきだった。

魔力無効化能力を纏ったベルゼビュートならば、真祖とだって戦える。単純な戦闘能力よりもロマンを追及してしまうのは、魔女の悪い癖ではあった。

風の眷獣を打ち払い、肉壁を再構成した。削り取られた部分も不死の呪いが生きていたのですぐに治せたのだ。

「クシカはもうダメですわね。仕方ありません。ベルゼビュートちゃんの手綱を握るのは大変ですが一人でできないわけではありませんし」

そのための肉室だ。ユリカ一人でも、無限に等しい魔力が供給される肉室があれば、ベルゼビュートを暴れさせ続けることも可能だ。

まずは戦場を離脱する。空間転移はお手の物だが、那月という上位の魔女が目を光らせている状態では簡単にはいかない。

「フン、ここが貴様の心臓部か」

そこに、今一番聞きたくない声が届いた。

「南宮那月」

ゴスロリドレスは以前顔を合わせたときとまったく変わらない。小さな身体、幼

い顔立ちに相手を見下したような視線という不釣合い。

「わざわざ本体がお越しとは。いえ、それも本体ではありませんでしたわね」

「貴様の相方と同じ運命を辿らせてやる。安心しろ」

「問答の余地はなしということですか。空隙の魔女。言っておきますが、わたしを牢に繋いだところでベルゼビュートちゃんは止まりませんわよ」

むしろ、司令塔を失い制御不能に陥る。これだけの巨体だ。歩くだけで街を壊滅させることも十分に考えられる。

「ああ、この心臓部が魔力炉心になっているようだからな。それくらい、見れば分かる。蝙蝠どもの肉を継ぎ接ぎした、何とも悪趣味な部屋だ」

「この美しさが分からないなんて、センスのなさは服だけにしてもらいたいものですわね」

挑発に挑発が重なる。傍目から見ればただ言葉を投げかけあっているだけだが、その実、目に見えない多種多様な呪いの類が飛び交っている。二人の魔女を隔てる僅か十三メートルの距離は、まさしく死の川というべき空間に仕立て上げられていた。

「十五、六の子どもにしてやられた貴様にわたしのセンスを理解しろとは言わんよ。貴様の目はどこまでも節穴だ。度し難いほどにな。わたしが、わざわざ貴様と話を  
する時間を取ってやっているということにすら気付かん愚かさ。もはや笑う気にも  
ならん」

「何を言って……」

那月の背後で魔力が膨れ上がった。

それはハルピュイアの魔力。凧が残した眷獣の力だった。

「馬鹿な、その眷獣はさっき！」

「倒した、と思っただろう。実際には、わたしが転移させて引き取っていたのだが  
な」

再び現れたハルピュイアは、すでに死にかけていた。度重なるユリカの攻撃を受  
けて、それでもなおこの世に留まり続けているのは、さすがとしか言いようがない。  
「さて、どうするか。この部屋の魔力を暴走させれば、確かに周囲に甚大な被害を  
もたらすことができるだろう。そうして、わたしの目から逃れる算段だったのかも  
しれないが、みすみす見逃してやるはずもない。考えなしの馬鹿魔女め。これまで

貴様が出し抜いてきた三下どもとわたしを一緒にするなよ」

「南宮那月……ッ！」

眷獣が召喚される。もはや何を召喚するのか指定する余裕もない。出せるだけ出して一斉に攻撃を加える。少しでも那月の目を眷獣に向ければ、脱出の可能性は高まるのだ。しかし、那月はあっさりとその場を去った。空間転移をして、ユリカの眷獣軍団の攻撃から逃れたのだ。残されたのは凧が召喚した手負いのハルピュイアだけだ。

そのハルピュイアが遂に最後の力を振り絞った攻撃を放つ。白い光が満ち溢れ、眷獣が魔力に回帰する。

自分自身の魔力すらも贄として、時間遡行の能力を肉壁に叩き付けた。効果は靦面だった。肉室を構成していた吸血鬼の肉があわ立って、壁面から老若男女様々な身体の部品が湧き出してくる。ホラー映画のような光景。その意味をユリカが誰よりも理解していた。

「き、さま……!!」

ベルゼビウトに命じて眷獣の能力に対抗させようとする。それすらも、時間遡



地上からそれを見上げたのは東雲だった。金色の髪を掻き揚げて、唇を吊り上げる。

「来た来た、待ってましたよナツキちゃんッ」

小さな身体に溢れんばかりの大魔力。

「使えるときに使っておかないと、もつたいない。凧ちゃんばかりにカツコイイとこ持ってかれるわけにもいかないし、ねッ」

吹き荒れる魔力風が周囲の木々を凍結させる。

立ち上がるのは氷の眷獣シバルバー。見た目は巨大なサイの骨だが、全身が氷でできている。美しく輝く氷の死だ。

「久しぶりの大盤振る舞い！ 凧ちゃんと萌ちゃん苦しめたあんたは、即刻シバルバーに墜ちて死ねッ！」

晴れ晴れとした笑顔で死の宣告。雄叫びは凍える風となり、サイの眷獣は鋭い角をベルゼビウトの腹部に突き立てる。身動きの取れないベルゼビウトにこれを防ぐ術はなく、体内から一瞬にして氷付けにされて碎け散ったのであった。



## 第四部 十七話

アルディギア解放戦線によるテロから一夜明けて、暁の帝国に流れるテレビ番組はすべてこの事件の報道特集となっていた。

破壊の限りを尽くされた自然公園は、火災こそ免れたもののいくつものクレーターを作っており、所によっては基礎部分から修理が必要になった場所もあるだろう。

この事件は、第四真祖とその夫人、多くの大使ら世界各国の要人が凍結封印されてしまったという点で、帝国側の警備体制に非難が集まったが、その後の奪還作戦に於いて救出対象に傷一つつけずに事態を沈静化させたという事実まで否定はできず、一日も経てば非難の矛先はアルディギア解放戦線へと向かっていった。

アルディギア王国でも、武装蜂起があったようだが、暁の帝国での作戦が失敗に終わったと知るや武装勢力は士気を喪失し、次々と拠点を制圧されたと報じられている。

結果、アルディギア解放戦線の捨て身の蜂起は一日で鎮圧されたのであった。

テレビはどの局も同じ内容を報じている。クリスマスの華やかな話題もすっかり鳴りを潜めてしまった。一時は非常事態宣言が出されるほどの事件であり、その影響もあってか非常事態宣言が解除された今でも外を出歩いているのは報道関係者が大半だ。クリスマスを賑わす若者は、一部を除いて自宅に籠っている。書入れ時だと意気込んでいたであろう百貨店等は悲鳴を上げているに違いない。

そしてクリスマスの夜を、凧は病院で過ごした。

今年に入ってから、何回病院に運ばれたのか。事件に巻き込まれる回数が飛躍的に高まったこともあって、すっかり常連になってしまった感じがする。

「今回は、大して問題もなかったから良かったけどな」

「下手したら死んでたのは変わんないけどね」

凧に宛がわれたベッドの隣の丸イスに座っている零菜が呟く。

彼女は怪我もなく、魔力もさほど消費していなかったため簡単な検査だけで解放されたのだ。

「皆は？」

「大丈夫。凍結封印されてた人は、まだしばらく入院させられるみたいだけど、そ

もそも時間を凍結する魔術だから、身体への悪影響もあまりないみたい」

「そっか」

「そう。あ、でも萌葱ちゃんは事情が事情だし、入院、長くなりそうだって。それでも一週間くらいらしいけど」

「それくらいで済めば、いいほうだろ」

萌葱は悪魔に身体の半ばまで取り込まれていた。その状態を目視したのは凧だけだが、命が助かっただけでも奇跡的だった。それが、たったの一週間で退院できる程度で済んだのだから、僥倖というほかないだろう。

「凧君の眷獣のおかげだってね」

「……ま、その源は古城さんの眷獣だけだな。俺のは、第四真祖の型落ちだから」  
時間逆行の眷獣。

萌葱の身体を敵に囚われる前の状態に逆行させることで、悪魔に取り込まれた後に生じた問題をすべてなかったことにしたのだ。

時間を戻し、今に直結させて過程を消し去る。極めて驚異的な能力であり、本来第四真祖の強大な眷獣にのみ許された力であった。

「凧君は大丈夫なの？」

「何が？」

「身体」

「ああ。それ、全然問題ないみたいだ。自分でも驚くくらいにね」

凧は笑った。

これまで、戦いが終わった後はいつもボロボロだった。敵からの攻撃ではなく、自分の魔力行使に肉体が悲鳴を上げてきたからだ。

今は彼の身体に傷はない。戦いの過程で生じた傷は、すべて塞がっていた。

「それは……」

零菜は何と言うべきか迷い、口を噤んだ。

凧の身体がどうなっているのか、具体的などころは何も分からないからだ。

凧が、凧沙に巣食う吸血鬼の力を移すための器としてデザインされて生まれたのだということも、それを主導したのが自分の父や母たちであったということも零菜には受け入れがたいことではあった。

そうなる凧の身体は本当に大丈夫なのかと疑ってしまう。もともと、眷獣の使

用に耐えられない身体だったのだ。今回、那月が風に施されていたという封印を除いて、吸血鬼として大きく飛躍した風だが本質が変わったわけではない。

彼の身体に傷がないのは、単に修復能力が高まっただけだ。今までよりも強力で多様な眷獸を使えるようになったのだから、肉体的な負担は大きくなっているのと言うまでもないだろう。

「そういえば、雪霞狼はどうなったんだ？」

「取り返せたいんだよ。元剣巫だって、盗んだの」

「雪菜さんの知り合い？」

「雪菜は首を振った。」

「面識はないって。まあ、色々あったんでしょ。全然抵抗しないで捕まったみたい」

剣巫—— 暁の帝国成立以前、日本で組織されていた退魔組織に属す戦う巫女だ。一般には知られていなかったが、徹底して秘匿された存在というわけでもなく、他国の上層部やテロリストなどはその存在を認識していたらしい。雪菜の母親も、剣巫出身者だ。この剣巫も、その所属組織も今は失われている。政治闘争の末に獅

子王機関は解体され、所属していた攻魔師たちは様々な道を歩むことになった。中には裏家業に身を落とす者も少なくなかったという。

「亡命とか、あるかもしれないな」

「どうだろうね。十中八九、日本は関わりを認めないだろうし」

劍巫を送り込んできたのは、間違いなく日本なのだ。雪霞狼を取り戻すというのは、日本側が仕掛けてくる謀略の口実に使われる定型句だ。

暁の帝国と日本の関係は、かなり微妙だ。暁の国内には、日本から見捨てられた。日本なしで発展してきた、という思いが渦巻いているし、日本国内には暁の帝国の持つ技術はもともと日本のものではないか、という気運が高まっているという。いい貿易関係を築いており、民間のやり取りは活発なのだが、片手で握手をしながら、もう片方の手はいつでも相手を殴れるように握り締められているという状況がここ数年続いている。

「しばらくは騒がしそうだな」

「そうだね」

零菜は肩を落とす。

元剣巫が、今回のテロに関わっていたという事実は両国間の緊張状態を悪化させる爆弾であった。

今のところ、ニュースを度々騒がせてきたアルディギア解放戦線の息がかかった軍人たちによるクーデター……という扱いを受けているが、ここに国が関わっているとすると一気に国際問題に発展する。

日本が最も近い隣国ということもあって、反発はあっても事を荒立てたくはないというのが冷静な意見なのだ。

凧の病室を古城が訪れたのは、零菜がそろそろ帰らないと腰を浮かせた時だった。

「古城君。病室抜けて大丈夫なの？」

「ん、まあ少しならとやかく言われないうしろ」

零菜が胡乱な視線を父親に向ける。

一国の主が病院の中だけとはいえ、勝手にで歩いてもいいものか。第四真祖なので、粉々に身体を粉碎されても復活できる。よって、古城は入院する必要性がそもそもない。だが、それを病院で「証明」するまでは大人しくするべきではないか。

そんな意図が込められた視線も、父親はどこ吹く風だ。生まれついでにの皇帝ではない。元々庶民。その感覚は、今でも抜けていないところがある。

「零菜、ちょっと席を外してくれないか」

「ん。もう帰るから」

「そうか。迎えは呼んだのか？」

「大丈夫。来てもらえるから」

零菜はひらひらと手を振って答えた。

「じゃあね、凧君。後、古城君、ちゃんと凧君に説明してね。いろいろと」

「分かってるよ」

実の娘に窘められて、古城は肩身が狭そうだ。

外見だけならば、親子ではなく兄妹にも見える。古城の外見は二十代の前半くらいで止まっているのだ。

零菜が病室を辞した後、僅かに気まづい沈黙があった。

古城は徐にイスに腰掛ける。

「古城さん。どうしたんですか？」

「ああ、まずは礼を言わせてくれ。最近、凧には世話になってばかりだ。萌葱を助けてくれて、ありがとう」

「いや、そんな礼なんていいですよ」

凧は自分がしなければならぬことだから萌葱を助けに行ったのだ。

「萌葱姉さんを助けた力は、古城さんからもらったものだと言いました」

「サタルメリク・アルバス水精の白鋼……からの派生だな」

「たぶん、そうだと思います」

凧の眷獣にできることは指定した範囲の時間を逆行させることだ。その範囲も十数メートル四方程度の限定された空間が限度だ。

古城の水精の白鋼は、それこそ都市を丸々消し去ってもおつりが来るほどの強力な力を持つ眷獣だ。同じ効力であっても、力の差があまりにも大きいので「派生」という表現は、的を射ていないような気がした。

凧の力は所詮は型落ちだ。第四真祖の眷獣から派生してこの程度ならば、恥じ入るばかりだ。

「萌葱は、来たか？」

「いいえ。まだ、検査とか色々あるんじゃないですか？」

「ああ、まあ、そうか。さつき会った時に、凧のそこに行くように言ったから、そろそろ来てるんじゃないかと思ったんだがな」

「ん？　なんで俺んここに来るようになって？」

「助けてもらったんだ。一言礼を言うのは、当たり前だろ」

古城がそうしているように、萌葱もまた凧に救われたのだから礼を言いに来るのが道理だ。

特に礼を言われる必要を凧は感じないが、それが円滑な人間関係のやり取りに貢献するものなのだから、頭ごなしに拒否はしない。

その時は、どうせ落ち込んでいるであろう姉貴分に何かしら言葉をかけてあげるかと思はう。

「那月ちゃんから聞いたんだってな」

何をとは尋ねない。

古城の深刻そうな顔を見れば、それが凧の出生の秘密に関する話だと想像もつく。「プレイヤーってヤツですね」

「……ああ」

「母さんを助けるためだったと聞いてます」

「……そうだ」

古城は実に言い難そうに声を絞り出す。

凧沙に取り付いた第四真祖の力の残滓。原初のアヴローラの呪い。それを、凧沙に靈的に似た別の器に移す。それ以外に凧沙を救う術はなかった。

「プレイヤーの技術を流用したのは、それが吸血鬼好みだからですか？」

「察しがいいな。ああ、確かにそうだ。もともと、可能性の低い賭けだったんだ。プレイヤーへの力の移譲なら、成功率は上がるはずだったからな」

そうして、吸血鬼が好む器は、原初の力に対しても効力を発揮した。凧の血は、もはや人格も何もかもを失い宿主を蝕むばかりだった原初に気に入られ、その内に取り込んでしまった。

古城たちすら驚くほど、あっさりと儀式は終わったのだという。

「すまなかった」

「いいですよ」

「よくはないだろ」

「いいんですよ。別に、実はプレイヤーでしたって言われてもピンとこないですし。実際、今までと何も変わりませんから」

「それは、そうかもしれないが……」

凧がプレイヤーかどうかなど、凧にとって大きな問題ではなかった。人工的に調整されたということも、別に興味の湧く話でもない。そういうものかという程度のものではしかない。もちろん、そういった考え方をしてしまうのも、受身の性格もプレイヤーの特性ではある。が、だからといって、自分の性格や物の考え方を矯正するということも一朝一夕にできることではない。

結局、何も変わらない。今に不自由していない以上変える必要もないし、古城たちを責める理由もない。

古城から自分の生まれた経緯——概ね那月から受けた説明と同じ内容を聞かされて、凧は特に憤りを覚えるということもなく淡々と自分の出生の秘密を受け入れた。

古城とのやり取りは、全体でも五分程度しかなかった。

彼は皇帝で病院の患者。零菜が危惧していたように、簡単に病室を空けていい立場ではなかった。あまり席を外して騒ぎになるとまずいので、要件を終えたら自身の病室に引き返さなければならなかったのだ。

互いに口下手なほうだ。叔父と甥という関係もあって、二人きりで話をしてても話は長く続かないものだ。

凧の検査入院の期間は二日に短縮された。一日目の検査結果で問題がなかったの  
で、もう一日病院で様子を見て何もなければ三日目には退院の運びとなる。

だから、萌葱としても事件のことで凧と話ができるのは二日目の夜が最後の機会だと思った。テロの被害者の中でも特に念入りに様々な検査を受けさせられた萌葱は、正直、かなり疲れている。

一日半を検査に費やし、分かったことは「とりあえず異常なし」というありきたりな結論だけ。確定結果は後日だが、何も問題ないことは何となく理解している。少なくとも不死の呪いを上回る悪影響が身体に生じているわけではない。

病室のドアをノックする前に、少しだけ深呼吸する。いつもは自然に接すること

ができるのに、こうして改まって話をしようとするのとどうしてか緊張してしまふ。意を決して、萌葱はドアをノックした。

返事を待ってからドアを開ける。

一人用の病室に、気配は一つ。ベッドの上で身を起こす弟が、いつもと変わらぬ様子で萌葱を出迎えてくれた。

「凧君、遅くにゴメンね」

「まだ八時過ぎたくらいじゃないか。全然、遅くないぞ」

凧は書棚の上に置いてあるデジタル時計を見て答えた。

日は没したが、窓の外は人工の光で満ちている。病院は都会のど真ん中にあるためか、日付が変わるくらい深夜でなければ暗くはならない。だから、消灯の時間がくると遮光カーテンを閉めるのが常であった。

「姉さん、歩き回って大丈夫なのか？」

「わたし、凧君のおかげで怪我らしい怪我もしてないから」

イスに座った萌葱は、薄く笑った。

入院中なので、萌葱は化粧をしていない。高校に入ってから気合を入れて化粧を

するようになった彼女だが、もともとの顔貌が良いということもあって、化粧の有無がさほど印象に違いを与えない。とはいえ、凧としては、今の萌葱のほうが懐かしくまた慣れ親しんだ雰囲気ではあった。

「化粧してない姉さんも久しぶりだな」

「……女の子の前でそういうこと言うのはダメ。アウト。ギルティ」

「む、ゴメン」

「うむ」

素直に謝る凧に萌葱は腕を組んで、あたかも大工の棟梁のように偉そうに頷く。内心、ドキッとしたのは秘密。

萌葱にしてみれば、凧の前にすっぴんを曝すというのは気まずい。しかし、早く会っておかなければという思いから、凧の退院前に病室を訪れたのだ。

「ま、姉さんは化粧してなくても、大して変わんないけどな」

「ちよ、どういう意味」

「ん？ 化粧は印象を良くしたり、美人に見せたりするものだろ。姉さんはもともと美人なんだから化粧は身だしなみ程度の意味しかないのかと思ってた」

「あ……うん、いや、そう面と向かって言われると何というか……」

返答に困ると、萌葱はもごもごと呟く。

気の置けない仲というのは、ふとした拍子に意表を突く発言を呼び込むから油断ならない。

「姉さんと一緒に捕まってた吸血鬼の人達も、目を覚ましたらしい。さっき、ちらっと聞いた」

「そうなんだ。よかった」

萌葱は肉室に使われていた吸血鬼と一時同化していた。彼等、彼女等のことを思うとこれからが大変なのは目に見えている。酷い人は何十年も前からあの状態で魔力を搾取され続けていたのだ。

「あの吸血鬼<sup>人</sup>達、意識はあったから尚の事辛かったわよね」

「意識、あったのか」

「あったみたいよ。わたしも、半分混ざっていたから感じ取れたし。うん、凧君がいなければ、わたしもああなっていた。もしかしたら、何十年も」

そう思うと、今更ながらに恐怖が襲ってくる。

あの時は、正直実感が湧かなかつたのだ。魔女にいいようにされた自分が情けなく、恥ずかしく、反発心から平常心を保っていた。追い詰められると冷静になるのは、萌葱の長所でもあるだろう。常に自分を——過小評価する癖がついていたにしても——客観視してきたからこそ身に付いた心の持ちようであった。けれど、危機的状况を終えた今になって抑えていた恐怖が浮き上がってきてもおかしくはない。

萌葱は吸血鬼で、第四真祖の長女だが、同時に歳相応の少女でもある。戦士の心得があるわけではないのだ。むしろ、ずっと取り乱さずに平静を保ち続けてきたこと自体が偉大なことではないか。

「姉さん？」

「うん、ゴメン。ちょっと、わたし、落ち着かなくて」

肩を震わせ、目尻に涙を浮かべる萌葱は恥ずかしげに俯いた。

死の恐怖を今更になって実感する。凧と話して、あのまま自分が敵に囚われていたらどうなっていたのかを振り返ることができたからだ。

「凧君、ありがとう」

やっとのことで搾り出せたのは、たった一言だった。

この一言を言うために、萌葱は凧の病室を訪れたのだ。

「ありがと、ほんとに……無茶、させてゴメンね……」

感極まった萌葱は、我慢ができなくなったのか涙を流し始めた。

萌葱が声を殺して泣く姿を見るのは、いつ以来か。きつと、今まででもずっと心の中では泣いていたのだろう。表に見せまいと必死になって辛さを押し殺してきた。そんな萌葱の仮面が、剥がれ落ちて凧の前に素顔を曝している。

「姉さんが悪いわけじゃない。悪いのは、姉さんを利用しようとしたあの魔女だろ」  
「でも、わたしが捕まんなかったら、凧君が危ない目に会うこともなかったし、いろんな人に迷惑をかけることもなかったし……だって、あんな……！」

駄駄を捏ねる子どものように萌葱は嗚咽を漏らし始めた。いよいよ自制ができなくなったらしい。

そんな萌葱は凧は堪らず抱き寄せた。

萌葱が子どものように泣くのなら、凧はかつて大人にそうしてもらったように萌葱を包み込むのだ。

「凧君……?」

「落ち着いた?」

萌葱の頭を胸に抱き、凧は静かに尋ねた。萌葱は突然のことに驚いたのか言葉をなくし、それから身じろぎする。

「馬鹿。わたし、年上なのに」

「一つしか違わないだろ。なのに色々と背負いすぎ。たまには、楽しんでもいいんじゃないの」

今まで萌葱は我慢しすぎたのだ。それが姉としての見得や責任感から来るものだったのは、見ていて何となく分かっていた。

「もうちょっと、周りを頼ってもバチは当たらないからさ」

萌葱は、凧の胸に額を押し当てて、

「……うん」

小さく頷いた。

最後に一条の涙を流し、萌葱はこの日初めて笑ったのだった。



## 幕間

テロ事件の後、暁の帝国は比較的速やかに平穩を取り戻していた。

それは、テロの首謀者がアルディギア解放戦線であり、そのアジトが暁の国内に存在しなかった、あるいはあったとしてもすぐに鎮圧されたからであった。それは一から海上の造営された人工島を基盤にした国家だからこそであろう。

しかし、クリスマスという重要な祭日を逃した商業関係者の落胆は大きく、その反発もあってか通常二十八日には閉まる店が開業していたりと、なくした稼ぎを取り戻そうという動きが広がりを見せている。

結果的に年末を控えて、世の中は例年以上に騒がしくなっているようだ。

テロの数日後には、歳末セールスの報道が情報番組の中心になっているというのは、如何なものかと思わなくもないが、今回のテロが局地的なものに終わり、尾を引かなかったことや一般人にはほとんど危害が加わらなかったこともあるのだろう。

意図的に明るい話題をテレビが提供しているようにも見える。

テロ事件に少なからず関わったから、穿った見方をしてしまうのだろうか、東

雲は思う。

だからだと流れるテレビの電源を消した東雲は、紅のポンチョを着て外に出た。一月を目前に控えた暁の帝国のタワーマンション五十一階は、南国とはいえ冷たい風が吹き荒んでいゝる。今日は天気もよくないので、肌寒かった。

東雲は金色に輝く髪を風に靡かせて、足早に渡り廊下を歩き、扉二つ分移動する。この階にあるすべての部屋が暁家の所有になっている。それぞれに姉妹とその母親のプライベートな空間が与えられているのである。

東雲が訪れたのは、そのうちの一つ。萌葱と浅葱の家であった。

「入るよー」

と、声をかけてから返事を待たずに玄関を跨いだ。

玄関の前に真っ直ぐな廊下があって、その向こうにダイニングキッチンへの入口がある。

一般家庭にもよくある構造である。

ワンフロアが丸々暁家のものなので、家というよりも部屋という感覚だ。部屋の中にさらに個別の部屋がある。リビングとして使われる洋室の扉を押し開けると、

自分と同年代の少女が二人いた。

萌葱と紅葉である。

長女萌葱は高校デビューに発奮して髪を明るく染めた姉妹のファッションリーダー。紅葉は長く深い黒髪と物静かな言動が年齢以上に落ち着いた雰囲気醸し出している暁家の次女であった。

萌葱は最近発売したばかりの携帯ゲームに熱を上げ、紅葉はコーヒークップを傍らに置いて、何やら勉強中だ。

「何か、酷いな」

扉を開けた直後に、東雲は呆れたように呟いた。

「いきなり何よ」

萌葱が顔を上げて、東雲に問う。

「花の女子高生が、せっかくの冬休みにゲームと勉強とか。色気なさすぎじゃない？」

「仕方がないでしょう。外出禁止なんだから」

顔を上げた紅葉が、抑揚のない声で言う。

「好きで籠ってるわけじゃないっての」

さらに、萌葱も紅葉に追隨して答える。

テロの影響は世の中にはさほど大きくでなかったが、皇室がテロの標的にされたこともあって、皇女たちはマンションに缶詰状態にされていた。

それはテロから身を守るためだけでなくマスコミを初めとする世間の好奇の視線から守るためでもあった。テロさえなければ、クリスマスも年末年始も恙無く過ごせていただろう。青春の一ページを飾る女子高生の一年目を、このような不本意な形で過ごすことになったのだから、萌葱も紅葉も不快感を隠せない。

「大体、外に出られないのはあんたも同じでしょ」

「まあ、そうだけど」

萌葱の指摘は正しく、東雲もマンションから外には出られない。そのように言い含められている。

「お茶貰っていい？」

「お好きにどうぞー」

東雲は、冷蔵庫の扉を開いて中を覗き込んだ。

ウーロン茶と水出しの煎茶がペットボトルに入れられている。東雲は少し悩んでから、煎茶を選び、コップに注いだ。

「このお茶どこの？」

一口飲んでから、東雲は萌葱に尋ねた。

「知らない。そのスーパーで買ったヤツ」

「スーパーで買ったの？ マジで？」

「何？ 不味かった？」

「いや、そうじゃないけど……」

東雲は舌が肥えているというわけではないし、南米暮らしが長いのでお茶の味の違いをいまいち理解していない。しかし、

「ここ、一応王宮なんだよね」

「マンションだけだね」

「うーん、この庶民派……」

こうしていると、第四真祖の娘であることを忘れてしまいそうになる。

高層マンションの最上階を独占しているという時点で一般家庭を超越していると

はいえ、それはそれなりの資産家ならば可能な範囲の贅沢である。

それ以外の面は至極庶民的だ。娯楽はゲームか読書かインターネット。食事はコンビニかスーパーで仕入れた食品で賄っている。

専属の料理人もメイドも執事も暁家には存在しない。護衛として攻魔官が就いている程度で、日常生活は皇女たちが自分で取り仕切っている。母親の多くが仕事で帰りが遅くなるので、夕食を自分で用意することも珍しくはないし、ゴミ出しも自分たちでやっている。世界一庶民的な皇族などと揶揄される由縁である。

「ジャーダ様のところじゃ、いいもん食ってたんでしょ。お姫様」

「そんな言い方しないでよ。別に普通よ、普通。第四真祖の娘つてのも、あまり知られてないしね、わたしは」

存在が正式に公表されていない東雲は、注目度も格段に低い。

その理由は母親が先代の第四真祖であり、両親が共に第四真祖であるという異例中の異例の存在だからである。言わば「純血の第二世代」であり、そういった事例は他に例がない。世間がどのような反応をするか分からない状況だったため、発表が見送られた。

彼女の存在を知っているのは、現在ではごく一部の政府要人のみとなっていた。

「まあ、でも一応メイドはつけてもらってたよ」

「うわー、めんどくさ」

「そこでそういう感想が出てくる時点で、お姫様向いてないよ。パフォーマンスでもそういう人を連れ歩く必要はあるんじゃないの？」

心底嫌そうにする萌葱に東雲は苦言を呈する。

今後、暁の帝国が成熟していくにつれて、そして萌葱達第二世代が成長し、様々な役割をこなさなければならなくなるにつれて、見栄えをより気にする必要性が出てくるだろう。

高校生ともなれば、自分の置かれている立場を理解し、今後の展望に思いを馳せることはできる。が、それと同時に一番遊びたい盛でもある。

「ところで、東雲はいつまでこっちにいられるのかしら？」

と、不意にシャーペンを止めて顔を上げた紅葉が尋ねた。

「冬休みいっぱいかな。紅葉ちゃんは？」

「三が日終わったら帰るわ」

「ちょっと、早くない？ もう少しゆっくりしていけばいいのに」

「わたしの学校は、四日から授業があるの。講習ということになっているけれどね」  
「進学校ってのも、大変なものだ」

まるで他人事のように、東雲は気のない相槌をする。

東雲が通う学校も、高い偏差値を誇る名門校ではあるが、自由な校風のために授業自体はきつくない。ただ、その分だけ自分で勉強しなければいけないといっただけで、学校生活が個人の能力と努力に左右されるといっただけだ。そして、東雲自身はさほど成績は悪くない。恥ずかしくない程度の学力を維持するための最低限の自学自習を常日頃からしているのであった。

「彩海学園は、七日から。まあ、一般的かな」

「七日まで、缶詰なん？」

「それまでには解除されるでしょ。されるよね？ クリスマスを病院で過ごした挙句、冬休みいっぱい家の中に閉じ込められるとか、ないよね？」

女子高生の一年目の冬休みを、なんの楽しみもなく終えることになる予感に萌葱は震えた。

「可能性がないとは言えないのが、辛いところね」

「まあ、萌ちゃんが一番の被害者だし、身の安全を考えればしばらく出られないのは仕方がないかと。冬休み終わったら学校に行けるだけマシなのでは？」

「そんなー」

妹二人の容赦のない回答に萌葱はがっくりと項垂れる。

「あたしもリア充っぽいことしたいのー」

「まず彼氏を作るところから始めないといけないわね。立場的にも、前途多難ではあるけれど」

萌葱はただの女子高生ではないのだ。

暁の帝国の皇女である。それも、第四真祖の第一子である。それだけに、人間関係に大きな制約がかかっているのは否めない。

萌葱自身が、一線を引いているというのもあるし、周囲が気を遣っているということもある。いずれにしても、萌葱は見た目がよく、性格にも難がないというのに、未だに色恋沙汰は皆無なのであった。

「ていうか、相手がいないのはみんな似たようなものでしょうが。あんたはどうな

のよ、紅葉！」

「わたしはそういうのには関心がないから」

熱もなくあっさりとして紅葉は答えた。

「血を吸いたいか何とか何とか言ってみては？」

「それはそれ、これはこれ。彼氏とか作ったら、デートとかしなければいけないくて、いろいろと面倒じゃない」

「それを面倒がってたら、一生彼氏できないでしょうが……」

「今のわたしの理想は、そうね。気が向いたときに、血を吸わせてくれる友だち……くらいがいいわ」

「あんたに都合がいいだけなのでは？」

「そんなことないわよ。吸血は相手も気持ちよくなるって話だし、十分にWinWinでしよう。ねえ、東雲」

話を振られた時、東雲はちょうどコップに注いだお茶を飲み干したところだった。コップをテーブルに置いた東雲は、紅葉の問いかけに頷いて同意した。

「血を吸うにも上手い下手はあるみたいだし、相性もあるって言うけどね。で、二

人は血を吸ったことあるの？」

「ない」

「まったく、ないわね」

萌葱と紅葉は同時に残念な返答をする。紅葉は何を考えているのか分からないが、萌葱は大分堪えているようではあった。

「この面子、ちょっとダメダメ過ぎない？ 妹たちは、風ちゃんから血を吸いまくってるのに、姉がこれでは……」

この半年と少しの間、晁家は不運に度々遭遇していた。テロに事件にと大忙しで、姉妹のほぼ全員が巻き込まれている。

そして事件を解決する際に、誰かしらが風から血を吸って能力を高めている。零菜以外は、緊急事態ということを理由に吸血したもので、色気のある話ではないが姉三人が未経験であるのに対して妹たちは吸血の感触と味を知ってしまったている。

「あんたも似たようなものでしょうが」

と、萌葱は東雲に食って掛かる。

相手も自分と似たようなものという言い分は大変低次元の反論だが、萌葱にはそ

れくらいしか言葉がなかったのだ。

対する東雲は堪えた様子もなく、泰然としていた。

「血を吸ったことはないけど、キスはしたし、血も吸われたし、萌ちゃんよりは進んでるけど？」

「は、はあ!? 何それ、聞いてないんだけど!?!」

萌葱がソファの背凭れから身を乗り出して叫んだ。

紅葉も声にこそ出さなかったものの、驚いたように目を見開いた。

「相手は? つーか、血を吸われたってどういうこと!?!」

「相手? そりゃ、凧ちゃんに決まってるでしょう。他に誰がいるっているのよ」  
至極当然のように言う東雲に、萌葱は愕然とした。

「は? へえあ?」

「ああ、そういうこと」

パニックになる萌葱とは裏腹に、紅葉は得心したようだ。

「萌葱を助けに行く直前ね。凧君が、吸血鬼に近付いたって聞いていたから、何があったのだろうかとは思っていたのだけど」

「うん、わたしの血を吸ったの」

東雲は頬をほんのりと紅くしながら、首筋に摩る。凧に噛まれた箇所には、それを匂わせる痕は残っていない。

「ちょっと待って。凧君に吸血能力はなかったはずだけどー！」

「もともと吸血鬼の力があるんだから、ないってことはないのよ。ただ、封印されていただけで。それをナツキちゃんが解除したから、今はもうばっちり吸血もできるって寸法よ。わたしの血は、凧ちゃんの力を目覚めさせる呼び水だったってわけね。まあ、最初は吸血できないから口移しでしたわけだけど、ね、ふふ」

「……………?」

「あら、萌葱がショートしたわ。あまり、過激なこと言っちゃダメでしょう。萌葱は純情なんだから」

「今時の女子高生で純情とか、絶滅危惧種なのでは？」

「絶滅危惧というだけで絶滅したわけじゃないから」

何と言うこともないように紅葉は言う。

そういうものかと、東雲も取り合わなかった。

「それで、どうだったの？」

「何が？」

「吸血よ。吸血鬼なのに、血を吸われるのはどうかと思うけど……気持ちよかった？」

「そりゃあ……」

東雲は、尻に首を噛まれたときを思い出す。

再び自分の首に手を当てて、血を吸いだされた感覚に思いを馳せた。

「何か言うの恥ずかしいなあ」

「いいじゃないの、ここにはわたしたちしかいないし」

「そういう問題？」

「そういう問題」

「うーん……んー……まあ、最初は痛い」

「やっぱり痛いの」

「注射みたいな感じ。その後、こう、すぐに痛みが引いて、何ていうか、えーと……まあ、力抜けるっていうのかな、ガクガクするっていうのか、超やばかった。トイ

レ行っというてよかった」

ナイシヨ話をするように声を潜めた東雲。

「あんたは血を吸われて何ともなかったの？」

萌葱がソファの背凭れから身を乗り出して尋ねてきた。

頭がショートしていたのは最初だけで、再起動してからは俄然興味を抱いたようだ。

「わたしは特に何とも。あ、でも何か目覚めそうだった」

「目覚めるって何」

「いや、何かこう新しい世界というか。あー、帰る前にもっかい血い、吸われてー」  
東雲は頭を抱えてテーブルに突っ伏した。

吸血鬼は通常、血を吸われることはない。それどころか、血を吸われることに対して抵抗感を抱くのが一般的だ。それは、血を吸われると相手に自分の全存在を食い尽くされる可能性があるからであった。上書きと呼ぶ現象だ。暁古城が第四真相の力を得た経緯も、これに近いものとされている。相手のすべてを食らい、その力を我が物とする。

もちろん、必ず上書きが発生するわけではない。

ただ血を吸い、魔力を補給するだけであれば上書きは発生しない。吸血鬼同士のカップルでは、互いに血を吸い合うこともあるにはある。しかし、一般的とは言い難い。

「吸血鬼が血を吸われる快楽に目覚めてどうするのよ。アブノーマルすぎる」

「むしろすごい興奮する」

「紅葉、妹が変態になったんだけど、どうなのよ、これ」

「もともとでしょう。スイッチが入っちゃっただけで、才能はあったのよ、きつと」  
「みんなして酷いこと言うな。自分らだって、血を吸ったり吸われたりあれこれしたいんでしょに」

心外だとばかりに東雲は唇を尖らせた。

「だいたいこちとら思春期だぞ。エロイこと考えて何が悪い」

「何か開き直ったぞ」

「リア充したいって言ってる萌ちゃんだって似たようなもんでしょ」

「違うわッ。もっと、いろいろとあるでしょ。デート？ とか電話？ とかで得

られる充足感的なヤツが」

「行き着くところはエロイことじゃん。恋愛なんて最後はそこでしょ」

「頭ん中ピンク色過ぎない、ちよっと……」

「それ抜いたら友達でいいじゃんって話になるじゃない。どれだけ仲がよくてもこの人とは無理だなってパターンあるでしょ」

「それは……まあ……」

身も蓋もない話ではあるが、東雲の言い分も分かるだけに口籠ってしまふ萌葱。しかしながら、欲望に真っ直ぐな東雲の価値観に萌葱はドン引きだ。

紅葉は相変わらずの感情の掴めない微笑みを浮かべた。

「まあ、別に相手が誰でもいいってわけじゃないでしょうし」

「そりゃ、もちろん」

相手を選んだ上での発言である。そもそも誰でもいいというのは、問題がありません。ぎる考え方であり、東雲もそのように考えたことは一度もない。

「今の時点じゃ、ただ妄想癖があるだけよ。別に脳みそがゆるゆるなだけで実害はないでしょう」

「今日一番辛らつだな紅葉ちゃん……」

もとより毒舌なところがある紅葉だ。傷付けるつもりで言ったわけではないのは分かっている。脳みそゆるゆるというのも、自覚があるので反論はしない東雲であつた。

「血を吸う練習って名目なら、凧君に頼めばやらせてもらえるかしら」

不意に紅葉がそんなことを言う。

「性格的に断わらない気がする。でも、内心でどう思ってるか分からないけど」

「それは、確かにそうよね」

東雲の答えに紅葉は同意した。

凧は頼み事を断わらない性格だ。身内からの頼みなら、大抵のことは引き受けてくれる。積極性のない性格で気持ちの上がり下がりが少なく、ぶっきらぼうなところがとっつき難く思われるが、生来のお人好しで、理由さえあれば自分にとって不利益なことでも受け入れることができる。

「ただ、頼みにくいわ。凧君の出生のことを考えると」

「まあ、それは、ねえ……」

凧はある種の人造人間でもある。

ホムンクルスではなく、クローンに近くデザインされて生まれた存在だ。凧沙から生まれはしたが、生まれる前から凧沙の身体に残った『呪い』を受け入れる器としての機能を期待されていた。

その大元となったのは、プレイヤーという自己犠牲を前提として運用される対吸血鬼用の人造生命体の研究である。凧の性格は生活歴もあるが、根本の部分にこの研究成果が反映されていると見るべきであった。

ある程度の我侷を受け入れる広い度量は、凧の意思ではなく遺伝子レベルで操作された結果なのではないかと思ってしまうのも無理はない。

「凧君は血を吸うの、初めてだったはずよね？　それで、上手かったわけ？」

「……まあ、わたしも血を吸われたのは初めてだし、何とも言えないけど……：けっこう良かった、よ」

改めて口にするに気恥ずかしい。東雲は紅葉から視線を逸らした。

「東雲からすると合格ということ。凧君からしたら、どうかしらね」

「どうということよ？」

「内心で、『東雲の血、すげえ不味い』とか思ってるかもしれないわ」

「そ、そんなこと思ってるわけじゃないじゃん！ 健康診断ちゃんと受けてるし、血糖値も中性脂肪も問題なかったってば！」

焦ったように東雲は声を荒げた。

今まで考えたこともなかった可能性を提示され、ガツンと頭を殴られたような気がした。

そういえば、きちんと感想を聞いていなかったと今になって思い至る。とはいえ、自分の血の味はどうだったかなんて聞けるはずがない。

「もし不味いとかほんとに言われたら、立ち直れない自信があるわ……」  
その場面を想像して、東雲は戦慄する。

そうになったら、死ぬ気で生活習慣を改善するしかない。  
とはいえ、何がいい血液なのかは分からないのだが。

「吸血鬼が血を吸われるときのことを考えるのも如何なものかと思うけど」  
と、萌葱が今更ながらにツツコミを入れる。

「でも、男子にお前不味いからなあとか言われたくないじゃん」

「確かに……」

萌葱は血を吸われることには関心がないが、もし万が一にもそういう場面になってしまったら、否定的な感想ではなく、肯定的な感想を言ってほしいものだ。

自分の身体のことなので、「料理が不味い」と言われた場合以上の衝撃を受けそうではあった。

「じゃあ、味見してみればいいのではなくて？」

「何言ってるんの、紅葉？」

唐突な紅葉の言い分に、萌葱が問い返した。

「だから、事前に味を見ておこうという試みよ。吸血練習にもなるでしょう。とりあえず、萌葱の血をわたしが吸うのはどうかしら？」

「何言ってるんの、マジで」

萌葱はあからさまなドン引きであった。

妹に噛み付かれて血を吸われるということに対して、まったくと言っていいほど興味関心が湧かないどころか嫌悪感すら覚える始末であった。

そこで、インターホンが鳴る。マンションの入口ではなく、家の扉の前に人がい

るのだ。ここまでやってこれるのは、親族の誰かだ。

「あ、鍵かけてたわ」

「じゃあ、開けてくる」

東雲が家にかかる際に鍵をかけていたため、訪問者は家の中に入れなかったのだ。萌葱は、ソファから降りてゲーム機をクッションの上に投げ出すと、玄関に向かって去っていった。

「あらら、振られちゃったね」

「そうね、残念」

紅葉は小さく笑って、頬杖を突いた。

「じゃあ、あなたの血をもらおうかしら」

「ダメー」

「あら、そう。残念。わたしはアリなのだけれど」

「ガチ百合だったの？ 姉妹なんだけど？」

「百合じゃないわ。両方イケる口ってだけ。萌葱と凧君がツートップ。東雲は次点だから、安心してよくてよ」

「どこにも安心できる要素がないんですけど」

そう言いながら、東雲は携帯端末を取り出した。

無料ゲームのアプリを立ち上げつつ、紅葉との何となくの会話を続けた。

「わたしのこと散々に言ってくれた割に、紅葉ちゃんも相当ぶっ飛んでるんじゃないの……」

「かもね」

紅葉の視線が廊下の方に向けられる。

扉の向こうから、二人分になった足音が近付いてくる。

扉が開いて、入ってきたのは零菜——ではなく、よく似た新入りであった。

「おじゃまします」

「空菜ちゃん、いらっしやーい」

昏月空菜は零菜を基にして作られたという人造吸血鬼だ。外見も文句なしに零菜そっくりで、遠目からでは見分けはつかない。

空菜は大きなビニール袋を持ってきていた。中にはペットボトルとお菓子の袋が詰め込まれている。

「軟禁状態にあるということで、差し入れです」

「ありがとー。気が利く」

テーブルの上に置かれたビニール袋に東雲が駆け寄る。遅れてきた萌葱が空菜の後ろから、テーブルに広げられた菓子袋を眺める。

「ちょうど口寂しかったのよね。うちにあるのは、粗方食べちゃったし」

「することがないと、つつい食に向かうものね」

と、萌葱と紅葉が言う。

「凧君の様子はどうか？」

「今年中には退院するようです。検査結果も問題ないようですね」

「そっか。良かった」

空菜は凧を見舞った帰りなのだ。

身体そのものが変質した凧は、萌葱よりも入念に検査が行われていた。それだけに、心配もあったが、問題がないようなので安心した。

「じゃあ、わたしはこれで」

「待った待った」

と、帰ろうとする空菜を萌葱が呼び止める。

「せっかく来たんだから、ゆっくりして行きなよ」

「しかし……」

「何か急ぎの用事でもあるの？」

「いえ、これといって」

「じゃあ、いいじゃん。東雲と紅葉とは、あまり話したこともないでしょ」

東雲は南米、紅葉は日本でそれぞれ暮らしている。

そのため、空菜とはまったく接点がなかった。情報として存在は知っていたが、顔を合わせるのはテロ事件の日が最初だったし、それからさほど会話をした覚えがなかった。

「そうそう、これを機に親交を暖めるのもいいんじゃない？」

「そうね。それがいいわ」

東雲と紅葉も萌葱の提案に乗り気だった。

突然の誘いではあったが、用事がないと言ってしまった手前断わることもできないし、その理由もない。

「分かりました。では、同席させていただきます」

と、半ば事務的に答えて空菜はイスに腰掛ける。

菓子袋が盛大に破られて、何種類もの彩りある菓子がテーブルの上に姿を現した。新たに空菜が加わって、何があるわけでもない駄弁るだけの一日が過ぎていくのだった。

## 幕間

ピピピ、と甲高い電子音が鳴った。

机に置いた腕時計のタイマー機能が、午後三時を知らせている。

零菜は、ノートに走らせていたシャーペンを木製のペン立てに入れて背中を伸ばした。机に向かってちようど二時間が経過した。ノートには、因数分解の問題に悪戦苦闘した証が長々と綴られている。それを見ただけで、今日も一日ががんばったぞ、という気持ちになれる。

零菜が通う彩海学園は、私立の中高一貫校であり、ここ十年の間に進学校としての名声を高め名門校の仲間入りを果たした学校だ。

第四真祖の出身校で知られ、その縁からか皇女たちが一様に通っているため注目度が格段に高まっている。

そんな学校のカリキュラムは進学校らしく、中学三年生の中頃になると授業内容が高校の予習になる。一部を除いて高校受験がないので、学習をどんどん進めてしまうのだ。

当然、ついていく方は大変な思いをすることになる。帰宅部の零菜だが、決して暇ではなく習い事に時間を取られる中で学習時間を確保し、成果を出すことにはストレスを感じざるを得ない。

「うん、終わり」

ざっと、ノートを眺めて零菜は満足そうに頷いた。

受験の心配がないので、三年生の冬休みは課題さえこなせば自由に使える。

そういったところだけは、受験に追われる通常の中学校よりも気持ちの面では余裕があると言えるだろう。勉強に使う集中力など、二時間も持てばいいほうで、冬休みの課題をやり終えた以上、さらに勉学に励む気は毛頭ない。

聞けば、母親の零菜は中学三年生時点で高校卒業レベルの学力があったというが、俄には信じ難いものだ。眉唾物だと零菜は思っていたりする。

零菜は参考書や教科書を閉じて机の上に放置し、自室を出た。

慌しい一年が過ぎ去ろうとしている年末に、母が帰ってきた形跡はない。暁の帝国の警察権を司る零菜は、クリスマスに発生したテロの被害者でありながら、自ら陣頭指揮を取ってその後始末に追われているのである。今年は、年末年始に親戚一

同が顔を合わせるのには、絶望的な状況だ。

リビングの暖房を切っていたので、自室を出るとフローリングの床がひんやりと  
していて、肌寒い。今日は全国的に冷え込むようで、寒さに慣れていない南国育ち  
の零菜は身震いした。

シン、と静まり返ったりリビングの静寂が耳に痛い。

テレビのリモコンを手にしたところで、零菜は動きを止める。玄関の前を通っ  
た魔力の気配は、空菜のものだ。十数メートル程度の範囲内ならば、魔力や霊力の  
「感じ」から個人を特定することも不可能ではない。

複数の魔力が萌葱の家に集まっている。萌葱だけでなく、紅葉と東雲も一緒にい  
るようだ。女子高生三人で集まって女子会でもしているのかと思っていたが、空菜  
がそこに加わるのは珍しい組み合わせだ。海外で暮らす紅葉と東雲とはほとんど面  
識がないはずである。

と、そこでテーブルの上に放置していた携帯が震えた。メッセージアプリが起動  
して、新着メッセージの存在を知らせていた。

東雲からの呼び出しであった。

味気ない短文で、今すぐ集合としか書かれていない。集合場所は、萌葱の家だろう。玄関を出て二秒もあれば行けるので、それ自体は問題ない。ちょうど、零菜は勉強を終えたばかりで、時間を持って余していたこともあって、二つ返事で萌葱宅に出かけることにした。

家の外は思いのほか寒かった。

地上五十一階という高所かつ風の強い日ということもあって、体感温度はかなり低い。南国と違って油断していると凍えてしまいそうである。

東雲がそうであったように、零菜も足早に玄関扉を開けて萌葱宅に上がりこんだ。冷たい冬の風で一瞬にして冷えた身体が床暖房によって足裏から暖まっていくな。

「さっむ……！」

天候に文句を言っても何の解決にもならないのだが、つつい口に出してしまふ不快感。年間の平均気温が十度を下回らない南国で育った零菜にしてみれば、気温の低下は天敵にも等しいのだ。

リビングにたどり着くと、目に入ったのは乱雑に開けられた菓子袋と脱力気味の

姉三人十 $a$ である。

板チョコを割るでもなく、そのまま齧りついていた東雲が零菜を見止め、にやりと笑って手招きする。

「よう来た、よう来た。まあ、そこに座んなさい」

なんだか良くない気配を感じながらも、零菜は東雲と対面する形でイスに座る。左に萌葱、左斜め向かいに紅葉、右側のお誕生日席に空菜がいて、テーブルは空菜の反対側を除いて席が埋まった。

座ってから、空菜と目が合った。

「どうも」

「ん」

空菜との関係は、非常に難しく、決して良好とは言えない。顔を合わせれば挨拶くらいはするし、必要なら話もするが、積極的に関わる仲かというところではない。向こうも、零菜を一方的に敵視することはなくなったようだが、時折喧嘩腰になる。経緯が経緯だけに、こればかりは一朝一夕には改善しないだろうと零菜は内心で諦めている。彼女自身、空菜を受け入れるには時間がかかると確信しているからだ。

「いきなり、どうしたの？」

手近にあったグミの袋を開けながら、零菜は尋ねた。

「年の瀬も間近で、思い出話をね、しようかね。ほら、この一年、零菜ちゃんたちも大変だったでしょ？」

「ん、そりゃ、まあね」

小さなグミを奥歯で噛み締め、零菜は頷く。

振り返って見ても、かなりハードな一年だった。夏休み前から様々な事件が多発して、国内の治安が揺らいだ。零菜が巻き込まれた事件も何件かあって、命の危機を感じたことすらあった。立場上、命の危機に曝される可能性は示唆されていたし、小さい頃は誘拐未遂もあったが、ここ数年ははそんなことを忘れるくらいに平穩だった。

「来年は落ち着くといいんだけど」

「まあ、今年は厄年みたいなもの、頻発することはないでしょ」

零菜の呟きに萌葱は樂觀的に答えた。

特区警備隊の治安維持部隊が日夜、中央行政区を中心に警備を強化している

光景にも慣れてしまった。二十年前は世界で最も治安のよい国の一つである日本の一部だったが、それでも多種多様な魔族と人間が混在する絃神島は治安の悪い部類であった。

暁の帝国となってからも、騒動はどこかしらで起きています。

それでも、世界規模で見れば、治安は上位に位置しているのであった。

東雲と紅葉は国外で生活しているので、暁の国内で事件が起こっても当事者にはならない。報道や家族友人から後で詳細を聞くだけなのだ。

「うん、ま、それはそれとして、零菜ちゃんに聞きたいことは別にあるんですねー」  
「……………」

口の中のグミを飲み込んで、零菜は何も言わずに東雲に視線を向ける。

東雲は頬杖を突いて、零菜に微笑みかけた。

「凧ちゃんとキスしたって？ それも、ディープなヤツ」

「ツ……………んく!？」

唐突な話題に零菜は喉を詰まらせたような声を漏らした。

「な……………！ な、それ、は！」

「仲直りしたとは聞いてたよ？　でも、まさかねえ、いきなりそんな展開になつてるとは思わないじゃん？」

「いや、別に、そんなのは……」

零菜は昨年まで、凧を避けるように行動していた。今年、一緒に事件に巻き込まれたことで、距離が縮まり、普通に会話できるまでになった。

そこまでは、東雲も聞いている。

「も、萌葱ちゃん！」

零菜が食って掛かったのは萌葱だった。

「だって、仕方ないでしょ。つい……」

「つい、じゃなーい！」

零菜が凧とキスをするに至ったのは、萌葱の悪戯が原因だ。あの場には萌葱と零菜のほかには麻夜もいたが、この場でこの話題が噴出したということは萌葱が口を割ったということだ。

「わたしも、この話は聞いたことがありますでした。どういふことか、詳しく説明してくださいとのことですよ」

と、表情がない割には強い口調で空菜も迫った。

「説明って……単に、萌葱ちゃんが凧君に吸血促進剤を飲ませて、それで変になっただけで。事故だよ、事故、ただの事故！」

「それはもう聞いてるんで。というか、それだけなら別に萌葱さんから聞けばいいだけです」

「じゃあ、何……？」

「さあ……東雲さんが、いきなり呼び出しただけなので」

身構える零菜に空菜は曖昧に答えるだけであった。彼女自身も気になっ  
ていながら、何が気になるのか理解していないといった具合だ。

「うん、そういうわけだから、零菜ちゃん。ここは一つ、色々と遅れているお姉さんに教えて欲しいんですけどね」

「……何を」

「味とか？」

「ん、く……あ、え？」

「キスをしました。それは、まあいい。で、どんな感じだった？ 味は？ 感触

は？」

「し、知らない」

零菜は顔を紅くして、仰け反るようにして答えた。

「知らないってことはないでしょう。所謂ファーストキスだよ？ 押し倒されて、ねっちよりちゅぽちゅぽしたんでしょ!? 白状しなさい、具体的に！ あるいは詩的に！ ほら！」

「知らない知らない覚えてない！ 全然まったくこれっぽっちも！」  
カッとした零菜は必死の形相で反論する。

「大体、人のことなんてどうでもいいでしょー！」  
「人のことだから気になるんじゃないの」

棒状のチョコをマイクのように零菜に向けて、東雲はグイグイと零菜を追い詰める。

「ねー、空菜ちゃんも気になるでしょ？」

「いえ、ですが、はい、何でも、キスのほかに尻さんの指を舐めまわしたとか。その辺はどうなのか？」

「ちょっと、萌葱ちゃん!」

口の軽すぎる長姉に、零菜は改めて抗議の意を示す。

空菜が口にしたのは、以前、零菜と凧が蜘蛛型の眷獣に追い回された際の出来事である。吸血行為に抵抗感があつた零菜は、凧の手から流れた血を舐めて力に変えた。

「否定はしない、と。そうですか。いやらしい吸血鬼ですね」

「だ、だれが、いやらしいだ。常日頃から血を吸ってるのに言われたくないんだけど」

吸血鬼が吸血するのは、当たり前——ということでもない。

何十年も前の価値観ならば、まだよかつただろうが、人間との共生が進む現代では前時代的な発想である。対象となる人間に、低確率とはいえ血の従者化の危険があることもあって、無理矢理の吸血は犯罪だ。そもそも、吸血衝動は性欲に起因するところが大きいので、思春期の吸血鬼にとって、吸血行為は憧れであると同時に恥ずかしいことでもあるのだ。

「わたしが血を吸っているのは、身体の問題もあるからです。こそこそ凧さんの家

に通って血を吸っていた誰かさんとは違うのです」

「もう半年は経ってるし……て、あれ。あんた、その時にはいなかったような」  
はっとして零菜は再び萌葱を見る。

萌葱はそっぽを向いて口笛を吹いた。

「ちよつと、萌葱ちゃん、べらべらしゃべりすぎじゃないの!？」

「話の流れで」

「話の流れじゃないよお」

箇条書きで並べると、確かに空菜の評にも反論できない面はあるが、それはそれとして妹のためを思って胸の中にしまっておくのが姉ではないのか。

好奇心旺盛な女子高生は分かるが、口の軽い女子高生は嫌われるだけだと、内心で忠告する。

「ま、萌ちゃんは萌ちゃんです。色々あったし。ほら、病院で、頭撫で撫であったでしょ」

「待って、何で知ってる？」

萌葱が焦ったように東雲を問い質す。

「見たから。ちらっとだけね。まあ、でも、暁東雲はクールに去ったので、詳しくは知りません」

「ばらしたらクールでもなんでもないでしょうよ！」

「もうそろそろいいかなって」

「よくねえよ。まったく、よくねえよ」

「というか、そこ止まり？ その先は行かなかったの？」

「先って何よ。ほんとに、あれは、あれよ？ 凧君の優しさよ？ 下心とかない

から」

「密着してて下心ないって、乙女としてどうよ、それ」

「……そ、そういうこと言わないでよ」

自分で言っていて、若干傷つく萌葱であった。

異性として見られていないと言われたようで、がっくりとする。

「じゃあ、そういう東雲ちゃんは、どうなのさ」

「わたし？ わたしは、実はもう白状しているっていうか、零菜が来る前に口を割ってるからね。凧ちゃんに血を吸われてヤバかったって話したよ？」

零菜が反撃とばかりに東雲に尋ねたが、東雲は余裕の表情で答えた。

「血を吸われた？ 凧君に？」

「イエス」

「吸血鬼なの？」

「うん」

「ええ……」

零菜は気味の悪いものを見るような目で東雲を見つめた。

「なんか失礼な妹だね」

「いや、普通そういう反応になるのではなくて？」

姉妹の会話を楽しげに見つめていた紅葉が口を挟む。

一般的な感性で言えば、吸血鬼が吸血されるのは危険行為である。また、アブノーマルな行為でもあった。少し背伸びをした、大人の女性向けの雑誌には吸血鬼同士の恋愛に於いて確かに互いの血を吸うことを取り上げている場合もある。しかしながら、やはりそれは正道からずれているからこそ燃え上がるのだとしている。とどのつまりは真つ当な行為ではないのであった。

とはいえ、東雲は遊びで風を吸わせたわけではない。それにはきちんとした理由があって、彼女が口走ったように快楽を覚えてしまったのだとしても、それは想定外の出来事として取り扱うべきものだ。その時点では、あくまでも風の中に眠る吸血鬼の力を呼び覚ますために、最も都合のよい呼び水として東雲の血が適していたというだけであって、享樂的な事情による吸血ではなかった。

「やっぱり、相性がよかったのかなー」

「ちよつと、除夜の鐘で煩惱飛ばしてきなさいよ。このオープンスケベ」

「わたしから煩惱取ったら何も残らないよ」

などと、萌葱の暴言をさらりと受け流す。

本気かどうか分からない発言に、萌葱はため息をついた。別に、東雲が煩惱に塗れていたとしても、それはそれで構わないのだ。吸血も相手が許せばいいだろう。ただ、やはり萌葱の気分は優れない。吸血するのもしられるのも、萌葱は経験がない。頭の中で描ける情景には限界があって、こうして話をしていても経験者たちの感想を内心で羨んでばかりだ。

「そういえば、風君はどうしたのかしら？　今、家に一人でいるの？」

紅葉が空菜に尋ねた。

「凧さんは、合宿中です。攻魔師候補生の合同合宿ですね。来月、試験があるとか何とか」

「ああ、そういうえば、そんな時期ね」

攻魔師として働くには、中卒以上の学歴が必要だ。身の危険を伴う仕事の割りに早い就労年齢なのは、単に技術職としての側面が大きいからだろう。もちろん、大半が大学や専門学校を出てから就職するのは言うまでもないが、凧のようにもともと灵力の高さを見込まれて幼い頃から魔術の鍛錬を積んでいた者もいれば、魔族のように身体能力や魔力が種族柄優れている者も存在しているのが、現代社会だ。学生をしながら攻魔師として働く者も、かなり少ないが皆無というわけではないのであった。

「笑ってはいけませんが始まるまでには帰ってくるって言ってみましたよ」

空菜は、いつの間にか手にしていた携帯用輸血パックから赤々とした血を啜った。

## 幕間

今年のクリスマスは散々だった。

年の瀬に、そんな風に数日前を振り返るのは、茶色味がかった髪 of 少女だ。

もともとは肩の辺りで毛先をそろえたショートカットだったが、いつの間にか伸びて肩甲骨のあたりまで毛先が届いている。狙ってやったわけではなくて、美容院に行くのをサボっていたらこうなっただけだ。そのため、前髪も目にかかって視界を妨げていて、パツと見の印象が暗くなっている。

顔貌は整っていて、将来的には美人になりそうな顔立ちとは友人に言われる。実際、父も母も見た目は上位に入るし、彼女自身も客観的に見ても美少女の仲間入りを果たすに相応しい顔立ちではあるのだが、伸びた前髪と黒縁眼鏡が彼女の顔を隠してしまっているのが痛い。

見た感じから暗い。話しくい。印象に残らない。そんな外見になってしまっていることを彼女————暁唯雫は自覚している。

昔はそれでよかった。

身を守る上で、地味な外見は都合がよかったからだ。

見た目のよい女子は人気者になるか、攻撃対象になるかの二択を迫られる場面が多い。もともと積極性に欠ける上、暁の帝国の皇女の一人でもあるため目立ちやすい立場の唯雫は小学校で少なからぬトラブルに見舞われていた。ごく一部の仲のよい友人ができるまで、思い悩んだ時期もある。

結局、行き着いたのは地味な外見と目立たない服装と行動であった。すべてをほとんどに済ませて、無難に解決することで、唯雫は平穏を得た。

中学に上がってからも、さほど生活は変わらない。制服が新しくなったことと授業の内容が多少難しくなったただけだ。部活動に入っているわけでもない唯雫は、放課後に運動して汗を流すようなことすらない。

日々の生活に不満がないわけではないが、かといって不利益を被ることもなく、淡々と学校生活を送っている。自分が望んでそうなったし、想定通りではあったが、環境が変わり、友人関係も好転していく中でいよいよ唯雫自身も変わってみよう意識してみるのだが、地味キャラが板についてしまった今を変えるだけのエネルギーが出てこない。

一度安定してしまうと、そこから変化していくのが難しい。

結局、この一年を無為に過ごしてしまったという思いが強く、何か季節のイベントごとに何とかして自分を変えようと思いはするのだが、行動に移せないまま今に至ってしまった。

その挙句、せっかくのクリスマスはテロ事件に巻き込まれ、外出も儘ならない状況だ。

唯雫にとっては散々なクリスマスであると同時に思い通りにいかない一年を象徴する事件でもあった。

唯雫自身は、凍結封印を受けていたので酷い目にあっただけという実感はまったくない。気がつけばすべて終わっていたという状況なので、萌葱のように辛い思いをして、それをしっかりと覚えている人とは違って気楽なものだ。

(……美容室に行くのを面倒がっているんじゃない、どうにもならないんだけど)

目にかかる前髪を指で退ける。

現状への不満は自覚しているのに、それをどうにかする努力をする気力はない。別に不都合というほどでもないし、自分に自信がないので目立たなくて済むのなら

それで構わないとも思ってしまう。

人前で顔を出すのが苦手だ。他人と目を合わせるのもだめだし、初対面の人と会話をするのも緊張してしまう。眼鏡はそんな唯雫が人見知りを緩和するためにつけているのであって、けして目が悪いというわけではない。

美容院が苦手なものも、お洒落な人が集まり、初対面の美容師に話しかけられたり、髪に触れられたりするのが嫌だからなのだが、それを人に相談するのも弱みを見せるようで嫌。

嫌なことばかりで、とても面倒くさい性格だと自己分析し、同時に自己嫌悪する。大晦日に勉強するほど殊勝な性格でもない。唯里は古城がいる上の階に行っているので不在だし、家の外に出ることもできないので暇を持て余している。こういう時はゲームに限るとソファに寝転がって黙々とソシヤゲをしていた時、メッセージアプリが新着メッセージがあることを報せてきた。

差出人は萌葱であった。

『昼飯食ってるよー』

ただ一言だけだ。これはつまりご飯を食べに来いということだろうか。時計の短

針は11の数字を指している。お昼にはまだ早い気もするが、誘われたからには食べに行かなければなるまいと唯雫はソファから下りることにした。

萌葱宅の玄関を開けると、いい匂いが漂ってきた。このツンとする香辛料の香り

——カレーの匂いだ。

「おじゃまします」

と、声をかけてリビングまで行く。

扉を開けると昼間から鍋を囲む姉たちの姿があった。

「おーす、唯雫。待ってたよー」

萌葱がにこやかに唯雫に声をかけてくれる。

高校に入学して何があったのだろうかと心配になるくらい、萌葱は変わった。もともと明るめではあったが、彼女の髪は決して金髪ではなかった。それが、今では都心の真ん中を練り歩いていそうなギャル風に様変わりだ。高校デビューを大成功させたわけだが、急にお洒落になった姉との久々の再会に戸惑うところもある。

とはいえ、昼間からカレー鍋。飯にもここに集まっているのは一国の姫なのだ

が、根本的に庶民派な曉家らしい昼食に唯雫は内心で安堵する。

「えーと」

「そこ座って」

「はい」

萌葱の視線を追いかけて、自分の席を把握する。テーブルは四人掛けで、お誕生日席にイスを置いて六人で鍋を囲めるようにしている。

主催者と思しい萌葱は、当然お誕生日席。その左右を零菜と麻夜が埋めている。零菜の隣には空菜、そして麻夜の隣に唯雫が座ることになった。

「ここは？」

「ん？ ああ、そこはあれ、東雲」

「ただいまーあ」

ばん、と勢いよくドアを開けてリビングに入ってきたのは、萌葱が名を出したばかりの東雲だった。

「おかえり。どうだった？」

「ばっちり、タイムリー」

東雲は萌葱にビニール袋を見せる。

中にはペットボトルが何本か入っているようだった。

どうやら、ジュースを貰いに行っていたようだ。

「あ！ 唯雫ちゃんも参加組み？」

「はい。お邪魔します」

「畏まるなよ。自分の家だと思って羽伸ばしい」

バンバンと東雲は唯雫の背中を叩く。

「あんたの家じゃないけどな」

「ダメなん？」

「いや、思う存分羽を伸ばしていい、唯雫はね。あんたは働け」

「何で!?! てかお父さんからジュース貰ってきてあげたじゃん。十分働いてるでしょ！」

冷たい萌葱の言葉に抗議する東雲。互いに笑みを浮かべながらの応酬だ。険悪な雰囲気はまったくくない。

東雲は自分の席に座り、頬杖をついて東雲に視線を向ける。

独特な瞳の色。綺麗な焰光の瞳だ。第四真祖の「純血の子」である証。もしも、第四真祖が世代交代をするのなら、彼女が能力的には後継者の第一候補となるだろう。

「唯雫ちゃんは、いつまでここにいられるの？」

「三が日まで。四日からは母さんの仕事が始まるから、三日の昼過ぎに帰る予定」と、唯雫は答えた。

「大体そんなもんか。唯里さんの赴任っていつまでか知ってる？」

「わかんない。仕事の話は、うちではあまりしないし」

「そっか」

「しの姉さんは、こっちに帰る予定はあるの？」

「高校出たら戻るかも。あっちの大学に行かなければだけどね」

日本で暮らしている唯雫と同じく、東雲も国外で生活している。彼女の場合は南米の第三真祖の夜の帝国が普段の生活拠点である。

将来、地元で就職することを考えると、地元の大学を出るのは悪い選択ではない。暁の帝国にある大学は、世界でも有数の研究機関を備えているところが多いのも魅

力的だ。

「そいや東雲さん。あんた、理系と文系どっちにするの？」

ペットボトルの蓋を開け、オレンジジュースをコップに注いでいた萌葱が、不意に東雲に尋ねる。

「わたしは理系に行きたいなって。歴史、そんな好きじゃないし」

「考古学者の孫なんだけど、わたしたち。ま、わたしも理系だから何とも言えんけど」

苦笑しつつ萌葱はコップをそれぞれ妹達に配った。

「紅葉姉さんと紗葵姉さんは、いないの？」

「紅葉は、霧葉さんと呼ばれて出てった。紗葵は、何か魔具を弄って忙しいらしい」

「そうなんだ」

霧葉とは、休日と一緒に出かけられることもある。唯雫と同じく日本の学校に通っていて生活圏が重なっているの、顔を合わせやすいのだ。

紅葉がここにいないのは、とても残念だった。唯雫にとっては、一番話がしやすい

い相手である。

「鍋、もういいんじゃない？」

じっと鍋の様子を見ていた零菜が、声をかけた。ぐつぐつと沸騰したカレー風味の鍋だ。具材がいい感じに煮えている。

「おいしそー」

「いいじゃん。食おう。わたしはこのために朝ごはんを抜いたんだから」と、零菜に続いて萌葱が言う。

「萌葱姉さん、もしかして昨日から企画してたの？」

「うん。テレビでカレー鍋やってて」

「それでか」

得心がいったと、麻夜は苦笑した。

「僕らにとっではいきなりのことだったし。昼からカレー鍋って」

豆腐を取り皿に取りながら、麻夜は言う。

「はい、じゃあ、早い者勝ちだから、どんどん取ってって。ちなみにカロリー過多なので、締めはないです」

とりあえず全員に具が入った取り皿が配られたところで、萌葱が宣言する。

「米もないのか」

「カロリー過多なので」

がっかりした様子の東雲に萌葱が言う。

美味しいものを食べたいが太りたくないという女子らしい発想だ。普段からさほど運動をしていない萌葱は、零菜や麻夜のように身体能力が高く、日頃から運動をしている人ほどカロリーの消費量が多くない。それを気にしているのだ。

「まあ、萌ちゃんも最低限運動したほうがいいと思うけどね。せめて、護身術くらいやったら?」

「う……まあ、そのうちね」

東雲に指摘されて萌葱は言葉を濁す。

萌葱の運動嫌いは今に始まったものではないが、かといって体育だけでいいかというところというわけにもいかない。

今回のテロの一件で、自分の身は自分で守れるようにならないかという思いを新たにしたばかりである。

「ちよつと、空菜。肉ばっか取り過ぎ」

「あなたもさつきから肉しか取ってないように見えますが」

隣の席で冷戦状態だった零菜と空菜がいよいよ肉を巡って争いだした。いつものことだと周囲は気に止めないが、このような零菜を初めて見る唯雫には新鮮な一幕だ。

萌葱はカロリーを気にしているのか肉や豆腐には箸をつけず、もっぱら野菜類ばかりを取っている。麻夜は零菜と空菜の牽制に漁夫の利を得て肉を掻っ攫いつつバランスよく具を取り、東雲は方向性なく適用に取って食べている感じだ。唯雫はもとも少食ということもあって、少しずつ食べられるものを拾って食べている。

吸血鬼とはいえ、胃の容量は同世代の人間の女子と大差はない。食べた分だけ栄養が蓄積されるという点も変わらないので、食事に気を遣うのが常ではあるが、時たまこうして羽目を外しておなか一杯食べるのも楽しくていい。

食後、それぞれがそれぞれの時間を過ごすことになったが、唯雫は萌葱宅に残ることにした。戻っても唯里はしばらく帰って来ないだろうし、暇なだけだからだ。

「はい、これ」

と、萌葱がアイスコーヒーを入れたグラスを唯雫の前に置く。

「ありがとう」

「砂糖いる？ ミルクは？」

「ブラックで大丈夫」

「そう」

萌葱は、角砂糖を自分のコーヒーに一粒入れてかき混ぜている。

唯雫はそんな萌葱の顔をコーヒーを口に運びながら盗み見る。

綺麗な顔をしていると思った。休みだというのに、薄く化粧をして、身だしなみをしっかりと整えているし、染めた髪にも艶があって痛んだ様子がない。日頃から、しっかりと時間をかけてケアをしているに違いない。

高校生になって、ずっとお洒落になった萌葱。しかし、それでいて道を踏み外したという雰囲気もなく、しっかり者の姉は今も変わっていない。

「何？ 何かついてる？」

萌葱は唯雫の視線に気付いたらしい。

「何でもない」

と、唯雫は答える。

「唯雫、ちょっと前髪伸ばしすぎじゃない？　日本だとそれが流行ってるの？」

「え、いや、これは……何ていうか、美容院に行くのが面倒というか」

お洒落に気を使っている萌葱に指摘されると、つい気圧されてしまう。自分が如何にそういった方向で遅れているのかということを確認化されているような気がするからだ。

悪い事をしているわけではないが、女子として「ダメなこと」だというのは自覚しているので尚一層、無意味な罪悪感を覚えてしまう。

「面倒はダメよ、面倒は」

「そう、だよね」

「人それぞれではあるけどね。でも、多少は気を遣わないと」

「人は見た目が七割って言うしね……」

「まあね。それに、気を遣ってますってアピールは大事でしょ。適当やってると逆に目立つよ」

「う、うん……」

目立つ、と言われて唯雫は身を引いた。

ふと、自分は目立ってしまったているのだろうかと思ひみる。あまりクラスでは話さずほうではないし、特定の友人と机を挟んで駄弁るのが席の山。体育祭や文化祭でも、ノリのいいクラスメイトたちを遠目で眺めているメンバーの一員である。

「前髪切るのは嫌なの？」

「そうじゃないけど……」

実際のところ、どうしたらいいのかは自分でも分からないのだ。

美容院に行かないのはどう変わったらいのかというイメージが掴めないからだ。萌葱のようになれるとはまったく思わないが、かといってどうなりたいのかは分からない。

「ふむ」

と、萌葱が唯雫の顔を覗きこむ。

「……な、何？」

「いや、唯雫は素材はいいから、それをどう活かすか何だよなって。うーん、やっぱり眼鏡がなー」

「これ？」

「そう……伊達でしょ、それ。黒縁に長い前髪はやっぱり暗い印象になっちゃうし、てこ入れするならそこからだな」

そう言いつつ、萌葱は唯雫の額に手を伸ばし、前髪を掻き揚げて顔を出させた。「いきなり髪切るわけにはいかんしね。今日のところは眼鏡を変えて、ヘアピンで顔出すだけで勘弁してあげよう」

得意げに、萌葱は言う。

唯雫の反論を聞く前に萌葱は席を立ち、寝室に行ったかと思えばすぐに戻ってきた。萌葱は寝室からクリアケースを持ってきたのだ。中には色とりどりの眼鏡が何本も入っている。

「これ、全部姉さんの？」

「そうよ。所謂お洒落眼鏡ってヤツね。でも、まあ、学校で使うってなると選択肢が限られるか」

彩海学園はお洒落については緩いが、唯雫が通っている日本の公立校は、それなりに厳しい。伊達眼鏡に目くじらを立てることはないが、あまり派手なものはダメ

だろう。

唯雫にある地味な印象をせめて大人しい程度に軽減できればいいと考えると、「黒は黒で、もうちょっと細めのフレームにしてみようか」

落ち着いた黒いフレームをそのままに、よりスマートな印象を与える細身のフレームの眼鏡に変更してみる。唯雫の眼鏡を外して萌葱の目がねを装着する。

「ああ、似合う似合う。いいんじゃない？」

「そう、かな？」

「やっぱり、目のあたりは大事なよ。眼鏡一つで印象はぐっと変わるもの。じゃあ、前髪をどうにかしましょう。自然のままだと鬱陶しいでしょ。ヘアピンくらい校則違反にはならないよね？」

唯雫に確認を取りながら、萌葱は自分のヘアピンの中から黄色いヘアピンを選んで、唯雫の前髪を纏めてくれる。

「うんうん。イケルイケル、やっぱり元がいいと何やっても似合うわ。外出られるんなら、服も選びたいところなんだけどな」

「そこまでは、いいよ。うん、でもこれ」

唯雫は萌葱がつけた眼鏡を外す。

「いいよ、それ。あげる」

「え、でも」

「見ての通り、わたしいっぱい持つてるからね。その眼鏡も滅多に出番回ってこないから、唯雫が使ってあげたほうがいいのよ。ちなみに、半年前に買ったヤツだから、別に古いわけじゃないからね」

萌葱はそう念押しをして、唯雫の眼鏡をかけなおさせる。

「ま、視力が悪いわけじゃないんだし、眼鏡なしでもいいけると思うよ。髪型変えるまではしなくても、前髪の纏め方ひとつで印象って変わるんだし。とりあえず、顔くらい出しておいて損はないよ」

「あ、ありがと……」

笑う萌葱を直視できなくて、唯雫は恥ずかしげに俯いた。

「あの、萌葱姉さん」

「ん？」

「ほんとに、変じゃない？」

「変なわけないでしょ。え、校則違反とか？　ヘアピンあたり引っかかる？」

「いや、大丈夫だと思うけど」

萌葱が心配するのが校則違反かどうか、ということは今、唯雫がしているヘアピンも眼鏡も学校で使うことを想定して萌葱が選んでくれたものだということが分かる。

見た目を大きく変えたわけではない。眼鏡を取り替えて、前髪を纏めて顔を出ただけだが、確かに雰囲気は明るくなった。

唯雫が苦手とするものではあるが、萌葱が大丈夫だと言ってくれたのが背中を押してくれた。

「萌葱姉さん。あの、今度は服の相談もしていい？」

「おう。任せとけ、というほど精通してるわけじゃないけどね」

「萌葱姉さん、すごくお洒落だし」

「そりゃ頑張ってるもの。本とかテレビとかチェック欠かさないからね。いくつか貸してあげるよ」

そう言って、萌葱はファッション誌を何冊か持ってきてくれた。

そのファッション誌を開き、萌葱にいろいろとアドバイスを貰いながら、唯雫は日本に帰ってからの自分のお洒落について想像の翼を広げるのだった。

### 暁唯雫

唯里の娘。中学一年生。単身赴任中の唯里と一緒に日本に渡り、母方の実家で唯里と祖父母の四人で生活してる。近所に母方の従弟がいて、最近はよく勉強を教え  
ている。

魔族が少ない環境にいるため、目立たず、大人しく過ごそうという方向性で努力してしまったため、すっかり地味キャラになってしまった。

## 幕間

彩海学園の冬休みは、一月八日の月曜日から始まる。

年度の考え方を含めてカレンダーは日本だった頃と大きく変わるところはない。国家元首や支配体制の変更から、建国記念日等がずれているが、旧建国記念日等も名を変えて休日のまま残している。よって、休日の数は日本よりも多少多くなっているようだ。

一月のよいところは、休みが多いことだ。新年の浮かれた気持ちのまま、しばらく過ごすことができる。少なくとも、第二月曜日の成人の日までは、学生的には冬休みの延長の感覚だ。

この日、一月に於ける最後の自由を謳歌できる成人の日は、抜けるような青色を空一面に湛えた式典日となった。朝から各メディアは成人式の中継に奔走しており、式典会場で挨拶をして回る古城や雪菜らの姿が何度も画面に映し出されている。また、毎年恒例の暴れる新成人が今年も出て、会場から追い出される様子が報じられていた。

そんな報道をBGMにして、凧はダンボール箱を閉じていたガムテープを剥がす作業に追われていた。

何かと問題が度重なり、凧は暁家が所有するマンションに引っ越してくることになったのだ。

マンションのワンフロアを所有している暁家は、使いきれない部屋が何部屋もある。その一室が、凧と空菜に宛がわれたのである。

子ども部屋感覚でマンションの一室を渡してしまうのは、さすがは皇室といったところだろうか。

すでに荷物の搬入は終わっており、後は荷解きを終えるだけとなっている。

その荷解きも昨日には粗方終わっていて、残る段ボール箱は四箱。今まで買い集めた漫画や雑貨、教科書の類となった。

これならば、他人の手を煩わせることもない。

凧は一人で荷解き業務の最後の仕上げにかかると。

午前中まで一緒に作業をしていた空菜は、午後からクラスメイトとの約束があるということ以外出した。とてもよいことだと思う。交友関係が広がるのは、彼女に

とって大きなプラスとなるだろう。

軽く口笛を吹きながら、凧はダンボールを開く。

「ん？」

ダンボール箱の中に小さな紙袋が入っていた。

有名なデパートの紙袋で、取り出してみるとずっしり重い。

「何だこれ。こんなの入れてたかな」

自分のダンボール箱に入っていたということは、空菜の私物ではないだろう。

気になって紙袋の中に入っていた箱を取り出してみると、青を基調とした栄養ドリンクの箱だった。

「ああ、そっか。ばあちゃんが置いていったヤツだ」

二ヶ月ほど前に、ふらっとやってきた祖母が置きっぱなしにしていたものである。結局、ほったらかしにしたまま忘れていたのを、今回の引越しに際して発見して適当に箱詰めしたのだった。

蓋を開けてみると、中には六本の栄養ドリンクが入っていた。

Ph—*a*というドリンクらしい。ラベルにはそう書いてあるが、聞いたことのない

いドリンクだ。消費期限は、来週の月曜日となっている。

「何だ、もう切れそうじゃん。あぶねー」

一口も飲まずに栄養ドリンクの期限を迎えてしまうのは、何とももったいない話だ。凧は、日頃から那月やアスタルテ等に厳しい戦闘訓練を受けているので、栄養ドリンクは相棒と言ってもいい存在である。当然、その分の出費もあるので、タダでもらえる栄養ドリンクを溝に捨てるようなことはできない。

ちよつと、味見でもしてみようかと思つたとき、インターホンが鳴つた。音からしてエントランスのものではなく、ドアのインターホンである。つまり、親族の誰かということはある程度確実だつた。

特に警戒をする事もなく、凧は玄関のドアを開ける。立っていたのは小さなビニール袋をぶら下げた萌葱だつた。

「やつほー、凧君。お昼、食べた？」

「いや、まだ」

「じゃあ、ちょうど良かった。これさ、よかつたら食べて」

そう言つて、萌葱はビニール袋を凧に渡す。

「カレーパン？」

「そう。市松屋って知ってる？ 年末に中央銀行の隣にできたパン屋なんだけど」

「この前テレビでちらっとやってた。けっこう、並んでるんだって？」

「そうそう。そのパンをね、立花さんが買ってきてくれたのよ。その、おすそ分け。今日、みんな出払ってるしさ」

立花さんというのは、萌葱の護衛を担当する攻魔師の一人だ。確か、最近産休に入ったばかりだった気がする。

「産休じゃなくて育休。もう、産まれてるよ。写真見せてもらったけど、すっごい可愛かった」

「そうなんだ。男の子？」

「うん、そうみたい。攻魔師にはしたくないんだって。まあ、そうだよね」

「大変さを身を以て知ってるからな、あの人も」

攻魔師は過酷な仕事だが、とりわけ日本の獅子王機関を出身母体とする攻魔師は、非常に大変な経験をして暁の帝国にやって来た者が多くいる。立花もその内の一人だ。といっても、獅子王機関が解体されたのは、彼女が中学生の頃の事だ。現場を

知る前に居場所を失い、唯里を通じて暁の帝国に逃れてきたという経緯があった。攻魔師にとつては荒れた時代が思春期だったのだ。複雑な思いを抱いているのは疑うべくもない。

「萌葱姉さんは、昼食は？」

「もう食った」

「そう。じゃあ、食後に桃のゼリーでもどう？ コンビニのヤツだけど」

「いいの？ もらうもらう。上がっていい？」

「ん、どうぞ」

凧は、萌葱を家にあげる。

内装こそ違いが、構造は萌葱の家と同一だし、荷解きを手伝っている。何よりも、もともとは暁家で物置と化していた部屋なのだ。勝手は知っている。

新しく購入した木製黒塗りのテーブルは四人掛けだ。LDKの広い部屋に、陽光で暖まった風が柔らかく吹き込んでくる。

暦としては冬なのだが、南国だからだろうか。穏やかな午後の気配に、眠ってしまいたいそうだった。

「何か飲み物が欲しいな。コーヒーと紅茶があるけど、どっちにする？」  
と、凧が尋ねる。

「コーヒー」

と、萌葱は答えた。

「了解。少し待ってて」

凧は、キッチンに向かい、お湯を沸かし始める。

「あれ？ 凧君が淹れんの？」

「そうだよ」

「缶コーヒーとかじゃなくて？」

「あまり好きじゃないんだ。缶コーヒー。味気なくて」

「ほー……」

普段、自分でコーヒーを淹れるという習慣のない萌葱には、珍しい光景に見える。  
萌葱としては、市販の缶コーヒーでもまったく問題ない。

もちろん、美味しいに越したことはないし、手間を多少でもかけた物はそれだけで価値があると思うが、量産品もオーダーメイドも萌葱からすれば違いはない。

萌葱の舌は高級食材と廉価品を見分けられるほどグルメではないからだ。

「ふーん……」

萌葱は頬杖をついて尻の背中を眺める。

コーヒートを淹れている男子というのも、これはこれでアリだな、と新しい発見を  
してしまった。悪くない。これは、あれだ。萌というヤツかもしれない。エプロン  
をつけていたら、なおよかった。

「アイスとホット、どっち？」

「わたしはアイスにする」

萌葱の返答から数分後、萌葱の下には冷たいコーヒーが届けられた。グラスは結  
露していて、いかにも冷たそうだ。

「悪くないじゃん」

「どーも」

一口飲んだ萌葱が頷いた。少なくとも、百円ちよつとの缶コーヒーよりは美味し  
いと思った。

「いつからコーヒー、自分で淹れるようになったの？ わたし、知らなかったよ」

「最近だよ。ほんと、つい最近。抽選でセットが当たったから、やってみた」

「それで、嵌った」

「嵌ったわけじゃないって。ただ、道具をほったらかしにするのはもったいないし、さっきも言ったケド、缶コーヒーよりは、自分で淹れたほうがいいってだけ」

「風は萌葱が持ってきてくれたカレーパンを食べてみる。少し辛口だが、カレーパンにしては珍しく、しっかりと具が入っている。」

「ジャガイモ、人参、豚肉、グリーンピースの甘味もある。昼食に軽く食べると考えると、少々重たいかもしれない。」

「きつと、女性ならこれ一つで満足するのだろうか、と勝手に想像をする。」

「どう、それ。美味しい？」

「うん、美味しい。萌葱姉さん、これ食べたんじゃないのか？」

「もちろん。でも、かなりのポリウムでしょ。わたしのおなかには入りきららないのよ」

「ゼリーは入るのに」

「別腹ですー」

言いながら、萌葱は桃ゼリーをスプーンで掬って口に運ぶ。

「てかさ——パンにそれは合わないんじゃない？」

萌葱の視線の先には、先ほど凧が見つけた栄養ドリンクがあった。

「ちょうど、飲もうと思ってたところに姉さんが来たんだよ。ばあちゃんが置いていったヤツで、どんなもんかと思ってさ」

「……それ、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃない？ 消費期限、切れてないし」

「カレーパンに栄養ドリンクって、栄養過多じゃないの」

「一本くらい、大したことないって。どうせ、明日には教官に伸されることになるんだ。今のうちに栄養摂っておくよ」

そういって、凧は小瓶の蓋を螺旋って開ける。つんとした匂いは、コンビニでも買える栄養ドリンクと違いはない。

だとすれば、口に合わないということもないだろう。

凧は特に警戒することもなく、一口で小瓶の中身を飲み干した。味は有名栄養ドリンク、リモピタンAにそっくりだ。いや、ちょっと甘味が強いかもしれない。

「……うん？」

くるり、と視界が回った。

突発的で何の不調もなかった。これは貧血とか眩暈とかではなくて、物理的に視線の位置が変わっているんだらうということだけ理解して、凧は意識を手放した。

萌葱は目の前で起こった事象に何ら対応する術を持ち合わせていなかった。知識、経験、その他あらゆるものが、萌葱には不足していたのである。

だが、それは萌葱の不勉強を浮き彫りにするものではない。未知の事象に対する対応能力が欠如していると言われればそうかもしれないが、高校一年生にそこまで求めるのは酷というモノではないだろうか。

そもそも、一体誰が適切な対応を取れるというのだろうか。

目の前で、幼馴染が突如として子どもになってしまふなどという奇天烈な展開に。

「……？」

「……？」

凧、と思しい子どもと事態を把握できず固まってしまった萌葱の視線が絡まり合

う。

年齢は——見た目から四、五歳くらいだろうか。小学生というには幼すぎる。

「えーと……えーと……あのー、ちょっと、待ってね……あー」

萌葱は何をどうしたらいいのか分からず、完全に思考が真っ白になり、そこから復帰するのに、たっぷり十秒ばかりの時間が必要だった。

（ちょっと、何これ。一瞬前まで凧君だったのが、子どもに掘り替わってたんだけど！）

「……ねえ、君」

「ッ!？」

びく、と少年は肩を震わせる。

恐る恐る周囲を見回しているのは、自分の置かれた状況が分かっていないからだろうか。

「あの、そんなに驚かないで……あの、えーと、お名前、何ていうの？」  
できるだけ平易な言葉で質問する。

「……昏月風、です」

思いのほかしつかりとした受け答えで、少年——恐らくは昔の風は答えた。

「あー、そっかー、風君かー。うん、えー……」

「おかあさんは……?」

「へ?」

「おかあさん、どこ? ここどこ? うう……」

じわりと風の目に涙が浮かぶ。

「あの、あの、えーと、大丈夫! 大丈夫よ、心配しないで!」

「ううう……」

「ちよ、泣かないで。ねえ、風君。あのね、ここは、えと」

どうしたものか。何をどう説明したらいいのかまったく検討もつかない。一先ずは質問をして、風が泣く前に状況を把握しよう。

「風君はさ、何歳ですか!」

「……よんさい」

小さな指を三本立てて風は答えた。

「可愛い……じゃなくて、えーと、その、どこから来ましたか？」

「びょういん」

「え？」

「お医者さんに行った」

「お医者さん？　風邪引いたのかな？」

凧は首を振る。

「おばあちゃんのこと……」

なんだか本人も分からないらしい。

何となくだが、察しはついた。この頃の凧は病弱だった。きっと、彼の体質の所為だ。最近になって分かったことではあるが、この頃から凧は様々なデータを取り、細かく状況をチェックされていたのだ。

「ふぐ……」

「よ、よし。その、あ、これ、食べる？　ゼリー」

泣き出しそうだった凧が視線を上げた。萌葱が少しだけ食べたゼリーだが、あまり減っていないしスプーンで掬っておけば、凧の目線からなら食べかけとは分から

ないだろう。

凧が興味を持ったようで身を乗り出してくる。

「はい、あーん」

「あー」

スプーンにゼリーを乗せて凧に食べさせる。

「美味しいですか？」

そう尋ねると凧は素直に頷いた。

「ヤバイ、これ可愛い。どうしよう……！」

スプーンでゼリーを掬って口元に運ぶと、反射的に口を開けて食いついてくる。ゼリーのカップが空になるまで、さほど時間は掛からなかった。

おやつがなくなつたので、次は何で気を引こうかと萌葱は思案する。今の凧は四歳児だ。ここは凧の家ではあるが、四歳の頃に住んでいた家とは別なので、チビ凧にとっては見えず知らずの空間だ。

今もきよろきよろと周囲を見回して、そこにいるはずの誰かを探している。

「おかあさん……」

不意にイスから下りようとした凧は、バランスを崩して床に転落した。ドスンという派手な音を立ててひっくり返ってしまったのだ。

「うわッ、ちょ、だ、大丈夫!?!」

萌葱は血相を変えて凧に駆け寄った。

ひっくり返った凧はびっくりして固まっている。そして、萌葱が抱き起こしてから事態を把握したのか、急にぐずり始めてしまった。

「ひぐッ、ふぐッ、うう、う……」

「な、泣かないで……い、痛かったねー、びっくりしたよねー」

膝について凧と視線をあわせ、萌葱は頭を撫でて話しかける。昔、テレビで見た子どもの対処法の見よう見真似だ。

「う、ううう……あああ!」

「うわああ、ダメだー。ど、どうするの、これえ」

右往左往する萌葱。せめて夏音が結腫がいてくれればよかったのだが、今日は二人とも子どもを連れて外出している。

「そうだ、分かった! 凧君、お母さんに電話してみよう!」

「うう？」

「そう、電話。わたしね、凧君のお母さんの電話番号知ってるから！ 電話、取ってくるから、じっとしててね！」

妙案とばかりに萌葱は携帯を取りに自宅に戻る。同じフロアにある萌葱宅まで、走れば十秒とかからない。携帯を取って、凧のところへ帰ってくるまで、一分もいない。

萌葱は自室から充電していた携帯を引たくり、慣れた手つきで電話帳から凧沙の電話番号を呼び出した。国際通話料金とか、もう気にしていられない。

（出て、出て、お願いします凧沙さん！）

神にも祈るような気持ちで、萌葱は凧沙を心の中で呼ぶ。

こうしている間にも、萌葱は凧宅の玄関ドアを潜っている。ドタドタと短い廊下を突っ切ると、飛び込んできたのは凧が開け放たれた窓を潜ってベランダに出た光景だった。

「うわーーーーッ!!」

所謂『目を離した隙に……』という展開が襲い掛かってきたのである。ここは地

上五十一階だ。柵の向こうには死しかない。眷獣も魔術も使えない四歳の凧では、とても助かる見込みはない。

「凧君、ストッププー……プー……!!」

転がるような勢いのまま、萌葱は凧に駆け寄って、その小さな身体を抱きかかえて部屋の中に連れ戻した。そして、窓を閉め、鍵をかけて凧が外に出られないようにした。

「はあ、はあ、はあ、あぶねー。マジ、あぶねー……」

心臓が止まるかと思った。

これは、身がもたない

『……もしもし？　もしもし、萌葱ちゃん？　どうしたの？』

「あ！　凧沙さん！　助かったー！」

萌葱はほっとして膝の力が抜けそうだった。

『珍しいね、萌葱ちゃんから電話なんて』

「お忙しいところ、すみません」

『いいよいいよ。ちょうど、昼休み中だしね。それで、どうしたのかな？』

「はい、実は、ちょっと困ったことがありますて……」

それで、萌葱は凧の現状を掻い摘んで説明した。

祖母が残したという栄養ドリンクを飲んだ凧が子どもになったというだけなのだが、それを電話で伝えるとわけが分からない三文小説のようだった。

『へー、四歳の凧君に戻っちゃったんだ』

「はい、そうなんです。それで、今成人式もやってて大人が出払っちゃって、わたししかないんです」

『ああ、そっかそっか。今日、成人の日だもんねー。あはは、でも懐かしーなあ、ちっちゃい凧君。わたしもそっちに行きたいなあ』

「笑いごとじゃないです」

声を潜めて話をする萌葱をちっちゃい凧が興味深そうに眺めている。

『分かった。とりあえず、凧君と話してみるよ。たぶん、そんなに長い時間はかからないと思うけど、一応深森ちゃんに確認はしてもらっていいかな？』

「はい、お願いします」

そして、萌葱は凧に携帯を渡した。

四歳ともなれば、電話で話をするくらいはできるようになる。

会話の相手が風沙だということも、理解できたようで表情を明るくして風沙と話し込んでいる。

その隙に、萌葱は備え付けの固定電話から深森に電話をかける。固定電話を設置している家庭も今は少ないが、家族が誰でも使える電話として、そこその価値は維持している。もっとも、使うのは宅配便の業者などとのやり取りくらいのものだが、今はそれが役に立った。

『はい、もしもし。風君、どうしたの？』

「お祖母ちゃん、わたしわたし。萌葱」

『お？ 萌葱ちゃん？ どうしたの、珍しい』

「至急確認したいんですけど、風君に子どもになる薬渡したりしませんでした？」

『ん？ 子どもになる薬？』

「栄養ドリンクの小瓶なんだけど、お祖母ちゃんに貰ったって言ってたの。それ飲んで、風君、四歳になっちゃって」

横目で電話中の風の様子を確認しつつ、萌葱は深森に聞く。すると――

『あー。はいはい、思い出した！ 医療用の退行薬の試作品！ なくしたと思っ  
たら、うちにあったかー！』

「退行薬？」

『固有堆積時間パーソナルヒストリーを一時的に封印状態にして、何年か時間を巻き戻す霊薬よ。まあ、  
まだ実験段階のものなだけだね』

「そんなの何に使うの？」

『んーとね、例えば進行性の病気とかまだ治療法のない病気とか……今はどうにも  
できないけど、ほっとくわけにもいかないっていう人が適切な医療を受けられるよ  
うになるまでの時間稼ぎに使うのが主目的』

固有堆積時間は、その個人を積み上げた「思い出」を含めた時間そのものだ。そ  
れは魔力の源であり、個人の存在そのものを示している。固有体積時間を一時的に  
封じるということは、封印対象となった時間そのものを一時的に喪失し、その分だ  
け身体も記憶も退行することになる。

極めて高度な霊薬と言えるだろう。最上級の魔導書が一流の魔術師に読み解かれ  
て辛うじて発動できる大魔術か、あるいは第四真祖くらいしか固有堆積時間に干渉

することは困難というのが常識だ。

『まあ、厳密には固有体積時間を封じたのに近い状態を作り出すってだけなんだけどね。世界を騙す幻術っていうのかなー。その人の歴史そのものを戻すから、服すらも纏めて巻き戻るって寸法よ』

「細かいことは何でもいいんだけど、これ、治る？ 凧君、縮んでるけど」

『一本飲んだ程度なら一日も持たずに効果切れるから、早ければ今日の夜には戻るかもしれないね』

「あ、そうなんだ」

萌葱はほっとした。この状態がいつまで続くか分からなかったからだ。

『だから、今の内に色々勉強してね。将来のために』

「何、いきなり将来って」

『子どもの扱い方は、知ってたほうがいいよ。子どもと触れ合う機会なんて滅多にないんだから。あ、でも四歳だと瞳ちゃんたちがいたかー』

「保育士にでもならないのなら、今から子どもの世話って早すぎだし」

『そーんなことないよ。浅葱ちゃんがあなたを産んだのは二十歳の時よ。あと、四

年であなたも二十歳。四年なんてあっという間だから、あっという間に適齢期』

「わたしは別に二十歳で子ども作る気はないし、吸血鬼だから適齢期とか別について感じだし……！ 正直、お母さんたちが早すぎってただけだと思うケド」

古城の妻は、概ね二十歳前後で出産している。吸血鬼だけでなく人間の視点からでも、比較的早い出産だと言えるだろう。

それは古城が色々と吹っ切れたことと先を争った妻たちの戦いの結果でもある。萌葱が両親の辿った道を進まない限りに於いて、二十歳で出産という事態はならぬ。萌葱としては、普通に大学生生活を謳歌している予定なのだ。

「はあ、まったく……」

祖母のあまりに大事なことを時々失念する癖に辟易しつつ通話を終える。ちょうど、凧も凧沙との通話を終えていたようで、携帯を返してくれた。

「お母さん、何て言ってた？」

「お姉ちゃんの言うことをよく聞ききないって言ってた」

「そっか。でも、よかったね、お母さんとお話できて」

「うん。今日はお仕事で遅くなるって」

「うんうん、じゃあ、お母さんが来るまで、ここで遊んでよっか？」

「いいの？」

「いいよお、何して遊ぼうかなー」

「野球拳」

「はい？」

萌葱は笑顔を固めて聞き返す。

「野球拳？」

「うん。この前ね、お正月におじさんたちがやってたの」

「ほー……おじさんたち？　ねえねえ、そのおじさんって、もしかして古城って名前じゃなかった？」

「うん、そう。知ってる？　萌葱ちゃんとか零菜ちゃんのお父さん」

「知ってる知ってる。すごいよく知ってるよー。でも野球拳は知らなかったなー。ふーん、あ、じゃあ、古城おじさんと一緒に野球拳してた人当ててみようか？　矢瀬って名前だと思っただけど、どうかなー？」

「おー、すごい。そう。矢瀬おじさん。お姉ちゃんすごい。よく知ってるな」

「そうでしょー。お姉ちゃんってば、物知りなんだー。だから、野球拳はダメ」

「ダメか」

「そう、ダメ。野球拳はね。悪い大人がすることなんだよ。凧君は古城おじさんや矢瀬おじさんの真似をしちゃ、ダメだからね」

「そうだったのか……古城おじさんたちは悪い大人だったのか。なんてことだ……」  
世の真実を知り、純粹な心が落胆に沈んだ。

でも仕方がない。悪い大人の影響は、正しい知識で封殺しなければならない。見えない物に蓋をするだけでは、悪影響は防げないのだ。

「お姉ちゃん、名前」

「ん？ あ、そっかそっかごめん、言ってなかった」

今更、萌葱は凧が今の自分を知らないことに気付いた。

「えっと、どうしようか……」

名乗ろうとして萌葱は躊躇した。凧は『萌葱』という名前を知っている。言うまでもなく、彼女自身だ。この凧が知っているのは五歳の萌葱だが、ここで名乗るのはいいのかどうか。一瞬だけ逡巡してから、まあいいかと割り切った。どうせ一日

と経たずにこの生活は終わるのだ。

「わたしね、萌葱っていうの」

「萌葱？　おー、僕のお姉ちゃんもね、萌葱っていうの」

「そうなんだ、同じ名前だねー」

「うん」

凧沙と話ができて安心したからだろうか。凧は、先ほどよりも快活な雰囲気を出すようになった。

「萌葱ちゃんっていうお姉ちゃんがいるんだねー」

「いる。正確には、従姉っていうんだって。お母さんのお兄さんのこども」

「そっかー、詳しいんだね、凧君」

「へへー」

誉められて嬉しかったのか、凧は頬を綻ばせて笑う。

（やべー、むっちゃ超可愛いー！　抱きしめて頬ずりしたいー！）

にやけそうになる顔を引き締めて萌葱は凧の頭を軽く撫でる。

子どもは嫌いではない。ちょうど、この凧と同じくらいの妹もいるのだ。ませ始

めた瞳や夏穂に比べて、凧はまだまだ歳相応の子ともな感じがする。

この年齢の子どもは何でも玩具にする。遊び方さえ教えてあげればいい。引っ越してきたばかりの凧宅は、見方を変えれば玩具の宝庫ともいえる。例えば段ボール箱。これは、子どもにとっては秘密基地にもなるし、ロボットにもなる重要な玩具の材料だ。

萌葱はダンボール箱を解体し、凧と一緒に小さな恐竜を作ることにした。ダンボールを張り合わせるだけの、簡単な作業で、鋏を使うところは萌葱が凧に代わってすることで危険を最小限に抑える配慮をする。

凧の仕事は切り取ったダンボール紙を糊付けして、張り合わせることだ。

凧は恐竜の足の形に切り取ったダンボール紙を、胴体部分につけている。工作を楽しそうにしているとやっぱり男の子だなあと感慨深く思ってしまう。

この凧と萌葱は十年前に一緒に過ごしていたのだ。その時のことは、もうほとんど覚えていない。だから、この頃の萌葱がどんな娘だったか気になった。

「そういえば、凧君にも萌葱ちゃんって従姉がいるんだよね？」

「いるよ」

「どんな娘なのかな？ わたしもおんなじ名前だから気になるな」

「んー？ どんな？ んー」

凧は手を止めて虚空を見る。何と答えたらいいのか悩んでから、口を開いた。

「えーと、元気」

「へえ、元気な娘なんだ」

「うん、よく一緒に遊んでる。危ないところ行って、怒られたりもする。この前も、あみあみの壁を登ろうとして、先生に怒られてた」

「そ、そう？ そんなことあったかな？」

活動的な子ども時代だったことは覚えているが、凧が言うような事をした記憶はなかった。もちろん、凧にとっての「この前」は萌葱にとっての十年以上前の出来事である。記憶の鮮明さは凧のほうが上で、当然ながら事実なのだろう。綺麗さっぱり、萌葱は忘れてしまっているが、五歳の萌葱は恐らくフェンスか何かをよじ登って立ち入り禁止区域に侵入しようとして、保育士に捕まったのだ。

「お転婆な娘なんだね」

「あと、可愛い」

「え？ そう？ 可愛い？」

「うん」

「そう？ そうなんだ、へえー」

子どもが言っていること。それも、恋愛のれの字も知らないような年代の可愛いは、当てにならない。だが、何にしても、普段そういうことをまったく言わない風が口にしたというところで、萌葱は不覚にも、どきりとしてしまった。

昔の風が昔の萌葱に対してそう評していたというだけのこと、今とは別物と考えるべきだが、それでも以前は可愛いという風に見てくれていたのが、妙に嬉しかった。

「ふう、何か熱い」

パタパタと風は手で顔を扇ぐ。

日が暮れて、西日になっていた。直射日光が風と萌葱に当たっている。時刻は午後六時を回っていた。そろそろ夕飯時だ。

「もうこんな時間だね、どうしようか」

順当にいくのならば、夕ご飯の支度をすべきだ。風は作ったばかりの二つのダンボール人形を戦わせ始めた。西日を浴びて、汗もかいている。子どもは体温が高く発汗しやすいと聞く。そのまま放っておくと、冷えた夜気で風邪を引くかもしれない。

ちょっと汗の匂いもするようになったし、ちょっと血も吸いたくなっ——、  
(何考えてるのわたしッ)

頬をパンパンと萌葱は叩く。

小さいが、風は風だ。眷獣の能力がなくとも、プレイヤーとしての誘引能力は健在なようだ。一瞬、萌葱の思考が吸血に傾きかけた。こんな小さな子どもから吸血するとか歴史に残る大事件だ。まあ、風だしいいかもしれない。後で説明すれば分かっただけの気がするし——、  
「うろうろう」

萌葱はテーブルに額を打ち付ける。

「お姉ちゃん？」

びっくりした風が今日何度目かの硬直をする。

「だ、大丈夫。ちょっと、頭を冷やしただけ。どうかしてるのよ、今日。あははー」  
このままだとダメだ。今日はいろいろと慣れないことが連続して精神的に疲れている。風の状態を考慮して、適切に対応しなければならぬ。

例えば汗の処理。

吸血衝動を喚起する特性は、風の汗を初めとする体液に多く含まれているらしい。つまり、これをきちんと処理するのが重要。

「そ、そうね、そうだ。うん、汗かいちゃったし、お、お風呂行こうか……？」  
風はきょとんとして萌葱を見てくる。

はっと、今の発言の危うさを萌葱は理解したが時すでに遅しだ。

「お風呂、行く！」

風は風呂が好きみたいだった。イスから飛び降りて、風呂場を知らないのに駆け出そうとする。

「ちよ、ちよちよちよと待って風君！」

慌てた萌葱が風を止めようと立ち上がる。バタバタと動き回られるのは、また大変だし、風呂を沸かしてもいない。

萌葱は凧を追いかけようとして、ダンボールの切れ端を踏みつけた。するりと床が後方に抜けてしまったかのような感覚。踏ん張りが利かず、萌葱は前によるめいた。

「あ、ぶなッ！」

凧に頭をぶつけそうになったのを、凧を咄嗟に抱きかかえるようにして回避した。ガタゴトと派手な音を立てて萌葱は転んだ。幸い、凧と衝突することは避けられたが、凧を押し倒す格好になってしまった。

「ごめんね、凧君！ 怪我、ない!？」

「うん」

こくこくと凧は頷く。

頭とか打ってたら大変だと思ったが、凧も倒れただけでどこも打っていないようだった。

病弱かつ脆弱な保育園時代の凧だ。ちょっとしたことでも大怪我に繋がってしまう。それにしても近くで見ると、やっぱり小さい子は可愛いなと思う。汗をかいても汚く見えない。むしろ健康的だ。肌艶もいいし、とても柔らかそうだ。

そんな考えが頭を過ぎった直後であった。

バタバタして頭から抜け落ちていたが、ここは風の家なのだ。半年と少し前までは事情が違い、風宅にはもう一人の同居人がいる。

急に足音が聞こえたかと思うと、ガチャッと音を立ててドアが開いた。

「ただいま戻りました風さん。今日は時間がないので、コンビニ弁当。おまけもいますが……」

入ってきたのは、空菜だった。萌葱の異母姉妹に当たる零菜を元にしたデザインーズチャイルド。ホームクルス。クローン。その他様々な概念に相当する存在で、戸籍上は風の義妹となっている少女だ。空菜は萌葱の存在を認めて、足を止めた。

「ちょっと、オマケって何よ。てか、なんで立ってんの？」

「何かあった？」

空菜の後ろからやってきたのは、零菜と麻夜だった。外で一緒になったらしい。同学年の組み合わせだ。おかしくはないのだろう。

三人が三人とも同じような反応を示した。視線を萌葱とチビ風の間で上下させ

る。

「それはどこのどなたですか？」

まず、最初に口を開いたのは空菜だった。物静かで多少機械的なところのある空菜が、困惑したような声音だ。

「あ、これは、その……」

まずいところを見られた萌葱は、弁解の言葉を探したが、状況が状況だけに一から説明する必要がある。

「萌葱ちゃん、それはダメだよ」

空菜が今まで萌葱に向けたことのない軽蔑の視線を向けてくる。

理解できなくもないところが悔しい。今の萌葱はどこの誰とも知れない男の子を連れ込み、押し倒している女子高生にしか見えない。極めて危ない絵面だ。特に空菜からすれば、自宅に空き巣があることよりも非現実的な光景であろう。

「とりあえず、確保！」

空菜が言うや、空菜が萌葱の背後に回りこみ、両手を脇の下から回して萌葱を風から引き剥がした。

「萌葱姉さん。子どもはちよつと、アウトじゃないかな？」

「麻夜まで!? これから説明するけど、そういうのじゃないからね！」

「君、大丈夫？」

麻夜は萌葱の反論を無視して、起き上がった凧に話しかける。

「大丈夫」

「そうか、良かったよ。変な事されなかった？」

「変なことって何さー！」

ずるずると空菜に引き摺られる萌葱が遠くから叫ぶ。

大して凧は急に増えた人に驚きながらも、麻夜の問いに首を振る。

「何もなかったよ。ただ、お風呂に行こうって言って、それで、何か、倒れてはあはあしてただけ」

「逮捕ー！」

「違ッ。ちがーうッ。事情があるの！ 話を聞け、あんたら！」

慌てた萌葱がバタバタと空菜に抵抗する。悲しいかな単純な力勝負では萌葱は空菜の足元にも及ばない。獣人特性を有する空菜に対して、人間よりも筋力が多少上

なだけの萌葱は非力に過ぎた。

いずれにしても萌葱は疲れた身体に鞭打って、最悪の誤解を解くために言葉を尽くす羽目になったのだった。

## 閑話 二十四年後編

——アツイ。

うだるような熱気と息苦しさに身じろぎする。眩い光がまぶたを通して網膜を刺激した。室温がじりじりと上がっている上に太陽光が直接顔に当たっていて、さらに熱いし暑い。大変に寝苦しくて、零菜の意識は暗闇からあつという間に浮上する。

零菜はのっそりと身体を起こした。

両肩に押し掛かる倦怠感。びっしょりと汗をかいていてシャツが肌に張り付いているのがものすごく不快だ。

「はあ……ダルイ。なんか頭痛いし……」

朝から気分が悪い。身体が重いというだけでなく、頭の奥に鈍痛が走っている。風邪でも引いたのかと思ひながらベッドから足を出すと、なにやら固い物を蹴ってしまった。からからと音を立てて転がっていくのは、空き缶だった。

「なんこれ」

零菜の足元には、いくつもの空き缶が転がっていた。

ベッドのすぐ近くに座卓が置いてあり、その上には空き缶と一升瓶が乗っかっている。食べかけのお菓子の袋も出したままになっている。

——え、何これ。というか、ここどこ……？

零菜は初めて、そこが自分の部屋ではないことに気付いた。まったく見覚えのない部屋で、足元に転がっているのは、どう見ても酒の空き缶だ。

種類は様々で、ビールからチューハイ、日本酒、ウィスキーと色々だ。

ゴミの多い室内は、それに反して日用雑貨が少ない。小さな薄型テレビとノートパソコンの乗った机、漫画やなんらかの参考書が詰め込まれた本棚。クローゼットには、カジュアルな私服のほかにスーツが何着か吊るしてあるのが見えた。

とりあえず、全体的に見覚えはなかったが、開け放たれたクローゼットの様子から男性の部屋なのだろうということは分かる。

——何これ。え？ どういうこと？ お酒？ え？ え？ え？

冷や汗がぶわっと吹き出して、零菜は硬直した。

ここがどこで、どうしてこんな状況になっているのかまったく分からない。酒の空き缶が転がっている部屋で寝ていたという事実だけは確かにあって、もちろん零

菜は中学生なので、それだけでも完全にアウトだ。

覚えていないが、飲酒したとかいうことになったら雪菜に怒られる等というレベルの話では済まされない。

軽くパニックになった零菜は、硬直した頭と身体を何とか動かして現状を把握しようとするところ、背後で、大きな物体が動く気配がした。

咄嗟に視線を向けて、零菜はさらに絶句する。

零菜の背後——つまりは、零菜が寝ていたベッドの壁際で風が寝ていたのだ。おまけに、上半身裸で零菜に背中を向けている。その身体にはいくつもの古傷が刻まれていて、これまでに彼が潜り抜けてきた修羅場の過酷さを物語っている。眷獸を召喚する度に怪我を負っていた風は、最近では力が馴染んできたのか負担も軽くなったようだが、過去の傷跡まで消えるわけではない。この生々しい傷跡も、彼が風であることの証左だった。

下半身はタオルケットがかかったままなので分からない。今まで気付かなかったのは、零菜が反対側に気をとられていたからだだが、こっちはこっちでかなり、いやとてつもなく刺激的な光景だった。

「はうッ!？」

零菜は一気に顔を真っ赤にして、ベッドから転げ落ちた。

床に転がっていた空き缶が背中に食い込んで、猛烈に痛い。

「フギッ、んぐッ、あ、ああ~~~~~!」

メキメキと酷い音がした。

涙目で呻く零菜は、身体を丸めて背中を摩った。

吸血鬼の身体のおかげで痛みが引くのが早い。もしも人間だったら、零菜が感じた以上の痛みを感じた上、さらに長い時間を悶絶したことだろう。

吸血鬼でよかった、と零菜は場違いな感想を抱いた。

それから、零菜はベッドの下から顔を出して、寝ている風——らしき人物を眺める。

確かに、風っぽくはある。魔力の感じからしても風と同一だ。だが、どこか違和感もあった。例えば身体付きがちよつとがっしりしすぎているような気がしないでもない。

もちろん、風の身体をまじまじと見たことはないのだが。

「ていうか、何で上脱いでんの……?」

床に落ちているジーンズは、もしかして寝る直前まで風が履いていたのだろうか。上はどこに脱ぎ散らかしているのか。どこかに落ちているのかもしれないと思っ、座卓の下を覗きこむと案の定、服が落ちていいる。

手に取ると、それは風の服ではなかった。大人っぽいベージュのワンピースだ。そして、ワンピースには、黒いひらひらしたレースのついたブラジャーと黒いショーツが包まれていた。

このショーツがまた特徴的で総レースの花柄だ。可愛らしいが、すけすけでかなりきわどい一品だった。

恐る恐る零菜は自分のシャツの中を確認する。

零菜はシャツ一枚だった。下着の類は身につけていなかった。状況から察して、このワンピースと下着は、零菜が身につけるべきものなのだろう。

これもまた、零菜には見覚えがなかった。

だからだと嫌な汗が滝のように流れる。室内の暑さのせいだけでないのは、言うまでもない。

この惨状については、まったく覚えていない。

落ち着いて考えようにも、ここに至るまでの経緯を含めて何もかもに身に覚えがなさ過ぎるのだ。

情報がなさ過ぎて、どう動いていいのかまったく分からない。

「ん……」

凧が寝返りを打った。掛け時計の秒針の音だけが、静かに響く部屋の中では、その音すらも大きく聞こえてくる。

如何にも眠そうにした凧が、目を開ける。髪は寝癖がついてぼさぼさで、眩しさに目をショボショボさせている。

そんな寝起きの凧と零菜は目を合わせた。

「あ、あの……」

「あー……零菜か」

「あ、うん……」

声の感じからしても、やはり凧なのだろう。

少ししわがれた声なのは朝一番だからだろうか。

凧は、時計に目を向ける。

「んだよ、まだ八時か」

と、呟いたが、起き上がろうとせず、二度寝しようとする。

「あの！　えと、今日、休日だったっけ？」

と、零菜は恐る恐る尋ねた。

零菜の記憶では、まだ冬休みなのだが、窓の外から見える景色は、妙に夏めいている。南国の暁の帝国にも、一応四季はあって、街路樹の若々しい緑は初夏を思わせる。季節すら、零菜の昨日までの記憶とずれているようだった。

零菜に問われた凧は、怪訝そうな顔をする。

「……今日、木曜だぞ」

「そ、そうだっけ？　あれ、学校は……？」

「零菜、今日講義あったっけ？　今期、木曜は完全に空いてんじゃないかった？」

今期、とはどういうことか。そもそも講義という言い回しからして、馴染みがない。

「大丈夫か？　寝ぼけてんの？」

と、凧は怪訝な顔をして身体を起こした。

零菜の知る凧よりもちよつと筋肉質な身体つきが目にも毒だ。零菜は視線を逸らしつつ、大丈夫、と誤魔化すしかなかった。

そして、零菜は決定的なものを見つけてしまう。

それは、視線を逸らした先にかかっていたカレンダーだ。

一月ではなく、六月のカレンダーである。さらに問題なのは、暦だ。

……!?

そのカレンダーが、本当に今日この時点でのものであるならば、実に四年半の月日が進んだ計算になってしまうのだった。

「わ、わたし、顔洗ってくるよ……!」

「ん？ ああ……」

零菜は、逃げるように部屋を出た。

ベッドが置かれた寝室の隣にダイニングキッチンがあり、そこを出るとすぐに玄関だ。間取りを見ると、極普通の1DKの賃貸住宅だということが分かる。

どうやら、ここが「凧の家」であるらしい。

「何が起こってるの……？」

状況を把握しようとしているのに、事態はますます混乱を深めている。

一先ず、凧から距離を取った零菜は、ふらふらとした足取りで家の中を見て回る。といっても、二部屋しかなく、後はトイレと浴室があるくらいだ。ダイニングキッチン飾り棚には、家族写真が飾ってあって、学生服を着た凧や零菜たちが楽しそうな表情を浮かべている。写っているのは、皆、零菜の記憶にある顔立ちよりも大人びているように見えるし、凧の身長は古城に並んでいる上、瞳と夏穂に至っては、別人のように大きくなっていく。零菜の記憶では幼稚園児だった瞳と夏穂だが、この写真では小学校の中学年くらいにはなっていそうだ。

悪い夢を見ているような気分だ。

顔を洗えば、一気に夢が覚めて現実に戻れるのではないかと淡い期待すら抱いている。

脱衣所の洗面台を探し出して乱暴に顔を洗い、水滴に顔を濡らしたまま鏡を見つめる。

「なにこれ。朝起きたら、未来に来てたって意味不明なんだけど」

生ぬるい水道水でも目覚ましには足りず、独り言を呟いてみても何も変わらない。鏡に映っている自分の顔は……少し大人びているが、記憶にある零菜の顔に近い特徴がある。というか、雪菜によく似ていて、嬉しいような嫌なような複雑な気持ちになってしまう。

先ほど目に入ったカレンダーの日付が正しければ、零菜の記憶から四年半が経っている。俄には信じられないが、零菜が寝ている間に仕掛けるドッキリにしては、手が込みすぎている。

「特に問題なく進学してたら大学二年生か……」

タオルで顔の水気を取りながら、そんなことを呟く。

状況が掴めないのは、変わらない。

浦島太郎になったような気分のまま、あえて今が現実であると受け入れるのであれば、零菜は大学二年生……であって欲しい。

浪人せずに大学に行けていれば、そうなっているはずなのだ。

見ず知らずの人の家。ここに未来の凧が住んでいるらしい。

洗面台の隣に置いてある白い化粧棚も気になる。

化粧水とかファンデーションとか、女物の用品も化粧棚に入っているし、歯ブラシも何種類か使用中の物が置いてあるのだ。

男の一人暮らしという感じがまったくしない。

常時、誰か——それも女子複数人がこの家に寝泊りしている環境だと断言できるとは、さる状態だ。

ここが風呂の部屋だと仮定して、これはいったいどういうことか。

釈然としない気持ちのまま、零菜は脱衣所を出る。

郵便受けに新聞が投げ込まれていたので、ついでに回収し、洋間に向かった。

新聞の日付は、やはり零菜の記憶よりも四年半後になっている。

テレビ欄を見ると、知らない番組が大半だ。知っている番組もちらほらとあったが、気休めにもならない。

「服、着ない」と

何をするにしても、一先ず、この格好を何とかしなければならぬ。寝室に戻った零菜は、風呂が二度寝しているのを確認してから、先ほど発見したきわどい下着と

ワンピースを身につけた。

「何かスカスカするなあ……」

本当に、これは自分が着ていた服なのだろうか。

特にシヨーツ。これはないだろうと思いつつも、それ以外に女物の服は見当たらなかった。

空き缶だらけの寝室から、洋間に戻る。

学生の一人暮らしにしては、広い家だ。零菜は、大学生が暮らす学生アパートの相場を知らないが、中学生の感性からしても、この部屋はそれなりにいいところだと察しがつく。

イスの上に無造作に置かれた黒いシヨルダーバッグを発見した。男物とは思えないので、きっと自分のものだろうと思う。

「やっぱり」

バッグの中には財布があつて、そこには各種カードが入っている。そのカードの中に学生証があつた。

零菜の顔写真が入った学生証には、『帝国総合大学魔導学部攻魔師養成課程魔導

犯罪史専修』とある。だから長い名前だが、要するに攻魔師の資格を取得できる学部ということだろう。

もともと、研究機関の集合体である絃神島を中心に形成された暁の帝国は、国土内に多くの研究機関を抱えたまま成長している。その結果、旧絃神島と称される地域には、学園都市というべき研究機関、大学等の密集地が誕生した。

その中でも最高峰の大学が帝国総合大学だ。

どうやら、零菜は無事にSランクの大学に合格できたようだ。

自分のことと言っているのかどうか分からないが、ちょっと安心してしまった。目が覚めてから、一時間ばかり。時刻はちょうど午前九時になった。朝の情報番組が終わり、通販番組が増えてくる。

この流れは、いつの時代も変わらないらしい。

見ず知らずの人の家で目覚めたのならば、かなりのパニックになっていただろうが、幸いにして風がある。零菜の知る風とは違うが、知り合いがいるのといないのとでは気持ちの持ちようが大きく異なる。

比較的落ち着いて、頭を整理する時間を作れたのは大きかった。

「どうにもならない」

というのが、一時間弱の時間を使って辿り着いた結論だった。

分かったことはここが零菜の視点から未来に当たる時間軸だということだけだ。零菜の意識が時間を超えてきたのか、それともただ四年半の記憶を失ってしまっただけなのか。ここで悩んでいても結論は出ない。

零菜の場合厄介なのは、タイムスリップが不可能ではないということだった。

零菜の血に宿る規格外の力。エクリプティカ・サフィルス 天球の蒼——時空間制御の力を持つ眷獣である。

何らかの形で、この眷獣の力が作用しているのだとすれば、精神のみの時間跳躍もありえなくはない。ただ、この眷獣の力は今の零菜では完全に制御も把握もできていないので、可能性があるとしか言えないのであった。

零菜はこの時代の自分の携帯端末を操作する。

ロックがかかっていたが、虹彩認証だったのが幸いして解除できたのだ。

さすがに四年程度では、携帯の変化は余りないようで、操作に苦慮することはなかった。

大学の講義の登録や各種連絡は、専用アプリで管理するらしい。

凧が先ほど言ったとおり、零菜の時間割表を見る限り今日——木曜日には授業が一つも入っていない。ついでに明日もまっさらだ。

「大学って暇なのかな？」

時間割表は、かなり空白が目立つ。月曜日に四コマ講義があるのが最多で、火曜日は朝一の講義が終わるとそれ以降はまっさらだ。

毎日、一限から五限までぶっ通しで授業を受けている中学生から見ると、大学生のこのスケジュールはスカスカと評するほかない。

正直、羨ましい。

これは、毎日が日曜日といっても過言ではない。遊び放題ではないか。

画面をスワイプして、アプリを見ていく。何か、零菜の助けになる情報を探すためだ。メールやメッセージアプリを見ていくと、自分も知っている名前がたくさん残っている。中学時代の友人と、大学生になってからも頻繁にやり取りを重ねて会っているらしい。

凧とのメッセージのやり取りも見てみた。

大学生になった自分と凧との関係が、これで見えてくるはずだ。ちょっとドキドキする。他人の携帯を盗み見るのは極悪非道の行いだ、これは自分の携帯だ。だから、問題ないと言いつける。

「んー……ん？」

直近のメッセージを表示すると、写真データが添付されている。

それを零菜は開いて拡大し、零菜の手が止まる。

それは零菜自身の写真だった。ただ、肌色成分が多い。カメラの位置は零菜の斜め上で、その写真は零菜が自分で撮影したものと思われた。

恥ずかしげな表情をしつつも嫌そうではない。

今、零菜が身につけている「ちょっとどうなの？」と思いたくなるようなきわどい下着を身につけた、零菜自身の自撮り写真だった。

おまけに、写真には『着てみたよ、どうかな。▽▽(\*ゞゞ♪』とメッセージが書き込まれている。

「こ、れ……な、何……!？」

絶句しかない。

てへ♪ じゃねーよ、と内心でつつこみを入れる。

送り先はもちろん凧だ。

それ以上、零菜はアプリを見ていられなかったので、すぐにアプリを落とした。残念な事に、零菜は四年半の月日を重ねて知能を低下させてしまったらしい。

携帯をテーブルに置いて肩を落とした零菜の背後で、ばたんとドアが開く音がする。

凧が起きてきたのだ。

「……おはよう」

少し、警戒心を滲ませて零菜は挨拶をする。

「おはよう、零菜」

凧はきちんと服を着ていた。Tシャツとジーンズというラフな格好だ。起き掛けに顔を洗ってきた凧は、少しだるそうにしている。

「体調悪いの？」

と、牛乳を飲む凧に零菜は聞いた。

「ちよっと、頭痛い。二日酔いってヤツ？」

飲酒について、なんでもなしのことのように凧は言う。

やはり、寢室に転がっていた空き缶の山は酒盛りの名残だったのだ。

「零菜は、大丈夫なのか？ 昨日も、かなり飲んでたけど」

「え？ うん、まあ……」

嘘だった。

ちよつと体調不良気味だ。これが、噂に聞く二日酔いなのか。吸血鬼用のアルコール飲料は、後に残ると聞いたことがあるが、本当のようだ。

ともあれ、そんな体調不良が気にならないくらい、今の零菜の置かれている状況は厳しいものがあった。

「何か様子、おかしくないか？ 何かあった？」

凧は目ざとく零菜の不調を読み取った。

覇気のない、曖昧な受け答えに違和感を覚えたのかもしれない。

「何かって言われても……別に」

とりあえず零菜は誤魔化した。

ここで相談してもよかったが、現状を説明する都合のよい言葉が思いつかなかつ

たのだ。

凧は顔を洗って、歯を磨き、それから部屋に戻って斜めかけのボディバッグをかけてきた。

「どっか行くの？」

「授業」

「あ、そう……」

凧と零菜はカリキュラムが違うらしい。

大学は、授業を自分で選択して必要単位を取得するやり方をしているところもあるのだと漫画で見た。そもそも、零菜と凧が同じ大学に通っているのかどうかも分からない。

凧が出て行った後、取り残された零菜は手持ち無沙汰のままイスに座っていた。テレビでは、日本の刑事ドラマが再放送している。これは、零菜が生まれる前からずっとこうだったらしい。

こういう時、どう動くのが正解なのか。

凧にすべてを打ち明けて、それで一緒に解決策を模索するのが良かったのではな

いか。

これが一過性の記憶喪失ならば、まだいい。本当に零菜の精神だけが時間を超えてやってきているのだとすれば、未来の零菜はどうなったのか、そしてここにいる零菜は元の時代に戻れるのか等気になることが多い。

インターホンが甲高い音を鳴らしたのは、零菜がうつらうつらと舟をこぎ始めたころだった。

音に驚いて目を覚ました零菜だったが、突然の来客に対応していいのかどうかは分からない。もしも、自分の知らない友人とかがいたら、困った事になる。

「……うん、居留守しよう」

零菜はとりあえず無視することにした。

顔を合わせて、適当に誤魔化せる相手ばかりではない。

この時代の人間関係が分からないので、人に会わないに越したことはない。

ともかく、ここは逃げの一手だ。

部屋の中で大人しくしていよう。

そう思っていると、がちゃんと鍵が開く音がした。

「……っ!？」

零菜がびっくりして身を縮める。一瞬、風が帰ってきたのかと思つたが、それからインターホンを鳴らす必要がない。

複数の足音とビニール袋の擦れる音が近付いてきた、無造作に扉が開かれた。

最初に入ってきたのは、金髪の美女だった。身長は零菜のほうが高く、小柄だ。煌めく金色のショートヘアを後頭部で纏めている。

その後ろから、先ほど鏡で見た零菜とそっくりな顔が現れる。こちらは、銀粉をまぶしたような独特の反射光を放つセミロングの黒髪を赤いバレッタでハーフアップにしている。

「ありや、零菜ちゃん、いるんじゃない。返事くらいしてよー」

金髪の方が口を開いた。

白く透き通った肌に、金を基調としつつ見る角度で色合いの変わる瞳と髪。

「東雲ちゃん……?」

「ん? 何?」

入ってきたのは、大人びた東雲だったのだ。彼女は、勝手知つたる我が家のよう

にリビングに上がってきて、そのまま壁際に黒いビニール袋を置いた。なかなか重量感がありそうだ。

入ってきた金髪が東雲だとすると、残る零菜似の方は自ずと答えが出る。

「空菜？」

「何？」

「いや、なんでも……」

空菜がずいぶんと大人に見える。髪形の所為だろうか。いいところのお嬢様と言われても納得の、教養ありそうな美人に育っているではないか。

「何か、様子が変だよ。零菜、変なものでも食べたんじゃない？」

「別に何にも……何もないって」

空菜が、柔らかい口調で零菜を心配してくるといふのは、奇妙な感覚がする。

零菜の知らない四年半の間に何があったのか。こんな風に見るからに優しいお嬢様に空菜がなってしまうなんて、よほどのことがあったに違いない。ぶっちゃけ気持が悪い。

「んー？ 凧君は？」

「さっき、出ってた。授業だつて」

「あれ、マジで？ えー？ そうだっけ？」

東雲は東雲で風をちゃん付けで呼んでいない。これは、まあ妥当な変化と言っているのだろうか。しかし、違和感があるのは違和感がある。

「えー、今日って水曜日じゃなかったっけ？」

「今日は木曜だよ、シノさん」

「そうだっけ？ あれー？」

「徹夜明けで曜日感覚狂ってない？」

「ん……かも」

見れば東雲の目の下には隈ができています。

「徹夜？」

「ゼミの発表資料作らなくちゃいけない。それに、実験のレポートもあって寝てないの。三十時間くらい。で、さっき出してきたところなのよー」

やけくそ気味に笑う東雲。

ついさっきまで大学生は暇ではないかと思っていたところで、三十時間ぶっ通し

で勉強しなければならぬと聞くとそのギャップに困惑する。

これは、まさか零菜が勉強していかないだけなのではないか？

「零菜は、今日は完全オフでしょ？」

「……ま、まあ」

「零菜は今期、ホントに必修しか入れてないからね。二学期から大変かもね」

「そ、そういう空菜はどうなの……？」

と、零菜は未来の自分の名誉のために言い返す。加えて空菜の情報を聞き出すためでもある。

「わたし？ わたしは今期は三十単位入ってるし、結構取ってるほうじゃないかな？ 夏休みも夏期講習出る予定だし」

よく分からないが、空菜はしっかりと授業を取っているらしい。それが、零菜と比較してどの程度か分からないので評価の仕様が無いのだが。

零菜は携帯を取り出して、もう一度大学のアプリを起動した。

時間割表を見ると、右上に今期の単位数が記載されていた。

零菜の大学二年前期の登録単位数は、十二単位だった。空菜の半分以下である。

「少なッ」

「何単位？」

「十二」

「そんな単位で大丈夫？」

「ど、どうかな……」

「なんで自信なさげにしてるの？」

空菜が可愛そうな人を見る目で空菜を見てくる。

大学生の中で時折現れる、学業をおろそかにして遊びを優先する人に対する真面目な学生からの冷ややかな視線である。

「こ、これはきつと何か深い事情があるってことで」

「だから、なんで他人事なのさ」

零菜と空菜の会話を聞いていた東雲が、そこで思わず噴き出した。

「ま、まあ、零菜ちゃんはわたしたちと違って文系だし。二年生は暇な時期だよ。ゼミもないしね」

「東雲ちゃんは、ほんとに忙しいみたいで」

「うん、魔導科学部は魔術と科学を平行してやってくからね。めんどくさいんだ」  
魔術と科学を融合する研究は古くから行われている歴史ある研究分野だが、その一方で多様な知識を必要とするため極めるのは非常に困難なのだ。

理系の知識が必要でありつつ、古典や外国語の書物を読み解く語学力や魔術の知識や才覚も必要だ。

ごく一部の、才能と知識があつて初めてこの分野に取り組む土俵に上がれるのである。

「将来安泰じゃないですか。魔導科学系の技術者なら、食いつぶぐれないでしょうし。わたしの魔獣学は、ちょっと先々不安ですよ」

「魔獣だって、いろいろとあるでしょ。畜産から学芸員、環境保全といろいろと」  
「まあ、流れる的に公務員になりそうですね。魔獣関係の職に就く先輩って、けっこう少ないです、うちの学科」

なんだか世知辛い話をしている。

零菜にも関わりがある話だろうが、今の零菜には他人事だ。

「はあー、何にしても凧君がいないとなー」

唐突にテーブルに突っ伏す東雲。

「凧君に、何か用があったの……?」

「ん、いや。用って言うかね。提案? みたいなの? プレイの?」

「プレイ……?」

「徹夜明けのテンションで、いつもはちょっと恥ずかしくてできないことしようと思つて意気込んできたのにー」

東雲はこれ見よがしにがっかりしてみせる。

「また、そういうことを言つて。さしずめ、その袋は玩具といったところですか。

よく、堂々と持つて来れましたね」

「人の中が見えるわけじゃないし」

「見ていいですか?」

「んー」

東雲の適当な返事を了承を受け取つた空菜は、東雲が持つてきた黒いビニール袋まで歩いていって、中を覗き込む。

「はあー、これはまた」

ごそごとと音を立てて、中から箱を取り出す。

ピンク色の大きめの箱で、首輪のイラストが描いてある。

「え、なにそれ……」

「首輪でしょう。SMプレイ用のゴツイやつですね。……ゴムまであるし、ヤル気満々ですね、シノさん」

『超薄0。01ミリ』と書かれた小さな箱を東雲に見せ付けるように振る空菜。

「だから徹夜の変なテンションのままに妄想を実現しようとしただけなんだって。なんか、こう、冷静に指摘されると恥ずかしいわ」

「そりゃ、そうでしょ」

「それ、空菜ちゃんにも似合いそうだよね」

「それは、わたしが獣人属性だからですか？　だとしたら、その意見は半年遅いですね」

「……え？　もしかして、もう経験済み？　わたし、聞いてないんだけど」

「それこそ人に言うことじゃないでしょう」

「えー」

卑猥な話をしている。

あまり知識のない零菜でも、それははつきりと分かった。空菜が何気なく持っている箱も、噂に聞く避妊具の代表格だ。それくらい中学生の零菜も知っている。学校に持ち込んでいる友人もいたし、知識は身を守るものでもある。

ともあれ、それを空菜は平然と持っているし、持ち込んだのは東雲だった。おまけにSM用の首輪とか頭が痛くなるワードがポンポン出てくる。

「ともかく、それ、わたしのだから勝手に使わないでね」

「ええ、それは当然。自分のは自分で用意しますよ」

空菜は二つの箱を袋に入れ直した。

「ふあー……あー、眠い。お風呂入ってちょっと寝よー」

欠伸をして、東雲は脱衣所に向かって歩いていく。

取り残された零菜は空菜と二人切りになる。

頬杖を突いた空菜が、じっと零菜を見てくる。

「……な、何？」

「いえ……何か、いつもと感じが違う気がするんだけど、どうかした？」

「……別に、何でも」

「ふーん……昨日の夜に風さんと遊びすぎたとか？ ゴムなくなったからって、わたしの予備使うのダメだからね」

「つ、使わないし何の話……ッ」

「この前、わたしが置いてった予備一箱、一晩で消費したじゃないの。酒の勢いって言っても限度があるでしょうに」

「そんなこと、言われても……」

「とりあえず、細かいのはいいので千二百円。使った分、返してもらってないよ」  
「う、えー……」

身に覚えのないことで、千二百円という大金（中学生感覚）を請求されている。空菜の話は、零菜が空菜のあれこれを勝手に使い切ってしまったということだ。未来の話で、ここにいる零菜自身には関係ない。この身体の本来の持ち主と自分が同一人物だと思いたくなかった。

零菜側に空菜の主張を否定する材料が一切ない以上、その要求を飲まざるを得ない。

今の零菜の金ではないので、支払いに躊躇することもなかった。零菜は大人しく「自分」の財布から千二百円を空菜に支払った。

——さっきから、意味分かんないことばっか。頭がどうにかなっちゃいそう。

理不尽な状況の変化に対して、零菜はグロッキーになっていた。

ここが未来だとして、零菜の周囲を取り巻く人間関係がそれぞれ大きく深化している。基本的な関係性は変わっていないようだが、深みが大分違う。

「やっぱり、何か悩んでない？」

と、じつと空菜が零菜を見つめてくる。

その瞳に気圧されて零菜は、うっと口を噤む。

「凧さんを血の従者にしておいて、さらに悩み事なんて贅沢な話だと思うけど」  
嫌味つたらしく空菜が言ってくる。

「……凧君が、血の従者？ え、わたしの……？」

かっと顔が紅くなったのを零菜は自覚した。

きつと、今日で一番の驚きだっただろう。

「……今更、何紅くなってるの？」

零菜の初心な反応に空菜はさらに疑念を強めて見つめてくる。

「零菜、やっぱりいつもと違うんじゃない？ ……ねえ、あなた何か、言わなくちゃいけないことがあるんじゃないの？」

空菜の視線は零菜をまっすぐに射止めている。

からかう様子はなく、ただ純粹に零菜を心配している。そんな空菜の氣遣いが感じ取れて、零菜は複雑な氣持ちになった。

少なくとも中学生の頃の——ここにいる零菜と当時の空菜の関係はこうではなかった。

外見はどうあれ、今の零菜の精神性は中学三年生のままなのだ。原因は未だ不明。知識を借りるなら、身近な人物に助けを求めるのが道理だ。

相手が空菜であるというのは、この際棚上げする。ここにいるのは、零菜の知る空菜ではないのだ。

そうして、零菜は意を決して自分の状況を説明することにしたのだった。

零菜・・・帝国総合大学魔導学部攻魔師養成課程魔導犯罪史専修第二学年在籍。高校生の頃にCカードを取得しているが、大卒で取れる上級職を取得するため本学部に入學した。凧を血の従者とし、暇な大学生らしく自由を謳歌している。何だかんだで学業は優秀。凧とは半同棲状態。

凧・・・零菜と同じ大学の同じ学部の魔導犯罪対策専修に所属する二年生。零菜の血の従者だが、他の姉妹からも関係を求められているハーレム状態。行動の決定権が零菜にあることもあって、事実上暁姉妹に囲われているといってもいい。

東雲・・・高校卒業と同時に暁の帝国に帰国する。零菜と凧の先輩という立場。こちらは理系の最難関魔導科学部に在籍している。週に何度か凧宅を訪れて、あれこれしている。

空菜・・・魔獣学科で魔獣の生態を研究している。人工の大地では魔獣の生息地がそもそもないので将来性はさほどないというのが悩み。四年半でお淑やかな方向に成長した。零菜との関係は良好な模様。



## 閑話 二十四年後編 2話

何をどうするべきかまったく分からない零菜は、とりあえず空菜に洗いざらい現状を話した。今、この場にいる零菜の記憶は中学三年生の新年を迎えた当たりで途切れていて、その後のことがまったく分かっていない浦島太郎状態であるというのは、何とも説明しにくいものではあった。

何せ、自分が四年分の記憶をなくしてしまっただけなのか、それとも過去の自分が未来——この時間の自分に憑依しているのか区別がつかないのだ。

記憶喪失と憑依では、対応が当然ながら変わってくるし、何よりも零菜の外見は大学二年生の零菜のままなので、空菜からすると寝ぼけたことを言っているという程度にしか聞こえない。

「何とも……俄には信じ難いことだけど。つまりあなたは中三の零菜ってこと？」

「そう。少なくともわたしは、そう思ってる」

「……冗談、にしては突拍子もなさすぎるか」

空菜は微妙な表情を浮かべて、零菜を凝視する。

「し、信じてくれる？」

「さて、どうかなあ。まあ、あなたの性格的にそういう冗談を言うことはないだろうとは思うけど。それに、妙な魔力も感じるし」

「そう、かな。自分だと、よく分からないけど」

「何かフィルターがかかっているのかもね。わたしでも微弱にしか感じないし、掴みどころがないからはっきりしないんだけど、攻撃的ではない感じかな。いちおう、ハスタ・アウルム銃の黄金は使わないほうがいいとは思うけど」

「なんで？」

「仮にあなたが過去のあなただとして、こっちの零菜に憑依している魔力を消しちゃったらどうなるか分からないでしょ。意識自体が消えないとも限らないし、その辺はわたしの管轄外だからね」

「う、それ、怖いなあ」

空菜の脅しを受けて、零菜は相棒の使用を控えることにした。

この現象の原因が分からないままに、その発生源の可能性がある魔力を打ち消すとどのような副作用が現れるか想像ができない。

すべて元通りになるといふのなら話は早い、そうでなければ零菜自身に悪影響が出る恐れもあった。

「とうか、本当にこれまでのこと覚えていないの？ 四年分、ごっそり？」

「うん。覚えていないも何も、わたしの感覚からすると高校をすつとぼして大学生になつてゐるって感じだし。正直、タイムスリップみたいなものだし」

「ふうん、そうなんだ。四年って言ったら、わたし、生まれて……たか。生まれたばかりのころだね。零菜を妙に目の仇にしてたっけ。もう、よく覚えてないけど」

「その、そういう態度取られるの、すごい違和感なんだけど。何ていうか、四年で変わりすぎじゃない？」

過去を懐かしむ空菜の大人びた態度は、零菜の知る中三の彼女とは別人だ。

「そうかな？ まあ、自分では分からないけど。ただ、喧嘩する理由がなくなっただけじゃない？」

「そんな軽い感じなの？」

「まあ、他所のことは知らないけど、わたしはそうだったんでしょ」

空菜の話はよく分からない。

零菜は空菜との微妙な距離感にいつも戸惑っていた。敵ではなくなったが、仲良くもできない複雑な関係性は、友人とも家族とも違うものだった。

それが、四年後のこの世界では普通に会話できるようになっているらしい。それどころか、家族として認識している——可能性が高い。何があって、ここまで関係が改善したのか気になるところだが、空菜から話を聞いてもいまいち理解ができない。

話を聞く限りは、きっかけすらなく自然と互いが互いを受け入れていったようでもあった。

「うーん、どうするかなー。これ、ちょっとわたしの手に余る」

空菜の言葉に緊張感はないが、同時に零菜は少し落胆した。

空菜は人工生命体として、極めて多彩な知識を詰め込まれている。問題解決の糸口を探る上で、相談先としては妥当な線ではあったが、その空菜でも手出しできないとなれば、その道のプロに話をするしかない。

零菜が小さくため息をついたとき、扉が開いて、バスタオルを身体に巻きつけた東雲がやってきた。

「さっぱりしたー。そして、ねむいー」

「シノさん、服は？」

「換えの服持ってきてなかった。考えてみたら当然だよ。着の身着のままだったし」

「玩具持ってきておいて、服はないんですか。凧さんがいたら、どうするつもりだったんです？」

「んー。でも、どっちにしてもベッドインするつもりだったし、結果は変わらないんじゃないかなって」

「さようで……」

「で、何か面白い話？」

「うーん、まあ、そうとも言いますか。とりあえず、わたしたちはこれから出かけますけど、シノさんはどうします？」

「わたしは寝る。正直、限界だから。シャワー浴びながら寝落ちしそうだったくらいで……」

しゃべりながら、東雲はうつらうつらし始める。

よほど強烈な睡魔に襲われているらしい。

大学の課題対応のため、ろくに眠れないままパソコンに向かい続けた結果だ。

「おやすみー……」

あくびをしながら、東雲は凧の部屋に向かって歩いていく。

「うわ、空き缶だらけ！ やっぱり酒盛りしてたんだな！ くそー！」

凧の部屋の惨状を見た東雲の声が聞こえる。

しかしその後はベッドの軋む音を最後に物音はしなくなった。

こっそり様子を見にいくと、東雲は凧のベッドにうつ伏せになって死んだように眠っていた。あつという間に深い眠りに落ちてしまったようだ。

よほど眠たかったのだろう。まったく動く様子がない。この分では五、六時間は目覚めないだろう。

「完全に落ちてますね」

「うわッ、びっくりした」

いつの間にかすぐ背後に回っていた空菜が話しかけてきたので、零菜は心臓が止まりそうになった。

空菜は空菜で、零菜があまりに敏感に反応したので、若干引き気味だ。

「急に後ろに立たないでよ」

「急でもないと思うけど……シノさんがこの調子だと、頼るに頼れないね」

「東雲ちゃんなら、何とかできたかもしれない？」

「いや、そうとも思えないけど。もともと、この分野の人じゃないし。シノさんの眷獣は完全に殴り合い専門だしね」

「そこは四年経っても変わらないんだ」

眷獣は吸血鬼の切り札だが、その能力は多岐に渡る。

零菜の眷獣には、時空間制御や魔力無効化という破格の特殊能力があるが、すべての吸血鬼の眷獣がそうというわけではない。むしろ、零菜のように科学で理解できる領分を超えた能力を持つ眷獣はごく一部だ。

東雲の眷獣は、姉妹の中でも最強というに相応しい怪物揃いだ、その能力は直接戦闘——破壊活動に特化している。目の前の敵を倒せばいいという単純な問題ならばあつという間に解決できるのだが、零菜が抱える今の問題に対処するには相性が悪い。

「これから、出かけるって言ってたけど」

「ん？ ああ、このまま家にいても事態は打開できないから、その道のプロに聞きにいくしかないかなって」

「プロって？」

「そりゃあ、時空間魔術の大家って言ったら一人しかないでしょ」



南宮那月は、零菜の記憶には彩海学園の教師と攻魔師の兼業をしていたはずだ。しかし、この四年間で那月の立場も大きく変わり、現在は帝国総合大学で教鞭を執っているという。

大学生になった今でも、零菜は那月の下で学んでいるということになる。

空菜に連れられて外に出た零菜は、眩い太陽に目を晦ませる。

初夏の日差し、といえば聞こえはいいが、南国の暁の帝国ではこの時期から真夏

日になることも珍しくない。地上三階からの眺めに特筆するものは何もなく、数キロ先に聳える中央行政区のビル群の窓ガラスに反射する光が眩しかった。

ちょうど、低い背丈のアパートが密集する区画のようだ。二階建ての低価格学生アパートが集まっているので、道を歩いている疎らな人影は皆、大学生くらいの年齢に見えた。

「ここ、どの辺なの？」

「帝大の場所、知らない？」

「それは何となく分かるけど……」

「口で言うとは難しいけど、帝大まで歩いて五、六分ってところ。自転車ならあつという間」

駐輪場で自転車の鍵を開ける。

空菜はここまで自転車で来たようだ。零菜も空菜に教えてもらった自分の自転車に跨った。

今の状況を完全に受け入れているわけではない零菜だが、夢だと思うには現実感がありすぎる。肌を焼くような太陽光の熱もこの手に握る自転車のハンドルの感触

も、生暖かく湿った空気もすべて本物だ。何よりも夢だと言うのなら、こんなにも空菜と仲良く会話ができているはずがない。それは空菜からすれば非現実的ではあったが、同時に「空菜自身が想像することができない」ということが夢ではなく現実なのだと教えてくれる。

「まずは大学に行って、それから那月先生の研究室に行ってみる。いるかどうか分かんないけど」

那月は多忙だ。アポなしで突撃しても、不在にしていることも珍しくない。

空菜の先導で大学に向かう。坂道のない平坦な道のり。人工島らしい区画整理で直角に交わった道路をジグザグに進んでいくと、すぐに大通りに出る。

ああここか、と空菜はすぐに自分の記憶と目の前の景色を重ね合わせる。

知らない場所ではなかった。この大通りをまっすぐ北に向かって行けば中央行政区の駅前に出る。中学生の空菜にはあまり大学近辺は縁がないのだが、車やバスで何度か通ったことはあった。道の名前を知らない。しかし幹線道路ではあるはずだった。

両脇には青々と葉を茂らせるケヤキが立ち並び、初夏の風に木漏れ日が揺れてい

る。

雲ひとつない青空はどこまでも続いていて、少し早いがプールか海で騒げば楽しいだろうなと思わせる。何故か信号機に併設された電子温度計の表示は三十三度で、真夏日一歩手前であった。それでいて湿度が高いので、不快指数が鰻上りだ。ここに来るまでに汗も大分かいてしまった。

「門が変わった？」

赤信号の前で止まった零菜は、正面に見える帝大の門を見て眩く。

帝国総合大学——通称帝大の門は、赤レンガ製だった。年代物の雰囲気を感じ、図的に演出していたのだが、目の前にある正門は、黒塗りの簡素な木造に見える。それこそ、日本の寺の門を大きくしたような見た目だ。

「去年、ちょっと魔獣が暴れる騒ぎがあって、レンガの門は壊れちゃったからね。バイコーンが頭突きして、木っ端微塵になったの」

「何でこんな街中にバイコーン!？」

「移送中のトラックから逃げ出したんだったかな、確か。全国ニュースになって、大騒ぎだったんだよ」

「そりゃ、そうだよね」

街中に低級とはいえ魔獣が現れて、大学の門を破壊したとなれば大事だ。

バイコーンは二本の角を持つ、凶悪な魔獣である。神話では純血を司るユニコーンに対して不純を司るとされるが、現実のバイコーンには特筆した特殊能力はない。その角を狙った乱獲によって数が大きく減り絶滅の危機にあるという問題を抱えた保護対象の魔獣である。

しかし、それでも魔獣は魔獣だ。

その角の一突きで人間は死ぬだろうし、獣人でも重傷は免れない。体格もサラブレッド並で、筋力はその数倍。その上、魔力で筋力を上昇させるので、さらに突進力は跳ね上がる。昔、テレビ番組で野生のバイコーンが乗用車に突進する映像を見たことがあるが、その凄まじい突進力に乗用車は一突きで破壊され、真っ二つにされていた。

それがこんな人の多い場所で暴れだせば、下手をすれば死人が出るだろう。

「どうなったの、それ」

「大学構内に飛び込んできたから、わたしたちで迎撃した。凧さんが一撃入れて、

わたしが眷獣で取り押さえた。わたしの眷獣はそういうのと相性がいいからね」

「黄金クリッスロニスの指先？」

「そう」

空菜の眷獣はパワー型。おまけに魔力を吸収するので、魔獣を取り押さえるのに向いているのだ。空菜が魔獣学を専攻したのも、魔獣への対応能力の高さからなのかもしれない。

彼女ほどの力があれば、バイコーン程度は片手間で倒せるだろう。

ちょうど話が終わったところで、青信号になったので、二人はペダルを漕いだ。大学のキャンパス内に自転車で入る。何棟もの研究棟が立ち並ぶ総合大学のキャンパスだが、ちょうど午前の授業中の時間帯だけあって人気は少ない。

零菜と空菜は、キャンパスの最奥に位置する魔導学部棟の駐輪場に自転車を停めた。

「何か緊張する」

「あなたの学部だよ」

「わたしは、意識の上では中学生なんだって。大学って、それだけで敷居が高いっ

て言うか」

「悪いこと何もしてないのに、敷居が高いって。別に大学見学に来たつもりでいれ  
ばいいんじゃない？ どうせ、見た目では分かんないよ」

「そうかもしれないけどさ」

零菜にとっては初めて来た場所だ。普段、通っているのだとしても、意識上は場  
違いな感覚を抱いてしまう。

「みんな大人な感じ」

「どこが？」

「なんとなく」

零菜は通り過ぎる学生たちを見て、そんな感想を漏らした。

大学生だ。中学生からすれば、雲の上の存在である。大学という高度な学校で授  
業を受ける人たちで、遥かな先輩たちだ。

「その感覚は、わたしには分からないけど。零菜が思ってるほど、大学生は大人  
じゃないよ。正直、子どもより性質が悪いかもしれない」

「そうなの？」

「間違いないよ。まあ、中学生も中学生が思ってるほど大人じゃないけどね。だからこそ、モラトリアムなんて言うんだけど」

歩きながら、埒のない話をする。すれ違う大学生の視線が、妙に気になってしまふ。零菜が必要以上に周囲を気にしていることもあるが、視線を集めるのは零菜と空菜の容姿がそれだけ人目を惹くからだ。

エレベータで五階まで上がり、そこから薄暗い廊下を東側の突き当りまで歩いていく。部屋の管理責任者名に南宮那月とあった。

「那月ちゃん、ほんとに大学の先生になったんだ」

「四年前の時点でその話はあったみたいだよ。南宮先生は、地位にも研究にも固執する人じゃないから色よい返答をしなかっただけで……」

そう言いながら、空菜は扉をノックする。しかし、応答がない。

「やっぱりいらないかな。今日の講義は一限だけだった気がしたんだけどな」

大学の教員が研究室を離れるのは珍しいことではない。講義もあれば研究もある。講演会などで外出することもあるだろう。現地調査のために海外に出向くことだってある。那月の場合はそのままでしないにしても、魔導犯罪者対策の最前線にい

るだけの、教員以外の仕事も抱えている。

「アポなしは無理か。講義終わりを狙えればよかつたんだけど、お？」

「何してんの？」

やって来たのは腰まで伸ばしたポニーテールが印象的な美少女だった。細身のジーンズと無地の白いワイシャツという簡素な服を着て、その上から緑色のエプロンをかけている。腕まくりして露になった細腕で分厚い本を五冊ほど抱えていた。

「紗葵さん、奇遇ですね」

「こんちわ、空菜さん。それに、零菜姉さんも？　南宮先生は、今日の夜まで出てみたいだよ？」

「え、夜までいないの？」

「うん。だから、これを部屋の前に置いといてくれて、うちの店に連絡があつてさ。よつと」

長机の上にとすと本の束を置いた紗葵は、ぐるぐると手を回して筋肉を解している。

彼女が持ってきた本は、『魔術研究史Ⅲ』とか『近代魔導犯罪の傾向と分析』と

いった難しげな本ばかりだ。最低でも二百ページはあるだろう。それを五冊。すべてハードカバーなので、相当な重量だっただろう。

「お店、忙しいの？」

「いえ、別に。というか古書店なんで、むしろ閑古鳥が鳴いてますよ。使う人、いませんからね」

「よく経営してるよね。そういうお店ってどうやって稼いでるの？」

「うちはネットが主な収入源になってるんです。レア物の魔導書もありますからね。もちろん、合法的なヤツ。後は、古書をインテリアに使う人向けにも販売してるんで、以外に需要はあるみたいです」

「古書をインテリアに。へえ、そんなものもあるんだ」

紗葵は空菜と親しげに話してから、ふと零菜に視線を向ける。

「何か、零菜姉さん、大人しいけどどうかしたの？」

「え、いや、別に……」

「もしかして、また風んここでお酒飲んでたりして」

「……ん、う」

「えー、またー？　姉さん達、最近緩みすぎ！」

身を乗り出すように紗葵が強い口調で言う。

妹にこんな風に言われなければならぬほど、最近の零菜の生活は緩んでいるのだろうか。そうかもしれない。今日、目が覚めたときに見た部屋の惨状を見ると否定することができない。

「まったく、凧が血の従者で、基本的にわがまま聞いてくれるっていつでも限度があるんだからね。講義はちゃんと出てるの？」

「まあまあ、その辺で。成績については、意外にもきちんとしてるんで大丈夫大丈夫」

「……そう？　なら、い——くないけど。まあ、零菜姉さんのことだし、わたしにはかんけーないし」

などと言いながら、ため息をつく紗葵。

「凧も凧だ。やっぱり、わたしが見に行かないと。このままじゃ、どんどん墮落する」

ぶつぶつとそんなことを呟いた紗葵は一人で頷いている。

「ところで、紗葵さん。ちょっと、いいかな」

「ん？ なんです？」

「実のところ零菜関係で問題が発生したんで、先生に相談に来ただけど」

「やっぱり単位？」

「いえいえ。身体の問題で」

「身体？ —— あ、ま、まさか、こ、子どもができたとか。せめて避妊はちゃんとしてるもんだって」

「いえ、そうでもなく」

「ち、違う？ よかった。びっくりした」

顔を紅くしたり青くしたりした紗葵は、ほっと一息をついた。

紗葵の中で零菜はそうとう評価が低いらしい。どういう生活習慣になったら、そこまで言われるんだと零菜は内心で未来の自分を詰った。

「それで、えーと。何があったの？」

「はい、実はですね」

空菜は周囲に人がいないことを確認した上で、紗葵にも零菜の現状を伝えること

にした。

この問題は家族間で情報を共有したほうがいい。落ち着いたら雪菜にも伝えなければならぬとは思っていた。

「……とりあえず、お祖母ちゃんのところに行ったら？ たぶん、家にいるよ」

「なるほど。確かに」

いぶかしみながら紗葵はそうアドバイスする。祖母の深森は医師でもある。それも魔族を相手にしてきたのだ。那月がダメなら、深森も選択肢としてはありだ。

紗葵はこれからすぐに店に戻らなければならないらしい。深森に会いに行って様子を見てもらい、その結果をメッセージアプリで共有する約束をして、紗葵は店に戻っていったのだった。

紗葵・・・帝国総合大学人文学部一年生。二ヶ月前まで高校生だったこともあり真面目に学校に行き、真面目にバイトをしている。バイト先は大学近くの魔導書も扱う古書店。姉たちの爛れた生活には辟易しているが、凧が姉妹の仲の楔になって

いることも事実なので、ハーレム状態には口を出さず、とりあえず生活状況改善を目指して小言や掃除などで年上たちと関わっている。まだいやらしいことは未経験。吸血も風が血の従者になった頃を最後にしてない。



## 閑話 二十四年後編 3話

構内に鐘の音が響く。

総合教育棟三階大ホールに集った学生はおよそ百三十名。それが、講義の終了と共に一斉に席を立った。ある者はグループを作って食堂に向かい、ある者はさっさと荷物を纏めて自宅や研究室に帰る。「魔獣学Ⅱ」は座学で、広く門戸を開いた授業なので、凧のように将来この道に進むと決めている学生以外にも単位目的で受講している者は多い。

攻魔官志望の学生自体が、全体からすれば一パーセントに満たない少数だ。講義に学生を集めようとすれば、自然と他学部 of 学生も視野に入れることになるのだから。

受講生が多くなれば、その分だけ授業も大雑把になる。学生からの質問を受け付ける余裕が講師にはなく、自然と講義自体がただ席に座っているだけとなる。

必要そうなことをメモするだけの講義は退屈だ。内容に興味があるが、頭に入っていないのはどうにもならない。それでも最高難度の大学に合格した身だが、高校

生の頃に比べて勉強する気力がまったく湧いてこないのである。

まあ、これはこれで仕方がない。大学も二年目になれば中だるみする。勉強よりもバイト。バイトよりも遊びがメインになるのが当然の流れだ。

教材を片付けて、凧は席を立った。

二時間目が終わり、大学は昼休みに突入する。大学生協も学食もすでに気の早い学生で埋め尽くされていて、とても利用する気にはならない。

「帰るか」

今日はこれで終わりだ。大学で昼食を摂る必要性はない。このままさっさと家に帰って自堕落に過ごすのが、今日の最適解だろう。

大学図書館で勉強するような殊勝な学生ではないのだ。もちろん、身体を動かして鍛錬に勤しむというのなら話は別だが、呪術なり眷獣なりを使う鍛錬は時と場所を選ぶ。思い立ってすぐに行動とは行かない。

今日の講義の内容をきれいさっぱり頭から消して、凧は総合教育棟を出た。広いキャンパスの中には、学部棟や研究棟などが立ち並んでいて、一つの都市のようになっている。

総合教育棟はその中心に位置しているキャンパス内最大の建物だ。四階建てで多学部を受け入れる大人数向けの講義やガイダンスで使う頻度が高い。

当然、講義が終わった直後は数多くの教室から一斉に学生が津波のように溢れ出し、建物内部のみならず、その正面広場まで祭りさながらの人込みとなる。

凧は、そんな人込みをすり抜けるようにして広場から逃げる。

駐輪場に停めていた自転車を探し出し、鍵を開けたところで肩を叩かれた。

「……びっくりした」

「そんな風には見えないな。もうちょっと分かりやすいリアクションが欲しいね」  
にこやかに話しかけてきた麻夜が、至近距離で手を振っている。

「髪、変えたな」

「ん……そう。一昨日、美容院に行ってきた。どう？」

「似合ってる。」

セミロングぐらいの長さの髪は、緩くウェーブが掛かっている。それを低い位置で一つ結びにして、前に流していた。

「ふふ、ありがとう」

シンプルな髪型だが、それが麻夜の魅力を引き立てている。一房の髪を軽く指で梳く。髪が短かった頃にはなかった仕草だが、ここ数年はそれも板につけてきた。白いブラウスと七分丈の細身のジーンズという組み合わせも、すっきりとしていて余計な装飾はまったくくない。

「で、どうしてここにいるんだ？」

と、凧は尋ねた。

「講義が終わったから。ほら、僕んとこは今、改修工事してるからさ。十二月までは、こっちの校舎を借りてるんだ。言っただけじゃなかったっけ？」

「初耳」

「そうだったかな？ まあ、いいや。僕も凧君と会えるとは思ってなかったし」

麻夜は、この大学の学生ではない。ここから自転車で五分ほどのところにある帝国文化大学に通学している。学部は魔導考古学部で、祖父である牙城が教授を勤めているが、その校舎が改修工事に突入した。そこで、もともと大学間の繋がりがあつた帝国総合大学の総合教育棟の一面を一時的に借りているというわけだ。

帝国総合大学と違い、帝国文化大学の規模はさほど大きくない。校舎の余裕はな

かったのだ。

麻夜は、活動的な大学生だ。勉強もサークル活動も、そして資格取得のための独自学習も積極的に取り組んでいる。

彼女のライフスタイルは、模範的な大学生であると言えるだろう。

「凧君、お昼はどうするの？」

「この後ないから、家で食おうかと」

「じゃあ、僕も行つていい？ 作るからさ」

「ん？ いいぞ、別に用事もないし」

麻夜は、パーソナルスペースに入り込むのが上手い。人のことをよく見ているからだろう。相手との距離を測る能力が高いのだ。

麻夜は凧が自分を拒否しないことを知っている。多少のわがままなら彼は受け入れるだろうという信頼もある。だから、凧に対してはとても距離が近いのだ。

凧は麻夜の申し出をあっさりと受け入れる。突然の来訪ではあるが、それはもう慣れているのだ。暁姉妹の誰かが突然家に来るなど日常茶飯事だし、泊り込むことも珍しくない。

そういうおかしな環境は、やはり人の感覚を鈍らせるのだろう。

自転車で家に帰ると野菜はいなくなっていた。その代わり、東雲が凧の部屋で熟睡している。

「すっかりみんな入り浸ってるね。まるで、あれだ。サークルの部室みたい」

「何するサークルだよ」

「飲むとき飲んで、駄弁って、エロイことする人はエロイこと。ヤリサーかな」

そんなことを言う麻夜も常連の一人ではあるのだ。

何かと凧宅に寄って、時に酒を飲んで帰っていく。泊まることもある。決して人のことを言える立場ではないのだ。

麻夜は自分で言ったとおりに昼食を二人分用意した。といっても、ミートソースのスパゲッティだ。乾燥麺をお湯で戻せばいいので労力はかからない。

「東雲姉さん、起こさなくてよかったよね」

「あの分じゃ、声かけても起きてこない気がする。忙しかったのかな」

「最近、そうだったみたいだね。いや、僕は会うの一ヶ月ぶりくらいだし、連絡を取り合ってるわけでもないから、又聞きだけどさ」

それはそうと、自分の家で寝ればいいのに、と麻夜は思ったりもする。

零菜もさっきまでいたようだし、やはりこの家には常に誰かしらいるようだ。

「麻夜は、大学のほうはどうなんだ？」

「僕？　ま、考古学はそこそこ。実習で海外に行かなくちゃいけないのは面倒だけど、いい勉強になってるよ」

食後、洗い物をしている麻夜に風は唐突に尋ねてみた。とりわけ重要な話題ではなく、ただ単にふと気になっただけだった。

「海外、ね。あまりいい思い出ねーな」

「海外に行くたびに何かしらあったからね。君は、巻き込まれ體質にもほどがあるんだよ。でも、ここ何年かはないね」

「幸いなことに治安もよくなってるからな。犯罪率、減ってるんだってよ。凶悪犯罪は特に」

「まあ、さすがに力入れないといけない分野だからね」

絃神島の頃から、決して治安がいいとは言えない街ではあった。日本という世界でも知られた安全大国の一部でありながら、喧嘩に魔導犯罪にと様々な事件がどこ

かしらで発生していた。暁の帝国になってからもその傾向は変わりない。それが、最近はやつと落ち着いてきたのである。

テレビでもワイドショーを騒がせるのは、海外の事件事故が多くなった。技術の進歩は事故も減らしたのだ。その代わり、汚職事件がこここのところ頻発しているよ  
うな気もする。

「あれ見つけたんだ、よかったね」

昼のワイドショーは今ホットな話題をお届けするいつものコーナーに入った。海に釣りに出かけて行方不明になっていた人間の父子が無事に救助されたという話題がトレンドだそうだ。

「一昨日は、急に天気が変わったからな」

「珍しいことにね」

山のない暁の帝国で、急に天気が変化するというのは余りない。天気は比較的安定しているのだ。排水機能も充実しているので、豪雨災害といったものはまず起こらない。人工島の強みであろう。

「ねえ、凧君」

「ん？」

「血、欲しい」

唐突な麻夜の発言に、凧は特に表情を変えなかった。これも、別に珍しいことではない。この家に入出入りするものは凧以外は全員が吸血鬼で、彼女たちは凧を吸血対象として認識している。肉体関係もある。今更、吸血するしないで騒いだりはしない。もう、そういう年齢になったのだ。

「麻夜、何かあった？」

「ん……ちよっと、ね」

麻夜は凧の隣のイスに座って、それから枝垂れかかるようにして首に噛み付いた。滲み出る血を少しずつ飲んで、情念の火を滾らせる。

「副専攻、介護なんだけどね」

「知ってる」

「昨日の実習でね、いろいろと触られたよ。まあ、接触のある仕事だから仕方ないと言えは仕方ないけど」

不快感を露にしながら、麻夜は囁く。

介護関係者が抱える潜在的な問題の一つは、長年議論されているものの解決には至っていない。

「男の人って苦手だし、思ってたよりもキツかった。あと、気持ち悪い」

「介護だと、そうだよな……相手と近いからな」

「セクハラだよ。施設長が嚴重注意してくれたけどさ。まあ、どこでも、多少はあるって言うし……でも、嫌なものは嫌だから」

麻夜の声には憎悪と恐怖が混じっている。その対象は、麻夜に触れた被介護者ではなく不特定多数の誰かだ。行き場のない嫌悪感、麻夜の過去に起因するトラウマだ。

昨年、麻夜は同級生の男子に髪を切られた。麻夜の親しみやすさを好意と勘違いした男子の逆恨みだった。当然、大問題になり、その男子生徒はその場で現行犯逮捕されたが被害を受けた麻夜は今でもその時のことを引き摺っている。

これまで、相応に修羅場を潜ってきた麻夜は、ちよつとやそつとの危機でどうこうなったりはしない。分かりやすい敵が相手ならば、眷獣なり呪術なりで対応できただろう。同級生という身近な相手が劣情と共に攻撃してきたからこそ、麻夜は

ショックを受けたのだ。

「介護の勉強、続けるのか？ そんなに嫌なら辞めてもいいんじゃないか？ 副専攻なんて、別に必要でもないだろ」

「途中で投げ出すのはもつと嫌。資格はあつて損するものじゃないし、凧君が、介護必要になつたら僕がしてあげるよ。おはようからおはようまで」

「しばらくは必要ないかな」

「うん、だろうね」

零菜の血の従者になつた凧は年老いる事もなく、重傷を負つてもすぐに治癒する。介護が必要な状態になるというのは考えられない。強いて言えば、第三者から物理的、魔術的に拘束された場合だけだろう。

「凧君。頼みがあるんだけど」

「何？」

「触られたとこ、上書きしてよ。凧君で、さ」

麻夜の瞳は紅く染まっている。血を吸ったばかりの唇からは牙が顔を覗かせていて、声音を湿らせる。麻夜の悪い癖が出たようだ。

辛いことがあって、それを抱えきれなくなった時、麻夜は凧との接触を求める。それが決してよくないことだと分かっているが、だからこそ燃え上がってしまう。

「まだ、昼間だぞ」

「関係ないよ。昼とか夜とか」

「東雲寝てるし」

「それこそ今更じゃないか。東雲姉さん相手に隠したって意味ないよ。むしろ見せ付けたほうが喜ぶまである」

「そりやさすがにねーよ。いや、ないと思う」

尻すぼみになるのは、東雲の普段の言動の所為だ。彼女の性癖を考えると、ありえると思えてしまうのが悲しいところだった。

「でも、とりあえず今はだめ」

「むう」

「むくれてもだめだ」

「じゃあ、後で」

「後でな」

ふてくされた風にして、麻夜は風の膝を枕にして横たわる。

「その格好、辛くない？」

「へーき」

とりあえず、麻夜としては風に触れていればそれでいい。

男性に対する不信心は強く残っているが、それを理由に職務を放棄することはなし、風や古城といった気心のしれている家族は対象外だ。とりわけ風は家族という括りでありながら、気になる異性でもある。自分の悪い部分も大らかに受け入れてくれるということも理解しているので、そんな風の性格に付け入ることで、自らを慰めている。

東雲が起きてきたのは、午後四時を回った頃だった。

昼食を抜いていたので、すっかり空腹だった。これは、夕食の前に軽く風から血を貰わないとだめだな、と舌なめずりをしつつ服を着直して風の部屋を出た。

「えー、ずるいそれー」

麻夜が風に膝枕されている。それを見て、東雲は唇を尖らせる。

「東雲姉さん。起きたんだ」

「お腹減ったから」

「冬眠明けの熊みたいな言い草だね」

「麻夜ちゃんは、何故にここに？ 何で膝枕されてんのかな？」

「んー、特に理由はないよ。座っていると、疲れるし？」

「イスの上でその体勢もかなりやばくない？」

東雲は恨めしそうに麻夜を見る。

凧に膝枕されているのが羨ましい。後で自分もしてもらおうと決意する。

「くーちゃんと零菜ちゃんは？ まだ帰って来てないの？」

「空菜も来てたのか？ まだ二人とも帰ってないけどな」

空菜が来ていたことを凧は知らなかった。零菜と空菜が一緒に出て行ったのなら、一緒に戻ってくるかもしれない。もちろん、そのまま解散してそれぞれの家に帰ることもありえるが——と、そんなことを話していたら、玄関のドアが開いた音がした。

「ただいま戻りました」

滑るような足取りでやって来たのは空菜であって、その後ろから零菜と萌葱が顔を出す。

「凧君、お久しぶりー」

「久しぶり。二週間程度だと思っけど」

「まあね」

と、にこやかに萌葱は笑っている。

「何でスーツ？」

「バイト帰りだからさ」

萌葱はスーツ姿で、黒縁の眼鏡をしている。ブルーライト対策だそうだ。

「今日、シフトの日じゃなかったよね」

「まあ、ちよいとサイバー攻撃食らっててね。やり返してやったところ」

「まだ、うちに攻撃してくるところがあったのか……」

暁の帝国の電子戦は世界最強だ。浅葱が開発したプログラムは、およそあらゆる敵性国家並びに企業からの干渉を弾き返す。萌葱の眷獣がネットワーク上に展開されれば、一分の隙もなくなるというものだ。この母娘がその気になれば、イスに

座ったまま世界の半分を征服できる。ネット環境に依存した国ほど、暁の帝国にとってはカモなのだ。

「麻夜はライムしたのに、既読も付かなかったんだけど、ここにいたのね」

「え？ ほんと？ ごめん、見てなかった。わたし、ご覧のとおり寝てたんで」

「ああ、うん。もう、起きたら？ 夕飯にはちよっと早いけど、色々と買い込んで来たよ」

「ほーん、何」

萌葱が買い物袋をひっくり返す。

酒にノンアル、フライドチキン、フライドポテト、ハンバーガー。絶望的なまでに身体に悪そうなラインナップである。

「ピザも頼んどいた。後で紗葵が持ってきてくれることになってます」

「いいね、お腹超減ってた！」

顔を輝かせた東雲は萌葱とハイタッチしている。

「支払いは？」

「今日は臨時出勤で日払いだったので、わたしが奢っちゃいます」

「さすが萌葱ちゃん、そこに痺れる懂れるう！　じゃ、ぶしゅっと」

東雲は結露して水滴の付いたチューハイの缶を手早く掴んで開けた。

「これは、今日も酒盛りになりそうだね、風君」

身体を起こした麻夜は欠伸をかみ殺して、慣れた手つきでプルタブを開ける。

「萌葱ちゃん、シャワー浴びてきたら？　着替えないとスーツに臭い付くよ」

「あ、そうだね。風君、シャワー借りていい？」

東雲にそう言われて萌葱は風に尋ねた。断わる理由は特にないので、風は許可を出す。

「前に置いてったジャージがあったよね。どこだったっけ？」

「寝室の右側の箆筒の上から三番目」

風の部屋に入っていった萌葱。

「うわ、空き缶だらけじゃん。こっちも片付けないとヤバイよ。後で纏めない」と

昨日の酒盛りの名残を見て、萌葱がそう声をかけてくる。結局、今日も酒盛りすることになったのだが、これとあれを纏めてしまえばいいかと風は適当に考える。

「零菜、どうした。突っ立ってないで座れば？」

「え、あ、うん……」

妙にそわそわとした様子の零菜が他人行儀な風でイスに腰掛ける。

「あ、そうそう。大事なことを忘れるところでした。零菜のことで、ちょっと口火を切ったのは、空菜だった。」

「零菜がどうした？」

「それが、今の零菜は普段の零菜じゃないんですよ」

「意味が分からん」

「身体はそのままに中身は中学三年生だそうです。深森さんが言うには、エクリプティカ・サファイルス天球の蒼の制御上の問題だそうです」

空菜がそう説明するので、零菜に視線が集まった。

「ますます意味が分からないんだけど。要するに……」

「時空間を超えて、昔の零菜と今の零菜が入れ替わった、ということです。深森さんと那月先生に視てもらった結果です」

「……それは、また」

なんと saying 正しいのか分からなくて、凧は押し黙る。

「それで、その状態は元に戻せるのかな？」

と、麻夜が尋ねる。

「眷獣の効果は一日と持たないみたいなので、多分明日の朝には戻ってるはずだそうですね」

「てことは、つまり……心配する必要なし？」

「そういうことになります」

眷獣が悪さをしただけで、零菜本人にも周囲にも大した悪影響はないというので、一安心だ。

「ほんとに中三の頃の零菜なのかい？」

「う、うん。麻夜ちゃん、だよな？　なんか、イメージ違うんだけど」

「まあ、あの頃と比べると大分わたしも変わっているだろうね」

零菜にとっては、一番変化が激しかった人物と言えるだろう。今の麻夜と中学生の頃の麻夜が同一人物なのかと言われて、素直に頷けないのだ。

「まあまあ、事情は分かった。けど、今すぐにその何？　入れ替え？　が戻るわけじゃないんでしょ？　じゃあ、ごちゃごちゃ考えても仕方ないし、飲もつか」

東雲が零菜の肩を抱いて、チューハイを押し付ける。

「わたし、中三だってば」

「身体は二十越えてるから大丈夫大丈夫」

「え、いや、それは……」

何とも反論しにくいことを言う。確かに法的には問題はないのかもしれないが、だからといって飲酒するというのも如何なものか。

「ノンアルあるんだから、それでいいだろ。東雲も無理に勧めんなよ」

「凧君は真面目だなー」

「真面目ではないけどな。単純に零菜が困惑してるってだけだろ。中身は中三だぞ」  
「はーい」

東雲は悪びれもせず、零菜の手の中にあつた缶をオレンジジュースに取り替える。  
「ありがとう」

「どーいたしまして」

ぐびぐびぷはっと東雲はアルコールを体内に入れていく。

白い頬がほんのりと紅に染まる。

「それで、中三のいつの零菜なんだ？」

凧に問われた零菜は、オレンジジュースの缶から口を離す。

「わたしの昨日は、一月……まだ冬休み」

「中三の冬休み？ あー、クリスマスステロの後か。なっつ、大変だったな、あの頃は」

「確かに、かなりバタバタしてたよね。凧君なんかは受験が近かったのにさ」

零菜にとっては二週間も経っていない大事件を、凧たちは過去を懐かしむように話す。実際、彼等からすれば四年半も前のことだ。

「零菜ちゃんからは何か聞きたいことないの？ ほら、ここ未来だし。未来？ 未来でいいのかな？」

「その辺はよくわからないみたい。深森ちゃんが言うには、地続きではない？ みたいなの？」

「あれだ、並行世界ってヤツだ。よく分からんけど。まあ、過去と未来がまっすぐ繋がってたら、天球の蒼の能力はあんま意味ないことになるしね」

「うん、それは、そうなんだよね」

具体的に、零菜が自分の能力を把握できているかというところではない。今回の事件も、過去の零菜と未来の零菜のどちらに原因があったのか分からないのだ。少なくとも中三の零菜は未来の自分の入れ替わりを望んではいなかった。

「凧君はあまり変わってないね」

「そうか？ 零菜の血の従者になってたりするぞ」

「……そう、だけど」

「ハーレムだしね」

麻夜が口を挟んだ。

「古城君みたいになってる？」

「傍から見れば、ね。凧君とわたしたちの関係はね……父さんたちとはちょっと違うと思うんだけど、まあ中三には早い」

「その言い方、すごく気になるけど……」

「元に戻ったら覚えてるの？ こっちのこと」

「多分忘れる、と思う。そんな感じがする」

「じゃあ、気にしないほうがいいよ。今が一番いいところに落ち着いているだけで、

大変だったし。主に萌葱姉さんが」

「何で？」

「あの人が発起人だから。まあ、そうせざるを得ないっていうか、色々あったの。わたしたちにもね」

あっけらかんと話す麻夜の隣で、凧は渋そうな顔をしている。凧が当事者、というか中心地にいるはずだが、肩身が狭そうだ。

ドアが開いて、萌葱が入ってくる。体操着のジャージは、彩海学園のものだ。これを着ていると、高校時代の萌葱とそう変わりがないように見える。

「萌葱ちゃんは零菜ちゃんのこと分かってるんだよね」

「ここに来る前に聞いた。懐かしいよね、四年半前ってわたし高一だよ。もうあれから四年半とか、絶望するわ」

イスに腰掛けた萌葱は、そのまま自分が買ってきた酒瓶を開けてお猪口に注いだ。

「何、その白いどろどろは？」

「これ？ どぶろく。知らない？」

「知らない……うえ、アルコール臭い」

「結構、強いからね。日本のお酒の中では」

その強い酒を萌葱は平然と飲んでいる。

「萌葱ちゃんはお酒、強いのか？」

「わたし？ そんなでもないかな？」

萌葱はそう言いながらも、ちびちびとどぶろくを味わっている。

「萌葱ちゃんは強くないけど、強いお酒が好きだな。ほどほどにしないと、またやらかすよ」

「わ、分かってるわよ」

萌葱の顔が赤いのは、酒の所為ではないだろう。過去の「やらかし」が羞恥心を呼び覚ましているのだ。

「何かあったのか？」

と零菜は東雲に聞く。

「ほら、酔った振りして甘えるヤツあるじゃん？ あれをしようとして、ガチで酔いつぶれて吐いた。結局、凧君に介抱してもらったんだもんね」

「あ、あれは、その想定外だったのよ。あんなになるとは思ってたし……も

う大丈夫。自分のことは、自分が一番よく分かってるから」

普段はしっかり者なのに、ここぞというときに失敗するのは昔から変わらないよ  
うだ。

今日顔を合わせた姉妹の中で、萌葱が一番変化が少ない。本当に、零菜の知って  
いる萌葱がそのまま大学生になったという感じだ。関係性にも大きな変化はないよ  
うで、安心感があった。

「あなたがここにいるのは、今日までなんだし、大学生ってこんな感じだっていう  
のを感じてって」

「お酒飲んでダラダラしている印象しかない」

「間違っていないから困る。単位さえ落とさなければ、遊んでも文句言われないし  
ね。高校の頃より緩いのは否めない。空菜以外はここに至るまでに必死こいて勉強  
してるから、トントンだよ」

萌葱はそんなことを言っただけで正当化する。

空菜以外、としたのは空菜はその出生から受験勉強の必要がなかったからだろ  
う。生まれた時から学校の勉強は網羅している。

「そういえば、紅葉ちゃんとか、ここにいないみんなはどうしてるの？」

「紅葉は、留学してる。魔獣の実地調査で、南米にいるよ。東雲が昔使ってた家そのまま借りてる。で、唯雫はまだ日本の高校通ってて、来年、こっちの大学を受験する気でいるみたい。後は、夏穂と瞳は小学校。男子からモテモテみたい」

「可愛いからね、二人とも」

四歳から八歳に成長した幼児組は、案の定、クラスのアイドルになっているとのこと。まあそうだろうな、と納得する。

とりあえず、四年半経っても平穩無事に過ごせているようなので、零菜は少しだけ安心する。もちろん、この未来に辿り着くためには、零菜と周囲が彼等と同じ選択を積み重ねる必要がある。それは、きつと現実的ではない。同じ零菜でも、過去の零菜と未来の零菜は別人だと思うから、必ずしもこんな関係性にはならないだろう。

気になることはたくさんあったが、何を聞いても明日には忘れている。だから、零菜はあまり突っ込んだことは聞かなかった。

朝、目が覚めるともやもやとした違和感があった。間違ひなく自分の部屋なのに、ここではないという思いが不意に浮かんでくる。

一月のまだ肌寒い朝のこと。今日の予想最高気温は十四度。暁の帝国にしては低いほうだろう。

何となく、玄関から外に出る。フロアそのものが暁家の所有物なので、部外者と顔を合わせることはない。強いて上げれば、家族の誰かだ。

「あ、零菜……」

そして、朝一番に顔を合わせたのは自分と同じ顔をした新参者と幼馴染。空菜と凧だ。二人ともジャージを着ている。

「おはよう、二人とも。朝、早いね」

「ランニングでもしようかって話になったんだよ。今年になってから、まだ身体を動かしてないからな」

と、凧は答える。

「零菜は、何だ、その、大丈夫か？」

「え？ 何が？」

「いや……」

と、凧は口籠る。

しかも、

「どう思う？」

「……いつもの零菜に見えます」

というやり取りを空菜としている。

「ちょっと、二人とも……何？」

不審そうに零菜は二人に空色の瞳を向ける。

自分をのけ者にしてこそこそ話をしていることにムツとする。

「いや、別に……」

「別って何？ それにいつものってどういうこと？」

零菜に対して空菜が確認するように尋ねてくる。

「覚えてないんですか？」

「何を？」

「昨日のこと」

「昨日……？」

零菜は何のことか分からない。昨日と言われても、普通に過ごしてただけだ。冬休み課題をしたり、ゲームをしたり。何も特別なことはしていない——はず。

「ありゃ、みんな朝からどうしたの？」

そこに出てきたのは萌葱だった。寝起きなのか、化粧をしていない。髪はシュシュで束ねただけの無防備な姿だ。

「あ、零菜……あんた、今日は大丈夫？」

「萌葱ちゃんまで!? ちょっと、え、何? 何なの？」

困惑する零菜の様子に、萌葱は凧と空菜と目配せする。

「零菜、あんた今日は病院……いや、お祖母ちゃんのとこに行こう。きっと、疲れてるのよ」

「だから何なの!？」

零菜は何のことかさっぱり分からない。しかし、他三人もきちんと事情を飲み込めていないようで返答は曖昧だ。

ただ、分かることは昨日の零菜の様子がおかしかったということだけだ。それも零菜の記憶にはない。自分の知らないところで、何かとても不味いことが起こっているのではないかと不安になる零菜だった。

麻夜・・・帝国文化大学二年生。魔導考古学を専攻しつつ、副専攻で看護学を学んでいる。男性不信を抱く一方で、凧を信頼できるほぼ唯一の男性として強く意識しており、凧との関係性に依存しているところがある。凧と二人だけのときとそれ以外で一人称を使い分けるなど、理性的に振る舞い、時に自分のトラウマすら利用して凧に甘える悪女な面もある。実は恋愛で人が変わるタイプで、四年間で一番変化があった人。

萌葱・・・大学生の身分を持つてはいるが、実体はフリーのプログラマー。眷獣を使わなくとも大概のプログラムは組み立てられる。仕事が早く正確なので色々

な企業や役所のサイバー犯罪対策に重宝されており、収入に困ることはない。風のハーレムを立案した張本人。風が零菜の血の従者になったことで関係の見直しを迫られた際に、家族がこれからもずっと一緒にいるためにハーレムの構築を提案した。その経緯から姉妹の中では強い発言権がある一方で、恋愛面では一緒に時間を過ごして、言葉を交わせれば嬉しいというレベルの純情気質に変わりはないため、積極的過ぎる妹達についていけないと思う場面も多々ある。



## 第五部 一話

魔族の中でも最強と名高い吸血鬼。その吸血鬼の中でも最も古く、すべての吸血鬼の祖となったとされる存在が真祖である。第一から第三までの真祖が、古よりこの世にあり、二十年前に第四真祖がそこに加わった。彼等は存在そのものが天変地異と等しく、単独で一国の軍隊と同等の扱いを受ける真正正銘の怪物だ。

真祖たちはその圧倒的な力を背景に人と魔族を束ね、国家を形成している。吸血鬼の帝王が統治する国を夜の帝国ドミニオンと呼び、真祖の数だけ帝国は存在している。

ここはその内の一つ、中央アメリカにある夜の帝国——混沌界域。第三真祖、混沌の皇女ケイオス・ブライドジャーダ・ククルカンが支配する領域だ。

一月の末。

年末年始が終わり、何かと騒がしい日々が過ぎ去って、ようやく落ち着きを取り戻した頃である。混沌界域であっても、国際的な曆を導入しているので、この辺りは変わらない。他国と異なる文化風習はあるものの、年末年始を祝うという全世界

的なイベントはこの国にも根付いている。

ジリジリ、という擬音がびったりだろう。

太陽照りつける「真夏」の混沌界域は、熱帯に属するためかなりの高温多湿だ。日本の夏とか、まだまだ甘いのだ。

内心で多種多様な文句を並立てながら、暁の帝国からの留学生である暁東雲は汗を拭いながらゴミ袋をゴミ集積所に放り投げた。

混沌界域は中央アメリカだ。赤道直下。四季らしい四季はなく、雨季と乾季の二つに一つだ。そして、今は乾季である。雨が降らず、日が一瞬太陽がガンガン照りつけてきて、高温多湿が加速度的に高まっていく最悪の季節。一般に、混沌界域ではこの乾季を夏と呼ぶ。

「あっちー、もう帰りたい」

と東雲は一人ごちる。三週間前まで実家に帰省していた。暁の帝国も赤道よりではあるので気温は高いが、それでも真夏の混沌界域に比べればずっと過ごしやすい気候ではあった。ジメジメジリジリカンカンと日光と湿度のダブルパンチは体力に自信のある東雲をも蝕んでいる。

学校の電光温度計に表示された気温は摂氏四十五度。普通の人間であれば、日焼けからの水ぶくれも考えられるし、命の危険もある気温だ。気象観測庁からは朝から高温注意を呼びかける案内が出されている。

曲がりなりにも吸血鬼が、全力全開の太陽光の下にいつまでもいるものではない。ゴミ捨てを終えた東雲は、さっさと校内に逃げ帰った。

「シノー、ゴミ捨て終わった？」

と、クーラーの効いた教室でトランプに興じている同級生が聞いてくる。人間の少女で、名前はティーラ。遠くからでも良く分かる眩い赤毛が特徴だ。

気温上昇により、授業は午前で切り上げだ。

この国ではよくあることで、四十度以上の気温になると休校になる場合があるのだ。クーラーはあるが、登下校に危険が伴う、などと言う理由で休校を選択する日もある。ヨーロッパだと二十五度以上で休校になる国もあるのだから。

「ファッキンホット。まじで外やばいんだけど」

「何度だった？ 見た？」

「四十五」

「何だ、昨日と同じじゃん」

「同じでもヤバさには変わりないからね」

五年近くこの国にいるが、この暑さはどうにも慣れない。体質的なものだろうか。  
「てか、ティーラは暑さに強いよね。なんで？ 人間なのに」

「人間のほうが環境適応力は高いって話もあるぞ」

横から口を挟んだのはティーラのトランプの相手を務めていたルリーズだ。ヨロツパからの移民の子で、ゲルマン系のほっそりとした顔つきだ。ちなみに、戦王領域出身の吸血鬼を祖としている吸血鬼でもある。

「吸血鬼は世代交代が遅いからね。その点、人間の種としての強さじゃないかなあ」  
「そうは言うけど、わたし達、あんたらみたいに不死身じゃないから。死ぬときはすぐ死ぬから。あー、もう歳取りたくないよー助けてルリーズ」

「二十五過ぎて同じこと言ったら、わたしの血の従者にしたげる」

「誠心誠意お仕えます」

吸血鬼と人間。見た目は同じでも生物としての差はあまりにも大きい。普通に会話を交わし、感情をぶつけ合うことができるのに、一方は不死身でもう一方はそう

ではないのだ。ティーラは、このままだと老いて死ぬ。東雲とルイズは、どこかで成長を止めて、歳を取っていく彼女を見ていくことになる。血の従者にする以外にこの悲しい結末を避ける術はない。

とはいえ、そう簡単に進む話ではない。簡単に血の従者を作ってしまったえば、世の中が混乱する。吸血鬼に人生を差し出してでも生き永らえたいという人間は枚挙に暇がない。吸血鬼と人間はそうした葛藤の中で共存の道を探っているのだ。

「ティーラの彼氏は吸血鬼じゃなかった？ そっちに頼めばいいじゃん」

「もう別れましたけど」

「え、ごめん。知らなかった」

思わず地雷を踏んでしまったことに焦る東雲。

「ふん、こっちから振ってやったっての。他の女の血を吸ったのよ。わたしに隠れて。最悪じゃない？」

「えー、うん。そうだね」

「あ、そんな風に全然思っていないな、コイツ」

「仕方ないでしょ。特別なご家庭の出身だしね。まあ、高位の吸血鬼がハーレム作

るのは自然だから。わたしの爺さんもそうみたいだし」

東雲の考えを代弁するのは吸血鬼事情を肌で感じて育ったルイーズであった。

東雲が第四真祖の子であることも、第四真祖がハーレムを構築していることも知っている。無論、後者については世界的に知れていることではあるが。

「第四真祖はいいのよ。別に。でも、アイツはちげーから。ただの一般吸血鬼なんだからハーレムすんならどっかの領主になってからにしろってんの」

ぷんぷんと怒り心頭といった様子のティーラ。浮気をされたことがよほど腹に据えかねているらしい。

「吸血と言えば、シノは例のつがい候補とはよろしくやったの？ 帰省したんだから、顔くらい合わせたでしょ」

唐突にルイーズが話を振ってくる。

「は？ 何？」

「年末年始は実家戻ったんでしょ？ で、お気に入り男がいたはずだよ。それどうした？ 番った？」

「番うとか、品がないな……」

「親に獣人が混じってるとどうにもねー」

「すべての獣人さんたちに謝れ」

「すんませーん」

と、まったく謝罪の気持ちなくルイーズは受け流す。

「それで、会ったの？」

興味深々なのはティーラも同じだ。

恋バナを先に振ったのは東雲だ。深掘りされるのは仕方がなかったのかもしれない。ティーラは彼氏と別れたというからこれ以上は突っ込めないし、ルイーズにも相手がいるのは確定していて、彼女の場合はそこを突いてもなんらダメージにならない。

彼女たちは細かいところまでは話していないものの、好意を抱く相手がいる程度のことは伝えていた。ならば、それが発展したかどうかを確かめたくなるのが人情というものだ。

「会うのはね。当然、会ったよ」

「ほーそれで。キスとかした？」

「……実はした」

「マジ？ え、ほんとに？」

ぐっとルイーズが身を乗り出すようにして聞いて来る。

「シノが？ほんとに？ こういうことに関しては口だけのヘタレが？」

「ヘタレって言うな。何、その評価」

心外とばかりに東雲は机を叩く。

「そりゃあ、頭ン中で色々妄想しても実行に移せないならヘタレじゃん」

「そこは身持ちが固いとかでいいんじゃない？」

「でも、コイツ貞淑とかそういう言葉は似合わない気がするよ」

「うーん、確かに」

二人して勝手なことを言っている。

もちろん、東雲自身も自分に貞淑さを求められても困るとは思っている。大変遺憾ではあるが、友人二人の評価は的を射ているように思うのだが、それを他者に指摘されるのはあまりいい気がしないものだ。

「ん？ てことは、番った？」

「番ってない」

「暁の帝国のラブホってどんなのがあるの？」

「行ったことないって。知らないわ、そんなん」

ルイーズとティエラの質問に正直に答える。

過激な話をしているようだが、年頃の女子の話はこんなものだ。

眼前の二人とは、それこそ留学してきた頃からの付き合いになるので五年弱になるだろうか。ずっと、こうしてつるんできた。進学してからもクラスが同じになり、変わらない顔ぶれに苦笑したものだ。少なくとも東雲よりもこの二人は「大人」だ。いつの間にか彼氏を作り、いつの間にか大人の階段を登っていた。ティエラに至っては先ほど別れたと言っていた男子は、中学時代から数えて三人目の彼氏だったはずだ。振るのも振られるのも慣れたもので、怒っているようではあるが、内心ではもう吹っ切れているはずだった。

彼女たちに限らず、同級生達は高校に上がった途端に次々と大人になっていく。クラスのグループも自然と高校デビューに成功した勝ち組は塊になっていることが多かった。

東雲が所謂勝ち組側にいるのは、見目麗しい美少女吸血鬼であるという点と友人二人が勝ち組側であるという点が大きい。

そんな友人二人に置いていかれまいと、つい対抗心から口をついて出たのが風の存在だった。

付き合っているわけではないというのは前提としてあるが、どうにもテイラーもルイズも、ゆくゆくは付き合うのだろうという見立てで東雲に話を振ってくる。そういう甘酸っぱい展開があればいいなと思わないでもないが、生憎とこれまでにそういった出来事は皆無である。

風と本気で関係を持つとうとするのなら、それこそ積極的にアプローチを仕掛けていく必要があるだろう。彼の性格は分かっている。よほど琴線に触れない限り、恋愛面で自分から動くことはないはずだ。

むしろ、分からないのは自分の感情だ。果たしてどこまで本気で風には好意を抱いているのか。恋愛らしい恋愛をしたことのない東雲では、妄想するのが精一杯だった。関係を無理矢理進めて、取り返しの付かないことになるくらいなら、現状維持でもいい。でも、他の娘と付き合うようになったらそれはそれでショックを受ける

ことになるだろう。面倒くさいことこの上ないが、それが東雲の現状であり、同時に他の姉妹も同じような感情を抱いているはずだった。

「何、ほんとにキスマでなの？」

と、ルイーズが聞いてくるので、適当に頷いてみる。

まさか、自分の血を口移しで飲ませたなんて言えるはずがない。あれは、姉妹間だからこそカミングアウトできた話だ。

つまらなそうにする二人組み。東雲からすれば、あそこまで風に迫ったことはこれまで一度もなく、かなりの大事なのだが、ティーラとルイーズからすればまったくそうではないらしい。真の肉食系にとって東雲のような妄想主体の肉食系もどきは、端から相手にならないということだろう。

何ともやるせない思いを抱えて自宅に戻る羽目になった東雲。こっちにはこっちの都合がある、と内心で言い訳を重ねる。キスをしたと言ってしまったが、あれだって状況的には風の力を目覚めさせるための儀式の一端でしかない。

あれで風が東雲を意識するようなことがあれば儲けモノだが、風自身があれを儀

式で必要だったからだと納得している。あの男の残念な点は、まさにそういったところだ。状況が整えば、大抵の事は受け入れるが、そこから人間関係を派生させようという気概はない。基本的に受身で、押せば押すほど引いていくような感じにする。正面から告白すれば、それに対して誠実に対応するタイプでもあるだろう。だからといって東雲から行動するということも、これまでではなかった。

関係を変えるのが怖いという思いが頭を過ぎっている。

「ぬ、ノックくらいせんか」

自室のドアを開けると、見知った顔がベッドの上で漫画を読んでいる。ジャーダ・ククルカン。第三真祖その人であった。

「どうして、ここに？」

「何、貴様が帰国した際にメレンゲの最新刊を入手していたと風の噂で聞いてな。都合よく暇をしていたから入らせてもらった。許せ」

不法侵入を悪びれもせず、ジャーダは言っただけのける。この国の最高権力者であり、最高戦力でもあるジャーダは東雲の戦闘の師であった。アヴローラとの交友から、その娘である東雲にはよくしてくれるのだ。

「ジャーダ……漫画くらい、いくらでも読んでもらって構いませんが……しかし、真祖が漫画」

「娯楽は重要だぞ、東雲。統治者にとって臣民の心身を如何に安んずるかは重要案件。こういった読み本はな、古来、規制の対象として目を光らせるべきものでもあ  
るのだ」

思いもよらぬ正論に、東雲は言葉を詰まらせる。

確かに、昔から風紀の乱れを糾すため、出版物を規制する統治者は少なくなかつたし、出版物に干渉することで自らの権威付けに利用することもあつた。現代の漫画ですらその表現等で賛否両論が巻き起こる。経済活動にも政治活動にも利用し得る漫画という表現媒体は、すでに子どもの玩具の次元を超えているのだ。

「長く生きると娯楽に餓えるようになる。愉しむためだけに突き詰めた空想というのは、それだけで価値がある。二十に満たぬ貴様には理解できぬだろうがな」

そう言いながらジャーダはページを捲る。東雲が暁の帝国で入手した最新刊だ。日本語でかかれたそれをジャーダは苦もなく読んでいる。

「あの、ところでアカネはどこに？」

アカネとは東雲専属のメイドの名だ。日系三世で、二つ年上。孤児となり行き場をなくしていたところをジャードが気まぐれで拾い、メイドとして雇い入れた。あまり堅苦しいメイドを必要としていない東雲にとっても、メイド初心者だったアカネは受け入れやすかった。

「あれなら買ひ物に行かせた。ワインくらい常備しておけ」

「飲む人いないんですけど」

「<sup>ワタシ</sup>余が飲むだろう。第一、貴様ももう十六。ワインの味くらい覚えておくようにしなければならぬぞ。貴人ならば尚の事だ」

飲酒可能年齢は国によって異なる。暁の帝国は日本の法律を基にしているので二十歳以上となっているが、必ずしも世界中がそうではない。むしろ二十歳としている国は少数で、多いのは十八歳以上だ。さすがに、十六歳で飲酒ができる国となると少ないが、混沌領域はそんな数少ない国の一つであった。

「ああ、それとあれだ。明後日にな、あれが来る予定だ。言い忘れていたが」  
「あれ？」

「貴様が入れ込んでいるプレイヤー。昏月凧とかいう名前だったか」

「は？ え？ なんで？」

「余が呼んだからに決まってるだろう。貴様の父に電話をしてな、研修の名目で呼び寄せたのだ。何、あれの母には、まあ多少の恩もあるからな。少しばかり攻魔師の基礎を叩き込んでやろうと思ったのだ」

と、本当に気まぐれを起こしただけのようだった。

「それと、来週には貴様の姉妹も来ることになった。バレンタインのチョコ祭りに合わせてな」

「どういう風の吹きまわしでしょうか……？」

今までにこんなことはなかった。混沌界域に来たことがある暁家の人間は子ども世代では東雲だけだ。

「風の吹き回しも何も、半年も前から計画していたことだからな。テロのこともあったから、どうしたものかと思っただが、実現できそうだから話したまでのこと。二月十四日のバレンタインにチョコを送る。うん、あれはいいアイデアだ」

バレンタインデイ。

それは二週間後に控えた日本及び暁の帝国で行われる重大イベントだ。厳密には

他国でも同様の風習はあるのだが、日本と暁の帝国では女子から好意を抱く男子にチョコを送る日として定着している。ここ十数年は、友達同士であったり、感謝している相手であったりとチョコの送り先は大きく変わっているが、「チョコを送る日」という点は一貫している。

混沌界域では、この風習を利用して、バレンタインデイに合わせてチョコ祭りを開催しているのだった。それは、偏にこの国がカカオの、そしてチョコの最大の生産地であるからだ。

恋愛イベントにチョコを絡めた日本のメーカーのアイデアを拝借し、チョコの内需を活性化しつつ観光客を取り込むための一大イベントを企画したのは他ならぬこのジャーダである。

今年で十年目になるチョコ祭りは、溶けたチョコを手当たり次第にぶっ掛けあい、街中がチョコ一色になるチョコ戦争が最大の見所で、昨年は三日間で二百六十万人を記録している。

もちろん、東雲も常連だ。誰かれ構わずチョコをかけるチョコ祭りは、子ども達にも大人気なのだ。

「まあ、だから貴様に何かせよというわけでもない。せっかく親族がバカンスに来るのだから、一緒に楽しくやればよかろう」

ジャーダは適当にそう言って、別の漫画を漁りだした。暇というほど暇ではないはずだが、彼女にも息抜きは必要だろう。だからといって東雲の部屋で漫画を読み漁るのは如何なものかと思うが、フレンドリーな態度であっても一国の元首。世界最強生物吸血鬼の真祖である。なかなか、会話の距離感が難しい相手ではあった。子どものころのように無邪気に話しかけられる相手ではないのだ。

ともかく、重要なのは風が来るということであって、できることならジャーダには今すぐにでも出て行ってもらって部屋の整理整頓をしたいところであった。



## 第五部 二話

攻魔師見習いとしては、破格の活躍をした凧であったが、普段は公立中学校に通う極普通の学生だ。凧が通う学校は、公立校の中では規模の大きいほうで、一学年七クラス、部活動が盛んでサッカー部と野球部は全国大会への出場経験もある。日本でプロサッカー選手になった先輩もいるらしい。勉強の評判も悪くない。卒業後、進学校とされる高校に進む比率は毎年高く、中央行政区にある公立中学校の中では全体的に高評価を受けている学校であった。

凧は、そんな学校の中では良くも悪くも目立つ存在であった。

身体が弱く、入退院を繰り返していたという過去があるので多めに見てもらっているが、遅刻癖は周知の事実であり、あまり真面目な生徒という印象は持たれておらず、攻魔官見習いとして現場に出ることもあるというレアケースでもあるので、教師たちからは扱いにくい生徒という認識であった。

凧自身も学校をあまり重視した生活をしていないので、余計にそういった認識に拍車をかけている悪循環となっていた。

そんな凧の生活態度は、この半年と少しの間に改善されていた。

その理由の一端を担うのが、「離れて暮らしていた」妹との同居であった。

一人暮らしで乱れた生活は、同居人が現れたことで正さざるを得なくなった。おまけに、その同居人は同じ学校に転校してきたのだ。結局、一緒に学校に通うことになるので、サボるにサボれなくなったのであった。

一月末の時点で、凧は一ヶ月間無遅刻無欠席の快挙を成し遂げていた。これは、実は中学入学以来初めてのことである。身体を壊したり、サボったりを繰り返したので、欠席数は不登校の生徒を除けばトップクラスだったのだ。それを思えば、なかなかの成長と言えらるだろう。

「はー、だるい」

授業の合間の十分間の休憩時間だ。チャイムと共に各々が羽を伸ばし出す。教師は教材を持って教室を出て行き、日直が黒板に書きなぐられた数式を消す。数分前まで誰一人言葉を発しなかった教室内は、一気に息を吹き返してガヤガヤと賑やかになった。

昼食まで、あと少し。次の国語が終われば、晴れて昼休みだ。凧は、国語の教科

書とノートを机の上に置いて、シャーペンの芯を入れる。

凧の席は窓際から二列目の後ろから三番目だ。南国の暁の帝国では、直射日光が厳しいので、凧としては外れである。

「凧、芯くれ」

と、唐突に話しかけてきたのは前の席のヨシオカだった。夏までは坊主頭だった元野球部員は、今はほどほどに髪が伸びて毬栗のような髪になっていた。もともと固い髪質なのだろう。彼の頭は、棘棘した毬藻もようであった。

「0。5でいいか？」

「おう、あんがとよ」

シャーペンの芯をなくしたらしいヨシオカに、芯を渡す。

「後で返すぜ」

「いらんよ、そんなん」

シャーペンの芯一本程度、返してもらったところで何になるというのか。いちいち返せと言っていたら、凧のほうがち臭いと揶揄されるだろう。

「そーいや、凧さ、高校はどこ行くんだっけ？」

「中央か彩海。まあ、公立が第一志望だなあ」

中央高校は、中央行政区の南端にある公立高校で、進学校と呼ばれる部類だ。風が自宅から通える範囲内の公立高校では、上から二、三番目くらいの学力があるだろう。目安は定期テストで五百点満点中、四百二十点から四百五十点くらいを取れることらしい。例年、それくらいの点数を取っている先輩たちの多くが合格している聞かされた。

家計の負担を考えると、私立高校に行くよりは公立高校に進学したかったし、それなりの偏差値の高校に入りたい。

彩海学園は言わずもがな、第四真祖の出身校ということで名を上げ、今もその子女が通学している。かつては中堅どころの私立高校だったが、今となっては帝国屈指の進学校かつ高級志向の学校と化していた。基本的に中学からの持ち上がりなので、高校から入学する者は少数派だ。風自身、彩海学園への進学希望は強くない。所謂、祈念受験である。すでに願書は提出済みで、私立高校の受験はちょうど七日後であった。

「ヨシオカは、北高だったっけ？ 推薦組は気楽でいいよな」

「はっはっは、ここで高みの見物させてもらってますぜ」

と、ヨシオカは憎らしい笑みを浮かべる。

幼少期から野球ばかりやっていたこの男は、野球のスポーツ推薦で早々に進路を決めていた。十一月には結果が出ていて、それ以来ろくに勉強もせず遊んでばかりいる。ヨシオカに限らないが、推薦合格を決めた連中は、受験に向けて追い込みをかけなければならぬこの時期にその必要がないため、かなり自由を謳歌している。私立の受験を目の前にしてはいるものの、教室の空気はそれまでと大きくは変わらない。授業の多くでは教科書の内容がほぼ終わっているので、専ら試験対策ばかりで、これから始まる国語にしても、恐らくは過去問をひたすら解いていくことになるのだろう。

それを考えれば、すでに受験を終えている推薦組は退屈だろう。彼等にしてみれば、もう学校で授業を受ける意味がない。

大して、風は曲がりなりにも受験生だ。

この時期ばかりは、きちんと机に向かって勉強をしている。幸い、同居人の空菜は学校の勉強はほぼほぼ問題なく解ける。「初めから知っている」という空菜の特

性上、教え方は上手くないが、聞いたことに端的に答えてくれるのでありがたいのだった。

六時間目の体育は、中学最後の体育だった。

受験という至上命題に向かって三年生は突き進んでいる。

体育に限らず、美術科や家庭科といった受験とは関係のない授業は一月ですべて終わることになる。

最後の体育はソフトボールであった。一月とはいえ、暁の帝国は常夏の島だ。太陽光は強く、女子は全員が日焼け止めを使っていたし、外気温は二十度前後と多少涼しさを感じつつも、少し動けばすぐに汗ばむ陽気である。

スポーツが大好きだという女子以外には体育は不評だ。汗をかくというのが、そもそも敬遠される理由で、いつもブツブツと文句がそこかしこから聞こえてくる。体育が六時間目にあるのは、そうした汗をかきたくない女子からは割りと好評ではある。何せ、この後の授業がない。このまま家に帰るなり、街に繰り出すなりす

ればいいのだ。汗の臭いを気にしながら、男子たちと時間を共にする必要がないので気が楽なのだ。

異性の視線に無頓着だった空菜も、この半年で成長した。

日焼け止めクリームを外出時には塗るようになったし、制汗剤が常にバッグの中にあるようになった。

それは、偏に周囲がそうするべきだと言い含めたからではあるが、当初は浮いていた空菜も、今では普通にクラスに溶け込んでいた。

「これで、中学の体育も終わりかー」

「感慨深いわあ」

「何それ、じじ臭い」

更衣室で、各々が駄弁っている。

中学最後の体育が終わって、やっとその実感がやってきた。

これで、もうこの学校の体操服で授業を受けることがないと思うと、それはそれで寂しい。そんな気持ちごとく皆に漂っている。

残念ながら、空菜にはそういった感想はない。

三年生の半ばにこの学校に「転校」してきた空菜には、周囲の友人たちほどこの学校への思い入れはない。体育も、一つのカリキュラムとしか捉えておらず、終わったのなら次のステップに進むだけだと冷めた思いではあった。

あるいは、一年生から皆と過ごしていれば、彼女たちのような思いを抱けたのだろうか。

ホームクルスを初めとする人工生命体にも感情はある。個体によってまちまちだが、それは人間と変わらないだろう。

更衣室の中で吹き荒れる制汗剤の嵐。多種多様な匂いがそこかしこから漂ってくる。

「んん……」

空菜は咽そうになる喉を押さえる。

人間以上の嗅覚のある空菜にとっては、更衣室のこの一瞬はなかなか辛いのだ。単独ではいい匂いでも、それが何種類も折り重なって漂っていると、それは臭気の地獄である。フローラルな香りのオードブル。いや、闇鍋か。女子生徒たちが何気なく使う制汗剤の香りは、空気中で混ざり合い、空菜の嗅覚を混乱させる。

空菜が使う制汗剤のような、匂いを抑えた物だけを使って欲しいところである。

「鼻が痛い」

と、空菜は呟く。

「結局、最後まで慣れなかったねー」

と、空菜の隣を歩く女子——高原紬が笑みを零した。物静かな空菜は、自然といつもいる面子が偏るのだ。その外見から多くの人目を集める彼女ではあるが、多人数で騒ぐタイプではないため、お近付きになれたのはごく一部の緩い友達だけだ。

「わたしは臭いに敏感なんです」

常人以上の嗅覚を持つ空菜にとって、人間の使う香料がキツいと感じられる場面は多々あった。暁の帝国がいくら夜ドミニオンの帝国かつ旧魔族特区であるとはいえ、魔族よりも人間のほうが圧倒的に人口が多い。

魔族が少々肩身の狭い思いをすることも珍しくはなかった。

制服に着替えて、更衣室を出ると男子の一団がぞろぞろと歩いているところにくわした。体育を終えて帰ってきた別のクラスの男子達だ。その中には凧も混じっ

ていた。視線を交わして、すれ違う。特に会話をすることはない。

「ねえねえ」

と、袖が袖を引っ張ってくる。

「何です？」

「昏月君と一緒に住んでるんだよね？」

「そうです。まあ、兄妹なので」

「義理なんでしょ？ 何かないの？ こう、進展は？」

「ないですよ。何です、いきなり」

「えー、義理の兄妹って、話のネタとしては超優良じゃん」

「漫画のネタにされるのは、ちょっと……」

この友人は自分で漫画を描いて、ネットにアップしているらしい。画力の高さは空菜も認めるところだが、肝心の作品は、未だに見せてもらっていない。ネット上の不特定多数に公開しているのに、友人に見せないのは、恥ずかしいからだろうか。その一方で、描いていること自体を隠してはいない。そうした複雑な人間の心理は、まだ空菜の解せないところではあった。

「まあ、興味を引きやすいのは分かりますけどね」

もう何度もこうしたやり取りをしてきた。

空菜が「転校」したとき、すぐに凧と兄妹であることが知れ渡った。珍しい苗字で、隠しようがなかった。

空菜は見ての通りの美少女だ。

妖精のようなとか人形のようなとか形容される暁雪菜に面差しが似ていることも話題になった。外見では非の打ち所がなく、運動神経、学業ともトップを走っている。そんな超がつく美少女と二人暮らしをしている凧には、自然と様々な視線を向けられた。

とはいえ、実害があったわけではない。

凧は学校ではあまり注目を集めることのない学生だったし、他者と対立するような言動があるわけでもない。友人関係は良好で、クラスの中にいるのは仲のよい友人とほとんど話したことのない他人のどちらかで、仲の悪い知り合いは一人もいないという状況である。好奇の視線を集めても、泰然としていたので、それ以上の追及には繋がらなかった。

そんな風の対応に空菜は倣い、こうした冷やかしの話題にはあっさりとした対応をしてきた。

「つまらんなあ。もうちょっとこう、イイ感じの話ないん？」

「何がイイ感じなのか分からないのですが、まあ、ご希望に添えるようなものはないと思いますよ。最近、家でどういう話をしているか教えましょうか？ 主に数学と理科の過去問です」

「ヤメテ、それはわたしに効く。うがー、今日も塾だよ」

「明日は？」

「塾だね」

「明後日も？」

「同じく」

渋い顔をする友人。話を聞く限り、一週間で四日は塾に行っているようだ。彼女の成績は悪くないが、受験を間際に控えた受験生は、日々あらゆる重圧と不安を抱えながら、取り憑かれたように勉強に耽るものらしい。その点、空菜は圧倒的なアドバンテージがある。生まれついて様々な知識を与えられているので、理系と暗記

物はほぼ完璧だ。その方面に勉強時間を割く必要はない。躓く可能性があるとするば、問題作成者の癖が出る国語くらいだろう。

未だに納得できていない先月の統一模試の国語。マークシート式のテストで、空菜は失点した。五つの選択しから一つを選ぶ問題で、正解を選んだ自信があっただけに外れていたのが驚いた。解説を見ると、それぞれの選択肢に○が一つ、×が三つ、△が一つついていて、○と×しか見たことのない空菜にしてみれば、△が出てくる意味が分からなかったし、△の選択肢の解説には「間違いとは言いつれぬが、状況的に○の選択肢のほうが適しているの、やや間違い」という頭を抱えたくない説明文が載っていて、珍しく腹が立った。そういうわけで空菜は現代文が嫌いになった。

ちなみに、同じ問題を皿はどちらにしようかなで正しいほうを選んだらしい。ホームルームでも、担任が受験に向けた心得を話している。

一月の半ばごろから、俄に活気付いてきた受験ムード。世の中も、そうした空気を呼んで受験生向けのセミナーやら験担ぎグッズの販売を推し進めている。

空菜も、その一翼を成す受験生ではあるが、周囲ほど熱が入らないのが実状だっ

た。

勉強、受験、将来、どれも自分とは関わりのない遠い世界の話のようだ。

空菜にとって自分の将来を自分で想像するというのは困難である。そうした自由は、空菜の設計段階から想定されていないからだ。人工生物としての用途が定められていなかったのも、自由度の高さがあり、それゆえに日常生活を送れているのだと考えているが、だからといって自分が人間や他の魔族のような「自由」を持っているという実感もない。凧を初めとする家族たちは、空菜の自由を認めている。しかし、空菜自身がそれを受け入れられていないところがある。

好きにすればいいと言われる。では、好きにするというのは具体的にどういった行動を差すのか。それは、他人から教えられるものではないのだろうか。

とりあえず、凧についていく。

先々のことを考えるのが苦手な空菜は、凧の行動を自分の行動の指針に据える。凧が受験するのなら、空菜も同じところを受験する。

担任からはもっと上を目指せるとは言われている。

しかし、その意味を空菜は理解していない。だから、凧と同じでいいのだ。

世の中に出て半年と少し。

少しづつ周囲に溶け込んできてはいるものも、まだまだ馴染んだとは言いがたい。

午後六時を回って、空菜はマンションに帰ってきた。

バレンタイン目前チョコレートフェアなるチョコの安売りが気になって、駅前のデパートに吸い込まれてしまった。

今の自宅は、一月から引越してきた新居なのだが、零菜の家と同じ間取りなので、目新しさはない。近隣住民といっても、基本的に曉家に囲まれているので、特に問題らしい問題もない。すっかり慣れてしまった。

玄関を潜ると、いい匂いがする。

今日の夕飯当番は凧で、すでにキッチンに立っていた。

「おかえり」

「ただいま」

簡単な挨拶の後、部屋の扉を開けて自分の学生カバンをベッドの上に投げた。

「トマト系の匂いがします。これは、そう、オムライス」

「いや、ただのチキンライスなんだけど」

「オムライス」

「……卵、あったよな」

謎の重圧を感じて、凧は冷蔵庫を開ける。

幸い、卵は買い置きがあった。

チキンライスをオムライスに変更するのは簡単だ。

拘りのある人は、卵の炒め方から気を使うのだろうが、凧はそこまでしない。普通に梳き卵をフライパンの上で広げてチキンライスを投入するだけだ。

昏月家におけるオムライスとチキンライスの違いは、上に乗せる卵の有無以外にないのだった。

テーブルに着いた空菜はキッチンに立つ凧をじっと眺める。

妙な視線にむず痒くなる凧は、盛り付けながら空菜に尋ねる。

「何？」

「いえ、何でも」

「何だよ」

「…………… 凧さんは、高校に行った後、どうするんです?」

「急だな、ほんと」

苦笑しながら、凧は空菜が先のことを気にかけるのはいいことだと思った。

空菜の変化を最も感じることでできる立ち位置にいる凧は、この半年の間に彼女が少しずつ変わってきたことを理解している。

「高校ね。まあ、はっきりとはしないけど」

「しないけど?」

「最終的には攻魔官になるつもりだからな。今もそのために南宮教官に扱かれてんだし、高校入ったら、本格的にそっち方面のバイトするだろうな」

「あるんですか、そういうの」

「あるよ。民間の攻魔師事務所。古城さんの知り合いが経営している事務所があって、そこでバイトする予定」

「あれ、もう決まってるんですか?」

「一応ね。学業と両立が前提になるけどな」

「そうですか」

聞くだけ聞いて、空菜はまた黙りこくった。

空菜は空菜なりに悩みを持ち始めた。

悩みというのは大切だ。一時的には足を止めることになったとしても、全体を通して見ればその後の前進に繋がるものでもある。

ともかく、中学生生活は残り二ヶ月もない。三月の頭には進路が決まっていて、卒業式を迎える。実質学校に通えるのは一ヶ月ほどだ。

先々の悩みは大切だが、まずは受験に集中し、失敗しないようにするのが先決だろう。

受験については、空菜よりも凧のほうが大変だ。人のことを心配している余裕は実のところないのだった。

## 第五部 三話

中学校のカリキュラムがすべて終わり、受験対策にすべての時間が割かれるようになってから、目に見えて三年生の雰囲気は変わっていた。

休み時間でも参考書を広げて机に向かう生徒が珍しくなくなり、会話は目指す高校の話であったり、受験への不安であったりした。

成績が振るわない者は、その不安を口にし、過去問で満足のいく結果が出た者は、僅かながらも自信を付けた。

暁の帝国にある公立中学校に中高一貫校はない。

風が通うこの学校も、同じである。卒業すれば、もうこの校舎に制服を着てやってくる機会は訪れないし、この面子が教室に揃うことも二度とない。

受験が近付いていると同時に卒業が近付いている。

どこことなく寂寥感のある空気が漂っているのも、そのためだろう。

多かれ少なかれ学校への思い入れを皆が持っている。今の人間関係を大切に思っているし、この教室でみんなまで過ごしている当たり前前の時間が、あと一ヶ月で終

わってしまふ寂しさを感じている。

二月六日。私立高校受験の前日である。暁の帝国内にある私立高校の六割が、明日、入学試験を執り行う。

このクラスには、公立高校一本で勝負する肝の太い生徒はいなかったようで、推薦組を除く全員が受験をする。

黒板には「卒業まで後三十三日！」と女子が描いたカウントダウン。一日ごとに、数字が減っていくのが、いっそう卒業を意識させてくる。

凧が受験する彩海学園は、午前中に筆記試験を行い、午後面接試験をする。面接だけで合否を決める私立高校もある中で、ここはさすがに名門校の自負があるのか、きちんとテストを設けている。

筆記試験は過去十年分の過去問で準備をしてきた。そこそこの点数は取れていないが、十年分の過去問の結果を見れば、勝算はある。

ただ、凧は学校生活そのものに難のある生徒である。テストの成績はまあまあいいとして、生活態度がどう評価されるかは難しいところだ。

凧には攻魔官になるという目標があり、Cカードも中学卒業と共に取得できる。この前試験をパスしたので、これは確定だ。

面接では、それをアピールポイントにしようと思っている。

いくら彩海学園でも、Cカードを保有している学生は少ないだろうし、テロリストと戦った経験のある受験生は、きっと凧以外にはいないだろう。

あまり重い話を面接ですることはできないので、抽象的にならざるを得ないところではある。攻魔師事務所の面接なら、実戦経験をアピールできるのだが、学校の面接はそれが果たして評価ポイントになるのかどうか——Cカード保有者でもある担任は困り顔で、あまり過激なことは言わず、努力していることを中心にとアドバイスしていた。

「はい、じゃあ今日はここまでです。明日はいよいよ勝負の日です。緊張するなというのは無理でしょうが、あまり気負いすぎて眠れないというようなことがないようにしましょう。みなさん、するべきことはもうし尽くしているはずなので、堂々と明日を迎えるようにしてください」

と、ホームルームの言葉をあっさり目で終えた担任。

最後に起立礼をして、一日が終わった。

チャイムと同時に席を立つ。

「ようす、帰るんか？」

日に焼けた肌と白い歯が眩しい。

生粋の中学球児だったこの男は、きつとこのまま高校球児に進化するのだろう。見てくれはイケメンの部類なのだし、ガタイもいい。高校に行って全国区で戦えば、きつともてるだろう。

「もちろん、直帰」

「三十分でも時間作れんか？」

と、ヨシオカは言う。

その後ろには、元サッカー部のタナカがいた。いつもの面子だ。

「何かあんの？」

「ちよいと身体を動かさねーか？」

「明日受験だって」

「三十分だけだよ」

「……まあ、それくらいなら」

あまり、強く断る理由がなかった。

今になって受験対策を新たにできることはない。精々、公式や単語を覚えているか確認する程度が関の山だろう。担任が言っていた通り、やるべきことはやり尽くしている——という建前はある。

グローブもボールも、ヨシオカのカバンから出てきた。この男、もう高校進学を決めているのでカバンに勉強道具が入っていないのだ。

学校近くの広い公園で、三人で三角形を作ってキャッチボールをした。

飛んで来るボールをグローブでキャッチして、隣に投げる。ヨシオカの玉を受けてタナカに流すだけの単純作業だ。

「グローブつけんのも久しぶりだわ」

と、凧は呟く。

「体育でやんないからな。やっぱ、サッカーですわ。野球は道具の初期投資に金が掛かりすぎ」

「サッカーだって似たようなもんだろーが」

サッカー部と野球部特有のいがみ合いだ。

それぞれの部活にグラウンドが宛がわれているわけではない。中学のグラウンドはサッカーコート一面分と少しだ。それを半分にしてサッカー部と野球部が練習場とし、残る僅かな直線を陸上部が使っている。

これでも都心の公立校としてはなかなかの大きさのグラウンドなのだ。他の中学では、もっと小さなグラウンドしか持っていないところも珍しくない。

サッカー部と野球部。

何となく立ち位置が被っているような気がしなくもない。ボールが互いの領地に転がっていくし、用具室も共有なので何かとライバル視する機会が多いのだとか。もちろん、それは仲が悪いということではない。

「てか、急にキャッチボールとかどうかしたのか？」

「ま、最後だからな」

と、ヨシオカは言う。

「俺、卒業式は出られそうもないし」

「……何か、あったのか？」

「別に。寮に、もう明日から入るんだよ」

「明日？ マジで？」

「マジ……あ」

凧の手から離れたボールが、タナカの頭上を越えて転がっていく。

「下手ー」

「すまんすまん」

ボールをタナカが取りに走っていく。

「野球部の寮って、まだ卒業もしてないのに？」

「野球の名門校だからなー。推薦で入ったヤツは、入学前から野球部の活動に参加できんだよ。任意だけど、俺はそれに申し込んだってわけ」

パス、と乾いた音がする。

ヨシオカのグローブに白球が飛び込んだ音だった。

「高校野球も大変だな。北高は、部員数も多いんだろ？ よく知らんけど」

「Cチームまであるからな。当然、Aチームに入れんのはごく一握り」

全国大会を目指す名門校に入学するということは、部内での厳しいスタメン争い

に身を投じることでもある。三年間努力して、結局ベンチにも入れない選手は数え切れないほどいる。そういう環境に、ヨシオカは飛び込もうとしているのだ。

そして、それはタナカも同じだ。

彼もまたスポーツ推薦で高校への進学を決めている。寮生活のための準備を進めているとも言っていた。

暁の帝国の学校は、あまり多くの敷地を持っていない。中央に近ければ近いほど、その傾向は強くなる。逆に郊外に行けば行くほど、目的を定めて造成された土地となるため、スポーツの強い学校は、中央から離れた土地に作られる傾向にある。

「昏月は、明日から彩海だったっけ？」

「おう」

タナカに問われて、頷いて、ボールを投じる。

ボールを投げるといふ動作は、日常的にするものではないので、あまり上手く投げられない。簡単なようでも、実は案外難しいのだ。

運動神経は悪くない風でも、慣れない動作はぎこちなくなくなる。

「彩海受験するヤツ、かなりいたよな」

「まあ、進学校だしな。それに、金もあるし」

この辺りに暮らす中学生で、大学まで考えている生徒は概ね彩海学園を選択肢に入れる。祈念受験をするという者も珍しくはない。有名校というのは、受験料だけでかなりの額を稼げるといういい見本である。

「俺は記念受験だよ。私立は正直、考えてないからな」

「そんなこと言っていると、公立も落ちるぞ」

「怖いこと言うなよ。まあ、そんなときには攻魔師事務所に雇ってもらおうわ。Cカードは取れっから」

凧は、軽口に軽口を返す。

中卒でも完全な技術職である攻魔師としてなら、働けないことはない。ある種才能の世界だ。十代の攻魔師が、数百年を生きる吸血鬼を倒すこともある。そんな理不尽が罷り通るのが魔導の世界である。もちろん、それは突出した才能のある攻魔師が、血の滲むような鍛錬を重ねたからこそその結果だが、端から見れば何の冗談だと思っだろう。

「あ、ヤベ」

と、タナカが口にする。

タナカの手を離れたボールが、明後日の方向に飛んでいく。

「おい、どこ投げてんだよー」

「悪い、手が滑った」

転がっていくボールを、ヨシオカが拾いに走る。

「握力なくなってきた」

と、タナカが苦笑する。

「早くね？ 握力なさすぎだろ」

「サッカーはあんま握力使わないからな」

タナカはそう嘯いて、両手を握ったり開いたりする。

タナカの言っていることはわかるのだが、それでも運動部がそうそうに握力がなくなるといふのは貧弱すぎるのではないだろうか。

運動部に対する偏見と言われればそれまでだが。確かに、サッカーだけしているのなら、特別握力を鍛えるということとはしないかもしれない。

日頃から棒を振り回している凧のほうが、筋力があるというのも不思議なことで

はないだろう。

公園に設置されている時計を見る。

三十分だけのつもりが、一時間もキャッチボールをしてしまっていた。

いくら、本命ではないとはいえ、これ以上遊ぶのはどうかと思う。

「もう時間だし、俺は帰るわ」

「ん、付き合せて悪かったな」

と、ヨシオカは言った。

「また明日、じゃなくて明後日な」

タナカはグローブを外し、どこからともなく取り出したサッカーボールを転がしていた。

これから、日が暮れるまでサッカーをするつもりだろうか。それはそれで羨ましい。受験さえなければ、自分も残って一緒にサッカーをしたかったくらいだ。

ヨシオカは、彼の言うとおりなら、もう中学校で会うことはないのかもしれない。それを思うとますます卒業という言葉の重みを実感する。

こうして、それぞれの道に進んでいくのだと思うと寂しいような嬉しいような不

思議な気持ちになるのだ。

「ぬ……遅かったですね」

家に帰ると空菜がテーブルに国語のテキストを広げていた。

「今日のご飯は、カツ丼です。もうできてるんで、適当にあつたため食べてください」

「はいよ」

フライパンにカツ丼の具が入っていた。

カツ丼は明日の受験を意識してのものだろうか。

空菜自身はさっさと自分の分を食べきってしまったようだ。食後のコーヒを啜りつつ、萌葱が置いていったクッキーの残りをもそもそと齧っている。

「……身体、動かしてきました？」

「おう。ちょっとだけな」

「いつもの二人ですね。確か、野球部とサッカー部の人」

「そうそう」

凧は、とりあえず麦茶をコップに注いで、一息に飲み干した。冷たい麦茶が、火照った身体に染み込んでいく。

「ちょっと、キャッチボールしてた。ヨシオカが、寮に入るって言うからな」

「しばらくは出て来れないということですか？」

「どうだろうな。そこまで、中学生に強制はしないだろうけど、アイツなら出ないだろうな。意外にストイックだしな」

真面目なスポーツマンであるヨシオカは、野球には真摯に取り組んできた。その姿勢はこれからも変わらないだろう。寮に入ったら、完全に向こうのやり方に従うだろうし、早く新生活に慣れようと必死になるだろう。今日、凧やタナカとキャッチボールをしたのは、ヨシオカなりに中学生生活に踏ん切りをつけるためだったのではないか。

「食事の前に、汗を流したほうがいいのではないですか？」

「汗、臭うか？」

「いえ、それは別に構いません。ただ、汗も埃も落としておかないと、家が汚れま  
す」

「それもそうか」

汗は雑菌の温床ともなる。そのままにして、ソファやベッドを汚すのは、衛生的にもよくないだろう。

シャワーを浴びて、汗を流したら、カツ丼を腹に収める。その頃には、日が暮れていて、午後八時半過ぎになっていた。

タワーマンションの窓から煌びやかな夜景を眺めつつ、凧は自室に籠り、テキストを開く。最後の確認作業だ。数学の公式と英単語、古典漢文といった暗記物だけだ。思考問題や長文読解は、今更やったところで焼け石に水である。だから、それはもう手をつけない。凧にとっても、空菜にとっても初めての受験である。祈念受験と嘯いていても、本番が明日となると、緊張もする。

しばらく、レトロな掛け時計の秒針の音だけがカチカチと鳴り続けていた。

いつもはテレビやゲームの音が耐えない昏月家が、静寂に包まれている。

ふと顔を上げて時計を確認すると、十一時になったところだった。

「ふ、ん……よし、寝るか」

いつもはここからが本番なのだが、さすがに受験の前日に夜更かしするわけにも

いかない。

念入りに受験票と筆記用具とテキストを確認して、いつもは持ち歩かない内履きもカバンにしっかりと入れて、凧は眠りに就いた。



彩海学園は、暁古城の出身校ということもあって、地元では他の学校よりも高い格式があると認知されている。もともとは、比較的校則の緩めな、中堅の私立校だったが、ここ十数年の間に徐々に全体の成績が上昇していて、世間の評判に合わせるように学内の環境も整えられていった。

エレベーターや自動ドアは、一般的な公立校出身者にとっては、それだけで珍しい。公立高校には、ここまでの設備はない。有名私立校と一般公立校の間に横たわる環境の差は、暁の帝国でも変わらず大きいのだった。ちなみに、グラウンドは一般的に公立も私立も人工芝である。人工島なので、土よりも人工芝のほうが安価だ

からだ。ここは、日本とは異なる点であろう。

この学校に、今日は全国から人が集まる。

学ラン、セーラー服、ブレザー、私服と様々な服装の学生が一同に会している。

「セーラー服は、初めて見ましたね」

「どこだろうな。この辺にはないよな」

と、空菜と凧は声を響めて話している。

受験番号確認のための行列の中で、受験票を大事に握り締める。

「何か、緊張してます？」

「そりゃあ、まあな」

「珍しい」

「そうでもないだろ。そっちはどうなんだよ」

「わたしはあまり。ここにいるのも、成り行きですし？」

「そうかい」

空菜は、受験そのものにさほど意味を見出していないのだろう。生まれて半年程度で、勉強に不安があるわけでもなく、将来の希望はおろか今の自分すらきちんと

確立していない。彩海学園を受験するのも、夙が受験するから一緒に申し込んだという程度だ。

列が進んでいき、空菜が受付の前に立つ。対応しているのは、この学園の教師だ。「はい、じゃあ、次の……あら？」

女性教師は、空菜を見て固まった。

「何か？」

「あ、いえ……受験票をお願いします」

空菜は釈然としない面持ちで受験票を渡す。

それを、バーコードリーダーに読み込ませて申請情報と照合する。

「ええと、昏月空菜さん、でよろしいですか？」

「そうです」

「はい、じゃあ、赤い線に沿って進んでください……」

赤い線の先には、教室がある。受験番号で机が指定されていて、そこで試験を受けることになる。

空菜を見た教師も、不思議なものを見たといった表情だ。

彩海学園は零菜が通っている学校だ。当然、こういった反応になるだろう。

「それでは、次の方」

凧の番が回ってきて、同じ苗字ということもあってさらに不思議がられた。

こればかりは如何ともし難い家庭の事情である。何かあるのかもしれないと思われても仕方がないが、他人の空似と言われればそれまでだ。

もっとも、凧は凧で暁家の親戚である。そこに空菜という零菜によく似た少女がいれば、「おや？」となるのは自明の理であろう。

凧と空菜の教室は別だった。受験番号が四十は離れていたもので、これも予想できたことだった。

自分の席に着いて、周りを見回すと、知らない顔だらけだ。同じ学校の生徒もいたが、生憎と交流は皆無の相手である。互いに顔を知っているだけで、名前も知らない他人であった。話し相手がいない教室は、完全アウエーの状態だ。試験官が入室するまで、黙ってテキストに目を通すくらいしかすることがないし、事ここに至っては、それ以外の選択肢はそもそももないだろう。

教室に入ってから二十分ほどで、すべての机が埋まった。

廊下を行き交う人の気配も完全に絶えて、試験管がテスト用紙を抱えて入ってきた。

「えー、それでは、受験票を机の右上に置いて、筆記用具以外はカバンに入れてください。これから、テスト用紙を配付しますが、指示があるまで触らないようにしてください」

と、簡潔な説明をしてテスト用紙を配り始める。

紙の音以外には何も聞こえない。静まり返った教室は、かつてないほどの緊張感に包まれていた。

テスト用紙が行き渡ったことを確認した試験官が、腕時計を見る。

風達が見られるのは、壁にかかったアナログな時計だけだ。秒針すらないその時計では、すでに開始時間になっているように見える。

いつ始めの合図があるのか。

今か今かと待ち続け、緊張のあまりに気が遠くなりそうになる。

そして、

「……始め」

静かに、彩海学園の入学試験が始まった。



学校のチャイムが鳴り響く。

この音は、どこも同じらしい。

西日が差す校門を、凧と空菜は揃って出た。

ぞろぞろと受験生たちが帰っていく。

午後の面接試験が終わった生徒から、帰宅が許されていた。面接試験は空菜のほうに先に終わったが、凧が終わるまで玄関で待っていたのだという。

受験番号順の五人一組による面接なので、大体いつ頃凧の番が回ってくるのかは分かる。

「どんなでした？」

と空菜が聞いてくる。

「まあまあ、だな」

「やっぱり国語は、傾向が変わってしまいましたね。昨年までは、あんな問題はなかったと思います」

「……十千のところか？」

「そうです。まあ、あれについては呪術を嗜んでいれば問題ないんですが」

「そうだな。今年の問題のほうが過去問より相性よかったな」

歩きながら、感想を言い合う。

私立高校の入学試験は、時折それまでと異なる傾向の問題を出してくることがある。今年は、運悪くその年だったようで、これまでまったく顔を出さなかった十千に関する問題が出題された。マニアックな知識問題で、社会科の参考書に多少載っている程度のものだ。それが国語で出てくるのだから、初見の受験生はパニックになっただろう。一点を争う入試では、こうしたちよつとした知識問題で差ができることもある。

幸い、十干は日本の呪術にも関わる要素なので、幸いなことに凧も空菜も躓くことはなかった。二人にとっては、サービスマス問題と言えるだろう。

「しかし、この学校はちょっと苦手ですね」

と、空菜が呟く。

「……じろじろ見られたからか？」

「はい」

空菜はあっさりと頷いた。

今日、彩海学園は入試当日のため休校だった。零菜たちは持ち上がりで高等部に入るため、入試をする必要もない。よって、自宅待機が言い渡されている。そこに、零菜と瓜二つの空菜が別の学校の制服を着て現れるのだから、学校関係者の目を引くのは当然だ。

「彩海学園に通えば、どの道バレることもあるんだろうけどな。昏月だって、親戚なんだし」

「親戚だということが知られるのは、わたしは別にいいんですけど。ただ、零菜と似てるという探るような視線が好ましくありません」

そうだろうな、と凧は思う。

誰だって不躰な探るような視線には嫌気がするだろう。

凧も、人間から魔族に種族チェンジした扱いになった時には、周囲から何事かと思われたものだ。

「さて、と。後は土曜日に本命かあ」

凧は緊張感溢れる一日が終わって、伸びをした。

今週の土曜日に公立高校の特色試験がある。一般入試と異なり、筆記試験と面接が課される入試だ。推薦入試に近い形式で、各校が問題作成するので学校ごとに課題が異なっている。そのため、特色試験と呼ばれる。凧は、この特色試験を受験することにしていた。凧にはCカードがある。特殊技能を持っている生徒は、特色試験で有利なのだ。

入試の緊張感は、今日体験した。本番と見据える土曜日はもっと緊張するだろうが、それなりの修羅場は乗り越えてきたのだから大丈夫だと凧は自分に言い聞かせた。



## 第五部 四話

凧にとって、その日は人生の大一番であった。

区立中央高校の特色入試の当日である。午前九時から筆記試験と面接が立て続けに行われ、正午にはすべてが終わる。暁の帝国の高校の中でも、中央高校はそれなりに高い偏差値の学校だ。中央行政区にある公立校では、上の中くらいにはなるだろう。

もし、合格できれば、モノレールかバスで学校に通うことになるだろう。通学時間は三十分から四十分程度。交通状況によっては一時間は見たほうがいいのかもかもしれない。

この中央高校は、十年前までは定時制の学校だったらしい。その当時は、あまり勉強できないはぐれ者たちの巣窟だったというが、今はそんな面影はまったくない。偏差値、進学率共に急上昇していて、中央行政区の公立校ではトップ3に数えられるまでになった。

ちなみに、偏差値第一位は、区立暁第一高等学校。凧の自宅から自転車でも行け

るところにある名門校だ。もともと勉強のできる生徒だけが集まるので、良くも悪くも放任主義だという。勝手に勉強して、勝手に学力を向上させる。教師はそのためのレールを敷くだけという校風だ。そのため、本当に自分で勉強するという志のある生徒だけが受験するしやっつけていける。人に言われてやるような生徒は、落ち零れるか、大変苦労しながらついていくことになる。

偏差値第二位は、国立帝暁大学付属高等学校。言わずと知れた大学付属。暁の帝国では唯一の公立の中高一貫校である。大学付属なのに、エスカレーター式ではないので必死に勉強する。中学の頃から勉強する習慣を叩き込まれた生徒が通っていて、ここの生徒は、他の学校の生徒から見て「なんかこう、どこがというと説明に困るけど、なんか変」といった印象を受けることが多々あるという。浮世離れた生徒が育つ、そんな学校である。もちろん、風の選択肢には入らない。

風が選んだ中央高校は、上位二校に比べると親しみやすい校風だ。

勉強が大変という話はもちろんある。課題が多いとか、夏休みにも講習があるとかが説明会でも言っていたことだ。しかし、何よりも「やればできる」生徒には手厚いというのが一番だろう。

この学校は、暁第一高校に追いつき追い越せを標榜して授業している。そのため、勉強についていけない生徒への対応が手厚い上に進学指導にも力を入れている。

よって、トップクラスではないにしても、準トップクラスでのびしろのある生徒は、この学校と相性がいい。そして、何よりも攻魔師や芸能活動といった学校外の活動にも理解があるというのが大きかった。

攻魔師として活躍するだけならば、中卒でもいい。Cカードがあれば、攻魔師にはなれるのだ。しかし、結局はどこも学歴社会だ。本物の実力者ならば、自分の力一つでなりあがることもできるだろうが、そう甘い世の中ではないのが実状だ。将来のことを考えれば、大卒資格は取っていて損はないし、多くの攻魔師が今は大卒である。人手不足の業界だが、だからといって敢て中卒を使う理由がない。学歴は重要ではないとテレビやネットで声を大にする人がいるが、それは「学歴がなくてもやっていけるだけの実力や運があった人」の台詞であって、実際には学歴が足りないことを理由にチャンスすら与えられない人が大半だ。同じ仕事をするのなら、わざわざ低学歴の人を雇う理由が、雇用主側にはないのだから当然である。そういう社会の現実を、凧は中学生ながらに知っている。攻魔官候補生として現場に顔を

出す機会があつて、そこで一緒に仕事をすする先達から注意喚起されていたのだ。

幸い、凧は勉強はそこそこできる。

呪術を幼い頃から学んできた凧にとって、勉強は苦ではないのだ。

日本由来の古い呪術には、古文や漢文の知識が必要だし、錬金術系は科学的な知識もいる。風水は地質学や天文学に触れなければならないといった具合だ。

体系化された呪術はそれ自体が学問であり、その内容は学校の勉強と重なる部分が多々ある。

例えば、古文漢文で凧が常に成績上位者に名を連ねているのは、幼少期からの積み重ねの結果であつて、その知識を活かせば、出席日数の割りに成績が維持されているのも不思議なことではないのだった。

もちろん、呪術とは関係のない部分の勉強はそこそこで、その差がトップクラスの偏差値に今一つ届かない理由でもあつた。

緊張は前日の夜からあつたが、当日は思いのほか落ち着いて迎えることができた。命の危機を何度も乗り越えてきた凧は、土壇場には強いらしい。

筆記試験で頭が真っ白になることはなく、面接試験でもそつなく受け答えをすることができた。

那月教官の冷ややかな視線に比べれば、面接官の先生方は優しい部類だ。虎と猫くらい違う。見た目とは正反対である。

そんな本人に知られたらどんな報復を受けるか分からないことを考えていると、ばったりと会ってしまった。コンビ二前で、ゴスロリドレスに身を包んだ、中学生一年生くらいの見た目の恐ろしい大魔女に。

「……なんだ、お前か」

怪訝そうな顔をした那月は、凧の顔を見た後で腕時計に視線を落とした。

「そうか。そういえば、今日だったな」

「受験ですか？」

「ああ」

那月は頷いて、

「どうだ、手応えは」

と、尋ねてくる。

「まあまあですね」

凧は当たり障りのない返事をした。

実際、明確に失敗したという感想はない。筆記試験で解けなかった問題はあるが、それは少数に留まっている。過去問を解いた感じと比較しても、点数は悪くないはずだった。

「受けたのは中央だったか？」

「そうですね」

「そして、私立は彩海、だけか？」

「はい。一応、その二校ですね」

「そうか。だとすると、中央を落とすと大変だな」

「はい？」

「彩海は残念だったからな」

「……はい？」

聞き逃せない言葉に凧は固まった。

那月は、彩海学園の教師でもある。その那月が残念だったということは、つまり

色々と困惑気味に思案する凧を見て、那月は僅かに相好を緩めた。

「冗談だ、気にするな」

「気にしますよッ！ 受験生にしているいい冗談じゃないですッ！」

思わず素で文句をつける凧。

受験生にとって受験結果は重大だ。那月の立場でそれを冗談めかして言われれば、声を荒げたくもなる。

「すまなかったな。確かに、少々毒が強かった」

と、那月は非を認める。

少々どころではない。凧の第一志望が彩海学園だったら、目の前が真っ暗になっていた。

「で、教官はこんなところで何をやってるんですか？」

「ただの買出しだ。それこそ、うちは合格発表を明日に控えているからな。試験担当の教師は、朝から準備に追われているし、差し入れの一つでも持っていかなければな」

「教官は？」

「わたしは、そういった雑務はしない」

「そうですか」

那月は彩海学園の教師であると同時に国を代表する攻魔官でもある。そのため、学校の雑務は一切行わず、攻魔官としての仕事を優先するようになっていく。

魔族特区の頃から、各校には攻魔官の資格を有する教師を配置することが義務付けられているのだが、そういった攻魔官と兼任している教師の手をその他の雑務で煩わせるわけにはいかないという風潮があるのだ。

普通の教師ですら多忙を極めているのだ。いざという時に攻魔教師が対応できないという事態は避けなければ、学校の管理責任が問われることになるだろう。

実際、過去にも魔族が学校で事件を起こした際には、その学校に所属している攻魔教師の対応が問題視されてきた。

彩海学園は伝統的に魔族の生徒を多く抱えているので、余計に攻魔教師を重視している。特に世界最高峰の実力を持つ那月の扱いは、VIPクラスだ。

「つーか、そうか。明日っすか」

「今のうちに気持ちの整理をつけておけ。まあ、うちに受かっても、お前は中央を優先するのだからがな」

「まあ、そうですね」

「問題児を抱えなくて済む分、わたしは楽でいい」

「もうちょっと言い方ないんですかね」

「自分の体質を考えろ。うちには魔族の学生が比較的多い。中央のほうが、余計なトラブルが少なくなるんじゃないか？」

「……言うほどでもないと思いますけど」

と、自信なさげに凧は言う。

自分が、魔族を惹き付ける体質なのは、散々言われてきたことだ。特に吸血鬼の吸血衝動を喚起してしまうので、吸血鬼との関わりには注意が必要だった。

とはいえ、それも我を失うほどの強烈な吸血衝動を呼び起こすわけではない。

問題があるとすれば、吸血衝動が性欲と結びつきやすいという点だろう。自分の吸血衝動を恋愛感情と誤認してしまう可能性は否定できないし、もともと凧に好意を抱いている相手だと、さらに効果を増してしまう。感情に作用する能力や体質と

いうのは、扱いが非情にシビアなのだ。

それを別にしても、凧が彩海学園に通うとなれば、気苦労も多いだろう。

身分や立場を明かすか否か。空菜の存在をどのように説明するか。色々と政治が絡む問題も出てくる。今でこそ、空菜はお姫様のそっくりさんで通っているが、同じ学校に通ってしまうと他人の空似とも言えなくなる。——同じマンションに暮らすようになったので、その当たりは覚悟の上ではあるが、学生のコミュニティは大人には見えないものだ。どのような反応が広がるか、想像できない。

「お前が背中から刺されんとも限らんしな」

「さらっと怖いことを言わないでください」

げんなりした凧だが、那月が言わんとすることも分かる。

零菜や麻夜と同じクラスになる可能性もある。二人の人氣から、凧が妬み嫉みを受けるのは想像に難くない。二人から吸血されている等と広まったら、困ったことになる。

予想できるトラブルを避けるという点でも、彩海学園はあまりいい選択肢ではなかった。それでも、彩海学園を滑り止めにしたのは、優秀な攻魔官を多く排出す

る学校だったからだ。その方面への理解が深い学校というのは、将来を選択する上で重要な要素だ。

「ま、終わるだけ終わったのだから、しばらくは息抜きか。まだ、一般入試も残っていたか」

「明日の合格発表次第ですね。私立落ちてたら、公立落とせないんで、また頑張りますよ」

もしも、私立も特色入試もダメなら、他の受験生と同じく一般入試で戦うしかないので、受験勉強を続けなくてはならない。二月の最終週まで、気の抜けない戦いが続く。それは、避けたいというのが本音だ。勉強は苦手ではないし、嫌いでもないが、だからといって毎日あくせく机に向かい続ける生活をしたいかというところだ。

「ん……立ち話が過ぎたな。わたしは戻る。結果が悪くても腐るなよ」

「結果の悪さを連想させないでもらえますか？」

呆れた物言いに苦情を言う風。

那月の言い方の悪さは昔からだ。もちろん、相手を選んでるのは言うまでもな

い。那月がいくら傲岸な性格でも空気を読むくらいはする。

那月は言いたいことを言って、そのまま去っていった。

採点にこそ関わっていないが、それ以外にも仕事は山ほどあるだろう。学校の先生だって、土日に仕事がないわけではない。公立校の先生ですら、夏休みを取ったことにして出勤していたりする業界だ。

那月に疲労はないから、他の先生よりは大分マシなのだろうと他人事のように思う。

「ただいまー」

凧は、自宅に帰ってきた。

諸々の覚悟を背負ってマンションを出てから六時間。やっと、ここに戻ってきた。

「おかえりなさい、凧さん。思ったよりも、早いお帰りでしたね」

「受験番号が早かったからな。面接もその分だけ早く終わったんだよ」

面接が終われば、その時点で帰宅が許される。

知り合いも多く受験する学校ではあったが、とっとと帰ってしまおうと足早に下校したのである。

受験生の中には受験が終わった開放感からそのまま仲間内で街に繰り出す者もいるだろうが、凧はそんな気分ではなかったのだ。

「ずっといたのか？」

「はい。特に出る用事もなかったのさ」

ポチポチとソシヤゲをプレイしている空菜。特に凧のほうを見ようともせず、画面を注視している。壁にかかっている時計は午後三時を示している。土曜日のこの時間帯は主婦向けの番組ばかりで、凧の年代を満足させる番組はあまりない。結局、家に帰って来ても本を読むか、ネットサーフィンをするかという少ない選択肢から選ばなければならなかった。

もつとも、それが気楽でいいから、足早に帰ってきたわけだが。

「どーすっか……ま、とりあえず風呂だな」

今日はもう外出する予定もない。

真冬であっても、外を歩いてればそれなりに汗をかく。それくらいの気温だった

のだ。

風呂はまず風呂を沸かした。

二十分とかからずバスタブには並々と湯が満ちて、シャワーで汗を流してからゆっくりと湯に浸かった。

普段は鳥の行水と揶揄される程度には短い風呂の時間だが、今日はそれなりに時間をかけた。

このマンションのバスタブは、全部屋が同一規格のユニットバスだというが、風呂の身長で足を伸ばしても反対側まで届かないくらいに広く作ってある。以前暮らしていたマンションでは、ちょっと屈まなければならなかったので、ずいぶんと楽になった。

「消えんなー、さすがに」

風呂は自分の両手を水面から上げた。

幾重にも伸びた大小様々な傷跡。あたかも茨を巻きつけたかのようなそれは、胸から放射状に広がっている。眷獣召喚の際のフィードバックを受けた証だ。魔力の通り道が、耐え切れずに裂けたものなので、傷ができる場所は毎回同じだ。風呂の場

合は胸から腕にかけてが一番多い。魔力を放出する際の、銃口としての役割を両腕が担っているのが原因だろう。

何度も何度も裂けては治るを繰り返した両腕の表面は、すっかり元の色を失いパッチワークのようになっていた。

クリスマス以降、風の吸血鬼化が進行した結果、こうした怪我に悩まされることはなくなったが、モザイク状になった肌が綺麗になることはなかったし、今後もこのままだという。それは、たとえば皮膚を移植しても変わることがないとまで言われた。

不死の呪いが、現状を固定する呪いであるのなら、この傷だらけの身体こそが現在の現状となるのだ。

正直、気にしている部分はある。

人の目が気になるといふほど、繊細な精神をしているわけではないが、人を見て気持ちのいいものではないというのは理解しているし、それを理由にプール授業を欠席していたりと多少は日常生活への影響もある。事情を理解してくれる友人ばかりではない。心無い陰口や無理解が皆無だったわけでもない。特殊な事情や特別な

立ち位置、人と違う活動、これらは学校という狭い枠組みでは爪弾きの対象だ。凧もそうなる可能性はゼロではなかった。

凧が学校生活を比較的まともに送れたのは、他人と一定の距離を置きつつ、攻魔師を目指して修行しているということのを隠さなかったからだ。

後ろ暗い背景による怪我ではないと分かってもらえれば、受け入れやすくもなる。那月からアドバイスを受けて、そうして振る舞ってきた。

仲良くなれる相手とは仲良くなれるものだ。

他人に不快感を与えないように配慮した生活は、息苦しいと思えることもあったが、大きな問題を引き起こすこともなく今に続いてきた。

傷の一つや二つで変わることはない、と言いながら、気にしなければ回らない人間関係もある。

背中をバスタブに預けて、天井を何をしてもなく眺めている。

ぬくぬくと暖かい風呂に浸かって、受験で疲れた心身を癒す。

そんなリラックス状態になっていた凧の頭上に強い魔力が渦巻いた。

「な……」

完全に油断していた凧は対応が遅れた。そもそも、見覚えのある魔法陣であり、知っている魔力だったから初動が遅れたとも言える。

天井に現れた魔法陣は一瞬だけ明滅し、肌色の物体を落下させる。

大きな水飛沫が上がって、凧を頭から濡らした。

「あぶ……ゲホッ、何!? 熱ッ、え、何!? 萌葱ちゃん!? どう、ゲホゲホッ!」  
ジャブジャブと溺れた猫のように暴れてから、それが顔を出す。

深く、艶やかな射干玉の黒髪が雫を滴らせている。白い肌は健康的な朱色を帯びて水を弾いていた。

激しく水面に叩きつけられた彼女——零菜は事情が掴めないまま暴れて、体勢を崩して凧に倒れ掛かった。

「ふぎゃ……!」

潰れたカエルのような声を出し、大量の湯がバスタブの外に掻き出されてしまう。

事情が分からないのは凧も同じで、いきなり裸の零菜が落ちてきたかと思えば覆いかぶさってきたのだから、頭の中は真っ白だ。見る人が見れば桃源郷なのだが、当事者にしてみれば阿鼻叫喚だ。

零菜は凧を押し倒し、抱きつくような姿勢になる。凧は押し付けられる柔らかい感触を愉しむ余裕はなく、事態の打開に向けて必死に頭を働かせていたが、土台無理な話ではあった。

「痛ッ、あ、んあッ!？」

零菜はここで初めて凧が自分の真下にいることに気付いたようだ。

空色の宝石のような瞳をまん丸に見開いて固まっている。超至近距離、吐息すら感じられるほどの近さだった。

「凧、君……?」

零菜の髪から水滴が滴り、音を立てる。零菜の視線がスッと下に下がって、一瞬で顔が真っ赤に染まった。

「あ、あ、あ、ああ、ひあ、ひあ、あ」

ジャバジャバと水音を立てて下がる零菜。顔も瞳も紅くなって、凧よりも長く湯船に浸かっていたかのようなうだ。

距離が取れたので、凧のほうも零菜の全体像が見えてしまった。

うわ、でけえ……と、口に出さなかったのは、なけなしの理性が働いたおかげで

はなく、単に状況が飲み込めなかったからである。

零菜は美人なだけでなく、服の上からでも分かるくらいの巨乳だ。

凧の同級生の女子で、これだけのものを持っている生徒はいなかった。

ここ二、三年のうちに、零菜の肉体は傍から見ても分かるくらいに女性らしく発達していた。本人が、それを気にして悩むくらいには艶めかしいボディなのだ。

「うあ、あ……み、見ないでえ……」

弱弱しく泣きそうになりながら、零菜は前を隠して後ろを向き、湯船に沈み込んでいく。

「あ、す、すまん……」

喜ぶべき状況なのかもしれないが、漫画のようにはいかない。実際にこのわけの分からない状況に直面してみると、何をしたらいいのかも分からなくなる。

「ここ、何、お風呂？　凧君の家？」

「そうだよ……風呂に入ってたら、零菜が降ってきたんだ、ぞ……」

「あ、う……ごめん……うッ」

零菜は振り返りかけて、すぐに顔を背けた。

凧に見られないようにしながら、鼻頭を押さえる。

少し鼻血が出てしまっていた。鼻を打ったわけではなく、父からの残念な遺伝であった。

パニックになっていた零菜も、この頃には落ち着いていた。

問題があるとすれば、その場の勢いで風呂場から退散するといった手が打てなくなってしまったことだろう。凧も零菜もどうしていいか分からない。分からないので、身動きが取れないといった具合である。

「凧さん、何か今、妙な魔力を感じましたが大丈夫ですか？」

と、脱衣所から声をかけてきたのは空菜である。

緊迫感のない声かけは、彼女が危険性を感じていないからだ。少なくとも、弄っていたソシャゲの必殺技を発動させてから脱衣所にこのこやって来るという程度の余裕を出していた。

「あわッ、空菜ッ」

迂闊にも零菜が声を出してしまった。

他ならぬ空菜が零菜の声を聞き逃すはずもなく、

「何故、零菜がそこにいるんです?」

冷やかな声音であった。

扉の向こうの空菜は、思春期を迎えて距離感の分からなくなった兄の部屋で大人の玩具を見つけた年頃の妹、のような嫌悪と冷たさを視線と声に乗せている。

「これは、これは、その、違くて……事故で……事故、だよ?」

「ふうん……」

何とも言えない空気が流れた。

その後、風呂を上がってホクホクになった凧と零菜は空菜からの取調べを受けることになった。

「……つまり、蒼エクリプティカ・サフィルスの天球を実戦運用できるように練習していたら、うっかりうちのお風呂に転移してしまった……という建前で凧さんのお風呂に突撃したわけですか」

「建前じゃない! 全然、まったく建前じゃない!」

テーブルを叩いて、零菜は空菜に抗議した。

事のあらましは単純明快。

蒼の天球という高度な転移能力を持つ眷獣を、もつと気軽に使えればいいな、と  
思い立った零菜は萌葱の協力を仰いで、自宅を試運転をしていた。

零菜の自宅には転移魔術の防止結界が張られているので、蒼の天球の制御を誤っても家の外に飛び出すことはないだろうと思っていたのだ。

ところが、現実はそう思い通りには行かず、三度目の実験で、本来は三メートルだけ転移するはずが二十メートルも出現位置を誤ってしまい、凧の頭上に跳んでしまったのだった。

焦ったのは萌葱だ。

家中どこを探しても、零菜がいないのだ。彼女がいた場所には、バスタオルだけが残されていた。

「まあ、あれじゃん。知らない人じゃないくて、良かったじゃん」  
と、萌葱が言う。

零菜の転移の魔力を追って、萌葱は昏月家にやってきたのだ。歩いても二十秒と掛からない距離である。追跡は容易かった。

「慰めになってないよお。ああああ〜〜〜！」

零菜は髪をくしゃくしゃにかき乱してテーブルに突っ伏した。

「男性のお風呂に裸で突撃して鼻血出してるとような吸血鬼トがわたしのオリジナルかと思うと、悲しくなってきましたよ」

と、空菜は追い討ちをかける。

心なしか口角が上がっている。

内心ではにやにやとしているのだろうが、それをあえて堪えている。そんな表情である。

「まあ、あれだ。確かに、萌葱姉さんの言うとおりに、その、知らない人とか道路とかに出たら、不味かったな」

「写メとか撮られても、あたしなら消せるし……ね」

「そのときは相手の記憶も消して」

「さすがに、それは……まあ、できなくもないけど」

萌葱は否定しようとしてから、考えを改めて頷いた。

できなくもない、その言葉は嘘ではないのだが、一度やってしまうと取り返しが

つかない可能性が高いので、今まで一度も使ったことがない脊獣の使い方だった。未だ、理論上は可能という段階を超えていないが、感覚的にはできると思っている。それができなくもないという回答の真意であった。

「凧君も忘れて！」

「……おう」

凧は空返事をした。

視界一杯の肌色を忘れることなど早々できない。もうちょっと冷静になって、ドサクサに紛れて揉んでいればよかったとか不埒なことが頭を過ぎったので、頭を冷やすために零菜から距離を取って自室に戻った。

「うううー」

零菜も零菜で凧の裸を間近で見えてしまっている。

何とも忘れ難い一枚絵が頭にこびり付いてしまって、零菜はしばらくまともに凧の顔を見れなくなった。

## 第五部 五話

「だるい」

朝起きて、最初の一言がそれだった。

三十八度二分——旧式の脇に挟むタイプの体温計の無情な機械音が妙に耳障りだった。二度三度、測りなおしてみたが結果は一分二分程度の増減を示すだけで誤差の範囲内だ。とどのつまりは熱がある。平熱が三十六度五分程度の暁東雲にとっては超高熱である。

「風邪ですね」

と、往診に来た医者と言った。

「吸血鬼のわたしが風邪なんて、そんな、ゲホゲホ、ありえない、ゲホ、おえ……」  
しゃべりながら咳をして、それで咽て胸を叩いた。

「吸血鬼でも風邪を引かないことはないですよ。まあ、薬を飲んでゆっくり寝てれば、すぐに良くなりますよ」

祖母の深森と同じタイプのハイパーアダプターだというこの医師は、簡単な触診

だけで東雲の風邪が重篤なものではないと判断した。

「今日、人が来るし、この時期に風邪とか困る」

「お祭も近いですからね。東雲さんは吸血鬼ですし、そこまで長引くことはないと思いますよ」

「……ありがとうございます。葉は早く効くのがいいです。ゴホッ、ゲホッ」

四日後の二月十四日は、混沌界域におけるチョコ祭の日だ。バレンタインデイに感謝の印や好意の表れ、あるいは友情の確認のためチョコレートを贈る風習は日本発祥で、暁の帝国にも当然のように根付いている文化だが、それをジャードが取り入れて始まった祭である。

混沌界域は、何ととってもカカオの原産地だ。三千年以上も前から様々な用途でカカオを利用してきた。ジャードにとっても大切な作物である。それを、世界的にアピールしながら、内需を増やす目的で始めたチョコ祭は、どちらかというところと奇祭の一つとして認識されている。首都で行われるチョコ合戦は、毎年、各国から多くの記者や観光客が訪れる一大イベントへと成長した。

東雲も一般参加枠で突撃予定だったので、祭を直前に控えた段階での体調不良は

ショックだった。

「ふぐぐ……」

ベッドに横になり、唇を噛み締める東雲。

「ゲホ、喉痛い……頭痛い……ゲホ、ゲホ」

マスクをかけて冷却シートを額と脇に貼り付けている。

透き通った白い頬は、熱のせいで真っ赤になっている。

全身に倦怠感があって、異様に寒い。

ただでさえ喉が痛いのに、咳をするたびに肺が痛む感じがして苦しい。

記憶にある限り風邪を引いたことのない東雲にとって、これは想像以上の苦行だった。

「お水をお持ちしました、シノ様」

ノックの後に寝室に入ってきたのは、メイド服を来た女性だった。

スレンダーな身体つきだ。身長は空菜と同じくらいで、東雲よりも少し年上に見える。外見年齢は、十代後半から二十代前半といったところだ。吸血鬼でなければ、きつとそれくらいであろう。内側に緩くカールしたボブカットの黒髪にブルー

の瞳で、アジア系ともラテン系とも見える顔立ちだった。

アカネ・シルバ——東雲がこの国に来た頃から仕えているメイドである。

「ありがとう」

東雲はコップの水をごくごく飲んだ。

寝汗をたくさんかいていたし、喉も痛かったので、冷たい水がありがたかった。

「汗が拭きまますから背中を向けてください」

「んー」

東雲はのっそりと起き上がり、言われるがままに背中をアカネに向けた。

アカネは東雲の桃色のパジャマを捲くり、柔らかい新品のタオルで背中を拭き取る。

「後でシャワー行きたい」

「熱の様子を見てからですけど、肌を清潔にするのは大切ですからね」

そう言いながら、アカネは東雲の背筋に指を這わせた。

「はわッ。ちょっと、変な触り方しないでよ」

「ふふ、すみません。すべすべだったのでつい」

「もう……」

だるそうにながらもぷりぷりと頬を膨らませる東雲。

「……それでは、前もしましょうか」

「前はいい。自分でできるから」

「いえ、しかし、病床のシノ様のお手を煩わせるわけには参りません。ここは、このアカネにすべてお任せを」

「だから、いいってば」

「……分かりました」

不承不承といった感じで、アカネは東雲から離れた。

「新しいタオルはここに置いておきますね」

「ん」

「それと、こちらに水も用意しておきます」

「ん」

ごろり、とベッドに寝転がった東雲にアカネは話しかけた。新品のタオルとコップ、そしてスポーツドリンクをベッド脇の書棚に置いた。

「ねえ、そういえば、葉は？」

「お持ちしております。シノ様が早く効くのがいいと仰ったので、一番即効性のあの葉を処方していただきました」

「え、ほんと？　ありがとー」

東雲はすぐにも回復したいのだ。

風邪が思いのほか苦しいということもあるが、何よりも祭に間に合わせたいというのがある。

予定通りなら、風と空葉が今日にも到着するだろうし、心配させたくもない。

「食前に一粒ということですので、ええと……今は正午前ですので、ちょうどいいかもしれませんね」

葉袋の説明書を読み上げたアカネが、がさがさと袋を開封した。

「今、やってしまいますか？」

「ん？　んー、そうだね。早いに越したことはないし、ゲホ……えほ、うー、苦しい」  
「では、分かりました」

アカネは、葉袋から一回分ずつに分封された葉を取り出す。透明なビニールの袋

に入っているのは、一粒の紅白のカプセルだ。

「何か、大きくない、それ……？ 飲むの大変じゃない？」

カプセルは、一センチを越える大きさである。水で流し込むにしても大きすぎる嫌いがある。普段から薬を飲む機会のない東雲としては、もっと飲みやすい大きさの薬を処方して欲しかった。

吸血鬼用の風邪薬が、あまりないということもあるのかもしれないが、患者が楽になるよう小型化してもいいのではないか。

そんな風に思って、疑問を呈したのであるが、アカネはきよとした顔で首を傾げる。

「飲む？ これを飲んだらダメですよ」

と、言った。

「え？」

東雲の目の前で、アカネが医療用の使い捨てゴム手袋を装着している。日夜、洗剤や冷水などの様々な刺激からメイドの手を守る必需品である。

ゴム手袋をした手で、アカネは薬の封を切り、カプセルを指で摘んだ。

「シノ様、お尻を出してください」

「へ……?」

「きちんとお尻を出してもらわないと、座薬を入れられないじゃないですか」

「ざ、座薬? そんなの頼んでないし……ゲホッ……嫌なだけで」

さっと顔を青くする東雲。

「この歳になって座薬とか、無理なんですけど!」

「何言ってるんですか、年齢とか関係ないですよ。これは、医療行為です」

「やだ、恥ずかしい!」

「もう、我侂言わないでください。シノ様が即効性のある薬を求められたので、お医者様がわざわざ処方してくださいだったのですよ」

「う、それは……でも、座薬とか、女子高生にとって抵抗があるというか……とにかく、無理だつてば、うゲホッ、エホッ」

「ほら、大声を出すから……まったく、そんな状態で昏月様方をお迎えするつもりですか?」

「それは……」

東雲は言葉に詰まる。

わざわざ、海を渡って暁の帝国からやって来る風と空菜を熱を出したままで迎えていいのかと言われると、それはダメだと思う。しかし、だからといって飲み薬ならばまだしも座薬というのは極端な選択肢ではないのか。十六歳の乙女として、これは大きな決断だ。確かに、座薬のほうが飲み薬よりも効くのが早い傾向があるというのには聞いたことがあるし、即効性の薬を求めたのは東雲だ。

「とにかく、今は、心の準備が」

「服薬時間も決まってるんですから、大人しくしてください。大丈夫ですよ。わたし、病院実習で座薬打つの、誉められたんですから。少なくとも痛みはないです。むしろ、皆さんもつとつと大変喜んでいただいたくらいです」

「え、何それ、ほんとに座薬だったの!？」

「シノ様、あまり興奮されると熱が上がりますよ」

「誰のせい、あ、ちょっと、待って、やめ……ゲホ、ゲホ、うあ」

医療拒否する主人を手早く組み伏せるアカネ。我侷な主人を素手で制圧するのも従者の務めとばかりの手際のよさである。

「や、やめて、離せえ」

「当身」

「う……ッ」

ジタバタする東雲に、アカネの右手が閃いた。

一瞬の出来事であった。痛みを感じる間もなく、東雲の抵抗が刈り取られたのである。

六年の付き合いになる親友とも言える相手に、座薬攻撃を仕掛けられるという乙女として終わってしまいそうな展開に羞恥心で血流が上がり、高熱で意識も朦朧としてきた。

「ふふふ、これは、医療行為、ですからね、大人しくわたしに身を預けてください  
ね」

なにやら頬を上気させたアカネが東雲の服に手をかける。

二度と風邪を引かないと、東雲はブラックアウトしそうな意識の片隅で誓った。



凧の受験は無事に終わった。

目標に定めていた高校への進学が決まり一安心。中学に行く必要性もなくなり、入学式までは悠悠々自適な生活ができるようになった。

空菜も彩海学園に合格したので、最低限の行き先は確保できた。三月に入ってから、凧と同じ高校の一般入試に臨むが、彼女の成績ならば心配はないだろう。単純な知識を競う問題で、後れを取ることはない。そもそものスタートラインが他の学生と違いすぎている。

受験が終わり、行き先が決まったので、凧は心置きなく海外渡航ができるようになった。

母がアルディギア王国で生活していることもあって、パスポートを所持していた凧だが、暁の帝国から出るのは初めてだった。

第三真相が治める混沌界域は、暁の帝国の友好国の一つである。

中米から南米にかけて勢力を有する熱帯の国である。

日本から見れば、暁の帝国は南国ではあるが、混沌界域からすればまだまだ序の

口である。赤道直下にあるこの国は、一年を通して熱く、湿度が高い。飛行機から一步外に出れば、その環境の違いを実感することができた。

混沌界域は、豊かな国だ。アメリカ大陸の中で、最も成功している国と言ってもいいだろう。その理由こそが、第三真祖の存在である。

真祖は単独で一国の軍と同じ扱いを受ける。それだけ、強大な力を有している。夜の帝国は、真祖という強力な軍事力を中核として、その地域で数千年に渡って力を誇示し続けてきた。誕生から現在まで、敗戦らしい敗戦がなく、首都が戦火に曝されたことはほとんどない。中南米の盟主として君臨する混沌界域は、それだけ経済的にも軍事的にも安定している。世界的な人魔協調路線が四十年以上になり、北方のアメリカ連合国にも国際的に優位になっている。

いずれにしても第三真祖ジャーダ・ククルカンという絶対盟主がいる限り、この国は政治的にも軍事的にも安定し続けるだろう。

そんな混沌界域に、凧が足を踏み入れることになったのはジャーダからの招待状によるものだ。

古城に届いたそれは、非公式に古城の娘達を混沌界域に旅行させてみないかとの

誘いであり、そこに凧と空菜の名もあった。

ただし、凧と空菜は旅行ではなく、短期留学という名目である。

攻魔官を目指す凧にとって、外国の夜の帝国を見ることのできる機会は重要だ。夜の帝国の仲間入りを果たしたばかりの暁の帝国からしても混沌界域は学ぶところの多い国である。こちらの攻魔官とも関われる機会があるのなら、それは喜ぶべき経験である。

学校の勉強は面倒だと感じる凧だが、攻魔官に関わりがあるのなら積極的に取り組めるのだ。

受験が終わり、ほっと一段落ついたところだ。

海外旅行気分も上乘せして、凧はスーツケースを引っ張って熱帯の国に降り立った。

「何、この国、暑い」

さっそく不平を漏らしたのは空菜である。

初体験の混沌界域は真夏のと真ん中である。最高気温は四十度に到達しようとしており、高温多湿の環境は不快指数を桁外れに跳ね上げる。

「息苦しい。ジワジワ来るな、これ」

照りつける太陽に焼かれ、吹き渡る熱風を浴び、あつという間に汗が噴き出してくる。

湿度が高いせいで汗が揮発せず、滝のように流れ出ていく。

アスファルトが高温で溶け出しそうになっている。陽炎がゆらゆらと揺れて、世界そのものが蒸し風呂になっているかのようであった。

凧と空菜は快適な空港のターミナルビルから外に出て、熱帯の洗礼を浴びることになった。

話には聞いていたが、実際に体験してみるとその不快感が桁外れだ。

夏の暑さが当然のように人の命を責め苛む。

中東の国々もそうだが、地域によっては夏という季節そのものが強大な敵として現れることもある。暁の帝国の夏などまだましな部類だ。

二月十日、生まれて初めての混沌界域デビューは、想像以上の環境の違いに困惑するというスタートであった。

「この後は、迎えが来るんでしたよね？」

と、空菜が言う。

「そのはず。待ち合わせはここでいい……と思う」

なかなか勝手が分からない異国の地である。

英語とも異なる文字は、まったく理解できないので携帯に頼るしかない。

東雲からの連絡では、空港のロータリーに迎えを寄越してくれるということだが、果たしてどこにいるのか。

何かの行き違いでもあったのだろうか。東雲に連絡をしようかと思いついたとき、凧たちの前に黒塗りの車が停まった。

助手席のドアが開いて、スーツ姿の女性が下りてきた。

「昏月様ですね？ 遅くなって申し訳ありませんでした。初めまして。シノ様の身のお世話を見せていただいております、アカネ・シルバと申します。シノ様の命により、お迎えに上がりました」

アカネと名乗ったスーツの女性は、人好きのする笑みを浮かべた。少し年上に見えた風貌は、その笑みで若干幼く見えるようになった。

「あ、はい……ありがとうございます」

「それではどうぞ、お乗りください。まずは、お屋敷にご案内しますね」

どうぞ、と後部座席に乗るように勧められる。

中を覗くと奥行きがあってゆったりとしたシートだ。

無駄な装飾は見当たらないが、素材にしっかりとしたものを使っているという印象だ。

巧妙に隠されているが、この車には防衛術式が何重にも仕込まれている。真下で爆弾が炸裂しても、この車は無傷で装甲を続けるだろうと思えるほどの頑強な設計だ。

日常生活で乗る車は、路線バスが精々の風からすれば、セレブ御用達の高級車に乗り込むのは気後れする。緊張しながら促されるままに後部座席に乗り込んだ。

重厚感のある外観とは裏腹に、ゆったりと車は走り出した。

暁の帝国とはまったく異なる景色が左右に広がっている。

海に面した空港の周囲は自然が多く、地平線は連なる山脈によって隠されている。

「本物の山だな」

「本物の土の畑でしたね」

凧と空菜は物珍しそうに外を眺めた。どちらも暁の帝国では見る事のできない貴重な光景だ。

「山も畑も珍しいですか？」

と、アカネは尋ねる。

「はい。うちは人工島なので、山も畑もないですよ」

「あッ、なるほどー。そうですね。言われてみれば、確かに」

「山は人工物ですし、畑はバイオプラントですからね。個人農家なんてほぼいないんじゃないですか」

暁の帝国が他の国々と違うのは、一から人間が作り出した海に浮かぶ人工島という点だ。鉄と石と魔術で構成された国土には、天然の土は算出しない。海洋資源開発で出た海底の土から塩分を除去して、国営公園の造園に充てていたりはその、他所から土を持って来てやっとな緑が生きられる環境ができるというのは、大地に根付いた伝統的な農業と相性が悪すぎる。

「そういえば、暁の帝国は世界で最もバイオプラントが発達した国なんて言われているんですね」

「そんな風にも言われているみたいですね。ないと困りますし」

大工業国である暁の帝国の弱点は、食糧自給能力の低さにある。

海洋資源に恵まれているとはいえ、土がないので農業が育たない。喫緊の課題として、安定した農業生産物の供給が挙げられ、長年バイオプラントの拡張と効率化を推進してきた。

食料を輸入に頼っていると、海上封鎖をされた際に受ける打撃が大きくなりすぎる。

太平洋に浮かぶ暁の帝国と中南米の混沌界域の「仲のよさ」は、海を挟んで隣国であるというのも大きい。この二カ国が友好関係になれば、簡単に海上交通を麻痺させることはできない。

「ところで、今日、東雲さんはどちらに？」

「シノ様は、お屋敷におられます。本当は、ここに来る予定だったので、風邪を引かれまして」

「え、風邪？」

「はい。今はベッドでお休みになっております」

「そうですか。大丈夫なんですか？」

「大したことはないですよ。騒ぐ程度には元気がありますから」

「騒いだんですか……」

「ええ、まあ色々」と

騒ぐ東雲というのは、もともとのフランクな性格もあつて想像に難くないが、我儘を無理強いするタイプではない。いったい、何があつたのだろうか。

「まあ、気にしなくて結構です。今頃はお目覚めになり、ベッドの上でゴロゴロしてる頃でしょうし」

「本当に大したことなさそうですね」

「ただの夏風邪ですから」

不老不死の吸血鬼も風邪を引くことはある。

不老不死なので大抵の細菌やウイルスは効かないのだが、精神的な不調で体調を崩したり、魔力欠乏で倒れたり、如何に不死の呪いを持っていても、どんなときにも万全の体調を維持できるわけではないのだ。

それでも、第二世代の中でも肉体的なスペックは最高純度で、最も真祖に近いと

まで言われる東雲が風邪というのは、珍しいことではある。それをただの夏風邪で済ませてよいものなのかどうか、風は心配になる。

空港から市街地まではバイパス道路が一直線に走っている。いつの間にか畑はなくなり、住宅街を見下ろす高台に到達していた。起伏の激しい地形は、それだけで平坦な街に生きる風にとっては新鮮だ。

「ああ、見えてきました。あちらに見えるのがシノ様のお屋敷です」

住宅街の中にひと際大きな建物がある。西洋風の庭園が整備された白磁のように白い建物は、暁の帝国の領事館で、領事館と接続する洋館が東雲の屋敷である。

写真では見たことがあるが、とても立派な建物だ。もともとは庁舎の一つだったものを改装し、暁の帝国との友好のため、ジャーダから寄贈されたものであるという。

領事館の裏手から、敷地の中に入る。屋敷の前で風と空菜は車を降りた。

「それでは、中にどうぞ」

「お邪魔します」

アカネに促されてエントランスに入る。

ここもまた高級感が漂うエントランスだ。高い天井にシャンデリアが吊るしてあり、なんだかよく分からない絵画が壁に列を成してかかっている。

中世の城かそれをイメージしたホテルを思わせる。

タワーマンションをワンフロア丸々暁家のものにしてはいるが、敷地面積はこのほうがずっと広いだろう。

「ここに一人で住んでるんです？　なんか、お姫様みたいですねえ」

「お姫様なんだよ、アイツは。正真正銘の……」

親族ということもあって忘れがちだが、東雲は第四真祖の娘だ。一国の皇帝の娘なのだから、お姫様という表現はまさにそのまま適用される。

「凧ちゃん、空菜ちゃん、いらっしやーい。待ってたよー」

と、声が降ってくる。

東雲が二階から手を振っていた。

「シノ様、お目覚めになったのですね。体調は如何ですか」

「まあまあ……喉痛いし頭も痛いけど、朝ほどじゃない。ていうか、なんだか酷い目にあった気がする」

「気のせいでしょう」

「そうかな」

「はい」

しれっとアカネは答えた。

熱のせいか、医者への往診以降の記憶が途切れ途切れになっているのだ。

「風様と空菜様のお部屋をこれから案内します。シノ様はもうしばらくお部屋でお休みください」

「えー」

「風邪をうつすと大変です」

「……まあ、そうだけどさー」

不満げにしながらも、東雲は引き下がった。

自分だけならばともかく、風と空菜に風邪をうつすことがあってはならないからだ。

「後で診に行きます。その時に熱が下がっていれば、多少自由にしてもいいと思いますよ」

「はいはい、じゃあ、お言葉に甘えて休んでますよ。じゃあ、またね」

「ちゃんと、休めよ、病人なんだから」

風邪を引いたという情報しかない凧は当たり前障りのない声かけをする。東雲は小さく笑って、奥に去っていく。

「さて、お部屋にご案内しますね。それから、着替えをしていただきますので」

「着替え？」

「はい。一先ず、こちらへ」

凧と空菜は屋敷の奥に案内された。

宛がわれた部屋は二階で、凧と空菜にそれぞれ一つずつだ。内装は同じで、普段使っていない来客用の部屋だそうだ。

大きな屋敷に東雲とアカネと若干の使用人だけの生活だ。使わない部屋も多いのだとか。

「着替えはこちらで用意したのになります。一時間後に呼びに来るので、それまでに着替えてくださいね」

そう言い残してアカネは部屋を出て行った。

取り残された凧は、とりあえずテーブルの上に置かれた着替えを手取る。

ジャケットにベスト、そしてストラックス、ワイシャツもある。衣服に詳しくない凧でも、それがスーツ一式であることはさすがに分かる。

式典であっても学生服で出席できるので、あまりスーツを着た記憶はないのだが、この屋敷に相応しい服装と考えると納得もできる。

トントン、とドアをノックされる。返事をする、空菜が入ってきた。

「その格好……？」

凧は驚いて、言葉をなくした。

現れた空菜は、伝統的なヴィクトリアンメイド服と編み上げブーツという組み合わせであった。

「それが用意されてたの？」

「はい。メイド服、ですね。クリスマスに零菜が着ていたものと同一……いえ、こちらのほうが本物っぽいですか」

「多分、ガチの本物なんだろうな……零菜が着てたのは、コスプレ用のはずだし」  
クリスマスステロの際に、零菜が那月に押し付けられたメイド服は、ヴィクトリア

ンメイドではあったが、コスプレの域を出ないものだった。那月の自宅にある多数のコレクションの一つである。しかし、空菜が身につけるメイド服は現役のメイド服である。

混沌界域では、今でもヴィクトリアンメイドが現役で採用されている。これは、ジャーダの趣味を受けてのものだという。

「どういうことでしょう。凧さんのそれも、たぶん執事服になるんですよ」

「この流れだとそうなんだろうな」

空菜のメイド服は大変可愛らしいのだが、これから執事とメイドとして東雲に関われということなのだろうか。一時間後にアカネがやってくるということのなので、そこで説明があるはずだが、何かしら役割を与えられることになりそうだ。



## 第五部 六話

普段着ることのないフォーマルな格好をすることになり、風は少々萎縮した。それも、ただのスーツではなく、格式ばった執事服である。

平日は学生服とジャージ、休日はパーカーとジーンズが基本の風にとっては、非常に息苦しいスタイルである。

空菜は空菜でクラシカルなメイド服である。バストサイズもウエストもばっちりだったというから驚きである。

「そういえば、先月東雲さんにあれこれ測られましたね。うーん、あれですかね」  
正月に東雲が帰省したときの話である。

メジャーを使って、空菜の身体を細かく計測していたのだという。その後、ネット通販で何着か服を買っていたが、そこで得た情報を下にこのメイド服も作られたのだろう。

新しく加わった「妹」に戸惑うでもなく積極的に関わっていたのは東雲の性格がよく現れた場面だろう。

ともあれ、白と黒のモノクロカラーは、空菜に落ち着いた印象を与えている。もともとが感情表現の乏しい性格だ。美しすぎると評される美貌も相俟って、メイド姿の空菜はどうも近づき難い雰囲気醸し出している。

クラスの男子がこの姿を見たら、泣いて喜ぶであろうことは明白だ。

着替えを済ませると、これまた同じくメイド服に着替えたアカネが迎えに来た。

「お二人ともお似合いですよ。シノ様もお喜びになるでしょう」

「そうですか……あの、それで俺たちがこの服を着た理由はなんでしょう？」

「あれ？ 聞いてませんか？」

「何を……？」

先頭に行くアカネが意外そうな表情で振り返る。

「凧様と空菜様にはこれから短期使用人講習を受けていただくことになっていきます。空隙の魔女……南宮那月様から是非にと伺っていたのですが」

「使用人講習……？ 何ですか、それ……？」

「それはもちろん、執事やメイドの基本技能を学ぶ短期講習です。一日三時間、明後日までです」

「何も聞いてないんですけど。南宮教官も関わってるんですか」

「はい。あの方も時々こちらの大学などに来て魔導犯罪の講演をなさいますので、その際に当家に立ち寄られることもあるのです」

那月は世界的に有名な攻魔官である。

その戦闘能力は条件次第では真祖と正面から戦うこともできるほどで、単独で壊滅に追い込んだ魔導犯罪組織は両手の指で数えられないほどの数に上る。

その力は魔女になった際の契約の代償に由来するもので、他人が真似ることはまず不可能だが、彼女の経験や技術を求めて各国の関係機関が講演の依頼をすることは珍しくない。

「今回企画した短期使用人講習は、もともとは南宮様が開発した攻魔師養成講座の一部をアレンジしたものです。わたしも以前受講しました」

「攻魔師養成講座と何の関わりが？」

「暁の帝国だと馴染みがないかもしれませんが、使用人にも一定の戦闘能力を求めるのが混沌界域の慣わしです。何せ、使用人というのはわたしもそうですが、主の近くに四六時中いますからね。日常的に護衛の役割を果たせると重宝するんです」

「はあ、なるほど」

アカネの説明でしっくり来た。

もともと日本の絃神島を母体とし、二十年程度の歴史しかない暁の帝国にはそもそも日常的に使用人を雇うほどの富裕層は少数だ。それも、生まれついでに貴族と  
いうのは暁家しかないのが現状だ。

だが、混沌界域は違う。

遙か古代から続く夜の帝国は皇族だけでも相当数存在している。

彼等は当然のように使用人を雇い入れるし、政争も戦争も日常茶飯事だった時代  
もあつただろうから、暗殺の危険に対処するべく護衛も近くに置く。そうした中  
で、使用人と護衛を兼ねるといふ風潮が生まれるのは自然な流れだったのだろう。  
「攻魔師になれるような人材は、軍に入るか貴族の使用人になるかってところでは  
民間で攻魔師やるより安定してますからね」

「そういうものなんですネ、こっちでは」

「いつだって、戦える人材は引く手数多ですよ。もっとも、わたしは戦力というに  
は……まだまだですが」

アカネから感じる魔力は、大したことはない。彼女は人間だ。魔族ではない。となると、年齢も風とそう変わりないだろう。ならば、よほどの才能がない限りはまだまだ未熟の域を出ない。人間よりも遥かに頑強で、長寿の魔族が多い世の中で、ただの人間が社会で活躍するにはそれ相応の努力が必要だ。とりわけ、混沌領域は夜の帝国だ。国防力の中核を魔族——特に吸血鬼が担っているため、人間の口のほうが遥かに多くとも、魔族の社会的地位は高い。

使用人に戦闘能力が求められるというのなら、人間が魔族優位の社会に割って入るのは大変だろう。いくら、人手不足とはいえ、上の席は長寿の魔族が占めている場合が多いのだから。

「もちろん、何から何まで戦闘能力を求めているわけではないですよ。戦えると優遇されるといっただけなので、家事全般や秘書的役割など他に求められる場面は多々あります」

と、アカネは語る。

東雲に仕えているアカネは、暁の帝国から給金が出ている。

孤児となった彼女を拾い上げ、この家に連れてきたのはジャーダだが、雇い主は

古城である。ジャーダから古城に彼女を使用人として教育し、雇ってみてはどうかと提案があり、古城もそれに同意した。「行き場がないならここにいろか？」といった程度の理由で雇われたのが始まりなのだとか、アカネは自分の来歴を簡単に説明した。確かに、古城ならばそういう判断をしそうではある。

凧と空菜がアカネに案内されたのは、地下だった。重たい鉄扉を潜った先にある螺旋階段を降りていくと、かなり大きな空間に出た。おそらく二十五メートルプールの丸々入るくらいはあるだろう。強力な結界がいくつも設置され、厳重な管理が成されているのが一目で分かった。

見た目は学校の体育館にそっくりだ。天井は高く、床は木製であった。地下なので窓はなく、照明の明かりが唯一の光源であった。

「地下シェルター兼運動場です。ここが、講習会場になります」

「シェルター……？」

なるほど、確かにそう言われてみれば、この頑強な構造は地下シェルターと言われても納得できる。パツと見だが、下手な眷獣の直接攻撃にも揺るがない防御能力

がありそうだ。

この屋敷は領事館に併設されており、皇女が日常を過ごしているのだ。有事の際の避難場所を確保しているというのは、自然なことなのだろう。

風が暮らす自宅マンションも、皇帝一族が暮らしているが、ここまでの施設はない。そもそも増築できるだけの、土地がないし、皇帝も皇后も庶民派過ぎて、お金に余裕のある一般人の延長線上の生活をしていることからしてもアルディギア王国で堂々と姫をしているクロエの次に東雲は姫君らしい生活をしていると言えるのではないか。

「それで、講習は何をするんですか？」

と、空菜が口を開く。

攻魔師の勉強もできるぞ、と事前に言われてはいたが、ここまで本格的な勉強をするとは聞いていない。学ぶところもあるのだろうという程度の覚悟で、ほぼ旅行気分だったのだ。

「まずは座学です。とりわけ、今回は清掃、調理、整体、医療、介護をみっちり詰め込んであります」

「一日三時間で三日間……それでできる内容ですか？」

「医療介護といっても、基礎中の基礎だけです。応急処置のやり方とかですね。それに一日三時間は外の時間です」

いやな予感しかない。

外の時間という言い回し。それはつまり――。

「シェルター内部の時間を三分の一にまで減速しますので、一日九時間ですね」

「俺、最近受験終わったばっかなんですけど……」

受験勉強を終えて海外旅行に来たと思ったら、学習塾の受験対策合宿みたいな状況に放り込まれるとは。

大きなシェルター内に机が二つ並んでいて、そこで寂しく勉強するということか。その前にはホワイトボードが置かれている。

「時間の操作は、とても難しい魔術と聞きますが。魔女ならばともかく、個人で扱えるレベルの技術はまだ開発されていないのでは？」

と、空菜が尋ねる。

「そこは、その分野の一流の魔女が関わっていますから。第四真祖がシノ様を守る

ために南宮様に依頼して造ったのがこの施設です」

「ここも教官が関わってたのか」

時空間制御の魔術は超高度な魔術だ。凧はその概要を理解することすらできない。術式を見て、それが空間制御の魔術だと理解することはできるが、どういう理屈で発動しているのかを読み解くことは困難だ。

「それで、アカネさん。講習っていうことは、先生もいるってことですか？」

「はい。もうそろそろいらっしゃる頃合かと……あ、噂をすれば」

扉を押し開けて入ってきたのは、身長二メートルはありそうな大男だった。肩幅が広く、筋骨隆々。頭はスキンヘッド。スーツ姿だが、明らかにカタギの雰囲気ではない。

「もう揃っているようだな」

太くざらついた声で男が言った。

流暢な日本語である。

「その二人が、受講者ということでもいいのかな、アカネ」

「はい、左様です」

アカネがカーテシーで挨拶をして、それから凧と空菜に振り返る。

「こちら、全界使用人協会会長のリカルド様です」

「使用人協会会長……？」

思わず、凧は男を見る。

巨大だ。

まるで巨人のようである。外見年齢は三十代から四十代半だが、魔力の感じはもっと古い——恐らくは旧き世代の吸血鬼であろう。『使用人』という肩書きが恐ろしく似合わない。

「昏月凧、です。よろしくお願いします」

「昏月空菜です。よろしくお願いします」

威圧感を放つ大男に、凧と空菜は気圧されながらも頭を下げた。

「使用人協会会長のリカルドです。どうぞ、よろしく」

リカルドはにかつと笑みを浮かべて言った。

それまでの威圧感を吹き飛ばす人好きのする笑みであった。

「初対面で威圧するのはいかがかと思えますよ、会長」

「せっかくこんな見た目なのだ。少しは活用したいだろう。この国では、顔が知れてしまっていて面白みがないからね」

アカネとリカルドが軽口を交わしている。

「ああ、すまない二人とも、席に着いてくれ。アカネも一緒にどうか。久しぶりに、復習のつもりで」

「いえ、結構です。買出しに行かなければならないので」

「そうか。残念だ。主が一人とはいえ、この屋敷を少数精鋭で回すのは大変だな」  
「そうでもありませんよ。楽しくやらせていただいています」

そう言って、アカネは笑う。

「凧様、空菜様。申し訳ありませんが、わたしはこれで失礼します。講義が終わった頃にまたお迎えに上がりますね」

また一礼して、アカネが去っていく。残されたのは凧と空菜と会長の三名だ。

そして、施設の結界が動き出した。

時間操作の魔術で時間の流れが遅くなったのだろう。内部にいる凧と空菜には、実感がまったくないがもしも、外を眺めることができれば、外の人たちの動きが三

倍速に見えるはずだ。

「うむ、ここを使わせてもらうのも久しぶりだな」

「あの、ここ使うことがあるんですか？ 使用人協会とかで」

「もちろんだとも。時間遅延魔術を組み込んだ施設は世界中のどこを探してもここだけだからね。短時間でみっちりトレーニングをするには、優れた施設と言えるだろう。まあ、三倍速で歳を取るの、それを嫌う人もいるがね」

「日本語、お上手ですね」

と、凧が言う。

先ほどからずっとリカルドは日本語を話している。

「ん？ ああ、日本語はビジネス界では必修だからね。暁の帝国の台頭は、そういった分野にも影響しているのだよ。それに、一流の使用人ならば三ヶ国語は話せなければね」

暁の帝国の公用語は日本語だ。

そして、暁の帝国の技術力は世界屈指である。ビジネスマンの間で日本語の人氣が高まっているというのは、世界の科学技術をどの国が牽引しているのかということ

とを如実に表しているのだった。

リカルドはジャケツトを脱いだ。

ワイシャツが筋肉でパツパツになっているではないか。

ボディビルダーのような魅せるための筋肉ではない。この筋肉は、戦うための筋肉である。

「さて、ではさっそく始めよう。時間に融通が利くとはいえ、無駄にしていいいわけではないからね。一時間目は、調理の基礎中の基礎からだ。うん、君達の国では家庭科と言ったかな。調理に裁縫、掃除まで学校で教えてくれるというのはすばらしいことだ。我が国は、その辺まだまだでね」

リカルドはにこやかにマジックペンのキャップを外した。

凧は手元に視線を向ける。

分厚い教本がそこにあつた。ノートとシャーペンもきちんと揃えてある。

「まずはテキストの三十ページから始めるぞ。私が教鞭を取るからには、三日で使用人検定の三級程度は軽く合格できるようにするから覚悟するように」

そして、突然始まった勉強会は凧の想像もしていなかった展開に進んでいく。そ

れは頭も身体も使う、厳しい戦いであった。

「脇が甘い。膝もきちんと曲げろッ。礼は基本中の基本だぞッ」

空菜に指導が飛ぶ。

カーテシーのやり方を徹底的に仕込まれているのだ。

その隣で、凧は右足を引き、左手を腹部に当てた姿勢のまま固まっている。「正しい姿勢を身体に覚えこませる」という方針の下で、十分近くこの姿勢を維持しているのだ。

二時間に及んだ座学の後で待っていたのは、お辞儀の基本講座であった。

もちろん、それまで和風の、それも正式なものではない学生レベルのお辞儀しかしてこなかった凧と空菜にとって本場の執事とメイドの礼儀作法など門外漢だ。空菜も知識としては知っていたが、実際に使ったことなどなかったので指導が入ってばかりである。

初めは気恥ずかしさがあったのだが、会長は本気だ。熱意を持って指導してくれらる。攻魔師として必要かどうかは別として、これは適当に流していいどうでもよい

勉強ではないということは確かだ。

凧は途中から無心の境地に至っている。空菜はどう思っているのだろうか。彼女は恐らく、凧に巻き込まれたただけだ。

「何より必要なのは敬意だ。敬意は行動によって表される。執事なら執事、メイドならメイドの作法をきちんと守り、示すことが、相手だけでなく、『礼』の文化と歴史に対しても敬意を示しているということになるのだ」

自論を熱く語りつつ、身体を傾ける角度から言葉遣い、時に表情に至るまで指導が入る。普段、表情の変化が少なく感情表現が苦手な空菜が大いに苦戦したところである。

「うおおおおおおおおおッ」

凧が吼える。

魔力で肉体を強化して、リカルドに立ち向かう。

相手は身長二メートルに達する筋骨隆々な魔族である。それも、話を聞けばかつては軍に所属していたという。この肉体を見れば、まったく驚くに値しない。むしろ

ろ、軍人でないことが驚きである。

凧が手に持つ竹刀が、小枝のように見えるくらいの鍛え抜かれた肉体だ。

座学ばかりでは飽きるだろうと、この日の後半は模擬戦となった。

凧と空菜が二人掛りでリカルドに挑む形となる。

「いい動きだ。相当に仕込まれているな」

感心したようにリカルドが呟く。

向かってくる凧の竹刀を自分の竹刀で受け流す。力任せに振り回すのではなく、確かな技術で竹刀を振るっている。力と技を高い次元で組み合わせた軍人の剣だ。

「実戦経験も何度かあるのだろう。今の時代、その歳で現場を知る者はそうはいないな」

空菜が紡いだ風の魔術を易々と斬り裂くりカルド。

素早く動く凧の額に竹刀を打ち込む。

凧はそれを紙一重で回避する。

「素晴らしい。しっかりと見えているな」

リカルドは凧の動きを高く評価している。

十五歳という年齢にしては、凧の戦い方は様になっていると見える。リカルドの剣を紙一重で回避する反射神経だけでなく、リカルドの動きをきちんと目で追っているところが高評価だ。優れた直感の持ち主だと聞いてはいたが、目もいらいしい。これは普段から厳しい鍛錬を積んできた証である。一朝一夕に身に付くものではないし、生まれついて才覚があっても鍛えなければ使い物にはならない技術だ。空菜のほうも、同様だ。あちらも近接戦も魔術も眷獣も使いこなすという異彩を放つ少女である。どちらも大きな可能性が未来に広がる人材だ。惜しむらくはこの国の人間ではないということだろう。

「タイニー・アウルム  
小さな黄金ツ」

黄金に輝く雷光の豹が、リカルドの視界に紫電を走らせる。

吸血鬼ではないのに吸血鬼の特性を有する珍しい体質だ。

それゆえに眷獣の召喚もできる。ここ数ヶ月、吸血鬼化の進行により眷獣を使用する際の負担も大きく減ってきている。以前はこの小さな黄金すら召喚するだけで表皮が裂けて血が噴出す有様だったが、今はそこまでのダメージはない。

眷獣としては非力な小さな黄金だが、雷光の豹らしく速度は最高峰である。速く

鋭く相手に迫り、一撃を加えるのがこの眷獣の使い方だ。

「まだまだッ」

轟、と魔風が吹き渡る。

瞬間的に膨れ上がった魔力が、指向性を持つ風の弾丸となり、性格に小さな黄金の身体を跳ね飛ばしていた。リカルドが飼う眷獣の力だ。完全に召喚せず、その能力だけを顕現して見せたのだ。それだけで、凧の眷獣が打ち消される。

空菜が魔力の暴風を斬り裂いて進む。眷獣を顕現させずに能力だけを身に纏うのは、リカルドの特権というわけではない。

空菜の刃シーカ・アルゲントトゥムの白銀は、魔力を無効化し、斬り裂く眷獣だ。零菜の槍ハスタ・アウルムの黄金よりも

幾分か性能が劣るものの、相手が魔力による干渉をしてくるのであれば滅法強い。対魔術、対眷獣の戦闘では反則級の能力だ。

刃の白銀の能力を全身に纏わせた空菜の拳は、吸血鬼の再生能力や獣人の魔力強化済みの肉体強度を貫通し、ダメージを与えることができる。

「よしよし、なかなかだぞ」

空菜の能力を把握していたリカルドの表情に焦りはない。

空菜の拳をいなしたりカルドは、足払いをかけて空菜の体勢を崩す。思わず踏ん張ってしまったところで、リカルドに捕まった。右手を掴まれてあっさりと振り回された挙句に、風に向かって投げ飛ばされる。

「んきゃッ!?!」

「うおッ!?!」

バタバタと音を立てて転がる二人。

「二人とも筋がいい。特に眷獣の使い方。眷獣は力の塊だ。ただの人間が相手なら、適当に暴れさせるだけでも十分脅威を与えられるだろう。だが、理性ある吸血鬼ならば、その力の塊をただ暴れさせるだけでなく、如何に戦闘に組み込むかを考えねばならん。その点、昏月兄妹はよく徒に力を使うだけでない分のびしろがありそうだ。まあ、眼に頼りすぎているという欠点もあるがね」

「ありがとうございます……何と言うか、お強いですね」

「若者に負けていられんよ。重ねてきた年月も時間も違う。十年二十年で追いつかれるわけにはいかないだろう。それに、最高の執事というのは最高の兵士を兼ねるものなのだよ」

得意げに話すりカルドの言葉に嘘はない。

彼はそう信じて徹底して自分の技術を鍛え上げてきたのだ。それこそ、百年単位で磨いた技術だ。凧と空菜が例え超天才児だったとしても、十五年程度の年月を超えられるほど、彼の研鑽は安くはない。

「さて、ほどほどに動いたことだし、本日の復習をして終わりとしよう」

「ほどほど、ですか……」

「もう疲れました」

げっそりとした表情で愚痴を言う二人。

座学も組み手も、想像以上にハードだった。

体力も魔力も気力もガリガリと削り、頭と身体にリカルドの語る使用人を叩き込んでいく作業である。

座学や身体能力に於いて凧を上回る空菜ですら、疲労困憊といった様子だ。

何度も何度も投げ飛ばされて床を転がり、腱鞘炎になろうかというくらいノートを取った。九時間に渡った講習は、体感でそのさらに三倍もの時間を費やしたようで、途方もない密度であった。これが、後二日も続くのかと思うと気が滅入る。

あまりにも突然始まった地獄の講習会だ。もともと勉強することがあればいい、という程度の気分だった風にとっては不意打ち極まりないものだが、だからといって異国の地では逃げ出すこともできない。何より、弱音を吐いたり逃げたりするのは恥ずかしいと感じる心が風にはある。方法はどうかあれ、那月がお膳立てしてくれたことに変わりはなく、旅費は暁家負担なのだ。ならば、この講習も食らい突いて乗り越える。那月の説明不足は今に始まったことではないし、講習内容は確かに風の将来にも関わる貴重なものだ。これを学習し、自分の血肉にすることこそ自分が今するべきことなのだ。と風は心身を奮い立たせた。



## 第五部 七話

葉のおかげか、熱は下がり、喉の痛みも引いた。少しだるさは残っているが、朝方に比べて体調はずいぶんと回復したと言えるだろう。

東雲は自分の額に手を当てて、治ったと心の中で呟いた。

吸血鬼の回復力は伊達ではないということだろうか。せっかく凧と空菜が遊びに来てくれているのに、一人で寝ているだけというのはなんとも味気がない。ソーシャルゲームも漫画も小説も、いつもは時間を忘れて熱中できるのに、今日ばかりは不思議と手につかなかった。凧と空菜は何をしているのだろうか、とにかく暇だと心の中で呟いていたり、気持ちばかりがあっちへふらふらこっちへふらふらしていた。何かを始めようとする、別のことが気になって結局暇を持て余しているながらベッドの上でゴロゴロするだけとなってしまう。これ以上時間を無駄にすることが他にあるだろうか——などと思いつつも、ちゃっかり昼寝はできてしまう。一時間ほど意識を遠のかせ、覚醒して漫画や小説やゲームに手を伸ばし、それからうだうだゴロゴロしてまた眠るを繰り返し、気づけば夕方になっている。

凧と空菜は昼過ぎにこの家にやって来た。それからそこそこの時間が経ったが、二人ともまだ東雲に会いに来ていないというのが不満ではあった。

一応、この家の家主ではあるし、病人でもあるので、挨拶と様子見に来てくれてもいいじゃないかと思うのだ。

部屋のドアがノックされたのは、そのときだった。やって来たのはアカネだった。

「なんだアカネかー」

「どうかしましたか？」

「別に、何でも」

「そうですか。それで、お身体の具合は如何ですか？」

「大分よくなったよ。熱も引いたみたいだし、もう大丈夫かな」

ベッドの上で胡坐をかいて座る。

行儀がいいとはいえないが、気心の知れたアカネしかいない状況だ。自分のプライベートな空間で気を張る意味はないのだ。

アカネはお盆にガラスの水差しとグラスを乗せている。

「あと一時間ほどでお食事の用意ができますので、食前の薬をお持ちしました」

「葉……」

東雲は警戒感を強めた。

今朝は酷い目にあった。近年希に見る屈辱を味わったのだ。

「そう警戒しなくても、今回は普通の飲み葉ですよ？」

「あ、そう。ならいいんだけど」

警戒を解いた東雲は、アカネからグラスを受け取った。並々と注がれた冷たい水で、二錠の風邪葉を胃に流し込む。

ひんやりとした水が火照った身体を冷やしてくれる。寝汗をかいたのでちようどよい水分補給になった。

「あの二人は、今どうしてるの？」

「凧様と空菜様でしたら、今は地下で使用人講習を受講されてます」

「使用人講習？ そんなの受けてるの？」

「南宮様からの要望もありまして。凧様にとっても大切なことであると伺ってます」

「攻魔官目指してるって話だし、まあ……でも、別に今日しなくてもいいのに」

「むしろ、今日から始めなければスケジュール的に厳しいですよ。地下で時間圧縮

しなければ単位が足りなくなりますから」

「うわ……そこまで詰め込んでるの？」

凧が到着してから数時間しか経っていないが、時間圧縮をしているとなれば、凧と空菜はもっと長い時間を地下で過ごしていることになる。

暁の帝国からはるばる混沌界域までやってきて、初日から講習を詰め込まれるというのとは何とも世知辛い。

「現実時間では三時間ほどですので、そろそろ終わる頃ですね」

「実際は何時間やってるの？」

「一日九時間を予定しています。それが三日で、二十七時間ですね」

「それじゃあ、二人とも全然休めないじゃん」

東雲が三時間ベッドの上で転がっている間に、凧と空菜は九時間も地下で講習という名のスパルタ教育を受けていたのだ。その前に長時間の飛行機での移動があったはずで、二人の身体には相当の負荷がかかっているのは間違いない。

時間圧縮というのは、現実時間と圧縮時間との差の分を得するための魔術だが、身体にかかる負担が大きいのだ。

それは単純に一日の活動可能時間の問題だ。

人間も魔族も休みなく活動を続けられるわけではない。それぞれに適切な活動時間があって、それを超えると心身に強烈な負荷がかかるというのは言うまでもないことだ。

時間を圧縮して得をした分を別の活動に費やすというのは、その分だけ睡眠時間を削っているというのも同然なのだ。

「そこは、大丈夫です。お休みになる時も、地下シェルターを使う予定です」

「……なる、ほど。それ、大丈夫？」

確かに、寝るときにも時間圧縮を行えば、睡眠時間を確保することはできるだろう。表で三時間しか経っていなくても、九時間は睡眠時間を確保できる。

ただし、時間操作の魔術は身体への負荷が大きいという欠点がある。

「そこは、きちんと計算されていますから大丈夫です。少なくとも数日程度の利用なら、身体への影響は最小限とのことですよ」

もちろん、この使用人講習に大物の講師が来ていることから上のほうは、根回しをきちんとしていたのだろう。凧にも空菜にも、そして東雲にも伝えられていな

かったのは、抜き打ちであることに意味があるからなのだろうか。

「シノ様、お食事前にシャワーを浴びられたほうがいいですね」

「……わたし、臭い？」

「いえ、シノ様の香りであれば、臭いなどありませんが、汗をかいていますよね？ 軽く流して、さっぱりとしたほうがいいと思います。今日は、男性の目もあるのですから」

「そうだね。そうだ、そうだ」

熱が引いたので、シャワーを浴びてもいいだろう。寝汗でシャツが肌に張り付いている。思っていたよりもずっと、汗をかいているらしい。言われるまで、気がつかなかった。熱いこの国では汗をかくのは日常茶飯事だが、空調の効いた屋内で、汗に濡れたままというのは身体に悪い。

「じゃあ、お言葉に甘えてシャワーしてくる。食事には間に合わせるから」

「分かりました。脱衣所にお着替えをお持ちしますね」

「うん、ありがとう」

この屋敷には三つのシャワールームがある。使用人用と東雲用、そして来客用で、どれもこの国では珍しい浴槽を備えている。

暁の帝国が日本から派生した国家であり、日本の文化を受け継いでいるという証であった。

普段、東雲は三十分は風呂に時間を使う。シャワーだけで済ませることが多い混沌界域では稀有な時間の使い方である。しかし、今日は体調不良や夕食前ということもあって、久しぶりにシャワーだけで済ませてしまおうという気持ちになった。頭からシャワーのお湯を被ると、寝起きでぼんやりとした頭が冴えてくる。何度も寝たり起きたりを繰り返したせいも、身体のほうが寝たままになっていたが、これもしゃっきりした。

寝ることと風呂に入ること。この二つは東雲の日々の楽しみで、たとえシャワーだけであっても、リフレッシュには十分だ。

湯水が肌から一日の汚れを洗い流していくと、あたかも生まれ変わったかのような気分になれる。

我ながら現金なことだと思う。

曇った鏡にシャワーをかける。輝きを取り戻した鏡に映るのは、見飽きるくらいに見慣れた女の身体だ。日焼け止めを念入りに使った肌は、赤道近くの混沌界域にあつて純白を維持している。肌の白さは北歐に暮らすクロエに近いと自負しているくらいだ。

何とか母を追い抜いたものの、姉妹の中では低いほうの身長のせいで実年齢よりも若く見られて侮られることも多いのが最近の悩みだ。昨年から一センチも背が伸びていないのが、絶望感を加速させる。自分の周囲にいる友人たちが軒並み高身長なせいで、並んで歩くのが嫌になってきた今日この頃である。容貌と眷獸勝負なら、同年代に負けない自信があると密かに思っていたりもする。事実、東雲は飛び切りの美少女と言っても過言ではない。目鼻立ちがはつきりとして整った顔に、虹を溶かし込んだ金色の髪は、唯一無二の輝きがある。そして、焰光の瞳と称される魔眼は、第四真祖の特性の一つであり、姉妹の中では東雲だけに発現している。東雲の密かな自慢の一つであった。

基本的に楽観的で吸血鬼としても、この歳で旧き世代に迫る完成度を誇る東雲だが、うら若き乙女として悩みもある。

母親譲りの低身長と童顔が最たるもので、胸の膨らみも気になるところだ。

自分の周囲には、背の高いグラマラスな同級生が多くいる。彼女たちと並んでいと、一気に女性としての自信がなくなってしまふのだ。

アジア人は幼く見えると言う人もいる。アジア人の要素が入っているから、尚の事子どもっぽく見えるのかもしれないが、同級生に比べて二、三歳年下に見られるのが腹立たしいし情けない。おまけに、同級生からはそれをネタにからかわれる始末だ。

まだ吸血もしたことはない。されたことはあるが、それはそれ。もっと大人になるには、やはり吸血が必要かもしれない。

「今日こそ、凧ちゃんから」

凧から血を吸う。

それは、東雲の一つの目標だった。

年末年始は、目標倒れに終わった。

理由はどうあれキスしたし、吸血されたりもした。それはそれでいい思い出だ。しかし、やはり東雲は吸血鬼だ。現第四真祖と前第四真祖の娘なのだ。未だに一度

も吸血経験がないというのは、遅れていると言われても仕方がない。聞けば妹たちは凧から頻繁に血を吸っているらしい。とりわけ、空菜は身体の都合もあり、吸血頻度がやたら高いと言う。このままでは、どんどん差を付けられてしまう。

吸血鬼との相性のいい凧の血を日常的に摂取していれば、能力も徐々に強化されていくに違いない。

零菜たちが混沌界域に来る前に、最低でも一度は血を吸わなければ、また機会を逃してしまう。

しかし、どう言い出そうか。

吸血は多分に性の分野に関わる行為だ。血を吸うのは相手の身体に口を付けるので、よほどの信頼関係がなければ大問題である。妹たちはいったいどうやって凧から血を吸っているのだろうか。それが、東雲には不思議でならなかった。



叩きのめされたというのが、凧の正直な感想だった。

使用人協会会長のリカルドは一流の軍人でもあり、一流の教師でもあるというのがよく分かる一日だった。

身体の節々が痛いし、頭もガンガンする。

受験前ですら、ここまで真剣に学習に取り組むことはなかった。

使用人としての技術や知識が、そこまで将来に関わるかと侮っていたが、確かに護衛任務で上流階級の人たちの傍に控えることもありえる。そこで、使用人の知識があれば、アドバンテージになると言われれば、真面目に取り組む気になるというものだ。

学校の勉強と違い、こちらは将来に直結しうる知識であるということも大きい。先々での知識や技術の用途が明確な分だけ、その必要性の認識も早く行われる。

「疲れた、これは疲れた」

明日も明後日も、この講習が続くとなるとゲンナリする。

できれば、事前に教えてもらいたかったものだ。心の準備ができていれば、もう少しでしたっただろうに。

睡眠時間は、あの時間圧縮魔術空間を使うことで確保できるらしい。ありがたい

が、民間に普及したらブラック企業も真っ青な勤務体系ができあがりそうだ。

使用人講習が終わったので、シャワーを浴びて私服に着替えた。激しい運動で大量の汗を流したので、それを洗い流すのは急務であった。紺色のシャツとチノパンというラフな服装に戻ったときの開放感といった言葉にし尽くせないものがある。堅苦しい服装は慣れないし、息苦しかったのだ。動きやすい服装ではあるが、決して運動しやすいものではなかった。

「あ、凧ちゃん」

何となく廊下を見て回っていると、曲がり角を曲がってきた東雲とぼったり出くわした。

ほのかに香るシャンプーの香りとしっとりとした髪艶を見ると、彼女が風呂上りなのだと分かる。

「東雲、体調悪いって聞いたけど、大丈夫か？」

「うん、大丈夫。熱ももうないし。風邪なんて初めてで焦ったよ」

少し頬が紅いのは、風呂上りだからだろう。

熱もないというのなら、安心だ。吸血鬼の回復力は伊達ではないということか。

羨ましい限りだ。風は度々倒れて入院騒ぎになったことがあるので、健康で病に強い身体には憧れる。

「風ちゃんのほうは大変だったね。なんか、ごめんね。せっかく、来てくれたのに」  
「東雲が謝ることじゃないだろう。それもこれも教官が裏で糸を引いてたのが悪いんだ。確かに、攻魔官の先進国だし勉強できることもあるとは思ってたけどさ」

「リカルドさんなんだって？ 講師に来たの」

「知ってる人？」

「こっちじゃ有名人だよ。わたしも晩餐会で何回か一緒したことあるよ。北のほうと戦争してたときから最前線で戦ってた人だからね。混沌界域だと、戦争の英雄でもあるの」

「へえ……そうなんだ」

詳しい来歴までは知らなかったが、優れた軍人というのは間違いなかったようだ。真祖を頂点に戴く混沌界域は、長らく北方に位置するアメリカ連合国と抗争を繰り広げていた。聖域条約にも加入していないアメリカ連合国は、夜の帝国にとって不倶戴天の敵でもある。現状、世の中の流れからもアメリカ連合国は取り残されて

いて、経済と軍事の両面で圧倒的に混沌界域が優勢ではある。

「戦争の英雄が執事って不思議なもんだけど」

「吸血鬼は長く生きてると多芸になるんじゃないかな。それに、あの人はもともとジャーダの側近もしてたみたいだし、その流れかも」

「東雲も将来はそういう道に進むかもな……いや、東雲は使う側かな」

「わたし？　　どうか。正直、先のことって全然分かんないよ。わたしがどうしたらいいのかなんて全然だよ、全然」

「そうか？」

「そうだよ。皇族って言っても、別に跡を継ぐわけじゃあないしね。眷獣を活かして軍属かなあ」

「東雲が軍属ってのも、あまり想像できないな」

東雲の眷獣がとてつもなく強力であるというのは知っている。凧の眷獣とは比較にならない圧倒的な力を持っている。クリスマスのテロ事件でも、その片鱗を見せたが、とても十代の吸血鬼が振るう力ではなかった。東雲は生まれついでのが天才児なのだ。

東雲がこのまま成長して年月を重ね、力を蓄えれば、真祖に匹敵する眷獣を操ることになるだろう。吸血鬼の力は時間を重ねれば重ねるほど強くなっていく。文字通り時間の問題なのである。ただ解き放つだけで天災とも思える破壊を撒き散らす。それが、東雲の眷獣たちだ。

東雲が経験を積んで軍属になれば、暁の帝国の軍事力は大幅に強化される。

暁の帝国以外の夜の帝国は、吸血鬼の眷獣に軍事力の要を任せているところが多い。科学大国である暁の帝国は、例外ではあるが、そのうち吸血鬼の軍属が増えていくのは目に見えている。

「あまり、軍ってのものな」

「変？」

「変じゃないけど」

と、凧は言い澀む。言葉を途切れさせた凧の顔を東雲は不思議そうに見上げた。

「変じゃないけど、何？」

「……まあ、あれだ。心配はするだろ。軍って、危ないだろ」

「ええ？」

ポカンとする東雲。

風呂の返答が意外過ぎて、一瞬啞然とした。

「心配、するの？」

「そりゃ、するだろ。しっちゃ、おかしいか？」

「え、いや、だってわたし強いし。まあ、経験はそんなにあるわけじゃないけどさ」  
「知ってる。けど、それとこれとは別問題だろ。誰だって、自分の家族が軍に行くって言ったたら、心配にもなる。百パー安全じゃないんだからさ」

「あ、うん、そう……」

東雲の眷獣なら軍でも最前線に立てる。具体的に戦場をイメージしているわけではないが、「常識的」にも強力な眷獣の活躍の場は戦場以外にないのだ。眷獣は意思を持つ兵器だ。萌葱の眷獣のような特殊能力でもない限り、戦うこと以外に使う道がない。軍というのは吸血鬼の就職先としては最適解である。生まれ持った才能を一番活かせる場所が軍というのも、どうかと思うが、常に戦争の危険に曝される国ではこれが重宝される。平和を享受して長い国だと軍の存在意義そのものが否定され、軍縮の流れになるが、暁の帝国を初め夜の帝国は未だに種族問題から紛争の

種を抱えている。治安維持組織の軍事力は欠かせない。

それに、吸血鬼は軍縮の影響を受けにくい。

兵器のように廃棄することができないし、軍属から民間に移っても有事の際に呼び戻せばすぐに戦力に数えられる。だからこそ、吸血鬼は夜の帝国の軍事力の要として、科学が発達した現代でもその中枢に位置し続けている。

ただ、やはり軍に入るとなると流血を連想してしまうものだ。

他者にとって東雲の力は軍事力そのものだが、凧にとって東雲は家族だ。血の臭いがするところとは無縁でいて欲しいと思うのは、当たり前前の感覚ではないか。

東雲は視線をそらして、右側の髪を指に絡ませる。何か言いたそうにしながらも、言葉を見つけれないでいる。

会話が途切れてしまい、次の話の端緒を見つけれないという何とも居心地の悪い空気が流れ始めたときに、アカネと空菜が廊下の奥からやって来た。

「シノ様、凧様、お夕飯の支度ができたのでお迎えに上がりました」

「あ、うん、ありがとね、アカネ」

「……お邪魔でしたか？」

「ううん、別に。凧ちゃん、行こ」

凧の腕を叩いて、東雲は足早にアカネのところへ歩いていく。

凧もそれに従った。

一階の食堂から、いい香りが漂ってくる。

「凧ちゃんは、高柳さん覚えてる？」

「ん？ ああ、昔、出入りしてた料理人さん」

凧が思い出したのは、人のいい妙齢の女性料理人だ。だいたい十年くらい前になるか。まだ東雲が暁の帝国にいて、凧も暁家と一緒に暮らしていた頃だ。その頃からやはり親たちは忙しく、小学校に上がったばかりの子どもたちの世話を手伝ってくれる人が必要だった。その時に夕ご飯の支度をしてくれていたのが高柳であった。世話になったのは、凡そ二年くらいだろうか。子どもが大きくなったことと社会情勢が落ち着いたことで、親たちも時間にゆとりができたので、使用人の利用を徐々に減らしていった。

凧は高柳の顔をぼんやりとしか思い出せない。

「もしかして、今いるの？」

「うん」

と、東雲は頷いた。

「うちでご飯を作ってもらってる」

「はあー、知らなかった。こっちにいたんだ」

「ふふ、そうでしょ。高柳さん、評判いいんだよ。ジャーダも引き抜こうとするくらいだしね」

「美味しかったもんな、実際」

顔はおぼろげでも料理は思い出せる。何と云うことのない家庭料理でも、とても丁寧に作っていたのが印象的だった。調理しているところを覗き込んだこともある。あの当時は何をしているのかいまいち分からなかったが、今となって振り返れば、味噌汁を作るのに昆布から出汁を取る等一手間をかけていた。夕食を自分で用意するようになって、一手間の大変さと大切さを教えられたものだ。

そう思えば、廊下に漂う夕食の匂いすら懐かしく感じられる。

久しぶりに味わう高柳の夕食を楽しみにして、凧は食堂に向かうのだった。

夕食の後、凧は一端自室に戻った。

身体が異様に重いのは、暁の帝国から直行便で混沌界域にやって来て、ろくに休憩も取らないままに九時間も勉強と鍛錬を叩き込まれたからだろう。

強烈な眠気を凧は感じている。ベッドに寝転んだら、そのまま落ちてしまいそうだ。気力も体力も使い果たした。そもそも、慣れない海外で緊張していたところで、突然の抜き打ち使用人講習だ。内容も濃密で、思い返すと頭がおかしくなりそうだ。

「ヤバイ、疲れた」

疲れたという言葉だけが頭の中を行き交っている。

シャワーと食事を終えたので、必要最低限の整理活動は終了している。後は睡眠を取るだけだ。明日から使用人講習の二日目が始まる。地下シェルターでたっぷり

睡眠を取らせてもらえることになっていたので、寝る前に移動しなければならぬのだが、それすら面倒になってきた。

ベッドの上に胡坐をかいて座り込む。

このまま倒れこみたいという思いがむくむくと鎌首を挙げてくる。このままでは、寝落ちしてしまうと思った凧はとりあえず音楽を聴こうとスマホを取り出した。

「凧さん、今いいですか？」

「何、空菜？ いいぞ」

「はい、お邪魔します」

ドアが開くくぐもった音がして、空菜が入ってきた。

学校指定のジャージを着ているのは、一番楽な格好だからだろう。家でも寝る前にはジャージを着ている。

「お疲れですか？」

「それなりに。空菜もだろ？」

「今日は大変でしたね。何と言うか、いろいろと」

「そうだな」

自宅からここまで凧とほぼ同じスケジュールをこなした空菜だ。肉体的に凧より強くても、疲労の度合いは大して変わりないだろう。彼女の持つ獣人特性がどのくらい疲労に作用するかといった程度だろう。

「今日の夕ご飯は美味しかったですね。あれを作ってるのが、高柳さん、でしたか。凧さんとも旧知の間柄とか」

「昔、うちに来てたからな。ここにいるとは思ってなかったけど」

高柳には先ほど会って、挨拶だけした。

十年ぶりの再会に、何か思うところがあつたかというところではない。そこまで深い関係ではないからだ。ただ、あちらは凧の成長に驚いていた。小学校に上がったくらいの少年が、今は高校生になる。子どもの十年は、とても大きいのだ。まして、当時の凧は入退院を繰り返す体調だったから、高柳としては無事に大きくなったことを喜んだのだ。

「空菜は、身体のほうは大丈夫か？」

「ええ、まあ。筋肉痛まではいかないくらいかなと。適切な処置をすれば、問題なく明日を迎えられます」

空菜は、肩を回して健在さをアピールする。

疲労への強さもさることながら、疲労回復能力も高い。獣人特性を持つ吸血鬼の強みだ。肉体的強度も回復能力も人間とは比較にならないのだ。回復能力の高さは、そのまま肉体の発展性の高さに繋がる。筋肉は軽度の損傷と回復によって成長していくのだとすれば、回復速度は筋肉の成長速度に直結する。

「で、空菜はあれか。血を吸いに来たのか？」

「話が早くて助かります。凧さんもお疲れですし、寝てたらどうしようかと思ってました」

「寝てたらどうするつもりだったんだよ」

「起こすのも悪いので、そのまま血をいただいていたかと」

何と言うことのないように空菜は言う。

実際、空菜は隙を見つければ吸血している。凧が昼寝をしている時にそっと首に牙を立てるなど、日常的に行っているのだ。空菜からすれば、隙を見せたほうが悪いという自慢な理屈である。もちろん、凧がそれを知っていながら拒否しないのが一番の原因ではある。

「時間は、いつも通りか」

空菜の吸血は主に朝一番と夜の九時前後だ。今、掛け時計を見れば九時を回ったところ、時間だけを見ればいつも通りだ。

頷いた空菜は、瞬きの後に瞳を真紅に染め上げて、

「そうですね。まあ、時差を別にすればですけど。正直、わたし、今けっこう来ます」

「何が？」

「吸血衝動。だって、前回から大分時間が経ってるんですから。こうして面と向かってしゃべってるだけで、喉が渴いて、しまっ……ッ」

パチパチ、と空菜の魔力が弾けている。

空菜が風の血を吸ったのは、今朝が最後だ。

「あ……そうか。地下」

地下シェルターを使った使用人講習。あれは、外の時間で三時間のところを九時間にも圧縮した。朝晩二回の吸血で回していた空菜の吸血サイクルが、それで大きく乱れたのだ。おまけに、使用人講習では模擬戦闘が度々行われ眷獣まで使っ

た。体力と魔力を使ったので、それだけ吸血衝動が強く喚起されている。

ただの吸血鬼ならばともかく、空菜は定期的な吸血が生命活動に影響するよう設計されている。不死の呪いが徐々にその制約を壊しているが、まだ完全ではなく、凧からの吸血は趣味であると共に必須の生理活動だ。

必要なのは平均して一日に二回。体力や魔力を多く消費することがあると、希に三回ほどになる。ほかにも吸血鬼の本能に根付く衝動なので月齢等の影響もあるらしいし、女性なので生理も関わりがあるのだとか。この辺りは本人でないと何ともいえないところで、平日に吸血衝動が現れると、休み時間に凧が保健室に呼び出されることになるのだ。

「もしかして、ずっと我慢してた？」

「うー」

瞳がギラギラしている。言語能力を喪失し、獣のようになっていて———という大袈裟だが、相当な飢餓状態だ。何日も前から狩りに失敗し続けたサバンのライオンのようである。

「あ、もう無理」

ふっと魂が抜けたような表情を浮かべた空菜。彼女の中で何かが切れた。次の瞬間には空菜は凧に抱きついていた。

「待て待てッ。準備するから、服に血がつくかもしれないから」

「ダメ。無理。待て、ない——んぐ」

「イッ……ッ」

ずきり、とした痛みが首に走る。

空菜の牙が凧の首に食い込んだのだ。そのまま体重をかけて空菜は凧を押し倒す。食い破られた皮膚から血が溢れて、空菜の口内に吸い込まれていく。獲物を捕らえた蠍螂のように、凧の身体を押さえつけて体重をかけて拘束し、深く牙を押し込んでいく。

噛まれ慣れている凧は痛みをすぐに忘れる。血が抜けて行く感覚を快いと思ってしまうのは、吸血鬼の特性の一つだ。

「ふ、ん、ふう……んん」

参った。

空菜の香りがする。

柔らかい空菜の身体が凧の身体に密着しているし、耳元では空菜が血を味わう音がする。

(……色不異空、空不異色、色即是空、空即是色……)

凧は可能な限り空菜を意識しないように努める。香りと触感と音で攻めてくる空菜に反応しないようにするのは至難の技だ。吸血自体が快楽に直結するのだから、これはある種の拷問である。念仏を唱えつつ、流れ作業として空の心で対応しなければ間違いが起きてしまうかもしれない。凧がもしも空菜に迫ったら、空菜は間違はなく凧を拒絶しない。彼女のホムンクルスとしての認識が凧の要求を全肯定するはずだからだ。だからこそ、凧は自制心を強く持ち続けなければならないのだ。

「……もういいだろ」

「待って、まだ、ダメです。もう少し、もう少しだけ、は、あ……ん、ふう……」  
空菜は凧の首に口を当てる。流れる血を啜り、味わい、魔力を身体に取り込んでいく。飢餓状態からご馳走を味わったために、いつも以上に多幸感が溢れてくる。一口二口ではとても足りない。空菜は血の雫を舌の上で転がすようにして味を確かめてから喉に送る。ゆっくりと、しつかりと、一滴も零さないとはかりに血を啜る。

牙を口から離してから、噛み痕から滲んだ血もきちんと舐め取った。

「落ち着いた？」

「はい……ふう、何とか。助かりました」

上気した頬で息を荒げている姿は何とも扇情的だ。直視するのは、目に毒だ。空菜はティッシュに消毒液を含ませて凧の首に押し当ててみる。

「傷、もう治りかけてますね」

血が付着したティッシュを握り潰し、傷跡を見た空菜が呟く。

「そうか？」

「最初の頃に比べて、ずいぶんと治りが早くなっていますね」

「やっぱ、そうなのか」

凧の身体が吸血鬼に近付いているというのは、クリスマス頃から言われていることだ。もともと、その傾向はあったが、東雲と那月により古城たちから施された最初の封印が解けたためだ。

数年もすれば、凧は吸血鬼に非常に近い存在になるかもしれない。それは凧にとって都合のいいことかもしれない。眷獣を制限なく使えるのなら、活動の幅が

広がる。

ふと、空菜がドアに目を向けた。それから、唐突に眷獣の腕が伸びる。人工眷獣の腕が器用にドアを開けた。

開いたドアの向こうから、東雲がたたらを踏んで室内に入ってきた。

「あ、う、わぁッ」

バランスを崩した東雲が膝を突く。

「東雲？ 何してんだ？」

「あ、えーと……その、大丈夫かなって……」

膝立ちのまま東雲はアタフタと答える。

「シノさん、ずっと見てましたよね」

「えあッ!? あ、何をかな？」

「わたしの吸血。そこで、ずっと最初から」

「え、う……気付いてたの？」

「まあ、鼻が利くので」

東雲の特徴的な能力の一つだ。といっても、別に珍しい力ではなく獣人の多くが

人間以上の嗅覚を有する。吸血鬼も人間よりもは敏感な嗅覚を有するが、空菜は嗅覚は獣人よりなのだった。

東雲は居心地悪そうにもじもじしている。焰光の瞳は紅を帯びていて、吸血衝動の兆候が見られた。

「シノさん、ちょっと」

と、東雲の下に歩いていった空菜は、東雲を連れて廊下に出て行った。

「空菜ちゃん、何かな？」

「シノさんも凧さんの血を吸いに来たんですか？」

ストレートに空菜は東雲に尋ねた。

直球で来た質問に東雲は心臓が止まりそうになった。物怖じしないで核心を突いてくる質問は、心臓に悪い。

「え……あ、いや、そういうわけじゃなくて、たまたま通りかかったただけだよ、ほん」と

これは事実だ。

たまたま通りかかった。そこで、空菜が風の部屋に入っていくのを見かけたのだ。そして、漏れ聞こえる会話から部屋の中で吸血が行われると知り、こっそり中を覗いてしまった。魔術を駆使すれば、薄い扉一枚透視するのに手間は掛からないのだ。姿隠しもきちんとしていたが、臭いではばれているとは思わなかった。

「ご、ごめんね」

「いえ、別に謝らなくてもいいんですけど」

「え？ いいの？」

「大したことではないですし。学校とかだと、ちょっと困りますけどシノさんなら問題にはならないですし」

「あ、そうなの？」

吸血を人に覗かれるのは、恥ずかしいことではないのか。人間で言えばキスに相当するであろう親愛表現なのだ。

「わたしにとって吸血は水分補給みたいなものですから」

と、空菜は言う。

「そっか、何ていうか、価値観が違うんだね」

必要に迫られて吸血している空菜と親愛表現として吸血を見ている東雲とは、同じ行為でも意味合いが違うのだ。

吸血自体が親愛のほか支配や上書き、魔力補給など様々な意味を持っている。そこにどのような意味を見出すのかは個人差がある。年齢や性別、育ってきた環境で吸血に対する価値観は大きく変わるのだ。概ね平和な時代に生まれ育った世代は親愛表現と受け取るし、戦乱の時代に育った世代は魔力補給や支配をイメージする傾向があるという。空菜はまた別で、身体の都合が大きいようだ。

「もちろん、誰彼構わずじゃないですよ。凧さんだからというのもあります。血を吸うのは、特に今の時間帯がオススメですよ」

「時間で変わるの？」

「はい、全然違いますよ。特に匂いとか舌触りは、時間帯とか運動量で変わります。水分をどれだけ失っているかで舌触りは変わりますし、シャワーの後なのか、運動の後なのかで匂いも変わります。汗の塩辛さの度合いも違います。凧さんの血はいつでもいいんですけど、やっぱり風味がいいときに吸うのが一番味わい深く楽しめるのです。そこで個人的にオススメするのがお風呂上り三時間くらいです。シャツ

の柔軟剤の匂いと凧さんの匂いのバランスが最高にマッチして、いい具合になるんですよ」

「……なんか、急に饒舌になったね。あと、あなたが匂いフェチなのは分かった」  
空菜の吸血に対する思わぬ拘りを知り、圧倒される。

東雲もマニアックな性癖を自覚しているが、それはあくまでも妄想の域を出ていない。実際に行動するとなるとハードルが高いのだ。空菜は東雲の想像を遥かに上回るフェティシズムの持ち主だったようだ。好きな物を語るときに無駄に饒舌になるオタクを連想してしまった。

「んん、まあ、凧さんの血を吸って元気になったので、ちょっと舞い上がっていましたが、すみません。別にシノさんに見られていたからってわけでもないですよ」

「そういうの、いいから」

「吸血には性癖が出るって本に書いてあったので、勘違いされると困るなと思って」

「そうなんだ。吸血の本……?」

『『今更人に聞けない!! 旧き世代に聞く、楽しい吸血のやり方』という本です。後で貸しましょうか?』

「マジで？ 借りていい？」

「いいですよ。持ってきてるので、今からでもお貸しします」

吸血は吸血鬼にとって重要な愛情表現の一つだ。お手軽に愛情を示すことができ、やはりマンネリ化しやすい一面もある。よって、恋愛技術の一つとして吸血を捉え、若い吸血鬼をターゲットにした吸血ハウツー本が夜の帝国には数多く出版されていて、空葉は数冊、そういった本を購入していた。

もちろん、その手の話題はネットにもたくさん転がっているし、混沌界域にも多くある。東雲も手に取ったことがないわけではないが、じつくりと目を通したことはなかった。

「で、シノさんは吸血しなくていいんです？」

「ん？」

「凧さんから、血、吸わなくてもいいんですか？ 興味、あるんですよね？」

「……ん、いや、それは、でも……なんかこう、ムードとかあるし」

「クリスマス時には、シノさんから凧さんに迫ったようですけど……」

「あの時は、勢いがあったから、それに大義名分も」

東雲が凧に口移しで自分の血を与えたのは、今にして思えばいぶんと大胆な行動だった。その背景には、テロリズムに遭遇したことによって気分が高揚してしまったことや那月の命令という大義名分があったことがある。とどのつまりはその場の勢いだ。

無論、うら若き吸血鬼なのだから、吸血はしたい。凧から血を吸うと、数時間前に決心したばかりだ。

「今、血、もらっていいのかな？ 大丈夫？」

「凧さんなら大丈夫かと。わたしが吸った分は、もう回復してるころですし」と、空菜は答える。

凧の回復力が向上しているので、一日で吸える血の量も格段に増えているのだ。吸血鬼化が進行すれば、そのうち飲み放題になるかもしれない。

「よし、分かった。やる。わたしはやる」

東雲は決意を新たにす。

いつまでも妹たちに先を越されたままにいるわけにはいかない。

何よりも凧の血は自分にこそ相応しい。原初の力を宿した凧の血は、第四真祖の

血を濃厚に受け継ぐ東雲にとって自分の血も同然だ———そういう感覚を、東雲はずっと感じている。直接顔を合わせて、確信した。風の力と自分の力は非常に相性がいい。きつと———いや、間違はなく風の血を吸えば、東雲の力はかなり強化されるはずだ。



「吸血させてくださいッ！」

風の目の前で東雲が頭を下げている。

見事な土下座であった。

廊下での空菜との話し合いを終えて部屋に戻ってきた東雲は、そのまま風の前に向かって来た。スリッパを脱いで、ベッドに上がって来て、風が何事かと思ったところで額を布団にこすりつけるくらいに頭を下げてきた。鎌倉武士のような清清しい土下座だった。

「吸血ッ、させてくださいッ！」

「東雲、急に、どうした？」

その勢いに押されて、凧は困惑気味に尋ねた。

「凧ちゃん、お願い。もう、この勢いでやらせて」

「やらせてって、説明を」

「理由なんてないです。強いて言ううと吸血をしてみたいだけ。だって、みんなやってるし。わたし、一応上から三番目だよ。なのに、未経験。それに凧ちゃんの血、吸いたい。空菜ちゃんがいいって言った」

支離滅裂にも聞こえる東雲の返答は、凧をますます困惑させる。しかし、一応言いたいことは分かった。まず、もともと凧の血に関心があった。凧が吸血鬼の吸血衝動を喚起する体質なのは周知の事実である。おかしなことではない。そして、妹たちが凧の血をすでに吸っている事実がある。空菜が血を吸っているところは先ほど東雲に見られたし、零菜や麻夜も凧の血を吸っている。皆、東雲にとっては妹だ。そして、決め手が空菜がいいと言ったところで決心したわけだ。何となく、流れは分かった。

「空菜は勝手に……」

「空菜ちゃんは、相談すればいいって言うと思うくらいしか言ってない」

「そう」

その空菜は、成り行きを見守るでもなく自室に帰ったらしい。後で地下シェルターに行くことになるので、何を話したのか聞いてみることにすると、東雲の対応だ。

「まあ、確かに、東雲が吸いたって言うのなら、吸っていいけど」

「ほんと？ そんな簡単に決めていいの？」

「うん、まあ、いいんじゃない？」

「わたしの一世一代の土下座だったのに」

「別に土下座なんてしなくても……」

勢い勇んで突撃した東雲ではあるが、風は血を吸われることに慣れ過ぎていた。東雲にとっては重大な吸血も、風にとっては日常的に繰り返す活動の一つでしかないのだ。これが赤の他人なら、さすがに許可しないが、東雲なら家族も同然である。「別にいいよ」の一言で片付く。これもまた、吸血鬼とその他の価値観の違いであろうか。

「そう、そうなんだ。え、へへ……じゃあ、ええと、もらうね」

生唾を飲んだ東雲。

動悸が激しく、頭の中に心臓があるみたいだ。喉が渴いて焼けるように痛い。凧の血を吸えると思った瞬間に、何か切り替わった気がした。

「あ、おい、待って」

凧が急に顔を歪める。

「え？ 何？ 何か変なことした？」

「そりゃ、いきなり魔眼はナシだろ。そんなことしなくても、逃げないって」

「え、あ、ごめん」

東雲は無意識のうちに魅了の魔眼を凧に向けてしまった。吸血鬼の基本技能の一つだが、この歳で使えるのは珍しい。姉妹でも東雲の他には零菜と空菜しかきちんと発現できていない。この力を、東雲は本能的に使ってしまったのだ。

かつては、魅了で相手を骨抜きにした後で血を吸った時代もあったらしい。吸血対象が性愛の対象であると同時に捕食対象だった時代だ。

凧は東雲の焰光の瞳が煌めいた時に咄嗟にこれをレジストしたのだ。今日の鍛錬

がさっそく活きた場面だった。

「あ、そうだ、もう一つ」

「何、かな？」

「俺の呼び方、そろそろ変えてくれない？」

「何か変？」

「変って言うか、ちゃん付けはさすがにね」

「え……可愛いのに」

「可愛い、か？　ともかく、ちゃん付けは恥ずかしいから今後はダメ。前から言おうと思ってたんだけど、この機会にね」

「ダメ？」

「血を吸わないなら」

「わ、分かった」

吸血衝動のスイッチが完全にに入った状況で待ったをかけられるのは、想像以上に辛かった。凧がこのタイミングを見越していたとすると相当悪辣だと思えるくらいだ。空菜が凧に飛びかかったのも分かる。あそこまでの衝動ではないにしても、頭

がぼうつとするし、凧の首から目が離せなくなる。今まで経験したことがないくらいに、「欲しい」という感情が燃え上がっている。どうしても我慢できない欲求がこの世にあることを東雲は初めて実感した。

吸血は血を吸うほうが優位な行動だと思っていたが、そうとも言い切れないようだ。少なくとも今は、凧にイニシアチブを握られている。血を吸うのではなく、血を吸わせてもらおうという立場だからだ。

「凧、君の言うとおりにする」

慣れ親しんだ呼び方を変えるのは、抵抗がある。言い慣れないので言葉が詰まってしまった。

「じゃ、じゃあ、もういいかな？」

「うん」

「それじゃ、するね」

東雲が凧に身体を寄せる。空菜よりも小さな身体だ。これが、背伸びをするように凧に枝垂れかかって、首を噛んだ。

鋭い犬歯が凧の皮膚に刺さる。

「イツ……」

針で刺されるような痛みが走って風が顔を歪める。

「あッ、ごめん、痛かった？」

東雲が驚いて口を離した。

「いや、大丈夫。初めてだし、仕方ないよ」

「う、うん、ごめん」

恥ずかしくなって東雲は視線を伏せる。

要するに今のは、噛み方が下手だったということだ。上手い吸血鬼なら痛みなく

吸血できるという。

「あ、の、どうしよう……」

東雲が不安感に苛まれる。自分が噛み付くことで風が痛みが生じるなら、噛めな  
いと思ってしまう。相手を傷付けてしまうかもしれないということが恐怖に繋が  
るのだ。直前までであった全能感がまったくなくなって、一気に自信がなくなっ  
てしまった。

「大丈夫だって、ゆっくりとやればいいから」

「……う、うん」

東雲は深呼吸をして動揺を鎮める。

それから、風の肩に顎を乗せるようにして噛み付く場所を探った。今までにないくらい明確に風の匂いを感じる。体温や息づかいもはっきりと感じ取れる。身体の奥深くから、心地いい緊張感が膨らんできて、全身が振れてしまいそうだった。

「ん……あ、ん」

そして、東雲はついに風の首に牙を突き立てた。二つの牙が皮下に食い込んで血を流させる。血の吸い方は、すぐに分かった。息をするのに、いちいち考える必要がないのと同じくらい当たり前の感覚だ。

傷口から滲む血が東雲の口に入る。舌の上でビリリと弾けた。まさしく雷光のように、それは来た。食べ物とも飲み物とも違う第三の味。

脳がそれを血の味だと理解したとき、東雲の中で吸血鬼の本能が完全に開花した。

「ん、ふ、う……ん」

じわり、と広がる苦味は鉄分なのだろうか。

いずれにしても不快ではない。

血もそこから得られる魔力もすべてが、身体に浸潤していく感じがする。頭が揺さぶられて、思考がクリアになっていくようでいて、同時に熱病に浮かされたように頭の回転が鈍っているようにも感じられた。ふわふわして気持ちいい。

ぐっと思わず牙を押し込んで、さらに出血を強いてしまう。

腕を風の背に回して、身体がずれないようにしっかりと固定した。

血を舐めるように味わっていると、身体が熱くなってどんどん次が欲しくなってくる。頭がおかしくなっている。血の味しか分からないし、それ以外は必要ないと思えてしまう。それくらいに、これは強烈な快感を伴って東雲を翻弄している。

どれくらい、風に噛み付いていたろうか。一分か、二分か、もっと長くかもしれない。東雲は唇を離して、風を解放した。

「ふぁー、これ、すごい……あ、何かダメ、嵌るかもお」

うっとりとした東雲は、唇についた血を舐めてぶるぶると身体を震わせた。全身が弛緩しているのに身体の奥深くは緊張しているという奇妙な状態だった。快楽中枢が吹っ飛んだ感じだ。

「風、君。ありがとう……その、もしよければ、また吸わせて」

「いいよ。減るもんじゃないし」

血は放っておいても勝手に製造される。コストもない。可愛い女の子がそれで喜ぶのなら、いくらでも献血する。

「んふふー」

「何、急に」

「別に、なんでもないよ」

急に笑った東雲を怪訝に思う凧。東雲はというと機嫌よくベッドを降りた。東雲から感じる魔力が見るからに増大している。魔力を押しえ込んでいた枷を取り除いたかのようにだった。

「力が漲ってくる。吸血って、すごい」

東雲は自分の手の平を見つめた。

体内に渦巻く魔力が体表面から滲み出ている。

凧の体質もあるし、東雲との相性もあるのだろう。東雲の妄想のとおり、凧の血は東雲の身体に適していたらしい。

凧は時計を見る。

空菜と東雲に血を提供している間に、夜が更けた。いよいよ眠らなければ明日が持たない。

「東雲、俺、地下行くから」

「あ、うん、もうそんな時間か」

少し残念そうな顔をする東雲。

これから凧は空菜と一緒に地下に下りて、たっぷり休養してから二日目の使用人講習に臨まなければならぬ。これ以上の夜更かしは禁物だ。

「おやすみ、凧君」

「おやすみ、東雲」

最後にもう一回、一口血を吸いたいと思ったが東雲は我慢する。凧と東雲は一緒に部屋を出て、それからそれぞれの寝室に向かっていった。

## 第五部 八話

壁にかけたアナログ時計の音が、やけにはっきりと聞こえる。

アンティークショップで見つけてきた古時計は、三十年くらい前に製造された物らしい。店主の手で綺麗に直されたそれが妙に気に入って、内装とも合うと思ったので父にせがんで十四の誕生日に買ってもらったものだ。

年月を経て黒ずんだオークのフレームはそれだけで味わいがある。昔は真っ白だった文字盤は陽光で黄ばんでしまったが、それも気に入っている。

延々と飽きることなくずっとオークの時計は時を刻む。

いつもは気にならない———それどころか心を落ち着かせてくれる時計の音が、今は異様に鬱陶しく思える。心と身体が落ち着かず、電気を消しても眠れないのだ。

冷たい月光が差し込む部屋は青白く染まっている。月光の奥に浮かぶ掛け時計は、午前零時半を示している。

真夏の混沌領域はうだるような暑さで外は夜間でも汗ばむ気温だ。寝るのに冷房

を入れるのは、常識だ。今も冷房は室内の温度は快適な二十三度前後に維持して  
れている。だというのに、東雲は身体の火照りを感じていた。身体は眠りを欲し  
ていない。頭も起きてしまっている。夜目が利く吸血鬼にとって明るい月夜は日中と  
大差なく物が見えるのだが、今日はいつも以上に目が冴えている気がしている。

じっとしていられない。

今すぐにでも激しい運動がしたい。サッカーでも野球でもバスケットボールでも  
いいから全力で身体を動かせる何かをしたい。ベッドの上で何時来るかも分からな  
い眠気を待ち続けるのは苦痛で仕方がない。

「う——ん」

小さく呻く。

愛用の抱き枕を抱きしめて、顔を埋めて睡魔を呼ぶ。もう何度もそうしてきた  
が、一向にやって来る気配がない。

「寝れない」

困ったことになった。明日、何かあるわけでもないが、このままだと仮に睡魔を  
呼び込めても昼過ぎまで寝ているパターンになってしまう。

目を瞑って、意識を暗闇に捧げる。しかし、心臓の音が消えない。時計の音が耳が拾う。感覚が研ぎ澄まされて、明瞭に魔力が溢れてくる。

東雲の身体は、今、溢れんばかりの情動に突き動かされている。

原因は明白だった。

「凧、くうん……んう」

抱き枕に押し付けた唇でくぐもった声を漏らす。

初めての吸血——それがもたらした副作用とでもいうのだろうか。

身体の内から暖まってしまっている。

脳髓から火が出て、全身の血と神経が沸騰しているかのようだ。

凧の血の味を思い出す。舌の上に乗せて、鉄を思わせる苦味が命の熱と共に身体に行き渡る感覚に打ち震えた瞬間は、東雲にとってまったく新しい経験だった。

(もっと欲しい)

さすがに、そこまでは言えなかった。

一度だけでいいから、なんてことも言えない。

本音を言えば、何度だって血を吸いたい。それこそ、空菜のように理由をつけて、

機会を見つけて、その都度噛み付きたい。それくらい東雲は一度の吸血で風の血に溺れてしまいそうになっている。

東雲の身体は今すぐにでも風の下に行つて吸血したいと訴えている。

東雲の瞳はまだ紅のまま。極光を湛えた焰光の瞳は、ルビーのような深紅になる。人ならざる魔性の瞳のまま、元に戻らないでいる。これは吸血衝動を抱いている証で、年頃の乙女としては、とても異性には見せられない状態である。

溢れんばかりの情動は、別の何かにぶつけなければ収まりがつかない。今すぐにも五十メートル走を十本ばかりぶっ通してしたいくらいだが地下のシエルターは、風と空菜が使っているので利用できない。

まさか、ここまでの変化があるとは思わなかった。

空菜みたいに血に慣れていればこうはならないのだろうが、東雲はそうではなかった。

初体験を済ませたばかり。その余韻が未だに残っている。

吸血鬼にとって特別な風の血は、第四真祖の血縁者には特に強く作用するらしい。その誕生の経緯からして、身体の相性はいいと踏んでいたが、ここまで満たさ

れるとは思わなかった。それは、あたかもジグソーパズルの足りなかったピースをやっとのことで見つけたような達成感と充足感であった。

凧に血を与え、凧の血を求め。血の循環が東雲と凧を結びつける。凧の魔力は東雲の先天的な「不足分」を補うし、東雲の血も凧の先天的な「不足分」を補っている。

凧の血を吸って、脳が蕩けるかと思うくらいの多幸感があった。じんわりと身体の芯から暖まっていく感覚は、湯船に肩まで浸かったときに近い安堵の感情を湧き上がらせた。

「あつつい……」

じっとりと汗をかく。

冷房が利いているはずなのに、体温が上がっているような気がする。風邪はすっかりよくなった。ならば、やはり吸血の所為だろう。

血を吸った後は気分が昂ぶる。

程度は個人差があるが、吸血鬼に共通する性質ではある。寝る前に吸血すると寝つきが悪くなると聞いたこともあるが、本当だったということか。

「んーッ」

東雲はベッドの上でじっとしていることができなかった。

吸血できないのなら、走り回りたい。それも無理ならどうするか。テレビをつけて、深夜番組を見るかスマホやパソコンでネットサーフィンをするか。

あれこれ考えた結果、東雲は一先ずは水分補給に行こうと結論した。

汗をかいたからか喉が渴いた。

真っ暗な屋敷の廊下を東雲は早足で歩く。足元はしっかりしている。僅かな光があれば、鮮明に暗闇を見通せるのが吸血鬼の目である。人間のそれとは比較にならない視力を有するのである。危なげなく階段を下りて、キッチンに辿り着く。

当然ながら誰もいない。真っ暗だったので電気をつけた。蛍光灯の明かりで目が眩み、涙が滲んだ。

東雲はコップ一杯のミネラルウォーターを飲んだ。

水で身体が冷やされたからか、少し落ち着いた。

「何かないかなー」

小腹が空いて冷蔵庫に手を伸ばした時、あえて思っていたことを声に出す。こう

して、有り余った情動を発散させる。

いつもは眠っているの、空腹を意識しない時間帯だが、よくよく考えれば最後に腹に入れてから六時間以上が経過している。これは、口寂しくなるのも無理はないではないか。

「んーふふーん、ふんふんふーん」

東雲は鼻歌を交えて冷蔵庫を漁る。

屋敷は大きいものの、東雲を含めて家人は僅かだ。冷蔵庫に入っている食料も、凧と空菜を迎えるために買い溜めした分を含めても多くはないし、どれも調理して使うのが前提の食材だ。

「ジャーキーあったあつた」

冷蔵庫の奥に押し込まれていたタッパーには、エレファントタートルと呼ばれる魔獣の肉を加工したジャーキーが入っている。大型魔獣の干し肉はこの国の伝統料理の一つである。東雲が手に取ったタートルジャーキーは、暁の帝国で一般的なビーフジャーキーよりもずっと噛み応えがあり、濃い塩味が特徴だ。

「あ、と、は……これにしようかな」

弾む声でガサゴソとスチールラックの上に置かれたビニール袋を漁る。

取り出したのは即席麺の袋だった。

実家に帰ったときに購入した即席醤油ラーメンの残りだ。

ラーメンは今や世界に広がった文化だ。混沌界域にも多くの店があって、それぞれの地域や文化に合わせた味付けがなされている。

とはいえ、東雲の舌は暁の帝国で築いた味覚が基準になっている。超濃厚のどろどろとした魔獣の脂たっぷりのラーメンは胃もたれしそうで口にできない。さっぱりした醤油ラーメンが一番だと思うし、特に即席麺が一番のお気に入りだった。

いつも丁寧な味付けの食事をしている東雲にとっては、即席麺の雑なしよっぱさが口寂しいときに重宝するのだ。

吸血衝動を食欲に変化させ、東雲は電気ケトルで沸かしたお湯を即席麺に注ぎ、二分三十秒待って食べ始める。

「ふう……うまい」

本来は三分待つところを、三十秒早く食べ始めたことで麺に硬さが残っている。東雲が一番好きなタイミングである。お湯も少なめにして味を濃くしている。ここ

までしたら、シメに白米を入れたいところだが、残念ながらキッチンにはパンしかない。

そもそも、混沌世界の主食はトウモロコシである。市場でも米はあまり見かけないし、あったとしても、おいしくない。

東雲は黙々とラーメンを食べて、タートルジャーキーを齧る。

不健康極まりない食べ方だが、だからこそおいしさを感じてしまう。夜中ということもあるのだろう。悪いと分かっている、だからこそ惹かれる悪魔的な魅力が深夜のラーメンにはあるのだ。

ラーメンと用意したジャーキーをすべて食べ終えてから、東雲はふと我に返る。「やっちゃった」

どんぶりの中は空っぽだ。汁まで綺麗に飲み干した。すべて胃に送り込んでから、激しく後悔した。

「明日、走らなきゃ」

今食べた分は、そのまま体重へと移動するだろう。

低身長がコンプレックスの東雲だ。横幅の変化は、高身長の人よりも如実に見た

目に影響する。

人生初の吸血をしたその日に、興奮した勢いのまま極悪な食事をしてしまうとは。後悔先に立たずとはいうものの、やってしまった感が強い。

皿洗いだけして、寝よう。そう思った矢先に、近づいてくる足音を聞いて身構えた。やってきたのは空菜だった。

「空菜ちゃん？ どうしたの？ 地下にいるんじゃないの？」

「休憩時間です。時間圧縮の連続使用は身体に悪影響があるということだ」

「あ、そうなんだ」

地下シェルターの時間圧縮魔術は、内部時間を外部時間の三倍にまで引き上げることが出来る。必要な睡眠時間を六時間とすれば、外部時間で二時間程度の睡眠でこれを達成できる。東雲がベッドの上で悶々としている間に凧と空菜は睡眠を終えて二日目の講義を始めていた。

「凧、君も出てきたんだよね」

呼び方を変えるよう凧に言われたことを思い出して、呼び慣れない君付けをする。

「凧さんなら、部屋に戻ってますよ。呼んできますか？」

「いや、いい。大丈夫」

むしろ、いなくてよかった。

尻にこっそり夜食にラーメンとジャーキーを食べているところを見られたくはない。

「……不健康そうな食事ですね。太りそう」

「分かっているから、口にしなければもいいからッ」

自覚はあるし、盛大に後悔したばかりだ。

脂肪分が腹部ではなく、胸部に貯まればこんな心配もしなくていいのにと東雲は自分よりもふっくらと膨らむ空菜の胸を恨めしそうに見つめる。

「なんですか？」

「いや、別に。大きいなって」

「ん……？」

空菜は、東雲の視線を追う。その先にあるのは豊満なバストだ。

「これですか？」

空菜は自分の胸を掴んだ。

「動くときに邪魔になるんですよね。効率が悪いというか」

「あッ、またそういうこと言うッ。持たざる者への慈悲が感じられないッ」  
服の上からも勝敗は明らかだ。

空菜は中学生とは思えない女性らしい身体つきをしている。対して東雲は、年齢以下に見られるのが常態化している。

「母方の問題なんだろうか。いや、でもなあ」

零菜は、現時点で母親よりも胸部装甲が分厚くなっている。父方の祖母がナイスバディなので、やはり零菜のスタイルは父方の系譜ではないだろうか。

そうだとすると、なおのこと納得がいかない。

父親は全員が同じだ。それなのに、胸部にこうも大きな差が出るのはどうしてなのだろうか。身長も、古城は高いほうなのに、東雲の成長は早いうちに止まってしまった。今となっては、妹たちを見上げるようになった。なんとという理不尽だろうか。世界最強の第四真祖の娘にして、いずれは世界最高峰の吸血鬼の一翼を担うであろう東雲であっても、自分の成長まではコントロールできないのだ。

「別にシノさんだって、悲観するほどないってわけじゃないのでは？」

「それでも大きいほうがいいもん」

「そういうものですか」

「そういうもんです。男子だって、大きいほうがいいに決まってる。そりゃ、極端な大きさは別としても、空菜ちゃんくらいあれば、安泰でしょ。吸血鬼だから歳いってから垂れる心配もないし」

「男子ですか。まあ、そうかもしれないですが」

「空菜ちゃん、クラスでそういう話ないの？ 男子からジロジロ見られたりして  
るんじゃないの？」

「視線は、確かに感じますよ。吸血鬼は珍しいですからね」

「そういう視線じゃないと思うけど」

東雲の前に座った空菜は、ミネラルウォーターを飲んでいる。

こうして間近で見ると、ますます美人だと思う。暁家の血縁者は全員世間一般でいうところの美男美女ぞろいではある。特に女性陣は特筆して注目すべき容貌の持ち主ばかりだ。

一般公立校に突然やってきた美少女転校生というのが、彼女の立ち位置だ。それ

はもう話題になるだろう。凧と義理の兄妹となれば、なおのこと。凧もまた何かしらの騒動に巻き込まれたであろうことは想像に難くない。

「わたしが男子だったら、空菜ちゃんを放っておかないよ。何とかしてお近づきになりたいと思うし、告白とかあったんじゃないの？」

「恋愛はよく分かりませんが、告白は確かにされたことはあります」

「え？ ほんとに？ うわーすごい、どんなの？」

冗談で聞いてみたが、まさか本当に告白されているとは思わなかった。

東雲はそういった経験は皆無だ。強大な力を持つ吸血鬼はこの夜の帝国では特別な立ち位置を築く。まして、第四真祖の娘となれば、そうそう近づけはしない高嶺の花だ。

そして、それは他の姉妹にも言える。

どれだけフレンドリーに周囲を接していても、必ず皇族という立場が邪魔をする。自由恋愛を標榜しても、気後れするものだ。まして、外見は周囲から隔絶するくらい整っているとなればなおこのことだ。

しかし、空菜はそういった制約はない。

皇族の関係者だと知られていない空菜は、足踏みをする理由がないので自然と下心を向けられる機会も多くなる。

「どんなと言われても、普通にお断りしましたよ。こういうのは、すっぱり断るべきだと本で読みました」

「まあ、そうだよ。空菜ちゃんに彼氏がいるって聞かないし」

もしも、今、空菜に彼氏がいるのなら風から血を吸うことのもかなりまずい話になる。

「それで、どんな風に断ったの？ 断るのはそれはそれで悪いなあって気にならない？」

「いえ、別に。風さん以外の男性に興味はないと言ったらそれで終わりました」

「そ、それ、言ったの？」

「はい。まあ、思えばわたしも言い過ぎた面はあると今は反省しています」

「うわあ……」

「友達もそんな反応してました」

「そりゃ、そうなるわ。ちよっと相手が可哀そう。あと、巻き込まれた風君も」

「凧さんに喧嘩吹っ掛けられる人、いないですよ」

凧が攻魔官を屈指していることは周知の事実。呪術も使えるとなれば、正面から喧嘩を吹っ掛けられる者はいないのだ。義理の兄妹で一緒に暮らしているというところで、様々な憶測や噂が流れもしたが、空菜はこんな性格だからまったたく気にならなかった。それに、世間ずれしているところがあるのは明白で、周囲からもそういう認識は持たれていた。凧のことも今はブラコンを拗らせているという認識で落ち着いている。

「シノさんには、そういう経験はないんですか」

「残念ながらねー」

「凧さんには、ちょっといをかけているのに」

「ちょ、ちょっといかかそういう言い回しはよくないと思うの確かにずっと血を吸いたいと思っはいたけど別にやってみたら全然大したことじゃなかったしそれに吸血は年頃の女子はみんなしたいと思ってるよわたしだけじゃないもん」

「え、はあ……?」

空菜は妙に食い気味な反応をした東雲に押され気味だ。

取り立てて気に障ることを聞いたとは思っていないのだが、東雲の感情を揺さぶる言い回しをしてしまったらしい。

「ところで、シノさん」

「何かな？」

「シノさんは、凧さんのどこがいいと思ったんです？」

「んぐおッ」

水を飲みかけていた東雲は思い切り咽た。

「あ、すみません」

「い、いい。ちょっとびっくりしただけだから」

はあはあと東雲は息を整える。

「急にどうしたの」

「いえ、なんとなく。シノさんは凧さんから血を吸いたがってましたし、やっぱりどこか惹かれるところがあつたのかなと。まあ、血については凧さんの体質もあるんでしょうが」

「あー、うん、それね」

凧の体質——プレイヤーと呼ばれる人工生命体が有する魔族を惹き付けるフェロモンを生成する特異体質だ。とりわけ吸血鬼の吸血衝動を強める働きがあるとされる。とはいえ、それは吸血鬼が我を忘れるというほど強力な催淫作用があるわけではない。ただ魅力的に感じるといふ程度だし、そもそも離れて暮らしている東雲にはあまり関係がない。

「凧君のいいところ、ねえ」

うーん、と東雲は眉根を寄せて考える。

「まあ、まず顔だよね」

「顔ですか」

「ぶっちゃけ好み。見た目って何だかんだで大事でしょ。凧君は、合格」

「身もふたもないですね」

「あはは、まあね。でも、そんなもんじゃない？ 見た目でアウトなら、そこまですでしょ。見た目が許容範囲内だから、その先もあるわけで。まあ、凧君は小さいところから接点のある男子ってのも大きいけどさ」

「そういうものですか」

「そんなもんでしょ。もちろん、心とか内面も大事ってのは分かるけど、そんなのは優先順位というか判断基準の一つだから、切り離せるもんじゃないし。頑張り屋で女の子のために身体を張れる凧君は、まあそこも合格だよね」

春先から立て続けに起こった暁家を巻き込む事件の数々に、凧は巻き込まれていた。時に当事者にもなり、その都度大きな怪我を負い、命を危険に曝した。クリスマスでのテロ事件の際には東雲も現場で凧が戦っているところを見ていた。

「シノさんは凧さんと付き合いたい？」

「それは、まあ」

東雲は断定を避けた。

凧への好意は事実としてある。それが恋愛に近しい感情だという自覚もしている。吸血衝動を向けてしまう相手であり、唇すらも許したのだ。叶うなら、その先に進みたいとも思う。

「わたしはなんだかんだ言っただ第四真祖の娘だしね。他のみんなもそうだけど、本気で人を好きになって大丈夫なんだろうかって思う。相手の迷惑を考えると、ね」  
よくも悪くも皇族というのは立場がある。学生でいられる今はまだいいが、その

先のこととも考えてしまふし、伴侶となるような人にも注目を集めてしまふかもしれないと思ふとやはりしり込みしてしまふ。今ならばまだ仲のよい家族の中での関係だと言ひ訳もできるが、一步踏み出してしまふとそうは言えなくなる。

口には出さないが、同じような悩みを姉妹は共有している。

風への好意の種類や度合いはそれぞれだが、いまだに誰もその思いを告げないのは風への配慮もある。そして、同じな悩みを持つ姉妹への配慮とそれを言ひ訳にした現状維持が今の東雲たちの関係性だった。

「風君と関わっていたいけど、それが悪い方向に向かうのは嫌。だったらいっそ変わらなくてもいいんじゃないかって、思ったりもする。今が一番楽しいし」

そうは言つても不満がないわけではない。東雲にとつての最もいい展開は風といい関係を結ぶことだ。風が東雲を求め、東雲が風を求める関係性が一番だ。求めあつて一つに溶け合つてしまふくらい深く繋がりたい。それほどまでに入れ込むのは、東雲が本能レベルで風の中の原初を求めているからでもある。

「んー」

東雲は空菜をジトっと見つめる。

「何ですか？」

「いや、やっぱり、空菜ちゃんってわたしたちの天敵だって」

「なぜです？ 別に敵対する要素はないと思いますけど」

「うん、まあ、そうだね。そうなんだけどね」

凧と同居する美少女かつ毎日血を吸い、しかも東雲たちのように立場という足かせがない。これで警戒しないほうがどうかしている。

今まで曉姉妹が自然と育んできた共通認識や共有価値観を空菜は持ち合わせていない。空菜の存在自体がこれまで「みんな仲良くやっていきましょう」という妥協でやってきた中に投じられた一石となる可能性は高いのだ。

「空菜ちゃんも仲良くしようね」

「急に何ですか？ なんかわですよ、会話の流れが」

「そう？ 変じゃないよ、全然」

空菜に笑いかけける東雲。その笑顔の意味を判じかねる空菜は、どことなく漂う不穏な空気に警戒心を抱く。どこかで東雲を怒らせてしまったかもしれない。

人間社会で活動するようになって広がった交友関係だが、まだ半年程度の交流で

は自然と空気が読めないことを言ってしまうこともある。東雲にも同じように何かしらの地雷を踏んだのかもしれない。自分の反省点だと思いつつながらこれまでの会話を振り返る空菜だったが、特筆する内容の会話をしたとは思えない。東雲が意図しない形で空菜は人間関係の円滑な運営の難しさを学習したのだった。

---

### 東雲の恋愛観を語る回。

凧に求めることが姉妹でそれぞれ少しずつ違う。ハーレムするのなら、それぞれに応えないといけないので大変である。

## 第五部 九話

二月十四日、バレンタインデーと呼ばれる「祭日」は、男女を問わず特別な意味のある日である。西洋においては失われた神話の聖人に肖って贈り物を渡し合う日であり、日本においてはチョコレートを渡す日である。とりわけ、女性から男性に對して好意をチョコレートともに伝える日というのが、ここ数十年の間に醸成された日本の独自文化であり、それを色濃く受け継ぐ暁の帝国でも同様であった。もつとも、女性から男性へチョコレートを贈るとするのはこの祭日の一面に過ぎない。お菓子メーカーの策略に乗ってたまるかど強がってみても意識せざるを得ず、何となく女性は男性にチョコレートを贈らなければならないのではないかという強迫観念染みた環境が昨今の若者にとっては大きな負担となっているのも否めない。恋愛を絡めない友チョコや義理チョコといった方向性が強くなってきたのも自然な流れではあるのだろう。ともあれ、日本並びに暁の帝国は、一月の末から二月十四日までチョコレートを中心に軽めの贈答品の売れ行きが好調になるし、学校ではどこも浮ついた雰囲気が漂うことになるのである。

そして、その文化に目を付けたのが混沌界域であった。

カカオの生産量世界トップをひた走るこの国は、当然の帰結としてチョコレートの生産量も世界トップであり、最大の輸出国が日本と暁の帝国であった。とにかく混沌界域産のカカオとチョコレートは高級品として知られていて、バレンタインデーにチョコレートを大量消費する文化に目を付けないわけがなかった。

二月十四日にチョコレートを大量消費する。輸出だけでなく内需を拡大するとう狙いで始まったチョコ祭りは、今年で十年目の節目を迎え、予算も例年比の三割増しで計上されている力の入れようだ。

政府と国内のお菓子メーカーがタッグを組んでアピールしただけあって、混沌界域でも二月十四日はチョコレートの日だと社会が受け入れている。

テレビをつけても広告が目白押しだ。この記念日に合わせて、様々な企業が多種多様な戦略を練って新商品を送り出している。

国内外の客を迎え入れる国家の玄関である空港の磨き抜かれた廊下で佇みながら、吊り下げられた大型ディスプレイから流れるチョコレートの宣伝を眺めている。「零菜、あと三十分くらいかかるって」

早足でやってきた萌葱に声をかけられた零菜は、視線を姉に向ける。

「けっこう待つんだ」

「さすがに時期が時期だからね。祭りの前日だから渋滞も酷いみたい」

「やっぱ、そうだよ。一日早く来ればよかったんだけど」

零菜たちが混沌界域の入国手続きを終えたのはつい先ほどのことだった。生まれて初めての混沌界域に心躍らないはずもないが、言葉の通じない他国というのは緊張する。スマホの翻訳アプリを使えば、何とでもなるというが、使いこなせるかどうかはぶっつけ本番なのでなんとも言えないのであった。

「紗葵たちは店ぶらつくって。零菜は？」

「わたしも行く」

「ん、あっちだって」

ガラガラと青いスーツケースを引っ張って、零菜は萌葱についていく。

空港ターミナルビルは多くの観光客でごった返していた。

世界有数の祭りを明日に控えて、外国からの旅行者が多数集まっている時間帯だ。地上五階のビルに入居するテナントの多くが混沌界域のお土産を取り扱ってい

るが、食料品を扱う店では軒並みチョコレートが並んでいた。

「どこもかしこもチョコだらけ……暁の帝国ちやよりも気合入ってない？」

「市場規模だけなら、もう日本も超えてるんじゃないかって言うからね、この時期の混沌界域は……ま、政府が予算組んで、チョコ祭り用に買い上げてるってのもあるみたいだけど」

もともと、人口は混沌界域のほうが暁の帝国よりも多い。そこで、政府を挙げたキャンペーンを実施すれば、自然と暁の帝国以上のチョコレートの消費量になるだろう。こちらのほうが物価も安い。外国からの輸入に頼る暁の帝国はどうしてもチョコレートは高くなりがちだ。

「今年はクラスでチョコを配らなくていい分楽だね」

と、萌葱は言う。

いわゆる義理チョコと友チョコである。仲良くしている友人には、チョコレートを贈る。それが、強要されているような雰囲気を感じてしまうのが、このイベントの悪いところだ。チョコレートの良し悪しでマウントを取るような連中もいるし、人間関係がこじれることもあり得る。特に女子はその手の話題で何かと優位性を主

張したがる生き物だ。

さすがに、第四真祖の娘を相手にして、チョコレート一つでちよっかいをかけてくるような輩はいないが、立場上友人をないがしろにしているという風聞を立てるわけにはいかないのが辛いところである。萌葱はチョコレートを配って最低限の間関係を保証できるのなら、むしろ得だと思ふことにしている。

しかし、それも例年の話だ。

今年は、バレンタインデーを海外で過ごすことになった。よって、チョコレートを用意しなくてもいいという名分が立つ。いつもつるんでいるような本当に仲のいい友人にだけ、事前にそれとなく渡しているが義理チョコの類を教室に持ち込まなくてよかった分だけ今年の負担は小さくなった。

萌葱の意見に零菜も同意する。零菜たちからの義理チョコを楽しみにしている勢力も一定数いるのだが、今年はそういった面々とも顔を合わせなくて済む。これは大きな負担軽減であった。

「あ、いたいた、あそこだ」

萌葱が指さしたのは、民芸品を取り扱う店の中だ。

木彫りのお面や数珠のような何か、色のついた石の珠といったどこにでもありそうな商品が並んでいて、お面を手にとって興味深そうに眺めている瞳とその横で虚空を眺めている夏穂がいて、二人の幼女を左右で見守っている紗葵と麻夜がいる。「零菜ちゃん、気に入ったものはありましたか？」

「うわッ」

不意に背後から声をかけられて、零菜は飛び退いた。

「ごめんなさいでした。驚かせてしまいました」

「あ、かのねえ。ううん、別に大丈夫」

麦藁帽を被った銀髪の女性——夏音は、穏やかに微笑んでいる。時々何を考えているのか分からない不思議な気配のする彼女は一児の母なのだが、雪菜と同様に血の従者となっているので見た目は零菜と同じくらいか少し上くらいに見えなくもない。

銀色の髪とサファイアのように青く澄んだ瞳はアルディギア王族の血に由来し、佇んでいるだけで高貴さが滲み出しているようですらあった。

「零菜ちゃんは、何か買いましたか？」

「ううん、まだ何も。今、ここに来たばかりだから」

「そうでしたか。出発まで時間がありますから、ゆっくり選んで……と」

夏音が言葉を途切れさせたのは、彼女の娘が駆け寄ってきたからだ。

最年少の夏穂が、紅い包装紙に包まれた箱を片手にやってくる。

「ママ、これ」

「はい、それにしましたか。じゃあ、お金を払わないとダメでした」

夏音は財布からお札を取り出して、夏穂に渡す。自分でレジに持っていき、支払うようにと言い含めて、その様子を見守った。

「自分で買わせるんだね」

「大事なことでした。それに、しっかり者のお姉さんたちもいますから」

「まあ、ね」

夏音は決して放任しているわけではない。萌葱や紗葵が、何かと面倒を見てくれるから安心して任せていられるし、だからこそ、この機会に体験させられることをさせている。皇女だ何だと言って、甘やかして育てるつもりは毛頭ない。実は、それなりに厳しい母親でもあるのかもしれない。

「零菜ちゃんは、もうチョコレートはあげましたか？」

「え？ あ、全然まだ、だってまだ会ってもいないし！」

「お父さんのことでした」

「ツ……あ、わ、渡してきたよ。ああ、うん、古城君だよ、うん」

カッと頬が熱くなるのを感じる。

嵌められた、と一瞬思ったが、夏音は穏やかに微笑むばかりで零菜をからかおうという意思は感じられない。零菜が勝手に勘違いをして自爆しただけだ。それも、自爆した事実には夏音が気づいているかどうかとも分からない。

こういう時の夏音は妙に怖いのだ。何かしら得体のしれないものを感じることがある。天然気質でありながら、本質を突然突いてくる。何かと鈍い母に比べてずっと隠し事のできない相手だと感じていた。

「かのねえは、古城君に渡してきたんだよね？」

「はい。毎年のことでしたが、喜んでもらえて何よりでした」

どんなチョコレートを渡したのか気になるところだったが、夏音のことだから無難と極端を足して二で割ったようなチョコレートだったのではないだろうか。時

折、常人とはかけ離れた感性を披露するのも夏音の特徴だった。



地下シエルターの時間操作魔術によって大幅な短縮を実現し、短時間で使用人講習をクリアするのに必要な単位数を獲得した凧と空葉は、やっとのことで自由な時間を手に入れた。

旅行気分はすっかり抜けてしまい、外出する気力もないという有り様ではあったが、もう勉強も鍛錬もしなくていいと思うと気が楽だった。

朝日が昇ったところに講習を終えた証となる修了証明書を受け取り、地下シエルターで睡眠を取った。時間圧縮のおかげで、外の時間にして三時間で十分な睡眠を取ることができたので、体力面では日常生活に問題がないのだが、気力はそうもいかなかった。お昼前、これからというときではあったが、まったく何かしようとい

う気にならないのであった。

かといつて、テレビを見ていても知らない国の言葉で何を言っているのか分からないし、人の家で昼間から寝ているというのも落ち着かない。どうしたものかと思つているところで、空菜と東雲がやってきた。

「ハロー、今、いいかな」

と、東雲が言う。

東雲と空菜の手には透明な袋があつてその中にはそれぞれクッキーとチョコレートが入っているのが見て取れた。

「ハッピーバレンタインだよ、凧君。どうぞ」

東雲は凧にクッキーを手渡した。

円形のココアクッキーとプレーンクッキーでとてもシンプルだ。

「ありがとう」

「味見もしてるから大丈夫なはず。あまり甘くならないようにしてみた。どうせ、凧君はこれからいっぱいもらうだろうしね」

「うん、まあ、ありがたいことにね」

否定はしない。

お昼過ぎには零菜たちがここにやってくるだろう。例年通りなら、何かしらもらえるはずで、しばらくは甘いものを購入する必要がない状態が継続する。

「これからチョコ祭りだからね。甘いいっぱい出てくるから、お口直しに寝る前に食べるといいよ」

「そうか？　じゃあ、そうする」

「うん」

東雲は嬉しそうに笑う。

一番最初に手渡し、一番最後に食べてもらうことでより強く自分を印象付けようとする策である。例年通りを演出して気軽な挨拶をする感じにしているのも、風気負わせないようにするためだ。

気軽に暁の帝国に帰ることができない東雲は、バレンタインデーに風に贈り物を手渡しするのは四年ぶりだ。昨年までは古城と風それぞれ郵送していたので、今年は少しばかり力が入っている。

他の姉妹はいつでも手渡しできるが、東雲はそういうわけにもいかないので、多

少の抜け駆けは大目に見てもらってもいいだろうと先手を打ったのであった。

「空菜もありがとうな」

「はい。凧さんが普段よく食べているチョコより、少しばかり苦めにしました」

「おーそうか」

食べ物贈るうえで、相手の好みを知ることが大切だ。

チョコレートは甘いか苦いかで味わいが大きく変わる。苦いチョコレートが好みの相手に、甘いチョコレートを渡すのは悪手である。その点、凧と同居している空菜は、凧が買ってくるお菓子の内訳まで把握していた。チョコレートはカカオ72パーセント以上と苦みを感じるものを購入することが多く、カカオのパーセンテージが複数ある袋詰めの場合も必ず最も苦いチョコレートから食べている。結果、袋の中は最終的に甘いチョコレートばかりが残ることになる。

日常的に凧を観察し、その嗜好を知る空菜にとって、凧が好む苦みに調整するのは難しいことではなかった。

「空菜のこれは手作り？」

「はい。この辺のお店は勝手が分からないので、シノさんから材料を借りて用意し

ました」

地元からチョコレートを持ってくることはしなかった。このイベントの意義をそこまで深く理解しているわけではないのだが、自分もまた凧にチョコレートを贈っておく必要はあると感じてはいた。東雲がちょうどクッキーを作り始めたので、便乗してみたのだった。

「空菜ちゃん、手際が良くてすごかった。手慣れてる感じ」

「お菓子作りは初めてですが、知識はあります。日常的に食事を作る機会もあるので、それなりに」

「わたしはこういう時しか、キッチンに立たないしなー」

東雲には専属の料理人がいる。昏月家のように凧と空菜のどちらかで食事を用意しなければならぬ家庭とは事情が違う。

「わたしにとっては初めてのイベントですから勝手が分かりませんが、まあ、こんな感じなんですわね」

「あ、そっか。バレンタインなんて言われても、何のことか分からなかったよね」  
拍子抜けしたような口調の空菜に東雲が反応する。

空菜が生まれたのは半年と少し前だ。前回のバレンタインデーの時にはまだこの世に生を受けていなかった。すべてのイベントが空菜にとっては初めての経験である。

「クリスマスはあんなことになりましたが、今回は突然の講習会を除けばふつうですね」

「一応、乙女としては重要なイベントではあるんだけど」

「好きな人にチョコレートを贈る、ですよ。はい、だから凧さんに贈ったのです」  
「んッ」

東雲は咽そうになりつつ唇を噛んで堪えた。

なんの銜いもなく好意を口にした空菜に度肝を抜かれたのである。もちろん、風もである。このように真正面から好きだと言われるのは初めてだ。反応に困り、あれこれと考えてしまう。

「空菜ちゃん、本人がいるけど、そんなんでいいの？ ああ、ほら、ねえ……？」

「どういうことですか？」

「どうって……好き、とかさあ。あ、それでどうなのって話なんだけど」

「どう？ 好きだからチョコ贈るんですよね。嫌いな人に贈る理由はないと思いますけど」

「そうだけドツ、え、う」

唐突な告白に居合わせた東雲は言葉が続かない。

「空菜が俺を好きか。そうか、うん」

凧も凧で大きな決断を迫られることとなった。

凧と空菜は義理の兄妹だ。血縁関係はない。それでも家族としてこの半年間やってきた。親も海外出張中なので、基本的に家には二人きりだ。空菜のような美少女と恋人関係になるというのは魅力的だが、これまで積み重ねてきた関係性を見直し、同居という環境下で間違いが起こらないよう気を張らなければなくなる。何よりも空菜は生まれたばかりの赤子のようなものだ。兄という立場で長らく接し空菜にあれこれと教えることも多かったが、無垢で無知な少女を引き取って自分の彼女にしてしまうのは、倫理的に如何なものか。まるで光る君のようではないか。

「凧君、どうするの!？」

と、東雲は興奮気味に尋ねる。

東雲にはどうすることもできない。

あえて、この告白を妨害することできるだろう。空菜は凧に好きだと言ったわけだが、付き合ってほしいとは言っていない。揚げ足をとって妨害するなり回答を保留させる方向に話を誘導することはできなくはない。だが、それはしてはならない蛮行だ。人の恋路に差し出口をするのは、許されないことである。煩悶しながらも東雲は事の成り行きを見守る他ない。

「何をそこまで慌てるのです？ シノさんだって、凧さんが好きだからクッキーを贈ったんですよ？」

「んんッ」

突然、思わぬ形で飛び火してきて、東雲は絶句する。

「ば——なに、急に」

「クッキーでも意味合いは同じなのですよね？ なら、そういうことでは？」

「いろいろあるでしょ！ ほら、友チョコとか義理チョコとか！ 凧君はほらなんていうか家族だし、家族に贈るのも一般的！」

「はあ、だから、わたしもこうして贈ったのですけど……凧さんは一応、兄ですし。」

これからも血を吸わせてもらうわけですからね」

「ん……？」

空菜は訳が分からないという表情で東雲を見ている。東雲と凧が何をそんなに慌てふためいているのか理解できていないのである。

「空菜ちゃん、凧君には家族だから贈ったの？」

「はい。日ごろからの感謝を形にして伝える、という意味ではとてもよいイベントです」

「へえ、はあ……ふうん、そう。好きってそういうこと」

LikeかLoveかの違いというのか、日本語の「好き」が内包するいくつかの意味は受け取り方次第では誤解を招く。

空菜の感性は成長途上。性に関しては幼稚園か小学校低学年レベルであり、好きと嫌いは、快いか否か、美味しいか不味いか、都合が良いか悪いかという程度の単純さだ。より複雑な感性が育つには、まだあと二、三年はかかるだろう。

「うん、美味しい」

凧は若干の落胆を覚えながら、空菜のチョコレートを口に運ぶ。凧なりに少し期

待したところはあったのだ。凧も健全な男子だ。女子から好意を告げられるのは、恥ずかしくはあるが嫌ではない。

そうだと思ったが、少し期待した分だけダメージも大きい。

「苦いなあ」

凧に合わせて少し苦めにしたというチョコレート。そのカカオ含有量は八十パーセントを超えている。苦いというよりは渋いというべきだろうか。ビターチョコレートが好きな凧はこれくらいがちょうどいいのだが、いつも以上に苦く感じるのはなぜだろうか。

「でも、美味しい」

「そうですか。よかったです」

言葉少なにしながらも空菜はほっとした様子だ。

凧の口に合わせて味を調えたが、実際にどう反応するかは未知数だった。それが好意的に受け止められたので、安心したし、自信にも繋がった。

空菜の言葉選びに翻弄された東雲はというと、改めて空菜の潜在的なポテンシャルに圧倒されていた。やはり、彼女は天敵。どのように行動するか、その影響がど

う出るか全く読めない難敵であると再認識することとなった。



## 第五部 十話

窓から見えるのは茶褐色の街並みとどこまでも青い空だ。まだ午前中だというのに、気温は三十度を優に超えている。カンカン照りという言葉は、昨今はなかなか使わないが、あえて使うのならばこんな天気の日を使うのだろうと風は思った。それほどまでに、この国の太陽光は強烈だった。暁の帝国も南国で、夏場はかなり厳しい暑さに見舞われるのだが、それでも人工島の利点を生かして道路や建築物の大半に耐熱素材を使っている。

混沌界域には、それが無い。

自然なままの気温は、慣れない旅人を瞬く間に倒れさせることになるだろう。比較的暑さに強い暁の帝国育ちの風であっても、それは例外ではない。

冷房の効いた屋敷の中であって、窓から差し込む日光は肌を焼くように暑かった。これでは外出する気など起きるはずもなく、よほどのことがない限りは外に出ないという判断を下す。もともと、インドア派の風にとっては、外出を渋る言い訳に使えるとすら思えるくらいだった。

とはいえ、今日ばかりはそうもいかない。

バレンタインデーの贈り物を東雲と空菜からもらった。空菜は一緒に住んでいるので毎日顔を合わせるが、東雲はそうもいかない。

三月になったら、ホワイトデーがやってくる。毎年、何だかんだでチョコなりお菓子なりを送ってくれる東雲に、凧も郵送でお返しをするのが常であったが、今年手渡して受け取ったのだ。ならば、手渡して返すのが筋ではないか、と思うのだ。三月に、この国に戻ってくるのはさすがに不可能だ。ならば、いっそ、今のうちにお返しを渡してしまうのがいいのではないか。

実際はどうか分からない。

きちんと記念日として三月十四日を目掛けて発送したほうがいいのかもしれない。女心は正直分らないので、どっちが正解かはやってみないことには何とも言えない。

東雲の気配を探して廊下を歩く。

強い魔力を持つ東雲の居場所は、すぐに分かった。一階のエントランスホールから気配を感じる。東雲以外にも何人かいて、うっすらと話し声が聞こえてくる。

「お客さんか」

エントランスホールにいたのは、スーツ姿の赤毛の女性だった。見た目二十代の中頃くらいで、着ている七分丈のスキッパーブラウスは真夏だからか清涼感を感じさせる。

女性からは、お堅い雰囲気を感じる。

出入りの業者ではないようだ。

お役所関係だろうか。

東雲の立場ならば、何かしら公務員との接点があってもおかしくはない。東雲の安全確保は、暁の帝国と混沌界域双方の課題である。

東雲はずいぶんと心を許しているのか、仲よさそうに話をしている。どうも旧知の仲のようだ。

しばらく東雲は忙しそうなので、後にしようかとその場を立ち去ろうとしたとき、ふと顔を上げた女性と目があつた。

「昏月凧君ですね」

と、声をかけられた。

少し高めの鈴を鳴らすような綺麗な声だった。

「初めまして、わたしはディアドラと申します。混沌界域国土保安庁警備部の者です」

「初めまして、昏月凧です」

凧には語れるような肩書はない。こういうとき、どう名乗るのが適切なのか分からない。

「お邪魔でしたか？」

「いいえ、昏月君にも時間を見てご挨拶させていただくつもりでした。シノさんの護衛は、うちが所管しているので」

「あ、そうなんです。それで警備部」

「はい。要人警護を担当する部署です。本日は昏月君へのご挨拶とシノさんのご機嫌伺で立ち寄らせてもらいました」

「ご機嫌伺ですか」

「はい。シノさんはお姫様であらせられますし、へそを曲げられるとわたしの出世にも響くので」

「なるほど」

思っていたよりもお堅い人ではないらしい。愛らしい笑みを浮かべて、ジョークを飛ばしてくる。隣で東雲が「なるほどじゃない」と遺憾の念を示している。

「もう、ディアドラさん、変なこと言わないでよ。別に迷惑かけてないし、連絡だつてちゃんと取ってるじゃん」

「そうですね。シノさんはそのあたり、きちんとしてくださるので助かっています。世の中には護衛の目を掻い潜って出かけようとするおてんば姫も数知れず、ですからね」

「そうそう、わたし、そういうのしたことないからね」

東雲は胸を張ってそう言った。

護衛の目を掻い潜って遊び回る姫と聞けば、まっさきにクロエが思い浮かぶ。彼女の母親も、十代のときにはかなり活発に護衛を困らせていたと聞く。

当人は自由気ままにやっているのだから、回りの人間はそうもいかない。何かあれば大問題だし、なくても大問題だ。

ディアドラは東雲にへそを曲げられると出世に響くと冗談めかして言うが、現実

に東雲が勝手に抜け出してトラブルに巻き込まれたら、叱責どころでは済まないだろう。それは、暁の帝国から送り込まれている護衛たちにも言えることだろう。

「行動一つで人の人生変えられるのは、すごいことだな」

「それが立場というものです。シノさんは、その自覚はきちんとしているようでありますよ」

東雲に視線を向けたディアドラが小さく微笑んだ。

「さて、わたしはここで暇させていただきます。お祭りも近づいているので、そろそろ配置につかないといけませんから」

「やっぱ、今日は忙しいんだ、ディアドラさん」

「それなりに、です。基本、わたしは上で見ていて、実働部隊任せですけど、いざとなれば指示を出す立場ですからね」

二月十四日の夜に開催されるチョコ祭は、万を超える人が集まる大きな祭だ。

世界各国から人が押し寄せてくるので、開催地は地獄絵図のようになる。当然、警備を担当する役人たちはこの日が最も忙しい日となるだろう。

「釘を刺されてしまいましたね」

後ろで見守っていたアカネが口を開いた。

「釘？」

「要するに、大人しくしていると言いに来たんでしよう、ディアドラ様は。チョコ祭に参加する前にもめごとを起こされては堪らないということですね」

「む、別に何もしないし」

「例年と違って、今年は凧様もいますからね。念には念をとったところでしょう」  
「むう、信用ないな」

多くの人が押し寄せる祭の当日。当然テロ対策にてんやわんやしているところだ。そこに東雲が全く別の問題をもたらせば、それこそ手が足りなくなる。

ディアドラからすれば、仕事を増やすなど言いたくなるのは仕方のないことだろう。

「もめごとを起こすなのは、俺も対象かな」

「それはそうでしょう。わざわざ、あなたにも会いに来たわけですからね」

「そりゃ、そうか」

凧は立場上一般人ではあるが、第四真祖との血縁は混沌界域の上層部ならば認

知しているだろう。この滞在も東雲が暮らす屋敷に逗留しているのだ。関係者として扱う以上、護衛の目を光らせなければならぬ。

となると東雲へのお返しを用意するために出歩くのもままならないわけだ。こっそり抜け出してもいいが、明確に困ると言われている手前、さすがにその禁を犯すことはできない。無理を言っ外に出ても迷惑をかけるだけだ。ここは引き下がって別の方法を探すべきだろう。



「なかなかお上手ですね、凧様」

「普段からこれくらいはしてますからね」

凧はキッチンに立っていた。

熱したフライパンで玉ねぎを豚肉を炒めているところだ。

「それにしても、急に昼食を作りたいと仰るので驚きました。それもシノ様のため

になんてねえ」

「そりゃ、クツキー貰ったまま帰国するってわけにもいきませんからね。これくらいのお礼はしとかないと」

「凧様、なかなか律儀な性格してますね」

「そうですか？　そうでもないですよ」

話しながらも手は止めない。

ケチャップをふんだんに使ったケチャップライスがフライパンの中で踊っている。いい匂いがキッチンに立ち込めて、空腹を誘う。

東雲にお礼をするタイミングは今しかないが、外出が制限されているので買い物にも行けない。そこで、凧は昼食を作ることでお礼に代えようとしたのである。

作っているのは誰でも美味しく食べることのできるオムライスだ。

アカネの許可を得て、多めに卵を使っている。

「そういえば、さっき来ていた」

「さっき？」

「あの、赤毛の人。ええと、ディアドラさん。東雲とはずいぶん仲良く話してた

みたいですけど、護衛の担当は長いんですか？」

「そうですねえ……うーん、おそらくシノ様がこちらに来てからずっとになるんじゃないですか」

「へえ、そう考えるとけっこうですね」

「まあ、あの方はこの道のプロですから。もう何十年も要人警護を担当してきた実力者ですよ」

「そうなんですか」

「ええ、はい」

「何十年ってことは、あの人も魔族なんですね」

「旧き世代の吸血鬼ですよ。六百年を数える古参の一人ですね」

「そりゃ、またすごい」

吸血鬼は古ければ古いほど強力になる。

魔力の源である固有堆積時間パーソナルヒストリは、すなわち一存在が積み重ねた時間の総和である。長く存在した吸血鬼はそれだけで莫大な魔力を蓄積する。

吸血鬼の戦闘能力を決定付けるのは、血統と固有堆積時間の二つであり、旧き世

代はどちらも突出しているの、旧き世代に強大な吸血鬼という図式が成立するのであった。

血統は超一流でも、若い吸血鬼は力を持って余ってしまった、地力で負けてしまったりもする。破壊能力は旧き世代に匹敵あるいは凌駕するとされる東雲であっても、固有堆積時間は十六年と吸血鬼としてはあまりにも少ない。

時間がすべての吸血鬼界隈では、第四真祖の血統はまだまだひよっこも同然だった。

「そろそろ、シノ様たちを呼んできましようか」

「そうですね。お願いします」

用意するのはオムライスと千切りキャベツとミニトマトのサラダそして卵スープだ。皿からすれば、少し物足りないラインナップだが、皿以外が女性であることを考えればこれでも十分だろう。

「美味しい」

空菜と並んでオムライスを食べる東雲の評価は好意的だ。

凧とアカネは軽く昼食を済ませたので、東雲と空菜だけがテーブルについている。

「オムライス久しぶり。なんか懐かしい味。美味しい。凧君ありがとう」

「シノ様、もう少し語彙力のある感想をおっしゃった方がよかったですのでは？」

「食レポなんてしたことないわ。美味しいのは美味しいですよー」

東雲はパクパクとオムライスを口に運び、スープで味わう。その隣で空菜がサラダとスープに目をくれず一心不乱にオムライスを頬張っている。

オムライスといっても、さまざまなバリエーションがある。近年、人気を博すプレーンオムレツを乗せたふわとろオムライスもあれば、薄焼き卵を使ったオーソドックスなオムライスもある。ケチャップライスをチャーハンにしたものもあり、創意工夫次第でいくらでも形を変える料理である。

凧が作ったオムライスは、薄焼き卵をケチャップライスで包んだ一般的でごく普通のオムライスだ。

「空菜ちゃんは、オムライスばっか食べてるけど……」

「おかわり欲しいです」

「さすがにない。スープならあるぞ」

「スープはいいです」

「そうかい」

オムライスは空菜の好物でもある。人を選ばない家庭料理で、皿の得意料理でもある。ただ、おかわりを用意するようなものではない。ケチャップライスも残ってはいないのだった。

「ま、主役は東雲だから。空菜もだけど」

「わたし？」

「バレンタインのお礼。東雲には直接できなそうだからな。今のうちに、だ」

「あ、ん……そう、あはは、そっかあ」

東雲は頬を染めて、それを誤魔化すようにオムライスを口に運ぶ。

「わたしはおまけですか」

「違うっつての。だから、二人に昼食作ったんだろ。ただ、東雲はタイミング的に今しかないからメインにしてるんだよ」

拗ねたように唇を尖らせる空菜に困らされる風。言い方に問題があったのは確かだ。空菜からすれば、一緒にバレンタインのプレゼントを渡したのに序列をつけら

れたように感じただろう。

とはいえ、空菜とは同居しているのでお返しを渡す機会はいくらでもある。今回ばかりは、やむを得ない措置と思ってもらうしかなかった。

「うん、まあまあ、空菜ちゃんはいつでも家で作ってもらえるじゃん。てか、今も一緒に食べてるし」

「そうですね」

むくれながらも空菜は食べる手を止めていない。

東雲は、凧と同居する空菜の立ち位置を羨ましいとは思う。

家族と離れて遠い異国の地で暮らす東雲にとっては、家族との同居というのがそもそも羨ましいのだ。もちろん、アカネのような親友が一緒にいてくれるが、血の繋がりのある家族と時間を共にできるのは特別なことだと思う。

最も、離れているからこそ、今日のような特別な配慮をしてもらえるというのもある。

まさか、凧が手料理を振る舞ってくれるとは思っていなかったもので、これには驚いたし、東雲からすれば予想外の贈り物だった。

凧は簡単なものしか作れなかったとも言いが、そんなことを言う必要はないのだ。料理にどれだけ手をかけたかではなく、料理を供する理由が東雲には嬉しかったのである。



真つ赤な絨毯の敷かれた部屋は、アンティーク家具に彩られてさながら中世の城の中であるかのような。照明器具も現代のそれではなく、ランプを象った電灯で高級感が滲み出ている。天蓋のついた大きなベッドがあり、化粧台があつて、ゆつたりとしたソファがある。そのどれもが普段使いされているもので、ここが観光地などではない個人宅であることを物語っている。

「はあ……なんて綺麗」

堪らないとばかり声を蕩かせる女がいる。赤毛の女——ディアドラである。長い時間を生きる吸血鬼であり、長らく国家の一部門を統括する立場にある女であ

る。数時間前に東雲の屋敷を訪ねた時とは別人のように表情を劣情に歪めている。ディアドラがうっとりとした表情で眺めているのは、椅子に座った少女であった。金色のショートヘアの色白の少女は、茫洋とした瞳を虚空に向けている。

自身に向けられる邪な視線にも動じることなく、じっと固まったままで動かない。そんな少女の髪にディアドラは触れる。頬を撫でて、抱きしめて、首筋を噛む。血が出ても噛まれた少女は声を上げることもなく、微動だにしない。

「はあ……うふふ、今回のはうまくできてると思わない？」

唇を離れたディアドラが話しかける先に現れたのは、長いローブに身を包んだ誰かだった。フードを深く被った顔は影になっていて見えない。背の高さは百七十七センチくらいだろうか。混沌界域の男性の二十代男性の平均身長よりは小さく、女性の平均身長よりは高い。

得意げにディアドラはその誰かに話しかける。

「ほら、見て。この髪、今までが一番、うまくできてると思うの。サラサラで絹みたい。そして色合いも完璧じゃない？ ドウメキ」  
ディアドラは少女の髪を手櫛で梳く。

彼女が言う通り、さらりとした髪はディアドラの指をすり抜ける。引っかかることのない髪のは触は高級な絹を思わせる。そして、髪色。一見すると金色のそれは、光の加減で別に煌めく。虹のような輝きを纏っていた。

「目が違う……力なき、人形の瞳は我が欲するものにあらず……色、魔力、感情、何もかもが求める水準に届いて、おらぬ」

しわがれた甲高い声でドウメキが答えた。

「あらそう？ この前のヤツよりはうまくいったと思ったのだけど」

「焰光の瞳の、再現には、至らず」

「ああ、まあそうよね。そこはわたしも不満なのだけど」

「オリジナルの、目の、美しさには、遠く及ばぬ。私の欲する、価値もなし」

感情を感じさせない口調で、ドウメキが断言する。

自らの「研究成果」を否定されてもディアドラは表情を曇らせなかった。この回答が来ることは分かり切っていたからだ。

初めからドウメキの目的は焰光の瞳であって、身体の方ではない。どれだけ容貌がよくても、目が違えば彼女の欲望を満たすことはない。

「私からすれば、完成度が確実に上がっていることを評価してもよいかと思いがね」

また別の声が聞こえてきた。

「あら、いたの、マテオ」

「ひどい物言いですねえ。声をかけてきたのはそちらでしょう。私も忙しくてね。何せ、うちの店、お祭り前は毎年毎年書き入れ時なんですよ」

どこからともなく現れたのは背の低い男だった。身長のわりには横幅が広い。痘痕面でお世辞にも顔がいいとは言えない中年の男であった。

名はマテオ。

風俗店の経営者であり、人身売買を国内外で行っている犯罪組織の長でもある。一国の要人警護を担当する部署の責任者と犯罪組織の長の癒着によって、静かにこの混沌界域には官憲の目の届かない暗部が生まれていた。

「どこもそうじゃない。わたしだって、そうよ」

「お役所勤めのあなたが、今この時期この時間に現場を離れているのは如何なものか。妙な勘繰りを受けると動きにくいでしょう？」

「どうせ、それも今日までじゃない。賭けに出るって決めたでしょう」

「まあ、そうですがね」

「それで、あなたはこの娘をどう思う？」

「とても良い出来かと。量産できるのであれば、ええ、高級な「ジョークグッズ」として取り扱えます。人肌の温もりを持つ人形というのは、珍しいものですからね。ところで、それ、生きていますか？」

「肉と骨でできた人形を生きてると言っているのかしらね。まだまだ魂までは再現できていないのよ。だから呼吸してるだけで、後はお人形そのもののね」

「あえて、人形のまま培養槽から取り出したのですか？ それだけの出来なら臓器も揃っているでしょう。放っておいても魂が宿ったでしょうに」

「そんな不完全な魂はいらぬもの。どうせ動かすのなら完全再現がいいじゃない。わたしが求めているのはあくまでも器なんだし。魂になる眷獣は別。ふふ、でも可愛らしいからつい愛でちゃうのよね」

「不死性は？」

「そうねえ……」

ひゅん、とディアドラの腕が宙を薙ぐ。

鋭い爪が少女の胸を切り裂いて鮮血がカーペットを濡らした。両断された椅子とともに、血染めの少女が床に転がる。

「御覧の通り」

「まだまだ、吸血鬼とは言えませんね」

「自分も吸血鬼だけど、不死の呪いを人工的に再現するって難しいわ。これじゃあ、眷獣<sup>魂</sup>の再現ができたとしても、身体が持たない。それじゃあ、わたしの目的は達せないわ」

「ディセンバーの復活でしたか」

「ええ、そう」

「しかし、それにしても昨今は第四真祖の娘によく似た人形をお作りのようですが？」

「仕方ないじゃない。可愛いんだし。それに、彼女はディセンバーの子どもみたいなものでしょう？　なら、ディセンバーと同じくらいに愛しても浮気じゃないわ」  
倒れた少女の顔は東雲によく似ていた。瞳の色が違うという指摘は確かだが、そ

れ以外は一卵性双生児と言われても納得できるくらいにそっくりだ。

完成度の高い人形ではあるが、目的には程遠い。ディアドラ自身もそう思っていたからこそ、破棄することに迷いはなかった。自分が作った自分を慰めるための道具としか見ていないのだ。

「ディセンバーですか。私は、アヴローラを遠目から見ただけですが、確かに美しい顔立ちでしたな。ディセンバーも似たような容姿でしょうか」

「ディセンバーはアヴローラよりも成長したから、外見的にはちょっと歳を重ねてたわ。でも、ええ、あの娘を美しくないと言うのは、よほどこじれた性癖を持つてるってことになるんじゃない？」

「ふくくく、あなたがそれを言いますか。想い人の再生のみならず、その娘のクローニングにまで手を出すあなたが、こじれた性癖とは」

「可愛いものを手に入れたい。わたしの目的はただそれだけ。そのためにだらだらと生を貪っているのだからね」

先ほどまでの満ち足りた表情から変わって、疲れ切った曇りの表情を浮かべた。長く生きた吸血鬼は強大な力を持つ一方で精神的に摩耗する者もいる。また、現

代とは異なる価値観の時代を生きてきたので、生まれた時代ごとに話がかみ合わないこともあるという。

旧き世代のディアドラも、その例に漏れない。生の実感を得るために、極端な行動を取っているのだ。

「ところで、あなた達はいいかしら。このままだと、あなた達も巻き添えよ？」と、ディアドラは二人に問いかける。

「焰光の瞳が、手に入るのなら、官憲など、どうでもよい。あの目が欲しいから、この場に、いる。あの宝石、のような、目は、私のコレクションの中でも、最上のものと、なる」

「私はもともとこの国の人間ではないので、危なくなればさっさと高跳びさせてもらいます。もちろん、できる限りの手土産はいただきますがね。今のうちに、部長の作品、いくつか持ち出させてもらっても構いませんか？ どうせ、二、三日遊んだら廃棄するんでしょう？」

「んー、少しだけよ。廃棄予定の娘が培養槽に入ってるから」「ありがとうございます。それだけでも十分な手土産ですよ」

国内外で活動する組織の人間であるマテオにとっては、混沌界域の売り場を失っても大きな損失にはならない。暁の帝国との同盟関係をうまくいき、周辺諸国との関係も安定して混沌界域は内政に力を入れるようになった。治安の改善とともにマテオの商売もやりにくくなっていたのである。パトロンであるディアドラがその地位を捨てる覚悟で動くのならマテオもこの国に拘り続ける意味がなくなる。

ピーピーピーと電子音が鳴ったのはその時だ。

ディアドラの携帯端末に着信があったのだ。

「あら、呼び出し。そろそろ、戻らないといけないみたい」

「大変ですねえ、お祭り前は」

「今日はバレンタイン当日ですもの。盛り上がりは最高潮。当然、警備もしっかりしないとイケませんね」

「その割には責任者がこんなところで油を売っているようですが」

「優秀な部下がいっぱいいるんですもの。毎年、わたしは座ってるだけで一日終わるの」

するり、と音もなく立ち上がるディアドラ。ジャケットに袖を通し、魔術を使っ

て血の匂いをかき消した。

「お忙しいようですし、この辺でお暇しましょうか」

「我は、我で、動く」

足早に二人の客は部屋を出ていった。

濃密な気配が消えた後、ディアドラはカバンを肩に担いだ。

六百年を過ごしたこの国とも、あるいは今日が最後かもしれない。それだけの覚悟を持って動くことになる。犯罪だろうが何だろうが関係ない。手に入れたいものを手に入れるための戦いだ。刹那的な欲望に身を任せる。破滅はもとより計算の上だ。

この欲望を発散できないまま永遠に生き続けるくらいなら、ここで欲望とともに破滅する。

「しかし、シノちゃんも変なファンに狙われて大変よね」

もちろん、自分もその中の一人ではある。

恋であり愛であり欲望である。彼女の母と同体をなす眷獣の器に恋い焦がれて二十余年。その復活を夢見てきた彼女にとっては、東雲の存在は特別に過ぎる。想い

人の子どもというだけではない。東雲自身もまた宝石のように美しく見えた。ゆえに、これを手に入れたいと望む。手に入れて、その美しさと可愛らしさのすべてを解き明かし、そして完璧な複製を作って消耗品のように使い潰したい。オリジナルは永遠に手元に置いてひたすらに舐り、犯し、辱めて凌辱したい。どす黒い欲望が溢れてくるのを止められない。長き人生に飽いたディアドラにとって、ディセンバーと東雲への恋心は唯一の清涼剤だ。

東雲が小学生の頃はまだよかった。幼い姿は愛らしかったが、ディセンバーほどの欲望は抱かなかった。成長して、身体が大きくなって、少女から大人への階段を登り始めるともうダメだった。ディセンバーを思わせる容貌は、さらに成長して一人の乙女になるだろう。それを自分の手元に置いて、自分だけの物にしてしまいたかった。六百年の無味乾燥の人生にあって、二十余年もの間温め続けた想いは本物だ。捻じれ狂った願望だが、誰にも邪魔はさせない。

ディアドラは高鳴る鼓動に突き動かされるように血濡れの部屋を出る。努めて平静に、内心の喜悦を覆い隠して職場に向かうのだった。



## 第五部 十一話

空港を出た零菜たちは、まっすぐに領事館に向かうことはしなかった。せっかく海外に来たのだから、観光しないともったいない。というわけで、首都にある国立博物館であったり、世界遺産であったりを巡り巡って日常とは違う異国の空気を楽しんでいた。

とりわけ、昔ジャードが暮らしていたという古い王宮は大きな衝撃を零菜に与えた。

とても古い遺跡である。

およそ八百年前に建造されたという巨大遺跡は、標高二千メートル級の山の山頂に築かれた大神殿だ。それを取り囲むように形成された村には、多いときで三千人が暮らしたという。

未開の時代、ここにジャードは神も同然の存在として暮らしていた。教科書にも載っている石の廃墟は、気候の変化で水が得られなくなったことから、百五十年ほどで廃棄されたらしい。

混沌界域のような夜の帝国は、こうした吸血鬼の遺跡が多数存在している。人間ならば、世代交代を繰り返して、忘れ去っているであろう古い遺跡だが、不老不死の吸血鬼の中にはこの住人だった者も存命だ。観光ガイドを務める吸血鬼も、その一人だった。

「この都を離れると決めた時には、わたしはまだ十歳でね。防衛戦に強いとはいえ、水がなければ生活できない。そういうことで、ここ離れて二十キロの山の上に新しい都を造ったんだ」

昔を思い返すように、見た目少女の実年齢推定六百五十歳の吸血鬼が語っている。石を積み上げて作ったアーチ状の橋の下を潜り抜けたところであった。

山頂を吹く風は冷たかったが、照り付ける太陽は地上と変わらず暑い。観光地なので整備が進んでいて、道はしっかりしているが、少し外れると下草が生い茂る緑豊かな場所だった。

「あの、そんなに乾いているようには見えないんですけど、それでも水がなかったんですか？」

零菜の質問に、ガイドが大きく頷いた。

「見たままだとそうだね。今は雨もよく降るし、緑も深い。けれど、雨の量が少なくてね。それに、ここはほら、川もないし、井戸を掘ってもなかなか水が出ない。植物はいいかもしれないが、三千人が暮らすには雨水だけではどうしても足りなかったんだ」

歴史の生き証人の言葉には重みがある。

彼女たち吸血鬼がいなければ、この遺跡は忘れ去られていただろう。仮に再発見されたとしても、そこでの暮らしは残された遺物から類推するしかない。

生き証人のいない歴史は、年々書き換わることも珍しくない。

新しい発見が昔の偉人たちの姿をまったく別のものにしてしまう。肖像画が実は別人でした、というのは今どきよくある話で、それどころか人物像やその人個人の功績ですら研究の発展で変わることもある。それを考えると、実際にその時代を生きた人の言葉は重い。歴史学者や考古学者が「こうだったのではないか」と主張しても、それは想像の域を出ないが、吸血鬼が「あの時はこうだった」と言えば、それは明確な事実となり得る。その言葉を否定するのなら、吸血鬼の言葉が記憶違いだったことを証明しなければならない。こういう時、大抵の場合は当時を知る吸血

鬼や長命種を集めて思い出話をさせるのが常であった。この遺跡については、第三真祖が暮らした王宮であったというのは現前たる事実なので、遺跡の歴史はほぼほぼ真実のまま現代に伝わっている。

「はい、あの黒い煤みたいなのは、何かここで戦いの跡だったりしますか？」

ガイドに尋ねたのは麻夜だった。

麻夜が指差すのは、石垣の一部だ。石階段のすぐ隣の石積み壁に大きな黒い跡がついている。明らかに、高温で焼けた跡であった。それも自然のものではない。

「ああ、あれねえ」

ガイドの女性は困ったように頬を掻く。

「いや、あれは実はわたしがつけた跡なんだ。子どもの頃の喧嘩の名残だね。眷獣出しちゃってね」

「え、そうなんですか？」

「うん、いや、何百年も経ってるのに、消えないどころか保存までされちゃって恥ずかしいってらないね」

遺跡そのものが今は厳格な規定に基づいて管理されている国指定の重要文化財

だ。そこにあるのは建物だけでなく、当時を偲ばせる「汚れ」も含めて保存されているのだ。

ガイド本人にとってはただの喧嘩の痕跡でしかないが、後世の人々にとっては昔、この遺跡で暮らした人の生活を今に伝える重要な情報の一つであった。

「これを保存するときに、消していいんじゃないかと意見を出したんだけどね。残念ながら、ダメだって言われてね。こんなことなら、あの時にちゃんと後始末しておくんだったと後悔してるんだ」

「そうだったんですか。でも、残るものなんですね、そんなのが」

「ほんとだよ。お姫様たちも気を付けたほうがいいよ。何せ、これから人生長いんだから。もしかしたら、今住んでる家を後世、遺産として一般公開する日が来るかもしれない」

「それは嫌ですね……」

その時を思っ、麻夜は嫌そうな顔をした。

麻夜が住んでいるのは高層マンションだ。上流階級が暮らす高級マンションだが、年月を経て資産価値が上がるようなものではない。この遺跡のような歴史ロマ

ンが、あのマンションに付加されるとはとても思えなかったが、もしも万が一、昔第四真祖の姫が暮らした部屋などという宣伝文句で公開されたら、恥ずかしいことこの上ない。

自分の生活が後世の研究対象になると思うと、それはとても複雑だった。立場上仕方がないのかもしれないが、余人に勝手に踏み込んできてほしくもない。

「ガイドさんとしては、ここは故郷なんですな」

「うん、そうだね。だから、こうしてガイドの仕事をしてるんだ。遺跡になったから、戻って暮らすことはできないけど、麓には町もできたしね」

ここが遺跡となり、観光地化する前は、誰も足を踏み入れないジャングルの奥地だった。新天地に出て行った人々は誰もここを顧みることなく、時に思いを馳せることはあっても戻ってくることは終ぞなかった。

朽ち果てたこの都市を遺跡として蘇らせたのは、かつての住人ではなく、冒険家の人間だったという。

人工島を前身とする暁の帝国には石造りの古い建物は存在しない。国土そのものが、百年も歴史がない人工物だからだ。よって、暁の帝国で生まれた世代にとつ

て、こうした歴史ある建造物というのは馴染みがないのだ。それどころか天然の山すらも、零菜たち暁の帝国育ちには珍しく、圧倒されるものであった。

海外旅行をしたのなら、必ず経験するべきだと言われるのが自然体験だ。特に登山は、暁の帝国にはない自然を体験できるので人気がある。零菜たちがこの遺跡に立ち寄ったのも、歴史を感じるのと同時に山を感じる教育的な目的があったからだった。

大自然は暁の帝国には存在しない。強いてあげるとすれば、大海原は身近にあるが、緑豊かな大地はテレビの向こうにしかな存在しないのだ。

東雲はこんな環境を身近に生活しているのかと思うと、少し羨ましいと思う零菜だった。



千年を超える歴史を持つ混沌界域。その首都は長い歴史の中でたびたび場所を変えてきた。もともと、国土の大半がジャングルで人が住むには適さなかったこと

や、小王国が乱立した時代があったことなどが原因だ。

第三真祖を頂点とする国家が今の形になるまでに多くの犠牲があり、たくさんの小王国が減び去った。

強大無比な第三真祖に敵対した部族の末裔や彼らが遺した遺産は今でも混沌界域の治安に悪影響を与えているくらいには根深い対立問題が残っている。

もっとも、それも近年は落ち着いてきている。世界的な和平のムードで、武力による意思表示は味方を得られない傾向が強い。

数十年前の大戦期ならばまだしも、今の時代に積極的に戦争を推奨する国はほとんどなく、徒に敵を増やすことにしかならないのだ。

そんなわけで、混沌界域は、その長い歴史の中で最も安定した時代を迎えていると言っても過言ではなかった。

その背景に、暁の帝国との友好関係があるのは言わずもなだろう。太平洋を挟んだ友好国は、貿易と軍事で緊密な関係を築いている。

混沌界域は生鮮食品で外貨を稼ぎ、暁の帝国から科学技術の産物を輸入する。農業国家でもある混沌界域と科学大国である暁の帝国は、互いに需要を満たし合う関

係なのだ。

真祖同士の繋がりは、非常に重要だ。それこそ、国際情勢が大幅に変わるくらいの重大事である。

混沌界域と暁の帝国の関係が安定していることで、太平洋側の軍事面が落ち着いた。内陸部に力を注げるようになり、国内治安が急速に回復した。それが、この二十年だ。六百年間、この国を見続けてきたディアドラからすると、最も「平和ボケ」した時代と言えるのではないだろうか。

「部長、お疲れ様です」

執務室に入ったディアドラを迎えたのは、部下の一人だった。今日のチョコ祭の目玉であるチョコ合戦は、何万人もの人が入り交じりチョコレートをぶつけ合う混沌としたイベントだ。毎年、多くのけが人が出る負の側面もあるが、経済効果の高さもあって年々過激になっている。

当然、警備のほうも力を尽くすことになる。軍警察だけでなく、ディアドラが管轄する警備部はその最前線の指揮を執る部署だ。

「お疲れ様。配置のほうはどう？」

「問題ありません。第一から第六まで、所定の位置で展開中です。国道七号線と州道二十三号線の交通規制も開始しました。軍警察のほうもすでに配置についての連絡がありました」

「大丈夫そうね。トラブルもない？」

「大きなものはありません。小さなものとすと、外国人観光客二名が窃盗被害を訴えて、軍警察に被害届を出したようです。後は喧嘩が二件、それくらいでしょうか」

「大したことなさそうでよかったわ」

ディアドラは小さく笑みを浮かべて部下を労った。自分の席に座り、モニターを眺める。映し出されているのは、人でごった返す大通りの映像だ。

執務室にはディアドラと彼女の秘書二名のみが常在する。部下は報告のために出入りするが、これからは主に電話連絡が主となる。ディアドラは部署の総元締めではあるが、現場を指揮する立場ではないからだ。ディアドラの下には課長がいて、それが全体の動きを見ている。

「毎年のことながら、今日は朝までここで暇をしているしかないのね」

「皆さん、忙しくされているのですけど」

「仕方ないじゃない。わたしの仕事は、そうあるわけじゃないのだから」

まさに時が止まっているかのよう。チョコ祭に遊びに出かけることはできないが、かといって指示を出すようなこともなく、ただ報告を待つだけの気楽な立場である。

現場は死に物狂いの緊張感に支配されているのに、一番のトップは座っているだけだ。

「本当に、みんなには申し訳ないわ」

ため息をついたディアドラはコーヒーを口に運んだ。

ブラックコーヒーの苦みと香ばしさを味わいながら、背凭れに体重を預ける。

ディアドラにとって、今年が最後のチョコ祭だ。その時が来るまでは、この光景を目に焼き付けておくのもいいだろう。それくらいには感傷的になってはいたのだった。



午後五時を過ぎてから、領事館の駐車場に零菜たちを乗せた車が到着した。

真夏の混沌界域は、この時間でも十分に日が高く明るい。日が没するのは夜の七時半くらいだ。これだけ明るい夕方という気にもならない。まだまだ一日はこれからという気持ちになってしまう。

「いらっしゃい、みんな。待ってたよ」

東雲はスーツケースを引いてやってきた一団を笑顔で迎える。

実は、姉妹が東雲が暮らすこの屋敷を訪れたのはこれが初めてである。

「うわー、東雲ちゃん、こないいいところに住んでたの?」

「僕たちが住んでるマンションとの設備の差に引いた」

「なんでよ。どんなどこに住んでるかなんて、もともと知ってたでしょ?」

暁家が暮らす高層マンションも暁の帝国の中では最高級だ。しかし、その構造は民間のマンションと大差ない。金さえあれば、誰でも暮らせるマンションであり、事実、別のフロアには一般人が起居している。

一方で東雲が暮らすこの屋敷は領事館と併設されているだけあって、真正正銘の一品ものである。傍仕えのメイドのような使用人以外の住人は東雲だけで使ってい

ない部屋は数多い。

まさに良家のお嬢様といった暮らしぶりに、皇帝の娘とは思えない庶民派な暮らしをしてきた零菜も麻夜も啞然とするほかなかったのだ。

「写真も動画も見てきたけど、実際に来ると別格だね、これ」というのは零菜の感想だ。

天井の高い吹き抜けのエントランスホールなど、マンションには存在しない。この屋敷がすべて東雲一人の住居として扱われているのだから、羨ましいとしか言えないのだった。

「僕も一度はこういうところに暮らしてみたいな」

「留学すればいいよ、留学すれば。どう、彩海学園じゃなくて、高校はこっちにしたら？ 部屋はいっぱい余ってるよ」

「そうか、そういう手もあるね」

麻夜は興味深そうにエントランスホールの隅々にまで視線を走らせている。

「今からじゃ遅いだろ。もう二月だぞ」

と、凧が口を挟む。

「どうかな。こっちは四月始まりじゃないんでしょ？」

「九月だね」

「だったら、いけるんじゃない？ 半年暇するかもしれないけど」

割と本気で考えていそうな麻夜の口ぶりに、凧は少し困惑する。

彩海学園中等部に通う麻夜は、そのまま何事もなく高等部に進学する予定だ。そのルートはすでに確定している。今更、進学先を変えるのは、事実上不可能ではある。まして、混沌界域に留学するとなれば、そのためにスケジュール調整やら、受け入れ先との調整やらで大騒ぎになる。

留学そのものは不可能ではないかもしれないが、そこにかかる手間暇を考えると現実的ではない。

「皆様、ご歓談のところ申し訳ありません。そろそろ、お部屋の方にご案内いたします」

そこで、アカネが口を挟んだ。

「アカネさん、どうぞよろしくお願いしました」

夏音が楚々とした立ち振る舞いでアカネに頭を下げる。

「夏音様、わたしなどにそのような……恐れ多いことです」

「これからお世話になりますし、東雲ちゃんが普段からお世話になっていましたから」

「は、はい……恐縮です」

夏音の透き通った笑顔にアカネは思わず圧倒されてしまった。

血筋で言えば、アルディギアの王族に連なる高貴な身分だ。おまけに第四真祖の妻でもある。従者としての立場を教え込まれたアカネは東雲に対してはフレンドリーに接することができが、夏音のような「本物」には、気後れしてしまうのだ。「まず、ご案内を。大きい荷物はここに置いておいていただければ、後でこちらで運びますので」

「ああ、お部屋に運ぶだけなら、自分でするから大丈夫ですよ。大した荷物もないですから」

そう口にしたのは引率の大人の二人目、結瞳だった。

「そういうことでしたら、はい……では、こちらにどうぞ」

大人数の相手は慣れていないし、皇族だと思って身構えていたら思いのほかあつ

けらんとした雰囲気だったので、アカネは鼻白んだくらいだ。

暁の帝国の皇族は、庶民的な価値観だというのは噂で聞いていたが、実際に接するとどうしたらいいのかよく分からない。

皇族として遇するべきではあるが、だからといってあまりにも高級感を出すと却って価値観の違いで不快にするかもしれない。そんなことを考えてしまうのだ。屋敷の部屋は有り余っている。一人一部屋宛がっても、十分に余裕がある。結瞳と瞳、夏音と夏穂は同じ部屋にして、萌葱、零菜、麻夜、紗葵はそれぞれ一部屋ずつ宛がわれた。

「アカネ、そんなにいろいろ考えなくていいよ。普通でいいの、普通で」と、一通りの案内を終えた後で、東雲が耳打ちする。

「普通と言われましてもですね、さすがに限度があるわけですよ」

「初対面の相手に緊張するアカネも珍しいよね」

「大旦那様の奥方様です。何よりも失礼ないようにしなければと気を張るのは、当たり前です」

アカネは東雲の専属メイドではあるが、雇い主は古城ということになっている。

その妻である夏音と結夢は、直属の上司の妻である。気にするなというほうが無理な話だった。

「んー、てかわたしは？ 大旦那様の娘なわけだけど」

「ですから普段から失礼ないよう勤めておりますよ。シノ様を崇拝するが如く地面を這い、御姿を視界に入れることのないよう常に頭を下げていろというのであれば、当然、そのようにいたします」

「そんな極論は言っていないでしょー」

東雲は苦笑いを浮かべる。

アカネとの付き合いも長くなる。同じ屋根の下に暮らしているので、自然と距離が近づいていて、今となっては主従というよりも友だちであり、家族も同然という認識だった。

「シノ様、お祭りの準備をしますので、少し外しますね」

「うん、分かった」

チョコ合戦に参加するには、事前の準備が必要だ。アカネには人数分を用意してもらおう手はずになっていた。

「どうしよっかな。みんなのここに行ってみるかな」

東雲は踵を返した。

家族に会うのは一か月ぶり、この屋敷に招いたのは初めてのことである。自然と歩みも軽くなる。どうも、みんながこの家に集ったのが嬉しいらしい。自分でもこんな気持ちになるとは思っていなかったが、家族が一緒というのは不思議と気分がいい。

ドアを開けたままにしている萌葱の部屋の前に来たので、部屋の中を覗いてみた。

「萌ちゃん、部屋どう？」

「うわッ、あ、なんだ東雲か。びっくりした」

「ドア、開いたままだよ？」

「あ……そうだった」

萌葱は素でドアを閉め忘れたのだろう。部屋はこの日のために掃除をしていたので綺麗だ。ホテルの一室のように、ベッドもテレビも空調もきちんと揃っている。

「なんか、ホテルみたい。生活感がなくて落ち着かないわ」

「だって、普段使ってないもん、この部屋」

「贅沢だ。こんなに大きなお屋敷に一人暮らしなんて……いや、アカネさんもいるけどさ。それにしても、ねえ」

「そうかな。そうでもないよ。屋敷が大きいから、夜なんて真っ暗。トイレに行くのも、大変だよ」

「うーん、そう聞くとホラー」

萌葱は真っ暗な夜の廊下を想像して身震いする。

広い洋館。人気はなく、静まり返った夜の廊下は、ホラーかミステリーか、とにかく不気味な要素に満ちている。

「で、萌ちゃんは何してたん？」

「ん、んう……何というと、えーと、お土産？」

「え、何、なんか持ってきてくれたの？」

「はい、これ」

萌葱がスーツケースから取り出したビニール袋には、一升瓶が入っていた。

「お酒？」

「さすがに違う。これは百パーセントオレンジジュース。最近、うちのプラントで

作り始めたヤツ」

「へえー、そんなの作ってたの？」

「そうみたい」

暁の帝国は人工島であるがゆえに、昔から食料自給率が低い傾向にあった。食糧難に備えて、バイオプラントの整備と効率化は急務で、力を注いできたのだが、近年はこうして採れた果物をジュースにして売り出すこともできるようになったのだ。

「で、そっちが風君用？」

「ん……ん、分かっているならいちいち聞くなっただの」

「あはは、気になるじゃん、そういうの」

スーツケースの中にあるのは綺麗にラッピングされた小さな箱だ。季節柄、何なのかは察することができた。

「そういう東雲は？」

「わたしはもう午前うちに空菜ちゃんと渡したよ」

「そう。ちなみに何を渡したの？」

「なんの銜いもなく普通のクッキー。萌ちゃんは？」

「似たようなもん。いわゆるスコーンってヤツ」

「また、珍しいところに目を付けたね」

「だって、毎年同じだとまたかつてなるじゃん。そろそろ違う方向性を検討するべき段階なんじゃないかと思うのよ」

バレンタインだからといってチョココレートを渡さなければならぬわけではない。最近は様々なバリエーションが増えているのも事実で、必ずしもチョココレートという時代ではない。東雲のようにクッキーというのも、一般的になっているし、そこからあえて外して違うお菓子を用意するのも悪くはない。

「ということ、ちょっと渡してくる。凧君の部屋、どこ？」

「ここ出て、左の奥」

「ありがとう」

プレゼントを持って萌葱は部屋を出て行った。

プレゼントの贈り合いは毎年のことだ。例年の慣行なので、今更緊張も何もない。流れ作業のようなものだ、しつつも、いつもよりも少し気合の入ったラッピ

ングをしたスコーンを持って萌葱は風の部屋に向かった。

萌葱の気持ちも分からなくはない。風はもともと弟分であり、家族であり、そして心を寄せる相手でもある。距離感はかなり難しくなっているだろう。そうした上でクリスマスの事件があった。萌葱は風の命がけの行動によって救われたわけで、バレンタインはその時の感謝を伝えるイベントとしては最良だった。

「渡すところ、覗くってわけにもいかないか」

どうなるのか、正直に言えば気になる。まさか、告白をするとは思わないが、甘酸っぱい雰囲気を作られると、少しもやっとするものはある。

東雲は部屋から出る。

ばったり会ったのは零菜と麻夜と紗葵だった。三人とも小さなビニール袋を持っている。

「みんな揃ってバレンタイン？」

「うん、風君の部屋こっちでいいんだよね？」

麻夜が頷いて、風の部屋のほうに視線を向ける。

「そうだよ。さっき、萌ちゃんも行ったところ」

「萌葱姉さんが？　なんだ、一緒に行けばよかったのに」

「いいのかな、今行つて」

「時間を置いたら、渡すタイミングなくなるって。大丈夫大丈夫、なんか雰囲気違つたら引き返せばいいんだよ」

萌葱が凧とどうこうなるとは考えられないが、クリスマスのこともある。男女の関係は別にしても、何か萌葱から伝えているかもしれないので、そこは気を回すつもりではあつた。

とはいえ、プレゼントを渡すという点で麻夜たちも同じ立場である。様子を見るくらいはするが、必要以上の配慮はしない。さすがに、本当にいい雰囲気になつていれば、それは考えるが、萌葱がそこまで大胆に行動するとはどうしても思えないのだ。

「東雲姉さんは？」

紗葵が東雲に尋ねる。

「わたしはもう渡した」

萌葱にしたのと同じ回答をする。

「じゃあ、うちらが最後じゃない？」

「早く渡しちやおう。善は急げっていうし」

三人揃って萌葱の後を追うように風の部屋に向かっていく。

年に一度の行事とはいえ、確実に姉妹分はチヨコがもらえる風は幸せものだ。その分のお返しに心と金を碎かなければならないことを考えると同情はしてしまうが。東雲は三人の妹の背中を見送って、一旦自室に戻ることにした。

## 第五部 十二話

暁家が屋敷にやってきたことで、屋敷の中は一気に賑やかになった。二人で暮らすにはあまりにも広すぎる洋館が、ついにその役目を果たすこととなったのだ。それでも、やってきたのは両手の指で数えられる程度の人数だ。無駄に広いと東雲が語る洋館の収容人数からすれば、スズメの涙くらいの数でしかなく、学校のクラスまるまる一つ分が泊っても対応できるだけの広さがあることを考えれば、まだまだ寂しいと思えるくらいだった。

凧はベッドでゴロゴロしながら、テレビをつけた。

特に何があったわけでもない一日で、むしろこれからが本番だ。正直、チョコ祭に参加できるのは嬉しかった。世界的にも大きな注目を集める奇祭だ。暁の帝国でも毎年、その様子が報道されて話題になる。テレビを見ても、どの局も今日の一番に向けて過去の映像でチョコ祭の振り返りをしていたり、祭の会場に集まり大騒ぎをしている若者を映していたりする。報道キャスターが何を言っているのかはさっぱり理解できないが、とても盛り上がっているのはひしひしと感じられた。

ドンドンドン、と力強くドアがノックされたのはその時だ。

「はい？」

返事をしたが、応答はなかった。

怪訝な表情を浮かべて凧はドアに近づく。

覗き穴から様子を窺ったが、誰もいない。

凧は不用心にドアを開けた。ここで何があるわけでもない。目的不明ながら、誰かが悪戯を仕掛けてきたのかもしれない。

「トリック・オア・トリート！」

声は真下から響いた。

「うお、びっくりした」

心臓が跳ね上がったかと思った。

瞳と夏穂が菓子箱を持って立っていたのだ。まだ年中組の二人の背丈では、覗き穴では見えなかったのである。

「トリック・オア・トリート！」

ぐいぐいと瞳が凧にチョコの箱を渡しにくる。受け取ると、手を出してきた。

「握手握手」

その小さな手を尻は握ってシェイクハンドする。

「ちがーうッ」

憤慨したとばかりに瞳が頬を膨らませた。

「トリック・オア・トリートって言った。お菓子くれるう、にむに」

むくれる瞳の頬を揉みしだく尻。もちもちしていて柔らかい。

「お兄さん、これ、あげる」

「夏穂ちゃん、ありがとう」

夏穂がくれたチョコのパッケージには英語で「Splash!!」と書かれています。混沌界域で販売されている一般的なチョコ菓子だ。

瞳がくれたのも同じメーカーのもので、こちらはなぜか漢字で「雅」とでかか  
と書いてあった。

「瞳ちゃんのは、なんで開いてるんだ？」

「美味しかったぞ？」

「途中で食べたんだな？」

実はけっこう本能に忠実なのかもしれない。瞳は歳のわりにしっかりもの——と見えて、実はその後ろをくつついて歩いている夏穂のほうがりっかりしてて、瞳のブレイキ役になっているのかもしれない。

「わたしだけじゃないよ。夏穂も食べた」

「美味しかった」

「もうちょっと我慢できなかったかな」

二人の部屋から凧の部屋まで一本道だ。ざっと二十メートルくらいの距離である。瞳と夏穂はそれすら我慢できなかったらしく、途中で開封し、中のチョコレートを半分も食べてしまっていたのだ。

本来であれば、菊の花を模した一口サイズのチョコが十二個入っているはずのところ、今は六個しか入っていない。

「これで、トリート貰おうってか。まあ、いいんだけど」

凧はとりあえず部屋の中に引き返した。

その後ろからトコトコと幼女がついてくる。

凧は部屋の隅に置いていたスーツケースを開けた。しゃがみこんで中を漁る。何

かあったような気もするし、なかったような気もする。とりあえず、お菓子類の残りがないか探してみる。

「凧くん、何してんの？」

瞳が背中に引っ付いて、スーツケースの中を覗き込んでくる。

「探し物」

ずっしりとした重みを感じながら、凧は手を動かす。

着替えの入った袋をどかすと、小さなビニール袋があった。中にはレトロな缶入り飴が入っていた。キャンデイドロップスは祖父母の世代が子どもの頃から存在する歴史ある駄菓子である。缶の中に何種類もの飴が入っていて、缶を振って飴を取り出す。欲しい飴を選ぶのは難しいタイプの缶である。

「飴、やるから手を出せ」

「ほい」

奇妙な返事で元気よく瞳が凧の前に手を回してきた。背中からは離れようとしな  
い。小さな手の平に飴を一粒出した。転がり出てきたのは黄色の飴だった。

「レモン味だ」

「レモン好き。やったぞ」

嬉しそうにレモンの飴を口に放り込む瞳。それを羨ましそうに眺めている夏穂にも、凧は声をかけた。

「夏穂ちゃんも」

「ん」

夏穂の手の上で凧は缶を振る。出たのは真っ白な飴だった。

「当たりだな、夏穂ちゃん。ハッカだぞ」

「ん、ありがと、お兄さん」

夏穂はハッカ味の飴を口に運ぶ。味が豊富なキャンディドロップスの中でもハッカは封入数が少ない飴だ。一缶につき、五つくらいしか入っていないレア。そのため、ハッカは当たり扱いだ。小さいころは、ハッカが出ると喜んでいたものだ。

「凧くん、わたしもハッカ欲しいなー」

「レモン食べてるでしょ」

背中によじ登る瞳に凧は言う。

すると、頭上でゴリゴリと固い物が碎ける音がした。

「なくなった」

「よく噛み砕けたな……」

瞳はレモンの飴を噛み砕き、飲んでしまったのだ。口の中の飴を食べてしまつて、二個目を要求するためだった。

「はいはい、手を出しなさい。ハツカね、ハツカ」

凧は缶の穴を覗き込んでハツカが出てくるように中の飴の位置を調整する。

「あーんする」

「何？」

「知らないの？ ドラマでやってた、あーんってヤツ」

「ああ、そういうの。ほれ」

「ありがとう」

肩に頭を乗つけてくる瞳の口にハツカ飴を入れる。瞳はぱくりと飴を食べて舌の上で転がした。

「美味い？」

「美味くもあって、美味くなくもあって不明」

「どういこうった」

妙に神妙な言葉遣いで瞳は答えた。最近見ているドラマの影響を受けているらしい。先週の放送で似たようなフレーズが使われていたのを尻は思い出した。

瞳と夏穂は、少し前までたどたどしく舌足らずな口調だったが、ここ一、二か月の間にずいぶんと成長を感じさせるようになった。テレビの影響もあり、急速に語彙を増やしている。

「あーんは仲良しの証だって」

「それもドラマで言ってたのか？」

「ママが言ってた。こじょーくんとしてた」

「おう、それは……まあ、いいか」

夫婦仲がいいのはいいことだ。子どもにとっては最良の環境だろう。微笑ましい光景なはずだが、あれこれ邪推してしまうのは尻が思春期だからか。とりあえず話題を変えて、夏穂に話しかけた。

「夏穂は、何がいい？」

「オレンジ」

「オレンジね」

瞳に二個目を上げて、夏穂に上げないわけにはいかない。夏穂の要求通りにオレンジの飴を缶から出して渡した。

背中に瞳を張り付けたまま、凧は立ち上がった。子どもの相手をする機会はほとんどない。離れて暮らしていた時は、それこそ年に数回くらいしか顔を合わせることはなかった。今は同じマンションの同じ階に住んでいるので、頻繁に顔を合わせるようになったが、瞳と夏穂が凧のことをどのように認識しているのかはよく分かっていない。

瞳と夏穂の世界は、もともと父と母と姉と先生の四通りだ。そこにふらりと現れた親戚のお兄さんとの距離感、他とは違うものではあるのだろう。

「凧君、ちょっといいかな？」

ドア越しに萌葱の声が聞こえてきた。

「姉さん？ いいよ」

「お邪魔します……お？ なんだ、二人ともここにいたの？」

萌葱がドアを開けて入ってくる。瞳と夏穂がいることは想像していなかったよう

で、少し驚いた様子だ。

「萌ちゃん」

凧の背中にくっついたまま、瞳が萌葱に手を振った。

「瞳ちゃん、バランス崩すからあまり動かないで」

「あはは、ぶらぶらするぞ」

「動くなつてば」

瞳はさらに凧の背中をよじ登って肩車を始める。古城にも同じことをしていたし、話によると保育園でもよくやっているらしい。どうやら、瞳は高いところに上るのが好きなようだ。

「あらまあ、仲のいいことで」

「親戚のお兄さんはレアキャラだからな」

「何言ってるの、ほぼ毎日顔合わせてるでしょ」

「ここ一か月くらいだけだね」

凧が今のマンションに越してきたのは最近のことだ。それまでは、瞳と夏穂にとって滅多に会うことのない親戚でしかなかった。

「萌ちゃん、何しに来たん？」

瞳が尋ねる。

「え？ あー、まあ、いっか。はい、風君」

萌葱はクリーム色の包装紙でラッピングされた箱を風に渡した。

「お、ありがとう姉さん」

「ん、まあ、いいってことよ。今年は、ほらクリスマスに助けてもらったし」

「別にそれは気にしなくていいのに」

「気にしないのは無理でしょ、さすがに」

萌葱は気恥ずかしそうに頬を掻く。

クリスマス当日に起こったテロ事件で萌葱は危うく悪魔に取り込まれてしまうところだった。風が果敢に死地に飛び込んでこなければ、今頃どうなっていたか分からない。それだけでも感謝してもらえないくらいの出来事だった。

大きな事件を乗り越えることができたのは、風のおかげだ。バレンタインは、風にその時の感謝を伝えるいい機会でもあった。

風にチョコレートを渡すのは例年通りだ。今更、緊張も何もないのだが、クリス

マスの一件が背景にあるので、少しばかり贈るチョコレートには気を使ったし、いつものバレンタインとは違う意味合いがあるのも事実である。

色々と思案しながらこの部屋を訪れたのだが、さすがにこの場に瞳と夏穂がいたのは予想外だったし、少し当てが外れたようにも思った。しかし、同時にありがたいとも感じた。二人がいなかったら「微妙な空気」に耐えられなかっただろう。子どもがいれば、子どもに合わせて話を回せるので都合がいいと考えることにした。

「チョコ、チョコどんなの？　ねえこれ、どんなの？」  
瞳が凧の手にある包に手を伸ばす。

「はいはい、ダメダメ。チョコはさっき食べてたでしょ」

「えー、見るだけ。萌ちゃんの見るだけ」

「とりあえずそろそろ降りなさい」

凧の上でゆさゆさと揺れる瞳を持ち上げて、凧はベッドの上に瞳を下ろした。

不満げな瞳はすぐに頬を膨らませて拗ねた風を装う。

可愛らしい年相応の不貞腐れ方に凧と萌葱は苦笑する。

「姉さんのは落ちて着いたら開けるよ」

「そうね。今、開けると瞳たちに食べられそう」

クスクス笑いながら、萌葱は頷いた。

「わたし、食べないけど！」

「自分のすら、途中で食べた、よ？」

心外だと抗議する瞳に夏穂がツツコミを入れた。まさにその通りで、瞳の主張には何一つ信頼できる要素がないのだった。

「忘れたあ」

「あああ……」

瞳が夏穂に抱き着いてそのままベッド上に押し倒す。プロレスごっこが始まる。とはいえ、あまり夏穂はやり返さず、瞳を押し返すだけだ。ゴロゴロ転がって猫のように夏穂にくっつく瞳に対し、夏穂はどこか冷めたように対応している。

二人の性格は正反対だ。しかし、そのためか仲たがいすることもなくいつも一緒に行動しているようだった。

「んー」

瞳に背中から抱き着かれて息苦しそうに呻く夏穂は、瞳を振り払うことなく身体

を起こした。のそのそとベッドの上を這って、枕元に置かれている飴缶を拾い上げた。

「ん」

と、夏穂は凧に飴缶を渡した。

「なんだ、もう一個いるのか？」

「いない」

「いらんのか？」

夏穂は頷き、そして萌葱を指差した。

「え、何？」

萌葱は急に夏穂に指差されて首を傾げた。

「仲良しする？」

「え、何のこと？」

夏穂の言っていることが分からず、萌葱は目をぱちくりとする。

意味を正しく理解できるのは、凧と瞳くらいのものだろう。

「それいー。凧くんと萌ちゃんですれしよー」

瞳が夏穂の提案に乗った。

「凧君、何これ。どういうこと？」

「なんか、この二人の間で流行ってる儀式みたいなもの」

「はあ？」

まったく意味が分からないと萌葱は間の抜けた声で応答する。

「儀式じゃないよ。ただのアイサツ。簡単だよ。凧君がね、この飴を萌ちゃんにあーんする。それだけ」

「あーん!? どゆこと!?!」

「ママがこじょーくんとしてた」

「ん、ぐ……そういうのは聞きたくなかったな」

萌葱は父の醜聞に渋い顔をした。

「萌ちゃんと凧くんもするといいよ。わたしたちもしたし」

「凧君と……?」

「子どもの遊びだぞ」

「分かってる」

瞳の言い分を額面通りに受け止めれば、ロリコンのそしりは免れないので一応の反論はしておく。もつとも、そのまま受け止めるのはよほど理解力のない人間か状況を意図して読まないタイプの面倒な人間だけだろう。子どもの遊びに付き合っているだけのことにいちいち目くじらを立てる必要はないし、別に悪いことをしているわけでもないのだ。

「萌ちゃん、しないの？ 仲良しじゃない？」

「え？ あー、ん、そんなことないよ。ねえ、凧君？」

瞳は不安そうに萌葱を見上げる。その表情に居た堪れなくなり、萌葱は凧に助けを求めるように確認する。

「もちろん」

それ自体はただの事実である。否定の余地はなく、凧は頷いた。

「はあ……仕方ない。凧君、ちょっと恥ずかしいけどさ、それしようか」

「まあ、別に姉さんがいいならいいけど。何味にする？」

「なんでもいい。てか、懐かしいなそれ」

キャンデイドロップスは誰もが子どものころにお世話になる駄菓子である。缶の

デザインは何十年も変わっておらず、今となってはその外見だけでアンティーク家具と並べても雰囲気を壊さないくらいには古めかしいデザインだ。萌葱は風同様子どもの頃に親しんだが、そうでなくとも見た目だけである種の郷愁をの念を抱かせるだろう。

風の手の平に転がり出たのは、真っ白な飴玉だった。

「お、当たり」

「やっぱ、そうなるよな」

「いや、ハッカは当たりでしょ」

そう言いながら、この先どうするというのが風と萌葱の心中に浮かんだ。言葉にすれば、簡単だ。風が萌葱にこの飴を食べさせればいいのだ。しかし、思春期真っただ中の少年少女である。姉と弟も同然とはいえ、子どもにじっと見つめられながらというのは心理的抵抗感がかなり強い。

何か期待しているような視線が二つ風と萌葱の注がれている。瞳と夏穂の好奇心を宿した純粋な視線である。

「姉さん、はい」

凧がハツカの飴を萌葱に差し出す。

萌葱も腹をくくった。

萌葱は凧からハツカ飴を食べさせてもらおう。

「おおお」

瞳が感嘆の声を上げた。

何が「おおお」なのか分からないが瞳はそれなりに納得したようだった。

「ん……ハツカは、久しぶり」

「まあ、滅多に食べないからな、これ」

中学生になった頃くらいには、キャンディドロップスは思い出の彼方に消えていた。今、凧の手元にこれがあるのは、暁の帝国を出国する前日、東雲への手土産を選んでいた時に候補として空菜が持ってきたからだった。

凧は缶に蓋をして、枕元に投げた。

ドンドンドン、とドアが叩かれる。

「はいはい!!」

返事をしたのは瞳だった。

「お邪魔しまーす」

部屋に入ってきたのは麻夜だった。その後ろから零菜と紗葵も現れる。

「瞳に夏穂も、お母さんたちが呼んでたよ？」

「ママが？」

「なんで？」

「さあ。早くいった方がいいんじゃない？」

麻夜の言葉に瞳と夏穂はベッドから飛び降りた。母が呼んでいるとなれば、一目散に向かわなければならぬ。瞳は夏穂の手を引いて、「おじやましたー」と叫びながら部屋を走って出て行った。

「嵐みたいだったな」

凧は疲れたように独りごちた。

瞳くらいの年齢なら、これくらい元気なほうがいいのかもしれない。付き合わせれるのは疲れるが、嫌ではない。

「あんたら、何しに来たの？」

「萌葱姉さんと同じ理由だと思っよ」

麻夜はそう言ってビニール袋から、小さな包みを取り出した。手のひらサイズの紙の包みだった。

「はい、凧君。いつもの」

「サンキュ」

あっさりとした受け渡しは毎年のことだ。

「凧、あたしのはこれ」

紗葵が麻夜に続く。麻夜に比べると一回り大きな紙袋は、有名な量販店のものだ。その中に小さなカップが入っていた。紗葵はカップケーキをくれたようだ。

「紗葵もありがとな」

「三倍、よろしく」

「これ三個？ まあ、食べられるか」

「そういうことじゃないけど!? まあ、食べられるけど、食べられるけどね？」

紗葵が小さい身体を大きく膨らませるようにして主張する。カロリーも糖質も特に気にした様子はない。普段からあまり気にしないで食事をしている、間食も意識していない。花より団子な年頃なのだろうか。

「……じゃあ、はい」

「悪いな」

思えば零菜からこうしてバレンタインのチョココレートを貰うのは久しぶりだ。零菜との関係に溝ができてから五年もの間、付き合いはあったので季節の節目節目に顔を合わせはしたが最低限の関わりに留まっていた。この一年で大きく変わったことがあるとすると、零菜と普通に会話ができるようになったことだろう。それは風にとつても零菜にとつても非常に大きな出来事で、昨年この時期には想像もできなかったことだった。

華やかな美人姉妹からチョココレートを貰うというのは、恐らくは同年代の男子からすれば垂涎の的であろう。それが親戚付き合いも兼ねた毎年のルーチンワークであったとしてもだ。そして、風にとつても毎年のことであって、一か月後にはこのお礼をしなければならぬ。こういった催しは、面倒だと思ふ気持ちもあるのだが、風は性格的に投げ出すことができない。今から、今年はどうしようかと頭の片隅で思案している。

「ねえ、そろそろ時間だよー」

大きな声で、ドアの向こうから声をかけてきたのは東雲だった。

「時間だって」

「もうそんなか」

「いよいよだね」

時計を見ると、確かに東雲が事前に伝えていた時間まで五分を切っていた。いよいよ、チョコ祭最大の催しであるチョコ合戦の時間が近づいていた。



「はい、それでは初めての参加となる皆さんに事前説明をします」

大広間に集まった凧たちの前に立つのはアカネである。メイド服から青いジャージに着替えていて、雰囲気が変わっている。

「チョコ合戦の概要ですが、大通りの左右に分かれて反対側に向かってチョコを投げるだけです。簡単ですね。まずは禁止事項です。ルールは魔力の使用禁止、暴力禁止、道具は運営で用意したもののみ使用可、まあ、基本中の基本ですね」

「それだけならルール説明も何もないような」

目の前にいる人にチヨコレートをかけるだけというシンプルなルールだ。相手に怪我をさせなければ、問題は無いということか。

「まあ、確かにあまり細かなルールとかありませんね。勝敗を競うものでもないの  
で。……えーと、それから、ぶっかけていいチヨコも運営が用意したものだけです。  
主に溶けたチヨコを封入したゴム風船……チヨコボムを投げます。事前予約をした  
人には、チヨコ鉄砲とチヨコバズーカが貸与されますが、わたしたちは今回はあり  
ません」

「チヨコ鉄砲はチヨコ用の水鉄砲ね」

東雲が補足説明をする。なお、チヨコ鉄砲もチヨコバズーカもカートトリッジ式  
で、運営が用意したカートトリッジ以外は使えない仕様になっているとのことだ。

「チヨコボムなくなったらどうするの？」

「会場になる道の端に、補給テントがずらっと置かれるので、そこに取りに行きま  
す。補給用のチヨコボムがなくなったら、チヨコ合戦終了です」

「すぐ終わりですね」

麻夜が呟く通り、チョコ合戦はそこまで長時間のイベントではない。チョコボムがなくなり次第終了なので、短期決戦になるのが恒例だった。

昔は二チーム制で勝敗を競っていた頃もあったが、加熱しすぎるとギャンブルの対象になるということで廃止されたという経緯がある。

「チョコは固まんないんだよね？」

「チョコは混沌領域の独自技術とかで、常温でも液体のままだよ。さすがに固まったら、痛いからね」

零菜の質問に答えたのは東雲だった。

混沌領域はチョコレートを主要産業に位置付けていて、様々な商品開発を国家プロジェクトとして推し進めてきた。冷やしても固まらないチョコレートは、その事業で開発された技術の一つであった。

「ええと、後は、さすがに用意はしてないと思いますけど、ホワイトチョコを混入するのは禁止されています。使ってる人がいたら運営に通報してください」

「ホワイトチョコ、なんでダメなんですか？」

紗葵がアカネに疑問を呈した。

「一回目の合戦後に、いろんなところから苦情が来たみたいです。見た目がアウトだそうです。まあ、そうなりますよね」

「アウト？　なんでそれがアウトなんですか？　ホワイトチョコでもいいような気がしますが。別に害はないし」

「害はないですし、チョコとして捉えるならいいんですけど、世の中にはそうでない人もいるわけで、えーと、それをわたしから説明するのは難しいかなと……はい、じゃあ、それはシノ様にお任せします」

「え、わたし!？」

急に話を振られて東雲は驚く。

「いや、今、わたしに振られても困るんだけど！　説明するのはアカネでしょ！

最後までちゃんとしてよ！」

「妹様に変な知識を与えるわけにはいきませんので。責任とれませんか。姉としてちゃんとした知識を伝えてください」

声を潜めて主従が口論する。紗葵は何をそんなにバタついているのか理解できていないようで胡乱な表情で二人を見ている。

「ねえ、凧」

「ん？」

「なんで、ホワイトチョコダメなの？」

「えー、そうだな」

紗葵はどうもこの手の話に疎いようで、いまいちピンと来ていないらしい。こういうのは聞かれたほうも恥ずかしいのだが、それ以上に聞いている方がもっと恥ずかしい。今はいいとして、友達に聞いたりしたら大変なことになる。

「保健体育的な話になるんだ……痛えッ」

横腹を抓られて凧は呻いた。犯人は零菜だった。

「ちよっと、凧君。何、言おうとしてんの!？」

「じゃ、どうすんだよ」

「んー、とにかく凧君言うのはセクハラだから」

「そう言うと思ったけど……じゃあ、零菜何とかしろよ」

「わ、わたしに説明させるのも、セクハラだから！」

「どうしろってんだよ」

零菜は頬を染めて風抗議する。言わんとすることはよく分かる。確かに風が説明するのも零菜に説明させるのもセクハラと言われかねない。

「その、葱葱ちゃんに何とかしてもらおう、とか」

「え、わたし?」

葱葱は葱葱で飛び火してきて肩を震わせた。

気配を消して会話に組み込まれないように黙っていたのに零菜からストレートに飛んできて困ってしまった。

「ねえ、何でみんなしてそんな慌ててんの? あたし、変なこと聞いた?」

「変なことではないんだけど、その、ねえ」

「説明が難しいというか……」

姉と兄が言いよどむ理由がさっぱり分からない紗葵は、ムツとする。一人だけ分かっているという状況に腹を立てているのだ。自分の無知さを論われているような気持ちにすらなるし、自分の質問をきちんと受け止めてもらえないようにも思える。

「とりあえず……チョコ合戦が終わったら自分で調べるってことで」

萌葱の適当な妥協案。しかし、姉も兄もそれで合意したようで、これ以上の回答は得られそうもなく紗葵はムスツとした。

説明担当としての職責を全うさせられるのではないかと危惧していたアカネもほっと一息ついた。

「えー、じゃあ、説明に戻りますね。といっても、最後に服装で……これは自由ですけど、雨合羽で済ませる人もいれば、服が汚れるのを嫌って水着になる人もいますし、コスプレする人もいます。現地に着替える場所はないので、ここで着替えて行きます。これで、大まかな説明は終わります。出発まで三十分ありますので、それまでに着替える人は着替えてくださいね」

以上、とアカネは説明の終了宣言をした。ちなみに、ジャージの下にはすでに水着を着ているらしい。アカネは準備万端のようだ。

水着の準備は、出国前に済ませていた。チョコ祭で水着に着替えるというのは事前情報としてすでに把握していたし、せっかくの南国である。チョコ祭がなくとも暁の帝国にはない天然ビーチに行く予定もあった。女性陣にとってはチョコ祭もあるが貸し切りの天然ビーチが魅力的過ぎた。テンションも上がるし、この旅行のた

めに全員が水着を新調していたのだった。

下ネタが一人だけ通じないと辛いぞ。昔、雑談の中で出てきた下ネタを下ネタと理解できず、単語の意味を同級生に聞きまくったけど誰も答えてくれなかったし、後で卑猥な意味の単語だったと知って学校に行きたくなかったぞ。



## 第五部 十三話

チョコ合戦では、チョココレートをぶつけ合う。どこかの国ではトマトをぶつけ合うというが、それに近い奇祭で、参加者は頭からチョココレートを被って全身が茶色く、甘くなってしまふ。会場も一面チョココレート塗れになる。毎年、この祭に参加している東雲は、どんな祭なのかを肌で感じているし、どんな準備が必要なのかも熟知している。水着で参加するのなら、汚れてもいい水着で参加しないと後で大変だというのも実体験として把握していた。

自室で東雲は姿見と向き合っていた。

自分におかしなところはないか、最終チェックをしている。

シンプルな三角ビキニである。明るいグリーンは、若々しく健康的で明るい印象を与える。ビキニなので肌の露出は多いが、しかし性を必要以上に強調しない雰囲気醸し出す。見る角度によっては虹色に輝く東雲の金髪にもよく馴染んだ色彩だ。

「あ、それにしたんですか？」

と、部屋に入ってきたアカネが言う。

「なんか変？」

「いえ、よくお似合いですよ。去年買ったヤツですよ？　結局、一回しか着なかつたと思いますけど」

「だから、着るんだよ。海では別の着るし」

「たった二回で廃棄されるなんてかわいそうなビキニですね」

「廃棄するって決まったわけじゃないし。チョコついても洗えば綺麗になるかもしれないし」

「いやいや、捨てましょう。チョコ合戦の水着は使い捨てですよ、基本」

液体チョコレートが繊維の奥まで浸透すれば、そう簡単には落ちないだろう。洗濯をするのは東雲ではなくアカネの仕事でもある。アカネとしては何も考えずに廃棄処分してくれた方が仕事の手間が減って楽なのだ。

「それにしても、昨年新調した水着を今年も着ることができるといのは」

「何が言いたいのかな？」

「特に成長がなかったということかな、と」

「……なんでそんな酷いこと言うの？」

表情の抜け落ちたような顔をする東雲。

実際、自分でもショックだったのだ。東雲は十六歳。ちょうど成長期だ。身長伸びは昨年がピークで今年は二ミリしか伸びていなかった。これは誤差の範疇で、午前と午後測定して結果が変わるとかその程度の差異でしかない。一年の間に縦には伸びなかったのだ。不幸中の幸いか、横に膨らむこともなかったが、それは胸部も同じようなものだった。

東雲自身気にしていることであって、自分なりに調べて自分なりに努力はしていた。どれも眉唾ものの説ばかりで信ぴょう性のないものばかりだったが、何もしないよりはマシだと思って頑張った結果、昨年のビキニが特に問題なく着用できるといふ結果をもたらした。一年間の努力は水泡に帰したのだ。

「体脂肪率がほとんど変わらなかったというだけ、よかったと思えばいいのでは？」

「く……そういうアカネはどうなのよ」

「まあ、わたしも変わりはありませんよ。年齢的にも成長期、そろそろ終わりです

し」

東雲よりも年上のアカネは、自分の成長に期待はしていない。身体作りに余念がないのは東雲と同じだが、その目的も現状維持であって、東雲のように高みを目指すものではない。アカネの目標数値は概ね達成されており、現状に不満はないのだった。

「それで、何しに来たの？」

「手荷物の確認です。後で不足があると悪いので」

「なんか持ってくのあった？ 会場には持ち込めないでしょ？」

「会場に持ち込めなくても、貴重品以外にもロッカーに入れておくものはあります。薬とかね」

「いるかなあ」

チヨコ合戦の会場は手荷物の持ち込みが強く規制される。物を投げ合うという成り立上、ちよっとした物が凶器になり得るからである。

そのため、貴重品は会場周辺に設置されている簡易ロッカーに仕舞うか、そもそも持ってこないかという対応が必要になる。

「葉とか、わたしたちにいる？」

「体調崩したばかりのシノ様がそう言うのはどうかと。また座薬しますか？」

「それはやだけど」

不老不死、致命傷でも魔力があればすぐに回復できる吸血鬼でも、体調不良に陥ることは珍しくない。不死力の根幹である魔力の循環が乱れば調子が悪くなるし、風邪を引くこともある。精神面は他の魔族や人間と変わらないので、心の病も近年増加中だ。吸血鬼だからといって常に健康健全でいられるわけではない。

「ということ、念には念を、いくつか葉を見繕っておきました」

と、アカネはシヨルダーポーチから葉の箱を取り出してテーブルの上に並べる。中にはすでに開封してあるものもあり、東雲やアカネが日常的に使っている風邪薬や整腸薬がほとんどだった。

「消毒薬とかいる？」

「風様に使うことがあるかもしれませんが。あの方、普通の人より回復が早いと言っても吸血鬼ほどではないんですよね？」

「あ、そっか。今、どんなもんなんだろ」

凧の身体はクリスマスを境に急激に吸血鬼に近しい能力を備え始めている。生まれつきの能力を封印していたのだが、那月によって解除されたのである。完全な吸血鬼にはなれないが、迫ることはできる。凧の回復力がどの程度になっているのか、東雲は知らないし、凧もすべてを把握しているわけではない。

「お腹の薬と……頭痛薬？ こっちは車の酔い止め、虫刺されのも持ってく？」

「虫刺されはわたし用です。シノ様たちにはいらなんでしょう」

「まあ、そうだね」

吸血鬼は蚊に刺されない。吸血鬼が発する魔力を摂取して無事でいられる虫は、それこそ魔獣の類になるだろう。

「これ何？」

並んでいる薬の中にピンク色の四角い小さな袋を見つけた。

「コンドームです。知りませんでしたか？」

「コン、……えッ、何で？」

「念には念を、です。何が起るか分かりませんし、もしもに備えるのは大事でしょう。いざ、となったときに手元にこれがないとよくないですから」

「いざって何よ、これ使うの前提って」

「いくら吸血鬼の出生率が最低レベルとはいえ、避妊具なしは危ないですよ？ 吸血鬼の皆さんは、軽い気持ちで避妊しないでしちゃうことが多いみたいですけど、病気もあるかもしれませんし。シノ様のことですから、迫られたら断らないでしよう」

「え、迫られたらって、そりゃ、まあ……いや、そういう話をしてるんじゃないけど。別にわたし、こんなん使う相手いないし、しないし、いらぬし」

「相手ができるかもしれないですよ。何せお祭なんですから。浮かれた気分で何かが起こる。そんな可能性も否定できませんよ」

「ないって。わたし、これでもお姫様だし」

暁の帝国では、基本的に恋愛は自由だ。誰と結ばれようと、相手が人として問題がなければ問題視はしない———というスタンスではある。少なくとも、東雲たちを政略結婚に使うような話は皆無で、そういった話は全力で上が拒否しているらしい。

当の本人たちは気楽でいいのだが、同時に自分の立場を意識もしている。好意

を抱く相手がいたとして、自分たちの事情に巻き込んでしまっていていいのだろうか、と気後れする。子どものおきのように無邪気に振る舞うことが、年々できなくなってきたのは厳然たる事実だった。凧と自分の関係性に絞ってみても、家族、親戚、友達、皇族と一般人と、どうにも、線引きが難しい。どこかで線を引かなければならないのか、それともあくまでも家族として身内の範疇で捉え続けて大丈夫なのか。中途半端な現状をいつまで続けていられるのかは不透明なままだ。

凧に対して好意を抱いているのも事実。姉妹の誰もが、少なからず好意的だ。その方向性や強度に違いはあっても、凧を嫌っている者は一人としていないだろう。だからこそ、行動一つで関係性が大幅に変わる恐れがあった。東雲に今までの関係性を変えてまで、行動を起こす勇氣はなく、しかし同時に誰かが行動を起こすのを恐れてはいる。東雲にとっての一番は、誰も何もしないことだ。

「ま、とりあえず入れときますね。使わなかったら使わないでいいんで」「いらないんだけどな、ほんとに」

どうあってもこのメイドは自分に凧と関係を持たせようとしているように思える。他人の恋愛を面白がる前に自分のことをどうにかすればいいのに、と思わなく

もない。

「じゃあ、アカネはどうなの？」

「どう？」

「それ使うような相手がいたりするの？」

「今日お休みをいただいていない時点で分かるのでは？」

「えと。ごめん」

妙に強い口調で言われて、東雲はすぐごと引き下がった。反撃は失敗に終わった。言ってくれば有給休暇は取得できる。アカネには、年間四十日の有給休暇が付与されているのに、あまり取得しようとしれないのだ。決まった相手がいれば、もう少し休みを取ることもあるのだろうが、アカネの価値観もあるので、あまり強くは言えない。

「あら、くだらない話をしている間にもう時間になりますね」

「大半があんたが振ってきた話でしょうに」

アカネの口ぶりに東雲が反論する。話が余計に長くなったのはアカネが変な気の使い方をしたからだ。それも面白半分でだ。

水着の上から東雲はブラウスを着て、ミニスカートを履いた。ブラウスは水着が透けて見えるとよくないので、黒色にして、スカートは白と黒のチェック柄。全体的に落ち着いたデザインだ。足元は編み上げサンダルを選択する。チョコ合戦といっても、走り回るわけではない。機動力より見た目重視である。無彩色の服装は、明るい髪色を際立たせる。嗜み程度ではあるが、東雲なりに、ファッションの勉強をして組み合わせを選んでいるのだ。



チョコ祭の会場は首都の中心を貫くメインストリートだ。このメインストリートは横幅八十メートル、長さ三キロにもなる直線で、道の真ん中に植えられた街路樹が車線を分けている。道の左右には、商業ビルが立ち並び、終着点には王宮が聳え立っている。

チョコ祭は、この直線道路のうち二キロを歩行者天国にして、世界各国から集まったお菓子メーカーの宣伝ブースや出店を並べるお菓子の祭典である。そして、

それはあくまでもメイン会場の話であって、この話題性ある祭に便乗して全国各地でチョコ祭を模した祭が開催され、二月十四日は、混沌界域はどこもかしこもチョコレート一色になるのだった。

チョコ合戦の会場は、メインストリートの王宮側の一キロを封鎖して作られる。横幅八十メートルなので、すべてを左右四十メートルで二つの戦場を作り、チョコレートを投げ合うことになる。会場に面した建物は、ビニールシートで覆われて汚れないように守られる。街路樹の左右にはチョコボムの補給用テントが立ち並び、すでに会場入りした大勢の参加者でごった返していた。

「すげえ人……なんだこれ」

数えきれない人の波に風は曝されている。

これでも、入場規制のおかげで動く分には問題ないという程度には抑えられているのだが、チョコボムを投げるとなると工夫が必要そうだ。

チョコ戦争に参加するのは風の他、空菜、零菜、萌葱、東雲、麻夜、紗葵である。アカネはメイドの仕事に従事するとして距離を置くようで、瞳と夏穂ら母子は危険なので出店巡りで済ませるようだ。暁の帝国からついてきた各人の護衛を勤める帝

国職員も会場に合わせて軽装にしている。

ざっと会場を見回すと、貴人と思われる人やその護衛らしき人がちらほらいる。お忍びで参加するのは、暁の帝国だけではないらしい。

水着姿の参加者は思った以上に多い。

雨合羽を着ている人のほうがずっと多いのだろうと思っていたがそんなことはなかった。

「暑いしな」

雨合羽の少なさは、このじつとりとした熱帯らしい暑さが原因だろう。立っただけで息苦しさすら覚えるムシムシとした暑さは、暁の帝国とはまったく異なる気候の表れだ。高い湿度と気温で雨合羽を着ると蒸れて辛いことになる。水着のほうが動きやすく、快適なのだろう。

男女の別なく、水着姿が行き交っている。中には目のやり場に困るような過激な水着を着た女性もいるくらいで、水着を着るイベントとして広く知られているのだろうと思えた。

それと少数だが、コスプレをしている人もいる。見覚えのあるキャラクターに扮

した集団と何度もすれ違っている。

パタパタと手で顔を仰ぐ。高い湿度は汗の蒸発を妨げて、体温を上昇させる。慣れないと熱中症の危険がある。

風に乗ってチョコレートの甘い匂いがやってくる。

二メートルほど先の地面に溶けたチョコレートがぶちまけられている。誰かがチョコボムを落としたのだろう。参加者には最初に一人十個のチョコボムが渡されている。支給される専用の皮ベルトに左右五個ずつぶら下げて持ち運ぶことになっている。人にぶつかるなどで、腰に下げているチョコボムが地面に落ちるのは珍しいことではないようだった。

「あれ、凧君、水着じゃないじゃん」

と、驚きの声を上げたのは待ち合わせ場所にやってきた萌葱だった。萌葱は上下ともにコバルトブルーのスポーツビキニである。激しく動いても問題ないような装備を整えてきたのが見て取れる。

「一応、水着だよ？」

と、凧は答える。

凧の水着はベージュ色のショートパンツで、上半身は黒いTシャツを着ている。水着なのは下だけで、それもランニングで使っても違和感のないショートパンツスタイルなので、水着に見えないと言われても仕方がない。

「えー、水着？ それ？」

「水着だって」

「上は？」

「脱がないよ」

「なん……あ、うん、ごめん」

「謝らなくてもいいけどさ」

こういうことがあるから水着は好きではないのだ。

凧の身体には無数の傷跡が残っている。同年代で、ここまで傷だらけなのは凧らしいものだろう。人の目を引くし、見て気持ちのいいものでもない。だから、凧は上半身を人に曝すことはない。プール授業も見学させてもらっているくらいだ。

「風がないし、蒸し暑いな」

「熱帯って感じの夜だね」

「もう汗かいてきた。始まるまでどっかで涼むのダメかな……」

熱帯の蒸し暑さに文句を言いながら零菜たちが歩いてくる。

「二月に水着になるってのは新鮮だね。ま、今年は結局、学校以外で水着着なかったしね」

と白い歯を見せて笑う麻夜。モデル顔負けのプロポーションを見せてつける黒のビキニである。麻夜がいかに関心の体型に自信があるかを物語っている。事実、麻夜はすらりとしてメリハリのある身体つきをしている。そのため、グラビアモデルもできそうな堂々たる水着姿となっていた。

「どうだい、凧君。男子からの一言待ってるんだけど？」

「みんなすごい似合ってる。文句のつけようがないくらいだね」

凧はとりあえず当たり障りのない言葉を選ぶ。似合っていると思うのは本気だ。それを正面から褒めるのは恥ずかしいという気持ちがあったが、斜に構えた答えは相手を不快にするだけだということも分かっている。少ない語彙から誉め言葉を捻出するのに、一秒とかからなかったのはそういう要求をされるだろうと身構えていたからでもあった。伊達に女性だらけの環境で育っていない。

「……あ、そう」

麻夜は凧の即答に面食らって次の言葉に詰まった。

自分から褒めろ、と暗に要求していたが、いざ褒められたら恥ずかしくなってきたのである。正面から銜いなく言われたのも大きかった。凧が率直な返答をしたのが、麻夜の意表を突いたのだ。

「んー、それにしても、こういう水着は露出が多くて違和感がありますね」

そう言ったのは空菜だった。

空菜の水着は桃色を基調としてカラフルな花をあしらったビキニである。

「学校指定の水着なら授業で着ましたけど、これは全然着心地違うというか、これ下着と変わらないのでは？」

「布面積で言うと、まあ、そうなんだけど。泳ぎやすい材質っていうのを除くと、他所の人に見られてもいいっていうのではあるから」

と、東雲が答えにくそうに言う。

形状も布面積も下着と大差ないという空菜の身もふたもない意見は正しい。水着は見られてよくて、下着は見られるのはダメという基準は、意識や文化の差異でし

かないのかもしれない。

麻夜は言うに及ばず、空菜もスタイルがいい。そのため着るものを選ばず、何でも似合ってしまう。体型を強調するような水着を選んでも、何の違和感もない。

「ん、ん……」

零菜と視線が合うと、零菜は恥ずかし気に視線を逸らした。

零菜と遺伝的に近い空菜も当然そうなのだが、やはり胸に目が行ってしまう。服の上からでも分かるバストサイズだ。水着になると、俄然視線を集める。空菜はまったく気にしていないが、零菜はそれを人目を気にしてか、布面積の大きめのワンピース型の水着であった。ただし、腹部はメッシュ状になっているので、ビキニとワンピースの中間という感じだった。

大人しめで淑やかさを演出する水着だが、それでも隠し切れない巨乳とのミスマッチさがエロティシズムを掻き立てる——という評価をすると、どんな目で見られるか分からないので風はとりあえず黙る。

東雲は明るいグリーン色のビキニで腰にパレオを巻いている。華やかな南国のビーチによく映える水着を選択している。

紗葵はタンキニタイプの水着である。まだビキニの年齢ではない、と凧は失礼なことを考える。紗葵のタンキニは黒地に白い南国植物のイラストを散らしたシンプルなデザインだ。場所を選ばず、同行者も選ばず、いつでも着られる水着というのは長所と言えるだろう。

「その水着って汚れてもいいのか？ みんなガチのヤツなんじゃないの？」

「大丈夫、大丈夫。ストックはあるからね」

何でもないように麻夜は言う。

「空菜はあんの？」

「凧沙さんに買ってもらったので、大丈夫です」

「いつの間に……」

空菜に水着を買ってあげるのなら、自分にも何か買ってあげればいいのにと不満に思う。空菜はもともと何も持っていなかったもので、必要な物を買って与えるのは仕方がないにしても息子をないがしろにするのは如何なものか。もっとも、今欲しい物と言われても思いつかない。目についた漫画を買うために、現金で貰えるとありがたいという程度だ。

「ねえ、そんでどうすんの？」

萌葱が東雲に尋ねる。

「もう始まるんじゃないかな？ 時間、なってるし」

腕時計を見ながら、東雲が言う。

チョコ合戦の予定時刻は午後八時。時計を見ると、ちょうど八時になったところだった。

ちょうど、そこでチャイムが響いた。

「あ、始まるって。この次のブザーで開始。みんな、爆弾持った？」

「持った」

それぞれ両手にチョコ爆弾。見た目は暁の帝国や日本の縁日で見られる水風船と同じだ。どうも、それを参考にして作ったものようである。チョコ爆弾の中にはたつぷりとチョコレートが封入されている。思っていたよりも重量があって、ずっしりとしている。どのチョコ爆弾にも衝撃を緩和する魔術がかかっている、安全対策に万全を期しているのが見て取れる。

放送が終わった。

じつとりとした緊張感が会場を包み込む。熱帯夜に、人の熱気が色を加える。十秒前からカウントダウンが始まって、一秒一秒が異様に長く感じられる中、誰もが口を閉ざして開始のブザーを待つ。そして、静かに嵐を待つ会場に開戦を告げるブザーが響き渡った。

「しゃあ、行くぞお！」

いの一番に声を上げたのは東雲だ。祭の常連である東雲はむんずと掴んだチョコ爆弾を持って人の列を掻き分け最前列に躍り出て、狙いもつけずに全力投球する。放物線を描いたチョコ爆弾は、反対側の集団の中に消えた。続けて二つ、三つと投げていく。東雲に倣って、皆、チョコ爆弾を投げ始める。開始と同時に人の列は前進し、彼我の距離を十メートルほどにしている。この距離が大会に認められた最近接距離だ。前に出れば、子どもでも相手方にチョコ爆弾を投げつけられる。

「死にさせ、こらッ！」

「やりやがったな、この野郎がッ！」

「ヒヤッハーツ、顔面いったぜッ！」

チョコレートとともに一部から怒号が飛び込んでくる。言葉が違うので何を言っ

ているのかまでは判然としないが、チヨコ合戦を通して日ごろのうっ憤を叩き込んでいたようだった。チヨコレートをぶつけるといふ手段こそ可愛らしいが、その熱気たるや凄まじいものがある。

「あつぶね」

顔を反らして眼前に迫ったチヨコ爆弾を避けた。後ろにいた誰かに当たったチヨコ爆弾が破裂して、甘い匂いをまき散らす。そこかしこでチヨコ爆弾が炸裂してチヨコレートをぶちまけている。

放物線を描くチヨコ爆弾。頭上から降り注ぐそのすべてを避けるのは困難。それもこれだけ人がたくさんいれば、移動する隙間も少ないし、無理をすれば危険だ。避けられないチヨコ爆弾が身体に容赦なく叩き付けられる。開始から一分と経たずに、尻の上半身には三発のチヨコ爆弾を直撃していた。

「あはは、チヨコだらけだよ、凧君」

笑いながら、チヨコ爆弾の補充をしてきた東雲が言う。

「東雲……いや、そっちも酷いことになってるぞ？」

「いや、ほら、このお祭の醍醐味はチヨコのぶつけ合いだからね。避けてたら、ダ

メなんだよ? ——ほにゃッ!?!」

そういう東雲の側頭部にチヨコ爆弾が直撃し、盛大にチヨコレートをぶちまける。

「うお、大丈夫か?」

「うん、大丈夫。とにかく、反撃……きゃんッ!?!」

パンパンと連続してチヨコ爆弾が東雲に叩き付けられる。

「甘、くない……苦い。カカオいくつだこれ、もうッ。こんにゃろー!」

東雲が全力投球する。

凧も援護射撃を加える。顔面だけは避けて、後は身体で受け止めた。もう諦めの境地である。そして、それが妙に楽しくなってくる。童心に帰るといふか、こういう後先考えずに汚し汚されを楽しむというのは、子どもの頃に何も考えずにしていた泥遊びに近しいものがある。

「匂いが甘ったるいな、ホントに」

信じられないくらいにチヨコレートの匂いだ。無風状態の会場には、チヨコレートの匂いが充満していて、咽返りそうだ。

「思った以上に、なんかすごいお祭だね」

そう言ったのは零菜である。零菜も零菜で、頭からチョココレートに塗れている。頭上から降り注ぐチョコ爆弾。直撃しなかったとしても、地面に落ちたチョコ爆弾がまき散らすチョココレートで足が汚れる。まったく汚れずにやり過ごすのは不可能である。廃棄予定の水着を選んだのは正解だっただろう。

「あいたッ、背中……う、もうッ」

苛立ったように反撃する紗葵に続いて零菜もチョコ爆弾を投げる。

頭上で大きな破裂音がした。同時に大量のチョココレートが雨のように降りかかってくる。

「な、何ッ!?!」

「チョコバズーカが空中で破裂したみたいだ」

一部、抽選で当たった人だけが装備するチョコバズーカの威力はチョコ爆弾の比ではない。一度に放てるチョココレートの量はチョコ爆弾の三倍だ。それが零菜と凧の頭上で炸裂したのだ。

「本当にチョコだらけ。ん、あ、これは甘いヤツ」

零菜は舌なめずりをして唇についたチョココレートを舐めた。飛んでくるチョコ

レートはカカオの含有量が違う。甘い物から壮絶に苦い物まで幅広い。頭上で炸裂したチョコバズーカはかなり甘いチョコレートだったようだ。

「ほら、二人とも足止めしないで投げる。もう残り少ないよ」

萌葱が凧と零菜に声をかけた。

見れば補給テントにあるチョコ爆弾の在庫が少なくなっている。これがなくなつた時点でチョコ合戦は終了する。

「いけね、マジだ」

慌てて凧はチョコ爆弾を取りに走る。反対側から飛んでくるチョコ爆弾を背中に浴びながら、チョコ爆弾を受け取って、再び戦闘部隊の中に飛び込む。投げて食らって、全力で繰り返す。終了のブザーが鳴るまで、我を忘れてチョコ爆弾を投げ続けた。

開始から終了までに要した時間は二十分ほどだった。大規模な祭ではあるが、話に聞いていた通りチョコ合戦そのものはとても短時間のイベントだった。

「はあ、なんか疲れた。やり切った感がすごいな」

頭から足のつま先まで、チョコレートで汚れている。水着の繊維にまでチョコレートが染み込んでいるのではないかと思えた。

身体は疲れているが、充実した気分だった。大いに笑い走り回ったことでプラスの疲労感を得たのだ。

「いや、酷いねこれは」

手を振ってチョコレートを払う麻夜は苦笑している。人も道路もすべてチョコレート塗れである。

「べっとべと。でもさ、チョコって肌にいいんでしょ？ チョコパックになるかな、これ」

紗葵はチョコレートを拭うのではなく、肌に刷り込むように塗りたくっている。チョコパックは確かに美容でも取り入れられているが、果たしてこのチョコレートでも効果があるのだろうか。美容方面は風よりも女性陣の方が遥かに詳しいので、口出しはしない。

「チョコの匂い、染みつきそうですね。というか、チョコの匂いしかしらないのは、わたしの鼻がおかしくなったのですかね……」

空菜の嗅覚は獣人並みに鋭い。会場に充満する甘い香りは、凧ですらくらくらするほどだ。空菜にはもつと強烈に効いているだろう。害のあるものではないが、それも過剰になれば考え物だ。

「みんな、ほら、前に出ないとシャワー浴びれないよー！」

東雲が呼びかける。

凧たちの頭上には何本もの配管が臨時で設置されている。ここにいくつものスプリンクラーがついていて、終了後に会場を一気に洗い流すのである。チョコレート塗れになった参加者はこのスプリンクラーからの放水で身体についたチョコレートをとすのである。

スプリンクラーが一斉に水を放射する。つい数分前までチョコレートが降り注いでいた会場に土砂降りの雨のように水が撒かれた。

ドドドドド、と滝のような音がする。遠くが放水で霞んでしまうほどの水量である。熱帯夜にはちょうどいいくらいの冷たさで、身体の熱が一気に取り除かれている。

「簡単には落ちないな、これは」

髪を洗い、身体を擦る。チヨコレートは流れていったが肌について油分はなかなか落ちない。屋敷に戻って風呂に入るまでがチヨコ合戦だ。

「一気に汚れが流れていくの見るのは気持ちがいいねー」

全身をびっしょりと濡らしながら、東雲が話しかけてきた。足元を流れる水はチヨコレート色に染まっている。大量の水がチヨコレートを下水道まで押し流しているのである。常温でも液体の状態を保つという独自開発したチヨコレートだからこそ、本来水に溶けないチヨコレートを下水道で処理するという荒業ができるのだ。固化化しないチヨコレートは、水で流れていく。雨の多い混沌界域らしい豪快な水の使い方、会場のチヨコレートは瞬く間に洗い流されていった。



「今年も無事に終わりましたね」

と、安堵した様子で言ったのは、運営本部のテントにいる地方公務員の職員だ。

二十代半ばで、大学を出て三年目になる。

チヨコ祭は国上げた大事業である。安心安全に一日を終えるように、地方の役所職員も全面的にバックアップする。軍警察が治安維持に当たるのなら、彼ら一般職員は運営面を支援するスタッフである。祭の実行委員会は国の所管だが、現場で汗を流す多くのスタッフは地元自治体の職員であった。暴力を伴わないトラブルは、主に彼らが先頭に立って対応することになる。普段はこういった外に出る部署の仕事は門外漢の彼も、今日は休日返上で応援に駆り出されていたのだった。

「まだ、終わったわけじゃないぞ」

「あはは、すみません」

上司に窘められて、青年は頬を掻いた。

これからがまた忙しい時間帯だ。チヨコ合戦の参加者たちが一斉に帰宅する。たくさんの人が移動する中で怪我人が出たり、喧嘩が起きたりする可能性があるし、スリが虎視眈々と隙を狙っているかもしれない。迷子が出るのは、毎年のことだ。『本日のチヨコ合戦は終了しました。お帰りの際は、お忘れ物にご注意ください。小さいお子様をお連れの方は、手を繋ぐなど、お子様が迷子にならないよう、お気

を付けてください』

女性職員が放送分を読み上げている。

ぞろぞろとテントの前を通っていく参加者たち。チヨコ祭の出店はもう日付が変わるまでは続くが、終電間際まで居座って食べ歩く人はそう多くない。毎年のことながら、チヨコ合戦が終わり、参加者たちが列を成して帰っていくと、チヨコ祭が終わったような気持ちになってしまうのだった。

「学生の時は毎年、チヨコ投げてたんですけどねえ」

「君が学生の時は、もうこの祭があつたんだもんなあ。私の時にはこんな祭はなかったから、羨ましくはあるな」

青年と上司の二人は、談笑しつつ人の流れに目を光らせる。困っている人はいないか、落とし物はないか確認している。トラブルが起これば、真っ先に苦情を受けるのは彼らである。というか、大きなトラブルがなかったとしても、休み明けからは苦情対応に追われることになるだろう。それを思うと気が重くなる。

「そうだ、対策本部に定時連絡したか？」

「あ、すみません、忘れてました。すぐします」

青年が席を立つ。テントの端にある無線ファックスを使い、ここから二百メートル離れた国の庁舎にある実行委員会に定時連絡を入れるためである。

一時間に一度の定時連絡は、祭が始まってからほとんど内容に変化がない。トラブルが起きなければ、チェック項目へのチェックすら不要である。送付用のコピー紙を青年が手に取った時、不意に地面が揺れた。

「え？」

地震かと思った。揺れは大きく、突き上げるような振動だった。その直後、マンホールの蓋が跳ね飛んだ。一番高くて三十メートルは飛んだだろうか。ひらひらと舞うように鉄の塊は落下して、運営本部のテントを直撃した。

「うわあああああああッ」

悲鳴が誰のものかも分からない。テントを支える骨はマンホールの蓋が落下したときの衝撃で真ん中から真っ二つに折れていた。長テーブルがひっくり返り、機材が路面に落ちてしまう。

「大丈夫か!? 怪我は!?!」

「こっちは大丈夫です！」

「こっちも、何とか！」

「無事です！」

幸いなことにマンホールの蓋がぶつかった場所には人がいなかった。テントが倒れて下敷きになったが、テントそのものの重量は大したことはない。倒れたテントの下からスタッフが這うように外に出た。定時連絡をしようとした青年もまた、転がるように外に出た。

マンホールの蓋は鉄の塊だ。何が起こったのか分からないが、直撃していたら頭が砕けて死んでいた。魔族ではない人間の青年は、即死するだろう。背筋が凍りつくような気持ちになった。

「何が……起こったんだ？」

立ち上がって前を見る。

一方向に進んでいた人の波が滅茶苦茶になっている。悲鳴が上がり、怒号が響き、パニックを起こしていた。脳が理解を拒むということ、青年は初めて経験した。道路の一部が崩れて大きな穴が開いていた。多くの人がその穴の中に落下したことだろう。地下三十メートルに埋没している巨大な排水路がそこにはあって、ぱっ

くりと巨大な口を広げていた。

「何だ、これ……何なんだこいつ等はッ!？」

排水路から現れたのは、巨大な蜘蛛だった。それも何匹もいる。一匹の大きさは五メートルに届くくらいだが、足を広げると足の先から足の先までで十メートルを超えるだろう。おぞましい蜘蛛の魔獣が、地下から地上へ這いあがってくる。地獄のような光景に、青年は意識を手放しそうになった。

## 第五部 十四話

アスファルトがひび割れて、陥没し、間欠泉のように水が噴き上がっている。地下に埋没していた水道管が破裂して、土と石とアスファルト片をまき散らしながら水を噴き上げているのだ。

悲鳴は水の水音にかき消され、何が起こっているのか把握することも困難な状況だった。恐ろしいことが起こっているということだけが否応なしに理解させられる。

陥没した地面から這い出てきた巨大蜘蛛の魔獣は、ギラギラとした紅い単眼は上下に四つずつ並んでいて、並外れた動体視力を有している。高い跳躍力と三次元的な動きでビルの壁面に飛び上がり、さらに地上で逃げ惑う人々に向けて糸を吐きかけ始めた。

「何なの!?! 何が起こってるの!?!」

紗葵が叫ぶ。周囲は大量の水が霧状になって見通しが悪く、悲鳴や怒号で会話も儘ならない状況だ。

「分からないけど、この場にいるのは不味い……うわッ」

麻夜が人とぶつかってよろめく。自由はない。集まった多くの人が避難経路も何もなく逃げ惑っている。わらわらと湧いて出る蜘蛛に追い立てられて、人の波は滅茶苦茶になった。

「ダメ、みんな手……きゃッ」

零菜も人混みに押し流されるように望まぬ方向に流されていく。

「零菜さん、ご無事ですか!？」

すかさず駆け付けたのは零菜付きの女性攻魔官だ。名は須藤。さすがにプロだけあって人混みでもすぐに護衛対象者に近寄っていた。人の流れに逆らわずに歩を進めながら、零菜に危害が及ばないように特に蜘蛛からの不意打ちに気を付けている。

「すみません……みんなは？」

「各々、担当者が張り付いています。今は、早くここを抜けましょう！」

「あの、蜘蛛は……？」

「よく見えますでしたけど、恐らくは南米原産のセグロオオヒゲクモだと思えます。だとすれば、あの蜘蛛で死人が出るということはあまりないでしょう」

「そうなんですか？」

「はい。あのヒゲクモ類の魔獣は、獲物を捕らえた後、糸で包んで時間をかけて魔力を吸うんです。ですので、命は最後まで奪いませんし、あの蜘蛛の糸は獲物に微量の魔力を与えて生命活動をギリギリまで維持させます。確か、混沌界域の南部のジャングルで二週間、糸に包まれた状態で救出された人がいたという記録を見たことがあります」

「……なんか、詳しいですね」

「魔獣、調べる分には楽しいですよ」

黒い影が頭上を抜ける。

巨大蜘蛛がビルの壁面を駆けて零菜たちがいる一面に狙いを定めていた。

「あ、く……!!」

「零菜さん、ハスタ・アウルム槍の黄金はダメッ！ 感電するッ！」

「ッ!？」

咄嗟に最も信頼する眷獣を召喚しそうになった零菜を須藤が制止する。水浸しになったこの場で雷光の眷獣を召喚すれば、周囲に電撃が駆け抜ける。眷獣の電撃を

制御することもできなくはないが、現実とは言えず危険だ。

零菜の代わりに須藤がヒップホルスターから拳銃を抜いた。護衛任務ということで許可を得て会場に持ち込んでいたのだ。

彼女が愛用するグロリア17は、暁の帝国が開発した拳銃としては最も信頼されているモデルである。黒塗りの実践的なデザインで、外観の遊びは一切ない。使用する弾丸は一般的な9mmパラベラム弾だが、最大の特徴は銃身に刻まれた三種類の呪紋であろう。発射された弾丸は銃口に辿り着くまでに魔術を刻み込まれ、即製の魔弾となる。セーフティレバーを三段階にし、その位置で刻む魔術を切り替えることができる。魔術と科学を融合することにおいて右に出る者のない暁の帝国ならではの凶悪な拳銃だ。

タタタツと軽い銃声。右手一つで銃の反動を完全に抑え込み、三点バーストで蜘蛛の頭を狙う。ヒゲクモ類は視力が発達しており、目に頼った狩りをする。充満する霧が視界を悪くする。十把一絡げの獲物の群れから不意に飛んで来た、蜘蛛にとっては小さすぎる弾丸を回避するのは困難だっただろう。魔弾はすべて命中した。蜘蛛の頭を貫き、脳に食い込んでから、内部で激しく発熱する。グロリア17が

放つ魔弾の中で唯一、対魔獣用を意図した発炎弾である。

中枢神経を焼かれた蜘蛛が力なく落下して水しぶき上げた。

「やった、すごい」

「ありがとうございます」

厳しい表情のまま須藤はグリップを握りしめる。

とりあえず、効果があつてよかったと内心安堵する。もともとグロリア17は対人、対魔族用が開発された拳銃だ。身体が大きく、生命力の強い魔獣には不利。まして、相手は虫の魔獣だ。魔獣ではない虫もそうだが、虫には痛覚がほとんどないと言われている。脳一つ失つたとしても、即座に命を失うこともなく、種によっては頭を失つても反撃してくることもある。魔獣となれば、なおのことだ。セグロオオヒゲグモにとって、ただの拳銃弾が与える程度の外傷などあつてないようなもので、数十発撃ち込んでようやく効果が目に見えるかという程度であろう。発炎弾で、内部を焼くというのは効果的な対処法だが、これが効かなければ彼女だけでは対応困難な相手であった。

会場に持ち込めた銃弾は二十発だけだ。今の戦闘で三発消費したので、残弾は十

七発である。蜘蛛の数が分からない以上、無駄撃ちは絶対できない。

「くッ」

猛烈な爆発音と衝撃が駆け抜けて、悲鳴が上がった。毒々しい魔力を背後に感じる。吸血鬼の眷獣だ。

「こんな人がたくさんいるところで」

破壊規模の大きな眷獣は人混みでは使えない。

第三真祖の血を引く吸血鬼は、武器の形状をした眷獣を宿していることが多いので、人混みでも比較的戦えるが、今、背後で召喚された眷獣は猛獣の姿をした巨体だ。誰かを巻き込んでいなければいいが。翼の生えた虎の眷獣が蜘蛛をなぎ倒し、食い殺す。あっという間に三匹の蜘蛛を討ち果たした。アドレナリンが出て興奮状態になっていいるのだろう。猛然と蜘蛛を叩く眷獣に自分の危険を忘れて声援を送る人も少なくなかった。

逃げ惑う人の中から、蜘蛛と戦うことを選んだ人が出始める。人口密度の低い場所を選び、魔術や眷獣、魔族の能力を駆使して蜘蛛と戦い始めた。軍警察も人が掃けた場所に陣取り、応戦し始めている。

「危ないッ」

飛んで来た糸を咄嗟に回避する零菜。バランスを崩し、人に押されるようにしてビルとビルの間の一メートル幅の路地に押し込まれる。

「大丈夫ですか、零菜さん」

「大丈夫です。須藤さんは？」

「何とか……しかし、路地ですか」

肩で息をしながら路地の様子を確認する須藤。ビルは高く明かりもない。真っ暗な路地ではあるが、零菜も須藤も夜目が利く。この暗さは何の障害にもならない。舗装されていない足元は湿っているが、これは日の光が届かないからだろう。水道管の破裂で生じた水漏れの影響はここには及んでいない。

「眷獣、どうしようか」

「様子を見ながら、ですね。魔力を栄養源にしているあの蜘蛛にとっては、無限の魔力を持つ吸血鬼はご馳走です。眷獣を出せば、間違いなく寄ってきます

「う、キモイなそれは」

零菜は蜘蛛が嫌いだ。魔獣だけでなく、普通の蜘蛛にも生理的嫌悪感を抱く。益

虫などということもあるが、見た目からして零菜にとつては害虫である。その巨大蜘蛛が大量に自分集ってくると思うと、背筋が震える。

「ここはいい避難場所かもしれない。この狭さなら、あの蜘蛛は簡単には入ってこないでしょう」

「そうですね。でも、どうしてみんなここに逃げ込まないだろう」

零菜はふと疑問に思う。

路地には蜘蛛はいない。身体が大きく、しかしコンクリートを砕けるほどの力も強度も持たないからだ。

「人払いの結界が張ってありますね。こっちの術式ですから、ぱっと見分かりにくいですが。チョコ合戦の参加者なり見学者なりが路地に入るのを防ぐためでしょう。交通規制の一環ですね」

「それでわたしたちも飛び込むまで気付かなかったんだ」

そのおかげで、とりあえずの避難先を見つけたことができた。零菜は深呼吸して、膝に手を突いた。

「これ、何とか他の人も連れ込めたりしない？」

「どうでしょう。迂闊に人を連れ込むと、逆効果の場合もあります。ここは狭いので逃げ場がありません。万が一、蜘蛛が想定外の場所から攻撃してきたらと思うと、人をたくさん呼び入れるのは危険です。それに、混沌界域側がここに人がいると認識していない可能性もあります。救助が遅れたり、ここに人がいないと思って作戦行動を取るかもしれませぬ」

「そうかな。はあ……もう、考えたらきりがありませんね」

「とにかく、今はご自身の身の安全を確保するのが大事です」

「分かってます」

この混乱の中で家族と離れ離れになってしまった。

みんな、そう簡単にどうにかなるとは思わないが、万が一がある。何が起こっているのか全体像が見えないのがさらに不安を掻き立てる。

「出口側から離れましょう。下手に通りの近くにいと、蜘蛛から攻撃される可能性もありますから」

蜘蛛の身体が入ってこなくとも、吐き出された糸が飛んでくることも考えらえる。セグロオオヒゲクモは、素早い動きで獲物を捕らえるだけでなく、糸を投げ縄

のように使って狩りをすることもあるのだ。粘つく糸に絡め取られたら、そのままここから引きずり出されてしまう。

零菜と須藤は、路地の奥に向かって歩く。

この道は、区画整理を免れた雑多な飲み屋街に続いている。入りくねっているのは、この街が徐々に拡大して今の形になった成立過程を表しているようで、こんな時でなければ探検してみたいと思うくらいだった。

左右の建物はコンクリート製のビルから古風なレンガ造りのアパートに代わる。赤茶けた外壁の建物がずっと続いている。

「人、住んでるのかな？」

「住んでいるでしょう。もしかしたら、この騒ぎで避難しているかもしれません……ッ、頭を下げて」

零菜も寸でのところで危険を察知した。銃撃音とともにドスンと物音がした。

「う……気持ち悪い」

落下してきた蜘蛛は、一回りほど小さい。体内を焼かれて黒い煙を吹いている。「子蜘蛛、でしょうか。こんなのがいるとなると、ここも不味いかもしれませんね」

身体の小さな蜘蛛ならば、路地に入ることもできるだろう。

「前門の虎、後門の狼ってところですね」

「どちらも蜘蛛ですけどね」

「前と後ろ、どっちに行きますか？」

「じゃあ、前」

「承知しました」

須藤は警戒しながら先行する。頭上とアパートとアパートの間から敵が来ないか注意深く進む。人とは異なる魔獣が相手だ。対人戦のノウハウはほぼ役に立たない。

曲がりくねった道を進んでいると、不意に開けた場所に出た。住宅の間のできた広場のようだ。中心には噴水まで設置されている。近隣住民の憩いの場なのだろう。背の高いアパートに四方を囲まれた、隠れた公園に続く道は四本。霊菜たちが来た道以外も、曲がりくねっていて先が見えない。そして公園には先客がいた。ロボロのローブを着た人影だ。

あからさまな不審者だ。いかにもこの騒動について知っていきそうな雰囲気。まさ

か、この格好でただのホームレスということもないだろう。ただ、確認する術はない。零菜にも須藤にもこの国での警察権はない。関わらないように、距離を取って進むだけだ。そう思ったが、

「何、してるの？」

零菜がそう口にしてしまうのも無理はない。ローブの人影が何をしていたのか、角度が変わって初めて分かったのだ。

そこにいたのは、一人ではなかった。その人影は白い物体に覆いかぶさるような姿勢を取っていた。地面に横たえられた白い物体は細長くその先端には人の頭があった。それは、蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにされ、意識を失った少年だったのだ。

「見た、な……」

ローブの何かが零菜たちを、ここで初めて認識したようだった。

しわがれた声。しかし言葉は分かった。聞き取りにくいのが、日本語を話している。「言葉が分かるようですね。なら、その子をどうしたのか教えてもらえますか？」

警戒しながら須藤は尋ねた。

警察権がなくとも現行犯逮捕はできる。眼前の正体不明の何者かを静かに問いた

でした。

須藤にとっては零菜を安全圏まで逃がすのが仕事だ。目の前の少年を見捨てることになるが、優先順位はあくまでも零菜である。

しかし、少年が蜘蛛の糸で拘束されている状況を考えると、ロープの何者かはこの事件の核心を知る可能性が高い。二人をみすみす逃がしてくれるとは思えない。何があるか分からない相手に認識された以上、背中を向けるのは危険だった。

「その顔、お前、暁の帝国の、姫、か……ぐ、ふ、ふ……」

フードに隠れて見えないが地の底から響くような不気味な笑い声が聞こえる。

須藤は零菜を背中に隠すようにして、いつでも引き金を引けるようにする。選択する魔弾は治癒の魔弾。対人制圧用で殺傷ではなく、確保を目的とした弾丸だ。

「焰光の瞳、ではない……が、空色の目、は、美しい、な……」

「何を……ッ!?!」

頭上から蜘蛛の糸が降ってくる。須藤と零菜は後ろに下がって回避する。アパートの屋上から顔を覗かせるのは、三匹の蜘蛛だ。それぞれが腹部の先端から糸を飛ばして須藤を絡め取ろうとしている。

「須藤さん！」

「大丈夫、あなたは逃げて！」

「でも……ッ」

糸を飛ばす蜘蛛は巨体なので、この広場まで降りてこられない。その代わりに、蜘蛛がアパート屋上から降りてくる。

「逃がしは、しない」

須藤が発砲し、子蜘蛛を迎撃するがきりがない。零菜と須藤の逃走ルートはすでに蜘蛛が抑えている。逃げ道はない。

「だったら……!!」

ローブの人影が蜘蛛を操っているのなら、これを倒せばここを切り抜けることはできるだろう。危惧しなければならぬのは術者を倒した後の蜘蛛の動向だが、そこまで気を払う余裕はない。

零菜は魔力を右手に集中し、愛槍を召喚する。

「それは、知って、いるぞ」

「な、あッ」

零菜が槍の黄金を呼び出す直前、眷獣へのパスが乱れた。一瞬、別の力が眷獣召喚を妨害したのだ。ローブの人影が零菜に手の平を向けていた。手の平には目玉がついていて、それが零菜を捉えていた。

「魔眼……ッ」

手の平の紅い瞳が発する魔力が零菜の召喚を妨害したのだ。だが、そうと分かっていたら対策はある。魔眼はよほど強力なものでなければ効果は長続きしない。まして零菜のような魔力の塊を術中に嵌めるのは容易ではない。

直後、またしても零菜の予想外の出来事が起こる。

ローブの人影がやおら自身の正体を隠匿していたローブを脱ぎ捨てていたのだ。

「ひいッ……」

その怪奇な姿に零菜は恐れ戦いた。震えあがり、喉が干上がるかと思ったくらいだ。

ローブの人影は男だった。それは声で予想できた。が、まさかローブの下に何も着ていないとは思わなかった。骨格と筋肉を厚い脂肪で覆ったぶよぶよの肉体は大きく腹が突き出ているだけだ。だらしがない。

何一つ評価のしようのない体型である。

変態と叫び、悲鳴を上げなかったのは、この瞬間に零菜が男の術中に嵌っていたからに他ならない。

男はただの露出狂ではなかった。その裸体には戦術的な意味があって、全身に数えきれないほどの魔眼が埋め込まれていた。

「まさか、百目鬼!?」

声を上げたのは須藤だった。

百目鬼は古来、日本に伝わる鬼の一種だ。詳しいことは不明で、魔族とも魔獣とも言われている。戦国時代ごろには姿を消していて、その正体は現代では謎に包まれている。

「う……あ、く」

零菜が膝から崩れ落ちる。

槍の黄金さえ召喚できれば、こんな拘束は無効化できる。しかし一步相手の方が早かった。零菜に先んじて槍の黄金の召喚を妨げ、次いで零菜が年相応の驚愕で思考停止した一瞬の隙を突いて自由を奪った。吸血鬼への対処方法をよく心得た会心

の魔眼だった。

須藤は身動きが取れない。襲い来る子蜘蛛の群れは彼女の対処能力を超えつつある。銃弾は底をつき、今は魔術と体術を駆使して何とか倒されずにいるという状況だった。

「空色の目、第四真祖の血族のもの、なら……宝石よりも、価値が、ある」  
見かけとは裏腹に百目鬼の動きは素早かった。

魔眼の拘束を振り切ろうとする零菜に飛び掛かり、首を掴んで引き倒す。

「が、あッ、あッ」

万力のような力で首を締め上げられる。

窒息して顔色が急速に悪くなる零菜に百目鬼が左手の平を向ける。

百目鬼の手の平の中心に穴が開いている。ぽっかりと開いた穴から血管のようなものが這い出してくる。百目鬼はこうして他者の目を奪うのだ。身体中に開いた眼窩に他人の目を取り込んで、その力を我が物とする。

「い、や……離せ」

気味の悪い触手が目に触れたら終わりだ。零菜は直感して、震える手で百目鬼の

左手を抑えようとする。力が入らないし、魔力も心もとないがとにかく死力を尽くす。

「ああああああああああああああああああッ」

最悪の展開に身が竦む。

そんな零菜の視界が不意に開けた。

「お……ぐがッ」

百目鬼の身体が後方に吹っ飛んだのだ。噴水に叩き付けられた百目鬼は苦し気に呻く。

「か、はッ、はあ、はあ」

零菜の身体に自由が戻った。

「何してんですか、まったく世話の焼ける」

「空菜……はあ、はあ、はああ……助かった、ありがとう」

「動けますね」

「うん」

飛び込んできた空菜が百目鬼を蹴り飛ばした。空菜はさっきと変わらぬ水着姿だ

が、ネコ科を思わせる尻尾と三角形の耳が生えている。獣人の特性を活かした強烈な蹴りだからこそ、重量のある百目鬼を跳ね飛ばせたのだ。

「空菜さん、ありがとうございます」

空菜が参戦したことで形勢が逆転した。白い巨人の腕が猛然と襲い掛かってきた子蜘蛛たちを引き潰していた。

「ぐ、お、なんだ、同じ、顔……双子、か？ いや、そうか……お前が」

「まだ動く。思ったよりも頑丈か」

容赦なく空菜は追撃をかける。何をしてくるか分からない相手は短期決戦で制圧するに限るからだ。しなやかな豹のように距離を詰める。

「ぬうッ」

百目鬼の身体に埋め込まれた魔眼が輝く。青く、赤く、緑に黄色と様々な光が空菜を捉える。拘束能力だけでなく、視力を奪い、聴力を奪い、魔力を奪う魔眼の連続投射である。

「ッ……」

百目鬼は驚愕に目を見開く。息を飲み、そして強烈な衝撃を受けて再度跳ね飛ん

だ。空菜には百目鬼の魔眼の一切が効果を発揮しなかった。それどころかクロスカウンターの要領で振るわれた空菜の右手の延長線上に真っ白な腕が現れて百目鬼を殴り飛ばしたのである。

空菜にも零菜と同じ魔力を無効化する能力がある。零菜よりも自由度は低いが、不意を打たれなければ魔眼に拘束されることはないし、その他の干渉も魔力に由来していれば打ち消せる。

「おの、れ……ぐ」

百目鬼は予想を超えて頑丈だった。空菜の眷獣で殴られて、まだ動ける。

「お前たちの相手を、している時間は、もう、ない」

「何を、う!？」

地面がひび割れて埋没していた電線が襲い掛かってきた。無機物操作の能力だ。空菜の魔力無効化に対抗して、物理攻撃に切り替えたのである。そうして意識を逸らした隙に、百目鬼は無機物操作の魔眼を地面に使った。百目鬼のいる区画が崩れて、沈み込み、地下の排水路が剥き出しになったのである。邪魔な土砂は空中に巻き上げて、百目鬼は排水路に飛び込んだ。

「危なッ」

落ちてくる瓦礫を白い巨人で防ぎながら、空菜は零菜と須藤を庇う。

「あいつ、逃げた？」

「地下に入ったみたい」

零菜に空菜が答える。

「あの魔眼で蜘蛛を操っていたということでしょう。蜘蛛が出現したとき、大規模な道路の陥没がありました。それも、魔眼の力でしょーね」

須藤が呼吸を整えながら分析した。百目鬼は日本に由来する魔族、あるいは魔獣。言動から魔族に分類してよさそうだが、ともかく現代に生き残っていたとは驚きだ。

「空菜はよく、ここが分かったね」

「ああ、それは偶然、偶々。わたしは皆さんと逸れた後、ビルの屋上に駆け上がったんですね。もしたら、蜘蛛に追いかける羽目になってしまっ」

「魔力を食う蜘蛛みたいだからね」

「そうなんですか？ ふうん、まあ、追いつてられてるうちに蜘蛛の動きが変わっ

て、こっちに集まり始めたのでこれは何かあると思って様子を見に来たら、あなた達がいたという感じですよ」

「そうなんだ。うん、まあ、ほんとに助かったよ」

「油断しすぎですね。せっかくの魔力無効化なんですから」

「……う、ごめん」

零菜の油断もあるが、ここに張られた人払いの結界に影響を与える可能性があったため、槍の黄金の召喚に躊躇したということもあった。とにかく、他所に気を使って自分が危険な目に遭うのは本末転倒である。まずは自分の身の安全を確保するのが大原則だ。

「あの、空菜。凧君は？」

「分かりません。凧さんともこの騒ぎで逸れてしまったので。いつもなら匂いで行方を追うこともできたかもしれないんですけど、チョコの匂いがきつくて鼻が利きません」

獣人らしい嗅覚も今はチョコ祭の残り香に邪魔をされて真価を發揮できない。

蜘蛛の襲撃が収まり、糸で拘束された少年を保護した須藤は、無線で暁の帝国の

仲間や大会実行委員会に連絡を取った。

「お二人とも、麻夜さん、萌葱さん、紗葵さんの無事は確認できました。今、それぞれ別の場所にいますけど、何とか安全圏に退避できているようです。それに、東雲さんと凧さんも、混沌界域の担当者が確認したようです」

「よかった。じゃあ、とりあえずは何とかなりそう」

身内の安否確認ができただけでも気持ちが大きく変わる。

蜘蛛の魔獣の問題が解決したわけではないので気は抜けないが、空菜が駆け付けたことで戦力が増えた。蜘蛛の襲撃を逃れて安全な場所まで退避することは、さほど難しくはないだろう。



## 第五部 十五話

立ち上る水煙。響き渡る悲鳴と怒号。突然地面が大きく陥没し、その下から大量の巨大な蜘蛛が出てきたら、どうなるか。そんな三流ホラー映画も顔負けな状況が眼前で発生していた。巨大な蜘蛛の魔獣に対し、会場に集った人の大半は無力だ。ただの間人には無手で魔獣と戦う術はない。獣人と吸血鬼ならば、あの程度はどうとでもなるが、それは戦闘経験を積んでパニックにならなかつた一部だけの話であつて、その一部ですら逃げ惑う数千人も一般人がいては自由な身動きなど取れるはずもない。頼りになるはずの軍警察も、突然の出来事に指揮系統が混乱しているのか動きは鈍い。無論、大量の魔獣が突如地面から出てくるという状況が想定できるとは思えないし、想定できたとして対応できるかという点と困難だろう。

崩落した道路は十五メートル四方で深さは三十メートルにもなる。巻き込まれた人がどれくらいか想像もできないが、ただの間人ならば十中八九命はないだろう。パニックになつた人の波は当然だが、崩落現場から離れようと一気に流れ出す。自分がどれだけ正常な判断力を持つていようと、多くの人が一斉に動き出してしま

えば抗いようがない。

ただの崩落事故ならばまだいいが、蜘蛛の魔獣が大量発生していると、ここを一刻も早くこの場を脱出し、安全圏に逃げなければならぬ。

凧は、人波に完全に飲まれる前に咄嗟にすぐ近くにいた東雲の手を取った。とにかく安全確保が最優先だ。止まっていたのは、押し寄せる群衆に踏みつぶされてしまう。

「凧君ッ……!!? みんなはッ!?!」

「今は走れッ!!」

凧とて、零菜も麻夜も萌葱も紗葵も空菜も心配だ。すぐに引き返して、全員の無事を確かめたいし、全員で行動したい。しかし、状況がそれを許さないのだ。すでに引き離されている。人の流れに逆らえば、重大な事故を引き起こしかねない。

どこかで銃声が響き、どこかで悲鳴が上がる。どこかで何かが壊れる音がする。視界の隅に、糸に巻き取られて攫われる誰かの姿が映った。蜘蛛が群衆の中に飛び込んで、何人も跳ね飛ばし、粘性のある糸で拘束している。転んだ人が誰かにぶつかり、倒れてドミノ倒しになっているところもある。

「くそ……ッ」

この半年余りの間にそこそこの修羅場を経験したので、凧の頭は比較的落ち着いている。あまり思い出したくない経験ではあるが、こんな時に役に立つというのは不幸中の幸いだろうか。

東雲の手を離さないように握りしめて、凧は人波を掻き分けてビルの壁沿いに進むようにした。こうすれば、人の動きにある程度対応できる上、蜘蛛の襲撃方向を制限できる。

「こっちッ！」

不意に伸びてきた手が凧の襟首を掴んで引っ張った。

凧と東雲が引きずり込まれたのは、ビルとビルの間の僅かなデッドスペースだった。

「二人とも、無事でしたか」

安堵の吐息を漏らしたのは、アカネだった。凧と東雲をこの場に引っ張り込んだ人物である。

「あ、アカネ。アカネ、よかったあ」

「シノ様も、お怪我もないようで」

ひし、としがみ付く東雲の背中を摩りながら、アカネは東雲が怪我をしていないか確認しているようだった。

「凧様、シノ様をお連れしていただいて、ありがとうございます」

「いえ、とんでもないです。……咄嗟に手が届いたのが東雲だけだったので……」  
凧の手がもつとあれば、全員の手を掴めた。あるいはあの場に踏み止まっていればよかったのか。前者はともなく、後者も状況からして、選べる選択肢ではない。

「アカネさんもよく俺たちが見つけられましたね」

「そりゃ、わたしはシノ様付きですから。シノ様の身の安全を確保するためにあの手この手を使うのが仕事です。このくらいの人混み、わけないですよ」

笑みを浮かべてアカネは言う。

混沌界域のメイドは主人を守る護衛役を兼ねる。東雲に大事が起らないように、傍で見守り、時に身を挺して戦うのが使命だ。アカネはそれを実行したに過ぎず、特別なことをしたつもりはないのだ。

「そうだ、みんな……みんなを助けないと！」

アカネと合流し落ち着いた東雲は、思い出したように顔を上げた。

「落ち着いてください、シノ様。皆様には、暁の帝国から護衛が派遣されているじゃないですか。彼らもプロでしょう。ここは護衛の皆さんに任せて、まずはシノ様の安全を確保しないとダメです」

「で、でもッ」

「シノ様が戻れば、わたしも凧様も戻ります。シノ様を助けるために、他の誰かも現場に向かわないとダメになるかもしれません。それでもいいんですか？」

「う、う……」

助けられる立場の者がいる一方で、助けに行かなければならない者もいる。逃げるべき時に素直に逃げていけば、そうした人が死地に赴く必要はなくなる。災害時にも、時折報じられることではある。

「今の状況だと、戻ってみんなと合流するのは難しい。俺もアカネさんに賛成だ。ここを離れて、落ち着ける場所を探そう。零菜たちなら、きっと大丈夫だ」

凧は東雲にそう語り掛ける。それは他の家族に手を伸ばせなかった自分に言い聞かせているようで、凧の心中を慮って東雲も居た堪れない気持ちになった。

「アカネ、この後、どうするの？」

「さて、どうしますかかっていうとこなんです。ここなら、あの蜘蛛の体格では入ってこれませんが、糸は届きます。完全に安全とまでは言えませんが」

一息付ける場所ではあるが、もしも蜘蛛がこちらを狙ってきたら糸を吐きかけてくるだろう。強力な粘着力を持つ糸に絡め取られれば、そのままここから引きずり出されることも考えられる。それでも、大型の蜘蛛が入ってこれないデッドスペースは、数少ない安全圏と言えるだろう。ベストではなくともベターな隠れ家であり、ここに籠城するという選択肢もある。

「窓を割ってビルの中に逃げ込めるかな？」

「それもいいですね。そうしますか」

アカネはすたすたと手近なビルの窓に歩み寄って、中を覗き込んだ。それから徐々に足元に転がっている石を拾い上げて、窓に叩き付けた。突然の暴力に窓ガラスはあっさりと屈して、派手に割れた。

「う、わ……ホントにやったよ」

窓枠に残ったガラス片も石で叩き割り、アカネは素早くビルの中に入ってしまふ。

「何してるんです。善は急げ、ですよ」

声をかけられて、凧と東雲は目を見合わせた。それから、意を決してアカネについてビルの中に入っていった。

割った窓ガラスは後日弁償するとして、そこは倉庫のようだった。段ボールがうず高く重ねられていて、焦げのついたフライパンや食器などが乱雑に詰め込まれている。

「壁はコンクリだし、あの蜘蛛のガタイならここには入れないな」

「そうだね」

凧は、窓から身を乗り出して、外の様子を窺った。

メインストリートの人はあらかた逃げ散ったようで、爆発音や銃声が激しくなっている。人が減ったチョコ合戦の会場は、本物の合戦場の様相を呈し、軍警察による蜘蛛の駆除が始まっていた。

「人払いの所為で、ビルに逃げ込むっていう発想自体、普通の人にはないんだな」「やっぱり、そうなんだね。どうも、静かすぎると思ったんだよね。もっと、逃げ

込んできてもいいはずなのに」

大規模なイベントで魔術を使った交通規制をするのは珍しいことではない。チョコ祭は世界に発信される混沌領域最大のイベントに成長している。祭に乗じて窃盗に入られることがないように近郊のビルはわざわざ国が補助を出して人払いの結界を敷いているし、路地やビルとビルの中の狭いスペースにも一般人は注意を向けることもできないようにしていた。

「防犯上の対策ですけど、見直しが必要かもしれないですね。まあ、狭いところだったり、運営側が予期していないところに逃げ込むと、後が大変なので、ある程度避難経路は定められてしかるべきではありますけど」

「さすがにこれは想定外、だよね」

アカネの言葉に東雲は頷いた。

「ああ、それとシノ様、こちらをどうぞ」

アカネが東雲に衣服の上下を差し出した。

「わたしのなので、少し大きいかもしれませんが、その格好でいつまでもいるわけにはいかないでしょうし」

「いいの?」

「はい」

東雲はいまだにビキニ姿だ。服を取りに行く余裕がなかったのだから仕方がない。アカネが渡したベージュのブラウスと細身のジーンズを水着の上から着て、急場を凌ぐことにした。

「そういえば、アカネさんもそのスーツどこから取ってきたんですか?」

アカネはどこからかスーツを取り出して着用していた。

「転送魔術で取り寄せました。風様もよろしければどうぞ、お身体に合うのは、この執事服しかありませんが」

「ありがとうございます……転送魔術ってかなり高度な魔術なのでは?」

アカネの手の平から零れる魔力が魔法陣を描いて、執事服が一着現れた。

「理屈はわたしも分かってないですよ。わたしは魔術についてはさほど得意ではないですからね。でも、まあ、ちょっととした裏技があつて、事前にマーキングした物なら呼び出せるんです」

何でもないことのようにアカネは言うが、それは簡単に言えるほど楽なものでは

ない。空間制御魔術は扱いがかなり難しい超高難度の魔術だ。有名どころの転移魔術となると、それこそ大規模な演算装置の補助を受けたり、高位の魔女クラスの技術が必要になる。それを小さな物品だけとはいえ、事もなげに扱うとはどういう裏技なのか、とても興味が惹かれる。

「ふふ、企業秘密ですよ？」

「分かってます、残念ですけど」

魔術にだって特許はある。それに、家系で伝えてきた秘術等もあるし、体質に関わるものもある。他者の魔術を無遠慮に覗くのはマナー違反だ。

「アカネさん、携帯とか持ってませんか？」

「ありますが、電波が入ってません」

「入ってない？」

「はい」

アカネは頷いて、自分のスマホを風と東雲に見せた。確かに、電波が入っていない。そのうえ、ネット回線にも繋がっていないようだった。

「この辺の基地局が全部やられたってことはないだろうし、衛星にも繋がっていな

い？ 人為的な妨害かな」

機械に詳しいというわけではない三人だが、こうもあからさまに通信ができない状況が作られると作為的なものを疑わざるを得ない。

情報自体が極めて少ないので断言はできないが、蜘蛛の魔獣が出現した光景を見れば、誰かが裏で糸を引いていると思うのは自然なことだった。

「中の様子、ちょっと見ますね」

アカネはドアのほうに歩いていき、息を潜めながらドアを開けた。

凧たちがいるのは、七階建てのビルの一階部分の一室だ。

平時、このビルの一階はブティックや飲食店がテナントとして借りていて、二階以上は法律事務所や建築会社のオフィスが入っている。今日は、休日でチョコ祭もある。その影響なのか、どこも閉まっているようだ。

「警備員くらいはいるかとも思いましたけど、考えてみれば入口は強化ビニールシートで塞がれてましたね」

廊下を覗き見たアカネはそんなことを呟いた。

チョコ爆弾が直撃してもいいように、チョコ合戦の会場沿いの建物の外壁や窓は

特殊なビニールシートで覆われていた。表から人が出入りするの、そもそもできないのだ。

「裏口から外に出られますけど、あえて危険を冒す必要はなさそうですね」

「こういう時の鉄則は動かないで救助を待つ、ですよ。サバイバルじゃないですけど」

凧は、アカネの意見に同意する。

外にはどれだけの蜘蛛がいるか分からない。一匹だけなら凧でもどうにかなる相手だが、それが数を成して襲ってくるとなれば話は変わる。凧はあくまでも個に過ぎず、一人で一群を相手にできるような戦闘能力は持ち合わせていない。東雲ならばどうにかなるだろうが、街中で大規模破壊を得意とする眷獣を解放するわけにもいかない。戦えば大なり小なり危険を伴う。蜘蛛との戦いを避けて安全を確保するのなら、動かないのがベストだ。嵐が過ぎ去るのを待ち、無事に脱出しているであろう零菜たちと合流する機会を窺うのだ。

ビルの中に逃げ込んで二十分が過ぎた。

銃声は鳴りやまない。それどころか徐々に大きくなっていて、時折地響きのよう

な振動を伴う爆発音が響いて、ぱらぱらと天井の埃が舞い落ちる。怖気のする魔力の渦が、先ほどまで笑顔に満ちていた祭の会場に吹き荒れているのを感じる。

かなり強力な力を持つ吸血鬼が投入されたのだろう。

一般人が逃げていなくなれば、吸血鬼の眷獣を解き放つのに支障はない。古代から続く夜の帝国である混沌界域には暁の帝国とは比較にならない数の吸血鬼が軍に属している。

個体で見れば脆弱な部類に入るセグロオオヒゲグモは、眷獣の攻撃が掠めただけで重症を負うであろう。纏めて薙ぎ払うのも難しくはない。軍警察が吸血鬼の職員を戦場に投入したのなら、本格的な掃討作戦が開始したと見ていいだろう。

「せめて、みんなと連絡が取れればいいんだけど」

と、不安そうな東雲が言う。

「式神飛ばしても、どこにいるか分からんとな」

凧も手を拱いていたわけではない。

簡易的に作成した式神を飛ばして零菜たちを搜索していた。何とか接触し、安否確認を取りたかった。しかし、今の凧には式神を作る道具がない。専用の呪符もな

く、何とか逃げ込んだこの部屋に置いてあったコピー用紙を使って作成した式神の精度はお世辞にもいいとは言えなかった。

「不味い、奥へッ！」

叫んだのはアカネだった。

凧が反射的に東雲を引き寄せ、身を伏せて転がった。窓の外から室内に真っ白な糸が吐き出されたのはその直後だった。

「ひいッ」

東雲が小さな悲鳴を上げた。真っ赤な目と毛むくじやらかな頭がじつと東雲と凧を見ていた。成虫に比べるとやや小さな幼体で、だからこそ、狭い路地に身体をねじ込むことができたのだろう。緑色の体液を零しているのは、ここに来るまでに戦闘に巻き込まれたからか。肉体が欠損し、体積が小さくなったことも路地に入れた理由の一つだ。

蜘蛛は魔力に飢えていた。

魔力を主食とするセグロオオヒゲグモにとって吸血鬼は栄養豊富なサプリメントに等しい。魔力さえあれば、欠損した身体を修復し、成長を加速することもでき

る。この蜘蛛がここに辿り着いたのは偶然だが、それによって凧と東雲という極上の餌を見つけることができた。命の危機に瀕した「彼」には、もはや狙う獲物の危険度を計る余裕もない。

「窓からもっと離れてくださいッ」

アカネがどこからかアサルトライフルを取り出した。転送魔術によるものだ。蜘蛛が次の行動に移る前に、アカネは引き金を引いた。

銃口から立て続けに銃火が舞って、室内を明るく染める。至近距離から放たれる5・56mmの弾丸が三十発、全弾、蜘蛛の顔面に突き刺さる。

「く……くッ」

しかし、蜘蛛は退かなかつた。傷口から体液を流しながら、強引に室内に押し入ろうとしている。長い脚を窓から押し込み、文字通り室内を弄った。段ボール箱の山が倒壊し、派手な音を立てて中に入っていた物品を床にまき散らす。

アカネの銃撃は蜘蛛に確かな打撃を与えていた。貫通力のある小口径のライフル弾だ。蜘蛛の外骨格を貫通し、損傷は脳に至っている。これが他の魔獣であれば、この時点で駆除ないし逃走に追い込めただろうが、この魔蜘蛛にとっては撤退する

ほどの怪我ではないのだった。蜘蛛は脳に損傷を受けたとしても、直ちに死に至ることはない。まして、魔力で生きることには特化した魔獣である。体内の魔力を活用し、生存能力を著しく高めている。

「フェール・ミニウム落ちた深緋！」

凧が眷獣を繰り出した。緋色に輝くユニコーン一角獣だ。窓に張り付く蜘蛛に向けて、衝撃波を叩き付ける。

炸裂音とともに蜘蛛の脚は砕け、その身体は反対側のビルの壁面に叩き付けられた。

緑色の血を流し、ひっくり返って蜘蛛は動かなくなる。落ちた深緋の衝撃波が蜘蛛の全身を隈なく破壊し尽くしたのである。小さな穴程度ならばまだしも、内部までズタズタにされたのでは自慢の生命力も意味を成さない。

「助かりました、凧様」

「いえ、こっちこそ」

急な襲撃で一気に緊張感が高まった。

「東雲は怪我は？」

「大丈夫……ありがとう」

東雲はぺたんと地面に座り込んでいる。東雲の眷獣は、ビルの中で使うには威力が強すぎる。彼女がもっと眷獣のコントロールを身に着けて、自在に操れるようになればいいが、今はその段階ではない。戦えるのは凧とアカネの二人だけだ。

「この蜘蛛って、仲間を呼んだりしますか？」

「さあ、どうでしょう。わたしも詳しいわけではないので何とも言えませんね」  
凧の質問にアカネは首を横に振る。

一部の生き物——有名どころではスズメバチ等には、自分が危害を加えられるとある種のフェロモンを発して仲間に危険を知らせる能力がある。まして、相手は魔力を操る蜘蛛の魔獣である。万が一にもこうした能力を有していると厄介だ。

「移動したほうがいいかもしれませんね」

「そうですね。少なくとも、この部屋から離れましょう」

杞憂に終われば、それに越したことはない。しかし、万が一にもこの部屋に獲物がいると周囲の蜘蛛に伝達されていたとすれば、非常に困ったことになる。

「シノ様、移動できますか？」

「うん」

東雲は素直に立ち上がった。移動することに否やはない。守られてばかりというのは癪だが、こればかりは適材適所である。そして何よりも、切断されて体液を垂れ流す蜘蛛の脚が転がる部屋から一刻も早く出たいという気持ちが強かった。

慎重にドアを開けて、三人は廊下に出た。非常灯が妖しく廊下を照らしている。暗闇で視界は心もとないが、足元を気にする者は一人もない。暗闇を見通す技術はそれぞれが別ではあるものの所有しているのである。

「上に行きましょう」

と、アカネが提案する。

一階の入り口は強化ビニールの幕で塞がっているが、魔獣の侵入を阻止するためのものではないし、入口は窓と違って魔獣が出入りできるだけの大きさがある。

三階に向かう階段の踊り場で凧は足を止めた。

「待って、ちょっと止まって」

二人を制止して、一人で三階まで上がった。

「凧君？」

怪訝な顔をする東雲の眼前で、凧は勢いよくその身を翻した。

凧が廊下に顔を出した瞬間に、蜘蛛の糸が真横から飛んで来たのである。目視で確認する余裕がなかったが、直感的に危険を察知した。

「いるッ！」

「もう入ってきたんですかッ!？」

しかも、想定していた一階からの侵入ではなく上階からの侵入である。出入口がどこにあったのか分からないが、セグロオオヒゲクモの巨体を通すだけの窓なりドアなりが上階についていたということだろうか。

徘徊性の蜘蛛の卓越した身体能力は馬鹿にできない。一瞬にして獲物との距離を詰めて捕食することができる。糸での捕縛に失敗した瞬間に、蜘蛛は猛然とダッシュして凧を追っていた。

八本の脚で、人間とは全く異なる動きをする蜘蛛は転がるように階段を戻る凧に射程に収めていた。

凧に向けて糸を吐きかけようとする蜘蛛の脚元が爆発した。衝撃と炎が蜘蛛を真下から襲い、黒煙が上がった。

「は、派手な……」

「眷獸よりは優しいですよ」

踊り場に戻った凧を待っていたのは、今まさに手榴弾を投げたアカネだった。手榴弾の中には金属片が入っていて、これが爆発と同時に蜘蛛の身体を引き裂いた。アサルトライフルの銃撃に動じなかった蜘蛛であっても、脚と臓器を纏めて抉られればまともに動くことはできなくなる。

「シノ様は伏せててください」

アカネは次の銃を呼び出した。

対魔獣用の大口徑ショットガンだ。

蜘蛛を倒すのに必要なのは外骨格を貫通した上で体内の内臓や神経系を引き裂く威力のある攻撃だ。このショットガンなら、狭い廊下での取り回しもよく、蜘蛛に對しても一定の効果を上げられる。

「凧様は上をお願いできますか？」

「分かりました」

下の階の緑色の非常灯の光を黒い凶体が遮った。すかさずアカネが発砲する。散

弾の威力は人間の上半身を一瞬で挽肉に変えてしまうほどであり、象すらも一発で撃ち殺せる。蜘蛛の頭胸部に一発。怯んだ隙にさらに一発を叩き込む。流れるように素早く次弾を装填して、銃口を次の蜘蛛に向けつつ、呼び寄せた手榴弾を壁に向かって斜めに投じる。

壁に当たって廊下の視覚に転がった手榴弾が爆発し、壁に隠れていた蜘蛛に金属片を浴びせかける。飛び出て来た蜘蛛には容赦なく散弾を撃ち込んだ。

「アカネ、わたしにも銃、何か」

「シノ様は銃撃ったことないでしょう？ 素人が使うもんじゃないですよ。そこで座っててください」

「う……」

にべもなく断られて東雲は押し黙った。階段の踊り場で、壁を背にして三人は下の蜘蛛に挟まれている。しかしながら廊下よりも階段のほうが狭い。おかげで蜘蛛は数を待みにすることができず、一匹一匹確実に仕留められている。

「行け、小さな黄金!!」

雷光の豹が刃のように蜘蛛の身体を引き裂いた。電熱が体組織を焼き焦がし、神

経系を破壊する。この蜘蛛は身体が大きく魔力を扱うとはいえ、魔力攻撃に対する耐性はさほど強くはない。体内を駆け巡る雷撃は極めて有効だった。

「駆け抜ける小さな黄金！」

小型で小回りの利く小さな黄金は、屋内での戦闘に秀でている。電光の速度で駆ける小さな黄金は、蜘蛛の運動性能を上回っている。一匹、また一匹と身体から煙を出して痙攣する蜘蛛が続発する。

銃撃と眷獣により戦線は維持された。蜘蛛は満足に三人に攻撃を届かせることができないままに命を落としていく。

「はあ、はあ……っか、いい加減しつこいッ」

パチン、と紫電が駆け抜けて蜘蛛がひっくり返った。

「いくら何でも、俺たちに集中しすぎじゃないか？」

「確かに……といっても、確かめる術はないですし」

銃口から火を噴いて、蜘蛛の飛び掛かってくる蜘蛛の身体を吹き飛ばした。死体の山を押しつけて、蜘蛛がさらに階段を登ってこようとしている。上の階でも同様だ。死んだ蜘蛛を邪魔とばかりに押しつけて階段を降りようとする。

「どっか部屋の中には入れれば、ここよりは安全だ」

「どうしますか？」

「俺が囹になる」

「何言ってるんですか？」

「もしかしたら、俺が原因かもしれないし。俺は、こういうのに好かれる体質らしい。だったら、上手くすれば惹き付けられるかもしれない」

凧は吸血鬼の吸血衝動を向上させる特異体質だ。そして、その体質は吸血鬼以外の魔族や魔獣にも「好意的」に捉えらえることがあるとされる。蜘蛛が凧を優先的に狙っている可能性もあり、そうだとすれば、凧がここを離れることで蜘蛛のうちのいくらかをこの場から引き離すことができるかもしれない。

「そんなの、ダメ！」

真っ先に反対したのは東雲だ。

「凧君は、またそんなこと言って……そんなのするんなら、もう、わたしが眷獣出すよッ」

「それも不味いですよ、シノ様。ビルが崩れます。シノ様はともかく、わたしが死

にます」

額に汗を浮かべつつ、アカネは東雲を制止する。

不老不死の東雲はビルの倒壊に巻き込まれても生き永らえられるかもしれないが、人間であるアカネは十中八九死ぬ。

「眷獣召喚はともかく、凧様が囷になるのは確実性が低いので却下です。下手をすれば戦力が低下しただけになるかもしれないですし」

凧の言う通りに凧が蜘蛛を引き寄せられたとして、残った蜘蛛が依然として多数いるという状況までは変わらないだろう。安定して蜘蛛を倒せる凧を失うというリスクのほうが大きい。

「このままじゃ、ジリ貧だぞ」

危機感を露にする凧。

眷獣も銃弾も無制限に使えるわけではない。そのうち限界が訪れる。そうなったとき、果たして蜘蛛の集団と渡り合うことができるのか。あるいは、本当に東雲が眷獣を解放してビルごと蜘蛛を吹き飛ばすという展開が実現するかもしれない。

じりじりとした焦りに焙られる中、状況を一変させたのは予期せぬ方向から放た

れた強大な魔力の奔流だった。

右から左へ。

一階の廊下を舐めるように駆け抜けていった黒い炎が、一瞬にして蜘蛛の大群を炭化させた。

「何……？」

それは強大な吸血鬼の眷獣だった。

暴走することもなく、完全に制御された眷獣は余計な破壊をすることもなく用事が済んだらすぐに退去した。

「シノさん、ようやく見つけましたよ」

落ち付いた、聞きなじみのある声音だった。

東雲にとっては長い付き合いになる女性。

「ディアドラさん！」

その姿を認めて、ぱっと東雲の顔が明るくなった。

旧き世代の吸血鬼の一人で、戦乱の中世を生き抜いた猛者である。これほど心強い救援は他にないだろう。

「ディアドラさん、どうしてここに？」

「このビルに不自然に蜘蛛が入り込んでるのが見えたので誰か避難者がいるのだからと思うまして、様子を見に来たんです。わたし一人なら、今みたいに手早く終わるので早く救出できますし」

と、得意げに話す。

実際、ディアドラの力は圧倒的だったし、部下を送り込むより自分が戦った方が早いというのは事実だろう。

「実際、蜘蛛と戦闘しているようでしたし、シノさんの魔力も感じたので不味いと思ひ駆け付けた次第です」

ディアドラが視線を上に向ける。そこでは依然、凧が雷光の豹を駆り、蜘蛛と対峙していた。

「上にもいますね」

ディアドラが指を鳴らすと、猛然と現れる黒炎の蛇が三階廊下を焼き払う。

あれだけ苦労した蜘蛛との戦いをディアドラは片手間で終わらせてしまった。

これが旧き世代の吸血鬼の力か、と凧は慄然とした。

「ディアドラさん、その、状況は？」

「はつきりしたことは分かっていますませんが、何かしらのテロだと思えます。犯行声明はまだ出ていませんが、人為的なものなのは、間違いありませんね。これを見抜けなかったのは口惜しい限りです」

警備部門のトップでもあるディアドラは、この問題に率先して対応しなければならぬ立場だ。

「抜けてきていいんですか？」

「現場の指揮は軍警察が担当。うちのほうも課長クラスが詰めているから実務上わたしはいなくてもいいのですよ。それに、暁の帝国の要人に何かあればそれこそ大問題です。こっちのほうがむしろ重大事ですよ」

「そうですか」

東雲は表情を曇らせた。

助けてもらえて嬉しいし安堵して力が抜ける思いだった。それと同時にディアドラが自分のために持ち場を離れなければならなかったことが申し訳ないのである。東雲は自分はお姫様だから助けられて当然、と思えるような育ち方をしていな

い。これは、暁家の教育方針が導いた結果である。

「ディアドラさん」

「どうしましたか、昏月君」

「助けていただいてありがとうございます。この後、どうしたらいいか確認をしたいと思ひまして」

「そうですね。時間もありませんし……このままここに留まることはできませんので外に出ます。走る体力はありますか？」

「俺は大丈夫です」

凧は頷きながら、東雲とアカネを見る。二人とも頷いている。

「そうですか。大丈夫そうですね。では、行きましょう。善は急げというものです。速やかに安全を確保しましょう」

強大無比な吸血鬼にとってセグロオオヒゲグモ等何の障害にもならない。

セグロオオヒゲグモは巨大で敏捷性が高く、一流の狩人だ。知能も比較的高いほうで、狩りはそのスピードを活かした高速移動と吐きかける糸で捉える二種類の方法を使い分ける。普段は、糸で形作られた巨大な巣に、通常二十四近くの成体が暮

らしているときれる。

「昔、ずっと昔に、セグロオオヒゲグモの巨大なコロニーが発見されたことがあります。ここから南西に百二十キロほど行ったところにある熱帯雨林の中です。複数の巣が繋がってできたようで、数百匹もの蜘蛛がひしめいていました」

暗い廊下を歩きながら、ディアドラが昔話を始めた。

「数百匹……」

東雲がごくりと生唾を飲んだ。

巨大蜘蛛の大群というだけで背筋が凍るような思いだ。蜘蛛は見た目からして不快感を喚起する不快害虫である。それが巨大で、しかも大群となるともはや言葉にできないほどの恐怖だ。

「小さな村が近くにありましたが、蜘蛛はその村を壊滅させて、しかし数を維持するためにさらに多くの餌が必要になって、さらに離れた人里を襲うようになりました。わたしが討伐命令を受けたのは、その時です」

「じゃあ、あの蜘蛛と戦うのは初めてじゃないんですね？」

「そりゃ、もう。あの蜘蛛とは長い付き合いですよ。あの巨体ですからね。積極的

にあれを襲おうという魔獣も魔族もいませんし、生物ピラミッドの最上位にいる種の一つでしたよ。昔は」

「昔は？」

「人里に手を出すようになってからは、それこそ戦争状態でした。あの蜘蛛はわたしたちに目の敵にされて、大規模な駆除の結果、三年ほどで人と関わる地域ではほぼ絶滅しました。今はもう密林の奥地にひっそりと暮らしているくらいの珍しい魔獣になったはずなんですけどね」

「ものすごい数が出てきましたけど」

「そうですね。ま、これが人為的な物なら、誰かが手引きしているんでしょう。それは、今後の捜査で明らかになるはずですよ」

非常に珍しい魔獣を大量に繁殖させたのか、あるいは生息地から引き込んだのか。いずれにしても、用意周到な計画があったことを窺わせる。厳重な警戒態勢が引かれていたはずのチョコ祭の会場に、あれほど大量の魔獣を持ち込むなど正気の沙汰ではない。

一行は飲食店のスタッフルームを通り、ゴミ捨て等で使うであろう裏口の前に来

た。

「外に出たらわたしに続いて走ってください。実はここから二百メートルほど行っ  
たところにわたしの家があります」

「ディアドラさんの？」

「はい。分譲マンションですけどね。通勤に便利なので、庁舎近くに買ったんです  
よ。セグロオオヒゲグモ程度の魔獣なら、あのマンションには手出しできません」

ディアドラの本拠地は首都から三百キロも離れた海沿いの町を中心としている。  
彼女は中級貴族なので、領地持ちなのだ。しかし、こうして首都で長らく仕事をし  
ているので領地経営は家臣に任せて、自分は庁舎近くにマンションを買って単身赴  
任しているというのである。領地を家臣に任せて自分は皇帝の傍で仕事をするとい  
うのは、珍しくはない。吸血鬼自身が強大な軍事力である以上、地方の領地に野放  
しにしておくのは建設的ではない。

「では、行きますよ。しっかりついてきてくださいね」

言うや否や、ディアドラはドアを開けて飛び出した。躊躇する余裕はない。凧も  
東雲もアカネもディアドラの背中を追う。

路地裏を抜けて、通りに出た。チョコ合戦の会場からビルを挟んで反対側だ。そこから東に向かつて一直線に走る。道路に車はない。交通規制のおかげで放置された単車が寂しく佇んでいるだけだ。

「蜘蛛がッ」

まだまだいる。ビルの壁面に張り付くものもいれば、道路上で目ざとくこちらを見つけたものもいる。軍警察との戦いで身体を欠損している蜘蛛や、あえなく命を落として転がっている死骸もあった。

道路の先で、大きな虎の脊獣が蜘蛛を引き裂いているのが見えた。氷の槍が蜘蛛を貫き、炎の弾丸が蜘蛛の肉を焼く。魔術と脊獣、そして銃火器がそこかしこで蜘蛛とぶつかっている。

「向かってくる蜘蛛は全部無視してくださいッ」

ディアドラが叫ぶ。それと同時に猛然と駆け寄ってくる三匹の蜘蛛に、ディアド  
ラは黒炎の蛇を叩き付けた。

黒炎の蛇は一瞬で蜘蛛を焼き払い。消し炭に変えた。強烈な魔力の放出は一瞬だけだが、その一瞬で勝敗は決した。

二百メートル弱を真つすぐ駆けて、マンションのロビーに逃げ込んだ。

大きなシャンデリアに照らされた広いロビー。床は磨き抜かれた大理石である。超高級ホテルもかくやとばかりのマンションは、やはり政府の有力者や上場企業の役員クラスが住民の大半を占めているらしい。それだけにセキュリティも万全で、蜘蛛の魔獣が近くで暴れているという状況にあっても、マンションの中は静かであった。それどころか、ロビーの奥には多くの避難者が逃げ込んでいる。ざっと見て、三十人はいるだろうか。このマンションのセキュリティを知っている地元民が、挙って逃げ込んできたのである。管理者側としても追い返すわけにはいかず、ロビーを自主避難所として提供したのだ。

ディアドラはこのマンションの住人だ。管理人もそれを承知しているので、駆け込んできても問題なく通してくれたし、その連れである風たちにも事情を聞こうともしなかった。

「ふう」

と、ディアドラは呼吸を整える。

「何とかなりましたね」

ディアドラが微笑む。

三人は言葉もない。この二百メートルにすべてを出し切ったような気分だった。今までにここまで必死になって二百メートルの距離を走ったことがあっただろうか。

体力的には余裕があるが、精神的にはぐったりとしてしまう。巨大蜘蛛という生理的不快感を呼び覚ます魔獣の襲撃は、想像以上に精神に負担をかけていたようだ。「それでは、このままうちに行きましょう。そこなら安全です。通信が回復するのを、そこで待つのが得策です」

「何から何までありがとうございます。わざわざ、駆け付けてくれて……」

「シノ様は暁の帝国と我が国との友好の証でもあります。それに、もう何年も関わっているんですから、これくらいわからないですよ。ここだけの話、シノ様の身の安全は最優先事項なんですから」

声を潜めてディアドラは言った。

混沌界域で預かる第四真祖の御子。確かに、何かあれば大問題だ。時に、一般市民の命よりも優先して救出しなければならぬ存在が東雲でもあるのだ。

「わたしの部屋は二十二階。エレベータはこっちです」

ディアドラに案内されてエレベータで二十二階まで上がる。

地上二十二階というだけあって見晴らしがいい。周辺は高層ビルが乱立しているが、このマンションはひと際背が高く突出している。そのおかげで、セグロオオヒゲグモの動きが手に取るように見えた。

ビルで隠れたメインストリートからは濛々と粉塵が上がっている。崩れ落ちて陥没した道路の穴から、未だに粉塵が上がっているのだから。黒い粒のようにも見える蜘蛛が四方八方を走り、飛び回り、追い立てる軍警察と死闘を演じている。

「ひどい」

と、東雲は零した。そうとしか言えない光景だった。ついさっきまで万単位の人々が楽しんでいた祭の会場がこの有様だ。セグロオオヒゲグモは命をすぐには奪わないというが、だからといって危害を加えないわけではない。この騒ぎの中で死者が零とはとても思えなかった。

ディアドラが自宅の鍵を開けた。玄関の電気をつけて、家の中を指し示す。

「どうぞ、こちらに」

「すいません、お邪魔します」

東雲が最初に玄関に入った。凧とアカネもそれに続き、ディアドラが最後にドアを閉めて鍵をかけた。靴を脱ぐという習慣はない。そのまま廊下を進んで突き当りのリビングに入った。漂ってくるのは上流階級の暮らすマンションには不釣り合いな水と土の匂いだ。奇妙なアロマを焚いているなど凧は思う。閉め切っていたからだろうか、むわっとした熱が渦巻いている。熱帯の熱帯夜となれば、こうも息苦しいものか。

「電気は……」

眩いたその瞬間に、凧の意識はぐるりと回転した。

## 第五部 十六話

意識が反転する気持ちの悪い浮遊感は、一瞬の出来事ではあった。ディアドラ宅のリビングに足を踏み入れたとき、不意に生じた魔力は凧たちを包み込み、そのまま飲み込んでいた。自分が正体も意図も不明な魔術の行使に巻き込まれたというのは凧を始め東雲もアカネも理解していた。さすがに、何も気づかないほど鈍感ではない。かなり複雑で強力な魔術に囚われたのは、肌で感じていた。

「ッ……と、え、何？」

東雲がきょとんと周囲を見回した。

特に何も変わっていない。

室内に生じた魔術の痕跡もなく、魔術による違和感は何かの間違いだったのではないかと思えるくらいであった。

「ディアドラさん、今、何かありましたか？」

「はい」

と、凧の質問にディアドラは頷く。

「安全を確かなものにするためのセキュリティです。まあ、これでもそここの地位にいる官僚なもので。身体に害はありません。わたしを守るための魔術です」

「そうですか。でも、急なことだったんで驚きました」

「すみません。言っておけばよかったですね」

ディアドラは苦笑した。

ディアドラの立場を考えれば、自宅に独自のセキュリティを敷くのは間違っていない。一国の警備部門を扱う仕事をしている上に、所領を持っているわけだから身の安全を確保するというのは重要だろう。そして、そのディアドラの防御策の中に凧たちも入れてもらったわけだから、凧たちの安全は、ほぼ確保されたと思ってもいいだろう。

「お飲み物……と、冷蔵庫は切らしてたな。すみません、昏月君、アカネさん、手伝ってもらっていいですか？」

「はい」

「今行きます」

キッチンで冷蔵庫の中を確認していたディアドラだったが、どうやら冷蔵庫に飲

み物が入っていなかったらしい。

凧とアカネに声をかけて、リビングのドアを開けた。

「あ、わたしも……」

「シノさんはそこで待っていてください。うちの倉庫、そんなに広くないので」

「え、はい」

自分も手伝おうとした東雲の機先を制するように、ディアドラが断りを入れた。ディアドラからすれば東雲は一番のお客様だ。手伝ってもらおうわけにはいかないという判断だろうか。執事服を着ているような凧や東雲に仕えるメイドのアカネには手伝いを依頼しやすい。

「大丈夫ですよ、すぐに戻りますから」

「いや、別に一人になるからって変な心配はしてませんけど」

東雲は一人が心細いと思われたのが心外だと唇を尖らせた。子ども扱いされるのは、なんとなく気に入らない。自分がまだ子どもだと理解しているが、だからといって何もできないと思われるのは癪に障る———そんな年頃だった。

「昏月君、アカネさんはこっちに」

ディアドラは廊下に出て、凧とアカネを呼んだ。

暗い廊下の電気をつけて、そのまま歩いていく。凧とアカネもその後ろをついて行った。

「広いマンションだ」

凧は眩く。

リビングもかなりの広さがあった。凧が今暮らしているマンションと同じくらいだろう。以前住んでいた一般的なマンションの三倍は広い。そして、ここはもっと奥行きがあるように見える。

高層マンションでありながら、初めから多人数ではなく金のある少人数が生活することを想定した設計なのだろう。

「この部屋です。資材倉庫になってまして」

電気をつけると、そこは下の階に繋がる階段があった。

「マンションなのに下の階があるんですね」

「珍しいでしょう。その分、割高だったんですけど、仕事で使う資材の保管もできるんで重宝してます。ここなら、ほら、万が一にも泥棒は入らないですし、水害に

も強い、空調も完璧です」

「ああ、確かにそうですね」

高層階なら水が流れ込む心配もないし、盗みに入る者もないだろう。災害時の支援助物資等の保管場所としては確かに使えそうではある。

本来の使い方も似たようなもので、この部屋はシェルターを兼ねているのだろう。この部屋だけはコンクリート製であることを前面に押し出すようにした、武骨なデザインだ。壁も床も天井も真っ白で、段ボールの山や台車が置いてある。

「温度も一定に保てるし、食材の保管にも使えますから、非常食以外も結構置けます」

「はあ、そうなんですね。じゃあ、この中に」

「はい。オレンジジュースの箱があります。わたしは飲みませんが友人が来るときに開けたりはしますね」

風呂階段を下りていく。英語で Orange と大きく書いてある。段ボール箱の蓋の隙間から、ペットボトルのキャップが見えた。

「ディアドラさん。これでいいですか？」

指差しながら凧は階段の上にいるディアドラに確認した。

「はい、それでお願います」

ディアドラは微笑み、そしてドアを閉めた。

「ディアドラさん……？」

ディアドラの前にいたアカネが首を傾げた。

凧が段ボール箱を持ってくるというのに、ドアを閉める意図を判じ兼ねたのだ。

ディアドラは笑っている。薄っすらと笑みを浮かべている。その笑顔が不思議と悍ましいものに見えて、ぞっとする。

「アカネさん、そこから離れてッ！」

凧の忠告に若干遅れて、ディアドラから魔力が溢れた。小さな爆発のような衝撃に、アカネが跳ね飛んで、段ボール箱の山に突っ込んだ。

「あ———か」

呼吸を乱したアカネが潰れて内容物の漏れだした段ボール箱と一緒に床に転がる。

「アカネさん!？」

「平気、です。ゲホゲホッ、く……」

口の端を切つて血が零れている。衝撃で足腰が立たないのか、アカネは立ち上がることができないでいる。

「そう……さすがに、頑丈ね」

冷厳に見下ろしてくるディアドラに、今までの人の好きそうな様子は窺えない。ディアドラの声音には凧とアカネへの殺意が明確に籠っている。

「小さな黄金ダイニー・アウルムッ！」

凧は黄金の豹を呼び出した。睨み合いをするまでもなく飛び掛らせる。高位の吸血鬼に先手を取られた以上、問答の余地はない。裏切りの理由は気になるところだが、今はそんなことを気にしている場合ではなく、とにかく速攻でここを切り抜けなければならない。凧が持つ眷獣の中で最速の小さな黄金で、ディアドラの首を狙う。

猛然と襲い掛かる電光の豹を前に、ディアドラは一步も下がることなく、

「燃やせ、ベリヌス」

漆黒の太陽が雷光の豹とともに凧とアカネを飲み込んだ。

黒炎は一瞬にしてすべてを焼き尽くす。その気になれば、人間程度は一秒とかけずに骨も残さずに焼き払ってしまうほどの火力がある眷獣は、かつて敵対した吸血鬼の血を啜って手に入れたものだ。敵の力を我が物とし、戦闘能力を増大させるのも吸血鬼の特性の一つである。

少し特別な力を使えるだけの人間の子ども二人分など、然したる問題にはならない。

部屋の中に転がる段ボール箱は真っ黒に炭化し、中に入っていたジュースは悉くが蒸発し、ペットボトルも溶けて消えている。しかし、燃えやすい段ボール箱が炭化しているとはいえ、残っているのは偏に死体を確認するために火力を調節したからに他ならない。手心を加えたわけではなく、ただ標的を確実に葬ったことを目で確認するためであった。

「今の一瞬で逃れましたか。驚きますね、君たちには」

煤けた部屋の中にあるのは、炭化した段ボール箱だけだった。どの程度の出力で人体が燃え残るかは十分すぎるほどに熟知している。火力調整を誤ったわけではな

いので、ここに二人分の死体がない以上は何らかの手段で脱出したと見るべきだ。思惑通りに邪魔者を抹殺することはできなかったが、凧とアカネが生きているという確証が得られただけでもよかった。殺したと思って何の手も打たないよりはマシだろう。

もつとも、ここから逃れたところで何ができるといっわけでもない。

「転移魔術か眷獣か。そんな情報はありませんでしたけどね」

すべての手の内を二人がディアドラに曝しているわけではないだろう。彼らの手札に転移魔術を実現する何かがあったのかもしれない。それでも、そう遠くには転移はできないはずだ。自由自在に転移魔術を行使できるのは、真正の魔女くらいのものだ。消費する魔力も術の精度も人間が咄嗟に行使できる範疇にはない。

「いいでしょう。エレディア」

ディアドラの呼びかけに応えたのは、黒く染まったマントの男だった。人ではない。真っ白な身体の上に麻のような簡素な素材でできた一枚布の衣服を纏い、その上から西洋風の鎧を装着していた。肌は常に青白く燃えていて、深く被った兜と炎で表情を窺うことはできない。氷のように冷たい炎の魔人というべきか。鎧の隙間

から絶えず零れる火の粉は、物を燃やすことは決してない。むしろ、彼に近づくだけであらゆる生命は凍えてしまうだろう。

「ここから逃げた二人を殺しなさい」

命令は簡潔だった。

騎士は、鎧の軋む音で返答とした。蒼く燃える炎の騎士は、踵を返して部屋を後にする。

騎士が出て行った後で、ディアドラは肩を震わせた。

「うふッ、んふふ、ふふふふ……ッ」

顔に張り付く壮絶な笑み。狂気に侵されたとしか思えない豹変ぶりだ。何年も何年も待ち侘びたその時が今訪れようとしている。興奮を抑えきれず、感情が昂っているのだ。

東雲はまだリビングにいる。この部屋で起こった一瞬の出来事に、東雲は気付いていない。それは当然だ。この家はディアドラの支配下にあり、魔力の流れを誤認させる結果が張ってある。とりわけ、あの物置部屋はシェルターを想定しているの  
で、外部への魔力漏洩は極めて小さくなるようにしてあるし防音も万全だった。も

ちろん、だらだらと戦闘を長引かせていればさすがに隠し切れないが、実際の戦闘時間は数秒だった。

「さて、と。いよいよです」

舌なめずりすらしてしまふ。この日のために、すべてを捨てると決めたくらいだ。自分は余りにも長く生きた。退屈な人生だ。もう何もかもどうでもいい。だから、すべてを放り捨てて刹那の欲望に身を焦がすことにした。

リビングのドアを開けた。

「ディアドラさん……なんか、さっき魔力を感じた気がしたんですけど」

「ああ、大したことありませんよ。少々、虫を駆除しようとしただけですから」

「虫？」

「はい。少し、大きめのサイズだったので、うっかり魔力を零してしまいました」  
「さっきの蜘蛛じゃないですよね？」

「もちろん。あんなもの、我が家に一步たりとも入れませんとも」

東雲は胸を張るディアドラに苦笑する。

巨大蜘蛛ですら歯が立たないディアドラが魔力を零すような虫とはいったい何

なのか。家の中に入り込む不快害虫と言え、ゴキブリかゲジゲジくらいのものでろう。虫の知識はあまりない東雲だが、自然の多い混沌界域での暮らしは長い。曉の帝国よりも多くの純粋な生態系を維持するこの国では、日常的に虫の姿を見かける。何といっても南アメリカには世界最大のゴキブリであるナンベイオオチャバネゴキブリが生息しているのだ。その体長は十センチを超える。そのほかにも大型の生物はたくさんいる。魔獣でなくともビッグサイズなのが混沌界域である。

「あれ、凧君とアカネは？」

「ああ、お気になさらず」

ディアドラは東雲に歩み寄った。フローリングが僅かに軋む。真っ赤に染まったディアドラの瞳に、良からぬ物を感じた東雲は後ずさろうとしたが、そっと伸びたディアドラの手に捕まった。特に何があるわけでもない。少し、いつもと様子が違うと思っただけだ。その予感はずしかなかったが、如何せん信頼関係が出来上がっている。裏切られる側は裏切る側に対して常に後手に回らざるを得ず、ディアドラの両手が東雲の頬を挟み込んで動きを封じた時には、東雲の眼前に真っ赤な瞳が迫っていた。

「ん……むッ!？」

さらりとしたグロスで艶を出したディアドラの唇が東雲の口を塞いでいた。

目を見開いて、頭が真っ白になった東雲の唇を割ってぬるりとした感触が口の中に入ってくる。何が起こっているのかまったく理解できなかった。

ディアドラの口づけは異様に濃密だった。長い年月秘してきた衝動を叩き付けるようであった。東雲の唇を奪ってすぐに、手の位置を変えて、東雲の片手で後頭部を抑えながら、もう片方の手を腰に回し、また自らの腰を押し付けて、全身を密着させる。身体を密着させることで、東雲が蹴りで反撃できないようにしたのだ。

「ん……く……ふぐッ、んんッ!？」

筋力の違いは明白だった。固定された東雲は藻掻いて逃げようとしているが、ディアドラを引きはがすことができない。それどころか、何かしらの呪詛を経口摂取させられているのが分かる。口を通して体内にディアドラの魔力が注ぎ込まれている。

「あ……は、ぐ……あ……?？」

やっとの思いでディアドラから離れた東雲は、動転しながら後ずさった。

「な、に……？ え、今の、何？ なんて……え、あ、え？」

東雲はパニックになっていた。

ディアドラが敵であるということにすら考えが及ばないほどに思考が乱されている。

「ふふ……やっぱり可愛い。びっくりさせちゃったかしら？」

「い、意味が分からない……突然、何するんですか？ じよ、冗談が過ぎるんじゃないですか？」

「冗談？ うふふ、わたし本気よ？ ずっと、あなたのことを想っていたんです」「ど、どういう……」

「何ということはありません。恋であり愛でもあります。あなたはわたしが心から愛し、犯したいと思った女の子の血を継いでいます。二十年前に失われたデカトスの子にも等しいあなたとの出会いは運命なのだとすら思えたくらいですよ」

「デカトス……」

その名に聞き覚えはあった。

第四真祖の眷獣の器はそれぞれ数字で呼ばれていた。デカトスは第四真祖の眷獣

をその身に宿す人工吸血鬼の一人で、東雲の母であるアヴローラと同一の存在だ。デカトスは十番目を意味するが、古城と出会った頃にはディセンバーと名乗っていたという。

アヴローラと同体を成すデカトスの子である東雲は、アヴローラの子であると同時にデカトスの子であるとも言えるだろう。

「今日からあなたはわたしの物です」

「わ、わたしにそんな趣味はないし……その、わたし、帰ります。その凧君とアカネはどこに……?」

「もういないわ」

「え?」

「さっき、わたしの眷獣を叩き込んであげたわ。言ったでしょう、虫を駆除しようとしたって」

「え、あ……?」

ディアドラは変わらず笑みを浮かべている。

対して東雲の顔色は悪い。真っ青になっているし、冷や汗が止まらない。心臓が

バクバクと鼓動を速めている。恐怖と不安で自律神経がおかしくなりそうだった。何一つ、脳が情報に追いつけない。

「凧君とアカネを、こ、殺した？」

ディアドラは何も言わない。ただ妖艶に微笑むだけだ。その余裕のある態度が真実めいていて、東雲は思考の一切を切り捨てて自分の血に宿る眷獣に声をかけた。眼前の女をここで始めて敵だと認識した。

「う……ッ」

ぐらり、と視界が揺れる。

眷獣を召喚しようとしたのに、体内の魔力の動きが悪い。ろくに眷獣に声をかけることもできないくらいに状態が悪い。おまけに指先の感覚が弱まっている。

「怖い怖い。眷獣なんて真っ先に封じるでしょう」

「さっきの呪詛は」

「眷獣封じ。あなたの眷獣は強力ですから。ですので、もっと保険を重ねます」

ディアドラが言うやりビングのドアが開いて、ぞろぞろと人が入ってくる。その数、七人。全員が小学校の中学年くらいの幼い子どもだ。全員が一樣に同じ簡素な

貫頭衣を来ていて、同じ顔をしている。

「何、その娘たち……?」

「見て分かりませんか?」

東雲の眼前にいる七人の少女を信じがたい思いで見るとは思えない。

簡単には認められないが、少女たちは全員東雲の幼少期によく似ていた。

「ふふ、わたしと出会った頃のあなたをモデルにしてみました。あなた専用の眷獣の器です」

「な……眷獣の器って、そんなの」

「完全にとは行きませんが、ディセンバーを取り戻そうと、この二十年研究に研究を重ねてきたのです。第四真祖を引き裂き、封印した古代の天部たちのようには行きませんが、それに似たことはできます」

ディアドラはそう言いながら、少女たちを東雲にけしかけた。

誰もディアドラには逆らわない。

人工的に作り出されたホムンクルスとも言うべき者たちは、意図的に魂を宿さないように調整されている。文字通り、肉と骨でできた人形である。それが一斉に東

雲に襲い掛かった。

「嫌ッ、何ッ、何するのッ……!?!」

少女たちは東雲の髪を引っ張り、身体に張り付き、服を引き、腕にしがみ付く。この時には東雲の身体は呪詛に侵され、満足に動くことはできなくなっていた。あっさり少女に引き倒された東雲の首に背中にくっ付いてきた少女が噛みつく。

「ひ、い……ッ」

鋭い牙は吸血鬼のそれだ。東雲の柔肌を食い破って血を啜り出す。

痛みと快感、そして恐怖が東雲の身体を駆け抜ける。

この少女たちは東雲用の眷獣の器だと言った。ならば、目的は吸血による眷獣の奪取に違いなく、吸血鬼同士の吸血で発生する上書きオーバーライトへの恐怖が東雲を震え上が

らせた。

「やだッ」

身体を捻って東雲はその少女から逃れようとする。力を振り絞って少女を振り払う。しかし、抵抗はそこまでだった。次々と少女たちが東雲に噛みついてくる。首だけではない。強引に東雲を床に組み伏せて手足を拘束し、服を破って肌を曝させ

た。首が一番血を吸いやすいが、一度に噛みつける人数は限られる。だから、血を吸えればどこでもいいとばかりに牙を突き立てる。

「痛いッ、あ、やめ、て……やだ、吸わないでって言うてるのに、ひ、あッ、ん、あッ……い、ああッ」

暴れる東雲を押さえつけ吸血を続ける少女たち。東雲の懇願は魂なき人形には届かない。いくつもの牙が東雲の肌に食い込んで、血と一緒に大切なものを吸い出している。力が抜け落ちて、生まれた時から一緒にいる分身も同然の眷獣たちが抜き取られていくのを感じる。自分の血の中にある力そのもの。東雲を形作る根幹部分が身体から抜け落ちる。

「やめて、もう、離して、噛まないで……うああ、あああ、やだ、助けてよお」

血とともに眷獣と魔力が抜き取られ、やがて東雲からは何もなくなつた。いつも存在を感じていた眷獣が身体から消えて、たった一人になってしまった。悲しくて悔しくて、そして何より今自分を取り巻くすべてが恐ろしくて東雲は泣きながら意識を手放した。



## 第五部 十七話

ヒロインが酷い目に会うのが苦手な人は注意してください。

温度を感じることもできないような超高温の漆黒の炎に雷光の豹が飲み込まれた。風の眷獣は決して強い部類ではない。積み重ねた年月が吸血鬼の戦闘能力に大きく作用するのだから、十五年程度の固有堆積時間しかない上、生来の吸血鬼ではなく偶然力を手にしただけの風の眷獣では、六百年を数えるという旧き世代の吸血鬼には到底及ばない。力の差は歴然で、小さな黄金は一秒と抗うことができず一方的な敗北を喫した。

逃げる場所のない密室で解き放たれた業火から逃れる術はなく、本来ならばそのまま凧とアカネは焼き尽くされていたはずだった。

「く……あッ」

強い衝撃を肩に受けて、訳も分からないまま視界が回る。冷たい感触を背中が捉

え、視界いっぱい煌めく星空が広がっていた。

風で木々がそよぐ音がする。湿度の高い空気はねっとりとして息苦しい。周囲には木々が生い茂っていて、ここは薄暗い森の中にある開けた場所という感じだ。ここが外だということを確認するのに、風は思いのほか時間を必要とした。

「何が……」

迂闊ながらも風は茫然としてしまう。

風を現実に戻したものは、アカネの声であった。

「風様、ご無事ですか？」

「アカネさん？ 俺は大丈夫、みたいです。何が……というかここは？」

「分かりません。ですが、脱出はうまくいったみたいです」

と、アカネは言う。倒れていたのは彼女も同じようだった。立ち上がって衣服についた泥と草を払う。

「アカネさん、何かしたんですか？ いや、もしかして転移を？」

「はい」

アカネは頷く。

「ただ、いつでも自由にというわけではないので、次はないと思ってください」

「あ、はい。でも、武器を呼び出すだけじゃなくて、移動もできるっていうのは……」  
「できるというよりも暴走させているって感じなので、使えているわけではないといえますか。わたしは魔術師でも魔女でもないんで」

転移魔術は超高等魔術である。超一流の魔術師ですら、ろくに使いこなせない。事前準備をきちんとした上で行う大魔術であり、戦闘で使えるのは空隙の魔女の異名を持つ那月くらいのものだ。それも、強大な悪魔に人生を捧げるような代償を支払って手に入れた力である。余人には真似できないものだ。

「しかし、ディアドラ様……いえ、ディアドラがこんなことをするとは思いませんでした」

「今回の蜘蛛も、あの人が手引きしてたのかな……理由が分からないけど」  
社会的地位のあるディアドラが、何を思っただテロ事件を起こしたのか。凧にもアカネにも全く想像はできなかった。

「……シノ様をお助けしななりません。すぐにでも」と、アカネは言う。

「そうだ。東雲……ディアドラのところにまだいるのか」

ここに逃れたのは凧とアカネだけだ。東雲はまだディアドラの下にいるはずだ。「思うに、ディアドラの目的はシノ様だったのではと。あの人、わたしと凧様をあえてシノ様から引き離して攻撃してきましたから」

「……確かに。でも、理由は？」

「さあ、そこまでは。ただ、シノ様の立場やお身体のことを考えれば……どんな理由でも考えられます」

「……ッ」

凧は隠し切れぬ苛立ちが湧き上がってくるのを感じた。

東雲は第四真祖の子である。それも古城とアヴローラの血を引いている。第四真祖の子どもの中でも最も吸血鬼としての純度が高い。本人はそれを誇りに思っている節があるし、能力も突出している。有史以来、血族を持たなかった第四真祖の子どもというだけで狙われる可能性はあるし、暁の帝国を敵視する国や組織は残念ながら存在している。そういった手合いは、東雲の身柄を喉から手が出るほど欲しがるだろう。

もしも、東雲が吸血鬼に人権を認めないような者たちに引き渡されるようなことがあるれば、彼女の先行きは極めて壮絶なものとなるだろう。

「助けに行かないと」

凧は呟く。

不思議なことに、魔力が湧き上がってくるような気がした。

「……しかし、どうやって？ 相手は旧き世代の吸血鬼の中でも長く戦場を経験した歴戦の猛者ですよ？ 勝ち目があるとは思いません。今だって、逃げるのが精いっぱいだったじゃないですか。助けに行くことは賛成ですけど」

「方法は分からない、けど。乗り込んでいって、戦える相手じゃないことも分かっている。だけど、放っておくこともできませんよ。とにかく、今のままじゃダメだ」

凧はディアドラをよく知らないが戦闘能力は極めて高いのは実感した。悔しいが凧程度ではまったく相手にならない。象にアリが挑むようなものだ。

「まず、他の皆さんと連絡を取る方法を考えましょう。ディアドラの犯行をジャーダ様が容認しているとは思いません。暁の帝国と事を構える利点がまったくないわけですし、もしかしたら、すでに動いているかもしれないかもしれません。ディアドラの一連の

行動は、まったく隠す気がありませんでしたから」

「そうですね。俺たちを自宅に連れ込んでからのこれですからね。いくらあの人が警備の責任者だっていっても、隠蔽できることには限度があるでしょうし」

「後は、外部と連絡をどうやって取るかです。風様、気づいてますか？　ここ、明らかにわたしたちがいた場所とは違いますよ」

「……何となく、そんな気はしてました」

事実を認めなくなかったので、今まで指摘はしなかった。

単純にマンシヨンの外に逃げたというわけではないらしい。

「アカネさんの転移はそんなに遠くまでいけるものですか？」

「まさか。力いっぱい暴走させて、精々が二、三キロ圏内のどこかといったところですよ。移動先は指定できないので、右も左も分かりません。そして、あのマンシヨンの周囲にこんな森はありません」

「混沌界域の最大都市の真ん中にいたはずですからね」

チヨコ祭の会場は混沌界域の首都。それも王宮の真ん前のメインストリートである。自然豊かな混沌界域と言うが、さすがに首都となれば世界有数の大都市のひとつ

つである。大きめの公園に木々はあるが、視界を塞ぐほど鬱蒼とした森はない。

「あの感覚……リビングに入った時の妙な魔術……まさか転移か。あの時点で、俺たちはずいぶんと遠くまで連れ去られていたってことか？」

考えられることはただ一つだけだ。

凧とアカネは、いつの間にか転移魔術で拉致されていたということだ。

タイミングはリビングに入った時の魔術の気配であろう。ディアドラはセキュリティのためと言っていたが、もはや信用はできない。あれが転移魔術の発動であれば辻褄は合う。

「そんなことが可能ですか？ わたしが言うのもあれですけど、転移魔術はそう簡単ではないはずですよ。まして、わたしたちを纏めてなんて」

「どうでしょう。ディアドラの引き出しが分からないので何とも言えませんが、可能性はあります。例えば、移動元と移動先でまったく同じレイアウトの部屋を用意して、お互いの空間を紐づけして、任意のタイミングで空間ごと入れ替えるとか。細かい条件指定がない分、事前準備だけで効果はあるような気がする」

この方法はかなり難易度が高い反面、自室に仕掛ける時間はいくらでもある上に

魔術そのものは相手の身体に直接かけるわけではないので弾かれにくいという性質がある。油断していた凧たちならば、転移に巻き込むことはできるだろう。

「……わたしの転送と同じような原理ですね、それ。A地点とB地点を移動することにだけ特化させるわけですか。端から拉致を目的にするなら、それで十分。それでも難しいはずですけど」

「吸血鬼に時間はいくらでもありますし。まして、ディアドラは金もあつたはずだし」

事前準備はいくらでもできた。転移魔術の難度を跳ね上げているのは、転移先の条件指定だ。気象条件や地脈の流れ、人の流れ、そういった様々な条件を計算しなければならぬ。普通の人間では満足に使えないというのは、計算能力の限界を優に超えてしまうからだ。しかし、転移元と転移先を事前に決めておいて、「計算式」の構築に必要な条件を予め設定できたとすると難度は大きく低下するだろう。

ディアドラが初めから東雲狙いで計画していたとすると、本来は凧とアカネが必要があるから凧とアカネを外すことができなかつたのだとすると転移の理屈につい

ては納得はできる。その上で凧とアカネは東雲についてきた邪魔者なので、不意打ちで始末しようとしたということだろうか。

不幸中の幸いだったのはアカネにも転移魔術があつて、辛うじて脱出できたということだろう。

「アカネさんの転移は、そう遠くまでいけるものじゃない。とすれば、東雲からそんなに離れたわけじゃないな……」

それも不幸中の幸いと言えるだろうか。

位置関係が分からないが、東雲まで歩いて行ける範囲ではあるようだ。

残る問題は場所の特定だ。

右も左も分からない中で闇雲に動けば、結果的に東雲から遠ざかることにもなりかねない。方角は月や星の動きから推測はできるし、日が昇ればより分かりやすい。それに、凧にはささやかながらも魔術がある。適当にちぎった広葉樹の葉に呪文をかけて、蝶に変化させる。呪符の類を持ち合わせていないので、出来がいいとは言えないが、物見の代わりはしてくる。これを空に放った。ひらひらと舞い上がった蝶は、重苦しい夜気の中で冴える月光を浴びて煌めいている。

「どうですか？」

アカネは魔術が使えない。

一応の知識はあるが、こればかりは生まれ持った才能に依存する領域だ。アカネは魔術を学んではいるが、実践できるほどに習得はできていない。

「……ちょっと、これは」

凧が絶句している。

蝶を通して見た光景が彼を圧倒しているのだ。

「アカネさん、今、映します」

凧は次いで地面に水たまりを作った。三十センチ四方の水たまりの表面が青白く発光して、蝶を通して上空からの映像を映し出した。

そこに映し出された光景を見て、アカネもまた絶句する。

「森しかない」

四方に広がる大森林。地平線の彼方まで、人工物はまったくくない。助けを呼ぼうにも、歩いて行ける範囲に人家はない。無線や携帯を持っていたとしても、通信できなかつただろう。

「どこだよ、ここ」

「わたしにも、さっぱり……」

混沌界域の広大な国土は、その多くが熱帯雨林が占めている。人と魔族は、森を切り開いて文明を広げてきたが、未だに人跡未踏の地は広く存在しているし、歴史の中で忘れられた土地も多くある。過去に人が住んでいたことがあったとしても、現代では魔獣や森の獣の住処になった無名の遺跡群もどこかにはあるだろう。そういう地図に載っていない魔境が現代も各地に存在している。生物多様性に秀でた熱帯雨林のど真ん中だ。どんな魔物が潜んでいるか分からない。

「東雲がいるのは、あそこか」

目的地だけは明確だった。

隠されているわけでもなく、堂々と佇む中世ヨーロッパ風の石の城。アカネに可能な転移範囲の中にある人工物はこれしかない。

ここから、直線距離でおよそ二キロといったところだろうか。

大きな城というわけでもない。屋敷にしては大きいという程度の小城である。もちろん、一個人で所有するというのであれば極めて規模の大きな建物ではあるが、

ディアドラが貴族に名を連ね、現在でも領主として土地を持っていることを考えれば、城を持つていること自体はおかしなものではない。

月明りに照らされる黒い森の中に建つ城。その城の窓のいくつかから明かりが漏れ出ている。人がいるとなれば、それは東雲かディアドラであろう。使用人もいるかもしれない。あの城の中にどれくらいの人が入って、東雲がどの部屋にいるのか、今のところ情報はまったくない。

東雲を助けるのであれば、ディアドラとの戦闘をどれだけ避けることができるのかということが重要になる。

凧とアカネの目的は東雲の救出である。ディアドラの相手をする必要はない。しかし、ディアドラに気づかれずに東雲を救出するとなると、ディアドラと東雲の位置関係を把握しなければならぬし、あの城の構造や人員も知る必要があるだろう。そういった情報がない現状では、迂闊な手出しはできないし、もしもこのまま戦うしかないというのなら、それは成功率の極めて低い、それも失敗すればその時点で命を失うと言うハイリスクな戦いにならざるを得ない。

「行くっきゃないか」

「そうですね」

とにもかくにも、通報のしようがない。このまま何もしないで時間が過ぎるのを待つべきか、それともディアドラを出し抜いて東雲を救出し、そして逃避行をするのか。

「あのお城の中なら、通信設備はあるでしょう。いくら何でも外部と全く繋がりを持たないなんてことはないでしょうし」

「助けを呼ぶためには、敵地の真ん中に飛び込まなくちゃいけないってことですね。どの道、東雲を助けることにも繋がると」

広大極まりない熱帯雨林の真ん中に建つ小城だ。このような僻地に城を建てる意義は分からないが、生活に必要な物資を運び込むために人里との繋がりは必要になるだろう。それはつまり連絡手段がああの中には備わっているはずだということでもある。

熱帯雨林の中を当てもなく彷徨っても、待っているのは死だけだ。空腹か脱水か、あるいは森の獣に襲撃されるか。いずれにしても未来はない。

ディアドラをどう出し抜くか——それが重要なのだが、どう考えても不可能

だ。地の利も戦闘能力も、何もかもが凧たちを上回った相手だ。これを出し抜くのは並大抵の幸運では実現できないだろう。それでも、他に選択肢は存在しない。

「あれ、何か……」

水面に映る目的地。石の城の門がゆっくりと開いたのである。固く閉ざされているべき城門を、こんな深夜に開く理由はすぐに分かった。白く光る何かは門から外に出てきたのである。それはどこからか現れた手綱を付けた巨大蜘蛛の背に乗ると、まるで馬を乗り回すかのように蜘蛛を走らせる。

「今のは、いったい……」

「……まあ、追手ってヤツかな」

「……ですよね」

よくない予感二人にあった。

ディアドラが凧とアカネが逃走したと気づいて、どう行動するか。何もしない可能性も低くはなかった。この僻地だ。助けを呼べる環境にないのだから、放っておいてもどこかで野垂れ時ぬだろうと。向かってきても脅威になるほどの力のない二人だから、放置するという選択もあるだろう。

だが、もしも、脅威度の高低に関わらず始末をつけるというのであれば、追手を放つことも十分に考えられた。

「できる限り隠れながら進みましょう」

「はい」

敵の能力は未知数だ。

ディアドラ子飼いの追手ならば、相当の危険人物ではあるのだろう。この森のどこかに潜む凧とアカネを探し出して、その命を刈り取るに相応しい実力を有するのは確かだ。

せめて相手の能力が分かっていたらよかったのだが、ない物ねだりをしても仕方がない。可能な限り気配を消し、魔術を使って身を隠しながらゆっくりと進む以外に方法はなかった。



部屋の中は真っ暗だった。窓がなく電気もつけていないので、光源となるものは

何一つとして存在しない。自然の夜であっても、星々の光があり、完全な暗闇というのは珍しいくらいである。東雲は都会育ちなので猶更、本当の暗黒に身を浸す経験は少ない。おまけに、この部屋は東雲を拉致監禁した女の用意した部屋であり、この状況に置かれることを強要されているのである。

のっぺりとした闇の中で、部屋の全貌を見ることは難しい。夜目が利くと豪語する者であっても、僅かの光もなければ暗闇を見通すことはできない。この闇を見透かすのであれば、赤外線を始めとする光以外の情報源に頼る必要がある、魔力すら満足に使えなくなった東雲にそれは土台無理な話であった。

普段から目に頼った生活をしているために、目で情報が得られないときの不安感  
は極めて大きくなる。身体は自然と視力以外で情報を収集しようとし、感覚が研ぎ  
澄まされていく。

明かりを灯せば、この部屋の不可思議なレイアウトに気づくだろう。

四方を囲む壁も天井も床もすべてが真っ白な石灰岩で作られている。汚れ一つなく  
蛍光灯は市販品である。窓は初めからなく、調度品の類もまったく用意されてい  
なかった。あるのは部屋の中央に置かれた大きなベッドだけで東雲はそこに寝かさ

れていた。

東雲はここに至るまでに半ば強引に様々な衣服を試着させられた。それはあたかも着せ替え人形のような扱いだったが、自前の服を破り捨てられた東雲は宛がわれた服を着るしかない。二十着は試されただろうか。それだけ着せ替えていながら、結局今の東雲は黒いレースのパンツを履かせてもらっているだけで、他は一糸纏わぬ姿である。空調が利いているためか、少し肌寒いと思えるくらいだった。

寝かされている白いシーツは滑らかで肌触りがよく、最高品質なのだと分かる。無菌室以上に徹底して余計な物を取り去った白い部屋の中であって、このベッドだけは極めて上質であり、異質さを際立たせていた。

この部屋に監禁されてどれくらいの時間が経ったのか分からない。暗いだけでなく音もない環境は、精神に欠ける負担が激増する。

東雲は身体を起こすことなく、ベッドの上にいる。縛られているわけではない。脱出は不可能だということを手ですでに否応なく思い知らされたために、逃げようという意欲を失っていた。

生まれた時から感じていた眷獣の存在も今は感じない。東雲は生まれて初めて

たった一人で見知らぬ場所に放り込まれた。

魔力すら満足に使えない今の東雲は、ただの人間の少女と変わりがない。

右の手首に巻かれたミサングは、東雲の体内の魔力の流れを乱し使えなくする拘束具の一つである。引き千切ろうとすれば強烈な痛みが電流のように全身を駆け巡る上に強度は鋼鉄に匹敵する。皮肉にもこのミサングは暁の帝国の前身である絃神島で開発された魔族登録証の技術を転用したものだ。

東雲の身体ではなく、心を先に縛ってしまう。抵抗の意思を失えば、その後の監禁も楽になる。例えばこの部屋に施された結果もその一つだ。物理的に外に出られなくする結果ではない。ベッドを中心とした半径三メートルの魔法陣であり、東雲がこの外に出た瞬間に、彼女の全身、頭の天辺から足のつま先まで壮絶な痛みを与えるものだ。その痛みは一瞬ではなく、境界の外にいる限り継続する。東雲とて、何も初めから無抵抗だったわけではない。ディアドラが部屋の外に出た隙に脱出を図ったこともある。そして、痛みあまりに絶叫し、部屋中を駆け回る羽目になった。魔力を制限された東雲には境界の詳細は分からない。半径三メートルというのも、東雲が痛みで駆け回っている中で見出した安全圏である。

東雲は「この範囲にいれば痛くない」ということを自ら学習してしまった。自分で学習した事柄は、他者から教えられるよりもずっと早く身につく。安全圏から出ることを生き物は嫌う。吸血鬼も同様だ。まして、その外に出れば気絶することも許されないほどの猛烈な痛みに曝されると分かっている外に出る気力が起きるはずもない。

不意に開いたドア。差し込む廊下の光は一瞬だったが、暗闇で夢現の差が分からなくなっていた東雲を現実に取り戻す程度の役には立った。

「起きてる？ もう疲れて寝ちゃったかしら？」

入ってきたディアドラは妖艶な笑みを浮かべている。ネグリジェを着て、成熟した大人の色香を存分に漂わせながら、東雲の横たわるベッドまでやってきた。ほんのりと香水が香る。柑橘系の香りだ。

「ふふ、寝心地いいでしょう。あなたのために用意した特注品なのよ」

東雲の耳元でディアドラが囁く。

東雲は何も言わない。黙して語らず、無言でディアドラから顔を背けた。そんな東雲の反応にディアドラは気を悪くすることなく、東雲を抱き枕にするように横に

並んで横たわる。

「本当に可愛いわ。肌も綺麗で、髪もさらさら……いい匂いもする」

「ッ……」

東雲の背筋に怖気が走る。

ディアドラが欲情しているのは闇に輝く紅い瞳ではっきり分かってしまう。異性からそれとなく性の対象として見られていると感じることは今までにあっても、こゝも明確に欲望を向けられたことはない。曲がりなりにも十代の乙女である東雲にとって、これは余りにも気味の悪いことであつた。

東雲の肌をディアドラの手が撫でる。腹から胸までを撫でながら、首筋を甘噛みする。牙の先端が肌を破るか破らないかという力加減だ。血を吸われるのではないかと東雲は身を竦める。そんな東雲の反応に気をよくして、ディアドラは愛撫を継続する。

「き、気持ち悪い……もうやめて、よ」

東雲は思わず口答える。

「あら、酷い。こんなに愛してるのに……シノちゃんにも早くわたしを愛してほし

いのだけど」

「意味分かんない。なんで、そうなるの……？ どうして、こんなひどいこと……もうやだ。みんなのところに帰してよ……ん、ふぁ」

ディアドラは強引なキスで東雲の訴えをかき消す。逃れようともかく東雲を抑えて、ディアドラはさらに熱い舌を肌の上に這い回らせる。想い焦がれた東雲を手中に収めることができ、ディアドラはご満悦だ。長い人生の中でも最高の気分を味わっていると言ってもいい。戦いにすら飽きたディアドラにとって綺麗で愛らしい乙女をいたぶるのは唯一の楽しみだ。それが高貴な身分であればなおのことだ。

かつて、人権意識の低い中世は今よりもっとよかった。まだ若く命のやり取りを楽しめた時代であり、そして多くの戦利品を獲得できた時代でもあった。部族間の対立は今よりも過激だったし、信仰上生贄等の野蛮な習俗を持つ者たちも多かった。だから、野蛮な方法で戦利品に屈辱を与え屈服させることも珍しいことではなかった。

ディアドラの性的嗜好はそうした経験が長すぎる人生の中で醸成したものと言え

た。

東雲はまだ心が折れていない。散々に泣きはらしたし、ディアドラへの恐怖も植え付けられているが、ディアドラへの拒絶の意思は明確だ。どうやってここを折るか。抵抗に抵抗を重ねた東雲がついに屈した瞬間こそがディアドラが心待ちにしている時である。彼女が自らディアドラの支配を受け入れるようにするかを愛撫しながら考えている。堕ちる瞬間は一度しかない。それをどんなシチュエーションで堪能するかは重要だった。

廻り方は何通りもあるが、最も東雲にふさわしい堕ち方を導けるのはどれなのか。時間を巻き戻して実際に複数の選択肢を試せばいいが、そんな技術はディアドラにはない。だからこそ色々想像できて楽しいというのもあるのだが。

「そうそう。ちゃんと実験もしないとね。せっかく、シノちゃんが手に入ったんだし」

「じ、実験？」

その不穏な言葉に東雲は身震いする。

「心配しなくてもいいわよ。シノちゃんも不老不死なんだから、死にはしないわ。

痛いか気持ちいいかはちょっとわたしにも分からないけれどね」

「何するの？ 何？ 何して、うぐ……ッ」

ディアドラの右手が触れたのは東雲の臍の下辺りだ。そこにディアドラの魔力が渦を巻いている。

「東洋では、丹田っていうらしいわね。臍下丹田？ 下丹田？ ちょっとよく分からないけど、まあ、魔力を扱う上で重要な箇所なのは間違いないわね。全身に魔力を行き渡らせる丹田に、ちょっと魔法をかけてあげたわ」

「痛い……何、を？」

丹田は伝統的に「氣」を練る重要な部位とされる。魔術的に言えば魔力を効率よく運用するために意識する場所であり、それは洋の東西を問わず認められている。魔力の運用に関わる場所なので、ここを魔術的に侵されると全身に悪影響が及びやすくなる。

「シノちゃん、その歳で結構抵抗力が強いからね。これで、わたしの魔力を通りやすくするの。ふふ、あなたを模したお人形たちだと、ちゃんとした実験にならないかったし、真の眷獣の器を作るためにも、人工眷獣があなたの血に根付くか試して

みたいの」

「人工眷獣？　血に根付くって、どういふ……」

「あなたのお母さまは遙か古代の天部と三人の真祖が作り出した眷獣の器、強大な第四真祖の眷獣を封印するための棺だった。わたしが焦がれた彼女もそう。ふふ、シノちゃんはシノちゃん欲しいのだけど、ディセンバーを取り戻すことも諦めないの。だから、彼女を受け入れるのにふさわしい素体を作らないといけないわけ。シノちゃんはディセンバーの血縁者でもあるからね、悪いのだけど試させて、ね？」

暗闇が不意に払われる。

青白い輝きが東雲の丹田に瞬いて、膨大な魔力が唸りを上げる。

「あ……い、あッ、い、痛い、あああ、痛いいい！」

東雲が苦悶の声を上げた。

ディアドラが強引に紡いだ魔力の経路を通し、主のいない人工眷獣が東雲の良質な血を住処にしようと入り込んでくる。東雲もまた眷獣を失い魔力の安定性を欠いている。眷獣の寄生を東雲の身体は容認できる状態だった。それでも、まったく縁

も所縁もない眷獸を受け入れるのは苦痛を伴う。吸血による上書きですら自分も乗っ取られるというリスクを背負う。このような正規の方法ではない強引な寄生がスムーズに行くはずがない。

しかし、もがき苦しみながらも東雲の身体は壊れない。筋肉も骨も神経系もひび割れて崩れそうになりながら生まれながらに備え持つ不死性が身体を再生させる。不死性の負の側面。

吸血鬼の肉体は魔族の中では脆弱だ。だが、不死性は突出している。高位の吸血鬼なら心臓や脳が破壊されても復活できるほどだ。それだけ強力な不死性を持っている吸血鬼は、何をしてでも死なないがゆえに、甚振る際に死なない程度の加減するという手間暇をかける必要がない。

サディストにとって吸血鬼というのは最高のサンドバックだ。

事実、東雲は死ななかつた。強引な人工眷獸の寄生実験は、物の数分で終わった。東雲にとっては長く苦しい実験だったが、結果的に東雲は人工眷獸をその血に受け入れることができた。ディアドラにとっても研究結果がいい方向で出たのでご満悦だ。

「やっぱり、頑丈ね、シノちゃん。まだまだ全然壊れてないもの……」

「ひ、い……あ……離れ、て……もうやだ……う、く」

東雲が取り込んだ人工眷獣は東雲の血の中で眠っている。敵対されても困るのでそうなるように仕込んだ。東雲にとっては爆弾を仕込まれたに等しい状況でもあった。

「決めた」

と、ディアドラは言う。

「シノちゃんの壊し方。シノちゃんみたいな可愛い娘にはやっぱり、海より深い絶望が似合うもの」

ディアドラの笑みは妖艶で危険だった。

「昏月君とアカネさん。あの二人、生きてるわ」

「え？」

突然の告白に東雲は耳を疑った。

ディアドラが殺したと思っていた二人だ。

「本当よ。わたしは殺すつもりだったのだけど、わたしの眷獣が直撃する直前にど

うやってか逃げ果せたみたいなの。目下、捜索中よ」

凧とアカネが生きていることが分かった途端に、東雲の目に生氣が戻った。

今、東雲の現状を知るのは凧とアカネの二人だけだ。東雲が頼りにできる存在であり、東雲をこの苦境から救い出してくれるかもしれない存在でもある。東雲は二人を大事に思っているし、それに輪をかけて助けに来てくれるかもしれないという希望を抱ける相手であった。

この情報を与えれば東雲はきっと気持ち強く持つだろう。それは分かり切っていた。

「だから、きっちり殺すわ」

「な、なんで？ そんなことする意味が分かんない。あの二人に手を出さないで」「ダメ。ふふ、だってシノちゃんはあの二人がとても大切なんでしょう？ それは、わたしからすればとっても不愉快なことだもの」

それは嫉妬と呼ばれる感情の発露だった。東雲に思われている二人に対しては、どろどろとした黒い感情を抑えきれない。あの倉庫で眷獣を放つという雑な対応をしたのも、それが原因だった。

殺すという決定に変わりはない。生かしておく意味がないし、存在しているといっただけで不愉快だった。

だから東雲が屈服した後は、凧とアカネのことを東雲の記憶から消すよう精神操作をするつもりだったくらいだ。

しかしながら、殺すことは決定しても殺し方までは決めていなかった。どうせなら、その死を利用して東雲を屈服させたくなかった。希望を絶望に変える。上げて落とす。東雲の目の前に二人の首を並べて、ディアドラの物になる宣誓をさせよう。それが、東雲を最も輝かせる墮とし方だ。方向性は定めた。今となっては凧とアカネが逃げてくれたことに感謝するしかない。

差し向けた追手はディアドラの眷獣ではないが、それに匹敵する怪物だ。

ディアドラが長い人生の中で墮とした数多の奴隷たちの魂から作成した死霊の集合体である。ただの人間と眷獣を発現しただけの攻魔師モドキが戦える相手ではない。

二人の首が届くのも時間の問題か。

早ければ朝にでも届けられるだろう。その時を今か今かと待ちわびながら、ディ

アドラはほくそ笑んだ。

---

あまり濃厚にやりすぎてR指定になると困るので手元のラノベの描写を柔らかくする感じで……。

最近のラノベはあまり見てないけど、書店で眺めているとR指定食らわないのが不思議なヤツあって戸惑う。



## 第五部 十八話

首都近郊のタワーホテルが、零菜たちの避難所となった。

チヨコ祭会場の運営委員との事前調整を担当した職員の前泊先として借りていた部屋だったが、ここを確保していたおかげで混雑する避難所を利用しなくても済んだ。第三真祖の王宮を貸してもらったこともできたのだが、テロの発生現場が目と鼻の先であり、テロ対応の必要性から零菜たちが王宮に逃げ込むのは逆に対応困難を伴うと予想されたので却下された。

最初に辿り着いたのは萌葱と麻夜で、その次が紗葵であった。通信障害が回復した頃に零菜と連絡がついて、空菜とともに零菜が到着したのは萌葱がやってきてから三十分も経ってからであった。

「まだ、混沌界域からの連絡はないんですか？」

「はい。こちらからも連絡を取っているのですが、まだ何も答えられないの一点張りです」

「そうですか」

暁の帝国職員の間にも疲労と不安の色が目立つ。テロ発生から一時間が経ったが、まだ満足な情報が来ていない。大規模な魔獣の群れの襲撃だ。事前にテロを警戒していただろうが、対応が後手後手に回っていて、情報収集と発表が上手くいっていない。混沌領域側すらも、何が起こっているのか、どう対処すればいいのか、きちんと整理ができていないのである。

「あの、東雲ちゃんたちとの連絡ってその後どうなっていますか？」  
と、零菜は須藤に聞いてみた。

「安否確認が取れた、というのが最後です。今、どこにおられるのか分かりません。通信障害は、復旧しているはずなのですが」

東雲の担当者とは繋がらない上に混沌領域側はてんやわんやだ。東雲は暁の帝国の姫である。最優先に安全を確保しなければならぬ立場であるが、その担当者がどうしているのか分からない。混沌領域側も担当者がいないからといって、そこに別の人員を宛がえるような余力がない。

テレビの報道も目新しい事実は出てこない。ただ祭を訪れた客が推定で三万人にも及んでいたことや、市内各地に開設された臨時避難所に多くの人々が押し寄せて

対処困難な状況に陥っていること、セグロオオヒゲクモと軍警察の戦闘の一部始終の中継等が繰り返されている。

現れた魔獣の掃討作戦が開始されたというが、それは限定的なものに過ぎなかった。自由自在に動き回る蜘蛛をチョコ祭会場から極力離れたところに行かせないように警戒網を敷き、一匹一匹確実に潰していくという気の遠くなるような作業だ。何匹首都の中に侵入したのか明確でなく、地下排水路から現れた以上、そこに敵の本拠地——巨大な巣があると見ていい。行方不明者の中にはこの巣に連れ去られた人もいるだろう。迂闊に纏めて焼き払うという選択は取れない。

避難所には、周辺住民も逃げ込んでいる。祭の参加者だけではないのだ。必然的に避難所を守る軍警察の人員も多数必要になるし、避難所運営も至難の業であった。結果、情報伝達が極めて遅くなり、暁の帝国側は何も行動がとれないことになった。状況が状況だけに仕方のないところもあるのだろうが、かといってただ待たされるだけというのは不満と不信を募らせることになる。まして、零菜達からすれば家族と連絡がつかないのだからなおのことであった。

麻夜は窓の外に目を向けた。

緊急時に窓辺に立つのは危険を伴う。が、相手は蜘蛛の魔獣だ。狙撃の心配は必要ないと思われる。高層階からの景色は不安を煽るものでしかなかった。少し離れた場所ですくつもの火の手が上がっている。テロ発生現場周辺は停電しているのか真っ暗になっていて、ぼつぼつと見える光は眷獣や魔術が放つ魔力光である。

まるで戦争だ、と麻夜は思った。

つい先日のクリスマスでも似たようなことに巻き込まれた。今年はどうも厄年らしい。平和な時代に生まれた麻夜にとっては、実戦は一生に一度経験するかどうかという程度のものでしかなかった。それが、こうも立て続けに巻き込まれるといよいよ運のなさを実感する。いや、それ以上に運がないのは凧だろうか。東雲と行動を共にしているはずの凧は、今年——より正確には今年度になるが、とにかく戦い続きたった。まだ中学生だというのに、命がけの戦闘を繰り返す羽目になった。本人が望んでいるわけでもなく、巻き込まれ続ける一年だった。

もしかしたら、東雲はこのテロに関する何かに関与して、凧も一緒なのかもしれない。だとすれば、すぐに助けに行きたいところだったが、麻夜たちの行動も著しく制限を受けている。

余計な動きをすれば、混沌界域側にも多大な迷惑をかけるし、東雲の居場所も分からぬのだ。ただ時間が過ぎるのを待つしかない現状に麻夜は歯噛みする。そして、それは他の全員が共有するいら立ちだった。

暁の帝国からの問い合わせにもきちんとした対応ができていない混沌界域側ではあったが、こちらはこちらで大混乱に陥っていた。

僻地にしか生息していない魔獣が市内に突然現れたことや地下三十メートルに埋没している排水路から現れたこと。また、地面を大きく陥没させたのは魔術によるものであったことから、政府はこれをテロ事件として緊急対策室を設置した。

とはいえ、上の動きは遅く、下は上からの命令を待っている余力がなかった。魔獣による襲撃だが、テロであれば明確な武力攻撃である。

テロへの対応は、チョコ祭の運営委員会の権限を大きく逸脱するものであり、軍警察に任せるしかなく、テロと認定された時点で運営委員会の大本である警備部もまた軍警察の指揮下に入って対応することになった。

しかし、ここで重大な問題が発生した。

警備部の最高責任者であるディアドラと連絡がつかないのだ。

ディアドラがどこに行ったのかまったく分からない。最後にディアドラと会話をした職員は、現場の様子を見てくると言い残していたと証言しているが、その現場がどこかまでは把握していなかった。

最高責任者ならばすぐに連絡がつくようにしているべきだし、そのための連絡手段を常時持ち歩いていることになっている。通信障害が発生しても専用の使い魔があるので何の音沙汰もないのは不自然だった。

「そもそも、なぜ最高責任者がこの状況で出歩くのだッ」

軍警察幹部が警備部の職員を問い詰めるが、それを言いたいのには職員の方だ。トツプと連絡がつかないので、やむを得ず次席の部長補佐が対応している。事務処理上の問題はないが、ディアドラだけが担当していた業務も少なくなき、その中には暁の帝国要人への対応も含まれていた。よって、事務処理が著しく遅延することになったのである。

「とにかく、すぐに連絡を取れッ、いいなッ」

「も、申し訳ありません」

軍警察側の要求に担当職員は悄然として頷くしかない。緊急時の対応マニュアルもまさかディアドラが不在になるということまで想定はしていないし、何よりもこれほどの大規模な「魔獣災害」を想定したマニュアルは存在していない。

チョコ祭の運営委員会は、テロ対策本部に繰り上がり、軍警察の関係者も慌ただしく出入りするようになったが、人手不足は否めない。

右往左往する職員を部長補佐はよく纏めていたと言えるだろうが、次から次へと届けられる情報の整理が追い付かず、精神的にも体力的にも追い詰められていた。

「避難所の様子は？」

「三十三か所でキャパオーバーの連絡が入ってます。かといって、別の避難所に移動させるわけにもいかないのです、無理に入ってもらっているようですが」

「報道からの問い合わせですがどうしますか？」

「今は対応できないと伝えろ。それと、避難所以外の場所に避難した人もいるだろう。把握は進んでいるのか？」

「そこまで人が回せません。蜘蛛がどこにいるか分からないので、攻魔師以外の職

員にも外出制限がかかっています」

「むう、せめてシステムへのけが人と避難者数の反映は常時するよう各所に通達しろ」

「すいません、避難所管理システム、さっきからフリーズしてます。保守業者にも連絡がつかませんッ。とりあえずファックスとメールに報告方法を切り替えました」

「くそ、だから改修費用は優先してつけるべきだとあれほど言ったのに、財務の堅物どもめッ……ええい、部長はいつたいたいどこに行ってるんだッ。所在確認、急げッ」  
歯噛みする部長補佐。

ディアドラの存在はそれだけ大きかったのだ。

何十年とこの部門のトップにいた彼女への依存度はそもそもかなり高い。旧き世代の吸血鬼は、混沌界域の戦力の中核であり、その扱いは別格だ。警備部にとってディアドラは精神的支柱でもあったし、事務処理上彼女の不在が致命的な影響を与えないものであったとしても、その不在が与える影響は致命的と言っていいものとなっていた。

そして、事ここに至ってもまだ、ディアドラが東雲を拉致したという認識は誰一人として持っていない。それどころか暁東雲が行方不明であるという情報すら、テロ対策本部の中枢には届いていないという有様であり、届いていたとしてもディアドラとの関係を疑う者は現れなかっただろう。

ディアドラにとって現場の混乱は想像以上の成果を上げていた。

テロ発生直後の体制ならば、きちんと対応できるとディアドラは踏んでいた。当初に混乱はあっても、一時間もすれば体制が固まって、組織的対処を始めるだろうと。東雲の行方不明とディアドラの関係性も、一、二、三時間のうちには解明されて、追手がかかると予想していた。

まさか、朝になってもディアドラが犯行に関わっているということに気づかないとは思ってもいなかった。これには、ディアドラも拍子抜けした。テレビを見ても後手後手の対応で酷い有様である。蜘蛛による被害以上にその対応の遅れや混乱ぶりの方が大きな問題で、ディアドラがその場にいたら叱咤していたのは確実だった。「あの子たちこんなにはできなかったかしら？」

と、頭を抱えなくなつたくらいだ。

ディアドラは自分の影響力をかなり低く見積もっていたのである。緊急時のマニユアルも体制も構築していたが、自分への精神的依存度を甘く見ていた。それが結果的にディアドラを助けることになり、東雲をさらなる窮地に追いやることになつたのだつた。

ディアドラが犯人だと分かつたとしてもこの場所が特定されるまでにはかなり時間がかかるだろう。現場の対応が遅れば遅れるほどにディアドラが愉しむ時間も増える。上手くすれば、国外への逃走も現実味を帯びるかもしれない。

「ディアドラ様、お食事の準備ができました」

テレビを眺めるディアドラに声をかけたのはメイドの少女だった。ショートボブの茶髪で肌は日に焼けた褐色である。

「ありがとう、マリア。シノちゃんの分は？」

「ホムンクルスに届けさせております」

「そう」

ディアドラの前に食事を並べるマリア。外見年齢は十代ではあるが、彼女もまた

吸血鬼だ。それも旧き世代に当たる。積み重ねた時間はディアドラに引けを取らない。

「おっと」

と、ディアドラがスプーンを落とした。金属音を立てて床を転がるスプーンをマリアが拾う。

「すぐに代わりを持って参りますッ」

「いいのよ別に気にしなくて。大したことないでしょう」

「しかし……」

「面倒は嫌いなもの、知ってるでしょ？」

「あ……はい」

マリアの顎をディアドラはつま先で持ち上げる。

「ふぁ……あ……」

何をされているわけでもない。ディアドラに見下ろされ、足先で扱われているだけでマリアの瞳が欲情の赤に染まっている。表情を蕩かせて身体を震わせる。

「物欲しそうにして、そんなに我慢できないの？」

「ディアドラ様がいらっしやるのは、久しぶりなので……その、あ、わたし……申し訳ありません。ご奉仕をさせてください」

うっとりとして懇願する少女にディアドラは慈愛の視線を送る。

マリアはディアドラのすべてを変えた吸血鬼だ。今にして思えば運命の出会いだったのかもしれない。ディアドラを狂わせ、彼女のすべてを奪い、そして再出発のきっかけを作った吸血鬼の娘である。

「ふふ、もう四百年は経つのね」

懐かしそうに目を細めるディアドラ。

かつてはその高い戦闘能力で軍人として活躍したディアドラだが、出身は地方の弱小貴族の娘であった。だからこそ軍に入り、成功することを夢見ていたということもある。当時の混沌界域は今よりもずっと国土が小さく、内憂外患に苦しんでいた戦いの時代だった。ディアドラの実家が治める領地も常に戦いの気配を身近にしていた。

国外の勢力だけでなく、国内の貴族間でもトラブルは日常茶飯事だった。特に水利権の争いは戦争に発展することも珍しくなく弱小貴族は常に煮え湯を飲まされる

立場に置かれていた。

北方の反乱軍と戦っていたディアドラにその一報が届いたのは、確か収穫の時期を過ぎたころだっただろうか。

領地が敵に襲われて、壊滅したというのである。

敵は隣接する領地の主とその軍勢で、水利権を争う相手であった。

収穫を終えたばかりの穀物や領民を略奪した敵軍はディアドラの父と母と兄を殺し、妹を凌辱し、その精神を破壊した。

知らせを受けて実家に戻ったディアドラが見たものは焼き払われた城と物言わぬ妹、そして父と兄の亡骸であった。血の従者であった母は、父の死によって肉体が崩壊したようで塵も残っていなかった。

残されたディアドラはこの無道を訴える力すらなかった。襲撃者は中央でも名の知れた中級貴族で、当主はディアドラの父を正面から打ち破った猛者である。ディアドラは領地を返し、平民となった。軍も辞した。そんなディアドラを密かに雇ったのは、父の仇と対立する別の貴族だった。

十年以上の月日を重ねて、ディアドラは自分を雇った中級貴族を乗っ取った。婚

姻関係を結び、力を示す、逆らう血族を殺害、上書きして潰して、そしてその後復讐を果たした。家族と領民がされたことと同じことをやり返した。父の仇を正面から滅ぼし、その妻も打ち取った。一人娘は戦利品として持ち帰り、妹がされたように凌辱した。

その中でディアドラはあることに気づいた。

美しく立場ある者が転落して汚れていく様は見えていて心地いい、ということだ。

ディアドラを恨み、憎み、いつか殺してやると息巻いていた少女がやがてはディアドラに卑屈に笑い、媚び諂い、ディアドラの機嫌を窺うようになり、さらにはディアドラに愛情を向けるまでに墮落した。身を守るために誇りも身体も差し出して、記憶すら都合よく書き換えた。それが今のマリアであり、ディアドラの嗜虐的な性癖を決定づけた張本人であった。

それ以降、ディアドラは秘密裏に敵対した敵の中から身分ある少女を選んで連れ帰り、屈辱を与えることを趣味とした。裏の顔は常に秘密にしていたので、ディアドラの真の姿を知るのはマリアくらいのもとなった。

広がった領地の中にある誰も見向きもしない無意味な熱帯雨林。生産性がなく開

発困難な地域にあえて別荘を建てたのも、人目につかないところで趣味を満喫するためだった。

「じゃあ、そうね。マリアとも一年ぶりくらいかしら。いいわ。今日は気分がいいし、あなたのしたいことに付き合っただけあげる」

「は、はい……ディアドラ様」

心底から嬉しそうに心を捻じ曲げられたマリアは笑う。

ディアドラと敵対していた当時のことを、マリアはもう覚えていない。どうでもいい過去の話だ。四百年も昔に死んだ過去のことなど今更思い出そうとも思わない。ただ、ディアドラに愛してほしいという一念だけが胸にある。そういう風に思想が決まってしまった。時間をかけて東雲もこうなる。そうするだけの手段がディアドラにはいくらでも存在しているのだ。



熱帯雨林の中を進むのは当然ではあるが大変な困難を伴う。

危機が生い茂っていて道はなく、足元は常にぬかるんでいる。進む先には沼地があつて、どんな生き物が潜んでいるか分からないので避けるしかなく、目的地まで真つすぐに進むことができないのだ。

気温は夜でも高く、湿度も尋常ではない。体表面が湿り続けていて、汗が気化しないので体温が下がらず、熱中症の危険と隣り合わせだ。不浄な環境の中では、ちょっとした切り傷が感染症を引き起こす。一見して飲み物や食べ物があるように見えるが、大抵は食用に適さないものばかりだ。そういうことを考えると砂漠と熱帯雨林のどちらが人間にとって過酷なのだろうか。

とはいえ、凧とアカネには普通の人間とは異なるサバイバル上の強みがあつた。それは魔術の存在だ。

何もない処から火を熾し、獣除けの結果を張り、濡れた身体を乾かす。魔術を使えば熱帯雨林の中でも比較的快適に過ごすことができる。飲み水の確保も工夫すれば難しい話ではない。

倒木を乗り越えて湿った枯葉を踏みつける。苔むした木々がどこまで立ち並び、その間を埋めるように背の高い草が茂っている。歩いているだけで全身が濡れてしまふ。気持ちの悪い環境だ。

「また川か」

行きついたのは泥色の川だ。

水の流れはほとんどないようだ。

上空からも捉えられない小川が四方八方に伸びている。背の高い木々が地表の様子を覆い隠しているからだ。

「昏月様、どうしましょるか？」

「できれば迂回したい」

暁の帝国にある川とはまったく異なる川は、凧からすれば異質極まりないものであった。

もちろん、自然の川はとても危険だということを凧は知識として知っているし、ここに来るまでに何度も経験した。

試しに石を拾って川の真ん中に投じてみる。すると水しぶきがそこかしこで上が

り、黒光りする鱗が見え隠れした。

「ワニ系がいっぱいいるなこども」

凧はため息をついた。

暁の帝国の川はすべてが排水路か工業用の用水路だ。天然物は一つもなく、都市計画の中で整備されたものである。当然、そこに危険生物は生息していない。ところが混沌界域の川は危険生物だらけだ。魔獣ではない普通のワニですら、時に攻魔師を殺傷する。泥川の中に足を踏み入れれば、どこからか近寄ってきたワニに食い付かれ、そのまま水中に引きずり込まれるだろう。

そうと分かっていれば対処のしようもあるが、問題はこの中に魔獣が潜んでいる可能性もあるということだ。

ワニだけならばどうとでもなる。小さな黄金を川に飛び込ませるだけで、周囲のワニは全滅するだろう。しかし、そこで強力な魔獣が出てくるとなると話は変わる。逆に凧とアカネが一息で食い殺されるかもしれない。

この地域の生物についての知識がないので、迂闊な行動はできない。凧とアカネの行軍速度が遅滞しているのは、熱帯雨林そのものが自然の要害を成しているから

だった。

どこかで無理をしなければならぬ場面があるだろうが、その判断を誤ると取り返しがつかなくなる。

川から一度離れようとしたとき、唐突に凧の首が胴体から離れた。綺麗に宙を舞う首。遅れて思い出したように血が噴き出して、頭をなくした身体が無様なステップを踏んだ――。

「ッ!!」

脳裏に浮かんだ死は、一秒以内に訪れる。

確認の暇もなく、凧は靈感に従って姿勢を低くする。

鋭い刃が凧の首があつたところを通過した。それは高速回転する鎌で、川を渡って対岸の大木に突き刺さった。

すぐに跳ね起きて全身に魔力を行き渡らせる。アカネは何が起こったのか分かっていなかったがさすがに訓練を受けてきただけあって、対応は機敏だった。拳銃を手にとって、いつでも射撃できるような姿勢で背後を振り返る。

白い炎を纏う鎧が佇んでいた。

(何、あれ)

今まで見たことのない怪物だと直感した。

目があっただけで足が震える。熱帯だというのに凍えるような寒さが足元から忍び寄ってくる。見れば、怪物に触れた植物の表面に霜が降りて葉が萎れていく。あれは死だ。よくないものだ。この世にあって、あの世の亡者に等しい別物だ。

「アカネさんッ、そっちじゃない！」

白い鎧に目を奪われたアカネは風の言葉にやっと我に返った。その時、アカネの左側には音もなく巨大な蜘蛛が近づいてきていた。

「タイニー・アウルム  
小さな黄金ッ」

咄嗟に風は黄金の豹を召喚した。瞬時に地面を蹴って、豹は巨大蜘蛛に躍りかかる。やはり、魔術的な防御力を持たない蜘蛛は脊獣のいい的だ。小さな黄金の電撃に曝されて、大蜘蛛は煙を上げてひっくり返った。

「あ、ありがとうございます、昏月さ……あッ」

「ぐッ……！」

小さな黄金を蜘蛛に向かわせた隙を突いて鎧は風まで二歩のところ近づいてい

た。見た目以上に俊敏で、この距離からすらりと抜いた直剣が凧の首を狙った。

ギヤリリリッ、と耳をつんざく異音が響く。

凧の手を覆うように現れた金剛石の籠手が刃を辛うじて弾いたのだ。ドール・アダマス鈍き金剛は

金剛石の防具を形成する眷獣だ。防ぐだけでなく、相手の攻撃を反射する。籠手に受け止められた剣は、そのままの勢いで持ち手に向かう——ことはなかった。跳ね返ってくる勢いのままに白い鎧は回転し、追撃をかけてきたのだ。

靈感を恃みに凧はこれを避けた。

危うく腹を真つ二つにされるところだった。

「こいつ……強い」

ただ力任せに剣を振るっているわけではない。確かな技術を持っている。鈍き金剛の効果を知らないはずなのに、瞬時に適切な対応をして見せた柔軟な対応力は脅威だ。そしてそれは同時に、この怪物に明確な理性があることを明示している。

呼吸をしているのか。口元からは火の粉が一定のリズムで舞っている。目に当たる部分からも白い炎がメラメラと溢れているではないか。

「Syuaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa!」

「きゃあああああッ」

それは雄たけびだったのか。

強烈な叫び声にも似た何かが凧の身体を凍て付かせ、余波を受けたアカネはパニックになったように悲鳴を上げてへたり込んだ。

声に乗って四方に駆け巡るのは死の予感。凍える凧は実際に気温を下げていくわけではなく、そう感じさせるだけのものではあるのだが、それが強力だ。何せ、植物ですら凍えていると錯覚し、萎びてしまおうし、大気中の水分も実際に霜に変わる。それは、万物に作用する暗示と言えた。

凧は大きく深呼吸をして、目を見開いた。凧にはその暗示の効きが悪いようだった。確かに手足は痺れるような感覚があるが、戦えないほどではない。

「朽ちた銀霧！」

ウィザード・シネレウス  
鎧の狙いは首。

凧は剣の切っ先をあえてよけず、触れる箇所を霧に変えた。凧を突き抜ける白銀の剣は、凧に傷を負わせることはできず、返す刀で重力剣を白い鎧の胸に深々と突き刺した。

「ぎッ……」

鎧そのものは特別な品ではないらしい。鎧は、インフェリア・アーデル不出来な黒剣の刃を防ぐことができず、重力剣は、肉と骨を断ち切り、心臓を貫いた。

鎧の左手が風の首を掴んだのは、その直後だった。

「ぐ、あ……」

ギリギリと締め上げてくる。胸を貫かれているのに、力はまったく衰えない。

「あ、あああああああああッ」

アカネが興奮気味に鎧を銃撃した。ライフル弾が鎧の頭を貫通し、さらに側面から胴体に撃ち込まれる。

「G u s s u u u a a a a a a a a a a a ……」

呻き声を漏らし、銃弾の衝撃でよろめく鎧を風は蹴り飛ばした。不出来な黒剣の能力で相手の体重を軽減したことで、大きく距離を取ることに成功した。

鎧の怪物は未だに健在だった。

まったくこちらの攻撃が通じていない。

アカネの手が震えている。恐怖しているのだ。見ているだけで、どこか別の世界

に連れていかれてしまいそうな気がする。

「アカネさんの攻撃はたぶん通らない」

「そう、思います」

言いながら、アカネは引き金を引く。試してみたのはショットガンだった。貫通力でダメなら広い範囲を損傷させてはどうかと思ったのだ。しかし結果は鎧が大きく仰け反るだけで、すぐに体勢を立て直してくる。

一発、二発と立て続けに発砲したが、数メートル後ろに下がらせるのがやっとだった。

鎧は砕けているし、肉も破壊できている。しかし相手の命に届いている感じがしない。肉体の欠損はあまり意味を成さないようだ。

だらりと下げた右手に銀色の長剣が握られている。その切っ先が触れた地面は、徐々に白みを帯びていく。

「白い幽鬼」

ぼつり、とアカネが呟く。

「あいつのことですか？」

「……聞いたことがあります。昔、ディアドラが従えていた魔物の中にそう呼ばれた剣士がいたと。昔話になるくらい昔の話です。黒い森の王、恐怖の炎、血濡れの冬、骸の支配者なんて呼び方もされていたみたいですが……実在したなんて」

「ずっと人目につかないところで待機させてたってことか。正体とか、分かります？」

「いいえ、さすがに……正直、おとぎ話の怪物程度の認識でしたから」

仰々しい名前をいくつも持っているらしい剣の魔物だ。

冷たい吐息だけで、生命力を奪い取られそうだった。

「あれが本当に白い幽鬼なのだとしたら、勝ち目なんてありませんッ。不死身の怪物ッ。血に飢えた真正正銘の魔物ですッ」

「アカネさん。そうだとしても、逃げられる相手じゃなさそうですがねッ」

幽鬼が跳躍した。重い鎧を着込んでいるとは思えない軽やかな身のこなしで、尻を頭上から両断しようとする。

それを尻は斥力を用いて迎撃した。ぐん、と急に進路を変えて、幽鬼は目標を誤ってしまう。見えない力に引き寄せられたかのように、あるいは弾かれたかのよ

うに大木に着地する。そこをアカネが狙撃する。口径の大きなアサルトライフル。いわゆるバトルライフルによるフルオート射撃だ。間断なく容赦もなく叩き付けられる鉛弾の嵐を受けて幽鬼が堪らず地上に落下する。

「あああああああああああああああッ」

なおもアカネは引き金を引き続ける。

大口径で貫通力のある弾丸は太い木の幹も貫通できる。木陰に隠れた幽鬼に対しても攻撃性能をある程度維持している。

「違う、アカネさん、後ろだッ」

「え？ わッ!？」

凧の指摘を受けてアカネは間一髪のところまで死を免れた。虚空を薙いだ剣先はアカネの髪をはらりと舞わせるだけに終わった。

アカネの身体が恐怖で凍り付く。目があった途端に全身が痺れてしまうようだ。理屈を抜きにしてただひたすらに恐ろしい。魂が凍り付くような錯覚すら覚えるほどに。

「あ、あ、あああああああああッ!!」

恐怖から逃れるために、アカネは引き金を引いた。ただ茫然と佇んでいることだけはできなかつた。恐怖に身が竦む者と恐怖から逃げるために行動してしまう者がいる。アカネは後者だつた。至近での発砲。でたらめな射撃だが、この距離で外すことはない。

相手が普通の人間ならば挽肉になつているのであろう猛烈な火力が叩き込まれた幽鬼はしかし、鎧を碎かれ火花を散らしながら剣を振るつた。

そこに割つて入つたのは風だつた。黒い剣が銀の剣を逸らした。

「下がってッ」

アカネと入れ替わり踏み込んだ風の剣撃が魔力の衝撃を四方に飛ばす。

木々がへし折れて、凍り付き、枯れ果てる。銀色の剣が死の風を吹かせながら縦横無尽に駆け巡る。直感に従い、風は黒い剣でこれを受け流しながらも距離を取つた。慣れない森での戦いは基本的に風に不利ではあるが、身を隠す場所は多い――

――そう思っていたら大木を幽鬼はやすやすと斬り捨てて見せる。風は倒れる大木の重量を軽減し、斥力でこれを弾いて幽鬼に叩き付けた。直撃したときには重量軽減の魔力は重量増加へと転じ、本来の質量の二倍に相当する重量となつて幽鬼を押



い。凍える風は恐怖を呼び起こし、心身を消耗させる。植物は寒さにやられて真っ先に枯れるし、川にたくさんいたはずのワニもこの幽鬼を恐れてか姿を消した。

凧の吐息が白くなる。湿っていたはずの土が凍り付き、周囲が白くなっていく。骨の芯まで身体が冷えていくような冷気が立ち上っている。ここは熱帯雨林だったはずなのに、川の表面に氷が張っている。この幽鬼が、ただそこにいるだけで周囲の命が凍えているのだ。それこそ、空気や水ですらその霊的な冷気の影響を避けられない。

「小さな黄金！」  
タイニー・アウルム

雷光の豹を召喚し、幽鬼に向かわせた。牙と爪は物理的な破壊力を持ちながらもそのすべてが雷撃だ。幽鬼はこれを巧みな剣裁きで凌ぐ。やはり、特別な剣だ。魔力で構成された雷光の豹を剣で戦えるのは、それがまっとうな材質ではないからだろう。何かしら魔術による賜物か、それとも幽鬼が持つ能力を纏わせているのか。あの怪物が発する魔の冷気が色濃く、剣の魔術特性まで分からない。

「うく……ッ」

大きく振りかぶってきた幽鬼の剣を不出来な黒剣で受け止める。身体能力を向上

させた身体が拉げてしまいそうなくらいの膂力に凧は膝をついた。

そこに幽鬼の蹴りが襲う。胸を強かに蹴られて、三メートルばかり吹っ飛んだか。仰向けに倒れた凧に覆いかぶさるように幽鬼がとどめを刺そうとする。反応が遅れた凧を手伝って、黒剣が左手を操って銀の剣を弾く。魔力と魔力がぶつかって衝撃が駆け抜ける。

「ぐ、う……ご、あッ」

凧の胸を幽鬼が足で踏んで押さえつけた。肺が押し潰されて呼吸が満足にできなくなる。そして、凧が反撃に移る前に、幽鬼は凧の左手首を剣で貫いていた。

幽鬼の剣が凧の左の手の平を貫いていた。

「ぎ、あ、あああああああッ！」

刺し傷の痛みだけではない。左手から幽鬼の魔力が凧を侵食している。冷気が凧の生命力を奪い、左手から徐々に凍えさせてくる。左手に握っていた出来ない黒剣が手から離れて霧散した。

『オマエにフサワシイ死を、クレテヤル。オソレ、オノノき、死を受け入れヨ、ニンゲン』

冷たい吐息で囁いて、幽鬼は剣を振じった。めきめきと凧の左手の骨が砕けて、肉が抉れる音がする。

「あ、ぐ、ん、あああああああッ！」

あまりの寒さに気が遠くなる。

胸を抑え込まれていることでもなければ、剣で貫かれた痛みでもない。凧を苦しめているのは、傷口から流れ込む幽鬼の冷気である。凧を凍死させようとでもいうのか。幽鬼は凧が弱り、苦しんで死ぬのを待つように剣を突き立てたままである。左手を固定された今、使えるのは右手だけだ。震える右手も感覚が消えつつあって、弱弱しく胸を踏みつける幽鬼の足を掴んだ。

酷く冷たい。ドライアイスを素手で掴んだ時のようで、あまりの冷たさに手の平が火傷している。

「響ゆらぎよ」

バン、と炸裂音がして、幽鬼がたたらを踏んで後ろに下がる。

不思議そうに、幽鬼が凧を見てくる。

呼吸が楽になって凧は咳き込みながら立ち上がる。このまま座り込んで休みたい

という欲求が鎌首を擡げるが、一步前に出ることで誘惑を断ち切る。

「黒雷ッ!!」

全身を強化して、もう一度出来ない黒剣に声をかけた。重力操作の力だけを借りて、幽鬼に向かって跳ぶ。五歩かかる距離を一步で詰める。幽鬼の剣の軌道を霊視で読んで、ストレスのところをすり抜けて懐に飛び込んだ。凧の攻撃など効きはしないと高を括ったのだろうか。幽鬼は避けようとしなかった。

凧は小さく早く呼気を切って丹田に「気」を集め、掌底を放った。

「若雷ッ!!」

ドン、と衝撃が幽鬼の背中を突き抜ける。よろめく幽鬼から凧は離れず、追撃する。

「伏雷ッ!!」

霊力を纏わせた膝蹴りで幽鬼の腹部を打ち付ける。禍々しい吸血鬼の魔力ではない。凧沙から受け継いだ強大な霊力を叩き込む。獅子王機関の対魔族用の戦闘術『八雷神法』は、剣巫が素手で獣人を打ちのめすことができるほどの強化を実現する。

「火雷ッ!!」

敵の内部に靈力を送り込み、内側から破壊する。強力な防具に身を包んでいても、内側を攻撃されては一溜りもない。これはそういったコンセプトの下に鍛え上げられた技術であり、叩き込んだ靈力は吸血鬼や獣人の再生力を弱体化させる。

物理的な破壊が意味を成さない幽鬼に対して、内部を靈的に攻撃する八雷神法は有効打を与えうる数少ない手段であった。

高密度の靈力を拳に纏わせて、思い切り幽鬼の顔面に撃ち込んだ。砲弾のように靈力を解き放ち、幽鬼が大きく吹き飛ばされ、そのまま川の氷を突き破って水中に没する。

砕けた川面の氷が棘状に変化した。幽鬼の怪物が、怨念の炎を噴き上げながら川面に姿を現した。

じつと風を見つめた後で、何を思ったのか幽鬼は身を翻して対岸の森の中に消えていった。

「退いた？」

どっと汗が噴き出した。

幽鬼が去った途端に世界に色と熱が戻ってきた。蒸し暑い熱帯の空気がねっとり  
と凧を包み込む。

足の力が抜けて、崩れ落ちてしまう。魔力も霊力も相当に消耗している。このま  
ま倒れ込んで眠ってしまいたいくらいだった。

「昏月様……ッ」

アカネが慌てた様子で駆けよってきた。

「申し訳ありません、何のお役にも立てず。その手……ッ」

アカネは凧の左手を見て絶句する。

「なんだこれ、気持ち悪ッ」

凧もふと自分の左手を見て顔を歪めた。

幽鬼に貫かれた左手は肘から先が真っ白になっていた。血色が悪いにもほどがあ  
る。

「失礼します」

と、アカネが凧の左手に触れる。

「痛みは？」

「ないです」

「まったくですか？」

「触られてる感覚もないくらいで」

凧の左手はどうも完全に機能を失っているようだった。動かない上に痛覚も働いていない。

「ものすごく冷たい。その、言い方は悪いのですが、死んでいるみたいですよ」

「その言い方、ホントに勘弁してください」

言われたくなかったが、凧もそんな風感じていた。

左手だけ見た目が白すぎる。

昔見たホラー映画に出てくる悪霊の肌がちょうどこのような見た目だったなと思うくらいの白さだった。生気がないというか、血の気が完全に失せている。血が通っているように思えなかったし、実際に血が通っていないかもしれない。手の平の傷口から血が出ていないからだ。

「とにかく、幽鬼が撤退してくれたのは幸運でした。ここを離れないと」

「動けますか？」

「まあ、何とか」

凧は足に力を込めて立ち上がる。手足が震えていて、肉体的な限界に近いことを教えてくれる。どこか安全な場所を探して、休息を取る必要がありそうだ。

パキパキと木の枝が折れる音がした。凍えて朽ちた木々は脆くなって折れやすくなっている。葉も落ちて見通しがいい。そのおかげもあって、早いうちに新手に気づけたのはよかったのだろう。

巨大な蜘蛛が二人を取り囲んでいた。幽鬼の乗騎として操られた一匹を凧は小さな黄金で倒していた。その死骸に釣られてやってきたのだろうか。幽鬼の冷気が消えたことで、熱帯雨林に住まう魔獣たちが活動を再開したのか、あるいはこれも幽鬼の指示によるものか。蜘蛛の言葉を解すことはできないので、彼らが現れた理由までは分からないが、はっきりしているのはこのままでは凧とアカネは仲良く蜘蛛のデイナーに早変わりということである。

「こんな時に……」

アカネは両手に対魔獣用散弾銃を構えた。口径が大きいだけでなく、水平二連式である。完全に趣味の領域で過剰火力のはずだったが、巨大蜘蛛を相手にするには

これでも火力が心もとないくらいだった。

「昏月様は戦えますか？」

「もちろん、と言いたいけど、どこまでできるか」

気力も魔力もすっからかんだ。本来ならば戦える状態ではないが、戦わなければ死ぬだけなので絞り出せるだけ力を絞り出す。まずは半径一メートルに虫除けの結界を張る。あの蜘蛛の魔獣にどこまで通じるかは不明でも、ないよりはマシだろう。アカネが発砲する。強力な散弾銃の反動をアカネは片手で抑え込んでいる。何かしらの強化によるものと思われるがアカネの身体から発する呪力の動きは風の知識にはない。

「タイニー・アウルム小さな黄金。頼むぞ」

身体がびりびりと痺れる。

自分の魔力がいよいよ身体の組織に影響を与え始めたのだろうか。吸血鬼化の進行でご無沙汰になっていた感覚は、懐かしいとすら感じられた。

小さな黄金が速やかに獲物に食らい付く。大蜘蛛も無抵抗ではなかった。小さな黄金の電撃にある程度耐えている。魔力への耐性を有する個体であり、小さな黄金

の出力が大幅に低下しているからでもあった。

凧は立っていられず座り込んだ。足の力が全く入らないどころか、目が霞んでくる始末だ。

「くそ……」

毒づくことにすら疲労感を覚える。

「昏月さん！　しっかり！」

断続的にアカネが発砲する。巨大蜘蛛の頭に強烈な散弾を撃ち込んで吹き飛ばす。緑色の体液を噴き出しながら蜘蛛はアカネから距離を取る。それでもアカネが一度に攻撃できる蜘蛛は二匹が限界だ。それも一撃で絶命させられるわけではない。小さな黄金が素早く立ち回り、蜘蛛を近づけないよう牽制してくれているが、凧が意識を失えばそこまでだ。押し寄せる蜘蛛の群れにアカネ一人では対処できない。

凧に無理をするなど言いたいところだが、凧の眷獣がいなければ立ち行かない。無力感にアカネは唇を噛んだ。

こんな蜘蛛に食われて死ぬのは御免だ。早く逃げるなり、死ぬなりしてくれと引

き金を引き、弾切れになったらすぐに違う銃に持ち替えた。とにかく銃弾をばらまいて、蜘蛛を近づけない。小さな黄金が弱った蜘蛛に噛みついて電流を流し込み、戦闘不能に追いやってくれる。蜘蛛の数は少しずつ減っている。しかし、その包囲網は着実に狭まってきている。獲物を包囲して、じわじわと距離を詰め、そして隙を見て一息に食いかかる。それがこの巨大蜘蛛のハンティングだ。

「く、この、このおッ」

短機関銃の銃身が焼き潰れるほどに撃ちまくり、散弾銃を撃ちかけて、手榴弾を投じる。ロケット弾くらいの火力を間断なく叩き込むくらいでないと、この蜘蛛の群れを制圧するのは難しいのではないか。銃弾では、巨大蜘蛛を怯ませることはできても、確実に命を奪うまでには至らないことが多い。

小さな黄金の動きが鈍っている。凧からの魔力供給が弱まっているのだ。凧の顔色が悪い。人間でありながら眷獣を使い続けているのだ。完全な吸血鬼でない以上、たとえ吸血鬼に近い体質を持っていても限界はある。

「あ……」

蜘蛛が八本の脚を跳ね上げて、アカネの眼前に迫った。巨大な身体に相応しい凶

悪な毒牙が毒液を滴らせてアカネに迫った。不思議なくらいにスローモーションに見える。見分けがつかなかったのだが、この蜘蛛はチョコ祭を襲ったセグロオオヒゲクモとは種類が違うらしい。ハンティングの方法が全く違う。そんな今となってはどうでもいいことをアカネは考えていた。

死を前にして思考停止する。逃げるでもなく、諦めるでもなく、ただ固まってしまふ。スローモーションに見えているだけで、アカネの反応速度が上がったわけではない。極限まで高まった危機感が脳内物質を過剰分泌した結果、認識能力が一時的に上昇したというだけだ。反応できていない分、この毒牙が自分に突き刺さす瞬間までをしっかり見続けることになるだろう。

終わりを覚悟した直後、赤黒い炎がアカネの眼前を通り過ぎて行った。一瞬感じた熱風が過ぎ去って、アカネは命を繋いでいた。

気が付けば、アカネを食らおうとした巨大蜘蛛が炎を上げながらダンスしていた。身体を内側から焼かれて巨大蜘蛛はそのまま死んだ。

「何ですか、これは」

現れたのは赤黒く燃える炎の剣士だった。それも同じ炎の剣士が五人もいる。

「誰かの眷獣だ」

と、凧は眩く。

禍々しい負の魔力は吸血鬼の眷獣に他ならない。灼熱の剣士は各々が巨大蜘蛛に躍りかかって、これをめった刺しにし、斬り刻み、そして焼き払った。炎は電撃と同じく巨大蜘蛛の弱点で、弱り切った眷獣ならばまだしも、本調子の眷獣の相手を蜘蛛が務められるはずもなく、五人の剣士の活躍によって凧とアカネを襲った巨大蜘蛛は瞬く間に駆除されていった。

「いったい、誰が……」

凧は確認しようとして前のめりに倒れた。目が霞んで何も見えない。力を使い果たして、体力の限界が訪れたのだ。助かったという安堵感が緊張の糸を切ってしまう、電源を落としたかのように凧の意識は闇に沈んでいった。



## 第五部 十九話

寒い。

ひたすらに寒い。

呼吸すると肺が凍る。息ができない。あれほど熱かった血潮が凍結して心臓が悲鳴を上げている。死ねと誰かが言った。一緒に来いと誰かが言う。言葉は分からないが意味は分かった。見えない手が自分の手を掴んで、引っ張っている。足が重い。そんなに早く歩けない。筋肉も骨も凍っている。歩くだけで肌がひび割れて凍った血が零れ出ている。もう動けないし、どこにも行けない——。それはダメだと誰かが言う。身体が痛い。全身が炎に焙られている。突き刺されている。切り刻まれている。苦悶と苦痛、名誉も誇りも命までも奪われて、冥府の門をくぐる。ことすら許されず、今もこうして凍えながら彷徨っている。

一人は辛い。仲間が欲しい。もっと、たくさんの仲間が欲しい。

生きているものが妬ましい。暖かい世界が愛おしい。苦しい。ただ苦しい。だから、お前も一緒に来い——。

「あ、起きた」

パチクリ、と大きな瞳が風の眼前にあった。コバルトブルーの透き通った瞳はサファイアを嵌め込んだように美しい。

「おい、こやつ、起きたぞ」

それは年端も行かない少女だった。

パタパタとせわしなく走っていく後ろ姿から、十歳かそこらの年齢だろうと推測した。少なくとも人間の見た目に合わせれば、であるが。

一枚布から成る貫頭衣を着て、肩にかかるくらいの金髪を自然に任せている。足元は裸足だ。

「どこだ、ここ」

凧は自分がどこにいるのか分からなかった。

とりあえずは生きているらしい。

倒れる直前の記憶は、自信はないが明瞭だ。蜘蛛の大群に囲まれて、あわやというときに誰かの眷獣が間に入って助けてくれたのだ。

身体が重く、酷い疲労感がある。どれくらい眠っていたのだろうか。

「洞窟、これが本物の」

テレビでしか見たことのない自然の形。流水や地盤の隆起、あるいは土砂崩れ等で長い年月をかけて、またあるいは唐突に生まれる巨大な穴。それは、自然を知らない風にとっては浪漫の対象でもあって、秘密基地めいた神秘的な空間に子どもの頃は大層惹かれたものだったが、まさか今になって洞窟の中に寝そべることになるとは。

背中に痛みはない。

木の枝を組んだ簡易的なベッドに木の皮を敷いているようだ。

「昏月様、よかった。意識が戻りましたね」

「アカネさん。すみません、俺、倒れたみたいで」

「無理もないです。相当の消耗でしたから」

先ほどの少女に呼ばれたアカネは慌てた様子で洞窟に入ってきた。

「俺、どれくらい寝てました？」

「丸一日以上、三十二時間と少しですね。このまま目覚めなければどうしようかと

思っていました」

「三十二時間って、痛ッ……」

飛び起きるように身体を越した尻に鈍痛が走った。どこがどう痛いと言表現できないのがまた辛いところだ。

「寝すぎて身体がバキバキだ」

「動かせますか？ 正直、今の昏月様の身体がどうなっているのか、わたしには何とも言えないんです。その手のこともありますし」

「……これか」

ぶらり、と垂れ下がった左手は相変わらず真っ白なままだ。感覚がないのも変わらない。とりあえず、包帯か何かで固定して邪魔にならないようにしておこうと思っただ。

「こうしてみると、呪いっぽいですね」

「呪い、ですか。見た感じ、確かにそうですね」

「専門じゃないので何とも言えないですが……魔術とは別なのは確かです」

魔術ならば効果を發揮させるために、術式が存在する。よって、術式を逆算する

ことで解呪することもできる。しかし、この呪いは極めて原始的だ。術式が存在せず、魔力で凧の身体に張り付いているような状態である。手っ取り早いのは力技での解呪。強い魔力なり霊力なりで洗い流すのが一番だが、もともとの呪詛が強力なのと、今の凧の手持ちでそれを可能とする物がないというので選べない選択肢だ。当面、この呪詛については対症療法しかない。進行を抑えて、無事に帰ることができたら専門家に診てもらおうというのが確実な対処法であった。

「アカネよ、捕ってきたのじゃが、これはどうするのじゃ？ このまま食っているのか？」

洞窟の入り口から幼い声が聞こえてくる。

先ほどアカネを呼びに行った少女が、大きな魚を抱きかかえていた。淡水に暮らすの古代魚、アロワナの一種であった。

「あれ、誰ですか？」

「わたしたちの命の恩人ですよ」

少女は巨大魚を抱えながら洞窟の中に入ってくる。

一メートル弱の巨大魚は、少女よりも少し小さいくらいのもので、しかも丸々

と肥えている。それを軽々と持ち運んでいるので、相当筋力があるようだ。

「凧君はお目覚めのようじゃが、食欲はあるのか？」

「腹ペコだけど、まず君のことを教えて欲しいんだけど」

「ん？　ほう、我のことか。ほうほう、そうか、我のことが知りたいか。ふふふ、

凧君はやはり気が多いな。いくら我が美少女とはいえ、初対面で口説こうとは」

「口説いてないし、この状況で初対面だから教えてくれて言ってるんだけど。あと、気が多いとか言うな」

美少女という点には同意するが、凧は見た目小学校低学年から中学年の子どもは性的関心の対象外だ。

「むー、反応がつまらぬな。せっかく、初めての会話なのだから、もうちっとノリよく話しようではないか」

頬を膨らませて不満を口にする少女。どこことなく尊大な物言いが、身体にまったく合っていないのが一周回って面白いとは思った。

「まあ、よい。自己紹介じゃな。我が名はゲヘナ。深淵より現れし、火と硫黄の王にして永久の炎の番人、そして汝の命の恩人なるぞ、敬え」

胸を張ってゲヘナは言い放つ。

自信満々で実に得意げだ。

「凧です」

「知っておるぞ」

無駄な自己紹介を省いた凧は、とりあえずゲヘナと名乗る少女と握手をした。

「で、結局何者なんだ？」

「聞いておらなんだか？ 我が名誉ある名を二度も名乗らせようとは凶が高いにもほどがあるろう。だが、まあよい。我が名は……」

「ゲヘナちゃんなのは分かったから」

「ちゃんはいらんぞ」

凧はゆっくりと立ち上がった。

まだふらつきがあるし、両足は痺れている。左手の自由が利かないのも問題だが、足の踏ん張りが利かないかもしれないというのは、戦闘だけでなく移動にも影響が出る。特にここは足場が悪く、乗り越えなければならぬ障害物も数知れない。

「お二人とも、魚、焼けましたよ」

ゲヘナの自己紹介が一段落したところで、アカネが声をかけてきた。

天然の焼きアロワナだ。

巨大なので三人で分け合ってもすべてを食べることができない。大きな葉を皿にして、切り分けた白身を食す。

「少し泥臭い」

「しかたないです。こんな川に棲んでるんですから」

白身は味気なく、泥の味がする。それでも食べないよりはましだ。エネルギー補給は必要だ。体力が著しく低下した尻はなおのこと。少し無理をしてでも胃に食料を届けなければならない。

「ゲヘナ様は、お気に召したようで」

「ん？　そうでもないが、魚を食すのは初めて故」

がつがつと魚肉を食べるゲヘナ。

「改めてだけど、このゲヘナちゃんが俺たちの命の恩人、つまりあの眷獣の宿主ってことでいいんですか？」

「なぜ我に聞かぬ？」

「そりゃ、なんか会話にならなそう」

「何と生意気な小僧じゃ。暗き深淵より来たりし我が炎、その目に焼き付けたであらうに。敬え」

「それ口癖か？」

魚を頬張って、紅の頬がぷっくり膨れてリスみたいになっている幼女をどう敬えというのか。

「ちなみに我は吸血鬼ではなく眷獣である、敬え」

「敬えはいんだけど……眷獣？」

「如何にも」

むふーと自慢げに小さな胸を張る。

よくよく見ればどこかで見覚えのある顔立ちである。まさかと思うが、いや、この場にいる以上は何かしら東雲に縁がある者であろう。

「東雲と関係があるのか？」

「どうか、我は東雲の眷獣であるぞ。目覚めたのはつい何日か前であるが」

「どうということ？」

にわかには信じがたいことをゲヘナは言う。アカネに目配せすると、アカネはもう聞いていたのだろう、口を開いた。

「どうも、その方はシノ様の血に宿る眷獣、ゲヘナ様本人のようです」

「……聞いたことない眷獣だけど」

東雲の眷獣は氷でできたサイの骸骨であるシバルバーと白装束の女性の骸骨であるヨミの二体が記録されている。凧も新しい眷獣が目覚めたという話は聞いていない。

「凧様、この前シノ様に血を吸われたでしょう？」

「……まあ、はい。聞いてました？」

「ええ、もちろん。報告を受けてます。まあ、本来であれば微に入り細を穿って聞き取りたいところなのですが、それは置いといて、その時にこの方がお目覚めになったというこのようです」

「あの時に？」

東雲が一世一代の土下座をして凧の血を吸ったときに、このゲヘナは目覚めたのである。吸血鬼の眷獣は初めからすべて揃っているわけではない。思春期に入った

ころから徐々に目覚め出す。特に吸血によって力を増すと、それを呼び水にして新たな眷獣が目を覚ますことはよくある話だった。

東雲ほど強大な才に恵まれた吸血鬼の眷獣が二体だけというはずもなく、待機状態だったゲヘナは凧の優れた霊媒の血で覚醒したのだった。

「んく、うむ、左様。我は汝の血を啜り目覚めた眷獣である。我に血を献上せし汝は、特に目をかけてやらんでもないぞ」

「眷獣がこうして出歩いてるのはどういうわけで？」

「この身は眷獣の器というヤツよ。ディアドラが禁を犯して作り上げた東雲の紛い物よ」

「作ったって、そりゃ」

凧は絶句した。

吸血鬼のクローニングは今の科学力では不可能とされる。唯一の成功例は空菜だが、その技術は失われている。

ホムンクルスであっても不死の呪いまでは再現できない。

魔術でも吸血鬼の完全再現はできないのである。

ただし、歴史を紐解けばそれに近しい技術は存在していた。

太古の時代に生み出された第四真祖は、まさに人工的に生み出された吸血鬼であり、その第四真祖を十二分割して封印した際に作られた眷獣の器もまた人工吸血鬼である。

東雲はその人工吸血鬼であるアヴローラ・フロレスティーナの娘である。それと思えば、なるほど東雲の身体にどれほどの価値があるのか計り知れない。

「眷獣の器を再現するって言ったって生半可なもんじゃないだろう？」

「無論、この身は不出来に過ぎる。我を収めるには小さすぎる器よ。見よ、この手足の短さ。ここに来るまでにずいぶんと苦労したものよ」

「そういうことじゃなくてだな」

「うむ、分かっておる。我が身は吸血鬼には程遠い。我を納めはしたが、この身はそう長くは持つまいよ」

「やっぱり、か」

「そのような顔をするでない。我はゲヘナ。この身が失われたところで、東雲の血に帰るのじゃから、何の問題もあるまいよ。むしろ、清々するわ。今は、ちよいと

窮屈に過ぎるのでな」

ゲヘナは東雲の眷獣だという。東雲の血に宿る強大な眷獣は、少女の身体に押し込まれて封印されている。

「ディアドラが眷獣の器を用意した目的は、東雲の無力化か」

「察しがよいな、左様じゃ。ディアドラなる吸血鬼は、これと同じ物をいくつか用意しておった。それらに東雲を襲わせ、血を吸い、眷獣を奪い取ったのじゃ。まあ、かくいう我もその一体なんじゃがな」

ゲヘナはもくもくと魚を食べながらも、自分の素性を語った。

眷獣の器として生み出された肉体は当初は自我がなく、東雲の血を吸い眷獣を奪い取ったことで、奪い取った眷獣の意識が表面化したというのだ。

眷獣は意思を持っている。だからこそ、無色透明だった器に自らの意識を表出させることができた。

「ということとは、他の器の皆様はどうされたのでしょうか」

「我が同胞はディアドラの手中に置かれておる。ディアドラめが生み出したのは器のみにあらず。人工的に眷獣まで作り出しておる。それも、みな精神干渉系の能力

を持つ眷獣ばかりじゃ」

「……もしかして、みんな操られてる？」

「うむ。我は精神支配を逃れて、こうして自由を得たが我が同胞は総じて囚われの身である。嘆かわしき事よな」

「君だけ精神支配を免れた理由は？」

「我は一人にあらず。ゲヘナは一にして全、全にして一を成す焰であるがゆえに幻術如きで支配できぬものであるぞ」

「群体系の眷獣ってことね」

独特な言葉回しにも慣れ、凧はゲヘナの特性の一端を理解した。

意識を手放す直前に見た炎の剣士たちは、すべてがゲヘナだった。特殊な眷獣だが、複数の身体を持つ眷獣は時折報告される。武器の姿をした眷獣もいるように、眷獣の姿かたちや在り様は千差万別だ。群の中の一体を操ったとしても他の身体が支配されていなければ、精神支配は限定的なものとなる。

「幻術を逃れた君は、あの城から何とか脱出して、俺たちに合流してくれたと」

「如何にも。ディアドラめは東雲が手に入って有頂天であったからな。抜け出すこ

と自体は簡単じゃった。後は、汝らを探して森を彷徨っておったら、良からぬ魔力が感じられたので、すっ飛んで来たわけじゃ」

「俺たちのこと探してたんだ」

「汝ら以外にこの窮地をどうにかできる者もおらぬからな。エレディアがあればとは思わなんだが」

「エレディア？」

「汝の左手を貰った魔人のことじゃ。ディアドラはそう呼んでおった」

「それがあいつの名前なのか」

凧は未だに感覚のない左手を見た。

氷のように冷たい刃に侵された左手は、一日二日で自由を取り戻すことはないだろう。

「昏月様、エレディアですか。あの幽鬼に最後の方は渡り合えていたように見えましたが、何か分かったのですか？」

「え、あ、ああ。あれは、イチカバチかだったんですけど、あれの正体に見当がついたので」

「正体？」

「はい。あれは、まず間違いなく死霊の類です。俺もあそこまで強いのは初めて見るんですけど、間違いありませんね」

「死霊？ あれは、なるほど、確かに……」

「ネクロマンシーが大本にあるのは確実です。数えきれないくらいの人の死霊を寄せ集めて形作った怪物ですよ、あれは」

死霊を操る魔術は古今東西どこにでも存在する一般的な魔術と言える。死者に對するスタンスが各地の民族性や信仰によって違うので、内容までは一様ではないが、死者へのアプローチは原始的な魔術の一種であり、信仰の一つでもある。

「死者の魂の集合体？ すみません、やはりわたしには理解が及ばない分野です」  
「魔術的には残留思念とか言ったりしますが、死んだ人に残された魔力だったりも利用しますか。術式によって違います。自然発生する場合もありますし。まあ、あれは、別格でしょう。ネクロマンシーの範疇を明らかに超えていますよ」

「あれがネクロマンシーによる死霊の塊として、それは分かりました。対処法は？ 銃弾がまったく効かなかった以上、蹴っても殴ってもダメなのでしょう？」

生き物でないのなら、生き物を殺す方法は通じないのが道理だ。鉛弾を何万発撃ち込もうが、依り代の死体を破壊できても、その本質にはまったく影響を与えられない。

あれほど強力な死霊ならば、専用の装備と人員を揃えて計画をきちんと練って討伐に当たらなければならぬ相手とするのが普通だ。そもそも数百年も前から存在する死霊等、聞いたこともない。この密林の奥地でずっと身を潜めていたのだろうか。

「ちなみに聞くけど、ゲヘナ」

「ん？」

「君のあの眷獣は何度も使えるもの？」

「ああ、我のか。ま、使えんでもない。この身が機能停止するまでの間じゃがな」  
「やっぱり、身体の寿命はあるか」

「使うべき時には使うぞ。現世はなんとというか窮屈じゃしな。かといって、今の東雲の下には帰りとうないしな。ディアドラに上書きされては堪らぬ。あの変態に吸収されるのは、我でもお断りぞ」

「……東雲の今の状況、聞いてなかったな」

聞き逃せない言葉があったので、風は声のトーンを落としてゲヘナに尋ねた。

「東雲の近況か？　我が城を飛び出す前までじゃが、泣いておったな」

「そうか」

拉致監禁されたのだから、そういう反応になるのは自然だろう。

「ディアドラはなぜシノ様を誘拐しようとしたんでしょ？　わたしにはそれが

不可解です。あの方ほどの立場ある人が、シノ様を攫う理由が思い当たりません。

ゲヘナ様はご存知ですか？」

「我が直接聞いたわけではないが、この身が記憶している程度でよいか？」

「はい」

ゲヘナが器に宿る前から、この器は稼働していた。脳も記憶装置としては機能していたようで、ゲヘナが宿ってからはゲヘナはその記憶を参照することができたのだ。

「東雲を攫った理由は一言で言うと、愛じゃな」

「愛？」

「うむ。あのディアドラとかいう吸血鬼は、どうも東雲に異常な愛情を向けていたようじゃ。ほれ、この器。どうして、東雲に似た顔つきにしていると思う？ 眷獣を納めるにはそれが都合が良いから？ それもある、がそれは後付けの理由よ。もとはディアドラを満足させるための玩具とすべく生み出されたのが、この身を形作る技術の根幹と聞いたぞ」

「う……あ、え？ ちょっと、意味が分からないのですが」

「私も分からん。じゃが、ディアドラは東雲を誰かの手に渡そうとは微塵も思っておらぬ。ただ手元に置いて愛でる。それだけのために、これだけのことを仕出かしたわけじゃ」

「すべてを捨てて、シノ様を強引にでも手に入れる、と？ 暁の帝国との戦争すら誘発し兼ねないことを、そのために？」

「らしいぞ」

「信じられない。本当に意味が分からないのですが……？」

愛のためにすべてを投げ捨てる。

物語にはよくある題材だが、現実にはここまでのことをする者はそうそう出てこな

い。

一国の立場ある者が、他国から来た姫に思いを寄せる。そこまではいいだろう。性別の壁も物語としてなら盛り上がる。しかし、現実に実行するというのは理解しがたい行動だ。それもテロを引き起こし、暁の帝国との緊張状態を生み出し、混沌界域からテロの容疑者として追われることになるという巨大極まりないリスクを背負うことになるのになだ。

「東雲を攫った理由が東雲を好きだったからって、そんなストーリー染みた理屈で？ あれだけの被害を出したのがそれって。それに、いつまでもここにいられてってわけじゃないだろうに……どの道、混沌界域側からも追手がかかるはずだろ？」

「長く生きた吸血鬼が何を考えているのか分かるものか。自暴自棄になつとるのかもしれんし」

「東雲が危害を加えられる可能性は？」

「今まさに加えられておるじゃろう。我もだからこそ出てきたんじゃし。ディアドラはああ見えて拷問趣味の恐ろしい女じゃ。どうせ死なんかからと身体を痛めつけるのは当たり前、心を壊すことなぞ造作もない。そんな輩に囚われて、無事で済むと

思うか？ 我が主は、あれでまだ十六の小娘じゃぞ？」

「ッ……」

重苦しい沈黙が洞窟に満ちた。

自分たちの置かれている状況も危機的状況ではあるが、常にディアドラの下に置かれている東雲はもっと危険な状況である。

話を聞く限り、ディアドラは殺人も辞さないサディストだ。そういう顔を表に出さないで何百年も生きて来た狡猾な吸血鬼である。

これだけの騒ぎを起こした以上、ディアドラに再起は不可能だろうが、だからこそやけくそになっているとも言えた。すべてを覚悟して、人生最期の思い出作りをしようとしていると考えられる。人生に飽きた吸血鬼が時折見せる自暴自棄の行動は、娯楽という娯楽を貪り尽くした長命種だからこそその厭世観によるもので、ディアドラもその類なのだろう。ただ、彼女の行動によって生じる悪影響は計り知れない。

混沌界域としてもこの件は放置できない重大事件だ。暁の帝国との関係悪化は、両国の敵を利用するだけだ。

ディアドラが犯人で被害者が東雲だと分かれば、第三真祖も本腰を入れて捜索に当たる。こんな稚拙な誘拐事件が長続きするはずがない、と思いたい。

「東雲は今も苦しんでるのか？」

「今は落ち着いておるな。我は一応、主と繋がっておるから、多少は分かる。ただ、時折激しく心が揺れておるのを感じる。碌な扱いを受けておらんという証左じゃない」

「そうか」

凧は至らなさに奥歯を噛み締めた。

可能ならば今すぐにも東雲の救出に向かいたい。このまま座していても何も始まらず、混沌界域からの救出がいつになるのかも分からない。時間をかければ、東雲の苦痛はさらに積み重なる。いつかは心が壊れてしまうかもしれない。

「…………ぐ、う」

急に胸が痛んで、凧は呻いた。

「どうしました？」

「分かりません。急に…………くッ」

身体の奥底がビリビリしている。

「左手ですか？」

「違います。もっと別の、ところからッ」

少しすると痛みが和らいだ、冷や汗がどっと出てきた。身体の震えは、左手の呪いのせいだけではない。

「大丈夫ですか？」

「はい……何とか。悪い物じゃ、ないと思います」

「顔をそんなに悪くして、悪い物じゃないっておかしいですよ」

「そうですか。いや、そうかもしれないですけど」

突然に湧き上がってきたイメージと魔力に身体がついて行かなかったただけだ。今は落ち着いている。脳裏をかすめた感情は怒りと表現するべきなのだろう。ディアドラに対して表現しきれないほどに複雑で重層的な「怒り」を抱いている。

「怪我、もしかして、今ので？」

「これ系は慣れてますから。しばらくすれば止まりますよ」

そう言いながら風は右手の二の腕を抑えた。

肌が避けて、血が滲み出ている。

ここ最近なかった魔力による自傷現象だった。

「ディアドラの前にエレディアをどうにかせんとな。まだあれの襲撃はないが、ディアドラとあれを同時に相手できるか？」

「無理です」

アカネは断言した。

エレディアは間違いなく最悪の敵の一人だ。さらにアカネが主要な武器が何一つ決定打にならない。その時点でアカネが戦力外どころか足手まといになってしまふ。ゲヘナの手を借りるにしても、ただの眷獣の器であるゲヘナの身体がどこまで持つか不透明だ。

死霊であるエレディアに対しては、神官として対死霊戦闘ができる風が矢面に立つしかない。

「うむ、方針を定めたら、まずは休憩じゃ。エレディアは日が出ているうちには動かぬと聞く。決戦は日没後じゃろう」

「死霊は陽光を嫌うってのは、どこの国も一緒だな」

まだ日は高く、一般に闇の属性を持つ魔物は動かない。死霊の多くは陰の気を好み、夕暮れから日没後に活動する夜行性だ。

「凧君よ、一眠りする前に我に血を献上せよ」

「血は別にいいとして献上ってなんだよ」

「汝は我の臣であろう？」

「いつからだよ。どうして、そうなる」

「我の宿主は一国の姫で、汝はその臣であろう。ならば、汝は我の臣も同然じゃろ？ さあ、血税を納めよ」

「上手いこと言っただつもりか」

そうは言うものの、血の提供には否やはない。

凧は献血には抵抗のない性格である。毎日のように血を提供しているので、必要性さえあれば吸血させるのは問題ないと考える。

「素直なのかそうでないのか分からんが、あれじゃ、汝のようなのをツンデレというのじゃろ。我は知っておるぞ」

「違うんじゃないか？」

「お誂え向きに血も出ておるし、もうここでよいぞ」

尊大な口ぶりのまま風の右手を手を取った。

風の右手の二の腕当たりが出血していた。肌が蜘蛛糸状に裂けているのは、先ほど湧き上がってきた怒りと魔力によるものだった。

ゲヘナは風の右腕に口をつけて血を舐め始めた。

吸血鬼ではないにしても、吸血鬼の眷獣をその身に収めるからには吸血によって力を蓄える性質はあるのだろう。

「幼女に舐めさせるといふのは、まあ、傍から見ると犯罪ですね」

「変な言い回ししないでもらえますか？」

アカネのあんまりな物言いに風は無然として言った。

「ふあ……もう我はもう寝るぞ」

と、小さくあくびをしてゲヘナはこてんと胡坐をかく風の足を枕にして寝息を立て始めた。寝つきのあまりのよさに驚いた。

「疲れていたんでしよう」

と、アカネは言う。

「昨日もあまり寝られませんでしたからね」

「すいません、なんか俺ばっか寝てたみたいで」

「昏月様は仕方ないですよ。寝てたというより気絶ですからね。それにとやかく言ったら人品を損ないますよ」

凧はエレディアとの戦いで力を使い果たした。気絶した凧をこの洞窟まで運び、三十時間あまり看病していたのはアカネとゲヘナである。敵の襲撃を受ける可能性もあり、心身が休まらなかつただろう。

「アカネさんは、大丈夫なんですか？」

「わたしは先ほど少し休ませてもらいましたから。ゲヘナ様には、相当の負担をかけてしまいました」

アカネはただの人間だ。多少、トレーニングを積んでいるとはいえ、魔族に体力では敵わない。想像以上に体力を奪うこの熱帯雨林という環境では休めるときに休まなければすぐに倒れてしまう。

「ゲヘナ様は、このお身体でしょう。実はもうへとへとだったんですよ、きつと。わたしたちと違って、あの城から徒歩でここまで来たわけですしね」

「そうか、確かにそうですね」

ゲヘナ自身は眷獣だが、その身体は人工的に造られた紛い物の吸血鬼もどき。見た目以上の身体能力があるとは言え、それでも体力が有り余っているようなものではないだろう。仲間が囚われ、東雲も苦しい状況に置かれている中で、ただ一人巡り合えるかも分からない凧たちを探して熱帯雨林を彷徨っていたのだと思うと、これまでの尊大な態度の裏に隠れた孤独があったのだろうと推測してしまう。

「アカネさん」

「アカネさんの転移も、ただの転移じゃないですよね？」

「さすがに分かりますか」

「そりゃ、もう何度も見ましたから」

アカネは目の前でずいぶんと便利に転移を使っていた。物の行き来しかできないので、転送と言ってもいいかもしれない。高度な魔術ではある。身体を自由に移動させることに比べれば、各段に難易度が低いとはいえ、凧は使えない。

「この際種明かしますと、わたしの身体にそういう術式を刻み込んでます」

「直接？」

「はい。ただ、それだけでは足りないので、わたしのもともとの能力を上乗せして使っている形になります」

「過適応能力者ハイパーアダプターですね、アカネさんも」

過適応能力者。

先天的に特殊能力を有する者の総称だ。俗な言い方をすると超能力者とも呼ばれる。魔力詠唱も祝詞も必要とせず、魔術的な現象を引き起こすことができる生まれつきの才能を持った者たちである。

「わたしの能力は強化。それも物質的な強化に留まらず、概念的な強化も可能とします。本来ならば、転移等発動すらできないわたしでも、転移を使えるのは、この能力で術式を補助しているからです」

「強化能力で術式の強度を上げるといことですか。かなり強引ですけど、概念レベルでの強化なら、無理矢理転移を成立させられるってことですか。危なっかしいと思いますけど」

「はい。慣れです、慣れ」

「ああ、まあ、そうですね」

使えないはずの力をリスクを承知で強引に使うのは風にも当てはまる。

身体に魔術を刻み込むというのは、相当の苦痛を伴うはずで、慣れと簡単に言うがそこに至るまでにどれだけの苦難があったことだろう。

風自身、眷獣の強引な使用を繰り返した結果が身体中の傷跡だ。

「アカネさん、どれだけ武器を用意できますか？」

「まだまだストックはありますから大丈夫です。ロケットランチャーみたいな大型の火器はないですけど、狙撃銃も突撃銃も、まあ、半分は趣味で集めてましたのでこんな形で日の目を見ることになるとは思ってませんでしたけど」

「刃物は、ありますか？」

「もちろん、サバイバル用に取り揃えてます。こんなのとこ」

本当に便利な転送魔術だ。

アカネは物は試しと大型のサバイバルナイフと三本呼び寄せた。形状はどれも違うが、思い切り振れば、大型の獣の大腿骨を叩き切ることもできそうな分厚い刃だ。

「どうするんですか？」

「このままだと、どうあってもあの化け物と戦う羽目になるので、その準備をしと

きます。できる限りの準備をしておきたいところですから」

ナイフを受け取った凧は、炭を使って刃に文字を書き込んだ。刃を魔術の触媒に使うためだ。強大無比な死霊の集合体との戦いは一筋縄ではいかない。できる範囲での準備を整えたとしても、果たしてどこまで食らい付けるか。実力差は明白。しかし、負けたら東雲を助けることはできなくなる。凧たちは、何としてでもエレディアを攻略しなければならぬのだ。



## 第五部 二十話

真つ暗な部屋に閉じ込められてからどれくらいの間が経ったのか分からない。身動き一つとれないまま、ずいぶん長い時間拘束されている。

東雲がいる部屋は、城の地下に設けられた培養室の一つである。ディアドラがホムンクルスの制作研究を行うための場所であり、かつてはディアドラ配下の研究員が詰めていた。

今は余計な人員は一人もない。ある程度の成果が出た時点で用済みだったからだ。ディアドラは表向きには極普通の公務員であり、領主であった。人柄にも素行にも目立った問題はなく、有事の際には率先して戦場に出た実績を数多く作っている信頼される吸血鬼の一人であった。

しかし、その裏ではこうして研究施設で違法かつ非人道的な実験を行っていた。研究員たちも非合法で集められたものばかりだ。表には出ず、この城で一生を終えることを強要された者たちである。ゆえに、処分も迅速であった。そして、その死は一つ残らず有意義に再利用された。エレディアという魔物を構成する死霊の一つ

として取り込まれ、永遠に凍え続けることにされたのである。

そんな研究員たちの長年に渡る研究成果の一つが、ここに残されている。

巨大な大木と見紛う植物である。

草丈十メートル余りで、無数の細長い葉を持っていて、一枚一枚に数えきれないほどの繊毛が生えている。繊毛の先端からは粘液が分泌されていて、これで獲物を絡め取るのである。

食虫植物の一種であるナガバモウセンゴケによく似た魔草である。混沌界域の中でディアドラが領有するこの熱帯雨林の奥地でしか確認されていない新種の魔草を、改良したものである。野生では野生動物や魔獣を捕らえて血肉を溶かして食らうが、このモウセンゴケは魔力を吸い取るように設計されている。さらに分泌液は獲物の脳に作用する毒液にもなっている。まず四肢の動きを麻痺させて抵抗できなくした後で、快楽中枢に刺激して「今が幸せである」と誤認させる。幸福感を自ら捨て去る生き物はいないので、大抵の獲物はこれで大人しくなり、魔力を吸い尽くされて息絶えるまで自分から魔草に囚われることを望むようになる。

東雲もまた魔草に囚われの身になった。もともとディアドラからの度重なる責め

苦で抵抗の意思を弱められていたので、東雲からの抵抗は少なかった。

吸血鬼は魔力の塊だ。魔力を食う魔草にとって吸血鬼というのはご馳走であり、東雲が与えられた瞬間から喜んで彼女の身体を葉で包み込んだ。

「あ……う……」

びくびく、と東雲の身体を震える。瞳は茫洋として何も映してはいない。繊毛の動きが肌を刺激して、小さく声が漏れてしまっただけで、今の東雲は何にも反応を示さない。ねっとり巻き付く葉の繊毛が、魔力を吸収している。

真っ暗な部屋で魔草に囚われていた東雲の下に光が差し込んだ。入口のドアが開いたのである。東雲の反応は光に対して反射的に瞳孔の大きさを変えるくらいだ。

「焰、光の瞳、見つけた、ぞ」

入ってきたのは、ぼろきれのローブを身に着けたドウメキだった。

首都でテロを引き起こした実行犯の一人である。

零菜の眼球を奪い損ねた後で、地下排水路に逃亡したドウメキであったが、どうしたのかこの城に辿り着いていたのだ。

ドウメキは東雲に歩み寄り、その粘液に塗れた顔を覗き込む。

東雲の反応等、どうでもいい。ドウメキが求めてやまなかったのは彼女の瞳である。世界に第四真祖しか持ちえない焰光の瞳と呼ばれる輝く目。眼球コレクターであるドウメキにとって、これは喉から手が出るほどに欲しい代物だ。

葉と繊毛、そして滲み出る粘液に浸された身体には見向きもしない。ドウメキは顔に絡みつく葉を剥がして、しっかりと顔を見えるようにした。

「ここに、ある、宝石のようだ……これが、焰光の瞳、本物、だ」

第四真祖以外に持つ者のいないとされる焰光の瞳。その輝きにドウメキは虜になる。それは天上の星々よりも輝きに満ちていて、眺めているだけでうっとりとしてしまう。まさに人生最大の喜びに溢れていて、この瞳が手の届くところにあるというだけで絶頂してしまいそうだった。

ドウメキは高鳴る鼓動に任せて右手に力を込める。手の平にある目蓋が開き、空っぽの眼窩が露になる。零菜の空色の瞳は手に入らなかったが、それに比しても焰光の瞳が手に入るのなら、何の痛手にもならない。

「やっと、手に入る……この瞳、を、この手に……ッ」

灼熱の刃がどこからともなく現れて、ドウメキの腕を斬り飛ばしたのはその直後

だった。

「ギ、イアアアアアッ」

噴水のように血を流しながら、ドウメキは崩れ落ちた。宙を舞った右腕が情けなく床に落ちる。

「ひ、ぎ、貴様、よく、も」

「ふふ、まさか、城主に挨拶もなしに、お客様に手を出すなんて、日本出身の割には礼儀がなくてないんじゃないかしら」

「ディア、ドラ……ッ」

ディアドラが入口に立っていた。

魔力を陽炎のように立ち上らせて、ゆったりと笑っている。

「焰光の瞳は、シノちゃんが手に入ったら生産してあげるって約束したと思いましたが、どうですか？」

「叶う、ものか。立場を捨てた貴様の、先等、あつてないようなもの。それに、所詮作り物など、オリジナルには、及ばぬ」

「なるほど、同感ね」

所詮は、一時の同盟に過ぎない。他者の眼球を奪うことにしか興味のないドウメキは、焰光の瞳を手に入れるまでの共闘ということまでディアドラと接点を持っていただけだ。

「この城まで辿り着けたのは……聞くまでもないわね。あなたの身体のどこかに、そういう転移目があったってだけ」

メラメラと黒い炎が溢れ出て、一匹の蛇になる。

ドウメキもただ黙っているだけではない。全身の眼球を光らせて、ディアドラに對抗する。拘束の魔眼をぎらつかせディアドラの動きを束縛する。

しかし、縛られたはずのディアドラは笑みを崩さない。鋭い牙を笑みの下から覗かせて、瞳を紅く染め上げる。

「エレディアが帰ってくるまで暇だったし、いいわ、ちょっとした運動……付き合っただけです」

黒炎が密度を増して、噴火のように魔力が炸裂する。ドウメキの束縛は一瞬で焼き切られ、巨漢はあえなく尻もちをついた。

「うぐ、く、あ」

「逃がしません。いずれはバレるにしても、まだまだシノちゃんで遊び足りませんからね。外に情報を漏らすのは、あり得ません」

力での戦いはドウメキに勝ち目がない。そもそも勝負になるはずもなく、逃げに徹するしかないのだ。ドウメキは準備していた転移の魔眼を解放する、が遅きに失した。眷獣の猛烈な魔力に隠れてディアドラ本人の接近に気づかなかった。黒い蛇を待機させたまま、ディアドラがドウメキの胸の中央に埋め込まれて青い瞳に指を刺し込んだ。

「あ、あああッ」

転移の魔眼が潰されたドウメキは、逃げる術を失った。ディアドラに蹴り飛ばされて部屋の間隙にまで転がっていく。

「あ、が……ま、て……約束、を……は、ぐ……オリジナルには、手を、出さぬ、から、ま、待てッ」

ドウメキの命乞いにディアドラは聞く耳を持たなかった。

興味も関心もないとばかりに、黒い蛇に捕食を命じた。

灼熱の蛇がドウメキの身体に大顎を開けて食らい付く。悲鳴すらも上げる間もな

く、ドウメキは黒い炎に飲み込まれていった。



凧たちが野営地に選んだ洞窟は、小高い丘の上の中腹にある。奥行きは十メートルくらいだろう。幅が広く、奥に行くにつれて上向きになっているので雨水が中に入りにくい。野営するのならもってこいの洞窟である。

少し風がある。数分前まで煌々と夜の熱帯雨林を照らしていた月はいつの間にか見えなくなつて、立ち込める暗雲から雨が降ってくる。

大粒の雨だった。

前が見えないくらいのもう一つの豪雨である。暁の帝国ならば、それこそ台風の直撃を受けた時くらいの猛烈な雨で、記録的短時間大雨情報が発令されるであろうことは明白。それくらいの大雨だった。この辺りの年間総雨量は二千ミリを当然のように超えている。このような猛烈な雨も決して珍しい現象ではない。絶え間なく続く雨音

は、暴力的なまでの轟音で、まるで滝の傍にいるかのようだった。

凧とアカネとゲヘナは、静かにその時を待った。

凧たちの居場所は敵に知られている。

理屈は分からないが、エレディアは凧たちをすぐに発見し攻撃してきた。凧たちを探す方法を持っているということだ。

そして、今は凧の左手が呪われている。

この呪詛を残した張本人が、この場所を特定できないはずもない。

呪詛は今の凧をじっくりと侵している。浸食を食い止めているのは凧の魔力と霊力——正負の生命力であり、より有効な手段として左腕全体にきつく巻き付けた包帯であった。

この包帯はそれそのものは市販品でありアカネが転送した物資の一つでしかないが、そこにびっしりと凧がとある文言を書き込んだ。

紗矢華直伝の仏頂尊勝陀羅尼である。

百鬼夜行避けの靈験あらたかな陀羅尼である。歴史上の著名人もこのおかげで百鬼夜行の害を逃れ、命脈を繋いだという古伝もある。

暁の帝国の魔術は、獅子王機関伝来のものが主体であり、それはつまり日本伝統の魔術体系を引き継いでいることを意味している。

対死霊戦闘の経験は日本も千年以上を誇る。相手が魔族ではなく、魔獣でもなく、死霊というカテゴリーに属するのなら、それに相応しい戦い方をするまでだ。この半日、凧は黙々と陀羅尼を書き続けた。アカネとゲヘナの分の包帯も用意して、それを身体に巻かせている。

簡易的な耳なし芳一のような状態だが、死霊からの精神的な圧迫を防ぐ効果が期待できる。

火を消して、見つからないようにするというのは、意味がなかった。だからこそ、あえて火を焚いていた。体力をギリギリまで消耗しないように、温かくするためだ。

「ッ……ッ……！」

左手がひりついた。

呪詛を受けて白くなった左手は、呪詛をかけたエレディアと結びついている。この呪詛は徐々に凧の身体を侵食し、やがて心臓に達して死に至らしめるものだ。凍

えて止まった心臓は、そのまま呪詛をまき散らす亡者の核として機能する。解呪せずに放置すれば、風は遠からずエレディアの仲間に引きずり込まれるということだ。

死霊は、本来単独ではそれほど力を発揮しない。生きている人間の方が死霊よりもずっと強いからだ。もしも、死霊は所詮は死んだ者の残留思念か残留魔力でしかない。残り滓なのだ。それが人に災いするだけの力を持つはずがない。できて体調不良にするくらいだろう。しかし、それでも時には強力な思念を残す者がいる。可視化するほどの強力な魔力を帯びた死霊は、そういった強烈な個性の残滓だ。もっともエレディアのような例は極めて稀だろう。何百年も彷徨う悪霊。死者の想念の集合体というだけあって、別格中の別格だ。

ただそこにいるだけで死を振りまき、命を凍えさせる。死後の世界があるとして、それが灼熱の世界なのか極寒の世界なのかは分からないが、エレディアの死の効果圏内はまさに死の世界と表現するに足るものだろう。

左手の異常はエレディアの到来を知らせるものだ。

ひと際冷たい風が洞窟に吹き込んできて、焚火を吹き消した。

「お出ました」

深呼吸して気持ちを落ち着ける。死霊を相手に気持ちを揺るがせれば、瞬く間に付け込まれる。病は気から。この世ならぬ者を相手にするのであれば、まずは自己を明確に維持するのがセオリーだ。

アカネと目配せして、凧は洞窟の外に出た。

雨が止んで、音が消える。立ち込める冷気が薄っすらと霧を生み出して、木々が凍えていくのが感じられた。

霜が付いた葉が次々と落ちてくる。雨粒は凍り、足元の泥も固く締まる。

「まるで、火の玉だな」

闇の中に浮かび上がる青白い炎を見て凧は呟く。幼いころに読みふけた昔話に出てくる怪異を連想したのだ。

「Uuuuuuuuuuuuuuu……」

夜気を凍らせる呼吸に合わせて火の粉が舞う。

青白く燃える死霊の騎士が、地面を凍らせながらゆっくりと歩いてくる。

「奔れ、タイニー・アウルム小さな黄金！」

夜闇を切り裂く雷光が駆け抜ける。

エレディアが剣を抜く。冷たい風が刃のように吹き荒れる。小さな黄金の高速移動。それをエレディアは流麗な体捌きで受け流す。

小さな黄金が少し大きくなったような気がする——。

見た目も派手に、その姿は豹というよりも雄々しい獅子に似て、鬣を振り乱して吠え立てている。

力強い雷撃の獅子は風の魔力を食らいながらエレディアを格闘する。あの獅子をして、エレディアの剣は危険だ。

死霊の剣は呪いの魔力を秘めている。ただの剣ならばまだしも、エレディアの剣ともなると眷獣を両断するだけの魔力がある。

「く……なんだこれ、重い」

小さな黄金の姿が変わっただけではない。どうも消費魔力そのものも増大している。いつもの感覚で呼んでみたら、全く違った。

小さな黄金から伝わってくる感情は怒りである。風の胸に湧き上がる感情とリンクして、激情の炎に身を任せているのか。

「あいつ、暴走してるのか……ッ」

どうも小さな黄金はエレディアしか見えていないようだ。

とにかく目の前の敵を討ち果たしてやるという意気込みは伝わってくるが、繰り出すのはあまりにも乱雑な攻撃だ。爪も牙もエレディアを捕え切れしていない。無残に打ち碎かれるのは、岩であり地面であり木々であり、つまりは自然物だけがひたすらに破壊されている。

「そんな無茶苦茶なやりかたで……俺のプランとか台無しだろ」

小さな黄金は風の制御を振り切ってエレディアに飛び掛かっている。紫電が四方八方に飛び散って、木々に火を放つ。このままでは大火災になってしまおうが、皮肉にもそれを押し留めたのはエレディアが放つ冥府の冷氣だった。

「S y u a a a a a a a a a a a a a a a a ……」

エレディアの首狙いの剣を小さな黄金は頭を逸らして躲した。閃電のような剣も、電光そのものの小さな黄金を捉えることはできない。その直後、ひらりと舞うように剣が振り下ろされた。最初の一撃はあくまでもフェイク。匣に過ぎない。本命はこの一太刀であり、獅子の首は樁の花が落ちるようにはかなく地に落ちて、直前まで振るった猛威が嘘のように消滅していった。

「くそ、何だったんだ、く、ぐ……」

左手は死ぬほど冷たいのに、心臓が異様に熱い。全身をかける血潮が加速して、魔力をどんどん精製している。

戦え、倒せ、眷獣たちが訴えている。

凧の頬から血が滴った。身体のところかしこであざができてくる。毛細血管が魔力で破れた証拠だ。このままだと戦わずして戦闘不能だ。

「昏月様、何が？」

「汝、ちよいと様子がおかしいぞ？」

凧の変化にアカネもゲヘナも気づいた。小さな黄金が通常と違う姿なもの、凧から魔力が漏れ出ているのも異常でしかない。

「大丈夫」

と、凧は言った。

今となってはそう言うほかないのだ。

「はあ、く……ふう……」

大きな深呼吸。

(大丈夫)

凧は思う。

眷獣たちに語り掛けるように。

彼らの想いは理解した。

エレディアの呪詛のおかげかもしれない。少しだけ凧は現世から外れたところに身を置いている。そのせいか眷獣といつも以上に結び付いている——のかもしれない。

少しずつ興奮状態の眷獣を落ち着かせる。小さな黄金があえなく倒れたのも、眷獣たちに冷静さを取り戻させる一因だっただろう。小さな黄金はしばらく休憩だ。血潮の向こうで反省していればいい。次に出てこれるようになったころには、エレディアは倒れているのだから。

エレディアが剣の切っ先を地面に引きずりながら、歩み寄ってくる。眷獣を一体屠った直後ではあるが、目立った疲労も怪我もない。

インフェリア・アーテル  
「不出来な黒剣」

静かに凧は呼びかけた。

右手に漆黒の魔力が集い、一振りの剣が出現する。ずっしりと重い長剣も少しばかり見た目が変わっていた。柄が独鈷杵になった独鈷剣だ。その意匠はどこか古城の眷獸を連想させる。

剣を持った凧にまるで騎士の礼でもするようにエレディアが剣先を天に向けた。そして、冷気を纏いながら歩み寄ってくる。

「昏月様ッ」

「来るぞッ」

心胆寒からしめる魔の彷徨。耳をつんざく悲鳴のような叫びとともに、幽鬼が凧に斬りかかる。

エレディアは剣の達人だ。道を外れた外道の剣術ではあるが、殺人技巧として比類なく、本来ならば凧程度が技量で対抗するような相手ではない。眷獸を向かわせて、遠距離から戦うべきではあるが、一撃で首を落とさんとするエレディアの刃を凧の黒剣が見事に弾いて見せる。

「このまま、任せるぞ」

黒剣は右手に吸い付いたようであって、片手でこれを軽々と振るう。足取りは軽

やかにそして振り下ろす剣は超重量級。一撃一撃が強烈な魔力を火花と散らす。

凧にとって黒剣は自分の分身にも等しく重さを感じるものではない。重量を自由に変化させることもできるので片手で振り回しても十分な威力を発揮できる。剣と剣が触れあった瞬間に超重量にすることで、単純に運動エネルギーを増大させ、エレイディアの剣を弾き返すのだ。剣を振るう速度に変わりはなくとも、重量が増せば威力も増す。単純ながら近接戦においてこれは大きなアドバンテージとなる。

左手が動かないのでバランスがとりにくい。しかし、それを差し引いても凧はうまく立ち回っている。達人級の殺人剣を相手にして何とか拮抗状態を作り出している。それは偏に出来ない黒剣に対応を任せているからだった。

身体が勝手に動くような感覚すら覚える。意思疎通を密にして、黒剣のしたいように身体を動かすことで凧はエレイディアの剣を躲し、いなし、そして隙を見つけて斬りかかることができている。

対するエレイディアの動きもすさまじいの一言だ。僅かな気持ちの緩みが死に直結する。剣の呪詛を受ければ忽ちに身動きが取れなくなるだろう。

泥に塗れ、凍えながら凧は剣を受ける。

「ッ……く」

まるで、荷物を放り投げるように風を黒剣ごと押し返したエレディアは、大きく息を吐き出すように火の粉を吐く。

すると、その背後から半透明な幽鬼がエレディアに付き従うように姿を現した。「仲間がいるのかよ」

呼び出された幽鬼の魔物はみな同じ鎧を着ていた。青白い火の粉を鎧の関節部から散らす死霊の騎士は、各々が剣を抜いてエレディアと並び立った。

「冷たき迷い人に煉獄の火をくれてやろうぞ」

赤黒い炎の剣士が炎熱を纏って現れる。東雲の眷獣、ゲヘナである。凍えた大気を燃え盛る魔風が払う。

「行くぞ、我らが獄炎にて、死霊どもを焼き払ってくれる」

死霊の剣士と獄炎の剣士が各々の剣を執って斬り合う。

水と炎が入り乱れ、戦場となった熱帯雨林のそこかしこで血ではなく燃える魔力が流れ出る。死霊の剣士であれば青白い炎を、ゲヘナであれば赤黒い炎を傷口から滴らせ、壮絶な「戦」を展開する。



「はい、ゲヘナ様」

続けて放った矢は幽鬼の剣士の肘に当たり、怯んだところをゲヘナの炎剣が背後からこれを貫く。青い炎血を流して幽鬼の剣士が悲鳴を上げる。アカネの破魔矢の効能か、ゲヘナによる攻撃でも幽鬼の剣士に損傷を与えているようだった。

「凧君、こっちの戦は任せい」

ゲヘナとアカネの援護で、邪魔な取り巻きは抑え込めた。後は凧がエレディアをどうにかするだけだ。

「黒雷ッ」

霊力を爆発させて、凧は身体能力を劇的に引き上げる。

重力操作を応用した超加速は、残像すら置き去りにする。体当たりをするように、凧はエレディアを斬り付ける。斬撃の威力は大木を斬り割り、大岩を両断する。その斬撃をエレディアは凧の動きに合わせて後方に跳ぶことで軽減した。さすがに戦い慣れている。

エレディアは後方に跳躍した後で、大木の幹を蹴って凧を飛び越えて立ち位置を入れ替えた。



漆黒の森の中でエレディアの姿だけが青白く浮かび上がっている。不気味な光景だ。

「落ちた深緋！」  
フエール・ミニウム

現れるのは緋色の一角獣。

長い角の先から衝撃波をエレディアに放つ。木々に大穴を穿ちながら突き進んだ。衝撃波は、エレディアに直撃してこれを跳ね飛ばした。

続けて二発、三発とエレディアを狙う。

不可視の衝撃波をエレディアはすれすれで回避する。魔力の流れを読み、碎ける木々で進路を推定する。

衝撃波が地面や木々を抉る度に地響きが生じる。

エレディアは冷気を放つことで落ちた深緋に対抗した。凍える魔風と冷気の刃で一角獣を牽制しつつ、本体である尻を狙うつもりでいた。

吸血鬼の眷獣は強力だ。しかし、その宿主は魔族の中では脆弱な部類である。眷獣と直接戦うよりも、吸血鬼本人を叩いた方がいい。それは相手が尻であっても同じである。

凧からすれば眷獣を出そうが出すまいが狙われていることには変わりない。僅かでもエレディアの意識が眷獣に向けばそれでよかった。

その隙に夜闇に紛れて、凧は仏頂尊勝陀羅尼を唱えた。百鬼夜行避けの陀羅尼である。エレディアは、無数の死霊の集合体、すなわち個で百鬼夜行を成している。紗矢華ほどの術者であれば、確実な効果を見込める陀羅尼も凧では一瞬のはずである。その一瞬に賭けて、一気にエレディアに突貫する。

エレディアは、凧を見失った。

百鬼夜行避けの陀羅尼が、凧の姿を極短時間ながら隠したのである。

「お、ああああああああッ」

「ガツン、と金属が拉げる音がして、黒剣が深々とエレディアの腹部に突き刺さる。衝撃で二人とも地面に転がり、視界が回り、脳が揺さぶられる。黒剣から手を放した凧は、大きく吹っ飛ばされる。

(まだだッ)

エレディアに肉体の破損は無意味。これはあくまでも布石の一つに過ぎない。体勢を立て直そうとするエレディアを超重力空間が拘束する。



エレディアが具体的にどれくらい前からこの森にいるのかは分からない。もしかしたら、外の世界に目を向けていたのかもしれない。しかし、そうは言っても日本とアルディギアに伝わる古い魔術まで見知っているとは思えない。

太陽を示すルーン魔術。エレディアが太陽を嫌う死霊であるからこそ、打撃を与えられると踏んで、アカネが用意したナイフに刻んだものだ。一日かけて太陽光を蓄えさせた。エレディアにとっては大嫌いな陽光を体内に流し込まれた形になる。

「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ッ」

エレディアが剣を構える。太陽の魔術の操るのは凧である。凧を斬ることで、すべては解決する。エレディアはまだ動く。太陽のルーン一つで動けなくなるほど脆弱ではない。その程度で倒れるのなら、もっと昔に機能停止していたはずだ。

靈感に従って凧はエレディアから距離を取る。エレディアは自分に突き刺さる黒剣を身体の損傷を気にせずへし折った。眷獣が倒されたことによるフィードバックで凧の魔力が削り取られる。

凧はもう一本のナイフを手を取った。アカネが用意したサバイバルナイフは一本だけではない。こちらにも太陽のルーンを刻んでいる。その刃を凧は自分の左手の



引き込まれる危険性もあるのだ。

声が聞こえる。

痛みと苦しみと寒さを訴える声だ。

生きている者が憎い。自分を傷つける者が憎い。恨みつらみが凝り固まって、多くの憎しみの魔力となった。

その根本は、きつと、いや間違はなくディアドラへの憎しみのはずだ。

「俺は、これから助けに行かなきゃいけない奴がいるから、お前と一緒に行くことはできない」

鈍い痛み。

身体と心に突き刺さって、涙が出そうだ。

はつきりと、エレディアの「誘い」を拒否する。僅かでも揺らげば、向こう側に引きずり込まれてしまうからだ。死者に悼むことはあっても、引きずられてはならない。対霊戦闘の基本中の基本を、改めてなぞる。言葉にすることで、しっかりと自分の足元を固めるのだ。

凧は走り出した。



はない。拳と膝蹴りで凧を強かに打ち上げる。骨が砕けた音がした。脳内麻薬の過剰分泌で痛みがない。ここで退けば死ぬ。痛みで身を守る段階はとうに過ぎた。

「あああああああああああああッ！」

凧は倒れない。吹っ飛びそうになる身体を背中から生やした翼が強引に前身させた。黒い蝙蝠にも似た片翼はクリスマスマスに初めて発現した第四真祖の力の残滓。これを推進力にして、エレディアを押し倒した。

「お前と一緒にには行けない。だから、お前が俺と一緒に来い」

エレディアの鎧で守られていない冷たい首元に、凧は噛みついた。背中が白く青く輝いて、冷たく燃える炎が辺り一帯を眩く照らした。

## 第五部 二十一話

東雲と連絡がつかなくなつて、三日が過ぎた。いよいよ、暁の帝国側もしびれを切らして当局に度重なる問い合わせを始めていた。

市内に現れた大量のセグロオオヒゲクモや避難した市民対応で多忙を極めているのは分かつてはいるが、一国の皇女が行方不明になつて三日も音信不通であるというのは異常事態であり、それも東雲については混沌領域側が「監視者」がいたはずである。

それは国内に滞在する強力な外国の魔族が良からぬことをたくらまないように監視する業務に従事する者であり、最近ではそこから護衛の意味合いも生まれているのだが、それを東雲にも混沌領域はつけていた。それがディアドラを始めとする警備部の職員である。責任者はディアドラであり、そのディアドラとも連絡が途絶しているのであった。

ディアドラ不在のまま警備部はなんとか体制を立て直してはいるが、セグロオオヒゲクモが市街地に大量に流入した後始末もあり、東雲とディアドラの搜索に割け

る人員は限られている。

軍警察も魔獣退治を優先せざるを得ない。戦闘力のある職員は、総じて討伐任務に駆り出され、特に地下排水路は市内の地下に蜘蛛の目状に張り巡らされた迷路も同然の規模であり、これに巢食った魔獣を退治するためには、相当数の人員で当てる必要があった。そのため、どこに魔獣が潜んでいるか分からない上に、被害がどこまで広がっているのかも分からず、体制そのものも機能不全を起こしていた混沌界域は、早急な搜索ができなかつたのである。

そんな混沌界域も、第三真祖が率先して動きだしてからは体制の立て直しも早く、東雲とディアドラの搜索の優先順位が最上位に上げられたことで事態が大きく動き出した。

「ディアドラっていう人が東雲ちゃんと一緒にいるかもしれないって？」

「そのようです」

「凧君も？」

「はい。マンションの監視カメラの映像に映っていたのが最後の記録ですが、その時点では一緒にいらしたようです」

零菜は須藤から報告を受けて、胸を撫で下ろした。

これまで、東雲と凧の所在は全くの不明だった。どこにいるかもわからず、連絡もつかない。これだけの事件が起きた後で三日も音信不通ならば、何かあったのではないかと思ってしまう。それこそ、最悪の事態も予測できる。

「それじゃ、そのディアドラって人は？」

「警備部の部長を務める旧き世代の吸血鬼です。歴戦の猛者で、長年警備部に籍を置く優秀な方と聞いています。ディアドラさんと一緒にいるのなら、大丈夫だろうというのが、わたしに連絡をくれた方の意見でした。もともと、そのディアドラさんとも連絡がつかないのですが」

「それじゃ、ダメじゃん。ディアドラさんのマンションに逃げ込んだんですよね？  
その後は？」

「その後は混沌界域側も掴んでいないということですよ。あまりにも不自然ですが、ディアドラさんのお宅を確認しても、誰もいなかったようです」

「不自然過ぎる、それ、おかしくない？」

「そうですね。しかし、現時点ではこれ以上の情報はいただけません。もしか

したら、あちらは別に情報を掴んでいるかもしれないし、確認は続けます」

ここは混沌界域だ。暁の帝国ではない。独自に動こうとも外交問題に発展する可能性もあって、行動には制限がかかる。相手が捜査をしているというのなら、連携もせずに行動すれば却って混沌界域側の動きを妨げることにもなりかねない。

今分かっていることは、テロ発生当日、東雲と凧、そしてアカネはディアドラに救出されて彼女の自宅マンションに避難したということだけだ。その後の足取りは依然として不明であり、ディアドラの行方も杳として知れない。

少なくとも、混沌界域側はディアドラの人となりを承知している。高い戦闘能力からディアドラが蜘蛛の魔獣如きに倒される可能性は低い。東雲が眷獣を召喚したという気配もない。ディアドラも含めて四人が行方不明というのは異常事態ではあるが、ディアドラの力を知る混沌界域側は、ディアドラたち四名が何かしらの事件に巻き込まれたとしつつ、ディアドラを容疑者には数えていないのだった。

目下の容疑者は百目鬼と思われる魔人である。犯行声明は今もなく、その目的は不明なままで、捜索が続けている。

やはり、ディアドラはついていた。

三日が経っても混沌界域はディアドラがこの事件の主犯格であるとは想像もしていなかった。ディアドラと連絡がつかないのは、連絡できない事情があるからだ、ということまでは考えても、それがまさか東雲を拉致して姿を隠しているとまでは頭が回らなかった。

ディアドラは自分の趣味のことは内々に処理して外部には一切知らせていないし、表向きの彼女は人となりも能力も非常に好評で部下の信頼も厚い。よって、まさかディアドラがこれほどの被害を出してまで東雲を拉致し暴行を加えているとは、思わなかったし、だからこそ捜査は鈍重を極めていた。

ディアドラはこの事件で自分が社会的に終わると覚悟していたし、その果てに命を失っても構わないというほどに思いつめてはいたが、だからといって何の対策もしていないわけではなかった。

転移の魔法陣は使い捨てで、転移先が特定できないようにしていたし、そもそも

転移した事実を残してもいい。ディアドラの部屋を捜査しても、そこに転移魔法がかけていたとは誰も気づかないだろう。

ディアドラを追いかけようにも、逃げた先を特定するのにさらに時間がかかる。ディアドラが拠点に定めた屋敷があるのは、彼女の領地の中でも僻地の僻地である。人跡未踏の熱帯雨林は、林業等で活用はされていても生活拠点にはされていない。まして、どんな魔獣が潜んでいるかも分からない熱帯雨林の奥深くには立ち入る者もなく、道もないのだ。命知らずの冒険者が道なき道を進むか、あるいは航空機で空から攻めるか。ディアドラの屋敷に来るにはこれくらいしか方法はなく、当然ながら居場所の特定は困難というほかない。

つまり、まだまだディアドラには余裕がある。混沌界域がこの場を特定し、特殊部隊を投入してくるまでは時間がある。それまでに、思う存分東雲という最後の玩具を味わい尽くす。

「ふふふ、シノちゃん……可愛いわ。すごく可愛い」  
うっとりとした表情でディアドラは囁く。

東雲は黒いゴシッククロリータのドレスを着せられていた。

痛みに痛みを重ねるような激しい呪詛の応酬、気が狂いそうになる快感で身体が燃えてしまいそうになった植物による粘液責めを経て、拍子抜けなくらい何もないうちに着せ替え人形の扱ひを受けている。

「それが一番かしら。いや、まだいいのがたくさんあるわ。今度、どれにしようかしらね」

東雲の意見を聞く素振りは見せない。

自分が見繕った服をせて楽しむ。ただそれだけの行為に二時間も付き合わされている。その間、痛みも快感もなかった。東雲に着せる服は見た目が突飛であったり、非常に性的であったりと表を歩けないようなデザインばかりであったが、それを除けば普通の布やナイロン製であって、何かしらの呪詛が込められているようなものではなかった。

ディアドラが勧める服を東雲は大人しく着た。

逆らえば、それを理由にディアドラは喜んで東雲を辱めるだろう。それが苦痛か快感かは分からないが、どちらにしても東雲を責め苛むのだ。ディアドラは東雲を愛でることをよしとする。その一方で、東雲を大事にするという発想はない。刹那

的な快感を求める彼女は、東雲を壊してしまうことも厭わないだろう。そういったデアドラの狂気を三日間で味わった東雲は、すでにデアドラに逆らう氣力を失っている。

痛くされないのなら、他に何もされないのなら着せ替え人形に甘んじるくらいは喜んでするし、身体を弄られるくらいならば何とも思わなくなつた。

一人になると感覚が徐々に麻痺してデアドラの行為を受け入れつつある自分に恐怖している。

心も身体も限界に近く、すでに屈している。それどころか、この苦しみが長く続くのであれば、いっそのこと一思いに壊してほしいとすら思っている。

デアドラは、東雲を壊さない。どれだけ痛めつけられても身体は再生してしまふし、心は壊れる寸前まで追い込まれても最後の線だけは超えていない。

東雲は、デアドラの欲望を満たす道具に過ぎない。

そして、デアドラは東雲が自分から墮落することを望んでいるのだろう。

「う……う」

唇を引き結ぶ。

夜通し魔草に絡め取られた身体に余韻が残っている。こうして、ディアドラの着せ替え人形にされている今も、魔草の粘液に浸された身体の熱に苛まれる。

強制的に幸福感を与えるという粘液を浴び続けた東雲は、魔草から引き離された今、強い不安を抱えていた。

薬効によるものと分かっているけど、身体と脳が偽物の幸福を覚えている。気をしっかり持たないと、自分から魔草の下に向かってしまいそうだった。

ディアドラもそれを分かっているから、完全に墮ちる前に引き離したのだろう。ディアドラは東雲を墮落させるためにあれこれと手を尽くしているが、すぐに墮落させるつもりもない。じわじわと甚振りながら、肉体的にも精神的にもディアドラに依存させるつもりだ。そうなる過程を楽しんでいる。だから、一思いに楽しませてくれないのだ。

心が折れるとか、墮落するとかそれがどういふことなのか東雲には想像もつかない。そうなる未来が近いということだけが実感としてある。

ディアドラに唯一付き従っている吸血鬼がいる。

何となく、彼女も東雲と似たような境遇だったのだろうと想像できる。

自分もあぁなってしまうのだろうか。

何も考えず、ディアドラの要求を喜んで受け入れるだけの存在になってしまうか。

それは怖い。怖いのだが、今となってはそれでもいいという考えが頭の片隅に浮かんでしまう。この苦しみが長く続くのなら、そうして楽になる道を選ぶのも悪くはない。

「じゃあ、今度はこの服にしましようかあ」

うきうきしたディアドラが手に取ったのは、いわゆるチャイナドレスであった。東雲を自由にできるのが相当嬉しいらしい。

こうしている分には、妹の面倒を見る気のいいお姉さんというようにも見える。ディアドラもどこかで精神が振れてしまったのだろう。

この屋敷には狂った吸血鬼しかいない。そして、数日後には東雲もその仲間に入っているのだろう。



朝日が、こんなにも心地よいものだったとは知らなかった。

戦いですり減った心身が癒されていくようだった。

死霊の騎士たちを迎え撃った洞窟の前でアカネは生きていることのすばらしさを実感していた。

凧が死霊の主を倒したおかげで、アカネとゲヘナが対峙していた死霊たちは消滅した。

エレディアが滅び、追手から逃れた凧たちはやっとのことで落ち着いて身体を休めることができたのだ。

アカネは三人の中では比較的元気なほうだ。

精神的にすり減ってはいるが、基本的にクロスボウの引き金を引いていただけである。それに比べてゲヘナは眷獣を酷使して魔力を使い果たし、凧に至ってはいつ倒れてもおかしくないくらいに疲弊していた。

単なる魔力切れではなく、もっと心身の深いところで取り返しつかない怪我をしているのではないか。冷たく凍えた左手は、二の腕まで色が抜けていた。

エレディアを倒したのに、呪詛が抜けていない。それどころか進行しているように見える。アカネは慌てたが、凧はこれでいいと言った。魔術に疎いアカネでは理解できない何かがあるのかもしれない。

「おはようございます」

と、呑気な声が洞窟の奥から聞こえる。

「おはようございます。お身体の具合はどうですか？」

「はい、問題なく」

起きてきた凧の顔色は悪くない。呪詛で色白になった左手だけは不安ではあるが。

「腕の調子はどうですか？」

「見た目はこんなですけど、大丈夫です。動きますよ」

凧は左手を握って開く。まったく動かすこともできなかった昨日からすれば、驚くほど状態が改善している。

「その見た目で問題ないのは、本当に大丈夫ですか？」

「今だけです。これが終わったら、多分元に戻りますし、気にしないでください

「い」

「気にしないのは無理ですよ。でも、まあ、何を言ったところで詮ないことです。今となっては、何を言ったところで無駄だ。」

凧の腕を治療できる者はいないし、凧の状態を正しく判断できる者もない。唯一、魔術への理解がある凧が大丈夫だとこれだけ言っているのだから、アカネがとやかく言うものでもない。

「それで、シノ様を助けに行くという方針に変わりはない、ということでもいいですね？」

「はい、もちろんです」

これは、三人で話し合って決めたことだ。

エレディアという直接の脅威を取り除いたことで、当面の身の安全は確保できた。しかし、結局はディアドラをどうにかしない限りは凧にもアカネにも安息は訪れない。東雲が囚われている限り、ゲヘナも眷獣の器の中に納まっているしかなさ

本来ならば軍警察に一任すべき案件だ。

しかし、凧たちには軍警察がどの程度この問題に動いているのかまったく情報が

なかったし、セグロオオヒゲクモの大量出現での混乱を沈めて東雲の居場所を探すというだけでも、相当の時間がかかることは分かる。ましてや、ディアドラが保有する領地の奥地に位置する熱帯雨林にいる等と予想できるはずもない。

救援がいつになるか分からないし、ディアドラは保安組織の長であった。混沌界域の混乱は想像に難くない。

一部門のトップがトラブル対応中に忽然と姿を消せば、当然その配下は右往左往するし、満足な仕事など期待できなくなる。

一日二日でこの場を特定して東雲救出に軍警察等が投入されるとするのは、考えられなかった。

凧もアカネも今はまだ大丈夫だ。ゲヘナは身体そのものが特殊なために、今後のことはまったく分からない。とにかく言えることは「今は」大丈夫ということだ。慣れない熱帯雨林でのサバイバル生活が、どこまで続けられるか、また、東雲を助けるために必要な戦闘能力をどこまで維持できるか。

食料が安定的に確保できるわけでもなく、感染症に倒れる可能性もある。時間は凧たちに味方をしないのだ。

城とも見える屋敷に籠り自由に生活しているディアドラとサバイバル生活を余儀なくされている凧たちでは心身への負担の度合いが全く違う。強大な吸血鬼であるディアドラに何の策もなく挑めば返り討ちに遭い、高確率で殺害されるのは目に見えているが、だからといって時間を置いたとしても事態が打開できるわけでもなかった。

東雲を見捨てて熱帯雨林の中で救助をひたすら待ち続けるか、それとも戦えるうちに戦いを挑むか。選べるのは二つに一つ。そして、凧は後者を選ぶ以外に道はない。

使える物はすべて使う。

衣服の下には陀羅尼を書き込んだ包帯を隙間なく巻き付けているし、手首にも足首にもルーンを刻んだ木片を糸でミサンガで結び付けていた。

吸血鬼の眷獣を完全に防ぐことはできないだろうが、ないよりはマシだ。護身術にも限界があるが、とにかく重ねて守りを固めた。ディアドラを相手にするには、雀の涙ほどの効果であっても、それが勝敗を分かつこともあり得る。

ディアドラの城までの道のりは、見た目以上に長く険しいものであった。

入り組んだ小川や倒れた大木が行く手を阻む。時に魔獣に遭遇することもあった。しかし、どう進めば早くたどり着けるかは凧には手に取るように分かった。

エレディアに牙を突き立てて、その血の記憶を引き継いだ凧は、この周囲の地形についての情報を得ていた。それだけでなく城の内部構造も東雲がいるであろう部屋の位置も手に取るように分かった。吸血によりその血に宿る情報を得ることも、吸血鬼の能力の一つだ。エレディアは死霊であって、厳密には血を啜ったわけではないが、凧の霊力がエレディアからの情報取得を容易にした。吸血はあくまでも導入であって、情報を得るというプロセスにおいて重要な役割を果たしたのは凧沙から受け継いだ霊能力であった。

そうした知識の助けを借りながら、身を潜めつつ行動した一行はついに城まで二百メートルの位置にまで近づいていた。

丸一日がかり、空は橙色に染まっている。途中で見つけた泉で汲んだ水で喉を潤して、じっと城を窺った。

「もう少ししたら最初の結界があります。侵入者を感知したら攻撃してくるはずですが、俺ならすり抜けられるはず。城の中に潜入して、東雲を助け出します」

極めて危険な作戦で、とても頭のいい方法とは思えなかったが侵入者を感知する結界を超えられるのが凧だけとなればやむを得ない。

三人で攻め込んで城の中に入ることもできずに迎撃されるといのは避けるべきだ。

「お氣をつけて。いざとなればすぐに知らせてください。わたしも支援します」  
「お願いします」

アカネにも役割がある。ただ凧と東雲が帰ってくるのを祈っているばかりではない。

城の中にはディアドラの他にもう一人旧き世代の吸血鬼がいるらしい。たったの二人だけだ。ディアドラとその吸血鬼の目を盗んで逃げられる可能性も無きにしても非ずだが、発見されて戦闘になった場合にはアカネが遠距離から支援射撃をする。強大な眷獣を屋内で使用するのは難しい。凧も簡単には倒れないはずで、外壁が崩れて内部が露呈すれば、銃撃は可能だ。

アカネとゲヘナから離れた凧は夜陰に紛れて城に近づいた。

さほど大きな城ではないが、東雲が暮らす屋敷よりはやや大きいだろう。白い外壁には蔦が這いあがり、窓に明かりがなければ廃墟も同然の風貌である。

城壁の類はない。

この城はそもそも統治のために用意したのではなく別荘扱いであって、城というのを見た目だけだ。物理的な防御力はそれほどでもない。熱帯雨林の奥深くに佇んでいるというだけで、攻め込まれる可能性は皆無に等しいのだから、城壁まで用意する意味はないのだろう。建造にも維持にも金がかかると考えれば妥当な判断だ。

その代わりに、この城の周囲をいくつもの防御魔術が取り囲んでいる。魔獣除けの結果もあるし、侵入者を検知する結果や迎撃する結果もあった。いくつかは綻んでいるようにも見える。やはり、別荘だけあって普段の管理が行き届いていない。

凧は姿隠しの術で姿を消しつつ、恐る恐る敷地内に侵入した。もしも、結界の警報に引っかけることがあれば、逃げるか突貫するか迷うところだが、案の定、結界は凧を異物として認識しなかった。

凧の中にあるエレディアの力を味方と誤認した結果だ。エレディアが凧に敗れた

ことは、まだディアドラに伝わっていないのだろう。これも、早期決戦を挑んだ理由の一つである。東雲が監禁されているであろう部屋は、三階の中央だ。特徴は窓がないこと。外から見て、窓の並びに不自然な空白がある場所が狙いどころだ。できる限り侵入に魔力を使いたくはない。

せっかく結界をすり抜けたのだから、そのまま相手に侵入を悟られずに東雲のままで辿り着きたかった。

いくら城の中に人が少なく、警報をすり抜けられたとしても自分からここにいますと宣言しているのでは元も子もない。

小規模な身体強化に留めて、壁をよじ登る。石と石の継ぎ目や、経年劣化して生まれたひび割れに指を入れてのボルダリングだ。

今の凧ならば三階程度の高さから落下してもどうということはないが、慎重によじ登らなければならぬのでやり直しとなれば精神的に辛い。いつディアドラに気づかれるかも分からないので気持ちも焦る。焦る気持ちを指先に反映させないように気を付けながら、凧は三階まで登りきる。真っ暗な窓から屋内の様子を探り、無人の部屋へ侵入するために「左手の死霊」の協力を得て鍵を開けた。

「ふう……」

転がり込んだ先で、とりあえず一息つく。

那月に叩き込まれたスキルがサバイバルと家屋侵入で輝く。それに、この左手の呪詛。物は使い様というが、今ばかりは便利に使わせてもらう。この家の警戒システムをエレディアの魔力はすり抜けられるのだ。

チリチリと左手の上で青白い火の粉が踊った。その火を吹き消して、凧は立ちあがる。青い炎はさすがに目立つ。東雲が監禁されているであろう部屋は、この部屋の隣だ。廊下に明かりはあるものの、物音がない。まるで無人のようだが、規模に反して三人しか今はいないのだからこんなものなのだろう。ディアドラとその従者は一階の応接間にいることが多いらしい。凧にとって最も都合が良いのは東雲を部屋に放置した状態で二人が応接間にいることだ。

様子見をしたところで仕方がない。

ここまで来たからにはなるようにしかならないのだ。

凧は思い切って廊下に出た。

監視カメラの類があれば、凧の侵入はばっちり映っているだろう。科学の目まで

は誤魔化せていない。しかし、幸いというかこの城は他者の侵入をそこまで警戒していない。侵入者がいるような土地ではないからだろう。監視カメラもついていないようで、凧にとっては好都合だった。

窓のない部屋のドアノブに触れる。魔術のトラップはない。どこまでも不用心だ。そっとドアを開けて、部屋の中を窺う。部屋の中は無機質で大きなベッドが置いてあるだけだった。横たわる東雲が差し込む光を見てまぶしそうに目を細めた。

「あ……」

東雲は驚いたように目を見開いた。

凧は安堵して力が抜けそうになる身体を叱咤する。

部屋の中に滑り込んでドアを閉める。後は時間の問題だ。

「凧、君？　なんで……？」

「東雲、迎えに来たぞ」

ベッドから身体を起こした東雲。

なぜかメイド服を着ている。

「アカネさんも無事だ。外で待ってる」

「アカネも、大丈夫？」

「ああ」

それを聞いて、東雲の大きな瞳から涙が溢れ出した。

「東雲、外に出よう。今なら逃げられる」

「逃げられる？ ディアドラさんは？」

「別の部屋にいる。まだ、気づいてないはずだ。夜陰に紛れて、熱帯雨林の中に姿を隠せば、そうそう見つからないはずだ」

「外に、出る……あ」

東雲の瞳が躊躇に揺れる。

「東雲？」

凧は東雲に手を伸ばした。東雲もその手を取ろうとしたが、手と手が触れる前に東雲は手を引いてしまう。

「ご、ごめん。無理。せっかく来てくれたのに……ごめん……」

「どうした？」

「だって、無理。ここから出れない。わたし、ダメなの……ここから出るの、ダメ

だって」

東雲は震えている。

恐怖に身が竦んでいるようで、

「ディアドラに何かされたのか？」

東雲は震えてすすり泣くだけで答えない。風の問いは残酷だった。何もされてい  
ないはずがないのだ。尋ねてから失敗したと風は思った。

「ごめん、気が利かなかった」

東雲は首を振る。

東雲はこの数日の間に心身ともに苛め抜かれていた。この部屋を出ることに恐怖  
するほどに、心が委縮している。

「痛い」

「東雲？」

「痛い。ここから出ると、身体が痛い。だから無理なの。ディアドラさんの  
許しがないと、ここから出ちゃダメなの。だから無理、なの。風君、ごめん、本当  
に……わたし、こんなだから……早く逃げて、今なら逃げられるんでしょ？」

「馬鹿言え、こんな東雲を放って逃げられるかよ」

東雲の告白に凧は憤る。

激高の感情が次々に溢れてきて噴火してしまいそうだ。

東雲を痛みで縛り付けるといふ悪逆に、今すぐにディアドラを討ち果たしてしまいたくなる。明瞭な殺意を抱くほどに、ディアドラが憎い。左手が凧の悪意に反応しそうになる。

「凧君、それ、どうしたの？」

「気にすんな。新しい仲間だよ」

左手を抑えながら、凧は言う。

吸血鬼である東雲をそこまで強く縛り付けるとなると相当の魔術か魔具だろう。そうと見れば当たりはつけられる。この部屋に敷かれた魔法陣は逃走防止のためのものだ。凧が部屋に入っても反応がない辺り、部屋の内から外に特定の人が出ようとした時だけ発動する魔術だ。その対象を絞っているのが、東雲の手についている腕輪だろう。

「それ、斬るぞ」

「え、これ……でもッ」

「朽ちた銀霧」  
ウィザード・シネレウス

破壊を伴わず、東雲を拘束する腕輪のみを霧に変える。これで、東雲は自由だ。悪意に縛られることもなく、この小さな牢獄に留まる理由もない。

「東雲の痛みはもうないはずだ」

「あ……本当に、出ていいの？ わたし、い、痛くない？」

「大丈夫。大丈夫だから」

と、凧は手を伸ばした。

つい先ほどまで手首に絡みついていた悪意の結晶が消えて、楽になった手を東雲は逡巡の後に伸ばす。凧の手を取り、ベッドから降りるまさにその瞬間、ドアを粉みじんに砕いて氷の槍が室内に撃ち込まれた。

「逃げられるとも思った？ まさか、エレディアを倒して城に忍び込んでくるなんて、さすがにシノちゃんの王子様ってところかしら」

壊れたドアの欠片を踏みしめて、ディアドラが入ってくる。

その姿を見ただけで、東雲の心が凍えてしまう。

狂気に塗れた笑みはどうしてか蛇を思わせて、東雲はカエルのように竦むしかない。叩き込まれた上下関係は逃げられる状況にあっても、逃げるという選択肢を選ばせない。

「上手く避けたのね、昏月君」

氷の槍はその切っ先で壁を貫き、大穴を開けていた。

射線上にいた凧は辛うじてこれを回避して、床を転がっている。

「完全に不意打ちを成功させたと思ったのだけど、なるほどよく鍛えられていると言ったところかしら。その歳で、よくここまでするものね」

「お褒めにあずかり光栄です」

「それで、殺されに來たのかしら？ エレディアを倒した後で、そのまま逃げたいればいいものを」

「見ての通り、東雲を助けに來ましたよ。このまま連れて帰ります。迎えが來るまで、もう少しかかりますけど、あんたのところには東雲は置いておけないので」

凧はそう言って立ち上がる。

砕けた外壁から月光が入ってきて廊下からの人工の光と合わさって真っ暗だった

室内を明るく染め上げる。

ディアドラの身体から熱を伴う殺気が炸裂した。魔力の放射だけで部屋の石壁がひび割れ、風を城の外に弾き飛ばす。

「ぐッ……！」

身体中に張り巡らせた防護魔術が全力で叩き付けられる魔力に抵抗したが、一部がすでに焼き切れている。さすがに旧き世代の魔力だ。眷獣召喚に使わなくとも、それだけで並の魔族を叩き潰せる。

空中で体勢を立て直した風は重力を操って難なく着地した。

ディアドラが風を追って外に出た。

着地前に不意打ちで使った水の槍を投じてくる。あれは眷獣であり、インテリジェンス、ウェポン意志ある武器の一つだ。風が振るう不出来な黒剣と同種の眷獣である。

旧き世代の眷獣と正面からやり合うのは危険だ。

風は迎撃ではなく回避を選択する。大きく後方に跳躍して、着弾点から距離を取った。地響きとともに地面を貫いた水の槍。めくれ上がった土が瞬時に凍結して、円形の氷の壁を作った。

「すげえな……ッ」

単純だが威力はかなりのものだ。

眷獣はどれも敵に死を押し付けるものではあるが、ディアドラの氷の槍もその例に漏れず凶悪な殺傷能力を有しているのは明らかだった。

「東雲を返してもらおうぞ、吸血鬼」

「勝手に人の家に入っておいて、盗人猛々しいにもほどがあるわね」

氷の槍を手にとったディアドラが舌なめずりをする。

ディアドラの立ち振る舞いには余裕がある。当然だろう。これまでの六百年で程度度の戦士ならば十把一絡げにして屠ってきたのだ。凧が眷獣を使ったとしても、脅威に感じることすらない。少しばかり遊んでやるか、という程度之感覚だ。そして、今の凧に勝機があるとすればその油断を突く他ない。

怨敵を前にして、凧の全身が震える。恐怖ではない。不思議なことにディアドラと敵対しても恐怖は一切感じなかった。あるのはただ、純然たる戦意のみだ。滾々と湧き立つ魔力に突き動かされるように凧は、不出来な黒剣を構えた。

## 第五部 二十二話

凧とディアドラ。

二人の間に横たわるのは比較することも烏滸がましい厳然たる戦力差だ。

吸血鬼によらず、すべてに於いて積み重ねた時間はそれだけで力を得る。固有堆積時間と魔術の世界では呼ぶそれは、意味のある時間の積み重ねが強大な魔力を生成する力の源となる不変の真理を指す。

肉体的に脆弱な吸血鬼が数多い魔族の中で最強と呼ばれるのもここに起因する。

吸血鬼の主要な武器にして最大火力を誇るのは眷獣だ。眷獣を召喚すれば、莫大な魔力を消費する。魔力は生命力そのものであり、不死の呪いを受けて無限の魔力を有する吸血鬼でなければ眷獣は扱えない。

ただ、眷獣といってもその能力はピンキリだ。

いかに無限の魔力を持つとも、一度に扱える魔力の量には個体差がある。

固有堆積時間が多ければ多いほど、一度に扱える魔力の総量も増加する。吸血鬼

が個体としてのポテンシャルが高まっていけば、眷獣も強大になる。

吸血鬼に限らず、長く生きれば生きるほど、固有堆積時間は積み重なって、魔力面では強化されていく。しかし、その一方で時間経過は生物に老化という名の劣化をもたらす。不死ならざる生物には、固有堆積時間をどれだけ積もうとしても寿命という壁を超えることはできない。

吸血鬼はその点に於いて半永久的に若い姿を維持できるという点で優れている。世界の法則に対する最適解を得た生物と言えるだろう。

固有堆積時間を理論上は無限に積み重ねていける。

ただ存在し、息をしているだけで吸血鬼の肉体は上限なく強くなる。故に最強の種族と呼ばれるのだ。

凧が対峙するディアドラは、そんな吸血鬼の中でも旧き世代と呼ばれるカテゴリーにいます。厳密な定義こそないが、百年以上を生きた吸血鬼がそう呼ばれる傾向にある。一般に強力な吸血鬼として認識されているのは、この旧き世代かあるいは高位の吸血鬼を親に持つ——真祖等の二世である。

ディアドラは六百年を数える吸血鬼だ。

それも、安穩と生きてきたわけではなく多くの修羅場を潜り抜けてきた猛者である。

見た目の艶やかな女性性とは裏腹に彼女が流してきた血の量は文字通り桁が違う。人権意識のない中世を生きた吸血鬼は、過酷で陰惨な戦争をその身で経験し、乗り越えてきた。

凧は十五年しか生きていない。

霊能者としては一流の素養があっても、何かの間違いで眷獣を身に宿し、吸血鬼に近い体質になったとしても六百年の歴史を上回るような手札はない。

今では攻魔師と呼ばれるような対魔族戦特化の人間も飽きるほど殺してきたし、吸血鬼同士の戦いでも同じく飽きるほどに殺してきた。

脆弱な人間が操る脆弱な眷獣など歯牙にもかけerる必要のない相手だ。

「どうしたの、その程度でシノちゃんの王子様やろうって？ 全然、なってないんじゃないの？」

氷の槍を振り回して、ディアドラは凧を追い立てる。

ディアドラの動きを先読みし、黒剣で刺突を凌ぐ。辛うじてだ。ディアドラは本

気を出していない。地面がそこかしこで凍結している。ディアドラの氷の槍は貫いたものを氷漬けにする単純ながら強力な能力を持っている。

ディアドラは高い身体能力だけでなく、槍術も習得しているらしい。

「あまりがっかりさせないでよ。もうちょっとシノちゃんに希望を持たせるような戦い方をしてくれないと、ね」

氷の槍が幾重にも軌跡を重ねる。空気中の水分と捉えて凍結させて、無数の刃を作り出す。

インフェリア・アーデル  
「不出来な黒剣ッ」

力を振り絞って放たれた氷刃を弾き返した。斥力場を発生させて、数えきれない刃を纏めてあらゆる方向に逸らしたのだ。

力場を生成すれば、数は問題にならないのがこの防御方法の利点だ。

不出来な黒剣の形成する斥力場の中に踏み入ったあらゆる物は、凧を捉えることなく進路変更を余儀なくされる。

「それ、これはどうかな!？」

ディアドラが笑みを浮かべて跳ぶ。凄まじい魔力が槍の穂先に集中しているのが

見て取れる。視覚化するほど濃厚な凍結の魔力が渦を巻いて槍を包んでいる。

ディアドラは氷の槍を逆手に構えて、風に向けて投じる。

「黒雷ッ」

全身を強化して、猛然と風は駆ける。あの槍を正面から受け止めるのは不可能だ。靈感に従って安全地帯にいち早く退避するしかない。

氷の槍の着弾で地面が揺れ、ひび割れる。逆棘状に土が盛り上がって凍結し、冷たい風が四方に暴風のように吹き荒れる。風は風に身体を持って行かれそうになったが、辛うじて直撃を免れた。

「タイニー・アウルム  
小さな黄金ッ」

呼び出したのは黄金の豹——今はなぜか獅子になっているが——である。雷光の肉体は少しばかり筋肉質になって巨大化したとしても相変わらぬ高速移動を可能とする。

槍を手放したディアドラに猛然と獅子が襲い掛かる。

「イメチェンしたの？ いつの間に」

ディアドラは驚いた風ではあったが、余裕を失ってはいない。ディアドラが小さ

な黄金を見るのは二度目だ。獅子の姿になったことに驚いている。しかし、力を上昇したとはいえまだまだディアドラを脅かすほどのものではない。

「ベリヌス！」

雷光の獅子を迎撃したのは黒炎の蛇だった。

鋭い牙で獅子に食らい付き、そのまま地面に叩き付ける。

「地力が違うのよ、地力が」

「く……ッ」

ベリヌスは小さな黄金に絡みついて締め上げる。小さな黄金は、牙と爪で応戦するが、ディアドラが言うように力が違い過ぎた。

コンクリートの壁にボールをぶつけているように、全力を出してもまったく意に介されてない。小さな黄金も歯が立たない。ディアドラの力は圧倒的で、眷獣同士の戦いでは屈は防戦一方だ。それもディアドラが手加減しているからこそであり、彼女が本気で殺しにすれば一溜りもないだろう。

「ほら、どうしたのかな！ もっと頑張って！ じゃないと、あっさり死んじゃうわよ！」

ディアドラの身体から溢れた魔力が、巨大狼の姿を象った。体長は六メートル弱くらいで、全身が白銀に輝いている。

突進してくる巨狼は、尻に正面から牙を剥いた。

「フェール・ミニウム落ちた深緋！」

それを迎撃するのは緋色の一角獣だ。

巨狼の首元を目掛けて、召喚と同時に頭突きをさせる。不意打ちも同然の召喚攻撃に巨狼は大きく仰け反って雄たけびを上げる。

ユニコーンの角は、巨狼の喉元に確かに刺さっている。

「そのまま、押し切れッ」

魔力を込めて、ユニコーンは前進する。角の先から衝撃波を放ち、巨狼を内側から砕く。顎を砕かれながらも巨狼は後脚で踏ん張り、前脚の爪でユニコーンを引き裂く。魔力の血を零しながら、ユニコーンは大きく跳躍した。巨狼を貫きながら、突進し、城の壁に叩き付けたのだ。

ディアドラは驚愕に目を剥く。その瞬間を狙いすましたように鋼の雨が襲う。9mmの弾丸が城外の茂みからディアドラにばら撒かれたのである。この不意打ち

は、ディアドラにも防げない。アカネの超能力で強化された銃弾は、通常の拳銃弾とは比較にならない威力でディアドラの身体を引き裂く。これが魔弾であれば、魔力の動きから察することもできただろうが、魔力を帯びていない通常弾は、魔力の多寡で強弱を計る吸血鬼の意識の外にあった。

「く、おあッ！」

血肉が舞う。

離れたところからのバースト射撃だ。弾丸は扇状に広がらざるを得ず、ディアドラを捉えたのは十発程度だった。が、それでも手傷は手傷。胸部と腹部に貫通射創を穿たれたディアドラは苦悶の声を上げて、よろめき、

「ゴグマゴグッ」

倒れずに新手の眷獣を呼び出した。

巨大な土くれの巨人だった。巨人は大股で城の外に飛び出して、アカネがいたであろう場所を殴りつける。凄まじい地響きが轟いて、木々がなぎ倒される。

「いつ出てくるのかと思えば、こう来ますか……はあ、この程度でッ」

「黒雷ッ」

ここが唯一無二の隙だ。

アカネのことは心配だが、意識は常にディアドラに向ける。残像を置き去りにした突進で、ディアドラに飛び掛かる。

身体に開いた傷口から血が溢れ出た血濡れの吸血鬼は、アカネに気を取られていたこともあって反応が遅れる。

「インフェリア・アーデル不出来な黒剣ッ」

ディアドラが眷獣を呼び出す前に、凧は黒剣でディアドラを斬り割いた。黒い重力剣の刃は、ディアドラの左肩から脇腹までを両断した。

肉を斬り割り、骨を断つ嫌な感触が凧の手に伝わる。

悪を成した吸血鬼とはいえ、命を奪う罪悪感は想像以上のものがあって、凧は吐き気に襲われる。眷獣を斬るのとはわけが違う。それでも、東雲を助けるためであり、生きて帰るために必要だった。

「だから、それは、甘い……ッ」

「ッ……!？」

バチン、と紫電が舞った。凧の身体は気付けば空中にあって、背中から地面に叩

きつけられた。

衝撃で呼吸が止まる。どこかの骨が折れたのかもしれないが、痛みを感じない。疲労と脳内麻薬の過剰分泌のせいだろう。

「ああ、まったく、詰めが甘い。普通の吸血鬼ならともなく、このわたしが両断されただけで即死するとも？」

ディアドラは血を吐きながら、起き上がった。斬り割かれた肉は盛り上がり、修復を始めていた。

「心臓まで一緒に斬ったはず」

「保険くらいは用意するものよ。まさか、使うことになるとは思わなかったけれど」  
口元を拭ったディアドラは、嫣然と微笑む。

「期待以上だったわ、昏月君。わたしは警備部の部長としての立場であれば、引き抜きたいくらい。でも、まあ、ここまでね」

電撃が迸る。

脊獣の力を抽出して放っているのだ。風を閃電が打ちのめした。

「ディアドラに土をつけたことを誇りとして、あの世に行きなさいな。あなたの死

体は防腐処理して、シノちゃんの前に飾ってあげるわ」

「悪趣味、な」

「ふふ、わたしの世代からすれば、これくらいは別によくある話だったけどね」

「今はそんな時代じゃないっての」

「面白味がなくなっちゃって困るわ」

ディアドラの周囲に魔力が陽炎のように揺らめいている。いつでも眷獣を召喚できるように準備がされているのだ。

凧は内心で舌打ちをした。

最大の好機を逃したのは痛手だった。

チャンス逃すと後はギリ貧になる。それまで優勢だった流れが変わり、次第に劣勢になってしまおうというのは、よくある話だ。決められるときに勝負を決めなければならぬ状況で、ディアドラを仕留められなかったのは勝敗を分かっ大きな分岐点となったかもしれない。

凧の甘さと言われれば、反論の余地はない。ディアドラを両断した後で、首を刎ねるなり、頭を潰すなりして止めを刺していればよかった。ディアドラの再生能力

を甘く見たというだけでなく、殺傷することに対する忌避感が目を曇らせた。

凧の勝利はディアドラの油断に付け込むしかないのだ。ディアドラが自分に手傷を与えた凧に、これまでのような甘い対応をしてくれるとは思えない。

凧の眷獣もどういうわけか強化されているとはいえ、ディアドラとは天と地ほど差がある。このまま戦いを続けても、けっして凧が優勢になれるはずもなく、ただ逃げれば東雲は今度こそ悲劇を迎えることになるだろう。

ディアドラがこれほどの騒ぎを起こした凧を許すはずもなく、東雲もまた何らかの理由をつけては拷問をされるだろう。それは、絶対に許すことはできない。闘志だけで凧は立ちあがる。怒りを糧にして、踏ん張り続ける。



電撃と炎が凧を追い詰めている。繰り返される激烈な魔力は、凧を追い立て、跳

ね飛ばし、血みどろにしている。

凧の身体は傷ついて、火傷を負い、内側までボロボロになっているのが見て取れた。

東雲は凧が甚振られる様をまざまざと見せつけられた。

外壁に開いた大穴から顔を出して、戦況を見守ることしかできない。眷獸を奪われ心を半ば折られた東雲には、戦場に割って入る力など皆無だった。ディアドラの魔力を感じるだけで手足が震えて、心が萎えていく。

「よく頑張りますね、あの子」

と、東雲の隣で表情もなく呟いたのはマリアだった。

「十五歳の人間にしては、よく持っています。ええ、それだけでもう十分でしょうに。東雲様を救うために、ディアドラ様に挑むという愚行……本当に愚かです。このまま、無為に死んでいくのでしょうか」

「……あ、く」

東雲はマリアを睨みつけるが、反論することができなかった。

ディアドラの圧倒的な力は目に見えて明らかだった。旧き世代の中でも戦闘経験

を重ねた吸血鬼だ。凧がどれだけ頑張ったところで覆せない力の差がそこには横たわっている。

時間を重ねた吸血鬼のほうが強い。それは世界の法則だ。凧は眷獣を用いて戦うしかないが、眷獣同士の戦いではどうあっても上位の吸血鬼が優位に立つ。つまり、多くの場合吸血鬼同士の戦いは同格の相手としか成立せず、ジャイアントキリングなど期待するだけ無駄なのだ。

もつとしつかりとした準備を整えていれば話は別だっただろう。

眷獣勝負ではなく対魔族用の武装を整えて、軍警察と連携すればディアドラを倒すこともできたかもしれない。いや、できただろう。旧き世代の吸血鬼はディアドラだけでないのだ。彼らがディアドラ討伐に動けば、ディアドラ単独での生存は危うい。外部に助けを求めるといふ選択肢が取れなかったのは、状況が状況だけに仕方がないが、現状を見れば無策に突貫してきただけにしか思えないし、その程度の襲撃者に後れを取るようならディアドラは六百年も生き永らえていない。

熱波が顔にかかり、髪を巻き上げる。

黒い炎が凧を追い回しているのだ。凧は眷獣を使い、上手く避けているがディア

ドラは一步も動かず、じりじりと凧を追いつめていく。

ディアドラは結果よりも過程を楽しむタイプのサディストだ。

凧をひと思いに殺さないのも、凧を甚振ることを楽しんでいるからだ。甘さではなく、油断でもなく、これは強者の余裕だ。

「あなたも、そうそうに諦めたほうがいいですよ。ディアドラ様のご寵愛、刹那の悦楽に身を浸せば、楽になります」

「……お断りです」

「そうですか」

マリアの意図は分からない。東雲を憐れんでいるのだろうか。ディアドラに心から従えば、確かに楽にはなる。しかし、それは凧とアカネの命がけの戦いを無駄にし、自分のために戦ってくれている彼らを見殺しにすることを許容することになる。東雲にはそんな選択はできない。少なくとも、まだ東雲にはディアドラに屈していない部分が残っている。

ディアドラもそうと分かっているから凧を甚振っているのだろう。お前の所為で人が死ぬ、と見せつけるためだ。

凧とアカネという東雲が信頼を寄せる二人を無惨に殺すことは東雲の心を殺すことにも繋がる。自分のために二人が目の前で死んだとなれば、それは東雲には背負いきれない業となる。

しかし、どうするか。

このままでは凧を見殺しにすることに変わりはない。

凧に勝ち目は皆無だ。アカネも殺されてしまうだろう。何もしないで、ここでただ座っていることしかできないでいいのか。東雲は懊悩する。自分のために戦ってくれている凧をこのまま放置して、安易な身の安全に将来を委ねていいのか。

自問自答の末に導き出した答えは否。

ディアドラへの恐怖も不安も消えたわけではないが、何もしないままに大事な人々たちを失うことは何よりも耐えがたい苦痛だ。ディアドラへの恐怖よりも凧とアカネを見殺しにしてしまうことが恐ろしい。

身体の震えを押さえつけて、東雲は腰を上げた。

「どこへ行くのです？」

「わたしにもきつとできることがあるから」

「そうですか」

マリアは悲し気に目を伏せる。

「苦難の道を選ぶのですね。では、少し大人しくて貰うしかないようです」

パン、と軽い破裂音がして東雲の身体が宙を舞う。

風の眷獣。その力の一部を東雲に叩き込んだのだ。軽いジャブ程度。しかし、地面に叩きつけられた東雲は震えてしまっただけ動けない。

「今のあなたでは、その程度……眷獣も使えない上にすでに折れた心でどうするのです。こんな、撫でられた程度の痛みで動けなくなるのに」

「う、うるさい」

瓦礫を掴んで東雲はマリアに投げつける。外壁を構成していた石壁の欠片だ。それをマリアは意に介さず、風で跳ね返す。

「あなたの調教はディアドラ様の愉しみ。わたしが奪うわけにはいかないのです。大人しくしてください」

「助けに来てくれる人がいるのに、戦ってくれてるのに、わたしだけ見てるだけなんて無理だから。あなただって、昔はそうだったんじゃないの？」

「だから、愚行だと言ったのです。勝ち目のない戦いをディアドラ様に挑んで死ぬ。目に見えている結末です。抵抗など無意味、いえ、それ以上にディアドラ様を愉しませるだけです。抵抗の意思を示した人を踏みつけて奴隷にして尊厳を踏みにするのが、あの方の趣味嗜好なんですから」

「何て、悪質な。それを知っててあなたは……ううん、あなたも同じ」

「不要な過去……です。ですが、あえてアドバイスするのなら、心配はいりません。すべてをディアドラ様に捧げれば、楽になりますから。親兄弟も友人も復讐も何もかも考える必要ありません。悩みも不要。あの方の寵愛をいただけている間は、どんな不安も抱く必要はありません」

「そんなの、お断り」

マリアも恐らくはかつてディアドラに捕らえられ、東雲と同じように拷問されたのだろう。ディアドラに気に入られ、その配下になるよう強要されたのだ。その過程にどれほど悍ましい調教があったのか。東雲以上の苦悶の日々を送っていたに違いない。東雲はまだ三日。マリアは数百年だ。そのうちに、マリアは自分を捨てディアドラに従う道を選んだ。選ばざるを得なかった。そうしなければ耐えられな

かったのだ。けれど、自分はそうではない。そうはなりたくないのだ。そうならないように、今、抗うと決めたのだ。

「もう、知らないからッ」

その時、東雲の瞳が淡く輝いた。金色の瞳だ。この魔眼に見据えられたマリアは、驚愕のうちに意識を持って行かれる。それはただの魔眼ではなく、目に宿る眷獣だったのだ。東雲には眷獣はないと過信したマリアは、抵抗する間もなくその幻惑に囚われる。

ディアドラが東雲に拷問目的で植え付けた人工眷獣。まだ赤子で大した力を持たないそれは、本来目覚めることもなく、東雲の中で眠り続けるはずだった。しかし、宿主の窮地に際してそれは目を覚ました。右も左も分らないような状況ではあったが、東雲に危害を加える吸血鬼を敵と認識し、強引に自らの魔力を叩きつけたのである。

眷獣全体で見れば貧弱極まりない力だ。マリアにとってはそれこそじゃれついてきた子どもの玩具がぶつかったという程度の衝撃でしかなかったが、ディアドラが開発した人工眷獣は悉くが精神支配系能力を有している。東雲の体内に巣食ったサ

リエルもまた、目と目を合わせた相手を幻覚を見せる能力があった。

旧き世代のマリアの魔力は、サリエルの魔力を弾いて余りある。この幻覚も一瞬の白昼夢を作り出すくらいにしかならなかったが、その一瞬が大きな隙となった。

「う……あッ」

マリアの胸から一振りの刃が生えていた。

燃える黒い炎の刃だ。

マリアの背後に現れた炎の剣士がマリアを背後から襲ったのである。

「ふう、はあ……やっと、辿り着いたぞ東雲」

廊下側から声がした。

東雲から血を吸った眷獣の器が立っている。

「あ、あなたは」

「おお、待て、我は味方じゃ。風君とともに汝を助けに来たのじゃ」

「……え？」

「その顔は信じておらぬな？ 無理もないが、事情を話す暇はないぞ。そら、勝利のためには手段を選んでいない場合ではない。我が縫い止めておけるのも、そう長

くはないぞ」

串刺しのマリアは、当然ではあるがまだ死んでいない。内部を獄炎で焼かれながらも、不死の呪いはマリアを生かしている。

何をすべきかは明瞭だった。ディアドラに勝利するために、マリアを倒すだけでは足りないのだ。足りない分は補わなければならない。

「マリアさん、ごめんね」

幻惑と刺突で未だ意識定かならぬマリアの首に東雲は牙を突き立てた。数百年分の歴史を丸ごと奪い取る。十六年しか積み重ねていない東雲が、旧き世代を上書きするのはリスクが大きすぎるのだが、今回ばかりは状況が違う。

マリアは初めから心が折れている。諦観の念に凝り固まった彼女は、上書きされようとも抵抗はしない。心臓を炎剣で焼かれ、魔力を消耗していることも手伝って、東雲はマリアの積み重ねた時間を継承することに成功したのだ。

「終わったか。して、念のために聞くが東雲でよかったか？」

「もちろん」

燃える剣が消えて、物言わぬ骸となったマリアを床に横たえる。

上書きで手に入れた力は膨大だ。旧き世代の魔力をそっくりそのまま受け継いだのだ。マリアが操る五体の眷獣も東雲の身に宿っているのを感じる。

「あなたたちは、どうするの？」

東雲から眷獣を奪った眷獣の器たち。シバルバー、ヨミ、ゲヘナの三人が揃っている。操られていたシバルバーとヨミをゲヘナが解放したのだ。ディアドラとマリアの両名が戦いに気を取られている間に潜入したゲヘナが同胞を魔の手から取り戻していた。

「この警備もザルじゃった。ま、詮ないことじゃが」

もともとディアドラは破滅願望に満ちていて、足元を疎かにしていた。自分にとって不利に転がろうとも、それはそれとして楽しむ享乐的な備えであった。何はともあれ楽しめればどうでもいいと意図して不注意を重ねた結果であった。

「この身は窮屈ゆえ、自然のままに帰すとす。我は煉獄の申し子にして、炎の王。このような幼女には過ぎたる眷獣よ」

パラパラとゲヘナの身体から粉が落ちる。表皮がひび割れて、白い石膏像のように固まっていく。

「では、再びともにあろうぞ、我が宿主。短時間じゃったが、言葉を交わせたことは僥倖じゃったよ」

にこやかにそして、満足げにゲヘナは言った。後ろのシバルバーとヨミを宿した器も静かに頭を垂れて、砕け散る。ずしん、と身体に重みが増したような気がした。東雲の血の中に、失われた三体の眷獣が帰って来たのだ。



そこかしこに黒い炎が上がっている。

ディアドラが信頼を置く眷獣が暴れ、木々に魔力の炎が燃え広がっている。城の周囲は地獄絵図だ。熱帯雨林は砕けて、燃え上がり、城の外壁もひび割れ、崩れている。旧き世代の眷獣がひと暴れすれば、これだけの災厄を振り撒けるのだ。

凧はそんな災厄の海を乗り越えて、未だに命を繋いでいた。

持ちうる秘術をすべて使い、眷獣を状況に合わせて使い分けてディアドラの猛攻を凌いでいたのだ。

ディアドラを相手にして、彼女が遊び半分であったとしてもこれは偉業だ。ディアドラは骨があると思わなかったが、それでも根性だけは認めるに値すると評価した。

蟻も同然の意識を特別払う相手ではないと思っていたが、少なくとも犬くらいには評価を上げてもいい。いや、自分の宝物を狙う悪者という点で言えば、ハイエナ辺りがちょうどいいか。ともあれ、脅威度に変更はなくとも、少しばかり手を焼く相手程度には認識を改めた。

それも、これで終わりだ。

凧の精神がどれだけ持ちこたえようと、肉体の限界は訪れる。度重なる眷獣召喚は彼の寿命を食らい、魔力を消費させ、力をそぎ落とした。ディアドラの攻撃を避ける体力もすでに尽きている。地面を転がりうつ伏せになったまま、立ち上がろうともがく姿は痛ましいとすら思える。身体を起こす元気もないのでは、ここが終点だ。

「ベリヌス」

鎌首を擡げる巨大な黒炎の蛇。凧に向けて大きな顎を開いた。

その灼熱は凧を今度こそ死に至らしめるだろう。焼き払われて炭化した死体に成り果てる。その後は、ディアドラがその死体を好きに使うことだろう。

凧の未来視が明瞭に死の事実を突きつけてくる。恐怖はない。昔から身の危険を感じる能力は人一倍低かった。凧は本質的に危機には疎い。凧を形成する技術は、もともとは軍事用の都合のいい兵士を作り出すためのものだ。恐怖を感じず、任務を遂行できるように設定されたものだ。その技術を応用した凧は、自分に向かってくるボールを避けることもなかったし、車を脅威に思わないので交通事故寸前に助けられたこともある。そのままでは日常生活にすら支障を来すと那月に身を守る方法を叩き込まれた。それが凧が攻魔師を目指すようになった最初の一步だった。恐怖はないので反射的に身を守ることもできない。だから那月が仕込んだのは危険を目で見て頭で理解し対応する能力だった。幸いにして凧には強力な霊視がある。未来を読み取る霊視は、凧の弱点を補って余りある能力だった。迫りくるベリヌスの顎に、凧は安堵の表情を浮かべた。

死を前にして気が触れたというわけではなく、この眷獣で死ぬ未来が消えたからだった。

灼熱の牙が凧を貫く寸前に、割って入った冷気がベリヌスを跳ね飛ばした。地面を踏み鳴らし、炎を吹き消して現れたのは氷で形作られたサイの骨だった。

「シバルバー、そのままやっちゃえ！」

真横からの攻撃にベリヌスは頭をかち上げられた。

そのままベリヌスが対応する間を与えず、シバルバーは蛇の身体を踏みつけて、鋭い角を突き刺し、凍える風を叩きつける。

「東雲……！」

「凧君、ごめんね……あと、ありがとう」

凧の前に立ち、東雲はシバルバーをけしかける。

シバルバーは東雲の眷獣の中でも突出して高い攻撃能力を持つ眷獣ではあるが、その力が跳ね上がっていた。

ディアドラの眷獣と正面からぶつかって、押し返せるほどの力を奮っている。

「シノちゃん、あなた……」

「もうあなたの好きなようには、させないから！」

ベリヌスの身体をシバルバーが踏み抜いた。黒い炎を凍える風が吹き消して、猛然とディアドラに突進する。

ディアドラは大きく後方に跳躍した。シバルバーの巨体で踏みつけられれば、ディアドラの身体を粉碎することは難しくない。

「この力、マリアを食ったのね」

「……ッ」

「ふふふ、いいわ。それでこそ、よ。そうやって得た希望を踏み砕く瞬間が一番だもの」

シバルバーの足元から黒い蛇が襲い掛かった。

一匹ではなく、何匹も。数えきれない頭を持つ多頭の蛇。その姿は巨大なイソギンチャクにも似て、不気味だった。

シバルバーの巨体に無数の蛇頭が噛みついて、絡みつき、その動きを封じる。藻掻くシバルバーは蛇を引き千切り、氷漬けにするが砕けた頭は次々に再生してシバルバーの動きを阻害する。

「まだまだ、眷獣はいるんでしょう？ ほら、どんどん出して見なさいな！」

ディアドラは魔力を総動員して眷獣を次々と召喚する。

金色の鷹であり、岩石のトカゲであり、白銀の巨大な兜であり、三首の獅子であつた。

吸血鬼は他者から眷獣を奪い取ることが出来る。長く戦場に身を置いたディアドラが実際に何体の眷獣を保有しているのかは、正式な記録も残っていない。現代では法律上届け出が必要となつているが、ディアドラほどに古い吸血鬼が唯々諾々と従っているわけでもない。現にディアドラは、未登録の眷獣を数多く宿していて、総数はディアドラ自身ですら正しく把握はしていない。

「ヨミ、ゲヘナ！」

白装束の女の骸と数多くの炎の剣士たちを呼び出して、対抗させる。炎の剣士たちはそのままでは力不足なので、すべてを重ねて一体の眷獣として振る舞わせる。シバルバーにすら匹敵する巨躯を持つ、鎧に身を固めた二足歩行の炎の悪魔だ。黒い翼を生やして、ゲヘナは黄金の鷹に剣を振り下ろして、これの首を一撃の下に両断した。

ヨミは髪を伸ばしてディアドラの眷獣たちを牽制する。岩石のトカゲを拘束し、三首の獅子を下がらせる。

強力な眷獣のオンパレードで吹き荒れる魔力だけで周囲の木々は枯れてしまうのではないかというほどだが、東雲の額には冷や汗が浮かんでいる。対してディアドラには余裕があった。

東雲の力には驚いたが、マリアの固有堆積時間を取り込んだのなら納得はできる。東雲は第四真祖の娘だ。単純に血の濃さから言って最強クラスの才能があるのは間違いなく、それが相応の固有堆積時間を得たのだからディアドラに比肩する力を得るのは当然のことだ。

ただ、それは力を得たというだけで使いこなしているとは言えない。今はまだ身に余る力をとにかく振り回しているというだけだ。

様々な能力を持つ眷獣の戦いは、力任せだけで乗り切れるものではない。風のように脆弱ながらうまく力を使って凌ぐタイプもいる。

「残念ね、シノちゃん。戦う前からあなたは負けているのに、今更わたしの前に出てきても、どうにもならないでしょうに」

「うるさい。風君とアカネを傷つけて、わたしに好き勝手して、そんなの絶対許さないから」

ゲヘナが東雲の想いに応えて、猛然と吠える。格闘していた三首の獅子を打ちのめし、炎の剣で心臓を貫いて、放り投げた。

バチバチと東雲の身体から放電する。魔力が可視化して雷のようになっていのだ。

「もうちょっと……このッ」

魔力を眷獣に注ぎ、力を与える。今の東雲で召喚できるのは同時に三体が限界だ。新たに得た力が戦艦の主砲並の力を持つとして、東雲の身体が扱える魔力は戦車砲クラスが精々だ。時間をかけて身体に力を馴染ませればその限りではないが、手にしたばかりの力を制御しきれない現状では、眷獣を暴れるに任せるしかなく、自分が従来から引き連れる眷獣以外は召喚することができないのだった。

それでも、東雲の力はディアドラに対抗できるだけのものはある。

もともと、旧き世代に匹敵すると評判だったのだ。それが、旧き世代に対抗するに相応しいだけの原動力を得たのだから、単純な力勝負でならディアドラにも優勢

に戦えるはずだ。

「あなたは、戦う前から負けてるって言ったでしょう」

東雲の眷獣に押されているかに見えたディアドラだったが、依然として微笑みを消えていない。むしろより深まっている。

東雲を苦しめることに人生を捧げた女だ。東雲が力を取り戻したことすらも、この後で東雲を凌辱するための過程でしかないのだ。

「何を……うッ」

ディアドラが何かする前に押し切ろうとした東雲が不意にふらついた。胸を抑えて、苦悶の表情を浮かべる。

「東雲!？」

「う、あッ……ぎ、あッ、ああッ」

ごぼり、と東雲の口から血が溢れ出た。

足元がおぼつかず、苦痛に声を上げることもしない。唾然とする風の前で東雲の身体から血とともに黒い棘が生えた。背中と腹部から二本ずつ。東雲の体内から肉と皮膚を食い破った怪物の正体は、ディアドラの眷獣だった。

「ぐ、あ……がふッ、あぐ……お、あ……」

血を吐きながら、東雲は力なく膝をつく。

棘の眷獣が姿を消して、支えを失った身体は糸の切れた人形のように仰向けに倒れた。

「東雲ッ」

凧が疲弊した身体に鞭打って東雲を抱きとめた。

主が倒れた眷獣は、力を失い劣勢になっていく。

「おい、東雲、しっかりしろッ」

自らの血で化粧をした東雲は白皙の美貌をさらに青くして凧の手の中で血を零す。

「ごめんね、凧君……しくじった、は……あ」

「いい、しゃべるな。魔力は再生にだけ回せ」

体内から貫かれた東雲の傷は徐々に塞がってきている。急所は外れていたのか、命を脅かすほどでもないが、力の源である血を失えば一時的にしても能力は著しく低下する。

眷獸によって臓器を内側から貫かれたのだ。その痛みは想像を絶するものである。  
う。

「わたしがシノちゃんに何も仕込んでいないわけがないでしょうに。あれだけ身体を弄ってあげたんだもの」

得意げにディアドラは語る。

東雲の身体を暴く過程で、事前に眷獸を仕込んでいたというのだ。ディアドラの有する眷獸の中では、発動条件が厳しいものの、相手の体内に仕込まれた後は任意のタイミングで覚醒し、内側から貫く爆弾のように扱えるのだ、と。

東雲がディアドラに捕らえられている間にどれほど過酷な責め苦がなされたか、  
凧は想像することもできない。

東雲の身体についた傷は軒並み再生して、何事もなかったかのように綺麗になっているからだ。凧のように傷が身体に残ることはない。それでも、ディアドラの語り口や彼女の嗜虐性を鑑みれば、東雲が吸血鬼でなければすでに死んでいたとしても不思議ではないし、再びこうして立ち上がったのは奇跡に近いことだろうということには予想がつく。

「あんた、これから東雲をまた苦しめるつもりか？」

「どうかしら。シノちゃんがそれを楽しく思えるようになればウィンウィンなるんじゃない？」

「ふざけるな。もう、あんたいい加減にしろよ……」

気を失った東雲を横たえて、凧は立ち上がった。疲弊の極みにある凧は、手についた東雲の血を舐める。強い魔力を湛える東雲の血から魔力を摂取して、もう一度力を高めた。

「あなたの出番はもう十分なんだけど。シノちゃんも気絶しちゃったし。できれば目の前で殺したかったんだけどね」

「できるかよ。あんたなんか殺されるか」

「ふふ、気合だけでどうにかなるようなら、とっくの昔にわたしを倒せてたでしょう。そんなに疲れ果てた身体で何ができるの？」

ディアドラは、土の巨人を歩ませる。東雲の眷獣と戦い傷ついた巨人ではあるが、凧を捻り潰すのに力はいらない。この質量ならば撫でるだけで大抵の人間は殺せるだろう。無論、凧もその例に漏れない。

土の巨人の腕が凧を圧殺する前に、凧の眼前に電光が駆け抜ける。その一撃で、巨人の腕は文字通りの土くれになって碎け散る。

「何……？」

ディアドラは怪訝そうに眉根を寄せた。

凧の身体から溢れんばかりに噴き上がる魔力の禍々しさ。つい数分前までディアドラに圧倒されていた凧のそれとは質が違う。

「何をしたのかしら？ ……何をしているの、早く潰してしまいなさい！」

凧を殺す。そうと決めたからには加減の必要はない。東雲を巻き込まないよう注意を払いつつ、凧だけを薙ぎ払うように打ち碎けばいい。横薙ぎに巨人は拳を奮う。その拳を碎いたのは、巨大な雷光の爪だった。

「そこを退け」

力が溢れてくる。

凧の魔力が紫電となって巨人の胸を撃ち抜いた。五つの電撃は刃であり、巨人の身体を一撃で削り滓に変えた。

「それが、あなたの本当の力ってわけ？」

「違う」

と、凧は否定する。

「俺の力なんかじゃない」

じわじわと凧の表皮が傷ついている。流れた血がすぐに蒸発して、いずこかに消える。何か凧の血を食っているのだ。

「俺は人間だ。出自はどうあれ……眷獣を自然に身に宿すことは、ありえない」  
今、この瞬間に理解する。

自分の力の正体を。

どうして、眷獣が使えるようになったのか。厳密には、凧は眷獣を使っていたわけでも、宿していたわけでもなかった。ただ、助けてもらっていただけだったのだ。

「俺はいつだって全力だ。東雲を助けるために、あんたに全部の力を見せていた。俺があんたに勝てなかったのは、皆が俺を心配していたからだ。本気を出せば、俺の身体が持たないんじゃないかってな。だから、ずっと皆が手加減をしてくれた。俺の命を食い尽くさないように、力を何百万分の一にも削って貸してくれただけだった」

電撃が四方に流れる。ディアドラの眷獣が軒並み押し戻されている。凄まじい魔力は凧のこれまでの力とは格が違う。

凧が使ってきた眷獣は凧に宿る眷獣ではない。凧の吸血鬼の力はいくまでも原初ルーツの残滓だけだ。

それ以外の眷獣は後付けのものでしかない。

五年近く前、零菜に血を吸われた時がすべての発端だった。凧はその時のショックで倒れ、運び込まれた病院で古城からの輸血を受けた。血の従者になることも辞さない治療はしかし、凧を延命させることに成功したものの血の従者にはできなかった。

凧の体質が吸血鬼に近づいたのも、眷獣召喚能力を発現したのもその後である。すべては原初の力が原因だった。封印された原初の力は、零菜に血を吸われたときに封印の一部が破れて力が漏出した。吸血鬼にとって血を吸われるというのは、上書きの危険があるということだ。原初は身を守るために零菜の力に抵抗し、人間だった凧はその「アレルギー反応」に倒れたのだ。そして、同様に原初は第四真祖の中核を成した力だったために輸血程度では血の従者にもなれなかった。

それでも、そこで原初の力は大きく失われ、代わりに第四真祖との間に不可逆的な魔力の繋がりが生まれた。

それは血の従者が主の眷獣を召喚できる現象にもよく似ていて、凧は古城の眷獣とも縁を結んでいたのである。

凧が召喚する眷獣は、どれも本来の姿とはかけ離れていて脆弱かつ中途半端だった。それが凧の身体でできる限界であり、眷獣たちが凧の身体を壊さないように最小限の出力にしてくれていたからでもある。

凧沙の息子は殺せないが、助けを求めるのなら力を貸す。それが眷獣たちのスタンスだったわけだ。

凧は左手の包帯を引き千切る。

真っ白に染まった手は未だ強力な呪詛に侵されていることの証左だった。左手から陽炎が立ち上る。冷気が忽ちの内に純粹な魔力に変わっていく。

「エレディアッ。そこにいたの!？」

ディアドラの驚愕も無理はない。倒されたと思っていたエレディアが、未だに凧の左手の中に残っていたからだ。

死神にも等しい死霊の集合体。風の左手を呪った魔物は、風とともにそこにいた。陀羅尼経で押さえつけていた死の魔力——膨大極まりない無数の怨念が、今、眷獣に捧げられている。ディアドラを倒すという一点に於いて、風とエレディアは同志だ。霊的感受性の高さを利用してエレディアと交信した風は、彼の恨みを晴らすために彼との共闘を約した。死霊を守護霊として自分の力にする術式。日本の御霊信仰を下敷きにした禁断の契約の賜物だった。

「魔力を回す。もう何も気にすることは無いッ」

膨大な魔力が雷光となって、ディアドラの眷獣の内、三体を一撃のもとに屠り去る。眷獣が纏めて碎かれたことで、フィードバックを受けたディアドラがよろめいた。

凄まじい力に全身の血液が沸騰するようだった。

古城の眷獣の力を知らないわけではないが、こうして自分の身体を通して使うとその圧倒的な力に怖気が走る。恐怖を感じないはずの心が竦むような思いだった。東雲が危害を加えられたと聞いた時から不意に湧き上がる強烈な怒りの正体も、今ならば理解できる。あれは、眷獣たちの怒りだ。第四真祖の眷獣たちにとって、

東雲は宝だ。希望そのものである。自分たちと同一存在であるアヴローラの娘なのだ。危害を加えられて黙っていられるはずがなかった。それが、目の前で東雲が血塗れにされたとなれば、もはや我慢の限界だ。

「疾きく在やれがれれッ、獅子レゲルス・アウルムの黄金ツッ！」

## 第五部 二十二話

獅子レグルス・アウルムの黄金。第四真祖が操る十二体の眷獣の内の一体であり、第四真祖の伝説的で圧倒的な戦闘能力を象徴する眷獣でもある。

召喚されれば周囲の地場は荒れ狂い、時に広範囲にわたって通信障害を発生させる。

雄々しい鬣を振り乱す雷光の獅子であり、爪の一撃が旧き世代の眷獣の全力攻撃を遥かに上回る桁外れの眷獣だ。

一般的な眷獣ですら常人が召喚すれば寿命を食い尽くされてしまうのだ。第四真祖の眷獣をそのまま召喚しようとしても、普通ならば召喚が完了する前に人間の寿命程度ならば消し飛ぶだろう。

それでも、凧は倒れることなく獅子の黄金を維持している。左手に宿るエレディアの怨念が、ディアドラを倒す力になる。

数百年もの間この世に留まり続けた、数百人分の死霊の力は、吸血鬼の眷獣に匹敵する魔力を貯蔵している。

無数の人々の無念を力に変えて、獅子の黄金は雄たけびを上げたのだ。

「だから、どうしたッ」

ディアドラは叫んだ。

凧と対峙して、初めて焦燥に胸を焦がす。

凧程度の吸血鬼や攻魔師は履いて捨てるほど殺してきたディアドラであったが、真祖の眷獣を相手にしたことは今までで一度もなく、そして長い人生だったからこそ、真祖の力を目の当たりにする機会も多々あった。

獅子の黄金がディアドラの力を上回る本物であるとすぐに理解した。

眷獣同士の戦いは、強い方が強いのだ。当たり前前の理屈ではあるが、これが分からない者も最近では珍しくなくなった。策を弄すればとか、努力をすればとか、何回か戦っている内にとか悠長なことを言う。

しかし、実際はそうではない。勝てる相手には勝てるし、負ける相手には何度挑んでも負けるのだ。そして、実戦では一度でも負ければ次がある保証はない。

勝てないと分かっている相手に正面から戦うのは愚者のすること。ディアドラは愚者ではない。凧が操っているからといって第四真祖の眷獣を侮ることはしなかつ

たし、その脅威を正しく認識していたから迎撃という選択肢は即座に捨てた。

ディアドラは大きく後方に跳躍する。

何か引張られるように空中でディアドラは加速していく。何かしらの眷獣の能力だ。獅子の黄金の爪を辛うじて避けたディアドラは、そのまま五十メートル近くを一瞬で移動した。荒ぶる獅子の黄金は、雄たけびとその巨体から放つ電撃だけで地面を破壊し、城を崩す。湿った土は沸騰して破裂する。電撃を浴びた木々は炎上して黒い煙を上げて倒れていく。

「くそ、逃がすなッ」

消費魔力が加速度的に上昇していく。

凄まじい「重さ」だ。

今まで召喚していた小さな黄金とは比較にならない消費魔力である。威力も存在感も桁外れだ。第四真祖の眷獣の力を見るのはこれが初めてではないが、自分で召喚するとその凄まじさを余すところなく実感できた。

急げ、と獅子の黄金に思う。

エレディアから預かった怨念の魔力が目に見えて減っている。いくら数百年分の

蓄積があるからといって、それは有限の魔力でしかない。巨大な外付けバッテリーであり、巨大な貯水槽とも言えるだろう。風単体で呼ぶことのできない強力な眷獣を召喚することも可能となる魔力量を貯蔵しているが、文字通り無限の魔力を食い荒らす第四真祖の眷獣からすれば、あまりに心もとない備蓄である。

エレディアの魔力が失われれば、次は風が負担する番だ。そうなれば、恐らくは一秒と獅子の黄金を維持できないだろう。

獅子の黄金は間違いなく風の切り札だが、だからこそ、これで勝負を決めなければ敗北が確定することになる。

そして、ディアドラも当然、それに気づいている。だからこそ逃げの一手を選んだのだ。戦って万一に賭ける必要もなく、風が自滅すればいいだけなのだから、危険を冒す必要性がない。

獅子の黄金の爪牙をディアドラは潜り抜けた。拠点を失ったがだからどうした。この森は彼女の領地であり庭も同然だ。東雲を手に入れて、思う存分に凌辱するという人生の最盛期を迎え、ディアドラはこの上ない喜びに満ちている。風という邪魔者を消した後で、再び東雲を回収すればいいのだ。今すぐに問題を解決する必要

もない。

「あなたが力尽きるまで、あと何秒かしら？ この隠し玉には驚いたけれど、ただの人間にその眷獣は操り切れない！」

どれだけ強力な兵器を持つとも、使えなければ脅威にはならない。

獅子の黄金そのものはディアドラを倒すだけの力はある。でも、風の制御下に置かれた獅子の黄金は、第四真祖やその血の従者が操る獅子の黄金に比べれば見劣りする。風の身体が獅子の黄金の魔力について行けず、手綱を握れていないからだ。

幾度も強力な敵と戦い乗り越えてきたディアドラにとって、力を発揮できない眷獣はどれほど強大でも脅威にはならない。

風が力を失った時こそ、ディアドラの反撃は成る。

眷獣をいつでも召喚できるように待機させつつ、ディアドラは追いつがる獅子の黄金をしり目に森へ飛び込んでいく。

ひとつたび姿を消してしまえば、こちらのものだ。魔力消費の激しい獅子の黄金を、どこにいるかも分からない敵のために暴れさせることはできない。風は勝機を逸したのだ。

「はッ——ッ」

ディアドラの勝利の確信に満ちた笑み。彼女はその笑みを浮かべたまま、体勢を崩した。遅れてどこからか火薬の爆ぜる音がする。銃声だった。ディアドラの膝があらぬ方向に曲がって、大量の血を流していた。

「な、にッ……!?」

バランスを崩して落下したディアドラは、足に穿たれた銃創のために立つことができなかった。身体の構造は人間も吸血鬼も変わらない。再生能力があったとしても、膝に大きな穴が開いている内は、体重を支えることは不可能だ。

ディアドラの逃走を妨げたのは、横合いから撃ち込まれたアカネの銃弾だった。貫通力に劣る9mm弾でも、無防備な吸血鬼を撃ち抜くことはできる。一発でも当たれば僥倖と、とにかく引き金を引き、ありつたけの銃弾をディアドラに向けてばら撒いた。

アカネ自身、ここが正念場だと承知していた。ディアドラを倒す唯一の機会は、今を置いて他にない。彼女も怪我をしている。ディアドラの脊獣から何とか逃れたものの、肋骨や大腿骨に重篤な怪我を負っている。それでも、強化能力で強引に身

体を動かしてディアドラに一矢報いたのであった。

「人間が、わたしに……ッ」

痛みがディアドラの思考を空白にする。

怒りでもなく嘆きでもなく、ただ理解ができないという表情であった。その一瞬の隙を獅子の黄金は逃がさない。

「追いついたぞ、ディアドラッ！」

「く……イパルネモアニ！」

ディアドラは足の再生と眷獣召喚のどちらを優先するか悩み、眷獣召喚を優先した。今となっては逃げきれない。自分の手札の中で最強の眷獣で戦うしかない。

現れたのは漆黒の闇を凝縮したようなジャガーだった。旧き世代の眷獣より強力な、さらに一段階上の眷獣。第二世代の吸血鬼と対立したときに、その存在ごと食らった超重力のジャガーだ。

存在するだけで周囲の時空を歪ませる闇の魔力が、獅子の黄金を包み込み、押さえつける。重力によって圧搾された大地が硬質化し、クレーター状に潰れていく。その中で獅子の黄金は四肢でしっかりと身体を支えて立っていた。

「く——あああああああああああああッ」

ディアドラがあらん限りの魔力を注いで重力を強化していく。だが、獅子の黄金は意に介さない。問答の余地もなく、慈悲もなく、ただ純然たる怒りを込めた咆哮で重力空間を焼き払った。

「あ——馬鹿、なッ、そこまでの力がッ」

ディアドラは動けない。

足の出血は止まらず、漆黒のジャガーは跡形もなく消し飛んだ。自身最強の眷獣が倒されたことで、そのフィードバックで魔力をこっそりと持って行かれた。

立てず、歩けず、眷獣を呼び出す時間もない。

強い者が勝つ。

眷獣同士の戦いは至極単純明快だ。基本法則に則るのなら、第四真祖の眷獣にディアドラが勝てるはずがない。

獅子の黄金は第四真祖が発生したその時から付き従う眷獣だ。

遙か太古に三人の真祖と天部によって作り出された最高傑作。たかが六百年足らずの時間で、どうして抗うことができるだろうか。

たとえばディアドラが、他の吸血鬼を食らって力を付けていようとも、その犠牲者の中に第二世代の吸血鬼がいようとも、関係がない。その尽くを獅子の黄金は食らい、破壊し、粉碎し尽くすのだから。

これこそが殺神兵器、世界最強の吸血鬼の眷獣の力である。

悲鳴を上げる間もなく、ディアドラは雷光の獅子に何一つ抗うことができないままに、その身を雷光に食い尽くされた。



混沌界域から遙かに離れた太平洋上の人工島群。暁の帝国の首都は、深夜に至るまでそこかしこにネオンの明かりが満ち溢れた不夜城だ。駅前の飲み屋街。週末に飲み歩くサラリーマンは、昨年比で2割増し。安定した好景気が、彼らの懐を温めているおかげだろう。

そんな浮かれた週末の夜、繁華街の地下五十メートルで繰り広げられる激しい銃撃戦は、秘密裏に行われたアルディギア解放戦線掃討作戦の最終局面を飾るものだ。

アルデイギア解放戦線によるテロから二か月が経とうとしており、彼らからの目に見える範囲での攻撃は皆無ではあったが、かといって残党を放置するわけにもいかない。

国内外で暗躍する過激派組織の根絶は急務である。その思想に共感した第二、第三のテロリストを輩出しないためにも、すばやく確実にこれを叩く必要がある。

そんな過激派組織をクリスマスに国内に引き入れたいわば裏切者とも言うべき者たちが立てこもる地下施設を攻魔官三十名が強襲したのは日付が変わる頃だった。慎重に進められた作戦は、一人の犠牲者を出すこともなく敵組織を叩くことに成功した。

チョコ祭への参加という建前で、娘たちを国外に一時的に避難させていた古城は、その報告を受けても落ち着かない表情を緩めはしなかった。

まず、第一に古城は監視されている。二十四時間体制で、妻の誰かが彼の不用意な行動を咎めるべく傍にいます。

東雲が誘拐された可能性があると聞いた時点で、あまりの過負荷に身体が物理的に壊れるので普通の人間では搭乗できない超音速機に乗り込もうとしたところを雪

業に確保されて以降、ずっとこうである。そもそも、娘たちの安全のために送り出したと言うのに、それが裏目に出ている上に駆け付けることができないのは忸怩たる思いがあった。

東雲は古城の愛娘の一人だ。眷獸制御のノウハウを学ばせるためとはいえ、単身で混沌界域に留学に出したこと自体古城にとっては苦渋の決断だったほどだ。まして、拉致されたと聞いた時には居ても立ってももらえなかった。

テロ発生から三日が経っても東雲と凧の居場所は杳として知れない。

凧沙からも凧を心配するメッセージがひっきりなしに届いている。

「古城、東雲と凧の居場所が分かったって」

飛び込んできた紗矢華の報告に思わず古城は立ち上がった。

「マジか、どこに？」

「混沌界域の南西部にある、熱帯雨林のど真ん中。報告にあったディアドラって吸血鬼の領地の中だけど」

紗矢華の携帯端末から送られてきた画像データは、東雲と凧の居場所を示した航空写真であったが、緑と岩、そして川しかなく小さな村すらない環境だ。

しかも、そこは首都から直線距離で三百キロは離れている。

「どうして、こんなところに」

「詳細の報告は来てないわ。けど、ディアドラが二人を拉致したのはほぼ確定でいいみたい。転移魔術を使った可能性が高いって話」

「拉致の目的は？」

「それもまだ、ね。次の画像なんだけど」

「これは……」

古城が息を呑んだ。

一枚目の拡大画像だ。表示されている時刻は混沌界域の時刻だ。暁の帝国の時刻に直すと二時間前の画像となる。

熱帯雨林の真ん中で黄金の獅子が暴れているのが見て取れた。周囲の木々が燃えて煙が上がっている。

「これのおかげで居場所が分かったの。どうも、広域に結界が張られてたみたいで、衛星写真にも今までは何も映らなかつたみたいだけ。これ、獅子の黄金レグルス・アウルムでしょ？」

┌

「凧か……アイツ」

古城の中の眷獸が凧を通して遙か異国の地で暴れている。眷獸のざわつきは感じていたが、その意図するところまでは読み取れなかった古城であったが、これで概ね理解した。

獅子の黄金が召喚されたということは、凧が自らの限界を超えて力を行使しているということだ。そうしなければならぬ敵がいるということであり、一刻の猶予も残されていないということでもある。仮に凧が敵を倒せたとしても、凧の身体に致命的な損傷が生じる可能性も高い。

凧は存在そのものがブラックボックスだ。獅子の黄金を凧が使えるということすら、古城は今把握したくらいだ。

「俺もすぐに現地入りする」

「ダメよ、何言ってるの。真祖が迂闊に外国に行けるわけないでしょ」

「ぐ……」

真祖は単独で一国の軍隊と同じ扱いを受ける。非公式で国外に出るなど以ての外だ。もっとも、他の三人の真祖もたびたび禁を犯しているように見える行動を取る

が、それは事前に側近が相手国に話を通して多い。突拍子もない行動を突然執る真祖の側近を勤める官僚は、真祖の行動を先読みする技術が求められる胃の痛い役割を担う。

翻って古城だが、彼は現代の人間出身ということもあってその辺りはきちんとして解している。だからこそ、止められれば不満をあらわにしつつ執務室で続報を待つだけの物分かりのよさはある。

ただしそれは、脱出すれば人に迷惑をかける上に眷獸を使わない限り脱出できない防護術式が重ね掛けされた執務室に軟禁されているような状況だからであって、自由にしていけば超音速機に飛び乗ってしまうということに変わりはない。

「現地にはわたしが行くわ。こういうのは慣れてるしね」

「そうか、ああ、まあ紗矢華が適任か」

紗矢華は呪術暗殺を得意とし、要人警護を十代から務めた手練れだ。海外での活動経験も豊富で、雪菜や浅葱のように国外には出せない切り札である彼女たちに代わり海外出張も多々こなしている。

呪術的な面でのサポートも紗矢華ならばできる。まさに古城が混沌界域に行った

ところで何ができるわけでもない。むしろ、紗矢華を派遣したほうがいいというのは合理的だ。

「すまんが、頼む」

古城が動けば内政干渉どころか、下手をすれば戦争になる。そうでなくとも軍隊と同様の扱いを受ける真祖だ。それが乗り込んでくれば、混沌界域側としても相応の対応を取らなければならなくなる。それは古城も望まない。

紗矢華もまた、古城の血の従者であるためにその強大な戦闘能力を身に宿している。一国の軍と同等の扱いといえるのであれば、紗矢華も同じではある。

しかし、国家元首が殴り込みに行くよりは幾分かはマシだ。

そして紗矢華の動きは政治的なパフォーマンスでもある。

夜の帝国は吸血鬼の力が強い国だ。強力な吸血鬼やその血の従者というのは、それだけで敬意を向けられる。暁の帝国のような新興国には歴史ある吸血鬼はいないので、やはり古城の血の従者が外交を担う上で重要な立ち位置を占めることになるのだ。

■

風は目を覚ました時、まばゆい太陽の光で思わず目を閉じてしまった。

自分が窓際のベッドに寝かされているのだと理解するまでに少し時間がかかった。

湿度百パーセントの熱帯雨林ではなく、洞窟の寝床でもなく、現代文明の技術を駆使したすばらしいベッドだ。

「風君、起きた？ 大丈夫？ わたしのこと、分かる？」

「え、あ……紗矢華さん？」

「大丈夫みたいね、よかった」

隣に座っていたのは紗矢華だった。紗葵の母親。暁の帝国にいるのではなかったか。ここは混沌界域で、東雲を拉致したディアドラをとの戦いで獅子の黄金を呼び出したところまでは覚えていた。

「う、く……ここは？」

「ここは混沌界域の国営病院。名前は、何だったかな……まあ、何でもいいか。普通の病気や怪我だけじゃなくて、呪いの治療ができる設備もあるところ」

「呪い」

それを聞いて、凧は左手を布団から出した。

真っ白だった腕は、すっかり血の気を取り戻していた。黒い蜘蛛の巣のような跡が薄っすらと指先から肘まで浮かんでいるのが、エレディアの名残だった。

「かなり強力な死霊だったみたいね。東雲とアカネから話は聞いたわ」

「御霊ですよ」

「分かってるわ。ただ、あなたが救出されたときには、もうその手にはほとんど残ってなかったみたい。獅子の黄金の魔力を肩代わりさせたんでしょ？」

「そういう約束でしたから」

「なら、彼らも本望だったでしょうね。約束通り、あなたはディアドラを倒したんだから」

「そうだ、あの後、結局どうなったんですか？ 俺は、何でここに？」

ディアドラを倒した手ごたえはあった。しかし、その後のことを覚えていない。紗矢華はディアドラを凧が倒したと言った。凧が無事に病院に搬送されているということは、そういうことなのだろう。

「そうね。あなた達がいた場所は、軍の監視衛星が確認したわ。獅子の黄金が派手に暴れてくれたおかげでね」

「ああ、そういうことですか」

「凶らずも凧が呼び出した眷獣は盛大なSOS信号になってくれていたらしい。」

「東雲とアカネも無事。心身のケアは必要だけど、命に別状はないわ」

「そうですか、よかったです」

東雲を助けるために戦ったのだ。東雲が無事であるということが何よりの成果と言えるだろう。

「ディアドラは？」

「遺体が回収されたと聞いてるわ。彼女の仲間も何人かいたようだけど、目ぼしい共犯者は今ほとんどん検挙されてるわ。後で新聞、持ってくるね」

ディアドラは単独犯ではなく、複数犯だったらしい。凧は突然、ディアドラに拉

致されたので、詳しいことはまったく分かっていない。

もつとも、あれだけの大きな事件を単独で起こすのは難しいだろう。どれくらい人間が関わっていたのか分からないが、相応の人員が関わっていたのではないだろうか。

「獅子の黄金の召喚に、上級死霊を使うってのは考えたわね」

「使えそうなものは何でも使わないと、とても戦える相手じゃなかったの」

「そう。でも、かなり無理をした。命あつての物種よ。この左手だって、呪われた事実には変わりが無い。その意味分かってる？」

「今後、しばらくは要注意ってことですか？」

「呪いは不幸を呼び寄せるものでしょ。いくら死霊と和解したからって、死霊みたいなマイナスの力を身に帯びてたら、ろくなことにならないのは当たり前。先人がどれだけ穢れを忌み嫌ってきたか知らないわけじゃないでしょ？」

「それは、もちろん」

「それに、ある程度穢れを落とさないと飛行機に乗せてもらえないし、病院の面会も認められないからね？ わたしみたいに資格のある人間は別だけど、呪いは感

染することもあるからね」

「そういえば、そうでしたね……」

呪いは感染すると言うのは有名な話で風がエレディアを相手に使った類感魔術と同じ理屈だ。無意識のうちに、その身に帯びる呪いを耐性のない誰かに感染させてしまうかもしれないので、強力な呪詛を受けた者はしばらくの間隔離される。これには国際基準があつて、一定化の数値に落とさなければ飛行機にも船にも乗せてもらえないのだ。

「ちなみにどれくらいかかりますか？　これ、抜けるまで」

「呪った本人が御霊になった挙句に消滅してるから、そう時間はかからないでしょうね。見たとこ、後、二、三日つてところかな」

「それくらい入院なら、大したことないですね」

「そうね。ただね、これ、御霊にしてなかったら今頃あなたは死霊の仲間入りしてたくらい危険な代物だからね。そこんとこ、ちゃんと頭に入れておきなさい」

「ありがとうございます」

エレディアが仲間を求めているのは分かっていた。ずっとエレディアは呼びかけ

ていた。様々な命に対して、孤独と苦痛を訴えていたのだ。凧はその受け皿になった。彼彼女を受け入れて、ともに戦う道を示したことで、お互いに救われたのである。

「じゃあ、わたしは行くわ。みんなに君のことを報告しないとイケないからね」

「よろしく言っておいてください」

「どうしようもなかったことだけど、みんなものすごく心配してるから、早く元気な姿を見せてあげるように。じゃあね」

「はー」

心配してくれているのはありがたい。

呪詛の所為で会えないのが残念だ。

紗矢華の背中を見送ってから、凧は深く息を吐いた。左手の冷たさが消え、血の巡りを感じる。エレディアは消滅し、ディアドラも倒れた。その仲間たちも次々に逮捕され、東雲も無事。今回の事件は、規模の大きさの割にその目的は矮小で、あまりにもあっけない幕切れであったのだろう。

呪詛が消えれば帰国の途に就く。長い空の旅になる。体力を取り戻さないといけ

ない。凧は枕に頭を預けて目を瞑った。

すでにずいぶんと眠っていたはずだが、睡魔はすぐに訪れた。ベッドに身体が張り付いたかのような感覚の中で凧は眠りについた。

---

凧の眷獣には正確な名前はありません。

古城の眷獣たちの魔力のごく一部が形を成したもので。

名前が分からないので凧はとりあえず「どういうわけか古城の眷獣に似た性質」というところから古城の眷獣に比べて小さいとか脆いとかのマイナス要素で名前を付けました。

タイニー等が英語なのも当時の凧は英語の辞書しか持ってなかったからです。

## 幕間

三月の半ばになり、一足早く暁の帝国には春の陽気がやってきた。中学三年生は卒業式を終えて、高校入学を控えた長い春休みに入っている。三月のこの時期に学校を丸々休むというのは、小学校に入学して以来初めてのことであり、卒業生たちは各々が自由に中学最期の想いでを作っている最中であった。そんな中で、凧は病室のベッドの上で暇を持て余している。窓の外から見える桜の花は、凧の目を楽しませてくれていたのだが、残念ながら早くも散りつつあり、淋しさを感じさせる。ソメイヨシノではない。花が咲くのに一定期間の寒さを必要とするソメイヨシノは、年間を通して気温の高い暁の帝国には不向きな品種だからだ。暁の帝国では、独自に品集改良された桜が二月の半ばに花を咲かせる。三月の半ばとなると、もう花の見ごろは過ぎているのだった。

「暇、すぎる……」

いい加減、病院も飽きてきた。

身体が弱かった幼少期は、病院での生活も慣れたものだったが、それも今は昔の

話である。外の娯楽に触れたが最後、何もない病院は余りにも無味乾燥として  
いる。混沌界域の病院を退院し、暁の帝国に帰国した凧であつたが、帰国したらした  
で検査入院が重なつて、この一か月、自宅で過ごした時間よりも病院で過ごした時  
間のほうが長くなつてゐる。幸いにして学校の卒業式には出席できたが、その三日  
後に再び検査入院である。

凧の身体を侵した呪詛の影響をきちんと診なければならぬというのは当然の理  
屈ではある。呪詛によつて悪影響を受けた組織が悪さをするかもしれない。呪詛そ  
のものは取り除けても、身体に影響を残してはいない保証はまつたくない。呪詛の影  
響は長い目で経過観察をしていかなければならぬものだ。

左手はまだひりひりする。

肘から先の握力は三分の二くらいまで下がつてしまつた。呪詛の影響もあるが、  
それ以上に一か月もの間包帯で固定され、筋肉を使う機会が減つたからでもある。  
右手に比べて若干細くなつた手は、指先が痺れるくらいで日常生活に影響があると  
いうほどでもないが、違和感は残り続けている。

主治医の祖母と紗矢華曰く、凧とエレディアの相性が良すぎたことが、治療が遅

れる原因であるとのこと。結果的にそれが奏功して、獅子の黄金を召喚する魔力の当てができたのだが、凧の身体にこびりついたエレディアの呪詛は、凧の左手に同化して完全に消えるまでに思いのほか時間がかかるのだとか。

「お邪魔します。ずいぶんと、暇そうですね」

病室を訪ねた空菜の第一声である。

空菜は大きな手提げ袋を持っている。

「暇も暇。何もすることがないんだからな」

ゲームもずっとやっていれば飽きるし、手元の本は読み尽くした。混沌界域での入院期間を含めれば、一か月にもなるのだ。途中、たびたび退院もあったとはいえ、自由の限られた病院生活は退屈との戦いになる。

「今日だっけ？」

と、凧は言った。

空菜の制服を見ての発言だ。

空菜が着ているのは、深い黒のブレザーだ。胸ポケットのところに金の刺繍が施されている。左右対称の錨の背後に桜の花を思わせる五枚の花弁が花開いているよ

うなデザインだ。本当は花ではなく太陽の光をイメージしているらしいが、どうみても花としか見えないそれは、凧と空菜が進学する予定の中央高校の校章である。一般に公立高校は紺色の学生服なのだが、中央高校は墨汁を染み込ませたかのような黒いブレザーとオーソドックスな学ランを採用している。彩はまったくないのだが、完全な無彩色の制服は、却って他の学生から浮いていて、目立つ。街を歩けば、中央高校の生徒だと一目で分かるくらいには認知されている制服だった。もともと、有名どころに比べれば地味で大人しめの制服ではある。彩海学園のように青と白というオリジナリティ溢れる色彩ではなく、制服目当てに受験する学生はそう多くはない。

この中央高校のブレザーを空菜が着ているのは、今日がオリエンテーションの日だったからだ。

合格発表日に採寸した制服が引き渡され、校舎内を見学し、希望者は部活動に参加させてもらえる。入学を控え、助走を始める日であった。

「凧さんの制服は先に家に置いてきました。病院では必要ないでしょう?」  
「ありがとうございます。それは?」

「春休み課題ですよ。入院中は暇でしょうから、これを進めるのもいいかと思って。教科書も一式持ってきました」

「いらん気を回すなよ……」

ずっしりとした手提げ袋の中に入っていたのは、高校で使う教科書とワーク、それにA4一枚の連絡プリントであった。

今日のオリエンテーションで、入学後を見据えた春休み課題が提示されたのだ。「暇なんですよね？ やることあったほうが、今のうちにやっておくと後が楽だと思いますけど」

「そりゃ、分かってるよ」

合理的に考えれば、暇である以上は勉強する時間を取ることでもできるということではある。しかし、だからといってやる気が起きるかというところではないのが人間の面倒くさいところである。暇だと言いつつ、何でもいいから手を付けるということではないのだ。興味関心を引かないものにまで、時間を費やしたいとはなかなか思えない。それが、いつかは手を付けなければならぬ学習課題であったとしても、だ。

「空菜は、部活とか委員会とか見てきたか？」

「見ましたよ」

「へえ、どこ？」

「陸上とバレーボール。後は、書道と美術部ですか。ふらっと立ち寄って、眺めただけです」

「どこかに入る？」

「検討中。まあ、運動部はないかなと。あまり、関心を惹かなかったので」

中学三年生の途中から入学した空菜は知識では学年一位も珍しくはない優秀さではあったが、部活や委員会といった学校の活動に参加することもなく、その経験もまったくなかった。空菜が入学した時点で、多くの部活動は三年生が引退していたし、委員会も同様だった。彼女は別段、そういった活動に関心を持っていたわけではなかったが、どうせ学生をするのなら何か参加してもいいのではないかと凧は常々思っていたところであった。

「凧さんは、何か始めますか？」

「俺は、攻魔師するから。やっぱり部活には入らないよ。中学卒業したら、事務所

でバイトするから」

かねてからの予定通り、中学を卒業してCカードを手に入れたら、凧は攻魔師としての活動を正式に始める。

とはいえ、高校生が一人でやっていける業界ではない。

万年人手不足の世界ではあるが、だからといって誰にでも仕事を回せるわけではないのだ。

凧はひとまず民間の攻魔師事務所でアルバイトをして経験値を積み上げる。知り合いに個人事務所を開いている攻魔師がいて、すでに五月からの入社を取り付けている。

「早く家に帰りてえ」

「別に、今回の入院は長引かないんですよ？」

「まあね。でも、ベッド固いしさ、寝にくいんだよね」

「仕方がないです。柔らかいベッドだと、いざというときに心臓マッサージできませんから」

「そんな理由だったのか」

空菜が見舞いに来てから十分ほど後に、病室のドアがノックされた。やって来たのは、麻夜であった。

「やっほ、元気？」

「麻夜、今日学校は？」

「今日、休みだよ。聞いてない？」

「聞いてない。なんで？」

麻夜は私服であった。春先の気候に合わせた薄手のカーディガンとジーンズである。体格にフィットする細身の服装なので、麻夜の引き締まった身体が強調されて、すらりとした活動的な印象を与えてくる。

大きなバスケットを床に置いて、麻夜は丸椅子に腰かけたのだった。

麻夜は凧と同じ年。同じ学年だが、彼女の通う彩海学園は中高一貫校である。三年生は受験なくそのまま高校に進学するのが大半だ。卒業式を終えたとしても、高校進学に向けた授業は継続するのが常である。

それが、なぜか今日は休みだという。

「今日は追試の日と高校入学者のオリエンテーションの日だよ。丸一日、テストが

あるから授業をやってる場合じゃないってわけ」

「ああ、そういう」

中学校には留年こそないが、成績が低い者には追試が課せられるのが彩海学園だ。私立というだけあって、保護者から求められる水準も高い。昔よりも設備が整い、偏差値も上がって暁の帝国でも有数の進学校になっている。

新しい風を求める校風から、高校からの入学者も受け入れることになっている。今日は、外部入学者に対するオリエンテーションと事前テストの日だった。

「せっかくの休みなのに、わざわざここに来るなんて、暇なのか？」

「そりゃ、暇だよ。今日は部活も休みなんだし、遊ぶ約束もドタキャンだったからね。暇つぶしに来たんだよ」

「暇つぶしには、ならんぞ。なんせ、俺が暇してたくらいだ」

空菜が来るまでは、本当に何もすることがなかった。空菜が来てからも、彼女が持ってきたのは勉強道具だけだった。

「凧君が迷惑だって言うのなら、帰るけど。リング、持ってきたんだけどな」

「迷惑はしないし、リングも食うぞ」

麻夜が持ってきたバスケットには、すでにカットされたリンゴが入っていたのだ。「切ってあってごめんね。こういう時は、目の前で皮を剥くのが理想かもしれないけど、ここ、持ち込み規制かかってるからね」

「別にそんな理想とかないから。面倒は少ないほうがいいだろ」

「言うと思った」

麻夜は苦笑して、つまようじを刺したリンゴを尻に渡した。

「どう？」

「うまい。酸味強めか」

「そういう品種みたいだね。うちのバイオプラントも馬鹿にできなくなってきたからね」

「天然物が美味いかって言ったら別にそういうわけでもないからな」

麻夜が持ってきたリングゴは絶妙な酸味と甘さの組み合わせだ。暁の帝国の農場は多くがバイオプラントだ。農作物も工業製品の一つになっていて、土から栽培した物は輸入に頼っている。やはり、世の中の人々はバイオプラントで生産されたものよりも、輸入した「天然物」をブランド物としてもてはやす傾向がある。しかしな

がら、天候の変化に左右されず、二十四時間管理が行き届いたバイオプラント産の農作物は品質に大きな差異がなく、安定して市場に供給できる庶民の味方だ。ただでさえ輸入コストが上乘せされる天然物に比べれば、工場での大量生産品の方が安価で美味しく食べられる。

結局、安いものが好まれるし、食料自給率は島国である暁の帝国では戦略的な意味合いも強く、バイオプラントの拡大と安定化は国策だった。今となっては、輸入品は本当に高い本物のブランド品が中心になりつつあり、中途半端な輸入品は姿を消しつつあるのが近年の傾向だった。

「空菜もどうか？」

「いいんですか？」

「凧君だけ食べるのも、気が引けるでしょ、ね？」

凧はリンゴを齧りながら頷いた。

「それでは、いただきます」

麻夜から受け取ったリンゴを齧って、空菜はいい音を立ててリンゴを咀嚼していく。

「左手の調子はどう？」

と、麻夜が尋ねた。

「まあまあ。ちょっとひりつくくらいで何ともない」

「そう、それはよかった。回復してるようだね」

「もともとそこまで酷いもんじゃなかったし」

「何言ってるのさ。色が真っ白だったって言うじゃないか。それも特級の呪いなんだから、それ以上に酷いってなかなかないよ、現代じゃ」

「そりゃ、そうだけだな」

呪詛がないわけではないが、その絶対性は失われて久しい。魔族や魔獣への対処が、魔術や霊能力、超能力しかなかった時代もあったが、今は違う。科学技術の発展は大きく魔術の立場を変えた。魔術のようなごく一部の才能のある人間の努力と忍耐に頼らなければならぬ時代ではなく、武器を持ってば誰でもそれなりの兵士になれる時代だし、そもそも武器を人間が持たずともある程度の戦争はできるまでになっている。

当然、魔術も用途を変えている。それは衰退ではなく適応である。科学の発展は

同時に魔術の新しい可能性を導いた。

発展の中で失われるものもある。

強烈で悪辣な古い呪詛は姿を消し、最近では話を聞くこともなくなったと言う。まして、数百年物の死霊等、現代ではまず見かけることはない。凧が生きて戻れたのは、奇跡といっても過言ではないのだ。

「ま、すぐに退院できるわけだし、別に今する話題じゃないか」

麻夜はリングを一つ取って齧る。

麻夜が持ってきたリングは三人で分け合っているうちにあっという間になくなってしまった。

「ああ、そうだ、凧君。聞いた？ 東雲姉さんのこと」

「聞いてない。何の話だ？」

「今度から、こっちに帰ってくるってさ。やっぱり、あれだけのことがあると向こうに置いておけないってことになったらしい。混沌界域の治安も、回復したとは言えないしね」

救出された東雲は、凧と同じく混沌界域の病院に搬送された。

東雲は身体に傷こそ残っていないものの、精神的に不安定になっている。

東雲の問題は身体よりも心のほうで、こればかりは吸血鬼だからといって簡単に癒えるものではない。肉体的に頑強な吸血鬼でも、精神的構造は人間と大差ないのだ。

拉致された東雲について、凧は多くを知らない。

ディアドラに弄ばれ、多くの苦痛を味わったということしか知らない。彼女のために戦った凧ではあるが、具体的などころまでは覚知していない。拉致され、言葉にできないような非道な扱いを受けたということだけは分かっているが、その詳細については誰も聞くことができないし、聞くべきではないのだ。

ディアドラの起こした事件は世界的にも大々的に報じられたが、暁の帝国と混沌領域の外交関係に亀裂を生じさせるための破壊工作であると報じられている。実際、捜査の中でそういった敵対国との繋がりも見つかっているらしい。どこまでが真実かは分からないし、ディアドラの本心は東雲とディセンバーへの歪んだ愛情なのは間違いない。

敵対国との繋がりがあつたとしても、それは東雲を手に入れるための手段に過ぎ

ないのだろう。

世の中に出回る情報とは正反対だ。外交問題のために東雲を拉致したのではなく、真実はその逆なのだということが、世に出回ることはないだろう。

長らく国の警備部門の長であったディアドラが大きな罪を犯して死亡したことは、混沌界域の表と裏に大きな影響を与えている。

ディアドラが影で犯罪組織と癒着し、多くの便宜を図っていたことも明らかとなり、警備部にも捜索の手が及んでいる。ディアドラの部下にも、逮捕者が出ていて、この騒ぎは終息のめどが立たないほどの大ごとになっていった。

「帰ってくるのはいつになるんだ？ 学校は？」

「今月中には帰ってくるみたい。急な話だから、向こうの友達とも離れなくちゃいけないし、アカネさんのこととかもあるから、確定ってわけじゃないらしいけど。学校は、多分、彩海に編入じゃない？」

なるほど、確かに彩海学園は、この国の中で最も安全な学園と言えるだろう。最新鋭の防犯設備に一流の攻魔教師を配置した要塞の体を成している。

公費が投入されているわけでもない私立学園でそこまでできるのは、皇族を受け

入れるという覚悟の表れであると同時に、安心安全を売りにした事業拡大にも繋がった。これがあるので、その後も皇族や上流階級の子女は彩海学園への入学を目指して中学受験をする風潮が生まれたのである。

「リングもなくなったし、そろそろ帰るよ」

と、麻夜は言った。

「なら、わたしもこれで。ああ、洗濯物だけ持って帰りますから、出してください」  
続けて空菜が言う。

凧は空菜に洗濯物の入った袋を渡した。病院の洗濯機を借りると金がかかる。微々たるものではあるが、節約の心を忘れないように空菜に頼んで洗濯物は引き取ってもらっているのだった。

「それでは、課題、頑張ってください」

「まあ、それなりに」

空菜の余計な後押しに凧は苦々しそうに返答する。麻夜は愉快そうに笑った。

「じゃあね、凧君」

ひらひらと、麻夜が手を振る。

暇と引き換えにやって来た春休みの課題に凧は嘆息する。

適当にパラパラと数学の教科書をめくってみると、一応は中学校で学んだことの延長線上にあるのだと分かる。面倒くさいし、適当にやって終わらせておきたいが、その適当のために時間を割く気にもならない。

固いベッドの上で何となしに教科書を眺めているとスマホが鳴った。メッセージアプリに表示されたのは麻夜の名前だった。

『退院したら献血してね』

と、書いてある。

なるほど、麻夜が凧を訪ねたのはこの相談のためだったのか。

献血とはつまるところ凧から吸血するということである。吸血者が被吸血者に使う隠語である。

吸血をされるのは、珍しいことではない。空菜にはほぼ毎日血を提供しているし、零菜にも一時期は頻繁に吸血させていた。血をいくら吸われたところで困ることとは特にないので、凧は求められれば、応じられる範囲で応じてきた。

麻夜から頼まれることは、今までになかったことなので新鮮ではある。冗談めか

して言うことは何度かあったが、麻夜が凧から吸血したのは本当に本当に危うい出来事に巻き込まれて対処が必要になったときだけだった。

いちいち悩むこともなく、いつも通りに凧は了承する。凧にとって血を吸われることはそれほど重要な話ではないからだ。

## 幕間

検査の結果は問題なし。ただし、経過観察は必要という主治医の意見付きだった。結局、凧の身体については分からないことが多く、はっきりと今後の見通しを立てることができないままだ。人間の身体としては問題はなくとも、霊的な部分で何かしらの障害を抱えている可能性は否定できない。それは目で見えないし、理屈で分かるものでもないので手の打ちようがなく、確認の術もない。とどのつまりは先のことは分からないというのが結論であって、それは他の普通に生きている人たちと何ら変わりのないことであつた。

検査の結果、すぐに治療をしなければならないものは見つからなかったというのが最大の成果だろう。第四真祖の眷獣を完全な形で召喚した影響は、今のところ現れていないし、呪詛を受けた左手は順調に回復している。日常生活への悪影響はほぼない。若干の痺れがあるくらいだ。

恐らくはこれまでの人生の中で最も濃密だった年度が終わりを告げようとしていた。

暁の帝国としても重大事案が多数発生した一年で、凧はその多くに巻き込まれている。自ら望んで鉄火場に飛び込んだわけではないが、トラブルが向こうからやってくるのだからどうにもならない。もとより、運がいい方ではないと思っているが、それでも巻き込まれた事件の大きさが大ききだけに無事に生き抜いてこれたのは幸運だったと言えるのだろうか――。

凧の退院を翌日に控えたその日、暁家はバタバタと人が出入りする喧噪の中にあつた。

大きな段ボール箱が次々と五十一階の空き部屋に運び込まれているのだ。

高度なセキュリティに守られたタワーマンションの五十一階には、引越し業者であつても簡単に出入りはできない。荷物の搬入出作業ですら事前の打ち合わせが必要で、その上で認められた数人だけが実際に作業に当たることになるのである。大がかりな作業は必要ない。

生活必需品は揃っているの、それが使えるかどうかの確認と最新機器への更新が必要なものだけを選択して入れ替えるのみだ。この日、外から持ち込まれたのは冷蔵庫とテレビ、本棚だけで力自慢の獣人によるスピーディな搬入作業で午前う

ちには部屋の中は物置状態から生活空間に整えられた。

「おー、いいじゃん。テレビ、ピカピカだし羨ましいなあ」

と、感嘆の声を上げたのは零菜だった。

東雲が混沌界域から帰ってくるようになって、そのための生活空間を確保するための引越した。大きな荷物は業者が搬入するとしても、小物類は最終的には東雲が開封して整理しなければならぬ。そのため、家族で東雲の引越を手伝っているのである。

とはいえ、今日は平日の昼間である。

大人たちは仕事で外に出ている。

春休みの中学三年生二人と萌葱の三人が、手を貸すことのできる最低限の人員であった。

物置として使っていた部屋だが、それはあくまでも一部だけだ。ここは、もともと五年ほど前までは東雲が起居していた部屋である。東雲が帰省した日には、寝泊まりできるようにしていたし、その程度の荷物しか置いていなかったのである。

「引越してめんどうくさいな、ホントに。これ、どうしよっかな」

開けた段ボール箱の中から地球儀を取り出して東雲は首を傾げた。

「なんでそんなの持ってきたの？」

段ボール箱を覗き込んだ萌葱が尋ねた。

「いや、なんとなく」

「余計なものを持ってこなくてよかったじゃないの」

「そうかもしれないけどさ。何が余計かって、実のところよく分かんないなって。

ほら、生活するだけなら、寝床と冷蔵庫があればいいわけだし？」

「だからって地球儀はいらんでしょ。いるならこっちで買ったっていいわけだし。

あ、ほら、これも……ナニコレ？」

「それは、お守り」

「趣味悪くない？」

「旅行した時のお土産だから。現地の魔除けだって」

金の鎖のペンダントだった。円形に形を整えた黒曜石に恐ろしい、それでいて剽

軽な怪物の顔が正面を向いて描いてある。

「ゴルゴネイオンの仲間かなって。まあ、免税店で買ったヤツだから、ご利益はな

いんだけどね。なんか旅行とかするときに、変なお土産買っちゃわない？」

「後から何でこんなんに金払ったんだろうって思うヤツね。分かる」

お土産屋を巡った時の何とも言えない高揚感を経験した者でなければ分からないだろう。とりあえず何か買っておかないともったいないという焦燥感だったり、物珍しさに突き動かされて財布のひもが緩くなる。家に帰ってから後悔するが、旅の思い出の一つなので軽々しく捨てるのも気が引ける。しかし、だからといって普段から見て眺めることもしないので、机の引き出しの奥に眠ってしまふのである。また、それが忘れた頃に出てくると懐かしくなつて捨てるに捨てられない悪循環を生み出す。東雲が混沌界域から持ってきたペンダントもその手の物だった。

「ま、とりあえず捨てないんなら机に仕舞うしかないでしょ」

「だよね。……いや、いや。もういっそ捨てよ」

うん、と一人で頷いてゴルゴネイオンをゴミ箱に投げ込む東雲。結局捨てるのかと萌葱は嘆息した。昔の意味不明なお土産の扱いは冷静になつてみるとこんなものである。

「東雲姉さん、この本ってどこに置く？ リビング？ 寝室？」

「それ、リビングの本棚に適当に並べといて」

「了解」

麻夜の声に東雲が答えた。

東雲の持ち物の多くは小物と漫画本だ。暁の帝国では電子化が主流になりつつある出版業界だが、混沌界域は旧来からの紙ベースの本がまだまだ主流である。電子化もしているが、広まっていない。よって、混沌界域で育ってきた東雲も基本的には紙の本に目を通してきた。

「本って嵩張るよね。この機に電子化したら？　そういうサービスあったと思うよ」

と、麻夜は言う。

紙の本を電子化するサービスを提供する業者も存在している。

このサービスは意外にも需要があつて、紙を電子化することで場所を取らずに情報を保存できるうえに、半永久的に管理できるということで歴史資料等にも利用されている技術だ。

「紙ってのがいいのに。分かってないな、君たち」

「紙のよさが分からないってわけじゃないけどさ、これを見てるとちょっとね」

東雲が持ち込んだ漫画本はざっと二百冊はくだらない。大きめの本棚を用意していたが、あつという間に埋まっっていく。

段ボールを運ぶだけでも重労働なのに、そこから本棚に本を移し替えるのも大変な作業だった。

「どうせ何年も読んでないのもあるでしょ、これだけあれば」

「まあ、それはそれ」

東雲は手を止めて、新品も同然にピカピカのキッチンに向かった。

小一時間ほど前に設置された家庭用の冷蔵庫を開いて、中からペットボトルのお茶を取り出す。

「ねえ、ちょっと休憩にしない？」

と、三人に東雲は声をかける。

「今日は緑茶しかないけど」

東雲はグラスに四人分の緑茶を注いでテーブルに並べた。

「みんな、ごめんね。休みだったのに、わざわざ手伝ってもらっちゃって」

「いいよ、そんな改まってお礼なんて」

「そうそう。どうせ、することなんて大してないんだしね」

零菜と麻夜が席に着きながら答える。

「することがないってのも、いいんだか悪いんだか。青春らしさが無いわよね」

「僕は一応バスケしてるから青春してるっちゃしてるよ。今日も午後に練習あるし」

「今日あるの？」

「あるよ。高等部との合同練習が五時まで」

「お疲れー。この暑い中でやるよ。あたしは無理だわ」

萌葱が心底嫌そうに言う。

母と違って運動が得意ではない萌葱は、体育会系のノリにはついて行けない。身体を動かすことにも、特に達成感を感じないし、楽しいとも思えないのだ。何よりも汗をかくし臭う。これは運動嫌いでおしゃれ優先の女子は大抵理由に挙げるだろう。

「そういうえば、東雲ちゃん。アカネさんって、これからどうするの？」

と、零菜は思い出したように言った。

東雲の世話をなるべく、メイドとして雇われていたアカネだが、東雲が暁の帝国に帰国するにあたってその去就が注目されていた。

「一緒にこっちに来ないかって誘ったけど、断られちゃった」

「え、そうなの？」

「うん。これを機に、貯めたお金で大学行っちゃってさ。前々から考えてたらしいよ。わたしが、いつまでも混沌界域にいるわけじゃないってのは分かってたからね」

「ああ、そうなんだ」

「連絡は取れるし、別に寂しくもないけど」

アカネは孤児だ。

頼れる親戚はいない。

アカネにとっても、東雲から離れて独自の道を行くのは大きなチャレンジになる。急な話ではあったが、だからこそこの機会を逃しはしないと決心したのだろう。

「アヴローラさんは、どうしてるの？　なんか、こっちに来るって話になっ  
てなかった？」

「ああ、お母さんは、来月かな。来るの。混沌界域（向こ）にも来てくれたけど、仕事を落

ち着けたら、ここに来る方向にはなってるって」

アヴローラは先代の第四真祖であり、東雲の母親だ。かなり特殊な立場にある女性で、国外での活動を主に行っているために、東雲と顔を合わせる機会もここ数年は少なかった。

彼女は第四真祖がかつて刻んだ戦いの爪痕の調査に長年携わっている。アヴローラ以前の第四真祖の主人格は凧の力の源泉でもある原初<sup>ルイット</sup>だ。原初は周囲の人々から固有堆積時間を奪うことで自らの力を底上げし、最強の吸血鬼として振る舞っていた。

固有堆積時間の喪失は記憶や記録の喪失に繋がる。

古代から活動の度に固有堆積時間を奪い続けたことで、第四真祖の正体は歴史書から失われ、伝説の存在となっていたのだ。

第四真祖によって失われた歴史は、第四真祖の破壊の歴史だ。

アヴローラは牙城と共同でこれを解き明かし、再確認することで自らの歴史を見つめ直す活動をしている。

「凧が帰ってくるのは、明日か。なんか、そう考えると家族みんなが揃うのは久し

ぶりだね」

「そうかな？　そうか、確かに、一緒に住むってなると五年ぶりなのか。東雲が出てってからだからね」

萌葱が昔を思い返しながら同意する。

東雲が家を出て、それから夙も一人暮らしを始めた。

昔はこのマンションで一緒に暮らしていたのに、それぞれの事情で離れ離れになってしまった。それが、今になって元の形に戻りつつある。

それは家族として喜ぶべきことだろう。

「テレビ、つけよ。リモコンは？」

「はい、これ」

「ありがとう」

零菜は麻夜からリモコンを受け取って、テレビの電源ボタンを押した。

平日の正午前だ。

数十年前のドラマの再放送か、あるいは情報番組くらいしか放送されていない。

「日本はちょうど桜の時期か」

零菜は羨ましそうに呟く。

西日本は徐々に桜が咲き始めた頃である。まだ満開には早いですが、九州のほうが綺麗な桜が咲き始めている。

暁の帝国の桜の時期は、もう終わりつつあった。

「ソメイヨシノってヤツが、ずらっと並んでるの一回ちゃんと見て見たくない？」と、零菜が言う。

「あれ、暁の帝国にはないヤツだっけ？」

「ないよ。ソメイヨシノは相性悪いらしい」

「そうなんだ、知らなかった、なんで？」

「寒い冬がないと花が綺麗に咲かないらしい」

「へえー」

麻夜は頬杖をついてテレビを眺める。

暁の帝国にも桜の名所はあるが、日本の有名どころと比較すればずいぶん小さい。最近のホットな話題は桜前線の北上だ。混沌界域のテロ事件は、事件から一か月

経ち、犯人グループがほぼ壊滅して終息したこともあって暁の帝国での取り扱いはずいぶんと小さくなった。続報が入らない限りは改めて報道されることもないだろう。

有名人の熱愛発覚とかコンビニ強盗のほうが大きく取り扱われるくらいには、世間の興味は移り変わっていた。

東雲にとってはありがたいことではある。

あの事件とはもう金輪際関わりたくない。事件についての報道も目に入れたくないし、耳にも入れたくない。

身体に傷は残っていないが、ディアドラに弄られた感覚を忘れたわけではない。肉体的には元通りだ。一見すれば酷い目にあっただとは思えないくらいに綺麗な身体になっている。だが、過去が消えるわけではないし、記憶を失うわけでもない。心に刻まれた痛みは今も東雲の奥深くを責め苛んでいる。混沌界域から暁の帝国に戻ってきたのも、東雲を家族の下に連れ帰ると同時に事件現場から遠ざけるためでもあったのだ。

「テレビつまんね」

「ストリートだね」

「ネタがないんかな。こう、どうでもいいような話を何十分もしなくていいよね。政治とか環境の問題とかなら分かるけど、芸能人のスキャンダルとかそこまで力入れなくてよくない？ これなんて、その辺にいる一般の変な人の話題だよ？ もう十分近くこのネタなんだけど」

「生活に必要な情報ではあるね。ただ、受けはいいんでしょ。視聴率取れるネタじゃないとね。スポンサー厳しいからね。今はもうネットもあるし」

萌葱はテレビには目もくれない。手元の携帯端末を弄っている。情報取得という点ではネットから情報を吸い上げるほうがいいというのが萌葱の判断だ。萌葱はインターネット上のあらゆる情報をかき集めることができる眷獣を持つ。真偽不明の情報が入り乱れるネット上で萌葱の解析能力は大きなアドバンテージになる。

「お、このドラマ見たことあるよ。懐かしいな」

チャンネルを変えているとドラマの再放送に行きついた。

姉妹が小学生の頃に放送していた人気ドラマだ。今見返すと、メイクや髪型が時代を感じさせる。

「あ、ここ覚えてる。見てた見てた、犬養の濡れ場」

「濡れ場とか言うなって」

麻夜の明け透けな言い回しに萌葱が指摘する。

犬養はドラマのヒロインだ。

吸血鬼の主人公と人間のヒロインのオフイスラブを描いたドラマである。鈍感な主人公と素直になれない強気なヒロインという数十年前から使い続けられたありふれた関係性が「結局最後はくっつくんだろ」という安心感を最初から漂わせつつ、若干の山を設けて綺麗に十話で完結させたのでとても見やすいドラマだった。

今では薄味に思えるが小学生だった当時の零菜たちにとっては、ちょっとしたラブシーンが刺激的だったのを覚えている。

そして、まさに今テレビで再放送されているシーンは主人公とヒロインが結ばれた直後の吸血シーンであった。

「あー、懐かしい、これ。なんか、話題になったよね。この夜景をバックにした吸血」

「今見ると何てことないなって思うけどね。うーん、まあ血を吸うなら、こういう

のもやっぱアリ？」

主人公の自宅マンション。煌びやかな夜景からの吸血、そしてベッドシーンへの流れは当時大きな反響を呼んだらしい。それまでのじれったい関係性があったので、このシーンのクライマックス感は大きかった。

「今でも吸血シーンって言ったらこれだよ。よく特番で特集されてるみたいじゃん」

東雲が暁の帝国に帰省するのは、季節の節目節目である。时期的にテレビは特番を組むことが多く、東雲は暁の帝国に帰ってくると決まって何かしらの特番を目にしていた。

ドラマのラブシーンの人気投票では、この吸血シーンが上位に入っていることは珍しくない。

「この二、三話前くらいから血を吸ってもいい雰囲気だったよね」

と、麻夜は言う。

「この二人は付き合うまでそういうの全然なかったからね。だからこそ、ここでやっと血を吸ったかってなるので、それまでにちょこちょこ血を吸ってたら台無し」

と、萌葱が麻夜に重ねる。

「確かさ、この前の回で物置に閉じ込められるシーンがあったよね。そこで血を吸ってもよかったんじゃないかと思ったりもする。僕ならそうするかも」

「その時点では付き合っていないからね」

「付き合っていないけど、あの時点でイイ感じだったし。そこはもうガツといっていんじゃないかと」

「そこは行ったらダメなんだよ。我慢して我慢して結ばれてからの吸血ってのが、ストーリーを盛り上げるんだから」

麻夜と萌葱では見解の相違があるらしい。二人が議論している間にドラマはエンドロールに入っている。次回が最終回で、四月からは別のドラマの再放送になるよ  
うだ。

「機会が大事ってのは分かるな。やっぱ、血を吸うんなら、こう自然なタイミン  
グって大事じゃない？ せっかく吸血するんなら、分かり合ってるって感じ  
でし  
たいじゃん」

「東雲いいこと言う。そうだよな。せっかくの吸血だもんね」

萌葱が東雲の言に同意して頷く。

「零菜も麻夜も吸血経験者だし、その辺は一家言あるのかもしれないけど。吸血鬼なんだから、吸血シチュにはもうちょっと拘っていいんじゃないかと。ねえ、東雲」  
「うん、ドキドキ感があるといいよね。まあ、夜景をバックに吸血なんて、うちらの中じゃ空菜ちゃんくらいしかしてないんじゃない？」

「空菜は毎日してるから」

零菜が複雑そうな表情で言う。

空菜は体質的に吸血が必須だ。凧と一緒に暮らし、凧から毎日血を吸っているのだから、「夜景をバック」に吸血するのは日常茶飯事だろう。ここは地上五十一階。暁の帝国の中心地だ。

「萌葱姉さんが言うほど、僕は経験豊富じゃないよ。必要に迫られて血を吸ったのは何回かあるけど、プライベートではしてないし」

「わたしはプライベート経験者です」

「何それ、初耳。東雲姉さんいつしたの？」

「みんなが混沌領域に来る前。ほら、時間はあったから」

東雲のカミングアウトに麻夜は驚いたようだった。

凧から血を吸ったことを東雲はまだ報告していなかったのだ。それどころではなかったし、混沌界域での一連の事件に触れるのをずっと避けていたからだった。

あっさりとは東雲がカミングアウトしたのは、話の流れもあるが、直接テロの件と関わりのない内容だからだ。

「……………東雲の吸血って上書きしたって奴じゃなくて?」

萌葱は「???」と頭にクエスチョンマークを浮かべ、東雲に確認する。

「え、うん。凧君から血を貰ったよ。ちょっとだけね。一口だけだよ」

「え、あ……………へ……………そ、そう。どんなだった?」

「え、感想? え、それは……………なんか恥ずかしいな」

頬を朱に染めて視線を彷徨わせる東雲。

まるでファーストキスの経験を問われたかのように初々しい反応だ。萌葱の声音がいつもよりも平坦なことには気づいていない。

「東雲ちゃん、凧君から吸ったんだ」

「まあ、ね。ほら、わたしだって吸血鬼だし、あの時はそういう雰囲気だったし、

自然にね、なるようになったのよ」

と、零菜の確認に対して東雲は嘯いた。

嘘である。

東雲は決して自然に吸血するような雰囲気を持ち込めたわけではない。むしろ、自然に任せていれば今でも血の味を知らないままだっただろう。彼女が吸血を経験できたのは、偏に意地もプライドもかなぐり捨てた全力の土下座外交の成果である。

吸血は一般的に吸血鬼側が主導権を握っていると思われがちだが、現代において一方的な吸血は犯罪だ。両者合意の上で吸血するのが基本なので、立場はフラットだ。

だが、稀に風のように複数の吸血鬼から血を求められる者がいる。その場合、どの吸血鬼に血を吸わせるかの選択は血を吸われる側にある。吸血鬼は一転して選ばれる側になり、血を吸わせてもらおうという立ち位置になる。

それでも、吸血はした。東雲からすれば、吸血できるのなら風を頭を下げるくらいどうということはない。むしろ、性格的に風の上には立てないので、それでいいというくらいである。後悔はまったくしていない。過程はどうあれ、東雲は胸を

張って吸血経験者だと言えるのだから。

「ぶっちゃけ、A10神経ぶっ飛んだぞ」

「それ、日常生活に戻れないんじゃない？」

東雲の冗談めかした言葉に麻夜は苦笑する。

吸血が快の感情を呼び起こすのは周知のとおりだ。麻夜も東雲と同じ血を啜っているのだから、東雲のジョークは盛り過ぎにしても、近しい感覚を知っている。

吸血は、嵌る人はとことん嵌る。種としての本能が、それを求める。

妹たちの会話ので笑えない姉が一人。

(嘘、経験ないのあたしだけ……?)

妹たちの会話がどこか遠くに聞こえる。

なんだかんだで東雲は仲間だと思っていたのに、蓋を開けてみたらいつの間にか大人になっていたのだ。

凧と過ごす時間は限られていたはずの東雲が、凧から血を吸っていたという事実は萌萌葱にとって衝撃的過ぎた。

(一緒に住んでる妹たちはみんな吸血経験あり? あたし、一番年上なのにみんな)

なの話について行けてない？ え、え、え……？)

もはやシヨックが大きすぎて言葉が認識できない。

吸血鬼として一番重要な部分で明らかに出遅れている。周回遅れにされているよ  
うな気分だ。

零菜と麻夜と東雲で吸血談義を始めている。それを隣で聞きながら、萌葱は愛想  
笑いで相槌を打つばかりで、ひたすら気分が沈んでいくのだった。

---

凧「萌葱姉さんがぬとねの区別がつかないような顔している」

## 幕間

空菜の教えを受けながらなんとか春休み課題を終えたのが昨日のことだ。大量はないが、予習の範囲も入っていたので簡単とはいかなかったし、どうも課題テストがあるらしい。ということ、適当にしていると後で涙することになるのは明々白白であり、凧も嫌々ながら気合を入れて教科書に向き合うことにしたのである。

凧は真面目な生徒というわけではなかったし、勉強が得意というわけでもない。学校に遅刻はするし、身体中に傷があることもあって、あまり交友関係を広げてこなかった。特定に少数の友人と他愛もない会話をするというだけの学校生活は、退屈ではあったが嫌いではなかった。

その生活もすでに終わってしまった。来月からはまったく新しい環境での生活がスタートする。

進学先はそこそこの進学校だ。今までのような義務教育ではないし、遅刻はご法度になる。生活習慣から見直さなくてはならないのが、今から憂鬱だ。

課題を終えて、昼食も終えた。時刻は午後の一時前である。テレビを見ても、特筆するような面白味のある番組はない。

「それでは、凧さん。行ってきます」

部屋からやって来た空菜が言う。

中学校のブレザーを着ているが登校するというわけではない。なんでも、クラス会をするらしい。

「行ってらっしゃい」

「はい」

「七時には帰って来いよ」

「はい」

「変なのについて行くなよ」

「もちろんです」

中学生最後の思い出にと、空菜のクラスでカラオケに行ったりファミレスに行ったりするらしい。凧のクラスにはそういった動きはない。すでに寮生活に突入した者もいたり、日本に留学したりと各自の都合が合わなかったからだ。凧に至っては

入退院を繰り返す始末である。

空菜が出て行くといよいよ一人になる。

クリスマスの事件以降、暮らすようになったマンションは、凧が小学生のころまで住んでいたところではあるが、それでも一人で暮らすには広すぎる。キッチンとトイレと風呂、そして自分の荷物が置ける部屋があれば十分な凧にとって、この家は大きい。使わない部屋もあるくらいである。

広い家というのは、いいことばかりではないのだと改めて知った。何せ管理が大変だ。掃除する場所がその分だけ増えるのである。

「う……」

立ち上がるとくらりとする。少し貧血気味だった。今朝に空菜に血を吸わせた後で、いざというときのためにと輸血パック用の血を抜いた。昏月家の冷凍庫には凧の冷凍保存された凧の血が何パックも入っている。

凧が行方不明になっていた数日間、空菜が飢えを凌げたのはこのためだ。旅行にも十日分は持って行っているのだ。

とりあえず、エナジードリンクで栄養補給を行う。

吸血鬼化の進行のせいか、血液の生成速度が上昇している。今まで以上に血を抜かれても大丈夫な身体になっているのはいいことではあるのだが。

今のところ、空菜は一日一回から二回の吸血を必要とする。その他にも血を吸わせてほしいと言ってくる者もいる。

輸血パックがあるとと言うと、「空菜には直接吸わせて僕にはダメなんだ。ふーん」とか拗ねたように言い出す。もちろん、本気で拗ねているわけではないが、そう言われると凧は断れない。直接吸血されて困ることがあるわけでもないからだ。断る理由がなければ、断れない。結果、時に血が足りなくなる。血液が回復するまでの、ほんのひと時だけ、貧血になってしまうことが時々ある。

することがないので、昼寝でもしようかと思ったときにインターホンが鳴った。玄関扉に備え付けているインターホンだ。これを押せるのは家族の誰かだけなので、凧は特に警戒もせずにはドアを開けた。

「あ、こんちわ」

ドアの前に立っていたのは零菜だった。

手にバスケットを持っている。

「これ、おすそ分け。上がっていいかな？」

「ん、どうぞ」

零菜は徐に家に入った。

バスケットの中から零菜が取り出したのは、季節外れの桃だった。

「どうしたんだ、それ」

「バイオプラントで採れたヤツが、送られてきたの。結構数が多くて、うちだけだと食べきれないからみんなのところに配ってる。日持ちしないし」

「悪いな。こんな、高そうな桃」

「まだ表に出ていない研究段階のヤツだって。美味しいけど、安定生産に漕ぎついでないらしいよ」

「いい匂いがするな。大ぶりだし」

「いいでしょ。美味しいよ」

零菜は手際よく桃を包丁で切った。

「固そうだな」

「そうだね。これ、そういう品種みたい。シャキシャキしてるの。柔らかい桃のほ

うが好きだった？」

「いや。どっちかかっていうと、固めの桃が好き」

「よかった」

零菜は小さく笑みを浮かべて、切った桃を並べた皿をテーブルに置いた。

「零菜は飲み物何にする？」

「もらっていい？ 何があるの？」

「コーヒー、紅茶、煎茶、番茶、麦茶、オレンジジュース」

「バラエティ豊かだね」

「萌葱姉さんが置いてったのもあるから、うちだけで揃えたわけじゃないよ」

「紅茶にする。萌葱ちゃんが置いていったのって紅茶でしょ？」

「当たり前」

そこそこ高級な紅茶らしい。

それをティーポットで二人分用意した。

「桃、美味しいな」

と、凧は言った。

シャキシヤキした触感の桃は強めの酸味の中に、芳醇な甘さがあった。しつこくないあっさり目の味わいで、何個でも飽きずに食べられそうだ。

「季節外れって思うけど、バイオプラントだからか」

「そうだね。この時期に桃は食べないけど、だからこそ狙い目だって思ってるみたい。競合する相手がいないからね。新ブランドとして確立するには、まだ一、二年かかりそうだけど」

バイオプラントで一から十まですべて管理されている植物は理論上季節も気候も関係なく収穫することができる。温度や湿度も管理できるので、収穫時期を調整して、意図的に旬をずらすことも簡単にできるのだ。

「やっぱ、萌葱ちゃんの趣味はいいよね。この紅茶、すごい美味しい」

「紅茶はよく分らないけど、飲みやすい紅茶だと思う。普段、他の紅茶飲まないから比較できないけどな」

「凧君、いつもは？」

「麦茶」

「そっか。まあ、そうだよな。癖もないし」

零菜は桃を一口齧った。

何とも幸せそうだ。

「そういえば、零菜」

「何？」

「ちょっと気になったんだけど、なんか今日、髪が水っぽくないか？」

「え、ああ……これね。ちゃんと乾かしたんだけどな。分かる？」

「何となく」

「さっきまでプールで泳いでたから」

「下の？」

「うん」

零菜は頷いた。

このマンションには、居住者用のプールがある。一階と五十階に二十五メートルプールがあって、五十階は四十五階以上に居住する住人とその知人等にのみ利用が許されたVIP用である。零菜が利用しているのは五十階のプールだろう。

「水泳は身体にいいから。いい運動になるし」

と、零菜は言う。

水泳は全身運動だ。

身体に負担が少ないので、リハビリにもよく使われる。

「プールか。この前の水着で？」

「え、あ、あれは、違う。あんなのじゃ、泳げないし！」

混沌界域のチョコ祭で着ていた水着は、腹部がメッシュ状になった露出多めのワ  
ンピースだった。スポーツ用ではないのは確かだ。

「今日のは普通に競泳用の水着だよ。学校指定の」

「スクール水着か」

「まあ、そんなもん。競泳用のだから、材質は他の学校とちよつと違うと思うけど  
ね」

そう言って、零菜は自分の髪を弄った。

つやつやとした射干玉の黒髪だ。日ごろから丁寧に手入れをしているのだろう。  
手櫛だけでざらりと毛先まで揃うのだ。

思わず見惚れてしまいそうになる。

「ん、何？」

「いや、なんでも」

凧は慌てて目を反らす。

零菜はそんな凧に小首を傾げた。

「凧君、興味ある？」

と、零菜は言った。

「興味って？」

「彩海学園の水着。その、空菜のは見たんでしょ？」

「そりゃ、まあ、空菜のは見たけど」

「全然、違うよ。そっちのヤツとは」

「そうなんだ」

「うん……」

零菜は少し冷めた紅茶で唇を濡らす。凧の様子を窺うように、凧の方を見る。

「その、どうする？」

「おお……」

と、思わず凧は感嘆の声を漏らしてしまふ。

凧の部屋である。

いつもは凧だけで使う六畳一間だ。ベッドの他には本棚と机とテレビ、パソコンしかない。衣服は備え付けのクローゼットの中だ。男物の部屋らしく、整理整頓が行き届いていると言えるほどではない。出っぱなしの漫画や小説が枕元に散乱している。良くも悪くも生活感にあふれた部屋である。

凧は自分のベッドを椅子代わりにして座っている。いつでも寝ころべるので、椅子よりもベッドに座る頻度のほうが多いのである。

そこに、零菜はやって来た。

学校指定のスクール水着を着ている。

一度、自宅に戻ってからクローゼットの中に仕舞っていたスクール水着を取り出して、また戻って来たのだ。凧の家と零菜の家は歩いて十数秒だ。ほぼ、自宅も同

然の距離である。

「う、なんか、やっぱり恥ずかしい」

「それは、まあ、そうだろうけど」

零菜は羞恥に震えて顔を真っ赤にしている。

十分前の自分を呪っている。どうしてあんなことを口にしてしまったのか、零菜自身分かっていない。口をつけて出てしまったというところだ。零菜に何かしらの意図があったわけではない。言うなれば、事故だ。

とはいえ、凧からすれば零菜の心情を察するのは不可能である。零菜にすら分からないその時の零菜の思い付きなど、どう配慮すればいいというのか。

水着に興味があるかと聞かれれば、興味があると答える他ない。事実がどうかではなく、一対一で、あれほどあからさまに誘われたのだ。拒否するのは、土台無理な話である。

零菜の水着はなるほど、凧の知るスクール水着とは異なるデザインだった。

詳しいことは分からないが、一目で競泳のために設計されたものと分かる。凧の通う中学校の水着は紺色一色の単調なものだが、こちらは両脇から太ももまで水色

のラインが入っていて、紺色と水色の二色である。

学校の授業で使うことが一目瞭然の通常のスクール水着に対して、彩海学園の水着は実際の競技で着ても違和感がないデザインだ。

それにしても、想像以上に凶悪な見た目だ。

競泳用の水着は、水の抵抗を減らすために、とにかく身体にフィットするように作られている。零菜のスタイルはとてもいい。特にバストサイズは中学生離れしていて、グラビアアイドルも真っ青である。出るところが出ていて締まるところが締まっている理想的な身体である。それが競泳用水着を着たら、とんでもないことになるのである。具体的には胸部がはち切れそうだ。胸がヤバイ。尻はびっくりした。

「あの、どう?」

「うん、似合ってる」

「そうかな? みんな着てる水着だから、特別どうってものじゃないけど」

「着る人で変わるんだなって。零菜が着ると、うん、可愛い、と思う」

「う、うん……」

当たり障りのない、しかし本心を零菜に告げる。零菜は羞恥極まって俯くばかりだ。この後、どう話を展開するのか、凧も零菜も分からなくなった。

零菜は勢いだけで水着を着てしまったし、凧も流れに身を任せてここに至ってしまった。後先は考えていなかった。

「あ、なんか、そのやっぱり部屋の中で水着は変だし、もう着替えるねッ」

居た堪れなくなった零菜は凧にそう言って、踵を返した。その時である。ガタン、と物音がした。玄関のドアが開いて、誰かが家の中に入って来た音である。

「ただいまです。ちょっと、一時帰宅です」

出かけていた空菜が帰って来たのである。

「あ、なッ、何でッ!? ちょっと、凧君ッ! 空菜、今日は遅いんじゃないの!?」

「俺に聞かれても。遅いはずだけど」

凧は時計を見る。まだ三時過ぎだ。空菜の帰宅予定時刻まで四時間ある。予定よりもかなり早い帰宅だ。

「凧さん? 部屋ですか?」

空菜の足音が近づいてくる。

「ひ、ど、どうしよう」

「零菜、服は？」

「だ、脱衣所」

わたわたとする凧と零菜。

零菜の服は脱衣所にあつて、そこは玄関のすぐ隣である。服を取りに行けば、空菜と鉢合わせることになる。凧が零菜の服を取りに行くのもダメだ。そこには下着もある。水着は見せてもいいが、下着は日常使いの物だ。見られておかしいものではないが、人に見せるようなものではない。まして凧が見るのであれば、今日の日常用の下着はよくない。

「凧さん？ 返事がありませんが、大丈夫ですか？」

ついに空菜は部屋の前にやって来た。

ドンドンと部屋のドアを叩く。空菜は凧に用事があるようだ。空菜の手がドアノブにかかったのが分かった。咄嗟に凧は零菜の手を引いた。

「ちよつと、待て。聞こえてる」

「もしかして、倒れてますか？」

と、凧が返事をしたのと空菜がドアを開けたのはほぼ同時だった。

「すみません、お昼寝中でしたか」

「あ、ああ、大丈夫。どうした？ 晩飯、いらなんじゃなかったか？」

凧は冷や汗をかきながら尋ねた。

ベッドの上で上半身を起こした姿勢だ。足にはタオルケットをかけている。空菜は「ん？」と小首を傾げた。

「夕ご飯がいらぬのは変更ないです。一部、予定変更になって。これから、またすぐに出かけます」

「そっか。気を付けろよ」

「はい。ありがとうございます。凧さんも、何かあれば言ってください。調子がいとは言えないんですから」

「分かってるって。大丈夫、大丈夫。別に何も無いから」

「……そうですか。郵便が届いたので、置いときますね」

空菜は釈然としない面持ちではあったが、それ以上何かを尋ねることもなく、観

察するようなジトっとした視線を凧に投げかけつつ、踵を返した。

「では、行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

空菜がドアを閉める。そのまま足音が遠のいて、玄関のドアを開けて出て行く振動を感じ取る。

「ふう……」

と、凧は息を吐いた。

それからタオルケットをはぎ取る。

体育座りをした凧の足の間に、丸くなった零菜がすっぽりと納まっていた。息を殺して、じっと潜んでいたのだ。

「行った？」

「大丈夫」

「気づかれなかったかな」

「どうかな。まあ、何も言わなかったから、詮索はしてこないだろうけど」

空菜が何かに気づいた可能性は否定できない。零菜の姿を見たわけではないが、

空菜は鼻がいいのだ。部屋の中に零菜がいるということに気づいても不思議ではない。それでも致命的な水着を着た状態までは気付かれてはいないだろう。

「あ……その、凧君。そろそろ、着替えるから」

と、零菜は頬も目も紅くしながら言った。

予想外の闖入者のために、まさか水着姿で凧の布団に潜り込むことになるとは思っても寄らなかつた。不意打ちも同然の事態に、頭がどうにかなりそうだった。

「あ、ごめん。急に引っ張り込んで」

「ううん、気にしないで。わたしも、助かったから」

苦笑しながら零菜はベッドから出た。このままだと、ますます気まづくなくなってしまう。零菜は足早に脱衣所に向かい、水着から普段着に着替えた。

「あの、その、今日のは参考だから。彩海学園のは、他と違うってのを見てもらいたかっただけだし、高校はまた別の水着になるから、この水着のままってわけじゃないからね」

「分かってるよ。ちなみに高校のは？」

「き、着ないから！　もう、馬鹿！」

零菜は顔を紅くして去って行ってしまった。



その夜。

漫画を読んでいた凧の下に空菜がやって来た。門限の通りにクラス会から帰ってきて、風呂から上がったところだった。

ドライヤーで髪を乾かした後、タオルを首にかけてパジャマ姿である。

「空菜、どうした？」

「洗濯するので、何かあったら出してください」

「ああ、そっか。でも、特にないかな」

凧は空菜よりも早くシャワーを浴びている。今日の洗濯物は、その時に洗濯機に投げ入れている。

「そうですか。じゃあ、これを交換で」

「ん、何……？」

空菜は凧に白い布の塊を渡した。

「シート？」

「交換します。新学期に向けて、気分を一新しましょう」

「何に影響されたんだ？」

凧がいるのはベッドの上だ。凧がいるのにお構いなく空菜は、シートを剥がしにかかる。凧はベッドの上で転がって、波打つシートから逃れた。

「では、失礼します」

半ば強引にシートを回収した空菜は、凧のシートをぐるぐると巻いて部屋を出た。テレビか友達にでも影響されたか。新学期に向けた準備というのなら、昼間にしてでもいいものを、なぜこうも唐突に行動を始めたのだろうか。

凧は柔軟剤のいい匂いにするシートを新たにベッドに敷き直して、ベッドにダイブするように飛び込んだ。

軋むベッドで視界が揺れる。

直後、凧のスマホが鳴った。

メッセージアプリに着信があったことを伝える表示が出た。差出人は零菜であつ

た。画面をタップして零菜からのメッセージを開く。

タイトルは『参考※部外秘絶対の人に見せないこと』とある。

「うおお」

本日二度目の感嘆であった。

添付画像は想像もしていなかった零菜の写真データだった。それも、今日着ていた水着とよく似た別の水着であった。水色のラインの両サイドに銀色のラインが入っている。どうも彩海学園高等部の水着のようだ。零菜も来月から高校生だ。次の夏には、高校のプール授業があるので、すでに高等部の水着を購入している。それを着て撮影したのだろう。

姿見の前に水着を着た零菜が立っている。スマホを縦にして撮影している。水着を主役にするために、あえてスマホを顔の前に持ってきている。そのため、零菜の表情はスマホに隠れて見えず、身体のほうは何にも遮られることなくばっちり映っている。

「うーん、これは……」

外部に漏れると大変なことになる機密情報である。

凧は手早く画像を保存し、フォルダに暗証番号を設定した。

「顔が見えないと、むしろエロく見えるんだな」

新しい発見であった。

顔が見えないからこそ、身体の方を注視するし顔についても想像が働く。一部を意図的に見せないことで想像の余地を生み、より魅力的に見せるといふ手法である。零菜がそこまで意図したわけではないが、結果的にそうなっている。

ひとまず、凧は零菜のメッセーじに『似合ってる。可愛い』と短文の返信をした。何もしないとスルーしたと思われる。素直な感想をすぐに送るのは大切なことなのだ。

凧のシーツを回収した空菜は脱衣所にやって来た。風呂場と洗面台があり、洗濯機と乾燥機も置いてある。

空菜は洗濯機の蓋を開けた。衣服はすでに乾燥機の中だ。

今、洗濯機は空である。

空菜は徐にシーツに顔を押し付ける。鼻を鳴らして、シーツの匂いを嗅いだ。慣

れ親しんだ風の匂いに混ざって余計な香りがついている。柔らかな甘い匂いである。それ自体は嫌いではないものの、ここに付着しているのが癩に障る。

空菜は鼻が利く。匂いに人一倍敏感である。獣人系の血が入っているので、自分の縄張りに余計な香りを残されると無意識に反発心を抱いてしまう。

学校帰りに香水の専門店に立ち寄って、あれこれと見て回ることもある。それくらいに香りに関心がある。

その空菜にとってうっすらと漂う残り香の正体を嗅ぎ分けるのは簡単だった。

「バニラ系の香水、ですわね」

ムツとした表情を浮かべて空菜はシートを洗濯機に投げ込んだ。

バニラの匂いを発する物は、昏月家にはない。

よって外部から持ち込まれたものである。

匂いの出どころは概ね見当はつく。

昼間に風の部屋に行ったときに、間違いなくその場にいた。匂いで分かったが、あえて口にしなかったのだ。

何をしていたのか知らないが、何となく気に入らないと感じる。

凧の部屋に誰が上がるかと、本来空菜の関知するところではない。暁家の一員も同然の昏月家は、実質的に大家族。多数の出入りがある。実際に、凧の部屋を粘着クリーナーで掃除すれば、色違いの長い髪の毛が採取できる。

なので、今更凧の部屋を出入りするからといって思うところはないが、シーツに匂いを残されるのは別の話だ。

獣人の本能がこれに不快感を示している。

ぶっくりと頬を膨らませながら、空菜は洗濯機のスイッチを押した。

## 幕間

春休みも後半に入り、いよいよ入学式が近づいてきていた。

このところ天気の良い日が続いていて、ビルの間から見える空は真っ青だ。全国的に高気圧に覆われて雲一つない晴天となっている。風もそよ風程度で、気温も高くない。比較的涼しい心地良い春の一日であった。春うららとはこういった気候を言うのだろう。出不精の風であっても、こうも心地よい日は国立自然公園にでも散策に行きたくなってくる。以前住んでいたマンションからなら歩いても行けるくらいこの場所にあった広大な自然公園は、今も多数の親子連れで賑わっていることだろう。

もともと、今日の風の目的地は自然公園とは正反対の場所だ。中央行政区と第一北地区の境目の地域だ。自宅最寄りの駅からモノレールで六駅ほど離れた桜庭駅で下車し、幹線道路に背を向けてオフィス街の真ただ中に向かう。

桜庭地区は、暁の帝国が誇るビジネスマンの街の一つだ。風の暮らしている地域が行政機能を集約した政治の街である一方こちらは様々な企業の事務所が軒を連ね

るビジネスの街であった。煌びやかな高層ビルが立ち並び、春休み中ではあるが学生の姿は少ない。凧自身、ここに来るのは久しぶりだ。普段はまったく用事のない地域だけに、土地勘がないと言っているくらいだ。

暁の帝国に生まれ育って十五年。凧が足を伸ばした地域は、実のところあまりにも狭い範囲でしかないのであった。

「昔一度だけ来たことがあったけど、忘れちゃったな」

ビルとビルの間を抜けていく。手荷物は筆記用具を入れたリュックサックとスマホだけである。スマホのナビに従って駅から歩くこと十五分。途中、曲がるところを間違えて余計に時間を食ってしまったものの、遅刻せずに目的地にたどり着くことができた。

見上げるビルにはいくつもの看板がかかっている。飲み屋の看板が二つ。エステサロンの看板が一つ。IT関連会社と思われる看板が一つ。そして、民間の攻魔業者の看板が一つだ。凧はこのうち、攻魔業者に用事があったってやってきた。

事務所はビルの五階にある。個人経営の事務所なので、大きくはないが確かな実力と実績を重ねてきた業界の有名どころだ。

エレベーターで五階に上がり、事務所のドアを開ける。

「失礼します。今度お世話になる、昏月で——」

「超必殺秘儀、十王滅却キイック!!」

舌足らずな高い声とともに何かが風の顔面に向けて飛んできた。

放物線を描く何かを風の動体視力は瞬時に見て取った。それはまだ小さい女の子で、これを避けると地面に真っ逆さまになるであろう。

「ぬおおッ」

避けることは簡単でも避けてはならないと判断した風は、受け止める決心をした。体重は十五キロ前後だろう。それが、勢いをつけて飛んで来たのだから、想像以上の衝撃だ。受け止めはしたがそのままひっくり返って尻もちをついてしまった。

「んぎゃ」

カエルがつぶれたような声が腹の上でした。

「お、誰？」

「こ、こんにちは」

ぱっちりとした大きな黒目の女の子だ。風の顔を覗き込んで小首を傾げている。

「え、あ、ちょ……何してんの優香!？」

事務所の奥の方から女性の悲鳴染みた声が聞こえてきた。



「ごめんねー、昏月君。うちの娘、最近ヒーローものに嵌っちゃって」

「いや、大丈夫です。怪我也なかつたみたいですし」

事務所に上がった凧はソファに腰かけた。

向かいに座るのは、この事務所の所長夫人、宮住優乃である。獣人ではあるが、完全な獣化ができない体質らしく、常に獣耳だけが頭の上にちょこんと乗っている。そして、先ほど凧に飛び掛かって来たのが、優乃の一人娘である宮住優香。今年で四歳になる彼女は、瞳や夏穂と同じ保育園に通っているらしい。

今日は、本当は事務所が定休日ということで娘が事務所を遊び場に使っていたのである。

さすがに獣人の血を引くだけあって身体能力が高く、飛び跳ねていたところに凧

が顔を出してしまったのだ。

もつとも、凧がいなければドアに激突するコースだっただけに、凧のおかげで修繕費が出なくて済んだと優乃はほっとしていた。

「今日、琉威さんは？」

「所長は家。昨日の夜から今朝まで出ずっぱりだったからね」

「夜勤ですか。大変ですね」

「魔獣は夜に動くことも多いからね。あなたも本格的にこの業界でやるんなら、カレンダー通りの休みは取れないかもしれないってことを覚悟しないとイケないよ」  
攻魔師として働くには中卒資格が攻魔師免許とは別に必要だ。四月から高校生になる凧は、無事に攻魔師として活動することが認められるわけである。

そこで、凧は昔から付き合ひのある宮住家が経営する事務所でアルバイトをするべく試験を受けたのだった。

人形遊びを始めた娘を離れたところに置いて、優乃は書類を凧の前に並べ始める。契約書と誓約書だ。

「ここに名前と印鑑。後、一番下に給与の振込先ね。契約内容は今のうちきっちり

読んで、疑問があったら聞いてね」

「はい」

「あ、そうそう。こっちもいるんだった。攻魔業保険、入ってもらわないと」

「やっぱ、そういうのあるんですね」

「もちろん。義務じゃないけど、危険を伴う仕事だからね。普通はみんな入ってるし、うちだったら全員に義務付けてる。保険料は半分は事務所負担で残り半分は給与天引きだから気を付けてね」

「なるほど。つまり、出勤しないと……」

「赤字だね」

「あるんですか、そういうの」

「昏月君の保険料だと、そんなにしないから普通はないよ。月に二日以上出てくれれば、計算上は給料だせるはずだし。まあ、すぐ退職したりすれば別だけど」

「ちなみに赤字になった場合はどうなるんですか？」

「こっちから昏月君に請求しなくちゃいけないかな」

「仕事で出てるのに請求されることもあるんですね。速攻で辞める人が悪いとはい

え」

「そういうこともあるから、すぐに仕事を辞めると損することもあるんだよね……と、話が逸れた。昏月君は、最初は簡単な事務をしてもらうから、あまり気負わなくていいよ」

「むしろ、事務のほうが経験少なくて緊張するくらいです」

「その歳で実戦経験豊富なのは頼り甲斐があるんだけど、手放しに喜んじゃいけないことなんだろうね。……ともかく、まずは事務からだから。将来、攻魔師やるにしても、事務知らないと苦労するよ。殴り合うだけが仕事じゃないからね」

「はい。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくね」

必要書類を提出して、凧は事務所を出た。

契約は四月一日からである。

凧としては、このまま仕事の触りだけでも経験させてもらいたかったが、それはできない相談だった。

この前、中学校を卒業した終えたとはいえ、制度上は三月三十一日まで中学生な

ので、就労はできないのだ。

宮住攻魔師事務所を出ると、ちょうどお昼時になっていた。道行くサラリーマンも、足早に近くのコンビニやラーメン店に駆け込んでいる。

土地勘のないこの場所で店を探してもいいがサラリーマン軍団に交じる気はなかった。風は、三駅離れた絃神島北駅近辺を散策することにした。この辺りは桜庭と異なり世代を問わず多くの人々が行き交う煌びやかな電気街だ。

複合ビルの中には多くの家電量販店やゲーム、アニメの専門店が入っていて、さらに劇場や博物館、水族館など観光施設もひしめき合っている。暁の帝国随一の観光地である。

観光をするもよし、安くていい物を探して買い物をするもよしの賑やかな街である。

ここなら食べ物にも困らない。

せっかく外に出たのだし、新生活に向けた大きな第一歩を踏み出したのだからと少しだけ気分が高揚していた。多少、値の張る物を食べても罰は当たらないだろうと思っ、この人混みの中に足を踏み入れたのだ。

結果的にそれは少し誤りだったかもしれない。

なるほど、確かにこの街には多くの飲食店が出店している。より取り見取りで、一日ですべてを回りきるのは困難だろう。

しかし、そんな飲食店も多くが春休みを謳歌する学生たちによって埋め尽くされていた。大抵が仲の良い友人と連れ立ってのもので、独り身はほとんどいない。こうした中に入っていくのは少しばかり気が滅入る。第一、並ぶのが面倒だ。ここまで来たはいいが、結局はコンビニで済ませるのが一番楽なのかもしれないと思いついたところで、

「あれ、凧君じゃん」

と、声をかけられた。

「麻夜？」

「おつす、こんなところで何してるの？ 今日宮住さんのところに行くんじゃないか？ たっけ？」

凧と同じ時間に家を出た麻夜とは、三時間ぶりの再会である。今日、宮住攻魔師事務所に行くのも伝えていたので、不思議がっている。

「宮住さんのところには、今行ってきたとこ」

「そうなんだ。で、それが終わってここに来た。誰かと待ち合わせかな？」

「残念ながら。昼飯どうしようかと思ってぶらついてたところ」

「へえ、そう」

麻夜は頤に手を当てて考え込む素振りを見せる。

細身のジーンズを愛用する麻夜は、身長こそ平均よりも少し高いという程度ではあるが、すらりとした長い脚を強調しているせいか実際よりも高身長に見える。

「麻夜は何か買物？」

「ん？ ああ、僕は本を探しに。通販でもいいけど、自分の足で探すと思わぬ発見があったりするからね」

「ああ、それは分かる。収穫はあった？」

「まあまあ。井口ゆうこのまさかの新作にうっかり手を伸ばしそうになっちゃったくらい」

「聞いたことある名前だ。何だっけ。少女漫画の人だったような」

「そうそう。ネットでもよく話題になるよ。詳しくは自分で調べて。井口ゆうこ、

ゲテモノで検索すると一発だから」

「ゲテモノ……?」

およそ少女漫画とは繋がらないワードにいぶかしむ凧ではあるが、井口ゆうこの名は暁の帝国のみならず日本でも有名だ。

十年余り前に発売した漫画があまりにも衝撃的過ぎてネット上がお祭状態になった。多くの女兒が性癖を拗らせるきっかけになったといい、今でも「性癖返して」とか「性癖盛り過ぎおばさん」などとコメントされている。

とりわけ、悪名高い『あにいも』は、兄と妹の禁断の恋を謳った迷作である。兄に恋する妹が紆余曲折の末にその想いを遂げる前編と突如現れた弟が変身したイカに兄を寝取られる後編で評価が大きく変わる。子ども向けの少女漫画でそんなものを出してしまうものだから、多くの女兒が被害を受けた。漫画を取りそろえる図書館ですら、後編のみ閲覧禁止にするくらいである。「前編で終わっていれば名作だった」という意見が多数を占める中、近年、そのぶっ飛んだ内容がネタとして定着し、再評価が進んでいる。

「ま、それはそれとして。凧君もお昼はまだなんでしょ?」

「そう。これから」

「なら、ちようどいい。僕と一緒に来ない？ 行きたいところがあつただけど、

一人だと入りづらくてさ」

「そういうことなら」

断る理由もない。

凧も一人だと入りにくいと若者でごつた返す飲食店に入るのに二の足を踏んでいたところだったのだ。

「で、どこ行くんだ？」

「黒猫堂」

「それって前に行かなかつたっけ？」

「あれの二号店が、最近オープンしたんだよ。ちようど、そこの角を曲がつたところにね」

「ああ、そうなの」

黒猫堂は、六月に麻夜と一緒に行った店である。カップル限定を謳ったパフェを麻夜が食べるために、凧が行ったのである。

流行り廃りの激しい飲食業界ではあるが、二号店を出すまでになるということは、それなりの儲けがあるのだろう。

凧が麻夜に連れられて向かったのは、大型ショッピングセンターのダナーである。その一階に、黒猫堂の二号店が出店していた。

黒い看板に黒猫堂二号店と白字で書いてある。

到着したとき、お昼時を僅かに過ぎていたからか、ちょうどよく並ばずに席に着くことができた。

麻夜は初めから何を注文するか決めていたようだ。メニュー表を眺めたのは、確認のためである。

「そしたら、僕はこのパンケーキにするよ。黒猫ベリー全乗せで。君は？」

「……オールスターにする」

「量はそんなでもないよ、それ」

「米も欲しい気分。腹減った」

凧のオールスターは、ライスとサラダに小さなパンケーキがついたランチメニューの一つだ。もともと、女性客を意識したメニューが多く、育ち盛りの凧が満腹感を

得るには物足りないところはある。

「凧君、僕に合わせてくれる？　がつつり食べたいなら、別にそういうのもいいけど？」

「合わせてないよ。それに昼からがつつり食べるほど、食欲旺盛でもない」

と、凧は言うてから。

「甘いのも食いたかったし」

と、付け加えた。

「そう。なら、よかった」

パンケーキが出てくるまで、十分ほどの時間があった。

ほぼ毎日顔を合わせている上に、麻夜とは魔術面でもよく話をする。凧にとって魔術は護身術だ。今となつては昔のことだが、かつての凧は病弱で、身体能力で劣っていた。その一方で、やはり魔族や魔獣を惹き付ける体質は今と変わらないので、身を守るために魔術の知識が必要だった。

麻夜は魔女の子である。悪魔と契約していない麻夜は魔女ではないが、魔女の知識の多くを学んでいる。体系化された魔術ならば悪魔と契約していなくても使うこ

とができるし、話を聞いているだけでも面白い。

男女の会話というには色気がないが、何年も前から凧と麻夜は魔術という共通の趣味で会話を成立させてきた。

「そういえば」

と、麻夜はふと思いついたように凧の左手を見た。

「それ、まだちゃんと治ってないの？」

「ああ、これ。もう少しかかるんじゃないかな」

凧の左手は、まだ白っぽさを残している。傍から見れば片手だけ日焼けしていないように見えるというくらいには血の気が戻ったが、事情を知る麻夜から見れば、まだ元通りになっていないというのは心配だ。

「一か月経つよね？」

「診てもらってるけどね。紗矢華さん曰く、落ち着いてるから下手に刺激しないで自然と抜けるのを待った方がいいってさ」

「そういうものかな」

「エネルギー切れてるからな、これ。呪詛って言っても、大本はディアドラへの恨

みつらみなわけだし。一緒に戦ったからね」

「凧君はむしろ戦友ってこと？　呪う相手がいなくなつて、満足しちゃつたってわけかな」

「そういうことみたい。俺への害はないよ。他の人にも影響ないし。ほっとけば霧散して、いつの間にか消えてるだろうって」

「紗矢華さんが言うなら、そうなんだろうけどね」

麻夜が見ても分かるくらいには強力な呪詛だ。

原始的だが、強烈な恨みの念が籠っている。魔女術にもこういう怨念を使う術は多々あるが、正直、凧の左手の呪詛は薄らいでいるとはいえ、根源的な恐怖を感じてしまう。

恨みつらみを利用した魔術は多種多様だ。それだけ、怨念は強い力と結びつくのだろう。負の感情の爆発力はすさまじいものがある。

「お待たせしました。こちら、黒猫ベリー全乗せになりまあす」

甘ったるい猫なで声の女性店員は、大学生のアルバイトだろうか。

麻夜の目の前に置かれたプレートの上には三段重ねの薄焼きのパンケーキの上

に、たっぷりイチゴ、ブルーベリー、ラズベリー、カシス、アカスグリの実を並べ、ブルーベリーソースと生クリームもたっぷり使った一品だった。

「そして、こちらがオールスターランチです。ごゆっくりどうぞ」

麻夜のパンケーキは想像以上にがっつりしたものだった。ランチメニューを頼んだ風のほうが少食のように見える。

ごはんと目玉焼きとサラダとわかめスープに小さなチョコソースをかけた二段重ねパンケーキである。

「凧君、それ足りる？」

「腹八分にはちょうどいい。というか、麻夜のほうは結構な量に見えるけど？」

「これくらいなんともないよ。女子の別腹を舐めないでもいいな」

不敵に笑う麻夜はフォークとナイフを手にとってから、思い出したようにスマホのカメラ機能で写真を撮った。

「おっと、待って凧君。そっちも撮るから」

「好きだね、そういうの」

「情報共有のためにね。ここの店のこれが美味しかったっていうのは、結構話の種

としては上等なんだよ。とりあえず、ライムっと」

ポチポチ画面をタップしてから、麻夜はスマホをカバンに仕舞う。

「さてと、いただきます。あ、いいよ、凧君。もう食べて」

「ん、それじゃ、いただきます」

凧のそれは簡単に昼食を採るついでにパンケーキを楽しみたい人向けのメニューなので、とりわけ話の種になりそうなものでもない。「普通に美味しい」という程度の感想しか抱けないのは、凧が食に拘りが無いからか、それとも表現能力が欠如しているからか。

「うんうん、これいいよ。すごくいいよ。酸味と甘さのバランスが絶妙だね」

「麻夜も好きだね、そういうの」

「何？　なんか変？」

「いいや、全然。それ、甘すぎない？」

「むしろ、酸味が勝ってるかも。ベリー押しなだけあってね」

パクパクと麻夜はパンケーキを口に運ぶ。かなり気に入ったようだ。お姫様の一人が常連になるのなら、この店も安泰だろう。

「凧君のパンケーキはどうなの？」

「甘めのチョコ使ってるよ」

「凧君の苦手なヤツじゃない？」

「苦手じゃないよ。苦いほうが好きってだけ。チョコとして味わうもんでもないでしょ、これは」

「まあ、確かに」

女性向けメニューというだけあって、少な目だったので凧はそうそうにメインディッシュは食べ終えてしまい、デザートのパンケーキを残すだけとなった。自分だけ食べ終えるのも、麻夜に悪いので、コーヒーを啜りながらペース配分をしていると麻夜の視線が凧のパンケーキにちらちら移っているのに気付いた。

「何、気になるの？」

「え？ ああ、それどんなかなって」

「なんだ、麻夜も食うか？」

凧はフォークでパンケーキを一切れ取って、麻夜に差し出す。チョコソースと生クリームを付けるのも忘れていない。

麻夜からすれば、自然に、それでいて急に「あーん」をされるのだから戸惑う。心の準備ができていない。

「……君って時々そういうことするよね」

小さくため息交じりに恨み言を呟いてから、麻夜は口を開けて凧のパンケーキを頬張る。何より麻夜を困らせるのは、こういう行為が嫌いではないということだった。

「ん……美味しい。こっちの酸味の後だからかな。余計に甘さが際立つよ」

「そう？ もう一切れ食う？」

「食わない」

そう言って、麻夜は自分のパンケーキにフォークを突き立てから、凧に向ける。

「はい、お返し」

「ん……？」

「ほら、早く。そして僕の気持ちも味わえ」

有無を言わさぬ麻夜の口調に凧は気圧されつつ、黒猫ベリー全乗せを口に入れる。途端に広がるベリーの酸味と生クリームの甘さのコントラストに感動すら覚える。

る。甘さを強調した風のパンケーキに対してこちらは酸味と甘さのバランスを重視している。酸味を強めに出すことで、甘さを苦手とする客でもパンケーキを楽しめるのだ。

「うん、これは美味しい。甘すぎないから量があっても行けそうだな」

「でしょ」

「……なんか気恥ずかしいな」

「……だから、僕の気持ちを味わえて」

「悪かったよ」

「まあ、別に、グルメ・デ・フォアグラは人前でするもんだし？ 別に恥ずかし

くもないけどね」

「もうちょっと別の例えはなかったのか、それ」

麻夜は白い歯を見せて笑顔を見せる。

つられて風も笑ってしまった。

糖分多めの昼食を終えて、黒猫堂を出た風と麻夜は、ともに手持無沙汰になった

ことに気づく。凧も麻夜もこの日の予定を午前中のうちに終えていたからで、このままモノレールに乗って家に帰れば、一日の仕事は終了だ。しかし、ここは国内でも有数の大型ショッピングセンターダナエーである。ぶらつくだけでも色々興味を惹かれる物に出会えるのは言うまでもなく、少し見て回ることにした。

百円均一のアイデア溢れる新商品を眺めたり、小物を眺めてみたり、花屋で観葉植物を見たりもした。とにかく敷地が広く、多様な店が軒を連ねているので出口すら分からなくなりそうだった。

「ねえ、凧君。次、ここ入ろうよ」

「ゲーセン？」

「そう。せっかくだから、二人じゃないとできないことしよう」

麻夜はそう言うや恐らくはこの辺りで一番賑やかなゲームセンターに入っている。四方八方から電子音が響く中で、麻夜が向かったのはエアホッケーだった。

「最近、全然してないな、これ」

「うーん、童心に帰っちゃうね。アハハ、懐かしい」

ゲームセンター自体、凧も麻夜もあまり利用しない。子どもの頃に家族で訪れた

時にエアホッケーをみんなで楽しんだことがある。旅行先の温泉旅館に据え置かれているゲームコーナーにも、エアホッケーがあって、寝る前に軽く汗を流したのを思い出す。

「壊さないようにしないとなあ」

「もちろん。弁償は後味悪いからね」

子どもの頃とは筋力が違い過ぎる。吸血鬼の筋力で本気を出せば、機材を故障させかねない。楽しむためにも力加減をしなければならぬのだ。

運動能力は麻夜のほうが高い。残念ながら、素の力では凧は麻夜には及ばない。純粋な吸血鬼は、それだけ身体能力が人間よりも秀でているのだ。

それでも、エアホッケーは力をセーブしなければならぬ。全力を傾けられないのなら、凧と麻夜の力関係は五分五分になる。後は技術とずる賢さだ。

三戦して凧が二勝。麻夜は納得いかないと言ってさらに二戦追加し、結果、凧は四勝一敗の好成績だった。

「むう……」

「まあ、若干麻夜が不利だったかもしれないけどな」

むくれる麻夜を励ますように凧は言う。

セーブしなければならぬ度合いは麻夜のほうが上だ。麻夜は自分の力を抑えることを意識しすぎて、反応が遅れたというのは間違いではない。もちろん、それは勝敗を分かつポイントの一つでしかない。凧の靈感が優れていて、素早く反応できたとする反則もあるし、麻夜の責めが単調だったということもある。

「ああ、後これ」

「何？」

凧は麻夜は小さな箱を渡した。

「そのくじ引きで当たったヤツ」

「ああ、さっきの」

それはゲームセンターに入る前に、偶々引いたくじ引きで当たったものだ。麻夜が黒猫堂でもらった券で引いたもので、四等賞だった。

「もともと、麻夜の券だっただろ」

「そうだけど、これ、シュシュでしょ？ 僕、こういうのはあまり使わないんだよね」

当たったシュシュは有名な織物メーカーが作ったものだ。ベージュの生地をブラックで縁取りするシンプルなバイカラーだ。

「麻夜は、確かにあまり頭に装備しないな」

「装備って言うな。帽子くらいは被る。ただ、髪はほら、こういうのつけて纏めるほど長くはないからね」

麻夜の髪は暗めの茶髪でショートボブだ。長い髪に比べれば、ヘアアレンジの幅は狭いしセンスを問われる。

ショートでもシュシュを使うことはできる。ただ、麻夜はそういった技術を今まで遠ざけてきた。

「何ていうか、可愛い系は似合わないと思うし」

合う合わないは人それぞれだ。麻夜はかっこいい系のファッションを今までしてきた。スポーツを続けるに当たって動きやすい格好を好んだ結果、自然とそういった衣服が集まったのだ。そして、ある程度固定観念が固まってしまおうと、そこから抜け出すのに勇気が必要になってくる。

「似合わないってことはないだろ、さすがに」

「……そう？　髪短いけどなあ。シュシュは長い人のほうがいいと思うけど」

「短くても使えるんじゃないの？　それに髪は伸ばしてもいいわけだし」

「伸ばす？　伸ばすかあ……どうかな」

麻夜は自分の髪先を弄る。

可愛い系かかっこいい系かを決めるのは、個々人の自由だ。しかし、同時に似合うかどうかは、似合うように調整すればいいだけの話である。よほど個性的な体格をしていない限りは、あるいはよほど個性的なファッションでない限りは似合わないというような事態にはならない。麻夜の手にあるシュシュはシンプルなデザインなので、使いどころには困らないはずだ。

結局のところは、麻夜が自分に枷を嵌めているだけなのだ。

「ちなみになんだけど、髪を伸ばすのは夙君的にはアリだと思う？」

「全然アリ」

「そう」

麻夜はカバンを開けてシュシュの入った箱を仕舞った。

「使う？」

「さあ、分らない」

「そう」

「初めからナシなのはもったいないから、検討はしてみる」

「じゃあ、気長に検討結果を待つよ」

「待たなくてもいいよ、別に」

麻夜は気恥ずかしそうに頬を赤らめて、そっぽを向いた。

「もう帰ろ。なんか疲れたし」

と、麻夜は提案する。

夕暮れにはまだ早い。しかし、歩き疲れたし、することもなくなった。麻夜と連れ立って、凧は駅に向かった。



## 幕間

年度が変わり四月になると、いよいよそこはかたなく落ち着きがなくなってくる。春休みの終わりが見えてくるからである。

暁の帝国は日本と同じく四月から新学期である。始業式は概ね第二週の月曜日かなので、春休みは残すところ七日である。

そして、暁萌葱にとっても待ちに待った完全なる長期休暇である。

というのも、彩海学園の春期補講が三月末まで継続していたからである。これは萌葱の成績が悪いということではなく、進学校らしく受験対策に春休み中も午前中だけ授業があるのである。

受験を特別意識していない時期にこれをされても、嬉しいはずもなく、傍迷惑に感じているばかりであった。

ともあれ、春休みとは名ばかりの補講期間がやっと終わり、萌葱は晴れて春休みを満喫できるようになった。

たった七日しかない自由時間。それが終わればまた代わり映えのない学校生活が

始まる。学校は嫌いではないが、めんどくさいと思うのもまた事実。春休みの特別感を短い間に味わいつくすにはどうするべきか。有意義で後悔のない使い方をしたい。

夏にも冬にも大きなトラブルがあり、悪いことがたくさんあった一年だったのだ。春休みくらいは何事もなく普通に安心して楽しみたい。

鼻を突くのは消毒液の匂いだろうか。

不快ではないが、どことなく病院を思わせる匂いは清潔さのアピールだろうか。綺麗に整頓された室内には、汚れがなく毎日のように掃除されているのが分かる。実際、ここはかなり清潔に保たれているという印象だ。

部屋の中には大きな液晶モニターがあり、円形のガラステーブルとゆったりとしたソファが鎮座している。壁紙は目にも鮮やかな花柄で、全体的に綺麗に纏っているものの落ち着きがないという雰囲気であった。

蛍光灯が十分に明るいので困る事はないが、部屋に窓はなく外の様子は分からな  
い。しかし、時折聞こえてくる大きな雷鳴やビルを震わす風の音を聞く限り外は大

荒れのようなだった。

萌葱は一人、ソファに腰掛けて盛大にため息をついた。

頭にはタオルを巻いていて、身体にはバスローブを羽織っている。水が滴る衣服は、クローゼットにかけて魔術を使って乾かしている最中である。

落ち着かないのは部屋の内装だけでない。萌葱自身もそうである。キッチンがなだけで、それ以外の機能はすべて網羅しているとばかりに快適な部屋だ。室温は少し寒いくらいだが、空調は自由に調整できるので気にならない。

なるほど確かに休憩するには快適な空間だ。人目を気にしなくていいと言うのも悪くはない。とても清潔感があるというのもポイントが高い。

ベッド脇に当たり前のよう置いてあるコンドームの袋や玩具の自販機に目を背ければ、普通のホテルといってもよかった。

「はあ……なんで、また」

どうしてこんなところに来てしまったのだろうと萌葱は頭を抱えた。

何を隠そう、ここは男女交際の果てに辿り着く聖地であり欲望の集積地ラブホテル。暁の帝国がかつて絃神島と呼ばれていた時代から続く真正銘のピンク街にあ

る老舗ホテルの一室であった。

萌葱はこの部屋に入ってからずっとソファに座っている。

部屋の角にはガラス張りの浴室があつて、シャワーの音が聞こえてくる。ガラスは曇つて中は見えにくい。これもラブホテル独特の構造だ。

すぐに、シャワーの音が止まった。

そして、ドアを開いて、中から暖気と共に少女が出てきた。

「おーし、上がったよ。萌ちゃん、その格好寒くないの？」

頭をタオルでゴシゴシと擦って水気を取りつつ、尋ねてきたのは東雲だ。

透き通るような白い肌はシャワーで火照つてそこはかとなく朱に染まっている。実年齢より幼く見られるのが嫌だという顔立ちも、中南米の基準の話であつて、暁の帝国ではそこまででもないだろう。平均より低い背丈という点は変わらないものの、概ね歳相応ではないだろうか。

「はーあ」

「人を見るなりため息つくのは失礼では？」

「別に東雲がどうつてことじゃないわよ。ただ、世の不条理を嘆いてんのよ。なん

で、初ラブホが妹と一緒になんだってね」

「こっちの台詞ですけど」

萌葱もそうだが、東雲もこういうった施設には縁がなかった。萌葱にとっての初体験は東雲にとっても初体験になるのだ。

「あんたが『行こうぜ』みたいなノリだったじゃん」

「萌ちゃんだって断わらなかつたじゃん」

東雲は備え付けのバスローブを身体に巻きつけて、ベッドに座った。

「そりゃ、わたしだってちゃんとした機会に来たかつたけどさ。この辺、ほかに何もないじゃん。コンビニでもあれば、よかつたけどさ。そうすれば、傘だって買えたし」

萌葱と東雲がいかがわしいホテルに入ったのは、互いにその気があったというわけでもなく偶発的な事故のようなものだ。

今日の午前中、萌葱と東雲は揃って事件後の経過観察のために病院を受診していた。主治医は深森なので気がねすることがない。

予約していても、時間通りに受診できないのが大病院の常である。思いのほか長

引いた検査を終えて、春の麗らかな陽気に当てられて郊外の公園で開かれているイベントを見に来たのが運のつきだった。

「まさか、こんな雨が来るとは思わないっての」

「まあね」

萌葱は呻き、東雲は苦笑する。

突如、湧き上がった暗雲がもたらした風雨に、何も準備していなかった二人はずぶ濡れになった。ちょうど近道しようとしていかかわしいホテルのある裏路地に入ったところだったので、そのままの流れでこの部屋に逃げ込んでしまったのだ。た。

「あーあ、これから、こういうとこに来るたびに萌ちゃんと来たのが頭を過ぎるんだらうな」

「そういうこと言うの止めてよ。てか、あんたのほうがノリノリだったじゃないの」  
「そりゃ、まあ、ほら、興味本位というかね。友達によく使ってたって言ってたし。なんだかんだで萌ちゃんだって興味があったからついて来たんでしょ？」

「べ、別に興味とかそんなの……」

萌葱はさつと視線を逃がしたが、その先にあったのは玩具の自動販売機だ。

「何、あれに興味あるの？」

「ないわよ！」

東雲のからかい混じりの笑みにかちんと来る。

「あんたはさつさと髪を乾かして来なさいよ。風邪引くでしょ」

「分かってるよ。ドライヤーまであるんだから、本当に泊まろうと思えば普通に宿泊できるんだね」

洗面所に備えつきのドライヤーで東雲は髪を乾かし始める。

萌葱は脱いだ衣服の乾燥具合を確かめ、カバンから取り出したオレンジジュースで喉を潤した。

確かに東雲の言うとおり、風呂もトイレも空調もしっかりしているし、ルームサービスまであるという充実ぶりで、ただの宿泊目的でも困らない作りだ。

場所によってはビジネスホテルよりも安く泊まれるところもあるようだし、面倒なチェックインの手続きも必要ないので、楽に使える。旅行で宿泊費を安く抑えた時に、使うことがあると聞いたこともあるが、これなら納得ではある。

強いて言えば窓がなく、外の光を取り込めないのが難点だが、それはこのホテルの用途を考えれば当然の構造だ。

テレビも大型の液晶テレビだ。二、三年前に登場したモデルである。このホテルはそれなりに儲けがあるのかもしれない。

そう思いつつ、萌葱はリモコンを手に取りテレビをつけた。

髪の手入れは面倒だが、人は第一印象が七割だとよく言う。とりわけ、顔は重要であって、というのも人間の目線の高さがまさに顔のある位置にあるからである。他人を区別するときに、顔を見ない人はまずいない。そして、髪というのはまさに顔を印象付ける重要な部位であり、同時に一番手を加えやすい部位であるとも言える。

メイクを変えなくても髪型一つで印象は変わる。

東雲は姉妹の中で唯一、生まれた時から金色の髪を持っている。その上、この髪はアヴローラに由来する特異な色合いで、薄らと虹のように輝くのだ。

東雲はあまり自分の身体には自信がない。背は低いし、童顔で、恐らくは今後大

大きく変わることはないだろう。頑張っているが、こればかりは仕方のないことだ。胸も零菜のように明確に大きいと言えるほどではない。しかし、この髪だけは別。東雲だけの綺麗な色合いで、内心で自慢に思っているのだ。

肩に毛先が届くくらいの長さに揃えているのは手入れのしやすさと見た目を天秤にかけての結果だ。長いと手入れが大変になるが、短いとどうしても童顔が強調されてしまう。今が自分としてはちょうどいい長さであった。

「ちよつと、パーマしてみようかな」

毛先を見ながら東雲は呟く。

今まではストレートを通してきたが、その状態を維持したまま毛先だけゆるく内巻きにしてみるのもいいかもしれない。

萌葱行き着けの美容院があったはずなので、後で教えてもらうことにしよう。混沌界域から暁の帝国に帰ってきたが、東雲にとっては故郷であると同時に未知の環境でもある。五年も離れて暮らしていたので、様々なことが新鮮であった。

東雲はドライヤーを片付けて洗面所を出た。

途端、聞こえてきたのはあられもない声であった。苦しげで、息も絶え絶えとい

う感じ。しかし、どこか媚を売るような響きが妙に大袈裟に表現されている。

「あ、うわ、東雲ッ」

萌葱は飛び上がるようにびくんとして、慌てた様子でリモコンを押した。画面が変わり、毎日放送している見慣れたワイドショーになった。

「……さっきの雨、通り雨みたいだった。もうすぐ晴れるっぽい」

「あ、そうなの。まあ急だったから、そうなんだろうとは思ってたけどね」

萌葱は顔を赤らめながら、必死に誤魔化そうとしているが声の上擦っている。

こうも分かりやすいと返って呆れるばかりだ。

一族の長女として肩肘張っているが、こうした話には妙に疎い。というよりも、どうも臆病なところがあるのだ。

妹の模範になろうと努力していて、だからこそ失敗を恐れてしまう。

東雲は萌葱のそういうところは好きだ。ただ、そういった性格なのでチャンスを活かせないまま終わることが時たまあるのが玉に瑕だとは思っている。

それはそれとして、東雲は萌葱に近付いて、リモコンを取り上げた。

「あ、ちょっと」

「えー何見てたのー？」

にやにやにしながら東雲はリモコンのボタンを適当に押す。

「はー、地上波だけじゃなくて衛星もちゃんと入るんだ」

まさかラブホテルで普通にテレビが見られるとは思っていなかったもので、これは驚いた。そして、目的のチャンネルに到達する。

「……………その、けっこう過激、だね」

「……………あたしがつけようと思ってつけたチャンネルじゃないからね？」

「分かってるよ、大丈夫大丈夫」

そう言いつつ、東雲は生唾を飲んだ。

大型テレビは大迫力の視覚情報を提供する。画面の中で繰り広げられているのは、「まっとうな」プレイではなく、極めて特殊な嗜好の人向けの演出であった。

「潜入捜査官のくっころモノは、人気あんのかな？ 男の人はこういうの好きだったりする？」

「あたしに聞くな。ていうか、いつまでもそんなのつけんな。もどして、元の番組に」

「えー、うん」

「なんでちょっと先が気になるみたいなのよ、あんた……」

東雲は言われたとおりにチャンネルを変えて、もとのワイドショーに戻した。話題は浄水場に侵入した子猫の捕獲騒動で、三ヶ月前にテロ事件の標的になった国の報道としては実に平和な内容である。

「まあ、こういうのは姉と見るもんじゃないなって」

「当たり前でしょ……」

ベッドの上に寝転がる東雲は、うつ伏せのままに床に置いたバッグを開けた。中から取り出したのは、病院で処方された薬であった。

「それ、いつまで飲むの？」

「さあ？ 半年は様子見するみたいだよ」

「そんなにかかるの？」

「まあ、そんなもんじゃないかな。萌ちゃんは？」

「あたしはそういうの特にない。異常なしくて結果だから」

萌葱はクリスマスに、東雲はバレンタインデイに拉致されている。

何とか救出され日常生活に戻ることができたとはいえ、そのときの辛い経験はなかったことにはならない。

萌葱にとって幸いだったのは、悪魔と融合した事実そのものが尻の脊獣によって巻き戻されたことであろう。結果的に後遺症が残ることがなかった。一方の東雲は拉致されていた数日の間に多数の薬物を投与されていた。吸血鬼を籠絡するため開発された強力な薬物だ。東雲が第二世代の吸血鬼ということで、効きが悪かったのが奏功したが、それでもまだ完全に薬効が抜け切っていない。

精神安定剤や睡眠薬も手放せないのが現状だ。少しずつよくなって来ているが、油断はできない。発作的に恐怖や不安が膨れ上がって、貧血になってしまうことが時たまある。

半年というのは、治療方針を決めていくための様子を見る期間であって、実際にはさらに長期に渡って影響を見なければならぬのだ。

それでも、普通の人間と異なり東雲は強力な吸血鬼だ。オーバーライト上書きによって旧き世代と同等の固有堆積時間を手に入れた彼女は、最強格の力を持つに至った。薬への耐性も比例した上昇しているので、ディアドラが使った薬の影響は想定していたよ

りも早くなると見られている。

「お、吸血してる」

テレビのチャンネルを変えていくと、ちょうどお昼のサスペンスドラマの再放送をしているところであった。

映画の吸血鬼が、血を吸って仲間を増やす場面だった。

「相変わらずの名誉毀損具合ですな」

と、東雲は冗談めかして言う。

吸血鬼を化物として描く作品は多い。人間社会と吸血鬼は、長らく対立していたため、政治的にも人間側は吸血鬼を貶める娯楽作品を好んで製作した時期があった。数ある創作された吸血鬼の中でもドラキュラは成功したキャラクターの一つだ。陽光や十字架、流水を嫌い、吸血によって仲間を増やす悪魔のような存在は大本の映画から独立して、一つの怪物像として成立していた。

こうしたドラキュラ映画は魔族差別的として嫌う風潮もあるが、暁の帝国では抵抗感なく娯楽作品として受け入れられている。

「吸血と言えばさあ、東雲、凧君から血い吸ってる？」

「ん、まあ、何回か」

「ふうん」

「いや、別に変なあれじゃないけど。他の娘もしてるし。空ちゃんなんてバンバンじゃん？ わたしは、まだ言うて三回だけだし」

東雲が初めて吸血をしたのがバレンタインデイの直前だった。その後、期間が開いて春休みに二回、軽く吸血している。

吸血は吸血鬼にとってそこそこ重要な行為だが、血を吸われる凧はもうすっかり慣れてしまつてあまり抵抗感がなくなっているようだ。それこそ、空菜に対してなドルーチンワークのようになっていいる。

もっとも、それは信頼関係が出来上がつていて、吸血に対して互いに理解しあっているからこそである。

「萌ちゃん、やっぱり興味ある？」

「いや、まあ、興味って言うか……」

「凧君、噛みたい的なあれ？」

「……最初、どうやった？」

「最初？ あー、最初ねえ」

東雲は一カ月前のことを思い出す。

初めての吸血はとても大切な出来事である。性的な分野に関わるので、初めの一歩を踏み出せない思春期吸血鬼は珍しくない。

その一方で慣れてくれば自然と吸血できるようになる。相手との信頼関係を築いていることが前提だが、萌葱も東雲もその点はクリアしている。

凧は常に受け入れ態勢をとっている。後は吸血する側次第となるだろう。

「最初のときは、まあ、自然になるようになったって感じじゃない？ まだみんな着てない頃だったし、一緒にいるうちに、こう、吸血の感じになってったわけ。雰囲気的大事なところあるし、最後、じゃあ吸血してもいい？ みたいな流れになっ  
たよ」

「どんな流れよ、それ。抽象的過ぎてまったく想像できないんだけど。てか、この前もそんな言い方だったし、実際どうなのよ」

萌葱は問い質すように尋ねた。一方の東雲は、初めての吸血について話をするのが気恥ずかしいというわけでは、もちろんなかった。

必死になって土下座までして血を吸わせてもらったというのが、恥ずかしいを通り越して情けないと思えたので、人に言いたくないのである。これは、凧と自分だけの秘密なのだ。相手が凧であれば、もういっそいくらでも土下座して構わない。一回したのだから、二回目以降も変わらない。むしろ、そんな情けない自分を楽しめるくらいだが、それはそれ。萌葱に知られるつもりはまったくくない。

「こっちからお願いする形にするしかないけど、頼めばできるよ。凧君なら」  
「そうかな」

「うん。萌ちゃんなら大丈夫。凧君、断わらないって。だから、一回頼んでみればいいよ。一回、噛ませてって」

「それでいけるもん？」

「いけるいける。相手、凧君でしょ？ なら、いけるって」

あまりにも軽い感じで言う東雲に疑いの視線を向ける萌葱。

確かに凧は経験豊富だし、年頃の姉妹の中で萌葱だけが出遅れている感じがあ  
る。紅葉は遠方にいるので除外。あれは、なかなか読めない女だ。とにかく、凧の  
傍にいながら萌葱だけが吸血できていないのは由々しき事態である。これはどうに

かしたいと思ひながらきつかけが掴めないでいた。

「頼めばいいって、それができないから今の今までずるずる来てたんだけど」

萌葱が凧に吸血を頼めないのは、複雑な感情が入り乱れているからである。

萌葱はずっと凧に対して姉として振る舞ってきた。姉であるということは、萌葱にとってアイデンティティを形成する重要な要素だ。

萌葱は明るく振る舞っていても、自己評価の低さと不安感を常に抱いている。その感情が努力の原動力にもなっているのだが、姉という唯一無二の要素は萌葱の自己を確立する上で大切な立脚点である。それが吸血によって崩れるかもしれないと思うと、強い不安を感じる。

しかし、いつまでもそうしていられないのも事実だ。すでに、零菜も麻夜も東雲もクロエも吸血を経験しているし、紗葵も凧の血の味を知っている。萌葱だけ取り残されているのもまた、姉の立場がない。

今まで通りの関係性は、破綻しつつある。皆と対等以上でいるためには、凧からの吸血は必要不可欠だ。もっとも、そんな理由で吸血するのは、あまりにも身勝手であるという良識も持ち合わせているし、吸血は軽い気持ちでするものではないと

いう思いもある。

吸血する理由もしない理由も持ち合わせているので、結局は萌葱がどうするかを決めるだけだ。

「ちなみにさ、東雲」

「ん？」

「あんた、仮にだよ。あたしが凧君から血を吸ったとして、それは東雲的にはどうなの？」

「どうって……ああ、そういうこと？ 別にいいよ、萌葱ちゃんだし。姉妹以外の誰かだと、嫌だけど」

「そう」

「実際、零菜ちゃんも麻夜ちゃんも吸ってるし、内々の話なら今更だもん。遅れてるってんなら、わたしもそうだし。ただ……」

「ただ？」

「それがきっかけでわたしに血をくれなくなったら、それは困るよ」

東雲はこの一瞬だけ真剣な眼差しを萌葱に送った。まるで牽制するように。

風が平等に血を与えてくれる状況には文句はない。しかし、誰か一人を選ぶようなことがあれば、その枠は自分に与えられるべき。誰も言わないが、誰もがうすうすそう思っているのだろう。

『みんなで平等に。大事な物は喧嘩をしないように分け合う』という考え方は、ずっと昔に萌葱が言い出したことだ。その考え方が姉妹の中で根付いている。

ちなみに、この考え方の出所は浅葱が何気なく言ったことを萌葱が真に受けた事に端を発するが、結果的に姉妹間の争いはほとんどなくなった。

独占行為に対しては、抑制が働く。ただ、それにも限度がある。将来的にどうなるかは不透明で、流動的だ。

「ん、分かった。春休み中に頑張る」

と、萌葱は宣言した。

「萌ちゃん、そんなこと言って、ほんとにできるの?」

「あたしだってやり方くらい知ってるし、やれば分かるんでしょ?」

「そりゃ、そうだけど」

吸血は本能に根ざした能力だ。

頭で考えてすることではない。生まれたての馬が、教えなくても立ち上がるように。吸血鬼の遺伝子に吸血方法はしつかりと刻まれている。後は上手い下手の問題だが、そこまでを萌葱が意識する必要はないだろう。

「……東雲さあ」

「何かな」

「頼めば何とかなるって言ったじゃん？」

「うん、多分ね」

「頼むの手伝ってもらえないかなあ？」

「……そこでヘタれるから先に進めないんじゃないの？」

呆れたように東雲は呟く。

萌葱が臆病なのは、長い付き合いだから知っている。

東雲は萌葱を似た者同士だと思っているし、萌葱は自分に不都合だと分かっているながら、回りを立てるためにわざと貧乏くじを引くこともあるくらい調整役としての役割に甘んじてきた。

萌葱は生粋の善人なのだ。

生来のものか後天的なのかは知らないが、ともかく争いが嫌いで悪事ができない性質だ。そういう性格だから、何だかんだで信頼されるのだろう。

「わたしにできるかっていうと分からないけど、まあ、やるだけやってみる？」

東雲だって、凧の血を簡単に吸っているわけではない。最近、やっと慣れてきたという程度だ。萌葱の力になれるかどうか保証はないが、乗りかかった船だ。それくらいなら、手伝ってもいいだろうと受け入れたのだった。



「……ここって何時までだっけ？」

「何時までってのはなかったけど、最短は九十分ってことじゃない？ 雨も上がってみたいだし」

「そう？」

「雨雲、もうなくなっちゃよ」

萌葱はスマホを弄っている。

氣象庁の雨雲レーダーを見ているようだ。

「そろそろ出るか。割り勘ね」

「えーお姉ちゃん奢ってよ」

「嫌よ。こういうときばかり、そんな呼び方するんじゃないっての」

「ぶー」

東雲のブーイングを受け流して、萌葱は乾いた服を着た。着替える東雲から半額分を徴集し、支払いを済ませて、ホテルを出た。

二人で割れば、大した金額ではなかった。

ビルとビルの間に見える空は真っ青だ。本当に一時的な通り雨だったのだ。日が差す路地はそこかしこに水溜りができていて、午後の陽光を反射してる。

周囲に怪しげな看板があるものの、雨上がり独特の匂いは、十分に爽やかさを感じさせた。

「もう完璧に晴れたね」

「ほんと、さっきまでのあれ具合が嘘みたい」

豪雨で濡れた衣服もカバンもすっかり乾いている。おかげで、雨に打たれたとは

思えない状態でホテルを出ることができた。

「さて、帰りますか」

と、萌葱は来た道を戻る。そこで、傍と立ち止まる。

「萌葱ちゃ……あ」

となりを歩く東雲も目をまん丸にして止まった。

すぐ目の前に空菜が立っていた。

「え、空ちゃん？　なんでここに？」

「駅に行くのに近道になるので」

空菜は買い物帰りなのだろう。リュックサックを背負っている。お洒落よりも実用性を重視した格好なのは、それなりの量の買い物をしたからだろうか。

空菜は二人を不思議そうに眺めてから、ビルに視線を走らせる。

「お二人は、そういう？」

「ち、違うッ、誤解ッ」

「そんなわけないからッ」

「……あ、はい。分かりました」

萌葱と東雲の否定は同時であった。必死の劍幕に空菜は一步引き下がる。

「ホントに分かった？ 大丈夫？」

「はい。大丈夫です。今は、そういったことにも寛容な時代ですし、わたしも理解があるつもりなので」

「だから違うってば!？」

後日、中央高校の屋上にて。

空菜は中学時代からの友人と新たに知り合った友人の計三名で昼食を摂っていた。前者の名は蛍、後者の名は秋葉だ。

「空菜の卵焼き、手作りってマジ？」

と、蛍が言う。

「そうです。冷凍ではないんですよ」

「え、それ自分で作ってるの？」

弁当箱を覗き込む秋葉は驚いたようであった。

「はい。別に難しくはないので」

今日の弁当は空菜の手作りだ。凧の分も空菜が用意している。朝早く起きて、朝食と弁当を用意するのが、空菜の日課になっていた。その代わり、夕飯は凧が作る事が多くなった。一緒に暮らす中で自然と役割分担が成された結果だった。

「そういえば、この前身近な人がラブホから出てきたところに遭遇しました」

思い出したように空菜が口走ったのは、蛍と秋葉の会話の中でホテルの話が出てきたからだ。曰く、三組の誰と誰が、どこに行っていたところを見たとかいう四方山話である。

「面と向かって逢っちゃったの？」

「そうなんです」

「うわー、そりゃ何ていうか、気まずいねえ」

「ですよ。まして、同性でしたから。そういうことも、今はとやかく言う時代ではないわけですが」

「え……同性なの？」

「そうだったんです。同性でそんなところに入ることってあるんですね」

「いやいや、そりゃびつくりでしょ。気まずいなんてもんじゃないし……へえ、え

? 身近?」

「ん……ハンバーグ、豆腐で嵩増ししすぎて失敗だったかも」

空菜は眉根を寄せてハンバーグの出来に不満を抱く。

そんな空菜を余所目に蛭と秋葉は視線を交わした。

「身近な人が同性とだって」

「空菜みたいな超絶美少女と一つ屋根の下で何も無いって、やっぱそうなのかな？」

「あ、でも、身近って言っても、別に確定じゃないし」

「でも、空菜って二人暮らしなんでしょ？ それに明言できるもんでもないし」

「あー……」

空菜は水筒に入れてきた味噌汁をカップに注いで、舌鼓を打っている。

今、まさに余計な誤解を生んだことにはなんら気付いていない様子である。

「どうしました?」

「なんでも」

「大丈夫。うん、そういうのもわたしはありだと思う」

「はい？」

空菜は小首をかしげる。

どこことなく、空菜を気遣うような態度が奇妙だったが、他人の機微に疎いのは自覚している。生まれて一年ほどしか経っておらず経験がまだまだ足りないのだ。

友人の反応を不思議に思いながら、空菜は残りのおかずを口に運んだ。

水面下で風が極めて不本意な扱いになってしまったことには終ぞ気がつかなくなつた。

萌葱と東雲は正反対ながらも似た者同士で気が合う。考え方が違うのに結論が同じになったりする。

## 幕間

暁の帝国の新学期は四月第二週の月曜日から始まる。

今日は、第一週の土曜日である。つまり、明後日からついに高校の入学式となるのだ。約一ヶ月もの長期間の春休みは、しかし、いざ振り返ってみると、特に何もないままだから過ぎしてしまったという事実だけが横たわっている。

通院と訓練以外の外出はほとんどなかった。かといって、何かしたいことがあるかというところでもなく、このまま高校に入学しても、おそらくは同じような日々を過ごすことになるのではないかと凧は思う。

とはいえ、高校に入学したら凧はすでに内定している攻魔師事務所でのアルバイトが始まる。今までよりも、外に出る機会が増えることになるので、完全に今までのような生活と同一ではなくなるだろう。

部活ではなくバイトに精を出す高校生活になるのだろうか。

後は、勉強について行けるかということが不安ではあった。

凧は充電を終えたスマートフォンを取り上げた。何かの通知が来ている。ロック

画面を解除してメッセージアプリを起動すると、零菜の自撮り写真だった。

『昨日買ったヤツ。どうかな？』

とのこと。

春物の薄い桃色のカーディガンのことを言っているのだろう。高校の制服のワイシャツの上から着ている。スカートの青色とともに爽やかな春の到来を印象づける。零菜はもともとの素材がいいので、よほど奇抜なものでもなければ、大抵似合うのだ。

五枚目になる零菜の写真をフォルダに保存し、少ない語彙を駆使して感想を伝える。

いつも同じ感じになってしまるのが悩みどころだ。しかし、あまり長々書いても、むしろ気持ち悪いのではないかと思ってしまう。

風は続いてスマートフォンで、スケジュールを眺める。カレンダーの多くは真っ白で、入っているのは入学式と最初の出勤日だけだ。

そこで、風はふと机の引き出しを開けた。

「ノートがないな」

電子化が進んだ世の中だが、学校の授業は紙の教科書と紙のノートで行われている。中学時代のノートをそのまま使い続けるわけにも行かず、手元には予備のノートがない。

「めんどいなあ」

と、ぼやきながらカーテンの隙間から外を眺めた。晴れ渡った空だ。燦々と輝く太陽は初夏の日差しだ。しかし、これが明日になれば天気が崩れて、雨になるらしい。今買いに行くか、明日買いに行くかの違いはかなり大きなものになる。

いっそ外に出るのなら、新生活に向けていろいろと身の回りの品を買い換えてみるのもいいかもしれない。

凧が学校で使うシャーペンは、三年前に購入したものだし、ペンケースも新しくしたい。

さほど大きな買い物でもない。

凧は財布を綿パンの後ろポケットに押し込んで、玄関を出た。

「うわ、びっくりした」

と、開けたドアの向こうで声がする。

ドアを閉めると、金色の髪が並んでいた。東雲と萌葱であった。陽光を浴びてキラキラと輝く金と虹の髪が東雲で、もともと色素の薄めの髪をブロンドに染めてサイトテールにしているのが萌葱である。

こうして並んでいると同じ金髪でも、光の反射の仕方や色の濃さが違うのが面白い。

「凧君、お出かけ？」

東雲は凧の格好を見て尋ねた。

シヨルダーバッグを肩にぶら下げているだけのラフな格好だ。

「ちょっと、買い物。文房具とか、足りないことに気づいてさ」

「明後日もんね、入学式。課題とかあるんじゃないの？ 終わった？」

「一応ね。最初のテストは、まあ適当に」

入学式の後に行われる課題テスト。国数英の三科目が対象なのだが、あまりやる気が起きないのだった。

「そっちは？」

「ん？」

「出かけるのだった」

「んー……」

東雲は視線を泳がせて、萌葱を見る。

「……何？」

萌葱は、首を傾げる。

疑問符を浮かべる萌葱に対して東雲は何やらひらめいたように相好を崩す。

「わたしは別に外に用事ないけど、萌ちゃんは新学期の準備は大丈夫？」

「え、あたし？ あたしも別に……い」

萌葱は顔を歪めてよろめく。東雲が脇腹を抓ったのだ。

「な、何すんのよ！」

「確か萌ちゃん、さっき学校始まる前に用意する物があるって言ってたよね？」

東雲は、萌葱の抗議を無視した。

「え、えーと……あ、新しいマザーボード、いうッ!？」

萌葱が飛び上がる。

今度は東雲が萌葱の尻を抓ったのだ。

「朝から晩まで黙々と機械弄ってばっかでないの？」

「機械弄って何が悪いってのよ。趣味が合わないからってとやかく言われる筋合いがないんですけど」

「わたしだって萌ちゃんの趣味をどうこう言うつもりはないけど、今は違うでしょうに。そんなんだから、何の進展もないんだよ」

東雲は完璧に上げたセンチリングを完璧に無駄にしそうな萌葱に呆れてしまう。  
「凧君、ごめんね。ちょっと待ってて」

東雲は脱兎の如く自分の部屋に走って一分ほどしてから戻ってきた。

「はい、これ上げる」

と、凧に渡してきたのはファミレスのクーポン券だった。

「ここ、最近CMしてたところだな」

「そうそう。この前、空ちゃんを連れて行ってきたんだ。んで、帰りにもらった。

明日まで二十パーオフだから。凧君、お昼まだでしょ？ 行ってきなよ」

「へー、東雲は？」

「わたし、今日はいろいろとつまみ食いしちゃったから夜までいらんの。このお腹

をすかせたお姉ちゃんを何とかしてやって。それ、二人まで使えるから」

そう言うや東雲は萌葱の背中をバシバシ叩く。

「そっか。悪いな、もらっちゃって」

「気にしない気にしない。クーポン有り余ってるから」

東雲は暁の帝国に戻ってきてから、時間を見つけては外に出ている。自分が離れて暮らしている間に新しくなったところが自宅周辺にも多々あるのだ。年に一、二回しか帰省できなかったから、四年の空白は意外に大きかったのだ。

そんなわけで、東雲の手には七件分のクーポン券がある。家族に融通するくらいなんてことないのだった。

「で、萌ちゃんは何買うんだっけ？」

「あ、えーと、新しい眼鏡、買いに行こうかなって」

東雲の剣幕に押されて、萌葱は頭をフル回転させる。その上で咄嗟にもう一つの趣味を口に出した。眼鏡といっても萌葱の視力が悪いわけではない。お洒落のための眼鏡だ。これを萌葱は十本ほど持っている。

「だそうです、凧君」

「ん、おう……ん？　じゃあ、萌葱姉さんとお昼しつつ、必要なものを買おうと。東雲は来ないんだな？」

「うん。わたしはいい。今回は遠慮するよ。次ね、次」

「オツケー、了解」

意外な展開になったが、一日暇を持て余しているくらいだ。クーポンを使える店で安く外食できるのもいい。

「じゃあ、姉さん。行く？」

「うん、行く」

こくり、と萌葱は頷いた。



太陽がちょうど南の天上にさしかかろうとしている。

気温は緩やかに上昇していて、外にいただけで軽く汗ばむ陽気だ。まっすぐに伸びた道路にうっすらと陽炎が発生している。このまま暑苦しい夏に向けて、季節は

一直線に進んでいくのだ。

「なんて言うか、ごめんね。変なことになって」

と、萌葱は言う。

「いや、別に謝らなくてもいいよ。どうせ、時間はいくらでもあるんだし。最初はどこにする？」

「凧君の用事を先に済ませようか。あたしがついてきてるだけなんだし」

「といっても文房具だから、どこでもいいんだよな……姉さんは文房具はどこで買ってるんだ？」

「あたしは、いつもは学校の帰りに寄るから、彩海近くの百貨かな。でも、まあ、こういう時に行くんなら、やっぱり矢吹通りだね」

「矢吹通りね。じゃ、その辺にするか」

矢吹通りは中央行政区の西よりにある若者文化の発信地である。複合ビルが建ち並び、ショッピングモールから映画館、水族館などなど、多彩な娯楽を提供している。

ここが若者の街になったのは、ここ十年の再開発の結果だ。もともとは古い商業

ビルが建ち並び、夜には怪しい客引きが夜のお店の案内のために繰り出されるような治安の悪い地域だったらしい。

それが十年前に違法に持ち込まれた人工魔獣の暴走で壊滅した。暁の帝国が正式に日本から独立して以来、最大の死傷者数を出した大惨事となった。

この強力な魔獣は、討伐に出た紗矢華の煌華麟を一時的に使用不能にするなど猛威を振るったが、最終的には紗矢華が繰り出した吹き矢の呪詛によって滅んだ。

以降、この辺り一帯は地名は矢吹通りと呼ばれるようになり、重点的な再開発により若者の街に生まれ変わったのであった。

凧はあまり立ち寄らないが、萌葱は当然、この賑やかな地域を庭としている。服を買うにも眼鏡を買うにも、この街での調達が一番だ。

モノレールに乗って駅二つ分で、最寄り駅となる矢吹駅に到着する。地上四階、地下一階の駅ビルは、帝国内でも上から数えたほうが早い敷地面積を誇り、屋上の緑化公園は人気のデートスポットだ。もちろん、凧も萌葱もそんなところに寄り道をするという選択肢は持ち合わせていない。

「さすがに人が多いな、ここは」

と、凧は感想を漏らした。

春休みの終わりを目前にした最後の土曜日である。周囲には多くの若者が溢れかえっている。

「大学まで一斉に月曜からスタートだもんね。今のうちに遊んでおこうっていうリア充な連中よ」

「今のうちに遊ぶってんなら、俺たちも大して変わらないような気が」

リア充の定義はよく分からない。恋人と面白おかしく過ごしていればリア充なのか、それとも仲のよい友人と他愛のない話をしていればリア充なのか。

駅ビルの中には多くのテナントが店を構えている。凧の目的を達成するには、ここだけでも十分なのだ。

「じゃあ、とりあえず文房具から。ここにしよう」

五分ほど歩いて見つけたのは、駅ビルの三階に店を構える文房具店、クレアだ。ごく一般的な文房具を扱っている店で、学生をターゲットにしているだけあって値段も良心的である。全国に十五店舗、日本に出店した店を合わせると五十店舗を越える暁の帝国を代表する文房具店である。その矢吹通り店がこの駅ビルに入ってい

るのだった。

全国最大規模のクレア矢吹通り店は、この一店舗だけでおおよその需要は満たせると言われるくらいの品揃えを誇る。

品揃えが多すぎて、目移りしてしまう。必要なのはノートだけなのだが、ついつい他にも手を伸ばしてしまいそうだ。

「凧君、ノートだっけ？」

「そう。明後日からだつてのに、ストックがなかった。中学までのをそのまま使うのも、なんか違うなって思ったんだよね」

「せっかう高校デビューなんだから、心機一転したいよね」

「そこまで大それたことじゃないけど。ただのノートだし」

「いやいや、ノートとかシャーペンとか、普段使う物を変えるってのは、気分転換にはなるよ。あ、これなんてどう？ 可愛くない？」

「可愛い」

「買う？」

「俺が？ 萌葱姉さんじゃなくて？ 俺は普通のでいいよ」

萌葱が手に取ったのはデフォルメにしたカエルのキャラクターを象った消しゴムだった。

萌葱が使うのなら違和感がないのだが、凧が持ち歩く消しゴムにしては可愛らしすぎる。

「いちいちなくなったら買いに来るってのも面倒だろうし、この機会にまとめ買いたほうがいいよ。空菜だって使うんでしょ？」

ノートが五冊で一束になっているのを五束購入することにした。他にもボールペンやシャーペン、シャーペンの芯、水性のカラーペンを黄色、水色、緑色の三色分購入した。

ただ文房具を買いに来ただけなのに、すでにクレアだけで一時間も使ってしまった。

「ちよっと、時間をかけ過ぎちゃったね」

「このまま眼鏡、探しに行こうか。レンズの調整とか、あるんじゃない？」

「それは行ってみてだね。あたしは度が入ってる必要ないから、そこまで時間はかからないと思う」

そんなことを言いながら、矢吹通りを歩く。

凧は萌葱の行きつけだという眼鏡店の所在地を知らない。萌葱に先導される形で、道を進んでいく。

「眼鏡、どこで探すんだっけ？」

「ジーニアスって店。デイブレん中にあんの」

「あー、あそこね」

辞書みたいな名前の眼鏡専門店は、デイブレ——デイブレークという複合商業施設の四階に入っている。

凧は入店したことはないが、通りかかったことはあるのですぐにイメージができた。

エスカレーターで四階が上がって、まっすぐにジーニアスに向かった。

休日の昼間で、店内はそれなりに賑わっている。けっして広いと言えるほどの店舗面積ではない。平均的なコンビニよりも少し広いくらいだろう。その中に十人の先客がいて、その全員がおそらくは同世代で、男女比は男3の女7である。

萌葱が趣味で集めているというおしゃれ眼鏡。その三割がこの店で購入したもの

らしい。暁の帝国のお姫様ではあるが、その経済観念はかなり一般家庭の中流家庭に近い。自然とちょっとした贅沢ですら、学生の手の届く範囲になるのだ。

萌葱は楽しそうに店内を一瞥すると、商品をゆっくり見て回った。凧は何か意見するでもなく萌葱の後ろをついて歩く。

「どれがいいかなー……凧君はどんなのがイイと思う？」

「俺に聞くのか」

「そりゃ、せっかく来てもらったんだし意見は欲しいでしょ」

「まあ、確かに……」

一緒に来ている以上は何も言わないというのも不自然だ。

しかし、凧にお洒落は分からない。ファッション誌を読むことはあるが、こだわりのない。特に意識して勉強したこともない。

もちろん、眼鏡というものが視力矯正のためのものだけでなく、ファッションを考える上で重要な小道具なのは理解している。

顔は人がまず最初に視認する部位だ。

それ故に顔を彩る眼鏡は、その人の第一印象を大きく左右する。

眼鏡は知的なイメージが強い。昔、まだ眼鏡がファッションとして広く受け入れられる前は、視力の低下 $\parallel$ ガリ勉 $\parallel$ 眼鏡着用というような連想もあり、眼鏡は地味で内向的で勉強がよくできるといふようなイメージと結びつきやすかった。

今はそういった旧来のイメージを越えて、様々なスタイルの眼鏡が登場している。眼鏡がファッションとして広まるにつれて、発生した需要を満たすために多様な形状の眼鏡が生まれている。

眼鏡の形状一つ変えるだけで、その人の印象は大きく変わる。

知的でクールに見せることも、人なつっこく活動的に見せることもできる。

「姉さん、眼鏡は結構こだわりがあったり？」

「うーん、そうでもないけど……」

萌葱は手近な一本を取り上げて、眺めている。半透明な水色の眼鏡だ。

「ブルーライトとUVカットは入りたい」

「吸血鬼なんだから、あまり関係ないんじゃない？」

「そうでもないよ。いや、最終的には治るんだけど、その瞬間は影響受けてるから。荷物だって、持ってるときは体力使うでしょ？　ま、結局は気持ちの問題なんだ

けどね」

おそらくは家族の中でも特にブルーライトを浴びているであろう萌葱だが、吸血鬼である彼女はそれによって目が悪くなるというようなことはない。不死の呪いが、萌葱の身体を正常な状態に維持している。ブルーライトカットもUVカットも結局は気休めでしかない。

「眼鏡って結構大事な戦略物資だと思うのよ」

「戦略物資？」

「または原始的な魔術の触媒的な？」

「どうということ？」

「人は見た目で判断する生き物って言うでしょ？ 何割とかは人それぞれにして  
もさ」

「それは、よく聞く話だけど」

「凧君はどう思う？」

「間違っていないんじゃない？ 普通の感覚だと思うけど」

「だよね」

萌葱は水色の眼鏡を元の場所に戻した。

「まあ、中には外見じゃなくて内面が大事とか、揚げ足取りに言う人もいるけど、そういうことじゃないよね」

「内面と外見は関係ないしね。それぞれ別に評価することかなって思うよ」

「そうそう。内面は内面、外見は外見。そして、人が人を評価する最初のポイントはどうしたって外見なわけ。内面なんて時間をかけて見てかなくちゃ分かんないし、外見がダメなら、その後の評価も厳しくなりがち。んで、ここだという外見するのは持って生まれた見た目じゃなくて、大抵がファッション。大げさなものじゃなくて、TPOに合った格好なのかってこと」

萌葱は、今度は黒縁の眼鏡を手を取った。形状はウエリントンと呼ばれる形状のファッション眼鏡だ。レンズ部分が台形に近く大きめなのが特徴だ。

「あたしは長女だし、人から侮られない格好は最低限しないとダメなんだよね」と、萌葱は少しだけ声のトーンを落として呟く。

第四真祖直系の第二世代の長女である萌葱は、政治的にも背負っているものがある。見た目を気にしなければならぬ立場という一面もあるのだ。

「で、眼鏡は戦略物資？」

と、凧は少し暗くなつた話題を強引に戻した。

「そうそう。ほら、どう？」

萌葱はウェリントン型の眼鏡を試着した。

飴色の太いフレームの眼鏡だ。レンズが台形で大きく、自己主張が強い。

「うーん、ちょっと違う」

「そう、じゃあ、これは？」

今度は飾り気のないシルバーのハーフリムだ。眼鏡は添えるだけで、萌葱の顔に注目を集める。

「俺はこっちのほうがいいかな。こっちのほうが頭良さそう」

「こらこら、あたしの頭が悪いみたいじゃないの」

「印象の話だから。細めの眼鏡ってそんな感じするし」

「分かるよ。分かるけどね」

唇を尖らせる萌葱。

「ま、こんな感じで眼鏡ってのは印象を操作する小道具としてはかなりの優れも

のってこと。自分をどう見せたいかってイメージがあれば、後はそれに合った眼鏡をつけるだけで第一印象を操作できるってわけ。古代から化粧が呪術的な意味合いを持つてんのも似たような理由かもね。状況に合わせてヒーローは色変わるし、ロボットはパーツを付け替えるし、うちのファッションも、そんな感じの処世術なのさ」

萌葱はそう言いながら一通りの眼鏡を眺めた後で、眼鏡を二種類に絞り込んだ。「スクエアとハーフリムはどっちがいいと思う」

「せっかくだから、スクエア」

「ふーむ、そう。確かに、ハーフリムよりはカジュアルよりだし、いいかもねえ。うん、はい、じゃあこれ」

不意に萌葱は尻に黒縁のスクエア型の眼鏡を渡してきた。

「え、俺はいいよ」

「一本か二本はあったほうがいいって。ファッションは呪術。侮ったら後悔するよ」  
「……そう言われるとなあ」

萌葱の言わんとすることも分かる。呪術に絡められると断りにくい。さすがに姉

を十六年努めているだけあって、凧のツボをよく心得ている。

仕方なく凧は黒縁の眼鏡をかけた。

「ああ、へえ、うーん、なかなか似合うね。こう、休日の図書館とか、カフェとかにいそう」

「そう？」

「いいじゃん。こうなると、服も変えたいね。チノパンをブラックにして、上はシンプルに……」

「俺のはいいって。今は萌葱姉さんのを買いに来たんだけ」

「そうだけど、せっかくだからねえ。よし、あたしのはこれにして、凧君はそれね」

「ん、いや、俺は……」

「遠慮しないで。高校の入学祝いだと思ってさ」

萌葱は浮かれた様子で話す。

店内で押し問答するのも恥ずかしく、萌葱がここまで言うてくれるのならと素直に好意に甘えることにした。

眼鏡のレンズの調整には二時間ほどかかる。最新技術を使ってもブルーライト

カットの処理などなどあって、萌葱の要望に応えるためにはそれだけの時間が必要ということだ。

その時間を凧と萌葱はファミレスで潰した。

東雲がくれたのは飲み物が一杯無料のサービス券で、凧と萌葱でそれぞれアイスコーヒーとオレンジジュースを注文した。昼食としてポロネーゼと小さなマルゲリータピザを頼んだ。



できあがった眼鏡を受け取って、本日の予定は概ね終了だ。モノレールに乗って、家に帰るだけである。

萌葱は凧の袖を引っ張った。

「ちよっと、行きたいところあるんだけど、いいかな？」

と、萌葱は言う。

特に予定のない凧は、二つ返事で了承した。

何となく、それまでの萌葱の表情とは違う暗い顔をしているのが気になった。言葉少なになつた萌葱を気に掛けつつ、やって来たのは第三南地区の国営公園だった。

「何でまたこんなところに？」

ここはクリスマスステロの現場となつた公園だ。そこかしこに破壊の痕跡が残っていて、公園内は立ち入りが制限されている。

アルディギア製の軍事機密の多くがこの園内に散乱していた。優先的に片付けられたが、その兵器たちが残した爪痕を消すには、もうしばらく時間がかかりそうだし、眷獣が引き起こした破壊の中には呪いに近い性質を帯びたものもあるので、さらに長期の復旧計画が必要になるらしい。

「いいから、来て」

萌葱はずんずんと先に行く。

園内のすべてが立ち入り禁止になつてゐるわけではない。無事だつた遊歩道は一般に開放されている。しかし、あれだけの事件があつたのだ。曰く付きの公園に立ち入る人の姿は少ない。

「へー、そうはいつでもそこそこ直ってきてるじゃん」

と、園内を見て回る萌葱は言う。

倒れた街灯は元通りになっているし、めくれたアスファルトも整えられている。立ち入れる範囲の保修は、とりあえずできているように見える。

「うーん、でも、やっぱり、あつちはまだまだみたいね」

萌葱が見るのは、遊歩道の奥に見える迎賓館。そちらに向かう道はすべて規制されて立ち入れない。倒れたり、燃えたり、凍ったりと様々な要因で死に絶えた木々もそのまま、地面は捲れ上がり、陥没し、無残な姿を残している。

「さすがに今年はいろいろあったし、公園は優先度低いんじゃない？」

「ま、そうよね。ぶっちゃけ、あそこ全然使わないしね」

「あの迎賓館、一応普段は会議とか研修とかで国の人が使ってるから」

「あ、そうなの」

「そのための施設も兼ねてるって話」

「むしろ、そっちがメインよね」

萌葱はじっと迎賓館を眺めてから、意を決したように脇道に入った。

「ちょっと、姉さん！」

「大丈夫、大丈夫。監視カメラとか、その辺は押さえてるから」

「そういうことじゃなくて、ああ、もう」

先に行く萌葱を追いかけて尻も規制線を越えた。

公開されている箇所とはまったく違う世界に入り込んだようだった。静寂だ。鳥の声も遠く、漂う陰気な気配は複数の魔力がここでぶつかり合った証だ。それを恐れて、普通の動物は本能的にこの辺りを避けてしまうだ。

こういうところは、あまりいい環境とは言えない。

よくない物の溜まり場になりやすいのだ。

萌葱は壊れた道路を歩いて行き、自動販売機の前で止まった。電気の通っていない自動販売機は、クリスマスからずっと佇んだまま放置されている。

「姉さん？」

「ここ、あたしが捕まったところ」

「え？」

「あたし、ここで悪魔に捕まったんだよね」

「ここで？」

「そう」

クリスマスの日、萌葱が大悪魔ベルゼビュートに取り込まれ、凧が身体を張って救出したのは記憶に新しい。

萌葱にとっては、酷いトラウマを刺激する場所だ。

「姉さん、どうしてこんなところに来たんだ？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫」

萌葱の顔色が見るからに悪い。

日常生活には支障がないくらいだが、それでも心の傷は治っていない。この公園がそうであるように、萌葱の心身の治癒にも時間がかかる。

「凧君がいてくれるから、大丈夫」

「別に俺は何もしてないぞ」

「そんなことないよ。助けてくれたんだもん。助けてくれた人がいれば、ここに来てでも大丈夫って分かった」

それでも萌葱は少し震えている。

全然、大丈夫そうには見えなかったが、凧にはかける言葉が見つからなかった。気の利いた言葉を掛けてあげられるほどの語彙力はなかったし、余計なことを言つて気を張っている萌葱を傷付けたくもなかった。

「そこ、座るか」

「ん」

凧はすぐその青いベンチに萌葱を連れて行った。しばらく歩きづめだったので、腰掛けると足の裏からふくらはぎまでがじんじんした。

「ふー……、新学期前にちょっとだけ前進。区切りとしてはちょうどいいよね」

「姉さん、あまり無理すんなよ」

「うん。心配掛けてごめんね。あと、助けてくれてありがとう」

「三ヶ月も前の話だろ」

「三ヶ月しか経ってないよ。まあ、最近も東雲のこともあったし、なんかもう、激動の一年だったよね」

「厄年かな」

「凧君が？　　うちらが？」

「全員」

「かもね」

萌葱の相好が崩れる。トラウマで固まり、緊張していた身体がほぐれてきたようだ。

「うん、じゃ、帰ろっか。ここにいるの、誰かに見られるのよくないし」

「そうだな」

凧が腰を受けた時、萌葱が慌てて袖を引っ張った。

「危なッ、いきなり何？」

危うくバランスを崩すところだった凧は、尻餅をつくようにベンチに座り直した。

「あ、ごめん」

萌葱はパツと手を離れた。

「何かあった？」

と、言う凧の問いに萌葱はすぐには答えなかった。

視線を逸らして、凧と目を合わせようともしない。不安を感じているようにせわしなく、視線を動いている。

そして、一度大きく息を吸ってから、萌葱は口を開いた。

「ちよっとお願いがあるんだけど、いいかな。嫌だったら、断ってくれて全然いいんだけど」

「内容によるけど、そんな改まって何？」

「吸血、してみたっていうやつなんだけど」

「え？ 吸血？」

「え、あ……その、今のなしでいいから！ 帰ろうか。もう夕方だしね！」

萌葱は耳まで真っ赤になった。

思い切って頼んでみたが、聞き返されてしまった。一度目に勇気を振り絞った萌葱に二度目はない。そもそも、姉が弟にこんなことを頼むのはいかがわしいのではないかという常識的な自制心と意地が萌葱を我に返らせる。

二人きりの誰もいない環境が、萌葱にアクセルを踏ませた。しかし、想定外の事象に対してブレーキを踏むときは一瞬だ。

「血、吸ってく？」

凧がわたわたする萌葱にそう提案した。

吸血されることに慣れていく風にとっては、それは特別なイベントではなかったのだ。

「え、その、いいの？ そんなあっさり」

「まあ、慣れてるし」

「……空菜とか毎日吸ってるっていうからね」

「医療行為だけだな」

「知ってる」

と、萌葱はやや不服そうに呟く。

「でも、急にどうして」

「だって、みんな風君から吸ったって言ってたし。あたしだって興味はあったの！

「あ、ああ、そう」

考えてみれば、風は零菜に始まり、今年になってから何度も血を吸われる経験をした。暁家以外には血を与えていないが、家の中では頻繁に血を提供している。特に空菜は、体質上まだしばらくは吸血が必要だ。それでも、確かに萌葱には今まで

に一度も血を吸われていない。

「じゃあ、はい、いいよ」

「何かもう、あっさりしすぎて拍子抜けする……」

毒気を抜かれた萌葱だったが、血を吸ってもいいというお墨付きを本人からもらったのだ。ここで血を吸わなければ、いつ血を吸うのだ。

咳払いをして生睡を飲んで、心臓が異様な高鳴りをする。頭の中で血管が何倍にも膨らんだような気がするくらいだった。

「吸わないのか？」

「吸う。吸うから待って！」

深呼吸をした萌葱は緊張しながらベンチに膝をついた。前傾姿勢になって風の首元に顎を乗せるようにして体重を掛けた。風は萌葱の華奢な身体を受け止めて、バランスを保つ。

今までにないくらい強い吸血衝動に瞳が染まり、犬歯が疼いた。不思議なくらい明確にどうすればいいのかわかった。息をするのと同じくらい当たり前のように、萌葱は風の首に牙を突き立てた。

■

タワーマンションの五十二階に戻ってきたとき、西の空には太陽が沈んでいて、うっすらとオレンジ色が残っていた。それも数分後には消えて夜の帳が下りるだろう。玄関前の電灯がついて廊下を照らす。

「あ、帰ってきた。ずいぶん遅かったね、二人とも」

廊下でぼうっと突っ立っていたのは東雲だった。髪が少し湿っている。風呂上がりのだったようだ。

「あんた、なんつー女子力の欠片もない格好してんのよ」

萌葱が指摘した東雲の格好は、灰色のジャージにビーチサンダルという私生活感丸出しの格好だ。

「う、うるさいな。涼みに出てるだけなんだから、そんな気張った格好しないでしょ。あ、でも風君はちよつとあっち向いて」

萌葱に食ってかかった東雲だが、異性の目はやはり気になるのか最後には気弱になった。

改装してガラス張りになったかつての外廊下は、風が通らず涼しさは以前ほどではない。だが、家の外というだけで気分は違うのだろうか。

「で、戦果、は……？」

東雲はふと風を見て固まる。

風は萌葱が選んだ眼鏡をかけていた。せっかく買ったのだからと萌葱にせがまれて付けさせられていたのだ。

「こはッ……なん、それ。風君が眼鏡つけてる、なんで!？」

東雲は駆け寄ってきてまじまじと風を眺める。

「近い近い、恥ずいから止めろ」

風は、東雲を押し戻す。

「あたしがプレゼントしたの。風君もこういうの、たまにはいいでしょってね。ちなみにあたしはこのシルバー」

萌葱も眼鏡をかけている。シルバーの眼鏡は、風の感性に合わせたスクエア型

だ。シルバーのフレームは萌葱の顔立ちを邪魔せず、その魅力を引き立てる。眼鏡は主役にはならず、引き立て役に徹しているのだが、萌葱の新しい眼鏡には、東雲は特に関心がない様子だ。

「そっか、こういうのアリなんだ。なるほど、これはヤバい。ちょっと、イイかも」  
「ねえ、似合ってるよね、凧君」

「うん。いいね。たまにはこういうのも、すごくいいね」

東雲からも高評価だ。あまりお洒落で褒められることがないので、こうも手放しに褒められると嬉しくなる。この眼鏡を選んだのは萌葱だし、眼鏡を掛けただけで他には何も手を加えていない。お洒落と言えるほどの変化でもないが、萌葱が言った通り、眼鏡は人の印象を変える最も簡単な武器の一つだ。今までの凧しか知らない東雲は、眼鏡をかけた凧の新しい印象にキュンと来た。

「ほらね、凧君も高校に入るんだし、たまにはこういうのも気に掛けて損はないよ」  
萌葱はアドバイスしてくれる。

いい評価をもらおうと続けたくなる。

凧は乗せられていることを自覚しつつ、まあ少しくらいならと前向きに検討する

ことにした。

凧が自分の家に入っていた後、東雲は萌葱の服の裾を掴んだ。

「ちょっと、服が伸びるんだけど」

「萌ちゃん、今日の報告。せっかくお膳立てしたのに何もなかったなんてないでしょ。凧君の鬼畜眼鏡コーデ以外にもあったんでしょ？」

「そりゃ、まあ……鬼畜眼鏡コーデってなんだ。そんなにした覚えはないよ」

「え、あれはもうそうでしょ。そうとしか見えない」

「なんでよ。あれは、どっちかっていうとおとなしめな印象を意識してるの。文系男子的な。凧君は身体鍛えてるし、体格も悪くないからそのギャップを利用して、敢えて地味系にしたんだっての。鬼畜ってどっから来たのよ？」

「そりゃもう、地味系眼鏡の裏に狼の本性を隠してるなんてのは王道だし、凧君がマジでそんな感じに見えてゾクゾクしちゃった」

頬を染めてうっとりと言う東雲。眼鏡をかけた凧が、かなりタイプだったらしい。普段とのギャップに萌えたという点は萌葱の狙い通りだ。しかし、その受け止め方は斜め上を行った。

「解釈違いにもほどがあるんですけど。感性のアンテナから腐ってるんじゃないの」

「そんなことないよ、普通だよ」

「絶対普通じゃない」

萌葱は自宅についてくる東雲をやむなく上げた。まだ遅い時間というわけでもない。しばらくは東雲に一日の報告をさせられるのだろう。そう思うとげんなりする。とはいえ、萌葱は今日大きな進歩をしたのだ。吸血未経験という長年の懸念材料を取り払うことに成功した。一皮むけて、生まれ変わったような気分だ。なので、少し癖の強い妹に付き合うくらいはまったく負担にならない。それくらい気分が高揚していたのだった。

## 幕間

今年の夏は暑くなりそうだと、風は漠然と窓の外を見て思った。

透き通った青空に綿菓子みたいな雲が漂っている。一時間前からほとんど位置が変わっていないので、今日は上空も風があまりないのだろう。窓は開け放たれているが、束ねられたカーテンが時折ふわふわと揺れるくらいの風しかなく、教室の中には春とは思えない熱気が籠もっていた。

高校生になって半月経った。

新生活に浮き足立っていた教室内も、このころにはある程度の落ち着きを取り戻し、最初のゴールデンウィークに向けてどう過ごすのかというのが目下の生徒たちの関心事になっていた。

風個人で言えば、高校生という肩書きの範囲ではさほど変化はなかった。環境の変化はあっても、学校という枠組みを出る物ではない。周囲の人間関係や授業内容こそ変わったが、それは中学時代から進級しクラスが変われば似たような新学期のスタートだ。

この春から、凧は左手首に腕時計とは別にもう一つ金属製の輪を填めるようになった。

ピカピカの最新型魔族登録証である。

吸血鬼の力に目覚め、眷獣を操る凧は四月から正式に魔族として扱われるようになったのだ。人間から魔族に変化する例は少ないながらもあり得ないものではない。

一般的な例では吸血鬼の血の従者が該当するし、珍しいがよく知られる例としては僵尸鬼等がある、凧が高校に上がってから魔族登録証を付けることになったからといって、騒ぐ者はいなかった。好奇心で「何の魔族なんだ？」と尋ねてくる者は少なからずいたが、それも悪意あつてのものではない。そもそも、ほとんどが初対面なのだから、大半のクラスメイトは凧が魔族登録証を付ける以前のことには知らないのだ。

中学までと違って、高校には給食を皆で食べるという習慣はない。この学校には学食もないので、それぞれの生徒が昼食を自分で用意する。学食の有無は学校によって違うが、概ね国内のどの高校も似たようなものらしい。幸いなことに凧には

一緒に昼食を摂る友人ができた。これで一人で食事をする事になっていたら、なかなか不安な一年を過ごすことになるだろう。

「美味そうな弁当だな、凧の」

と、人の弁当箱を覗き込んで呟いたのは、上浜という男だ。凧よりも若干背が高くガタイがいい。小学校から柔道していて、高校でも初日から柔道部に入部届を出したという。

「まさか凧が作ってんのか？」

「いや、俺だったらコンビニで済みます。朝から弁当まで用意しない」  
「だよな」

そう言う上浜は、登校途中にコンビニで昼食を購入している。部活の朝練で朝が早いので母親に弁当を用意してもらうのが忍びないらしい。かといって自分で作るのも面倒なので、コンビニ弁当にしている。今日も昨日も同じサンドイッチだ。

凧は柔らかい卵焼きを口に運ぶ。ほどよい焼加減の卵焼きは、凧の好みに合わせた薄い塩味だ。

「昏月君のお母さん、こっちに戻ってきてるの？」

と上浜の向かいに座る高木が口を開く。ガタイの大きな上浜に対して高木は線の細い少年だ。将棋部に入部した彼は、見た目の通り運動が苦手な絵に描いたような文化部系の学生だ。そして、実は凧と同じ中学校の出身だ。凧は高木を知らないが、高木は凧を知っていたらしい。

「いいや、全然。まだアルディギア」

「へー、じゃあ……」

「妹さんか、作ったのは？」

高木の言葉を遮って、上浜は身を乗り出してくる。妹さんというのは、空菜のことだ。母親不在の状況で凧以外が弁当を用意するのなら、消去法で空菜の名前が挙がるのは当たり前だ。今や、この学校で空菜の存在を知らない者は一人もいない。とんでもない美少女がいるという噂は三日もしないうちに学校中に広がったし、それが事実だと分かるやその注目度は跳ね上がった。

「空菜でもない。これ作ったのは、姉のほう」

「姉さんなんていたのか、お前に？」

「厳密には親戚だけど、いろいろあってほぼ同居状態だから」

「ほー……」

上浜はそれ以上の追求はしなかった。

家族関係の話題になったとき、凧の家庭環境を説明するのは難しい。母親はアルディギア王国で仕事をしていて長らく留守にしており、親戚は実は皇族。義理の妹の空菜は、まだ生まれて一年も経たない従姉妹のクローンだ。こうした事情を説明するわけには、もちろんいかないし、かといって嘘を塗り固めても不自然だ。だから、凧の常套手段は「いろいろあって」という一言だ。これだけで、大抵はそれ以上の追及を止めてくれる。複雑な家庭であることを臭わせることで、良識ある人は引き下がるのだ。

「それでも、お姉さん毎日弁当作ってくれてるんでしょ？ 妹さんにも。すごいよね」

「最近、料理に目覚め始めたみたいだからな。暇を持て余してるってどうか。学校行ってないからな」

凧と空菜の弁当を用意しているのは東雲だった。

四月から学校が始まった凧たちと異なり、東雲は転校の手続きが終わっていない

い。日中暇であるということと料理の勉強も兼ねて凧と空菜の弁当を作っているのだ。ちなみに彩海学園は食堂があるので、弁当は必要ない。

上浜の部活の愚痴をつらつらと聞きながら昼食を終えて、弁当箱を閉じた時に教室の後方から空菜が入ってきたのが見えた。

空菜は三つ隣の一組だ。選択授業や複数のクラスが合同で行う体育でも被ることはないので、校内で顔を合わせることは希だった。

空菜が入ってきたことで、クラスの視線が一斉に彼女に引き寄せられた。

「凧さん、二限、世界史でしたよね？」

「そうだけど、どうした、急に？」

「教科書を貸してもらえませんか？ 今日はまだ使いませんよね？」

「なんだ、忘れたのか？」

授業が重ならないということは、こうして教科書の貸し借りもできるということでもある。空菜は凧のクラスの時間割表を頭に入れていりし、凧が置き勉しているのも知っているのだから、教科書を忘れたときは借りに来ることもできるが、彼女が忘れ物とは珍しい。凧は机の中から二時間目に使った世界史の教科書を取り出して、

空菜に渡した。

「わたしが忘れたわけではないですよ。友達が忘れたから貸してあげようと思って」

「そう。まあ、今日はもう使わんから、持ってたっていいぞ」

「ありがとうございます」

教科書を受け取った空菜は特に表情を変えないことなく、教室を出て行った。周囲から注目されていることも、何とも思っていないのだろう。

教科書を受け取った空菜は、自分に向けられた視線に一瞥も返すことなく教室を後にした。

「いいなあ」

と、上浜は呟く。

「超絶美人な妹とか、羨ましいぞ」

「まあ、な」

「お義兄さん。今日、遊びに行っていない？」

「誰がお義兄さんだ、気持ち悪いな。部活サボんな」

「昏月さんとお近づきになれるなら、部活とか余裕でサボるわ」

顧問が聞けば額に青筋を浮かべるであろう発言に、隣の高木も頷いている。

「まあ、でも実際昏月さんって付き合ってる人いないでしょ。中学の時から、モテたけど、告白は全部断ってたって話だし。それも、かなり切れ味鋭くスパツと」  
「スパツと？」

「『あなたに興味ありませんので』的な感じ。僕だったら立ち直れないな」

空菜はあの見た目なので、中学時代からかなり人気はあった。学校には一年もいなかっただが、告白やそれに近いアプローチは何度もあった。それを尽く拒否して今に至っている。空菜が誰とも交際する気がないどころか、アタックしても玉砕するだけと広まったことで、そう言う意味合いで近づこうとする男は激減したが、高校に入学してからは再び空菜の周囲が色めき立っていた。

「上浜君は、昏月さんにアプローチするの？」

「お前、俺がぶった切られると思いながらそういうこと言うんじゃないよ」

「もしかしたら、万に一つの可能性を引き当てるかもしれないよ」

「そんなギャンブル俺はしないっての。あんぐらいの美人は遠くから眺めてるだけで十分だわ」

肩をすくめてみせる上浜は、残ったサンドイッチを大口を開けて平らげた。

気づけば昼休みも半ばになっている。話し込んでいて箸が進んでいなかったことに気づいた凧は、掻き込むようにして弁当を空にした。

弁当を片付けていると、教室に学級委員長の坂木が入ってきた。黒髪のショートボブの髪につけた二つの黒いヘアピンがトレードマークだ。見るからに真面目そうで、大らかな印象の女子だ。

その坂木は、A4サイズのプリントの束を持ってきた。

「委員長、それなに？」

と、クラスの女子が尋ねる。

「大ちゃん、体調不良で午後休みなんだって。だから、次の生物は自習」

教卓にプリントを置いた坂木の言葉に、特に女子が歓声を上げた。

大ちゃん、というのは生物教師のあだ名だ。「大介」だから大ちゃん。週に三回はジムに通うというスポーツマンで、見るからに体育教師ではないかと思わせる立派な体躯の持ち主ではあるが、物理が専門という理系教師だ。

生物が自習になって女子が喜んでいるのは、別に大ちゃんが嫌われているという

わけではなく、次の生物がユスリカの幼虫の解剖だったからだ。

真つ赤な幼虫の頭を引き抜き、酢酸カーミンで染色して唾腺染色体を観察するというのが趣旨なのだが、苦手な人はとことん苦手だ。虫嫌いでも幼虫の頭を引き抜くことに精神的な苦痛を感じる場合もある。教科書だけで十分だと思う者も少なくない。

「生物自習だって。理科室に行かなくてよくなったな」

「僕、ちょっと興味あったんだけどな」

「次の生物でするだろうから」

意外にも残念そうな顔をする高木。凧はというと、ユスリカの解剖はあまりいい気はしない。魔術を学ぶ以上、生物の犠牲は避けては通れない。古来、生き物を使った呪いは枚挙に暇がないからだ。しかし、それはそれとしてユスリカの幼虫の頭を引き抜く作業は、できればしたくはないものだ。

下校時刻を知らせるチャイムが鳴った。

これから先は、部活動の時間だ。

帰宅部の凧は、速やかに下校する。長々と学校に居座つてもすることがない。この学校は部活に所属することを強制していないが、多くの生徒が何かしらの部に所属している。

「凧さん、お帰りですか？」

玄関で空菜にばったり会った。

肩に提げたスクールバッグには兎のぬいぐるみがぶら下がっている。当初は無個性だった空菜は、いつの間にかこういう品を買い求めるようになっていた。言わば個性が出てきたということだ、それは喜ばしいことだ。

「俺はもう帰る。空菜は？」

「わたしはこれから部活の見学です」

「へえ、どこ？」

「生物部です。友達が入りたがってるみたいで、ついていくことにしました」

「生物なあ……」

生物部というのが何をやる部活なのかはまったく見当もつかない。凧とは生きて

いる世界が違う感じがするし、運動部と違って実際に何をして過ごしているのか見えないので、イメージができない。ただ黙々と作業するようなものなら、確かに空菜の性格に合っているかもしれない。

「どんなところだったか、後で教えて」

「了解です。では、夕飯までには帰りますので、オムライスで待っててください」  
「今日の夕飯は俺じゃないから、その要望は聞けないな」

ちえ、と唇を尖らせる空菜だったが、すぐに「では」と行って踵を返した。早足で向かった先には、二人の女子生徒がいて、あれが空菜の新しい友達なのだろう。空菜は二人と合流し、階段を上っていった。二階の隅にある理科室に向かったのだろう。

吹奏楽部の演奏と陸上部のかけ声が混ざり合って、学校はどこも騒がしい。平日の夕方特有の喧噪を背にして、凧は学校を後にした。

モノレールに乗って帰路につく。

夕日の光がビルの窓ガラスに反射してまぶしい。この時間帯はモノレールの混雑具合もさほどでもなく、日によっては座れることもできる。

自宅近くのコンビニで粗挽きソーセージを買って小腹を満たし、エネルギーを補給した。

マンションに入ってスクールバッグを担ぎ直し、階段を小走りで駆け上がる。風呂の自宅は五十二階にある。普通はエレベータを使うところだが、トレーニングがてら階段を使う。人にぶつからないように注意しながら、ランニング程度のペースを維持して階段を昇っていく。

昔に比べて格段に身体が強くなっている。

肺活量も筋力も病弱だった頃とは比較にならない。

吸血鬼に近づいたことで、生物としての強度も上がっている。自分でも驚くほどの身体能力の向上だ。五十二階まで休むことなく駆け上がっても、ほどよく息が上がるくらいでしかない。まだ試していないが、全力で駆け上がっても休憩を必要としないという程度の体力はあるかもしれない。

ずっと続けてきた鍛錬の成果の一つをこうして実感できたのは、充足感に繋がっている。まだまだ強くなれるという将来への期待感も抱けた。

風呂は自室に入って制服を脱ぎ、シャワーを浴びて汗を流した。

スウェットに袖を通し、冷たいお茶で喉を潤して一息ついてから、弁当箱を洗う。高校に上がってからのルーチンワークである。

洗った弁当箱の水気を取ったら、それを持って外に出る。向かうのは三つ隣の東雲宅だ。インターホンを鳴らすと、すぐに返事があった。

「開いてるよー」

ということなので、ドアを開けて中に入る。

当たり前だが間取りは凧の家と同じだ。しかし、不思議なもので住む人が違えば家の雰囲気はまったく別物になる。

凧と空菜が住む家に比べて、東雲の家は生活感に乏しい。それは、彼女がこの家に暮らし始めてからあまり時間が経ってないからだろう。

東雲の荷物の多くは、まだ混沌界域の邸宅の中にあるのだ。

「東雲、弁当箱持ってきた」

「あー、うん、ありがとー。置いといて」

と、声ができるが姿は見えない。言われたとおりにシンクの上に弁当箱を置いた。

東雲は別室にいるようだ。

ガタガタと音がする。

「なんかしてんの？」

「ん、ちょっとね。あ、手伝ってもらえるかな？」

「何を？」

凧は東雲の声のする部屋に入った。

そこは小さな物置部屋で、東雲は大きな収納用のプラスチックケースを押し入れの中に押し込んでいた。

「なんだこれ」

「混沌<sup>むじ</sup>界域<sup>くわい</sup>から届いたヤツ。ちょっと重くて大変なの」

「そこに入ればいいのか」

「うん」

プラスチックケースが二つ残っている。そのうちの一つを持ち上げると、確かにずっしりと重い。中身は東雲が買い集めた漫画で、凧には読めない混沌界域の言葉で書かれたものだ。

「軽々持ち上げるね。さすが、男の子」

「これくらい余裕余裕」

実際、筋力のついた風にとっては軽いものだ。この三倍の重さでも、持ち上げることは難しくないだろう。

東雲も吸血鬼なので、持ち上げる筋力くらいはあるだろうが、それでも上背がないので荷物を持ち上げるのは大変なのだ。風が自分の目線の高さに物を持ち上げる場合、東雲にとって頭より上に持ち上げなければならぬ。かかる負担はそれだけで大きく変わる。

「ありがとね。助かったよ」

「いいよ、これくらい。弁当も作ってもらってるし」

「どうせ、しばらくは暇だからね。それくらいいらないと」

片付けが終わって、整理された押し入れを眺める東雲。本棚を用意するはずだったが、荷物のほうが先に届いてしまった。それで押し入れに押し込もうと思ったらしい。

「本棚なんてすぐに用意できるんだし、出したままでもよかったんじゃないのか？」

「

「見栄えが悪いじゃん。部屋の。とりあえず見えないところに置いときたいの」

「そんなもんなのか……」

この家の生活臭が少ないのも、こういった性格によるものなのかもしれない。風だったら、床に箱を置いたままにしていただろう。

「あれ、そういえば今何時？」

「五時十分過ぎ」

東雲に聞かれて、風は腕時計を見た。

「そろそろご飯の用意しないと。みんな帰ってきちゃうね」

「手伝おうか？」

「え？ いいよ、そんな。風君も学校から帰ってきたばかりなんだし、休んでていいよ」

「学校なんてそんな疲れたりしないから」

最近、食事は東雲に任せきりだ。

暇だからと東雲は風と空菜の弁当を朝に用意し、さらには姉妹の分も含めて夕食を作るようになった。混沌領域にいた頃は家事は人に丸投げしていたが、こっちに

帰ってきてからは自分でするのが基本となった。その上で、まだ学校に編入できていないので有り余った時間を家事に回しているのだ。

「東雲に作ってもらってばかりも、よくないし。たまには一緒にやってもいいだろ」  
「一緒に？ あ、うん……」

東雲は頬を掻いて、髪先を弄る。思わぬ風の申し出に、返す言葉をなくした。たいたことを言われた訳ではないのだが、余計な意識をしてしまう。

すぐ近くに大きな雷が落ちたのは、その直後のことだ。凄まじい爆音が響いて、骨身が痺れるかと思っただけだ。

このマンションに落雷したのではというほど近くだ。その影響で物置の明かりが消えた。この部屋には窓がないので、一瞬で室内が真っ暗になってしまった。

夜であっても、何かしらの明かりはある。人工の光に満ちた首都は、深夜でも空の雲に光が反射するくらいに明るい街だ。それがなくとも月や星の光もある。しかし、密室で明かりが消えれば光源は一切ない。本当に真っ暗になる。

「ひああっ！」

ドン、と風の腰に衝撃が走る。バランスを崩して尻餅をつくが、咄嗟に体当たり

をしてきた東雲を抱きかかえる。

「東雲、急にどうした？」

「凧君！ 急に電気が消えて！ やだ、凧君！ 暗い、暗いの、見えない！」

「いて、ちょっと、引っ張るなって、なんだ、急に」

真っ暗でよく分からないが東雲が凧にしがみつぎ、滅茶苦茶に服を引っ張っている。尋常ではない。パニックになっているようだった。

「し、東雲。大丈夫だって、ただの雷だよ。すぐに……」

と、凧が言い終わる前に何事もなかったかのように電気が点いた。非常電源が機能したのか、それとも普通に復旧したのかは定かではないが、ただの雷程度で長々と停電するような柔な設計ではないのだ。雷で停電すること自体が、おそらくは初めのことではないだろうか。

「東雲？」

大人しくなった東雲に声を掛ける。

「あの、ごめん。ちょっと、取り乱しちゃった」

起き上がる東雲は、いつもよりもずっと小さく見えた。

「東雲、大丈夫か？」

「……だ、大丈夫。別に、何でもない」

「顔青いぞ。それに、泣いてるじゃん」

「こ、これは、ほんとに何でもないって。あの、ごめん。気にしないで。ちょっと、びっくりしたただけだから」

そうは言っても、凧が言ったように東雲の顔色が悪い。顔面蒼白で今にも倒れてしまいそうだ。昔、クラスの発表会の時に過呼吸で倒れたクラスメイトによく似ている。

逃げるように凧の上から下りようとした東雲を押しとどめたのは、二度目の雷鳴だった。これもまた近い。今回は電気が消えることはなかったが、東雲はびくりとして固まってしまふ。

「う、あ……う」

明らかに東雲の様子がおかしい。

固まって震えている。

「出ようか」

できる限り優しく声をかけた。

東雲が何に怯えているのか、凧には想像ができた。

狭い物置はよくない。

東雲の手を引いて、リビングまで連れ出した。東雲は抵抗することなく、凧に歩いてくる。ソファに座らせて、冷たい麦茶を飲ませた。

「落ち着いた？」

「うん。その、ごめん。驚かせて」

東雲は申し訳なさそうに目を伏せる。

「暗いところがダメなの」

東雲は眩くように言った。

「ああいう真っ暗なところ、怖くて」

「夜は？」

「ずっと電気点けてる。それに、こっちは夜もかなり明るいから、あまりこういうことはないんだけどね」

東雲の顔色は確かによくなってきた。

もともと肌が白いから、血色がよくなればそうと分かる。

冷や汗も収まったようだ。

「今日はちょっとびっくりしちゃった。急だったから」

「このことは、古城さんとか知ってるのか？」

「もちろん。だからこっちに帰ってきたんだし。おばあちゃんにも診てもらってる。なんで、そういう意味では問題ないの。薬もあるしね」

問題ないわけじゃない。

実際、東雲は苦しんでいるのだ。

あの東雲の動揺の仕方は尋常ではなかった。ほんの一時であっても、強烈な恐怖の感情を抱いていた。その原因は、ディアドラに拉致されたことだろう。東雲は真つ暗な部屋にずっと監禁され、弄ばれていた。詳細は風には分からないが、ただ閉じ込められていただけではないというのは分かる。

当然、心に傷を負っている。

萌葱もそうだった。

短時間であっても、恐怖と苦痛で支配されていた経験は目に見えない傷を東雲に

負わせていた。

安易なことは決して言えない。その場しのぎの無責任なことを言っても、それは東雲を助けることにはならない。

「俺にできること、何かあるか？」

「え？ 何かって」

「何かって、何かだよ。今日みたいに、荷物運んで欲しいとか、調子悪いから何か手伝って欲しいとか。弁当だって作ってもらってるんだし、東雲が楽になるように手伝うぞ」

東雲が苦しい思いをしていると分かっているながら、だからといって何をするのが正解なのか分からない。

それでも知ってしまった以上は、何とか助けになりたい。

真っ暗な物置で東雲は尻に縋り付いてきたのだ。

東雲はきよとんとした顔をした。

「手伝うって言われても、何をどうしたらいいかわたしもよく分かんないけど。困ったら、頼む」

「ああ」

「あの、それとせっかくだからちよつとだけ……」

「ん……？」

東雲は凧に手を伸ばす。

「手、握ってもらっていい？ 少しでもいいから」

「そんなことなら」

凧は東雲の手を握る。

小さい手だ。ともすれば年下にも見える東雲の手の平は、第二次成長期を迎えてまさに身体が完成しつつある凧に比べればずいぶんと華奢だ。

「凧君、手、大きいね」

「そうか？ 東雲が小さいだけじゃないか」

「そうかな、そうかもね」

東雲は相好を崩して、感触を確かめるようにして手をにぎにぎしてくる。

「気にしてくれてありがとうね」

「当たり前だよ」

「うん。それでも、ね」

しばらく東雲は凧の手を握ったままだった。

凧の手を握って、その熱を感じて、すこし心が軽くなった。

凧に救われたから、凧が側にいると落ち着く。何となく、そんな気がする。欲を言えば、手を繋ぐだけでは足りなくて、もっとしっかりと感じたい。抱きしめて欲しい。ディアドラに触れられ、弄ばれたところに触れて上書きして欲しい。そんな欲求が湧き上がってきて、今にもあふれ出しそうだった。

だがそれは、さすがに言い出せない。今は気に掛けてくれただけで、十分だ。

「うん、ありがとう。もう大丈夫」

東雲は凧から手を離す。

「ご飯作るから。手伝ってくれるんでしょ？」

「何からすればいい？」

「今日はカレーにするから、野菜を切るところからお願い」

東雲はソファから立ち上がって、キッチンに向かう。凧もその後を追った。



## 幕間

中央行政区は、その名の通り暁の帝国の行政機関の多くが集約される行政都市だ。オフィスビルや高層マンションが建ち並び、スーツ姿で行き交う人の数は国内最多とされる。その一方で人口は国内第五位。よくあるドーナツ化現象がここでも起きていて、昼間の人口と夜の人口の差が非常に大きいのが特徴だ。

そんなホワイトカラーの街である中央行政区の一画に建つタワーマンション——通称、暁城は、上層階に第四真祖の妃とその娘たちが暮らす文字通りの御殿である。物理的にも呪術的にも、極めて強固に設計され、さらに昨年に眷獣の侵入を許した教訓から、さらに補修が行われた。見た目こそ、暁の帝国では珍しいタワーマンションだが、その防衛機構は眷獣を用いた攻撃にすらも想定したまさに城砦であり、暁城という通称は的を射ているといえるだろう。

その現代の城砦の内部で、何よりも優先して守られなければならない姫の一人が絶望していた。額に冷や汗を滲ませて、眼を開き、見てはならないものを見てしまったとばかりに打ち震えている。

虹色に煌めく金髪が特徴的な、少女——暁東雲である。彼女は、十歳からつい先日までのおよそ六年間を混沌界域に留学して過ごしていた。正式に帰国してから二ヶ月あまり。混沌界域で東雲を巡って生じたテロ事件にかかるケアをするために、定期的な通院を余儀なくされ、学校にもまだ通えていないというように、未だに以前のような生活には戻れていない。

その東雲は、今、完全に固まっていた。彼女の視線は、スマホの画面に固定されている。そこに映っていたのは、二日前に受けた精密検査の結果通知であった。

「あ……あああああああ」

東雲にとっては、受け入れがたい結果だった。ショックで呻くしかない。ここに他に誰もいないのが幸いだった。スマホを見ながら、地獄の底から呻く亡者のような声を聞かれなくて済んだのだから。

日々上昇していく気温と不快指数は、科学技術の最先端を行く暁の帝国でも如何ともしがたいものがある。

夏を目前にした初夏の涼やかさというのは、ほんの数日しか続かなかった。こ

の三日間、晴天が続き、外に出るのも億劫になる夏日が連続している。家に閉じこもってクーラーの効いた部屋でまったりするのが、インドア派の正しい生き方だと暁葱葱はスマホで天気予報を眺めて思った。

萌葱は見た目こそ、遊んでいそうな外見をしているが、本質的にはインドア派だ。外で馬鹿騒ぎをするよりも、黙々とパソコンや機械を弄っているほうが好きなのだ。

その萌葱がわざわざ休日に出たのは、二つ下の階だった。

タワーマンションの五十階に設置されたプールが目当てだ。

このマンションには、一階と五十階にプールが設置されている。完全な人工島である暁の帝国では、真水は貴重な資源だが、その一方で市民プールや学校のプールも普通に運営されている。それは、プールに貯水槽としての役割を担わせることで、万が一の水不足に対応するためであった。

「元がプールの水だって言われたら、あまり飲みたいと思わないけどねえ」

プールの入り口の壁には、暁の帝国の貯水システムの概略図がかけてあった。この建物のプールも排水された後は浄化处理されて、その八割が中央行政区内で循環

していく。真水を海に垂れ流すということは、ほとんどない。暁の帝国が開発した浄水システムは、深刻な水不足に喘ぐ乾燥地帯を中心に輸出され、世界十三カ所で稼働し、その地域を潤している。

「誰か来てる？」

更衣室に入った萌葱は、先客がいることに気づいた。プールの入り口は電子錠で施錠されていて、中に入れるのは暁家の者か、特別に許可された客だけだ。姉妹の誰かが、先に泳ぎに来ているのだろう。運動を率先してするのは、零菜か麻夜、あるいは紗葵であろう。

萌葱は競泳用の水着を着てストレッチをする。ボディラインに鮮明にする水着が、萌葱のスレンダーな体型を浮き彫りにする。年頃の女子らしく、体型は常に気にしている。インドア派であっても、こうしてプールに来るのは、気軽に運動ができるからだ。汗をかくのは嫌いだ、プールは熱さとも汗のべたつきとも無縁だったし、効率よく全身運動ができる。ほぼ自宅にあると言ってもよい施設を使わない手はないのだ。

特に警戒することもなく、萌葱はプールに突撃する。ほんのりと塩素の香りがす

る。空調が効いているので暑すぎず寒すぎずのほどよい室温だ。まさに都会のオアシス。蒸し暑い暁の帝国においては、海水浴と並ぶレジャーがプールとなるのも頷ける話であろう。

身体に負担のかからない程度のほどよい運動と避暑を兼ねた水浴び、もとい水泳に來た萌葱は、本気の水泳に勤しむ先客を思わず眉を潜めた。

「どうしたの、急に？」

じゃばじゃばと水しぶきを上げてクロールをしているのは、東雲であった。

東雲は日常的に運動をしているわけではない。まして、水場で遊ぶという程度ならばまだしも、本気で及ぶ姿は普段の東雲からは想像ができないものだった。

「はふー、きつい」

反対側の壁まで泳ぎ切った東雲は、水に入ったまま足を底に突いた。ぜえぜえと肩で息をしている。そんな東雲をプールサイドから見下ろして、萌葱は話しかけた。

「何してんの？」

「うわ、萌葱ちゃん、いたの？」

「今來たところ。ガチ泳ぎなんて珍しいじゃん。混沌<sup>向</sup>領域<sup>こ</sup>でも、泳いでたんだけ？」

「いや、別にそういうんじゃないけど。世の中、暑いしね。運動不足もよくないし。萌ちゃんは？」

「あたしも同じ」

萌葱は水の中に飛び込んだ。冷たい水に全身が浸って気持ちがいい。このまま何もしないで浮かんでいたいくらいだ。

「あー、冷てー」

「いきなり飛び込まないでしょ。顔にかかった」

「泳いでたヤツが何言ってるの」

「不意打ちで顔に水かかったらびっくりするでしょ？」

むっとする東雲は半歩分、萌葱から距離を取った。

東雲は自分の身体について、いくらかのコンプレックスを抱えている。その一つが身長だ。こっそり背伸びをしてやっと百五十センチに届くかどうかという身長は、混沌界域で仲のよかった仲間内では最低だ。もともと童顔なのに、身長も低いせいで年齢よりも低く見られることはザラであった。プールの水深は百二十センチ

だ。水面から頭のとっぺんまで三十センチしかないが、萌葱はさらに十センチほども余裕がある。身長差をいつも以上に感じてしまい、思わず距離を取ってしまったのだった。

萌葱のほうも「今、こいつ距離取ったな」というのは感じていた。そして、なるほど、とも思った。萌葱から距離を取ったのが悪意から来るものではないのは明らかであったし、かといって水しぶきがどうこうという話でもない。無造作に萌葱は東雲の脇腹をつついた。

「んひゃ!? ちょ、何!?!」

「いや、何となく?」

「何となくでつつかないでよ」

東雲は萌葱の手から逃れるために、さらに三步分、水中を滑るように移動する。「それ、彩海学園ちのスク水でしょ? 買ったの?」

「編入予定ではあるからね。必要な教材は一式、もう揃えてるんだよ」

東雲が暁の帝国に戻ってきたのは、年度末だ。もともと予定していたものではなく、突然の決定だったので編入手続きが遅れている。東雲の身体のこともあり、帰

国してから二ヶ月近くが経った今でも学校には通えていないのだった。

「萌ちゃんこそ、別に泳ぐのが好きって訳じゃないのに競泳用の水着は持ってるんだね」

「何があるか分からないからね。がつつり泳ぎたくなったときに、持ってたら便利でしょ」

萌葱は床を蹴る。まるで月の上にいるような感覚でふわふわと水中を漂って東雲に迫る。東雲はバックステップを踏んで萌葱から距離を取る。

「何で逃げんのよ」

「何で追っかけてくるの」

「いいじゃん、ちよっと捕まってよ」

「意味分かんないし、やだって、あ、ちよっと」

後ろに逃げるよりも前に進む方が速い。陸上ならば萌葱が東雲に追いつくことなどできなかつただろうが、水中ならば話は別だ。萌葱はあっさりと東雲に追いついて、東雲の脇腹辺りを弄り出す。

「ふぎヤッ、ちよっとくすぐりたい！ やめ、変態！」

「誰が変態だ、このこの」

「うわ、ほんとかくすぐったいって、んにゃ、は、離せー！」

東雲はジタバタ暴れて萌葱を突き飛ばす。それから身の危険を感じたのかまた距離を取る。

「何のつもり？」

「あはは、ごめん。ちょっと気になって」

「何が？」

「いや、ほら、どんくらいぷにぷにしてんのかなって」

萌葱は人差し指と親指で何かを掴む動作をする。それを見て、東雲はかっと顔を紅くした。

「ぷにぷになんてしてないんだけど!？」

「急に水泳始めたから、気にする何かがあったんだろうなと。この前の検診結果、そろそろだし？」

「うが……」

東雲は言葉を失ってぱくぱくと酸欠の金魚のように唇をわななかせてうろたえて

いる。どうやら凶星だったらしい。

「あらー、やっぱり？」

「やっぱりって何？ え、わたし外見に出てる？」

東雲は紅かった顔を青くして自分の頬を抑えた。

「どうか。んー、気持ち丸みを帯びてきたような」

「いや、冗談でしょ？ 三キロ程度でそんな違いが出るわけ」

「三キロも増えたの？」

「うが……」

失言に気づいたときには萌葱はにやにやといやらしい笑みを浮かべていた。東雲は悔しげに顔を歪めた。

「三キロって結構だよ。いつから？」

「……二月から」

「一ヶ月あたり一キロか。順調に育ってるってわけね」

「ぐぐぐ……」

気づいていないと言えば嘘になる。体重計の確認は日々しているし、健康診断の

結果も毎回きちんと見ている。体重の変化を気にするのは乙女の基本だ。東雲が今になって慌てて運動を始めたのは、今体重が何キロというのも重要だが、それ以上に今後の体重の変化を予測したグラフが示されたことが大きい。

「ふうん、月一キロペースなら、確かに一年後にはなかなかいい感じに丸くなるわね」

「丸くなりたくない。ただでさえ背が低いのに、横に広がったりしたら……」

東雲はまだスレンダーだ。三キロ増えたというが、それは二月中に心労で大きく減った体重が戻ってきただけなのだから、むしろそれぞれものは好意的に捉えていいだろう。健康診断でも問題視されたのは、増え方で、この一ヶ月でグラフの傾きが急になっていた。

学校に通わなくなり、運動量が減った。それに反して摂取カロリーは変わっていないのだから、当然、余剰なエネルギーは貯蓄に回されるだろう。

「それにしても、急に増えるってどうしたんだらうね。何か、心当たりあるの？ 参考までに」

「……まあ、それは、なんて言うか……寝る前にラーメンとか食べちゃったり」

「自業自得では？」

「毎日じゃないもん」

「他には？」

「強いて言うとお弁当作ってるときに味見してる」

「やっぱり自業自得なんじゃないの？」

「うっさいうっさい、目の前に美味しそうなのがあったらお腹すくでしょー！」

「うわ、いきなり水かけんな」

突発的に水の掛け合いが始まる。それから水中でのプロレスだ。地上ではできない三次元的な動きで東雲と萌葱は取っ組み合う。

「何してんの二人して」

と、騒いでいる二人をプールサイドから見下ろしていたのは零菜だった。いつの間にかやって来たのだろうか。萌葱も東雲も気づかなかった。

「零菜も来たんだ……う」

顔を上げた萌葱は喉を埋まらせたように呻く。

「零菜ちゃん、お疲れー……あ」

東雲もまた、零菜を見上げて固まる。

零菜が着用しているのは、白いスポーツビキニだ。簡素なデザインだが、激しい運動にも耐えられるのは一目瞭然である。まかり間違ってもポロリは起こりえない安心設計だ。そのシンプルなスポーツビキニが、零菜の健康的な肉体美を引き立てている。ほどよく引き締まりくびれた腰に薄ら浮かぶ腹筋の健康美が眩しい。その一方で、隠しきれない存在感を示すのは胸だ。萌葱も東雲も真っ先にそこに視線が向かってしまった。

「何？」

萌葱と東雲の負の感情を乗せた視線を受けて身じろぎする零菜。

水中で何やら取っ組み合いをしていた姉二人が、動きを止めたかと思えば血涙を流さんばかりの視線を投げかけてくるのだ。零菜としては薄らと身の危険を感じざるを得なかった。

「ふう、まあいいや。ちょっと休憩」

東雲は水から上がって、零菜の元にペタペタと歩いてくる。

「零菜ちゃんは今日は何？ 何かの特訓かなんか？」

「いや、クールダウンも兼ねて泳ごうかと。さっきまで呪練場で扱かれてたからさー」

呪練場は、その名の通り呪術の鍛錬をする専門施設だ。眷獣が扱えるだけでも吸血鬼は強大な魔族だが、眷獣は能力に偏りがある。種としての力だけでなく呪術を学ぶのも、最近のトレンドだ。

「うへ、大変」

「二人は何してんの？」

「わたしたち？ えーと、そうだね」

何をしているかと言われると、特に何もしていなかった。ダイエットというと負けた気がして嫌というのもある。

「準備運動中？」

「何の？」

「競争」

「ああ」

「零菜ちゃんもする？」

「わたし？ うーん、面白そうだけど、あんまり得意じゃないんだよね」

零菜は渋い顔をして答えた。

「珍しい。零菜ちゃん、運動全般得意でしょ？」

「え、うん、泳げはするけど……」

零菜の身体能力はかなり高い。幼い頃から護身術をたたき込まれてきたし、身体の使い方も上手い。スポーツで必要なセンスを先天的に備えていて、飲み込みが早い。水泳に対しても、苦手意識は持っていなかったはずだ。

「どうかした？」

「ううん、別に、速く泳ぐの、苦手だから」

「そうだったっけ？ 運動得意でしょ？」

「普通に泳ぐんならまあ……速くしようとする、なんて言うのかな、スピードが出ないっていうか……」

「えい」

零菜の言わんとすることを理解した東雲は、無造作に零菜の背中を押した。

「うわッ、うわわ!？」

派手な水しぶきを上げて零菜はプールに落ちた。

「げほ、げほ、急に何すんの!？」

「あ、ごめん、身体が勝手に」

「無意識に人を突き飛ばす!？」

「あはは、ごめんって。でも零菜ちゃんも悪いんだよ」

「なんでわたしが?」

「この無自覚もちもちマシユマロダイナマイト。存在するだけで罪深い」

じゃぶじゃぶ、と東雲は零菜に水をかける。

「うわ、もー、止めてってば。萌葱ちゃん、何とか言って」

「東雲はちょっと悩ましい時期だから」

萌葱は肩まで水に浸かりながら、ゆっくりと零菜に近づいた。

「ていうか零菜、そんな水着持ってたっけ?」

「ああ、これ? この前買ったばっかだからね」

「混沌領域に持ってたのはどうしたの?」

「何かちょっと、背中が張るっていうかキツくなった感じで止めた」

零菜の発言を聞いて萌葱と東雲は視線を交わした。それから頷いて、二人で零菜にプロレスを仕掛けた。

「うわ、何すんの!?!」

「零菜、ギルティ!」

「反省しろ、ふわふわ大明神!」

嫉妬と怨嗟の籠もった水中プロレスに引き込まれた零菜。ちょっとした水浴びのつもりで来たのに、いきなり姉二人に絡まれて散々な目に遭った。結局、その後は三人で意味もなく水中プロレスに興じ、落ち着いてからタイムを競い、最後には水球をして、都合三時間ほど動き続けた。



## 幕間 《猫の怪》

ウェストミンスターチャイムが校内に鳴り響く。一日の終わりを告げる鐘の音とともに、教室の空気は一気に弛緩する。この最後の授業となった六時間目の化学は、考え得る限り最も楽かつ退屈な授業だ。何せ、問題を解きもせず、只管に教科書を読み進めるだけなのだ。テストには不安があるものの、授業中に居眠りをしていても指摘されることがないという、授業内容は化学専門ではない教師のやらされている感も手伝って、授業という体を為しているとは思えないものになっていた。それでも、やる気のない生徒にとってはちょうどよい休憩時間だ。部活のための体力温存を図るものもいれば、無我の境地で窓の外を眺めている者もいる。凧はというと、ほぼ後者だ。二年生の文理選択では、間違いなく文系に行く。化学を学ぶ機会は一年生だけだが、どの道受験でも使わないので、まったくやる気にならないのであった。

「昏月、いるか？」

帰り際、生徒指導の柳葉教諭が教室の入り口から凧を呼んだ。

「昏月、何したんだよ？」

「え、何かやったの？」

「やってねーよ」

凧はあらゆる疑いをかけて茶化してくる友人にデコピンしてから柳葉の下に行く。生徒指導の柳葉は、細身で背の高い30代の倫理教師だ。凧のクラスを担当していないので、わざわざやって来て呼び出すのならば、生徒指導だと思われるのも無理ないだろう。とはいえ、中学時代にはサボり癖のあった凧だが、高校に入ってからは無遅刻無欠席を貫いている。自分は置いておくにしても空菜の評判を傷付けるのはよくないという意識があるからだ。そういうこともあって、凧は生徒指導を受けるような悪いことをした覚えはまったくくないのだった。

「悪いな。今日、バイトあったか？」

「そうですね。六時から」

「じゃあ、できるだけ手短に話すな。ちょっと来てくれ」

そういう柳葉教諭に連れて行かれたのは、三階の隅にある資料室だった。こぢんまりとした部屋に、机は一つだけ。左右の壁は本棚で隠れていて、分厚い本で埋

まっている。部屋の中は古い本の臭いで満ちていて、昼間でも薄暗い。

生徒が使うことはない。ここは教師が授業を構成する上で必要な参考資料を集めた部屋だ。

「初めて入りました」

「だろう。教師でも俺くらいしかここは使わない。今は資料といっても電子化して  
るからな」

「じゃあ、先生はなんでここ使うんですか？」

「静かだからな。集中できるんだ。それに、電子化といっても端末が壊れたりしたら、その時は使えないし、ある程度は紙で残すことも必要だ」

電子化の進む暁の帝国ではあるが、停電や機器の故障まで無縁になったわけではない。万が一に備えて、必要な情報を書き出しておくのは間違いない。それは呪術を扱う風にはよく理解できた。電子化にはリスクがある。例えば、呪術を記した書物などは電子化が禁止されている場合がある。知るだけでも危険な知識というのが呪術の世界には普通に転がっているのだ。

「それで、先生。俺を呼んだのは……」

「ああ、ちょっと相談があつてな。攻魔師としての意見が欲しい」

「相談」

「まあ、俺ではないが、ちょっと待ってくれ。そろそろ来るはずだ」

凧はめでたく攻魔師資格を取得し、この四月から民間の攻魔師事務所で攻魔師のアルバイトをしている。昨年からの実績があるとはいえ、まだ高校生だ。本格的に仕事を任せてもらっているわけではなく、経理や資料整理などの事務仕事が今のメインだ。

あえて、攻魔師の意見が欲しいということは、呪術絡みの相談だろう。

気軽に引き受けるというのも、仕事として活動している以上よくないのだが、友人や教師からの頼みくらいなら聞いても問題ないだろう。

資料室のドアがノックされたのは、そのときだ。入ってきたのは、学級委員長の坂木恵美めぐみだった。

「お、来たな」

「すみません、遅くなりました」

どうやら、待っていたのは恵美のことだったらしい。

凧のクラスの学級委員長。それ以上の情報は凧にはない。入学して二ヶ月経つが、彼女との接点は今のところ同じクラスということ以上にはない。

背は平均よりも低め。黒髪のショートボブで、童顔だが整った顔立ちをしている。空菜の登場で隠れているが、男子からの評判は頗る良好だ。

「ええと、昏月君、ごめんね。忙しいのにと、恵美が言う。」

「まだ、何も話を聞いてないんだけど……」

「あれ？ あ、そうなんだ」

凧と恵美の視線が同時に柳葉に向かう。

「よし、じゃあ、まずは座って」

手を叩いた柳葉がパイプ椅子を指し示す。狭い部屋なので細身の三人だけでも圧迫感がある。これが、ガタイのいい担任であれば、むさ苦しさが倍増したことだろう。

「まずだ、昏月のほうもバイトがあるっていうから、簡単に言うと、坂木の相談に乗ってやって欲しい。おそらくは呪術に関する問題なんだが、如何せん俺にも坂木

にも知識がないし、誰にどう相談したものかと思ってたんだ」

「はあ……なるほど」

そんなところだろうとは思っていた。

呪術関係の厄介なところは、極めて専門性が高いということだ。それも、対応できるのは霊力や魔力を持つ者だけで、概ね生まれつきの才覚によって支えられている。この業界が万年人手不足なのも、生まれつきの才能に左右される上に、才能があるからといってこの手の仕事を選択するかというところでもないという問題があるからだ。

「魔族絡みではなく？」

「それもよく分らない。ただ、面と向かって危害を加えられたというわけじゃない。特区警備隊案件か医者案件かも、判断が付かないんだ。だから、その手のことに詳しそうな昏月に、まずは助言を求めたい」

「そうですか。まあ、俺で分かることなら」

風の返事を聞いて、安堵したように表情を緩めたのは恵美だった。話を聞く前から、そんな風に期待されると困るのだが、それはそれとして攻魔師としてのそれら

しい相談だ。頭ごなしに断るわけにはいかない。

「えと、じゃあ、よろしくお願ひします」

どう話していいのかわからなかったのだろう。恵美はなぜか頭を下げる。それから、ブレザーの上着を脱いで、背もたれにかけると、左手の袖を捲った。

「は……？」

と、思わず凧は眩いてしまう。

恵美の腕は包帯でぐるぐる巻きにされていたのだ。二の腕から肘の下まで、まるでミイラのように。

「怪我？」

「うんと……うん、まあ……見苦しくて、ごめんね。これを、見て欲しくて」

恵美は包帯を外していく。日焼けとは無縁そうな白い肌なのだが、違和感がある。おまけに、包帯の下は赤い筋が何本も走っていた。

「切り傷……なんか、ひっかき傷みたいだな」

よく見ると、傷は三本から五本の筋が平行してついている。一本の長さは長いものでも五センチ足らずだが、恵美の腕にはそれが縦横についている。

「やっぱり、そう見える？」

「そうとしか見えないんだけど、ただ、数多いな」

「そうだね。実は身体のほうにも引っかかれてて、人目につくところは大丈夫なんだけどね」

「てことは全身包帯巻いてんの？」

「うん」

困ったねー、と苦笑する恵美だが、事態は思ったよりも深刻そうだった。

「最初は三月の終わりくらいかな。教科書を学校に受け取りにきたときに、二の腕だったかな。赤い筋ができてて、そのときは傷がつくほどじゃなかったんだけど」

「じゃあ、もう三ヶ月近くか」

「うん」

恵美によると、ゴールデンウィークが終わった頃から状況が悪化し始めたらしい。赤い筋程度のものが、血が滲むくらいの切り傷に変わり、さらに身体のほうにまで範囲が広がってきた。一日に最低でも一回は引っかかれる。何が、どうしてこんなことになったのか分からないままで、只管不安だったのだと。

これは確かに判断に迷うところだ。

明確に呪術案件だ。しかし、その原因が何かで相談先が変わる。例えば魔族や魔術師等が能力なり呪術なりで引き起こした魔導犯罪ならば特区警備隊が動くだろうし、霊的な自然現象に引っかけたのであれば、呪術の専門医が相談先になる。とはいえ、素人の恵美や柳葉にその違いは判断できない。「いったいどうしたらいいのだろうか」という不安ばかりが膨らんで、動くに動けなくなったのだ。

呪術が関わらない犯罪でも、被害者がすぐに警察に相談しないということとはよくある話だ。何が起こっているのかも分からない呪術案件ならなおさらだ。そもそも、背後に「何者か」がいるのかどうかすらも分からないのだ。

「できることなら解決して欲しいが、そうでなくても相談先とか教えてもらえると助かる」

と、柳葉が言う。

「相談先は、まずは特区警備隊でしょうね。こういう霊障の後ろに引き起こしてる人間がいるのなら魔導犯罪です。相談記録は残すべきですな」

「特区警備隊か。そこまで大事じゃないんじゃないかな」

「大事だと思うけど？」

「え、うん……」

恵美は口ごもる。何か話していないことがある、という雰囲気だ。

「大事にはしたくないって感じ？」

「え、まあ……」

曖昧に笑ってみせる恵美。彼女のこういう表情は初めて見る。

「坂木、身体にまで傷がついてるんだぞ。昏月も言っているとおり、これは大事だ。特区警備隊が相談先だっていうのなら、ちゃんと相談しないと。姉さんにも、説明して」

「母さんには黙っててって言ったじゃん」

「そうは言っても、ここまで来たら隠し通せないだろう」

「それは、そうだけど」

柳葉と恵美の会話が少しずつヒートアップしてくる。心配する柳葉に対して妙に親しげな口調で反論する恵美。年頃の娘の反抗に手を焼く父親のようにも見えた。

「あの、もしかして親戚かなんか？」

と、口論に凧が割って入る。

「あ……ええと……」

恥ずかしげに恵美は視線を逸らす。答えたのは柳葉だった。

「ああ、これはオフレコにしてもらいたいんだが、実は姪なんだ」

「そうなんですか。同じ学校ってアリなんですね」

「ダメではないぞ。配慮は必要だけどな。俺は坂木の成績にも進路にも指導にも極力関わらないし、授業も持たない。本来は別の学年を担当すべきなんだが、そこまで縛ると人手が足りなくなるからな」

教師と生徒が親戚というのは、在らぬ疑いをかけられることもあるから、できるだけ他言しない。

この話を柳葉が凧に持ってきたのは、恵美からプライベートで柳葉に相談が行ったからなのだろう。

「お母さんには、このことを伝えてない？」

「うん、まだ言っていない」

「それは、あー」

恵美はこのことを大事にしたい上に母親にも知られたくないという。複雑な家庭環境なのかもしれないと思ってしまうと、踏み込んだことが聞けない。そんな凧の配慮を感じ取ったのか、恵美は慌てて手を振って否定した。

「別に母さんと仲が悪いとか、そういうのがあるわけじゃないよ。ただ、まあ、その……」

「心配をかけたくないとか？」

「それもあるけど……」

恵美の態度は煮え切らない。

特区警備隊への相談も母親への報告も凧が強制できるものではない。

恵美の希望を叶える最善手は、凧が骨を折ることだろう。おそらくは、彼女はそれを期待している節もある。

「とりあえず、その傷、もう少し見せてもらってもいい？」

「あ、うん、いいよ」

左腕は痛々しいくらいに赤い線が走っている。解いた包帯にも血が滲んでいくくらいで、ここ一ヶ月の間に恵美に加えられた陰湿な「攻撃」のほどが窺える。

目的は不明ながらも、なかなか強力な怨念を感じざるを得ない。

「ちなみに、人に恨まれる何かした覚えある？」

「ない」

「だよね」

凧の知らない裏の顔がある可能性もあるが、今のところ恵美に悪い噂は聞かない。凧のアンテナは信用ならないが、交友関係の広い上浜からも評判がいいので、まず恵美が原因ではないだろう。とはいえ、目立たないところに傷を付ける陰湿さには一定の意思を感じる。それも、怨念の類だ。

凧は恵美の手首近くの傷に触れる。その途端、ピリリとした感覚が走って手を引いた。

「痛ッ……」

凧の手の甲に、ひっかき傷ができていた。

「昏月君!？」

「くっそ、やられた。やっぱり、猫か」

恵美の手に触れた瞬間、目に見えない一撃が凧を襲った。その一瞬の交錯を凧の

霊視は見逃さなかった。

白い猫が、凧の手に爪を立てたのだ。霊的な攻撃なので、視る力を持たなければ分からない。

「昏月君、傷！」

「いや、大丈夫。これくらい、すぐ治る」

薄い切り傷だ。傷と呼べないくらいのもので、撫でているうちに塞がる。一応、名目上は凧は魔族の一員になったのだ。

「猫って言ったか、昏月」

「ええ、まあ。白い猫の手だと思います」

凧が視たことを柳葉に報告すると、柳葉が身を乗り出した。

「白猫、やっぱりか！」

「違う、そんなはずない！」

同時に恵美が大声で否定する。必死の声音には鬼気迫るものがあった。

「坂木？ どうした？」

「あ……………」

また、恵美は視線を逸らして口ごもる。

「なあ、坂木。もしかして、心当たりがあるんじゃないのか？」

「心当たりなんて……別に」

恵美は嘘をつけない性格らしい。もともと、この件には不安を強く感じていることもあって、如実に心当たりがあると明言しているも同然の態度を取ってしまった。いる。

「昏月、実はな」

「叔父さん」

「隠しても仕方がないだろう。昏月は視たんだから」

「それは……」

ぐっと恵美は言葉を押し殺して俯く。

そして、柳葉が口を開いた。

「実はな、坂木の家には白猫がいる。それも、猫又だ」

「猫又？ 魔獣の？」

柳葉は頷いた。

「ちゃんと許可取ってるから大丈夫だから。それに、母さんがこの学校に通ってた頃からいるんだし、今更虎吉が何かするなんて、ありえない」

柳葉に続いて、恵美が言う。

その猫又は虎吉という名前らしい。

猫又は一般には無害な魔獣の代表だ。許可を取れば飼育もできるし、ペットショップでも取り扱われている。普通の猫よりも寿命が長く、百年生きた個体もいる。

猫又は魔獣の中でも特殊な部類で、普通の猫の中から突然変異的に発生する。猫又同士を掛け合わせても、次世代が猫又になる確率は極めて低く、何をきっかけに猫又になるのかは分かっていない。人間が吸血鬼の血の従者になるように、魔力によって生態そのものが変わることは珍しくない。猫の遺伝子の中にそういった変異を引き起こす未知の遺伝情報があり、それが発現することで猫又になるのではないかとされている。

そして、恵美がこの件を大事にしたくないという理由も分かった。

虎吉がひっかき傷に関与しているとすると、それそのものが大事だからだ。

猫又が生物学的に魔獣になるのかは議論の余地があるが、法律上は魔獣だ。その

扱いは、普通の動物よりも非常に厳しい。

普通の犬ですら、人を噛めば保健所に連れて行かれる。まして、それが魔獣ならば、厳しい処分は免れない。もしも、虎吉が何らかの理由で恵美を傷付けているのなら、これは行政の専門部隊が動いて虎吉を処分することになるだろう。仮に虎吉の命は助かって、二度と一緒に暮らすことは叶わない。

「攻魔師の立場から言わせてもらおうと、魔獣が人を傷付けるってのは、そもそも見過ごしちゃいけない問題。ただ、現時点だと犯人が虎吉かどうかは分からないので、何とも言い様がないかなと思う」

「虎吉は、悪いことなんてしないよ」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。虎吉を視ないことには、断言できないかな。俺は虎吉を知らないから」

「昏月君が虎吉を視れば、虎吉がやってないってことが分かる？」

「そうだな……たぶん、分かる。猫又が何かの能力を使っていれば、痕跡が視えるはずだから」

「じゃあ、視て！」

「え？」

「視て、虎吉の冤罪を晴らして！」

身を乗り出して恵美は言う。思いのほか強い主張に凧のほうが面食らった。

「今日、今から！」

「待て待て、坂木。落ち着け。昏月はこれから攻魔師のバイトがある。いきなり無理を言うのはいかんだろ」

「あ……ご、ごめんなさい。わたし、つい」

恥じ入るようにしゅんとした恵美に凧は思わず笑みを零した。

「わ、笑わないでよ」

「ごめん、つい」

バイトはバイトで外せない。急に休めば迷惑がかかる。せっかく、無理を言っ  
て高校生を雇ってもらっているのだ。

とはいえ、恵美のほうは実際に危害を加えられている。本人が特区警備隊への相  
談を拒否しているのがまた厄介だが、こちらも放置するわけにはいかない。

凧は時計をちらりと確認する。バイトまでは、まだ時間がある。

「とりあえず、虎吉を視るのは分かった。明日であれば、バイトないし時間があるけど」

「うん、分かった。ありがとう」

朗らかに恵美は笑う。期待に添えるかどうかはなんとも言えないが、虎吉に関してだけは恵美の期待通りになるような気がする。

爪を攻撃した猫の手が虎吉の可能性は高い。しかし、それが恵美を傷付けているものと同一かというそうではない。

彼女の傷からは、ドロドロとした怨念を感じる。よほど強い恨みを抱いているのだろう。その一方で、白猫の爪から感じた感触はもっと温もりがあった。傷の形状はよく似ているが、そこに込められた念が正反対だ。

「そうだ、一つ聞くの忘れてた」

「何？」

「家で引っかけたことはある？」

「それは虎吉に？ それとも、これ？」

恵美は腕の傷を指し示す。

「それ」

「そういえば、ないかも」

「ゴールデンウィーク中は、どうだった」

「なかったと思う」

ゴールデンウィークの後からひっかき傷が深くなるようになった。

家では引っかけられない。となると、やはり虎吉は冤罪のようだ。原因はどちらかという和学校にあるように思う。

同じクラスにいながら、呪詛に気づかなかったのは不覚だった。如何に自分が周りを見ていないか、見せつけられるようだ。

凧はスクールバッグの中を漁って、呪符を取り出した。

「はいこれ」

「お札？」

「簡易的な魔除け。包帯の下に巻き込むと、多少はマシになるはず」

「こういうの持ち歩いてるんだ」

「攻魔師だからな、こんなんでも」

「ありがとう、試してみるよ」

恵美は受け取った呪符を包帯に巻き込んだ。

低レベルの呪詛や悪霊の類ならば、この呪符だけで十分に効果が期待できる。ただ、今回の相手は行きずりの災厄ではなく、間違いなく明確に恵美を狙っている。一回、二回防いだところで根本的な解決にはならない。近日中に具体的な対処をする必要があった。



デスクに腰掛け、ノートパソコンと向かい合う。

凧が処理しているのは、民間攻魔業者への補助金や省庁が示した攻魔業法改正に関するの素案資料だ。

役所の中でも攻魔師関係は忙しい部署として有名だ。特区警備隊の親元であり、軍備とも深く関わるので動く金も大きい。人手不足に装備の更新、凶悪犯罪への対処など様々な案件が降りかかっている、福祉、徴税と並び不人気部署だという話だ。

もっとも、それはあくまでも事務方の話で、現場で戦う攻魔官は、攻魔師の中でも花形だ。

昨年は大きな魔導犯罪が頻発した。第四真祖の娘が度々渦中に巻き込まれたこともあって、役所の内部は大忙しだ。その煽りを受けた攻魔業法改正で民間攻魔師が使用できる武装に制限が設けられる可能性が高まっているのだ。

「凧君、進捗どう？」

「今、送ります」

凧のバイト先である宮住攻魔師事務所では、所長夫人の優乃が事務を取り仕切っている。夫は所員を連れて現場入りしている。

事務の仕事にも慣れてきた。消耗品の支払いを終えた後、「確認しといて」と言われた攻魔業法改正案の事務所に影響しそうなところをピックアップして優乃に提示する。

「あれー、ヒートスマッシャー規制対象なるの？」

「出力が引っかけります。うちの、結構高出力じゃないですか。アウトみたいです」  
「えー、あれ高かったのに」

「規制されるとしたら三年後の四月からみたいです。買い換えの補助金も、検討してるようですけど」

「うーん、シヨックだなー。装備の更新は規制の動きを見てからじゃないとダメだなあ」

十年以上使っている装備もあり、そろそろ更新を検討すべきものがいくつがある。民間に出回っている装備は、当然ながら特区警備隊の装備を上回るものではないが、それでもいい値段になる。命がけの仕事でもあるので、いろいろと補助金があるにはあるが、愛用の装備が規制対象になると戦略を見直さなければならぬ場面もあり得るだろう。

民間攻魔師が魔導犯罪者と対峙することはあまりないだろうが、魔獣と関わることはあり得る。装備品次第では命を失うかもしれないことを思えば、規制を喜ぶことはできない。

とはいえ、そういった装備品が魔導犯罪に使われるケースも珍しくなく、世間は目に見える脅威に敏感だ。

攻魔師がいるおかげで魔獣などの脅威に対抗できる一方、道を踏み外した攻魔師

が脅威であるということも明白で、攻魔師が置かれている状況はデリケートだ。

「しゃーなし。昏月君、もう時間だし、上がっていいよ」

「あ、はい。お疲れ様でした」

資料を整理していたら、いつの間にか時間が来ていた。攻魔師らしい仕事はまだできていないが、これも下積みだと思って続けている。それにバイト代は悪くない。小遣い稼ぎと思えば、事務仕事も苦にならない。

「あ、そうだ、優乃さん」

「ん、何？」

「ここ、猫又の資料とかありますか？」

「猫又？ 何、急に」

「クラスメイトが飼ってるらしく。ちょっと相談されてまして」

「魔獣っちゃ魔獣だからね、あれ。資料は、確かその書棚に入ってたよ」

「借りてもいいですか？」

「いいよ。もう五年は見てないし」

「ありますよね、そういうの」

本棚にあっていつでも手に取れる場所に置いてある本を、気づけば何年も開いていない。漫画や小説でもそういうことはよくある。まして、魔獣の資料ともなれば必要がなければなかなか開くことはない。

「じゃあ、これ、お借りしますね」

「はい、お疲れ様」

凧は猫又が記された本をバッグに仕舞い、事務所を後にした。



猫又と人類の歴史は、そのまま猫と人類の歴史でもあった。どのようにして猫から猫又が発生するようになったかは定かではないが、多くの場合危険視される魔獣の中では希有なことに、かなり早い段階から人間との共生関係を築いている。

それは、猫又が人間に対して友好的かつ危険性の低い魔獣だったからだ。体格は普通の猫と変わらず、知性は高いものの攻撃性は低い。外見は親から引き継ぐ。マンチカンから生まれれば二又のマンチカンとなり、スコティッシュフォールドから

生まれれば、二又のスコティッシュフォールドになる。

坂木家の猫又は、野良猫から生まれたらしい。当時高校生だった恵美の母が、道ばたで傷ついているところを拾い、坂木家に連れ帰ってからは、すっかり坂木家の一員になった。

そういう来歴を、凧は恵美から聞いた。

会話の大半は猫馬鹿と言えばいいのか、うちの猫又がどれくらい愛らしいのかという自慢話に逸れてしまったが、よほど虎吉のことが好きなのだろう。恵美からは虎吉への一切の疑念が感じられなかったし、身体に刻まれたひっかき傷が虎吉の何らかの能力行使である可能性についても、ありえないというスタンスを崩さない。坂木家には空菜が付いてくることになった。

これは凧が提案したことだった。空菜の能力は呪術への切り札になる。万が一、強引に事を決する必要に迫られたときには、空菜がいれば心強い。

その凧の提案を、恵美は快く了承した。

「わたしの家、ここ」

恵美の家は、学校からバスで二十分のところにあるマンションの三階だ。もちろ

ん、ペット可の物件である。そのマンションの前で恵美は上の階を指さして言った。

「いよいよ猫又ですね。虎吉でしたか」

「空菜さん、わくわくしてる？」

「テレビで見たことがあって、一度、本物を見てみたかったです。わたし、猫好きなので」

妙に目を輝かせる空菜。ここに来る前に、虎吉の写真データを恵美から見せてもらっているが、可愛い可愛いと褒めてばかりだ。

「ふふふ、本物はもっと可愛いから。わたしの写真技術が下手なだけ」

「エレベータを待つ時間も惜しいくらいですよ」

初めのうちは恵美は空菜と話しくそうにしていたが、猫の話で盛り上がった今ではすっかり打ち解けていた。たったの二十分間に風のある存在は大いに薄れてしまった。

「ただいま」

三階の自宅の鍵を開けて、恵美が中に入る。

「どうぞ、上がってください」

「お邪魔します」

凧と空菜が恵美に続いて家へ上がる。

「母さんは夜まで帰ってこないから、楽にして。今、お茶持ってくるね」

西日が差し込むリビングは、生活感を出しつつもしっかりと整理整頓されている。余計な物が床に置いてあったり、洗い物が出しっぱなしになっていたりはない。

「坂木さんは兄弟とかいないのか？」

「一人っ子だよ。父さんは単身赴任で日本にいるし、母さんは介護の仕事だから家にいるかはまちまち。今日は夜まで仕事に行ってる」

「じゃあ、この時間はあまり家に人はいないのか」

「うん。でも寂しくないよ。虎吉いるし、おじさんも時々顔出してくれるしね」

麦茶を入れたグラスを持ってきてテーブルに並べる恵美は、和室に視線を向けた。そろそろと出てきたのは、白猫だった。尻尾が根元で二つに分かれた猫又だ。

「お、おー、猫又だ。本物。可愛い。撮っていいですか？」

「可愛く撮って」

空菜がスマホを向けて、写真撮影を始める。至近距離まで空菜が近づいていく

が、虎吉は逃げるそぶりを見せない。

「大人しい猫又だな」

「そうなの。偉いでしょ。人なつつこいわけじゃないけど、人を怖がったりもしないの」

空菜に写真を撮られているのを分かっているのか、空菜の前に座り込んでカメラ目線を向けている。その余裕にはふてぶてしさすら感じる。

「意外といえば、空菜さんも意外だったな。わたし、空菜さんとこういう風に話せるとは思ってなかったよ」

「それは、俺も意外ではあった」

「……？」

空菜がこのように感情を露わにするのは珍しいことだ。いくら猫が好きとはいえ、ここまであからさまに振る舞うことはあまりなかったことだ。

「可愛い」という感情を抱き、表現するだけの成長をしたということだろうか。空菜は出自からして、情緒面の成長に不安があっただけに、こういう変化は好ましい。

「今日は怪我はした？」

「今日は大丈夫だった。多分、引っかかれてないと思うよ。昏月君のお札のおかげかな」

「そりゃ、よかった。今日は、俺のほうも校内を見て回ったけど、それらしい動きはなかった。きつと、警戒してるんだと思う」

「警戒してる……じゃあ、やっぱり誰かがわたしを？」

「そこまでは、まだ分からない。霊障ってヤツには、いろんなパターンがあるからね。人が呪詛することもあるし、自然発生する自然霊なんてのもいる。誰かが坂木さんを狙ったかもしれないし、たまたま坂木さんが行き会っただけかもしれない。それは、きちんと調べる必要があると思うだ」

凧は腰を上げた。猫又撮影会をしている空菜の隣に膝を突いて、虎吉の頭に手を伸ばす。

「虎吉、よろしく」

「ふしゃー」

挨拶とばかりに虎吉の右フックが凧の手を払った。ご丁寧に爪まで出している。「痛てえ、なんだこいつ」

「こ、こら、虎吉！」

慌てて恵美が駆け寄ってきて虎吉を抱きかかえた。

「ご、ごめんね、昏月君。普段はこんなことしないんだけど。しないんだよ？」

不安げに凧を見つめてくる恵美。心なしか泣きそうだ。それもそうだろう。凧がこの家に来た理由は虎吉が恵美を何らかの能力でひっかいているという冤罪を晴らすためだ。それにも関わらず、凧に攻撃的に振る舞えば、心証を悪くするだけだ。

「凧さん、何かこの子にしたんじゃないですか？」

「今日が初対面だよ」

「不思議ですね、こんなに大人しいのに」

恵美に抱きかかえられている虎吉を空菜が撫でると、これといって反撃はしない。大人しく撫でられるがままにされている。さらに、恵美が空菜に虎吉を渡しても抵抗しない。椅子に腰掛けた空菜の膝の上に、ふてぶてしく座ってゴロゴロ言っている。

「おい、虎吉。せめて、もうちょっと猫らしくしろよ」

安楽椅子にふんぞり返って座る人間のおじさんのような姿勢で空菜の膝を独占す

る猫又に凧は再度手を伸ばす。

「しゃー」

牙を剥いて威嚇。さらに連続猫パンチを見舞ってくる。来ると分かっていたら対処は容易く、凧はさっと身を引いてこれを躲した。

「こら、本当にもー、どうしたのよ虎吉」

恵美を注意する。

普段虎吉に甘い恵美は、人と猫又の力関係もあって強く言うことができない。しかし、今回は場合によっては虎吉の命を左右する攻魔師が相手だ。できる限りいい子にしてもらわなければ困る。

「あの、ごめんね。ちゃんと行って聞かせるから」

「いや、大丈夫。別に猫パンチなんて、普通の猫でもよくするもんだし。魔力を使って攻撃してきたわけでもないから」

必要以上に不安がる恵美を安心させるように凧は肩を竦めて言う。

「でも、なんで凧さんばかりパンチするんでしょうね。男子だからですか？ でも、虎吉君はついてないみたいですね」

「うちに来たときに去勢したって」

「去勢とか言うなよ、男子の前だぞ。それに空菜も、変なところさわさするな」

苦言を呈する凧に、恵美は失言に気づいて頬を赤らめ、空菜は指摘に意味が分からないのか首を捻る。成長が見えたかと思ったが、まだまだのようだ。

「まあ、いい。いくつか分かったこともあるし」

「分かったこと？」

「昨日、俺をひっかいたのは間違いなく虎吉」

「え!? でも……!」

「俺の傷に残った魔力とこの子の魔力の波形が一致してる。ま、感覚的にも間違いないと思っただけでも。念動力に近い力かな」

「あの、でも、それは……その……!」

呪術に疎い恵美には魔力のことを言われても納得できないし、理解もできない。当然、反論もできない。凧は攻魔師の資格を持ち、魔獣に対処することを公に認められているのだ。

「ただ、坂木さんの傷は虎吉じゃない」

「え？」

「坂木さんの身体についての傷に残ってた魔力は虎吉のとは違う。呪詛の犯人は別にいる」

「犯人は別？」

「間違いないよ。まあ、初めから虎吉が犯人だとは思ってなかったけどな」

「……よかったあ！」

心底安堵して、恵美は虎吉に抱きついて頬ずりをする。

「虎吉い、どれだけ心配したと思ってるのよお」

背中に空菜、腹部に恵美と女子二人に挟まれて虎吉はどことなくまんざらでもなさそうな雰囲気だ。この猫又は、会話こそできないものの、かなりいい性格をしていそうだ。凧に対しては、そんな状況下でもにらみを利かせている。そんなに睨まれても、と凧のほうが困惑するくらいだ。凧からすれば、虎吉の脅威などその辺の野良猫と大して変わらないのだが、これでも猫は好きな動物最上位に位置している。こうも嫌われるとショックが大きい。

「じゃあ、後は今後のことだな」

「今後？」

「虎吉が犯人じゃないと分かったからって、それで終わりじゃないだろ？ 問題

なのは、坂木さんを傷付けてる真犯人のほうなんだから」

「あ、うん、そうだね。だけど、それは……どうしたら？」

相手は目に見えない何かだ。正直、恵美ではどうにもならない。

「虎吉が犯人じゃないのなら、特区警備隊に相談しても問題ないんだろ？」

「あ、そうだね。確かに。母さんにも相談できるし、そしたら、明日にでも行ってみるよ」

「そうしたほうがいい。それと、学校でひっかかれたときを思い出して欲しいんだけど、どういうところでひっかかれた？」

「どういうところ？」

「教室で、ひっかかれたことはある？」

「ええと、教室はないと思う。そうだね、トイレとか後は、体育倉庫ではやられたかな」

「薄暗いところと水気のあるところは要注意だ。悪い気が溜まりやすい。できるだ

け明るいところとか人の目のあるところにいるように心がければ、相手は手を出さなくなるから」

「そうなんだ。分かった、気をつける」

「それと、呪符を持ってきた。とりあえず数があるに越したことないからな。財布とかポケットとかに入れて手元から離さないようにして」

凧は十枚の呪符を恵美に渡した。

「いいの？ その……今更だけど、そこまでしてもらって」

「乗りかかった船だからな」

今、凧が手を引いたところで問題が解決するはずもない。特区警備隊に相談したとしても、彼らがどこまで迅速に対応できるかは分からない。

「今のところ、この家の中は安心だけど、それも絶対じゃないから、これ、置いとく」

凧は円形の薄い石をテーブルの上に置いた。

「これ、何？」

「ルーンを刻んだ石。これも魔除けになる。石に刻めば一ヶ月は効果が持続するは

「ずだから、とりあえずこのテーブルの上に置いて」

「うん、ありがとう」

「呪詛のほうは、たぶん学校かその周辺がきな臭い感じがする。できれば、しばらくは学校を休んだ方がいいと思う」

「それは、ちよつとどうするか分かんない。学校って言われると怖いし、母さんにも話してみる」

学校を休むのは、勇気のいる判断になるだろう。

そもそも呪詛の正体が確定していない。学校での頻度が高いというだけで、学校に原因があるかどうかも定かではないのだ。時間が解決する問題であれば、しばらく身を潜めればいいがそうでないとすれば、根本部分をどうにかしない限り、外出もままならなくなる。

「もしも、相手が坂木さんに執着するのなら、学校に来なくなることで何らかのアクシオンを起こすかもしれない。場合によっては、かなり強引な手を使う可能性もある。今、用意できる魔除けの術をかけたから、この家の靈的な守りは向上してる。嫌がらせ程度の呪詛なら、入ってくることはできないよ」

強力な呪詛であれば、凧の守りを越えてくることはあり得る。世の中に絶対はない。守りは固めるに越したことはないが、何をしてでもマイナスの可能性は残る。

「ところで、最近虎吉、体調崩したりした？」

「よく分かったね。そうなの。先月は、ちょっとぐったりしちゃって、わたしそれも心配で。今はちよっとよくなったかな？」

虎吉の喉を擦りながら、恵美は言う。

ゴロゴロとエンジンを吹かしながら虎吉は気持ちよさそうに目を細めている。

「そのうち、また元気になるでしょ」

「そうかな？ そうだといいいね」

恵美にとっては一つの前進だった。虎吉が処分される可能性がなくなったので、相談すべき場所にきちんと相談できるようになったのだ。不安がなくなったわけではない。人間関係のトラブルすら、身に覚えのない恵美にとって、こうまで強烈に悪意を向けられるということが信じられないのだ。それも、学校の中でのみひっつかれるということは、犯人が校内にいるかもしれないわけで、そうすると自分の周囲が軒並み怪しく見えてしまう。学校に行くのが怖くなる。登校しないというの

も、身を守るための一つの選択肢ではあるだろう。

凧と空菜が帰った後、恵美は今までのことを母に報告した。母は驚くと共に、今まで黙っていたことを叱り、そして気づかなかったことを謝罪した。

翌日、恵美は特区警備隊に被害を相談し、そのまましばらく学校を休むことにした。



## 幕間 《猫の怪》 2

身の安全を最優先にするために、坂木恵美は当面の間登校を控えるようにした。表向きは体調不良ということにして、自宅で療養ということにしている。

顔の広い恵美を心配する声は多かった。仲のよい友人は休み時間にスマホでメッセージを送って、恵美とやり取りをしている。健康面に問題はないので、返答はできる。恵美がそこまで悪いわけではないと分かり、教室の中は安堵に包まれた。

凧と空菜を除くと生徒の中で恵美の問題を知るものはいない。恵美が学校に何者かに呪詛されている可能性があるということ、教職員の中では情報が共有されており、近日中に特区警備隊が調査に来るようだ。

同じクラスでありながら、恵美が攻撃を受けていることに凧は気づかなかつた。恵美とは特に縁がなく、注目していなかつたことや、凧がいるところでは攻撃がなかつたことが原因ではあるが、それでも凧からすれば自分のテリトリーを犯されたような不快感がある。

四月から正式の攻魔師の資格をもらったばかりだ。それなのに、同じクラスでこ

のようなことが起こっているには出鼻をくじかれたような気になる。

昼休みを使って風呂は校舎の中を見て回る。見るべき場所は、事前に決めておいた。こういう呪詛は、大体人目に付かないところで行われるものだ。有名なものでは丑の刻参りがあるが、人に危害を加える呪詛は、人に見られることを厳禁とする場合が多い。

陰湿という言葉が示すとおり、この手のものは薄暗く、湿っぽく、見るからに人が好まない場所と相性がいいのだ。

普通教室のある東棟や体育館は、生徒が賑やかに過ごしているので、今はとりあえず除外。職員室のある西棟は、特別教室棟とも呼ばれ、理科室や家庭科室、図書室といった特定の用途に特化した教室が詰め込まれている。文化部の部室があるのも、この棟で、風呂が初めて恵美から相談を受けた資料室があるのもここだ。用事がなければ訪れる必要のない建物なので、昼休みの人通りは少ない。時々すれ違いう生徒は、部室に用事のある生徒か、教師から呼ばれて何かしらの作業をさせられている生徒ばかりだ。

「特にないな」

一通り廊下を練り歩き、呪詛の気配を探ったが、今のところはヒットしない。

これでも凧には優れた靈視の才がある。今まで鍛えてきた第六感は、特に呪詛や靈的存在への感応力が高い。本物の怨霊も、相手にしたことがあるくらいで、学生レベルの呪詛などおまごとも同然だ。凧が探し回って呪詛の痕跡すら見つからないとなると、そもそも呪詛そのものが存在しないか、凧を上回る術者が潜んでいるかという話になるが、それはどちらも可能性としては低い。

呪詛の結果を凧は見ている。明確な怨念を感じるひっかき傷だ。あれを見て呪詛がなかったとは言えない。また、凧の目を盗んで恵美に陰湿な呪詛を仕掛けることができるほどの術者となると、相当の腕前だ。間違いなくプロレベルなのだが、そうなるとその何者かの目的も分からないし、ひっかき傷をつけるだけというのが意味不明ではある。

もしかしたら、たまたま恵美が狙われただけで、対象は誰でもよかったのかもしれない。可能性を考えるといくらでも出てくる。思考のループに嵌まると、いい結果は生まれられないものだ。

「普通に探してるだけじゃダメか」

人か魔族か魔獣か悪霊か。何が原因か分からないが、呪詛の結果だけが残っている。気味の悪い話だ。特に呪術を学んだ風からすれば、違和感だらけの呪詛事件である。犯人の目的は恵美への嫌がらせだろうか。それにしても傷口から感じる怨念は凄まじいものだった。強い憎しみがなければ、あのような強烈な念を傷に残すことはできない。

恵美がそれほど憎しみを買うようなことをしたのだろうか。

他人に恨まれるような人柄ではないはずだ。裏の顔があるのかなら、一男子としては大変シヨックではある。

どうも、片手間でどうにかできる事案ではなさそうだ。少なくとも昼休みの短い時間で、相手の尻尾を掴むのは難しいだろう。

とはいえ、時間を掛けていい話でもない。

いつまで続くか分からない呪詛のために、長々と学校を休むのは難しい。このまま事件が解決しなければ、恵美は転校を考えなければならなくなる。相談を受けた攻魔師としてはきちんと対処して、事件を解決したかった。

放課後、凧が向かったのは、第一南地区の帝国立南呪術試験場だ。国内外の実践的な呪術を研究する公的な研究機関であり、特区警備隊の第一南分隊が詰める南央警察署がある他、攻魔師であれば官民間問わず利用できる図書館や、呪術や眷獣の行使にも耐えられる呪術鍛錬場を備えた、暁の帝国でも随一の呪術関連複合施設だ。

凧自身、長年この施設に通って鍛錬を積んできた馴染みの施設だ。

施設に付属するグラウンドは民間にも貸し出されていて、今日は近くの大学の陸上部とサッカー部が使用していた。昼間なら、特区警備隊が訓練に使用しているところを見ることもできる。

今日はバイトがないので、学校からまっすぐこの施設にやって来た。

攻魔師資格を持っていけば、書庫に入ることができる。凧はここで、恵美に起こった霊障について調べてみることにしたのだ。

電子データ化されていない、古くかび臭い書物が並ぶ書庫は、呪術資料保全課が管理する図書館であり無機質な白壁に囲まれた地下三階まで続き、ワンフロアに約十万冊の資料が公開されている。

重要な機密資料や危険な呪力を帯びた魔導書は、当然ながら関係者しか立ち入れ

ない地下四階以下の階層に封印されているが、凧が求めているのは、そこまでの資料ではないし、凧ではそもそも閲覧する資格がない。

状況証拠は、猫の怪異を思わせる。

恵美についたひっかき傷は、刃物によるものではなく動物の爪による裂傷なのは明らかだ。動物霊による霊障だと、その動物の特性を反映したものになる。例えば、犬の怪異に危害を加えられれば噛み傷がつく場合が多い。ひっかき傷となると猫かそれに近い動物に由来する怪異のはずだ。

単純な動物霊が怨霊化したものならば、対処法そのものは簡単だ。攻魔師の基本の部分である。しかし、これが何者かによる呪術によるものだとすれば、その何者かに対処しなければならず、呪詛をどうにかすればいいという簡単な話ではなくなる。

手がかりになるかどうか分からないが、凧はとりあえず呪術と動物霊の基本をおさらいするために、この図書館を訪れた。

凧が閲覧できる本の大半は、一般にも出回っているような情報しか載せていない。毎回、物足りない気分になるが、呪術の危険性を考えればそれは仕方のないこ

とだろう。より専門的に学ぶのならば、大学で学ぶのが現代のセオリーだ。

凧は動物霊に関するレポートを何冊か手に取って類似の事例を探した。

呪詛の塊と化した動物霊。

人間に物理的な影響を与えられるほどのものとなると、人為的に手が加えられて  
いると見るべきだ。そうでなければ、世の中は危険な動物霊だらけになってしまう。

二時間後、凧は図書室を出た。

外は薄暗く、後十数分もしないうちに日が暮れる。館内の人気は激減し、出入り  
していた学生たちも帰宅したようで、すれ違うのはこの施設で働く大人がほとんど  
になった。

エントランスホールに来たとき、別方向から歩いてきた麻夜と出くわした。麻夜  
が来た廊下の先には、呪術の鍛錬場がある。

「お、凧君だ。そっちから来るなんて珍しい。どうしたの?」

「勉強。真面目な学生だからね」

「自分で言う?」

麻夜は小さく笑った。

麻夜の格好は、まさに運動部で走り込んでいる女子高生そのものだ。長袖のジャージと短パン、そして運動靴というスタイルは色気よりも機能性を重視したもので、陸上をしていると言われれば、疑う者はいないだろう。

以前はショートカットにしていた髪を、高校に入って伸ばし始めたようで、今は肩に掛かるくらいになっていた。その髪を麻夜は白いシュシュでひとまとめに束ねていた。

「長袖って暑くないの？」

と、風が尋ねる。

「鍛錬場は冷房効いてるからね。外もそろそろ涼しくなってくるだろうし」

まだ夏前だ。日が暮れば、気温はほどほどに下がる。風があれば、涼しさを感じることもできるだろう。

「風君は、最近鍛錬場に来ないね」

「そういえば、そうだな。土日はバイトを入れてるからな。学校帰りに寄るところでもないし」

「今日は学校帰りじゃないの？」

「学校帰りだよ。ちょっと、調べたいことがあったんだ。まあ、あまり大した発見はなかったけどな」

凧は肩を竦めて言った。

当たり前のことを再確認するだけの二時間だった。抜本的な解決には、ほど遠い。とはいえ、その当たり前の中に、いくつかの可能性はあった。やりようによっては、呪詛の正体を確認できるかもしれない。

施設を出ると、空は濃い群青色だった。建物で見えないが、太陽は水平線の向こうに消えているだろう。昼間の熱を残したのっぺりとした空気感が近づいてくる夏の気配を感じさせる。

「凧君、何で帰るの？」

「バス」

「じゃ、ワタシも付いていこうかな」

「タクシーとかじゃなくて、大丈夫なのか？」

「何で？」

「危ない、とかそういうの」

「凧君がいるじゃん」

「俺？」

「凧君には去年の実績があるからね」

「買い被りすぎだったの。たまたま、そういう状況になっただけじゃないか」

去年の実績と言われると、確かに凧は昨年大事に巻き込まれ続けた。零菜と戦った蜘蛛型の眷獣に始まり、紗葵の暴走や萌葱や東雲の拉致監禁と国家規模の騒動に発展した事件にも中心に近いところで戦った。それは、凧が望んでその位置にいたわけではなく、すべて偶然の積み重ねであった。

「じゃあ、たまたま偶然、ワタシが危ないことなっちゃったら、凧君は助けてくれるの？」

「危ないことにならないようにしてくれ。まあ、でも、そうなったら、助けるよ」  
気負うことなく凧は言った。

問いに対する答えとしては、特別なものではなかった。

「まあ、凧君はそう言うと思った」

「誰だって、同じこと言うだろ」

「かもしれないけどさ」

麻夜は若干不満げだ。

「凧君さ、また変なことに巻き込まれてない？」

「ないよ」

「本当に？」

「本当だって」

「ふうん」

それ以上、麻夜は追及してくることはなかった。

恵美の相談は、誰にも話していない。空菜以外に知る者はいない。余計な心配をかけたくないということもあるが、呪詛の正体分からないと「口が災いの元」になることも考えられるからだ。

麻夜は凧が学生以外の活動に首を突っ込んだことに感づいているのかもしれない。生まれた頃からの付き合いだし、些細な言動や雰囲気の違いからそれとなく凧の事情を察するくらいはできるのかもしれない。

恵美の呪詛事件を受けて、特区警備隊が中央高校に調査に入ったのは、次の土曜

日だった。



調査の結果、学校の敷地内に呪詛の痕跡は見つからなかった。

そういう報告が学校と恵美にもたらされたのは、月曜日になってからだだった。

特区警備隊の調査官は、校舎内だけでなくグラウンドもプール、倉庫までくまなく見て回った。

もしも、学生を呪詛されたとなれば、全国ニュースになるほどの大事だ。それも学校の敷地内となると、学校側の管理責任にもなるし、学生か職員の中に犯人がいる可能性が高くなる。生徒や職員の安全のために、休校すら検討しなければならぬまいだろう。

恵美が「療養」に入ってから一週間以上が経っている。

学校の中は至って平穏だ。

生徒が呪詛されて、特区警備隊が立ち入り調査をした等ということは誰も知らな

いし、そんな物々しい気配は全く感じない。

凧ですら、注意しているというのに何ら不審な点が見つからないのだ。

いっそ、恵美の自作自演を思ったほうがしっくりくるくらいに何にもない。もちろん、あのひっかき傷が帯びたドロドロとした怨念を知る凧が恵美の自作自演を疑うことはありえない。

では、特区警備隊の調査に瑕疵があったのか。今はほぼ毎日校内を見て回っている凧だが、呪詛の気配を感じない。結論としては特区警備隊と同じだ。この学校に、呪詛は仕掛けられていない。学校側も、そうであれば、休校にする必要はないと判断したようだった。

「気味が悪い」

凧はぼつりと呟く。

昼休みを使った見回りは、まったく手応えがないままに同じところをぐるぐると回るだけになっている。校舎裏もグラウンド脇の体育倉庫も視てみたが、何ら異常はない。

これが、そもそもおかしい話だ。

そもそも、暁の帝国の学校は、靈的に保護されている。第四真祖の夜ドミニオンの帝国なだけあって、国民には様々な種族が入り交じった状態であり、中には呪術を用いた犯罪——魔導犯罪を犯す者も残念ながらいる。そうした犯罪から児童生徒を守るために、各校は攻魔師資格を持った教師を配置したり、呪術で学校そのものを靈的に保護したりする。

中央高校は人事異動の結果、今年度から攻魔教師が不在になっているが、学校の敷地は結界に覆われていて、靈的な守護については国の基準を満たしている。

結界に覆われた学校の中にいる生徒に外から呪詛を飛ばすのは、よほどの実力者でなければ不可能だ。それにも関わらず、校内で恵美は被害に遭っている上に、自宅では攻撃されないとところを見ると、相手は学校の中でのみ活動していると見て間違いない。ところが生徒や教師の中で呪詛に精通しているのは、凧と空葉だけだ。魔族は少数ながら通っているが、種族としての能力は使えても被害内容に合致した能力ではなかった。

何者かが侵入して、呪詛を仕掛けた様子もなく、特区警備隊の調査でも原因不明だ。

闇雲に探し回っても、見つかる相手ではない。

姿を隠しているというよりも、現時点でここに「いない」のだろう。敵は学校を住処にしていけないのだ。

調査方法を抜本的に見直す必要がありそうだ。



昼前から怪しかった雲行きは、午後三時を過ぎたころから悪化の一途を辿り、空菜が学校を出る頃にはしとしと雨を降らせていた。天気予報の通りだ。日傘も兼ねた黒い傘を開いて、水たまりを飛び越える。猫系の獣人の要素を持っているからか、空菜は身体が濡れるのがあまり好きではない。こういう日は、天気予報を見た時点から気分が乗らない。それでも、今日は少しだけ雨でもいいかと思っていた。膝の上でエンジンを全開にしてゴロゴロ言っている虎吉を撫でる。虎吉は目を細めて付け根から二つに分かれた尻尾を揺らしている。

雨の中、空菜は恵美の家にやって来たのだ。虎吉はよほど空菜を気に入ったと見

えて、当たり前のように空菜の膝の上を占領している。

「ごめんね、わざわざ来てくれたのに、お茶くらいしか出せなくて」

「いいですよ、気にしなくて」

「虎吉、すっかり空菜さんに懐いちゃって。ちょっと、寂しいよ」

虎吉は甘えるようにひっくり返って腹部を見せるので、恵美が「このこの」とわしゃわしゃ乱暴に撫で付ける。

「ところで、坂木さん、身体の具合はどうですか？」

「大丈夫。家にいると引つかかれなくて済むみたい。……やっぱり、学校なのかな？」

「特区警備隊の調査では、学校に異常はなかったという話ですよね」

「空菜さん、知ってるんだ」

「凧さんと一緒に柳葉先生から伺ってます」

「おじさんから？　そうなんだ。その、大丈夫なの？」

「大丈夫とは？」

「呪いのなのは。特区警備隊の人が言ってたんだけど、呪詛っていうのは人に話す

と移すかもしれないから、専門家以外にはあまり言わないほうがいいって聞いたんだけど」

「わたし、体質的に呪詛は効きませんので、その心配は無用です」

「効かない？」

「はい」

空菜は頷いた。

「これでも吸血鬼ですから。生半可な呪詛は効きませんよ」

と、空菜はそれらしいことを言った。

「そうなんだ。なんか、いいな、呪詛が効かないって」

吸血鬼だから呪詛が効かないということはない。膨大な魔力を有するので、呪詛が効果を発揮しにくいという事実はあるが、必ずしも呪詛が効かないかというところではない。しかし、空菜の場合は眷獣の能力で呪詛そのものを無効化できるというのが正答だが、恵美にはそこまでの説明は必要ない。

「あ、そうでした。今日の本題を忘れてました」

「これ？」

恵美は自分の左手の袖を捲り、包帯を見せる。

「はい。こっちと交換してください」

「お札にも使用期限があるんだね」

「込めた霊力が抜ければただの紙ですからね」

包帯を解いて、凧が渡した呪符を受け取り、代わりに別の呪符を渡した。

「同じの？」

「はい。効果は同じ。ですが、準備期間が取れたのでこれまでよりも強力な魔除けです。そこらの悪霊では近づくこともできないようにしました。国の規制基準のギリギリを攻める意欲作、だそうです」

「そこまで大げさな」

「凧さんはちょっと前に呪い関係でいろいろあったので、今けっこう力を入れて勉強してるみたいですよ」

「昏月君も、呪い関係で何かあったの？」

「攻魔師ですし。それに、何とか巻き込まれ体質ってヤツなんですよ。人がいいので」

「そうなんだ。なんか、ごめんね」

「攻魔師の資格を持つてるので、相談を受けるのは当たり前なので、坂木さんが気にすることではありません。わたしが言うのもなんですよ」

空菜は新しい呪符を坂木の包帯に巻き込んでいく。手早く包帯を巻き終えて、回収した呪符は金属製の専用ケースに仕舞い込む。

「ありがとう。包帯巻くの上手いね」

「そうですか？ まあ、練習しましたからね」

もともと、空菜には多彩な知識がある。自分は吸血鬼なので、怪我とは無縁だが、一緒に住んでいる凧はそうでもない。いざというときのために、応急手当を学んでいたのだ。

「そうだ。学校って今、どんな感じ？」

「体育祭が台風と重なりそうでヤキモキしてる人が増えてきた感じですか。坂木さんのクラスがどうかは知りませんが」

「あ、そうだね。確かに」

空菜と恵美は別のクラスだ。この事件がなければ関わることもすらなかったら

う。当然、空菜が恵美のクラスの様子を知っているはずがなかった。

「わたし、これからどうしたらいいのかな？」

恵美はぽつりと呟いた。

「誰かに呪われるような、悪いことしたのかな？」

「気休めは言えませんが、坂木さんに落ち度はないと思います」

「そう？」

「呪詛は悪い人がするものですから。それに、坂木さんが悪い人だとは思いませんし。理由なんてないですけど、わたしの勘です」

「勘？」

「はい。割と鋭い方だと思ってます」

真剣な顔でそう言う空菜に、恵美は思わず吹き出してしまった。

空菜は何を笑われたのか分かっていない様子だ。

実のところ、恵美が笑顔を見せたのは久しぶりのことなのだ。誰かに恨まれていた。それも、強力な呪詛をかけられるほどにだ。それが、恵美の心を責め苛んでいる。しかも、犯人は教室の中にいるかもしれない。とても、学校に行こうとは思え

なかったし、楽しいという気持ち湧いてくることもなかった。そんな中で凧と空菜は、自分のために行動してくれているのが分かる。虎吉も空菜に懐いているし、今、一番信頼できるのはこの二人なのだ。

玄関のドアが開く音がして、空気が揺れる。

「ただいま、恵美」

と、女性の声がある。

「母さんが帰ってきたみたい」

どうやら、帰ってきたのは恵美の母親のようだ。

リビングに入ってきた恵美の母は、三十代にも見える若々しい見た目だった。飾り気はないが、恵美の母親らしい綺麗な女性だ。

「お客さん？」

「空菜さん。攻魔師の昏月君の妹さん。お札を取り替えてもらったの」

「ああ、あのお札の」

凧から渡された呪符のことは、母親も承知していたようだ。買い物袋を置いて、空菜のところまでやってくる。

「娘がご迷惑をおかけしてます。恵美の母の雪子です。いろいろ、恵美のためにしてくれて、ありがとう」

「ちょっと、母さん」

仰々しい母の対応に、恵美は顔を紅くして抗議した。

真面目で大人しい印象の恵美も、親の干渉には思うところがあるらしい。

「あら、虎吉もそこにいるの？」

娘の愛らしい反抗をそよ風のように受け流し、視線を向けたのは愛猫の虎吉だ。

空菜の膝の上で、すっかりリラックスモードに入ってしまった、ごめん寝をしている。

空菜が耳の先に触れるとピクピクと耳を動かすが起きる様子はない。

「もうすっかり空菜さんに懐いちゃったみたい」

空菜がこの家に来てから、ずっと虎吉は空菜の膝から動いていない。

「珍しいわね。虎吉がこんなに家族以外に懐くなんて」

「そうなのですか？」

「猫だけに警戒心が強い子なのよ。赤の他人の膝になんて乗らないわ」

雪子の答えは空菜にとっては意外だった。ずいぶんと人懐っこい猫又だと思って

いたのだ。

「じゃあ、凧さんの対応が普通だったんですね」

「どうか。さすがにひっかいたりはしないんだけど、昏月君は全然ダメだったもんね」

「何が違うんでしょうね」

凧はまったく虎吉には受け入れられなかった。

相性の問題だろうか。

特に理由なく動物に嫌われる者もいるにはいる。そういう人は、大抵が動物の勘に障る行動を無意識にしているのが原因なのだが、凧はそうではなかったはずだ。まして、虎吉はただの猫ではなく猫又だ。知性が高く、画一的に判断することはできない。単純に凧のことが気に入らないというだけの理由かもしれない。

ぐっすりと膝の上で眠る虎吉を抱き起こすのも気が引けたので、空菜はその後一時間、坂木家で談笑することになった。



出席日数の問題もあり、このまま欠席が続けば恵美は留年することになってしまふ。小学校や中学校の留年制度はすでに形骸化していて、ほとんどの学校は長い不登校でも、進級も卒業もさせてくれるが、高校では留年は珍しいことではない。事情が事情だけに、救済措置を求めることも不可能ではないだろうが、それでも限度がある。

何よりも、恵美が学校に戻りたいと思っても、呪詛の問題を解決しなければ安心して通学することなど夢のまた夢だ。

学生の立場からすれば、一日も早く復学したい。恵美は真面目な生徒だ。この卑劣な呪詛のせいで学校生活を壊されるなど、あってはならないことだ。

特区警備隊の調査は一応続いている。学校では呪詛が見つからなかったもので、今は本人の身辺警護に力を入れているという状況だ。校内で襲撃されていることから、学校関係者による呪詛という線が濃厚で、恵美がしばらく登校していないことから、自宅でも同様の被害に遭う可能性を考慮しての対応だ。

術者が呪詛をその都度飛ばしているのなら、明確に学校関係者が犯人だと言える。恵美が校内にいる間に呪詛で狙い打ちするためには、自らも校内にいなければならない。

設置型の呪詛ではないとなれば、この可能性が最も高い。使い捨ての呪詛ならば、長々と痕跡が残ることもない。

とはいえ、それすらも状況証拠からの推測でしかない。

恵美に残された呪詛の痕跡以外に、呪詛の存在を示すものは何もないのだ。これが、今回の事件の最大の問題点だ。

どのような呪詛なのか、それをまず明確にする必要があった。

凧は一人で学校にいた。土曜日の夕暮れ時だ。土日の部活動は当面の間、昼間のみの活動となったため、校舎内に人はおらず、廊下はしんと静まりかえっている。人気のない夕暮れの校舎は、それだけで不気味だ。普段明るく活気に満ちているだけに、雰囲気の違いが大きい。同じ景色が完全に別物になったかのようなのだ。

「さてと、鬼が出るか蛇が出るか」

凧はズボンのポケットに手を当てる。そこに入っているのは、恵美から回収した

魔除けの呪符だ。恵美を襲う呪詛を弾くために渡したのだが、空菜が回収した後で術式に手を加えた。恵美を守り続けていた呪符は、恵美の霊力を帯びていて、それを増幅している。今、霊的存在からは恵美がここにいるように見えるはずだ。

特区警備隊が検討し、恵美を危険に曝すとして却下した囮作戦だが、凧は恵美の霊力を携えることで、自らを囮としたのだ。

(見てるな)

じつとりとした視線を凧は感じた。

周囲には誰もいない。一人で来たのだから当然だ。しかし凧の霊感は明確に、敵意を感じている。昼間の学校では、頑なに気配すら感じさせなかったものが、凧の感知できる範囲内にいる。

(それにしても、どうやって来た？ 校舎の結界には引っかかってないみたいだぞ?)

校舎を取り囲んでいる結界に異常があれば、すぐに知らせが来ることになっている。それが無いということは、敵意の主は結界に引っかからずに校舎内に入ってきたか、校舎内にもともいたかのどちらかなのだが、どちらも現実味がない。あり

えるのだろうか、そのようなことが。誰にも気づかれずに校舎を出入りすること  
も、誰にも気づかれずに潜み続けることも困難なはずだが。

(どうする？ 来るか？)

視線に入り交じる敵意は強い。強烈な憎しみの念がじりじりと風の首筋を炙って  
いる。この感じは、以前戦ったエレディアに近い。怨念の塊。生ある者を尽く憎む  
力の結晶。これは、間違いなく怨霊の類だ。

この呪詛の主は、非常に強い恨みの念で恵美に執着している。

その理由まではまだ定かではないが、そこまで分かれば対処法はある。

張り詰めた緊張感が風の胸を締め付ける。

平原でライオンに狙われたシマウマのような気分だ。

振り返らないで廊下を歩く。ペースは一定で、三階の理科室の前から反対側の階  
段に向かう。

敵意を帯びた魔力が廊下に満ちている。海の底にいるような息苦しさだ。霊的感  
受性の高い風は、この悪意を明瞭に感じ取ることができた。

どこからともなく、風が吹いた。

次の瞬間、凧は身体を捻って後方に腕を振るった。

「……ッ!!」

敵意が殺意へと膨れ上がり、何か背後から凧に襲いかかったのだ。

風船が割れるような音がして、窓ガラスがガタガタと揺れる。凧の視線の片隅を黒い影が通り抜けた。霊力を込めた拳でのカウンターで、黒い影を打ち払ったのだが、すぐに相手は着地してするりと凧の脇を抜けてしまったのだ。

それどころか、振り返る凧に向かってすでに第二の攻撃を仕掛けてきた。凧は未だに相手の全体像が視えていない。凧の動体視力が辛うじてその影を捉えているという程度。靈感に任せて、対処する。呪力を全身に巡らせて身体能力を強化し、魔除けの呪文で反撃した。

「いつつ……」

ほんの三秒に満たない攻防で、凧の右手からは派手に鮮血が吹き出し、頬にも擦過傷ができていた。軽々とした身のこなしで凧を傷付けた何者かは、予想通り、大きな猫の姿をしていた。

「そこまででかいと猫には見えないな」

それは真っ黒な影絵のような猫だった。大きさは雄ライオンくらいか。差し込む西日の逆光なのに、「それ」には影がない。それそのものがこの世に滲み出た影であるかのような違和感だ。

黒々とした炎を纏っているかのように、その身体はぼやけていて、絶えず揺らいでいる。

ギラギラとした黄金色の目が、激しい憎しみを訴えてくる。憎くて憎くて仕方がない。傷付けて、恐怖させて、地獄の底に引きずり下ろしてやろうという陰湿な悪意を感じる。

「本物は初めて見るな。しかも、かなり強力な……ッ」

黒猫の怪物は、凧の予想を超えた速度で飛びかかってくる。一步が大きい。驚異的なスプリンターだ。

未来視で一瞬先を見通す。最初の反応の遅れを、体裁きで補う。不意打ちや予想外の攻撃への対処法は那月から嫌というほどたたき込まれた。突然、空間を飛び越えて現れる那月に比べれば、動きが見える分まだマシな相手だ。

後ろに下がりながら、爪を躲し、さらに飛びかかってくる猫の顎を膝蹴りで蹴り

上げる。

「ギッ——！」

どろりとしたスライムに触れたような感触だった。実体のない魔力だけの身体なのだ。その有り様は吸血鬼の眷獣近く、その身体を構成する魔力は人に仇為するための指向性の呪いだ。当然、直接触れるのは危険だが、凧は服の内側にまんべんなく呪符を貼り付けてきた。呪詛に立ち向かうと決めて来たのだから、それ相応の準備はしている。混沌界域から帰ってきた時に紗矢華からもらった魔除けの呪符で裏打ちした制服は、エレディアの呪詛にすら耐えうる逸品に進化しており、黒猫の爪が帯びた呪詛を完全に封殺していた。

それどころか、凧の膝蹴りを受けて、その体内に破魔の霊力をたたき込まれた。綺麗に決まったカウンターで黒猫の身体にノイズが走ったように、その存在がブレる。

狙った獲物が恵美ではないと気づいたのか黒猫は身体を捻り、壁を蹴って凧から距離を取る。そして、そのまま一目散に走り去った。

「待て！」

凧は、黒猫を追った。身体強化を施しての全力疾走だが、物理的な動きを超越している黒猫にはとても追いつけない。

それでも、マーキングには成功した。これで、あの動物霊の大凡の位置は把握できる。次の襲撃には、もっと素早く対応できる。

逃げた黒猫を追って、凧は階段を飛び降りるように体育館に向かう。

体育館に駆け込んだ時、唐突に黒猫の気配がかき消えた。

「……ッ！」

驚愕を声に出さず、霊力を体内に漲らせる。眼筋を強化して、漆黒の闇に覆われた体育館の中を具に観察する。

暗闇に潜む真つ黒な猫の怪異は、普通の視覚で捉えるのは難しい。霊的な感覚を研ぎ澄ませて、感知しなければ不意打ちを食らうことになる。

第六感を駆使した全方位の索敵にも、黒猫は引っかからない。完全に消失している。目の前に広がっているのは、ただの夜の暗闇だ。黒猫が発していた、猛烈な瘴気にも似た悪意を感じない。少なくとも、校舎の中からは脱したと見える。

結界に覆われた校舎から、凧のマーキングの範囲外に一瞬で抜け出すことができ

るだろうか。それこそ、転移魔法を使わない限り不可能な芸当だ。そして、そんな真似ができるのは魔術を極めて高位の魔女や魔術師くらいのものだ。

言いようのない気味の悪さを感じながらも、一通り風は校舎の中を見て回る。そして、異常がないことを確認して、やむなく帰路に就いた。

## 幕間 《猫の怪》 3

学校で黒猫と対峙した後、凧は特区警備隊にその旨を通報した。強力な呪詛を帯びた動物霊が学校に出現したとあって、物々しい武装をした隊員が集まって現場検証が行われた。

問題の呪詛が学校の中に出現し、忽然と姿を消したことは学校側の霊的防御能力に疑問符が付く問題だ。呪詛が結界の内外を行き来できるとなれば、学校の中で呪詛が行われているという前提が崩れることになる。学校側も特区警備隊も外部犯を考慮した態勢を構築することが求められるし、恵美の安全圏が学校外だとは言いつても恵美一人が狙われ続けるという確証はない。

凧は当事者なので、事情聴取を受けた。とはいえ、状況報告の後には雑談がほとんどだ。対応した特区警備隊の吉岡信二は、凧とはそこそこ長い付き合いで、共に那月の指導を受けた兄弟弟子である。クリスマスに起こったアルディギア解放戦線によ

るテロ事件の後、一時本庁に転属し、今年度から現場に戻ってきた。「少ない戦力でアルディギア王国の姫を守り、初動の危機的状況を凌いだ」ということで、半ば強引に階級を引き上げられてしまったのだ。本人としてはたまたま風がクロエを連れ込んだために、なし崩し的に対処しなければならなくなった事態だったので、妙なところで政治的な駆け引きに巻き込まれたとすら感じていた。

「階級上がったからいいんじゃないですか」

「給料が上がってねえ。増えたのは責任と仕事と残業だ」

「残業代は出ますよね」

「一応な。つっても現場は見なしだから、あまり恩恵感じないな。事務方なら、残業分がきっちり出るんだけどなあ」

以前、信二が率いていた部隊に比べると、彼が今率いている部隊はより実戦的だ。昨年度中に起こった様々な魔導犯罪は、例年に比べて規模が大きく、特にクリスマスのは建国以来のトップテン入りする大事だった。特区警備隊は装備や体制の再構築を急いでいるところであって、事務方にしても現場にしてもただでさえ忙しい業務がさらに増えている。

「というか、お前は毎回毎回、妙なことに首を突っ込まないと気が済まないのか？  
今更だけだよ」

「俺から首を突っ込んでるわけじゃないんですけど。運がないのかな」

「美人に囲まれて生活してるから、反動が来たんだな」

「そんな反動あったら堪ったもんじゃないですよ」

美人といっても相手は全員がこの国の姫だ。年々女性らしくなっていく上に、吸血などでスキンシップが増えている。変に意識すると困るので、あまりそういう視点は持たないようになっているのだ。

凧と信二の雑談を甲高い電子音が遮った。テーブルの隅に置かれた機械が、緑色のランプを明滅させている。

「異常なしだよ」

「ありがとうございます」

曲がりなりにも呪詛と対峙したのだ。ちょうど簡易検査キットがあるので、調べていけという信二の提案にありがたく従った。今、電子音を鳴らした機械は、採取した血液から呪詛の有無を判別するためのものであった。

「それでは失礼します」

「はいよ、気をつけてな」

「なんか分かったら、教えてください」

「あー、まあできる範囲でな」

特区警備隊の調査情報は簡単に外部と共有できるものではないのだが、凧の場合は、中央高校の中で唯一の攻魔師であり、この事件については学校側と被害者側から調査の依頼を受けているという言い分が立つ。それを抜け穴にして、調査結果の一部を可能な範囲で回してもらおうことにしていた。

膠着状態だった状況は一つ前に進んだものの、謎は残っている。

呪詛の存在はこれで証明できたものの、恵美が狙われている理由や学校の中だけで活動する理由が分からない。それに、どのように凧の追跡を振り切ったのかも分からない。学校を守る結界に抜け穴があるとしたか思えなかった。

特区警備隊から解放されて、自宅に戻ると妙に賑やかだった。幼稚園児が二人と妹が一人、いつもよりも余計に屯している。

「凧、おかえりー。こんな時間まで何してたの？ 今日バイトないんでしょ？」

リビングに入ってきた凧を迎えたのは、ソファに座る紗葵だった。紗葵の膝には夏穂が座っていて、その隣に瞳がいた。紗葵は妹二人に絵本の読み聞かせをしているところだったようだ。

「なんでうちでやってんだ？」

「瞳が暇だって。凧も暇だろうと思ったのに、全然帰ってこないじゃん」

「暇じゃないからな。高校生は忙しいんだ」

「わたしだって中三だよ。受験生」

「お前んとこ、受験ないだろ」

彩海学園は中高一貫校だ。内部進学で受験する必要はない。全体的にレベルの高い教育を施す学校なので、中学三年生であっても、他の学校の同年代よりもずっと早く高校レベルの授業を受けることになるが、だからといって受験という重荷を背負っている他校の生徒より忙しいということはない。

「ていうか、今何時だと思ってるんだ。もう寝なさい。夏穂、瞳も」

「眠くない」

「眠くないーい」

幼稚園児は二人とも凧の指示を拒否した。小生意気にきゅきゅと笑っている。

「結瞳さんと夏音さんは？」

「今日は仕事だって。だから、あたしと一緒にいるんだよ、ん、ちょ、痛い痛い」  
瞳が紗葵の背中をよじ登り始めた。

そして、夏穂が音読の続きを促すように紗葵の頬をぺしぺし叩いている。

「凧、変わってくんない？ もう五週目なんだけど」

「空菜にしてもらえ。俺はまだ宿題があるんで」

「えー、もう、分かったから、よじ登らない！」

瞳を背中から引きずり下ろして隣に座らせて、紗葵は音読を再開した。空菜の方は、奥のテーブルで煎茶をちびちびちと飲んでいた。

「どうでした？」

と、空菜が聞いてくる。

「出るもんは出たけど、取り逃がしたな。校舎の結界にも、問題はないみたいだ」  
「やっぱり、犬神ですか？」

「猫だったから、猫鬼ってヤツかな」

「蠱毒には変わりないですね」

蠱毒は東洋の呪術の中で、最も有名なものの一つであろう。

一般に広く知られているのは、壺などの容器に無数の毒虫を閉じ込めて共食いさせ、最後に生き残った一匹を使って様々な呪術を行使するというものだ。この呪術は虫だけでなく、犬や猫でも同じことができる。ただし、犬猫のような知能の高い動物はその分だけ恨み辛みを蓄えやすく、強力な呪詛になると同時に制御が困難というデメリットを持つ。

古代から禁止されてきた凶悪な呪術で、それは現代でも変わらない。むしろ、動物愛護の観点からさらに忌避されるようになっていく。

意図的に強力な怨霊を作り上げ、使い魔にしてしまう原始的かつ凶悪な呪詛だ。動物霊による霊障の時点で、凧も特区警備隊も真っ先に蠱毒を候補に挙げていたが、今日に至るまで、その痕跡すら発見できなかつたのは、猫鬼が今日まで行動しなかつたからだ。そして、せっかく発見した猫鬼は、まるでそこにいなかったかのように姿を消してしまった。

やはり、背後に術者がいて転移魔術なりを行使しているのだろうか。それでも、一切の痕跡がないというのが気になるが。

凧は椅子に座って、ため息をついた。前進したように見えて、本質には手が届かないもどかしさを感じている。

テーブルの隅に置いてあるチラシを何となしに手に取った。

今時、紙でチラシを配るといふのはあまりないし、まず目を通すこともないが、何か作業する時の下敷きには使えるので、とっておくのが昏月家だ。

ちらりと見えたタイトルは、「龍支脈の変更について」という行政からのお知らせだ。

「そういえば、今日だったな」

「何がです？」

「龍支脈」

「ああ、そうですね」

と、空菜は興味なさそうに呟く。

暁の帝国の前身となる絃神島は、海上を流れる強力な龍脈の上に建設された人工

島だ。龍脈は地球のエネルギーそのもので、古代から多くの魔術がこういった天然の靈力を利用してきたし、都市設計に反映してきた。いわゆる風水思想だ。中国は言うに及ばず、日本の京都等も、この思想を下敷きにして作られたし、絃神島もその例に漏れないのだ。

そして、川と同じように龍脈にも本流と支流がある。暁の帝国を流れる本流は大規模で、国家全体を覆っているが、そこから枝分かれした支流もまた、国内の各所を流れている。様々な力場がせめぎ合う龍脈の中で生きる国民にはその自覚はほぼないが、この強大な力を日々国が監視し、時に人工的に流れを変えて国民の生活を守っているのだった。

チラシは、その龍脈を監視している風水課からの通知だ。

星辰や人の動き、建設工事などで龍支脈の流れは変わることがある。大きな本流は変えようがないが支流ならば、ある程度人の手が届くし、どのように流れを変えられるかも予測ができる。チラシによると、凧の暮らすマンションから二百メートルほど離れたところに建設された大型ショッピングセンターの影響で、この近くを流れる龍支脈が若干曲がって流れるようになるらしい。

この国に住んでいれば、こうした連絡は度々もたらされる。他の国ならいざ知らず、本流の中に建造された暁の帝国ならば、支流がどう変わろうとさほど日常生活に影響はないのだが、ごくたまにそれで災害が起こることがあるので、影響が出そうな世帯にはチラシやメールなどで連絡が来ることになっているのだ。

今夜、十一時過ぎに、星辰の影響を受けて龍支脈が変わる。この程度の変化は報道されることすらない小さなものだ。

それにも関わらず、妙に胸がざわつく。

何か重要なヒントがあるような気がしてならない。

凧はチラシをじっと眺めた。

文字情報はもうどうでもいい。気になるのは添付された龍支脈図だ。この近辺の龍支脈の流れが変化前と変化後予想の二種類載っている。

「龍支脈……まさか、こいつか？」

「凧さん？」

凧の表情が変わった。龍支脈図には暁城だけでなく、坂木家も記載されている。龍支脈図によると、暁城は流れの変化の影響を受けないが、坂木家は流れを変えた

龍支脈の直下になる。そして、龍支脈を辿っていくと、図の範囲外ではあるものの、中央高校もまた同一の龍支脈上にあることが想像できた。

「空菜、こんな時間だけど頼まれてくれるか？」

「何でしょう？」

「坂木さんの家に向かってくれ」

「分かりました」

あっさりと、空菜は頷いた。

「理由聞かないのか？」

「何となく分かりました。それに凧さんの命には従いますよ。何でも」

大げさな言い方だが、事実だ。空菜は主人と認めた相手の言葉に従うように設計されている。凧が頼めば空菜は二の句なく受け入れるのだ。空菜のそうした性質を苦々しく思ってきた凧だが、一刻を争う今は頼もしい。

「油断しないで、気をつけろ」

「凧さんは？」

「特区警備隊に連絡する。それに、確認することがある」

玄関を出た風が向かったのは、同じ階の萌葱の家だ。インターホンを鳴らすと、萌葱がすぐに出てきた。

「風君、どうしたの、こんな時間に」

「ごめん、姉さん。ちょっと、頼みがあつて。調べて欲しいものがあるんだけど」

「調べて欲しいもの？ 急ぎで？」

「できるだけ」

「分かった。とりあえず、上がって」

風の焦った様子が見て、普通ではないことに気づいたのだろう。萌葱は追及することなく風を家に上げた。

萌葱の家に上がると、やけにいい匂いが漂ってくる。香ばしい焼けた肉の匂いだ。リビングに入ると薄ら煙く、小さく開けた窓から風が吹き込んでいる。

「ええ、風君!? 来るの!？」

と、驚いた様子なのは東雲だった。珍しく空色の伊達眼鏡をかけた東雲は、テールの真ん中に置いたホットプレートの上で、お好み焼きを作っていた。

「お好み焼き？」

「あ、ちよっ、これはねえ……残り物を効率的に処理しようとした結果であって、別にお腹が減ったとかそういうのじゃないんだよ？」

恥ずかしいものを見られたので、何とかして誤魔化したい。そういう気持ちが溢れ出る早口の言い訳だった。ちなみに理由の前半は事実で、後半は嘘だ。かといって、一人で処理できる量でもないのです、萌葱を誘って夜のパーティを画策していたのだ。

「あ、そうだ。凧君も一緒にどう？ 男の子だし、夜食はオッケーなんじゃない？」

東雲からの魅力的な提案に素直に頷けないのが辛いところだ。夜が深まって、ちよっうど小腹がすいた頃合いだ。目の前で完成が近づくとお好み焼きの魅力には抗いがたいものがある。

「ごめん、ちよっくと萌葱姉さんに頼み事があるから」

「あ、そうなんだ」

東雲が残念そうにしたところで、

「凧君、いいよ」

萌葱が自分の部屋から顔を出して、凧を呼んだ。

「何？ 萌ちゃん、これどうするの？」

「東雲、先に食べてて」

「わたしもそっち行きたい」

「焦げるでしょうが。発起人なんだから、ちゃんと食べ物の面倒見といて」

「え……そんなー」

寂しそうな東雲に後ろ髪を引かれながらも凧は萌葱の部屋に入った。

萌葱の部屋は、整理整頓の行き届いたイメージ通りの女子の部屋という感じだ。

この部屋に入るのも久しぶりだが、以前と印象は変わらない。ただし、机の上に置かれた大型のデスクトップパソコンが部屋の雰囲気にはミスマッチだ。

三つのモニターのうち、真ん中のモニターの電源が入っている。

「凧君、調べて欲しいってのは？」

モニターの前に座った萌葱がブラウザを立ち上げた。

「中央行政区と第二南地区の龍支脈図」

「龍支脈図？ チラシ入ってたのじゃダメなの？」

「もっと広い範囲で見たい。それにできれば、過去まで遡って」

「過去分も？ それじゃ、普通に検索しても出ないよ？」

龍支脈図は一般に公開される情報ではあるが、同時に人為的に手を加えると人の生活に直結する影響が出るものでもあるので、その内容は限定的なものになる。特に過去分まで遡ろうとすると、一般公開していない情報になるので、権限を持った職員だけが閲覧することのできる情報だ。その情報を風が入手するには、萌葱の手を借りるしかない。

「クラスメイトを助けるのに必要なんだ」

「クラスメイト？ 何か危ないことしてる？」

「大丈夫。相談に乗ってるだけ。ただ、もしかしたら、時間がないかもしれない。

だから、姉さんにしか頼めないんだ」

「……そ、そう。ふうん、あたしだけね」

萌葱はまんざらでもない表情を浮かべて足下に設置しているデスクトップパソコンの本体を指で叩く。僅かに魔力と紫電が走る。

「できる？」

「できる！ はい、できた！」

萌葱はあっさりと国のデータベースに侵入し、龍支脈の情報を引き出ししていた。絃神島時代からの龍脈全体の流れが時代別になって参照できる。

「一瞬!? 萌葱姉さん、やっぱすげえ」

「そうかなあ？」

「マジ、本当」

「ま、まあね、これくらい、朝飯前だし？」

萌葱は浮かれたように笑みを浮かべた。

萌葱の眷獣電子グレムリンの悪魔の能力は現代社会においては脅威以外の何物でもない。電子の女帝とあだ名される母、浅葱と並び、萌葱は電腦世界の支配者なのだ。龍支脈の情報が保存されているデータベースのセキュリティレベルで、萌葱の侵入を防ぐことは不可能だ。まして、最近は風の血を吸ったことで能力が向上しているのだから

ら、軍の設備ですら彼女の相手は難しい。

凧は真剣な表情で食い入るようにPDFデータを見ている。現在の龍支脈の流れを見て、そこから過去のデータに遡っていく。

「そういうことか」

スクロールする指を止めて、凧は呟く。ずっと蟠っていた疑問が氷解したのだ。  
「役に立った？」

「そりゃ、もう。姉さん、ほんと助かった」

「う、うん、そりゃ、よかったよ」

凧は満面の笑顔を見せる。萌葱は息を詰まらせたように言葉を紡げず、視線を逸らす。凧が真正面から萌葱にこうも感情を見せることはあまりないのだ。レアケース過ぎて、萌葱は戸惑うことしかできない。

「ありがとう。俺、ちょっと行ってくる」

「え、ちょっと行くって？ こんな時間に？」

「時間ないかもしれないから」

「え、あ、ちょっと！ やっぱり、危ないことしてるんじゃないの!？」

大丈夫大丈夫、と返事だけをして、萌葱の部屋を出た凧はその足で外に出た。訳が分からないとばかりに置いてけぼりを食った萌葱は困惑した。

「二人して、何してたの？」

東雲が不服そうな顔をして萌葱を見ている。お好み焼きはいい具合に焼けていて、東雲は先に食べ始めていた。

皿が増えているところを見ると、凧の分も一応は用意していたらしい。

「凧君も帰っちゃったみたいだし」

「ちょっと調べごと。凧君は、どこか出かけるみたいだけど」

「こんな時間に？」

「ねえ」

萌葱と東雲は同時に時計を見た。電子機器を好む萌葱にしては珍しい、振り子の付いたクラシックな掛け時計だ。それが夜の十時半を示している。

「夜遊び？」

「そんな感じじゃないけど。クラスメイト助けるのにいるって言うし」

「……」

「……」

「なんか、危ないことしてるんじゃないの？」

「そうかな、そうかも」

萌葱はしばし悩んでから、タブレット端末を起動した。ただ念じるだけで、一帯の監視カメラの映像をタブレットに中継させる。国内に設置される高性能な監視カメラは、萌葱にとっては自分の目も同然だ。あまり、こういう使い方はしたくはないのだが、これは仕方のないことだと自分を納得させて、風の姿を探した。



大通りでタクシーを捕まえた凧は、まっすぐ恵美の家を目指した。空菜を先行させているし、特区警備隊の信二にも推測を伝えている。信二は恵美の身辺警護に当たっている隊員に注意喚起をしようと欲しかった。確証のないことで隊員を動かすわけには行かないというのが、信二の判断ではあったが、それは役所である以上仕方のないことだ。だから、友人として凧が真っ先に動く。もしも、凧の推測通りな

らば、何もしなければ恵美が危うい。

深夜の住宅地へ続く道は車通りが少なく、思ったよりもスムーズだった。

こんな時間にタクシーを使うというので、運転手からは怪しまれてしまったが、塾帰りだということとそんなものかと受け入れてもらえた。向かう先が娯楽も何もない住宅街だったからかもしれない。

この分なら十一時までに目的地に着ける。

杞憂で終わってくれればいいが、もしも風の予想の通りに事態が進めばいいよ  
恵美の身が危ない。

坂木家まであと僅かというところで、空気の感じが変わった。

普通の人間ならまったく気にならない程度の変化。そして、呪術を嗜む者であつても、さほど軽く流す程度の霊力の流れの変化だ。

しかし、風にとっては大きな変化だ。

(想定よりも十分も早い！)

まだ十一時にはなっていない。予定よりも早く、龍支脈の流れが変わったのだ。建物の位置と星辰は決まっている。十分のずれの原因は、地上に生きる人々の生活

そのものだろう。人間や魔族が帯びる霊力や魔力が龍脈の流れにも若干の影響を及ぼすのだ。今回はその影響で十分ほど早く流れが変わってしまったのだろう。

せめて遅れるのであれば、問題はなかったのだ。時間が惜しい状況で、事態が繰り上がるのは避けて欲しいところだった。

空菜は着いているだろうか。

空菜がいれば、ひとまずは安心できるのだが。

凧は祈るような気持ちで、タクシーの後部座席に座っているしかない。その凧をさらに焦らせる事態が生じたのは、龍支脈が変わった直後のことだ。

「ん、なんだ？」

と、運転手が呟いた。

「どうしました？」

「いや、何かピカピカと光ってて。誰かなんかやってるのか？」

見通しの悪い路地なので、詳細は分からない。運転手が見たのは一瞬の光だ。そして、凧もまた次に現れた光を見る。白い稲光だ。間違いなく、空菜の眷獣刃シーカールゲントウムの白銀の輝きに他ならなかった。

空菜が眷獸を召喚する事態とは、つまり凧の予想の通りに猫鬼が坂木家を襲ったということであった。

■  
時は僅かに遡る。

学校を休んで、半月以上が過ぎてしまい恵美は曜日の感覚が曖昧になっていることを自覚していた。母も介護の仕事でカレンダー通りの休みではない。外出は怖くてできないので、結局一日家にいる。療養ということになっているので、気軽に友人と連絡を取り合うのも憚られるので、日中は虎吉を愛でるか、ゲームか自習の繰り返しだ。そして、夜はかなり遅くなった。平日も休日もないのだから、寝坊する心配がない。通販で買った漫画を夜通し読み耽り、生まれて初めての徹夜をしてみましたが、何にも影響しなかった。考えてみれば朝の六時に寝たとしても正午に起きれば日中に起床したことにはなる、と思った瞬間に自分がどんどん自堕落になっ

ていることに気がついた。

これでも高校に入学したばかりの健全な十五歳だ。危ないからと外に出ることができず、フラストレーションが溜まっているのも否めない。

ずっと、自分が呪われた原因を考えていた。

物心ついたころから真面目でいい子として周りから見られてきたし、事実恵美は当たり前のように大人の期待に応え続けてきた。揉め事を起こしたことはなく、運動こそ苦手なもの成績優秀なまま順当に中央高校に入学した。中学時代の部活は緩い文芸部で、誰かと競争するような経験がほとんどない。結論としては、特に恨まれる覚えはなかった。成績にしても、トップ争いまではしていない。最高で学年十二位という成績は、確かに誰もが優秀と口を揃えて言う位置ではあるが、トップ争いに加わるわけではなく、恵美を敢えて蹴落とそうと狙う理由はないはずだ。それとも、自分が気づかないうちに誰かを傷付けていたのだろうか。

可能性がないとは言えない。

きっかけはいくらでもある。本人にしか分からない理由で、人を敵視するという話は珍しくない。それでも、ここまで苦しめられなければならないほど、悪いこと

をしたのだろうか。

事情を打ち明けられる相手が極端に少ないので、自問自答を繰り返し、思考がどんどんネガティブな方向に向かってしまう。ともすれば、叫び、物に当たってしまいうまくなくらいに苛立つこともあり、そんな負の感情を抱いたことのなかった恵美は、さらに自分を追い込んでいた。不幸中の幸いなのは、同学年に事情を知り、さらに解決のために動いてくれている友人がいることだ。

同じクラスの凧とは、この件で相談するまで特に話をしたことはなかったし、攻魔師の資格を持っているといっても住む世界が違うと思っていたので、あまり関心は抱かなかった。むしろ、同じ学年にいとんでもない美人と評判の空菜の義理の兄という様々な嫉妬と怨念を向けられる立場については、哀れにすら思ったくらいだった。そして空菜は時折顔を出してくれる。虎吉を気に入ったようで、写真を撮り、雑談をして帰って行く。恵美の霊障を気にして、様子を見に来ているのだということは分かった。誰が敵か分からない中で、自分の側に立ってくれる人が身近にいる心強さに、救われている。

「虎吉、今日はもう寝ようか？」

白い猫又の前足の肉球をくすぐりながら尋ねた。返事はなく虎吉は何を考えているのか分からない視線を虚空に漂わせている。

昔から虎吉は変なところをじっと見てたり、急に虚空を威嚇したりするので、そういうときはホラーな気分になってしまう。

魔族が当たり前にいる暁の帝国で迷信も何もないが、幽霊の類は依然としてポピュラーなホラー物の定番で、靈的な素養のない恵美からすれば、怨霊の類はまったく想像の埒外なのだ。現実存在するのかもしれないが、見えないし触れないのでは非現実のものとして認識するしかなく、対処法など知るよしもない。

だから、できれば虎吉には変に思わせぶりの態度を取らないで欲しいのだ。猫には人間の目に見えないものが見えると聞かすが、それは紫外線のような人間には判別できない物理現象であって欲しい。幽霊がそこにいるとか言われても、恐怖しかない。

虎吉を膝の上に抱き起こして、少し大きくなった腹を撫でる。ずっと家にいるので、虎吉と接する時間が圧倒的に増えている。何となくこうして虎吉を抱いていると落ち着くのだ。生まれたときから一緒にいる家族だからだろう。ということだ、

今日も虎吉をベッドに連れ込もうと持ち上げたとき、不意に虎吉が身体を捻って恵美から飛び降りる。そして、そのままベランダに続くガラス戸まで走って行くと、尻尾をピンと逆立てる。

「と、虎吉？ どうしたの？」

しゃー、と牙を剥いて外を威嚇する虎吉のただならぬ様子に、困惑以上に恐怖が勝る。

地域の猫にすら威嚇することのない虎吉が、何を警戒しているのか。今までにない反応に、恵美は立ち竦む。

カーテンを閉めているので外は見えない。虎吉は恵美には分からない何かを感じて、威嚇しているのだ。

「虎き……」

バツン、とリビングの電気が消えた。

轟々、と風が唸るように吹いてきて窓ガラスを揺らしている。

停電はごく一瞬の出来事だった。すぐに電気は何事もなかったかのように点いた。何もなかった。電気が一瞬消えて点いただけ。突風がマンションの電気設備に

影響したのだろう。そう思ったかった。だが、虎吉が全身の毛を逆立てて唸り声を上げている。

「あ……う……」

何かが自分を見ていることを、こうも強烈に自覚することがあるとは思わなかった。靈感なんて物は欠片も持ち合わせていないはずの恵美が、呼吸を忘れるほどの圧迫感。カーテンの向こうに何かがあると確信できる。存在しないはずの第六感が強引にこじ開けられたような感覚だ。息を吸って吐く。この一連の動作が異様なほどに重たい。頭が酸欠になっていくことすらも救いであるようにも思えた。

ミシミシと窓枠が軋んでいる。何か家の中に押し入ろうとしているのだ。カリカリとガラスをひっかく音がして、些細な物音ですら恵美は恐ろしくて仕方がない。猛獣がすぐそこにいて、自分は無防備だ。しかも、相手は自分に狙いを定めている。完全に詰んでいる。何をどうしたところで打開策が浮かばない。逃げるという選択肢すら、悪手のように思えてしまう。

声は出せない。身動き一つ取れないまま、それがベランダからガラスを割って家の中に押し入ってくるのを眺めていることしかできなかった。

それは猫だった。

虎と見紛うばかりの大きさの黒猫だ。

ガラガラとした緑色の目が恵美を捉えた。

「ひい……ッ！」

黒猫の口がニィ……と笑ったように見えた。

何も考えられなかった。逃げることも泣くことも気絶することもできず、パニックなのに身体は一ミリも動かせない。そういう発想すら恵美にはなかった。

「あ……か……」

息ができない。恐怖で頭がどうにかなくなったみたいだ。殺される。このままだと、この黒猫に殺されてしまう。

「しゃーッ！」

膠着状態を崩したのは虎吉の威嚇だ。小さな身体から発する白い魔力が光の壁となつて黒猫の顔面を叩いた。

猫又は魔獣だ。攻撃性は低くとも、魔力を燃料にして生きている。縄張り争いなどでは、時にこうして魔力を使って戦う猫又を見ることがある。



虎吉は臆することなく威嚇した。

碎ける結界。そして、家中を揺るがす振動が四方に弾ける。衝撃で恵美は尻餅をついた。黒い呪詛の波はついに恵美に届くことはなかった。その代わり、跳ね飛ばされた虎吉が恵美の背後の壁に叩き付けられた。

「虎吉？」

ぼとりと床に落ちた白い猫又は、ぴくりとも動かない。

「虎吉ッ！」

それまで動けなかったことが嘘のように恵美は走り出せた。虎吉に駆け寄って覗き込む。虎吉は目を閉じて、動かないままだ。完全に脱力している。

「と、虎吉。ねえ、虎吉ってば、やだ、虎吉！」

名前を呼んでも起きない。虎吉の温もりが、徐々に消えていくような錯覚すら覚えた。自分の半身が切り離されたかのような喪失感が恵美を襲い、理解の範疇を超えた感情が渦を巻く。黒猫への恐怖すら、この時には忘れてしまうほどの激情だ。

「何なの……。なんで、わたしがこんな目に遭わないといけないの!? あなた、いったい何なの!？」

結界が砕けたことで、恵美を守るものはなくなった。それでも、激情が恐怖に勝った。虎吉という大切な家族を守りたい一心で、恵美は黒猫の前に立った。そのけなげな勇姿に黒猫は何ら感じるものはなかったようだ。黒猫の中には憎悪しかない。恵美の悲しみはご馳走だ。むしろ、虎吉も含めて殺意の対象である。

「来ないでよ。それ以上来ると、酷いよ」

恵美の武器は空菜が持ってきてくれた呪符しかない。包帯に巻き込まれた呪符が、この黒猫にどこまで通じるか分からないが、今はそれを信じる以外にないのだ。

まるで恵美を苦しませるように一步一步、ゆっくりと近づいてくる黒猫。恵美を守る呪符が気になるのかじろりと睨み付けてくる。一息飛びかかってこないのは、この呪符を警戒してのものか。恵美はあずかり知らぬことだが、黒猫は恵美の霊力を纏った凧の攻撃を受けている。そして、今は恵美は凧の霊力が籠もった呪符に守られているのだ。恵美の霊力と凧の霊力が同時に存在していることで、黒猫は本能的に校舎内での戦闘の再演を警戒したのだ。

だが、それも一瞬の時間を稼ぐので精一杯だ。

すぐに警戒する意味がないと判断した。牙でも爪でも、恵美の柔肌を裂くのは容

易い。苦痛を与え、悲鳴を肴に臓腑を食る。それくらいしなければ、黒猫を突き動かす憎悪は晴れない。行き所のない苦痛、苦悶、悲嘆、憎悪、そういった負の念は恵美を一思いに殺してしまふのでは解消できないのだ。

黒猫が恵美に爪を伸ばす寸前に、白刃が煌めいた。

「刃の白銀」  
シーカ・アルゲントゥム

二振りの白銀に輝く短刀を振るい乗り込んできたのは空菜だ。魔力を斬り裂き、無効化する眷獣の刃で黒猫の腕と首をしたたかに斬り付けた。

「ぎ、がッ」

三の太刀を受ける前に、黒猫は優れた敏捷性を活かして飛び退いた。

「空菜さん！」

「坂木さん、間に合ってよかったです。怪我は？」

「わたしは大丈夫。でも、虎吉が！」

空菜は恵美の足下に倒れる虎吉を見て顔を歪める。

すぐにその傍らに膝を突いて、触れる。

「大丈夫です。気を失ってるだけです」

「ほ、本当？」

「はい。今、わたしの魔力を少し提供しました。一応魔獣ですから、魔力があれば持ち直すはずですよ」

魔力を糧に生きる魔獣という点では猫又も他の魔獣と同じだ。虎吉は気絶してほしただけで怪我の程度は軽い。魔力を供給すれば、遠からず目覚めるはずだ。

「ありがとう、空菜さん。わたし……」

「お礼なら後でいいです。今は……」

空菜は立ち上がって、窓際で唸る黒猫に向き直る。

両手に小太刀を構えて、油断なく黒猫——猫鬼を睨む。

確かに強力な呪詛だ。空菜は実戦経験こそ乏しいものの、呪詛の知識は豊富にある。猫鬼は古い呪詛の代表格である蠱毒の一種であり、その中でもとりわけ強力な部類だ。それでも、吸血鬼の眷獣に匹敵するほどの蠱毒となるとそう簡単に作れる物ではない。今、空菜と対峙する猫鬼の力は、確かに眷獣に近いものを感じるし、人間には脅威だろう。だが、空菜にとっては恐れるほどの相手ではない。

「友達と虎吉を傷付けた落とし前、きっちり付けさせてもらいます」

怒り、というものを空菜は明確に感じた。ふつつつとした感情が左右の小太刀に伝播して、刀身を白熱させる。

諦めずに躍りかかってくる猫鬼に、空菜は正面から猛然と刃を振るった。

## 幕間 《猫の怪》 4

白銀に煌めく魔力光が乱舞する。空菜が白刃を振るうたびに、漆黒の呪詛が焼き払われ、跡形もなく消失していく。

全身を怨念の魔力で構成する猫鬼にとっては、これ以上ない天敵だ。なにせ、空菜の眷獣はあらゆる魔力を消滅させる。猫鬼の攻撃の一切が、斬り払われて届かない。隙を見て恵美を狙おうとしても、空菜は先んじて猫鬼の移動先に刃を振るう。一手も二手も先を読まれている。本能に任せて牙を剥く猫鬼ではあったが、その本能が自身の不利を訴えている。

普通の生き物ならば、ここで逃走しているだろう。自分よりも強い相手に挑んでも死ぬ確率を高めるだけだ。よほど戦わなければならぬ事態でなければ、逃げるのが自然だ。

しかし、猫鬼は空菜から距離を取りはしても、決して諦めるそぶりは見せない。それは、この猫鬼が強烈な怨念に突き動かされている蠱毒だからだ。理性も本能も、怨念が勝る。敗北の可能性など関係なく、自身の呪詛を達成するための式神だ

からだ。生存は考慮していないし、できない。

猫鬼の実情を視て取って、空菜は恐怖しない。この程度の敵は脅威ではないからだ。それよりも、そのあり方を哀れに思った。

空菜もまたある目的を達成するために製造された人造の生物だ。紆余曲折のすえに、昏月家に拾われたに過ぎない。自分のオリジナルに当たる零菜と争ったことは、蠱毒に似ている。実際、吸血鬼同士の闘争は蠱毒に近い。倒した相手から血を啜り、その全存在を奪い取る上書きは、オーバーライト自発的に行う蠱毒のようなものではないか。

猫鬼は、フェイントを交えて空菜を攻める。運動能力は猫鬼が上だ。三次元的な動きをする猫鬼は、飄々と家具の上に飛び乗り、壁を蹴り、人間ではあり得ない角度から攻撃してくる。猫鬼は空菜から見て左側の壁に着地するや、雄叫びを上げて呪詛の波を叩き付けてくる。空菜は左手の小太刀を真横に薙いで、呪詛の波を斬り払う。小太刀を振るい胴体ががら空きになったところをカーペットの下に潜ませた尾が狙い撃つ。実体のない猫鬼は、身体を伸縮させることもできるのだ。鋭く伸び上がった呪詛の尾は空菜の鳩尾に吸い込まれるその瞬間、膨大な魔力が吹き荒れて

光り輝く壁が実体化する。

「黄金クラリスの腕スロボスを持つ者」

空菜の眷獣の一部、光り輝く巨人の腕だ。家の中で実体化するには本体が大きすぎるので、収まるサイズで部分的に召喚した形になる。それでも、猫鬼の攻撃力ではこの強固な眷獣を突破することはできない。

もともと、猫鬼は呪詛の塊であって、物理的な破壊力に特化しているわけではない。

「ぎぎぎぎぎぎいいいいいいいいッ」

苦痛という概念が呪詛にあるかは不明だが、猫鬼が苦しそうな呻き声を上げた。黄金の腕を持つ者に触れた尾が溶けて消えていく。黄金の腕を持つ者の能力は魔力の吸収だ。全身を魔力で構成した猫鬼にとっては刃の白銀に並ぶ天敵である。

「出ていけ」

空菜の静かな呟きに反した、強烈な巨人の拳が猫鬼を殴り飛ばした。声もなく、猫鬼は家の外に殴り飛ばされた。空中に投げ出された猫鬼は、如何にも猫といった風に身体を回転させて、中空に着地するが、黄金の腕を持つ者にごっそりと身体を

構成する魔力を削り取られ、臃な陽炎のように揺らめいている。

「ただの魔力の塊にしては、しぶといですね」

眷獣ほどの力のない、魔力の塊でしかない猫鬼は、本来ならば黄金の腕を持つ者に触れるだけで存在を維持できなくなる。それにも関わらず、猫鬼は依然として明瞭な怨念を空菜の背後に向けている。

眷獣ですら身体の半分を失えば実体を維持できずに消えてしまうというのに。

その疑問はすぐに解消された。突如、猫鬼の身体が黒い炎に包まれて、失った部位を修復したのである。

「ずいぶんと潤沢な魔力をお持ちで」

空菜が呆れたように呟く。

猫鬼の身体はすべてが魔力であり、魔力さえあればいくらでも復活できるようだ。猫鬼はどこかから大量の魔力を吸い上げて、肉体を再生させたのだ。これでは空菜がいくら猫鬼の魔力を吸収したり、消滅させたりしても、その都度回復されてしまう。完全な私たちごっこだ。持久戦の様相を呈してきた時、地上から猫鬼に向けて青白い弾丸が放たれた。

「よく狙え！ 速いぞー！」

近くで配備に就いていた特区警備隊の隊員だ。風の通報を受けたのだろうか。駆けつけてきたのは三人だけだが、今は貴重な戦力だ。

構える拳銃は、対魔獣用の魔弾を装填した特区警備隊の基本装備の一つだ。持ち主の靈力を弾頭に変換した非実体弾は、破壊力に乏しい反面、その殺傷力の低さから住宅街等の人口密集地での使用に適している。そして、靈力を打ち込むということから靈体にも有効だ。

隊員が拳銃の引き金を引き、弾丸は青白い光跡を残して夜を斬り裂く。鬱陶しそのうに、猫鬼はマンションやアパートの壁や屋根を飛び回り、隊員のうちの二人がこの後を追って街路樹とアパートの屋根に登る。

「しゃあッ」

街路樹に登った隊員に向けて猫鬼が前足を伸ばした。鋭い爪を剥き出しにした前足は、まるで鞭のように撓って、十メートル以上の距離を隔てた隊員を襲う。隊員は背中を反らして爪を躲すが、体勢を崩して枝の上から真っ逆さまに転落する。そのまま、頭からアスファルトに激突するかに思われたが、隊員は足を枝に絡ませて

身体を固定すると、枝にぶら下がったまま拳銃を抜いて、猫鬼の額に三発の魔弾を撃ち込んだ。

このような反撃が来るとは想像もできなかった猫鬼は、防御姿勢を取るまもなく眉間と両目を撃ち抜かれた。

味方の芸術的な射撃に目もくれず、アパートの屋根に飛び移った女性隊員は左右の手に一挺ずつ拳銃を握り、青く澄んだ魔弾の輝きを容赦なく猫鬼に放つ。

二方向からの射撃を受けて、猫鬼の動きが鈍る。反撃しようにも撃ち込まれる魔弾が猫鬼の身体を揺らがせる。致命的なダメージを与えるには至らないが、動きを止めるだけの効果はあるようだ。

隊員二人が猫鬼を抑えている間に、壊れたベランダからもう一人の隊員が入ってきた。ポニーテールの若い女性隊員だった。

「遅くなって申し訳ありません。特区警備隊の朝倉支部第四分隊の荒木です。お怪我はありませんか？」

硬い表情をしたまま荒木は空菜と恵美に話しかける。

幸いなことに空菜も恵美も怪我はしていない。

「大丈夫です。あの、ただこの子が」

恵美は抱きかかえていた虎吉に視線を向けた。空菜が魔力を与えた後も意識が戻らない。息はあるが、専門知識のない恵美には状態が分からず不安が募るばかりだ。

「猫又？ ずいぶんと消耗しているようですね」

「だ、大丈夫ですか？」

「すみません。わたしは魔獣医ではないので、はっきりしたことは分かりません。ただ、この子の霊力は安定しているように見えます。そこだけを見ると、すぐに危うい状況にはならないのではと思います」

「そうですか、ありがとうございます」

一先ず安心した恵美は眠る虎吉の頭をそっと撫でた。

「あなたは吸血鬼、ですか？」

「はい。昏月空菜といます」

「昏月、さん……あれ？ あの、何というか」

「何ですか？」

「いえ、すみません。知ってる人に似ていたもので」

「よく言われます」

表情を変えずに空菜は答えた。美形の空菜が無表情で呟くように言葉を紡ぐと、それだけで妙な威圧感が生まれる。けっして、空菜本人が圧をかけているわけではないが、空菜は心に引かかかものがあったので、勝手に圧を感じてしまった。

荒木は、空菜をパッと見たとき、彼女のかつての師の面影を見た。

対魔族戦闘のエキスパートであり、第四真祖の寵姫の一人でもある暁雪菜やその娘の零菜によく似ていると思っただが、口にする前に思いとどまった。他人のそら似はよくあることだ。下手な発言で地雷を踏むかもしれないとは口が裂けても言えないが、とりあえず口を閉じた。

「お怪我がないようで、何よりです」

荒木は、話題を逸らすように当たり障りのない言葉を選んだ。

「火力不足ですね」

と、空菜が戦闘状況を眺めて言う。

隊員たちが放つ魔弾は、幾度も猫鬼を撃ち抜いている。それでも、猫鬼は活動を続けている。隊員たちが与えるダメージが、猫鬼の回復速度を上回れないのだ。

とはいえ、駆けつけてきた隊員たちはプロの攻魔師だ。二人で連携し、猫鬼の動きを的確に封殺している。

彼らの装備は今使用している非実体弾の拳銃と警棒、呪符くらいのものであった。この通常装備でも、普通の魔導犯罪者や怪異が相手なら十分に制圧できるのだが、運の悪いことに今相手にしている猫鬼は、普通の相手ではなかった。

それでも、普通ではない相手であっても、その場の判断で膠着状態に持ち込んでいるのは、日頃の訓練の賜物と言えるのだろう。

「想像以上の回復能力です。正直、今の装備ではあれを祓うのは難しいでしょう。応援の要請をしましたので、それまで何としても食い止めます」

「わたしの眷獣なら相性もいいですし、あの猫鬼を倒すことはできると思います」

「あなたは学生でしょう？」

「わたしの眷獣が、今は一番効果的です」

刃の白銀にしても、黄金の腕を持つ者にしても、純粋な魔力の塊である猫鬼の天敵となる能力を有している。

あの回復力さえ何とかできれば、十分に勝機がある。

いずれにしても、隊員たちだけでは火力不足であるのは荒木も認めるところであり、難敵を相手に吸血鬼の眷獣というのは心強い。

「回復力をどうにかすると言っても……何か案はあるんですか？」

「さきほど、猫鬼の魔力を吸った後で、龍支脈から猫鬼に霊力が流れ込んだのが感じられました。あれは、龍支脈と霊的に繋がっているはずです」

「そんな馬鹿な……」

荒木は絶句した。

龍支脈から直接霊力を得ているとなると、あの猫鬼のエネルギーは事実上無制限だ。一度に使える魔力こそ、そこまで多くはないが、成長すれば真祖の眷獣にも匹敵する力を持つ可能性すらある。大自然の力をそのまま利用できることを考えると、あるいはそれ以上の怪物になることも理論上はあり得るのだ。

これから先、猫鬼が強くなることはあっても弱くなることはない。

しかし、そんなことが可能なのかという疑問はある。龍支脈から直接霊力をくみ上げるのは、容易なことではないのだ。

確かに、龍支脈の恩恵を受けていない人はこの国にはいない。大規模な呪術実験

をするのも、大自然のエネルギーを活用すれば楽に大がかりな儀式が行える。とはいえ、大規模呪術はしかるべき準備をした上で執り行うもので個人レベルで行うことは想定しないし、必要な施設も大がかりなものになる。個人で受ける恩恵は、ささやかなお零れに過ぎない。個人レベルの龍脈の利用というのは、言うなれば川の支流からさらに用水路に水を引き、そこからコップ一杯の水を汲むという程度が関の山なのだ。直接、何の加工も設備もなしに龍支脈から霊力を吸い上げるなど、自殺行為だ。

「からくりはまだ分かりませんが、事實は事實です。あれと龍支脈の繋がりを切り離せば、後はわたしで仕留められます」

「結界に隔離すれば、龍支脈と切り離すことはできるはずです。それは、こちらで請け負いますよ」

荒木が胸元の無線機を使って、戦闘中の二人に連絡した。

外部から魔力なり霊力なりを得て、自らを強化する方法は、呪術に携わる者ならばごく普通を選択するありふれた手段の一つだ。当然、魔導犯罪者も機械なり魔術なりで自分を強化するので、特区警備隊はそうした外部からの魔力供給を遮断する

術を心得ている。

隊員の連携で猫鬼は、坂木家から三十メートルほどの距離を隔てたところから、口惜しそうに呻くばかりだ。

猫鬼からすれば、特区警備隊員も空菜も目障りな障害物でしかなく、本命はあくまでも恵美だ。それ以外は眼中にない。自分を傷付ける相手にも、関心が向かない。それは、猫鬼が呪詛の塊であり、呪詛する相手を「設定」されているからだ。恵美をあくまでも優先するのであれば、それ以外の第三者は邪魔者ではあっても、優先的に排除する相手ではない。

猫鬼の思考は単純だ。優先順位を更新するだけの知能、というより自由がないのだろう。

その性質を逆手に取って、特区警備隊員は安定した戦いぶりを見せていた。

それでも戦況が一進一退なのは、偏に猫鬼に対する決定打を与えられないからだ。

魔弾を撃ち込んで、すぐに回復してしまう。隊員の攻撃は、猫鬼を退かせることはできても、倒すには至らない。並の魔獣ならばとうの昔に原型を止めないほど破壊されているはずの攻撃を受けて、猫鬼は未だに健在だ。糠に釘を打っているよ

うな、途方もない徒労感を覚えていたところで、荒木が持ちかけた提案は、光明とも言えた。突破口が見えれば、そこに向かっていくだけだ。

「右から回れ。追い込むぞ」

「承知しました」

左右に展開して猫鬼を追い立てる。

三人一組で三方向から敵の移動を制限しつつ、自分たちに有利な場を作る。対魔獣戦闘の基本だ。

「荒木！」

「はい！」

坂木家から出た荒木が前面に結界を張った。魔除けの結界だ。それが、猫鬼の進路を塞ぐ壁となる。

前を塞がれて動きを止めた猫鬼を左右から隊員たちが魔術の鎖で縛る。不動金縛りは、日本にルーツを持つ暁の帝国でもポピュラーな魔術だ。

「抑えた。結界を……！」

金縛りが成功し、もがく猫鬼を隔離するべく霊力を高める隊員たち。金縛りを維

持しながら結界を構築するという高い練度を求められる魔術の平行使用だからか、金縛りの術式に若干の乱れがあった。生存本能のなせる技か、猫鬼はそれを見逃さず、強引に身体をねじ曲げて金縛りから抜け出した。

「何!？」

同時に、驚愕に目を剥いた隊員の一人を鞭のように撓る尾で打ち払う。不意を打たれた隊員は咄嗟に防御姿勢を取ったものの、衝撃を殺しきれずに跳ね飛ばされて、三階建ての آپार्टの給水塔に叩き付けられた。

「大野木さん！」

「大丈夫だ！ 前！」

思わぬ反撃に動揺した別の隊員に猫鬼が襲いかかった。猫鬼の身体が伸びる。下半身を残したまま、上半身だけが伸びて隊員を狙う。猫の姿を基本としつつ、魔力のみで実体がないという強みを活かした攻撃だ。

およそ想定することの不可能な動きに隊員は対応できずに固まってしまふ。

漆黒の猫鬼が隊員に躍りかかる寸前、横殴りの電撃が猫鬼の上半身を焼き払った。黄金に輝く小さな獅子の眷獣タイニー・アウルム小さな黄金だった。

空菜が猫鬼と戦闘していると察した凧は、そこでタクシーを降りた。タクシーを戦闘に巻き込む訳にはいかないからだ。いぶかしむ運転手に事情を説明して来た道を引き換えしてもらおうと、凧は大急ぎで坂木家まで走った。

特区警備隊の隊員を交えた魔術戦の気配を感じながら、はやる気持ちを抑えて走る足に力を込める。そうして戦況が見えるところまでやって来て、特区警備隊に加勢するため最速の眷獣を走らせた。結果的にそれが功を奏し、今にも猫鬼が隊員に飛びつこうかという寸前に間に合った。

猫鬼の首に食いついた小さな黄金は、雄叫びを上げながらその首を噛み砕き、電熱で猫鬼の身体の半分を消し炭にしたのだ。

「凧さん！」

「空菜、大丈夫か？」

壊れたベランダの上から顔を出す空菜に凧は尋ねた。

坂木家のベランダは崩壊し、窓も砕けている。まるで大型のトラックが突っ込ん

だかのような惨状だ。他の階への影響も皆無ではないだろう。魔獣が市街地で暴れている時、住民が取るべき行動はひたすら家の中で嵐が過ぎ去るのを待つことだ。迂闊に外に出れば戦いに巻き込まれるし、魔獣にも狙われる。家の中が最も安全なのだ。それでも、自分の周囲で魔獣が暴れて魔術戦になっているとなれば、心中穏やかではいられないはずだ。恵美のためだけでなく、この地域のためにも早期に猫鬼を倒す必要がある。

「あなたも吸血鬼ですか？」

猫鬼が近づけないように結界を張っている荒木が走ってきた凧に尋ねた。

「そこにいる空菜の兄です。Cカード持ってます」

凧は自分のCカードを提示する。攻魔師ならば、魔導犯罪や魔獣との戦いに関わっても、問題は生じにくい。たとえ民間人であっても、攻魔師資格は希少な資格なので、特区警備隊が作戦の中で援軍として活用するのは容認されるのが一般的だ。「まだ学生なのに、すごいですね。ですが、助かります。手を貸してもらえますか？」

「もちろんです」

軽やかにアパートの屋根に飛び移った猫鬼は、凧が校舎で対峙したときよりも大型化している。小さな黄金で頭から胴体まで焼き払ったというのに、すでに再生しているところを見ると、弱点らしい弱点はなさそうだ。物理的な破壊は不可能と思っただろうがいい。

「凧さん、あれの動きを止めてください」

壊れたベランダの奥から顔を出した空菜に頼まれた凧は、二つ返事で了承した。凧は三次元的に駆け回る魔猫の気配を追いながら、魔力を練り上げる。

規格外に強力な猫鬼に即席の破魔の霊術が効かないのは特区警備隊の苦戦ぶりを見れば分かる。物理的な拘束は意味を成さない魔力の塊に対して、動きを止めるというのはなかなか困難なミッションだ。

おまけに相手は疲れを知らず、傷も負わないと来れば、攻撃によって弱低下させるという一般的な魔獣対応は取れない。

猫鬼は、緩急を付けた動きで特区警備隊員を手玉に取っている。一度崩れた連携を立て直す時間は素早く軽やかに移動する猫鬼を前にしてはあまりにも長すぎるし、猫鬼も確実に獲物を仕留めるために、特区警備隊という障害に囚われないよう

に必死だ。

「小さな黄金。追い立てろ！」

速さには迅さで勝負する。中空を蹴る小さな獅子が、雷光の速度で猫鬼に追いつがる。

猫鬼を遥かに上回る移動速度。常人ならば、空中に紫電を飛び交っているようにしか見えないだろう。雷撃の眷獣の猛追を受けて猫鬼が呻く。その頭を、鋭い爪が打ち砕く。さすがに吸血鬼の眷獣は相手が悪い。猫鬼の力では、小さな黄金と組み討ちすることはできないのだ。

しかし、それでも再生は止まらない。消し飛ばされた頭を次の瞬間には再生し、小さな黄金の頭上を飛び越える。

倒したと思った相手が一瞬にして復活したのは、小さな黄金にとって驚くべきことだったらしい。慌てて猫鬼を追いかけて、今度は背後から首根っこに食らいつく。強靱な顎で猫鬼の首を焼き砕くと、勝利の雄叫びを上げる。その真横を、復活した猫鬼がすり抜けていく。小さな黄金は、飛び退る猫鬼を見るや今度は怒りに打ち震えてこれを追いかける。そうして、小さな黄金は速度と力で猫鬼をモグラ叩き

のように倒しては追いかけるを繰り返した。

「倒さなくていいんだよ、こっちに追い込め！」

凧は小さな黄金に指示を飛ばす。

以前よりも強い魔力を帯びた小さな黄金は、扱いが一層難しくなってきた。それを御すだけの力を経験を凧は積んでいるのだが、このまま小さな黄金が猫鬼を追い回して夜の住宅街を走り回っていたら、凧のほうが先に参ってしまう。

相手は持久戦に強いのだ。早い内に片付けなければならぬ。

空中で小さな黄金と猫鬼が交錯する。幾重にも折り重なる黒と金色の魔力光の乱舞が、夜空に光り輝く。猫鬼がまき散らす呪詛の尽くを焼き払い、猛然と猫鬼を追う小さな黄金への魔力供給を凧が停止した。不意に訪れた静寂は追い立てられていた猫鬼ですら予想外だったようで動きを止めた。来る小さな黄金の攻撃への対応への備えが無駄になり、動きを止めたその一瞬で凧は新たな眷獣を呼び出していた。

インフェリア・アーデル  
「不出来な黒剣！」

夜闇よりもなお暗い、あらゆる光を飲み込む黒の剣が凧の右手で鈍く魔力稼働させる。

出来ない黒剣の能力は重力操作。

魔力で生み出した小規模な超重力の結界が猫鬼を捕らえる。

「じゃあッ！」

猫鬼が脱走を試みるが、超重力空間は猫鬼を路面に叩き付けたまま逃がさない。魔力による拘束は、猫鬼にも有効。出来ない黒剣が生み出す重力空間は、猫鬼を捕らえる不可視の檻として、その性能を存分に発揮していた。

「今のうちに！」

「了解しました！ こちらも準備はすでにできています！」

特区警備隊員が三人がかりで結界を張った。三方向から猫鬼を取り囲み、三角形の紋様を描く。光り輝く結界が猫鬼を今度こそ絡め取り、龍支脈から流れ込む靈力を大幅に抑制した。頼みの綱のエネルギー源を絶たれた猫鬼が苦悶の声を上げる。猫鬼単体では、自らを維持する魔力を生み出すこともできないのだ。ただ存在するだけで魔力を消費して消えてしまいうだろう。

そこに空菜が致命的な一撃を加える。

光り輝く巨人の腕が猫鬼の頭をむんずと掴んで、猫鬼を構成する魔力を根こそぎ

奪い取っていく。初めこそ激しく抵抗した猫鬼であったが、もはや回復の術はなく、抵抗そのものにも魔力を使う有様だ。あつという間に魔力を失い、空気に溶けるように消えていった。

猫鬼が消失して、十分ほどが経ち、再生の気配がないことから現場の空気は弛緩した。強い緊張が解けて、自然と関係者に笑みが浮かぶ。とはいえ、これですべてが終わったわけではない。まず、猫鬼は存在そのものが強烈な呪詛の塊だ。それが街中で暴れたのだから周囲を浄化する作業が必要だ。万が一にも、猫鬼が呪詛を巻いていたら大変なことになる。場合によっては第二、第三の蠱毒が自然発生する可能性もあるし、感受性の高い人に「感染」し、新たな霊障を引き起こすこともあり得る。

そのため、特区警備隊は大がかりな土地の浄化作業を夜通し行わなければならなかったし、直接的に悪意を向けられていた恵美は、専門病院に運び込まれて検査を受けることになった。

恵美を襲った猫鬼の存在は、それまで凧以外は確認できていなかった悪質な呪詛

の存在を白日の下にさらし、特区警備隊の警戒態勢を引き上げさせることに繋がった。

街中で危険な呪詛が使われ、女子高生が襲われるという事件は、行政としても放置することのできない事件だ。まして、三ヶ月も前から霊障に苦しんでいたとなると、未然に防げなかった特区警備隊への風当たりが強くなる。適切な対応を取らなければ、住民の不安を煽るだけで、事件の解決から遠いてしまう。

一先ずは土地の浄化を急ピッチで行う。幸いなことに空菜が魔力を食らったことで、猫鬼がまき散らした悪性の魔力の多くが消失している。この分なら調査も含めて日の出前には解散できそうだった。

次々に集まってくる特区警備隊の浄化班は、深夜の急な呼び出しにもかかわらず毅然として事態の収束に当たる。

その様子を眺めていた凧に、吉岡が缶コーヒーを渡した。

「いいんですか、公務員がこういうこととして」

「これくらいで目くじら立てるヤツは……まあ、いないとも限らないが、いいだろ別に」

そう言って、吉岡は自分の分のコーヒーを啜る。

「で、どうなんだ？」

「急になんですか？」

「今日、猫鬼がここに出るって分かったんだろ？ どうやって知った？」

吉岡信二は猫鬼の事件に関わる特区警備隊の隊員だ。学校の調査にも従事していたし、恵美を視てもいた。猫鬼はなぜか学校以外で恵美を襲ったことはなく、学校の外に出ることもなかった。猫鬼の行動範囲は、常に学校の敷地内に限定されており、恵美がいなければ現れることすらない。そういう怪異が、急に恵美の家を襲撃した。そこに凧と空菜が居合わせたのは偶然ではないと推測するのは、真っ当なことだろう。何より、信二に通報し、特区警備隊員の派遣を要請したのは凧本人だ。

「今日、龍支脈の流れが変わったんです」

「ああ、この辺な」

「今まで、坂木さんの上は龍支脈の上にはありませんでしたけど、今回の変動で龍支脈と重なるようになりました。それで、龍支脈を辿っていくと、中央高校があります」

「つまり、猫鬼は龍支脈を辿って移動してることか」

「魔力の塊ですから、龍支脈に乗ること自体は可能なんでしょう」

「理論上は、そうかもしれないけどな」

信二は今一納得できないとばかりに頭を搔く。支脈とはいえ龍脈に乗って移動するというのは、呪術が日常に存在する暁の帝国の専門家からしてもファンタジーの領域だ。

いくら魔力の塊とはいえ、まかり間違えば一瞬で押し流されて大自然を流れる霊力の中に霧散することになる。

「あの猫鬼は、半自動的に対象を追尾して呪詛するタイプの式神みたいですから、坂木さんに繋がる道が見えれば強引にでも通ろうとするでしょう。それに本・体・じ・ゃ・ない・わ・け・で・す・し」

「目に見える部分は使い捨ての身体。本体は別にいるか」

「試行回数は何回でしょうね。何百回もチャレンジして、そのうちの一回が龍支脈を上手く抜け出せたってことかもしれないですね」

呪詛を飛ばす本体が別にあり、それが仮初めの身体を用意して恵美を追わせる。

龍支脈に乗り、恵美を襲えれば良し、失敗すればそのまま消失するが、本体にとっては痛くも痒くもない。数え切れないほどの失敗を繰り返しながら、恵美にじわじわと迫っている。それが猫鬼を動かす呪詛の本体だ。

「形を持った呪詛ってのは、厄介だな。そこまで極まってる、終わりが無いもんだ」

話し合いで解決できる段階はとうに過ぎている。

相手は自動的に恵美の存在を検知して、攻撃を飛ばすプログラムだ。試行回数が数千数万になったとしても、諦めるということはない。それ以外の機能は、もとより持っていないのだ。

「蠱毒の本体は龍支脈を辿っていった先にいるわけだな」

「だと思えます」

「ここの支脈は、全長十五キロはあるぞ。目星はついてるのか？」

「ええ、おそらくですけど」

「マジか。どこだ？」

翌朝、日の出と共に風は中央行政区の南の外れにある日野坂地区公民館にやって来た。休日でも地域活動で使用する部屋は開設されるのだが、今は早朝で誰もいない。四階建てのコンクリート製の建物は、長年の風雨に汚れて黒ずみ、外壁は所々ひび割れている。年季の入った建造物は、公民館と言うよりもむしろ学校と言った方がしっくりくる風貌だが、それも当然だ。日野坂地区公民館は、中央高校の旧校舎を再利用したものだ。それも立て替えもせず、そのまま地域で活用しているから、使い古した校舎がそのまま残っている。昨今流行のデザイン性を外観に求めず、昔ながらの「学校」をイメージさせる純朴なコンクリートの建物は、残念ながら行政の思惑通りには活用されておらず、校舎の八割は利用者を待ちながら時間の流れに身を任せているような状態だ。

再開発の流れで近くにできた新興住宅地に若い世帯が移り住み、日野坂地区の人口はここ十年で減少の一途を辿っている。かつて五百人の学生が利用した学び舎も、今や日に十数人の高齢者が訪れるだけとなってしまった。

そんな寂れた旧校舎を訪れた風は、敷地に入った瞬間にもはや間違いようのない

猫鬼の悪意を感じ取った。

「ああ、これは確かに俺でも分かる」

と、呟いたのは帯同してきた信二だった。

「ここが元凶で間違いなさそうだ。よし、各班呪物の捜索に当たれ。敷地全部だ。ネズミ一匹逃がさないつもりで探し出せ」

十人の部下を二人一組で散開させる信二。ある班は公民館の外を探し、ある班は中に踏み込んでいく。猫鬼の気配が充満した敷地の中では、何が起こるか分からない。ここは猫鬼の領地も同然だ。

「凧、お前も探せ。得意だろ？」

「そりゃ、まあ、もともとそのつもりですし」

凧がただの素人ならば、特区警備隊に丸投げで全く問題ない。こういった事案に対応するのは、彼らの仕事だ。

しかし、凧は新人とはいえ攻魔師だ。その力を社会に役立てるのは、官民を問わず攻魔師が負う義務である。

人権に厳しい日本ですら、攻魔師は中卒から活動できる。より魔導犯罪リスクの

高い暁の帝国ならばなおのことだ。

何より、ここを特定したのは凧だ。言わば、これは凧の手柄であり、最後の一押しに関われる好機をみすみす逃すわけがない。

「じゃ、俺裏手に回りますんで」

「そっちが怪しいのか？」

「何となくです」

呪術の歴史は人類の歴史と同等とも言われており、世界各国で様々な形に変化している。当然、それを扱う攻魔師にも得意不得意がある。凧が得意とするのは、霊体への干渉だ。古くは巫女や神官などが習得した技術で、母から受け継いだ強力な霊媒能力は世界的にも希有な才能であった。

人に見えないモノを視て、感じて、時に対話すら行う。それを可能とする凧の靈感の鋭さは、同年代でも凶抜けている。

空菜を連れて、勘任せに歩を進める。

油断はできないが日が昇り始めたことで、呪詛の苦手な日差しが公民館にかかると。長い夜が終わり、朝の安寧が訪れたのだ。

公民館として使われているのはコの字型の建物の西側の一階と二階だけで、他にも使われているのは体育館だけだ。残りは手つかずのまま放置されている状況である。一階と二階の窓にはベニヤ板が張られていて、中の様子は外からでは分からない。

「こっちは何年ほったらかしにされてるんでしょかね」

「萌葱姉さんからもらった資料だと、中央高校が移転したのは十年前だって話だから、その時からだろうな」

「もったいない」

建物の東棟は、売却されるも買い手が付かず、地域での有効活用も為されないままなのだ。グラウンドも結局は管理されず、固く絞まっていたはずの地面に背の高い雑草が生い茂っている。

「土なんですね、このグラウンド」

「昔の学校は土のところもあったみたいだな。日本時代の方針らしいぞ」

暁の帝国は、人工島なので土がない。今、国の中にある土はすべて余所から持ってきたものだ。自然の植物が育つ余地は、そもそもないのだが、時折こうして昔土

を敷いた土地が放置された結果、雑草が繁茂する光景が生まれることがある。

「嫌な感じが、さつきからしますね」

「ああ、そうだな」

空菜が不快感に顔を歪める。負の魔力を扱う吸血鬼でも、じつとりとした呪詛の魔力は不快以外の何物でもない。

「この辺だな」

凧が感じる違和感の発生源は、プール脇の桜の木の近くだ。すっかり廃れたプールには水がなく、廃タイヤや自転車投げ込まれて朽ちるに任せた状態だ。その周囲を取り囲むように、桜や梅の木が植えられている。外からプールの中が見えないように木々で覆い隠すためだったのだろうか。管理者不在のまま放置された十年間で、雑草が繁茂し、木々は剪定されることなく枝葉を好きに伸ばしている。結果、プール周辺はより一層人目が入りにくくなった。おまけに一日の大半が日陰で、水が多い。

ガサガサと音がしたので顔を上げると、反対側から回り込んできた特区警備隊の隊員と目が合った。

「君たちもこの辺に目を付けたのかい？」

「はい、ちょうどここが怪しそうだと思ったところですよ」

「うーん、確かにジメジメしてて嫌な感じだ」

凧が指さしたのは、桜と梅の間だ。降り積もった落ち葉が分解されて、柔らかい土で盛り上がっている。水の流れがほとんどないので、表土が流出することもないまま十年分堆積しているのだろう。人間が見ていないところで自然が勝手に土壌を作り出していると考えると神秘的だが、残念なことにこの土は呪毒に汚染されているようだ。そのまま自然に帰すわけにはいかない危険物だ。

「よし、ここを掘り返してみよう」

何が起こるか分からないので慎重に土をスコップで掘り返す。見た目は普通の湿った土だが、掘り返すと強い瘴気が滲み出てくる。普通の人間ならば、ここにいらただけで嘔吐やめまいに襲われただろう。

「これは、なかなかキツイな」

と、凧は呟く。

エレディアから呪詛を受けたときほどではないが、ねっとりとした毒性の空気だ

気分が悪くなる。

「いっそのこと、わたしの眷獣で掘りますか？」

という提案を空菜がしたが、却下した。

呪詛の大本を消してしまえば、事件が解決するかというところではない。呪詛があるということは、それを仕掛けた誰かがいるということなのだ。空菜の眷獣は、そこに至る手がかりすらも消してしまいかねない。

仕方なくスコップを使い手作業で掘り返す。何が埋まっているか分からないので、細心の注意を払って作業を進める。他の隊員たちも集まってきて、念のために結界を張り、龍支脈と周囲を切り離れた。

堆積した腐葉土を取り去り、絡まった木の根を切りながら土を掘ること十分。真っ黒な木箱が埋まっているのを見つけた。

「出た。間違いない、これだ！」

穴を掘っていた隊員が声を上げた。

土を拭い去るとそれはどこにでも売っているような市販の道具箱であることが分かった。水を吸い黒ずんだ道具箱に呪符を貼り付け、霊的なコーティングを行う。

蓋を開けても、中から呪詛が出ないようにする措置である。

必要な措置を終えてから、呪符で裏打ちした防護服に身を包んだ隊員が蓋を開ける。

「蠱術の本体で間違いありません」

「しっかりと記録残せ。終わったら空菜ちゃんにバシッと決めてもらうからな。後から記録取ってないって言っても遅いからな」

信二が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

蠱毒は数ある呪詛の中でも重罪だ。古代の日本でも名指しで禁止されるほど忌み嫌われた邪悪な呪詛である。

猫を利用した蠱毒だが、これはどちらかというと犬神に近い術のように思う。

「空菜ちゃん、記録取ったから、この辺刺してもらっていい？」

「了解しました」

信二に頼まれた空菜が頷いて、白銀の小太刀を抜く。魔力を無効化する電撃が四方に弾け、怨念に塗れた土ごと猫鬼の呪詛を消失させる。

その呪詛が抱く思いも成立過程も関係なく、空菜の電撃が打ち消していく。魔力

を無効化する刃シーカー・アルゲントウムの白銀を使うのは楽かつ安全な呪詛の処理方法だ。猫鬼の力の源である怨念すら魔力ごと容赦なく消し去って、ものの十秒ですべての呪詛を消し去った。

「終わりましたね」

と、凧が信二に言った。

両肩にかかっていた重圧が消えた。空菜の一閃は、過たず猫鬼の根幹を斬り裂き、完全に消してしまったのだ。

土地を浄化する必要がないほど完膚なきまでの完全消滅だ。掘り起こされた箱はただの箱でしかなく、土もまたただの土でしかなくなった。呪詛の痕跡はなくなり、もう二度と猫鬼が現れることはない。

凧は木箱を覗き込んだ。そこにはミイラ化した黒い猫の頭部が置いてあった。呪詛など関係なく、見るだけで気分を害するものだ。このミイラが猫鬼の核となった怨念の持ち主だ。黒猫のミイラは一枚の写真を啜っていた。密封された道具箱の中にあつたからか、色褪せてはいたが写りは悪くない。

「坂木さんじゃないな」

写真に写っているのは長い髪の少女だ。セーラー服を着ていて、あどけない顔立ちからすると中学生くらいだろうか。

「ずいぶんと年季の入った写真だな」

と、同じく覗き込んだ信二が言う。

「土は深いところにあつて根っこが絡んでましたし、穴を掘ったのは一年、二年のことじゃなさそうですね」

「てことは、これはあれだな。所謂人違いってヤツだ」

「本当に呪われていたのは、この写真に写っている人ですね」

とすると、恵美は完全なとぼちりだ。

凧が猫鬼をおびき寄せたとき、恵美の霊力を写しとった呪符を使って凧を恵美と誤認させたが、それと同じようなことが恵美に対しても起こっていたのだ。猫鬼は恵美を本来の呪詛する相手と誤認して攻撃を仕掛けていたのである。

恵美が身に覚えがないというのも当然だ。そもそも、恵美は最初から無関係だったのだから。

「とりあえず、この娘の身元を調べてみるか。別件で相談記録があるかもしれない

しな」

信二は面倒そうに言った。

写真は相当古そうだ。この猫鬼を生み出した悲劇は、おそらく十年以上も前のものであろう。とすると被害者になるはずだった少女はすでに成人しているだろう。

蠱毒に狙わせられるほどに恨まれているというのなら、別の呪詛を受けたことがあるかもしれないし、現在も苦しんでいるかもしれない。そして、呪詛の犯人の特定のためにもこの「少女」の身元は重要な情報であった。



凧と空菜は事件に当初から関わる関係者だ。そのため、まっすぐに家に帰ることなく特区警備隊の隊舎に立ち寄り、資料作成に協力することが求められた。坂木家の戦闘を終えてから、明け方に日野坂地区公民館に行くまでに仮眠を取ったが、決して質のよい睡眠ではない。明らかな睡眠不足に苦しみながらも、睡眠に負けずに調査作成を終えたことは快挙ではないか。

気がつけばもう昼時だ。隊舎の食堂で昼食を取っているが、前に座る空菜の目にも、若干の疲労の色が浮かんでいる。このまま家に帰って寝る。それが使命だからに、凧は自分に言い聞かせた。

そんな凧の隣に、大柄の男が腰掛ける。吉岡信二だ。

「隊長さん、どうかしましたか？」

と、空菜が尋ねる。

「ああ、実はな。君らが調書を作ってる間に、あの娘の身元を調べてたんだが」

「何か分かったんですか？」

「大方の予想通りだったからな。結構簡単に分かったぞ。これから確認に行く。凧はどうする？」

「むしろ、俺がついて行っていいんですか？」

「関係者だからな。それにクラスメイトだろう？」

「公私混同になるんじゃないですか？」

「龍支脈関係はお前が見つけたんだから、何か質問されたらお前が答えろよ」

「それが目的ですか。分かりましたよ。行きますよ」

信二は呪術の知識があるが多分に感覚的な能力の使い方をする。細かい理論を詰めていくタイプではなく、呪術の系統だった説明を苦手とする大雑把な性格だ。

技術的な質問が出たときに、凧に投げようという算段だ。

「凧さん、わたしも行きます」

「空菜、疲れてるだろ？」

「大丈夫です。行き先は、坂木さんのところなんですよね？」

空菜の問いに信二は首肯して答える。

この一ヶ月ほどの間に、空菜と恵美の仲はかなり近づいた。空菜にとっても、この事件の解決は重要案件だ。検査のために病院に搬送された恵美に会う最短ルートは、凧についてくることだ。

一人が二人になっても大して変わらないという判断の下、信二は空菜の同席を認めた。空菜が事件解決に大きな貢献をしており、恵美の友人という立場でもあるからだった。

恵美が搬送されたのは、中央行政区の東部にある帝国立大学付属病院である。一

般の病気の他、呪詛を専門に扱う霊障病棟を有している。

凧も物心ついたときから両手の指では数え切れなくらいお世話になっている病院だ。

恵美は霊障病棟の三階に検査入院することになった。

入院中の恵美を訪ねると、恵美は嬉しそうに笑った。

「空菜さん、昏月君も。あれ、面会はダメじゃなかったっけ？」

部屋の中にはベッドの上で身体を起こしている恵美とその傍らに座る母の雪子の二人だけだ。

恵美の疑問に答えたのは、遅れて入ってきた信二だ。

「ああ、それについては、特別に許可を取りました。検査入院中で大変なところすみません」

「あなたは？」

「特区警備隊の吉岡信二です。坂木恵美さんの関わる呪詛事件を担当しております。どうぞ、よろしくお願いします」

信二とは初対面である恵美は、空返事で答えた。特区警備隊関係の聴取は、すで

に終えている。改めて別の調査官がやってくることに疑問とは行かないまでも違和感を持ったのだろう。

「あの、特区警備隊さんの聞き取りは午前中にもしましたが、まだ何か？」

雪子が信二に尋ねる。

雪子からすれば自分が仕事で不在にしている間に娘が自宅で襲われていたのだ。特区警備隊には以前から相談していただけに、事件を防げなかったことに憤りを覚えていくくらいだ。もっとも、襲ってきた猫鬼に身体を張って戦ったのも特区警備隊の隊員なので、それを露わにすることはないが、もっと早く対応できなかったのかという思いは当然持つだろう。

「はい、まずは連絡が一つと確認が一つ。それぞれありまして、無理を言ってお伺いした次第です」

「連絡と確認ですか？」

「はい。まず、連絡ですが、昨夜恵美さんを襲撃した怪異、猫鬼といいますが、これの本体を今朝処理しました」

「本体を処理？ それは、もう解決したということですか？」

「呪詛としての猫鬼は、もう恵美さんを襲うことはありません。有り体に言うとお退治できました」

「本当ですか？ また、どこから出てきたりはしないのですか？」

「その心配はないでしょう。呪詛を形成する本体を、そちらの空菜さんの眷獣で処理しました。彼女の眷獣は呪詛の類の天敵とも言える能力です。二度と復活することはありません」

信二は空菜に視線を向けつつ、そう断言した。

「じゃあ、わたしは学校に行っても大丈夫なんですか？」

と、恵美が身を乗り出して尋ねる。

信二は鷹揚に頷いて、大丈夫だと答えた。

「……そうですか。よかった」

恵美はほっとしたように吐息を漏らすと、そう呟く。いつどこから襲われるか分からない状況は恐怖しかない。自宅すら安全ではなくなったのだから、どこに行けばいいのかすら分からなかったのだ。それが解決したのだから、これは大きな前進だ。

「空菜さん、昏月君、本当にありがとう。わたし、なんてお礼を言ったらいいか」  
「別にお礼とかいらぬよ。乗りかかった船だし、攻魔師なのに学校で霊障が起こされたら堪ったもんじゃないしな」

「そうですね。とりあえず、無事でよかったです」

呪詛の大本が消滅したことが確認されたので、検査入院が長引くということはない。空菜の魔力無効化能力を受けた恵美には万に一つも霊障が残ることはありえないのだ。恵美が検査入院しているのは、国の規定に則ったものであって、無事を裏付けるための作業でしかない。

「と、それが連絡でもう一つ確認が。お母さんの方なんですけどね」

「わたしですか？」

信二が鞆から取り出したタブレットの電源を入れる。手慣れた様子で画面を操作してから、雪子に画面を見せる。

「この写真に写っているのは、あなたですね？」

「え？ ……あ、はい。確かに、わたしです」

信二が雪子に見せたのは、黒猫のミイラが啞えていた写真だった。色あせた写真

をスキャンして電子化した画像だ。

「中学の時のわたしです。もう、三十年は前のものですけど。どうして、この写真が？」

「実は、呪詛の本体と一緒に埋められていたんです」

「……どうということ、でしょうか？」

今一意味が分からないという風に雪子が尋ねる。自分の写真が呪詛に利用されていたと聞いてもピンとこないのだ。その問いに答えたのは、凧だった。

「人を呪うときに、呪詛する相手に関わるモノを使うというのはよくある手なんです。有名な丑の刻参りでも藁人形に相手の髪を入れたり、名前を書いた紙を貼り付けたたりして釘を打ちます。写真を使うのは珍しいですけど、意味合いは同じですね」

「え……ちょっと待ってね、昏月君。その、それってつまり、呪われていたのは恵美じゃなくて……」

「……呪詛の対象は、坂木さんのお母さんです」

雪子は何を言われているのか分からないといった表情を浮かべた。

今まで雪子は一度も被害を受けていないのだ。恵美ばかりが傷ついていく中で、

無力感すら覚えていた。その根本的な原因が自分にあるなどと、一度として考えなかった。

「呪われていたのは、わたし？」

「はい。その写真が出たところに、俺も一緒にいました。場所は日野坂地区公民館の裏手、旧中央高校のプール脇の土の中からです。小さな木箱に入っていた猫の頭のみイラが、その写真を啜っていたんです」

「ね、猫のみイラ？ ああ、ごめんなさい。よく分からなくて」

「そうですね。すみません。まず、一から整理します」

呪詛のことを言われても、一般人はまったく分からない。漫画やアニメから漠然とした知識を得る人もいるが、雪子はそういったオカルトやサブカルチャーからは遠いところにいる人間だ。

凧はまず今回の呪詛がなんなのかというところから説明することにした。

「坂木さんを襲った呪詛の正体ですが、猫鬼と呼ぶ怪異です」

「猫鬼？」

「猫を使った呪詛です。犬を使えば犬神と言ったりします。動物や虫を使う呪詛の

一つで蠱毒の仲間ですね。蠱毒は聞いたこと、ありますか？」

「ごめんなさい。その手のことには疎くて」

「いえ、それが普通ですから」

凧はまず蠱毒について掻い摘まんだ説明をした後で、猫鬼の作り方を伝えた。猫のミイラが頭部だけだったところから、犬神と同じ方法で作ったものと思われる。猫を首まで土に埋め、極度の飢餓状態まで追い込む。餌を目の前に置き、最後の力を振り絞って伸ばした首を切断し、その怨念の詰まった頭部を使って憎い相手を呪詛するというものだ。

「酷い……」

と、呟いたのは恵美だ。

「その人は、猫をそんな風にして殺したの？ お母さんを呪うために？」

「そういうことだと思う。偶然、猫の首が落ちることはないだろうからね」

恵美の瞳に怒りの色が滲む。

猫又を家族同然に愛する恵美は、当然、普通の猫も大事に思うし、もちろん、常識として、猫をそのように粗雑に扱うことなど許されないことだ。

「でも、だったらどうしてわたしが襲われたの？」

と、恵美は尋ねる。もつともな質問だ。呪詛されているのが雪子ならば、恵美は本当に関係がない。

こればかりは想像の域を出ないが、状況証拠から考えると、

「たまたまだったんだと思う」

という結論になる。

「たまたま？」

「霊的な特徴は親子で似るんだよ。だから、たまたま坂木さんを見つけた猫鬼がお母さんだと誤認して、襲っていたというのが真相だと思う」

親から子へ霊力は引き継がれる。親の霊力が強ければ、霊力の強い子どもが生まれやすいし、その能力までも引き継ぐことは珍しくない。他ならぬ風が、母から霊的才能を受け継いでいる。まともに呪術を使うことのできない脆弱な霊力でも、それは同じだ。

「お母さんとわたしを間違って襲ってたなんて、そんなこと……」

「あり得なくはないよ。それに猫鬼自体が、まともな呪詛じゃなかったみたいだし」

「どうということ?」

「猫鬼を作ったのは素人だと思う。実際のところ、呪術として成り立ってすらいなかった。形だけ真似ただけだから、本当は猫のミイラができるだけだったはずなんだ」

猫のミイラと聞いて恵美は顔を歪める。

「でも、結果的に猫鬼は成功した。偶然の産物だよ。たまたま龍支脈上に埋められて、星辰とかの影響を受けて「それらしいモノ」が生まれてしまったわけだ。ただ、場所が悪かった」

「場所?」

「学校は結界で守られていて、靈的存在は出入りできない。つまり、外からの侵入だけじゃなくて、中から出ていくこともできないってことになる。不完全で脆弱な猫鬼は、怨念を晴らすことができないままずっと結界の中に閉じ込められていたんだろう。お母さんは中央高校じゃないんですよね?」

凧に話を振られた雪子が頷いた。

「わたしは城南出身。中央高校とは恵美が入学するまで縁がないわ。公民館になっ

てからも一度も行ってないの」

「猫鬼がいつ成立したかは正確には分かりませんが、ミイラの年代測定結果によると三十年から二十五年前だそうです」

「わたしが、高校生か大学生か、それくらい。でも、それくらい前なら、どうして今になって出てきたのかしら？ それに、恵美が襲われていたのは中央高校の中で、公民館じゃないのよね？」

雪子の疑問ももつともだ。

猫鬼は結界の外に出られなかったから雪子を長年襲えなかった。それは旧校舎が公民館に変わってから同じだ。結界はそのまま引き継がれて、今も継続して運用されている。猫鬼は、日野坂地区公民館の敷地から出られないはずだ。

「わたし、日野坂には行った覚えはないよ」

と、恵美も言う。

日野坂は、恵美の行動圏外だ。立ち寄る用事すらない地域で、そもそも日野坂地区公民館が旧中央高校だということすら今まで知らず、どこにあるのかも分からないくらいだ。

「俺たちも旧校舎のことなんてまったく頭になかったし、学校の結界はそれぞれ独立してるものだから、他の結界との関係なんて考えもしなかったよ。それでも、猫鬼は中央高校の校舎内に侵入できた。要は抜け穴があったんだ」

「抜け穴？」

「そう。昔のデータをいろいろと調べてみたけど、十年前に中央高校が移転したときに、結界をどうするかって話があった。結界は土地に紐付くから、移設ってわけにはいかない。けど、一から新築するのはかなり大変だ。だから、新校舎の仮設した結界に旧校舎の情報を転写するって方法を採用した」

「転写？」

「コピーしたってこと」

「ああ」

恵美が頭に「？」を浮かべているので、簡潔に説明した。

結界の形だけ作り、詳細な設定は別の結界から写し取る。大規模な結界を簡単に早く設置することができるという利点があり、学校同士なら権利関係や結界に必要な諸条件は容易にクリアできる。とりあえず、それまで通りの結界を用意して、そ

こちら移転先に合わせて随時アップグレードするというのは、施設を移転するときにはよく採られる手法である。問題は、その転写方法だ。一般的に結界を転写するとき、転写元と転写先を霊的に接続して、情報をダウンロードし、転写が終了すると接続を解除する。つまり、一時的ではあるが旧校舎と新校舎は霊的に繋がっていた時期があるのだ。

「調べてみたら、大体三ヶ月くらいは転写に時間がかかっているみたい」

「でも、終わったら繋がっているとところは切るんだよね？」

「そうだね。この工事でも、接続箇所の封鎖はしてる。ただ、それが甘かったみたいだ」

「甘い？」

「普通、こういう工事をするときは、新校舎と旧校舎の両方で切断作業をするんだ。切り離された道は、そのまま自然に消えていって、二つの結界は独立するものなんだけど、どうも新校舎側だけ塞いで旧校舎側は処置してないみたいなんだ」

「え？ まだ、繋がってるってこと？」

「そういうこと。ただ、新校舎側は塞いでるから、そのままなら問題はなかったん

だけど、今はその蓋って言うのかな、新校舎と旧校舎を繋ぐ道の出入り口のところに小さな穴が開いてたよ。意識しないと気づかないくらいのもんだけど、猫鬼が入りすぎるくらいなら十分みたいだ」

「そんな手抜き工事みたいなこと」

恵美も雪子も絶句している。

呪詛のことも結界のこともよく分からないが、本来終えているはずの工事が未着工のまま放置されていたことで、被害を受けることになったのだ。怒りよりも呆れのほうが大きいくらいだし、通常の工事と違って目に見えないので実感がどうしても湧かない。

「猫鬼に呪われていたのは、坂木さんのお母さんで呪詛の本体は旧校舎にあった。ただ、お母さんは猫鬼の活動範囲に入らずに生活していたから、その影響を受けずに三十年もの時間が過ぎてしまった。おそらく、この間猫鬼は休眠状態だったはずだ。そんな中で、中央高校に坂木さんが入学してきた。お母さんによく似た気配を感じて目覚めた猫鬼は、手抜き工事で残っていた霊道を通して坂木さんを攻撃した、というのがこの事件のあらましです」

「……二つだけ聞いていいかしら」

と、雪子が口を開いた。

「学校の外に出られないのなら、どうして昨日、うちに猫鬼は出たのかしら？」

それに、恵美の傷は最初の頃は、今ほど酷くはなかったと聞いているのだけど、それはどうして？」

「そうですね。猫鬼が坂木さんの家に出たのは、龍支脈を通過して移動したからです。学校の結界は、龍支脈から引き上げる霊力で維持しているんです。猫鬼はこれを利用して、移動経路に使ったと思われる。昨日の夜、龍支脈の流れが変わって坂木さんの家と学校が同一の流れの中に入ったのが原因ですね」

もちろん、それは簡単なことではない。

龍支脈の流れに乗って移動するのは、ほぼ不可能な難事である。それを実現できたのは、猫鬼が実体を持たない霊体であるということや、あくまでも移動していたのは本体ではなく呪詛だったということが大きい。失敗しても問題なく次の呪詛を飛ばせばいい。そうしてトライアンドエラーを繰り返して坂木家を襲撃したのだ。「坂木さんにつけられる傷が少しずつ深いものになっていったのは、猫鬼が時間と

ともに強くなっていたからでしょう。おそらく、三月時点ではそこまで強力な呪詛ではなかったのでしょう。もともと不完全な呪詛ですし、三十年近く眠ったままだったので、嫌がらせ程度しかできなかったんです。ただ、この猫鬼は怨念を糧にして時間経過とともに力を増した。最後には龍支脈に呪詛を通せるくらいに進化しました。これが、もしも完璧な猫鬼だったら、こうはならなかったんですけどね」

皮肉なことに、不完全な猫鬼だからこそ、常識外れの進化を実現できたのだろう。従来の術式に則った正式な猫鬼ならば、進化の余地はない。そこで完結してしまっている。恵美を襲った猫鬼は術者に唯々諾々と従う式神から独自の進化を遂げた魔獣に変化しつつあったのではないだろうか。

「それに四月までの猫鬼は、坂木さんにほぼ手出しできなかつたと思いますよ」

「わたしに？ どうして？」

「坂木さんはずっと守られていたから」

「守られて……？」

空菜が、その後を引き継いだ。

「虎吉ですよ」

「虎吉が？」

「はい。虎吉は、恵美さんにもお母さんにも、自分の霊力の一部をつけているみたいです。近づいてくる悪い者を追い払うための護衛みたいなものですね」

「そんなことしてたの？」

ここにいない虎吉は、今は魔獣の専門病院に預けられている。猫鬼との戦闘でかなり消耗しているからだが、命に別状はないと聞いている。

「この前、坂木さんと柳場先生に相談されたときに俺をひっかいたヤツだよ。あれで、猫鬼の呪詛も最初のうちは凌いでたんだ」

以前、凧の手をひっかいた白い猫の手。恵美には見えなかったが、凧はそれを虎吉の手だと見抜いていた。

「猫鬼は進化を重ねて少しずつ強くなっていくし、虎吉は消耗していく一方になる。力関係が逆転したのは、ゴールデンウィーク頃じゃないかな」

「虎吉が体調を崩してたのって、もしかしてそういうことなの？」

「多分ね。猫鬼が一気に進化したのもこの時期。蠱毒は怨念を糧に成長するタイプの呪詛だ。せっかく見つけた坂木さんが十日も自分の活動圏に入ってこないってい

うのは、猫鬼からしたら相当プラスチックが溜まったと思う。ただでさえ、学校の敷地の中でしか動けないんだからね。それが、猫鬼を今までにないくらい強力な怪物に進化させたきっかけだろう」

一ヶ月以上攻防を繰り返して、虎吉は疲れていた。その反面、十日もの間、ご馳走をお預けされた猫鬼はそのストレスすらも糧にして進化を遂げた。虎吉は猫鬼の呪詛に敗れて、体調を崩してしまい、虎吉の加護が弱まったこともあって、恵美の霊障はより深刻になっていったのだ。

「虎吉、そんなにまでして」

「まあ、虎吉が恵美さんの家に来たのって、お母さんが高校生の頃なんですよね？ 虎吉からしたら、恵美さんは娘とか妹とかそんな感じの認識みたいですよ」

「そっかー」

恵美はどこことなく嬉しそうに相好を崩した。

虎吉は猫又の力を使い、家族を守っていた。三十年間ずっと雪子が家庭を持ち、娘を産んでからはその娘のことも見守り、時に身体を張って守っていたのだ。

猫鬼は特に家族に明確に危害を加える意図を持った害悪で、しかも猫の怪異だ。

虎吉からすれば、自分の縄張りを荒らす不届き者以外の何物でもなかっただろう。

一通り、この事件の詳細を説明し終えたところに、信二が改めて口を開いた。

「それではお母さん。最後の確認ですが。三十年程前に黒猫と縁があったことはありますか？」

雪子は信二にそう聞かれ、瞳を揺らした。

それから、ゆっくりと深呼吸をしてから口を開いた。

「昔、実家で猫を飼っていたことがあります。虎吉がうちに来る前です」

「それが黒猫？」

「はい。名前はそのままクロでした」

雪子は頷いた。

「その子は、その後どうしましたか？」

「……うちがペット不可の物件に引っ越すことになってしまって、友達に引き取ってもらったんです。中学、二年生の頃だったかと」

「そのお友達について教えてもらってもいいですか？」

「……その、あまりお話できることはないんです。その娘、もう亡くなっているの

で」

「それは、すみません……」

「いいえ。高校二年生の頃です。お風呂で溺れてそのまま。詳しいことは、本当に何も知らないんです。別の高校に進学して、それから疎遠になってしまったので」

「そのご友人の進学先は中央高校ですね？」

「はい」

雪子は頷いてから、ハッと目を見開く。

「あの、その娘がわたしを呪ったっていうことですか？ さっき仰っていた黒猫の首って、まさか」

「詳細はまだ分かりません。調べてみないことには何とも。ですが、可能性は否定できません」

信二の言葉はあまりにも重い現実を突きつけてきた。

友人に呪詛されるというだけでもショックなのに、まさかその触媒に自分が可愛がっていた猫を使われるとは。しかも、それはその友人を信じて引き取ってもらった子なのだ。あまりのことに雪子は愕然と言葉を失い立ち尽くした。

その後の話。

恵美は検査に異常が見られなかったので、月曜日から登校を始めた。一ヶ月あまりの療養だったこともあって、クラスメイトは大きく驚いて喜び快気祝いに向けて有志がいろいろと動いているらしい。

虎吉も無事に坂木家に戻り、今まで以上にのびのびと過ごしている。学校帰りに空菜が虎吉に会いに来るといふ新しい日常にご満悦のようだ。

そして、一連の騒動を引き起こした呪詛については、触媒にされたのが昔雪子の実家で飼っていたクロであることが正式に確認された。飼い主の少女は、浴槽で亡くなる前に睡眠薬を大量に服薬したことが分かっており、自殺として結論づけられていた。その両親は娘の自殺は学校での虐めが原因だとし訴訟を起こしており、三年後に和解が成立、その後は日本に帰国している。まだ絃神島だった頃の出来事だ。今更日本にいる両親に話を聞くこともできず、呪詛は被疑者死亡で処理されることになった。

友人の死は知っていたものの、クロはその後も幸せに生きたものと信じていた雪子はショックを受けていたし、結局呪詛の理由までははっきりとしなかったのも、後味の悪い幕引きとなった。



## 幕間 《お化け屋敷編》

彩海学園は、暁の帝国を代表する名門校だ。国外からも留学生を積極的に受け入れており、通っている学生の中には第四真祖の娘や大企業の子女、有名芸術家の息子など上流階級の子どもたちが顔を揃えている。中高一貫の私立校で、進学にも力を入れていく文武において高いレベルを維持している学園なのだが、もともと、そこまで突出した学園ではなかった。

彩海学園が急成長した背景には、第四真祖やその皇妃の多くがこの学園の出身者であるということが絡んでいる。

歴史を見れば、まったく浅い新興国家だ。第四真祖という伝説に謳われる世界最強の吸血鬼が統治する第四の夜の帝国は、科学でも軍事でも世界の超大国に比肩する力を持つが歴史や伝統というものは如何ともしがたい。さらに、近代国家としては珍しく騒乱とも縁が深い。絃神島の頃から、大きな争いの中心に置かれ、時には諸外国から袋だたきにされてきた歴史がある。暁の帝国の国民の中には、外国への嫌悪感を口にする者もいるし、歴史の浅い国の国民が自分たちのアイデンティティ

を、第四真祖に求めるのは自然な流れだった。

確かに歴史は浅い新興国家だ。しかし、自分たちの皇帝は伝説の第四真祖であるという点については、誰にも明らかなアピールポイントだ。

当然、第四真祖——曉古城に縁のある地は、「神格化」されていくことになる。その代表例が彩海学園だった。

夏休みを目前に控えた七月の第三週月曜日。

机の上でパンの包みを広げるのは、曉の帝国第三皇女の曉零菜である。艶やかでしっとりとした射干玉の髪と空色の瞳が印象的な、人形のように整った顔の少女だ。口を開けばフレンドリーな普通の少女だが、立場と美しさのためか、初見では近づきたいと思われることもしばしばあるらしい。ともあれ、中高一貫の彩海学園の高等部一年生。同級生の多くは零菜と中学三年間を共に過ごしてきた。彼女の人となりは、あまり関わったことのない人の間でも知られているし、零菜の周りには幸いなことに小学校からの長い付き合いの友人も何人かいる。人付き合いでは、運に恵まれていると感じることは多々あった。

「助けて、姫えもん~~~~」

「人を青タヌキ扱いしないでよ」

零菜の眼前に座る友人は、水島千咲という。小学校からの同級生。驚くべきことに、彩海学園に入学してからも、ずっと同じクラスでここまでやってきたので、腐れ縁はついに七年目に突入した。

セミロングの黒髪を二つ結びにした千咲は、今、その頭を机に押しつけて呻いている。

「千咲ちゃん、ご飯は？」

「もう食った」

「早くない？」

昼休みが始まってから、まだ十分と経っていない。零菜は混み合う学食を避けて、学校が提携するパン屋の訪問販売を利用したので、今から昼食だ。零菜が席を外している十分の間に、千咲は自分の昼食をさっさと終えてしまったのだ。

「ちゃんと食べてるの？」

「もちろん。焼きそばパン二つ。綺麗に平らげましたとも。これ以上食べると、後が怖いんじゃない」

「炭水化物ばっか」

「そっちも似たようなもんじゃない？」

「わたしのはほら、ちゃんと野菜入ってるから」

零菜が食べているのはキャベツまじまじのサンドイッチだ。純国産の小麦粉と純国産のキャベツを使ったサンドイッチは、女子たちが選ぶ人気メニューの一つだ。「それだったらわたしのにも、野菜入ってるよ。紅ショウガとタマネギ」

「微々たるものでしょ」

零菜はサンドイッチをぱくぱくと食べて空腹を満たし、包装紙を丸めて紙袋に詰めた。包装紙から紙袋まで、リサイクルできる素材でできている。これは、彩海学園の科学部とパン屋の店長が共同開発した素材なのだとか。

「零菜、に千咲？ どうしたの？」

零菜の背後からやって来たのは、麻夜だ。通常、姉妹は別のクラスに配するものだが、零菜と麻夜は立場が立場なので、一カ所に纏めてしまおうという学校側の思惑があり、今年度は同じクラスになっていた。

あいいうえお順だと名字が同じなので、必ず前後の席になる。入り口から入って一

番手が、大抵零菜と麻夜の席になる。今は席替えの結果、離ればなれになったものの、昼休みにはちよくちよくまとまって駄弁っている。

麻夜は零菜の隣の席の椅子を引くと、少し離れたところで雑談をしている男子に声をかけた。

「吉崎君、ちょっと椅子借りるね？」

「ウス！」

吉崎と呼ばれた男子は、二つ返事で答えた。席替えの結果、零菜の隣の席を手にした男子だ。せっかく隣になったものの、ほとんど会話らしいものはない。未だに零菜は吉崎について、バスケ部員だということ以外の情報は持っていない。

吉崎の許可を得た麻夜は、彼の席に座った。

「助けて麻夜様」

「わたしと麻夜ちゃんの扱いの差は何？」

いつもの調子で千咲はおどけてみせる。零菜にとっての幼馴染である千咲は、当然麻夜にとっても幼馴染だ。

「助けるって、何？」

「それを今聞くところ」

やっと会話の始めに戻ってきた。

唐突な「姫えもん」のせいで話が逸れていたのだった。

「で、結局どうしたの？」

と、零菜が聞き直す。

千咲は、待ってましたとスマホを取り出した。

「うちでやってるお化け屋敷のことなんだけどね」

「お化け屋敷？」

「千咲のとおのお化け屋敷っていうと、ブルエリかな？」

「そうそう」

ブルーエリジウム。通称、ブルエリは暁の帝国の第二西地区セカンドウエストに位置するリゾート施設だ。二十年程前には増設人工島サブプロットとして絃神島の沖合十八キロのところに浮かんでいたが、暁の帝国となって国土が拡張していく中で本島と接合し、現在は内陸のリゾート施設になった。

施設の規模は二十年の間に五割増しになり、多彩なプールや屋外の運動場だけで

なく屋内施設も充実した暁の帝国屈指のレジャーランドになっている。

このブルエリだが、実は何度か経営危機に陥っている。

特に第二西地区に取り込まれ、海の孤島から内陸の商業施設に環境が激変した時の混乱はかなりのものだった。大株主の矢瀬財閥を中心に資金が投入され、リニューアルに成功したから今の姿がある。そして、そのときにブルエリに資金を投入した大会社の中に、千咲の両親が経営する会社も含まれていた。

「ぶっちゃけ、お化け屋敷は母さんの趣味みたいなもので、そんなに力を入れてる事業じゃないんだけどね」

「そんなもんなの？」

「うちは観光業やってるけど、イベント会社じゃないし。ブルエリに出資してる関係でスペースももらったから、何かやってみるかってだけだったんだけどね。お化け屋敷なんて安直じゃん？ 正直、上手くいくとは思ってなかったんだけど」

「去年、かなり好評だったよね？ テレビで見たよ」

麻夜は一年前の記憶を掘り起こす。ブルエリに誕生した夏限定のお化け屋敷は、夏らしさを求める若者たちで賑わっていた。

「今年もやるんじゃないの？」

「やるよ。今はプレオープンで、八月から正式スタート。まだスタッフと抽選で当たったお客さんしか来てないんだけど……」

と、千咲は言葉を切った。何やら深刻そうな顔をしている。それから、スマホの画面を零菜と麻夜に見せた。

大口コミサイトだ。このサイトでの評価が客足にも影響するとして、良くも悪くも話題に上がるサイトの一つである。

「これ見て」

「んー？」

零菜と麻夜はスマホの画面を覗き込む。

「二十代女性」の書き込みだ。

『ブルエリのお化け屋敷彼氏と行った後、彼が寝込んでいました。これって呪い!?』

と、書かれている。

「よくある話じゃない？」

と、零菜は言う。

心霊スポットやお化け屋敷といった土地を訪れたに災いが降りかかるというのは、よくある話だ。

「むしろ、千咲側がこういうのを書き込んでるんじゃないかと思ってたよ」

「今時、そんなことするわけじゃないじゃん。リスクしかない」

千咲は麻夜の意見を憤慨だとばかりに否定する。

「それに、これだけじゃないの。ほら」

画面をスクロールすると、ブルエリのお化け屋敷を体験したという人の体験談が綴られている。好意的な意見がある一方で、異様な寒気を感じたとか呻き声が聞こえたとか、中には具体的に「許さない」と言われたといった書き込みがある。その上、体調不良を訴える書き込みもある。

「事実に基づかない書き込みが営業に影響するんなら、削除申請するしかないんじゃない？」

零菜が冷静な意見をする。

それに、お化け屋敷に行くというのは、目に見えない驚異を楽しむのが第一目標

だ。その後に体調を崩せば、呪いかもしれないと結びつけて考える。あるいは、そういうネタとして楽しむのもアリだ。だとすれば、こういった書き込みは話題性を引き上げるものであって、必ずしもマイナスになるものではないと捉えることもできるのではないか。

「噂話程度なら全然いいよ。でもね、本物だったら本格的に不味いじゃん？」

「本物って。ブルエリに？ 地鎮祭しなかったの？」

「したはずだけどさあ」

暁の帝国でも地鎮祭の文化はある。呪術や魔獣、霊的存在の影響を抑えるためという明確な目的に基づいたもので、日本で伝統的に行われている地鎮祭よりも現実的な魔族特区としての都合による。とくによくない者を集めやすいとされる土地や催しでは必須だ。地鎮祭をしなかったせいで、霊障を負ったとなれば、裁判で負けることもある。

しかし、ブルエリでそのような不手際があるはずがない。

「てか、本物なの？」

と、麻夜が千咲に聞く。

「さあ?」

「さあって」

「だって、わたしはあんたらみたいに不思議パワー持っていないもん」

「自分で入ったりはしたの?」

「もちろん。でも、なんもなかった」

「じゃあ、何も無いんじゃない?」

「いや、それがさあ……スタッフの中にも、いるんだよね、実は」

「幽霊見たって?」

「そう。こう、黒い靄みたいなのが出てきて、『許さない、許さない』ってずっとしゃべってたって。バイトのスタッフさん、怖がってその日から来なくなっちゃったよ」

「ほんとなの?」

「幽霊のことはほんとかどうか確認できてないけど、その人のことはほんと。正直、このままでオープンできないよ。変な噂が広まったままオープンして万が一があったら、それこそ大問題だよ」

幽霊の話が本当かどうか、今はまだ確定していない。

お化け屋敷にしろ心霊スポットにしろ、そういったところが娯楽の対象になるのは、大前提として安全であるという了解があるからだ。本物が出るような場所に好き好んで行く者は、皆無とは言わないまでも限りなく少ないだろう。

お化け屋敷は本物はいないが、いるかもしれないというスリルを楽しむ場であつて、本物の心霊現象を味わう場ではないのだ。

「攻魔師事務所に頼んでみたら？」

という零菜の意見を千咲は、今は無理と断言する。

「なんで？」

「公に除霊しちゃったら、「本物はいない」って内外にアピールすることになるじゃん。お化け屋敷的に、それもちょっとできないのよ」

攻魔師に依頼をすれば、「本物はいないのは常識だが、もしかしたらいるかもしれない」という前提を崩すことになってしまう。「本物がいたので除霊した。もう本物はいない」となれば、お化け屋敷のスリルは半減してしまう。

「姫えもん、何かいい知恵ない？」

「その呼び方止めてよ」

「姫様、お助けください」

「そう言われてもなあ……」

何かと言われて零菜にできることは、正直ほとんどない。本物の幽霊がいるのであれば、ハスター・アウルム槍の黄金ですっぱり消し去ってしまえるだろうが。

「ああ、わたしが見に行けばいいのか」

「え？」

「いや、攻魔師に依頼できないんなら、わたしが見てみようか？」

「御自ら、ご出馬を？」

「千咲ちゃんのお願いだし？」

「いやいや、わたしなんかが姫様に来てくれなんて言えるはずもなく。ただ、こう、上手いこと内々で処理できそうな攻魔師さんに渡りを付けてもらえればなんて思っただけ。ほら、いるじゃん？」

「いるじゃんって」

確かにいる。

頼みやすい上に実績があるし、内輪で処理できる攻魔師に心当たりはある。千咲とも面識があるので、事情を説明しやすい。

最近、バイトで忙しくしているようだし、その延長なのか分からないが、危ないことに首を突っ込んだらしい。クラスメイトの女子を助けるために、猫鬼と対峙したのだとか。あまり、面白くはない。

「頼むって言っても、あっちはあっちで一応プロだし。まあ、友達の頼みは断らないと思うけど」

「ただでとは言わないよ。きちんと報酬を用意しないと後で、何言われるか分からないからね。ただ、表向きはお客さんとして入ったら、たまたま幽霊と遭遇したの、善意で除霊しましたって体にしてほしいだけ」

「それはそれでどうなの……？」

そもそも幽霊がいるかどうかも定かではないのだ。お化け屋敷に入ったとして、何も出てこないという確率のほうがむしろ高い。

実際、千咲はまだ幽霊の存在を自分で掴んではいないのだ。

「それに、今ブルエリ入れないじゃん。今月末までリニューアル休業中じゃないの

「？」

と、麻夜が指摘する。

ブルエリは夏休みの行楽シーズンを目掛けて、昨年の十二月から休業していた。クリスマススのテロもあって、作業が遅れ、六月のオープンが八月にずれ込んでいた。

「プレオープンのチケットだって、抽選なわけだし」

「それくらい、わたしで何とかするよ。お化け屋敷のスタッフってことにすれば、関係者扱いにできるもん」

「そういう抜け道か」

確かに、客として行こうとすればハードルが高いが、スタッフならば問題はないわけだ。

「じゃあ、零菜ともう一人と、梓は二人分……」

「ちよっと待って、一人忘れてない？」

麻夜が話に割り込む。

「この流れでわたしを置いてけぼりにする？」

「いや、お姫様二人を動員するのは、さすがに話が大きくなりすぎるかと」

「いやいや、適材適所だよ。わたしは、零菜よりも呪い系には詳しいよ？　後始末まで考えたなら、そういう要員は必要じゃない？　ほんとに幽霊がいるんならさ」

「そういうもののなの？」

呪術関係の専門知識がない千咲は、首を捻る。この手の話は専門性だけでなくまれついでに才能も関わる話で、関係ない者にとってはまったく理解できないブックボックスだ。

「呪い系なら、確かにそうだね。本当なら、麻夜ちゃんがいてくれたほうが心強いけど」

「本当じゃなかったら、御の字なんだよ。遊んで帰ってくればいいから。ほんとだったら、ほんとに困るの」

好き好んで、幽霊と一緒に仕事をしたい物好きなスタッフはそうそういない。客もまた然りだ。本物の幽霊がないのなら、それに越したことはないというのが経営側の判断で、それを客観的に証明して欲しい。客側に示すかどうかは、広報の腕の見せ所ではあるが、状況を正しく把握するというのは大前提なのだ。

「分かった。そっちの要望はできるだけ通るようになるから、軽く見るだけでいい

からよろしくお願い」

拝むように手を擦り合わせる千咲に零菜と麻夜は苦笑するしかなかった。



## 幕間《お化け屋敷編 2》

午前六時、設定したアラームよりも十分早く零菜は目を覚ました。普段であれば、ギリギリまで惰眠を貪るところだが、今日はすぐに目が冴えた。ベッドから下りると、軽くストレッチをして身体に活を入れ、それからシャワーを浴びに浴室に向かう。

昨日夜遅くに帰ってきた雪菜は、まだ寝ているらしい。

そろそろと足音を立てないように気をつけて、寝汗を吸ったシャツとパジャマを洗濯機に投げ入れて、浴室に入った。

熱いシャワーで汗を流してから、冷たい水を頭から被る。寝起きの身体が完全に覚醒し、身体の隅々まで血が行き渡るのを感じた。

今はまだ朝方なのでマシだが、今日の屋外は真夏日だ。容赦なく照りつける太陽は、地獄のような灼熱を地上にもたらし、外に出るだけで汗だくになってしまう。ちよつとした魔术を使ったズルをしたり、市販の冷却剤を使って普段は過ごしているが、それでも暑いものは暑い。技術の向上でヒートアイランド現象に日々対抗し

ているが、完全に無縁とは行かず、人工島故に国中が熱を持って真っ赤になる。朝に汗を流しても、午前以内に無意味になってしまいうだろうが、これは気持ちの問題だ。

世間は夏休みに突入し、これから国中のレジャー施設がかき入れ時を迎える。暇を持って余した多くの学生が大挙して押し寄せるのだ。零菜も、その学生の中の一人ではある。他と違うのは、今回訪ねるレジャー施設が、プレオープン中で人混みとは無縁ということと、遊びではなく怪奇現象の調査に向かうという点だ。

曲がりなりにも一国の姫な訳で、そのようなことは間違っても仕事ではないのだが、友達からの頼みにプラスして、リニューアルオープンを控えたブルーエリジウムということもあって、特別に引き受けたのだ。

身体の水気を取りながら、自室に戻る零菜は小さくため息をついた。

閉め切ったカーテンの隙間から陽光が差し込んでいて、今日は天気予報通りに快晴らしい。遊ぶにはいい天気なのだが、日差しにはとにかく注意しなければ。

まず零菜が取り出したのは日焼け止めだ。最重要課題は白い肌を守ることだ。今年発売されたばかりの最新の日焼け止めは、さらさらしていて、汗でも落ちにくく、

化粧の下地としても使えるものだ。これで、全身を紫外線から守る。

次に選ぶのは服だ。

もともと、零菜はそこまで多くの衣服を買い溜める性質ではない。日常は制服で十分だし、私服にお金をかけられるほど潤沢なお小遣いももらっていない。興味はあるが、使い回しで十分事足りる。

「うまくない」

クローゼットを開けると、古式ゆかしいヴィクトリアンメイドとコスプレ用のゴスロリメイド服が激しく自己主張してくる。数は多くないものの、私服よりもコスプレ衣装のほうが幅を利かせ始めている。一回しか着ていないものもあれば、まだ袖を通していないものもある。何れは着てみようと思いつつ、その勇気が持てない衣装だ。

それらTPOに反する衣装を押しつけて、私服を取り出してベッドの上に並べる。まず、悩みどころは快活な感じで行くか、おしとやかな感じで行くかだ。

一緒に出かける麻夜が以前であれば、必ず快活な感じでコーディネートしていたので、零菜は後者を選べばよかったが、今の麻夜は高校に入ってからイメージチェ

ンジを図って、かわいい系に進みつつある。

イメージが重なるのは、理想的ではない。

一緒に出かけるのなら、それは個々に食い合うようなデザインではいけない。かといって、麻夜に相談するのも気が引ける。これはあくまでも自分の中で決めていきたい。そんなことを考えていたら、昨日も夜遅くになってしまった。ある程度の絞り込みはしたので、思い切って選ぶしかない。



凧が零菜と麻夜からブルーエリジウムの話を持ちかけられたのは、三日前のことだった。

依頼主は水島千咲。この名前を思い出すのに、凧は小学校の卒業アルバムを引っ張り出す必要があった。零菜や麻夜と違い、進路が分かれて三年経っているし、同

じクラスになったのも、小学校の四年生だけだ。思い出すことがないままに、時間が経てば、かつての同級生とてうろ覚えになる。決して、風が悪いわけではない。水島家は、暁の帝国の経済界の重鎮である矢瀬一族の遠い親戚だ。とはいえ、何代も前に分かれたので、ほとんど血は繋がっていないに等しく、矢瀬家の異能も引き継いでいない。そんな忘れられた水島家の名前が表に出てきたのは、ここ十数年のことだ。

千咲の父が営む小さな広告代理店が、国家独立の混乱に乗じて様々なプロパガンダを矢瀬一族と展開し、それ以降彼らをバックにして事業を拡大してきた。もともと優れた経営手腕があったのだろう。展開した事業は大当たりし、今は広告事業の他にも観光業や水産事業にも手を伸ばしている。

ブルーエリジウムは水島水産や水島観光が魔獣庭園の一部に出資している関係で、水島家の影響力が強い。

今回、風たちを特別に関係者として招待するという強引な方針を打ち出せたのも、ブルーエリジウムの中で事業を営んでいるからこそだろう。

「んじゃ、出てくるから」

「お土産お願ひします」

「はいよ」

空葉は杏仁豆腐を食べながらドラマを眺めている。今日は午後から生物部のミーティングがあるのだとか。黙々と作業する生物部は、彼女の気質に合っているらしく、かなり楽しみに部活に参加している。

空葉を残してブルーエリジウムに行くというのは、若干心苦しいところがあつただろうが、彼女に都合があるというのなら、凧としても思い煩うことはない。

約束の時間になつたので、外に出るとちょうど零菜と麻夜が出てきたところだつた。

「凧君、おはよう」

「今日も暑いねー」

「おはよう。今日は、四十度行くかもしれないってよ」

「そう？ 最悪だね。何とかならないかな、この暑さ」

廊下はうだるような暑さだ。湿度が高く、ムシムシしている。立っているだけで汗が噴き出してしまいそうだった。

麻夜は黒いチノパンと白いブラウスというシンプルで機能性のある服を着ていた。桃色のシユシユで髪を一つに纏めていて、全体的にすらりとした身体がいっそう引き締まって見える。

隣の零菜は大人しめのコーデイナートだ。白いワンピースの上に空色のカーデイガンを羽織っている。夏空を思わせる爽やかな色合いは、零菜の瞳の色にも合っていて、彼女の魅力を損なうことなく、引き立てている。

そういった感想を言うと、零菜は少し得意げに顔を綻ばせ、麻夜は咳払いで応じた。

「凧君はさあ」

「何？」

「いや、いや。まあ、別に」

上機嫌なのか不機嫌なのかよく分からない微妙な困り顔で麻夜はため息一つついた。ちょうどその時、麻夜のスマホが震えた。

「タクシー来たって」

凧の通常の移動手段はモノレールだ。タクシーに乗ることはほとんどない。零菜

や麻夜も車での送迎かモノレールを使うのが普通で、高校生からすると高級なタクシーを利用することはまずないのだが、今回はタクシー券が水島観光の名前で支給されているので、心置きなく利用することにした。

ブルーエリジウムまで、タクシーで三十分ほどだ。

渋滞に巻き込まれることもなく、予定通りに到着することができた。

プレオープン中ということもあって、広い駐車場に一般車両は少なく、業者のトラックや高所作業車などが出入りしていた。

「んー、到着！」

零菜が大きく背伸びをした。

風が吹いて飛ばされそうになった帽子を慌てて押さえる。晴れ渡った空に積雲がぷかぷか浮かんでいて、この上ない好天気だ。幸いだったのは、風があることだろう。おかげで、体感温度は若干低い。それでも蒸し暑さには変わりなく、日光に肌を焼かれているような感覚がずっと付きまといっている。

「来た来た、待ってたよ！」

千咲が手を振って、正面ゲートから駆け寄ってくる。彩海学園の制服の上に、作

業服の上着を着ている。

「千咲ちゃん、なんか技術屋さんみたいだね」

「一応、裏方のスタッフだからね。形だけ」

零菜と千咲が手を叩いて挨拶している。

それから、千咲が凧を見る。

「昏月君だ、久しぶりー。うわー、背伸びたね」

「それは水島も同じだろう」

「いやー、でも昔はわたしとトントンだったじゃない。男子はぐんぐん伸びるもんね。わたしも弟に抜かされちゃったし」

炎天下にありながらも、千咲は快活だ。見た目は大人しそうだが、その言動には行動力を感じさせる。

「千咲、そろそろ日陰に入らない？ さすがに、駐車場は暑いよ」

麻夜が横から千咲に提案する。

「そうだね。ごめんごめん、ついね。じゃあ、案内するからついてきて」

ブルーエリジウムの広大な敷地を移動するのに便利なのが、園内をぐるりと一周

するモノレールだ。普通に歩けば、一周に一時間以上かかるので、五つのエリアを順番に巡るモノレールは重要な移動手段だ。そのほか、ファミリー向けの電動カーの利用も可能だ。

凧たちは千咲が運転する電動カートで移動することになった。

「こんなに人のいないブルエリは初めてだよ」

窓の外を眺めていた麻夜が呟く。

「お客さんより業者さんのほうが多いからね、今は。プールだって、今は閑古鳥だよ」

「プール入れないんだっけ？」

「ごめんねー。安全確認が済んでないみたい。魔獣庭園は行けるから、後で見てくださいよ。あと、うちのお化け屋敷も入れるよ」

「そこが今ヤバいんじゃないの？」

「そうそう」

「ヤバいとこ勧めちゃダメでしょ」

「あはは、だよ。ヤバくないようにさ、みんなの力で助けてください」

電動カートが付いたのは、ブルーエリジウムの宿泊施設エリアだ。とりわけ、ホテルエリュシオンは、暁の帝国でもトップクラスのリゾートホテルで、ブルーエリジウムのオープン当時から変わらず頂点に君臨し続けている。諸外国の王侯貴族の宿泊先としても、定着しているエリュシオンを横目に、凧たちがやって来たのは一軒のコテージだった。

白い二階建てのコテージは緑に囲まれたキャンプエリアの一角にある。周囲に広がる人工林は、日本から移送した木々をベースに二十年かけて育まれた「天然物」だ。白樺やブナ、コナラといった里山を思わせる木々が土に生えているというのは、人工島では珍しく、非常に人気のあるエリアだ。二十五軒のコテージを巡り、毎年予約の争奪戦が繰り広げられているのである。

コテージの中には真新しい木材の香りが立ちこめている。日々の管理が行き届いているのだろう。埃一つない綺麗な状態で維持されていた。

零菜はソファの脇に荷物を置いて、千咲に尋ねる。

「ここ使っているの？」

「もちろん。チェックアウトは明日の十一時ね。バーベキューセットは裏の倉庫に

入ってるから。食べ物も冷蔵庫に入ってるけど、足りないのがあったら、事務室に連絡してね。届けるよ」

ガラステープルの上にメニュー表を並べていく千咲。

その様子を見て麻夜が言う。

「何か、千咲手慣れてるね」

「そりゃ、手伝わされてりゃね。体のいい低賃金アルバイトだよ」

「そうなの？」

「うちの親、娘だからって、ただ働きさせようとしてたからね。さすがに、それならコンビニでレジやるでしょ？ 給料って名目じゃなくても、小遣いはもらわないとやってらんないよね」

そうやって、千咲は人手が足りないときにヘルプに駆り出されていたのだ。親の仕事を何かと手伝うのは、昔からやってきたことなので、否やはないが、花の高校生になった今、欲しい物もあれば遊びに時間を使いたいという欲もある。家のお手伝いでただ働きするのは、割に合わない。

「千咲ちゃん、それで、お化け屋敷のほうってどうするの？」

「あ、そうだね。正直、さっと見てもらって、所感を教えて欲しい感じ。本当に幽霊がいるのなら、何とかできるかどうか……まあ、下見からお願いたいたって」  
タブレットを取り出した千咲が、テーブルの上で画面を操作する。

「ほら、見て、SNSの書き込み。また増えてる」

「ふーん、これ本当に？」

SNSの投稿だけでは詳細はよく分からないし、真偽も不明だ。

「少なくともこの投稿者は、うちのお化け屋敷に来た人で間違いないよ」

「実体験ってことなんだ」

投稿者の女性は二十代前半で、プロフィール画像は彼氏と思われる人物と撮った写真を加工したものだ。絵に描いたような恋愛を楽しんでいるという風のSNSの投稿の中には本当に自分たちより十歳近く年上なのか疑いたくなるような馬鹿馬鹿しい話がたくさんある。

その最新の投稿が、ブルーエリジウムのお化け屋敷の話題だ。

彼氏とお化け屋敷に入ったら、黒い影みたいなのが見えた。「許さない」という呻き声が聞こえた。彼氏が熱を出して寝込んだ。そんな話だ。

「この前見せてもらったのも、こんな感じだったね」

「そうなの。体験談が似たり寄ったりだから、本当なのかなって思ったり……」

零菜と麻夜が最初に相談を受けたときに見たSNSの投稿文も、今見た人とは別人の投稿ではあるが内容はほぼ同じだ。

「凧君、どう思う？」

「実際にお化け屋敷を体験した人が揃って同じことを言ってるだけなら、もともとの噂に乗った話作りって線もあるけど、熱が出たってとこまで共通するともしかしたら霊障かもしれないなと思う」

「霊障？」

霊障という聞き馴染みのない言葉に千咲が疑問符を浮かべる。

「霊障ってのは、霊体から何かしら害を受けたときに身体に出てくる障害のこと。熱が出たり、悪夢を見たりってのは、軽い部類だな。酷いと命に関わることもある」

「命にとって、そんな重い話になるの？」

「投稿を見てると、そんなでもなさそうだけどね。投稿してる人も酷くなったら医者に行くって人ばかりで、実際に霊障かどうか診察した人はいなそうだし、多分、

みんな話に乗っかってるだけで、本気で呪われたとは思ってないんでしょ」

呪詛の本当の危険性を知る風からすれば、熱が出て数日寝込む程度はただの風邪と変わらないし、本当に呪われたと思ってるのなら、SNSに投稿して現状報告などという悠長なことはしてられない。呪詛の種類によっては指定感染症と同レベルの取り扱いになることもあるのだ。

そして、水島観光が気にしているのは、まさにその一点だ。

本当の幽霊の類が巣くっていて、人に危害を加えているとなると、それは行政命令で営業停止を食らう十分な理由になる。

コントロールできない脅威は、迷惑でしかないということだ。

もっとも、まだお化け屋敷を視ていないうちから、幽霊がいること前提に話しても仕方がない。

まだ噂の域を出ていない話でもある。炎天下のリゾート地で遊び疲れて体調を崩すというのは、決して珍しいことではないのだ。幽霊に呪われるより、熱中症で熱を出すほうが現実的だ。

心の底では皆そう思っているのではないだろうか。

プレオーブン期間中に対処すれば、噂話のまままで終わらせることができるだろう。

「結局、幽霊を見たって人はSNSの投稿で分かるくらいなんだよな？」

「ほとんどが、そうなんだよね。うちのスタッフにも何人かいるけど、毎回ではないみたい」

「それでも何人かは出てるんだ」

ギミックを知らない来場者だけでなく、内部のことを分かっているスタッフの中にも体験談があるというのは、いよいよ本物の可能性が高い。千咲が零菜に助けを求めたのも、スタッフの中にも不安がる者が出てきたということが大きいのだ。

「んじゃ、とりあえず見てみようよ。そのお化け屋敷」

零菜の提案に凧も首肯した。

ここで議論していても、あまり建設的な話にはならなそうだ。まずは実地調査を行い、呪術的な観点から状況を見定めなければ始まらないのだ。

かくして、一行は水島観光が運営するお化け屋敷の前にやって来た。

「ここが、噂のお化け屋敷」

「雰囲気あるね」

お化け屋敷の見た目は、二階建ての木造校舎。学校を舞台にしたお化け屋敷なのだ。

「これがうちのホラーアトラクション、大絶叫真・学校の怪談だよ。いろいろとうちの母親の趣味がぶっこまれた、全長一キロのお化け屋敷です」

「一キロ？ 学校を舞台にしてんのに？」

「好奇心から裏山の旧校舎に古くから伝わる七不思議を調べるため、旧校舎に忍び込んだ皆さんを待っていたのは、恐ろしいお化けの数々。朽ち果てた旧校舎は、誰も知らない異世界に繋がっていたのだ……という設定」

「学校の怪談系のお化け屋敷なんだ」

何年か周期でブームになる学校の怪談。零菜も小さい頃に映画を見て、そういう文化を知った。あまりホラーは得意ではないので、それ以来ホラー映画は見ていない。本物のお化けならば、まったく怖くないが、映画のお化けは本当に怖い。

「今、お客さん入れてないから機械は止めてるよ」

と、先導する千咲がタブレットを持って案内してくれる。今日は営業を止めてい

るので、照明もついていて恐怖はまったく煽られない。お化け屋敷の裏側がまじまじと見られるので、とても興味深い。

木造の校舎を再現した床は、ギシギシと軋む。これは木材が古いわけではなく、そうなるように設計しているのだという。

「何か、木造校舎って憧れるなあ。暁の帝国には、ないもんね、そんなの」

「日本にだって、もうないんじゃないか。木造校舎。あっても、学校としては使っていないだろうし」

暁の帝国が木材が乏しいので、多くの建物が鉄筋コンクリート製だ。森林資源に恵まれた日本でも、耐震基準やら時代の荒波やらで、ほぼすべての学校が鉄筋コンクリート製に置き換わっているはずだ。木造校舎というものは、すでに過去の遺物でありファンタジーの世界の産物だ。そして、だからこそ、不思議の世界を表すのに都合がいい。

「じゃあ、ここ。一階、女子トイレの花子さんエリア。花子さんの噂を確かめに来た一行は、奥から三番目のトイレから、別の時空間に飛ばされてしまうのです」

千咲の説明を受けながら、四人でトイレに入る。自動でドアが閉まり、密閉空間

ができあがる。もともと一人で使うスペースしかないところに四人で入ったものだから、ぎゅうぎゅう詰めだ。

「凧君、女子三人と密室だよ」

「こんなときに変なこと言うな」

からかうように麻夜が囁いてくる。

満員電車並の密な空間だ。そこで麻夜と零菜に挟まれているというのは、かなり気まづい状況ではある。

凧としては、かなり気を遣っている。女性の多い環境で育ったので、下手なことはしない。それに、この密な空間は、攻魔師の訓練をたたき込まれた凧からすると、落ち着かない環境だ。ここは幽霊がいるかもしれないという触れ込みで踏み入った場所だ。身動きが取りにくい環境にはできるだけいたくないというのが本音だ。

警戒心を強めたからか、凧の靈感の隅に僅かに違和感が引っかかる。微弱な視線のような何か。それを確認する前に、急に足下が傾いた。ガタン、と音がしてトイレの壁が奥に開く。滑り台になっていて、四人は押し出されるように強制的に滑り台から滑り落ちていく。

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

なかなか急な滑り台を十メートルほど滑って、クッションのプールに落とされる。

「ここで、異世界に到着しました」

「機械止めてるんじゃないの？」

零菜が唇を尖らせて抗議する。

「機械は止めてるけど、導線に従うと滑り台は通らないとダメだから。整備用のバックヤードもあるけどね」

「じゃあ、バックヤードでいいじゃん。最初から」

「えー、せっかくうちのお化け屋敷なんだからせめて中見てほしいじゃん」

「んーまあ、気持ちは分かるけど」

「それに、バックヤードで幽霊見た人いないんだよ。スタッフも含めて」

「じゃあ、本当にこの導線上なんだね」

特定の場所に居着くのは、所謂地縛霊というものに当たる。一般に知られているものは、その土地や建物に取り憑いて超常現象を引き起こすというものだ。

「ところで、今の時点で幽霊いた？」

千咲が不安げに尋ねてくる。

「何かいる感じはあるね」

答えたのは凧だった。

「本当に？ わたし、まだ何も感じてないよ」

「わたしも」

零菜と麻夜は揃ってそう口にする。

「さっき、ちらっと感じたくらいだからだな。気のせいってこともあるだろうし」

とはいえ、靈感は凧が最も強い。

お化け屋敷のような施設はもともと悪いモノを集めやすい性質があるとされる。ホラー映画の撮影も、きちんとお祓いをしてから行うのが慣例だ。しかし、暁の帝国のお化け屋敷は学校ほどではなくとも、結界を張ったり地鎮祭をしたりと悪霊対策を講じるのが普通であり、この施設も当然、セオリーを踏まえて設計されている。

「昏月君が何かいるかもっていうと、ちょっと不安だよ」

「いたとしてもかなり弱い部類の霊体だと思うけどね。ただ、強いか弱いかはこの

場合、関係ないか」

いるかいないかが重要なのだ。さらに言えば、それが僅かでも人に危害を加えるものならば、きちんと取り除かなければならない。事業者として当然の対応だ。

続く通路は無機質な白壁の一本道だ。学校から一転して、地下の非常用通路のような通路だ。蛍光灯の明かりで照らされているのが、返って不気味だ。

「本当ならここで、壁の右側からお化けの影がバーンて出る仕掛けになってるの」「ここに？ 普通の壁にしか見えない」

「壁は普通の壁だからね。この壁をスクリーンにして映像を投射するのよ。プロジェクションマッピングを活かした技術よ」

「へー、そうなんだ」

お化け屋敷の中を見て回りながら、千咲に仕掛けの説明をしてもらう。お化け屋敷の見学ツアーのようで楽しかったし、ギミックには最新の映像技術と昔ながらの制作技術を合わせた興味深いものだった。

「最後は脅かし役のスタッフさんの技術かな。お客さんの目線とかを誘導しながら、飛び出すタイミングを見計らってるんだよね。その辺はまだアナログなんだ」

結局、時々、何かに見られている感覚がしたものの、取り立てて霊体が姿を見せることはなく、面白いお化け屋敷の裏側を見学しただけになってしまった。

「何だろうね」

麻夜が呟く。

バックヤードの事務室で涼ませてもらいながら、コーヒーを飲んでいる。

「確かに、何かいそうなんだけど、分かんないなあ」

「やっぱ、弱すぎるんだろうね。元が。怨霊とか、そういうレベルの相手なら、いるってすぐに分かるものだけど」

麻夜と零菜もお化け屋敷を巡っている内に何度か違和感を覚えたらしい。凧もそのタイミングで気配を感じたので、霊体が潜んでいるのは確実だ。

「でも、やっぱり何かいるんだ。えー、さすがに嫌だなあ、それは」

「まあ、確かに気持ちが悪いのは分かる。普通は見えない相手だしな」

凧は生まれついて視える人間なので、霊体を見えない脅威と捉えたことはない。が、視えない人からすれば、どこに何がいるのか分からないというのは恐ろしいことだ。気配だけがそこにあるというのは、相手が幽霊でなくとも気持ち悪いと思う

だろう。

「幽霊なんてのは、大抵は時間とともに消えていくもんだから、放っておいても害はないんだけどね」

「そういうものなの？」

「普通はね。そうでなければ世の中幽霊だらけになるじゃん」

「うん、確かに」

凧の指摘に、千咲は頷く。

いつまでも幽霊が残っていたら、それは大変なことだ。死者のほうが生者よりも圧倒的に多いに決まっている。それでは、この世なのかあの世なのか分からない。「それに死んだ人の魂とかそういうのじゃないんだよ、俺たちの言う幽霊ってのは、残留思念なんて言って、強い感情を魔力で焼き付けた影みたいなものなんだ」

「影？」

「そう。だから、生き死には本来関係ない。生き霊って言うだろ？ あれは生きてる人の感情が核になって生まれた残留思念だからだよ。個人レベルの残留思念なら、普通は数日も持たないんだけどね。才能っていうのかな、魔力なり霊力なりが

強い人だったり、魔族だったりの感情が核になると、強い残留思念になるし、残留思念同士が混ざり合って強くなることもある。所謂怨霊とかはその進化形だ」

「あの、よくわかんないけど、うちにいるのは何？」

「実物が視えてないからなんとも言えないけど、最低レベルの残留思念かな。それでも人に霊障を起こせるくらいだから、怨霊に足を踏み入れてるかもしれないけど」

「どうしたらいいかな。何とかできそう？」

「出てきてくれれば、後はどうにでもできると思う。零菜の槍ハスタ・アウルムの黄金は、ちょっと止めた方がいいよな？」

「あー、そうだね。お化け屋敷のギミックに影響するとよくないよね」

零菜は風の確認に頷いた。

槍の黄金は魔力や霊力を問答無用で無効化する能力を持つ。そういった力を用いるあらゆる存在に有効な切り札で、当然霊体が相手だろうと問答無用で消去してしまふ。相手がどんな未練を核にしようとか関係がないので、無念を抱えた残留思念相手に使うのはあまりにも無慈悲だが、本質はそこではなく、お化け屋敷に使われているギミックすら容赦なく無効化してしまうという点に問題があった。

お化け屋敷全体に魔力無効化の神格振動波を流してしまうという作戦は、お化け屋敷そのものの営業に差し障るため使えない。

そのため、除霊するのなら霊体に出てきてもらうのが一番手っ取り早い。

「でもさ、さつき出てきてくれなかったし、どうしたら出てきてくれるかな。昏月君が攻魔師だって、分かっているかな？」

「どこまで知能があるかな。残留思念ってのは、それだけだとあまり知性はないもんだ。怨霊とかもそうだけど、結局、感情の塊だから打算的な行動は普通はしないんだよな」

この前、戦った猫鬼がいい例だ。

怨念の対象をどこまで追いかけて攻撃する傍ら、それ以外の相手は二の次だった。感情を核にした霊体は、理性がなくその核になった念を基にして行動する。

その一方で、力のある霊体は高い知性を持っている場合があり、悪知恵を働かせることもある。先入観を逆手に取られることもあるので、油断は大敵だ。

「じゃあ、基本に立ち返って霊体が出た状況を整理してみようよ。手がかりがあるかもしれないよ」

零菜の言うとおり、霊体が特定の状況下で出現するとすればその条件を見つけ出せば解決の糸口に繋がる。

「幽霊が出た時って言っても、あまり情報もないんだよね。……それこそ、SNSの投稿とスタッフの報告くらいだもん」

「そうだよね」

SNSはさっき見たとおりだ。特に新しい発見はない。もともと、短文の投稿なので情報量は多くない。スタッフの証言も似たり寄ったりだ。幽霊と思しい何かが出る場所は定まっていなない。花子さんのトイレで見える人もいれば、ベーターベンの音楽室で見える人もいる。他にも廊下や出口付近と統一感はない。客の導線上のどこにでも出現するようだ。

「共通点ねえ……まあ、見た目が黒い霧ってのは、あまり参考にならないよね」  
麻夜が自分のスマホでSNSを流し読みしながら呟く。

「霊的感受性が低いと霧みたいな形で見えるみたいだからな。それは、霊体全般の共通点だし」

霊体を認識するのは、それなりの霊力や魔力を持つものでないければならない。

一般人が認識するには、その霊体がそれだけ強力な力を持っているときに限る。吸血鬼の眷獣のような魔力の塊と組成自体は近しいので、潤沢な魔力を内包してれば一般人にも見えるだろう。しかし、多くの霊体はそこまでの力を得ることができないので、一般人に認識されることがないのだ。

「はあー、読んでるのだからなくなってきたなあ」

零菜が投げやりな態度でスマホをテーブルに置いた。

他人の自慢話を延々に読み続けるのはなかなかの苦行だ。それも中には文章がとてつもなく読みにくいものもある。

母も学校も勉強にうるさい環境で生きてきた零菜は、ぱっと見で意味が分からなれど、思った文章に目を通すのが辛い。わざと文体を崩しているのだろうが、そういった書き方に頭が付いていかないのだった。

「この人の投稿、彼氏と食べ歩きのことばっかりなんだけど。大学生じゃないの……？」

「こっちも似たようなもん。プロフィール画像が二人の自撮り写真だ。なんだろうな。なんか痛いなあ」

零菜と麻夜が辛辣な感想をブツブツと呟いている。

「あはは、そうだね。でもまあ、そういう人の投稿が、お店の評判を左右することも珍しくないから」

誰でも情報を発信できるようになってからずいぶんと経ち、SNSを介した情報発信、収集は当たり前のように行われる時代だ。

評価基準をネットの情報に依存する者は普遍的に存在するし、そういった人の動きに一喜一憂する店も珍しいものではない。

積極的に「呟く」ユーザーは、その分だけ発信力がある。だからこそ、水島観光としては、今回の幽霊騒動が大きく話題になる前に決着を付けたいのだ。

「そういえば、これさ。何で彼氏の話ばっか何だろうね」

「ん？ ああ、そうだね。確かに……」

零菜の疑問は麻夜も引っかけたようだ。

「え、何なんかあった？」

千咲は身を乗り出して零菜に聞いた。

「いや、彼氏が熱を出したって話は、そこそこ出てくるけど、彼女が熱を出したっ

て話はないなって思っ

「たまたまじゃないの？ 眩してるのが女の人のほうが多いからとか」

「かもしれないけど。家族で来た人の投稿なんかにも、幽霊を見たって話がないんだよね」

ブルーエリジウム関係の投稿をざっと見ていくと、プレオープンの抽選に当たり、一家でレジャーを楽しんだという人の投稿もある。

そういった人たちの投稿だと、幽霊の噂に言及することはあっても、自分たちが幽霊に遭遇したとは書いていないのだ。

「幽霊は賑やかなのが嫌いとか」

「わたしたちも別に賑やかにしてたわけじゃないし」

「それもそうだね」

「ねえ、千咲ちゃん」

「ん？」

「千咲ちゃんも幽霊が出るか確認しに、お化け屋敷に入ったって言ってたじゃん。その時、一人で入った？」

「ううん。さすがに一人では入らないよ。あときは、お父さんが一緒だったな」

「じゃあ、スタッフさんは？」

「スタッフさんは、ギミックのチェックに入った技術系の人と事務系のバイトの人だったかな。どっちもそれらしいのを見たっただけで、はっきりしたことは分からないんだけど」

「それさ、もしかして男女で入ったんじゃない？」

「え？ ああ、確かにシフトでそうなってたけど。……何、そういうことなの？」

千咲は怪訝そうな顔をする。

「たぶん」

零菜は麻夜と凧に目配せをした。

どちらも、同じ結論に辿り着いていた。

「えーと、つまり、この幽霊は男女でお化け屋敷に入ると出るってこと？ なん  
で？」

「それは、分からないけど、そういうのに執着する念が核になったってことなん  
じゃないかな？」

「えー……」

それが事実だとしたら、何とも情けない話だ。まだ、本当かどうか分からないし、背後に切実な事情があるのかもしれないが、結果だけを見れば、男女でお化け屋敷を楽しんでいるカップルのみが被害にあっている。スタッフのほうは分からない。男女一組がトリガーなのか、それとも、仕事中に仕事以外のお楽しみをしていたのか不明だ。

とはいえ、そんな理由で幽霊騒動を起こされていたのなら、経営側としてはやるせない。

「さっきわたしたちがお化け屋敷に入ったときに出てこなかったのは、四人組だったからかな」

「というより、あれじゃない。仕事っぽかったからじゃないかな。千咲ちゃん、作業着てるし」

「あー、なるほど、そういうこと」

確かに、作業着を着た千咲が一緒にいると仕事の延長というように見える。男女比も一対三なので、さほど浮ついた雰囲気を感じさせることもなかっただろう。

「ふーん、てことは、お化けに出てもらうには、お化け屋敷でデートすればいいことね」

「まあ、多分、予想通りなら、そうなるんじゃないかな」

「そんな馬鹿な話あるの？」

「そんなこと言われても」

千咲は真剣な表情で疑いの目を向けてくる。その気持ちはよく分かる。零菜自身半信半疑だ。しかし、状況から言ってそうとしか言い様がなかった。

「じゃあ、手っ取り早く解決するには昏月君と……れ、ええと、どっちが行く？」  
デートを装えば、問題の霊体が姿を見せるかもしれない。

凧と零菜が二人で行けばと思ったが、麻夜があぶれてしまう。

踏み込んだことをすると、後々よくないかもしれないと千咲の脳内で警鐘が鳴った。男が一人に女が二人。女のほうは異母姉妹で、どうも同じ男にただならぬ感情を向けているらしい。それは近くで見ていて感じた。遠くで見ている分には面白い状況なのだが、その友人である千咲自身もまた当事者になってしまっている状況では正直、どう舵取りしていいか分からない。

とりあえず、判断は本人たちに任せよう。咄嗟に、そう判断して安全圏に退避することにしたのだった。

## 幕間《お化け屋敷編 3》

暁の帝国有数のリゾート地として名高いブルーエリジウム。その一画にあるお化け屋敷に風は二度目のアタックを掛けようとしていた。

一日に二度もお化け屋敷の中に入ることは、もう二度とないだろう。特にブルーエリジウムのお化け屋敷はその主催者が半分道楽で作った割にはかなりよくできている。道楽とはいえ、本業にも関わること。適当にするのではなく、道楽だからこそ全力を注ぐという意気込みを感じるお化け屋敷だ。

とはいえ、一度目も、そしてこれから入る二度目もお化け屋敷が誇るギミックの数々は停止した状態にする。あくまでも、このお化け屋敷のどこかに潜む悪霊を退治するのが今回の趣旨であり、遊びに来たわけではない。

広大な敷地を持つブルーエリジウムではあるが、プレオープンということもあって、最盛期に比べて人は一割以下だ。街中の施設でありながら、人口密度は国内でも最小クラスに小さくなっている。そのおかげで、ほとんど人目を気にする必要がないというのは、今の状況では嬉しい誤算ではある。

殺人級の夏の日差しも、お化け屋敷に入れば存在感を失う。少し効き過ぎた冷房は、寒いくらいだ。

先ほどの調査の結果、お化け屋敷に巣くっている悪霊は、特定の条件に該当する者を呪っており、それ以外の者には姿を見せない傾向があることが分かった。

適当に零菜の槍ハスター・アウルムの魔力を館内に流しても、悪霊を消し去ることはできない。しかし、それではお化け屋敷のギミックにも悪影響を及ぼすのは明白なので、これは選べない選択肢だ。直接悪霊をあぶり出し、正面から除霊するのが一番確実ということで、凧は零菜と麻夜を連れて三人でお化け屋敷に戻ってきたのだった。

「やっぱり、ここまでしなくてもよかったんじゃない？」  
と、不満げに言うのは零菜だ。

蛍光灯の下に立つ零菜は、肌色の面積を格段に増やしている。一回目の調査の時は私服だった零菜だが、今回は黒いビキニの上から白いTシャツを着て、裾を縛っている。くびれた腰にすらりと引き締まった足をこれでもかとして出しているスタイルだ。

「まずは形から入った方が、確実じゃないか。何度も行ったり来たりしたくないで

しよ?」

と、余裕の表情を見せているのは、麻夜である。こちらもビキニの水着だ。零菜とは対照的にその色は純白で、黒い長袖のランニングウェアを羽織っている。黒が全体的を引き締めつつ、白い水着と肌を強調する。

「それに、三人で入るのが正解かっていうとそうでもないわけだしね」

「それは、確かにそうだけど」

せっかく持ってきた水着を使う機会がなかったもので、これに乗じて着ることができたのは良しとしよう。ただ、プールに入るわけでもなくお化け屋敷に入るためという本来の用途から離れた使い方をしているからか、気恥ずかしさがある。

「ほら、凧君も両手に花だぞ」

「そうだな」

「反応薄いよ」

「滅茶苦茶可愛くてびっくりしてるからな」

「そう? うん、まあ、その辺で許してあげよう」

麻夜は麻夜で少し気分が上がっているようだ。いつもよりも、若干口調が軽い。

話を振られた凧の返事に、とりあえず満足したようである。

凧もまた、薄着になっっている。デニムのショートパンツとTシャツ、そして長袖の白い薄手のパーカーだ。

「それじゃ、行くぞ。悪霊、一発で出てくるといいんだけどな」

何かいるのは先だっでの調査ではつきりしている。薄らとではあるが、存在を感じていた。こちらを観察するような視線だ。悪霊特有の負の魔力もあった。

一計を案じて、「いかにも」な格好でお化け屋敷にやってきた三人をターゲットとして認識するかどうか、勝負の分かれ目だ。

お化け屋敷の中は照明を点けてもらっているので明るい。お化け屋敷らしい雰囲気はまったくないが、普段見ることでできないバックグラウンドを見せてもらっているのも同然なので、それだけで面白い。

「さつきは、あまり意識してなかったけど、これ、こうなってるんだ」

「零菜、触って壊さないでよ」

「壊さないよ。わたしは子どもか」

ギミックの人形を覗き込んでいた零菜を麻夜が窺めると零菜はむっとして反論し

た。

「それにしても、何も出てこないね。風君、何か感じる？」

「今のところは別に。いる気配だけはあるんだけどね。それがいつのものかはまだ何とも言えない」

麻夜に聞かれた風は、正直に答えた。

お化け屋敷に悪霊が現れたのは昨日今日の話ではない。この空間全体に、悪霊の気配が薄らと漂っている。霊的に密閉された空間だ。一度居着いた悪霊はちよつとやそつとでは出て行くことはない。

「そこまで強い感じもしないよね」

零菜は周りを伺いながら所感を呟く。

感じ取れる魔力は微々たるものだ。悪霊といっても強いものから弱いものまで様々だ。強い者は怨霊などとも呼ばれ、時に歴史に名を刻むほどの怪物になることもあるが、多くの悪霊は個人レベルの呪詛に終始するし、自然と消滅していく程度の自我しかもたない。

「まあ、悪霊なんて基本的に人間よりも弱いのが普通だからな。この辺に自然発生

する程度なら、限界もあるだろ。ま、この前の猫鬼みたいな厄介なヤツもいるし、頭が回るヤツもいるから油断は禁物だけどな」

「そもそも、死んでからのほうが強くなるのか、よほど生前にいろいろ仕込んでないと無理だしね。それか、かなり才能があったか」

「悪霊の才能とかあってもな」

暁の帝国における攻魔師の仕事の中では悪霊への対応というのは珍しくない。もともと人工島なので、天然の魔獣は存在せず、強力な竜脈の中にあるため、その流れの影響を受けて時折淀んだ魔力溜まりができることがある。こうした環境で悪霊は発生しやすくなるのだ。

「というか、悪霊ってさ、個人の所謂幽霊ってヤツじゃないよね？」

麻夜の指摘に凧は頷く。

「普通の悪霊というか幽霊なんていうのは、大抵は残留思念が魔力の影響で具現化したものだからな。死んだ人間がそのまま霊体として残ってるのは、本当に滅多にないパターンだよ」

「生き死にも関係ないんだっけ」

「残留思念だからな。大本の人が生きてるかどうかは、あまり関係ないらしい。結局、強い感情と魔力が結びついて指向性を持ったものって扱いだからな。自然災害みたいなもんだ」

条件が揃えば発生するという点で、メディアなどでは自然現象の一つとして扱うこともある幽霊だが、攻魔師などが能動的に直接対処できることを考えると、危険性は自然現象よりも低いと見られる場合がある。

今回の悪霊も、その被害者は体調不良程度にしかなくていないし、被害範囲もお化け屋敷の利用者のうち、男女一組で入場したものの一部に限られている。決して、強い悪霊ではないと考えられた。

お化け屋敷を進んでいって、狭い廊下に出る。大昔の学校を模したエリアは、映画やドラマでしか見たことのない木造校舎を忠実に再現した趣ある造形である。今後は、映画のセットに使うこともできるのではないかと思えるくらいに出来がいい。強いて難点を挙げるのなら、冷房が効きすぎていて少し寒いということがあるか。「ねえ、ちょっと冷えすぎじゃない？」

零菜が二の腕を擦りながら言う。

肌を露出させているから、余計にそう思うのだ。屋外は三十八度近くになっている。温度差が激しい。汗が引いて、寒気を覚える。

「零菜、半袖だからな。俺の貸すぞ」

凧は自分が着ているパーカーを脱いで、零菜の肩にかける。夏用でも長袖なので、これですいぶんと変わるはずだ。

「あ、ありがとう」

パーカーに袖を通した零菜は、気恥ずかしげに俯く。

パーカーを脱いでひんやりとした空気に肌を曝すと、確かに肌寒い。スーパーの鮮魚売り場あたりの肌寒さを感じる。

「凧君、手」

横から麻夜が手を伸ばしてきて、凧の手を取った。

「麻夜ちゃん、急に何してんの？」

「罎が開かないから、もっとそれっぽくしたほうがいいかなって」

一度、凧の手を掴んだ麻夜だが、その後、何度か握り方を変える。

「何してんだ」

「どういう風にしたら一番しっくりくるのかなと」

「普通に繋げばいいんじゃないか？」

「それもそうなんだけど、それだと面白みもないしなあ」

「じゃあ、こうでいいよ」

今度は凧から麻夜の手を取った。奇を銜わない普通の指を絡める恋人繋ぎだ。

「らしい繋ぎ方ってこういうの以外にあるのか？」

「……どうかな。まあ、凧君がこれでいいなら、このままでいいよ」

握り心地を確かめるように麻夜は何度か手に力を入れて指の位置を調整するが、それからはほとんど力を抜いた状態にした。凧が麻夜を先導する形に落ち着いた。すると、今後は零菜が反対側から凧の腕を引く。

「らしいって言うなら、こういうのもアリでしょ」

麻夜に対抗する気を隠さず、零菜は凧の腕に自分の腕を絡めた。凧の二の腕付近を両手で掴むようにして、密着感を出す。

図らずも凧は両手を封じられることとなった。

従妹とはいえ、世界的にも通じるレベルの見目の二人に挟まれて、凧は努めて冷

静であろうとする努力を必要とした。

幸いなことにという語弊があるが今は仕事である。悪霊が現れれば分かるとはいえ、不意打ちの可能性もある。言わば敵地にいる状況なので、意識をそちらに割くことで冷静さを堅持している。

困るのは、その冷静さを身内が崩そうとしてくることだ。

両手に花と言えば聞こえはいいが、気分は連行される囚人のようだ。

妙なところで気を張ることになった風だったが、そのおかげか三人の中では最初に空気の変化に気づくことができた。

「二人とも、ストップ」

「ん？」

「何？」

零菜と麻夜は気づいていない。

悪意の矢印が風に向いているからだろう。靈感の隅がチリチリとする。

「もしかして、出た？」

「まだ出てないけど、見られてる」

零菜は視線を周囲に巡らせる。微弱な魔力の流れがあるのは零菜も感じていた。しかし、凧ほど明瞭には感じ取れない。

「麻夜ちゃん、どう？」

「ちょっと、嫌な感じはするけど……はっきりしないな」

当初の見立ては間違いいではないらしい。悪霊が反応するのは、特定の条件に該当する男女のペアだ。凧が感じるのは妬みや恨み、そして戸惑いだ。複数の負の感情が入り乱れていて、その視線が凧を見ている。

今までの被害者は全員が二人組だった。三人組というのは悪霊の対象としては弱いのかとも考えたが、この負の念を感じる限りはそのようなことはないだろう。

なら、もう一押しすれば出てきそうだな。

「悪い、ちょっといいか」

零菜と麻夜に拘束されていた手を解く。そして、二人の肩に手を回して抱き寄せらる。

「あの、凧君？」

「あ………ん」

零菜も麻夜も抵抗も抗議もなかった。三人揃って気恥ずかしさに言葉をなくして佇む。これで、悪霊が出てこなかったら、どうしたものと不安にもなったが、その心配は無用だったらしい。

ぞわり、と背筋が凍る。

霊視せずとも分かる黒い靄が風の前方五メートルに湧き出てくる。これだけの魔力が集まれば、常人でも目視できるだろう。

「うわ、出た」

「これはまた、すごいのが」

漆黒の靄は、徐々に体積を増していく。お化け屋敷に根ざした負の魔力は、次第に人と蜘蛛を掛け合わせたような異形となる。

「こういうとき、なんで蜘蛛が多いんだろ」

零菜は昨年、蜘蛛の眷獣に追い回されて危ない目に遭ったので、それ以来蜘蛛をますます嫌うようになっていた。

『おお、おお、おおおおお……!』

黒い靄の輪郭ははっきりとしない。どこから声を出しているのか分からないが、

空気だけが揺れている。

「ここまでくるとわたしでも分かるな。これは、強いて言うとな怒りかな」

麻夜は即座に護身の呪術を使って悪霊からの干渉に備える。凧と零菜も同時に同じ術を使っている。

悪霊となるほどの強い感情。その核になるのは、怒りや恨みといった「他者への害意」だ。

『許さない。許さない。絶対に許さない』

悪意が呻く。唸る。黒い靄はその表面にさざ波を立てて、少しずつ形を変えながら、凧たちを睨み付けている。

『お前だ。お前だ。お前だ』

悪霊の存在しない「目」が凧を見る。強烈な恨みの念が凧を射貫く。

「凧君、なんか恨まれることした？」

「こんな真っ黒な知り合いいないわ」

「だよね」

もともと、悪霊というのは残留思念の結晶ではあるが、こうなってしまった時点

で個人的な因縁などはあまり意味をなさなくなる。見たところ、この悪霊も個人の感情を最初の核にしたものではあるが、複数の悪霊未満のエネルギー塊を取り込んでやっとこの状態に成長したもののようで、すでに自我らしいものは存在しない。この悪霊が恨んでいるのは、凧のような「誰か」だ。

『お前だ。お前が悪いのだ』

声ならぬ声が響く。

地の底から溢れ出てくる負の念で空気全体が重くなる。慣れていく凧にとっては、その風程度だが、耐性のない人間ならば、この時点で体調不良になっていてもおかしくはない。

「俺みたいなのヤツっていうのは、女子と一緒にこのお化け屋敷に入ってきたヤツのことだよな？」

『おお、おお、そうだ、そうだ、どれも楽しそうにしていたな。楽しそうにしている、恨めしいな』

「この施設を管理してる人がな、あんたみたいのがいるせいで困ってるんだと。なんで、このお化け屋敷を選んだんだ？」

『恨めしいからだ。どいつもこいつも楽しそうだからだ。ここは男に媚びを売るばかりの女どもと女にだらしない男どもの巢窟だ。諸悪の根源だ。一部の男が富を独占するために、我らはいつも割を食う』

血を吐きそうな勢いで口汚く罵る悪霊に、むしろ零菜たちは冷めた視線を向ける。

「んー、本当にこんな理由で悪霊になるんだ」

「いい迷惑だよね」

声を潜めて、零菜と麻夜が語り合う。言葉の端々に明確な侮蔑の感情がこもっていた。それもそのはずだ。この悪霊が積み重ねた悪行の結果とその動機がまったく釣り合っていないのだから。

「そんな理由でたくさんの人に迷惑かけたの？」

『これ以上の理由があるか！』

零菜の質問に、悪霊は唾を飛ばさんばかりの勢いで反論する。

『みんないいよなあ、夏の思い出をここで作ってるんだ。我らはそんな機会もなかった。どうしてだ。なぜお前みたいなヤツがいるんだ。こんな可愛い女子を二人も連れて……！』

もしも悪霊に目があったら、血涙を流していただろう。それほどまでに強烈な怒りと悲しみを感じる。理由はどうかあれ、核になった感情の持ち主はよほど悔しい思いをしたのだろう。そして、類似する悲しみを背負った魔力の塊が結合して、この悪霊を生み出した。

この悪霊は成立過程で多くの感情を取り込んでいる。それが、怒りのあまり分化したらしい。靄の中からいくつもの顔らしきものが浮かんで消える。見ているだけで気味が悪い。

『ああ、可愛いなあ』『今で見た中で一番だ』『おっぱい』『腰つき堪らん』『右がいい』『左だ』『右の太もいいなあ』『左の腰もいいぞ』『よく見ろ、左のおっぱいに目が行きがちだが右もかなりだぞ』『柔らかそうだ』『いい匂いしそう』『両方可愛い』  
いったいどれくらいの想念を抱えていたのか。それらが表に出てきては零菜と麻夜を批評している。まるで、好きなアイドルを討論する男子高校生のようだ。零菜も麻夜も、普通ではお目にかかれない美少女だ。だからこそ、そんな少女が同時に目の前に現れて、悪霊は混乱していたのだ。

そして、情欲混じりの視線を向けられた挙げ句に自分の容貌を好き勝手に議論さ

れている零菜と麻夜の好感度は地下深くまで下がりきった。

滅多なことでは他者に悪意を抱かない二人が、揃って軽蔑しきった侮蔑の視線で悪霊を見据えている。

「そういうこと言うから彼女できないんだと思うよ」

と、零菜が低い声で注意する。もちろん、そういった想念の塊である悪霊がこれで行状を弁える可能性は極めて低いどころか、悪霊を構成する想念の中には零菜の侮蔑と注意を受けて喜ぶものがある始末だ。零菜が思わず口に出した「気持ち悪い」ですら、何の効果もない。

「とりあえず、本当に自分たちの行いを反省したほうがいいよ。本当、うん、ただ気持ち悪いだけだから。少なくとも、この人はそういうこと言わないよ」

麻夜が尻を示して悪霊に指摘する。いつもよりもキツイ物言いは零菜同様の理由からだ。これが悪霊だからいい物の、人間相手だったらどう反応したらいいものかと真剣に悩んでしまう。

『魅力的に見えるのは君たちが騙されているからだ』『どうせ誰にでもいい顔してただけだ』『一番性質の悪いヤツに違いない』

「酷い言われようだ……」

悪霊が相手なので話半分にししか対応していないが、とにかく凧への悪意が凄まじい。

「……それは、分からなくもない」

「……そういうところがあるのは、まあ……」

一方の零菜と麻夜は食ってかかる悪霊の言にうっかり一部同意してしまう。感情任せの適当な決めつけだが、二人から見て、凧にそういう一面があるようには感じられる。

『ほら見たことか』『他にも女がいるぞ』『許せねえなあ』『悪いことは言わないから別れるんだ』

「別に付き合ってるわけじゃないから」

「他の女って言っても、みんな家族だし」

『家族だと』『君たち姉妹なのか』『まだいるのか』

悪霊が興味深そうに尋ねてきた。答えたのは零菜だ。

「……同い年の腹違いだけだね。順番でわたしが先。あと、わたしたち以外にも姉

と妹がいる」

『まさか、その娘たちも』

「まあ、みんながみんなじゃないけど」

それはつまり、今お化け屋敷にやってきた零菜と麻夜以外の姉妹にも凧が手を出している上に公認状態であるということだ。少なくとも悪霊はそう受け取った。

『うおおおおおおおおおおおおおおおお』

慟哭の雄叫びを上げる悪霊。

「零菜、そこまで挑発しなくてもよかったんじゃないか？」

「……いいんじゃない、少しくらい」

「……文句を言いたくなる人がいるのは、仕方ないかもね」

零菜と麻夜がなぜか悪霊の肩を持つようなこと言い始める。

「まあ、でも、関係ない人にとやかく言われたくないな」

「確かに余計なお世話だし」

そして零菜と麻夜は「気持ち悪いし」と口を揃えて言う。

悪霊のほうは怒髪天を衝く勢いで凧に悪意を向ける。

『姉に妹！ 三密だけじゃ足りねえってか！』『どうせこれから濃厚接触するつもりだろう』『やはり、お前はギルティだ』

明瞭な怒気を孕む魔力の塊が空気圧となって風に乗って襲いかかる。呪詛を帯びた呪いの風だ。これを風はあらかじめ用意していた呪符で受け止めた。

「好き勝手言いやがって」

お化け屋敷中に散らばっていた悪意の気配が、目の前に集まっている。あり方は以前戦ったエレディアに近い悪霊の集合体だ。ただし、その結合は緩くお化け屋敷全体に広く分散していた。

『攻魔師だ』『謀ったな』『散れ』『根を伸ばせ』

風を攻魔師と見るや、すぐに逃げ出そうとする当り、少しは頭が回るらしい。会話ができるだけの知性を持ち、獲物を見定める理性があった。悪霊として、それなりの成長をしていたのは間違いない。放置していれば、もしかしたら一個の魔獣として独立したかもしれない。

「逃がさないよ」

麻夜が空中に爪を立てるようにして腕を振る。すると、魔力の糸が床、壁、天井

に網の目のように張り巡らされ、結界を形成した。

会話の中で少しずつ構築していた術だ。悪霊を逃がさないよう封じ込めるためのものだが、内から外には出られず、外から中には容易に入り込める一方通行の罫である。魔女の娘である麻夜はこうした魔術を幼少期から学んでいた。

凧が呪符を投じる。投げた呪符は十枚で、それが一列に繋がって鎖となる。

『お、おおおおおおおおおおおお！』

呪符の鎖は悪霊の周囲で円を描き、その動きを封じ込める。

「零菜」

「了解」

零菜の手に一本の槍が現れる。雷光の槍ハスタ・アウルムの黄金だ。

「槍の黄金——極小展開」

身の丈ほどの槍が小さくなって、短剣程度の長さになる。屋内での取り回しが容易な小型版だ。攻撃能力は大幅に下がってしまうが、その最大の特徴である魔力無効化能力は健在だ。凧の眷獣が古城の眷獣のスケールダウン版だということを聞いて考察した形態である。

零菜は小型化した槍の黄金は、悪霊に向かって投じた。

例え、真祖クラスの眷獣であろうと魔力無効化能力を前にすれば形無しだ。まして、ただの悪霊など、一溜まりもない。

断末魔の悲鳴挙げることも許されず、悪霊はその核となる情念ごと魔力を消去されて、この世から消え去った。

## 幕間《お化け屋敷編 4》

「いやー、助かったよ。ほんと、ありがとうね」

お化け屋敷に巣くう悪霊退治が終わったという報告を受けた千咲は、にこやかに風の中を叩いた。風と千咲は、同じ小学校出身で面識はあるが、中学校に上がってから進路は別れ、それっきりだ。今日は三年ぶりの再会になるのだが、そうとは思えないフレンドリーさである。昔から誰とでも仲良くなれる明るい性格だったのだが、それは今でも変わらないようだ。

お化け屋敷の事務室には、風と千咲の二人がいる。零菜と麻夜は、自動販売機で飲み物を買うために席を外したところである。

「で、結局、悪霊の正体は何だったの？」

「あー、なんて説明するのがいいのかな……彼女が欲しかった男の残留思念の集まり？」

「何それ、マジな話？」

「マジ」

「えー、それでうちのお化け屋敷に居着いたの？ そんな理由で？」

「まあ、残留思念だからなあ。常識的な考えなんて持ってないし。あれは感情の塊が魔力で形を取ったもんだから」

「んー魔術の理屈とかはよく分からないけど、それだったら昏月君を呼んで正解だったねえ。ダブルお姫様の両手に花だもん。彼女欲しさに悪霊になるようなのからしたら、出て行かすにはいられないでしょうよ」

零菜も麻夜もとびきりの美少女だ。

まだ見た目は若く幼さを残しているものの、将来的には極めて優れた器量の女性になることは明白だ。同年代の男子からすれば、お近づきになるだけでも羨望の対象となる。

「ぶっちゃけ、うちの男子たちだって、このこと知ったら黙ってないよ。間違いないよ。呪詛する」

「呪詛って」

「まあ、零菜も麻夜も、学園トップのお嬢様な訳だしね。容姿端麗なガチお姫様だよ。そりゃ、みんなのアイドルにもなるよ。席替えの時に隣を引けるかどうかは、

かなり大きいみたい」

「そりゃ、まあ、そうだろうな」

零菜か麻夜の隣に一日座っていられるわけだから、彼女たちの隣の席というのは男子からすれば魅惑の座席になる。

そんな学園のアイドル二人を侍らせてお化け屋敷に入っていくというのは、彩海学園の男子にとっては殺意すら抱きかねない暴挙だ。

「実際、昏月君は去年さらっと呪詛られてるわけだし、月のない夜は背中に気をつけたほうがいいかもよ」

「去年？ 俺、なんかしたっけ」

一年前の凧は大忙しだった。大半が暁姉妹に関わる揉め事で、時に命を張る場面もあることが何度もあった。人生でここまで事件が頻発する年は今後ないだろうというほどの大事続きの一年だったのは確かだが、その中で彩海学園の生徒から恨みを買うことはなかったはずだ。

「はろういんフェスタで、零菜と麻夜の約束をすっぽかしたヤツがいるらしいって、一時期噂になったんだよ。誰かまでは知られてないけど、それがどうも他校の男ら

しいぞって」

「あれは別にすっぱかしたわけじゃないんだけど」

凧は渋い顔をした。はろういんフェスタ当日、凧は空菜の魅了を受けて自由を失っていた。零菜との約束を守れなかったのは事実だが、事情があるのだ。

「あれ、本当に昏月君なの？」

「本当になって言われても、彩海の中でどう噂されてたか分からないからな」

「零菜が連絡取る男子なんて昏月君くらいだから。それに、ほら、あの日は零菜も大分ぷりぷりしてたし。絶対許さない。全部血抜いて、飲み干してやるって息巻いていたくらいだ、きゅ!？」

千咲の背後から伸びた手が、彼女の首に絡みつきスリーパーホールドを極めたのだ。

「誰が誰の血を飲み干してやるって？」

「げえ、零菜、いつの間に」

「人がいないのをいいことに適当なこと言わないでくれる？　千咲ちゃんの血から抜くよ？」

「悪かったって、ごめんごめんって」

千咲は零菜の腕をタップし、降参する。

解放された千咲は自分の首元を擦る。

「危なかった。わたしの首ついてる？」

「バッチリ」

大げさに心配するような表情を作った千咲が尻に尋ねてくるので、頷いておく。

「よかった。もげるかと思った、もげるかと。後、背中も」

「背中？」

「お山の自己主張がすごかった。知ってる？ あの娘、最近サイズがあがきゅ!？」

零菜が慌てて千咲の放言を食い止めるべく、再びスリーパーホールドを仕掛け

る。今回は腕だけで絞めている中途半端な姿勢だ。千咲の発言を気にして、胸を押

しつけないような体勢にしているのだ。

「れ、零菜、これガチ極まってるんだけど」

「尻君に変なこと吹き込もうとしたでしょ！」

「ジョークだって、ほんとに」

千咲は、両手を挙げて二度目の降参をする。

普段、零菜が家族以外と過ごしているところを見ることはないの、こうしてじゃれ合っているところを見るのは新鮮だ。

「この二人はいつもこうなのか？」

零菜と一緒に戻ってきた麻夜に尋ねる。

「そうだね。ずっと、こんな感じだよ」

「変わっていないんだな」

小学生の時も零菜と千咲はよく一緒にいた。教室で走り回っていることもあれば、机の上で折り紙やら落書きをしていることもあった。凧が千咲と会ったのは久しぶりだが、零菜は毎日のように顔を合わせていて、関係性はかつてとみじんも変わることもなく続いているのだ。

零菜の拘束から抜け出した千咲は、駆け足で素早く麻夜の背中に隠れる。

「わたしを盾にするなって」

「いいじゃん、わたしと麻夜の仲でしょ」

「友人の過ちを正すのも、大事な仕事だよね」

「あ、ちょっと、裏切るの!？」

「これは裏切りじゃない。正しいことなんだよ」

麻夜は千咲をむんずと掴んで、引っ張り、零菜に差し出す。両手をわきわきしながら零菜は千咲に迫った。

「くくく、いよいよ年貢の納め時だね、千咲ちゃん」

「お姫様がそういうこと言うのはよくないと思います。うちがちゃんとした納税者だぞ」

「マジレスはいらないんだよ」

零菜が千咲に襲いかかる。吸血鬼の腕力に物を言わせて、というわけではもちろんなく、細くしなやかな指を用いたくすぐり攻撃だ。乙女らしからぬ声を出して千咲を身を振って暴れる。

五分ばかり続いた攻防は零菜の圧勝に終わった。



ブルーエリジウムが保有するコテージには、すべて十数人が一堂に集まって飲み食いできるだけの広さの庭が付属している。風たちに貸し出されたコテージもその例に漏れず、綺麗に刈り揃えられた芝の上に設置したバーベキューコンロからは食欲をそそるいい匂いが立ち上っている。

太陽がピルの向こうに沈んでいく。夏の暁の帝国は、日が暮れてからも気温が高く、蒸し暑いのが常である。強烈な日差しに焼かれた人工の大地は、次の日の朝まで熱を持ち続ける。その点、ブルーエリジウムは都会のまったただ中にありながら、全体的に気温が低い。水をメインに扱うアミューズメントパークは、避暑地として利用できる場所を全面にアピールしており、キャンプエリアは本物の樹木を植えて、里山風の空間を演出している。最新のヒートアイランド現象対策と自然の緑と水を使った憩いの空間こそ、新しいブルーエリジウムの目指す新境地である。

コテージの庭側にはドライミストの散布機が設置されており、風のない夏夜でも涼やかな空気を作ってくれる。

とはいえ、それもバーベキューコンロの前ではまさに焼け石に水だ。

コテージに背を向けてコンロの前に立つ風の背中は確かに涼しいが、前は焼けるような熱がある。コテージのある森で拾ってきた枝葉を燃料に、ファミリー向けのキャンプができるのも売りの一つである。

例年、連日満員御礼のキャンプ施設も、プレ営業中の今は誰も利用者がいない。風たちが急遽、ここを利用させてもらえたのも、もともと利用者がいなかったからである。

周りに気兼ねすることなく、思いっきりバーベキューを楽しむにはいい環境が揃っている。それをむぎむぎと放り捨てることはできない。そこで、千咲が発起人となり、四人でバーベキューをすることになったのだった。

お化け屋敷に取憑いていた悪霊を退治したことで、予定通りに開場することができる。

その報酬として、コテージと庭を自由に使えることにしてもらったのだ。

「肉、肉、肉、うん、美味しい」

野菜は串に刺さる牛肉の塊にかぶりつく。一般のバーベキュー用の肉より大ぶりな塊だ。

「これ、けっこういいお肉だったりして」

「さすがお姫様、舌が肥えてますねー。実はエリユシオンと相談して融通してもらった、最高級の広野真牛なんですよ」

「あからさまにいいお肉だって分かるじゃん。こんなしつかりした肉持ってきたらさ。でも広野真牛って、有名なヤツ。初めて食べた」

「そりゃ、よかった。じゃんじゃん食べてよ。悪霊がいなくなってくれたから、うちはもう万々歳！ それにしても、美味しいなこの肉！」

千咲も塩胡椒をかけてパーベキューを堪能している。暁の帝国が誇る最高級の牛肉が広野真牛だ。酪農研究地区に指定されている広野地区で生産される牛で、国内市場では最高価格がつく。ブルーエリジウム内の老舗ホテルエリユシオンは、この広野真牛のステーキを取り扱っていて、千咲の実家が交渉して、肉を譲ってもらったのであった。

一般家庭ではまず手が届かない高級品。極力、一般常識の範囲内に支出を抑えている暁家でも、それは同じだ。これほどの贅沢品を味わえるのは、それこそ「姫」として参加するパーティくらいしかないだろう。

「なんか、むしろ申し訳ないな、こんな肉まで用意してもらって。あの悪霊とこの肉じゃ、釣り合い取れないんじゃないか」

牛肉を囓る風は、その柔らかく、それでいて歯ごたえのある肉の食感と味わいに感激する。食べ物の善し悪しが分かるような生活をしているわけではないが、スーパーで買ってくる安い牛肉とは味も食感も違うということが一口で分かった。まったくの別物だ。

「昏月君がいなかったら、もっと悪いことになってたかもしれないし、これくらい当然当然。それに、お姫様が二人も来てくれてるんだしね。うちとしても、ちゃんとお礼はしておかないとね」

悪霊が今日のレベルならば、大した問題は起きないだろう。あの悪霊にできることは、それこそちょっとした恐怖体験をさせることと体調不良を起こすくらいなのだ。しかし、それでも本物が危害を加えたということが公になれば、管理責任を問われるのが常識である。後々の営業にも支障が出るので、コントロールできないリスクは早急に対処しなければならぬ。

一日で、さしたる損失もなく悪霊を退治できたのは、お化け屋敷の経営者にとつ

ては僥倖だった。高級な牛肉を振る舞う程度の支出は、攻魔師に正式依頼することになれば格安だ。今は眠らせているだけのコテージを使ってもらうのも、試運転を兼ねると思えばむしろプラスであろう。

「野菜、ほら、ピーマン焼けたよ」

麻夜が火の通ったピーマンが刺さる串を野菜の取り皿に置いた。

「いや、わたしピーマンは……ちょっと、これピーマンしか刺さってないじゃん」

「苦手を克服するいい機会だよ」

「わたしは肉が食いたいんだけど」

渋い顔をする野菜。高級牛肉の刺さった串ではなく、どうして苦手なピーマンの串を取らなければならぬのか。それも、肉やタマネギ、カボチャ等が交互に刺さっているのならまだしも、ピーマンしか刺していない串だ。これは、嫌がらせ以外の何物でもない。

「野菜が大分残ってるから」

「だからってピーマンオンリーにしなくていいよね!？」

当然の反抗を示す野菜を麻夜は笑って受け流す。序盤で肉を中心に食べたものだ

から、用意していた野菜の消費が滞っていた。

どの野菜も艶があつて、ほどよい甘みを感じる出来のよいものだ。廃棄するといふのはあり得ない選択肢である。

「まあ、ほら、最後は男の子がいるから、大丈夫」

千咲が凧の背中を叩いて言う。

「残飯処理は任せろ」

「それでこそ、男や。もったいないからね、はい」

「だからって野菜ばかり押しつけてくるなよ」

千咲はトングで焼けたカボチャやタマネギを凧の取り皿に放り込んでいく。凧は別に野菜嫌いではないが、決してベジタリアンというわけではない。身体を作る大切な蛋白質を摂取しない理由があるのか、いやない。まして、そこにあるのは日常では味わえない高級肉だ。残飯処理に否やはないが、だからといって今肉を食わない理由はない。

バーベキューで腹を満たした後は、夏の恒例行事とも言うべき花火を楽しんだ。

都市部では花火ができる場所は限られている。ブルーエリジウムは、広大な敷地を活かして、都市部ではできない遊びができるファミリー向けの事業展開を視野に入れていくらしく、千咲の実家も参入を企図しているようだった。

せっかくの夏休み。明日、学校に行かなければならない予定もないのだからと、そのまま使わせてもらえることになった。

ルームサービスののように、管理事務所に連絡すれば、ピザやラーメンなどの夜食を注文することもできるし、雑貨もカタログから選んで購入することができる。こうした基本的なサービスは、凧たちにも適用される。

しかし、一頻り遊んで、たっぷり食べた後はすっかり疲れてしまっていた。千咲は家に帰り、凧と零菜、麻夜の三人はそのままコテージに泊まった。夜も遅く、そろそろ寝るところとところで、どこで寝るのかという問題で一悶着があった。ファミリー向けのコテージの寝室は一つしかなかった。ベッドこそ足りていたが、同じ部屋で寝るのは避けるべきではないかと凧は固辞した。もう高校生になったのだし、零菜も麻夜もずいぶん魅力的になった。過ちを起こさない保証はなかった。幸いなことにリビングには身体を横たえるのに十分な大きさのソファがあった。凧はそ

こで夜を明かすことにした。

凧はソファに寝そべり、タオルケットだけをかけて寝た。木々に囲まれたコテージに都会の喧噪は届かない。街中にありながらも、静かで暗い夜を過ごすことができる。秋になれば、虫の声を聞きながらキャンプを楽しむこともできるらしい。暁の帝国の中では、ここまで自然が豊かな場所は珍しい。

意識が闇に落ちる間際、冷蔵庫が唸る音に引き上げられる。閉じた瞼に、光が当たり、凧は薄らを目を開ける。

「あ、ごめん、起こした？」

「麻夜？」

麻夜が冷蔵庫を開けていた。

「何か、食べるの？」

「そこまで食い意地張ってないよ」

むすっとした表情の麻夜は、ペットボトルを冷蔵庫から引っ張り出した。

「喉が渴いたから、ちょっと飲もうと思って」

「ああ、そう」

無理矢理、目覚めたからか頭が働かない。

「ここ暑くない？ 何で冷房入れてないの？」

「入れてたはずなんだけどな……」

確かに、いつの間にか冷房が切れている。タイマー設定を間違えたのかもしれない。寝汗でシャツが張り付く感じがする。キッチン部分の明かりが部屋の唯一の光源だ。その光を頼りに掛け時計を見ると、時刻は午前三時となっている。

「凧君、水いる？」

「もらう」

「何がいい？ ウーロン茶と煎茶と麦茶……」

「麦茶で」

「了解」

水を入れたグラスを麻夜が持ってくる。冷たい麦茶が注がれたグラスは結露していて、すでに雫が付いていた。

凧は麦茶を一気に飲み干すと、かき氷を食べた直後のような頭痛を感じて小さく呻く。

「どしたの?」

「キーンってなった」

「冷たいの 一気飲みするから」

麻夜は相好を崩した。そして、身体を起こした凧の隣に腰掛けた。

「アイスクリーム頭痛って言うらしいよ、それ」

「美味そうな名前の割に、けっこうキツいんだが……」

痛みが治まるまで一分もかからなかったが、それでも辛い時間だ。もちろん、これ以上の痛みなどいくらでも経験してきたが、それはそれ。痛いものは、どうあっても痛いものだ。

麻夜は一気飲みはせず、グラスを数回に分けて傾け、ウーロン茶を空にした。

ソファの前にあるガラステーブルに、氷だけが入っているグラスを置いた。リモコンを操作して、クーラーの電源を入れた。

隣に座る麻夜を見る。凧の視線に気づいて、麻夜は怪訝そうな顔をした。

「何?」

「髪、どこまで伸ばすんだ?」

「そうだね。どうしようかな。試しに伸ばしてみたけど、どこまでってのは考えてなかった」

「そういうもん？」

「まあ、気分だよね。何か、変？」

「いや」

凧は小さく首を振る。

「髪、留めてないの、久しぶりだと思っただけ」

「寝るときは髪留めないよ。……ほんとに変じゃない？」

「変じゃない。むしろ、新鮮。麻夜はずっと髪が短かったってのも、あるけどね」

「ふうん、ちなみに長いのと短いのはどっちがいい？」

「どうかな。麻夜はどっちも似合うから……」

凧の頭が揺れる。強い眠気で頭が働かないのだ。うっかり寝落ちしてしまいそうだった。

「眠そうだね」

「三時過ぎてるからな」

凧は夜更かしするタイプだが、さすがに三時まで起きていることは希だ。まして、さつきまで寝ていたのだから身体も頭も付いてきていない。

そんな凧の頬を麻夜は指でつつく。

「何？」

「何となく？」

「何だよ」

凧は大きく欠伸をした。

「じゃ、わたしも寝ようかな」

麻夜はソファを下りて立ち上がった。場所が空いたので、凧は足を投げ出してクッションを肘掛けに立てかけて枕にする。

「おやす、み？」

しよぼしよぼする凧の目を、紅い瞳が覗き込んでいた。麻夜が凧の傍にしゃがみ込んだのだ。

「ねえ、今日、誰か凧君の血を吸ったりした？」

「今日は……朝一で空菜」

「それはいつものことだから。それ以外」

「それ以外はない」

「そっか。じゃあ、まだ余裕はあるよね」

「寝る前だぞ」

「大丈夫だよ、ちょっとくらい」

吸血は生命力を向上させ、精神を高揚させる。寝る前に風の血を吸えば、眠れなくなるかもしれない。一回の吸血で失う血は、大した量ではない。それでも数をこなせば貧血になるし、魔力を抜けるので疲労も感じる。もっとも、それはかなりの回数を一度にこなした場合だ。普通、体調に影響するほど、血を吸われることはない。

麻夜は体勢を整えるためにソファに膝を乗せる。そのとき、誤って風の手を踏んでしまう。

「いてッ」

「あ、ごめん」

「いや、大丈夫」

凧はパタパタと手を振る。痛みはもうなくなっていた。体質が変わったからかもしれない。吸血鬼化の進行で、怪我の治りはかなり早くなっている。ちょっとした痛みなら、痛いと感じた瞬間には消えていることもままあるくらいだった。

麻夜は暗闇に視線を走らせる。それから、じっと息を殺してから、肩の力を抜いた。

「どうした？」

「凧君が大きな声を出したから、零菜が起きてくるかと思って」

物音はない。零菜は二階の寝室で、眠ったままだ。

「起こすと悪いから、静かにしよう」

「それは、そうだけど、俺が悪いみたいなのはなあ」

「ごめんごめん。じゃ、失礼して」

麻夜の牙が凧の首に食い込む。麻夜の体温と吐息を感じる。噛まれた痛みはほとんどなく、むしろ痛気持ちいい感覚に脱力する。

「ん……ちょっと、しょっぱい」

「部屋が暑かったから」

「汗、かなりかいたみたいだもんね」

部屋の温度はほぼ外気と変わらず、今日は熱帯夜だ。クーラーが稼働することを前提に窓を閉め切っていたので、熱い空気が溜まっている。クーラーは動き始めたばかりで、涼しくなるにはもう少し時間が必要だ。

「拭けばよかった。悪かったな」

「凧君の汗とか、わたしは気にしたことないよ。でも、ちょっと、体勢がよくないな。なんか、噛みにくい」

「まだ、吸うのか」

「もうちょっとだけだから」

「ま、別に構わないんだけど、それは」

麻夜に吸血されて困ることはない。麻夜が一人で吸う量は多くても、小一時間で回復できる量だ。

どのような体勢で噛めばいいのか、麻夜は少し思案する。膝を突いて座った姿勢だと、身体を捻らないと行けないので疲れる。凧を起こすのは、眠そうにしているのでそこまで頼むのは気が引けた。

「じゃあ、うん、凧君そのままにしてて」

結局、血を吸うのなら密着するしかない。仰向けに寝ている凧から吸血する場合は正面から噛みつくのが安定するはずだ。

麻夜はソファに寝そべる凧の上に跨がった。

「あ、重い？」

「全然」

「そう、ほんと？」

「軽くて心配になるくらい」

「それは嘘でしょ」

麻夜は声を潜めて吹き出す。

そして、麻夜は生唾を飲み、唇を噛む。血を吸った勢いで凧の上のし掛かってしまった。少し、調子に乗ってやり過ぎているという自覚があった。もともとの眠気と吸血衝動に身を委ねすぎた、と内心で弁解しつつ、唇を首に寄せて噛みつく場所を探ってしまう。

「こういうときさ」

「ん？」

麻夜が噛みつきこうとしたとき、凧が不意に話しかけてきた。

「こういうとき、いつも手の置き場に困るんだよ」

眠そうな声だ。もしかしたら、少し寝ぼけているのかもしれない。

「吸血してるときの？」

「そう」

「そんなの好きなとこでいいじゃん」

「それも、いけないだろ」

それぞれに触られたくないところがあるだろう。昔ならともかく、今はいろいろと気を遣うことも多い。日常生活でもそうだし、吸血で密着するときはさらにだ。気心が知れているといっても、限度はある。

「……じゃあ、とりあえず、背中に手、回して」

「背中」

「姿勢崩れないように、支えてくれたらいいよ」

麻夜がそう言うので、凧は麻夜の背に手を添える。こうして麻夜に触れるのは、

初めてかもしれない。麻夜の身体は思っていたよりも細い。普段鍛えている身体はしなやかな強靱さを備えてはいるが、女性らしい柔らかさもあった。できるだけ意識しないようにしてきたが、胸もしっかりと押しつけられている。麻夜のほうはどこまで気にしているのか分からないが、風のほうは眠気が覚めるくらいには緊張している。そんな風の気持ちを知ってか知らずか、麻夜は風の首元に顔を埋める。肌を牙で噛み破り、滲み出る血を吸う。

日々、空菜に血を与えているので、血を吸われることに忌避感はなく、自然に受け入れてしまっているが、麻夜と空菜は吸い方に違いがあつて、麻夜はまだ不慣れな感じがある。

吸血慣れた空菜は血を吸うときには、しっかりと噛みつき、短時間で必要量を吸い出す。麻夜はそこまで思い切れないのか、噛む力は弱く滲む血を少しずつ舐め取るように味わっている。

二十秒ほどの時間をかけて麻夜は風の血を吸った。吸い終わってから、麻夜は風の上から身体を退ける。

「じゃ、僕はもう寝るから。おやすみ」

「ん、おやすみ」

足音を殺して、麻夜はリビングを出て行った。

時計は三時半を指している。麻夜の吸血で目が冴えてしまった。もしかしたら、今のはすべて夢だったのかもしれない。夜更けに従妹が押しかけてきて吸血してくる夢だ。感触もすべて生々しく身体に残っているが、それは普段から空菜に血を吸われているから脳がそういう状況を作ったのだ。暗闇の中でそう考える。そんなこととはないだろうと、煩悶するうちに風は再び睡魔に引きずられて眠りに落ちた。

## 幕間 《お化け屋敷編 5》

お化け屋敷に取憑いた悪霊退治から一夜明けた。開け放った窓からは涼やかな朝の風が吹き込んでくる。熱帯夜だったのが嘘のように、過ごしやすい朝だ。テレビをつけると朝の情報番組が流れている。学校で一時間目の授業を受けている時刻だ。夏休みでもなければ、この時間帯のテレビを目にする機会はほとんどない。ただの朝の情報番組とはいえ、学生からすれば特別感があって、風は好きだった。

「ニッキーとツヨシ結婚だって」

トーストを嚙りながら零菜が麻夜に話しかけた。

「何か去年くらいにネットニュースに上がってなかったっけ？」

「ホテルから出てきたとこ、すっぱ抜かれたヤツのこと？」

「そうそう」

「あの後、何の音沙汰もなかったけど、続いてたんだねえ」

芸能人の電撃結婚発表に、特にこれといった感想もなく零菜と麻夜は会話のネタにしている。ニッキーは、人気音楽グループ、スペモンの女性ボーカルでツヨシは

歌手や俳優として活躍するマルチタレントだ。女性ファンが多く、熱愛発覚の記事が出たときに過激なファンが脅迫状をニッキーに送りつけて警察沙汰にまで発展した。芸能関係に疎い風でも、これだけ世間を騒がせた二人なので顔も名前も知っていた。零菜と麻夜はこの話はあまり琴線に触れなかったようで、さらりと流してしまった。

「ねえねえ、今日、この後どうする？」

零菜の指が、正方形に切り分けられたサンドイッチに伸びる。塩気の効いた玉子とハムのサンドイッチだ。

「せっかくだから、どこか寄り道していこうか。このまま帰るのも味気ないしね」と、麻夜が返す。

チェックアウトまでにはコテージを出なければならぬ。役目を終えた風たちが、ブルーエリジウムの中いつまでも留まっていることはできない。正式営業後ならばまだしも、今はプレ営業中で許可を得た一部の客だけが滞在を許されるのだ。帰るときは速やかに帰宅しないと、会社に迷惑を掛ける。

「お土産でも買っていこうか。みんなもブルーエリに来たかっただろうし」

「売店で？」

「今日はブルエリの売店やってない日みたい」

「じゃあさ、黒猫堂のケーキにしない？ あそこ、テイクアウトも始めてるんだ」

「麻夜ちゃん、そこ好きだよ。じゃあ、ついでにちょっと早いけど、お昼もそこで済ませちゃう？」

「いいよ、そうしよう。ランチメニューもあるしね」

聞こえてきた店名には覚えがある。一年ほど前に麻夜と一緒に行った店だ。女子の間では、なかなかの有名店らしく、シックな雰囲気と可愛いデザインのケーキやパフェが人気だ。暁姉妹の中でも好評で、特に麻夜はその日の気分でモノレールを乗り継いで三号店にまで足を伸ばすこともあるくらいだった。

「ここからだ、三号店が近いんだよ」

「この前できたとこだよ」

「そう。本店で修行したパティシエがそのまま三号店の店長に抜擢されたってことで、味の心配はまったくくないよ。美味しかったし」

「凧君、それでいい？」

「どっかいきたいとか、希望ある？」

と、急に話を振ってこられた凧は、

「それでいいよ」

と、その場の勢いで答えた。

ある程度話の方向性が決まっているので、別の案を出しにくい。そもそも別案があるわけでもないのです、何ら異議はないのだが、この話の流れからすれば、零菜たちの中に凧から異論が出るという発想はなさそうだ。

ブルーエリジウムを出て、一日ぶりに駐車場にやって来た。相変わらず、灼熱の太陽がアスファルトを焼いていて、陽炎がゆらゆら揺れている。コテージからここに来るまでに、大分汗ばんでしまった。早く涼しいところに避難したいところだ。

「凧君、何か付き合わせてごめんね」

「大した悪霊じゃなかったし、むしろブルーエリに入れてラッキーだったよ」

「そう？　じゃあ、よかった」

麦わら帽子を被って日光を避ける零菜は、凧にこの話を持ってきた張本人だ。結果的にほとんど負担なく問題を解決できたので、体感的には旅行と大差なかったの

だが、それでも凧が悪霊と対峙することになったので、そこは危ない仕事を頼んでしまったと思っっているようだ。

少し離れたところで、麻夜と千咲が談笑している。千咲は零菜と一緒にいることが多いのだが、麻夜とも長い付き合いだ。何の話をしているのか聞こえてこないが、ずいぶんと楽しげである。

そんな二人を遠目に眺めていると、零菜が凧の袖を引いた。

「凧君さ」

「何？」

「……昨日の夜、麻夜ちゃんと何話してたの？」

「昨日の夜って……」

それはおそらく、真夜中に麻夜が水を飲みにもリビングに来たときのことを言っているのだろう。何を話していたのかは、正直寝ぼけていたので、ほとんど記憶にないが、凧の血を麻夜が吸っていったのは確かだ。

隠し立てするようなことではないはずだが、何となく口ごもってしまう。

「いやらしいことでもしてた？」

「んなわけない」

「ふうん……」

「何だよ」

「別に」

零菜の表情は麦わら帽子に隠れて風の位置からだとは見えないが、何となく、零菜の反応に棘があるように感じている。零菜の立っている側の肌が、妙にピリピリするのだ。零菜から妙な電磁波でも出ているのかもしれない。

そもそも、零菜は昨日の夜のことをどこまで把握しているのだろうか。夜もかなり更けている時間帯だったはずで、麻夜は、零菜は寝ていると言っていたはずだ。確認しようにも、やぶ蛇になる気がするので、この話は保留する。

炎天下の中で、零菜との会話が途切れてしまう。何となく居心地の悪さを感じていると、麻夜と千咲がこちらにやって来た。

「ごめんごめん、待たせちゃったね」

「まだ、タクシー来てないし大丈夫だよ」

「ちよっと、時間かかっているのかな」

千咲が手配したタクシーの到着が予定よりも遅れているようだ。

「ごめんね。いつもだと、呼んだら十分くらいで来てくれるんだけど、この時間、この辺は混むからさ」

千咲が申し訳なきように謝る。

「まあ、それは仕方ないよ。この辺りは車多いもんね」

物流倉庫や工場、大型のショッピングセンター等が近くにあり、交通渋滞が起こりやすい地域である。

交通事故も、少なからず発生する。科学技術が発展しても、それを使うのは人間だ。近年は、格段に少なくなったものの、自動車事故はいつもどこかで起こっている。交通量の多いこの辺りは、事故多発地帯だ。

「炎天下にいてもらうわけにもいかないし、タクシー車で事務所で涼んでいいよ」「ほんとに？ 助かるー」

千咲の申し出に零菜がいの一番に喜んだ。

日光は肌の大敵だ。こんがり日に焼こうというのならばまだしも、白い肌を維持するのならば、できる限り紫外線は避けたい。日焼け止めクリームもしっかり塗っ

ているが、この熱さにどこまで抵抗できるものか分からないし、汗もたくさんかいてしまう。いろいろな気を遣う年頃の乙女としては、屋内退避が最適解である。そして、これには麻夜も同意した。太陽光の下で、漫然と時間を使うよりはずっといい。

三人がブルーエリジウムを出たのは、その二十分後だった。予定時刻よりも若干遅くなったものの、計画は変更せず、黒猫堂三号店に向かったのだった。

零菜と麻夜と一緒に早めの昼食を摂ってから、凧は帰宅した。

自分の荷物を片付けなければならないので、零菜も麻夜もまっすぐに自宅に向かった。とはいえ、ワンフロアすべてが暁家の持ち物であり、玄関前までは一緒にいた。自宅というよりも自室と言った方がいいかもしれない。

僅か一日しか離れていなかったが、今回の小旅行は悪霊退治から始まったことであってか、長く家を空けていたような気持ちになった。

「何か、靴がいっぱいあんな……」

玄関には、自分と空菜以外の靴やサンダルが置いてある。

暁姉妹の誰かが遊びに来ているのだろう。

これといって珍しいことではない。

空菜という同居人が増えてから、凧が不在であっても空菜を訪ねて誰かがやってくるようになったし、そもそも、暁姉妹が我が物顔で人の家に入入りするのは昔からのことだ。

特に疑問に思うこともなく、凧は自宅に上がる。自分の家なのだから、気兼ねすることはない。

廊下を歩いて行き突き当たりのリビングのドアを開ける。

「ただいまー……あ？」

ドアを開けた先に広がる光景を見て、凧は一瞬、固まった。

いつも以上に好意的に言う生活感がある。悪意的に言えば散らかっているとも言える。テーブルの上にはトレイがあって、雑多な菓子の寄せ植え状態だ。一リツトルのジュースのペットボトルが五本も置いてあって、すべて飲みかけだ。

誰が持ってきたのか、昏月家にはなかったダイヤモンドゲームや人生ゲームがお菓子トレイの横に出しっぱなしになっている。

凧が不在の間、この空間がパーティ会場になっていたのは誰の目から見ても明らかだった。空菜一人で、この雑然とした状況を作り出すことは絶対にあり得ない。そして、この惨状を作り出した一人と思しい空菜はソファの上で静かに座り、帰宅した凧に視線を向ける。

「おかえりなさい、凧さん」

「ただいま。……なかなかすごい状況だな……空菜の格好も……何してたんだけ？」

凧が驚いて言葉をなくしたのは、空菜の服装もまったく違う物になっていたからだ。空菜が着ているのは、所謂メイド服だった。それも、メイド喫茶の客引きが着ているようなコスプレ専用のミニスカメイド服である。無駄にひらひらが多い。黒いガーターストッキングには、太もものにワンポイントで桃色のリボンが結んである。フリルの花をあしらったホワイトブルームをきちんと頭に装着し、メイドコスプレとしてはかなりの完成度に見える。もともと空菜の整いすぎた顔は表情の変化が乏しく、西洋人形のようなだった。

「パーティでも、してたのか？」

「そうですね。たぶん」

「みんなは？」

「あっちです」

空菜の空色の瞳が示す先は、空菜の私室だ。

ドアの向こうに人の気配がある。ガタガタと僅かに音がするのは何か作業をしているからだろうか。

「何してんの？」

「片付けです。昨日の夜にいろいろ出したままにしたので。ここにあるのも、そろそろ片付けますよ」

「そう」

「凧さん、それで、どうでしょう」

空菜は自分の胸元に手を置いて、そう尋ねてくる。

「……かなり似合ってる。いつもと全然雰囲気から変わるんで、驚いたよ」

「そうですね。なら、よかったです。どうも、この衣装はメイド服というには無駄が多く、機能的ではないように思いましたが、聞けば近年、男性の嗜好に合わせて変化した新しい形態とのこと。凧さんの嗜好にも適うようですね」

「変な納得の仕方するなよ。それと、外でそれ着るなよ」

「ええ、分かりました」

コスプレメイド服に妙なイメージを抱いている空菜は、凧の命を二の句なく了承する。空菜自身は、この衣装について思うところはあまりない。むしろ、メイド服は、人に仕えることを目的意識としてすり込まれている空菜にとっては、かなり馴染みやすい服でもあるのだ。だからこそ、観賞用に変質したコスプレ用のメイド服への違和感を強く抱いていたのだが、凧がいいと言えば、それはいいものなのだ。空菜は認識を新たにした。

「そもそも、なんでメイド服なんか着てるんだよ」

「まあ、それは昨日いろいろありまして」

ここで何かどんちゃん騒ぎをしていたのだろう。それはこの部屋の惨状を見ると簡単に予想することができる。

そこで、空菜の部屋のドアが開く。

部屋の中からは萌葱と東雲と紅葉が出てきた。東雲は大きな紙袋を両手で抱えている。

帰宅した凧を見た三人は、それぞれ三者三様の反応をした。

「え、凧君？」

「あら、思ったより早かったのね」

「ちよ、なん……っ！」

順に、萌葱、紅葉、東雲の反応だ。萌葱は驚き、紅葉は特に大きな反応なく、そして東雲は愕然として顔を紅くする。

それも無理ない反応だ。何せ、三人の中では東雲が最も大胆な格好をしていた。空菜がメイド服を着ていたように、三人もコスプレを楽しんでいたようで、それぞれが普段見ない格好をしているのだ。

萌葱がナース服、紅葉は婦警、そして東雲は、ボア生地 of 布で作った露出過多のビキニだ。それぞれの生地は紐で繋がっているだけで、上半身の肌露出がかなり多い。足は太ももまでストッキングに覆われている物の、全体で見ればビキニの水着と変わりが無い。彼女が顔を真っ赤にするのも頷ける衣装だ。

ハロウィンには早い、どうも昨夜、このリビングでは前代未聞のお姫様によるコスプレパーティが開催されていたらしい。

「わたし、着替える」

早足でその場を後にしようとしたのは東雲だ。

「ダメよ。二十四時間、この格好って約束でしょう」

「いやーだ」

逃げようとする東雲を紅葉が背後から抱き留める。

「あんまり暴れると、危ないところが見えちゃうわよ？」

「ちよつと、変なとこさ、さわ、やめー！」

紅葉の手が東雲の剥き出しの腹部をなで回す。

「……えーと、凧君、おかえり。大変だったね」

妹二人のじゃれ合いを傍目に萌葱は凧に話しかける。

「俺のほうは別に。大したことなかったよ。零菜たちとお土産買ってきたから、後で渡すよ」

「ああ、ほんと？　ありがとう。気を遣わなくてもよかったのに」

努めて普通の会話をしているが、萌葱は萌葱でナース服を着たままだ。あまりにもいつもと違うので、違和感が飽和状態になっている。普段と違うと言えば、紅葉

だ。日本にいるはずが、なぜ、この家にいるのか。戻ってくる連絡はもらっていなかった。

「……紅葉姉さん、帰ってたんだ」

「実は昨日のうちにね。本当は夏休みになったらすぐに帰ってくるつもりだったんだけど、そういうわけにもいかなかったのよね」

「大変だったみたいだからね」

「まあね」

黒く長い髪をさらりと払う。紅葉は留学先の日本で、事件に巻き込まれ、その解決に奔走していたらしい。先日報道され、日本と暁の帝国双方で話題になった。学校を舞台とした魔導犯罪は、日本の学校の警備体制について大きな課題を突きつけたと報じられている。それが一段落して、やっと帰省できたのであった。

「でも、なんで、そんなコスプレなんて？」

「もらいものなのよ」

「もらいものって、これを？」

「ルームメイトがね、これを着て写メを送ってくれて言って渡してきたのよ」

「なかなかやべーヤツなのでは？」

「そんなことないわ。ただちょっとわたしにのめり込んでるだけ」

そうは言っても、コスプレ衣装を友人に渡して、写メを要求するのは常軌を逸しているのではないだろうか。

「写メ送るの？」

「まさか、そんなわけないじゃない」

さりとて紅葉はそう言っただけ。

「でも、まあ、せっかくだからこれを使って楽しくやろうと思ったのよ。わたしとしては大満足よ。ねえ東雲」

「は、な、せ！」

またバタバタし始めた東雲を紅葉は解放する。

そのまま自分の着替えをひつつかんで、脱衣所まで脱兎のように走って行った。

「もったいない。可愛かったのに。ねえ？」

「んー、確かに」

その意見には同意する。

東雲の過激なコスプレは本人は恥ずかしがっていたが、かなり似合っていた。

記憶が正しければ、確かデンジャラスピーストなどというコスチュームだ。前に零菜が色違いの黒色のコスプレ写メを送ってきたことがあった。零菜のそれはまさしくデンジャラスなものだったが、東雲が着ると小動物的な愛らしさが強調される。同じ衣装でも、着る人によって印象がずいぶんと違うのだ。

「で、凧君、お土産って？」

「黒猫堂のケーキ」

「あら、素敵。麻夜のリクエスト？」

「そうそう」

「なら、三時のおやつは決まりね。凧君、わたし、コーヒーが飲みたいわ。ブラックで」

そう紅葉が言うと続いて萌葱が、

「あ、じゃああたしは紅茶がいい。確かあったよね、ダーズリンが」と、リクエストする。

そして、そのタイミングで戻ってきた東雲が、

## 「煎茶」

と、言って椅子に座る。

「何で全員バラバラなんだよ」

熱湯を沸かすだけで、細かい拘りはない。

全員お姫様ではあるが、家庭の中でプロ級のコーヒーやお茶を飲もうとは思っていない。むしろ、雑さがあったほうが家庭的で落ち着くというほどだ。

三時まで、あと一時間ほどある。凧は零菜や麻夜、紗葵にも携帯端末でメッセージを送り、ティータイムの準備を始めたのだった。

---

だらだらしたコスプレパーティーの中身は次回します。そのうち姉妹の設定的なのも出すかも。

## 幕間《お化け屋敷編 6》

天高く屹立するタワーマンション群が朝日を浴びて煌びやかに輝く。暁の帝国の今日の空模様は、快晴で真夏の太陽光を遮る無粋な雲もなく、いつも通りに日中は四十度近い気温をたたき出すことは目に見えていた。

暁の帝国はその国土のすべてが人工物で構成された人工島だ。もともとは土もなければ、木々もないコンクリートと金属の塊で、それを魔導科学の粹を結集して海上に浮かべているのである。おまけに、位置するのは太平洋上の赤道付近である。そのため、真夏の暁の帝国はかつて日本の一部だったとは思えないほどに高く、熱帯性気候に近い蒸し暑さに襲われるのが日常となっている。

幸い、この国は世界の最先端を行く魔導科学の本場である。

この二十年でヒートアイランド現象対策は大幅に進化している。例えばビルの外壁に塗布するナノマシンのおかげでビルの外壁に熱が籠らないようになっていし、街中にはドライミストの発生装置が普及し、街路樹や屋上庭園も推奨されている。上空から街を見下ろせば、昔に比べてもずいぶんと色合いが賑やかになったこ

とが分かるだろう。

蒸し暑い夏を戦うという分かりやすい戦略は人々に受け入れられ、一つの産業として成長していた。

それでも、やはり暑いものは暑い。

気温四十度が、気温三十度になったからといって、涼しくなったと諸手を挙げて喜ぶわけではない。

結局、技術がどれだけ発展しようとも、自宅では冷房を付けて生活するスタイルに変わりはない。窓を開けられないタワーマンションの高層階ならなおのことである。

遮光カーテンを閉め切って、真っ暗な部屋の中に明かりが灯る。

スマホの画面が点灯し、無機質な着信音が鳴る。

「んー……」

もぞり、と布団の中から顔を出した東雲がけだるそうに枕元でがなり立てるスマホを手にした。

しょぼしょぼとする目を擦り、画面を見ると電話の相手は萌葱だった。

「あい……」

『……あんた、もしかしてまだ寝てた？』

「ん……？」

東雲は働かない頭を搔いて、萌葱の言葉を理解しようと努める。

寝起きで意識がはっきりせず、萌葱が言っていることが頭に入っていない。

時間の感覚もはっきりしない。カーテンの隙間から差し込む太陽が眩しくて、目が眩む。

「なんだっけ？」

『何寝ぼけてんのよ。紅葉を迎えに行くって、言ってたでしょ。もう時間なんだけど？』

「……へあ……？」

『もう八時半よ。早めに出るって、あんたが言ったんじゃない』

「……あ、ああっ。ごめんッ」

冷房の冷気が首筋をぞくりと舐め上げる。寝汗が一気に引いて寒気がする。おかげで目が覚めた。今日は紅葉が暁の帝国に帰ってくる日だ。せっかくだから空港に

迎えに行つて、街を散策しようとしていたのである。

忘れていたわけではないが、完全に寝過ごしていた。

「すぐ準備するから」

『準備できたら呼んで。それまで、部屋で待つてるから』

呆れたような萌葱の声を最後に通話が切れる。

やってしまったものは取り返せないが、スマホに憎々しい視線を送る。アラームを三つも設定していながら、結局、目を覚ますことができなかつた。確認してみると、どうも自分で止めた形跡がある。まったく記憶になかつた。

「あー、早く夏終わらないかなあ」

東雲は照りつける太陽の下で意味もない恨み言を呟いた。

ブラックのカンカン帽を頭に乗せた東雲の額にはすでに薄らと汗が滲む。日傘と帽子と日焼け止めは暁の帝国に生きる女子高生の必需品だ。肌の白い東雲には尚のことである。

「秋になつても大して涼しくはないわね」

と、隣を歩く萌葱は答える。

日傘こそ差していないものの萌葱はキャスケットを被ってお洒落に決めている。デニムのショートパンツで大胆に足を出しているのは、細身でそれなりに身長のある萌葱には似合う。低身長にコンプレックスのある東雲はなかなか真似できないので恨めしい。萌葱や麻夜がするような「格好いい」コーデは、東雲には手が届かない。どうしても、衣装に着られているように見えてしまうのだ。それよりは、低めの身長と童顔を活かした可愛い系で纏めるのが安パイになる。挑戦したい気持ちはあるものの、なかなか踏み出せないうちに時間が過ぎていく。

「四十一度」

東雲が不意に呟く。

「気温？」

「今、その電光掲示板に出た」

「日向じゃ、まあそうなるわよね」

やって来た空港のエントランス前に設置された温度計に表示された気温は、今年が猛烈な酷暑であることを立証するかのように厳しい数字を表示している。

日向での気温の計測は太陽光の影響を受けるものなので、「気温」としての正式な数字ではないが、日常生活を送る上では重要な数字である。

暁の帝国の技術を費やしても、太陽光に直接曝される市民が快適な夏を送るのは、少なくとも屋外においては難しいということだ。

それこそ、日光を直接遮るくらいしなければ、肌を焼くような厳しい暑さからは逃れられない。

「紅葉ちゃんの便って、何時だったっけ？」

「十時着の予定だから、後二十分。ちょうどいいわね」

「お腹減った。割とガチで」

「朝、食べてないの？」

「食べてないんだよね」

「寝坊すんのが悪いのよ」

「ごめんて」

「昨日何時に寝たの？」

「多分、二時くらい」

「夏休み明けから彩海くるんでしょうが。それで大丈夫なの？」

「混沌<sup>あ</sup>沌<sup>ち</sup>領域<sup>ち</sup>にいたときからこんなだったからへーきへーき。今日はちょっと、クラーが快適すぎたんだと思うなあ。キンキンに冷やした部屋で、布団被って寝るの、最強じゃない？」

「それは分かるけどね。それとこれは関係ないから。あたしはあんたを毎日起こすの嫌だからね」

「分かっているって。新学期が始まったらちゃんとしてますよー」

彩海学園の編入試験を終え、東雲は制服を新調した。

新たな皇族を迎えるに当たり、今頃は学校関係者は忙しく駆け回っているところである。

彩海学園がこの二十年で大きく発展したのは、皇族の出身校というブランドの後押しを受けたことも大きい。第二世代のお姫様も彩海学園に進学したことで、ますますそのブランド力は強くなっているし、それに相応しい設備投資も行われている。二十年前とは彩海学園の学術機関としての機能も規模も様変わりしていると言っても過言ではないだろう。

萌葱と東雲は、ターミナルビルの展望デッキに上がった。

暁の帝国最大の空港であるセントラル国際空港の展望デッキは屋外と屋内の二種類が用意されていて、強い日差しを嫌う女性たちは、屋内展望デッキから飛行機の離発着を見ることが多い。

屋内展望デッキの天井は99パーセントUVカットが可能と謳う特殊なガラスで覆われていて、太陽光を気にせず空を見上げることができるのも、この展望デッキの特徴である。

「あれじゃない？」

東雲が目を細めて空を見る。

豆粒ほどの大きさの黒い点が晴れ渡る空にぽつんと浮かんでいる。

人間以上の視力を持つ萌葱と東雲の目にはそれが正しく飛行機であると分かっていた。

「それっぽいね。ぱっちり時間通り」

東京から暁の帝国までは、ジェット機ならば二時間もかからない小旅行だ。

かつての絃神島は完全な学術都市で、出入りは厳しい制限があったので、外国扱

いになった今のほうが気軽に移動できるという皮肉な状況がある。

観光業としては日本からの旅行者が圧倒的に多いのも特徴か。

この二十年で魔導科学に偏重していた島の産業は緩やかに変化していて、特に観光業の比率は大きく伸びているらしい。

紅葉が展望デッキにやってきたのは、さらに二十分ほど後だった。

しっとりとした黒い長髪に切れ長の双眸は、どこか近寄りたいたい固く冷たい印象を抱かせるが、それは「付き合いの浅い人間にとっては」という条件付きのものでしかない。漆黒の前髪の奥に覗く空色の瞳に親愛の情を滲ませているのが分かる程度には、身内には心を許している。

「遅かったわね」

と、萌葱が言った。

「仕方ないじゃない。外国から帰ってきたんだもの。入国手続きって、いろいろと面倒なのよ」

「最近、ますます厳しくなったみたいね」

「そう。面倒だけど、こればかりはね」

紅葉は背筋を反らして伸びをした。

「お疲れ？」

と、東雲が聞く。

「まあね。ずっと同じ姿勢で座ってたから、身体がガチガチ。ちょっと、運動したいわ」

「言うと思った。じゃあ、次の行き先は決まりね」

紅葉の答えを聞いて萌葱が言う。

「あら、いいところあるの？」

「ロードスタジアムが、先月こっちにも進出してね。行ってみたいなって思ってたのよ」



甲高い金属音を奏でて白球が舞い上がる。

紅葉が振り抜いた金属バットが時速百三十キロのボールを打ち上げた音だ。

「残念、ダメね」

紅葉は言葉とは裏腹に対して残念そうでもなく呟いた。

手元の操作パネルには、ゲームオーバーの文字が映し出されている。

ここはスポーツアミューズメント施設であるロードスタジアムの南朝日通店の中にあるバッティングセンターである。

ロードスタジアムは日本国内に百二十店舗を構えており、今年の七月について暁の帝国にも一店舗を出店した。

暁の帝国における一号店ということで気合いが入った施設になっていて、バッティングセンターの他にもボウリング場やキックターゲット、ゴルフの打ちっぱなし、卓球、バスケットボール、スケートボードといったスポーツを楽しむことができる。

野球は暁の帝国ではマイナースポーツだ。それは野球場という野球に特化した施設を作れるほど、土地に余裕がなかったという人工島ならではの理由が大きいし、バットやグローブといった用具を揃えなければならなかったり、ピッチャーとバッ

ター以外の動きが少なく体育の授業として成立させにくいという背景もあって、野球に触れる機会が生まれないうまま今に至っていた。

それでも、暁の帝国の国民の大半はかつて日本人だったので、野球の芽がないわけではない。

野球場がなくてもバッティングセンターができれば、話題になる。競合他社もない。そういう目算で力を入れたバッティングセンターは、とりあえずは成功と言ってもいいくらいには人が入る人気のアトラクションになった。

金属バットを籠に刺し、紅葉はベンチに腰掛けた。

「おつかれー」

萌葱が差しだしたペットボトルを受け取った紅葉は、ヘルメットで乱れた髪を整えながらスポーツドリンクで喉を潤した。

「思ったより当たらないものね」

「見てる分には簡単そうなんだけどね」

二つ隣のブースでは仕事の合間と思しいスリッ姿の男性が見事な金属音を奏でている。軽々とバットを振り抜く者がいる一方で、萌葱も紅葉も芳しい結果を得るこ

とができなかった。

「まあ、わたしはバットに当たりはしたからいいけれど」

「あたしはそもそも運動苦手なんだって」

ふてくされる萌葱は、空振りばかりで掠りもしなかった。

残念なことに、萌葱の身体能力は吸血鬼の平均値にも届かない。その上、センスもない。バットを振る姿を見るだけで、偶然以外に白球を打ち返せる要素がないことが誰の目から見ても明らかだというほどであった。

「萌葱ちゃんは腕だけで振ってるからね。明らかに振り遅れてるし、そりゃ当たらんよ」

東雲の指摘のとおり、萌葱のスイングには棒を振っているだけで力が乗っていない。全身の連動がないのでバランスも悪い。運良くバットにボールを当てたとしても、大した飛距離は期待できない。

「そんなに言うんならお手本を見せてよ。次、あんたの番でしょ」

「いいよ。混沌領域じゃあ、ベースボールはメジャーなスポーツだからね。あっちで磨いた腕を見せてあげるよ」

ヘルメットを被った東雲がブースに入る。

ピッチングマシーンが動き出し、紅葉の時とは比較にならない剛速球が発射された。その球速は時速百五十キロ。人間のプロ野球でも、この速度を安定して投げ続ける投手はいない。もちろん、素人が打ち返すのはまず不可能だ。

それを東雲のバットは完璧に捉えた。

白球は左中間を飛んでいき、ヒットとなった。

「あいつ、本当にやりなれてるな」

「野球選手でも目指してたのかしら」

「あっちじゃ体育でもやるんだよ、野球。人気スポーツだよ。まあ、学校の敷地がこっちと全然違うってのもあるのかもしれないけどね」

二球目はホームランだ。

カーブをあっさりと見破って、しっかりと打ち返した。

「余裕ね」

「これくらいなら、人間でもできる速さじゃん」

紅葉に答えながら、東雲はバットを振る。球速を上げて、苦慮する様子は見せ

ない。時速百七十キロを超える魔族用の剛速球も目で追ってしつかりとバットを当てに行く。

東雲が初めて空振りをしたのは、時速百八十キロを超えてからだだった。

「ちよつと、ミスった」

「そこまで連続して当てられるんだから、十分でしょ」

「前は二百キロまではノーミスで行けたこともあるんだよ。また練習しよっかな」  
東雲がバットを籠に入れる。

ルビーのように紅く染まっていた東雲の瞳の色が戻る。

極限まで集中力を高め闘争本能を加速させた彼女の目は、普通の人間よりも遙かに優れた動体視力を発揮する。その証として瞳の色が深紅に染まるのだ。吸血鬼ならではの生理現象である。

東雲の身体能力は吸血鬼の中でもかなり高い。

幼少期から混沌界域に渡り、特訓を重ねた彼女の基礎能力は、デスクワークを得意とする萌葱とは比較にならないのだ。

それは単純な身体能力だけでなく、能力の使い方や引き出し方といった技術も含

めてである。

「瞬間的な集中力を発揮する訓練にはなるってところかしらね」

「当たり前。そういう意味もあって、ちょいちょいやってたんだよね」

高速で飛んでくるボールを目で追い、バットに当てるという一連の流れは一朝一夕にできるものではない。動体視力を養い、集中力を鍛え、身体の動きをコントロールする技術が必要だ。

必要な時に必要な集中力を引き出す。

そういった能力もまた訓練によって培われるものだ。

東雲は華奢な外見の割に身体能力は非常に高く、またそれを活かす訓練を積んでいる上に、もともと運動面のセンスがあるので、萌葱とは比較ならない結果が出るのも当然であった。

「動いたら、ますますお腹減った」

東雲が腹部を押さえた。

朝食を抜いたおかげで、空腹状態が続いていた。軽めにゼリー飲料を口にしていたが、それも空腹を満たすようなものではない。

「いい時間だし、わたしは賛成だけど、萌葱は？」

紅葉は携帯端末のスリープモードを解除して時間を確認した。

正午を周り、世間的にも昼食時だ。

「もしかして、ダイエットでもしてる？」

「してるのは、ソイツ。あたしは普段からちゃんと考えて食事してるからね」

萌葱に視線を向けられた東雲は失敬なと反論する。

体重管理に一時失敗した東雲だったが、不断の努力で目標体重まで減量していた。成長期ということもあって、エネルギーの出入りをしっかり管理すれば、あっという間に体重は戻せることが実証された訳である。

「そういえばこないだ東雲がそんな騒ぎをしてたわね。もう戻せたの」

「もともと大して増えてないからね。増加率にビビっただけだよ」

取り繕う東雲は、咳払いをして話題を逸らそうとした。

東雲だけではないが、姉妹は全員が細身の体型だ。年頃の女子らしく、スタイルの維持には全員が気を遣っている。

東雲は少し油断しただけだ。

取り返しのつくところでブレーキを掛けた。

そのおかげで体形が崩れるという悲劇を未然に防げたのである。

「で、結局どこで昼食べるのよ」

萌葱が話を戻した。

身体を動かしてエネルギーを欲しているのは萌葱も同じだ。

カロリーの話をした直後ではあるが、それはそれとして食事自体は日々の楽しみだ。久しぶりに帰ってきた紅葉もいるので、少しくらいは羽目を外してもいいだろうというくらいには気持ち盛り上がっていた。



紅葉が古城に挨拶に行く時間になったため、昼食を終えて早々に萌葱と東雲は自宅マンションに帰ることにした。

東雲が昼食に選んだ大衆食堂は、どちらかと言えば体育会系の男子高校生が好むタイプの店で、イマドキの女子高生の選択肢にはあまり入らないところだが、東雲

はこういう店がむしろ好みのようで、帰国してからというもののラーメン屋とともに、暇を口実に色々と開拓しているようであった。

妹が行くというから付き合った萌葱と紅葉だったが、これには少々戸惑いを隠せなかったし、東雲が選ばなければ、まず暖簾を潜ろうともしなかっただろう。

萌葱ならばお洒落なカフェを選んだだろうし、紅葉であれば多少の出費を覚悟して高級感のあるレストランを選んだだろう。

東雲がこういった食事を好むのは、本人の性格もあるが、「混沌界域にはない故郷の味」を実感するからであった。

マンションに戻った二人が向かったのは、凧の家だった。

凧は零菜と麻夜と一緒に出かけていて不在だが、空菜は家にいる。いつもよりも賑やかなのは、紗葵と瞳、夏穂も揃っているからだだった。

暇になれば一カ所に集まって駄弁る。しかし、自分の部屋は年頃なので姉妹だろうと入れたくはない。そういう事情で、自然と凧の家に集まるが多くなっていた。

「騒がしいわね」

瞳と夏穂がリビングを走り回っているのを見て萌葱が呟く。

「さっきまで昼寝してただけだね。まあ、そのうち静かになるでしょ」

答えたのは紗葵だ。

机に頬杖をついて携帯端末を眺めている。

「ところで、お二人は紅葉さんを迎えに行ったんでは？」

ソファに腰掛けていた空菜が振り返る。

瞳が空菜の傍に駆け寄って、その上半身によじ登り始めたが、注意するでもなく自由にさせている。

「紅葉は古城君のどこ行ったよ」

「ああ、そうですね」

空菜にとって、それは重要な情報ではなかったのだろう。紅葉に触れることなく、肩に足を掛けた瞳を掴まえて抱き抱えた。

「そのままくすぐっちゃえ」

「了解」

紗葵の提案を受けて空菜が瞳の脇をくすぐる。

「はぎゃー！ やあ、やーめーてー！」

瞳は身悶えして空菜の膝から転がり落ちて、逃げるように夏穂のところを走っていく。

「落ち着きないですね」

「あんなもんだよ、あの年頃は」

「そういうものですか」

東雲の答えに空菜は色のない視線を瞳と夏穂に向ける。しげしげと幼女を観察する空菜には、あの二人の言動が不思議に見えるのかもしれない。

空菜には子どもの時期が存在しない。人工的に生み出された彼女からすれば、瞳や夏穂の言動というものは、理解も共感もできない不可思議なものでしかなかったのだ。

昼間に元気に走り回っていた幼女二人が疲れ果てて眠りに就いた頃からお楽しみの本番だ。

誰の親の目もない家の中が一番自由に羽目を外せる。他人の目もない。姫という

立場がついて回る外は、なんだかんだ気にすることが多くて気疲れするのだ。

自家製ピザを口に運んだ東雲は、幸せそうに相好を崩す。

「これ美味い。やっぱ、ベーコン多めに入れたの正解でしょ」

「野菜食べなよ」

「分かっているって。萌葱ちゃん、人のことばっか気にしてるとなくなるよ」

「分配ってのがあってしょうが」

作ったのは五種類のピザだ。

姉妹で具材を持ち寄り、闇鍋風にトッピングして焼いたのである。

「海獣のスライスハムピザ、悪くないわね。海獣が何なのか分からないけど」

紅葉が食べたのは巨大なハムをチーズの上に乗せたピザだ。ハムの直径は三十七センチ近くはあり、一枚でピザをまるごと覆えるほどであった。

「紗葵、海獣って何肉？」

「えー、確か、シーホースじゃなかったっけ」

「もとはジビエか何かかしら」

紗葵が持ってきた「海獣のスライスハム」は、紗矢華が知人からもらってきたも

のだ。

原料となったシーホースは海上に暮らす低級の魔獣で、縄張りに入ってきた船を攻撃することがあるので、駆除の対象になることがある。

とはいえ、駆除の件数自体は多くなく、市場価値も低いため、その肉が出回ることはほとんどない。駆除した業者が経営するジビエ料理店や通販で入手するくらいしかないものだ。

「そういえば、霧葉さんはどうしてるの？」

と、東雲は紅葉に尋ねた。

「さあ？」

「さあって」

「親が何してるかなんて興味ないわよ。お父様に挨拶した後は別行動だもの。夫婦水入らずに口を挟む気はないわ」

日本で暮らしている霧葉は暁の帝国で暮らす他の皇妃に比べて古城との接点が少ない。そのため、帰国した時には、「気を遣う」ことになっているらしい。これは同じく日本で暮らす唯里にも当てはまる暗黙のルールだ。

そして、さすがに高校生になって親がいちゃついているところに同席したいとは思わない。

紅葉にとっても親子で一緒に過ごす機会は滅多にないことだが、それはそれとして気恥ずかしさのほうに勝るのであった。

その時、五人の携帯端末が一斉に鳴った。

それぞれ別々の通知音だが、内容は同じだ。

メッセーリアプリの姉妹のグループに投稿があったのである。

それは麻夜からのメッセージで、ブルーエリジウムのコテージでバーベキューをしている自撮り写真付の投稿だった。

麻夜の背後には凧と零菜、そして依頼主の千咲が映っていて、楽しみに肉を食べていた。

「なんだこれ自慢か？」

東雲が口にした言葉と同じ文言で返信する。

「ブルエリわたしも行きたかったなー。しかもコテージでお泊まり。姉さんたち役得すぎでしょ」

紗葵も唇を尖らせて、お土産を強請る投稿をした。

空菜は「お疲れ様でした」と一言呟き、萌葱と紅葉も当たり障りない反応を返す。

「ブルエリのコテージって、評判いいよね」

紗葵はよほど羨ましいと思っっているのか、麻夜と零菜が送ってきたコテージの写真を眺めている。

「ブルエリの中に泊まれるんだし、そりゃね」

「あの三人、今日はそこに泊まるんでしょう？ 大丈夫なのかしらね」

ブルーエリジウムのコテージは普通はキャンセル待ちになるほど夏休み期間中は例年争奪戦になる。そこに零菜たちが宿泊できたのは、今年のブルーエリジウムはリニューアルオープン前で、一般の客がいないからである。

コテージ内はいくつかの部屋があるから、まさか同じ部屋で寝るといふことはないだろう。

しかし、年頃の男女が一つ屋根の下というのは、如何なものか。

「凧君だし、大丈夫でしょ」

萌葱がウェットティッシュで指を拭きながら答える。

風が積極的に零菜や麻夜に手を出すとは思えない。生まれた頃から風の気質は二人との関係を知っているもので、そこを不安には思わない。

「風君はそうかもしれないけど、一緒にいるのは零菜と麻夜よ？　萌葱と東雲じゃあるまいし」

「ちよっと待ちなさい。最後のいる？」

「名誉毀損も甚だしいんだけど？」

萌葱と東雲が　口々に紅葉に抗議の意を示す。

「わたしも萌葱ちゃんも吸血経験者だからね？　紅葉ちゃんはどなのよ」

「わたしだって吸血くらいしてるわよ」

「へえ……！　え、誰？」

東雲が身を乗り出して紅葉に問う。

紅葉は日本で生活していて暁の帝国には一年に数回しか帰ってこない。風の血を吸ったという話は聞いたことがないので別の誰かということになる。

萌葱も紗葵も、興味深そうに紅葉に視線を向けた。

「別に大した話じゃないけど、ルームメイトと後輩の二人ね。可愛い娘よ」

「何だ女子か」

「いいじゃないの。将来的には誰かしら血の従者になってもらう人を探さないとダメなわけでしょう？」

「その娘たち候補ってこと？」

「さあ、どうかしら」

少しだけ笑みを浮かべて紅葉は囁く。

どこまで本気か分からないが、血の従者の問題は姉妹の誰もが将来的に直面する課題ではある。異性で恋人であれば血の伴侶等とも呼ばれるが、実際は性別に関わりなく血の従者にすることは可能だ。

永遠を共に生きることになるうえ、絶対服従が課せられるという重すぎる契約を引き受けてくれる相手となると限られるが、一国の姫が血の従者を持たないというのも、それはそれで外聞が悪い。

とある吸血鬼の貴族は、百を超える血の従者を抱え、強力な血の従者の軍団を組織しているというくらいで、血の従者は古い吸血鬼ほど、感情を抜きにして戦力、あるいは富貴の象徴として重視しているのである。

そうなってくると、第四真祖の第二世代という重要な地位にある萌葱たちも、いつかは誰かを血の従者とすることになるだろう。

本人が望まなくても、周囲が放っておかない。

彼女たちはそういう立場の吸血鬼なのだ。

「まあ、それはそれとして、確かに零菜ちゃんと麻夜ちゃんだもんなあ」と、東雲は不意に話を戻した。

「大丈夫でしょ、さすがに」

萌葱は素晴らしいつつ表情に影が差す。

「零菜姉さんは、ラッキースケベ王だし、麻夜姉さんは最近なんかちょっと雰囲気変わったよね。凧はいつもの調子だけどさ」

姉の話に耳を傾けていた紗葵が横から口を挟む。

若干辛辣なのは年頃の所為もあるだろう。基本的には親愛の裏返しだ。

「零菜は置いといて、麻夜は確かにね」

「方向性変えてきたよね。高校デビューってヤツ」

「麻夜はわたしも驚いたわ。久しぶりに会ったら、ずいぶんと雰囲気変わっていた

もの。何かあったのかしら？」

かつての麻夜はボーイッシュな雰囲気だった。装飾品を身につけることもなく、服装も中性的な格好を好んだ。

ところが、最近の麻夜は髪を伸ばして、お洒落にも気を遣っているように見えた。雰囲気の大幅な転換は、従前の麻夜とのギャップが大きく、他者には強い印象を焼き付ける。

高校入学と同時に印象や生活習慣を変える者はどこにでもいるが、麻夜はその中でも特に顕著に、意識的に変えてきたと言えるだろう。

「最近の麻夜はなあ……」

「油断ならんとしたら、麻夜ちゃんじゃないかな……万が一、凧君の血を吸うとしたら、可能性が高いのは、麻夜ちゃん」

「まあ、零菜姉さんもその場の雰囲気次第じゃ大胆なことする人だし、怪しいっちゃ怪しくない？」

「結局、どっちもギルティってことですね」

空菜の総括に全員が揃って首を縦に振った。

ブルーエリジウムで夏を謳歌する零菜たちに対抗するように、萌葱たち残留組も一夜を楽しもうと決めた。半ば当てつけではあるが、こちらは紅葉が帰ってきたという大義名分があった。

凧宅の押し入れの中には、レトロなボードゲームが押し込まれている。祖父が子どもの頃から使い続けてきた年代物もある。

紅葉が日本から持ち帰ってきた貰い物のコスプレ衣装を着ることを罰ゲームとして、人生ゲームやダイヤモンドゲームに興じた。

コスプレの衣装は全員分が用意されていた。  
ゲームの回数にも制限はない。

つまり、勝ち負けによらず最終的には全員が何かしらの衣装を身につけることになるのが、最初から決まっていた。

着用する衣装はくじで引き、袋を開けるまで中は見えない。

負けた時、どんな衣装を着ることになるか分からないので、緊張感が生まれた。序盤の人生ゲームでビリになった空菜がメイド服を着ることになったのを皮切りに、紗葵が大正時代のハイカラな着物と女袴を引き当て、萌葱がナース服、そして紅葉が婦警の制服を着ることになった。

「紅葉さあ、妙に似合ってるね」

「あらそう？ 萌葱にそう言われるの、嬉しいわ。逮捕したくなっちゃおう」

「なんでよ。手錠を回すな、危ない」

妖しく微笑みながら付属の手錠を指で回す紅葉から萌葱は距離を取る。

コスプレなのは見ての通りだが、紅葉の大人びた雰囲気と婦警の衣装の噛み合い方が絶妙だ。

「それを言ったら萌葱もすごいわよ」

「ナース服が？」

「ええ、とても似合ってる。本当に、本物そっくりのナース服なのにコスプレ感がすごいのがすごいわ」

「失礼ね。というか、そもそも好きで着てるんじゃないわよ！」

萌葱がソファの上のクッションを紅葉に投げつける。

紅葉はクッションを受け止めて、くすくす笑っている。

「あたしも紗葵みたいに可愛いのがよかったわよ」

「これって当たりだよ、多分。綺麗だし」

紗葵がひらひらと袖を振る。

黒を基調とした着物には桜の花弁が舞っている。袴はシンプルに紺色一色であり、コスプレと言いつつも、式典でも着用できそうなデザインだった。

可愛いし綺麗だが、罰ゲームのネタとしては弱い。

一人目の空菜が、ミニスカメイドというコスプレの王道だったこともあり、紗葵としては複雑な心境だった。

「東雲さん、遅いですね」

空菜が呟く。

吸血パックから直接血を啜りながら、自分の部屋のドアに視線を向ける。

最後の敗者である東雲が空菜の部屋で着替えているのである。

「どんなコスなのよ？」

「知らないわよ。わたしも開けたことないもの」

萌葱の問いに、しれっと紅葉が答えた。

コスプレ衣装を用意したのは、紅葉のルームメイトだ。

何とかして紅葉に着せようと画策したらしいが、暁の帝国に同行できなかった彼女は紅葉のコスプレを目にすることはできなかったのである。

「空菜、さっきから何飲んでんの？ 人工血液……でも、なんか違うような？」  
萌葱は空菜の吸血パックに視線を向ける。

「凧さんの血の予備です」

「凧君の血！」

「はい。念のためにと凧さんが用意してくれている冷凍血液。わたしは、まだ吸血が必要なので。一応」

空菜は主と認めた相手から吸血しなければならぬ特殊体質だ。不死の呪いで克服しつつあるものの、まだ凧の血を身体が求めている。凧が長期間空菜の元を離れる時のために、凧は定期的に血を保存していた。

「そ、そういうのがあるのね。知らなかったわ」

「冷凍庫にけっこう入ってるのかしら」

萌葱と紅葉は興味津々といった様子で空菜を見る。紗葵も無言で空菜の手元に視線を向けている。吸血鬼ならば皿の血を欲するのは自然な反応だ。

「あまりならありますよ」

「ほんと？」

「はい」

空菜は頷く。

「どの道、長期保存できないので、消費する必要はありますから」

そう言った空菜は冷凍庫から吸血パックを人数分取り出した。

凍り付いた赤黒い血がパンパンに詰まっている。

人工血液だと何も感じないが、それが皿の血だと言われると思わず生唾を飲んでしまう。

萌葱も紗葵も皿の血の味は知っている。紅葉はまだ皿から血を吸っていないが吸血経験があるので、血を味わう快楽を覚えている。

ベストは相手から直接血を吸うことで、それに勝るものはない。

人工血液は味気ないし魔力も箆っていないので、まだ不味い。

「解凍は常温？」

「常温からレンジンでもいいですけど時間がかかるので、だいたいお湯で戻しますね。熱しすぎるとダメになるので、そこだけ気をつけて」

鍋に水を入れて吸血パックを浸して火に掛ける。

空菜が血の解凍をしている間に、東雲が空菜の部屋から出てきた。

羞恥心に顔を真っ赤に染めているのは、衣装の所為だろう。

「あはははははあはは、何その格好！」

萌葱は思わず吹き出した。

「うるさい！　なんで最後の最後にこんなのが残ってるのよ！」

「知らないわよ。くじ運がなかったんじゃないかって？」

「くう……！」

東雲の格好は肌面積の多いビキニ風だ。動物をモチーフにしたんだろうか。もふもふとしたボア生地を紐で繋いでいる。

昔、日本のオタク界隈で流行ったデンジャラス・ビーストというコスプレだとう。

「東雲姉さん、それ、ほとんど紐じゃん」

「狙いすぎでしょ、可愛いけど。いや、ヤバいな、それ。写真とっていい?」

「いいわけではないでしょ! ねえ、これ脱いでいい?」

萌葱に抗議しながら東雲は紅葉に尋ねる。

「ダメよ。一日その格好ってルールじゃないの。どうせ、暑いし、涼しい格好でいいんじゃない?」

「いいわけあるか!」

約束は約束だ。

東雲の抗議が通ることはなく、東雲は投げやりにソファに腰掛ける。

「東雲さんも、血、いりますよね?」

「血?」

「凧さんの予備の血。今、解凍したんですけど」

「凧君の? マジ? いるいる」

東雲は機嫌を取り戻した。

空菜から吸血パックを受け取り、口を開ける。

各々が吸血パックから血を啜る。

吸血鬼の家庭では、時折見られる光景ではある。

「うーん、悪くない。人工より全然いい」

というのは萌葱の評価だ。

「生のほうがいいけど、風の血って感じ。ちょっと、魔力が抜けてるのが残念だけ  
ど」

紗葵も血を舌の上で転がして分析している。

頻繁に風から血を吸うわけではないが、何度か血を吸っているので違いが分かる。

「紅葉はどんなん？ あたしたちは風君の血しか知らないんだけど、あんたとし  
ては」

「いいわね。言葉にするのは難しいけど、魔力もしっかり残ってるようだし、身体  
に染み込んでくる感じもある。これで冷凍保存で何日かしたものだっていうのな  
ら、人工よりずっといいに決まってるわね」

もちろん、最もいいのは風から直接吸血することだ。

魔力の無駄もないし、人肌の温かさもある。風自身の体温も息づかいも匂いも感じられるので、単純に血を味わうだけでは得られない多幸感が一緒に押し寄せてくる。吸血パックの血液だと、そういった肌の温もりがないので物足りなく思えるのだった。

一通りボードゲームをやり尽くし、乱雑に広げた駄菓子を適当に啄みながら紅葉は紗葵と雑談をしていた。

姉妹全員で一緒にゲームを楽しんでいたかと思えば、飽きればそれぞれがバラバラに活動し始める。堅苦しいことは何もない、自由気ままな空間は気を張る必要もなく楽だ。

紅葉は普段から気を引き締めて生活しているというほどではないが、日本では全寮制の所謂お嬢様学校に通っている。

授業は難解で進みが早く、校則も厳しい。二昔くらい前の時代の空気感が漂っているとすら皮肉を込めて評価されるくらいの化石染みた学校だ。

それを苦に思うことはないが、こうして実家に戻ってくると羽を伸ばすという言葉の意味が実感できる。

ダイニングチェアに腰掛けて頬杖を突いている紅葉は、視線を壁掛けのテレビに向ける。

鮮やかな100インチモニターは、紅葉の寮の部屋に備え付けられているテレビとは比較にならない高画質かつ高音質だ。

テレビと紅葉の間にはソファがあって、萌葱と東雲が並んでドラマを見ていた。放送されているのは日本のドラマだ。

近年希に見る高視聴率をたたき出した有名ドラマで、暁の帝国では半年遅れで放送されている。

青春恋愛ドラマで、原作は少女漫画だ。

焦れたい恋愛模様にも、十代を中心に高評価を得ていると話題だ。二期の制作も決定しているらしい。

そんな恋愛ドラマは、今まさにクライマックスシーンを迎えていて、主人公がヒロインに勇気を振り絞って告白したところであった。

「きゃー!」

黄色い歓声とはまさにこのことだ。

萌葱と東雲が抱き合いながらドラマに魅入っている。

「言った言った」

「あれ、いい。あの後ろからのヤツ」

「分かる。イケメンにあれされたい」

「後ろからぎゅって」

「ねー」

東雲と萌葱が口々にドラマの展開に語り合う。

彼女たちにとっても、このドラマはずいぶんと琴線に触れたようで、毎週必ず視聴しているのだ。

主人公がヒロインを後ろから抱き締めて告白するシーンは、それまでの十話の積み重ねもあり、満を持しての告白というだけあって、ずっと応援してきた視聴者を満足させるものだ。

「楽しそうね、あなたたち」

「紅葉はこれ見てないの？」

「ルームメイトが見てたわね。わたしも見てたけど、あまり印象に残らなかったわね」

萌葱の問いに紅葉が答える。

「日本でもけっこう流行ってたんでしょ」

「そうみたいね。真剣に見ると面白いんでしょうけど、最近ドラマを見続けるエネルギーないのよね」

「年寄りみたいなこと言うね」

「失礼ね。あなたより年下よ？」

「一ヶ月くらいしか離れてないでしょ！」

萌葱の抗議を笑って受け流す紅葉は、皿の上のチョコレートに手を伸ばす。

一年で数日しか過ごすことのない実家だが、こうして戻ってくると、毎日ここで生活しているかのような安堵感がある。

気心の知れた家族の中ということもあるのだろう。

学校の友人が悪いわけではないが、どこかしら姫ということとで壁を作ってしまった

ている部分もある。

その点、萌葱たちは全員が同じような立場であり、血の繋がった家族だ。

あまり意識していないが、どうもこの違いは大きいようで、紅葉自身、いつもよりも気分が高揚していることを自覚していた。

この調子で全員が夜更かしし、凧たちが帰ってくるまでコスプレしたまま過ごしていたのだった。

---

ひさしぶりに更新しました。

## 第六部 一話

夏休みも中盤に差し掛かり、連日猛暑日を記録する暁の帝国。長らく叫ばれ続けている地球温暖化の影響か、かつての同胞である日本では、各地で最高気温の記録更新が話題になる中、魔導科学の粋を結集して建造された人工島をベースとする暁の帝国は、南国でありながらも人口密集地については日本よりも平均気温が若干低い状態を維持していた。

コンクリートや金属が多用された人工島だが、同時に様々な呪術や最先端科学技術が街中に張り巡らされている。

一見するとコンクリートだが、熱を吸収しにくい特殊なコーティングが施されているというのは序の口だ。

資源に乏しい暁の帝国は太陽光をエネルギーとして効率よく利用するための技術開発には余念がない。その過程で、太陽光による弊害を防ぐ技術も開発されている。

技術大国らしく、こうした技術は世界中に輸出されている。大都市であればある

ほどに、ヒートアイランド現象を初めとする都市化の悪影響を受けやすくなる。九十九パーセントが人工物の暁の帝国は、都市化に伴う環境問題を研究する上でも重要なサンプルであり、猛暑対策は世界をリードする。

だが、やはりそうはいつでもものには限度がある。

今日の最高気温は中央行政区で三十六度である。耐熱コーティングが施された都市部でこれなので、もしもこの技術が確立されていなければ、四十度を超えていただろう。

確かに、何も無いよりはマシだが真夏日に相当する気温をたたき出しているので暑いものは暑い。

南国の人工島の宿命ではある。連日、どこの家庭や施設でも冷房をガンガン付けていなければ、熱中症で死者が出ることもなるだろう。

それもあって、公共施設には冷房がフル稼働中だが、加減を知らないのか管理者が暑がりなのか、異様に冷房が効いていて寒いくらいだというのは珍しい話ではなかった。

帝国立南呪術試験場の大ホールもそんな状況で、夏場なので薄着でやってきた風

は、時折身震いして鳥肌が立つ二の腕を擦っている。

帝国内でも最大級の呪術関連施設の大ホールは、主に呪術関連の講演会や研究発表の場として利用される。

特別な理由もなく、風が夏休みの貴重な一日を利用してここにいるのは、攻魔官の資格に絡む講演があるからだ。

中学校を卒業して攻魔師の資格を得た凧だが、まだまだ先は長い。

国家攻魔官の資格は将来的に必要だろう。それには大学で専門課程を修了する必要があるので、当面の目標は国家攻魔官の資格が取れる学部のある大学へ進学だ。勉強は嫌いなほうだが、資格を取らなければ目標の仕事ができないのだから、仕方がない。

今、壇上には那月がいる。

半円形の客席には、現役の攻魔師だけでなく、将来攻魔師を目指す少年少女もたくさん集まっている。攻魔師自体、難関かつ生まれ持った才能に依拠する職業なので、なかなかこれを仕事にする者は少ないのだが、攻魔師という言葉ができる前から魔族と戦ってきた人間の家系であったり、強力な魔力を生まれつき持っている魔

族は、この道を初めから志すという者もいる。そういう観点で見ると、伝統芸能に近い世界だ。

スポットライトの下で那月が淡々とした語り口で、過去の魔導犯罪について語っている。

おなじみのゴシッククロリータのファッションは、ここではあまりにも場違いだが、南宮那月を知るものなら、いちいち指摘するようなことはしない。

彼女の實力と実績は、誰の目から見ても明らかだ。

世界を見渡しても、真祖と正面から戦える個人戦力など彼女くらいしか存在しない。

専門性に特化した呪術関連の講演会というのは、普通は大入り満員とは行かないし、大ホールを使うこともまずないが、那月の講演となると話は別だ。

大ホールの四分の三は席が埋まっている。

これは、この手の講演では希有な客入りと言えるだろう。

講演は午前九時から十二時の三時間、途中に二十分の休憩を挟んで行われた。

凧は、タイミングを見計らって講師控室のドアをノックする。許可を得てから、控室に入った。

那月はパイプ椅子に腰掛けて、タブレット端末を眺めているところだった。

「失礼します」

「来たか、馬鹿弟子」

「イマドキ、そんな呼び方余所ですと何を言われるか分かりませんよ」

「言うようになったじゃないか。まあ、いい。わたしの講演で居眠りしなかったよ  
うだから、それでチャラにしてやろう」

「どうやら凧のことはチェックしていたらしい。」

ここに来て講演を聴くよう課題を出してきたのは那月だ。自分で出した課題の進捗状況は、きちんと把握しているのだろう。

那月は言葉遣いこそ上から目線だが、面倒見は悪くないし、目配りはしっかりしている。当然、真面目に取り組んでいるかどうかどうかも見ている。

「これ、差し入れです」

「ん」

ビニール袋に入れたジュースと和菓子詰め合わせを那月に渡す。

高価なものではないが、贈答用として和菓子専門店で販売されていたものなので問題はないうらう。世界的に有名な攻魔師への贈りものとしては安物過ぎるかもしれないが、学生の懐事情ではこんなものだろう。

「アスタルテさんはいないんですね」

「アスタルテには買い出しに行かせた。お前がもう少し早く来ていれば、その必要もなかったんだが、間が悪かったな」

「俺を足にしようとしてますよね。というか、自分が転移すればいいだけなのではない？」

那月が得意とする空間転移は、最高難度の呪術だ。高度な計算を必要とする上に魔力の消費も激しい。入念な準備が必要になる大技なのだが、那月はこれを片手間で発動させる。世界広しと雖も、那月ほど空間転移を扱える者は他にいない。

「知らないのか？ 転移は私用では使えないんだぞ？」

「いや、知ってますけど」

日常生活では呪術は魔力を行使することにも制限がかかる。

第四真祖を頂点に戴く夜の帝国ドミニオンであっても、人口に占める魔族や魔術師の割合は低く、大半が普通の人間なのだ。

魔力そのものが普通の人間からしたら脅威なので、共存共栄を図る上で、こうした異能は使用制限の対象となる。

現代社会で魔力を有効活用しようと思えば、攻魔師や魔導技師のような専門職に就くほかないのだ。

「ふむ」

那月は手元のタブレットに視線を戻した。

「何見てんですか？」

「夏限定のガトーショコラの懸賞が当たった」

「懸賞なんてやってるんですね」

「アスタルテが応募したものだがな。ちょうどいい。夙。この帰りに店に寄って、現物を交換してこい」

「俺ですか？」

「わたしはまだ仕事がある。アスタルテもな。開店時間中には取りに行けないか

ら、弟子に行かせるのは仕方ないことだろうか？」

「師匠の日常生活のお世話とか昔の徒弟制じゃないんですから」

そもそも那月の弟子ならば、実のところ他にもいる。

彼女ほどの実力者には後進の育成も期待されるものだ。

とはいえ、高校教師の傍らで国家攻魔官として働くという多忙さなので、風を最後に弟子を取らなくなった。卒業生は十人程度であろうか。現役は風を含めて三人で、その中には麻夜もいる。

「まあ、午後は暇ですし、取りに行くのはいいんですけど引換券とか」  
そう言った傍から、風の携帯端末が鳴った。

那月からメッセージが届いていて、引換券のURLが張ってあった。

「なるほど、了解しました。で、引き換えたらどうするんです？」

「配送サービスで明日の午前九時にわたしの自宅住所を指定しろ」

「分かりました。……ここ、聞いたことありますよ」

「何だ、意外だな。スイーツ店など、興味ないと思っていたが」

「興味ないですけど、ネットで見ました」

ネットでの流行廃りは多々あることで、ブームが落ち着いてからも安定経営できるかどうかが重要だ。この店ができたのはほんの二、三ヶ月前で、駅ビルの地下に広がる商店街に出店しているので立地は悪くないのではないか。

学生が学校帰りに立ち寄って楽しめる程度の値段設定なので、若者中心に噂になっっている。

麻夜あたりはチェックしていそうだ。

「じゃあ、ちゃっちゃと行って交換してきますよ」

「ああ。あまり遅くなると、また混むからな」

時間は一時過ぎで、昼食を終えた頃だろう。今から行くと二時前には店に着きそうなので、時間的にはちょうどいい。

思わぬ形で余計な仕事を背負い込んだ風だったが、那月相手に言い訳は通用しない。午後に急ぎの用事がないということもあって、素直にお使いに勤しむことにした。



噂の店は「エルミタージュ」といった。ガトーショコラは看板メニューで、開店三ヶ月記念で抽選で百名にプレゼントするという企画だったらしい。

南呪術試験場からはバスとモノレールで四十分弱。

中央行政区よりの第一南地区セントラル・ゾーンにある柳葉駅の地下街に出店しているこぢんまりとした店である。

この辺りはベッドタウンとして発展してきたこともあり、柳葉駅周辺は開発が進んで近年人口が増加傾向にあり、その流れで大きなショッピングモールも建設されている絶賛都市開発中のエリアだ。

その潮流のど真ん中にあるのが駅ビルの改修工事で、それが終わったのが昨年だ。エルミタージュはそんな新生した駅ビルに新規出店した新進気鋭の洋菓子店なのだった。

エスカレーターを下りて地下二階の食べ歩きエリアにやってくる。

サッカーのスタジアムがまるごと入りそうな床面積の中に、多くの店が軒を連ねている。地下二階は若者向けを狙ったコンセプトの店が大半だ。甘い匂いがそこ

かしこから漂ってくるのは、クレープ屋やアイスクリーム屋、パン屋にカフェのチェーン店と甘い物に溢れているからである。さながら、甘味の博覧会だ。

建物の中は外に比べて空調が整っていて涼しいということも利点だ。

夏休みで暇を持て余した学生たちは、こうしたショッピングモールに流入する。

ここは駅ビルの地下なので、部活や塾帰りの学生の利用率も高い。

午後二時過ぎという半端な時間帯でも、学生、特に女子が多いのも、狙い通りの結果が出ている証だろう。

この駅の利用者だけでなく、区外からもこの地下街を目的に訪れる客も多そうだ。今、各地で街の再開発が進んでいる。

若者狙いのショッピングモールを展開する地域は多く、モノレールの駅がその核を担っている。

駅ビルやその周囲にショッピングモールや学習塾を誘致し、その外周部に住宅地を整備するという方向性で、駅同士はモノレールで繋がるので、学生たちを中心に駅から駅に活気を伝播しようという試みである。

有力な繁華街が名乗りを上げ、この連動プロジェクトに参画しているらしい。

「結構いるな」

エルミタージュの外観は小さな喫茶店である。

地下二階フロアの奥まったところにあり、正面はラーメン屋で隣は学習塾という立地だ。

塾の夏期講習を終えた学生が、小腹を空かせて立ち寄るといふ光景が目に見えかぶ。そして、覗いてみると、この時間でもそれなりの客入りだ。

昼食を終えて、そのままデザートを食べながら駄弁っているのだろうか。

と、そこでふと後ろを振り返ると、見知った顔があった。

十メートルほど後ろに、どういうわけか零菜がいる。

制服ではないので学校帰りというわけではなさそうだ。

凧と視線があった零菜はそのままトコトコとこちらに歩いてくる。

「やっぱり凧君だ。こんなとこにいるの珍しいね」

「それはこっちの台詞なんだが……一人か？」

「まあね。訓練終わり、駅前までは送ってもらったんだよ。今はGPSもあるしね」

零菜は一国の皇女で、攻魔師の護衛が付くことが多い。

ただ本人の実力も身についてきて、高校生に上がって自由に動けるようになった零菜個人の護衛をガチガチに固めるというのも難しいということで、今はGPSによる居場所の把握に留める場合が多くなってきたらしい。

もちろん、それは魔導科学が発展した暁の帝国だからこそできる護衛のあり方だ。零菜に異常があれば、その居場所を即座に感知して救援を出せるし、零菜が一人で移動できる範囲や時間にも条件がある。

そこは、やはり一般人とは扱いが別になるのだ。

「で、凧君はここで何してんの？ ラーメン食べてた？」

零菜は凧の背後のラーメン屋に目を向けた。

「俺が用事あんのはこっち」

と、凧はエルミタージュを顎でしゃくる。

「南宮教官にお使いをな」

「ああ、そういうこと。そういえば、今日は那月ちゃんの講演会だったね」

「終わって挨拶に行ったら、ここにガトーショコラを取りに行けだってよ」

「那月ちゃんらしい横暴さだねえ」

零菜は凧の空いた手を見る。

「まだ買ってない？」

「ちようど今来たところだ。買うんじゃない。交換な。アスタルテさんが懸賞当たったって」

「へえ、じゃあ、これからなんだ」

「そうそう」

「ここさ、結構評判なんだよね。麻夜ちゃんがさ、ガトーショコラがいいって言ってたんだよ」

「麻夜はチェック済みだったか。まあ、そうだろうな」

麻夜は甘い物に目がない。

こういった店に一番詳しいのは、麻夜で間違いない。

零菜が露骨に店内を伺っているの、凧は苦笑した。

「偵察していく？」

「うん」

二つ返事で零菜は頷いた。

店の中は思ったよりも大きい。

縦長のL字構造だったようで、入り口から見えない部分も多かったのだ。

駅地下ということもあり、景色を楽しむことはできないが、白と木の素朴な色合いをベースにした内装は、地下の閉塞感を和らげ、落ち着いた雰囲気を出している。凧と零菜は、一番奥のテーブル席に座った。

備え付けのタブレットから注文するスタイルで、支払いもセルフレジだ。

注文方法の説明は店員がするが、それ以外に店員とコミュニケーションを取ることはなさそうだ。

「ガトーショコラだけで何種類あんだここ」

タブレットをテーブルの上に置いてメニューを表示すると、想像以上に品目が多い。

特にガトーショコラへの熱の入れようは執着すら感じさせるほどだ。

「大中小、大きさも選べるんだ。へえー。さすが、麻夜ちゃんが気にするだけあるね。フルーツミックス、ホイップたっぷり、ベリー三種盛り、ええ、どうしょっか

なー」

零菜は楽しげに画面をスワイプする。

ぱっと見、ガトーショコラかそれ以外かで項目が分かれていることから、この店の推しはガトーショコラなのは間違いない。

ここまでガトーショコラばかりだと、それ以外を頼むのが申し訳なくなってしまうし、他の客を盗み見てもガトーショコラ以外食べている客はいなそうさだ。

「ほんと、多いな。ガトーショコラ専門店かここは」

「こういうのって見るだけでも楽しいよね」

「分かる。ん、なんだ白いのもあんのか」

「ホワイトガトーショコラだね。こっちもいっぱいあるんだ」

「三十はあるんじゃないか」

大きさの別を除いても、ずいぶんと品目が多い。

よく見るとベースになっっているガトーショコラは同じで、上に乗せるフルーツで違いを出しているということだろうか。

「凧君、決めた？」

「俺はビターショコラチーズケーキ」

風が選んだのはカカオ80のチョコを使ったガトーショコラとチーズケーキを組み合わせたものだ。下半分がチーズケーキになっている。ものすごくカロリーが高そうだが、風のエネルギー消費量を考えれば何も問題ない。

「野菜は？」

「フルーツ盛り合わせカップケーキ」

それは一口サイズのガトーショコラにブルーベリーやオレンジ、バナナ、いちごといったフルーツを乗せた六種のカップケーキである。

お手頃価格で食べ比べができる人気商品であった。

本当は複数人で楽しむものではないかと思ったが口にするのはやめておいた。

那月のお使いがあるので、あまり店に長居はできない。

明日の午前一番に届くように時間指定をして配送しなければならぬ。それも食品となると、区内の配送しか受け付けてもらえないので、中央行政区の大手運送会

社の直営店に立ち寄った。

那月にメールをして、確かに発送手続きをした証拠写真も添付した。これで届かなくても風には責は及ばない。トラブルが起きて八つ当たりを喰らう可能性は、万に一つはあるかもしれないが、その時はその時だ。

ここから駅に戻ってモノレールに乗り、自宅マンションに帰る。バスでもいいが、少し遠回りになる。この辺りは以前に風が暮らしていたマンションの近くのなで、少し懐かしい気分だ。引越してちょうど一年が経つが、公園のベンチの色が変わっていたり、道路が綺麗になっていたりと少しずつ変化しているようだ。

少し日が西に傾いてきた。

零菜は黒い日傘を差しているが、それでも暑いことには変わらない。

「さすがに暑いな。用事も終わったし、とっとと帰ろうぜ」

「そうだね。那月ちゃんみたいに転移できたら楽なのにね」

「日常では使わないらしいぞ。さっき言ってた」

「嘘だあ、バンバン使ってるでしょ。人が見てないところで」

「だよなあ」

この辺りの会話も本人に聞かれると後日大変な目に合うのだろうが、とりとめのない愚痴は鬼の居ぬ間にしかできないのだ。

土台から作られた街なので、碁盤の目状に整地された区画ばかりだ。

この周辺は特に区画整理された四十年前に建てられた集合住宅が多い。同じ見ただ目で同じように並んでいる古い団地である。

太陽が九階建てマンションの影に隠れる。

直射日光が遮られるだけで体感温度はずいぶんと変わるものだ。

不意に、冷たい風が吹いた。空を見上げると黒い雲が流れ来て、太陽を覆い隠している。ゴロゴロと雷も聞こえてきた。

「これ、ヤバイ。降るわ」

「え、きゃッ」

零菜が小さく悲鳴を上げた。

ごう、と突風が吹いて零菜の日傘が壊れてしまった。

「ええ、うそお」

「一気にいったな」

「これ買ったばかりなんだけど」

ショックを受けた様子の零菜は、ため息をついた。

だが、そんな零菜の感傷に思いを巡らす余裕はなかった。

風が強くなり、雨も降り始めた。

近くに落雷があったらしく、爆発かと思うほどの雷鳴が耳朵を打つ。

「うちまで走るぞ！」

「うちって!？」

「そこ！」

風が指差すのは、以前住んでいたマンションだ。

大粒の雨が強風に乗って吹き付けてくる。

靴の中まで水が入って気持ちが悪い。

風は零菜と一緒にかつて暮らした部屋の前にやって来た。

「使えるの？」

「まだ、契約はしてるんだよ。母さんの荷物とか、今の家あっちに運んでないのもあるからな」

そう言って鍵を開けて、中に入った。

さすがに暮らしてないので、閑散としているが、電気も水道も通っているので、ざとなればこっちでも生活はできる。

「まあ、雨が止むまでここに避難だな……ん」

と、零菜を見た凧が慌てて視線を逸らす。

零菜の服が濡れて肌に張り付き、うっすらと下着が見えていた。

凧の目線ではどうしても、自己主張の強い零菜の一部分が目に入ってしまった。

それに気づいた零菜は顔を紅くして、両手で前を隠しながら凧に抗議する。

「こんなの見ないでよ」

「見、えたのは不可抗力だから」

「知ってる。でも恥ずかしいからもうこっち見ちゃダメ。今日の可愛くない」

「……十分に可愛いと思うが」

「んッ」

零菜に小突かれて凧は口を噤む。

零菜の下着は特徴のない桃色の布地だ。ブラウス越しなので細かい図柄は分から

ないが、これといって凝った意匠ではなさそうだ。

下着を風に見られることを前提に選んで来たわけではない。

零菜からすれば、これも不可抗力だ。

状況が状況なので、服越しでも見られたことは仕方がないが、評価されるような見方をされるのは恥ずかしい。

「とりあえず、タオル取ってくる。後、シャワー使っていいから」

「え、シャワー!?!」

「変な勘ぐりすんな。その服ずっと着てるわけにはいかないだろ」

「あ、うん、そうだね。風君は?」

「俺はまあ、何でもいい」

「家主は風君だし、風君最初がいいと思うな」

「零菜びしょ濡れで放置するのは無理だろ。着替えだって俺が探さないとダメなわけだしさ」

風が先にシャワーを浴びたところで、零菜の着替えはないのだから濡れたまま待たされることになる。零菜が先にシャワーを浴びればその間に風は自分の昔の服を

引っ張り出して着替えることができるし零菜の分も調達できる。

もちろん、シャワー前に全部用意することもできるが、時間の無駄は否めない。

「……分かった。じゃあ、お言葉に甘えて」

零菜はしぶしぶ風の申し出を受け入れた。

ずぶ濡れのままいつまでも玄関で口論しても何も始まらない。

「おじゃましまーす」

玄関を上がった零菜は、雨水の足跡を残しながらまっすぐ脱衣所に入ってしまった。

雨風が窓を打つ音が続いている。

ゲリラ豪雨は長時間続くものではない。だが、時間雨量こそ落ち着きはしたものの、そのまま雨雲が居座っているらしく、雨雲レーダーの予測を見てももうしばらくは雨が続きそうだ。

「風君、ドライヤー使う？」

脱衣所を出た風にリビングにいた零菜が声をかける。

彼女は一足先にシャワーを浴びていて、風がシャワーを浴びている間にドライ

ヤーを使っていたのだ。

「ああ、パス」

「はい」

零菜からドライヤーを受け取った凧は、そのまま脱衣所に戻って髪を乾かす。

本来、脱衣所で使うものだ。

零菜がリビングに持って行ったのは、脱衣所を使う凧と鉢合わせないようにするためだ。

零菜は髪が長いので時間が掛かったが、凧はそうでもない。一、二分もあれば十分に乾く。

「やっぱ、男の子って髪乾くの早いよね」

ドライヤーを片付けて戻ってきた凧に零菜が言った。

零菜の場合は単に乾かすだけでなく、ヘアオイルにも気を遣っている。

射干玉の髪の艶を維持するために、それなりに努力しているのである。

一方で、凧は髪について全くと言っていいほど気にしていない。いっそ、雑ですらある。風呂上がりのドライヤーも乾けばいいという程度であった。

「短いからな。坊主なら、そもそもドライヤーいらんし」

「まあ、坊主の人はそうかもね。野球部とか」

「彩海の野球部も坊主ばっかなのか」

「そうだね。あ、でも九月から坊主禁止にするらしいよ」

「なんで？」

「さあ。でも、坊主が嫌で野球しない人もいるらしいし。部員減ってるっぽいからね」

「彩海は勉強も大変だからな。スポ専もあるんだったか」

「野球、サッカー、バスケ、卓球、バドミントンもかな。推薦枠があるのは。でもテストは同じ内容だって。赤点の基準が違うって聞いたよ」

「さすが私立の進学校。うちはスポ専がそもそももないな」

「中央って何が強いんだっけ」

「スポーツは全然聞かんなあ。将棋は強いみたいだけど、あそこも部員が五人くらいしかいなかったな」

零菜は床にぺたんと座って、ストレッチしている。

日常的に身体を動かしているだけあって、ずいぶんと柔らかい。

片足前屈をしている零菜の格好は、白いTシャツと黒い短パンだ。どちらも風が中学生の頃に使っていたもので、昔のものであっても零菜にとっては大きめだ。この家に女性用の服がなかったというのが、ちょっととした問題だった。

風沙は何年も海外暮らしで、空菜もここではほとんど暮らしていない。荷物は全部、引っ越しの時に持って出た。今あるのは、持ち出す必要のなかった風の衣服だけで、数えるくらいしかない。

「……何、変なところある？」

「いや、別に」

「えー、何」

風の視線に気づいたのか零菜が尋ねてくる。

風の目線からだど、襟から零菜の身体が見えてしまいそうだ。

何より、自分の服を零菜が着ているというのが、やたら興奮する。

ということだ、これはこれで困ったことになった。

「雨、止みそうにないね」

と、零菜が窓の外を見て言う。

大粒の雨は、未だに窓ガラスを打ち付けていて、空を覆う分厚い黒雲のために夕暮れ前なのに薄暗い。時折、雲の中で雷光が明滅している。久しぶりに荒れた天気だ。台風の時期はこれからなのだが、その前にこれは先が思いやられる。

「あまり、続くんなら迎えを頼むか、傘買いに行くしかないな。レーダーだと、あと二……三時間で雨雲抜けそうだけど……」

「コンビニ近い？」

「走れば二、三分ってとこ」

「じゃあ、もうちょっと待とうよ。せっかくシャワー浴びたのに傘買いに行って濡れるんじゃ本末転倒だよ」

「まあ、だよな」

凧はソファに座って、背もたれに首を預ける。

午前中に那月の講演を聴講してから、動き回っていたこともあって、ようやく一息ついたという感じだ。土砂降りに襲われるというのは想定外で、まだこれから家に帰らないと行けないという課題が残っているのだが。

「凧君、テレビってなかったっけ」

と、零菜が尋ねてくる。

ソファの前にテーブルがあって、その向こうにテレビという配置だったが、今はテレビがあったところに何も無い。

「あれ、引っ越しの時に売った」

「そうなの？」

「ちよつと古かったからな」

「へー。あんま埃もないのは、時々帰ってきてるから？」

「一応ね。月一くらいで掃除しに来てる。物置代わりにもしてるし。だから、電気と水道が動いてんだよね」

この部屋の管理ができるのは凧と空菜くらいだが、空菜自身の私物はもうここにはないので、凧が気が向いたときに来て掃除をするというくらいだ。それでも、誰も管理していない部屋に比べると劣化は少ない。月に一度でも人の手が入るというのは重要なことだ。

そのおかげで、今日のような緊急避難ができたので、無駄にはならなかった。

ストレッチを終えた零菜は凧の隣に腰を下ろす。ポスンと音を立て、スプリングが上下に揺れる。

テレビはないし、マンガも小説もパソコンも娯楽に使えるものは今のマンションに引き上げている。この部屋は避難所としては使えるが、日常生活のために必要なものはない。電気は通っているが、携帯端末の充電器がないので、ネットサーフィンもゲームも長時間はできない。これから状況次第では迎えを呼ぶなりタクシーを呼ぶなりするのも、充電切れではできなくなる。

特に会話もなく、ぼうっと十分程度座っている。

「凧君」

「んー？」

「何かある？」

「何かあって？」

「食べるものとか」

「ない。水道水くらい」

「だよねえ」

零菜は暇そうに横になって肘掛けに肘を突いて体勢を崩した。

外では絶対に人に見せない気の抜けた姿勢だ。

あまり零菜のほうを見ると、あられもない姿すぎて目のやり場に困るので、あえて零菜を見ないようにしていると、Tシャツの袖が引かれた。

「思った。血い吸えば暇つぶしになるんじゃない？」

「それ暇つぶしになる？」

「……ダメ？」

起き上がった零菜が上目遣いで聞いてくる。

これは反則だ。

特に今は大きめのTシャツのせいで、胸元が見える。本人にどこまで自覚があるのか分からないが、今の零菜は日常生活感がありながら、今まで見せたことのない姿をしているのだ。

「ダメじゃない」

誘惑に屈した風は頷くほかなかった。

「やった。ふふふ、みんなには悪いけど、ちょっと多めにもらっちゃおっかな」

凧の血を吸うのは慣れたものということか。文字通り目の色を変えて、身を乗り出してくる。

「シャツの替え、もうないから汚さないでくれよ」

「大丈夫、上手く吸うから」

下手な吸血だと血が零れて服が汚れることもある。唇に血がついていて、気づかずに他の場所を汚してしまふという場合もある。血のキスマークと呼ばれる失敗談である。

零菜は凧の血を吸おうと首筋に唇を寄せて、少しもたつく。

「何してんの?」

「体勢、どうしようかと」

牙を突き立てると決めたとこに噛みつきたいのだが、上手く身体を支えられない。

「正面からがいいや。凧君、こっち向いて」

「はい」

零菜に言われたとおりに凧は身体を横に向ける。ソファの上で横になる体勢だ。

それで零菜が尻の上に乗って、しがみついてくる。

シャワー上がりの零菜のしっとりとした髪が頬をくすぐる。とてもいい匂いで、これだけで興奮してしまうし、柔らかくしなやかな零菜の肢体がひっしと密着しているから、さらに興奮する要素が揃っている。血を吸われるのは慣れていて。何だったら空菜に毎日吸われているので、作業のようなどころもあるが、今日はいつもと条件が違い過ぎた。

零菜もいつもより積極的だ。それは、尻と同様に普段とは違う環境、雰囲気にとられているといふことが大きかった。

邪魔者が入ってくる余地のない場所。それも男の部屋に連れ込まれる格好になっているし、男物の服を借りている。

実のところ、割と最初のほうから吸血衝動が出ていたし、血を吸うことしか考えられなかった。

それでも、理性は頑張っている方だ。

密着して準備万端。いつでも噛めるところまで来たら、今更後戻りは不可能だ。大胆に誘いすぎたと反省しながら、零菜は尻の首を噛む。

いつも通りに吸血。

牙を使って二つの穴を皮膚に開けて、滲み出る血を吸い出す。じわじわと鉄鏝にも似た味わいが舌の上に広がって、それと同時に風の霊力が零菜の中に入ってくる。これが堪らない。身体中の細胞が、歓喜するような快感だ。吸血鬼として上質な霊媒から血を得ているという喜びと意中の男から血を吸っている喜び。強烈な多幸福感はやみつきになる。風の血は姉妹みんなが求めているものでもあるので、それを独り占めしているという優越感もあった。

「はー……最高」

零菜は風にしがみつきながら、感嘆のため息をついた。

唇を離したところに牙の痕跡がある。そこから、僅かに血が滲む。零すと服が汚れるので、舐め取った。

「満足した？」

風は聞いた。

「え、まだ」

と、零菜は答える。

「だって、雨止んでないじゃん」

何時間吸血する気なのかと問おうとしたら、零菜は凧の首を噛んだ。甘い痺れるような痛みが凧の問いを封殺する。

零菜はじつくりといつもより時間をかけて血を啜る。時折、熱い吐息を漏らして小休止を挟みながら、噛むところをずらして吸血を再開する。

部屋の中は風雨と衣擦れの音以外に何も無い。僅かな環境音しかないのは、無音以上に静かに感じる。

しばらくそうしてから、零菜が身体を起こした。ふう、と一息ついて、何かに気づいたように凧の顔を覗き込む。

「凧君、目、赤いよ」

「マジ？」

「うん。すごい、初めて見た」

凧は自分の目が赤くなっている自覚はない。吸血鬼は気持ちの昂ぶりに合わせて目を赤くする。今の零菜がそうなっているように。

凧の目が赤くなるということは、吸血鬼化が進んでいるということなのだろうか。

「凧君さ、してみる？」

零菜は髪を耳に掻き上げて首を見せた。

吸血衝動のトリガーは性欲だ。ただでさえ魅力的な零菜が、白い首筋を見せたら凧の衝動は抑えようがなくなる。

「吸血鬼は血を吸われるの嫌がるんじゃないの？」

「……普通はそうだけど、凧君の血はいっぱいもらってるし。それに、東雲ちゃんの血も吸ったんでしょ？」

零菜が言うのはクリスマスの事件の時のことだ。凧は東雲に誘われて、彼女の血を吸った。初めての吸血衝動のままに東雲に流れる第四真祖に由来する力を取り込んだのだ。

ただ、一般に吸血鬼は吸血されるのを嫌う。それは吸血という行為は単なる愛情表現や魔力の補給というだけでなく、相手の血に宿る力を吸収する行為でもあるからだ。特に吸血鬼の場合は、吸血によって存在そのものを上書きオーバーライトされることがある。これは大きなリスクなのだ。だが、それも絶対に発生するものではない。そのつもりで吸血しなければ問題は無い。ただ血を吸い、衝動を満たすことだけが目的

なら、恐れることはない。

今日の零菜は積極的だ。

この状況に浮かれて舞い上がっているのである。そして、凧も同じだった。

「じゃあ、零菜。噛ませてもらうぞ」

「う、うん」

零菜が差し出した首筋に凧は噛みついた。不思議な感覚だ。噛みついてどうすればいいのかわかる。息をするのと同じだ。零菜の香りと体温を感じながら彼女の首から熱い血が口の中に溶け込んでくる。

「はう、い、っ……」

「痛かった？」

「ん、大丈夫。びっくりしただけ。続けていいよ」

そうは言うが凧も二度目だ。

普段は血を吸われる側なので勝手が分からない。手探り状態ではあるが、感覚は掴めたので、零菜を抱き寄せて首を噛む。

耳元で零菜の小さな声と吐息が聞こえる。

吸血される快感は知っているが、吸血する側になるとこれはこれで別の快感があつて興奮する。今までは受動的だったのが能動的にアプローチする側になるのだ。

そもそも相手の首を噛むという行為自体、吸血に関係なく特殊な行為である。「血を吸う」のと「噛む」のでそれぞれ別の興奮要素があるということに、凧は今気づいた。

零菜の血を吸ったからか、活力が湧いてくる。

吸血鬼化の証だ。

何となく疲れを感じていたのが吹き飛んだ。

少ししてから、零菜は顔を上げた。

「凧君、交代」

瞳を潤ませた零菜は頬を紅潮させていた。

そして、そのまま凧の首に顔を埋める。ちくりとした痛みの後にぞくぞくする危険な気持ちよさがある。

こうして密着していると零菜の首が無防備なのが分かる。

零菜が凧の首を噛んでいる時に凧も零菜の首を噛んだ。

「は、ひゃん!？」

可愛く零菜が声を上げる。

「ちよっと、今はわたしが吸ってるのに」

「まだ、俺噛んでる途中だった」

「あ、もう……!! んく……がぶ！」

「いてえ、おい」

「んー」

凧の抗議に耳を貸さず零菜は噛みついて離れない。こうしている間にも血と魔力が少しずつ零菜に流れていくので、こうなっては凧もやり返すほかない。零菜の首の付け根が口元に来たので噛んだ。服がぶかぶかだから噛みやすかった。

零菜の愛らしい呻き声も、ちょうどいいスパイスだ。

血を吸われながら、その分を吸って取り返す。

魔力が互いの身体を循環しているような錯覚があって、蕩けてしまいそうだ。

厳密には吸血鬼同士というわけではないが、血を同時に吸い合う行為は共食いを

連想させる。あるいは尾ウロボロスを噛む蛇か。

天候が回復する兆しはまだなく、離れる理由も見つからない。

吸血を続ける理由を探しながら、凧と零菜は延々と噛み合い続けた。

雨が上がって自宅に帰ってきたのは、午後七時を回った頃だった。

さすがにぶかぶかの服で外を歩くわけには行かないので、零菜は凧からジャージを借りた。雨は上がったが、蒸し暑く湿気がある。長袖長ズボンのジャージは良い選択ではないが仕方がない。

帰ってきて早々に濡れた服を洗濯機に放り込み、シャワーを浴びてさっぱりすると、帰宅途中で買い込んだ菓子が入ったビニール袋を持って外に出る。

「零菜、おそーい」

と、リビングの萌葱が言う。

東雲と紗葵も一緒にいた。

「麻夜ちゃんいないね。空菜も」

「麻夜は空菜んところ。漫画がどうとかって言ってた」

「ふうん」

麻夜と空菜はよく漫画の貸し借りをしている。最近も、麻夜が大人買いした漫画のやり取りがあるようだ。面白そうなら自分も借りようと空菜は思う。

「はい、これ。お土産」

「サンキュ。ポテチばっかじゃないの」

「他にも入ってるから。奥見て、奥」

凧の旧宅で雨宿りすることは伝えていた。

帰宅する際に、今から帰ると伝えたところ買い出しを頼まれたのだった。

萌葱はうす塩味のポテトチップスの袋を開いた。

テーブルを囲んでいた東雲とともにそれを口に運ぶ。

「で、零菜。詳細報告」

と、萌葱が言う。

「え？」

「え？ じゃねーんで。凧君んところ、ずっと二人でいたんでしょ。何もなかった

とは言わせないわよ」

こういうとき、嘘をついても仕方がない。こういう尋問があることは初めから分かっていたし、萌葱たちもある程度想像はついていることだ。

「吸血しました」

「うーん、アウト」

「何ですよ。別にいいでしょ、吸血なんて」

「アウトってことにしときたい。東雲先生どうです？」

「そうだね。零食ちゃんは役得が過ぎる感じある」

萌葱と東雲が口々に零食を非難する。

笑みを浮かべているのは本気ではない証だ。

「そんなこと言って、二人とも同じ状況だったらどうするのさ」

と、零食は反撃する。

冷蔵庫から持ってきたトマトジュースを飲みながら、ポテトチップスを摘まんだ。

「まー、吸うかな」

と、萌葱は答える。

「そりゃ、吸うけどね」

東雲も同意する。

「同じ穴の貉なんじゃないの？」

呆れたと言わんばかりの声音で紗葵が呟く。

凧と姉たちの関係性には思うところがないわけではないし、血を吸うことには自分も興味はあるが、血を吸った吸わないで一喜一憂する盛り上がりには、まだ入り込めていない。性格的に物事を俯瞰して、一歩引いたところに自己を置く癖があるからだろうか。

「あ、でもね。あれはよかったよ。東雲ちゃんの好きなヤツ」

「は、わたし？」

「うん」

「……え、どれのこと？」

「どれって」

東雲は食い気味に尋ねる。

東雲はいろいろと妄想癖があり、好きなことと言われても候補が多いのでピンと

こないのだ。

放っておくと話が逸れて、変な方向に進みそうなので零菜は自分の首を擦って見せる。

「ここ噛まれた」

「へあ」

東雲が変な声を出し、萌葱が隣で目を見張る。

「え、マジ？」

と、萌葱も身を乗り出した。

「マジマジ。東雲ちゃんの言ってたとおりだったね。最初はちょっと痛かったけど、何かよかった」

「えー、うそお、したのお」

東雲はシヨックを受けたような顔をして不服そうに頬杖を突いた。

「わたしだけの思い出だったのにー」

「あんだだけよかったアピールしてたらね、試したくなるじゃん」

「んー、わたしだって半年前に一回しかないのに」

悔しげに東雲は眉ねを寄せた。

「血を吸われるって、そんなにいいもん？」

と、未経験の萌葱は興味深そうに聞いてくる。

東雲だけでなく零菜までとなると、信憑性も高まる。

実際、ネットには体験談が上がっている。吸血鬼の本能的な抵抗感を克服できれば、吸血鬼カップルの基本的な交流の一つになり得るものだとは言われているが、やはり最初はハードルが高い。

「零菜姉さん、それでこんなに遅くなったの？」

紗葵も興味があるのか会話に入ってくる。

「遅くなったのは雨宿りしてたからなんだけどね」

「でも、雨宿りしてる間に吸血してたんじゃ？」

「まあ、そうだね」

隠す必要はないし、隠したところで意味がない。

どうしたところでバレるものだ。

零菜の初体験談は、姉妹間の女子トークで詳らかにされていく。

風に関する情報共有は、もはや特別なものではなかった。

特に吸血は日常になりつつある。最近はどうやって吸血まで持ち込むかではなく、どのように吸血するかという方法論が話題の中心になっているくらいである。それでも、血を吸われるというのは新鮮だ。

零菜と東雲の話聞きつつ、体験談をネットで検索し、こういう吸血はどうだとか、こういう吸血はないといった話で夜遅くまで盛り上がった。



## 第六部 二話

凧が進学した中央高校は、暁の帝国の中でもそここの進学校だ。夏休み中でも前半には夏期講習が設定され、夏期休暇中の課題も中学時代よりも遙かに多い。学校の勉強には身が入らない凧にとっては苦痛だが、気が乗らなければサボタージュも可能だった義務教育時代とは異なり高校は出席日数も留年も存在するので、油断は禁物だ。

学年で一番になるといふような意欲はないものの、中の上くらいは目指しておかなければならないという程度の意識はある。

法的には皇族から外れていて、現第四真祖の血を継いでいるというわけでもない。しかし、遡れば確かに暁家に辿り着く以上は、自分の存在が皇族の失点になってはならない。それくらい気持ちは持っていた。同じマンションで暮らし、すぐ近くに零菜や萌葱といった皇女たちが暮らしている特殊な環境だ。これで、彼女たちと自分の立ち位置を意識しないということはありません。

進学校に進んだのも、そうした意識の現れだ。

学校の勉強にはやる気が湧かなくても、呪術を初めとする攻魔師関連の勉強には積極的に取り組み吸収する地頭の良さはある。

気持ちが向かえば、学校の勉強についていけないということもないのが幸いだっ  
た。

もちろん、一を聞いて十を知るほどの天才ではない。

従姉妹の皇女様たちは誰も彼も不思議なくらい勉強で躓かないほど頭が良くて恨めしいくらいだが、残念なことに凧はその点については普通だ。

日頃から教科書と参考書を開いてノートにシャーペンを走らせていなければ、テストが散々なことになる。目下の所、夏休み明けの課題テストを乗り越えるために、夏休み課題に取り組む必要に迫られているのである。

攻魔師のバイトにも慣れてきて（といっても現場に出ることは少なく事務所の事務員のような扱いではあるが）自由に使える小遣いで懐が潤っている。散財するほど多趣味ではないが、少しくらいの遊興は自費でできるくらいになったのは、ありがたいことだった。

早めの夕食を摂って自室に籠って課題に取りかかる。

古文や歴史などの呪術の知識を応用できる科目は夏休みに入って早々に終わらせたので、今残されているのは数学や物理といった理系科目だ。正直、苦手の部類である。あまりやる気が湧いてこないこともあって、シャーペンの先は五分近くもろくに仕事をしていない。白紙のノートに点を打つだけの作業で、時間だけが過ぎていく。問題文は見えていただけで頭にはまったく入っていない。集中力は限りなくゼロに近く、うとうとと眠気に誘われる。

昼間に体力作りのために麻夜とランニングをした。

その疲れもあって、身体が睡眠を欲しているようだ。

眠いときに眠るといい睡眠が取れるのだ。

明日に予定は入っていないので、このままベッドに潜り込んで惰眠を貪るのも一つの手だ。

凧はカーテンの向こうに視線を向けた。

雲を照らす街の明かりは、人々の活動がまだまだこれからだと語っているかのようで、事実、夜に強い性質の魔族はこれからが仕事という者も少なくない。

昼間に比べて人通りが少なくなる大通りであっても、完全に人気がなくなるとい

うことはあまりない。

そういった人々の営みを、風の部屋から俯瞰することができる。

初めは物珍しかったこの景色も、一年もすれば見慣れたものになる。

この部屋に引っ越してきてから、それだけの時間が経った。

進学もしたし、攻魔師としての活動も始めた。

だが、この一年の間にどれだけの成長ができたのだろうか。これだけのことがで

きるようになりましたと、胸を張って言うことはないのではないか。

つらつらと余計なことを考えていると、携帯端末が震えた。

バイブレーション機能が作動して、机の上で大きな音を立てたのだ。

『いまいい？』

画面にシンプルなメッセージが表示される。

相手は零菜だ。

『大丈夫』

『どう？』

返事を打ち込むと、すぐに次のメッセージが飛び込んでくる。

たったの三文字だが、凧が一文字打ち込むよりも早いかもしれない。

と同時に画像が貼り付けられる。

鏡に映った零菜の姿だ。携帯端末を横にして鏡に構えている。

いつもの私服姿でも制服姿でもない。

零菜が着ているのは古式ゆかしいメイド服だ。

よくあるコスプレのミニスカートのメイド服とは異なるロングスカートの端を  
ちよこんと摘まんでいる。

黒と白の色合いが、しっとりとした零菜の黒髪も相まって全体的に落ち着いた印象を形作っている。

ちらりと見える足下は編み上げ革靴だろうか。

サバゲーで使いそうなゴツイブーツを履いていて、コスプレ感がある。

『可愛い。いつものヤツと違うじゃん。新しいメイド服にしたんだ』

『今度の試着。変なとこない？』

『ない。明後日はそれで行くのか？』

『そのつもり。あんまり奇抜なヤツで目立つ気ないからね』

零菜が言う「今度」は、はろういんフェスタのプレパーティのことだ。

日本から独立して半世紀も経たない新興国の暁の帝国には、歴史的な伝統行事というものがほとんどなく、お盆やクリスマスといった日本時代から続く慣習をそのまま継続しているものが大半を占めている。

そのような中で数少ない暁の帝国で醸成された文化の一つがはろういんフェスタだ。

これも、結局のところは北欧をルーツに持つハロウィンにあやかった祭である波臈院フェスタが絃神島で生まれ、商業的理由からはろういんフェスタに改題したというだけの宗教色のないイベントではあるが、間違いなく暁の帝国国内で発展し伝統行事として根付いたものだ。

多分に経済的事情で継続しているものではあるが、民族的アイデンティティのない暁の帝国人にとっては、国内産の大規模イベントはそれだけで重要な行事だ。

今となっては絃神島時代以上にその重要度は増しているといってもよく、経済的にも心理的にも欠かせないものといっても過言ではない。

そしてはろういんフェスタには二つの顔がある。

一つは全国各地に根付いた「この日に祭を行う」という意識に根ざしたもの。

各家庭や学校でハロウィンを楽しむ文化だ。

そしてもう一つがはろういんフェスタ実行委員会主催の大規模イベントである。一般にははろういんフェスタと言えばこちらを指す。

プレパーティーは、はろういんフェスタ実行委員会の関係者の集いであり、皇室も出資している以上、出席は必須であった。

日本を経由して誕生したハロウィンのイベントなのではろういんフェスタはコスプレでの参加が一般的だ。

普段はコスプレをしない者でも、この日に限ってはコスプレをして街に出るということも珍しくないし、国内外からコスプレイヤーがやってきて盛り上がることは言うまでもない。

そうした祭なので、プレパーティーでもコスプレでの参加が求められる。

『一国のお姫様がメイド服ってのは、いいのか？』

『いいんじゃない？ そもそも普段と違う役回りを演じるのもコスプレなんだし』  
それも一理ある。

自分と違う誰かに成り代わるといふのは、誰もが大なり小なり有する変身願望を満たすことでもある。

暁の帝国の皇女である零菜がメイド服を着るといふのは、かなり背德的だが、普段と異なる姿になることで抑圧から解放され、精神的充足を得るといふコスプレの醍醐味を存分に味わうことができるのかもしれない。

もつとも、零菜は普段からコスプレをしているし、彼女のメイド服にもバリエーションがある。

実際、凧が零菜のメイド服を見るのはこれが初めてではない。

暁の帝国で生まれ育ったのならば、ハロウィンの時期にコスプレをすることに違和感は覚えないし、メイド服はコスプレとしてはよくある部類で零菜が言うように奇抜なものではないのだ。

零菜と麻夜は高等部に進学し、義務教育を終えた。

今後、皇族としての仕事も少しずつ増えていくのだろう。

プレパーティも、そんな仕事の一つなのだ。

世の中は夏休みの真っ最中。

はろういんフェスタの実行委員会が少しずつ本番に向けて活動を活発化させているものの、まだ世間は秋のイベントよりも、夏のイベントを味わい尽くすかということに目を向けている。

テレビコマーションシャルでよく見る大型のレジャー施設は、ブルーエリジウムと双壁をなすマリンレジャー施設だ。

太平洋の島国である暁の帝国は、海洋資源が豊富である反面マリンレジャーの分野では未だ発展途上だ。

というのも、人工島である以上大自然の絶景は皆無であり、自然の浅瀬もない。そのため、どうしても人工的にレジャー施設を作り観光地に仕立てなければならぬのだ。

施設を造ったからには、投資を回収しなければならない。

大々的にCMを出しているのも、夏休みが一番の稼ぎ時だからだ。時期を外せば、

客足が遠のくのは必至なので、連日、耳に残る軽妙な音楽とともに繰り返されるコマージュは、厄介なことにネット上にも繰り返り出しているようで、何を見ても目に入ってくる。

今年はブルーエリジウムすでにレジャーは体験済みだ。本物かつろくでもないホラーではあったが、それを除けばすでに楽しい思いはしているので、凧は特別、この施設に関心はないし、夏真っ盛りの時期に好き好んで外に出ようとは思わないのであった。

冷房の効いた部屋で一日をだらだらとして過ごしたい、というのが本音である。もちろん、攻魔師として必要な訓練をサボることはしないが、それ以外の理由で外に出るのは魅力を感じない。わざわざ暑い世界に飛び込もうということに面倒さを感じているだけなのだが。

自室のテレビの電源を落として、凧は部屋を出る。

喉が渴いたので、水分補給をするためだ。

リビングには、麻夜と空菜がいて、テーブルの上に漫画が積み上げられている。どうやら麻夜が持ってきたものを二人で読んでいるところだったらしい。

「凧君、どうかした？」

と、麻夜が尋ねる。

漫画を読んでいる二人を何となしに眺めていたのが気になったのだろう。

「何でもない。水飲みに来ただけ」

凧はそう答えて、キッチンに向かった。

冷蔵庫の中にはキンキンに冷えた麦茶が入っている。

「麻夜はプレパティー出るんか？」

と、凧は聞いた。

「はろういんフェスタの？」

「そう」

「わたしも高校生になったからね。こういうところには出ておかないとダメっぽい」

「祭も仕事なんだな」

「仕方ないね」

肩を竦める麻夜。

プレパティーは、はろういんフェスタを運営する企業の重役や政治家が参加する

パーティーだ。

そこに出席することは公務としての色合いを帯びる。

今までは中学生ということもあって、こうした行事に参加する機会は少なかったが、義務教育を終えたことで、少しづつ皇女としての活動が増えてくることになる。

その第一歩が、このプレパーティーなのだ。

「凧君は来ないのかい？」

「そんなご大層なパーティーには行けません」

凧は血縁者ではあるが、特別な役職に就いているわけではないし、皇族として扱われているわけでもないのだから参加する理由がない。

プレパーティーはあくまでも実行委員会の決起集会だ。

無関係の高校生がうろつく理由がない。

「プレパーティーはコスプレするのが伝統なんだろう。麻夜は何にするんだ？」

「そりゃあ、わたしの衣装は魔女だよね」

ハロウィンのコスプレの代表格は魔女だ。

さらに、麻夜の母は真正正銘の魔女であり、麻夜自身もその特性を受け継いでい

る。悪魔と契約こそしていないものの、母親が持つ呪術の才能はばっちり麻夜に継承されているのだ。

インターホンが鳴ったのはその時だ。

このマンションの鍵はエントランスのオートロックとこの部屋の入り口の二カ所にある。今のインターホンは部屋の入り口に設置されているものである。これはつまり、家族の誰かがインターホンを押しているということだ。

返事をしていないのにドアが開いた音がした。ガタンと振動がリビングまで届いた。

「なんだ？」

ドスドスと廊下を踏みしめる足音がして、リビングの扉が開く。

「兄さん、ご無沙汰です。麻夜姉さんと空菜さんも、久しぶり」

勢いよく無断侵入を果たした侵入者は、紙袋を腕にかけた白銀の美少女——  
クロエ・リハヴァインだった。



クロエは、第四真祖にして暁の帝国皇帝の暁古城と北欧のアルディギア王国女王・フォリア・リハヴァインとの間に生まれた吸血姫だ。

普段は母方のアルディギア王国で生活し、帝王学を学びながら騎士として修練を積んでいるので、こちらに顔を出すことは滅多にない。

何せ飛行機でも片道十二時間はかかるのだ。王族かつ皇族のクロエが簡単に行き来できる距離ではない。

「どうしたんだ、急に」

と、凧は困惑しながら尋ねる。

「はろういんフェスタに向けてわたしもこっちに滞在することになったんだ。短期留学ってヤツだな」

「ハロウィンまでって、二ヶ月あるぞ」

はろういんフェスタの本番は十月の最終週だ。

これから予定されているプレパーティーですら、実行委員会の決起集会であって、まだイベントは水面下でしか動いていない。世間的にも、まだ先の話で、今の注目

は夏休みの最後をどう飾るかというところだろう。

「二ヶ月といってもあつという間だぞ。せっかく、こっちに來るんだったら、一日二日だともったいないし、それにわたしはこっちの皇女でもあるからな」

そう言われて見ると、確かにおかしな話ではない。クロエは古城の娘でもあるのだから、父方であればらく生活するというのは悪いことではない。

「短期留学って言っても、学校は？」

「彩海に手続きしたよ。二ヶ月だけの留学生ってことで」

「そんな簡単にできんの手続き」

「彩海学園とわたしが通う学園は仲がいいんだ。普段から交換留学も短期留学もしてる。わたしが來る代わりに誰か短期留学することになるはずだと聞いてるぞ」

クロエが普段から通っている学園は、アルディギア王国の王族を受け入れる超名門校で、古城は輩出した縁で成り上がった彩海学園とは歴史も伝統も何もかもが違  
う。

クロエは荷物を空いていた椅子の上に置いて、ガサゴソと中を漁る。  
取り出したのは包装紙で包まれた底の浅い箱だ。

「お土産。麻夜姉さんと空菜さんがこれ」

「悪いね」

「ありがとうございます」

クロエは、麻夜と空菜に手渡す。

麻夜と空菜にはそれぞれ見るからに高級なハンドタオルが贈られた。麻夜は黒に金のラインが入っていて、空菜は青に銀のラインが入ったシンプルなたオルだ。

「何かすごい手触りがいいな」

「そうだろう。うちは昔から木製の家具で有名だけど、そこからこういう高級な日用雑貨にも力を入れるようになったんだ」

「高級家具に抱き合わせてことだね」

「そういうこと。はい、兄さん」

「サンキュ」

青い包装紙の箱を受け取った凧は、包装紙を外し、箱を開ける。

中に入ってたのは、長方形の布だ。ハンドタオルかと思ったが、筒状になっている。

「俺は枕カバーなのか？」

「母様がそういうのがいいと仰っていたから」

「なるほど」

凧の枕カバーは、使い始めてずいぶん経つ。そろそろ交換してもいいかと思っ  
いたくらいだ。

「でかでかYESって書いてあるの何なんだよ」

緑色の下地に白抜きでYESと刺繍されている。

どこからどう見ても噂に聞くYES／NO枕のそれだ。

「母様がそれでいこうと仰ったから」

「あの女王陛下は……」

ラ・フォリアは女王になってからも身内に対してはお茶目な悪戯心を遺憾なく発  
揮する。

特に娘をけしかけることもあるので性質が悪い。クロエはクロエで生真面目なと  
ころがあるので、ラ・フォリアの餌食になる。

「クロエ、これの意図は」

「そういうデザインなんだろうな」

クロエは世のYES/NO枕がどういう使われ方をするのか、あるいはどう見られているのかを理解していないのだ。

「いいじゃん、凧君。今度からそれ使わないと」

「お前は分かって言ってるんだろ」

茶化す麻夜はにやついてこちらを見ている。外見が大分しおらしくなったが本質的には変わっていない。

「裏にすればいいんじゃない」

「裏もYESだよ、これ」

「何？　ほんとだ、これYES枕じゃん」

「拒否権なしだよ」

ご丁寧裏側にもYESが刺繍されていて、裏表内側の四面すべてがYESだ。凧に拒否権はないと言いたげな強権的な枕であった。

「まあ、仕方ないね。今度から凧君の答えは、はいかYESだね」

「権力側にいるヤツが言っちゃダメだろ、それは」

クロエはきよとんとしているが、ラ・フォリアは分かっているが、これを贈らせたのは間違いない。

クロエが母の悪戯心を理解せず、ちゃんとした贈り物だと思っているのがさらに性質が悪い。冗談として受け止めて今の枕を使い続けるという展開に繋げにくくなった。

「凧さんの枕カバーが不要ということですね。なら、わたしのと取り替えましょう。ちようど、わたしの枕カバーが壊れたところですよ」

「壊れるって何だよ。どんな使い方したら枕カバーが壊れるんだよ」  
と、空菜の発言に凧がツツコミを入れる。

もらった物を無碍にすることはできない。まして、相手はアルディギアの王女で、アルディギアの女王のアドバイスで選ばれた物だ。

文句を付けることすら不敬である。

ここはありがたく頂戴し、使用しないとイケない。

枕カバーは人に見せるようなものではないとはいえ、妙に使い勝手の悪いデザインなのは困りどころだ。



## 第六部 三話

カタカタと音がする。

電気ケトルの中でお湯が沸いた音だ。カチリ、と自動的にスイッチが切れた電気ケトルをスタンドから外して、ガラスのティーポットに湯を注ぐ。

ローズヒップとハイビスカスのブレンドティーである。

見る見るうちにティーポットの中が深紅に染まって、爽やかないい匂いが鼻腔をくすぐった。

蜂蜜とティーカップを並べて、頃合いを見てティーポットを手を取った。

お茶に関しては作法とか飲み方が色々あるのだろうが、一人で楽しむのにそこまで気にはしない。さすがに皇族なので見苦しくないように学んではいるが、それはそれである。重要なのは自分が楽しむことだ。故郷に戻ってきてから、学校にも通わず超長期休暇状態が続いていて、時間に余裕ができたので、今まで手を出さなかったことにも手を伸ばしている。それは料理であったり、ラーメン屋巡りであったりするが、お茶についても、ちょっととした趣味の一つとして手を出してみた。

世間が夏休みに入ってからなので、まだ一ヶ月も経っていない。体験した茶葉の種類も多くはなく、趣味と言えるほど深掘りもしていない段階である。

身も蓋もないことを言えば、美味しいものを飲み食いたいというのが東雲の趣味の根幹で、自分にはラーメンだけではなく、少しお洒落な趣味もあるのだと言いたいという不純な動機もあって始めたことではあったが、悪くはないと思いついてるところだった。

お湯を沸かせばいいだけなので、時間はかからず面倒なこともない。

本気で掘り下げていく程の熱意はないので、片手間で継続できるくらいがちょうどいいのだ。

ソファの上には、橙色のドレスが広げている。

ジャック・オー・ランタンをモチーフにした衣装だ。

プレパルティを明日に控え、用意をしていた衣装の確認をしていたのだ。

一段落ついたのでお茶を淹れて休憩しているが、一度座ると片付けるのが面倒になってくるのが困りものだ。

暁の帝国に帰国してから、学校にも通わずずっと家にいるので、怠け癖がついて

しまったのだろうか。

(九月から学校、大丈夫かな)

と、思わずにはいられない。

何せ、実に半年近くも学校に通っていないのである。

しかも、九月から通うのは新しい学校だ。

クラスにも馴染めるか不安はある。

ティーカップに口を付ける。

仄かな酸味が舌の上に広がる。

安物のティーパックを使っているが、悪くはない。さすがに、混沌界域の宮廷で飲んだものとは比較にならないが、あまり高級だと気軽に楽しめないというのが、姉妹に共通する性根であった。

皇女でありながら、金銭感覚は庶民的だ。それは、暁の帝国が最近になって建国されたばかりで、皇族自身が皇族という立場を手探りで運用しているからだ。

「今日はパンにしようかな」

食パンが余っているので、今日消費してしまおうと考えた。

朝食にはあまり手間をかけず、手早く済ませてしまつて明日に備えることにしよう。

そう考えて、ティーカップの中身を飲み干そうとしたとき、インターホンが鳴つた。

「はあーい」

と、気の抜けた返事をする。

どうせ家族の誰かだ。このインターホンはノックの代わりだ。入ってきたのは昨日アルディギアからやってきたクロエだ。まだ中学二年生だというのに身長はすでに東雲を越え、腰はくびれて胸も大きい。发育の良いモデル体型である。もともと、自身の发育に多少のコンプレックスを抱いている東雲にとって、クロエは目に毒なのだ。

黒を基調としたアルディギアの軍服は、クロエの青みがかつた銀髪と白い肌を強調する。

十人中十人が振り返る美少女に育つた妹は、優雅なティータイムを過ごしていた姉に笑いかけ、

「姉さん、決闘しよう！」

と、宣った。



クロエの素っ頓狂な第一声の後、首を傾げた東雲の視界が歪み、気がつけば古風な城砦の中庭らしきところに転移していた。

夏の暁の帝国の冷房の効いた快適な自宅が、物寂しい石造りの壁に取り囲まれた景色に一変する。

日が暮れかかっている空の大部分は群青色になっている。城門も城壁も半壊している、崩れた石が散乱しているという有様だ。

暁の帝国に、このような場所はない。いや、あるとすれば一つだけ。

「那月ちゃん！ こういうの拉致監禁って言うんじゃないの！」

南宮那月の監獄結界。

ここは、その内部だ。

何度か出入りしたことがあるので、雰囲気だけで分かる。

「うるさいぞ。年上をちゃん付けで呼ぶな」

「うわ、何かでっかくなってる」

現れた那月は、二十代半ばくらいの見た目になっている。

もともと人形のように愛らしい少女の外見だったが、今の那月は、その少女が美しさを損なうことなく成長した姿だ。

見た目は完全に別人だが、威圧的な表情と視線はまさに那月そのものである。

「わたし、ティータイムだったんですけど。説明を求めます」

「クロエから説明しただろう」

「決闘とか言っていましたけど」

「ああ、その通りだ。そして、わたしは決闘場の提供と戦闘技能の教導を依頼された。どうだ、理解したか？」

「今の説明で何を理解しろと？」

那月の言葉足らずな説明では、何も分からない。

まず、東雲が確認したいのはクロエと決闘する理由だ。

当事者のクロエは、東雲から十メートルほど離れたところにいる。彼女に説明を求めたほうが早そうだと視線を向ける。

「端的に言うと、眷獣を使った戦闘訓練を試してみたかったんだ」

「戦闘訓練ー？ アルディギアでもいくらでもできるでしょ」

「うちは対魔族の技術は発達しているんだけど、吸血鬼として戦うというのは確立してないんだよ。一昔前までは第一真祖と対立していたから。なので、姉さんに協力してもらおうと思って決闘に誘ったんだよ」

「決闘って言い方、ちょっと違うでしょ。何かと思ったわ。ていうか、なんでわたしなのよ」

「そりゃあ、東雲姉さんが一番強いから」

「はあ？ 零菜ちゃんとかじゃないの？」

「零菜姉さんは反則っていうか、吸血鬼的に参考にならないし。でも、シノ姉さんは混沌界域に留学してた。吸血鬼の本場にね。それが理由」

確かに零菜の能力は吸血鬼の能力というには異質だ。一方で東雲は、純粹に吸血

鬼として優れている。そしてその才能を混沌界域でさらに磨いていた。眷獣での戦闘を本場で学んだのは東雲だけだ。

「それにしたっていきなりすぎるんじゃないの」

「ごめん。でも、シノ姉さん暇そうだし」

「暇じゃねえのよ。優雅なティータイム中だって言ったでしょ!？」

あまりな妹の言いように反論する東雲。

とはいえ、本音を言えば暇だったのは事実で、半年あまりも学校に通っていない状況でもあったので説得力はない。

「那月ちゃんもなんでこんなに協力的なの？」

「南宮先生には、わたしがこっちにいる間のチューターを依頼しているんだ」

アルディギア王家からの正式依頼というのは、確かに重みのある依頼だ。

世界的に有名な攻魔師の元で短期間でも修行ができるのなら、それは実のある経験である。

クロエが言うようにアルディギア王国は吸血鬼と戦う経験は豊富でも、吸血鬼を育てる経験には乏しい。王家に生まれた建国史上初の吸血鬼の扱いはなかなか難し

いところもあるのだろう。それは、東雲の才能を持って余した暁の帝国と似通った事情ではある。となると、頭ごなしに拒否するというのも心情的に難しい。

「それで、ルールは？」

と、東雲は尋ねる。

答えたのは那月だ。

「お前たちの首に呪符を掲げさせる。一定の魔力を浴びると変色する仕組みだ。先に呪符の色が変わったほうが負けだ。眷獣の使用は可能だが、出力は抑えさせてもらう」

「まあ、当然ですね。危ないし」

「監獄結界の中だ。お前たちの眷獣如きで死ぬことはないが、まあ見栄えは悪いからな」

「見栄えと違って問題じゃないと思いますが？」

監獄結界は那月の夢の世界だ。

真祖の眷獣ならばまだしも、東雲とクロエの眷獣が暴れたところで那月の敷いたルールを覆すことはできない。つまりは眷獣を使った表ではできない、より実戦的

で危険な対決も、この監獄結界の中ならできるといふことだ。

呪符をつけたネックレスを首にかけた東雲とクロエは、互いに向かい合った。那月特製の防具で頭を胴手足をしっかりと覆い、万が一に備えている。

監獄結界内であっても魔力を使って戦うのだから痛みはある。それを最小限にするための対応だ。

「それじゃあ、シノ姉さん。胸をお借りします」

「後で何かちょうだいね」

「うちからいい茶葉取り寄せるよ」

「よし、じゃあ、やろうか」

那月が両者に視線を配る。

各種防具を装着し、安全性に問題がないことを確認してから、扇を勢いよく閉じる。ぴしり、と乾いた音がして、

「用意はいいな……始め」

那月の声を合図に、東雲はバックステップを踏んだ。

決闘の舞台となった中庭は円形で、眷獣を暴れさせるのに十分な広さがある。驚

いたことに空間が拡張しているのか、東雲が連れてこられた時よりも広くなっているのだ。

十分な広さが確保されているのなら、クロエの近くにいる必要はまったくない。吸血鬼の戦いの大原則は眷獣召喚であり、標的との距離が近すぎると戦いにくくなる。

後ろに跳んだ東雲を目がけてクロエが走ってくる。いつの間にか、クロエの右手には黒い棒が握られていて、それを槍のように突き出してくる。

黒棒はクロエの身長よりも長く、黒一色で見た目から材質は特定できない。

後ろに下がる東雲と前に進むクロエでは、やはり速度が違う。唸りを上げて迫る黒棒を、東雲は頭を振って避ける。

「あッ、ぶなッ、わあ！」

ひゅんひゅんと耳元で風切り音がする。

東雲は動物的な反射神経でクロエの攻撃を躲して、飛び退る。決してお上品な避け方ではなかったが、クロエの振るった黒棒は一発も東雲に当たることにはなかった。

「シノ姉さん、すばしっこいな」

「いきなり姉を棒で殴りつけるバイオレンスな妹はちょっと問題あると思うの」

「決闘だってば」

「知ってるけどさ、武器持ち込みオッケーとは聞いてないんだけど」

「持ち込んでない。作ったんだ。だから、反則じゃない」

一呼吸置いて、クロエが攻めてくる。

黒棒は、クロエが錬金術で即製したものなのだろう。魔導科学が発展しているアルディギア王国は、錬金術についても広範な知見を有しているのだ。

東雲はすれすれのところで黒棒を避ける。

基本的に相手の攻撃は受け止めるのではなく避けるものだ。零菜のように防御魔術を無視する能力や、触れるだけで効果を発揮する呪詛といったものも世の中にはある。

例えばクロエが相手の場合、この黒棒に対吸血鬼用の攻撃魔術を仕込んでいるということは十分に考えられる。何せ第一真祖と何百年も戦争を繰り返してきた王国のお姫様の棒なのだから、それだけで警戒するに値する。

驚くべきは、東雲の身体能力だろう。

クロエの攻撃は決して単調ではないし、遅いわけでもない。東雲は僅かな空気や魔力の流れを読み、勘を働かせて素早く安全圏に退避している。

瞬発力だけで見ても、東雲のほうがクロエを上回っている。

「セイツ」

クロエの突きが東雲の左肩を打つ。よろけた東雲の肩を、そのまま黒棒が突き抜けていく。驚愕に目を見張るクロエの前で東雲の身体が金色の霧となる。そして、瞬時にクロエの頭上に実体化すると回し蹴りを放った。首を刈り取るような回し蹴りをクロエは右腕を盾にして凌ぐ。空中で支えがないにもかかわらず、その一撃は重くクロエはよろめいた。

「重……！」

「足を止めていいのかな？」

「う……わッ」

驚いたことに東雲は空中を蹴ってクロエに躍りかかった。東雲の体重を乗せた跳び蹴りをクロエは黒棒で受け止める。

クロエは膝をバネにして東雲を跳ね上げる。東雲はクロエの抵抗を利用してバク

転。身体を捻りながら頭を下にして落下する。

(ここだッ)

クロエは空中の東雲に向けて、黒棒を横薙ぎにスイングする。

クロエの黒棒が東雲を捉える寸前で、ピタリと東雲の落下が止まる。予想外の動きに目測を誤った黒棒はそのまま東雲の頭頂部を掠めて空振りに終わる。

おまけに、身体を捻った東雲の顔はクロエのすぐ目の前にある。

東雲の瞳は深紅に染まっていた。

(しまッ……!)

強烈な魔力が視線を介して脳を侵す。

クロエの身体が脱力して、踏鞴を踏んで黒棒を取り落とした。

魅了の魔眼は、吸血鬼の基本能力の一つだ。強弱には個人差があるが、東雲は生来、吸血鬼が一般に持つ能力を高い次元で備えた才女だ。眷獣に限らず霧化に獣化、そして魔眼とこの歳で多くの能力を使いこなしている。

至近距離から魔眼の呪縛を受けたクロエは、全身の魔力を動員して東雲の魔力を洗い流す。

普通の人間が相手ならこれで終わっていたが、クロエもまた第四真祖の娘でありアルディギア王家の血を継ぐ貴種である。

魔眼の呪縛を解除するのに、そう時間は掛からない。

クロエの身体が自由を取り戻した。

「ちよっと、遅い」

逆さまのまま空中で静止した東雲の得意げな声と共にクロエの身体は再び自由を失った。

細い糸がいつの間にかクロエの身体に巻き付いて、キツく締め上げてきたのである。

「な、これ、蜘蛛の糸みたいなの、いつの間に」

「蜘蛛の糸じゃなくて、髪の毛」

「そうか、ヨミ」

「正解」

東雲の眷獣の一体、ヨミは長い髪の毛を操る眷獣である。今はその力の一端を呼び出して、物質化する寸前の状態で周囲に張り巡らせていたのだ。東雲の合図と

もに、それらの魔力は髪の毛として出現し、敵を絡め取る網となる。

「シノ姉さんが跳んだり跳ねたりしてたのも、これを足場にしてたからか」

「本体を召喚することだけが眷獣の戦いじゃないの。参考になった？」

「うん、ありがとう。さすが……シノ姉さんだ。でも、まだわたしは負けてないよ」

ギシリ、と髪の毛が軋む。

黒棒の効力ではない。

ここまで対峙して、クロエの黒棒には何も仕込まれていないことは分かっていた。

この威圧感、魔力の高鳴りはクロエの体内から発生している。

「来て、ファーヴニル！」

爆発的な魔力の高まりと共に白い炎が噴き上がる。それがヨミの髪の毛を焼き切った。自由を取り戻したクロエの全身を炎が包んでいる。それは次第に形を取って翼と一本の尾を形成した。

「そんな眷獣あったの!？」

「去年、兄さんの血で目覚めたみたい」

「あー、凧君のね」

「じゃあ、行くよ。第二ラウンド！」

轟然とクロエが突進してくる。

黒棒の先に至るまで白い炎が包んでいる。

(やっぱ身体強化系。しかも燃えてるし、ヨミじゃ相性悪いか)

身体能力に自信のある東雲だが、さすがに脊獣を纏って強化された相手と競うほど無謀ではない。こういう手合いは近づけないのがセオリーだ。

「シバルバー。相手してあげて！」

東雲が呼び出したのは巨大なサイの骸骨だ。その骸のすべてが氷でできていて、凍てつく風を身に纏っている。

白い炎を纏ったクロエと凍気を纏ったシバルバーが正面衝突する。

「くう……！」

打ち負けたのはクロエのほうだ。勢いを殺されて苦悶の表情を浮かべる。シバルバーは東雲の脊獣の中でも突破力に秀でた脊獣だ。その全長十五メートルに達する巨体は、体重差を考慮してもクロエがぶつかるには厳しい相手である。

「まだまだあ！」

轟、と白炎を吹き上げて凍気を焼き払うクロエは、飛び上がると白炎を噴射して加速し、シバルバーの眉間に黒棒を突き入れる。

思わぬ反撃にシバルバーは頭を振った。思いのほか痛かったらしい。さらに、その隙にクロエの棒術が炸裂する。シバルバーの頬を打ち、顎を突き上げる。大怪獣を少女が圧倒するというのは、何とも見栄えのする光景だ。

シバルバーは、突進力を削がれると持ち味が活かせないようだし、意外に打たれ弱い性格らしい。鉄砲玉として敵陣に突っ込ませるのが最適解なのだろうか。

シバルバーを本気で暴れさせれば、クロエを振り払うことはできるだろうが、妹相手にそれはやり過ぎだ。

全身から冷気を放出させてクロエを吹き飛ばし、シバルバーの役目は終わりにする。

「引っ込めちゃうの？」

「相性悪そうだったしね。それに、クロエちゃんのほうもキツそうだけど大丈夫？」

「そう見える？」

「顔色悪いよ。その眷獣、消耗激しいでしょ」

白い炎も最初の頃に比べて出力が落ちているのは目に見えて明らかだ。クロエの魔力を燃料としているのなら、燃やせる魔力がなくなれば鎮火するのは当然だ。翼も尾も形を維持するので精一杯といったところだろう。

「眷獣同士の戦いつてのなら、もう十分感覚掴んだんじゃない？」

「まあ、ね」

白い炎が弱まっていき、やがて消えてしまう。

額に汗の粒を浮かべたクロエは苦笑して胸元を押さえる。

「その眷獣、もしかしてそこにいるの？」

「心臓が触媒なんだ」

「そりゃ、負担大きいね」

眷獣の中には肉体の一部に宿って召喚されるタイプもある。有名どころだと魔眼として現れる眷獣などだ。クロエの場合は心臓だというから、身体への負担は通常の召喚獣よりもずっと大きい。身体を酷使用するタイプなので、身体を普段から鍛えていないとまともに使えない。

インテリジェンス・ウェポン

意思ある武器と呼ばれる武器型の眷獣は、それを扱う技術が必要だが、身体に

宿るタイプの眷獣は純粹に体力勝負なところがあるので、さらに厄介だ。

ロケットエンジンを後付けするようなものだ。コントロールするにはそれに耐えられる機体身体を用意しないとイケないが、クロエの身体は成長中で、まだ眷獣による身体強化に耐えることができない。

「じゃ、これで終わり。お開きにしよう」

と、東雲は言った。

「え、なんで？」

「なんでって、なんで？」

「せっかく、眷獣の感覚が掴めてきたんだから、もう少し付き合ってよ」

「いやいや、もうお腹減ったし、明日プレパーティーあるんだけど」

「もうちょっとだけ。あと十分かからないからさあ」

そう言いながらクロエは次の眷獣の召喚準備に入っている。

那月が設定した試合の終了条件も満たしていないので、那月のほうも止める気配はない。

「監獄結界の中だけど、妹怪我させたくないんだけどなあ」

呟く東雲を尻目にクロエは鈍色の大型犬を呼び出していた。その数は九匹。すべて鉄製の使い魔だ。黒棒を作ったのと同じ錬金術による使い魔だ。

「眷獣じゃないじゃないの」

「眷獣はこれから。ドラウプニル！」

クロエの右手首に黄金の腕輪が嵌まる。同時に召喚した鉄犬の首輪に同じ意匠の首輪が嵌められた。腕輪と首輪は魔力で接続し、鉄犬たちの魔力量が激増した。

一体一体が眷獣に匹敵する力を帯びて、唸り声を上げている。

「身体強化の次は味方の強化か。いろいろ手札があるみたいだね」

「シノ姉さんほどじゃないよ」

好戦的な笑みを浮かべるクロエは、右手首の腕輪を撫でる。黄金色の腕輪から毒々しい紫色の魔力が溢れて使い魔たちを染め上げる。さらに強力に魔力を充填された使い魔は、ただの魔術で作りに出されたものとは思えないほどに凶悪な怪物に変質した。

「行けッ」

クロエの合図と同時に九匹の鉄犬が猛然と走り出す。

一息に東雲との距離を詰めるほどの速度で、それが東雲の退路を断つように連携して襲ってくる。

対する東雲は鉄犬の牙が届く前に空に逃れる。ワイヤーアクションをするように飛び上がり、そのまま虚空を踏む。

ヨミの髪を蜘蛛の巣のように張り巡らせて、空中に東雲だけの足場を作ったのだ。自分の身体に髪を巻き付けて、足場から足場にターザンのように移動する。

「こんな危ないのを姉にけしかけるなんて、とんでもない妹だね」

「シノ姉さんのそれずるくない？」

「ずるくない。クロエちゃんだって、ほんとは飛べるでしょ？」

クロエには天馬の眷獣がある。

クロエの愛馬であり、空中戦能力は姉妹随一だ。ここで出してもいいが、決闘場の範囲が狭い。空を自由に飛び回って初めて真価を発揮する眷獣を活躍させるには、少々、那月が用意したフィールドは狭く、むしろ東雲の眷獣の的にされてしまう。

「じゃあ、飛べ！」

クロエに命じられた使い魔たちが、地面を蹴ってジャンプする。そのまま弧を描いて落下する、とはならず、何と鉄犬たちはまるで空気が足場であるかのように走り始める。

魔術で生み出された使い魔が物理法則に縛られないのは驚くに値しない。まして、眷獣で強化されているのだから、これくらいできて当然だ。

東雲は髪を手繰って瞬時に鉄犬たちの正面に蜘蛛の巣を編み上げる。

さらに、正面だけでなく全方位を取り囲むように蜘蛛の巣を組み合わせて、髪でできた立方体に鉄犬を閉じ込めた。

「そんなことまで!？」

「飛んで火に入るなんとやらってね！」

東雲が手を叩く。

立方体の各面が、一気に狭まる。

蜘蛛の巣を構成する髪は、鉄をも斬り裂く鋭利な刃だ。それが数百本も組み合わせ合わせた同時斬撃。立方体に閉じ込められた鉄犬は、一秒後には無残な鉄くずに姿を

変えているだろう。

鉄犬たちが黒い檻に包み込まれる寸前に、内部から紫色の炎が上がった。それは瞬く間に燃え広がり、ヨミの髪檻を焼却してしまった。

紫の炎を纏って鉄犬たちが飛び出してくる。

魔力の供給量を増やして鉄犬を強化し、強引に突破を図ったのだ。

「クロエちゃん、可愛い顔して脳筋だよね」

ぼそつと東雲は呟く。

実際、クロエの眷獣はどれも高性能だ。魔力量も潤沢である。第四真祖とアルディギア王家の力を継いでいるので、その性能はトップクラスである。生まれついて高性能エンジンを積んでいて、大抵の問題はそのエンジンを起動させれば片付く。そもそも、吸血鬼が最強の魔族とされているのは、その無限とも言える魔力を餌に召喚される眷獣の力が他の魔族を圧倒するからだ。その吸血鬼の中でも最強の眷獣を有する第四真祖の娘の眷獣は、歳経た旧き世代の眷獣に勝るとも劣らない力ですでに持っているのだ。

「だからこそ、わたしなのかなぁ」

猛然と襲いかかってくる鉄犬の牙も爪も、東雲には届かない。

ヨミの髪による拘束ではない。

突如現れた九枚の盾が、九匹の鉄犬の攻撃を受け止めていたからだ。

「力任せに突っ込んできたところで、もっと強い力で跳ね返されるのがオチなんだから」

どくん、と盾が脈打つ。

鉄犬と同じ紫色の炎が盾から噴き出して、鉄犬を包み込んだ。

雄叫びを上げてのたうつ鉄犬は、もんどり打って落下する。

「攻撃を跳ね返す盾の眷獣？ シノ姉さんの意思のある武器インテリジェンス・ウェポンってこと!？」

「盾じゃなくて、鏡だけどね」

そう言っているうちに、東雲の周囲を旋回していた鏡が割れて、小さな鏡に分裂する。さらさらと光を反射する鏡は、回転しながら数を増していく。

ただの意思のある武器というだけでなく、無数の眷獣の集合体。群体型の眷獣なのだ。

鏡の一部が回転したままクロエに向かって飛んでいく。

分裂したとはいえ、一枚一枚がクロエの身体と同じくらいの大ささだ。

「わ、わ、あぶなッ、きゃん!？」

跳んで跳ねてクロエは鏡の体当たりを躲す。

地面から黒棒を作り出して、飛んできた鏡をすれ違いざまに叩く。

対魔族用の術式を込めた破魔の一撃だ。簡易的ながらも吸血鬼の身体能力を駆使して叩き込まれる破魔の打撃は、並の獣人ならば一発でノックアウトできる威力がある。

バシン、という音がして黒棒が弾かれる。

それだけでなく破魔の術式の効果がそのままクロエに跳ね返る。咄嗟に魔力を全身に巡らせて抵抗しなければ、大ダメージを負っていた。

(危なかった。反射能力は物理攻撃も魔術攻撃も関係ないのか)

尻餅をついた勢いで後転して立ち上がる。立ち止まると囲まれて袋だたきにされるので、動き回らないとすぐに決着がついてしまうのだが、遮蔽物のない決闘場では、単に逃げ回るのも難しい。

このままだと決闘のルールに則って決着するより先に、クロエの体力が尽きて負

けることになりそうだ。

(だったら、纏めてヤルしかない！)

攻撃を反射するのなら、反射できない高出力の眷獣を叩き付けるしかない。

零菜の槍の黄金のような反則技はない。

愛槍ミストルティンが手元にあれば話は変わったのかもしれないが、あれは強力な魔具であって自分の力とは言いがたい。

「来い、ヴァナルガンド！」

クロエは深呼吸して魔力を一気に解放する。極上の魔力を呼び水に、その血に宿る魔が目を覚ます。ミシリ、と空間が歪み、灼熱とともに現れたのは青白い巨狼だった。その体軀は、東雲が呼んだシバルバーに匹敵するだろう。まさに怪獣だ。ヴァナルガンドは紅蓮の炎を全身に纏って、大きく吠え立てると、周囲に群がる鏡を熱波で吹き散らした。

さらに巨狼は顎を開くと口腔内に溜めた魔力を火炎に変換して放射した。

東雲は鏡を組み合わせて一枚の巨大な壁を作って炎を受け止める。

「さすがに重い……！」

おそらくはクロエが持つ眷獣の中でも最大火力を誇る眷獣であろう。

このような眷獣がいるとは知らなかったが、東雲も含め、まだ未覚醒の眷獣はい  
る発展途上なのも暁姉妹の恐ろしいところだ。

「クロエちゃん、そんな正面から力で攻めるだけじゃ、やっぱダメなんだよ」  
炎を受け止めながら、鏡の眷獣が変形する。

六芒星になり、さらに底面の各辺から三角形が垂直に立ち上がる。

それはまるで万華鏡のようで、先端に開いた穴にヴァナルガンズの炎が吸い込ま  
れていく。

「さあ、力を見せて——ミクトラン！」

鏡の眷獣が、ついにその力を解放する。

ヴァナルガンズの炎が筒の中で乱反射する。巨狼から供給される火炎は、絶妙に  
調整された鏡の角度から何度も鏡から鏡に反射し続ける。そのうち、ミクトランの  
魔力も上乘せされて、飛躍的に高まった魔力が底面の一点に収束、蓋が開いて一条  
の破壊光線へと生まれ変わる。

ヴァナルガンズ自身の力とミクトランの力が混ざり合った熱線は、ヴァナルガン

ドの炎を押し戻し、巨体を貫通した。

「きゃあああああ！」

勝敗はあっけなく決した。

ヴァナルガンドは頭から尾までを一瞬で貫かれて消滅し、その反動がクロエを襲った。クロエはぺたんとして座り込み、ぜえぜえと荒く呼吸する。

膨大な魔力が吹き荒れて、クロエの首元につるした呪符が魔力を受けて黒く変色する。

「そこまで」

那月が東雲とクロエに声をかける。

眷獣が消えて、直前までおどろおどろしい魔力が吹き荒れていたのが嘘のように静寂を取り戻した監獄結界は、決闘が始まる前の荒涼とした城砦に戻った。

「クロエちゃん、大丈夫？」

早足で東雲がクロエのところにやってくる。

「ああ、大丈夫。やっぱり、シノ姉さんは強いな。全然、本気にならなかったね」「本気じゃないのは、そっちもでしょ。ていうか、眷獣を本気で解放なんて、いく

らなんでもやり過ぎだし」

監獄結界の中なら眷獣の被害は考える必要はない。しかし、相手がいるとなるといくら那月が安全装置となってくれているからといって心情的にも本気で眷獣を使う気にはならない。

「さて、ここまでがチュートリアルなわけだが、アルディギアの王女様は何か言うことはあるか？」

「ないです」

「では、十分休憩の後に魔力のコントロールから徹底的に叩き込む。二時間は休みがないものと思え」

「は、はい。よろしくお願いします！」

クロエは居住まいを正して声を張った。

アルディギアの騎士団で修行しているので、礼儀は骨身に染みているのであろう。

「わたしはもう帰っていいよね？」

「ああ、もう帰っていいぞ。それとも妹に付き合っていくか？」

「いやいや、結構です。明日に疲れは残せないので」

那月の修行に参加するのなら、それなりの覚悟が必要だ。このようななし崩し的に参加するようなものではない。

「シノ姉さん、今日はありがとう」

「はいはい、お大事にね。那月ちゃんのはキツイから」

ひらひらと手を振って、東雲は答える。

クロエも明日のプレパーティに参加するはずだ。

那月もそれを承知しているから、あまり厳しいことはしないとは思うが、それでも那月の指導は非常に厳しい。攻魔師の頂点に君臨する超一流が、一流の結果を求めてくるのだから、その要求に応えるのは難しいのである。

東雲も那月の指導を受けることはある。

凧のように継続した師弟関係ではないが、戦う術を学ぶのは吸血姫としての義務でもあるのだ。

東雲は那月の作った門を潜って自分の部屋に戻った。

ティーポットはまだ温かさを残している。

濃密な時間を過ごしたような気がしたが、離れていたのはほんの三十分程度だっ

たのだ。

東雲はせっかく淹れたブレンドティーをどうしようか考えて、温め直すためにキッチンに向かった。

## 第六部 四話

夏休み後半戦となる八月下旬は、一年で最も気温が高くなるタイミングだ。常夏の島国である暁の帝国は、日中の最高気温が四十度を上回ることは珍しくなく、毎日のように熱中症対策を呼びかけるCMを目にする。

まだ日が昇って時間が経っていないにもかかわらず、すでに暑くなりそうな予感がする。

ゴミ捨てのために家を出た風は、雲一つ無い快晴の空を憎々しげに見上げた。

マンシヨンのゴミ捨て場は、エントランスを出てすぐのところにある駐輪場の脇だ。屋外に出た途端に、ぬるく湿った空気の壁にぶつかった。今日は風もあまりないらしく、この調子なら今年の最高気温を更新するのではないか。

積み上がったゴミ袋の山に昏月家のゴミ袋を積み上げる。今日は生ゴミの日なので、なかなかの臭いだ。

生ゴミの多くは資源として有効活用される。発電に使われたり、肥料に加工されたりだ。暁の帝国は小さな島国で、しかも人口島なので天然資源には乏しい。その

ためりサイクルやリユースは必要不可欠な産業となっている。

朝日がすでに熱い。日に当たる背中があつという間に熱を持った。すぐに空調の効いた館内に戻ろうと踵を返したところで、ちょうど外から帰ってきた雪菜と目が合った。

「あ、凧君。おはよう。早いね」

ワンピースの上から薄いカーディガンを羽織ったラフな格好の雪菜は、仕事中心はまったく異なる柔和な雰囲気だ。雪菜の仕事は治安維持である。かつて日本で剣巫と呼ばれた攻魔官が担当していた魔導犯罪者対策を引き継いでいて、雪菜はその長官である。国内の魔導犯罪対策を一手に担う組織を背負いつつ、時に古城に随行して皇妃としての公務も行うなど、彼女の生活は多忙を極めている。

「おはようございます。もしかして、仕事帰りですか？」

「違う違う。ちょっと宅配をお願いしに行ってたの」

「宅配便ですか」

「そう。霧葉さんから頼まれてね」

霧葉は日本に赴任している古城の妻の一人である。雪菜とは恋敵にあたるわけだ

が、それはそれとして関係が悪いわけではない。良きライバルといったころなのだろうか。親世代の微妙な力学については、あまり深入りしていないしするつもりもないというのが子ども世代の認識である。

骨肉の争いというのは世の中珍しい話ではない。特に吸血鬼の貴族級ともなれば、血で血を洗う壮絶な戦争に発展するケースもある。どこの夜の帝国でも何かしら一族内での火種は燻っているもので、家族仲が良好な暁の帝国は珍しい部類なのだ。

歴史が浅く古城も含めて人間出身で、他の貴族のような領地を持つということがないからかもしれない。

「凧君、朝ご飯は？」

「まだです」

「そう。じゃあ、よかったうちで食べていかない？」

「いいんですか？　ありがとうございます」

空菜はすでに部活があるということで学校に行ったので凧一人ということもあり、朝食は適当に済ませるか抜くかどちらでもよかったが、雪菜が用意してくれる

というのなら、その誘いを断る理由はまったくくない。

雪菜に案内されて、そのまま家に上がらせてもらう。風の自宅は同じフロアで徒歩十秒もかからない。内部の基本構造もまったく同じのだが、やはり普段使う人が違えば雰囲気も変わってくる。家具やカーテンの色合い、テーブルと椅子の位置による視点の違い、室内の香り、これらが違えば、まったく別の空間に様変わりする。

雪菜と零菜だけが使う空間なので、当然女性物しか見当たらないし乱雑に床に物が落ちていたりということもない。零菜は普段は自分の部屋にいるようなのでリビングの生活感とは極端に薄くなっている。

「今日は何かあるの？」

と、鍋を火に掛けながら雪菜が尋ねてきた。

「何かあるって訳じゃないですけど、体育祭の準備があるんで学校には行きますね」  
「そんな時期なの？」

「パネル作るんですけど、夏休みのうちに作っとかないとダメだって話で。クラスから美術部と暇なヤツ選んで駆り出されています」

「彩海学園でもあったなあ、そういうの。零菜はどうなのかな」

体育祭は各学校の特色があるが、大体は似たり寄ったりだ。公立校では予算が潤沢というわけではないし、学校行事の一つにそこまで力を注げるほど暇ではない。一方で私立校はこうしたイベントを売りの一つにしているところある。勉強、部活、学校行事の三つは学校の差別化の大きなポイントだ。

彩海学園の体育祭は施設が公立校よりも大きいこともあって、中央高校とは比較にならないほど派手だ。

「ごめんね、凧君。こんなのしかないけど」

と、雪菜が持ってきたのは焼きたてのウインナーをレタスとパンで挟んだホットドッグとオニオンスープだ。食欲をそそる香りに思わずお腹がなってしまう。

「男の子にはちょっと少ないかな？」

「そんなことないです。いただきます」

シャキシャキしたレタスと歯ごたえのある熱々のウインナーが堪らない。ケチャップの塩気がレタスでほどよく抑えられていて、嫌みにならない。オニオンスープは自家製コンソメスープを使ったもので、簡単に作ったので器材はタマネギのみにし

ているが、味がしっかり染み込んでいても美味しい。あっさりとしていて朝から口に入れるものとしては完璧だ。

「零菜は？」

「まだ寝てる。でも、そろそろ起きてくるんじゃないかな」

時計の針は七時三十分を刺している。学校に行くのならそろそろ家を出る頃合いだが、今は夏休み中である。凧だってゴミ捨てや登校の予定がなければ昼前までベッドの上で惰眠を貪っていただろう。

凧がホットドッグの最後の一口を頬張ったとき、背後でガチャンと音がした。

雪菜の言うとおり、零菜が起きてきたのだ。

「おはよー……」

と、眠そうに目を擦りながら入ってきた零菜。艶やかな黒髪はところどころが跳ねていて、暑くて寝苦しかったのかパジャマの前が大きく開いているというあられもない格好だ。パジャマの下には無地のTシャツを着ていたので素肌が見えるというわけではないにしても、だらしない服装ではある。

零菜はリビングに入ってくるなり足を止めて、凧を見て目を見開いた。

「は……？ え、なんで凧君がいるの!？」

「雪菜さんに朝メシをいただいたからだぞ」

一気に目が覚めたらしい雪菜は固まってから慌てて髪を手櫛で整え始める。

「雪菜、その格好……」

「分かってる。ていうか……ああ、もう」

雪菜が雪菜を注意しようとしたが、雪菜は雪菜が言い切る前に走ってリビングを出て行った。向かったのは洗面所のようにだ。

「凧君、ごめんね。慌ただしくて」

雪菜は苦笑いしながら雪菜が走って行ったほうを見ている。二、三分してから雪菜が戻ってきたが、今度はそのまま自室に入っていく。

「雪菜、ご飯できてるよ」

「はい」

返事は扉の向こうから聞こえる。どうも着替えをしていたらしく、すぐに出てきた雪菜は学校指定のジャージに袖を通していた。

紺色の長袖と長ズボンのジャージは、飾り気がまったくないありふれた体操着

だ。制服が可愛いと有名な彩海学園ではあるが、一方で体操着は普通すぎると不評だったりする。

零菜は風の隣の席に腰掛ける。一口サイズに切り分けられた卵サンドイッチとサラダ、ウインナーと苺ジャムのヨーグルト、そしてオニオンスープというメニューだ。

「風君、こんなに朝早い珍しいんじゃない？」

「今日は学校行くんだよ」

「ああ、パネルのヤツ？」

「そう」

風がパネル係に選出された経緯は零菜に伝わっている。大した話ではなく、伝統的に帰宅部や文化部がその役割を担うことが多いというだけだ。運動部の多くは夏に大会があり、パネル作成に参加できないし、体育祭で中心的役割を果たすことも多いので、文化部や帰宅部の生徒にスポットライトを当てようとするところとした裏方に大仕事を回すというのが学校なりの配慮ということだろうか。

「零菜は今日なんかあるの？」

「わたしはない。強いて言うとも明日の準備があるかなってくらい」

「プレパァーティ、何時に出るんだ？」

「六時くらい？」

と、言いつつ零菜はキッチンで何やら戸棚の整理をしている雪菜に視線を向ける。

「六時半でいいかな」

雪菜は零菜の問いに答えた。

プレパァーティに凧の出番はなく、空菜と家でいつも通りに過ごしているだけなので、さほど関心があるわけではないが、零菜たちにとっては大事だ。

仲のいい友だちとパーティするという程度の話ではなく、政治的な意味合いもある重要な顔合わせという側面がある。ここに出る零菜たちはただの高校生ではなく皇女としての顔で振る舞わなければならず、それなりの重責を負っているのだ。

零菜は黙々とトーストを口に運ぶ。

その隣ですでに朝食を終えた凧は手持ち無沙汰になりつつある。会話が途切れ途切れなのは食事のためだが、雪菜の存在もある。何となく大人がいる場であけすけな話をするのは気が乗らない。特に零菜からすれば自分の母親に話を聞かれるのは

気恥ずかしいという感情もあった。

凧が黙っているのは、零菜の服装にも問題があった。

ありふれた特徴のないジャージだが、ファスナーをしっかり閉めていないのだ。凧の視点からだど、零菜の首元や鎖骨までが丸見えである。それはとても困ることだ。一昔前の凧ならともなく、今の凧には明確に吸血衝動がある。こんな凧に白い首を見せられると、つい先日、零菜から血を吸ったときを思い出してしまふ。雪菜がいるのに零菜に対して吸血衝動を向けるというのは、ちょっととした自殺行為だ。とてもよろしくない。そのためできるだけ意識しないように衝動を我慢している。うっかりすると目が赤くなって吸血衝動が出ていることがバレてしまうので、かなり頑張っている。

零菜も零菜で朝から凧と鉢合わせするとはまったく思っていなかったのだ、この不意打ちには驚いた。寝起きの油断していた姿を凧に見られたのは、大失態だったといっても過言ではなく、この状況を引き起こした雪菜に色々と言いたいことがあるのだが、雪菜には悪意は微塵もなくただ親切心で凧を自宅に上げているだけなの、と言うだけ無駄だろう。

そもそも、凧も凧で雪菜に誘われたからといってあっさりとその誘いに乗るのはどうなのか。まさか、自分の母親に吸血衝動を向けたんじゃないだろうな、と内心で悶々としつつ凧を盗み見ながら朝食を食べ進める。

トーストを囓っているが味に意識が向かない。隣に凧の気配があるというだけで吸血衝動が湧いてきてそちらに意識を取られている。

朝一番に自分のテリトリーに凧がいるというのは、日常的にもあまりない状況である。飛んで火に入る夏の虫というか、蜘蛛の巣に飛び込んだ蝶というか、誰にも邪魔されずに吸血できそうな環境に近づいているというのが、吸血欲を大きくしている要因だ。

（零菜、ジャージくらいちゃんと着ろつての。吸血衝動、ヤバいかもしれん。めっちゃ吸血してえ）

（ママそろそろ仕事じゃないの。早く行かないかな。もう喉渴いてきたし、凧君の首が無防備すぎるのが悪いんだよなあ）

二人並んでイライラしながら、吸血衝動を我慢している。お互いに悶々としていて相手と雪菜に気取られないようにしているので、結局、状況が変わることもない。

二人揃って、吸血衝動なんて起きていないとばかりに振る舞っているので表面上はいつも通りだ。

朝食を終えた雪菜が食器を洗っていると雪菜がスーツに着替えてやって来た。

「じゃあ、わたしは仕事に行くから、出かけるんなら火の元と戸締まり気をつけてね」

「分かった」

「行ってきます」

「はい」

雪菜は素っ気なく返事する。素直に「行ってらっしゃい」とは言えない年頃だ。雪菜が玄関の扉を閉める音がする。

（ママがいなくなった。どうしよう。朝からだけど、イケる？ うーん、欲求不満でいやらしいヤツだと思われなかな？）

吸血衝動と理性が頭の中をぐるぐるどと駆け回っている。

吸血していいか悪いかの一定のラインを越えた関係ではあるので、後は状況が整うかどうかだ。そして、雪菜がいなくなった今、状況そのものは整ったと言えるだ

ろう。残すは互いの意思確認である。

食器を洗い終えた零菜がリビングに戻った。

改まって話をしようと思うと、話題の切り出し方に困ってしまう。話のネタを探している、不意に風の携帯端末が鳴り出した。

「何、電話？」

「いや、アラーム。学校行く準備しないとだ」

集合時刻は九時だ。モノレールの時間に合わせて家を出るなら、そろそろ準備をしないと間に合わない。時間に助けられたのか、それとも余計な邪魔だったのかは判然としない。

「じゃ、俺行くわ」

「うん、じゃあね」

後ろ髪を引かれる思いで席を立つ。

吸血衝動は一過性のものだ。

時間をおけばすぐに落ち着く。

自宅に戻り、歯を磨いてジャージに着替える。授業を受けるために登校するわけ

ではないので、荷物は貴重品だけで十分だ。

通学用の鞆に必要な最小限の持物だけ突っ込んで、凧は足早に自宅を後にした。



太陽が元気に自己主張を始めた頃、凧は中央高校で額に汗して絵筆を握っていた。よりにもよってパネル製作は屋外での活動で、今日集まったのは十人だ。本当は十二人のチームだが、二人は帰省の関係で欠席である。

皇女たちが周囲にいる今の環境ではプレパーティが直近のイベントだが、世間の注目度はさほど高くない。もちろん、他国の大使や企業のトップも参加するイベントなのでメディアは毎年報道するが、有名人のコスプレに関心が向けられるくらいのものだ。はろういんフェスタの本番は二ヶ月後であり、若者の間で機運が高まってくるのも一ヶ月以上は先だろう。

中央高校を始めとする多くの学校は毎年九月から十月にかけて体育祭が開催さ

れ、学校を上げてのイベントとなるため、多くの学生にとってははろういんフェスタよりも体育祭が目先のイベントになるのだった。

「マジであっつい」

風は額の汗を拭って空を見上げる。

燦々と輝く太陽が真上にある。目も眩むような熱線は、大気のみならずアスファルトの路面やコンクリートの校舎外壁を熱し続け、その照り返しも相まって体感温度は苦痛を伴うほどになっている。これでまだ辛うじて午前中だというのが恐ろしい。まだまだ気温が上がり続けることが容易に予想され、体力のない人間ならば命にも関わるほどの真夏日だ。

暁の帝国人は、生まれた時からこうした環境で生活しているので暑さには慣れているし、ナノテクノロジーを用いたヒートアイランド現象対策も都市全体で実施しているのだが、だからといって不快指数が冷房の効いた快適な屋内と同レベルになるということとはあり得ない。

風がいるのは体育館の脇の小道で、この道はグラウンドに続いている。そこに縦三メートル横六メートルの木製のパネルを敷き、美術部員が手がけた下絵に黙々と

色を付けている。

中央高校の体育祭では各学年が赤、青、緑の三つの軍に分かれて得点を競う。このパネルは凧のクラスが所属する赤軍の機敷席を彩るものであった。

グラウンドではサッカー部と野球部が練習中。そして体育館ではバスケットとバレー部の声がある。校舎のほうから聞こえてくる「新世界より」は吹奏楽部の演奏だ。夏休みであっても、学校は賑やかだ。こうして運動部が汗を流している隣で、凧たちはまったく土気が上がらない色塗り作業に従事させられている。

「凧、赤取ってくれ」

「はいよ」

クラスメイトの大場に絵筆と赤いインクのパレットを渡す。

大場は髪を短く刈り上げた大柄の男子生徒で、凧よりも十センチばかり背が高い。中学時代には柔道部に入っていたというが、今は囲碁部に転向している変わり種だ。

「今日、妹さんは？」

「空菜？ 部室にいるんじゃないね」

「そうか。生物だったっけ？」

「そう。なんか、コウガイビルとかいうのを部室で飼ってるらしい」

「なんだそれ。血い吸うヤツ？」

「ナメクジ食うらしい」

「やっぱ、不思議ちゃんだよなあ」

「生物のヤツら、みんな似たり寄ったりだろ」

「あー、まあな。ちよつと、昔ながらのオタク系多い部活だよな」

生物部は十人弱の少人数の部活だ。

活動内容は動植物の観察から釣りや虫取り、バードウォッチング等の屋外の活動もあり意外とアクティブだ。

暁の帝国は人工島なので、手つかずの自然というのは存在しない。

その一方で、人工的に作られた自然公園は各地にある。小高い丘であったり、森であったり、地域によってバリエーションは様々だ。

固有種はいないので、町で見かける生き物も自然公園に棲息する生き物も、渡り鳥のような長距離を移動する生き物以外は人の手で持ち込まれたものだ。

人工島で一から用意された環境下にあっても生物というのは遅いもので少しづつ独自の生態系を形成してきている。

空菜の所属する生物部が活動できるのも、それなりの自然と生き物がいるからだ。今日、空菜は朝一でバードウォッチングに出かけ、その後に部室で飼育しているマニアックな生き物の給餌と観察に精を出しているのだった。

パネルの完成は目前となっている。色塗りも終わりが近く、若干の微修正を必要とする部分もあるが、夏休み中に完成という目標は達成できそうな進捗である。

「よおし、大分形になってきたわね」

と、腰に手を当てる現場監督の女生徒が言う。

二年生のチームリーダーの佐藤某である。某というのは下の名前を風が記憶していないからだ。自己紹介の時に聞いた後、誰も彼女を下の名前で呼んでいないのだ。見た目の特徴は小柄で栗毛。性格は快活。美術部の新部長というだけあって、パネルの下絵のデザインは様になっていた。

太陽と海をモチーフにした背景に書道部員がデザインした「赤」という漢字が、

崩した楷書体で描かれている。

体育祭までは時間があるが、夏休みが終わるといくら文化部が運動部ほどの活動量がないからといって、放課後に集まって作業するというのは難しくなる。

体育祭の準備の中でも大物であるパネル作成は、夏休み中に片付けてしまわないと後が苦しくなる。いくらなんでも作業が間に合わず、体育祭当日に赤軍だけパネル未完成というのは前代未聞の失態だ。それを避ける目処が立ったというのは、安心材料だ。

「これ塗り終わったら、完成ってことでいいんですか？」

と凧は佐藤に尋ねた。

「うん、そう。今んとこ七割くらいだし、次で完成できそうだね」

佐藤はパネルに視線を巡らせる

彼女は色塗りの過程で美術部のこだわりはあまり見せない。細かなミスは、それはそれでオッケーと流してくれるし、そうでなくても彼女自身で手直ししてくれる。パネル完成が重要であって、完成度を上げようとまではしていないのありがたい。

「もう十二時だし、今日はこれで終わりにしよう。しゅーりょーです。片付けしましょーう」

手を叩いて佐藤が声を掛ける。

この集まりは基本的に午前中だけと決まっている。

気温が上がる午後に屋外で活動するのは、熱中症リスクが高まるからである。

本当は屋内で取り組みたいところだが、パネルを広げられるような都合のいい場所はない。体育館はそれこそ運動部が使っている。

「力持ちの皆さん、パネルよろしく」

と、佐藤が指示を飛ばす。

相手は主に凧と大場である。

攻魔師を始めた凧と元柔道部の大場は、他の生徒よりも筋力があるというのは周知の事実だ。自然と大物のパネル片付けの仕事を頼まれることが多くなる。

一同は手分けをして片付けを始める。駄弁りながらではあるが、その動きに遅滞はない。誰しも、灼熱の太陽の下から一刻も早く抜け出したいのだ。

「よっしゃ、大場、そっち持て」

「おう、こっち全然乾いてねえな。危ねえ」

生乾きのインクに触れないように気をつけながら凧はパネルを持ち上げる。二人ではバランスが悪いので、応援を呼んで倉庫に運び入れた。パネルは全部で四枚あり、体育用具を管理する倉庫の片隅に倒れないように立てかける。うっかり表面に触れないように、最後にカラーコーンとコーンバーで囲んで終わりで。

パネルの片付けを終わった頃には、他の小物の片付けも終わっている。凧と大場が戻ってきたところで、無事に解散となった。

パネルの絵のために集められた烏合の衆だ。終わったから皆でお昼にしようというようなフレンドリーな展開にはならない。この後、午後から部活がある生徒も少なくないということもあって、バラバラに解散していく。

「終わった、終わったー、超腹減ったー。なあ、凧、メシ行かねえ？」  
校門を出てすぐに大場が凧を昼食に誘う。

空腹は凧も同じだった。

「いいぞ。なんか行きたいところあんの？」

「山海龍門ってラーメン屋知ってるか？」

「なんか、どっかで聞いたことはあるな」

山海龍門はこつてり背脂ラーメンが有名なラーメン屋だ。絃神島ができた最初期からずっと同じ場所で店を続けている最古参である。

行列ができる店というタイプではないが、地元民から愛される店ではある。

凧はラーメン屋に詳しいわけではないしメディアから積極的に情報収集する性質でもない。それでも聞いたことがあるというのは、よく覚えていないが、どこかで話題になったのだろう。

「最近のカップ麺の監修してたな」

「そういうの最近多いよな」

「それに、井島がバイトしてる」

「井島のバイト先か」

複数のバイトを掛け持ちしているクラスメイトの顔を思い出す。高校に入ってから、何かと話をする機会の多い友人の一人である。金に困っているわけではないが、金を稼ぐのが楽しいという理由でバイト漬けの毎日を送っている変わり種である。そんなクラスメイトのバイト先ならば、名前を聞くこともあるだろう。

「で、井島が言ってたんだけどな」

「おう」

「めっちゃ可愛い娘が来るらしい」

「なんだそれ。客で？」

「そう」

「店員が客を物色するのはいいんか」

「仕事してりゃいいんだろ」

「うちの学校の生徒？」

「制服で来たことないからどこの誰だか分からんらしい。でも、うちの学校じゃないっぽいな。そんな美人がいたら話題になる。お前の妹さんみたいに」

「まあ、そうだな」

恋多き年頃の高校生活に美男美女の話題は彩りを添える。

学年を越えて話題になるような顔立ちの整った生徒がいることは希だが、だからこそ、もしもそういう生徒がいればすぐに噂は広がる。

空菜が入学早々注目を浴び、ついでにその義兄ということで風があれこれと噂さ

れたのもそのためである。

「いつも来るわけじゃないんだろ？」

と、凧は尋ねる。

友人がわざわざ可愛いと評するような女生徒だ。凧も男子生徒の端くれとして気にはなる。

「そりゃ、そうだ。でもいたらラッキーだろ。今は夏休みだし、遭遇率は高いはずだ」

夏休みで遭遇率が高いというのは、どうだろうか。

同じ学生なら、カレンダーは一緒だろう。休日が被るはずなので、昼食を外食で済ませようと思えば、運が良ければ同じタイミングで同じ店を利用するというのもあり得なくはない、ということだろうか。

「そもそも可愛い娘ってどんな感じなんだ？」

「井島が言うには、多分年下だってよ。背が低めで、幼い系」

「じゃあ、中学生じゃん。あの辺りなら、第一か三浦中？」

「いいとこのお嬢様っぽいから私立じゃねーかな。魔族登録証つけてるらしいか

ら、魔族だろうなあ」

「魔族なら見た目じゃ歳、分からんぞ。吸血鬼だったら俺らの百倍上かもしれないしな」

「かもな。平日の昼間も来ることあるみたいだからな。ただ、井島の勘だと年下らしい」

「それ、あいつの願望入ってるだろ。私立中学に通ういいとこのお嬢様が、平日の昼間にラーメン食べに来るか？ しかも制服見たこともないんだろ？」

「ま、仮に年上だったとしても、それはそれでいいんだよ。見た目幼くて実は百戦錬磨のお姉様だったら、逆に興奮するだろ」

「相手が吸血鬼とかなら、そういうのも全然あり得るからな」

外見で年齢が分からないのは吸血鬼や血の従者といった不老の種族があるからだ。吸血鬼の外見年齢は個人差が大きく、千年近く生きている者でも外見は人間の十代前半という極端な事例もある。若い吸血鬼にとっては自分の外見年齢がどこで止まるのかというのは大きな関心事で、戦々恐々としているところでもある。近年は外見年齢を若く抑える方法も編み出されていて、吸血鬼であってもアンチエイジ

ングは重視されているのである。

「それと、もしかしたら外国人かもしれんそうさ。日本語は話してたけど金髪で色白だっというからな」

「金髪……？ 染めてんじゃないくて？」

「そりゃ知らねーよ」

すべて井島からの受け売りだから、大場がその謎の女生徒の仔細を知るはずもない。

一方で、凧の脳裏にはその女生徒の像が形を為していた。

金髪色白で幼く見える、平日昼間にもラーメンを食べに行く吸血鬼というのが身近にいる。暁東雲という名前の凧の従姉だ。年下という予想は外しているが、いとこのお嬢様というのも、第四真祖の娘——国内最高ランクのお嬢様なのだから当たっている。まさか、そんな娘が入りしているとは店員一同夢想だにしないだろうが。そう言えば、山海龍門というラーメン屋の名前は東雲の行きつけのラーメン屋の一つとして話に出てきたことがあった。聞き覚えがあったのは井島のバイト先だからではなく東雲から聞いたからだったのだろう。

自分の従姉が友人たちの話題に上るといふのはこそばゆいものだ。

今日東雲が山海龍門を利用するかどうかは知らないが、もしもぼったり出くわしたらどうしたものか。今のうちに、連絡をとっておいたほうがいいかもしれない。

そんなことを考えながら、凧は大場と連れだって山海龍門に向かった。

# 二十年後の半端者

---

著者 山中 一

発行日 2024 年 1 月 4 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/40986/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---